

もしもExtraのラスボスが甘粕正彦だったら

ヘルシーテツオ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

はじめまして、初投稿となります。

この作品はFate／EXTRAと相州戦神館学園―八命陣のクロスオーバーとなっています。

Fate／EXTRAの世界にもしも甘粕正彦が生まれていたら、というコンセプトで書かれています。

相州戦神館学園―八命陣の世界からやってきたものではありません。甘粕の設定もExtra世界の設定による再現となりますので、独自設定多めとなっています。

上記の設定が受けつけないという方は、あらかじめご了承ください。

※更新停止。現在は別作品を執筆中。

活動報告にて未完部分のプロットを公開しています。

目次

熾天の門	1
対峙	14
DEAD END	41
決闘	44
敗北	87
神話礼装	108
決着	150
ある女の物語	187
魔性菩薩	197
最終幕(上)	237
最終幕(下)	283
※独自設定集	323
幕間：根源の少女	332
EXTRA編	
序章：本戦前予選	356
1回戦：考察主観『遠坂凜』	396
1回戦：参戦者	443
1回戦：戦の真	471
1回戦：主従激突	506
※ステータス：魔人アーチャー	549
1回戦：嵐の航海者	552
2回戦：緑衣の襲撃者	616
2回戦：求めるもの	649

2 回戦：誇りある決闘

3 回戦：狂者の資格

3 回戦：ランルーくん

3 回戦：無辜の怪物

3 回戦：第六天魔王

幕間：アトラスの少女（上）

幕間：アトラスの少女（下）

4 回戦：茶会

4 回戦：ハンティング

4 回戦：真祖の姫

4 回戦：臥藤門司

### CCC編

終わりの始まり

悪夢襲来

戦争開幕

女難勃発

非情の徒

王の旗本

黒の少女

聖者たち

※各勢力相関図

146014131377134213201275121811711163

112110761026 998 921 898 836 807 766 742 682

## 熾天の門

強さとは何か――

人生の中、とりわけ男子たるのであれば、一度はこの疑問を抱いたことがあるだろう。

己が意を通すための力こそ強さ。その論こそ解答とするならば、なるほど道理である。

勝負事に勝つための能力。欲した物を得る、望んだように事を運ぶための権力、財力。より単純に表すなら、自らの意を相手に押し付ける暴力か。

単純明快であり分かり易い。悪性とも言い表せるそれら人の業は、故にこそ霊長の頂点に至らせた紛れもない強さだろう。

同時にそれと真逆の意見として、我意を納めることこそが強さだとする説もある。

我欲を捨て、悟りの境地に至る。そこまでに至らずとも、当たり前

に他者を慮り、無償でも尽くそうとする尊い慈悲。  
すなわち衆生に対する救い。人が人を思いやる善性の側面。それ

を持てる心の清さこそが強さ。  
どの言い分も否定するつもりはない。そしてどれもが人の持つ強

さの一つと言ひ換えることができる。  
善徳であれ欲望であれ、自らが為したいとする事を為すという点で

は共通だろう。  
強さ。あらゆる物事に対して我意を貫くための基準。  
これをこの概念における一つの解答だと仮定し、次の考察へと巡ら

せる。  
果たしてこの強さの高とは、なにを以て決まるのか。

身分等を背景とした権威の差か。  
生まれながらの宿星として持つ才気、在るべくして在る先天的な性

質の強度か。

あるいはその者が掲げる理由や目的の如何、すなわち人が誇るに値

する正義であるのか否か。

ああ、これに関しては諸々にも意見があろう。これより語ることを、俺を知る者が聞いたなら持てる者が抜かす戯言と捉えるかもしれない。

だがあえて俺は、数多の答えがあるであろうこの疑問に対し、厳然たる一つの解答を我が信念より断言しよう。

——強さとは意志の重さである。

各々が抱いた信念に乗せられる思いの質量。それこそが高を定めるのだと。

身分の差など所詮は立ち位置の違いに過ぎない。

生まれ持った天稟とは出発点の利でしかなく、極論すれば背が高い低いと大差はない。

ましてやその中身など。高潔であろうが利己的であろうが、思いの質量の優劣にはなんら関係ない。

——ここに一人の男の話为例にとろう。

生まれついて他者とは異なる感性を持った男。

美しきを美しいと思えず、正義の光に価値を見出せない。

男が魅せられるのはその真逆。悪逆なる行為、絶望の慟哭を響かせる人々の悲劇。

人の善性が築き上げた倫理、その価値観と男は最初から相容れなかった。

男にとつての悲劇とは、価値観を共有できずとも、その意味を理解できる聡明さを持ち合わせていたことだろう。

たとえ男にとつては価値のないものだとて、他人にとって如何に崇高で信じるに足るものなのか理解できる。

その意味をしかと理解できるからこそ、男は他者と己の乖離を自覚せざるを得ない。

ありもしない救いへと縋った信心は、敬虔なる聖職者と父たにんには映る。自虐に等しい修練は男の肉体を鋼に変え、男を優れた戦士として完成させる。

それらの成果に対して向けられる評価の数々。それら全てが的外

れだと自覚して、しかし修正することも叶わない。

その苦惱。常人の感性では決して理解できない孤独は、男だけを苛んで、果ての見えない無明の道を歩ませ続けた。

やがてある出来事をきっかけとして、男はようやく迷いの中に答えを得る。

自らが生まれ持った感性。善性のものを無価値と感じ、悪性のものに愉悦を覚える破綻した人間性。

そんな己の本質を、生のままに愛し、咀嚼して飲み下すという回答を。

無明の中より光を得て、ついに自由を得た男は次にその意義について問い掛ける。

生まれながらに悪性を抱えた魂。”快なるもの”こそが魂の求める真理であるというのなら、己という存在とは何なのか。

誕生した命の存在価値。神さえも問い殺さんとする自らの求道でいて、男はその生涯を歩き続けていく——

さてここまでの話をふまえた上で一つ訊ねたい。果たしてこの男の在り方は、おまえ達に如何なるものとして映ったか？

哀れな人格破綻者か。

罪を罪とも思わぬ鬼畜外道か。

それとも生まれながらの悪性として、これも一つの価値だとその存在を是とするか。

俺は高らかにこう告げたい——彼こそ真の勇氣を持った勇者である。

その求道は倫理から外れているだろう。

自らの悪性を自覚して、その上で行っているのだから言い訳の余地はない。

己の本質を知りつつもそれを封じ、人としてあるべき正道を歩むことこそ本当の強さだと、そうした意見があるのも分かる。

だがそれでも俺は認めてやりたい。異端と知りつつもその道を選んだ男の覚悟を心から讃えたいのだ。

男は人の道徳を知っていた。己の行いが外道であると十分に理解

していた。

たとえ自らを偽り続けたものだとしても、そこに何一つの情熱が無かったとしても。そこに至るまでの生涯が軽いはずもない。

そこには信仰があった。修練があった。父がおり妻がいた。理解の有無に関わらず、自らと関わりを持った人々が数多といた。

覚悟は必要なのだ。全てを捨てるには。善悪に関わらず、臆病な者にその決断は下せない。

ましてその果てに得られるのは誰とも共有できない孤独の求道。あるのは自らの中で完結する答えのみであり、即物的に得られるものなど何一つない。

それら余さず承知して、選ばされたのではなく自ら選択した男の決断。ああ、それを勇氣と呼ぼずして何と呼ぼう。

ゆえに俺は男の強さを尊敬する。

誰もが男を認めずとも、俺だけは彼の全てを認めてやりたい。

それも人の可能性の一つだと、人間讃歌を歌い上げたいのだ。喉が枯れるほどにッ！

……熱くなりすぎたかな。話を戻そう。

強さの話をしよう。例にとった男の強さについては、すでに語った所であるが。

ならばその強さの芯とは。なにが男をそれほどまでに強くしたのか。

男が生まれながらに悪だからか。本質がそうであったからと、それだけが男の人生の全てか。

いいや否だそうではなからう。理由の一つではあるだろうが、決してそれだけが全てではない。

それは男が歩んできた人生そのもの。悪として産まれ、信仰の下に生き、苦行の果ての解答とその後の求道。その全てが男を形成してきた。

きっかけはおそらく無数にあり、他人に過ぎん俺が語るには筆舌にし難く。本人ですら全てを把握しているわけではないだろう。

だが幾多に経てきたそれらの過程。研磨の果てに鍛えられた男の



意志こそが強いのだと、そう結論付けることに否はないはず。

生まれの宿命など所詮は意志を形どる要因の一つに過ぎない。

あるがままに受け入れるもよし。嫌ならば拒絶してしまえばよし。

泥水として生まれた者が清らかな水へと変質するのは素晴らしい。泥水は泥水としてその深溝を増していくのも悪くはない。どちらにせよ強き意志は育つ。

生のままに己の本質を愛せない者は弱者だと、在るべき型に嵌まらぬ者は不純だなどと。そんなことを言った覚えは俺にはない。

俺はただあらゆる意志を認めるのみ。善悪は問わず、俺が評するのはその絶対値。より強い意志こそが人の可能性を示すと信じるが故に。

この世の悪を渴望する者たちよ。

おまえ達は悪。世界の誰からも賛美を得られぬ孤独の存在。

倫理という名の強固な鎖に縛られて、己の価値観のみでそれを断ち切ってみせねばならない。

だからこそ誰よりも強く傲慢に。他者の価値基準などに左右されぬ、己だけの美学で以て邁進してこそその悪。

遥かな高みに座して高笑いをするがいい。正義などと鼻で笑い、孤独の道でどこまでもふてぶてしく己を貫け。

負けてはならぬ。強く在れ。

この世の正義を信奉する者たちよ。

おまえ達は正義。人々より賛美を受け彼らに光を示す存在。

正しい側で在るがゆえに枷に嵌められ、己の思うがままに為すことは極々限られる。

その姿こそが規範であるから。力に溺れることなく自らを律し、強きを挫き弱きのために義憤する姿に人は憧憬を抱くのだから。

ならばこそ屈してはならぬ。おまえ達こそ人の在るべき姿の象徴。強大なる悪にも怯まず、より強き信念で打倒してこそ義心の正しさを証明できる。

負けてはならぬ。強く在れ。

そして、だからこそ俺は思うのだ。

才覚など瑣末。力の有無も所詮は要因の一部。善悪の気質ですら決定力に欠けている。

勝利を得て、真に本懐を遂げられる者とは、その果てまで己の意志を譲らなかつた者たち。

この世のあらゆる闘争、悲劇も、そうした強き意志を育てる礎となつている。

失われる命がある。踏みにじられる祈りがある。それは許せぬことだろうが、それ故に強き意志は現れるという事実を忘れてはならん。

ならばこの戦争を勝ち抜いた意志にこそ素晴らしい価値が宿るだろう。その強さを俺は信じている。

最果ての地にある頂。熾天の玉座にて俺は待とう。

強き意志ある者、俺の全てを託せるに足る者の到来を。

俺もまた礎となるべく、この神座に君臨しながら待ち侘びる。

——俺は人間を愛している。

だからどうか、勇者たちよ。俺が認めるにふさわしい意志を示してくれ。

見えない果てまで続く無限回廊。

物体の形骸を取ることもない純粹な情報体で構築されたそこを、わたしたちは進んでいく。

進む、というのは適切でないかもしれない。

進んでいるのではなく沈んでいる。遙か彼方にある深層、この月の最下層へと。

こうして自分の足で歩いている実感など当てにはできない。ここがそんな常識の通用しない場所だというのは、これまでにいやというほど理解している。

月の聖杯、ムーンセル・オートマトン。

それは人類とは異なる知的生命体によって作られた、あらゆる事象を観測する演算器。

総計128名もの魔術師<sup>ウィザード</sup>が求め合い、殺し合わされた熾天の座。

全ての歴史を記録し、無限の未来を計測する万能の願望器へ至る道にわたしたちは足を踏み入れていた。

「……この先に、勝者に与えられる聖杯があるのか。あらゆる願いを実現させる奇跡の器。かつて多くの魔術師がそれを求め、ついには手に入れる事のなかった力」

傍らに在るわたしの相棒<sup>サーヴァント</sup>。弓兵<sup>アーチャー</sup>のクラスを担う無銘の英雄。

その皮肉気な口調はいつもの通りで、そのことに安心感を覚えた。

「それをまさか、君のような魔術師でもない人間が手に入れるとはな。人生は、分からない。かつての私も、こんな気持ちだったのかもしれない」

それは自分でもそう思う。

この戦争が始まった当初、自分は間違いなく最弱の存在であったはずなのだから。

聖杯戦争。ムーンセルの主を選定すべく始まった争奪戦。

128名のマスターとそれに従うサーヴァントによるこの戦争は、霊子虚構世界『S.E. R.A. P.H.』<sup>セララフ</sup>を舞台に行われた。

月にアクセス出来るのはこの電脳世界に魂を物質化できる魔術師<sup>ウィザード</sup>のみ。

世界を支配する一族が、それに反抗する者が、他にも各々の願いを胸に、月の舞台へと集った。

そんな中において、自分は明らかに浮いた存在だった。

わたし、岸波白野には記憶がなかった。

聖杯に懸ける願いがなかった。戦いにおける覚悟がなかった。およそ信念と呼べるものは何一つ持ってなかった。

なのに戦った。／ 戦うとは倒すということ。

戦って生き残った。／ 生き残るといふことは勝利したということ。

戦いに勝って、相手を殺した。／ 生き残れるのは一人だけ。  
そんな戦いを、都合七回。

戦った相手に自分よりも脆弱な者は一人としていなかった。誰も  
が自分の願いを持っていた。

その願いを打ち砕いた。その命を終わらせた。彼等の終わりの光  
景は、今も脳裏に焼き付いている。

そうするだけの価値が自分にはあったのかと、ここに至っても尚そ  
の疑念を捨て去ることはできていない。

戦いを経る中で、無くしていた自分自身を取り戻すことはできた。  
だがその結果として得た答えは、そもそも失ったものなど無く、始  
めから何も無い存在だということ。

岸波白野という人間はとうの昔に死亡しており、自分はその記録か  
ら再現された亡霊だという絶望<sup>じじつ</sup>だった。

ある人に言われた。過去の亡霊が現在の世界に関わることは許さ  
れないと。

反論のしようがない。その通りだと自分でも思うから。

自分は勝つてはいけないマスター。自分はきつと世界に何も残せ  
ない。そんな人間が聖杯に至るなど許されないことだろう。

それでも、死にたくなかった。

諦めて立ち止まり、そのまま消え去ることをどうしても良しとはで  
きなかつた。

内にある思いなど真実そんなもので、ここまで来ることが出来てし  
まった。

自分に勝利するに値するだけの価値があるとは今でも言えない。  
彼等の命に代わるものなど、本来いないはずの人間である自分にあ  
るはずがない。

本当にこのまま進んでいいのかと、今更ながら迷いが生まれた。

「なによ、はくのん。ここまで来といて難しい顔して」

進む足を鈍らせた自分の背を、誰かの手が押してくれる。

その手が、その声があることは、誰もが消えていく聖杯戦争の中で  
唯一の救いだった。

「どうせ自分が勝っちゃってよかったのかーとか、そういうこと考えていたんでしょ。」

ほんと考え方が小市民なんだから。そういうとこ、1回戦の頃から変わんないわよね」

遠坂凜。

サーヴァントを失ったマスター。消滅を免れ、自分に共闘してくれる強い女<sup>ひと</sup>。

本来なら自分より遥かに聖杯に近い所にいた彼女。きつと選択が一つでも違っていたら敵として相對していただろう。

一人ではなかった。自分がここまで来れたのは、彼女が共に戦ってくれたからに他ならない。

……しかしどうして自分の考えが分かったんだろう。以心伝心？

「マスター。度々頭の弱い君ではあるが、そろそろ自覚の一つもしたまえ。」

君は実に分かり易い。詐欺師の類にはなりたいと思ってもなれない類の人種だろうさ」

「あ、それ分かる。なんか嘘についても騙しきれなくてずるずる気にしたあげく、律儀に本当にしちゃうイメージよね、はくのんって」

いや、うん。わかっていたけど勝者になってもこの扱いは変わらな  
いんだね。

「言っただでしょ、願いを叶えるのは勝者の権利だって。戦いがあった、辛いことや失ったものがたくさんあるなら、それに代わる成果がなかったら嘘じゃない。」

この聖杯戦争に勝ったのは貴女よ。その中身がどうかなんて関係ないわ。勝者には成果を手にする権利と、義務があるんだから」

凜の言葉は彼女自身のことも含んだものだ。

以前に話してくれた彼女の願い。

この停滞した世界。誰も変化を望まずに、大きな不幸もないがその分の幸福も失われようとする現代の在り様。

彼女はそんな世界に反逆した。そのきっかけとなったのは高尚な大義ではなく、誰の身近にもあってだからこそ見逃しているもの。

今の子供は笑わない。心から嬉しいと感じられるものがない。絶望はないが希望もない。変化を拒んだ世界では、これから学んでいく子供こそ犠牲者だった。

遠坂凜の願いとは西欧財閥の打倒。完全なる管理社会を名目に未来の可能性を封殺する体制そのものを倒して倒してみせる。

彼女の願いは叶わない。

そして自分が代わりに叶えようとも思わない。

その願いは彼女のもので、間違っていると思った世界も彼女の感じた中にしかないからだ。

それでも自分は彼女の願いを託されたのだ。

それは彼女だけじゃない。これまででに戦い、倒してきた者達。彼等の願いも含まれる。

代わって願いを成就させるという意味じゃない。その重さを知り、背負うということだ。今の自分に至るまでに、失われたものを忘れないたために。

そう、そんなことは分かっていた事だった。

「聖杯はあなたの好きにしなさい。誰にもそれは止められないわ」

うん。ありがとう、凜。

こんなに弱いわたしだけど、あなたとアーチャーがいたから頑張れた。

あなたを失わずに済んだというだけで、こんなにも誇らしい。

今、自分には願いがある。

迷ってばかりのわたしは、これだけとは思える確かな願い。

きつといろいろ言われると思うから、あなたには話さないけど。

それでも、凜なら大丈夫だって思うから。

「君たちは性急だな。もはや目前だとはいえ、未だ狸は捕ってはいない。こんな道の中で皮算用といかずともいいだろうに」

アーチャーの言葉に、私と凜は顔を見合わせて、笑った。

「絆や思いを新たにするのは構わないがね。焦ることもないだろうが、まずは成果の下まで辿り着こう。」

多くの者が求めた果て。到達者の義務として、その姿をしかと確か

めよう」

ああ確かに、いつまでも尻込みなんてしてられない。

聖杯はこの先に。ゴールを前に臆してしまった心も、二人のおかげでしっかりと持ち直した。

止まっていた歩を進める。

焦る必要はない。一步一步の実感を踏みしめながら。

伴う二人の存在を頼もしく思い、共に在れる自分に自負を持てる。さあ、前を向こう。恐れることはない。

自分は勝った。聖杯戦争は、もう終わったんだから——

『……マスター。我ながら心配性だとは思うのだが、準備はしっかりな』

瞬間、思い出されたのは昨夜のアーチャーの言葉。

だがそのきつかけとなったのはもつと別の、出処も分からない不吉な既知感だった。

一瞬、本当にただの一瞬の感覚。

見覚えなんか無いし、そんなはずはないと確信できる。

けれども無視はできない。それほどにこの感覚は強烈だった。

——自分は、この道を通ったことがある？

『過去の教訓だろう。この戦いが、そう素直に終わるものではないと体が覚えているのでね』

アーチャーの言葉が何かの予兆のようにも思えてくる。

あり得ないと理性は判断しているのに、自分の中の何か、脳裏に映る光景を事実だと訴える。

わけの分からない既知感<sup>デジャヴユ</sup>。その感覚は過去最大限の警告を自分に与えていた。

——心しろ。この先に最後の、そして最強の敵が待っている——

「マスター？ どうした？」

アーチャーの声にハツとなる。

気付けば緊張のせいか冷や汗が浮かんでいた。

制服の袖で汗を拭い、何でもないとだけ答える。

隠し事をしているつもりはない。本当に、そうとしか答えられない

感覚なのだ。

勝者は自分で、聖杯戦争は終わった。疑いようのない事実なのに、説明のしようのない感覚だけが危機を告げている。

一歩進むごとに危機感が増していく。

この緊張感は、まるで決戦を前にした時のよう。

歩を進める毎に覚悟を要求し、身近に感じる死への予感が背筋を震わせた。

——見えなかった果てが見えてくる。

この先に聖杯がある。そして恐らくは、この感覚の正体も。

心の中で覚悟を固める。それは決戦場へと赴く時と同じ心持ちで、私は足を踏み出した。

そこは部屋というには広すぎる空間だった。

翠色の水面に覆われた大地。乱立する大小様々な石柱。

そして中央に安置される、内部に異質な単眼を湛えた立方体のオブジェ。

あれこそがムーンセルの大本。セラフを生んだ異星のアーティファクト、セラフスヘブン・アートグラフ七天の聖杯。

だというのに、それら一切合切がまるで目に入らない。

あたかも路傍に転がる石のように、意識の片隅にしか置くことができなかつた。

その元凶は明白だ。

聖杯の下、山となつて積まれた石柱の上に、二人の男がいる。

一人は白衣を纏い学者然とした青年。印象に乏しく、こちらを向く表情は穏やかだ。

そこに漂う空虚さ。それはこれまでの相手にはない空恐ろしさを感じさせていたが——今はそれすら瑣末でしかない。



問題なのは、もう一人の男。

軍装に身を包み、石柱の山の頂に佇むこの男こそ、全ての元凶。

男が何かをしたわけではない。それどころか、まだ目すら合っていない。

だというのに、この全身に重くのし掛かる威圧。膝が崩れそうになる畏怖は何なのか。

案内役のNPCなどでは断じてあり得ない。こうして目にするだけで、灼熱の如き生の意志が伝わってくる。

ただ向き合うだけで他者を圧倒する王気。それはかの少年王を思い起こさせたが、圧する気の質量は明らかに彼以上だ。

それも当然だ。そもそもこれは質が違う。

レオの持つ王気は人を導く者としての理想の具現。人々の安寧のため、人らしさを捨てながら人の優しさに満ちた、人を超えた王聖。だが男から受けるのは他を押し恐怖を与える魔王のそれ。人らしい我意が常軌を逸して突き抜けたために、その枠組みを飛び越えてしまった超越者だ。

「ようこそ熾天の門へ。聖杯戦争の勝利者よ、おまえの到来を待ち侘びていた」

男が声を発する。

敵意はない。むしろ友好に満ち溢れてすらいた。

なのに身体は、心は、最大級の畏怖を感じている。

敵意などいらぬ。これはただそう在るだけで恐ろしい魔人だ。

燃え盛る大火を前に人が足を竦ませるように、桁違いの熱量は常人には直視すら難しい。

間違いなく、開戦当初の自分だったら、この時点で折れていただろう。

言葉を聞くまでもなく理解する。この男は危険すぎる、と。

「その健闘を讃えさせてくれ。」

岸波白野。俺はおまえの強さを心から尊敬している」

## 対峙

「あま……かす……。え、うそ甘粕、あなたどうして？」

口火を切ったのは、意外にも凜だった。

「ああ、凜。久しいな。おまえから見れば、地上で別れて以来となるのだろうか」

「おまえもまた、俺が守りたいと願う輝きの一つ。」

どんな形であれ、この場に辿り着けたことを嬉しく思うぞ」

返される男の言葉にも明らかな親愛が見てとれる。

もしかしなくても、凜はこの男と旧知の間柄なのか。

「……ええ。彼の名前は甘粕正彦。私の……まあ、雇い主よ」

雇い主？

それは凜が所属していたという、西欧財閥に対抗する解放戦線の？

「雇い主とは、随分とつれない言い方だ。」

俺はおまえたちこそ我が宿願の最大の同胞だはらからと思っっているぞ」

「そもそも俺がこうして月に至ることができたのも、おまえや技術部の者達の働きがあればこそだ。」

そのために命を散らした彼等を忘れたことなど一時たりとてありません。ああ、どうしてそんなことが出来ようか」

「……そう。その様子からして、あなたは全っ然相変わらずみたいね」

説明を求めた自分に、凜は語る。

遠坂凜が、解放戦線にはためく若き旗であるとすれば。

甘粕正彦は、西欧財閥に対抗する全ての意志の骨子であり魂そのものであったと。

世界の財源6割、軍備9割を抑えられた絶望的な現状で、曲がりなりにも対抗できていたのは彼の存在があったからに他ならないと。

余命五年とも言われる反抗勢力の駆逐。そこにイレギュラーが起きるとすれば間違いなくこの男。

停滞する地上に残された益荒男。ハーウェイの管理支配に抗う最後の敵。

それこそが甘粕正彦という男であると。

「些か評価が過大なきらいはあるが、概ね語られた通りの男だよ、岸波白野」

「改めて名乗ろう。俺の名は甘粕正彦。今を生きる人間として、腐りゆく世界を憂い月に挑んだマスターである」

告げる言葉に害意の類はない。

だというのに気が折れそうになる重圧は、彼が常態で逸脱している証左だろう。

なるほど凄まじい。

そして納得できる。彼がハーウェイの敵と呼ばれる理由が。

彼ならばレオにも、世界を支配する財閥にも勝てる。そう信じさせるだけの強さがあつた。

「だから、それを過大評価だというのだ」

「遠坂凜然り。この世界の行く末、停滞する未来に異議を唱える意志は、あくまで彼等のもの」

「それを、あたかも俺一人の功績であるかのように語られるのは心外だぞ。彼等の意志を侮辱している」

……？ なんだろう、違和感がある。

言っている事は至極真つ当。レオのようにどこか欠落している印象も受けない。

一人一人に意志があり、決して己一人で事を為してきたのではない。そう語った姿にはむしろ共感さえ覚えた。

だからこそ不可解だ。相対した瞬間、彼から感じた魔人性。疑いようがないと思えたのに、言葉を交わしてみれば案外まともな感性を持つている。

凜の知古でもあるようだし、あの時の畏怖は単なる錯覚だったのだろうか。

「……間違つてないわ。彼の願いだけは、決して叶えてはいけないのよ」

凜？

「そうよ、どうして私は不思議に思わなかった？ 甘粕が聖杯戦争を

他人任せにするなんてあり得ない。どんな危険も可能性があるなら飛び込んでいくのが彼だって知ってたのに。

記憶の改竄。それも特定個人の情報に限定した。多分、私だけじゃなくて全員に。ならもしかして……」

呟く凜の声に剣呑さが増していく。

すでに彼女は、何らかの事実に気が付いているのか。

「確認するわ。甘粕、地上で最後に別れた時から何か心変わりはあるの？」

「ない。地上での決意より、俺の懸ける宿願は唯一つだ。

それこそ俺の信じる楽園<sup>ぼんご</sup>。在るべき世界の姿と確信しているが故に」

「そう。ならもう一度言っただけでいい。

ねえ甘粕、貴方の考えは人間の願いじゃなくて神様の理屈。そんなものは壊れた狂気<sup>ユメ</sup>だって」

二人だけで繰り広げる論争に付いていけない。

それでも分かることはある。二人の論点は聖杯に懸ける願いの是非だ。そこに対立の理由がある。

共にハーウェイの掲げる管理社会に反抗する仲間であると二人は語った。

凜の願いは西欧財閥の打倒。管理を名目に未来の可能性を取り潰す世界の有り様を変えること。

ハーウェイに反抗する者ならば、それ以上の目的があるとは思えない。あの男、甘粕正彦は違うのだろうか。

「……最初は同じだって思ってた。彼も今の未来のない世界を変えようとしている。その思いは、確かに私と同じだったわ。

けど違うの。彼の願いは狂気と同じよ。それは——」

「待て、凜」

続けようとする凜を甘粕が制止する。

たった一言。その短い言葉に宿る強い意志は、逆らうことを許さない力があつた。

「それは俺の口から話そう。俺の信じる俺の願いは、俺の中だけにあ

る。

おまえが話せばおまえの主観が混じる。それは公平ではない。そうだろう?」

人が胸に抱く願い。それを感受してどう解釈するかは、人それぞれに異なる。

価値観が違うのだ。これまでに打倒してきた七人のマスター達。彼等も各々に違った願いを持っていた。

共感できた願いもあったし、そもそも理解不能な狂気もあった。それは本当に様々で、そして本人にとって切実であることは共通していた。

己の主張は己の口で。正論であり、王道だ。

凜もまたそうした王道を尊ぶ気性の持ち主であり、だからこそ押し黙るしかなかった。

「さてすまないな。知古との再会について懐かしんでしまった。

聖杯戦争の勝者。舞台の主演はおまえだ、岸波白野。無論忘れてはおらんとも」

甘粕の意識が再びこちらに向く。

受ける重圧に屈しそうになる心に発破をかけ、気を強く持つ。

その気概がなければこの男と向き合うことはできない。そう確信していたから、覚悟はできてる。

「我が胸に抱く願い。宣することに躊躇いはないが、その前におまえには理解が必要か。

おそらくおまえの視点からでは疑問ばかりだろう。まずはそれを晴らさねば始まるまい」

そうだ。疑問というなら幾つもある。

そもそも彼は何者なのか。マスターと名乗ったが、聖杯戦争はすでに終結したはずだ。

聖杯の下まで辿り着けるのは勝利者だけ。二人のマスターが存在していることは道理が合わない。

それとも何らかの抜け道があるのか。この場に凜がいるのよう。だとするならその目的はなんなのか。

「勘違いをするな。つまらん小細工など用いてはいない」

「世界を憂いて月に挑み、我が志を汲み取ったサーヴァントと共に戦い、勝利を経て聖杯に至った。」

おまえと同じだよ。立ちほだかった七人のマスター。彼等の願いを、命をこの手で断ち切つて俺はここに立っている」

「賢しきで得た結果ではない。消し去った願いに責任があるからこそ、己の願いに真摯でなくてはいかん。」

その道理、おまえになれば分かるだろう」

……それは、確かにその通りだけど。

それでは疑問が解消されない。

二人のマスターは共存できない。この前提があるからこそ今の状況の不可解がある。

いやもつと言うのならそもそも、自分は彼を知らない。自分が戦ってきた聖杯戦争の中に甘粕正彦という男は存在していなかった。

勝ち残るのは一組だけ。彼が正道を歩んできたというのなら、自分といずれかで相対してなければおかしい。

まるで道理が噛み合わない。しかし嘘をついてるとも思えない。

この不可解を解消する答えとはなんなのか。

「……繰り返している。この聖杯戦争は、すでに一度終わって繰り返されている」

——繰り返している？

その言葉の意味を、すぐには理解することができなかった。

「やはりおまえは聡明だな、凜。限られた情報から断片的に繋ぎあわせ、真実へと到達する応用力。」

そしてなによりその勇氣。既存の常識を捨てることを恐れずに、あくまで前進こそを良しとする気質、実に素晴らしい。

改めて思うよ。おまえのような人間こそ、俺の築く樂園ぼらんじにふさわしいと」

心底から賞賛するように告げる甘粕の言葉。

それは凜の答えを正しいものだと思つたのと同義だった。

「おまえの言う通りだよ、凜。この聖杯戦争は繰り返している。」

俺を勝者として一度決着した後、戦争を初期状態に戻したのだよ。俺という存在を除いてな」

かつて神父が話してくれたことを思い出す。

ムーンセルとは観測機。人類史のはるか以前からそう在り続けてきた。

完全なる観測のため、無限とも思える『起き得なかったこと』『起きるかもしれないこと』を観測し記録している。

それは膨大な量の過去認識と未来予知。その機能を意志ある者が掌握すれば、まさしく万能器の名に相応しい力を発揮すると。

なるほど、その機能を用いて彼は過去の改変を行ったのだろう。

全てのマスターが月に到達した時点まで戻して。そこから”甘粕正彦”という要素のみを取り除き。

だが、なんのために？

「当然の疑問だろうな。その理由は俺の宿願とも関わりがある。

例えば……そうだな。レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ、彼とは語り合ったのだろう」

突然出てきた名前に戸惑いを隠せない。

西欧財閥を率い、世界を統べるはずだった少年王。7回戦で自分と戦い、この手で下した相手。

なぜここにきて、彼の名前が出てくるのか。

「完全なる王。そのように望まれその通りに生き、それ故に敗北を知ることのなかった未完の王聖。その歪みはおまえもよく知っているだろう。」

しかしだ。ならば彼の語る理想、王の管理の下に人民は平等に安定の中で生きる。その全てが間違いだと言いつけるか？」

それは……そうだとは言いつけない。

彼の唱えた管理される世界。それを否定する凜の言葉には共感している。変化を拒むその在り様に歪みを感じたのも確かだ。

だがそれでも彼が人々を想い、世界をより良く導こうとしていたことは嘘ではない。

戦いの中で失われた命ありすを嘆いていた時、その内にある暖かさに触れ

たことがある。

それは抗い難い毒にもよく似て心に染み込み、だからこそ彼の真実から出た想いだつたと理解できる。

その理想を手放しには受け入れられない。しかしだからといって、その全てが間違いなどと言い切る傲慢は自分にはなかった。

「そうだろう、言えまい。民を思い、そのために尽力する彼の優しきは本物だ。

ハーウェイの管理を離れた世界。自由と言えば聞こえがいいが、要は無法がまかり通っているに過ぎん。そこには未だに旧時代の悲劇であふれている。

明日も知れぬ貧しさ故、腹を痛めて産んだ我が子を守る母。血の味をしめてタガが外れ、罪無き村を略奪する兵士共。

貧困、差別、人身売買、テロリズム。そうした理不尽に襲われて、絶望の中で朽ちていく人々。見るに耐えんよ、認められるはずもない。

俺にとってもそこは活動の中心だったからな。他人事ではなかったよ」

「人々の不幸を嘆き、万人の幸福を願った高潔な意志。間違いなどと言いつけるはずがない。

ゆえに敗北を知り真に完成した彼の姿は素晴らしかった。感じ入ったよ、彼が導く世界を見たいとさえ。

レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイの悲劇とは、完成した王聖を發揮する機会を持ち得なかったことだ」

熱を持って語る甘粕の言葉から感じるのは……敬意か。

徹底した理想を謳い、混乱する世に光を与えようとした少年王を、この男は心から尊敬している。

だが、本来ならそれはおかしなことだ。

彼は凜と同じく西欧財閥に敵対する者。その盟主たるレオは最大の宿敵のはずだ。

その理想は絶対に否定しなくてはならない。そうでなくては世界に抗い続けるなどできるはずがない。

強者の側から慈悲をかけるレオとは違う。追い詰められる弱者の



側にあつて、どうして敵を尊重しながら戦うことができるのか。

そこに何か、凜がこの男を危険視しているものの片鱗を見た気がした。

「ならばこれについて考えたことはあるか？　そもそもなぜ、こんな悲劇が起きたのか」

——それは、考えるまでもないことだ。

自分が勝ち残ったから。この手で彼を殺めたからだ、その事実が消えはしない。

彼は世界を背負うはずだった。多くの人々を導くはずだった。その価値は本来いない人間である自分とは比べ物にならない。

命の価値に貴賤はないと、そんな言葉すら言い訳だ。それほどにレオという人間は様々なものを担っていた。

きっとそれは、紛れもない自分の罪。その罪から逃げはしないと、覚悟はすでに出来ているから——

「そうではない。認識が間違っているぞ。その覚悟自体は素晴らしいと思うが」

「敗北そのものは必要だったのだ。持たざる者、人の負の感情に理解がない彼は、挫折こそ学ばなければならなかった。

悲劇の元は、その舞台が聖杯戦争であつたこと。敗北の果てには死しかないこの戦いの非情さこそが原因だ」

「もしも彼が聖杯戦争の以前、地上にいた時に敗北を知っていれば、何が変わったとは思わないか？」

……その想像は、考えたこともないものだった。

もしもレオが敗北を知っていたら。欠けていた部分を埋めていたら。

どうなつただろう。何かが変わつただろうか。それともやはり理想は揺らがぬまま、この月に至ることになつていただろうか。

”IF”の答えは分からない。

それでももし変わるものがあつたなら、それは素晴らしい変化に違いないと思う。

最期の時、不条理に抗い絶望に立ち向かう心を『いい感情だ』と言つ

た彼は、人間としても王としてもより良い所にいたはずだから。

「そうだ。ゆえに俺はレオナルド・ビスタリオ・ハーウェイを否定せん。高潔な理想を、その意志を心から賞賛する」

「罪があるのならば……それは彼の周りに在り、何一つとしてその歪みを糾そうとしなかった、人間たちの情弱にこそある！」

そしてその言葉を皮切りに、甘粕正彦の内側に秘める心が露わとなる。

その激情、今の世界に対しての、そこに住まう全ての人々に対する、抑えようのない憤りが。

「築き上げられた権勢に固執し、糞のような思想しか垂れ流さん老害ども。」

与えられた幸福を甘受し、己の生き方や寿命までも取り決められ疑問も抱かん赤子にも劣る白痴の群れ。

どれもこれもまとめて畜生以下よ。人間だとは断じて認めん」

「気づけたはずだ、その有り様が歪だと。己が人であると意識があれば、その思想を容易く受け入れるなどできるはずがない。

天より遣わされた王聖？ 劣る部分のない最高値を示す完成度？ そんなものよりも教えねばならんものが他にあったであろうが。

誰も彼もがその天稟に浮かれ、彼もまた人であるという意識を持つとうとしなかった。欠ける所のない完璧な存在だと盲信して抱く疑心を封殺した。

すべては、己が人生を預ける君主ロードの絶対性を損なわんがために。自分の信じる拠り所を疑うことがそれほどに怖いかよ」

「ただ相手と向き合い、声を出して名前を呼び、それは間違っていると  
言つてやればよかった。」

岸波白野おまへにできたことなのだ。言い訳は許さん」

岸波白野わたしは、決して強者として生まれてきたのではない。

遠坂凜やレオのような先天的な才など持ち合わせない、大衆の中に紛れる一般人だった。

岸波白野わたしだから出来た、なんて特別性は一切ない。

わたしにできたことならば、きつと誰にでも出来たかもしれないこ

となのだ。

「だから岸波白野。俺はおまえを尊敬しているぞ。

その強さ、その可能性はまさに俺の願い焦がれる人間そのもの。

すべての人類がおまえのようになれば良いと、そう願わずにはおれん」

だからこそ甘粕正彦は岸波白野を賛美する。

出発点からすでに優位にある強者ではない。最弱から最強に至ったことこそが素晴らしいと。

強さの下に産まれた強者が強く生きられる。極論するなら、それは当然のことだ。

出発点が違う。言うなればそれは予定調和。当たり前のルーチンワークで驚くようなことはなにもない。

勝利を約束された者が勝利する。それは彼等にとって呼吸と同じで、何かを成し遂げた実感なんて欠片もないのだ。

だから真に価値があるのは、強者の勝利ではなく弱者の奮起。

弱さの下に生まれた者が不屈の意志で絶対の強者を下す。それは得難い結果で、だからなによりも価値がある。

それはすなわち、あらゆる人間が強さを持つことの証明であるのだから。

「ならばいったい何がおまえをそれほどまでに強くしたのか。その答えも明白である」

「戦いだ。戦いがおまえを鍛え上げた。数々の苦境が脆弱な意志を美しく練磨した。」

立ちはだかる試練を退け、前に進もうと足掻く意志こそが人間を強くする。この聖杯戦争という名の試練がおまえという人間を完成させた」

「そしてひるがえって見るがいい。今という安寧に生きる人々に、果たして試練と呼べるものがあるか？

いいや否だ。管理という名目の下、与えられる安寧に生きる者には、もはや試練にぶつかろうという気概すら有りはしない。

誰も未来なぞ望んでいない、興味が無い。前に進むより立ち止まっ

た方が遥かに楽だ。人間はもう十分に幸福だ、と。

管理されるといふ道以外を選ぼうともしない。分かるだろう、腐っているのだよその性根が。人間のあるべき輝きが失せている。

西欧財閥の支配など、その要因の一つに過ぎん。ハーウェイが盟主といつても、独裁ではないのだ。その決定はあくまで多くの者の総意に依る。

原因はもつと深い部分にある。すなわち、今の人類は己の意思を他者に預けることに慣れ切っている。

我も人。彼も人。故に対等。そんな基本すら忘れて、思考を捨てた木偶に墮落しようとしているのだよ」

そう断言する甘粕の言葉を、凜はどんな思いで聞いているのか。

西欧財閥の打倒。停滞する世界を先に進ませるため、現在の体制を破壊すると彼女は願った。

対して、甘粕は語る。それでは足らぬと。その程度で人類の意識は変わらないと。

それは真つ向からの願いの否定。そう突きつけられて、果たして凜はどう反応を返すのか。

横目に見た彼女の様子は——静かだった。

甘粕の言葉にも動揺した様子もなく、冷静そのもの。

それはこの否定がすでに過ぎたものだから。地上にいた時に彼女は甘粕との議論を終えていた。

否定も承知の上で、凜は願いを決めた。ならば今さら、言葉一つで揺れる信念など持ち合わせていない。

「安寧という名の檻に囚われて、意識を腐らせていく人間たちよ。

俺はおまえたちを失いたくない。命が放つ輝きを未来永劫、尊び、慈しんで、愛していたいのだ！ 守り抜きたいと切に願う。

岸波おま白野えのような人間を絶やしたくないのだよ。劣化していく人の魂、捨て置くことなど断じてできん」

「だから——俺は魔王として君臨したい！」

「人類に試練を。その内にある輝きを取り戻すために、彼等が立ち向かうべき災禍を与える。」

無論そこに差別はない。全人類に等しく普遍的に、西欧財閥もそれ以外の者たちも戦いの舞台へと上がってもらおう。

おまえたちの輝きで、天上の光へ届く階段を築いてくれ。その先へ待ち受ける希望と共に、祝福の喇叭ラッパを吹き鳴らそう。きつと理想の世界が降りてくる」

「それこそが我が樂園ぼらいぞ——この甘粕正彦が胸に抱く真実の願いである！」

明快に、豪胆に、熱く雄々しくたぎりながら、甘粕正彦は己の胸にある願いの全てを口にした。

思わず眩暈を起こす。なにもかもが規格外すぎて付いていけない。

世界の停滞を憂う気持ちも、人類に対する思いも、どれもこれも本物で、かつ常軌を逸している。

そしてよく分かる。この男は本気だ。本気でそんな願いを抱いて、人類を災厄の渦に叩き落とそうとしている。

それは憎しみからではない。むしろ人を信じ、愛しているからこそ試練いたみを与えるのだと豪語しているのだ。

なるほど、これは狂気だ。なまじ理解が可能だけに、その異常なまでの熱量に圧倒される。

凧が叶えてはいけなと言った理由が今ならはつきりと理解できた。

「……本当に変わらないのね。その極端に振り切れてる所、確かに強さなんでしょうけど行き過ぎれば怪物でしかないわ」

「甘粕。あなたの理屈つて要するに性悪説よね。叩いてやらなきゃ人は変われはしないって、そんな風に見限ってる。

ハーウェイの農場ファーム暮らしは性に合わないけど。だからって戦いばかりの鉄火場なんて、そんなのは御免被るわよ」

凧は答える。その願いは人のものではないと。

甘粕正彦は行き過ぎている。逸脱して焦がれに焦がれてのたうち回り、人を外れた何かに変貌してしまっている。

だから認められないと。かつて彼と肩を並べて戦った少女は決意を口にするが――

「だが、俺の願いのすべてを否定することもできない」  
「ッ……!?!」

「確かにおまえの言う通り俺は極端がすぎるのだろう。性悪説の意見にも反論するつもりはない。

だがおまえの思い描く世界と俺の樂園<sup>ほろいぞ</sup>。程度の違いはあるが方向性は同じだ。

自覚もあるのだろう。俺の言葉にも理があると、必要悪として存在すべきと分かっている。

それでも人の領域に留まろうとする矜持は、おまえの何よりの価値だとは思うが」

——そう。凜の願いとは、西欧財閥の打倒。

それは支配される者たちの解放であり、彼等の安寧の破壊である。

問えば望んでいる者など誰もいないだろう。管理される都市の中に不満はない、それは確かな事実なのだから。

民が望む平穩を自分の価値基準で破壊する。そうすることで人々に自立心が戻ると信じて。

言うなればそれは彼女が人々に与える試練であり、甘粕正彦の願いと同じ属性である。

遠坂凜と甘粕正彦の願いの差異とは、人間として許される一線を超えているか否かなのだ。

「この聖杯戦争で願いの有無や是非など大した重さを持っていない。重要となるのは進もうとする意志の強さだ。

ゆえにおまえでは俺には勝てん。だからこの月には昇ってくるなと、忠告したはずなのだがな」

王道を行く似た気質を持つ者同士、同じ方向を向いた願いを持つ二人。

性質が同じである以上、勝敗を定めるのはその絶対値。如何に己の願いに質量を乗せられるかに掛かっている。

そうした土俵で争う限り、甘粕正彦には絶対に敵わない。あくまで人の側に立つ遠坂凜では、この男の人を外れた熱量には届かない。

だから勝てない。だから舞台上がってくれるなど、甘粕正彦は慈

悲で以てそう告げる。

彼が与える試練はあくまで成長を促すためのもの。実現不可能な理不尽を強いたいわけでは決してないのだから。

「まあそれも今となつては無意味な議論か。すでに聖杯戦争は終結し、この場にたどり着いた勝者はおまえではない」

「……ええ、そうね。敗者のわたしに何かを口出しする権利なんてない。その権利は勝者のもの、そんなのは分かっている。

けど、甘粕。だったら何で、あなたは自分の願いを叶えないの。わたしの知ってるあなたなら、躊躇うなんてあり得ないと思うけど」

そう、疑問はやはりその点に帰結する。

繰り返されているという聖杯戦争。それが出来る者は、勝利者であり聖杯を手にした甘粕正彦しかない。

だが彼ほどに自分の願いに迷いがなければなら、そもそもそんなことをする理由がない。寄り道でしかないだろう。

この男の気質なら本懐を前に余計なものなど挟まない。その上でそうしなければならなかった理由とは、いったい何なのか。

その問い掛けに対し、甘粕の返した反応は奇妙だった。

これまでどんな問いにも明確に己の答えを豪語してきた男が、ここに来て答えに窮しているように見える。

それは何といえ方がいいのか。罰の悪そうな、まるで親に失敗を見咎められた子供のような、そんな印象を受けた。

「それについては私の方から説明しよう。彼にとっては身の恥でもある話だ」

代わって答えたのは、ここまで何一つ口を挟まなかった白衣の男。まるで己は背景の一部だと言わんばかりに自らを主張しなかった

男の態度は、舞台を見守る傍観者のそれに見える。

「その通りだとも。すでに舞台から降りた私に、勝者の舞台で口を挟む資格はない。舞台外で傍観する第三者、その程度の扱いで構わない。」

しかし第三者には第三者なりにできる役割もある。彼への義理もあることだし、解説は私の方で受け持とう」

一瞥し、頷いた甘粕から了承を得ると、男は言葉を続ける。

「指摘の通り、甘粕正彦が進むのはどこまでも王道だ。本懐を前に道を逸れるなどあり得ない。」

彼は願いを叶えたよ。語り尽くした想いの通り、人類闘争の願いを聖杯へと捧げたんだ」

甘粕正彦は願いを叶えた。

狂気にも似た彼の楽園ぱらいぞは地上で確かに実現させた。

白衣の男はそう言ったが、それが事実ならこの現状はそもそもおかしい。

願いを叶え世界を変えたというなら、それこそ聖杯戦争を繰り返す必要なんてない。

いったいどうして、やり直すような真似を？

「そうだな。一言で表すなら……彼はやらかしてしまったんだ」

……え？

なに？ その『やっちゃったぜ』みたいなニュアンス。

「正直そうとしか形容できないのだが。」

願いの通りに、彼は聖杯を使って人類に災禍をもたらした。

……その結果として、世界は滅びた」

——はあ!?

「文明は崩壊した。国という機構は悉くが滅び去った。現存する人類の9割以上が死滅した。」

地上に存在した、これまでの世界を形成していた全ては滅び去った  
と聞いていい」

「俺も、あれは少々やり過ぎた」

反省していると、そんな風に苦笑を漏らす甘粕。

えーと、つまりそれって。

試練を与えすぎちゃって、気付いたら人類滅亡してましたって、そういうこと？

「一応、誤解しないでもらうために補足するが、彼は殲滅のための闘争を強いてはいない。」

正しく行動すれば誰もが生き残れる、生存のための戦いのみを試練



とした。それは私が保障する。

……ただその難易度が、度を越して高すぎたというだけでね」  
いや、変わらないからね。死にゲーとムリゲーの違いじゃん、それ。  
なんなんだろう、これ。

思いが規格外とか、魔王とか思ったけど、これはそんな問題じゃない。  
い。

——この人、馬鹿なんじゃないのか？

「とはいえ、さすがにそのまま認めるわけにもいかなかった。正彦は決して世界の崩壊など望んではないからね。

だがムーンセルを用いて行った以上は、破滅の未来は確定事項だ。  
甘粕正彦の望んだ未来に、今の人類は耐えられない。

破滅の回避のためには新しい未来を築くための選択肢ねがいが必要だ」

「理性では分かる。理屈だけで考えれば、もう少しやり様もあったかもしれない。

だが駄目だ。ムーンセルの中核は膨大な情報で構成された大海だ。  
その中では虚飾の意志など一切剥がされる。

理屈ではないのだよ。魂に刻んだ願いに妥協はできん。真実の思  
いのみをムーンセルは受け取って実行する」

己の願いに嘘はつけない。  
甘粕正彦が甘粕正彦である限り、ムーンセルの選ぶ未来は確定して  
いる。

——もしかして、だから聖杯戦争をやり直した？

「口惜しさはある。だが結果が出た以上は認めるしかあるまい。

残念だが、俺は器ではなかったということだろう。世を糾す者とし  
てふさわしくなかった。

ならばどうする？ 決まっている。後継者が必要だ」

「正彦がムーンセルの所有者である限り、月の眼が観る未来は決定し  
ている。

ゆえにその未来が成立する以前、甘粕がムーンセルに願いを捧げる  
前の時点で新たな所有者を選定する。

鶏が先か、卵が先かのジレンマだが、ムーンセルの中核は記録宇宙

の法則で機能している。選択肢があれば『有る』ものとして成立するんだ」

正直に言つて、白衣の男が語る話の原理は理解できない。

だが彼が言いたいこと、なぜ甘粕が聖杯戦争を繰り返したのか、その理由は見えてきた。

自分では無理だった。だから他者の手を借りる。

理屈としてはそんなもの。単純明快で裏などありはしないだろう。

自分に代わつて本懐を遂げてくれる者、彼が求めているのは真実それだけなのだ。

「我が願い、楽園成就を受け継いでくれるのならそれで良し。

もし異なる願いで以てここに至つたのならば——」

だがしかし、忘れてはならない。この男は甘粕正彦だ。

勇気も、愛も、厳しさも、なにもかもが常人の慮外にある男。他人に真摯であるがゆえに容赦もない。

愛する者に彼が与えるものは、いつだって試練である。

「——俺がその願いの最後の試練となろう。

勝者が敗者の祈りを喰らう。それこそが聖杯戦争の、そして人間の掟だ。

そこに真摯であるならば、激突は必然。俺の楽園ぼらいぞに代わる願いは、真実俺を超える意志でなくてはならん。

ああ安心しろ見限りはしない。俺に成り代わる者が現れるまで、何度だろうと繰り返そう。永劫の果てまで付き合うとも」

瞬間、脳裏に走つた映像は自分には覚えのないもので、しかし確かに存在したのだと分かるものだった。

ムーンセル中枢へと繋がる、この熾天の座。

聖杯戦争の勝者だけが至るこの場所に辿り着いたマスターの姿。

——それはレオナルド・ビスタリオ・ハーウェイである。

——それは遠坂凜である。

——それはラニⅡⅧである。

——もしくは、それは■■■■である。

数限りなく存在する”IF”の結末。

それはおそらく、ムーンセルが記録がしてきた闘争の軌跡の一片。その中にはもちろん自分の姿だつて存在している。

ある自分は、剣を携えた男装の少女と共に。

ある自分は、妖艶な半獣の女性と共に。

またある自分は狂戦士バーサーカーと共に聖杯戦争を勝ち抜いた。

可能性へんかはサーヴァントだけに留まらない。

映像の中にある岸波白野も自分とは限らない。幾つかの可能性において岸波白野は少年だった。

自分はイレギュラーから生まれた亡霊ゴースト。大元となった人間が誰なのか、それはムーンセルもまだ観測していない。

災禍の中に消えた誰かじぶん。それは本当に今ここにいる岸波白野だったのか。いやそもそも岸波白野という名前自体が真実なのか。

まるでシユレーディングの猫のように、その中身を確かめるまで定まっていることは一つもない。それが岸波白野と名称される存在の有り様なのだろう。

そして数多の可能性より現れる勝利者たち。

甘粕正彦はそれら全てとこの場所で戦い、そして全てに勝利してきた。

繰り返していると云った聖杯戦争。それは一度や二度といった規模ではなく、おそらくは可能性の限りの数を。

そしてそれら数多の可能性の中に、甘粕正彦が敗北するという選択肢は未だ存在していないのだ。

圧倒されてしまう。善悪を度外視して、その強さに。その意志の力に。

幾度となく繰り返す戦い。普通なら折れてしまうだろう。その痛みと不毛さに磨耗し、疲れはててしまうはずだ。

しかし甘粕正彦に限りそれはない。不毛などない、これは試練だとその魂は豪語している。

だってここは彼が望んだ光が溢れる。他者を踏み越え到達した勝利者は、彼の言うところの人の可能性かがやき。

それをしかと受け止めるのだ。疲れてなどいられない。むしろよ

くぞ来たど歓喜している。

……今、気付いた。

彼が望む闘争の世界。彼が謳う人類の楽園<sup>ほらいぞ</sup>。

この聖杯戦争は、その縮図ではないだろうか。

「さあ、俺はすべてを明かしたぞ。覚悟をもって本懐をここに曝した」  
「次はそちらの胸の内を一つ宣してみせてくれよ。なあ岸波白野。そして無銘の英霊よ」

「ほう、私を知っているのか？」

突如として告げられたサーヴァントの真名。

明かしていない自身の名に、アーチャーは言葉を返した。

「不思議なことではあるまい。現状、<sup>ムーンセル</sup>聖杯の所有者は俺だ」

「そこに記録された英雄のことはすぐに分かる。

おまえがどういった過程を経て、どのような結末に至ったのか、俺は余すことなく知っているよ」

「ふん、ならば分かりそうなものだがな。私はおまえが好むような真つ当な英雄ではないと」

真つ当な英雄ではない。自らを語るアーチャーの真意を自分は知っている。

名前のない英雄。

人々から望まれなかった正義の味方。

己を殺して理想に殉じ、果てに何も得ることのなかった一人の男の物語。

かつての己を卑下する言葉。一言では到底表せないその思いを、今は少しでも理解していたから――

「まさか。こんなもので何かを理解した気にはなっていない」

「俺は事実を知っているだけだ。その内側にある感情の動き、その心に関しては何一つ知り得ていない。

事実は事実であって、真実ではない。そこに至った意志を知らずして、いったい何を理解しろというのだ」

——だから、次の甘粕の言葉には心から共感していた。

単なる表面だけの事実を見れば、アーチャーの行いは悪なのだろう

う。

罪のない大勢の人々を殺し、時には親しい者すら見殺しにしたその所業は、多くの人たちに許せないものと映ったに違いない。

事実だけを切り出すのなら、人間だったアーチャーの一生は人として間違いだらけのものにしかならないだろう。

けれど、その内にあるものを自分は知っている。

一見すれば機械のような、冷酷無慈悲の所業の裏にある、あまりにも純粹な願い。

”より多くの人々を救いたい”と、そんな理想を最後まで捨てられなかった彼の心を知って、ただ間違いだったと言い捨てることはできなかった。

「この情報には主観がない。感情の熱がない。あるのは数理で語る事実だけ。そんなことを知ったところで、おまえ達を理解したなどとは思わん」

「……過去に何度か、知性が芽生えかけたこともあったらしいが。その度にこれは自らを消去してきた<sup>デリート</sup>。

あくまでも観測機としての在り方を崩さず、客観的事実のみを記録し続けてきたのだ。このムーンセルは。

やろうとすれば神になれる機能を持ちながら、決してその選択肢を選ぼうとしない。なんともまた——」

それは神父も語った、遥かな太古より変わらない月の在り方。そんな在り方に対し自分はいったい何を感じたのか。

観測者に知性があつてはならない。それは物事の意味を観測者が決定してしまうことになる。

地上に何が起ころうとも月は観客であり続ける。我々の行いを正しいとも間違っているとも言ふことなく。

地上<sup>そこ</sup>はあなたたちの世界だと、そう言つて見守っているかのよう

に。

そうだ。それはなんて——

「つまらん道具だ。そう思うだろう」

「所詮は道具。どこまでも作られた意味以上のものがない。使わねば在るだけの器物だよ。」

ゆえに、俺はムーンセルを大した物だとは思っていない。優れた技術とは思うが、それは製作者である某かに送るべき評価だろう」

「目的は監視か研究か、それとも神のつもりで我々を見守ろうとでもしたか、知らんがな。」

わざわざ残していつてくれたのだ。相手が返せと言ってくるまで、せいぜい使つてやればよい」

「そしてその力が世界の有り様を変革させる規模である以上、担い手は選ばねばならん。だからこそ戦争しれんが必要となる」

「期待しているのだよ、勝利者きしなみはくの。俺と同じ地点まで上ってきた者よ。」

おまえはいつたい何を聖杯に願う？ どのような意志で以て、この世界の未来を描くのだ？」

興味深そうに、だが同時に底冷えるような視線を向けて、甘粕は問いを投げてくる。

爛々と輝く目が、心臓を鷲掴みにされたような圧迫感が、半端な答えは許さないと告げていた。

わたしは——

### 【選択肢】

1. 「彼の楽園を受け入れることはできない」
2. 「……確かに、彼の願いを否定できない」

——彼の楽園を受け入れることはできない。

そこに確かな理があったことは認める。世界の停滞を憂う気持ちも本物だった。

全てを否定することはできない。甘粕正彦の理屈は必要悪として存在するべきなのだろう。

それでも、自分は彼の言う闘争の世界を拒絶する。

それは呆れるほどにシンプルな理由。命が失われるから。ただ、それだけ。

先程まで話していた相手が、今は世界のどこにも存在しない。その声も姿も意志も願いも、二度と還らない。

聖杯戦争の間に何度も味わった、その喪失感と痛み。理屈じゃないのだ。戦いを否定するには、それで十分。

自分は歴史上の偉人でも、次代の王でもない。平凡な、ありふれた単なる一個人。

だから思うのは自分にとって大事なもの。かけがえのない大切な存在について。

それさえ確かにあって、自分の手で守る事ができるのなら、そこそが今の自分にとって正しい道だ。

自分の手の届く範囲だけ良ければいい。それはあるいは、停滞の元凶かもしれない。けれども、否定されるべきものなのか？ 人間が、他人を大切に思う原始的欲求が。

大切なものを生かす。聖杯戦争で見つけた、小さな願い。

甘粕正彦の楽園ぼらいぞは、きつとわたしの大切なものを傷つけ、損なう。認められない理由として、それ以上のものなんてない。

「なるほど、結構。その思いを否定はすまい。

だがしかし、それはあれだな。要するに世界に対し何もしいないということか？」

「願いは個人的なものに終始し、世界はあくまで万人の手に。理屈はそんなところだろうが、それは丸投げと同義だろう。」

すでに数十年と続いた人類の停滞。事を起こさねば何かが変わると思えん。おまえは今の世界を認めるのか？」

「いいや、そこは貴方と同じだ。認めることはできない。」

——けれど、憎むことも、またできないのだ。

自分は過去の人間。再現された亡霊<sup>ゴースト</sup>。

きつと自分は、この世界に対して、客観的な感想を述べられる数少ない人間だろう。

だから言える。

この時代に何の価値も見い出せなくても。

この未来のすべてが他人事に過ぎないとしても。

たとえ、人の夢見た先が愚かしい行き止まりでも、今を生きる人たちの人生を否定する事はできないのだ。

それに戦いを経て分かった。停滞し、淀んだ世界でもより良い形を目指して進む者がいる。

甘粕正彦だってその一人。だからその願いを否定しきれない。けれど変化を望む意志は1つじゃない。

単なる丸投げだと、叩かなければ世界は変わらないと言うけれど、わたしはそうだとは思わない。

——そうだよね、凜。

「はくのん、あなた……」

<sup>あなた</sup>凜をこの月から生還させる。

彼女のような人間が生きている。それこそが変化の兆しだ。

託す人間がいるのなら、それは何もしないわけじゃない。過去の人間にできることは、今の人間に意志を託すことだけだ。

「ふむ、そうか。おまえの考えは分かった。それで、サーヴァントの方はどうなのだ？」

かつて熾烈なる人生を生きた英雄として、その意志を確かめたい。

おまえは世界を、俺の願いをどう見る？」

「さてな。あいにく英雄というには、随分と恥を知らずに生きてきた



身だ。世界を如何になどと口にできる資格があるとは思えない。

それでも、どうしても答えるというなら、人間のつもりで答えてやらんでもないが——」

傍らに立つアーチャーと目が合う。それだけで彼が言わんとしていることが理解できた。

ずっと一緒に戦ってきたわたしの英霊。心はすでに通じ合っている。この男に感じていることの根本は同じはずだ。

だからわたしは頷いた。それだけで彼にも十分に伝わったようだ。

「あえてオレが答えるまでもないだろう。おまえの持つ誤りはマスターも理解しているようだからな」

「ほう？」

そうだ。あなたは間違っている。

その願いは理解できた。戦いという必要悪も否定はできない。

だがそうした方法論とは別に、自分は甘粕正彦を認められない。その在り方に受け入れ難さを感じている。

それはアーチャーもきつと同じ。民衆に否定されながら、彼自身は民衆を否定しなかったアーチャーだからこそ分かる。

甘粕正彦——あなたは見守ることの尊さが分かっていない。

その強さの在り方を理解せず、何もしなければ無価値だと言い捨てている。

自分の理屈で間違っているからとそれを叩いて、叩いて叩いて直さずにはいられない。

人の上、神の視点を持ちながら、人の弱さをありのままに受け入れられないなんて狭量さでどうする。

そんなだからあなたは失敗した。世界を壊してしまったんだ。

「人はおまえの思うようなものばかりではない。叩けばそれに応えてくれるとは限らない。そんな意志の無さが貴様は許せんのだろう。」

己の意に反するものを許容できない。小物の発想だな。そんなことで世直しとは、片腹痛いよ」

思いは同じだ。この男を受け入れることはできない。

その答えを、ここにはつきりと口にした。



さは俺が証明しよう。

楽園ばういぞは成る。我が願いを継ぐに足る意志の成長を待とう」

「その結末を見届けろ。世界の行く末を決める立会人として。その資格がおまえにはあるのだから」

二人の会話にどのような意味が含まれているのか、それを推し量ることは自分にはできない。

自身は舞台を降りたと語った白衣の男。

傍観者だと言った彼は、いったい何者だったのか。

どのような経緯を持ち、どのような思いを抱いてこの熾天の門へと至ったのか。

月の聖杯ムーンセルを見上げられるこの場所で、いったいどんな未来をその心に思い描いていたのか。

それは、この場で語られることはないのだろう。

「――では、始めるか」

石柱の山より甘粕が降り立つ。

それが何を意味しているのか、語られるまでもなく理解する。

自分と同じ地平に立った甘粕。

見下ろしていた眼光は、対峙することにより強烈な意志を叩きつけてくる。

臆しているわけにはいかない。応えるように、自分も一歩前に踏み出す。

「気を付けて、はくのん。甘粕は今までのどんなマスターよりも強いわ。実力だけじゃない、何よりその心がね。

気を抜いたらあつという間に潰されるわよ」

もちろんだ。忠告されるまでもない。

甘粕正彦は強い。これまで戦ってきた誰にも、その意志の強さで並び立つことはできないだろう。

きっと、いや間違いなく今まで以上の難敵だろう。だがそんなものはいつものことだ。

「どうした？ 肩の力を抜け。いまさら緊張する事でもないだろう。

君との戦いは一回戦から楽だったためしがない。大変なのはいつ

ものことだ。

……だが、あの頃とは違うものもある。

それが分かっているなら、私たちは負けはしない」

前に出るアーチャー。背中を押すその言葉が心強い。

そうだ、自分の傍らにはいつだつて彼がいた。どんな相手にだつて彼と共に打ち勝ってきたんだ。

なにも恐れることはない。アーチャーとなら大丈夫。それは誰よりも信じていることだから。

「実に因果だ。何度繰り返そうとも、行き着く結論はいつだつて同じか」

「だがこれだけは断言できる。甘粕正彦はこの月で最強の存在だ。」

私の救世主<sup>セイヴァー</sup>を退け、その宝<sup>アミタ・アミターバ</sup> 具をも超えていった彼は、強さという概念の一つの到達点だろう」

「その彼をも倒し得る強さの信念であるならば、たとえ私の持つそれと異なるのだとしても、人類にとつての光となるだろう」

白衣の男の祝辞を受け取って、両雄は聖杯の下に対峙する。

——岸波白野。

——甘粕正彦。

ただ一人の勝者が全てを手にする絶対の掟、聖杯戦争の結末は変わらない。

最後の勝利者を決める戦い。ここに決戦の幕は切つて落とされた。

# DEAD END

——…確かに、彼の願いを否定できない

戦争は間違っている。そのはずだ。けれども彼の言葉を否定することもまたできない。

事実、戦いを経て自分は一回戦の頃からは想像できないような力を手に入れている。

戦争の中で生まれた発明、進んだ研究、それらも数限りなくある。世界が停滞したまま腐っていくのも何とかしなければいけないのは確かだ。

身にこびりついた道徳や常識は警告音を発するが、しかしいくら考えても否定への道筋は浮かんでこない。

それは、つまり彼の言葉が正しいという事なのか。少なくとも、自分の中にその言葉以上に確からしいものはない。

ならば、彼の願いを、受け入れるべきなのかもしれない。

「ふふふふふふ、くははははははははははははははははッ！」

返答した直後、甘粕は弾けたように腹を抱えて大笑した。

ようやく現れた彼の願いの後継者。その到来を待ち望んでいたはずなのに、何かが空虚な笑い声。

何故だろう、嫌な予感が止まらない。

「く、はは、は……そうか。俺の樂園ぼらいでを受け継いでくれるのだな。

ああ、岸波白野よ——」

甘粕が手を差し出す。

それは、こちらに手を差し伸べているように見えて。

だから、応えるように自分も手を差し出して——

「興冷めだよ。おまえは要らんぞ」

——え？

「迷うのはいい。ときに誤ることも構わん。それもまた人間に許された成長の過程だ。

だがそれらの積み重ねの果て、己の未来に深い影響を持つ選択肢だ

と理解した上で、弱きに流れる。

他人の意志に押され、本来の願いを遠ざける。心では違うと思っても自信が持てず、他の言葉に従うのは楽であるためだ。

そんな者にいったいなにを託せという。なにが任せられるというのだ」

なにが、起こった、の？

隣には、凜も、アーチャーも、いたのに。なにかをされた様子も、なかったのに。

ただ甘粕が、差し出した手を、握りつぶすように固く閉じたくらいしか、自分には分からなかった。

もはや視界は真っ赤に染まって、真偽のほどは確かめられない。

なにがいけなかったのか、なにを間違ってしまったのか、それももう、手遅れだ。

「何を願おうとも構わん。元より願いに優劣などない。壮大であれ矮小であれ、己に真摯であるならば価値は等しい。

だが、多くの者たちの屍を越え、失われた願いの上に築かれた頂に立ちながら、願う事を放棄する。

それはなあ、散っていった者たちに対し、あまりにも不義理というものだろう」

そこで、ふと気付く。

そもそも、甘粕と自分が対等だなんて、どうして思っていたんだろう。

聖杯の所有者だと彼は言った。それはこの月において、神にも等しい力を持つことと同義ではないのか。

一介のマスターとは有する力の次元が違う。勝負という土俵に上がることさえ出来ない。それが自分たちと甘粕の力関係。

最初から勝ち目なんてなかった。

甘粕正彦は真実に魔王である。立ち向かう術などありはしない。

ならば彼の言っていた試練という言葉にも、意味なんてなかったのかと思つて――

「はは、ふはははははは、ハハハハハハハハハハハツ——！」  
思考できたのはそこまで。

もう、なにも考えられない。凜とアーチャーが呼ぶ声も、遥かに遠い。

最後に耳に残ったのは、甘粕の笑い声。爆笑しているはずなのに、泣いているようにも聞こえて——……

……岸波白野の意識は闇に落ちる。

月の聖杯戦争は終わらない……——

## 決闘

すでに戦端は開かれた。

対峙するアーチャーと甘粕。もはや両者に油断はない。

アーチャーの手には愛用とする双剣・干将莫耶があり。甘粕もまた腰に下げる軍刀に手を掛けて――

そこで一つの疑問が生じた。

甘粕正彦という男の規格外さに圧倒され、ここまで見過ごしてきたが、当然の疑問がそこにあった。

――甘粕のサーヴァントはどこにいるのか。

この月で行われる聖杯戦争はサーヴァントの力を借りて行われる。

サーヴァント 英霊。人類史から読み取られ、選抜された『英雄・偉人』を誇張・

再現した存在。

マスターは自らを媒介として彼等を召還し、マスターの剣として彼等は戦闘を代行する。

マスターである以上はサーヴァントの存在が不可欠。それは誰でもあっても変わらないはずだ。

「俺のサーヴァント？ いるではないか、ここに」

そんな疑問に対し、甘粕は何でもないうように答えて、自らの胸に手を置く。

瞬間、甘粕から受ける威圧が爆発的に増大した。

倒れこみそうになるのを必死で抑える。震える身体に活を入れてその存在と正面から向き合う。

別人とも思えるこの圧力。それは単に存在感が増したただけではなく、もつと言えば内部そのものに変化が生じたような――

「馬鹿な……マスターの中に、サーヴァントの気配だと？」

自分の感じた違和感に、アーチャーが正確な答えを出した。

サーヴァントは甘粕自身の中に。それを表面に現したというなら、この威圧の増大も頷ける。

だがそんなことが可能なのか？ マスターの中にサーヴァントを



取り入れる。そんな特殊な宝具が存在する？

「君の疑問はもつともだが、その答えは残念ながら不正解だ。これは何らかの宝具による現象ではない」

白衣の男の言葉が響く。

傍観者と名乗る彼は、戦いの公平を期すためか、情報<sup>マトリクス</sup>を開示している。

「正彦が召還した英霊は、彼の祖国の高名な武将だった。そこに特殊性は何もなかった」

「聖杯戦争の最中、正彦のサーヴァントは致命打を受けた。消滅を免れるだけで精一杯であり、戦闘など問題外の状態だった。

マスターとサーヴァントは運命共同体だ。サーヴァントという戦う手段を失えば、マスターに待つのは敗北だけ。そのままでは不戦敗は明白だ。

ゆえに正彦は行動した。その状況を逆転させるため、起死回生の策に打って出た」

「それは——自らのサーヴァントと融合すること。その霊子情報を自らの霊子構造に取り込み、自分自身を戦える存在へと変貌させることだ」

白衣の男の語る話は、あまりにも荒唐無稽な内容だった。

サーヴァントとの融合。マスター自身が戦えるように自己を改造する行為。言葉にするだけなら簡単だ。

だがそんな容易いことなのか。聞こえだけなら魂の改竄に近いとも思えたが、そう単純なことだとは思えない。

「当然だ。君が経験してきた魂の改竄とは規模がまるで異なる。普通ならば自殺行為でしかない。

一時的な夢幻<sup>インストロ</sup>召還や、一部分のみの移植とは訳が違う。いやこの二つでさえ人間の手には余る」

「そもそもからして、英霊とは人間の上位にある者だ。その霊子情報は人間の比ではない。

大地より湧き出る泉の中に、水質の違う一杯の水を混ぜ合わせればどうなるか。水は泉の中に溶けて消え、元の性質など無くなってしまう

うだろう。

英霊との融合とはそれだ。上位の存在を下位の器に流し込めば、器の中身などあつという間に侵し尽くし、器そのものが耐え切れずに自己崩壊する。

そんなことは自明の理であり、試す者などいるはずがない。前人未到であり不可能な所業だ」

「そう、誰にも不可能だった——甘粕正彦が成し遂げるまでは」

「甘粕正彦という器は、英霊という存在に耐え切った。膨大な情報量に侵されながらも、器の中身は元の性質を失わなかった。

その一生分の経験値。英雄として祀り上げられ、後世に着色された幻想。それら一切を咀嚼し飲み干し、己の血肉に変えた。

サーヴァントの技も、宝具も、今やすべては正彦の一部だ。どれ一つとして持て余すことなく、完全に我が物としている」

甘粕が黒色の軍刀を抜く。

刀を手に立つその姿、その威容は英雄たちと並べても遜色はない。

マスターではサーヴァントに対抗できない。そんな常識はもはや意味をなさない。

……認めるしかない。甘粕正彦はサーヴァントにも匹敵する脅威である。

「無論、口で説明するほど簡単なわけではない。正彦自身でさえそれは賭けだった。あの時が正彦にとって最大の危機だったよ。

事実、一度は確かに崩壊したんだ。他ならないムーンセルがその判断を下しかけた。それがどれほど絶対的な意味を持つか、説明は要らないだろう」

「しかし正彦は戻ってきた。逆境を前に魂を奮起させ、自らの存在をより高みへと進化させた。

特殊な才能スキルによる恩恵ではない。あらゆる人間が持ち得る意志の力、それだけで正彦は未だの領域にたどり着いたんだ」

「単に強いだけじゃない。正彦の強さとは苦境にあつて発揮される生命力、意志ある生命が持つ無限とも言える可能性だ。

ゆえに私は正彦の強さを評価する。正彦は初めから特Aランクの

マスターだったが、彼には更にその先があった。底が知れない。

ああ長くなってしまうが、つまり何が言いたいのかといえば――

軍刀が振るわれる。

受け止める双剣。激突し合う剣戟の音。

「――甘粕正彦はとうに英雄を超えている。心して挑むといい」  
戦いの火蓋は切られたのだ。

――ぶつかり合う二つの凶器が火花を散らす。

絶えることなく続く剣戟の響き。炸裂する金属音が、目に追えない戦いの激しさを物語っている。

音速を容易く置き去りにして交錯する刃と刃。人間の域では到底不可能な英雄の技。

前時代的な闘争であるにも関わらず、両者の戦いはまさしく兵器の領域。共に人の条理を逸脱している。

それこそがサーヴァントの戦い。聖杯戦争における闘争代行手段。ムーンセルが選定する超常の存在たち。

再現される英雄神話<sup>マインロジ</sup>。その武勇は英霊の称号にふさわしい。

であるならばその戦いは互角であるのか――答えは、否である。

「っ――」  
この場における優劣は明らか。

振るわれる軍刀を双剣が受ける。受けて、流して、防いで、その繰り返し。

傍目にも明確に、アーチャーは甘粕に対して劣勢を強いられていた。

元より赤い騎士のクラスは弓兵<sup>アーチャー</sup>。

決して白兵戦を得手とする身ではないが、相対する男の力量には驚

愕していた。

その速度、その威力、その技巧、どれも自らより数段上。

事実、繰り出される軍刀を、アーチャーは捌ききれていない。

それほどに甘粕正彦の攻撃は苛烈で、凄まじく、一切の容赦がなかった。

死闘の中でアーチャーの記憶によぎるのは、7回戦にて争った剣の英霊の姿。

かの太陽の騎士と、甘粕正彦の剣技の質は近いものではない。

細部に至るまで精錬され、全てが極限の練度に修まった騎士道の完成形。理想の姿と謳われた騎士の剣と、甘粕はある意味で対極だ。

洗練されながらも荒々しく、一撃毎に魂までも込めるかのような雄々しい剣は、生命の力を象徴するかのような熱を帯びている。

性質としては真逆に位置する両者の剣。だがその脅威度は同等であるとアーチャーは判断した。

甘粕正彦が人間であるという認識はどうに捨てている。

白兵戦において己は甘粕に劣ると判断。しかして赤い騎士とて聖杯戦争を勝ち抜いた猛者である。

未熟なマスターと重ねた激闘の数々。強いられてきた苦戦は、英霊たるアーチャーをして小さくない糧として身に刻まれている。

劣勢の中でアーチャーを支えるのは、愚直な修練の果てに得た鉄の心。

『心眼』と呼ばれる戦闘経験からの洞察力が、ここまでの戦闘を繋いでいる。

それはいうならば攻撃箇所の調整だ。

自ら致命的と呼べる隙を作ることにより、その一点に攻撃を限定させる。

通常ならば対応しきれぬ力量差でも、その攻撃が読めていれば凌ぐことが可能になる。

無論、それは致死の一撃を受ける危機に常時晒されることを意味する綱渡りだ。

それでも、即死を恐れて傷を負い消耗するよりも、生か死かの綱渡

りにこそ活路を見出した。

戦意に衰えはない。勝機は必ずある。

現状においても、予測できるだけで二十合は隙を作り凌ぐことが出来るかと判断して――

「――ふむ。手法を変えるか」

突如としてよぎった悪寒。

感覚に従いアーチャーは退がり、そこにこれまでを超越した力の一撃が炸裂した。

――穿たれたのは水面の大地。表層を抉られ、剥き出し情報体がその姿を晒している。

粉碎されたその跡は、これまでと破壊の規模が違う。

寸前までとは剣の質が違いすぎる。重なっていたセイバーの姿はもはや見えない。

そこに連想されるのは別の難敵。ラニⅡⅧの従えた狂戦士バーサーカーの英霊の暴威だった。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

雄叫びを上げながら、渾身の力を込めた一撃が振り下ろされる。

隙の有無などお構いなしに繰り出される暴力は、これまでの心眼では推し量れない。

一切の行動を放棄して回避に専念。その衝撃は触れていないにも関わらず肉を斬り裂き血を流させた。

あまりにも性質が変わりすぎている。安定した走りを見せる高速車両が、突如として暴走列車に変貌したかのような切り替り。

これが甘粕の本性か。先ほどまでは偽りか。いいや否だ、どちらも甘粕の持つ技量の一端である。

容赦なく攻撃を繰り出す甘粕であるが、彼は決して勝負を急いではいない。

これほどの激戦を演じながら甘粕の頭にあるのはどこまでも試練なのだ。相手が倒されるよりも反撃こそを期待している。

つまりは試しているのだ。己の繰り出す一撃を相手がいかに攻略するか、その雄々しい姿を熱望して待っている。

本来それは驕りとも言い換えられる。己は試す側、つまり相手よりも上だと無条件で豪語しているのだから。

そうしたものは通常、戦いにおいて隙となるものなのだが、甘粕正彦のそれは極めて畸形である。

仮に、必殺を期した一撃を防がれたとする。

その時に感じるものとは何か。多くの場合、それは相手の力量に対する驚愕か、誇りに泥を塗られたことへの怒りだろう。

だが甘粕正彦の場合、それは期待に込めてくれた相手への歓喜と、自らを向上させようとする奮起となる。

よくぞ防いだ素晴らしい。ならば己もより強く在らねば、と。

常識を外れた思考回路は、しかし戦闘に臨む心として一つの理想に到達している。

なにせこれ、折れることを知らない。如何なる反撃を受けようと怯まず、奮い立って更なる反撃を繰り出すのだから。

課す試練には手加減というものが無い。生半可な攻勢では試練となり得ないと感じており、結果として隙がなくなる。

勝負を急いでいないからと、その現状に甘えようものならば即座に戦術を切り替える。緩むことを相手に許さない。

そして苛烈がすぎるその試練に付いてこれなくなった者に待つのは、ただ無残な敗北である。

「くっ——！」

漏れた苦悶は狂わされた計算へ向けたものか。

もはや先までの心眼は通用しない。今の甘粕の力はアーチャーの予測を超えている。

であるなら、先程よりもアーチャーは追い詰められているのかといえ、それも異なる。

技も戦術もなく振るわれる暴力は、まさに狂戦士のそれ。

全てを力に割り振った一撃は凄まじい。だが引き換えにそれまでの洗練された技の冴えは失われている。

突破口はある。暴れまわる狂戦士ならば、そのようにいなせば良い。すでに隙は見出している。

そう、隙は存在しているのだ——見え透いているほどに。洞察している、これは誘いだ。

忘れてはならない。甘粕は狂化の檻に囚われているわけではない。あくまで理性的な判断の下、自らの戦略に従って手法を変えているのだ。

突破可能な隙を自ら作り、敵にそこを攻撃するよう誘導する。他ならぬアーチャー自身が用いていた戦術だ。

ならば誘いに乗らなければ、というのは甘い見通しだ。甘粕の暴威は強力無比。迂闊な攻め口ならば容易く叩き潰される。

目に見えた突破口は、裏を返せばそれ以外の道が存在しないことを意味している。反撃を考えれば、結局はそこしかない。

そして甘粕の気質を考えるに、恐らくそれは更なる苦難の道へと通じている。そこに乗るのが正しいか、赤い騎士は判断しかねている。危険であると経験は告げる。

しかしこのまま徒に消耗を強いられるのも得策ではない。進むか、退くか。迫られる決断にアーチャーの意思が揺れる。

『アーチャー』

刹那、赤い騎士に届いたのは自らのマスターである少女の念話<sup>ことば</sup>。

紡がれたのは自身の呼び名。共に授けられる能力強化のコードキャスト。

余計に言葉を重ねる必要はない。それだけでマスターの意思は伝わった。

赤い騎士に微笑が浮かぶ。

いつからだろう。こんなにも彼女<sup>マスター</sup>の言葉を頼もしく思えたのは。始まりは誰よりも弱かった彼女。意志なく揺れるその背を押したのは一度や二度ではない。

それがいつしか、自分の方が背を押されるようになっていた。彼女の決断に従う自分がいた。

ああ、まったく——大したマスターだと、心からそう思う。

そんな誇りある主人<sup>マスター</sup>に対し、従<sup>サーヴァント</sup>者たる自分がすべきことは何か。決まっている。応えることだ。彼女の期待に、この身が持つ技の全

てを振り絞って。

如何なる苦難であろうと怯むには値しない。我が身はサーヴァント、彼女だけの英雄である。

そこにどれほどの試練が待ち構えていようとも踏破してみせる。それでこそ英雄というものだろう。

「——鶴翼、欠落ヲ不ラズ」

決意が定まる。もはや進む意志に迷いはない。

取るべき手段は一つ。甘粕正彦がこちらの反撃をも予測して待ち構えているというのなら。

その予測を上回る必殺、己の持ちうる奥義を以て思惑ごと粉碎するのみ。

「——心技、泰山ニ至リ」

アーチャーの双剣が投擲される。

干将莫耶。陰と陽に分かれた夫婦剣。

その軌道は弧を描き、二つの刃は左右より甘粕を挟み込む。

対し甘粕が返すのは渾身の力を込めた軍刀の横一閃。

並の者ならば容易く碎かれるだろう宝具による挟み撃ちを、ただ己の剛力を以て容易く弾いた。

己の武器を手放した赤い騎士に、甘粕は容赦はしない。

狂い乱れる暴れ馬の如き勢いはそのままに、猛進し繰り出さんとするの闘争本能が生み出す剛の一撃。

賢しく流すことなど許さない無双の力を前に、得物なしで迎撃することは無謀の一言でしか言い表せない。

「——凍結、解除」

ゆえに手にはすでに新たな得物が用意されている。

再び投影された双剣。進撃する甘粕に対し、アーチャーは正面から迎撃の構えをとる。

同時に、甘粕の背後を二つの刃が再び襲いかかった。

「ぬウ——!?!」

背後から迫る二つの殺意を、甘粕は神速の反応で防衛し、弾く。単なる狂戦士であったならば殺れていた。凌いでみせた技量は狂



気の内のそれではない。

狂乱の暴威も所詮は手法の一つ。不要になれば引き戻すことも容易い。すでに先までの技の冴えを取り戻している。

やはり流石というべきだろう。甘粕正彦の強さは浅くない。戦士としての完成度は完全に赤い騎士の上をいつている。

しかし見るがいい。才なき身が強者に適わぬ絶対はない。

凡夫の描く技といえど、磨き続けければ最強を崩す牙となり得るのだと。

「心技 黄河ヲ渡ル」

手の双剣が再び投擲される。

背後への迎撃。結果としてその正面は無防備を晒している。

これ以上はない隙を突き、双剣は敵の身を食い破らんと迫り——  
その一撃すらも、甘粕正彦は防ぎきった。

「唯名 別天ニ納メ」

甘粕の防戦はまさしく英雄の所業。

生半なサーヴァントであれば今の一撃で終わっていた。

紛れもなくその力量は大英雄の領域。仕留めるには二手では足りない。

——だからこそ、その次を持つこの奥義は必殺たり得るのだ。

「両雄、共二命ヲ別ツ」

干将莫耶オーバーエッジ。

構造強化されて投影され、鳥の広げた翼の如く肥大した刀身はもはや大剣の域にある。

長大なリーチと威力を持った双剣をアーチャーは繰り出す。更にそこへ弾かれた計4本の剣が飛来した。

これこそが夫婦剣・干将莫耶の持つ特性。

陰と陽。それぞれに対となる属性を持つこの双剣は、磁石のように互いを引き寄せ合う。

すなわちその手に干将があり莫耶がある限り、剣は自動的に持ち主の元まで舞い戻ってくる。

そして3組の双剣が引かれ合う交錯点。そこには甘粕正彦がいた。

——これにて完成。

真作を持たない贋作者たる赤い騎士の至った必殺の型。

振るわれる大剣、引かれ合う夫婦剣の包囲網はすでに脱出不可能。もはや死に体となった甘粕の剣に、これを凌ぐ術は存在しない——

「——見事。凡百が至った執念の境地、堪能させてもらつたよ」  
決着の瞬間、突如として無数の炸裂音が響き渡った。

「——甘粕正彦は英霊を取り込んだ。それは単なる模倣の意味とは異なるものだ」

「師より教えを授かる弟子のように、教えられた技を我が物とすることだ。」

会得した技を自らの力で発達させ、新しい形へと変化させることだ」

「正彦の剣は正彦のもの。サーヴァントの技ではない。」

元より人の極地に立っていた正彦は、英霊という膨大な経験値リソースを得ることでその強さを魔人の域に至らせている。

そこから得られたものは様々だが、それでも一つ言及するとすれば——

「——正彦が召還したサーヴァントのクラスは、アーチャー弓兵だよ」

決まっただと思つた。

アーチャーの繰り出した奥義・鶴翼三連。あれはアーチャーの持つ切り札の一つだ。

これまでの戦いで何度もあの技が決め手となった。その必殺性は疑っていない。

甘粕に逃れる術はない。確かにそう思った。しかし刃が届こうとしたその時、”何か”が宙を舞う干将莫耶を全て撃ち落としたのだ。

それは、甘粕の背後より現れたもの。戦場を変えた新たな武器の形。槍や弓という戦場の主役を過去のものとした。

その武器の登場を皮切りに、戦場の形態は変化していく。戦技を競う場は淘汰され冷酷な戦術のみが支配した。

すなわち近代化への移行。その原点として、極東の島国においてはあまりに有名な”銃”の概念。

その名——火縄銃・種子島。

「これは、アーチャー彼女”の宝具だ」

「受け取った意志は今も我が胸にある。革新を目指した王の姿、感じ入ったその有り様に恥じることがないように」

燃える鬼火の中より新たな銃が形を成す。十丁、二十丁と増え、次々と。

築かれていく種子島の総列。主君に率いられるその偉容は、かつて”天下”に届こうとした軍団のそれか。

それを戴く英雄の姿として、甘粕正彦の佇まいには不足も違和感もなかった。

「そして覚悟して受けるがいい。天下に覇を唱えた轟砲は軽いものではないぞ」

その言葉を引き金として一斉砲火が放たれた。

「くっ——！」

再び投影した双剣で銃撃を防いでいく。

いかに銃弾といえど、アーチャーは英霊だ。一発一発を弾き落とすことは難しいことじゃない。

だがこれは数が違う。

弾込めもせず次々と使い捨て入れ換えられる種子島は途切れる様

子がない。

種子島という武器は単体では決して宝具となり得ない。

その本質はどこまでも兵器。一丁の真贋に重さはなく、いかに数を揃え量を投入するかに意味がある。

ゆえにその宝具は群として成立する。小さな島国に当時世界最多の銃をかき集めた戦国の意志。それが形となった幻想<sup>ほうかく</sup>なのだ。

その弾幕はもはや点ではなく面の攻撃。

アーチャーは一定箇所<sup>ところ</sup>に留まらずに駆け回りながら回避を行うが、それでも完全に逃げ切れるものではない。

時間の経過と共に被弾は増える。回復のコードキャストで援護するが、消耗していくことは避けられない。

対して、アーチャーの攻撃は未だに届いていない。

決してアーチャーの技量が低いんじゃない。僅かな間隙から撃ち込む弓矢の三点射。人には不可能な芸当だ。

しかしその矢は届くことなく、正確無比な種子島の迎撃により悉く撃ち落とされている。そしてその間にも攻撃の手は緩まない。

単純に手数が違う。単体ならば脅威ではないが、数が揃えば恐ろしいまでの堅牢さだった。

このままでは追い詰められる。こちらがそう思う中、甘粕自身が動きをみせた。

並び立つ種子島の内一丁<sup>いちてい</sup>を手取る。それを甘粕自身で構え、自らの手で直接撃ち放った。

無数の砲火の中に紛れる一発の銃弾。マスターである岸波白野<sup>しなぶの</sup>にもはや識別できない。

しかし鷹の目を持つアーチャーの眼を通し、その驚くべき事象を目の当たりにした。

「っ！ くうううう——！！」

その軌道が曲線を描く。標的を捉え損ね、無為に消えるはずだった銃弾は、再び獲物に向かつて牙を剥いた。

それはさながら魔弾の射手。意のままに追いつき、相手に必中する伝承のように、銃弾は敵の喉笛目掛けて自由自在に突き進む。

回避は悪手と判断し、アーチャーは手にある干将で迎撃する。だが激突の結果、銃弾と共に干将の白い刃は砕け散っていた。

それは驚愕すべき結果だった。

いかに投影とはいえアーチャーの剣はまぎれもなく宝具。それをたつたの銃弾一発で砕いたのだから。

しかし驚いてばかりではいられない。自分は司令塔<sup>マスター</sup>、こういう時こそ冷静に敵の手を判断しなくては。

いったい何が起こったのか。目にした情報とこれまでの経験から分析する。

詳しいことは分からない。だがおそらく、あれはコードキャストの応用ではないのか。

まず自在に軌道を変化させ相手を追尾する効果を実現させたのは『射出』の術式<sup>コード</sup>。

そして干将と衝突しその刃を粉碎せしめたのは、相手の術に何らかの影響をもたらす『解体』の術式<sup>コード</sup>。

二つの術式<sup>コード</sup>を銃弾に上乘せし、あの恐るべき魔弾を実現させたのではないか。

単発では脅威でなし。そんな認識すら甘いと覆される。

ただの一発としてそれは凶器<sup>ほうぐ</sup>だった。その弾丸は宝具をも粉碎する威力を秘めている。

「づっ——！」

そして得物の喪失は、すなわち迎撃の手数<sup>しすう</sup>の消失だ。

被弾の頻度が増す。二本ならば迎撃できていたものが、一本では不足となる。

新たな剣を投影する必要がある。だがこの弾幕の中、迂闊な投影は致命に繋がる。

現状を打破するには剣が要る。だが大掛かりな投影をその都度行っているのは敵の銃火に間に合わない。

そう、いちいち取り出しているのでは遅すぎるのだ。

『——マスター』

アーチャーから念話が届く。

その意図は明白。こちらにも反対はない。

出し惜しみなんて出来る相手じゃない。全力を尽くして挑まないと活路はないと分かったから。

——アーチャー。宝具の使用を。

「承知した、マスター……！」

これよりアーチャーが使うのは、彼の切り札にして全て。

彼が用いる魔術は、これより漏れ出た一端にすぎない。

それはアーチャーの心象風景。自身の心をカタチにし現実へ上書きする大禁呪。

「I am the bone of my sword。」

Steel is my body, and fire is my blood.

I have created over a thousand blades.

詠唱の中でアーチャーは自身の内へと埋没する。

生涯を剣の如き孤高の鉄心で生きた彼の、その言霊は生き様を表すものか。

だがその行程は通常の投影の比ではない。

発生する際は避けようがなく、そこを見逃すような温さを甘粕正彦は持ち合わせない。

展開される種子島。再びの一斉砲火が放たれんとして——

「ぬっ——!?!」

それをくい止めるのがマスターたる自分の役目だ。

使用したものは『隠者の鏡』と呼ばれる礼装。

相手の攻撃意欲に反応し、一時的な麻痺症状を引き起こす簡易術式。

生じた効果により攻撃は中断。一斉砲火は不発に終わった。

「Unknown to Death。」

「Nor know to Life。」

Have withstood pain to create many weapons.

だがそれもあくまで一時的なもの。  
稼げたのはせいぜいが一手分の猶予のみ。

未だ銃口群は主の号令を待っている。今度は止める手立てはない。

——だが、すでにその必要もない。

元より甘粕を相手に自分が稼げる猶予など一手が限度。

その一手分の間隙の中で、アーチャーは自身を守護するための盾を  
内の丘より取り出していた。

火を噴く種子島の銃撃を七枚羽の盾が受け止める。

真名の解放なしに展開されたその盾は虚ろ。本来の強度には及ば  
ない。

それでも十分。残り僅かな間隙を生み出すにはその守護で十分す  
ぎた。

大英雄の投擲にすら耐え切った鉄壁の守り。たとえその域に至ら  
ずとも、銃弾如きに崩されるほど脆弱ではない。

そして、最後の二節が紡がれる。

「Yet, those hands will never hold anyt  
So as I pray, UNLIMITED BLADE WORKS」  
59

——その真名と共に、詠唱は完成した。

炎が走る。

燃えさかる火は壁となつて境界を造り、内側を変革していく。

顕れたのは荒野。錬鉄の歯車を廻す、無数の剣が乱立する丘が広  
がっていた。

この世界こそアーチャーの宝具。

固有結界。世界を侵す術者の心象世界の具現化。

——世界の名は、無限の剣製。

無銘の英霊、その生き様の果てに得た唯一の答えがそこにあった。





だがその手数てすうの差も無限の剣を内包する世界の中では埋められる。今度は甘粕の方がその火力に押されていた。

通常であれば、このような事態は有り得ない。

宝具とはその英霊を象徴とするもの。苛烈なる生涯の果てにある究極の一。本来その数は多くとも二つや三つが関の山という所。

だというのに大地に突き立つ剣の群は無限の如く途切れがない。その異常事態、如何なる英雄でも瞠目せざる得ないだろう。

「なるほど、贋作者か」

異常の答えはそれである。

赤い騎士は幻想ほうかくを担う者ではない。彼は造る者。贋作者たる姿こそが真骨頂。

世界に突き立つ剣はどれも贋作。自らの力で勝つのではなく、勝てるものを模倣し創造することこそが本質だ。

それは凡夫の身に許された唯一の幻想。

王道ではない。それでも為したい事を為すために手を伸ばした力。苔の一念で鍛え上げて貫き続けて、果てに辿り着いた境地である。

ゆえにその贋作は真に迫る。

全てが偽物といえど有する力は本物。一撃の重さは蓄積された幻想の重みである。

使い潰されることを良しとする兵器の群では、剣製の丘に敵う道理はない。

「いや素晴らしい。贋作といえど、その道を尽くすならば一つの真まことを見せてもらったよ、感服した」

「だが足りんな。これしきで負けてはいられんよ。背負う重みがあるのはそちらばかりではない。」

ああ、要は男の甲斐性というやつだ。この宝具を使うにあたり、無様を晒しては彼女に面子が立たんだろうが」

だがその道理に甘粕正彦は真つ向から対峙する。

至った世界かいどう、実に見事。だが俺の幻想ほうかくとして負けてはおらん。

おまえたちに絆があるように、俺にもまたそれはある。我が戦友サーヴァント、その生涯の重さはこの世界と比してもなお勝ると信じているのだ。

猛る意志のまま、甘粕は新たな兵器を創形する。

形を成していくそれは種子島か、いいや否。これはそんな規模のものではない。

種子島は象徴ではあるが全てではない。王の覇道の渦中で生み出された兵器は全てが『革新』の概念。それらは余すことなく宝具の一部として納められている。

その中でもこれは最大規模。豊潤な財源と対策必須の難敵、二つの要素により実現した”世界初”の規格外が現出する。

「聖剣、魔剣……伝説に謳われ英雄の象徴となる宝具。たしかにそれらも悪くはないがな」

現れたのは巨大な船。

鋼鉄の黒に覆われた威容は焙烙火矢に対抗するべく纏わせた鉄の装甲。

そこに宝具としての華はない。信仰の対象となり得る神聖さなど持ち合わせない。あるのは無骨なまでに重厚な兵器の意志。

矢倉からは無数の種子島が突き出し、さながらそれは銃口に覆われた針鼠。上に建つ壮健たる天守閣は、まさしく水上に浮かぶ城そのもの。

そして先頭に装備された大火砲・大筒三門。その存在感は否応なくこの巨船を闘争のためのものと告げていた。

この船は神の手による創造物ではない。精霊や祈りといった神秘の類で編まれたわけでもない。

これは純粹なる人の業。未知を開拓し理を知って作り上げた現実の産物だ。

巨船の名を、『鉄甲船』という。

「俺には兵器こちゅうの方が性に合っているよ。前進しようとする人の意志を感じられる。

在りし日が素晴らしいからと、いつまでも囚われていては進歩はあ  
るまい」

放たれる宝具群の悉くが鋼鉄の装甲にはね返される。

敵軍の如何なる攻撃も寄せ付けなかったという船の逸話。宝具と

化して昇華された幻想は、鉄壁の物理防御性能を発揮する。

迎撃には備えられた種子島。更には偉容を示す大筒三門が火を噴き、劍群の一角を吹き飛ばす。

攻守ともにそれは堅牢そのもの。いかに無限の宝具を備えた剣の丘といえども突破は容易ではない。

その天守閣の頂に立つて、甘粕正彦は高らかに叫ぶのだ。

どうだ見ろ、凄まじいものだろう。

まだ戦場に槍や弓が並んでいた時代に、こんなものを作り出そうというのだぞ。

これぞ革新を目指した人間の意志。乱世しれんの果てに成した輝きの結晶だとは思わんか。

なあ、おまえはこれをどう思うのだ？

「I am the bone of my sword。」

だが赤い騎士とて未だ健在。

圧倒される船の威容にも怯まず、宝具を弓につがえる姿に敗退の気配はない。

その後方には無数に投影された劍群。全力で展開されたそれらの宝具は、何より如実にアーチャーの意志を伝えている。

すなわち、退く気はないと。

「ハ——！」

徹底抗戦の構える赤い騎士。そんな敵手の意志を甘粕は歓迎する。

手が複数の印の形をきる。術式が展開され、共に創形されていく種子島、大筒、等々。

空間を埋めつくしながら展開される兵器群。その総数は、もはや一目で数えきれるものではない。

その意志に応えよう。準備はすでにできている。

アーチャーの劍製に、甘粕の兵器創形。互いに主の号令を待ち、激突の瞬間を望んでいる。

「偽・螺旋劍！」

放たれた矢と共に一斉射出される劍群の雨。

再び火を噴く大筒三門。同時に引き金を引かれた鉄砲、大砲の総

列。

—— 劍戟、銃声、突き穿つ刃、炸裂する砲火、衝撃、閃光、轟音、火炎。

巻き起こる大破壊が世界を揺るがして吹き荒れた。

まさしくそれは災禍の光景だった。

穿たれた大地を覆うのは炎。空には黒煙が立ち上って視界を閉ざす。

突き立っていた無数の剣は悉くが砕かれて、無残な残骸の姿を晒している。

作られた世界の上に刻まれた破壊跡。目にすればあの激突がどれほどの規模であつた理解できた。

状況はほとんど把握できていない。

激突の瞬間は目を閉じていたし耳も塞いでいた。まともに受けていたらどちらの感覚も破壊されていただろう。

それでも確かに言えるのは、アーチャーはまだ健在だということだけだ。

たとえ何も分からない中であっても、令呪を通したラインだけは常に確認している。

ラインはまだ通じている。固有結界だつて消滅してはいない。大丈夫、アーチャーは無事だ。

そんな自分の信頼に応えてくれたように、黒煙の中からアーチャーが姿を現した。

さすがに無傷ではない。

すぐにコードキャストでダメージを回復させる。

「ああ、すまない。恩にきるよ、マスター」

ううん、無事で良かった。

それより甘粕正彦は？

「……さて、手応えはあったが」

言葉とは裏腹にアーチャーの声には自信がない。

言わんとしている事は訊かずとも分かった。

これだけで終わるとは思えない。あの甘粕正彦という男が。

「——実に見事だ。まずは称賛を言わせてくれ」

こちらの思考に応えたように、黒煙の中から声がする。

晴れていく視界に映ったのは、捻れた大穴を空け轟沈していく鉄甲船の姿。

炎の中に沈んでいく黒船の上に甘粕は立っていた。

「引き出されるサーヴァントの力。それを支えるマスターとの絆。どれも不足はない。」

認めよう。おまえたちこそまさしく聖杯戦争の勝者にふさわしい主従であると」

船の上から降り立ち、こちらと地平を同じくしてから甘粕は告げる。

今度は彼も、無傷では済まなかった。

身体のいたる箇所刃の痕を残し、血を流している。

だがこちらを讃える言葉を口にする彼に、自らの負傷を気にしている様子は微塵もなかった。

「元より分かっていたことではあったがな。この身で直に味わうのはやはり違う。」

改めて思うよ。最弱の身からよくぞここまで完成した。おまえこそ人の持つ可能性の証明だと」

「どうやら褒め殺しがそちらの趣味のようだが。だとしても随分と節操のない。」

御覧のとおり、ここにある物は全てが紛い物。己以外の者が至った行程を再現しているだけの贋作たちだ。

王道ではない。真つ当な道筋を歩んだ英霊からすれば、武器も技も他から掠め取ってくるこの世界を好ましくなど思わんだろう。

それを理解しても尚、貴様は見事と称賛するのか？」

「無論だよ。これほどに極まった鋼の意志を目の当たりにして、認めぬことなどそれこそ有り得ん。」

王道ではない？ 結構ではないか。邪道とて一つの道には違いない。そこでしか為せんこともあるだろう」

「なるほど、懐の深さは大したものだ。しかし全てを肯定するという事は、裏を返せば全てを否定しているのと同義。」

貴様は信念の肯定者にはなれはしても、真実の理解者にはなり得ない男だよ」

「これはこれは、なかなか鋭い指摘だな。確かにそうした側面があることは否定できん。」

だがこれだけは言わせてもらおう。俺とて何から何まで認めているわけではない。

言ったはずだがな。俺は今の世の懦弱な意志を憎んでいる。安寧を貪るばかりの人間を認めることは出来ん。

総てを愛している、とまでは言わんよ」

「何の信念も覚悟もない輩が、臆面もなく正義を公言して憚らず、物知り顔で見当違いの道理を抜かす姿。ああ、反吐がでる。」

太平の世とは得てしてそうした奴輩が蔓延りだす時期でもある。現在の管理と安寧の社会はその極みだろうさ。

意志なき者が理念を語ったところで、いったい何の重みが宿る。魂の劣化を招く墮落腐敗、その温床となっているものは断たねばならん」

「そのためならば悪ささえも許容するか。強い意志が伴っていれば、他者に犠牲を強要する行為すら素晴らしいと。」

……なにが悲劇を憎むだ。貴様の考え方こそ、理不尽に倒れる弱者を生む要因となるもの。悪と呼ばれる理念そのものだ」

「矛盾しているつもりはないぞ。虐げられる弱者、理不尽に起きる不幸、悲劇を俺は憎んでいる。断言してそう言おう。」

だが同時に、他者を犠牲にしても事を為そうとする意志を否定するつもりもない。そうした悪の意志でしか成し得ない事もある。

そうした悪意に抗い、自身と大切に思う誰かの尊厳を守らんとする

善の意志も、また然りだ」

アーチャーと甘粕の主張は、どこまでも平行線だ。

自分は今でも甘粕正彦が悪なる人物だとは思わない。

地上では凜が肩を並べていたように、その気質はきつと多くの人達を勇気付けて導いてきたに違いない。

あるいは甘粕正彦とは、停滞する世界に新たな風を起こすべく生まれ”英雄”なのかもしれない。

けれどそれはアーチャーとは噛み合わない。

『理想』のために人々を救い続けたアーチャーと、『人間』のために人々を苦しめようとしている甘粕正彦では、致命的なまでに思想が食い違っている。

たとえどちらも善の意志からくるものであっても、両者の道が交わることは決してないのだろう。

……それでも、二人には奇妙な共通点がある。

二人が掲げている正義は、どちらも大衆の視点からは受け入れ難いものだ。

多くの命を守るために少数を殺戮する正義、人間の尊厳を取り戻すために試練を課す魔王、どちらも『必要悪』と呼ばれる概念。

程度の差はあるだろう。しかし二人の持つ思想そのものは人間にとって確かに必要となるものでもある。

ならば、より求められているのは、いったいどちらなのだろう。

「善悪の定義とは所詮、主観的な見方の問題だ。その場限りの視点で推し量れても、そのみで価値を判断することは出来ん。

なぜならば、例え今の人々の価値観から悪とされる行いでも、後の結果として見れば世に益をもたらす事例は往々に存在する。

世界を整え規範を与えるのが善ならば、時にそれを壊し世界に新たな前進をもたらすのは悪なのだろう。その真価は後にならねば測れない。

物事に絶対の正解答などない。どちらも人の持つ側面、光と成り得る意志の輝きだ。俺はそれを認め、尊んでいるというだけの話」

「——たとえば、そう。こんな人生ひかりなどは如何かな？」

途端、甘粕より異様な気配が立ち昇る。

こちらを圧するほどに高まりを見せる甘粕の魔力。この圧力は間違いのない、宝具を発動した証だ。

アーチャーに動揺した様子はない。

如何に会話を挟んでいたとしても、未だ戦闘の最中だということ。彼が一番分かっている。

常に警戒を怠らず、相手のどんな行動にも即応できる構え。どんな攻撃であれ応じてみせると言っている。

だが予想に反して、甘粕の起こした現象は攻撃ではなかった。

直接危害を加える現象は起きてない。代わりに視界の先、剣製の荒野の果てに今までに無かったものが映っている。

さながらそれは蜃気楼。世界を上書きする類のものではなく、ただ見えているだけの映像のようなものと確かに分かる。

映っているのは、一帯を包み込んだ炎と、それに焼かれていく寺院の姿。

総てを焼き尽くしていく大火。しかしその情景は恐怖や忌諱といった類とは別の感情を呼び起こしている。

これは、物悲しさだろうか。これまでの宝具の苛烈さとは違う、なにか儚さともいうべきものを感じられて。

——なぜか自分は、かつての災害の光景を幻視していた。

甘粕が兵器を創形する。

形を成したのは種子島。それ自体にこれまでと変わる何かは見られない。

けれど今はあの謎の宝具の存在がある。その正体が不明である限り、どんな攻撃でも油断はできない。

その警戒はアーチャーも同じであり、だから備えはすでに用意している。

引き金に手が掛かる。

対しアーチャーが構えるのは、彼が最も信頼している最高の守り。

如何なる攻撃であろうと届くことはない。その上で宝具の性質を見極めようとする判断は、確かに妥当なもので。



そこに何か、致命的な誤りがあるのでとは直感していた。冷静に相手の能力を測ろうとするアーチャーの慎重さは当然のものだ。

情報もなく迂闊な攻撃を仕掛けても、手痛い反撃を受ける危険性の方が遥かに大きい。

少々の危険など省みずに諸共粉碎するような豪胆さは、それに見合うだけの実力を備えた大英雄だけが持つていいもの。

決して能力面で恵まれていないアーチャーにとつて、その慎重さは様々な局面で彼を生き延びさせた武器であるはずだ。

だから、アーチャーの判断は間違つてなんかない、はずなのに。

嫌な予感は止まらない。けれどその予感が形にならない。どう伝えればいいのか分からない。

その迷いは一瞬の判断が戦況を分ける戦場において、余りに決定的な遅れだった。

「熾<sup>ロ</sup>天<sup>イ</sup>覆<sup>ア</sup>う七<sup>ア</sup>つの円<sup>ス</sup>環——！」

発射される銃撃に対応し、展開される盾の宝具。

その真名はアイアス。使い手を離れた武器に対しては無敵となる概念を持つ七枚の守り。

花卉の如き七枚羽は一枚が古の城壁に匹敵する。アーチャーが持ち得る限りで、それは最強の守護。

故に、勝敗はすでに明らか。

元より投射物には絶対の特性を持つ盾。銃撃如きでは一枚に傷一つも付けられまい。

明瞭すぎるその結果。だからこそ発生するだろう何らかの異常をアーチャーは見極めんとして。

七枚の守りを紙の如く突き破つてきた銃撃にその身を貫かれていた。

「がっ——！　ぐ、うう、馬鹿な——！？」

アーチャーの驚愕も無理からぬほど、それは有り得ない結果だった。

アイアスの守りは堅牢。その防御性能は今更疑いはない。

まして種子島とは投射武器。放たれた弾丸による攻撃は、完全にア  
イアスの特性に嵌っている。

たとえその守りを崩す何らかの概念があつたとしても、干渉があつ  
たのならその変質に気づけたはず。

だというのに今の銃撃は、そんな道理の全てを無視してアーチャー  
に届いていた。

この結果を見て、自分の中でようやく合点がいった。

アーチャーの守りを破った能力。目の当たりにして幻視した自分  
の”災害”。

その正体は――

「――そうだ。これは”滅び”の概念。天下を目前に潰えた王の結末  
を象徴とした”宝具”だ」

広がり映る炎の情景を見る。

この情景は一人の王の最期。旺盛を極め天下に並ぶ者などなかつ  
たはずの王の、余りにも唐突に訪れた滅亡。

予兆もなく、道理さえも歴史の謎として消えた滅びの無情は、その  
ままそれを象徴とする概念と化した。

それはすなわち諸行無常、盛者必衰の理。

人の一生など所詮は一昼夜の夢の如し。ならば人の生み出した幻  
想もまた然り。

この世の如何なる堅牢、絶対、不死の存在も、世に生まれて滅びを  
迎えぬものなど有りはしない。

故にこの宝具の前ではあらゆる守護が無為となる。その概念が死  
から遠ければ遠いほどに、逃れようのない滅びを誘発されてしまう。

悔やむ。この窮地を察していながら防ぐことが出来なかった。

何のために自分がいるのか。直接戦うのがサーヴァントなら、それ  
を支え補うのがマスターだろうに。

不甲斐ない。幾度となく味わった自らの無力感。それも今回は避  
けようとするれば避けられたはずなのに。

だがそんな後悔すら、今の状況では後回しにしなければいけないかつ  
た。

まともに直撃を受けたアーチャーは重傷だ。

おまけに滅びの下にあつては癒しすら許されないのか、回復も受け付けない。

対し甘粕は未だに健在。立ち直ろうにも時間も手段もない状態だ。打つ手がない。もはや状況は詰みに等しい。次に一斉砲火が放たれれば、敗北は必至だった。

「かつて、乱世の世に生を受けた一人の王がいた」

だというのに、甘粕はそれをしなかった。

あと一撃。それで決着がつくというのに、銃を下ろして語り出している。

どこか懐かしむような口調に悪意は見られない。策略の類でないのなら、本当にただ語っているだけか。

それでも状況を選べる自由はこちらに無い。得られる時間も惜しく、選択の余地など初めからなかった。

「曰く、乱世の風雲児。時代に求められるように生まれた王は、自らが生を受けた戦乱の世を是とした。

決して強者とは言えぬ家柄に生まれながら、天下を目前にまで成り上がる事が出来たのは、生まれた時代が乱世であった事に相違ない。

強者を追い落とす下克上。既成概念を打ち碎き、新しい方策を生み出す革新の寵児。そして邪魔だとあらば、神仏ですら焼き捨てる鉄血の意志。

まさしく稀代の英傑だよ。そして同時に、乱世でなければ十全に芽吹くことのなかった気質でもある」

「王の掲げた天下布武の意志。動乱の時代にあつてもたらされる世の革新こそ必要だと王は知っていた。

そのためには血を分けた肉親ですら斬り捨てた。逆らうならば女子供とて火をかけた。神も正義も、人を統べて目的を達するためには利用する道具にすぎない。

善と悪、二つの質を併せ持ち、持て余すことなく飲み干せる鋼の信念。自らの判断を迷わない意志の強さだ。

その有り様は、見方によれば暴君とも言えるだろう。だがその真意

は、誰よりも先を見据えた賢君だった」

語られるその内容は、かつて甘粕と共に在ったというサーヴァントの事か。

これまでの経緯で、彼のサーヴァントの真名には見当が付いている。

戦国に生まれ天下統一を目指した風雲児。多くの新しい価値観を導入した『革新』の王。国内においてその知名度で並ぶ英雄は存在しない。

伝承の類ならば自分でも知っている。だが実際にその人物を知るのには、共に聖杯戦争を戦い抜いた甘粕正彦だけなのだ。

「そのことは歴史が証明しているだろう。王が行った改革は間違いなく民草の益となった。後の世にも至るその貢献度は計り知れん。

その事業は、争いを嫌い秩序を謳うだけの名君や、世の理と救済を説く聖人にはできない事だろう。

たとえ、誰からの理解も得られなかったとしてもな」  
確かに、語る話には頷けるものがある。

変革には犠牲が伴われる。たとえ血を流す類でなくても、新しい法で得をする者がいるなら、反対に損をする者がいるのだ。

秩序を重んじ理想に殉ずる、そんな王はきつと素晴らしい。けれど正義を尊ぶ以上、既存の秩序を乱す劇的な改革は難しい。

それを成し遂げるには、世界を進ませるには、悪と呼ばれる気質も必要なかもしれない。

だけど、同時に陥没も見つかった気がした。

「そうだ。王の視点は誰よりも遠い。ゆえにその真意は誰の共感を得ることもなかった。

既成を踏み潰し邁進する王の革新。それは他者の眼からは、我欲に走る魔王の姿と捉えられても無理はない。

——ならばこの結末も、あるいは必然だったのかもしれない」

革新の意志を胸にあらゆるものへと手を伸ばしていく王。その近くにあつて、果たして臣下は何を思ったのか。

確かに王は民を潤わせ、繁栄をもたらすだろう。あるいは欲深なだ

けの者であれば、それでよかったのかもしれない。

だが人は決してそれだけではない。乱世を憂い、秩序を築こうとする正義の徒も多かったはずだ。

そんな者にとって、王の姿はどう映ったのだろうか。今まで信じてきた概念を無価値と断じて、破壊を繰り返す王の所業は。

もしかしたらその姿は、伝承にある通りの“魔王”そのものであったのかもしれない。

伝承においても王は多くの者を惹きつけたが、同時に多くの裏切りも呼んでいる。

そして最期は、重用していた臣下の謀反による自害。その結末が何よりも、王の生涯の無情を表しているように思えた。

「……時に、岸波白野。おまえはこの情景を見て何を思った？」

語り続けていた甘粕からの唐突な問いかけに、思わず声に詰まってしまう。

これまでに比べて、甘粕の声はどこか低い。

そのことに妙に緊張して、どんな答えを返せばいいか分からなくなってしまう。

「元よりそう愉快的な光景でもない。細かな感想はあるだろうが、まずはこう思ったのではないか？」

——こんな光景を、自分に近い場所で見たくない、と」

答えに窮している内に、甘粕の方で答えを出してしまう。

そしてその答えは、決して見当違いのものではなかった。

「岸波白野の気質を考えればそうなるか。そうしたものを忌諱する感情は取り分け強い方だろう。」

この情景は彼女の滅びだ。その旺盛の時に思い馳せれば、滅びゆく無情に感じ入るものがあるだろう」

幻視した災禍の風景。岸波白野の元となった人間の最期。

記憶の無いこの身にもそれだけは刻み込まれている。

この感情を正確に伝えるのは難しい。

その風景を視ると、どこか別の人間の人生を見ている感覚がある。

恐怖し囚われているのは違う。ただ自分という人間の結末を俯

瞰している事実が、ひどく悲しい。

死にたくないと思っただのも、こうして死というものを実感しているからかもしれない。

あるいはそれこそが、岸波白野の意志の源泉であるのかもしれないが。

「感動という言葉はな、心が感じて動くを書く。

そして人が心に感じ入る時とは、常に強い感情、意志が介在している時だ」

「芸術、創作、音楽。それら感動を生むものとは、製作者の強い思いが込められている。気乗りもせずにつめた駄作など、誰も見向きもすまない。

清廉なる正義は見る者に憧憬の念を抱かせる。あるいは人によれば反感、妬みといった劣等感を与えるかもしれない。

許されざる悪を目の当たりにすれば、真つ当な正義感の持ち主であれば強い義憤を覚えるはずだ」

「強き意志が与える影響は、他者を動かしその心に強さをもたらず。そしてそれは必ずしも元の意志と同じ性質とは限らない。

時には対立者としての悪の存在が英雄を生み出す要因とも成り得る。所謂、反英雄の概念だが。

俺があらゆる意志を認めるのはそのためだ。人には様々な意志があり、そのせめぎ合いの果てにこそ素晴らしい価値が生まれると信じている。

ならば悪だとして認めてやらねばなるまい。それもまた人の営みであり輝きの一つなのだから」

甘粕の言っていることは分かる。

これまでの戦いの中で多くの意志に出会ってきた。幾つもの葛藤と決心がその過程にはあった。

彼等との対峙の果てに今の自分はある、それは紛れもない事実だ。だが、そんな話をなぜ今に？

「託す、と言ったな？」

その問いはこれまでとは違う、自分へ直に向けられたもの。甘粕の

視線が直接こちらを射抜いてくる。

熱のない冷徹な視線はこれまでの彼とは明らかに異なり、太陽の如き圧力の代わりに凍り付くような畏怖があった。

「人が抱く願い、夢。そうした理想を思い描き、辿り着くための努力をし、それでも尚届かぬが故に他人ひとに託す。

血反吐を吐くほどの悔しさだろう。己の手で成し遂げられない事の無念、その苦しみは当人にしか分かるまい。

それだけの価値、願いにかけてきた情熱があるからこそ、託すという行為は尊く重い。ならばこそ託される人間も奮起するというもの。

分かるか？ 軽くはないのだ、その言葉は」

「託す者がいるならば無意味ではない。確かにそうだが、ならばその意志はどこからきている？

この世界を間違いだと言うのなら、在るべき正しい世界とは如何なるものだと考える？

考えがあるのなら、そこに至った切っ掛けはなんだ？ 誰かの理念か、経験した何時かの物事か？」

「それとも——単に先が無いからか？」

これは、違う。

ここにきてようやく気付く。甘粕の様子がおかしい。

あれほどに猛り狂っていた意志の念が、綺麗さっぱりと無くなってしまうっている。

その様子を言い表すなら、冷めているというのが正しいか。

甘粕正彦には似合わない無感動な姿。だがその異常にこそこれまで以上の危険を感じる。

さながらそれは絶対零度。灼熱の業火の如き熱量が、密度は変えずに一気に反転したかのよう。

その落差が恐ろしい。方向性が切り替わっただけで、甘粕は少しだつて弱体などしていない。

そして考えてしまうのは、その引き金となったもの。

何か、触れてはならない竜の逆鱗に触れてしまったような、そんな予感が拭えない。

「ただ自分には不可能だから、そこに至るまでの未来が自分にはないからと、先を諦めたが故に出た言葉か。

だとすればあまりに弱い。そんなもので得られるのは同情だけだ。成し遂げる強さなど得られはしない」

「……言い方が回りくどいな。迂遠な物言いは俺とて好かん。

要するにだ、俺はおまえの意志に疑いを持ち始めている。その根幹は自らへの諦観なのかと」

告げられたのは明白な失望の言葉だった。

反論すべきだと、頭では分かる。

だが口が開かない。甘粕正彦という規格外の意志を前に、生半な意志は形にすらならない。

自分の言葉では今の甘粕には届かないと、口にするまでもなく分かってしまった。

——だって、甘粕が言ったことは、岸波白野という存在にとって拭えない欠落であったのだから。

「おまえたちを強いと言った。聖杯戦争の勝者にふさわしいと。最弱から至ったその強さを尊敬すると言った事に嘘はない。

だがそれだけだ。我が悲願を明け渡し、世界を任せるには余りに温い。すべてを託せるとはとても言えん」

「このまま潰してしまうのは簡単なのだろうか。もう少しその意志を信じてみたいという気持ちもある。

さて、どうするかな？ こんなものではないと、未だ奥底に眠っているだろう輝きを引き出すには何が必要なのか。

ああ、ならばやはり——」

何も答えられない。答えられないままに、甘粕は話を進めていく。口を挟むどころか抵抗すら出来ない。

アーチャーの傷は未だ塞がらず、戦う余力はほとんどない。

語る間でも隙を見せるような甘い相手ではなく、反撃の可能性は絶望的だ。

時間を稼いだところで好転する兆しも宛てもなく、その気になればすぐにでもとどめを刺されてしまう状況は変わっていない。



相手の結論を甘んじて受け入れるしかない。

どうすることも出来ずに、甘粕の次の言葉を待った。

「――試練が、足りんかな？」

告げてきたのはそんな言葉。

それだけを残して、甘粕正彦はその姿を消失させた。

ここに断言しよう。勝利したのは甘粕正彦だ。

この戦場を聖杯戦争の枠内で捉えるならば結果は明白。

互いに用いたのは自らのサーヴァントの力。同じ参加者の一組として与えられた条件は五分。

対等の条件であるからこそ結論は確かとなる。アーチャーには逆転の余地はなく、岸波白野にも反論の余地はない。

戦いの勝者は甘粕正彦である。もはやこの事実は動かせない。

故に、ここから先は第二幕だ。

甘粕正彦と岸波白野。共に聖杯戦争を戦い抜いた勝利者同士の戦いは終わりを告げた。

結果そのものは順当に、強者がより強い強者に敗北するというありきたりな顛末。

互いの力をぶつけ合い、信念を試し合った両者の決闘。その舞台の幕はすでに降りてしまった。

これより先は岸波白野による一人舞台。

勝利<sup>Survival</sup>か死<sup>Death</sup>か、そのような選択の自由はもはや無い。

許されるのは生存への足掻きのみ。敗北者たる少女にはそれだけが許される。

これは試練、岸波白野のためだけに用意される逃げ場のない絶望<sup>絶望</sup>である。

不可解さだけを残して消失を遂げた甘粕正彦。

残された自分達が異変に気付いたのは、さして間もない後の事だった。

「っ！ 結界が——!？」

赤い空が揺れる。廻る歯車が軋む。

具現化された心象世界に罅が入る。それは明らかな崩壊の予兆であつた。

固有結界という秘奥は決して長時間持続できる類のものではない。

人間ならば保つて数分。人間を捨て魔性を極めた化外であつても数時間が限度だろう。

発動にかかる魔力もそうだが、上書きされた法則せかいを元に戻そうとする力、すなわち世界の修正力が働いたために維持するには莫大な負担がかかる。

魔力の枯渇した地上においてはもはや遠い過去の幻想。この月であつても世界を侵食するこの力は月の眼ムーンセルにとつても修正対象だ。

切り札を切ったからには勝負に出るしかない。アーチャーにとつても固有結界は後には退けない力だった。

敗北し消耗したアーチャーでは維持など不可能だ。何をせずとも遠からず消えていただろう。

だがこの崩壊はそれとは違う。まるで外からの力に押し流され、強引に消されようとしているようだった。

明白な異常事態。一体なにが起きているのか、まるで窺い知れない。

それでも、今この場で何をすべきか、それは見誤っていないつもりだ。

甘粕正彦の消失に従い、彼に連なるものも消え失せている。

滅びを表した情景も今はない。封じられていた選択肢を取る好機には違いなかった。

傷つくアーチャーへ回復を施す。受けたダメージが無くなり、消耗した魔力も全快した。

用いたのは『エリクサー』。如何なる傷も癒し、消耗した力を活性化させる不死の霊薬。それを再現したアイテム。

リソースは多くはないが出し惜しむ状況ではない。迷わずに切り札の一つであるそれを切った。

「ああ、すまないマスター。あれは私の判断ミスだ」

謝罪なんていらぬ。自分達は相棒パートナー同士なんだから。

行動したのなら、それは二人の決断だ。どんな失敗だって二人で背負っていけばいい。

自分もアーチャーもまだ生きてる。なら巻き返しは不可能ではないはずだ。

「……そうだな。その通りだ、マスター。我々はまだ終わってはいない」

アーチャーが立ち上がる。彼が傍らにいれば、自分はまだ進んでいける。

甘粕に言われた事は未だこの胸に燻っている。それでも立っていないなら、抗いながらも進むのが自分だ。

「だが警戒しろマスター。この結界の崩壊は、明らかな外部からの干渉だ。」

仕掛けてくるとすれば、おそらくは崩壊の直後だろう。覚悟だけは決めておけ」

やはりと言うべきか、この現象はアーチャーの意図したものではなかった。

アーチャー以外で固有結界に干渉することが出来そうな者など、この場では一人しか思いつかない。

甘粕の性格を考えれば、崩壊の渦中で不意をつくといったやり方は考えづらい。仕掛けるとすれば、崩壊の後だろう。

そこに待ち構えているだろう試練に対し、覚悟を決める。相手の意

凶は分からないが、穏やかなものでないのだけは間違いない。

空が割れ、大地に亀裂が走り、廻る歯車が砕け落ちる。

崩壊していく剣製の世界。心象風景の剥がされた先には元の世界がある。

身構えて待つ。消え行く世界に足を取られそうになるも、決して倒れまいとしながら。

——そして、崩壊の先に現れた光景は、覚悟して尚こちらの度肝を抜くものだった。

「甘粕正彦は聖杯を手に入れた。その意味は君が考えているよりも遙かに重い」

「甘粕は最上級のマスターであり、彼に応じたサーヴァントも文句のない大英雄。その組み合わせは当然ながら強い。」

並のサーヴァントを圧倒する火力を持ち、あらゆる防御を無意味にする宝具。サーヴァントの気質を尊び、それを十全に支える甘粕正彦。

開始の当初から彼の組の実力に疑いはなかった。少年王と太陽の騎士の組と並んで優勝候補の筆頭だった」

「だがその実力も、あくまで聖杯戦争の参加者として許された範囲でのものだ。勝者となり聖杯を手にした彼にそんな枠組みは意味をなさない。」

月の聖杯に接続し、その膨大なリソースから数多の力を獲得している。無論、持て余すような真似はしていない。

その力を駆使すれば、これしきの現象などは造作もない。本領はむしろこれからだ」

「もう一度言おう。甘粕正彦は英雄を超えている。彼は紛れもなく人を超えた”魔王”の格なんだよ」

舞い戻った空間は、先ほどまでとは一変していた。

まず視界に飛び込んだのは大海原。

先までの水面の大地にはなかった深さ。ここに至るまでに辿った七つの海のどれとも異なっている。

空の色は紅に染まり、それを覆い包む黒煙と灰の雲。海の青さえも朽ちゆくものを呑み込む深淵の闇にしか見えない。

ここには魅せられる幻想など有りはしない。月の舞台には不釣り合いな、しかし戦争という舞台にはこれ以上ないほどに適合した海。

そう、この海はまさしく戦争だ。甘い幻想など無い、非情なる鋼の掟だけがまかり通る鉄火場の風景がそこにある。

天に座した月の眼はどこにも見えず、凜や白衣の男の姿もない。つまりは、戦いはまだ続いている。この戦争は自分達だけのもの。

終わらせるつもりなど端から無い。

そんな意志が伝わってくる。それを証明するかのように、どうしようもなく目に付く鋼鉄が海に鎮座していた。

そこにあるのは鉄の戦艦だった。

先ほど見せた鉄甲船とも違う。これはある意味でその未来にあるもの。

至る箇所に搭載された艦砲。余計な幻想は交えない機能美に溢れた形状。威風堂々と君臨する無駄のない兵器の姿。

構成された最先端の要素。もはや宝具という言葉とはかけ離れ、しかし戦争にはどこまでも合っている。

——岸波白野は知らない、月の記録に記載されたその兵器の概要は。

大日本帝国海軍所属。

起工・1907年5月22日。

進水・1907年11月11日。

就役・1909年11月1日。

退役・1923年9月20日。

除籍・1923年9月20日。

鞍馬型巡洋戦艦二番艦、あるいは伊吹型装甲巡洋艦一番艦。

主に第一次世界大戦期にて活躍。戦後、軍縮の流れに伴い解体の運びとなる。

創形された戦艦の名は——”伊吹”。

ムーンセルより汲み上げられた、今の世界からはとうに失われた一世紀前の兵器がここに姿を現していた。

「これはまた、常識はずれなものを持ち出してくれる」

呆れたようにアーチャーが呟く。その意見には自分も同意だ。

これまでも古今東西の様々な英霊と戦ってきたし、その宝具はどれもこちらの予測など軽く上回るものだった。

だがこれはそれらとは方向性が異なっている。人々に幻想として奉られ、一つの信仰として力を持ったものが宝具だ。

それは太陽の力を持つ聖剣であり、因果を逆転させる槍であり、あるいは伝承そのものが宝具となる場合だってある。

いずれも共通しているのは、それが人々の間で伝わる幻想であること。共有する思いが年月を経て人の意識に刻まれて形となっている。

けれど目の前にあるのは純然たる兵器だ。

そこに幻想などない。解き明かされた現実の理屈を以て構成されている。

これまでの宝具の在り方とはまるで真逆だ。信仰もなく年数も少ないそれは、神秘の格で語れば明らかに見劣りするだろう。

ならば宝具としてこれまでよりも劣るのかと言えば、そんなはずはない。

向き合うだけでも身体に押し掛ける尋常ではない迫力の威圧。その脅威は先の鉄甲船を遙かに凌駕すること疑いない。

それもそのはずだ。兵器であるならば、新型が旧式に勝るのは至極道理。過去ではなく未来に在る方が強大であることなど明白だろう。

きつとこれは”革新”という概念を宿した一つの幻想。先を夢見て世界を拓いた果てに見る人間の可能性の結晶だ。

宝具という型に囚われぬ畸形。それは古代の神秘と比較して、決して劣るものでは有り得ない。

そしてこんなものを持ち出せる者もまた、一人しかあり得なかった。

「宝具化された近代兵器とは恐れ入ったが、これしきのもので今さら我々が怯むとは思ってしまい。

出てくるがいい、甘粕正彦。試すだなんだと、貴様が戯れてくるのならこちらは容赦なくそれを利用するぞ。

あえて言っておこう。私たちは諦めたつもりはないと」

そうだ。今さらこんなものを見たくらいで折れはしない。

己を超える強大な力。それくらいならば幾らだつて見てきたんだ。

元より自分の取り柄なんてこの諦めの悪さくらいだ。どれほど無様を晒しても、それだけは譲れない。

前を見据える。もう一度あの強大な敵に立ち向かうために、その決意は固まったから。

「——ああ、そうだな。そんなお前たちだからこそ、俺もこうして仕切り直しを求めている」

声の方を見上げる。甘粕正彦はそこにいた。

聳え立つ艦橋の上に立ち、こちらを見下ろす人影が一つ。

吹き荒れる熱波に大外套を翻しながら佇む様は、鋼鉄の城に君臨する王者のそれか。

けれど怯んではいられない。しかと己の敵を捉えるべく、その姿を直視して——

「その通りだ、諦めてはならん。歩みを止める事を拒むその気概、美しいぞ——胸を打つ。

俺ほどにおまえを認めている者はおらん。逆境に咲く生命の力こそがおまえの真価。その意志がある限り人はどこまでも進んで行ける。

——たとえそれが、どれほどの絶望を前にしたとしてもなあ」

岸波白野はついに、決して抗えない絶望を思い知ったのだ。

「兵器の創形。王の覇道の過程で生み出された新機軸の兵器類を具現化する宝具の能力であるが。」

根底にあるのは『革新』の概念だ。その在り方は元より、古きを淘汰し新しきを受け入れる事にある」

「ムーンセルには過去・未来のあらゆる人類の可能性が納められている。当然、兵器の類もそこに含まれる。」

蓄積されたそれらと接続し、受け継いだ宝具を改良・拡大し、その概念をより発展させたものを今の甘粕は用いている。

すなわち、未来に至る可能性まで含んだ兵器の創形。今や人類のあらゆる兵器が正彦の手中にあると言つていい」

「……だが、聖杯と繋がって得たものがその程度だと思ふのなら、そこは否と答えるしかない」

「元より正彦は兵器せんなものなんて求めてはいなかった。人の歩みの証と認めても、決して好んでいるわけじゃない。」

彼が月に求めたのは人のために人を裁く力。試練を与えるための道具ちからに他ならない。

兵器などそのための一手段に過ぎない。彼の真骨頂は別にある」

「聖杯の底の遙か深淵から正彦はそれを手に入れた。遠く創世記にまで遡り、人の原初から汲み取った”権能かみ”の名を。」

人を愛して人を裁く。甘粕正彦の性質にそれは何処までも適合していた。その名を背負う事になんの過不足も有りはしない」

「……来るぞ。来るぞ来るぞ来るぞ——」聖四文字”が！」



黒色に覆われた紅い空の下。大海に浮かぶ魔道の戦艦の頂上に立ち、それは悠然と君臨する。

戦争をそのまま風景化したかのような世界も、幻想の質を備えた現実兵器も、所詮は有象無象。その存在の前では全てが霞む。

それも至極道理。その存在こそ至高の天にして天地万物の創造主。宇宙を司る最高原理たる全能の神格であるのだから。

曰く、『Y・H・V・H』。神を表す聖なる四文字。

星が生命の存在を許さなかった原初の頃、世界の始まりを為す天地創造を行った”星造り”の石柱。

裁きの神。試しの神。愛する子羊たちの正道を問い、そのためならば世界を洗い流すことも厭わぬ虐殺の絶対正義。

——斯く在れかし聖四文字。

月の聖杯の遥か奥底に眠っていた大権能。

それを原初より汲み上げて、己が力とした人間は、その担い手としてあまりにも適合している。

甘粕正彦。『S.E. R.A. P.H』に君臨する虚構世界の支配者。

人間の輝きを愛し、焼き付くほどに焦がれた情念は、その勇気を現すために災禍を下すという狂行に走らせた。

愛しているから試練を与える。まさしくそれは神の審判。その愛には一点の偽りもないが故に、下す裁きにも揺るがぬ正義が宿る。

ここに立つのは現人神。人の身に神を宿した絶対強者に他ならぬ。

「なまじ公平を期そうとしたのが良くなかった。

尋常な決闘など、おまえたちの気質を鑑みれば真価から程遠い」

甘粕正彦は知っている、岸波白野の強さを。その真価を誰よりも認めている。

どこまでも平凡であった少女が発揮したのは、生ける者ならば誰もが持ち得る生命の本質。決して特別な能力などではない。

逆境に抗い、立ち向かう勇氣。人が見せるその輝きこそ甘粕が愛し

て止まないものだから。

岸波白野の戦いには順当な勝利など一つもなかった。始まりは常に弱者の側。戦力差で測るなら敗北は目に見えて明らか。

その差を埋めてきたのはいつだって行動の先にあった。決して諦めなかった意志が可能性を掴み取ってきた。

倒すべき敵を知って、己自身の不足を理解し成長する。時には仲間の手を借りながら、折れずに進み続けたその芯のなんと美しいことか。

薄弱に見える姿の内に秘めた強さ。その真価を問わずして、見限ることなどどうして出来るだろう。

だからこそ試練を与えよう。

岸波白野の真価とは苦難に立ち向かう姿。それを発揮させるための逆境を。

これは最終戦。聖杯戦争の決着を飾るのに相応しい、究極の逆境を与えるのだ。

これこそが魔王の祝福。勇者たちのために歌い上げる人間賛歌に他ならない。

限度があると第三者が口を揃えて言おうとも、魔王の耳には届かない。

だって彼は人を信じているから。諦めなければ不可能なんてないのだと、何より己自身で体現しているから。

己を超えろというのなら、この試練にだって打ち勝って然るべき。そう豪語し疑わないから容赦もしない。

「この絶望を前にしても尚突き進む意志を示せ。そんな姿こそ俺は見てみたい。

輝きを現してみろ。その生命の真価を發揮するのだ。おまえの意志を、俺に信じさせてくれ」

魔城の頂で魔王は笑う。小さな勇者の奮起を愛おしみながら、その魔手を振り上げる。

——絶望の二幕が、始まる。

## 敗北

それは、最初から結末の見えた戦いだった。

「はあ——くう——あああああ!!!」

赤黒の空に覆われた戦争の海。彼方の陸地は業火に包まれ、海面は愉悦に歪む悪魔の貌の如く不気味にうねる。

大海に浮かぶのは尋常ならざる魔性を備えた戦艦・伊吹。無情なる鋼鉄の暴力装置は蹂躪の時を今か今かと待ちわびている。

そこに希望に繋がるものは何一つとしてない。絶望を湛えた光景は終末までの秒読みを待つばかり。

だが、絶望の中で抗う者がいる。

岸波白野のサーヴァント。”弓兵”<sup>アーチャー</sup>のクラスを担う赤い騎士。

何もかもが滅びゆく地獄の前にしても、英霊たる彼は闘志を折つていない。

地を駆ける赤い騎士に戦艦の主砲が向けられる。

人一人を相手になど想定していない大砲身。まして狙うべき相手はサーヴァント。如何に威力を持つとも、高速で疾走する英霊に命中させるなど不可能だ。

だがそれは通常の兵器の話である。ここにあるのは幻想を呑み込んだ魔道戦艦。如何なる不条理も、支配者の意志によって実現するものが摂理となる。

旋回する艦砲が軋みをあげる。

射角の外に逃れる赤い騎士を追い、砲身自体が毒蛇のようになり曲がる。

物理法則を無視した奇怪きわまる現象は、しかしこの場においては何ら驚くに値しない。

曲がりくねった戦艦主砲が炎の轟砲を撃ちだす。暴発もせずに発射されたその艦砲には、もはや真つ当な理屈など通用しない。

無論、それは撃ちだされた砲弾にも当て嵌る。自在な軌道を描きながら迫るそれは、たとえ山を盾にしようとも幻の如くすり抜けて標的

を追いつめるだろう。

常道の手段では防ぐことはかなわない。故に赤い騎士も条理を超えた対抗策を紡ぎ出す。

行使される投影魔術。心象世界たる剣製の丘より取り出される贋作の魔剣。

迫り来る砲弾に対し、真つ向から振り抜かれた剣閃。激突の果て、砲弾は両断され魔剣もまた砕け散る。

だが事象はそれだけに留まらない。砲弾を発射した戦艦主砲に突如として一筋の斬撃痕が走る。前後も分ならず斬られた艦砲はそのまま炎を噴いて爆裂した。

あたかもそれは砲弾に刻まれた斬撃が転写したかのように。不条理を成す宝具を以て、赤い騎士は魔道戦艦に対抗する。

まさしく英雄、斯くあるべし。赤い騎士は負けていない。

数多の戦場を超えて錬磨された鋼の意志。彼がいるのなら巻き返せる。まだ終わっていないのだと——

そう信じていることができたならどれほどよいか。

赤い騎士がその手に弓を持つ。

番えた矢が狙い定めるのは、この地獄の君臨者。戦艦の艦橋上に立つ全ての元凶たる一人の男。

矢の銘は『赤原獵犬』フルンテイング。英雄ベオウルフの振るった相手を襲い続ける魔剣。

放たれた矢は魔弾と化して標的へと襲いかかる。射手が健在である限り、この魔弾を止めることはかなわない。

音速を超越して魔弾は直進する。間近まで迫った必殺の一矢に対し、佇む男にもはや対抗策はないと見えて——

「いつまで賢しい手に頼っている？ 俺が見たいのはそんな小手先のものではない」

男——甘粕正彦が手を突き出す。

行ったのはそんな動作。ただそれだけで魔弾を構成する幻想が解体キャンセルされた。

特殊な能力を用いた訳ではない。それは純粋な実力差。隔絶した

力の開きが両者の間には広がっている。

否、そうではない。単なる力の格差であればまだ絶望には早かった。

そもそも立っている場所が違うのだ。如何に屈強なる逸話の数々を持つとも、絵の中の住人がこちらを害することがないように。

単純に、次元が違う。赤い騎士と甘粕正彦は、同じ戦いの土俵に立ってはいない。

それこそが聖四文字<sup>いまデウス</sup>。

人を裁く神。虐殺をもたらず試練も、愛し子らの正義を呼び起こすために振るう愛の鞭。

試す側に在るために、原則としてその力は試される側を上回る。理屈などいらぬ。権能<sup>かみ</sup>とは元来そういうものだ。

課される試練に抗おうとする勇氣も、神にとつては己に捧げる祈りに他ならない。ゆえにその力は青天井に上がっていく。

赤い騎士は英霊。人を超えた力を持つとも、その存在は人間の側にある。

人が神を超えることは許されない。英雄にできるのは神の与える試練に立ち向かうことのみである。

「私情を挟まん法の執行官の如き冷徹さ。それも悪くはないが、たまには己を曝け出してみるといい。

でなければなにも為せん。そんなことではなにも救えはせんぞ」  
甘粕の意の下に、新たな兵器<sup>ユメ</sup>がカタチを顕す。

B—2ステルス戦略爆撃機。大翼を広げた漆黒の破壊兵器は、神が遣わす破滅の使徒だ。

投下される多種多様の爆弾が赤い騎士へと降り注ぐ。一雫が致命的な威力を持つ破壊の雨を掻い潜り、持てる投影<sup>チカラ</sup>を以て生き延びる。

だがそれも無意味な足掻きである。  
赤い騎士に勝ち目はない。そのことは彼自身がよく分かっている。

万に一つ、などという夢物語ではない。絶無だ。手段の殆どを出し尽くした赤い騎士に、対抗策など存在しない。

自身の冷徹さが告げている。こんなことに意味はないと。

こうして凌いでみせたところで、終わりまでの刻を引き伸ばすだけのこと。

結末は始めから決まっている。逆転への可能性など有りはしない。敗北は時間の問題だ。

それでも尚、赤い騎士は最期の瞬間まで膝をつくつもりはなかった。

彼の後ろに控える岸波白野<sup>マスダイ</sup>。弱小の身でありながら、どんな苦難にも諦めなかった少女。

彼女のサーヴァントである誇りを最期まで手放さないために。赤い騎士はその力を振るい続けた。

「願いを託すとは、つまるところ理想論だ」

アーチャーは戦っている。

勝てるはずのない相手に。見守っている自分にもそれは分かる。

相手との間にある次元の差異。神格を得た甘粕に英雄のアーチャーでは対抗できない。

それでも彼は諦めない。

勝算なんて無い。敗北も間近だと、傍目にも分かるほどに。

なのにアーチャーは、苦痛に耐えながら戦う意志を捨てようとはしない。

それは、何のために？

「具体的な案などなく、後に行く者が事を成してくれると期待するのみ。確かな保証はなにもない。

ああ、愚かだと貶めているのではないぞ。ありきたりな揚げ足取りなどする気はないから安心しろ」

勿論、分かっている。

誰のためかなんて、そんなの岸波白野<sup>わたし</sup>のためにしかない。

アーチャー  
彼は自分のサーヴァントだ。

サーヴァントの役目は戦闘の代行。そしてその意志はマスターのものでなければならぬ。

願いを抱いて月に上り、勝ち抜いていくのはあくまでマスター自身であるのだから。

「理想論、大いに結構。具体案がどうだのと語る前にまずはそこからだ。それには俺も同意するよ。」

だが理想と謳うのならば、それを他者に信じさせねば嘘だろう。意志を伝播させ、理想に共感を得られなければ何にもならぬ。

己一人で完結する理想に、何の価値がある？」

だから岸波白野は、甘粕正彦に答えなければいけない。

同じく聖杯に至った者同士として、彼の意志に対峙してはならない。

それこそが聖杯戦争。たった一つの祈りを定める月の闘争であるのだから。

—— だけど ——

「理想論を唱える者は、その意志の最初の灯火とならねばならぬ。それは火に惹かれた多くの者を動かす原動力となる。」

たとえばその者に学がなくとも、道を共にする賢者が知恵を貸してくれる。その者に力がなくとも、手を携えた戦士が力になろう。

一つの意志に多くの者が寄り集まり、やがては大いなる力となる。まるで夢物語だが、世界を変えようなどと夢を実現させるには、それだけの力が必要だろう」

「対し、独善の理想に凝り固まる者の、なんと脆いことか。理論や方法がどうだのと口にする輩とは、大概にして他者の意志を軽視する傾向にある。」

己の考える理念こそ至高。これぞ万人共通の夢に違いない。ゆえにこの願いの成就に手段は問わない。個人の意志など、この理想の前には如何ほどの価値があるものか。

なんのことはない。所詮は個人のみ価値観、単なるエゴではないか。要は、今の現実を認められんから自分の納得いく世界に作り換え

ただけだろう」

「それで強さになるのは我欲の悪性だけだ。正義だ秩序だと唱える者が、他者の主観を蔑ろにする理念を抱くなどただの逃避にすぎん。

現実を見据えた方法論？ 笑止、現実負けを認めた者が現実を変えようとするなど笑わせる。

そんな者の理想に人々を動かす力などない。やれ世界を救済だのと、己の信念を余人に宣する気概もない者が抜かすなよ。実に女々しい」

「世界は、人々は、一握りの主役のために居る背景ではない。人類全てが当事者であり、それぞれに人生ものがたりがある。手前勝手な理屈で決めて良いものでは断じてないのだ。

目の前にいるのは異なる思考回路を備えた他者。自らの理念を糾弾されるかもしれんし、害すれば当然抵抗もされるだろう。しかしそれを肝に銘じて向き合うのが、人々に対する筋であろうが。

どれほど重い過去を背負っていようが、過去は所詮過去にすぎん。それで個人の重さが変わるわけではないし、理想が高尚になるわけでもない」

「我も人、彼も人。ゆえ対等、基本である。他者と主観をぶつかり合わせることもせず、世界がどうこうと烏滸がましいわ」

対する言葉が見つからない。

真っ向から己の意志を投げかける甘粕に、何と答えればいいのか分からない。

甘粕の口にする言葉は、世界を誠実に見据えたもの。

夢のような言葉こそ真だと、そんな理想こそが世を変える力になると信じている。

ともすれば青臭い、しかし全霊をかけてそれを成し遂げようとしてきた甘粕だからこそ、その言葉には熱が宿る。

たとえ救済を口にしても、人の人たる意志を認められない時点で、それは間違っている。

甘粕の言うことは正しい。彼は確かに人々の意志を尊重し、愛している。



だけど――

「これはある男が語った言葉でな。

徳の高い僧だった。彼との問答は俺も学ぶことが多かったよ」

「曰く、人間とは、奪い、殺し、貪り、そして忘れるものである。

安寧があればそこに浸る。衣食住が足りていれば自ら動く必要もない。

人間はその本質に悪性を宿している。故に自らの悪を糺すため神という名の発明品さばきが生まれたのだと」

「例えば、目の前に二つの道が広がっていたとする。一つは険しい獣道、一つは平坦な街道。かかる時間も目的地も同じ、五分の条件。

どちらを選ぶかと問われれば、よほどの物好きでない限り街道を選ぶだろう。別段それは悪いことではない。

危険があれば避けて通る。労が少なければそれに越したことはない。苦労は買ってでもとは言いが、そうはいかんのが人間だ」

「悲劇、不幸とは忌諱すべきものである。だが世から一切の理不尽を取り除けば、後には約束された安寧しか残るまい。

先には甘受すべき幸福があると分かっている。理不尽に奪われる不安もない。世の万事すべて安泰である。

そんな環境に延々と浸されていれば、人はやがて自らの手足の動かし方も忘れてしまう」

「ゆえに俺は万人にこう告げよう。世界に必要なのは慈愛をもたらす女神ではない。

魔王という名の立ち向かうべき必要悪しれんこそが、人類の輝きを取り戻すことが出来るのだとな」

だから貴方は世界に災禍をもたらすのか。忘れたわけではない。この人は一度、脚色ではなく世界を滅ぼしている。それは決して許してはならない。

甘粕正彦の願いは世界を壊す。認めてはならないと、すでに自分は納得していたはずだ。

「ああ、確かにそれは俺の不徳だ。今も恥じ入る思いだよ。

やり方さえ違えば、理想とする世界はすぐにでも実現できただろ

う。理屈に添うなら容易いことだ。

それを承知した上で、俺はこのやり方を変えることはないだろうな」

……それは、なぜ？

己の理想を実現できると言いながら、どうしてそれを拒むというのか。

「ムーンセルは万能の願望機。あらゆる未来を内包する究極の演算器だ。

その機能を用いれば望む世界は容易く手に入るだろう。人が想像し得る範囲において、ムーンセルに実現できない未来はない。

それに願えば俺の理想も叶うだろうさ。誰もが自立した意志を持ち、信念を持つて事に当たる強さを得るだろう。

人があるべき輝きを示す、そうなるよう仕向けられた世界が現れる」

「だが、なあおい、そんな世界にいったい何の価値があるというのだ？」

……その問いに、岸波白野は答えを返すことができなかった。

「俺が子を殴るのは、自らの足で立ち上がれると信じているからだ。

鎖に繋いで、強引に立ち上がらせたわけではない。それでは余りに愛がなからう」

「与えられる試練に対し、立ち上がるように定められた意志。それのどこに勇気がある？」

そんなものが正しい人の姿だと？　ただ神の意志に引き摺られ翻弄される玩具ではないか。

試練に対する奮起の意志も、そうなるよう脚本に書かれた配役、偽物だろう。人間などどこにもいない。

どれだけ正しく、輝かしいものであろうとも、一つの神意ほうそくの下に隷属された人は、もはや人ではないのだよ」

「俺が与えるのは災禍だけだ。元より人は輝きを失ってはいない。奮い立つ機会さえあるのなら必ずやそれを取り戻せる。

そう信じているからこそその試練である。俺自身は人々に対して何

の干渉も行っていない。俺は人々を愛している、その尊厳を貶める真似はせん。

災禍に直面した時、それに立ち向かう勇氣、覚悟。誰かの手に動かされた訳ではない、それでこそ本物の意志だと証明できる」

「——このようになあ！」

戦艦が、自らに搭載された全武装を解き放つ。

無数の艦砲による一斉砲火、三門の発射管より放たれた魚雷群。

それぞれの艦砲が向く先々へ、疎らに撃ち出された砲弾は、中空でその軌道を捻じ曲げて同じ標的へと向き直り、魚雷もまたそれに倣う。

殺到してくる無数の砲弾と魚雷。その向かう先にはアーチャーがいる。

自身に迫る無数の殺戮兵器を前に、アーチャーはそれでも抵抗を諦めない。

「——熾<sup>ロ</sup>天覆<sup>ア</sup>う七<sup>イ</sup>つの円環<sup>ス</sup>」

再び真名解放される盾の宝具。

投射武器に特性を持つ最強の守りで、アーチャーは迫る脅威に対抗する。

「——っ……………!!!」

けれど、それは容易なことではない。

先の戦いでは存在の滅びを誘発されてその守りを破られた。

だが今度はもっと単純明快。特性も無視した威力によるごり押しのみ。

まるで厳然な実力差があれば相性など無意味だと言うように、純粹な破壊力を叩きつけてくる。

守りが次々と喰い破られる。

砲弾、魚雷が直撃する度に花卉には亀裂が入り、次の着弾で碎かれる。

堅牢だった七枚の守りも、もはや目に見えて穴だらけ。完全防御の体を為さず、余波は容赦なくアーチャーを削っている。

それでもこの守りを維持できなければ敗北は必定。故にアー

チャーは全魔力を盾に注ぎ込む。

「ぬ——ぬああああああ………!!!」

吐かれる裂帛の気合い。

身体の内側から悲鳴が上がろうともアーチャーは構わない。

後先など考えない、ただこの瞬間を生き延びるために、彼は全てを費やしていた。

——やがて砲撃の轟音が途切れる。

立ち籠めた爆煙の晴れた先、アーチャーは健在だった。

「そうだ。これだけの絶望を前にしても諦めん不転の決意。その覚悟こそ素晴らしい。

それはおまえのものだ。神に玩弄される偽物ではない。人の内から発せられる魂の輝きだ」

「元より我が災禍はそれを引き出すためのもの。共感など端から不要。

俺の強いる理不尽に抗い、抵抗の意志を示せ。その意志の先にこそ光がある」

「その輝きの下に築かれる新たな世界。それこそが俺の求める真の樂園なのだ！」

決して退かないアーチャーの姿を、甘粕は素晴らしいと心から称賛している。

けれどそれは希望を意味しない。これほどの攻撃も、甘粕にとって  
は小手先の手段に過ぎないという事実ぜっぼうだった。

未だ何の消耗もない甘粕に対し、すでにアーチャーは満身創痍だ。  
こうして施す回復のコードキャストも果たして意味があるのかどうか。

答えの返せない自分に付き合わせて、アーチャーを絶望的な戦いに  
駆り立てている。

それは単に、彼の苦痛の時間を長引かせているだけではないのか。  
コードキャスト  
回復術式そのものは問題なく行えた。

けれどその背にかけるべき激励の言葉を、自分には見つけることができなかつた。

「……マスター」

双剣を構えて、アーチャーが声をかけてくる。

そこに勝利を感じさせる力強さは無かったけど、絶望した力弱さもまた無かった。

「私のことは、気にしないでいい」

短い言葉で、彼は意志を伝えてくれる。

「最後まで、君に付き合おう」

それきり、アーチャーは戦闘代行者として自らが戦う敵へと相対していく。

勝ち目がないと分かっている。それでも岸波白野わたしに付き従うと、そう言ってくれている。

返すべき答えは、未だに見つからない。

どんな言葉でも甘粕正彦の強固な意志を挫くことは出来ないと理解してしまう。

どうすればいいのか分からない。どうやれば届くのか見当もつかない。それほどにこの相手は強すぎる。

ならば、自分がただ一言、”諦める”と口にすれば、アーチャーも戦いを止めるだろう。

それが正しい気がしてならない。

どう考えたってここから勝機なんて見出せない。

認めてはならないと思っても、勝ち目がないのではどうしようもない。

ならば抗ったところで無駄だろう。どうにもならないのなら早く諦めてしまうのが効率的だ。

そうすべきだ。そうしてしまおう。

もう付き合わなくてもいい。それをアーチャーに告げようと、口を開こうとして――

「迷っているのか？」己の意志をどう言葉にするのか

そんな自分の様子を見咎めたのか、甘粕から声がかかった。

「だとすればそれは見当違いな悩みだな。そもそも言葉にする必要がどこにある？」

明確にその意味を言い表せなければ形にならないなどと誰が言った。

諦めないで、その意志だけで十分だ。その姿にこそ輝きは表れる」  
……この人は、なにを言っているのだろう。

その言い方は、まるで自分が諦めまいとしているような言い方だ。  
今まさに、自分はアーチャーに対し、自らの意志を伝えようとしていたというのに。

この人は、まだ岸波白野わたしが諦めようとはしていないと思っっているんだろうか。

「そう思うのなら、理屈の上ではおまえにも諦めの意志はあるのだろうな。

だが本能は違う。おまえの魂はそうは言っておらんよ。そんなものが見れば分かる」

「現に、サーヴァントは戦い続けているではないか。

おまえが真に諦めようとしているのなら、言葉にせずともその意志を察せるはず。

それぐらいの絆、おまえたちの間に無いはずがあるまい」

アーチャーは、答えを返さない。

けれどその反応だけで自分には容易に察せられる。甘粕の言葉は事実だと。

だがそんなことは無意味なはずだ。

明らかに勝ち筋の見えない中で、それでも自分は諦めていないという。

自覚なんてない。可能性など何一つないというのに、そんな真似が出来るといふ強さには覚えがない。

それとも貴方には分かるのか。誰よりも自分のことを認めていると言った甘粕あなたになら、それが分かるだけでも。

そんな自分の問い掛けに、甘粕は苦笑も混じえながら、  
「知るわけがなからう。俺はおまえではないのだから」

あつげらかんと、そんな答えを返してきた。

「己が何を思い、何を為したいと願うのか。その信念は己自身にしか

決められん。

他人に形容されて型に嵌めるのではない。それでは本物の意志とは呼べん」

「俺がこうして言葉を尽くしているのは、おまえたちに俺の信念を理解してもらいたいと思うからだ。」

肯定しろと言っているのではない。ここには己とは違う価値観、信念がある事をしかと受け止めてほしい。

それを知った上で、如何なる意志を返すのか。俺はそれを知りたい。それこそが他者と向き合うということだ」

「だが、こんなものは俺のやり方にすぎん。おまえまでそれに倣う必要はどこにもない。」

意志を示す方法とは言葉だけではないのだから。時に行動そのものが、百の言葉より如実に意志を示す」

「そしておまえが示す意志は、俺にとっても重要な意味を持つ。」

俺が向き合うべきは、おまえのような人間だ。特別な才など持たず、ただ自由な意志で立つ平凡人。

世の大半を占めるのはそんな者たちなのだからな。ならばこそ俺に抗おうとするおまえの姿は、大いなる輝きとなって人々に示される。

ただ諦めない。その意志だけでこれほどに進んでいく事が出来るのだと、おまえの姿から学ぶことができるだろう」

「だからこそ、今一度おまえに聞きたい。」

ここまでの激戦を戦い抜き、相手の死を乗り越えても生を目指したその意志は、如何なるものであるのかと」

そう言つて甘粕が新たに創形した兵器を目にした時、今度こそ全身が総毛立った。

革新の概念に括られて現れる甘粕の創形兵器。そこに宝具としての信仰はない。

だがあれだけは例外だ。現実使用され、拭い切れないほどの毒を死を撒き散らした悪魔の兵器。

ただの一発が10万以上の人間を殺戮する。伝説を再現する災禍

の火は、人間の罪業としてその意識に刻まれた。

すなわちそれは”核兵器”。その名から連想される畏怖の念は語るまでもないことだろう。

「それこそが人の希望だと俺は思っている。その意志は勇気を与えるものだと思いたい。」

ただ状況ルールに従って、立たねば死ぬから嫌々挑む。そんな腑抜けた解答こたえを返さないでくれ」

乞い願うように言いながら、形を成したその悪夢を甘粕は投下する。

あれは本当にどうしようもない。

地上に着弾すれば、アーチャー諸共に自分も消し去られるだろう。

その破滅に至るまで、自分にはもう何をすることも出来ない。

「その魂の内にあるものを示してみろ——リトルボオオオオオオイ！！！！」

瞬間、何かの力に押し出された。

見えたのは、こちらに手を突き出したアーチャーの姿。

突き出した方と別の手には、自分でも見たことのない形の剣が握られている。

何をしたの、と尋ねる間もなく、世界から弾き出される。

そう、自分だけが。絶望的な破滅を目の前にアーチャーだけを残して。

彼が何をしたのかは分からない。けれど分かるのは、迫る破滅から自分だけを逃がしたという事実。

遠ざかっていく世界。

そこに映ってる、剣を手に挑むアーチャーの背中に手を伸ばそうとして——

そうして岸波わたし白野は、戦場せかいから断絶された。



……どれくらいそうしていたのだろう。  
随分と長い間待たされているような気がする。

そう感じているのは自分だけで、現実には大した時は経っていないのかもしれないけど。

一人だけ戻された元の場所で、自分はこうして立ち尽くしている。見回してみても、やはりというか凜や白衣の男の姿は見えない。

戦いは終わっていないのだ。戦場となった異界には、未だアーチャーが残っている。

こうして一人になると、改めて実感する。

岸波白野には何の力もない。一人では何一つ出来ることがない。

今も起死回生の方策なんて思い付かないし、これまでだってそうだった。

どれだけ勝利を重ねてきても、岸波白野の力なんてこんなものだ。どこまでも凡庸の域を出ない。

甘粕は岸波白野が希望だと言った。

けれど自分にそんな価値があるとはどうしても思えない。

だって岸波白野は、過去の亡霊。今に残すことの出来ない幻なんだから。

だから未来のある人間に託そうとしていたのに、それは間違いだったんだろうか。

——空間が歪み出す。

正常なこの世界と、異質に創られた異界とが繋がっていく。

両界の罅が消え去り、異界の消失と共にその内にあつたものもここへと戻ってくる。

まず目に付くのは、視界を覆うほどの巨大な建造物。

威容を誇った近代戦艦は、いまや全体がドロドロに融解しており、まるで腐り落ちる寸前の枯れ木のようだ。

大した距離もなく起爆された核の炎は、甘粕自身の戦艦までも容赦なく焼き尽くしたのだろう。その姿はもはや見る影もない。

それを目にして、脳裏に嫌な想像が思い浮かび、必死になって周囲

に目を走らせる。

アーチャーは——居た。

無惨に溶け落ち、灰となって朽ち果てた無数の劍群の中心に、たしかに立っている。

その姿は今にも崩れ落ちそうなほどに弱々しかつたけど、それでもまだ死んではない。

何よりもまず、それが嬉しかった。他の何を確かめるよりも先に、アーチャーの元へと駆けていく。

何もなかった自分に、最初に手を差し伸べてくれた相棒<sup>サーヴァント</sup>。

あまりにか細かい自分の足掻きに、嫌々ながらも応じてくれた彼の姿を覚えている。

あれから幾多の戦いがあった。けれど、彼がいなかったらそもそも戦うことも出来なかった。

何かをするにも、彼がいなければ始まらない。見えるその背中に、この手を伸ばす。

——直後に響いたのは、一発の銃声音。

たったの数歩。それだけで手が届く、そんな距離で。

アーチャーの霊核<sup>しんぞう</sup>が弾ける光景を目の当たりにした。

倒れ伏した弓兵<sup>アーチャー</sup>を前に、少女の足から力が抜ける。

ペタリと座り込んだ姿には、あらゆる力が喪失している。

立ち上がるための力が入らない。それは肉体ではなく、精神の問題だった。

決して諦めない鉄心。その骨子となる部分が潰えている。

立ち上がるとうとする。／ その意義が分からない。

歩き出そうとする。／ その行為には意義がない。

何か、彼女の心を支えていた柱ともいうべきものが、

アーチャーの喪失という事実を前に、ポキリと音をたてて折れてしまった。

そんな折れた少女の前に、甘粕正彦が歩み出る。  
手にあるのは一丁の種子島。

その硝煙が何を撃つたものかは、もはや説明は不要だろう。

一戦の後にも僅かな消耗すら見せず、変わらぬ強壮さのままに少女を見下ろした。

「ここまでか。まあ、こんなものだろうな」

声にこれまでのような熱量はない。

常態に等しかった魔人としての重圧も鳴りを潜め、その様は鎮魂の席の如く静かに蔽かだ。

彼は心から少女の挫折と絶望を案じている。軽口を叩いて場を乱すような真似は決してしない。

与えた張本人が何をと思うだろうが、それこそが甘粕という男なのだ。

如何なる善性、悪性を前にしようとする揺らがない絶対正義。権能そのままに甘粕正彦の在り方はこの世の誰より神に近い。

人類に光を取り戻そうとする理念は善性であり、奮起を期待して試練を下すという行為もまた、善性の質を持つ。

嘆きも死も、甘粕は望んでいないし容認もしていない。あらゆる人間が己の試練に打ち勝てればと本心から思っている。

力及ばず愛し子<sup>にんげん</sup>たちが敗北するのは彼にとって悲劇なのだ。せめてその姿を見事だったと称えることしか出来ない。

少女の強さは甘粕にとって尊敬に値するもの。それは今も変わっていない。

終わってほしいとは思わない。更なる奮起を果たしてほしいと願っている。

甘粕の試練は人に立ち上がるための機会を与えるもの。その機会こそ人には必要なのだと確信しているから、そこに例外はない。

故に、ここから岸波白野に与えるものは決まっていた。

「岸波白野。おまえの信念には初めから傷があった」

その言葉に、もはや正面から見据える気力もなかった少女の視線が、甘粕の方へ向く。

「諦めない。どんな苦境に相對しよう、動ける限りは決して。死を感じ、死に抗う姿、実に素晴らしい。」

だがその矜持を持ちながら、おまえは戦いの果ての未来を夢想することはないようだ。

いや、諦めていると言うべきか」

「その諦観は、おまえ自身があり得ざる人間、過去を再現された亡霊<sup>ゴースト</sup>だからか。」

そして亡霊であるが故に、<sup>ムーンセル</sup>月に触れればバグとして消滅される運命を感じていた」

少女が息を呑む。

はつきりと言葉にして言われたことはない。

けれど予感があったのだ。自身が不正規の存在であると知った時から。

自分はこの戦争の先を生きられない。漠然とした確信が胸の内にはあった。

ムーンセルは不正なデータを許さない。

絶対的な数理の化身は、己の観測に不確定要素<sup>イレギュラー</sup>を混じえない。

岸波白野が聖杯に触れば、その存在はたちどころに分解されるだろう。

たとえばここまで勝ち進もうと、岸波白野の結末<sup>うんめい</sup>は”死”<sup>デリート</sup>だと決まっていた。

「ではこれは知っているかな？ 岸波白野という人間は死んでいない。まだ地上で生きている」

甘粕の語る言葉の意味を、少女は咄嗟に理解できなかった。

「俺はムーンセルの所有者だ。知り得たい<sup>こたえ</sup>と思う情報ならば即座に拾える。」

我が尊敬すべき好敵手であるおまえたちの事なのだから、知りたいと考えるのは自然だろう。

そして俺は、この事実を知った」

「岸波白野、正確にはその再現の基礎となった人間は地上で仮死状態にある。

アムネジアシンドローム。かつてバイオテロが原因で発生したこの難病に侵され、その人物は冷凍睡眠コールドスリープされている。

当時では治療不可能の病だったからな。ゆえに治療法が確立されるだろう未来に希望を託したのだろう。

その処置を行ったのは……、いや。それはおまえには関係のないことだな」

それは少女にとって驚くべき事実だった。

己は過去の人間の再現。ならば当然、元となった人間はとうに死んでいると考えていた。

災害おわりの風景も覚えていて、それは確信にも近かった。だがそれは、死おわりに際のものではなかったらしい。

そして、知り得たその事実に対し、少女は思う。

”ああ、けれど、それならば——”

「そう、それこそがおまえの”傷”だ」

告げられる言葉に宿るのは酷薄な冷淡さ。

少女の抱いた希望などはお見通しだと言うように、その価値を容赦なく否定する。

「あり得ざる死者の亡霊が、その実は生霊だったというわけだ。この真実におまえは何を思った？

ならば消滅の果てにも残るものはある。終わった後にも『岸波白野』の意志が続くのなら、それだけでも報われるとでも？」

「そんな納得の仕方は死人だよ。生に足掻く者が懐くものとして好ましいものではない」

「基礎になった人間がいた。過去に生きた大元の人生があった。ああ、だからなんだ？

元が同じであろうが、別の道を辿り異なる意志に至ったのなら、それはもはや別人だろう。

その多様性こそ人の証である。同一人物ではない、そも同一の人間などこの世のどこにもいない」

「この聖杯戦争を勝ち抜いてきた意志はおまえのものだ。育まれてきた絆はおまえだけのものだ。」

その価値の重みを認められんでどうする。察するに、おまえは自分が生き長らえることに正当性を見つけられていない」

それは、自らが網サイバーゴースト 霊であるが故に。

その事実を理解した時から、少女はどこかで自身の結末を見定めてしまった。

それこそが勝者の至る月の聖杯。

終わりがくることを予感しながら、少女はその道を踏み止まろうとはしなかった。

未来に続く願いを胸に、けれど自身に関する未来には無頓着に。

岸波白野はついに、たとえばムーンセルを破壊してでも、自らが生き残ろうとする意識を持てなかった。

「生命が生きることには正当性などそもそも不要だ。他を犠牲にしてでも生き残ろうとするのは原初の命題だよ。」

人の倫理はそれを悪だと捉えるが、生命として生き足掻こうとする行為は誰にも否定できない」

「二人の力では足りないかもしれない。だがおまえには育んできた絆がある。」

元よりその気質は他の者と在ってこそ発揮されよう。その消滅の運命に異議ある者も少なくあるまい。

あるいはそれらの意志が事を成し遂げ、道理を覆すこともあるやもしれん」

「だが肝心要であるおまえに、何が何でも生き抜こうとする意志がなければ話にならない」

可能か不可能か。そんなことを論ずる必要はない。

事の結果は誰にも分からない。だが分からないからこそその勇気の価値である。

先が分からなければ動き出す事も出来ない軟弱者に、そもそもこれだけの期待を抱きはしない。

「奪われた運命ならば奪い返せ。」

それがルールに反するならば、そのルールこそ踏み躪れ。

過去の亡霊？ あるべきでない生命？ そんな理屈の道理、超越の意志を以て粉碎しろ」

「己の無理を押し通し、道理をこじ開けるとはそういうことだ。

無害な性質も時によれば枷にしかならん。鬼畜の我執も、欠片程度は持ち合わせてみるがいい」

我が儘になれと、甘粕は言う。

納得するのが早すぎる。自身の生命が失われるというのに、その執着の薄さはどうしたことだ。

たしかに少女が歩むのは正道だろう。だがそれだけでは事は為せないと言甘粕は知っている。

なぜなら甘粕自身がその体現者だ。

如何なる無理難題、不可能事であろうとも、それが必要だと判断したなら甘粕は怯まない。

時に正道から外れようとも、その道でこそ到れるのなら鋼の決意で登るのみ。それこそが甘粕正彦の王道だ。

潔さという言葉は、死力の全てを尽くした果てに用いる言葉である。燃え上がる火種が欠片でも残っているのなら彼は諦めない。

現在の甘粕はその王道の先にいる。

道理の一つも超えられない意志で、月の魔王に打ち勝つ事など出来はしない。

「己の人生に重きを置けない者に真の輝きは有り得ん。ならばその重みこそ知るべきだ」

手にある種子島が上げられる。

ゆっくりと定められる照準。銃口の先には座り込んだままの少女がいる。

「岸波白野。おまえはまず、自らの”死”を乗り越えてみせろ」

銃声と共に弾き出された弾丸は、何の抵抗もなく少女の胸を貫いた。

## 神話礼装

砕けていた意識が再生する。

繋ぎ合わされた意識は主体性が虚ろなまま、客観性の記憶確認を始める。

名前の再認識。

——岸波白野。問題なし。

状況の確認。

——ここは月の戦場。128人の魔術師ウィザードが集って殺し合う聖杯戦争。

報酬はあらゆる願いを叶える万能の願望器。聖杯ムーンセルを支配し運用する権利。

自分は勝者として、S.E. R.A. P.H.の海の最深部たるこの場所に到達した。

事態の把握。

——勝者としてたどり着いた熾天の門で待ち構えていた男。

甘粕正彦。自分の以前に聖杯戦争を勝ち抜いて聖杯を得た。全ての元凶。

自分は彼と対決し、その結果——  
結果の了承。

——岸波白野わたしは、敗北した。

主体性が復旧する。

意識が岸波白野わたしを認識する。

取り戻した主観は、まず今現在の状況を認識しようとして行動した。

目が開かなかつた／目を閉ざされているのかもしれない。

口が動かなかつた／口を噛まされているのかもしれない。

耳が聞こえなかつた／耳を塞がれているのかもしれない。

鼻が匂いを捉えなかつた／鼻を摘まされているのかもしれない。

舌が味を感じなかつた／味覚に何か異常が起きたのかと思った。



手の感覚がなかった／神経に異変でも起きているのかと思った。  
足の実感がなかった／地についていないのではと思った。

肌の感触がなかった／脳の障害を疑った。

全身のどこも動かなかった／よほど嚴重に拘束されているのだと信じた。

内蔵の一切が動いていないと自覚した／そこでようやく事態を認めた。

五感の全てが働いていない、それは完全なる停止の世界。

その中に在って、意識だけがある。それが今の岸波白野の状態だった。

それが単なる身体の機能不全なら、まだ希望がある。

機能不全ならば回復の可能性がある。一分の可能性があれば諦めるのは早い。

少なくともそう信じることはできた。どんな夢想でも継ぐことができるれば持ち直せた。

だが、そもそも岸波白野の肉体が、もうどこにもないのだとしたら

甘粕正彦を覚えている。その戦いを覚えている。

戦いの最期、アーチャーが倒れ、自分もまた撃たれたことを確かに記憶している。

ならば今の自分は、碎かれた肉体から離れ、魂のみとなって飛散してしまっただのではないか。

それは恐ろしい想像だった。

目が開けば前を見られた。手足があれば前に進めた。

岸波白野に才能なんてなかったが、それでも諦めないで前進するこ  
とだけは出来た。

けれど肉体さえ失ってしまったら、本当にどうしようもない。進む  
ことも退くことも出来ない。

想像してしまえば、次に訪れるのは恐怖だった。

何も感じられないことが恐ろしい。動けないことが耐え難い。

叫び出したくなるが、声を出す口も喉も存在しない。

誰かいないのかと声を上げる。  
返事をしてくれと必死に叫ぶ。

手足を伸ばそうと力の限り足掻く。  
肉体を動かそうと生命の限り藻掻く。

自分の持てる全てを総動員して、自らの存在を主張する。

——そうしたつもりで、もちろん全てが無駄だった。

正気を失いそうだった。

人の精神の拠り所は肉体だ。肉体を失った精神はその形を見失ってしまふ。

自分はどんな形だったのか、どんな人格だったのか、それすら見失ってしまいそうだった。

もう考えるのを止めてしまいたい。思考を放り出してこの苦しみから逃れたかった。

……ふと、それこそが正解答なのではと、そんなことが思い浮かんだ。

時間感覚すら曖昧な中、狂いそうな喪失感と戦いながら、自分は意識をつなぎ止めている。

だがそれは何のためだ。時間を稼いだところで事態が好転する当てなど何もないのに。

信念だとか、願いなんて言葉もはるか昔の遠い言葉に感じられる。

肉体は失った。後はこの意識を手放してしまえば、岸波白野は本当の終わりを迎える。

終わり——すなわち”死”だ。

その確信がある。手放しさえすればそれは訪れると。

ただ諦めればそれでいい。こんな状態となつては死こそが救いだ。

……ああ、もう無理だ。

これ以上は、耐えていられない。

闇すら見えない無明。空気にすら触れられない無感。

発狂してしまいそうだ。絶望しかないこの場所で抗う意味なんてない。

ここには何もなくて、自分にこれ以上の先はない。それは十分に理

解した。

理解したから、後はただ受け入れるだけ。それはなんて簡単なことだろう。」

—— さあ、これで終わり ——

—— もう何も —— 考えなくていい ——

—— 自分は —— ここで —— 終わるんだ ——

—— だから —— もう —— なにも —— しなくて —— いい ——

—— これで —— 何もかもが ——

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—— それは、本当に？ ——

「はあ？ なに、オマエ、まだそんなコトしてゐるわけ？」

ふと、誰かの声が聞こえた気がした。

声そのものよりも、それを聞き届ける意識が自分に残っていたことに驚いた。

「もうとつくにゲームオーバーだって分かんないの？ コンテニユールの仕様なんてないから」

…… ああ、どうやら自分は随分と死者の世界の近くにいるらしい。

この声が誰のものか、自分はよく覚えている。

自分が戦い、勝利し、その生命を奪ってきた相手を覚えている。

どうやら往生際の悪い自分に、彼等の方から迎えにきたようだ。

「つうか、オマエ負けたよね。なのに自分だけ生き延びようとするとか何様？」

僕たち相手には、散々そのルール守って殺ってきたくせにさあ」

——間桐シンジ。

偽りの日常の中での友人。自信過剰なゲームチャンプ。

決して褒められた人物ではなかったけれど、死なせたいほど憎かったわけじゃない。

「君自身が選んだ道ならば、如何なる結果でも拒むことだけはしてはならない。

無様な悪足掻きは、晩節を汚すばかりだぞ」

——ダン・ブラツクモア卿。

祖国に仕える軍人。狙撃手として歴戦を重ねた遅咲きの魔術師。

貴方の生き様に自分は多くのことを学んだ。

「お姉ちゃんもありすと同じになったんだね。早く一緒に行きましょう。」

あの娘も待つてるわ。みんなでお茶会しましょう」

——あります。

さまよえる網サイバースト霊。自分とよく似た境遇の、無垢な少女。

彼女に刃を振り下ろした罪業は、今もこの胸を苛んでいる。

——ランルーくん。彼女のことは、結局よく分からなかった。

「もう足掻かなくていい。おまえは十分やった。後は眠れ、岸波」

——ユリウス・ベルキスク・ハーウェイ。

ハーウェイの恐るべき暗殺者。その凶刃には何度も生命を脅かされた。

けれど自分は彼の心に触れた。その悲痛な思いを知った今では、かつてのように見ることはできない。

「理解できません。速やかな終了を期待します」

——ラニⅡⅧ。

アトラスなる所から来たという少女。その心は何かを探し求めているように見えた。

あるいは少し選択が違えば、同じ道を歩んでいた世界もあったのか

もしれない。

「受け入れましょう。貴女の力では甘粕カハクには届かなかった。それが結論です。

結論が出た以上、この戦いでそれを拒むことは許されない。それは貴女もよく分かっているでしょう」

——レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ。

生まれながらに勝者の道を歩んだ少年。世界を担うはずだった王の器。

彼を失った世界はどうなるんだろう。その未来を刈り取るだけの価値が果たして自分にはあったのか。

この聖杯戦争での対戦相手たち。

自分は勝ち残り、彼等は敗者として、残酷な死の刑罰を執行されて消えていった。

そして今、自分は敗者としてここにいる。ならば彼等と同様、自らの終わりを受け入れなければいけない。

どんな道理があつても、そこだけは曲げてはならないことだ。

敗者には死を。今まで彼等に課してきた絶対のルール。

納得なんてしていない。それでも相手の死を承知した上で、自分は戦い勝ち抜いた。

相手には強要し、いざ自分の番になってそれを反故にするなんて、そんな身勝手が許されるはずがない。

死デッドの防壁ドラインの先、見届けてきた結末を、自分が受ける時がきたというだけ。

彼等もまたそれを望んでいる。岸波白野によつて命脈を断たれた者たち、その資格はある。

疑問の余地はない。自分は甘粕に敗北した。残された力なんてなく、後は潔く結果を受け止めるのみだ。

——そう思っているのに、納得できないのは何故なんだろう。

「オマエさ、どんだけ面倒くさい奴なんだよ。ホント、恥ずかしいね。あーあ、身の程を弁えてたことか僕も気に入ってたのに、いつの間にかウザい奴になっちゃったなあ」

……うん、確かにそれは、自分でもそう思う。

「愚かな……。その行動は勇者の抵抗ではない。ただの現実からの逃避にすぎん」

みっともない。恥ずかしい。往生際が悪すぎる。

返す言葉なんてない。自分でもその通りとしか言えないから。

正直、もう止めてほしい。ここで休みたい。何もかもが限界だ。

まだ何処かへ向かわせようとする、内に秘める何かにも、無意味だと悟ってほしい。

「来てくれないの？ お姉ちゃん、ありすにこんなに寂しい思いをさせてるのに。」

——嘘つき!!! ありすたちに意地悪するお姉ちゃんなんて大嫌い!!!」

……ああ、責め立てる彼等の声が辛い。

こんなものは彼等に対しての侮辱だ。怒りの声も無理はない。

誰もが死にたくなかった。それでも最期は死の定めに消えて逝った。

その定めを強いた自分だけが、そこから逃れようとしている。これ以上の不義理があるだろうか。

「俺のような、悪霊にでもなるつもりか？ やめておけ、あんなものに縋っても不幸しか残せない」

唯一つの執着を抛り所に、狂気の域で自身を存続する。

そんな行為に意味はない。その救われなさはこの目でしかと見た。

あらゆる者にとつての害悪となつてまで自らを繋ぐ。その様は想像するだけでもおぞましい。

「あなたの生存に正当性はありません。全ての結論からあなたの自己消去を推奨します」

意味がない。価値がない。行動の理由が何一つ思い浮かばない。

あらゆる声が自分を責め立てている。その無様な姿を批難してい

る。

それは正しい。今の自分こそ間違っている。だから早く、この意識を手放そう。

「貴女が戦った理由は自らに対する無知だ。

己が何者なのか分からない。理由も知らないままに潰えることを許容できない。その思いこそ貴女の原点でしょう。

貴女はすでに答えを得ている。ならば自らの罪に精算をつけるだけです」

岸波白野には記憶がなかった。

どうして月にいるのか。なぜ聖杯戦争に向かったのか。

それが分からない内は死ねないと思った。忘れてしまった空白の中に、譲れないものがあるかもしれないと思ったから。

だがそれに対する解答は出ている。

岸波白野の存在に理由はない。その戦いに意義はない。

戦うべきではなかった。生き残るべきではなかった。自分にそんな価値は何もなかった。

だから、もういいだろう。

生き残るべきでない者が生き残った。これはその精算をつけるだけなのだ。

奪ってきた生命に贖罪を。あるべきでない道理は元の鞘に収まる。

彼等のためにも、これは正しい結末なのだ――

――いや、それは間違っている。

なぜだか、否定の意志が沸いた。

贖罪だと思った。これまで奪ってきた生命に対しての。

彼等に課してきた死に贖うため、自らもまた終わりを受け入れるべきだと思ったのだ。

だけど、それは違うと思う。

理屈で考えるよりも早く、その答えを確信した。

終わりを受け入れようとする心の動き。その心にどうしようもなく耐え難いものを感じている。

この気持ちは一体なんなんだろう。

終わりに対し抗う意志。それを確信させるに至らしめた思いとは何か。

彼等の声を、糾弾を、切り捨ててまで押し通す道理など——いや。

「もうさあ、オマエ死ねよ！ 鬱陶しくて目障りなんだよ！ ホラ、さつさと消えちまえよ！」

そもそもの話、これは彼等の声じゃない。

「もう眠れ。それが道理だ。これ以上無様を晒すな」

分かっている。彼等はどうもない。

死とは決定的な断絶だ。彼等の心にはもう誰も触れられない。

たとえその心に憎しみがあつたとしても、その怨嗟の声を聞くことは出来ないのだ。

「死んじやえ！ 消えちやえ！ お姉ちゃんなんていなくなつちやえばいいんだ！」

ならばこの声はなんだ。

自分のことを執拗に責め立てる声は、誰のものだ。

……決まっている。

少し考えてみれば至極当然のこと。

元よりこの五感の存在しない世界で、聞ける声など一つしか有り得ない。

きつとこれは、岸波白野自身の内にある声なんだ。

「ここで終われ、岸波。これ以上抵抗するな」

死の世界から声が届くなんてない。これは全て自身が生み出した幻聴だ。

彼等を殺した、岸波白野の罪悪感そのものが、自身を死に向かわせている。

い 懺悔というシステムがあるように、人の心は自らの罪に対し強くな



いつだって人々<sup>わたしたち</sup>は罪業を禊ぎ許されるための機会を求めている。他人を自らのために死なせて、平然と心を保つていられる悪性なんて自分は持ち合わせていない。

終わりを望んでいたのは、岸波白野自身だ。

自分が生き残るために彼等の生命を断ち切った、その罪悪を贖うための機会を求めていた。

甘粕の告げた岸波白野の傷。それは自身の罪悪感が生んだ死への逃避に他ならない。

「消滅を要求します。完結を断言します。あなたに可能性はありません」

岸波白野は平凡だ。何度だって断言できる。

絶対の判断を下せる王器なんて持ち合わせず、英雄のような定まった強さもない。

自らの判断に苦しみ、その罪業に迷ってしまう、どこまでも平凡で、けれど自由な人間だ。

だからこそ確信を持つて言える。

死による贖罪、その結論だけは絶対に間違っている。

自分の命には意味がない。その生存には正当性がない。

そんな言葉こそ言い訳だ。死を納得するための理由を探しているに過ぎない。

「なぜ抗うのですか？　そうまでして終わりを拒む理由など、貴女には無いはずだ。

求めていた答えは手に入れたはずです。いったい貴女に、どんな理由があるか？」

岸波白野の意志の発端は、自身の不明に対しての奮起。

どうしてなのか分からない。そんな疑問だけを寄る辺にした、衝動じみた発露だった。

では疑問の答えを得てしまえば、自分はそれで諦められるのか。自分は亡霊<sup>ゴースト</sup>で生命の価値はない。その答えで満足か。

——否。

そも、岸波白野は分からないから立ち上がったんじゃない。

理由の一つではあったと思う。けれど根本のところでは違っていた。

疑問なんて言葉じゃない。あの時の奮起は、もっと原始的なものだったと確信できる。

—— そうだ。きつと岸波白野は、

純粹に、ただ生きることが望んで立ち上がったんだ。

死に瀕した始まりの時、自分は自らの不明を恥じた。

だけどそれは無知であることを許せなかったのではない。

諦めるなんて認められなかった。あのまま命を放棄することが我慢ならなかった。

それは恐怖というよりも怒りに近い。何一つ理解のないまま死の運命に囚われる事がどうしても容認できなかった。

思い出してみる。自分が戦いを決意したのは何のためだったか。

深く考えるまでもなく、そんなものは単純明快。死にたくなかった、それだけだ。

世界が変えようとか、人々のためにとか、そんな願いで立ち上がったんじゃない。

ただ目先の運命が許せなくて、ひたすらに抗って生き抜こうとしていただけだ。

…… そうだ。そもそも岸波白野は、生まれてまだ一年と経ってはいないんだ。

岸波白野が単なる亡霊で、ムーンセルからその存在が始まったとするなら、当然そうなる。

いや、仮に元となったかつての自分を合わせて考えたとしても、それにしたってせいぜいが学生だろう。

世界の行く末を任せられるような、そんな相手じゃない。学ばねばならないことだらけの未熟者だ。

そんな者が世界のことを兎や角言うなんて、それこそお門違いというものだった。

停滞する世界を認められなかったと言った。

だけど岸波白野は、その世界を見たことも触れたこともない。

認める認めない以前の問題だ。他人の主観だけを頼りに世界を勝手に判断するなど烏滸がましい。

世界の在り方に物申す資格を持つ者。

それはレオや凜、そして甘粕正彦のように、世界に対して真剣に向き合ってきた者たちだけ。

自分にそんな資格はない。世界なんて大それたもの、元から自分は背負ってなどいなかった。

世界を守るためにか、そんな理由で戦おうとしていること自体、そもそもズレていたんだ。

自分にあつたのは、この命だけ。

不正規に生まれ落ちた無色の魂。背負った過去など何もない。

葬ってきた者たちに比べ、その命には重さがない。どちらを生かすべきか、訊ねれば誰もが同じ答えを返すだろう。

その命は偽物だ。誰も岸波白野を待っていない。期待しているものなんて一つだって有りはしない。

——ああ、だけど、それでも。

——たとえ世界の全てが岸波白野の価値を認めなくても。

——岸波白野だけは、その生命を大事にしてあげないと。

命が生きることには正当性は必要ないと甘粕は言った。

それは正しくて、優しい言葉だ。生まれた瞬間から命の価値が決められてしまうなんて、悲しすぎる。

たとえその存在がどのようなものであったとしても、生まれた瞬間の命には何の罪もないはずだ。

秩序を守る。世界を変える。

素晴らしい信念だろう。その願いはきつと尊いものだ。

けれど、ならばその前には個人の生存は否定されるのか？

ただ生きたいと願う意志は、万人の望む理想の前に潰えなければいけないのか。

そんなのは、違う。

そんな結論を岸波白野は拒む。

間違っていると誰に言われても、これだけは譲らない。

それが世界のためなんだと言われたって、自分自身を簡単に明け渡すなんて出来ない。

岸波白野は、自身の命が失われるから戦った。

それが始まり。それが本質。解答は最初から自分の中にあつた。

分からないなら知りたいと探し、己を脅かす事柄には全力で立ち向かう。

そうしながら人は前に進んでいく。それこそが生きていくことの本質なんだ。

なんていう遠回り。呆れるほどに頭が悪い。

気づいてみれば単純明快。こんなもの言葉にして語り聞かせるよ  
うなことじゃない。

前へ進むのは生きるために。それだけのために必死にここまで足搔いてきた。

この命は偽物で、その誕生に正当さはない。それでもここに在る意志は本物だ。

たとえば自分の存在が病原体となって大勢の人を脅かすとしても、最後まで自分自身を諦めたくない。

だからきつと、倒れ伏すその瞬間まで、人々を害さずに、自分の命も救えるような、そんな道を探し続けるだろう。

——だから、さあ、前に進もう。

前に進むための手足がない。

——そんなことは大した問題じゃない。

どうやれば届くのか分からない。

——そんなものは今に始まったことじゃない。

諦めずに、前へ進む。

その気概が欠片でも残っているなら、それはまだ終わりじゃない。  
どれほど無様で、みつともないものだとしても、そんな諦めの悪さ

だけが自分の唯一誇れるものだ。

それだけを通してここまで来た。ならば最後まで貫かなければ嘘だ。

ここで譲ってしまうくらいなら、始めから勝たなければよかった。殺してきた彼等に報いるものがあるとすれば、せいぜいがそれぐら이다。

彼等を倒してまで通したこの意志を、最後まで貫き通す。そうでなければ、彼等は何に敗れたのかも分からない。

事態がどうしようもないなんて、いつもの事だ。

やることは変わらない。元から自分に出来ることなんてそれしかない。

ただひたすらに足掻く。たとえ身体が動かなくても、この意志が動いている限りは自ら止まることを認めない。

いつかはこの無感の拷問に、意志も磨り減り折れてしまう時がくるかもしれない。けれどそれは今この瞬間のことじゃない。

だったら、前へ。

倒れる時がきたとしても前のめりで僅かでも先に。

意識だけでも残されているのなら思考だけは決して止めるな。

触れない。見えない。聞こえない。ならば意志だけでも前へと進ませろ。

諦めることを拒むこの意志が負けない限りは、岸波白野は前に進むことを止めはしない。

——刹那、意識の外皮をかすめる、懐かしい声を聞いた気がした。

幻聴かと疑う。

希望を失った心が見せた、張り子の幻かと。

だけどこれは違うと、疑心と別の心では確信していた。

呼びかけてみる。出来なかった。

それも当然だった。今の自分には声を出す機能がない。

たえ呼びかけてきた者が本当にいたとしても、今のままでは返事をすることも出来ない。

つまりは無意味。どうにかできないものかと思考を働かせて――

無感の中に、確かに感じる熱量を発見した。

その熱を知っている。

ここに在る確かな繋がりを理解して、先の見えない不安が消えた。

ああ、大丈夫だ、まだ”彼”がいる。

ならいつまでも燻ってはいられない。きつと笑われてしまう。

呼びかけは声にならない。けれど呼びかける手段はそれだけじゃなかった。

■■■■を呼ぶ。そのための手段を、自分は最初に受け取っていたのだから。

あとは、ただ一言、彼の名を。

その呼び名を忘れない。たえ何万年の牢獄に閉ざされようと決して。

最初に岸波白野へ手を差し伸べた、その存在を良しと言ってくれた戦友の名を。

……来て、アーチャー……ッ！

魂から振り絞った最後の令呪が、その意志を外へと届かせた。

「——ああ、まったく、やはり君はそうするんだな、マスター」  
肉体が復活する。

感覚が回復する。

岸波白野のあらゆる活動が再開する。

いつの間にか伸ばしていた左手は、誰かの掌に包まれている。

鍛え抜かれた褐色肌の腕。靡かせる赤い外套。シニカルな、けれど信頼を寄せてくれる表情。

それはよく知る彼の姿。サーヴァント・アーチャーは変わらぬ姿でそこに在った。

「あのまま眠っても責める者など一人もいないだろうに。誰よりも君自身がその選択を許せないらしい。

私も大概に諦めの悪いたちとは自負しているが、君のはそれ以上に筋金入りだ。改めて理解したよ。

どれだけ強大で、苦難に満ちた障害であろうとも、立ちはだかるのなら君は前に進むことを止めはすまい。

——ならばオレも、いつまでも眠っているわけにはいかないな」  
アーチャーの言葉がこそばゆい。

いつも隣にいた彼の言葉が、今はとても懐かしく思える。

それをもう一度聞けただけでも報われた気分になれるのだから、自分でも単純だと思う。

けど、しょうがないじゃないか。

アーチャーがまだ生きてる。自分にとってこれ以上の朗報はないんだから。

少しくらいは浮かれても大目に見てほしい。

——けど勿論、そうとばかりも言っではいられない。

「そうだな。君からすれば今の事態は理解不能な事ばかりだろう。

そして君に言うのは心苦しいが、まだ問題は何一つとして解決していない。

言うなれば、君はようやく事態と向き合えるようになったただけだ。立ち上がっただけに過ぎない」

アーチャーが生きていたのは嬉しい。だがそれはどうしてだ。

自分は確かに目撃している。アーチャーが甘粕によって撃ち抜かれる様を。

あそこから一体なにが起こり、どうやって自分たちは起き上がったのか。

「それがまず一つ目の誤りだな。そして最大の問題でもある。

残念ながら、私は甦ったわけではない。未だ霊核を砕かれ、地に倒れたままだ」

……何だって？

それじゃあ、今こうして話しているアーチャーは……。

いやそもそも、自分たちは今どこにいる。

辺りを見回しても、まるで見覚えのない奇妙な場所だ。

どこまでも広がる青の空間。その景色は深海の底を思わせる。

真つ当に立つことは出来ているが、果たしてそれが錯覚でないという保証はあるのか。

「なぜこのような事態になっているのか、大まかに察しはつくが、そこは重要ではない。

私も仔細を把握しているわけではないが、ここは私の<sup>インナースペース</sup>電脳体内、  
霊子構造の内側だ。

君の<sup>よひかけ</sup>令呪で、表側で停止した意識がこちらに表出したのだろう。君自身、私と接続することで外部への接点を得た」

電脳体、つまりここはアーチャーの心の中ということか。

そして外では、自分もアーチャーも倒れたままだと。

「そういうことだ。残念ながら事態が好転したとは言い難い。

そして私と繋がっている君も、このままでは復帰の見込みはない。<sup>ログアウト</sup>強制帰還はなく、仮に出られたところで今度こそ君の精神は行き場を失う。

最悪な状況は相変わらず、といったところか」

……どうやら、事態は思っていたよりも悪いらしい。



あの無感の牢獄から抜け出せても、その後が八方塞がりだ。死んでいないだけ最悪の一步手前というところだが、どうしたものか。

「ふっ。そういう割には、君には落胆の様子はないようだが？」

……そうなのだろうか、自分では自覚はないが。

けど仮にそう見えているのなら、きつとただ開き直っているだけだろう。

勝算のあるなしとか、意味がどうのとか。

そんなことを考えて止まってしまうくらいなら、いつそ考えなしのままでもいい。

元より考えただけで思いつくような利口な頭なんて自分は持っていない。

ならばまずは直球で、出たとこ勝負の覚悟で挑む。臆していたら始まらない。

我ながらどうかと思う体当たりぶりだが、諦めて立ち止まってしまうよりはずつといい。

これはもう意地なのかもしれない。

それだけを貫いた。それだけが誇りだった。だから最期まで譲らない。

たとえ先が一筋の光明も見えない無明の闇だとしても、岸波白野は前へ進むことを諦めない。

「……そうか。ああ、ならばもう一つ訊ねたいのだが」

「甘粕正彦。あの男について、君の私見を改めて聞かせてほしい。

奴の信念、その願いについて君はどう思っている？」

——甘粕正彦。

実際に戦ってみて、その強さはもう疑いの余地はない。

一介のマスターを超越した力。間違いなくこの月で最強の存在だ。だけど彼の強さとは、そんな表面上の力が本質ではないと思う。

何よりも凄まじいのは、常人を逸脱した意志の力。彼があそこまでの存在へと至ったのも、その意志の強さがあったからだ。

信念に懸ける思いの熱量。王道とも見える強者の有り様は、これま

で見えてきたマスター達には無かったものだった。

「マスター。奴の言う樂園ぼらいぞとは、極論に過ぎない。はつきり言えば、叶えさせてはならない類の願いだ」

……うん、それは分かっている。

「訊けば誰もが拒むだろう。己を脅かす災禍など、人々は望まない。

奴の打倒は、ある意味で人類の総意だとも言えるだろう。それを担う君は正義の側に立っている」

……確かに、そうなのかもしれない。

甘粕の言う世界を望む者なんてそうはいないだろう。

試練という名の災禍を拒んで、自らの平穏を守る。その行為は正しいものだ。

けれど――

「それでも奴を否定しきることは出来ないのは、今を生きる人々を真摯に見ているからなのだろうな」

――アーチャー？

「もしも甘粕正彦が、より良き未来という名の利益のためにこのような真似をしたのなら、迷わず悪だと断言できただろう。

それがどんなものであれ、利己的な願いを追い求め、他者の命を消費する者はまぎれもなく悪。

過去の喪失に耐え切れず、消えていった者に報いるために今を犠牲とするのは、身勝手なエゴに過ぎない。

奴がそんな愚か者なら、オレは迷わなかった。排除すべき対象として、この剣を振るえたはずだ」

「……だが、どうやら奴は未来すら見てはいないらしい。

ただ現在に生きている人々が、苦難を乗り越え立ち上がれる強さを得てほしいと、本気でそれだけを思っている。

スケールこそ大きいが、思想自体はあまりに幼稚で、そして正しいものだ」

アーチャーの言葉は、嫌悪を含んだものではない。

それどころか、むしろ甘粕を羨むような、そんな響きさえ感じられた。

「正直に言うとな、奴の話聞いていた時、オレも耳が痛かったよ。個人のみで完結する理想に価値はない。そんなもので救えるものはない。全くその通りだ。」

たった一人、友人だと信じられた、そんな者にさえ理解されない理想など、正しいものであるはずがない。

理解されなかった、いやそもそも理解してもらおうと努力さえしなかった。生前のオレは、最期までその誤ちに気付けなかった。

身勝手な理想で走り続けたオレの末路は、必然のものだった」  
己を責める言葉を吐くアーチャー。

その自責を聞いて、ようやく彼の思いを理解した。

『多くの人間を助ける、正義の味方になる』という彼の誓い。

私欲を殺し、理想に徹して、彼はそんな夢のような絵空事の体現者となった。

百人のために十人を殺す、止む負えぬ事情で悪事を犯した者を一方的に断罪する、血も通わぬような無情の機械として。

より多くの人々を助けるといふ偏った正義を、彼は自ら悪だと断じていた。

その結末は、信じた友人に捕らえられての法による断罪。

けれどそれは友人が裏切ったのではない。

人として、仲間として好いたからこそ手を貸した友人にすら、正義の下では躊躇なく敵に回れる、そんな在り方自体が友人を裏切っていたのだ。

結局、理想のために無辜の人々を犠牲とした正義の味方の最期は、正しい糾弾による断罪ではなく、社会に不要とされての粛清だった。

抱いた理想だけを寄る辺にしてきた一人の男は、一切の救いもなくその人間性を剥奪されて消え去ったのだ。

だが、もしも、男が別のやり方を選択できていたのなら。

多数のために少数を切り捨てる、そんな無情の在り方ではなく。

ただ『人を救いたい』という理想を、もつと純粹に、底抜けの莫迦者のように信じられていたとしたら。

そんな可能性を示す甘粕正彦の在り方は、アーチャーにとって眩し

く映るものだったのだ。

「それを思うと、やはり悔しいな。

サーヴァントとして在る間は口を挟むまいとしていたが、今のオレは人間として言ってやりたいことがある。

このままで終わるといふのは、端的に言って我慢ならない」

それは、今までのアーチャーからは考えられない言葉だった。

いかなる敵であれその在り方を完全に否定せず、ただ邪魔だからと切り捨ててきた英霊。

戦闘代行者としての在り方を崩さなかつた彼が、今は人らしい感情で対抗心を燃やしている。

そんなアーチャーの姿は、自分には悪いものだとは思えなかつた。

「ならばマスター。1つだけ、この状況を打開する心当たりがある」

そう言つてアーチャーが指し示すのは、一本道の続く先。

SE・RA・PHのダンジョンにも似た構造のそれは、底へと沈んでいくように続いている。

「推測が正しいのなら、この先にあるものにたどり着ければ我々は意識を復帰できる。

それどころか、甘粕に対抗できるだけの力をも手に入れられるだろう」

それは、願つてもない話だった。

生きて復帰することすら不可能と思える現状。反撃の可能性まで握めるなんて申し分ない。

唐突すぎるとは思つたが、他ならないアーチャーが言うことだ。

自分はそれを信じられる。

「ただし、そこまでの道のりは君だけで踏破することになる。

私では近づけないんだ。君でなくては、”アレ”に触れることは出来ない」

念を押すように、アーチャーは言葉を続けた。

それくらいなら、なんてことはない。

これまでの戦いをアーチャーに頼りきりだったことを考えれば、力になれることがむしろ嬉しい。

アーチャーの示す先を見る。

奥底へと続く道は果てが見えない。しかしそれくらいで怯みはない。

気力は十分、意志をしつかりと持って一步を踏み出す。

——先に進むもうとした瞬間、電流のような衝撃が身体を走った。

「それは警告だ。君は今から、私という存在の”大本”ともいべき地点へと赴こうとしている。

それが与える影響は計り知れない。間違いなく君には苦痛を強いる。

最悪の場合、消滅すらあり得るだろう。決して安易な道ではないことは覚悟しろ」

……ああ、それはそうか。

簡単であるはずがない。あの甘粕に届き得る道が。

あの強さに届くには、それに見合うだけの試練がある。そうでなければ対抗し得る道理がない。

少なくとも彼が辿ってきた道と同程度の苦難を乗り越えなければ並び立てるはずがないのだ。

「言った通り、これは私の推測だ。結局は無駄な足掻きかもしれん。ああ、ならば潔く諦めてみるのも一つの手だぞ。

話を信じるならば、この聖杯戦争はループしているらしい。オレのような半端な英霊には見切りをつけ、次の機会を待つのだって選択としては有りだ。

わざわざ苦しい思いをしなくても、このまま眠ってしまえばそれで済む。その方がずっと楽だろうしな。どうする?」

——そんなの、考えるまでもない。

迷いなんて今さらだ。

もう自分は選んでる、この歩みを止めはしないと。

それに、自分のサーヴァントはアーチャーだけだ。

他にどんな可能性があったとしても、今ここにいる自分が、最期まで共に戦い抜く戦友は彼しかいない。

だから、その覚悟を示すように。

確かな意志を抱いてもう一度、脚を踏み出す。  
沸き上がる本能の恐怖を押し殺しながら、岸波わたし白野は前へと進み始  
めた。

心理の回廊は、無限とも思える距離で続いている。  
ただひたすら、真つ直ぐに。

余計なことは気にせずに進んできたつもりだが、一向に変わる気配  
のない景観には次第に焦りが生まれてきた。

本当に自分は進んでいるのか。

なにか、終わらない袋小路の中に迷い込んでいるのではないか。  
そんな漠然とした不安が生まれて、心身に重りとなって吊り下が  
る。

——ギチリ

いや、考えるな。

どの道、必要なスキルと言われても自分にあるのはこの身一つ。  
出来ることは進み続けるだけだ。ならばその歩みを妨げることな  
らば、極力考えないほうがいい。

——ギチリ

ここは心理の世界。

アーチャーの本もとに繋がる奥底へと沈んでいく。

真つ直ぐと進んでいるはずなのだが、自分は確かに沈んでいるの  
だ。

一步の歩みの毎に感じる、海の底へと沈澱していく感覚。

重く冷たい不快感。それでもその感覚だけが、目的の地点へと接近している証左でもある。  
だから進む。この感覚がより強くなる方へと。深く、深く沈んでいく。

——ギチリ

ああ、それにしても身体が重い。  
延々と続く回廊のせいか、身にのし掛かる沈澱感のせいか。  
ひどくだるい。頭痛がして眩暈がする。身体が思うように動かせない。

肉体がないのに疲労を感じている事を不思議に思う。  
だが考えてみれば、この月の舞台上が上がってきた時点で、本物の肉体は無いも同然だった。

虚構で彩られた仮想世界。SFに思い描く世界観の完成形。そこでは全てが現実以上に本物だ。

疲れや痛みも、生の肉体が感じるように受けられる。

詳しい原理は、正直なところ自分にはよく分からない。

きつと使用する情報量がどうか、凜なら的確な解答を返してくれ  
るんだろうけど。

そういえば、自分は本物の肉体というものを感じたことがないのだ  
など、そう考えたら少しおかしい。

——ギチリ

けど、それにしたって身体が重かった。

こんなにも重たいと、心の方まで萎えてきてしまう。

先ほどから金属の軋む音がしている。その不快感と相まって、掛か  
る心労もかなり大きい。

身体への負担はまだいい。

けれど心に掛かる負担は困りものだった。

一度気力が折れたら立ち上がれない。その確信があったから。  
……少し、走ってみようか。

どこまで続いているかも分からないのに、余計に体力を消耗するやり方は良い判断ではないかもしれない。

だが、今は身体の疲労より心の疲弊が問題だ。

この鉛のような重苦しさを吐き出すために、身体の方に緩急を付けておきたい。

——ギチリ

そうと決めたなら、早速実行してみよう。

立ち止まり、息を吸い込んで姿勢を構える。

考えるのは全力疾走。肉体に活を入れるため、加減なんてするつもりはない。

吸い込む息を止め、脚に力を入れる。

踏み込んだ一步に勢いをつけて、前に進み出ようとして、

——ギチリ

……ようやく、事態を把握した。

肉体の疲労だとか、沈澱していく感覚なんてものじゃない。

この重苦しさは、もっと直接的な問題だった。

ギチリ

不快に響く金属の音は、身体の中から。

ギチリ、ギチリ

身体が重いのは当然だ。

精神面での話ではなく、物理的に重い物体に置き換わっている。

ギチリ、ギチリ、ギチリ

走り出そうとして、その拍子に飛び出したものを見る。

走り出すことは出来なかった。異物の感触に足を取られて転倒したのだ。



そして伸びきった足に見て取れる、明らかな異常事態。もう明白だった。身の内で今まさに起きている、この異常を理解するのは。

——両脚からは、剣が生えていた。

岸波白野の体内構造がいつの間にか置換されている。

内側から縫い付ける刃、走り出すことなどすでに不可能。

本来のものでは有り得ない異質の物質が、肉体を硬質化していた。それを認識した瞬間、見える世界も変質する。

いや、変質したのではない。今までそうだと認識できていなかったのだ。

——そこは、剣製の異界だった。

アーチャーという存在の魂に刻まれた世界図。

他の一切を混じえない無人の荒野。無限に精製されていく名も無き剣群。

天空を覆う無数の歯車だけが、世界に音を刻んでいた。

この世界こそ、アーチャーの起源。

定められた唯一無二の在り方の下、それのみを存在意義とする歯車仕掛けの機械<sup>ヒトガタ</sup>。

存在それ自体を『剣』<sup>ツルギ</sup>として。異質の法を内包した異端の魂。

その根源、遙かな深淵へと自分は足を踏み入れているのだ。

ギチギチギチギチ、ギチギチギチギチ

そして、自分の身に起きているこの異常は、恐らく防衛の類ではないのだろう。

内側にアーチャーの意識が現れているためか、異物として問答無用に排除される感じはしない。

だからこれは、必然として起きた症状だ。

英霊の原初という巨大な大海に、岸波白野という脆弱な個体を浸した結果。

大海の質に浸食され、元の形が飲み込まれようとしている。

身体が剣と化していく。

動作の度に肉の斬れる痛みが走り、四肢はまともに動かない。

変質していく身体がおぞましい。耐え難い不快さ。このまま進めば、症状はよりひどく進行していく。受ける苦痛は、想像を絶するものとなるだろう。

——ああ、つまりは、そんな程度のものでしかないということだ。

立ち上がる。

刃の擦れる音。踏みしめた足に激痛が走る。

だがこれでいい。痛みがあるのは生きている証明だ。

先程までの無感の牢獄。その絶望に比べれば、この程度はなんて事はない。

ギチリ、ギチリ

引き摺るように、それでも歩き出す。

生きているならば、こうやって前に進める。

重さも痛みも、それだけならば恐れるに値しない。

何よりも怖いのは、進めなくなること。抗う術すら失うことが何より怖い。

その恐怖に比べたなら、これぐらい十分に我慢できる。

ギチリ、ギチリ、ギチリ

だから、今、心配するべきことは。

目的の所に辿り着くまで、この身体が維持できているかどうか。

このまま全身が剣へと置き換わっていけば、そう遠くない内に動けなくなるだろう。

それまでに何とか到達しなければならぬ。懸念すべきはそれだけだ。

ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチリ

広がるのは無限の剣が突き立つ荒野。

その光景は遥かな果てまで続いて終わりが見えない。

歩き続けなければならぬのは確かだけど、この距離感はおもひよこさず考えた。だつた。

果たして終わりまで保つのかどうか、目算がつかない。  
身体は依然重くなっている。このままいけば、本当に動けなくなる  
のも――

ギチリ、ギチリ――ガキン

……危なかった。

四肢の重さに引き摺られ、転倒してしまった。

もしも身体の一部が剣に変わっていなかったら、地に立つ剣の串刺  
しになっていたかもしれない。

危機感が、再び意識を喚起させる。

気を散らしては駄目だ。もっと注意深くならないと。

大地に縫い付けられては、もう動けないだろう。そこから復帰する  
だけの力はない。

荒野に突き立つ剣群は、進めば進むほどにその密度を増している。

この先は更に危険と隣り合わせとなるだろう。益体のないことに  
気を取られるな。

ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチリ

どれほど進んだのか。

身体の方は、すでに半分以上が剣に置き換わっている。

果ては、まだ見えてこない。

ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチリ

埋め尽くす剣群に、荒野自体が見えなくなってきた。

すでに身体は7割ほどが剣になり、歩みの毎に周囲の刃に斬り裂か  
れる。

歩みは止めない。

ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチリ

果ては見えてこない。

余計なことは考えずに、歩くことだけに集中する。

自分の身体がどうなっているのか、気にするのはもうやめた。  
激痛を伴いながら、ひたすら足を前に動かす。

ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチ  
リ

……身体感覚が無くなってから、どのくらいが経っただろう。すでに痛みさえ、感じなくなって久しい。

無感とは違う。自分の感覚が別物へと変貌する。それは異なる形の拷問だ。

それでも足は止めない。

前へと、ただ前へと足を動かす。

この身体が動く余地を残している限りは、自ら止まることだけは決してしない。

だってそれだけが、きつと岸波白野（わたし）にできる唯一の戦いだから。

自分には戦う力なんてない。

凜のような事態に対し的確に対処できる能力もない。

自分にあるのはこの諦めの悪さだけなんだから、それだけは譲らない。

どうやらこの場所は時間の概念が薄いらしい。

少なくとも差し迫った刻限に追い詰められる、そんな危険だけはなさそうだ。

それだけは紛れもなく朗報だ。時間制限（タイムリミット）なんてあったら、本当にど

うしようもなかった。

けれど諦めない限り抗うことが可能なら、可能性は残されている。

だって、岸波白野（わたし）は足が遅いから。

だから追いつけるように、少しでも多くの歩数を重ねることしか出来ない。

ただ愚直に、相手よりも一歩でも多く、前を向いて進むだけ。

それが自分の戦い方だ。諦めるなんて選択は、あの無感の中を抜け出た時に捨てている。

止まるのは本当の終わりの時。この意志が途切れない限りは、岸波白野（わたし）は前を目指して進み続ける。

ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチリ、ギチリ——

——そして、最果てが見えた。

剣製の丘を越えた先。

あらゆる装飾、肉付きを廃した”原初”の地点。

アーチャーという存在が誕生し、最期には還る始点にして極点。この先こそ真の無意識の心理領域。すなわち”ゼロ”だ。身体は、まだ保っている。

刃の音がしない箇所は一つもない。食い破った剣は全身至る所から突き出している。

それでも岸波白野は保たれている。磨り減り尽くしてはいない。つまりは、間に合った。辿り着くことが出来たのだ。

そして、何も無い無垢の空間で、待ち受けている者に目を向ける。何色をも映さないヒトガタ。アーチャーの”原理”を宿した姿。

これを解き放てばアーチャーは覚醒する。甘粕正彦に対抗し得る力が手に入るのだ。

そんな自分が見ている前で、ヒトガタはこちらへ向けて剣を構えた。

不味い。

辿り着くことばかりに躍起になって、この事態を想定していなかった。

まさか封印そのものが牙を剥いてくるなんて。いや、封印だからこそなのか。

何にせよ、自分に打つ手はなかった。

身体は満足に機能せず、仮に万全だったとしても英霊の一撃を防げる道理はない。

ヒトガタが刃を振るえば、自分は認知することも出来ずに命を刈り取られるだろう。

目に捉えたのは、僅かな踏み込みの動作のみ。

次の瞬間には刃は目前にまで迫っている。

何も出来ない。ここまで来ておきながら、こんな風に終わるなんて

「——いや、君は十分すぎるほどにやり遂げた。あとはオレに任せてくれ」

振り下ろされた刃は、自分の目前で静止していた。

寸前まで迫った色のないヒトガタ。はしる亀裂から色彩が生じ、現れたのはよく知る相棒だった。

「今のオレと君は、令呪の力で接続されている。君が到達したということは、オレもまた到達したということだ」

見慣れない姿は、獲得した理の証明だろう。

英霊の原点たる力。同じ位階にあるがゆえに、創造神の権能にも対抗できる。

だから、心理の内側に留まる理由も、すでに無かった。

意識が浮遊していく。

苛んでいた激痛が霧散する。全身に浸食していた剣群も消失した。

それは覚醒の兆し。資格を得た自分たちは、再び戦場へと舞い戻るのだ。

差し出されたアーチャーの手を取って、浮上するその流れに身を任せた。

「……なあ、マスター。君は本当に素晴らしい人間だ。君に剣を預けることが出来たのは、最高の誇りだった」

ど、どうしたの？ 急にそんな、ストレートに褒めてくるなんて。

初めてだから戸惑ってしまう。それとも、いつもの慇懃な嫌味の前フリだろうか。

「ひどいな。これでも真剣に話しているんだ。茶化さないで聞いてくれ」

「過ぎ去ったもの、失なわれたものに報いようと、現在を蔑ろにするなど誤りだ。

たとえ届かない夢だとしても、絶望せずに目指し続ける。その在り方がどれほど尊いものか、君のおかげで思い出すことが出来た」

「言っただろう。この戦いはオレにとっても大いに意義があったと。

最弱であろうと、人間として正しい心を持つマスターに出会えた事

は、オレにとって——」

それは、以前に話を聞いた時には結論までは口にしなかった事柄。言葉にしなくても読み取ることはできる。サーヴァントとして、自分という無名の魔術師ウィザードと契約した理由。

「——奇跡のような幸運だった。生前に果たせなかった本当の願いを、正しいカタチで叶えることができたんだから」

その結論を、少年のような穏やかな笑顔で、アーチャーは口にしながら、明言された真意は、読み取った内容と変わらない。

たとえ口に出さずとも理解は出来ていた。理想を求めるあまりに遠ざけてしまった、アーチャーの本当の願いは。

——それでも、祝福に満たされた彼の笑顔を見れたことは、決して無意味なんかじゃなかった。

「だからオレは、最期まで君のための相棒サーヴァントで在りたい。本心からそう思う。

何を救うべきかも定まらなかったオレが、本当の意味で救ってやりたいと願う相手がいる。そこに後悔を残したくない。

改めて言うのも変だろうが、岸波白野マズタのために戦わせてほしい」  
そんなこと、答えるまでもない。

自分のサーヴァントはアーチャーだ。それ以外は考えられない。  
アーチャーだって分かっている。自分の意思は、すでに語るまでもなく伝わっているはずだ。

けれど、語らずとも分かる意思であっても、語るからこそ伝わる温かさもある。  
だから答える。

精一杯の感謝と信頼を込めて、この温かさが伝わるように。

自分がどれだけの想いを抱いているのか、その熱を貴方に知ってほしいから。

——私の英雄アーチャー。どうか運命が分かれた瞬間まで、私と一緒にいてください。

「ああ……了解だ、マスター。君は、オレが必ず守る」  
彼の宣誓を聞き届ける。

湧き上がってくる想いがあつた。頬を染めるほどの熱が浮かんだ。けれども、その想いは口にしない。秘めておきたいと思う温かさであつたから。

——だから、さあ、目を覚まそう。

手にすべき覚悟は貫つた。自分はもう戦うことを迷わない。待ち構えているのは最強の敵。敗北の記憶は新しい。怖くないはずがない。

でも、それを乗り越えられる勇氣がある。だからこうして、震えることなく前に進んでいられる。

そして、その勇氣の源は、頼もしく握り返してくれる彼の手から。もはや妨げるものはない。

自分たちが向かるべき戦場へと、再びこの脚で降り立とう。

覚醒していく意識の流れのままに、自分とアーチャーは浮上していった。

「かつてのオレは、理想の下に多くの命を切り捨てた」

誰に向けたものでもない独白。

それは彼が、己自身に向けた秘めたる想い。

「多数のために少数を。数量のみを確かな計りとして、情も何もかも切り捨てて。

……きっとその少数とは、君のような人間だったのだろうにな」  
それは生前の彼の誤ち。

より多くの人々を助けようとした。その果てに限界に気付いた。



人の手が救えるのには定数がある。全ての人間を救いきることは出来ない。

だからやがて、その数だけを基準とした。私情を排して、そうすることが切り捨てる人々に対するせめてもの義理だと信じて。けれど、それこそが最大の間違いだ。

その結果が望まないものでも、懸命に手を尽くした果てにあるのなら受け入れるべきだ。

全てを救うという理想。それだけに囚われてしまえば、原点にあったものもいつか見失ってしまう。

そんな過去の誤りを、現在の彼は理解している。

サバイバーズギルト。

事故や災害で多くの人命が失われた後、生還者が抱く罪悪感や責任感といった強迫観念。

死んでいった皆の分まで、生き残った自分が特別なことを為さねばならない。

自分よりも他人のために。その強迫観念に突き動かされて、助けられないという結果を認めることが出来なかった。

なんとという無様だろう。

滅私奉公を謳いながら、その救済はあくまで自分のために。

そんな歪さだから間違えた。結果ばかりに囚われて、その過程を蔑ろにした。

大切だったのは、理想のために走り続ける意志。

たとえこの手が全てに対して届かなくても、一人の人間として真摯に前に進む。

叶わない理想でも、そこで一人でも助けられる命があったのなら、そこには確かな意味があったのだ。

「……ああ、そうだ。決して間違いではないものもあつた」

自らの願いは歪んでいる。

その自覚はある。始まりから終わりまで、自分の理想は偽物だらけ。

自身の内から生じたものは一つとしてなく、空っぽの器に目に付い

たものを入れただけ。

全ては詭弁だ。自己の罪業を薄めるため、心の安寧のための代償行為に過ぎない。

——それでも、綺麗だと思ったのだ。

すでに英霊となった彼に、生前の己の記憶はほとんどない。

それでも■ ■ ■という存在の起点となった光景は覚えている。その記憶だけはどうやっても消し去ることは出来ない。

自分を救おうと差し伸べられた手を覚えている。

自分という命を見つられれたことに、心から安堵している顔を覚えている。

そこにどんな打算があったとしても、目の前の命を救いたいと思う、その姿は決して嘘ではなかった。

そんな姿に、憧れた。

自分よりも他人が大事。それが偽善だとは分かっている。

それでも美しいと感じた。そのように生きられたなら、それはどんなに素晴らしいと。

——誰もが幸福であってほしいと願う理想。

後の手段は間違えてばかりだったけれど。

その感情だけは、何一つとして恥じることはないものだ。

そんな願いを正しいものだと思じた、その心だけは——

「——決して、間違いなどではないのだから……！」

だから今度は、そのやり方も間違えない。

助けたいと思う少女がいる。その手を決して切り捨てない。

自分がなりたいたいと思った”正義の味方”とは、きつとそのような者であるはずだから。

その正しさがある限り、自分は戦える。

それを示してみせるためにも、己はもう一度あの男と向き合わねばならないのだ。

揺らがない勝者の高みから、甘粕正彦は地に倒れる敗者を見下ろしている。

徒に騒ぎ立てるような事はなく、ただ静謐に。

まるで彼等の眠りを見守っているように、立ち去り見限ることはない。

他ならぬ彼自身が手にかけて彼等が、今にも起き上がるというように。

「どうやら終わったようだね、正彦」

そんな甘粕の元へ、空間を越えて現れる二人の来訪者。

遠坂凜、そして甘粕に賛同する白衣の男。

共に勝者に付き添う傍観者として、戦いの場から離れていた二人がその姿を見せた。

「結果は……こうなったか。予想されたものではあるが」

「はく……のん……」

第三者たる彼等にも明白なその結果。

無残に倒れ伏す姿は、勝者が誰であるかをはっきりと示している。

岸波白野は敗れ、甘粕正彦が勝利した。その結論だけがこの場にはあった。

「未だ後継は現れず、君を超えていく者もない。この結果も、果たして幾度繰り返したものだっただか」

共に永劫の闘争を重ねる同士として、男は戦いを顧みる。

結果は無情。結論は変わらない。繰り返される闘争は、同じ答えを示していた。

「さて、正彦。勝利者として、君にはこの先を決める権利と、義務がある。

聖杯戦争を制した者として、君はあの聖杯に何を願う？」

男——トワイヌが指し示す先。

天に鎮座する月の聖杯。あらゆる未来を与える万能の演算器。

戦いの行く末を見守る傍観者として、その用途を問うた。

「これまでにそうしてきたように、再び聖杯戦争を巻き直すのか。現れる保証のない悲願の後継、あるいは絶無とすら思える、君以上の強さに至る可能性に期待して」

「……私は、もう1つの選択肢。君が至らせた破滅の未来、あえてその道を進むという選択も、悪いものではないと思っている」

それは禁忌ともいえる選択肢だ。

世界の破滅を容認する。その判断を甘粕が下せば、結果はすぐに訪れる。

それを避けるための闘争の輪廻<sup>ループ</sup>。トワイスはそれを捨てる考えを示したのだ。

「確かに世界文明は崩壊し、人類は多くのものを失うだろう。だが、それに代わる強さも手にする。

あるいはそれこそ、人を更なる高みへと至らせる光となるかもしれない。

正彦、君の選択であるならば——」

「そう急くな、トワイス」  
決断を迫るトワイスの言葉を、あくまで平静を保ったままで甘粕は遮った。

「結論を急ぐなよ。まだ終わってはいない」  
「なに？」

甘粕の言葉が示す意味を理解し、トワイスは敗者の主従へと目を向ける。

結論は変わらない。無残に果てたその姿は、敗北者以外の何者でもない。

主従ともに霊核<sup>しんぞう</sup>を撃ち抜かれ、生命活動の停止には疑いの余地はな

く——  
「……完全に停止しているというのに、なぜ消去<sup>デリート</sup>されない？」

虚無に包まれ消滅する敗者の運命。残酷なる月の末路は何者に対しても絶対だ。

それがマスターはおろかサーヴァントまでも健在のまま。動かぬ骸とはいえ、消え去らないのはどういうわけか。

「いや、それどころか、これは——！」

動かないはずの骸が、再び鼓動を刻む。寸前まで確かに停止していた肉体に、生の活力が戻っていく。

脈打つ血潮は刻と共に勢いを増していき、その活性はかつての彼等をして上回る輝きとなって表出した。

あり得ない事態に、遠坂凜も、トワイヌも眼を見張った。

そんなことが起きるはずがないと。目の前の現実を受け入れられず、困惑している。

その反応は至極正常。死していたはずの者の黄泉帰り。誰もが願ひ、叶わずに終わる本物の奇跡。

その奇跡が目前で起きている。何人であれ、驚嘆を覚えない道理があるうか。

「来るか——」

唯一人、その奇跡を信じていた、甘粕正彦を除いては。

「来るか来るか来るか——来い!!!」

奇跡は顕現する。

決定的に訪れた死。敗北という結論はここに覆る。

ただ諦めないという不退転の意志を以て。新たな命を掴んだ彼等は、ここに黄泉帰りを実現させる。

——そして、岸波白野と彼女の騎士は立ち上がった。

かつてない勢いで魔術回路を励起させ、最弱であった少女は揺るがない意志を湛えている。

並び立つ騎士の姿も見違えた。シンボルにも等しかった赤原礼装は無く、代わりに身を包むのは黄金を備えた原初の礼装。

死の終わりを乗り越えて帰還した少女と騎士は、甘粕にとっても油

断ならない強敵として舞い戻った。

「く、はははは、あつはははははははは、ハハハハハハハハハハ!!!」  
その激変を、甘粕は喜色溢れる大笑と、万雷の如き賞賛で以て迎え入れた。

「——素晴らしい!!! 不屈の意志で以て成し遂げたその偉業、奇跡!

これこそ俺が愛する人間の輝きに相違ない」

「その輝きを前にすれば、血統の才覚だの世界を揺るがす能力だのと、そんなものに価値を見出していること自体が馬鹿馬鹿しい。

天よりの寵愛を受け、我こそ勇者と宿命を定めてもらわねば行動の一つも起こせない。それで何かを成したと勘違いしている愚か者が多すぎる。

大した努力も覚悟もなく、何処その某かの神やら悪魔やらに偶然恵んでもらった力を振りかざし、何がそこまで誇らしい?

自ら運命を切り開く気概もない軟弱者が、自身の在り方がどうだのと主張や理想を語ってみせたところで、滑稽すぎて見るに耐えんわ」  
「おまえたちのような者こそ、俺の楽園ぼらいてんを彩る住人にふさわしい。喉が裂けるほどに叫びたい、おまえたちこそ真の勇者であると!」

「……よく言う。自身でお膳立てをしておいた者が」

褒め称える甘粕に、アーチャーは皮肉を込めて切り返した。

「神話礼装。英霊の原初に在る力。使いようによつてはムーンセルそのものにも仇なせるだろう。

許されるはずがないのだ。そんな力をサーヴァントが取得するなど。たとえ僅かな可能性でも、自身の破滅に繋がる因子を、ムーンセルは決して容認しない。

如何にマスターが無茶をしようと、覆せない道理もある。これでは筋道リミッターが通らない」

「原初の封印を解除し、権能級のスキルを発現させる。そんな改竄が可能なのは、ムーンセルの使用権を持つ者しか有り得ない。

我々に道が用意されていたのは、全て貴様の画策だろう。それがなければ私たちにはどうしようもなかった。

貴様からの賞賛など、貴様自身の自画自賛に等しい。戯言はそこま

でしておけよ」

「なに、そう卑下したものではない。俺とて似たような道を辿ってこの権能チカラを手に入れたのだ。

一方のみが力を有しているのでは公平とは言えん。同様の機会をおまえたちにも与えてこそ真の公平だろう」

「そしておまえたちは手に入れた。試練を乗り越え、見事俺と同じ域にたどり着いたのだ。

誇るがいい。その神話礼装チカラは誰かから恵んでもらったのではない。恥じ入ることなく、自らの手で勝ち取ったのだから」

元より甘粕にとって、力を抑えるというやり方は本意のものではない。

如何に相手に合わせるためとはいえ、言うなればそれは相手の力量を下と見ての行為である。

苦難を越え、勝利の果てに手に入れた力であれば、恥じるべき所は何もない。使用を躊躇う必要などどこにもないのだ。

見縊っている。侮っている。舐めている。自身の力を自ら制限するのは、要はそんな理由でしかない。

互いに持ち得る全てを尽くしての激突でこそ、本気の意志は顕れる。

ゆえに今この時こそが真の対等。同格の領域に至った彼等は、もはや裁きの対象とはなりえない。

「すでに言葉は尽くし、互いの主張をぶつけ合わせる段階は終わった」  
「譲れるものなどない。ならばあとは互いに持ち得る全てを懸けて、力の限りに潰し合うのみ。

小細工、手心一切無用の、正真正銘の真つ向勝負だ」

「ああ……俺はこれがやりたかったのだッ!!」

軍刀を抜き放ち、猛る鬨志を抑えもせず甘粕は決戦を了承する。  
言う通り、ここからが真の勝負だ。

対抗できる力は得た。しかし決して、少女の側が有利を得たわけではない。

都合二度の敗北。一度目は同じ地平にて完敗し、二度目は神の高み

より圧倒的に。

それらの敗北に偽りは無い。変わったものが力だけならば、三度も先の焼き直しとなるだろう。

違いは、その覚悟。

少女の意志には、もはや畏れ怯む脆さはない。

強度の差など百も承知。そんなものは恐怖になりはしない。

自らが弱者であると理解しても、抗う事はあらゆる生命に許された権利だ。

諦めない、と。勝敗すら度外視した領域で、岸波白野はその命の灯が燃え尽きる瞬間まで生き抜くと決意している。

寄り添う騎士の覚悟も、また等しい。

己はサーヴァント。少女のために在り、その敵を斬る剣である。

ならば最期までその通りであろう。後悔は微塵もない。彼女と共に戦えた事は、騎士にとって何よりの誇りだ。

勝算の有無など度外視し、ただ負けぬと、その決意で以て対峙していた。

「甘粕正彦。貴様を倒す」

剣製の世界が具現する。

大地に突き立つ無限の剣。贗作だけのこの世界こそ、アーチャーの力。

たとえ偽物ばかりの生涯であったとしても、磨かれた意志の強さには偽り無し。錬鉄の意志を刃に変え、アーチャーは神の如き男に挑む。

「いいぞ、それでこそ我が好敵手。そうこなければ俺も相手にする甲斐がない」

申し分ない闘志を受け止めて、甘粕もまた己の神威を発現させる。絶対正義を体現する裁きの神。その暴威には弱さなど一点も見られない。

「そうとも。こんなもので終われるはずがない。1つの祈りが全ての願いを喰らう聖杯戦争の幕引きを飾る戦い。共に死力の限りを尽くさねば、納得など出来るものか」



「俺はまだ何も、力を尽くしたつもりはないぞ」

両者に膨れ上がる闘争の意志。

仕切り直しはない。決着まで突き進むだろう。

聖杯戦争の勝者を決める、正真正銘最期の戦いが始まる。

「諦めないよ、不屈の意志を謳うのなら、その意志で以て俺を超える光を示せ。」

俺が全てを託すに足る存在だと信じさせてくれよ。おまえたちの光を俺に見せろおおおお!!!」

「行き過ぎたその狂念が、果てには世界すら呑み込んだか。甘粕正彦、やはり貴様の存在は許されない。」

見果てぬ理想を抱いてしか生きられないのであれば、その夢に溺れて溺死しろおおおお!!!」

## 決着

「……勘違いしているならば正しておくが、岸波白野カノシヅコの辿った道のりは決して安易なものではない」  
「ナビゲートも付いていない精神潜入サイコダイブ。それも英霊という高位の情報体に対しての潜行だ。」

そんな中に剥き出しの精神のまままで叩き落とされた。常人ならば一瞬で意味消滅してもおかしくない。

ましてその原初に近付くなど、浸食する異質情報は想像を絶する苦痛だったはずだ。それを越えていくことが安易な道であるわけがない」

「そう、誰にでも出来るようなことじゃない。そして誰かならば出来ることでもないものだ」

研究者然とした出立ちで、空虚を湛えた青年。

甘粕とは違う、熱のこもらない抑揚のない声で岸波白野を評価する。

「岸波白野カノシヅコだからこそ出来たことだ。だがそれは彼女が特殊だったわけではない。」

ここまでに辿ってきた闘争が、彼女にそこまでの強さを獲得させた。始まりでは確かに最弱であったはずだというのに」

「人は苦難に直面した時、平時では信じられないほどの力を発揮する。皮肉なものだ。人は幾度となく争いを悔い、自らの悪性を改めようとしてきたはずなのに、歴史から戦争が消え去ることはなかった。そして戦争の時期でこそ最も多くの成果を獲得した。」

我々ニンゲンは戦争を忌諱しながら、同時に必要ともしている。それが人という生物の在り方だ」

「——そう。それが貴方の結論ってわけね、トワイヌ・H・ピースマン」  
青年の声に答えたのは、共に戦場から切り離された遠坂凜だった。「戦争を憎んで、戦火の中に身を投じながら人命救助のために尽力した偉人。アムネジアシンドロームの治療法確立に最も貢献した学士。」

トワイスの名を聞いた時から当たりは付いていたけど。といって  
も、あの甘粕に賛同するくらいだから、通説どおりの人物じゃなかつ  
たみたいね。

—— 貴方は、白野と同じ過去の網 サイバーゴースト 霊？」

「その通りだ、遠坂凜。過去に存在したトワイス・H・ピースマンとい  
う人間をベースに、ムーンセルで再現されたNPC。それが自我を獲  
得した存在こそ、私の正体だ」

トワイス・H・ピースマンという人間の残滓である青年は語る。

病的なまでに戦争を憎み、その動悸を和らげるため戦地へと赴いて  
いたトワイス。

だがその根底にあるものは戦争の否定ではなく、幼い時分に刻みつ  
けられた生命の強さへの憧憬であったことを。

かつて戦災孤児であったトワイスは、戦場という修羅場の中で数多  
の奇跡を見た。

誰もが死に絶えるような土地の中で、幼い彼は生きる事そのものが  
得難いものだとして理解した。

やがて成長し、そんな時分の記憶を忘れた後でも、刻まれた戦争へ  
の理解だけは失われなかった。

最期の時、テロに巻き込まれ絶命するほんの数秒前に、トワイスは  
そのことを思い出した。

求めた命題の答えを得てトワイス・H・ピースマンは死亡し、後に  
再現された亡霊 トワイス はその解答のままに行動を開始した。

「ムーンセルで行われていた生存トライアルを現在の聖杯戦争のカタ  
チへと改竄し、やがて正彦が訪れるまで私はこの熾天の門で待ち続け  
た。

今の世界は間違えている。伴った欠落には、それを超える成果が必  
要だ。でなければ今日までの繁栄に意味がなくなる。

我々はそのように生きてきた。ならばその生き方のままに在り続  
ける。それだけが犠牲に対する責任だ」

「……貴方、やっぱり甘粕とは違うわ」

トワイスの下した結論に対して、凜は短くそう返す。

口調は冷ややかに、その瞳にも激した感情は何も無かった。

「主張そのものは確かに同じ。戦争という必要悪で、今の停滞した世界を変える。大筋の所では甘粕と同質だわ。」

けれど、トワイヌ・ピースマン。貴方は戦争が人類のために必要だつて言うけれど、その人類つて誰？」

「私たち解放戦線は、世界を変えるために戦っていた。理由は人それぞれだつたけど、停滞した世界を間違いだつて思っていたのは同じだつた。」

だけど、戦争のために戦っていた奴なんていなかった。みんなそれぞれで平穩のために戦っていたわ。

その辺りの気持ちを、甘粕はちゃんと汲み取っていたわよ」

「貴方は人類つていう顔のない概念のために戦争を求めている。その点が甘粕とは決定的に異なっている。」

どんなに強くなつていっても甘粕は人間だつた。でも貴方は、ヒト以外の何かになっている。生者には有害でしかない、異質な何かに「……意外だな。正彦と袂を分つた君が、彼を擁護するような発言をするとは」

「別に甘粕の全部を否定しているわけじゃないわよ。その理屈が正しい部分もあるつて認めてる。」

今の世界の停滞を変えるには、単に西欧財閥を倒すだけじゃ足りない。そんなのは分かつてるわ」

「ならばどうして、君は月に昇つた？」

遠坂凜は甘粕正彦の同胞だつた。

月の聖杯戦争の勝者は1人だけ。生還できるのはたった1人。

その信念を認めているというのであれば、必然的に一方が切り捨てられる戦いに身を投じることは道理に合わない。

「君が正彦の信念を理解していたのであれば、戦うべき戦場はここじゃない。」

正彦が作り出す世界への試練。それに立ち向かい、正しい強さを得ていく道こそ選択すべきだつた。

君の能力であれば、災禍の中でも生き延びることが出来たはずだ。

それとも、脱落する人間を見過ごせなかったか？」

「それこそまさかでしょ。私ってホラ、結構身勝手な性格してるから。その人間が弱いのは、その人自身の責任でしょう。境遇がどうかそういうの、結局全部言い訳だし。」

環境に甘ったれてる人間なんて、正直私だって嫌いだしね。まあ言っちゃうと、他人の痛みに鈍いのよ、私って」

それは、何てことのない軽口のように。

災禍に焼かれる人々のためという正論を、遠坂凜はあっけなく否定した。

「地上にいた頃ね、甘粕はみんなにとって英雄だったわ。」

彼がやることはいっただって正しくて、情熱に溢れてた。そんな彼の選択にみんなが付いていった。

追い詰められる解放戦線<sup>レジスタンス</sup>にとって、甘粕のカリスマは絶対だった」「当然よね。甘粕以上の奴なんていなかったし、代役なんて誰にも出来なかった。」

先を見通した行動力があって、他人を立ち上がらせる統率力があって、どんな逆境にも立ち向かう勇気があった。

甘粕<sup>カレ</sup>と一緒にならきつと勝てる。西欧財閥にだって対抗できる。そんなことを本気で信じられた」

「そうやってみんなが甘粕に従うようになって……ふと、思ったのよね。」

——ああ、この人たちは、甘粕<sup>カレ</sup>に支配されたがっているんだなって」甘粕のやることは正道で、その果てには勝利があると信じられたなら。

全てを甘粕<sup>カレ</sup>に委ねてしまえばいい。何も考えず、ただその後についていけばいいのだ。

そちらの方が確実で、自らで考えるよりも遥かに楽な道のりだから。

「それは必然の感情だ。過去には王政が世界の主流であったように、絶対的な王器に人は縋りたがる。」

……だからこそ、1人の英雄では世界を変えることは出来ない。そ

の事実からこそ、正彦は絶望していた」

「そこまでは知らない。けどそういう部分があったのは間違いないって思ってる。」

世界が西欧財閥の管理に意思を委ねたように、今度は甘粕の強さにみんなが依存していた。

少なくとも甘粕の目から見れば、世界は何も変わっていないかった」

「だからこそ、正彦は樂園ぱらいぞを求めている」

世界の停滞を破る。そのために戦うことに、甘粕に否はなかっただろう。

だが苦難と障害を乗り越えた先でも、彼が欲する世界が得られないのだとしたら。

それは何という皮肉だろう。甘粕が築く世界に、彼の求める勇氣は現れない。

誰かが悪いのではない。

ただ、甘粕正彦は余りにも強すぎた。

周囲の人々が、彼に全てを委ねようと思ってしまうほどに。

「……ああ、だから思ったのよね。甘粕カブレを止められるのは私しかないなって」

己が戦いを決意したのは、それだけだと。

死出の片道切符を切った理由を、凧は簡潔にそう言い表した。

「だいたいさ、誰もかれも甘粕のことを大物扱いしすぎなのよ。」

なんでも出来るし頼りにもなるから、みんな勘違いしてるけど。

本質なんて、我が儘な子供そのままでしょ、甘粕カブレって」

「だから、さ。1人くらい、甘粕カブレに付いていける奴がいないと。」

彼の強さに魅せられるだけじゃなくて、ちゃんと甘粕カブレって人間を理解してあげる人がいてもいい。

でないと、誰よりも努力している甘粕カブレが、いつまで経っても報われないじゃない」

誰よりも努力を重ね、情熱を懸けて取り組んできたのは甘粕だ。

遠坂凧はきちんとした仕組みが好きだ。努力の分には相応の成果があるべきだと思っている。

無論そうといかないのが現実だと理解はしてる。それでも己の周りではそうあってほしいと考えている。

如何なる現実を前にしても諦めなかった、あの雄々しい背中には、報われるものがあるべきだ。

「たとえその手段が、正彦を殺すものだとしても?」

「それしか方法がないんならね」

「……正彦が君を評価する理由が分かった。君という人間には得難い価値がある」

情性の穏当になびくのではなく、非情の覚悟で剣を取れる者。

ただ許し認めてやるだけが全てではない。時には否定し矛先を向けることが正道になると知っている。

たとえそれが自らの親しい者であっても、自身を信じて戦う意志が持てる強さ。

その強さを遠坂凜は持っている——甘粕正彦と同じように。

「でも、そっか。覚えていないけど、やっぱり負けちゃったんだ」

その敗北の記憶を凜は持っていない。

しかし事實は厳然と存在する。甘粕が聖杯戦争の勝者となったということは、そういうことだ。

「こうして納得できちゃうのがなんか悔しいけど。」

ならやつぱり、最後まで勝ち上がったのが白野で良かった」

自分では甘粕を止められない。

だから希望を託した者が岸波白野で良かったと。

彼女を見守ってきた仲間として、凜はこの結果を是として祝福した。

「その結論は安易だ。正彦の願いを拒んだ彼女には、世界を変えることは出来ない。」

誤った未来を正すために、正彦の災禍は必要だ。彼の謳う楽園（ほろいぞ）こそ人類の正しさがある」

遠坂凜の肯定に、トワイヌは否と唱える。

甘粕正彦の信念に賛同した同士として、世界にもたらす試練と闘争こそ是であると断言する。

後はもう、両者共に語らない。

どれだけ議論を尽くしたところで彼等はすでに傍観者。結果を左右することにはならない。

ゆえに、後はただ見守るのみ。

映し出される最後の決闘。願いの是非は彼等へと委ねられた。

その結論を受け入れる。覚悟を決めて、二人は繰り広げられる闘いに意識を向けた。

振り下ろされる黒色の軍刀は、何者をも粉碎する剛の一撃として繰り出される。

それを交差した二振りの剣が受け止める。並ならぬ神秘を備えたその剣は、剣製の丘より抜き放たれた聖剣、魔剣。

共に様子見はなく、賢しい戦術も持たない、正面からのぶつかり合い。ただ力の限りの剣戟を繰り返し、甘粕とアーチャーは激突していた。

その展開は一方的なものではない。

有利不利を問えば意見も分かれるだろうが、両者は同じ地平で戦っている。

獲得した神話礼装。根源に端を発する原初の力は、同位相の聖イマデウス四文字では裁けない。

権能による絶対格差は取り払われ、その決闘は再び対等のものとして展開される。

——いや、違う。

権能の行使、宝具の質、武技の技量。

ここに至れば全てが瑣末。そんな余分に囚われていては勝利はない。

手にする剣には信念を、繰り出す一撃には覚悟を乗せて。



背に負った譲れないもの。それを押し通すために、彼等は魂を燃やして力を尽くすのだ。

「――段々と、おまえという男が見えてきたぞ、アーチャー」

その激闘は、どんな語りよりも濃密な対話の時間<sup>とき</sup>。

振るわれる剣に乗った覚悟の質は、己自身の有り様を如実に写している。

「如何なる相手にも躊躇うことなく剣を振るう鉄心。

情を持たないのではない。しかし情に惑わされることもない。

無軌道とも見える生前の所業。それらを一本に繋ぐ芯の通った信念。

その意味、行動が目指す先は――」

「――人の救済……正義の味方、か」

そうして甘粕は、相対する敵手の根幹を看破していた。

「なるほど、素晴らしい。その理想は正しいものだ。

自らの在り方をそれと定め、英雄にまで至ったその決意。実に見事」

「だがやり方はいただけんな。それではあとに続く意志が生まれにくい。

敗走はなくとも、理解されないでは意味がなからう。誰の心にも光は灯らんさ」

それは大の大人が語るには青臭すぎる幻想。純真無垢な少年らが憧れる英雄像<sup>ヒーロー</sup>。

だがそうでなければいけない。そんな理想<sup>せいぎ</sup>を謳うのなら、そう示せなければ嘘だと、王道を邁進する男は告げる。

「正義とは定義の定まらない概念だ。それを志す者は常にその矛盾に苛まれる。

助けられた者がいる。救われん者がいる。では助けた者は正しく、それ以外は悪なのか。否だ、人の価値とはそう容易く語れるものではない。

助けられた者が悪を為す。あの者が救われていれば後の悲劇はなかった。その現実、決して理想の通りとはいかぬ偽善を持ち、真実の

正義たり得ない」

「だがそれでよいのだよ。矛盾に苦悩しながら、それでも人を救いたいと願う行動する。その潔さにこそ人は憧憬を覚える。

理屈に固まり魂の熱を凍てつかせた者に光はない。正義が確かでなければ前にも進めんなど情弱の表れ。そんな様に焦がれる理想など見いだせない」

「返す言葉もない。正義の味方を目指したオレは、そのやり方を間違えていた」

指摘された自己の歪みは、すでにアーチャーにとって既知のもの。

動揺は表れず、自罰の意識だけを胸に、その手の剣を振るい続ける。

「まあそう自分を責めるな。手段に問題があろうとも、在り方を貫いた意志は素晴らしい」

「信念に沿った生き方とはそういうものだ。おまえに限らず、英雄と呼ばれる者には皆そうした傾向がある。

懸ける思いが強いからこそ、行動はそこに縛られる。物事は柔軟に、とはなかなかいかん。

だからこそ強い。そんな有り様だから確固たる芯と密度が出来る。常人にはその厳しさは耐えられん。

それと引き換えにした不自由さだ。恥じることはない、おまえはその生涯をやり遂げたのだから」

「……ああ、分かっていたことだが、まるで変わらん性質すら度外視する、甘粕正彦の絶対値主義。

理解しているように見えて、その実にも見てはいない。賛美はしても糾すことはしないのだ。

どれだけ歪な信念であっても、突き進もうとする意志こそが甘粕にとっての人の価値だ。その輝きこそ彼は愛している。

それは確かに公平だろう。善悪に惑わされずに人々を俯瞰できる不変の価値観。

超越者にはふさわしい在り方。その性質は極めて正しく絶対正義の有り様を示している。

「同時にこうとも言える。あの災害が無ければ、英雄への目覚めはな

かったと」

「――！ 貴様……ッ！」

甘粕の言葉の裏にある真意を察して、アーチャーは激昂した。

「全人類に、英雄の如く生きろというのか!!!」

「そうだ。それこそが樂園だ」

当然だと言わんばかりの簡潔さで、甘粕は己が狂気を肯定した。

「人の幸福を願ひ、私心を捨てて他者に尽くす。それは確かに正しい。素晴らしい理想だろう。」

だがしかし、しかしだ英雄。他者を守るといふ行為にも、権利と矜持はあるのだぞ」

「妻を守る権利は夫にこそあるべきだ。子を守る権利は親にこそあるべきだ。」

愛する者を余所の誰とも知らぬ輩に守られて、そこに屈辱を覚えな  
いなど男ではないし人でもない。

この手でしかと守護していると自負するからこそ、互いの絆を理解  
し深め合うことが出来る」

「愛する者を守護する機会が失われた安寧の世。ならばその機会を俺  
が与えよう。」

力が足らぬというなら良し、それもまた提供しよう。その類ならば  
月にいくらでもある」

苦難に立ち向かい、勇気を奮う人々の姿。それが実現できる世界が  
甘粕正彦の理想。

安寧を貪るばかりの惰眠の生など認めない。そんなものがまかり  
通るのならば平穩すら害悪と言いつ切っている。

妻を子を、愛する者を雄々しく守れる災禍きがいを与える。そんな世界こ  
そ樂園だと信じて疑わない。

そして力とは、そんな意志の下にこそ降りるべきだ。

たまさか天運に恵まれただけの腑抜けに与えたところで、自己満足  
に終始するのが関の山。

人類に真の平等があるとすれば、それは意志の有無。如何なる境遇  
であろうと、立ち上がろうとする意志は誰であれ許される。

不遇の弱者には再起の力を、生来の強者には更なる試練を。その過程で人々の強さは練磨され、世界は素晴らしい輝きで満たされる。

——それがどれだけ厳しい難行で、幾億の脱落者が出ることも構わずに。

「共に英雄譚を書き綴ろう。おまえたちの愛と勇気でこの世界を満たしてくれ。

一部の誰かに宿命を押し付けるのではない。全員が自らの意志で宿命を背負うのだ。

愛を守れ。誇りを通せ。何一つ遠慮することはない、内に秘めたる熱き気概を示せ。

災禍の中で自らの光を見出だすがいい——おまえがアーチャーそうであったようになあ!!!」

「ふっぎけるなああああ!!!」  
——アーチャーは、あの地獄さいがいを覚えている。

苦痛に喘ぐ怨嗟があった。助けを求めている声があった。それらを全て黙殺して、ただ生きたいと歩いていた。

見捨てたことへの罪深さ。仕方なかったという道理に意味はない。その罪業は幼い心に消えぬ痕として刻まれた。

その痕は少年であった己の内側をかき消して、完全なる空の器にした。刷り込まれた理想に狂気の域で邁進するほどに。

甘粕の言葉は間違いではない。あの地獄を体験しなければ、自分が英霊へと至ることはなかった。

——岸波白野は、あの地獄さいがいを覚えている。

人も、物も、何もかもが崩れ落ちていく。脳裏に刻み込まれた最期の光景。

大多数が辿ることになっただろう結末。奇跡など訪れずに自身の命運はそこで尽きた。

どんな意志があったのかは知らない。分かるのはそれがテロによる人為的な災害であったこと、その結果として多くの命が失われたこと。

英傑賛美の横で犠牲となっているのは、いつだって大衆という括り

の中の小さな者たち。そんなか細い命など神の眼にはとまらない。  
ああ、ふざけるな許せない。

主従の思いは共通している。世界の在り方の是非など知るものか。  
ただ認めないのだ。目の前で人々が死んでいく惨劇を。  
ただ許せないのだ。己の理屈で犠牲を強いる理不尽を。

アーチャーも、岸波白野も、あの地獄を呼び出す者を許さない。  
この感情、とても理屈では語れない。

「オレたちは貴様を絶対に認めない!!!」

「ならばよし。そんなおまえたちだからこそ素晴らしい」

そんな彼等の反抗を、甘粕は心より歓迎している。

自身が魔王となつて災禍をもたらす。勇気を持って自らに挑む姿  
を見たいがために。

反逆の意志は甘粕にとって望むところだ。認めないと叫ぶ彼等の  
姿も火に注がれる油に等しい。

「その気概を力に変えて、俺という試練を見事乗り越えて見せろ。

さもなければ認めんよ。真実俺を超える意志でなければ、断じて勝利  
を譲りはしない」

「そら、まずはこれはどうだ?」

奮起に対する返礼にと、甘粕は新たな兵器を創形する。

だが挨拶代わりに放たれたその兵器は、そんな気軽さを吹き飛ばす  
ほど凶悪だった。

「ツアーリ・ボンバアアアアア!!!」

ツアーリボンバ  
爆弾皇帝。先のリトルボーイに次ぐ第二の核兵器。

だがその脅威度は先を遙かに上回る。衝撃波が地球を3周したと  
いうその破壊力は人類史上で最大最強だ。

先の核兵器の数千倍以上の総威力を防ぐ手立てはない。起爆させ  
れば敗北は必至である。

だがアーチャーは臆していない。

先までの戦いから甘粕の兵器創形は理解している。

いずれコレがくるだろうとは予想していた。ゆえに対策はもう考  
えてある。

甘粕が用いる兵器群は、元となった宝具の拡大解釈によるものだ。如何にそれら兵器の時間の針を進ませようと、あくまで宝具の型に嵌っている。

神秘は、より強い神秘によって打ち消される。滅びの火にはそれを制する概念で対抗する。

「――同調、開始」

トレリス・オン  
ト  
検索、該当あり。

必須事項、火を制するもの、炎を封じるもの。

固有結界内より適合する聖剣、魔剣を抽出。運用を開始。

世界より抜き出された無数の劍群。

それらは爆弾皇帝を四方八方より取り囲み、封じ込める結界を成す。

瞬間、鉄塊の中に秘められた途方もない核の熱量が解放された。

「く、お、おとおおおおおお!!!」

世界を照らし出す閃光と、瞬間で膨れ上がるうとする炎。

何もかも灰にする絶望的な破滅の前に、アーチャーは全霊を懸けて対抗した。

複製された魔剣らに魔力を流し、その概念を發揮させる。

力で抑えようとしてはならない。単純出力では相手にもならないのだから。

そうではなく、支配する。相手の法則をこちらの概念で上書きし書き換えてしまえばいい。

無論、緩みは許されない。僅かでも威力を漏らすだけで焼き尽くされて有り余る火力なのだ。

魔剣の概念が破滅の法則を塗りつぶす。掌握された熱量は物理力を喪失し一部の衝撃波を残して四散していく。

その衝撃波だけでもかなりの威力だったが、耐えられないほどではない。マスターを庇いながら踏みとどまる。

結果、人類最強の爆弾は威力の片鱗のみに留まり、その悉くを無害化、残りの大部分も不発に終わった。

刹那、晴れた閃光の中より甘粕正彦が、軍刀を振り上げて飛び出し

てきた。

それは戦術というには、余りにも無茶苦茶な突貫だった。

このタイミング、そのまま爆破されていれば明らかに直撃を受けていた。

仮に核の威力を耐え凌ぐ防御性があつたとしても、爆心地に飛び込むなど無謀が過ぎる。

どう見ようがその行動は自殺同然。道理で問えば有り得ない選択肢だ。

しかし同時に、そうした無謀さを度外視すれば、それは最上の機を得た奇襲でもあつた。

甘粕がそんな行動に打って出た理由は、アーチャー等にはすでに分かっている。

すでに三度目となる戦い。見せつけられてきた甘粕の気質を考えれば、答えは明白だろう。

つまり、信頼だ。必ずや防いでくれると、敵であるアーチャーを当然のように信じていた。

己と同じ地平に至った素晴らしき好敵手。他の誰よりも甘粕は彼等の強さを信じている。

核爆弾こんなもで敗れるなど有り得ない。そのように敵の強さを信頼して前へと踏み出したのだ。

常人の域を超越したその感性。それこそが甘粕正彦だと彼等ともう知っている。

そう、分かっていたことだ。だから覚悟も出来ている。

「――投影、装填」

意識は埋没し、感覚はすべて内側へと向けられる。

敵は間近。現実時間の猶予はごく僅か。

許されたその内に、甘粕を凌駕し得る投影を実現させなければならぬ。

脳裏の冷静な声は、無謀であると告げる。

万全を期すならば、六つ以上の工程を必要とする。

それを、この刹那に等しい中、寸分の劣化もなく再現しようとして

いる。

無茶がすぎる。博打にしても分が悪すぎだ。選択肢として論外で防御に専心すべきと理屈では判断できる。

だがそんな声を、もう一方の猛り吼える声は否だと断言した。

万全は望めない、それがなんだという。

許されたのは刹那の時間、それだけあれば上等だ。

防御に専心、そんな守勢の思考こそ甘粕正彦には粉碎される。

求められているのは、定められた限界を突破していく覚悟。

壁を越えろ。時の運行などに縛られるな。不可能事の1つや2つ、

意志一つで突破できずして何が英雄か。

イメージするべきは最強の幻想。何者をも粉碎する勇者の九つ。

この一瞬、アーチャーの裡より一切の余分が排除される。迫る敵の存在も例外ではない。

それが正道だ。アーチャーという英霊の本質とは、外敵との戦いではない。

その戦いは、常に自分自身との戦い。想定される最強を凌駕していく幻想への求道である。

獅子奮迅の勇猛さで直進する甘粕の刃。

一点の迷いも恐れもない剣は、それだけで必殺たり得る鋭さを秘める。

ゆえに迎撃すべきアーチャーにも余分はものは許されない。

疑惑も躊躇も振り切って、己が為せる最強の奥義を再現する。

手が握るのは未だ現出せぬ架空の柄。

幻想の中で浮かぶのは桁外れの巨重の斧剣。

アーチャー自身の身体能力で再現は不可。ゆえにその怪力までも複製する。

積み上げた経験を憑依させ、技法を理解し模倣していく。

狙い定めるは八点の急所。踏み込まれる一足に一足を踏み込んで、

「全工程投影完了——是、射殺す百頭」

ナインライフズブレイドワークス

カウンター

ここに最上の機を得た奇襲を、必殺の九撃が迎え撃った。



ギリシヤ最大の大英雄が誇る攻性宝具。

それは武具としての名ではない。数多の武芸の経験の果て、たどり着いた奥義の境地こそが宝具。

成し遂げた偉業の一つ、9頭を持つ水蛇退治ヒュドラの際、その不死性ごと殲滅するために用いられたとも。

投影された斧剣は対人仕様であるためだ。本来ならばどんな武具であろうと放つことが可能な万能の攻撃性を持っている。

人体が持つ八の急所にほぼ同時に放たれる九連撃は、如何なる英雄であろうとも逃れられない必殺である。

「ぐッ、ぬウ、おおおおおおお!!!」

が、それでも敵は甘粕正彦。

たとえ一撃でも十分な必殺性を誇る九連撃。

その洗礼を一身で受けながら、甘粕はそれを耐え、受け、流し、弾いて、防いでいく。

無論、無事で済むはずはない。何とか致命となる直撃だけは避けながら、一撃毎にその身は削られていく。

それでも尚、甘粕は怯まない。その意志は勇猛果敢の言葉一色で染まり、燃え上がる気概はこの窮地を踏破してやろうと猛っていた。

そして、必殺の九連撃は遂に相手を仕留めることなく終わる。

血を流し肉を削られながらも、甘粕正彦は揺らぐことなく耐え切った。

「ぐ——があ……ッー」

同時に、アーチャーの口からは血が吐き出される。

時間の流れさえ無視した魔術運用、その代償はアーチャーの回路を容赦なく焼き付けた。

結果を見れば、両者ともに痛み分け。

互いに全霊を尽くすも決着はつかず、勝敗は未だ分からない。

「大したものだな。まさか大英雄の奥義をこの身で受けることになるとは。1人と戦っている気がまるでせんよ。」

さすがは異端を極めた錬鉄の英雄。戦法も一筋縄ではいかんな」

「よく言う。それを完璧に受けながら五体満足で生存している貴様こ

そ異常だよ。

その人間を逸脱した、常識知らずの意志力だけは本当に大したものだ」

「それはお褒めに預かり恐懼感激の極み。ついでに我が樂園ぼらいぞについても理解してくれんかな？」

「聞けん相談だ。貴様の狂った理想は、ここで私たちが終わらせる」  
「そうか。それは残念だ」

一切の譲歩を拒むアーチャーに対し、甘粕はある意味対照的だ。

あれだけの激突を繰り広げた直後だというのに、まるで友誼でも結ぼうかというような親愛に満ちている。

太陽の灼熱は如何なる時にも燃え盛る。下した災禍を突破され、甘粕の人類愛は猛り狂わんばかりの熱量を帯びていた。

そして当然、それで甘粕の戦意が衰えることも有り得ない。

「あいにくだが、貴様の樂園ぼらいぞの是非など私たちにはどうでもいいことだ。世界は如何にと、そんなものは柄ではない。

貴様のこともただ斬り伏せるだけの存在。マスターの前に立ちただかる障害として排除するのみだ」

「なに、それで構わんよ。理屈でどうこうと語るのではなく、そうして諦めないと叫ぶ姿そのものに価値がある。

岸波白野の光とはそういうものだ。ただそこに在る、それ自体が得難い奇跡。それこそおまえの持つ輝きだろう」

憧憬、標、進むべき正道への希求を示す仁の益荒男。人間賛歌の指標としてふさわしい傑物。

そんな人物は確かに素晴らしいだろう。己の美感において1つの理想形であることも相違ない。

だが、だからといって岸波白野の輝きがそれに劣っているわけでは断じてない。

才覚に恵まれていない。王や英雄といったものの資質など持っていない。

大衆らと何も変わらない只人でありながら、諦めないと足掻きその意志で立ち上がっている。

最初から強者の宿星の下に生まれた者とは違う。弱者に分類される身でありながらそう在れることが、どれほど稀な輝きであることか。

断言できる。岸波白野も己にとっての理想形の1つだと。

その小さな命の限りに前へと進む姿に、心底からの尊敬を抱いている。

「そして、そんなおまえの輝きを引き出すために、必要となるのもやはり試練だ。

脅威を前に奮起する不屈の意志。それが実現させてきた数多の奇跡は、聖杯戦争の経過を見れば明らかだろう」

しかし同時に、岸波白野の強さとは平穩の中では埋もれてしまうものでもある。

もしも岸波白野の道のりが、障害のない安穩としたものであったなら。

岸波白野は今の強さに至ることはなかっただろう。大衆の一部として目を見ることもなかったはずだ。

その真価は、脅威によって追い詰められて始めて発揮される。

それを理由に軟弱だ、情けないと告げるのは、さすがに極論が過ぎるだろう。

岸波白野は間違っていない。その魂は間違いなく稀なる光を持っている

だからこそ、甘粕正彦はそれを試したいと切に望むのだ。

「これより先は、神話規模の激突となる」

その言葉が何を意味しているのか、この場に立つ者ならば明白だ。

宝具の開帳。その英雄が持つ象徴シンボル同士の打ち合い。

それこそがサーヴァント戦の真骨頂。武芸を競った戦いなど、英霊にとつては小手調べに過ぎない。

ましてや神威を呑んだ甘粕と、神話礼装を纏ったアーチャーとでの激突は、神や悪魔が跋扈し闘争を繰り広げた神代の規模に等しい。

「二割三割の力の小出しではない。十割を費やす、文字通り全身全霊を懸けた力の激突だ。」

一方が少しでも劣れば、その瞬間が決着だ。俺か、おまえたちか、どちらの意志が勝るかの結論が下される。

——では、始めよう。覚悟はいいかな？」

「愚問だ」

即答される強い拒絶。

その意志を歓迎する笑みを見せ、甘粕の姿がかき消える。空間転移。

旧時代の魔術においては、魔法の域にあるとされた大儀礼。

しかしそれも、聖杯を掌握する甘粕にとってはなんら難しいことではないのだろう。

ゆえにアーチャー等に驚きはない。その後にくるだろう甘粕の攻撃にのみ備えている。

そして、転移を終えて甘粕は上を見上げる中空に姿を現す。

その背に負うのは月の聖杯。S・E・R・A・P・Hに君臨する支配者として、その構図はどこまでも適合していた。

「英雄ならば魔性退治と洒落込めよ。古今、それがおまえたちの武勇伝というものだろう」

その手が刻む無数の印。増大していく神威の波動。

前兆の内でも感じられるのは極大の邪性。間違いなく言えるのは、これより放たれるのは邪神に類するものだということ。

その中でも恐らくは最高格。人々の善性を侵害し、悉く蹂躪する魔性の災禍が現出する。

「海原に住まう者——血塗れの三日月!!!」

——瞬間、あらゆる生命の尊厳は否定された。

立ち上がる気力が萎えていく。

生存への意義を見失う。

何かされたわけではなく、ただ思考がひたすらに後ろへと向いてい



氣迫が畏怖を凌駕する。恐怖を超えて正面から対峙する。敗けはしないと、自負を胸に立っていた。

……それに理解してしまうのだ、これは前哨だと。

後ろに控えるものたちの第一陣。先陣を先駆けた尖兵に過ぎない。竜の背後に、無数に沸き出る魔性が見える。

1体の例外なく、魔に属した眷属たち。邪神の下僕が群を為し、主の到来を迎えるべく地上に惨劇の宴を開くのだ。

これこそが魔の軍勢<sup>フォーモリア</sup>。ケルト神話に伝わる巨人の一族。神々の敵対者、その神威召喚に他ならない。

怖気が走る。これこそが甘粕の切り札だ。

如何に聖杯と接続していようが、本物の神格を召喚することが容易なはずがない。

それをこうまで同調し、完全に使役している。甘粕正彦の持つ人の心を逸脱した絶対正義<sup>せいぎ</sup>。破壊神、魔王の類とは驚くほどに相性がいい。

魔軍の後続が控えている。

尖兵1体にあまり手間はかけられない。

甘粕の神威召喚に対抗していくため、アーチャー等も覚悟決めた。

——この黒竜は、ただの一撃を以て打倒を果たす、と。

常道で考えたなら無謀の一言。

眼前に在るのは幻想の最強種。その中でも上位にある存在だ。

本来ならば赤い騎士の手には余る相手。死力を尽くして尚届くかどうか。

だというのに許されるのは一撃のみ。そんな蹴散らす雑兵の如く扱える敵では断じてない。

それでも、成し遂げなければ勝利には届かない。

たとえそれが前人未到の難行であろうとも、進むべき道があれば踏破<sup>トリス・オン</sup>することに迷いはない。

「同調、開始」——「投影、装填」

投影を開始。選択、魔剣グラム。

必要なのは竜殺しの概念。該当する剣製の中での最強を取得。

訂正。武器の再現のみでは不足。蓄積経験の読み込みを起動。  
英雄シングルド。悪竜殺し。肉体強度、修得技能の再現。  
彼の英雄が持つ力量の全て。それら余すことなくこの身に投影す  
る。

「―――トレイス・オフ  
投影、完了」

全工程を終了。その手には竜殺しの魔剣。

駆け出す。魔剣を振り上げるその姿は、常時のアーチャーとは異なる。  
る。

ただ、一撃を。この一振りを繰り出す最中だけ、ここにいるのは悪  
竜退治の大英雄。

一撃決殺を専心し、攻撃に全霊を傾けてアーチャーは突貫する。

しかし無論、黒竜も打倒されるだけの雑多な魔性ではない。

巨大な顎が開かれる。内より膨れ上がるのは地獄の業火の如き熱  
量。

竜の息吹。伝承にも名を轟かす竜種の暴威が放たれる。

剣は届かない。息吹の蹂躪の方が早い。

攻撃に専心した突貫は、引き換えに防御を犠牲にしている。

結論は明白。一撃での打倒などやはり無謀だった。1人では到底  
届かない。

だからこそアーチャーに不安はない。

1人では不可能だった。だが今の彼は1人ではない。

蹂躪の寸前、竜の息吹が突如として霧散する。

破滅の具現たる暴威の嵐が、その力の一切を喪失した。

身体を吹き抜ける柔風と化した息吹の中を、アーチャーは躊躇うこ  
となく疾走する。

”アトラスの悪魔”

現代に存続する錬金術師たちの協会、アトラス院。

未知なる技術体系を駆使する彼等の秘奥、その一端を宿した礼装。

その術式はあらゆる体系の攻撃を無力化する。

制約として無力化できる構造は1パターンに限定されるが、その効  
果は宝具級の攻撃でさえ無力化できるほどに強力だ。

岸波白野が生き抜いてきた幾多の激戦、その果てに獲得した最高位の礼装である。

マスターの援護により、その行くてを阻むものは消え去った。

踏み込む。到達した黒竜のもと、アーチャーは魔剣の間合いにその首を捉えた。

その一閃は英雄シグルドのもの。竜殺しの偉業を再現した一撃は、一刀の下に黒竜の首を両断した。

成し遂げた竜の打倒。だがこれで終わりではない。

忘れていない、これは前哨戦。召喚された邪神の軍勢は数多と控えている。

しかしそれさえも本物の神威の前では雑兵の群れに過ぎない。真の脅威はその裏に潜むものにある。

天空の向こうより、極大の魔性が招来する。

地上の全てを覆い尽くさんばかりの魔の波動は、さながら暗黒の太陽が血染めの月か。

招来に伴いその全貌が明らかとなり、それが巨大な眼であることが分かった。

——あれこそバロール。魔の眷属の首魁。死を司る魔神。

代名詞である魔眼はモノの死を具現させる。真なる魔神の権能は、ただ死を視覚させるだけの優しいものではない。

その魔眼に見られれば、死ぬのだ。神々であろうと例外でなく、絶対的な権能は死を司る概念の頂点である。

瘴気の渦巻く嵐が吹き荒れ、大地は炎獄の海に包まれる。

進軍を開始する眷属らの奥では、閉じられた瞼が下僕の手により開かれようとしている。

あれを開かせれば全てが終わる。抵抗の余地はなく、絶命の結果だけ下される。

「I am the bone of my sword」

故に勝てるものを幻想する。

アーチャー自身ではあの魔神を打倒できない。

ならば打倒できる存在を投影する。元より己に出来ることなど、そ



れだけしかないのだから。

創造の理念を鑑定し、

基本となる骨子を想定し、

構成された材質を複製し、

製作に及ぶ技術を模倣し、

成長に至る経験に共感し、

蓄積された年月を再現して、

その存在、余すことなく凌駕し尽くす。

「ぐう、が、ああああああああ!!!」

限界を超えた投影の反動を、絶叫で無理やり抑え込む。

ただの投影では到底届かない。劣化品であれば魔神を穿つことは

敵わない。

その剣製は限りなく真に、魔神にかつて自らを貫いたものだど認識

させなければ打倒は不可能だ。

群がる魔性らを剣群で迎撃しながら、アーチャーの意識は深淵へ近

づいていく。

投影するのは光神の槍。寸分の狂いなく、その神威に至るまで再現

する。

常時であれば不可能だろう。神の手にあるその武具は、アーチャー

の剣製では到底再現し切れない。

だが神話礼装を獲得した今であれば、原初の神代まで歴史を回帰で

きる。無論、容易い行程ではないが、可能ということは確かなのだ。

ならば至れ。遙かな神威にまで到達しろ。限界を超越しなければ、

魔神の権能には抗えない。

「――轟く五星ツツツ!!!」

放たれた一条の流星。蔓延る魔性の群を突き抜けて、光は半ばまで

開かれていた魔眼を貫いた。

死の魔眼が裏返る。あらゆる存在を死に到らしめる眼光は、自らの

眷属たちへと向けられた。

それは正しく神話の再現。光神ルーの槍に貫かれたバロールは、逆

に自分の軍勢を皆殺しにしてしまった。

死に絶えていく魔の軍勢。フォーモリア 神威召喚された邪性の災禍はここに破られたのだ。

そして自らの切り札を破られた甘粕は、その反動で完全に動きを止めていた。

ここが好機。これを逃せば勝機はない。

神話礼装の使用、許容を超えた投影の連続行使と、アーチャーの負担は限界に近い。

次がくれば、今度こそ凌げまい。ここで甘粕を討てなければ敗北だと彼等は理解していた。

投影した剣を弓につがえる。形状変化を加えられた剣は矢の形に。射られた剣は甘粕へ。神威召喚の代償を支払う甘粕に防ぐ手立てはない。

そんな常識の判断を、甘粕正彦という非常識は当たり前のように破ってみせた。

迫った矢を軍刀の一閃が弾く。  
弾かれた矢はあさつての方に、甘粕という標的を完全に見失う。

これでもまだ届かない。好機を得た一撃ですら、甘粕を捉えることは出来なかった。

——予想の通りに。

「っ?! 狙いは聖杯か!」

弾かれた矢は失速することなく、勢いのままに直進していく。

その矛先が向かう先。そこにあるのは変わらぬに在り続ける月の聖杯。ムーンセル

万象を観測し続ける月の眼に、投影された剣が突き立てられた。防がれると考えていた。

甘粕という男の強さは常識では量れない。隙の1つ程度では容易く覆される。

先に甘粕がそうしたように、今度は彼等が信頼したのだ。甘粕ならばこの程度は防いでくる、と。

だから決め手はまだ切らない。その前に甘粕の余力を限界まで削ぎ落とす。

放たれた剣の名は、『破戒すべき全ての符』。

契約破棄の魔術剣。その能力はあらゆる魔術効果の初期化。

無論、その効力はムーンセルの機能に影響をもたらすほどではない。

狙うのはただ1本の回線ライン。甘粕とを結んでいる接続回線アクセスコードだ。

「ぬぐ、うおお……っ！」

最大の恩恵の源、聖杯の力を奪い去る。

その力が絶大であればこそ、取り除かれた反動は大きく出る。

強固な大地に根差したものが、突如として大地を失うのに等しい。

その反動は確実に甘粕の自由を奪い取った。

もちろんその効果は永続のものではない。

接続遮断は一時的なもの。月の所有者マスターは変わらず甘粕正彦だ。

すぐに復旧が行われる。再び力を取り戻すのに長い時間はかからない。

しかし、ただ一撃を叩き込む、それだけの間は充分にある。

お膳立ては整えた。

戦いが始まってようやく訪れた勝機。

ここで勝負を決するために。己が知る最強の剣をアーチャーは抜き取った。

【推奨BGM『EMILYA』】

——其は、星々の光の具現。

古今東西、数多の伝承にある聖剣の概念、その代名詞たる至高の一振り。

その製造は人の手によるものに非ず。星の内部で精製され、人々の想念によって練磨された神造兵器。

黄金の光は神霊にさえ届く、担いし者に常勝を約束する王者の剣。

万人が憧れて追い求める『栄光』の在るべき姿がカタチを成した”  
最強の幻想”。

その輝きを覚えている。

人だった頃の記憶に覚えはない。あるいはこの世界の自分は関わりを持たなかったかもしれない。

それでも魂は確かに感じているのだ。かつて仰ぎ見た、光を束ねて天をも斬り裂いた至上の斬撃。その担い手たる騎士王の姿は■■■■という存在にしかと刻まれているのだと。

焦がれた輝きを、今ここに。

決して届かないその光に今こそ手をかける。

並び立つことの叶わなかった境地へと、この瞬間に到達を果たすのだ。

「この光は永久とわに届かぬ王の剣……禁じ手の中の禁じ手だ！」

人の輝きに焦がれているというのなら、祈りを集わせた聖剣の光に灼かれて散れ」

その手に現れた黄金の輝きは、在りし日に見た其れのままに。

限りなく真へと迫った贋作は、もはや真作と比べても寸分違わぬ煌きを示す。

ここに決着をつける。

これこそ自分に実現し得る究極の一、至大至高の一撃だ。

手にある聖剣の一閃は何者であろうと断ち斬れると確信している。いぎ、勝利をこの手に。月の聖杯戦争の幕をここに降ろす。

「——永久エクスカリバー・イマージュ!!!に遥か黄金の剣!!!」

「おお……ッー！」

迫り来る黄金の芳流。逃げ出すことはもはや敵わない。

理解できるのだ。あれこそ人々が思い描いた勝利と栄光、それを表

す至高の光だと。

あれは駄目だ。

あの光は防げない、防げる道理がない。

人々が願った理想の結晶。道理なき個人の力で破るなど理想に対する冒瀆だ。

視界のすべてを白色に染め上げる極大の殲滅光。叩きつけられる熱波の衝撃は、それだけで身を焦がす灼熱を伝えている。

星の光を束ねた聖剣の一撃、その威力は聖杯の加護を失ったこちらを一瞬にして灰燼とするに相違あるまい。

そして、そんな無慈悲なる破壊の意志とは別に、浮かび上がる憧憬の念もあるのだ。

ある意味で、これもまた物語における王道セオリーだろう。

強大な力を振るった孤独の魔王が、最期には人々の祈りで編まれた聖なる一撃の前に倒される。

勇者を否定しながらも必要としている魔王の自己矛盾。ならばこそのお約束であり、敗れ打倒されるのが物語の正道だ。

眼前にまで迫った聖剣の閃光。

破滅に至るまでの刹那、甘粕正彦の心には光に宿った理念に対する確かな畏敬の念があり、自身の敗北という結論にも――

「まだだだだ!!!」

【BGM変更推奨『EMILYA』⇒『PARADISO』】

「そんな……馬鹿なッ!!?」

目の前の光景が信じられないと、アーチャーは驚愕を露わにする。その思いはマスターである少女も同じ。目の前で起きていることが現実だとは思えない。

思考は道理を求めている。

この不条理が成立しているのには、何か理由があるのだと。

回線ラインの切断が不十分だった？ それともまだ何か宝具の類を隠し持っていた？

可能性だけなら幾つも思いつく。だがそれらのどれ1つとして真実だとは思えなかった。

「諦めん。我が魂魄一片の塵となり燃え尽きるまでは、終わってなどおらん!!!」

ああ、本当は分かっている。

考えるような裏などない。これはごく単純な、そして余りに常識はずれすぎる理屈だ。

あらゆる聖剣の頂点、神造の”最強ラスト・ファンタズムの幻想”を、己の意志力己の意志力だけで甘粕正彦は受け止めている。

「俺が託すのは聖杯ゴとき道具ではない。この世界の行く末、俺の愛する人間モノらの未来そのものだ。

軽くはない、軽くはないのだ譲りません。俺はまだ何も納得してはおらん！」

甘粕正彦は最強の敵、その理解はあった。

先に喫した二度の敗北、ゆえに覚悟もしていた。

たとえばどのような力を見せつけられようと、それで怯むことなど決してしない。

アーチャーも、岸波白野も、そのように覚悟し、その通りの意志で戦い抜いてきた。

だが、しかしそれでも、目の前で起きる大奇跡には目を見開かざるを得なかった。

もちろん聖剣の光は無力化も弱体もしていない。

振り抜かれた全霊の一撃は全霊のまま、寸分の狂いなく完全に甘粕を直撃した。

今この時も受け止める甘粕は光の熱に焼かれ、その威力に身体は押し潰される寸前だ。

すでに全身の構造体には亀裂が走り、崩壊は時間の問題。明らかな死に体であり、もはや終わりを待つばかりだと思える。

だけど、ああ、それなのに。

爛々と輝く瞳の奥、燃え滾る魂の力は衰えるどころか激しさを増している。

「そちらの輝きは存分に見せてもらった。人々の祈り願った至高の光、全くもって素晴らしい。魅せられたことに否はない。

だがしかし、俺に敗北を口にさせるにはまだ足りん。こんなもので何を納得しろという？」

甘粕にとって今の状況はまぎれもなく絶対の窮地である。

眼前に迫る破滅の光。地力でこれは撥ね返せない。確かな死の実に肌に粟立っている。

だがそうと思いつくたびに、魂はその事実に対し、この逆境を覆さんと燃え上がる意志を宿していく。

戦いの中で幾度も魅せられた勇気の奮起。

その奇跡を目の当たりにする度に、我が魂は感激に震えたものだ。

ああ、何度でも言おう、おまえたちこそ俺の思い描く理想、人が在るべき姿そのものだ。

そんなおまえたちだからこそ、ここに示したい。

幾度となく不屈の意志で限界を超えてきた。ならば俺も、今こそ限界を凌駕する。

俺の底力は、勇気は、まだまだこんなものではないのだと、おまえたちにこそ知らしめたいのだ。

「在りし日に魅せられた輝きを奉じ、その境地へと並び立たんとする意志は認めよう。」

だが、この輝きには迫り並ぶ意志はあろうと、超えていこうとする気概が欠けている！」

切り離された聖杯との回線ライン。それを自らの意志で強引に繋ぎ直す。

正規の復旧を無視した荒療治、その反動は甘粕の崩壊を更に加速させる。

限界だ、もう保たない。そんな弱音を吐く己の身体に喝を入れて、更なる力を絞り出す。

「贗作が真に勝る唯一の価値、それは本物にならんとする意志だろう。偽物だからこそ抱けるその熱意こそが、偽物ばかりの在り方に美を魅せる輝きであるはず」

「ならば超えていかねばなるまいが。少なくともその情熱がなければ、成せる理想など何もない。」

憧れた過去があるならば、築かれた栄光に敬意を払いつつもそれを学び、その先を見出すことが未来に生きる者の義務であろうがよおッ！

結果が出せるかは問題ではない。その意志を抱くことこそが重要なのだ。

たとえ試みが失敗に終わろうと、事を成さんとした意志は無為ではない。

それが真真正しい意志であるならば、いつの日にか必ず後を受け継ぐ者は現れる。

幾重もの失敗と挫折、夢に敗れた嘆きを架け橋に、人間はいつだって大いなる成功を収めてきたのだ。

だからどうか、人間よ。失敗を恐れるな、未開の荒野に踏み出す勇



気を持って。

その気概がある限り、人はどこまでも未来へ行けるのだと信じているのだから。

「贗作こそがおまえの戦の真だと謳うのなら、まずはその真作を超えてゆけええええ!!!」

そしてついに、斯く在れかしと人々より願われた最強の聖剣は、1人の漢の勇気によって打ち破られた。

度肝を抜かれる。

甘粕正彦、なんとという人間だろう。

この瞬間だけは状況も忘れて、その強さに唯々感心してしまう。

人間とはこれほどまでに強くなることができるとか、そう思わずにいられない。

苦境を前に発露させた、かくも強靱な不退転の決意。

人が夢想と共に憧憬し、栄光と勝利を約束した伝説に一步も退かず、真つ向から対峙できる勇氣。

その強さは、こう在りたいと願う理想のカタチの一つであり、そこに確かな尊敬を抱いたのも本当で――

「ロツズ・フロム・ゴオオオオオオツド!!!」

返す刃で放たれるのは、遙か天空より下される神の杖。

無限の可能性の中で人類が至る、歴史にまだ見ぬ未来の超兵器。

全霊を込めて聖剣を振り抜いたアーチャーは、今や完全な無防備を晒しており、

直下より飛来する超音速の大質量に、打てる手立てなど一つとして無く――

――こうして岸波白野は、今度こそ完全に敗北した。

「——ああ、今回も駄目だったよ。正彦は限度というものを知らないからな」

月の決戦の趨勢を見届ける傍観者。

虚構の海より生まれた闘争の探求者は、その結論に溜め息を漏らす。

「後継は現れず、超えていくにも至らない。戦争は再び振り出しにか。果たして彼が描き出す美しき紋様に完成の時は訪れるのか」

「——それも真如をもつて至る道であるならば、苦行の果てに自ずと悟りは開かれましょう」

答えを返すのは、彼に付き従った救世者のサーヴァント。

この世で唯一人、生命の真理に辿り着き、生の苦痛から解脱した解答者。

生存の闘争に人類の未来を見たトワイスの理念に、共感ではなく慈悲のために刃を取ったサーヴァントは、その自問に答えを返す。

「執着する心は幼く、未だ涅槃には遠き道なれど、二受に囚われぬ有り様は中道をゆく。」

人の善悪に価値がないように、正精進の姿にこそ美を見る彼の認識は、不偏の正義の名を負うに相応しい」

「人の見識を超えた神の視点、か。ならば正彦が貴方を召喚ぶ可能性もあったということか」

「いえ、それはないでしょう」

救世主の召喚の条件とは『人類を救う』という理念に開眼していることが挙げられる。

行為の善悪はどうあれ、災禍に挑む人々の奮起に理念をおく甘粕は、その条件に適合していると言えるだろう。

有り得たかもしれない可能性、それをセイヴァーは否だと切って捨

てる。

「真理へと近づくと教えよりも、無明の苦に足掻く人の強さにこそ重きをおく彼とでは、我が求道は相容れない」

「……というより、たとえ私の説法が頭に入っても、いざとなったらすぐに忘れるでしょう、彼の場合」

「釈迦に説法ならぬ、甘粕バカに説法というわけか」

「なかなか上手いことをおっしゃいますね、トワイヌ」

「そういう貴方こそ、案外と俗世のようなことを言うじゃないか」

「虚飾過多な言霊を弄し、それらしきものへと自他を偽る。そのような有り様こそ中道から外れている。」

単純明快なものは単純明快に言い表すのが、内外へと伝え説くのに最もよい。

——要するに、彼の人生とは割と勢イッいで生きていたのでしよう」  
「それはまた、随分と端的に言い表した真理だな」

全てはその場の気分と勢いだ。

身も蓋もない結論だが、同時に正鵠を射た解答でもあるだろう。

なぜならそれが甘粕正彦という男なのだ。

世界の停滞を否定し試練を以て人類を更なる未来さきへと進ませる。

字面だけ見れば大層な理想だろう。人の行く末を考えて、覚悟を抱いて聖杯戦争を勝ち抜いた。

その意志力の強さ。どんな場合にも揺るがない絶対正義の精神性。それは確かに大した人物だと言えるだろう。

だがそんなものは表層の飾りに過ぎない。甘粕の本質とはもっと単純で幼稚なものだ。

ただ好きなのだ、人の勇気が。

大好きだから見たいのだ、その雄々しい姿を。

だから願った、子供のよう。大好きな物語がたくさん見れる、そんな楽園ばらいぞを。

未熟で無邪気で青臭い。そんな有様だから勢い任せで全てを御破算ばくさんにもしてしまう。

だがそんな勇者バカであるからこそ、甘粕正彦はあれほどの強さを得ら

れたのだ。

「浄土を求めず終生を現世の俗欲に囚われたままの在り方は、私の悟りの道とは対極の位置にある。

だがそれは誤った道ではない。彼は真摯に自らの生と向き合い、苦楽に負けずに日々精進して生きている。

彼の願いの根底にあるものは、人々に正業へと向かうよう努力してほしいと望む心だ。

道は一つではない。彼もまた真理を胸に置き神を宿した者」

「ならばその行く末を共に見届けましょう。

行き着く果てに現れる世界の解答は、貴方にとっても救いとなるでしょうから」

そんな甘粕の愚かしさを、涅槃に至った解脱者は是とした。

己が妄想に迷い、数多の誤解を重ねながら生きるのが俗世の苦惱。

ならば彼等と同じ地平に立ち、精進を忘れた世を糾そうとする行いには真理がある。

人々を教え導くために涅槃に昇らず、衆生に留まり共に歩んでいく菩薩がいるように。

万人を涅槃に至らしめることだけが救いの道ではないのだから。

「……やはり貴方と比べれば、私もまだまだ未熟なようだ。

感情は不安を持ち、それと同じくらいの期待もある。ままならないものだよ」

そして同じく俗世の住人として、トワイヌは内にある懸念を口にする。

「人は間違いを繰り返す生き物だ。すでに正しい道を知っているはずなのに、誤ちを繰り返す。

我々は全能ではない。そのように諦めて、尚も生きていくのが——  
——いや。

その言い方は君の持論に抵触するか。諦めなければ夢は必ず叶う、だったね」

「けれどね、それが出来たら誰も苦勞はしないんだ。

遠坂凜は性悪説などと言っていたが、私に言わせれば君こそ性善説

の虜だよ。

人は誰でもそのような強さを持てると、子供のように信じすぎているんだ」

「試練に負けず、勇気を出して立ち上げられる者。」

君の思い描く理想の人類とは、正彦、他でもない君自身のことじゃないか」

口に出したのは甘粕へと向けた言葉。

同質の願いを持つ理解者として、同時に強すぎるその背を仰ぎ見ている傍観者として。

その行先に見える不穏さも、トワイスには分かっていた。

「試練の災禍と言うが、君には魔王（やられやく）の自覚がまるでない。

超えられるべき壁だというのに、君は文字通りの最強だ。誰も君を超えられない」

「ならばこの戦いも無間に続く回帰の輪だ。

君はそれでも信じるのだろうか、永劫に繰り返す徒労には無意味さも感じている」

甘粕正彦が倒されなければ輪廻は終わらない。

しかし甘粕正彦は最強なのだ。彼に勝てる者はこの月にいない。

弱者の刃が強者の奢りを討つ、そんな物語の王道（セオリー）も通じない。

つまりは無間。この月の聖杯戦争は永遠に終わらない。

甘粕と異なり理屈に重きをおく性質であるトワイスだから、懸念すべき未来も見えている。

「しかしだからこそ、それを超えた先には人類の未来を指し示す光があると信じられる。

君という試練を乗り越えて、人は未踏の価値を掴むだろう」

「元よりそうでなければ、君も決して敗北（なつとく）しないだろうからね」

それでもトワイスは、甘粕正彦の理念に賛同する同士で在り続けるだろう。

なぜならそんな理屈を抜きにした強さ、そこにこそ人間という存在の正当性を見たのだから。

甘粕の夢見る思いが目指す先。

そこにどんな解答が訪れるのか、覚者ならざるトワイスには分からない。

それでもその輝きが示す未来に現れるのは、きっと素晴らしいものだと思っているから。

行く末を見守る傍観者として、甘粕カレと共に在り続けるのだ。

月の眼が見下ろす熾天の間で、漢は待つ。

災禍の試練を受け継ぐ後継の意志を待望して。

月に君臨し世界を揺るがす魔人と相対する覚悟を祝福して。

あらゆる歓待の思いを胸に、勝ち上がった強者の到来を甘粕正彦は待っている。

己を乗り越える意志つよきを持った者が現れるまで。

この月の最奥たる場所にて、魔王は勇者の到来をその玉座より待ち侘び続けていた。

## ある女の物語

—— 女の話をしよう。

その女は愛された。

とてもとても愛された。

その美貌は偽りなき生来のカタチであり、天上の華のような魅力があつた。

誰もが一目で女に魅了され、彼女への愛を捧げ奉った。

その女は病氣だった。

とてもとても苦しい病氣だった。

女が生まれた山中の里で、その病氣は不治の病だった。

誰もが手は尽くしたと言って諦め、その命は十四まで保たないだろうと囁かれた。

愛と病、相反する二つに囲まれ育ちながら、幼い女は静かに悟った。彼等の熱情は自分を救わない。入れあげた欲望に価値などないと。天蓋寝所の中、憐れむだけの観衆雑多と僅かに覗ける外の景色だけを世界として、女は人の真理を理解した。

…… 結果を先に言うなら、女は助かった。

情け心か戯れか、最期の時間の遊興にと持ち込まれた霊子ハツキングの体験。

そうして得た外との繋がり。呆れたことに、女の患っていた病とは外の世界ではとつくに治療法の確立されたものだった。

自然への回帰を謳い、閉塞した共同体間での小宇宙化を目指すという、社会からの隔絶を良しとする山の教義。

これまで女が負ってきた苦しみは、そんな頑なさをほんの少し緩めればすぐにも解決できるものだったのだ。

その瞬間、産まれた時から教えられてきた教義も、女の中で無価値と堕ちた。

——ここより先を話す前に、女の性質タチについて少々話そう。

その因果のはつきりとした理由は分からない。

幼い時分の環境がそうさせたのか、それとも女の魂が最初から極大の魔性を帯びていたのか。

答えは出せない。ともかく女はそうなったのだ。

健全者となり、自由な生を謳歌する女。

その美貌には活力が宿り、彼女への愛に入れあげる男は益々増えた。

そんな男どもの情念を、女は拒むことなく受け入れた。その在り方は聖母の愛にも似て見える。

誰もが女に懺悔を求めた。母の子宮の羊水にも似た女の慈愛に包まれていれば、どんな罪でも怖くはなかった。

女は彼等の求めを受け入れて、その耳元でこう囁くのだ。「その行いは人間として恥ずべき事、裁かれるべき事です。

けれど、貴方に罪はありません。

だって——虫が何をしたところで、誰が罪を咎めましょうや」この世に人間は己一人。

その他の有象無象など取るに足らぬ虫けらに等しい。ならばその罪にも意味はない。だって虫の行いにそんな高尚さなどないのだから。

己以外に価値はなく、故に下等な生の罪を許すと、女は臆面もなく断言した。

正常な価値観であれば分かるだろう、女の秘める異常さが。

この女の属性は魔性、深入りしていけば待つのは破滅のみである

と。

しかし、理解して尚逃れられないからこそその魔性である。1度女の身体に抱かれてしまった者は、その悦楽から離れられない。



破滅が待つと理性が分かっているても、抱いた欲望<sup>アライ</sup>が抗いようなない毒を持つのだ。

女は彼等の全てを許した。  
ひたすらに許し、抱きしめて甘えさせ、その魂を墮落へと導いていく。

まさしく魔性の女だ。奮起のための機会を奪い、そこに至る活力も根こそぎ剥いでいく。

苦痛であれば逃れられもするだろう。だが女は至上の快樂である。垂らされる蜜は、人生を差し出しても欲するほどに甘美。

ゆえに女からは逃れられない。誰もが女という麻薬に嵌まり、その心身を墮とされて破滅した。

なぜそんな真似をと思うだろうが、理由などそもそもない。

女は好きだからやっているだけだ。彼等が墮落していく様を肴にして、自らも快樂を貪っているに過ぎない。

そして女の性質の悪いところは、それらの所業を善行として行っていたことだろう。

世に在る人間とは己のこと。

ならば己にとつての『善いこと』こそ人間の善行に相違ない。

自分は数多の人間<sup>ムシケラ</sup>の人生を救い、その崩壊の瞬間こそ悦とする。

それで良し、これぞ真理。己が異端と理解して、女は『自分が気持ちよくなるため』という善行を是とした。

そうして女は身勝手な我欲のままに振る舞い続けた。

群がる人々を救っては破滅させ、その姿を眺めては悅樂に浸る。

そんな行いを女は繰り返し、繰り返し繰り返し繰り返して——やがて飽きた。

女がいたのは山中という小さな世界。

無限に溢れ続ける女の欲の受け皿とするにはあまりに矮小。

ゆえに見切りをつけ、広大な外の世界へと目を向けて、

——自らが生まれ育った教団を全滅させた。

無論、女自身が手を下すなど有り得ない。

それは女の欲<sup>アライ</sup>に狂った者たちによる内部崩壊。

誰もが女を求めて殴り、殴られ、奪い、奪われ、殺し、殺されていく。そうしてわずか一夜の内に生きる者がいなくなった故郷を後にして、女は世界へと降り立った。

外の世界に出ようとも、女の所業は変わらない。より多くの人から愛されることを使命として。

それらの愛を最期には踏みにじっては自らを満たしていった。

女が好むのは濃密な人生。

種類は問わない。倒錯した趣味趣向、非道徳などはむしろ好物だ。それら得難い人生を歩んできた者たちの欲望を刺激し、自分へと溺れさせる。

そして最終的にはその全てを台無しにすることで性的絶頂を迎えるのだ。

狂った女の慈愛に感った信者は数知れず。

誰もが女のためにその人生を破綻させ、絶望しながら自殺していく。

女に愛してもらえたことに感謝して、もう愛してもらえないことを嘆きながら。

女の通った跡に残るのは屍の群れ。たとえ世界が広がろうとも、その光景はかつての故郷での惨劇と何も変わらない。

そこに欠片ほどの罪悪感も抱かずに、女は己のための救いの道を歩み続けた。

やがて時が流れ、女の救済が世にも知れるようになり、

慈愛に満ちた行いから、その本質を勘違いした者たちより『最後の聖人』と称されるようになった頃、

——女は、1人の勇者を見出した。

女の中の『牝』が疼いた。

一目で分かる、なんと濃密で苛烈な人生を辿ってきたのか。

己の意志一つで世界に対し否と唱える、強さと勇氣に溢れた稀代の益荒男。

その人生はこれまで見てきたどれよりも素晴らしく、美しい。

今までに破滅させてきた人生とは比べようもない、珠玉のごとき生き様だった。

女は思う——もしこれほどの人生を蕩かせたら、自分はどれほどの絶頂を迎えられるだろう。

女の中にあつたのは真実そんな思考のみ。

打算も敬意もなく、常と変わらぬままに女は男へと近づいた。

女が異変に気付いたのはすぐのことだ。

常ならば女が近づけば、誰もがその魅力の虜になる。

老若男女、貧富善悪を問わず、女を前にすればその欲を掻き立てられる。

人は人であるがゆえに、女の蠱惑からは誰も抗えない。

愛しであれ憎しであれ女を無視は出来ないのだ。そして愛憎は表裏一体であるが故に、最期には女の抱擁に蕩かされる。

だというのに、男は女に靡かなかつた。

女の蠱惑を無いものが如く扱い、自らの生き様を優先させた。

女がいようがいまいが、男の人生には変化など一つとして無かつたのだ。

これまでも、女にとっての『悪』と呼べる者は存在した。

それは己の快樂の純度を下げる無味なるもの。俗欲を排し生の執着を捨てた解脱の道を歩む者。

欲に縛られぬ彼等の在り方はどうやってても女の舌では咀嚼できない。ゆえにそうした者こそ許し難い敵として嫌っていた。

だが、男のそれはそうした者らとも異なっている。

男は欲望を消してはいない。その魂はいつだって己の理想に燃え

ている。

男は生を否定してはいない。愚かしくも前へと進む人々の生を誰よりも愛している。

そんな男の生き様は、舌の上で転がせば極上の美味となるだろう。なのに男は女を見ない。

そんな無関心が続くにつれて、女の執着は日に日に強くなっていく。

この男の生を蕩かしたい。その雄々しき生き様を思うがままに墮落させ、全てを破滅に導いてやりたい、と。

——だから女は、始めて他人に対して己の本性を自ら露わにした。

無数の蛇のように絡み合う肉と肉。

退廃に満ちたその光景は、奈落から溢れ出た地獄そのもの。

その中心、幾重もの人たちが絡み合う中心で、女は男へと蠱惑の眼差しを向ける。

この墮落を、この背徳を、貴方の欲望は如何に感じるのかと問いかける。

「さあわたくしに、あなたの”欲”を見せてください」

だが男は、女を見てはいなかった。

女の問いには答えずに、女が虫と信じる者たちに向けて男は告げる。

「おまえたちは人間だ。

我も人、彼も人。ゆえに対等である。

尊厳を取り戻せ、勇気を取り戻せ。

弱きに流れるな、墮落に抗え。顔を上げて、前を向くがいい。

思い出してみろ。おまえたちの人生は、本当にそれだけであったのかを」

そうとだけ告げて、男は女には一瞥もくれずに立ち去った。

去りゆく男の背中、そこには光さす王道を行く雄々しき強さが満ち

て、  
女の天蓋の中の闇、欲に埋まったその有り様の惨めさをこれ以上なく喚起させていた。

その夜を境にしても、女は変わらない。

改心するような殊勝さなど持ち合わせず、その性質は相変わらずの魔性である。

我欲の善行を良しとして、人を救いてはその破滅を愉しみ続けた。

——ほんの数匹の人たちが、自ら女の天蓋を離れていくという異常に目を瞑れば。

女の世界は変わらず、しかしそこには痕が残った。

如何に快樂へ耽けようと、その痕が絶頂の恍惚に影を差す。

脳裏から男の背中が消えない。なぜなのかという疑問が尽きない。

残った痕は日に日に深まり、女の世界を惑わす無視できない不純物と成り果てた。

我慢できなくなった女は、ついに直接男へと問い質した。

なぜ貴方は無視をする？

なぜ貴方は私を見ない？

貴方の眼に、私の自己愛はどのように映っているのか？

取り乱す女を前に、男はどうという事もない態度で答える。

「おまえがそのようになった事には、特に言うべき言葉はない。

理由がなんであれ、その在り方を選んだのはおまえ自身。ならば言い訳の余地はない。

我欲の善行、大いに結構だ。それも1つの人の姿であるのだろう」

男が語ったのは、女にも負けず劣らずの絶対値だけを基準とする異

質の美感。

善悪の区別なく、突き進む意志を男は愛している。ある意味で女の

同類とも言えるだろう。

女の魔性も、男からすれば1つの道。

背徳の是非など問わない。輝きを宿していればそれでいい。

突き進む退廃の聖道、そこに強さがあるのなら、男が愛する”人間<sup>ヒト</sup>の姿だ。”

だから、と男は告げる。

これは単純に好みの問題であると。

「おまえにはそそらない」

———そうして男は、女にとっての価値の総てを完全に否定した。

女の精神性は確かに人を逸脱しているだろう。

世の価値は己一人と豪語し、他者を破滅させ悦樂に変える物の怪。

この女こそまさしく最低最悪と呼称するにふさわしい。

だがしかし、男の美感に照らし合わせて見てはどうだろう。

善性、悪性の一切を問わない男の価値観から見ても、女の生き様に輝きはあるかどうか。

———否、である。

己こそ唯一の人たる者、それは女の中でだけ完結した思想だ。

外へと向けて論を争ったことなど一度もない。そうした敵対者は徹底して避けてきた。

それは世界を通じて得た悟りにあらず。ただ女の意識が己の殻の中で閉じただけ。

女の生涯に戦いなどなかった。自身で勝ち取ったものはなく、女が虫と呼ぶ者たちから貢がれたものばかり。

総ては女の毒に惑った者らの中心で、快樂を貪る傍らに零れおちたものを拾っただけの成果。

困難に立ち向かう勇気がない。己の信念にかける自負がない。男が輝きと呼ぶ要素は何一つ有していない。

無視は当然、男にとって女は真実どうでもいい。

せいぜいが男にとって価値ある人々のための試金石程度のものでしかない。

その欲アイに惹かれるでもなく、邪悪と義憤するでもなく、向けるのはただの無関心だ。

我こそ人、彼等は虫と悟りを開いた女は、

男にとっては女の方こそ”つまらない虫”でしかなかったのだ。

女が崩れ落ちる。

足元が定まらない。視界がぶれていく。

その衝撃は女にとって世界を揺るがす天変地異にも等しかった。

信じてきた自己愛せかいが音をたてて壊れていく。どうやって処理すればいいのか分からない。

——そんな女に、男は手を差し出すことなどせず、素通りして何処かとへ去って行った。

残されたのは己を見失った哀れな女。

渦巻く感情の混沌は、すでに女自身でさえ形容不可能。

善悪数多の感情が溢れては混ざり合い、喜んでいるのか苦しんでいるのかさえ定かでなかった。

……その途中経過に関して、記すべき言葉はない。

女の中身は人を外れた異端。理解することは異星概念を理解するに等しい。

よってここで記すのは結論のみ。思考の迷路の果て、立ち上がった女が至った解答を語ろう。

答えは至極単純。元よりそう頭のいい女でもない。内面の理解は困難だが、方向性は分かり易い。

人は己が持たないものにこそ強く惹かれる。形容するならそんな幼稚な感情の動きだろう。

「自分が気持ちよくなるために神となる」とまで豪語した女の欲望は、「たった一人の男を手に入れる」というあまりに初心な欲望ねがいに変わっていたのだ。

後のことは語るまでもない。

女は男を追い、やがては天上の月へと至る。

二人の対峙に善悪の定義は不要。問えば明白であろうが、何の意味もないだろう。

善と悪に分かれようと、結局二人は魔王と魔性。

互いに魔の属性を帯びる者同士。どちらが残ろうと世界にとっては碌でもない。

災禍の果てに滅びるか、快樂の果ての昇天するか、苦樂の差はあれど破滅の運命は変わらずだ。

即ちこれは純粹な私闘。

大義もなく、理念も持たない、欲と欲のぶつかり合い。

本筋からは切り離された、彼等のための逢瀬の時だ。

どちらも己の我が儘に抑えが効かない愚か者。どの道を辿ろうと対峙の仕方に変化はない。

ならば舞台背景を語るのも無粋だろう。結局はこんなもの、この一言で言い表せるのだから。

——恋を知り、愛を抱いて、現実へと挑む。

——これは、1人の女の”恋愛の物語”である。



## 魔性菩薩

天地に注がれる歡びの桃<sup>いろ</sup>。

天には雲、地には花、大気に満ちるは快なる甘味。

そこはまさしく極楽浄土。総てが楽に満ち足りて、総ての悦がそこにある。

名を、殺生院天上楽土。

あるいは、裏側のムーンセル中枢部。

虚数に浸される月の裏側、その深淵よりたどり着けるもう1つの月の聖杯。

聖杯の裡にて編まれる光の繭星、そこでは1人の化生が誕生の時を待っていた。

数多の欲、数多の魂を受け入れて。

流れ込む膨大な情報量の奔流に、その命は秒単位で死と転生を繰り返す。

その苦痛は推して知るべし。だがそれさえも化生に至る身には悦楽に変ずる。

苦痛による絶叫は同時に艶やかな嬌声を含み、繭星の内にある存在は苦と楽を共有しそれを愉しんでいた。

「調子がいいことだな。俺もお役御免でなんとも清々しい気分だよ」  
天の繭星を仰ぎ見るのは、魔術師<sup>キヤスター</sup>の役割<sup>クラス</sup>を負った童話作家。

人から化生へと変態していく己のマスターを眺めながら、少年の力タチをした厭世家は容赦なく毒を吐く。

「まったく醜い。臆面もなくよくもそこまで悦楽のみに耽られるものだ。」

信念に邁進する者でも、王聖を遵守する者でもない、こんな淫蕩と我執しか頭のない女が万能の座に至るとは！

ああ、まったく何とも嘆かわしい！ 世の無情というやつを呪うばかりだよ、俺は」

己<sup>サライアント</sup>が従<sup>マスター</sup>者の罵声を聞き入れ、主たる化生は嗤う。

衆愚が謳う正義の姿、民草を治める王者の権威、一切合切無価値と

断じて。

我が司る理こそ至高。憚ることなく確信を込めて断言する。

——人という生き物は”幸福”を求め動物である。

地球に生きる人間以外の動植物たちを見るがいい。

彼等の在り方は極めてシンプル。生物の本能に従い、生きるために喰らい増えるために繁殖する。

その中で人間だけが無駄に塗れている。不必要な行為が多すぎる。生の糧を得るための食に美味を求め、繁殖のための性交に愛の情緒を求め。

何故こんなにも無価値なものに傾倒するのか。優れた知性を獲得しながら、どうしてそんな当然の矛盾に気付けないのか。

故に、化生は悟る——その無価値さこそが人間の本质であると。

無意味に見えるそれらの行為、全ては人が感じる快の喜びに通じている。

愉悦に浸り、快楽を貪り、堕落を楽しむのは、心の欲望を満たすためだ。

ならばより広義に捉えるならば、人が生きる目的とは即ち幸福を感じることに他ならない。

人の思考が思い描き、心が判断して実行する行為の全ては、自らの幸福に繋がっている。

正義も国も、つまるところは幸福を得るために用いる手段、道具に過ぎない。

万象すなわち幸福の絶頂に至るため。それこそ我々の本性ニンゲンである。ならば良し、貴方がたが至るべき涅槃はここに在る。

無限に蕩け合う快楽の渦は一瞬にして永遠の極楽浄土。

一切の苦を捨て去って、己という極楽に全てを委ねてしまえばいい。

「ふん、ではおまえは万能に至った神の座で何を願う。

淫靡にして醜悪、その最低最悪な本性のまま、世界の総てを己の情欲の海に沈めるか」

愚問なり、答えるまでもなし。

己の”救済”こそが至高の価値観。そう信じて疑っていないから迷いもない。

菩薩とは、悟りを求めし衆生という意味を持つ。

それは同時に、人々と共に在りて悟りに導く存在であるという意味している。

悟りの境地に達して尚、衆生に救いをもたらすために菩薩は自ら地に残るのだ。

——ゆえにその化生の名は、魔性菩薩。

諸法無我など猿の戯言、果徳とは蹂躪するもの。溢れ出る六欲に溺れるべし。

墮落に誘うを是とし、快樂のままに果てるを救いと説く。生が苦行であるならば、その生こそを捨て去るべきと厚顔に言い放つ。

世界を蕩かす退廃の救済、この世で最も邪悪な救世者がここにいる。

「結構結構好きにしろ！ 元より物を書くしか能のないこの身は最弱のサーヴァントだ。

魔人になるおまえを止める術など持たんし、何より己の作品には最期まで付き合うのが物書きの責任だ。それがどれだけ吐き気のする怪作でもな！

しかしだ、マスター。その欲望を成就するには、倒さねばならない障害が残っているぞ」

その指摘に、耽溺を楽しむばかりの化生の思考が、止まる。

「おまえの得た権利は不正規だ。如何に管理能力を持ったAIを呑もうとも、不正は不正。

正規のルートで獲得した真の所有者マスターがいる限り、ムーンセルはおまえの物にはならない」

そう、化生の経てきた過程とは不実と謀略で構築されている。

己の毒で狂わせたシステムの一部、ずれ出した歯車の狂いを最大限に押し広げて、化生はこの座に至った。

言うなれば不正規ルート。目的のために過程は問わないとはよく

言うが、それでも不正規となるのは正規品より価値が低いからだ。すでに正規ルートの到達者がいる限り、化生の万能は完全ではない。世界を蕩かすという欲望は、その事実がある限りは果たせない。そんな己の現状を再認識して、化生たる”女”は情愛に熱く濡れた。

確認されるまでもない。無論、承知の上だ。

むしろそれこそ望むところ。女が目指した本命はそちらにある。

世界を蕩かす己の欲望。無論そこに嘘はない。だからこそその熱情である。

あらゆる物事に優先順位があるように、それこそ自分にとっての最優先事項。

女が欲している世界の景色。

そこに映るのは有象無象の衆生などではなく、たった一人の”男”なのだから。

「そうか。ならば俺から言うべきことは何もない」

マスターの心中を聞き入れて、従者たる童話作家は物語が己の手を完全に離れたことを理解する。

舞台が始まったのなら、演出家は疾く舞台より立ち去るのみ。出来る役割などもう何もないと悟っていた。

「せいぜい求める心のままに、その欲を貫くがいい。

俺の考えていた顛末とは異なったが、まあこれはこれで悪くはなからうさ」

立ち去っていく従者。それきり女はその存在を意識の彼方に忘却した。

代わり胸の内を占めるのは、これより相對する意中の相手。

それを思うだけで、ああ、身体は熱く火照り出す。子宮は疼き、股ぐらからは蜜が溢れ出す。

身を苛む苦痛も、女にすれば自慰に等しい。感受する総てを性的快楽に変えて己の欲求を満たすのだ。

人を捨てて神に至る？ そんなものは手段であって目的ではない。

この化生変化もまた同じ。これは言うなら衣装替え。

殿方との逢瀬を前に身なりを整え化粧を直す、女として当然の嗜みだ。

受け入れる総ては、そのために。万象を司る権利に手をかけながら、真実に求めているのはそれのみだ。

悪性は変わらない。しかし唯一無二を求めて邁進する姿には、かつては無かった意志が宿っている。

——そして、女の変化は完成した。

肢体をあますことなく晒す格好は、扇情的な魅惑と同時に淑女の慎重さがある。

男性ならば、いや女性であったとしても惹かれずにはいられない蠱惑の魅了。

まさしくその姿は『牝』にふさわしい。女はすでに人間ではないが、それ故に『牝』としてのカタチが極まっている。

一点の異形である、頭より生えた暗黒の双角。それさえも女の人外たる美を際立てていた。

それは有史以来最も破綻した理。

貴方がたは総じて虫けらに過ぎぬから、天地に人は我だけが居ればいい。

遍く人々は我がために、この欲望を満たすために使い尽くされるが道と知れ。

その天に『呪』を付けるなら、随喜自在第三外法・快樂天。

他者を貶め悦楽に浸るを善しとする究極の自己愛、異界の災厄が如き天魔が降り立った。

新しい身体、新しい世界の感触を、女だったモノは存分に確かめる。思ったほどの異物感はない。すでに感覚はこの肉体を受け入れている。

それよりも沸き上がってくる万能感が素晴らしい。何にでも手が届く、何事をも為せると実感できる。

これが聖杯を手にするということ。数多の英傑が求めたという話も領ける。確かにこれは善いものだ。

だがそんな感慨も、この空間への侵入者を感知した瞬間に忘却した。

機を窺ったような登場は、まるで女の変化を待っていたかのよう。

いや、実際に待っていたのだろう。”彼”はそういう男なのだ。

所有者は向こう。やろうと思えば妨害なんて幾らでも出来ただろうに。

それをこうして、自分と同じ位階へ至るまで待っていた。それが男の内にある実に稚拙な欲求からきていることを女は知っている。

ああ、なんとという愚か者だろう。

仏の悟りからは程遠い。我欲のままに男は生きている。

そして今なら分かる。そんな貴方だからこそ、自分はこんなにも惹かれたのだと。

「——ああ、ようやく、わたくしを見てくださいましたのね」

そうして女は、焦がれに焦がれた想い人を迎え入れた。

「見違えたな、その姿」

変化を果たした魔性菩薩を、嫌悪のない純粹な感心で甘粕正彦は迎えた。

「その欲を貫き人を超えて、俺の元まで辿り着いたか。

いいぞ、今のおまえの姿ならはつきりと見える。俺が見るべき輝きだ」

属性は問わない、突き進む意志こそが素晴らしい。

それは魔性が相手であつても変わらない。むしろこの絶対値ならば賞賛こそ当然だった。

かつて捨て置いた頃とは違う。劇的なその変革を、甘粕は心から歓

迎っていた。

「あ……」

そんな甘粕に対し、女の様子は毅然としたものとは程遠い。端的に言えば、初々しい。かつて幾人もの欲を蕩かした魔性の女とは思えない。

それでも演技の類ではないことは明白だった。男であれば理性が切れる仕草の魅了は、作り物では到底引き出せない。

それはまるで無垢なる処女おとめのように。

蠱惑の艶やかさとは異なる、別の形での女性の美点がそこにあった。

「……困りました。思い募ったものはたくさんあるはずなのに、言葉になりません」

「どうした？ 今さら恥じ入る性質タチでもなかろうに。言えるほど知っているわけではないかもしれないが、らしくないぞ」

「もう、だってわたくし……人前でこんなに緊張するなんて、始めてのことなんですもの。」

格好だって、もつと抽象的なものになると思っていましたのに、こんなふしだらな……。

殿方を前にこのような姿を晒してしまっただけは、わたくしとて羞恥の1つも覚えませぬわ」

不貞腐れて答えようとして、はたと気付く。

ここに至るまでにこんな初歩的な事項を失念していたことに、女の面は恥で染まった。

「……ああ、本当に、わたくしついたらどうしてしまったのでしょうか。こうして貴方様を前にする今の今まで、どう呼びすれば良いかさえ思い至っておりませんでした」

「そんなこと、好きに呼べばいい。どう呼ぼうが袖にはせんよ」

「好きに……？ で、では、御名前でお呼びしても？」

「二言はない。好きにしろ」

「それでは……ま……正彦、さん……？」

恥じらいを浮かべながら、思い焦がれた男の名を呼ぶ女。

その姿はまるで、己の中の恋心を持って余す純真な少女のようで。

「ああ。ならば俺も倣おうか。——なあ、”祈荒”」

「っ！ あ、うう……」

己の名を呼ばれて、女は身を震わせた。

それは純粹な喜びの表れだ。常人にも理解できる当たり前の感性で、女は喜びを感じている。

恋の熱に浮いた乙女ならば誰でも生じる、ただ好いた男に名を呼んでもらう、それだけの喜びを。

「さて、ここらで一っ宣してみせてくれるか。」

月に昇り、神に至り、数々の難行を超えて俺のもとまで辿り着いた意志、認めよう。

言いたいことがあるのだろう。その胸に秘めたる思いを、俺に示してくれ」

「……ええ、そうです。そのために月<sup>ここ</sup>まで来ました。

未練がましい女だと自分でも思いますが、分かっているも抑えられません。

こんな気持ち、以前には想像することも出来ませんでした」

自身の思いを伝える、それだけを求めてここまで来た。

幾多の難行を経て、神の位階に足を踏み入れたのも、総てはそのために。

それだけのためにと他人は言うだろう。だが女からすればそれがそれが真理。

万人に語り聞かせる大義名分など要らない。誰より欲<sup>アイ</sup>に真摯だった女だから、この熱情こそ総てだと断言できる。

総ては募りに募ったこの心の熱を伝え届けるために。

万感の思いを込めて、女は正直な己の気持ちを告白した。

「愛しています、正彦さん——だからこそ、わたくしは貴方様を蕩かしたい」

女の陰に、魔が帯びる。



「貴方様の持つ欲望の捌け口になりたいのです」

「貴方様という存在を使い尽くして、わたくしの快樂を満たしたいのです」

「その生涯を、その信念を、甘く蕩かして無価値にして、わたくしだけのものにしてしまいたいのです」

恋する乙女の姿のまま、女は己の狂氣<sup>アイ</sup>を口にした。

忘れてはならない。

この女は魔性菩薩、在るがままに異端である。

如何なる過程を経たとしても、己を抑制する殊勝さなど持ち合わせない。

相も変わらぬ女の裡は、愛する者を己の欲望のままに蹂躪し尽くすことに一点の疑問も抱いていない。

「——素晴らしい。愛という感情が至る極点の輝き。見せてもらったよ感服した」

そして、そんな女に見初められた男もまた、条理の価値観を超越した魔人である。

「求めるがままに欲し、奪うがいい。それがおまえの持つ愛のカタチなのだろう。」

その欲<sup>アイ</sup>を貫けよ、魔性菩薩。自身にしか理解できない孤高の道で、己の意志を押し通せ」

「ああ、いいぞ美しい。今のおまえになればそそられるよ」

女の在り方は異端である。甘粕にとってもそれは変わらない。

人の自立心を理念に置く彼の質を考えれば、害悪と言い切つてしまつても良いだろう。

それでも尚、己が信じる思いで突き進む覚悟<sup>つよむ</sup>がある、それだけで褒め称えるのに何の不足もなかった。

「ええ、そうですね。あなた様はそういう方ですもの。分かっております。」

——であるからこそ、許せない。認識を改めさせねばなりません」  
そんな男の賞賛を受け取って、女が見せたのは明確な怒気だった。  
「貴方様の言葉はわたくしだけを指したものではありませんでしょ

う？

人間皆等しく、精進する総ての意志を愛していらっしやる。他を欲することなく、天より見守る父のように」

「さすが、と申しあげておきましよう。貴方様の愛は父性の慈愛、偽りなき善のカタチです。主神の裁きを呑み干したことも領けます」

ですが、と声音に威を込めて女は続ける。

「わたくしにはそれが我慢なりません。皆を平等に慈しむことは、個人への執着が皆無であるのと同じでしょう。」

許せるでしょうか、意中の殿方が他の有象無象に目移りしているこの現状を。ええ、認められるはずがありません」

「わたくしは貴方様の総てを独占したい。互いが互いを求める欲情に従って、満たされる快樂の先で果ててしまいたいのです。」

なのに入れあげているのはわたくしだけ。肝心の貴方はつれないまま。わたくしを見ていてもどこか上の空。心はこちらを映しきっていない。

駄目なのですよ、それでは。今この瞬間、世界には貴方様とわたくしだけ。それ以外が入り込む余地なんて微塵もないのですから」

「ああ、なんと浅ましいのでしょうか。仏門を志す身としては考えられない墮落です。」

貴方様のせいなのです。個に執心し欲を狂わせた悪性に堕ちたのも、ひとえに貴方様がわたくしを壊したから。

知ってしまったら戻れません。身に染み付いてしまった悪性は、もはや拭うことが叶わないのです。この胸に灯った熱は、こんなにも苦しめて、気持ちがいいものなのですから」

魔性菩薩たる女は、自らを善として定義してきた。

如何に破綻した価値観、数多の者を破滅に追いやった悪性とはいえ、女の中では善行なのだ。

個に執心せず全を慈しむ、それは仏道においても善行と言える行為。

少なくとも女の中では、己の行為をそのように理解していた。だが此度のこれは違う。

己の成したい事でも、同列には扱えない。

個人を欲してその存在に執着する、その行いは仏道にて定義すれば紛れもなく悪。

故に女は理解している。道を乱され我執に囚われた己は、悪性への墮落者であると。

——だが、思い違えることなかれ。

いかに繕おうとも、女の性質は魔性。人を惑わし破滅へ誘う悪質こそ本領。

その内面の方向性、善と悪のどちらに傾く方が強大であるかは語るまでもない。

「ですから、正彦さん。貴方様が愛する人間はわたくしだけで良いのです。

神にも等しいその愛を、わたくしという色彩いろで染め上げてご覧に入れますよう」

己は女、女は女。

男性には想像もつかない領域で、己は愛に生きている。

この愛に広さはない。狭く閉じた価値観は、それ故に深度が計り知れない。

その深さ、女でなければ理解不能なその密度を、しかと思ひ知らせてやらねば気が済まないのだ。

「ならば成し遂げてみせるがいい。これほどに情熱を抱いて迫った女を拒んでは男が廃るといふものだ」

そんな女の求愛を、尚も揺るがぬ強き意志で甘粕正彦は迎え入れた。

「端的に言つてな、おまえの在り方は受け入れられん。

俺の愛する人々の輝き、困難に奮起し立ち向かう勇氣の意志と、悦楽に誘い生命の力を折らんとするおまえの欲望は対極だ。

おまえに聖杯は渡せん。俺の後継として認めることなど論外だ」

「そう、俺にとっての相容れぬ障害、つまり試練だよ。俺の信念と真っ向から反逆する意志が、こうして俺の前に立ち塞がっている。

避けては通れん。宿命は俺に突破せよと言っている。真逆であれ

ばこそ、残るのは意志で勝る者となるだろう。我が楽園ぼらいぞに懸ける思いが試されているのだ」

「その果てに迎える敗北ならば、おまえのものになるのも一興さだろう」

男と女が向かい合う。

互いの視線が交錯し、その瞳には相手の姿を映している。

交わした睦言も彼方に置いて、二人にあるのは独善的に邁進する狂愛のみ。

彼等の愛は互いの存在を尊重しない。我意のままに蹂躪することを良しとしている。

傍から見れば異常だろう。これほどに自己の欲望に傾倒した愛情も他にあるまい。

それでも彼等は知っている。互いに向けあう感情は確かに相手に対する愛であると。

互いに向かつて両者が歩み出す。

距離が縮まる。交わす視線ははつきりと相手を捉えている。

間近まで迫った両者。手を伸ばせば相手を抱き寄せることも可能になったその場所アで、

二人は己の殺意アを交わらせた。

男が降り下ろす軍刀。女が繰り出す掌の拳法。

刃が女の柔肌を斬り裂き、掌底が男の肉体に抉り込まれる。見れば両者の技法は完成され、威力、速度ともに超一級。

だがそんな優劣など二人の戦いでは重点とならない。ここに至れば武器の差など無意味、技量の質すら些末である。

互いに人を超越した魔人同士。そうと思えば条理の法則を覆すなど容易いこと。通常の武技を競い合つて何になるだろう。

究極に近づいた両者であればこそ、そのカタチは陳腐になる。彼等の戦いとは、そのような簡潔極まる一言にて言い表せる。

渴望する想いの質量、どちらがより強く自己の欲望を押し通せるか、単純明快な闘争がそこにあった。

その最中、魔性菩薩たる女が感受するのは歓喜の恍惚。

受ける痛みが心地好い。流れ落ちる血が熱い。

痛みの一つ一つが甘粕カハレから与えられるものだと思いと、それだけで興奮に身が震える。

もつと痛みを、もつとこの快感を与え合おうと、魔性菩薩はその魔技を振るう。

「不浄、辛苦、無常、無我、奥義——四天道！」

詠天流・四念回峰行。

分身とも見間違う高速の四連打。その技の質は多重次元屈折キシユア・ゼルレツチにも迫っている。

迎撃は英霊の技量でも不可能と言える領域。逃げ道を取り囲んでいく四点打撃は、それだけでも必殺足りえる脅威である。

その魔技を、甘粕正彦は真つ向から迎撃する。

正面からの繰り出された第一打。斬り払う。そこに背後からの第二打が奇襲となり、甘粕の身を穿つ。

続く第三打、第四打。だが先の二打で対応を見抜いたのか、一閃の内に捌き切る。

仕上げとばかりに渾身の力で放たれた五度目の打撃、そこへ返礼にと軍刀の斬撃を浴びせかけた。

鮮血が散り、女が退く。

攻防を制したのは甘粕正彦。攻め手たる女の方がより深い傷を残す結果となった。

「ふ、ふふ……ああ痛い、痛いわあ……うふ、うふふふ……」

だがその顔に浮かぶのは苦悶ではなく、絶頂に至ったような至福の表情。

男から与えられる刺激の総ては、魔性菩薩たる女にとっては最上の悦楽へと繋がっている。

「斬られた痕が熱い、血が流れ出す感覚が冷たいの。ああだけど、こんなに痛くて苦しいのに、それさえも甘く蕩けそうな快感に感じられる。」

ねえ正彦さん。これは貴方様の愛なのでしよう？ 貴方様がわたくしを見る、貴方様がわたくしに触れてくる。それだけなのにこんなにも満たされるのは、これが貴方様の愛だからなのでしよう？」

「無論だ」

情欲に狂う魔性菩薩に、甘粕は動じることなく肯定を告げた。

「俺が与える試練いたみはいつだって愛だ。その中から生まれる輝きを俺は愛している。」

受ける苦痛に屈するな、立ち上がり勇気を示せ。そこに現れる光こそ俺が求めてやまないものだ。たとえ何色であれ、な」

信じる思いに熱意を乗せて、口にするのは異質なる親愛のカタチ。彼等は互いに自身の愛を信じている。たとえ理解されなくとも、揺らぐことのない己の信念で。

常人が共有する価値観など二人の間では無意味。なぜなら二人共、己の欲する心のままに人類すら超越する意志で臨んでいるのだから。その信念の強度は神の域に達している。彼等の意志を挫くことが出来るのは、同格である互いの存在のみである。

「故にその輝きに対し容赦もせん。生半な光であれば粉碎されると覚悟しろ」

宣告と共に繰り出すのは、甘粕正彦の有する兵器創形。

展開される戦略規模の兵器群。一個人に向けるには過剰すぎる火力を、躊躇うことなく振り下ろした。

標的の女はおろか国一つさえ焼けるだろう総威力。如何に魔性菩薩といえど、その大破壊をまともに受ければ砕け散るのが必定である。

「まあ、まあまあ、そんな無骨な一物イチモツを持ち出して、わたくしを貫こうと仰いますの？」

だが向けられる女に、その脅威に対して恐怖する様子はない。

むしろ白けると言うように、嘲りの笑みを浮かべながら鉄の殺意を

眺め見た。

視界に映る兵器群、それを包み込むようにして手を広げる。

「無粋、ですわ」

そして広げた手が閉じられた瞬間、そこに存在していた兵器も消失していた。

「作り物ではもうわたくし、とても満足できません。

この肢体を剥き出して、思うままに蹂躪するのは貴方様の御手でお願ひいたします」

開かれた両の手から出てきたのは1立法センチほどの小さな四方体<sup>キューブ</sup>。

それこそが消失した兵器群の成れの果て。その体積も破壊力も極限まで圧縮された凝縮体である。

ideas『トラッシュ&クラッシュ』。視界の中で手に包んでしまえるならば如何なるものでも圧縮可能とする特殊スキル。

それは実際の手に収まる範囲だとは意味しない。全体像さえ視界に収まれば数kmもある巨大構造物だろうと圧縮できる。

「ほう——」

だがそのスキルは本来、魔性菩薩のものではない。

本当の使い手であった少女は今、魔性の権能の一部として取り込まれている。

ならば、その意味するところは——

「内に在る者の力を使ったか。我欲に耽溺する化生として面目躍如といったところかな」

「クス、ええだってこんなにも甘くて美味しいんですもの、彼女たちの心は。

貴方様への愛を知って以来、こういう乙女心がいつそうの好物になりましたの。その味わい深さがよく分かります」

優しく女が撫でるのは、自身の変化のために取り込んだ少女たち。全ての発端となった少女、その少女のエゴから生まれた少女たち。

総てが女の手により狂わされ利用された哀れな犠牲者だ。

利用されている己への慚愧、自分たちの願いを踏み躪る女への怒り

は、女の一部と化して尚も抵抗の意志を示している。

それはなんといい意地であろう。あるいはかつての女ならば、彼女等の意志こそが敗因となり得たかもしれない。

「今のわたくしには彼女たちが理解できる。それはつまり、蕩かしてわたくしのモノにすることも容易ということなのですよ」

そんな少女たちの矜持を、女はいとも容易く蕩かす。

その無念も、その怒りも、唯一無二たる彼女たちの恋心ですら、女の舌の上で転がされる果実に過ぎない。

総ての欲望は女のモノ。求め欲し執着する心を持つ限り、魔性菩薩の手の平からは逃れられない。

「貴女はわたくし。わたくしは貴女たち。さあ、共に欲のままに溺れましようや」

完成された欲界が少女たちを包み込む。

それは圧倒的な快樂の芳流。叛逆の意志までも蕩かされて、余さず女の欲となって同化した。

これにて女を阻む要因はなくなる。

溢れ出る欲望は一切の容赦なく、求める男を蹂躪するために発揮される。

それは即ち、同化した少女たちの欲も思うままに行使されることを意味していた。

「感じましたる欲のカタチは『盲目』。欲したモノは優しさ」

「みんなが私を怖がる。みんなが私から離れていく。」

ああどうして、私は普通なのに。どうしてそんな目で私を見るの？

私は悪くない。だってみんなが虐めるから、壊れていくのは私のせいじゃない。

だからお願い、この手を取って。私のことを好きでいて。

どうしても愛されず憎まれるなら、潰して壊して、身も心も私のモノに」

初手に吐き出されたのは、異形の巨腕を持った欠けた少女。

争いに向かない気質、傷つけられることを恐れる臆病さ。それらとあまりに不釣り合いな悪鬼羅刹が如き破壊の力。



限定された認識障害により自身ではその力を自覚できない。故にその少女は無垢なるままに破壊を繰り返す。

見るべきものを見ようとしない。その愛が辿る末路は愛する人すら壊して潰す悲劇しか有り得ない。

ならばいつそ壊れたままでいい。潰して小さくしてしまえば、傷つけられることはなくなるから。

盲目に鎖された自閉の愛情。純心無垢なるその想いは、だからこそ子供のように残酷だった。

「この腕に抱かれてください——ブリュンヒルデ・ロマンシア死がふたりを分断つまで」

伸びてくる巨悪の腕。対象への愛が深ければ深いほどに、その追跡は精度を増す。

愛しい人を捕えて離さないために。独占愛に懸ける想いの重量こそこの腕の力だ。

ならばこそ絶対に逃げられない。女が抱くこの熱情は、どんな概念よりも強大だと確信している。

射程も速度も超越した領域で、巨腕は男を確実に包み込んだ。「我も人。彼も人。ゆえ対等、基本である。」

万人に当て嵌めるべきこの道理。まして愛する者であればまずもってそうであろうが」

男を捕らえた巨腕の圧縮プレス。何物も潰し壊すその力に、男は真っ向から対抗する。

閉じかけた腕がこじ開けられる。盲目的に求める狂気おそいを、甘粕正彦は強さだとは認めない。

「己を見ず、相手を見ずに、それで愛がなんだと語るなど片腹痛い。そんな懦弱な想いに捕われるほど、俺は不拔けてはおらん！」

そして振るわれた軍刀の一閃が、両の巨腕を粉々に打ち砕いた。傷つくことを恐れ、自閉に囚われたままでは光はない。

如何に狂気の域にある熱情であろうとも、一方通行のままでは歪みは正されないのだ。

それでは正道をいく信念には届かない。そう信じるが故に甘粕正彦にとってこの結果は必定だった。

「では次はいかがでしょう。彼女の愛は、今のわたくしと少々似ているもので」

次に解き放たれた欲望は、刃が如き孤高の鋭利さを持つ少女。

己という世界に一点の汚点も許さなかったプリマドンナ、それも今や女の欲界の一部。

憤死級の屈辱であろう現状でさえ、蕩かされた欲望は一切の狂いなくその権能を振りかざす。

「感じましたる欲<sup>アイ</sup>のカタチは『純心』。欲したモノは恋人への献身」

「私の愛に理解は要らない。全ては私の中で完成しているから。

話し合う行為は必要ない、それほど強く愛してる。

触れ合う行為は必要ない、その程度の刺激では物足りない。

愛を告げられる事も必要ない、相互理解なんて求めてないから。

だからどうか、愛しい人。目を閉じて口を噤んで無価値になって、私の中に蕩けて下さい。

名前も人間性も捨て去って、私という揺り籠の中で、永遠に幸福でいてほしい」

理解も共感も求めない、自らが信じる愛のカタチこそ至高とする快樂のエゴ。

その在り方は一切の人間性を認めていない。たとえ愛する者でもそれは変わらない。

総てが人形であればいい。身も心も甘く溶かして己の中で一つになれば良いのだ。

それこそが真なる幸福のカタチ。そうして垂らされた蜜<sup>どく</sup>の一滴は文明圏を侵食して溶かし尽くす。

あらゆる倫理に囚われない完結した愛情。己の快樂こそ相手の幸福と疑わないから容赦もない。

「私と一つになりましょう」

サラスヴァティー・メルトアウト  
「弃財天五弦琵琶」

男を呑み込む水流の渦。それは対物理より対心にこそ真価を發揮する。

良識・道徳を溶かし共同体を崩壊させる毒の渦に浸されて、しかし甘粕正彦は揺らがない。

「自らの在り方こそが絶対と信じ、揺らぐことなく孤高を貫く気高い信念。

なるほどその姿は美しい。どこまでも己の理念を信じ抜く、そうした輩が俺は嫌いではない」

「だがあいにく俺は人形ではない、人間だ。

おまえが他者の価値など知らんと言おうが、俺とてそちらの幸福論など知ったことではない。

侵略されれば抵抗する。当たり前前の道理だ。有象無象を対象に取るような毒では俺には足りんよ」

そうして揺らがぬままに振るわれた剣閃が、蜜毒の海を二つに断ち割った。

容易く砕かれた二人の欲望。チカラだがこの結果は必然である。

甘粕正彦の持つ聖いまだ四文字の大権能。下位の権能である少女たちの力では抗し得ない。

故にこうなることは分かりきっていた。それは魔性菩薩たる女にしても同様の認識であった。

行使する力では甘粕正彦を打倒できない。

それを理解しながら繰り出した理由を問えば——理由なし、と答えが返る。

そう、意味なんてない。

ただ好きなのだ。趣味なのだ。

少女たちの欲アイを余すことなく理解して、その上で塵芥の如く投げ捨てることかたまたまなく快感なのだ。

最低最悪なその感性。そんな己こそ善しとして、魔性菩薩はその無意味さに興じている。

無駄な趣向、無価値な行為。

その無意味さこそ悦楽の本質と捉える魔性菩薩にとって、自身の行

動は何一つ疑問に感じることはない。

大局的な目的があろうと目先の欲に囚われる。その無軌道ぶりはどこまでも欲に忠実な享樂思考だ。

そして無論、求め欲する相手がいるならば、その執着は己の物とするまで収まらない。

「この娘は貴方様もお気に入りでしたね」

持ち出されたのは、始まりの少女。

ある一つの目的のために月の裏側より聖杯を手に入れるべき行動した。

繰り返される戦争の輪廻に一石を投じた、裏側で起きた戦いの発端となった者だ。

「ムーンセルを狂わせるために作り出した因果の一つ。上手く事が運べば万々歳、いかずとも二の矢三の矢と用いていく心算でしたが。

まさかこんなに上手く、わたくし好みの展開に事が運ぶなんて、この娘には感謝してあげなければいけませんね」

少女の行動が発端ならば、その行動の動機を作ったのが女である。

元は一介の管理AIに過ぎなかった少女。創造主ムーンセルに手を出すなど許されざる反逆行為だ。

そもそも少女にはそんな行動に思い至れる機能がない。マスターたちの健康管理というルーチンワークをこなすだけの機械に等しい。

そこに一滴の欲グダを垂らした。結果、その在り方は限りなく人間に近くなり、存在意義を超えた欲望にて動き出すようになる。

その欲望の正体とは、自分に手を差し伸べてくれた相手への、初心で儂い恋心であった。

「おかげで退屈せずに済みました。若人たちの甘い逢瀬のひと時、年甲斐もなくこそばゆい思いでしたわ。

その純情も、決心した行動も、見ていて本当に飽きませんでした。ですから最期まで、わたくしのために役に立ってくださいね」

そしてそんな少女の思いを知り、尚も踏み躪るのが魔性菩薩。

たった一つ胸に抱いた恋の気持ちさえ玩具にして、己のための武器として使用する。

「感じましたる欲<sup>アイ</sup>のカタチは『誓い』。欲したモノは愛する人の救済」  
「自身に残されたのは一夜の記憶。繰り返される時間の中で重ねた蜜  
月の一時。

特別でないアナタ。どこにでもいる人間<sup>アナタ</sup>。

そんなアナタの差し出ししてくれた手が嬉しかった。私にとってそ  
れは、何より貴い奇跡だった。

だからアナタのために駆けましよう、38000光年の闇の中を。  
世界がアナタを殺すというのなら、私こそが世界となる。たとえ自  
分が壊れたって構わない。

だって残像のような私にとって、アナタとの思い出こそが本当の真  
実だから」

語られるのは、少女が秘めた想いの全て。

自己の破滅さえ厭わずに創造主へと挑んだ勇氣も、全てはそのため  
に。

胸に灯った想い、それが無為に消えることが耐えられなかった。

自分が間違っているとは分かっている。この行動があの人<sup>の</sup>意に  
沿わないものだとも。

それでもその残酷な運命を許容できなかった。あの人<sup>が</sup>辿る結末  
を容認できなかった。

たとえ世界を壊してでも、大好きなあの人<sup>に</sup>生きてほしかった。

少女の想いに大義や理想はない。

誰しも抱ける恋心、そこに懸けた想いの深さ。

それは弱者であった者の矜持。勇氣を持って挑んだ意志は、世界を  
も侵し得る力となる。

「私の影は、世界を覆う——  
カースド・カッティング・クレータ  
C C C  
」

膨れ上がった影の津波。世界を犯す虚構の陥穽が男に襲いかかっ  
た。

広がる影の正体は、原初の女神の大権能による事象<sup>ワールド・ページ</sup>の変換。

大地を生み出した地母神、万物の大元である『根源』に根ざした力。

その情報を写し出し、使用者が望むままの世界で、今ある世界を握りつづす対界・対星の宝具である。

母なる女神の権能は、父たる主神の権能と同位にある。

ゆえにこの影は打ち破れない。まして万物の創造主という側面では、原初にて名が失われた女神の方が格上だろう。

大地に生まれた者は母なる神の権能には逆らえない。それは生命のシステムそのものへの反逆を意味する。

最大規模で展開される母神の抱擁は、たとえ原初に対抗する力があろうと防ぐことは敵わない。

「俺・摩訶迦羅耶娑婆訶——」

その不可能に対し、真正面から挑むのが甘粕正彦という男である。

何者も逆らえない女神の権能。

そこに例外があるとすれば、それは魂の在り方が問われることになる。

大地を離れ、宇宙を目指し、知性体としての幼年期が過ぎた時こそ、この権能は破られる。

それこそが母なる者の願い。名を失った女神は子の巣立ちの時を待っているのだ。

だからこそ甘粕正彦は立ち向かえる。

己の意志力で限界を超え、人間の枠組みを凌駕した男。

猛り燃えるその魂は、とうに地球ガイアの手の中から飛び立っているのだから。

「——大黒天摩訶迦羅アアア!!!」

世界を生み出す創造の権能に対抗するのは、世界を平に新生する破壊の権能。

曰く、恐怖パニすべき者。寿命の尽きた世界を破壊し次なる世界の創造に備える役割を持つ最高神の一角。

金銀鉄の三都市を焼き尽くした三又戟トリシュユラ。その一撃は世界を塗り潰していく虚構セカイを根刮ぎ吹き飛ばした。



その宝具とは、人類全ての欲望を受け止める大地母神、あらゆる欲の捌け口となる生贄の在り方。

人々の意識を己の内へと招き入れ、何十億という快樂の渦で構成される樂土を築き上げる。

それは知性を持ち、欲望という感情を構築できる生命であれば誰であれ逃れられない極樂淨土。

知性構造が異なっていようと関係はない。そこに欲がある限り防ぐことは不可能だ。

なぜならこれは苦にあらず。総ての知性が求めるべき樂の極地がそこにはある。

たとえ一瞬でその人生を昇華させられたとしても、呑まれた者らは本望なのだ。それほどの快樂が女の中には渦巻いている。

知っていても逃れられない。知っていてもさえ求めてしまう。欲望の化身たる魔性菩薩には抗えない。

人類総ての欲望を呑み込んだ快樂天、それをたった一人の男に向けて解き放った。

「———」の世、全ての欲

何十億の快樂が渦巻く混沌。

勇氣も信念も蕩かし墮とす樂土の地獄。

魂の尊嚴を否定する墮落の法に、回避という概念など何の意味もなさず、

混沌の中へと甘粕正彦は呑み込まれていった。

絡み合う蜜と蜜。溶けて混じり合う甘露の海。

交わり喘ぐのはその精神。一切の虚飾を脱ぎ捨てた裸の自分。



肉欲を介した快樂など二流の兎戯。真の絶頂、最高の愛欲は魂の逢瀬の果てにこそ訪れる。

「あ——あああ、ああああああああ!!!」

女が嬌声を響かせる。

受け入れた男の欲望に貫かれて、早くも女は絶頂に達していた。

「ああ、イイ、いいわあ……最高！」

すごいのお、こんなの始めて！　こんなに頑強かたくてたくましいなんてえ……。

無理イ！　こんなの駄目えええ！　わたし、すぐに昇天はててしま  
うううう!!!」

なんと濃密な人生であろうか。なんと雄々しき信念であろうか。

こんなにも剛直な生命には出会ったことがない。まぎれもなく過去最高、並び立つものなどない快感だ。

何度絶頂イつても絶頂イき足りない。これこそが至上の快樂と確信を以て断言できる。

貴方の気概がこの身を焦がす、その勇氣に満たされる。

己と相反する欲望のカタチ、その熱さが突き抜ける度に身悶える。

ああ、心地好い。人類最上級の強き在り方、それが自分の掌の上にある。

今よりこの益荒男の総てを蕩かす。その果てにあるだろう快感を思い、欲情は堪らぬ疼きを感じていた。

「さあ、わたくしとまぐわいましょう。

万色一体となった魂の閨で、裸になった心と心で交わって

どうかこの快樂に身も心を委ねて、何もかもを捨て去って溺れてしま  
いましょう」

快樂浄土の理が駆動する。

如何なる正義、矜持を抱こうとも逃れられない悦と樂の混沌流砂。呑まれた者は沈んでいくのみ。底知れない気持ち良さに抱かれながら、その人生の総てが蕩かされる。

そんな他人の快樂がそのまま己の快樂に変じていく。自であり他である天は、万事が自己愛に完結した欲界。

すなわち他化自在天。総ての善悪欲望を受け入れる器。欲望の権化たる魔性の神格。

「あああ、だけど……どうなのでしょう？」

「こんな極上の人生を味わってしまったら、わたくし、他の薄味じんせいで満足できるのでしょいか」

女に思い浮かぶのはそんな懸念。

快樂の絶頂、その究極を知ってしまった果てに、はたして自分が満たされるモノが地上には残っているのか。

有象無象の生など、甘粕コシに比べれば如何程もない雑多な味。全てが物足りなく感じ、二度と絶頂を味わうことが出来なくなってしまうかもしれない。

他者の中に快樂を見出す魔性菩薩にとって、それは死活問題かもしれない。

「まあ、好いですか。後の話など、どうでも。

この瞬間に身を貫く快樂こそ総て。今に満たされていれば、未来さきなんてその時に考えればよい」

懸念に対しそのように結論し、女はただ快樂に耽る。

その在り方はどこまでも欲望のままに。今の快樂にのみ向いている。

それ以外のことは全て無価値。どんな懸念があろうとも、女の欲望は止まらない。

「ああいえ、いつそそれなら、あああ、ああああ!!!」

二人共この至高の快樂の果てに、身も心も溺れ尽きてしまうのも悪くないかもしれません」

「そうです、それがいいわ。それこそわたくしの愛にふさわしいカタチ。

ねえ正彦さん。満たされたこの六欲の浄土の先に、共に至るべき涅槃へと旅立ちましょう。

究極の悦と樂の果て、重ね合わせた心身の中で入滅を遂げる。ああ、それはなんて禁忌に満ちた甘い響きなのでしょう！」

「だから、さあ！ 人生も、信念も、余計なものは総て捨て去って、欲



女の中に残った理性の声が現状の趨勢を判断する。

深入りすれば自壊するのはこちらの方。ここは一度退いて別の攻め口を模索すべき。

それは勝算を考えた確かな事実。理屈で算出した勝機を冷静に告げていた。

「——駄目！　それは、絶対にツ!!!」

そんな理性の声を、女の感情は断固として拒絶した。

女が一步を踏み出す。

肉体の無い身の上での比喩表現だが、決して遠いものではない。

輝き溢れる男の芯へ、この氾濫の元凶となつているものへ向けて進み出したのだ。

無論、無事では済まない。

一步の前進毎に崩壊は加速し、存在の亀裂は広がっていく。

それは痛かったし苦しかった。気持ちいいなんてこれっぽちも思わない。

悦楽こそ至上におく女にとって、それは有り得ない判断。己の快感に繋がらない苦行など魔性菩薩の在り方から外れている。

それでも女は足を止めない。

理由なんて自分でも分からない。我ながら意味不明だ。

だってこんな気持ちよくないこと、何の価値もない。常の自分なら即座に否定している。

苦しいことなんてさっさと放り出してしまえばいい。そうやって楽な事だけを求めていれば、自分は——

「いいえ、それは駄目よ。だって——」

仮初めの意志が剥ぎ取られる。その人間にとつても最も正直な部分が曝け出される。

その真意、魔性の深淵の中より現れる本音、それがようやく、女から吐き出された。

「ここで逃げ出してしまったら、この”恋”までが無価値になってしまっじゃない!!」

それこそが、女の本音。遥かな内に秘めていた真実の気持ち。

他人の人生に悦楽を見出してきた女。

それは即ち悦楽を他者に依存すること。裏を返すなら、己の人生には何の悦楽も見出せなかったことに他ならない。

魔性の奥に隠された根底の歪み。己自身ですら気付いていなかった欠落に、ここにきてようやく気付く。

他人を無価値と呼んだ女。

だが本当に無価値だったのは、そんな風にしか世界を見れない自身自身だ。

何も持つてない自分。空っぽな自分。

そんな空っぽな器だから、他人なんてものを受け入れられた。

受け入れてその価値を貶めて、己というちっぽけな自尊心を満たしていた。

ああ、なんて無様——神だ菩薩だと嘯いていた己の真実が、こんなにも矮小なものだったなんて。

けれど、そんな無価値な人生の中で、本当の”価値”と出会うことが出来た。

他人の中に欲望を求めてばかりだった自分。それが初めて、自分の中から生じた欲望で動くことが出来た。

そのカタチは浅ましく歪んで、相手の幸福なんてこれっぽちも考えない自己愛であつたけれど、想いを抱いたことだけは本当だ。

それを嘘には出来ない。夢見るこの想いを否定することだけは、決して許してはならないのだ。

歩を進める、想いの先へと。

崩壊していく自身への痛み。今にも崩れ落ちてしまいそうな喪失と戦いながら。

そう、戦っているのだ。生まれて初めて、女は試練に真正面から立ち向かっていた。

散々に他者を貶めてきた女。自身と同じ想いを持つ少女等を踏み

躪つてきた女。それでも前進する意志だけは、真つ直ぐに。

その意志は実を結ぶ。

輝きを放つ男の芯、目指したその心へと触れる。

後には何の打算もない、胸に秘めた想いの総てを吐き出した。

「好きです——愛していますッ!! 世界なんて要らない、わたくしは貴方だけが欲しいッ!!」

ただ純粹に、真つ直ぐに、その想いをぶつける。

それは常の魔性菩薩の姿からは余りに乖離したもの。

ただ恋に憧れて勇気を振り絞る、一人の乙女の姿がそこにはあった。

「どうして、です? どうして貴方は、そうまで強く在ろうとするのです?」

そんな生き方は苦しいはずです。辛く険しい道でしょう。なぜそんな道に、自ら足を踏み入れようとするのですか!?!」

女にとってはそれは最も理解し難いこと。

自他に苦難を求める男の有り様。悦楽こそ真理とする女とは真逆の道。

それを理解し呑み干さない限り、この想いが届くこともないと分かったから。

「どうして、貴方は悦楽を受け入れてくれないのです!?!」

持てる想いの全てを乗せて、女は男へと問いを投げかけた。

「——悦楽には俺の好きな勇気がないからだアッ!!!」

そんな女の想いを、男は一切の容赦なく跳ね除けた。

「ならば俺も問おう。なぜおまえは悦楽にそこまで拘る?」

「悦楽に身を委ね、そこで得られる満足感。それでどれだけ心地好かろうが、所詮は一時のみの事だろう。」

そんなものが真理? それこそが人間の本質だと? 有史以来に積み重ねてきた人の歩みを、その程度のもので語り終えて本当にいいのか?」



「魔性菩薩。どこまでも人の楽を追求した理。だがその概念には未来がない。

ああだが否定はせん。それも人間の在り方の一つなのだろう。しかし——」

去りゆく女に、甘粕は最期に告げる。

女より向けられた愛に対する、決定的な断絶を。

「——さらばだ、殺生院祈荒。おまえの欲と、俺は交わらない」

その言葉をしかと耳にして、女は数多の欲と共に去っていった。

弾き出された外で、敗北した女は倒れた。

その身にはもう何も無い。

取り込んだ少女等も、書き綴られた物語も、総てが剥がれ落ちていった。

倒れる女は、ただの女。何一つ力もない、たった一人のか弱い女だった。

「ああ……知ってます、これ……」

仰向けに倒れた顔は、上を向いている。

目は虚空を映していたが、意識に映っているのはまるで別の景色だった。

胸に渡来する空虚さ。

痛いとか苦しいとかではない。

寂しくて、悲しい。これも知らない感情だ。

勿論、気持ちよさなんて全然ない。それどころか、快樂そを求める事自体が虚しく思える。

女にとっては毒のような感情だ。そしてそれを拭うことは容易ではない。

視線を動かす。



見える先には恋焦がれた男がいる。  
距離にすればほんの僅か。だが今はその距離が、とても遠く感じ  
る。

自分は敗れた。この恋は届かなかった。

もはや追い求めることさえ出来ないのだと、そう理解した。

「失恋、と。そういうのですよね……」

女はただ、静かに泣いた。

倒れ伏した女。

敗北した魔性菩薩に、勝利者たる月の魔王。

その結果は誰の目にも明白。故に断罪者が誰であるかも明らかだ。

甘粕正彦が軍刀を振り上げる。

眼が捉えるのは女の姿。哀れなその姿に対し、情けを見せている様  
子はない。

過程がどうであれ、人類殲滅を企てた女。その罪業は明らかだ。

その存在は悪。紛れもない外道。その所業は決して許されない。

故にその処断には正当性がある。何人も貶める自己愛に耽つてき  
た女には、それを止めようとする者もいるはずがなく――

「なんのつもりかな？ 童話作家」

だからこそ、女を背に立ち塞がったその存在を見咎めた。

「なんのつもりか、だど？ 決まっている。」

サーヴァントとは、マスターの前に立つものだ」

迷いなく言い放つ。

魔性菩薩の在り方、その最低最悪な性を理解しても尚、その忠義は  
薄れない。

童話作家はどこまでも、女のためのサーヴァントだった。

「俺の役割は終わった。かくて物語は悲劇で閉じ、主役は己の望みを

叶えられず涙を零す。

ならば最期は後始末をつけるだけ。俺の描いた主役と、地獄の底まで共にする」

ただの物書きである彼に戦いの力はない。

甘粕がその軍刀を振り下ろせば、背に置く女ごと斬り捨てられるだろう。

盾にすらなっていない。女を守ろうとする行動としては、ただ無力としか言えない。

だがそうではない。

無力であるなど百も承知だ。別に女を生かそうと考えて前に立っているわけではない。

外道と道を同じくした者としての責任を取る。これはそれだけの話。

己が描いた悲恋の物語と運命を共にする。それが作家の責任だ。

「まあ、個人的にはかなり面白かった物語だったがなあ！

恋に焦がれ、妄想のままに突っ走り、果てには妖怪変化までしておいて、結局相手にされずにフラれる馬鹿女！

痛快だ、傑作だ！ 少年少女の奮闘劇より、こちらの方が俺好みの筋書きだ」

それでも世を捻くれて見る厭世家は、敗者に対しても容赦のない毒を吐く。

自己の価値を見出せず、他者の人生を罵倒しながら語る、どこか女とも通じた在り方で。

「だが作者としては無念だ。主役の望む結末へと、俺は至らせることが出来なかった。

これはその責任だ。この結末へと導いた者として、付けるべき責務があるというだけだ」

それこそがこのサーヴァントの仕え方。

マスター

主の人生・在り方を観察し、望み得る最高の高みへ至る物語を書き綴る。

その価値基準は善悪では測れない。元より偏屈な厭世家だ。大衆

の善性など皮肉混じりに目を背けるだろう。

彼にとつての光とは、懸命に幸福を求める姿。人生を懸けて自らの幸を追い求める姿にこそ、世に灯る最期の灯火と思えるのだ。

故に童話作家は自らの物語と運命を共にする。

たとえ結末が悲劇に至ろうとも、その結末に殉じることには何の迷いもありはしない。

そんな覚悟を見届けて、甘粕は満足げに笑みを漏らし、掲げた軍刀を鞘に納めた。

「なんだ、とどめを刺さんのか？」

「すでに決着はついた。あえて俺から手を下すこともない。

彼女とて人の輝きの一つと認めているからな。性質はどうあれ、人格にまで至った強さは素晴らしい。惜しめない賛辞を送ろう。

彼女の魔性が再び人々に仇なすとしても、それはその者たちの試練だろうさ」

「賛辞、か。要はこの最低な魔性の女も、おまえの愛するその他大勢と扱いはさして変わらんというわけだ。

ハッ、どこまでも報われんな！ こいつは最低の女だったが、男の趣味までも最低とは呆れをこえて爆笑ものだ」

どこまでも毒を吐くその口は、キャスターにとって信念に等しい。絶望の影を持ったその瞳で、世を悪しきと捉えて容赦なく現実の悪性を書き綴った創作作家。

彼の人物評はその裏の裏まで鑑定する。そして悪意を通したその口で相手の価値に駄目出しするのだ。

だがそれでも、的外れな偏見で物を言うことは決してしない。

残酷な現実を直視する童話作家は、だからこそ曇った主観で物を語る  
ことが許せない。

「ならば次はおまえのことを知りたいな。従者サーヴァントと言うが、その覚悟をそれのみで語り終えるのは些か惜しい。

なあ、教えてくれよ童話作家。その主マスターへ掲げる忠義は、主演に向けた矜持か、男としての情愛か」

友好に接する中でも発揮される甘粕正彦の魔人性。

相対していることも困難な意志の重圧が込もった問いかけに、キャスターは眉一つ動かさずに答えてみせる。

「情愛だど？ 馬鹿を言え、俺は人間を愛さない。こんな女にくれてやる愛など一欠片とて持ち合わせるものか。」

あるいはこいつが元のまま、人を外れた神か化物の類であれば、愛してやるのも一興だったかもしれない。

だが、こいつを見ろ。これのどこが神だという？ そんな大層なものであるものか」

「馬鹿で悪質で淫売で最低な、ただの人間だ。」

恋を知り現実に挑んで愛に敗れた、一人の女だ」

「故にそうとも、俺が向けるのは我が舞台の主役に対するプライドだけだ。」

俺が描いた物語の主役に、俺はその作者として共にいる」  
迷いなく断言する。

その想いが実か虚かは分からない。それでもその口から語られた以上は、それがキャスターにとつての真実となることは間違いなかった。

「作者として、か。確かに名立たる童話作家としてはらしいのだろう。しかし——」

「俺という男の人生観は諦観に支配されている。世の物事がそう上手くいくはずがないと」

甘粕の言葉を遮り、割り込むようにキャスターが強い口調で語りだす。

「春を控えた寒い夜、男は確かな愛がこの世にあると知った。両親に捨てられ、世間に疎まれ、それでも心に優しさを持ち続けた少女の姿に、男は愛という言葉の真理を見た。」

身体中が擦り傷だらけ。幸福など欠片も知らない身でありながら、必ずいつか幸福は訪れると世を慈しむ少女の在り方は一つの奇跡だと思つた。

彼女の祈りは報われると思つた。彼女のような人間にこそ奇跡とは訪れるべきと思つた。数年後、古くからの友人である富豪の妻とし

て迎えられて、祈りは成就したのだと確信した。

——彼女の無惨な死体が、街はずれで発見されるまでは」

「事件の顛末など関係ない。世に愛はなく、役には立たない。我々はみな醜いのだと、そんな解答も意味はない。

なんのことはない、男はただ怖かっただけだ。己が真実だと信じる愛の姿が、偽物であると思い知らされることを恐れた。

自分は碌でなしの非人間。彼女に触れる者としてふさわしくないと、そんな理論を逃げ道として、ついに女に触れることをしなかった。

幸福になるべきと思うなら、己自身で幸福にしてやればいい。その手を取って、悲惨な人生に報いるだけの幸せを贈ればよかった」

「心は安定を求めて、男は厭世家となった。人は死以外で幸福にはなれないと、そう哲学において目を背けた。

根底にある真の弱さから逃げ、世の絶望を物語にして書き綴りながら奇跡を待つ、それがハンス・C・アンデルセンという愚かな男の人生だ」

語った人生は己自身。

他者に対するのと変わらない毒舌で、キャスターは自らの生涯をこき下ろした。

「——どうだあ!! 俺の前で人生を語ろうなど半世紀早いわ!

何やら俺の弱さでも語ろうとしていたようだが、馬鹿め! 指摘などされるまでもない」

「こんなものは描き方の問題だ。読者の心証に合わせ、場面を別の視点から描くのと変わらん。

伝えるべき主観はなにか。記すべき客観はなにか。作家はそれを思い悩みながら、書きたいものと書くべきものを紡いでいく」

「舐めるなよ。己自身も客観視できなくて、何が物書きなものかよ」

睨みつけるキャスターの眼光を受け、甘粕は快笑した。  
「なるほど、確かに。これは余計なお世話だったようだ。

さすがは稀代の童話作家。俺如きが語れることなど端から無かったらしい」

「その通りだ。元より我が身の武器はこの口先のみ。だからこそ、た

とえ一寸先にこの命が散ることになろうとも、俺は忌憚なく他人の<sup>ものがたり</sup>人生を語り続けるぞ」

宣言し、キャスターはまた一つの<sup>ものがたり</sup>人生観を語り始める。

その対象は言うまでもなく、眼前に立つ月の魔王たる稀代の益荒男、甘粕正彦。

「結論から言えば、貴様は物語の役者として失格だ。0点どころかマイナス点だ！」

「まず主役としてはどうか。確かにその善性は読者の視点に立つのに向いているといえる。

だがそれ以外が壊滅的だ。おまえは余りに強すぎる。展開すべてがヌルゲーだ！」

行動力の高さから展開に詰まることがなく、挫折や葛藤など無きに等しい。敗北しようが即座に乗り超える。

いつそ追い詰められ絶望に向かう状況へと放り込んでやればと思うが、そうなったとしても最悪だ。

どんな絶望の物語であろうが、おまえなんぞが出た時点で痛快劇に置き換わる。読者の誰がおまえに絶望など期待するものか！

初めからほぼ勝ち確定。何某ならば仕方ない、その系統の輩と同類だ」

「ならば敵役としてはどうか。これはもつとひどい！」

敵役とはそもそも、倒されるべきものとして存在している。故にその悪意は明確に描写されなければならない。

悪意とはそれ自体が敗因だからな。たとえば善性の質に属しているが、悪という矛盾はその信念に決定的な弱さを与える。

魔王が持つ自己矛盾。如何に強大な存在であろうと、その弱さによつて最期には正しき善性の下に討たれる。それこそ物語の王道だ。

だがおまえの場合は弱さが弱さになっていない。自己の矛盾などお構いなし。理屈がどうこうではなく単純に気にしないという阿呆ぶりだ。

結果、魔王側が正しき勇気力で主人公を倒すという無茶苦茶が起こり得る」

「勇者をやるには限度を知らず、魔王を張るには悪意が足りない。物を考える頭は持っているくせに、いざとなれば呆気なく放り出す。おまけにその方が強いときたものだ。」

理想はある。正義もある。それらを叶えんとする気概もある。だがそれ以上に自身の欲望が先行して、何もかもを御破算にする大馬鹿者。

役割の領分を超えて暴走する個性。何処までも物語を破綻させる劇物。それがおまえという人間の本性だ」

「ああくそ！ 自分で語っていてムカついてきたぞ。このご都合主義め！」

死ね！ 碌に信念も背景も描写されず、ただ最強とかいうクソキヤラにでもやられてろ！」

心底から気に喰わないと、世を悲観する厭世家ネガティブな作家は、いい空気を吸っている前向きポジティブな男を罵倒した。

「的確な指摘、痛み入る。確かに俺はその通りの男なのだろう。」

限界など知らん。加減など分からん。どんな物事にも全力で挑んできた。意志の力は不可能という壁さえも超えると信じている」

「それが偽りなき俺という男の姿。変えるつもりなど毛頭ない。」

俺をも超えていく輝きは、その試練の先にこそ現れるものだからだ」

「……おまえの望みは、本来ならば誰でも手に入る類のものだ。だが他ならぬおまえの強さがそれを困難極まるものに変えている。」

誰もおまえには勝てん。この月の誰一人として敵わんだろう。それでももし、可能性があるとすれば——」

月の魔王を打倒し得る意志つるぎ。

その可能性を持っているのは神威に至った魔性菩薩ではない。

最弱から最強へ届かせる不屈の意志。誰よりも強い心を持つ者を彼等は知っている。

この戦いも所詮は前哨戦。

月の深淵にて対峙する本当の好敵手。それはすでに決まっていた。「幾度となく繰り返した闘争の果て、数多の可能性を集わせて俺に刃

を届かせてみるがいい」

「もはや繰り返しは効かん。どうあれ聖杯戦争は終わりを告げる。

信じているぞ、その意志を。かつて見せた魂の輝き、それをも超える光を俺に示してくれ」

やがて到来するだろう勇者を思い、魔王たる男は心を滾らせながら笑っていた。



## 最終幕（上）

月の裏側。

それは太陽が照らさぬ場所。現実の月にある光なき暗黒の領域。

このムーンセルにある裏側もまた同じ。現世の一切から外れた深淵への穿孔だ。

そこにはこの世総ての害悪が収めてある。

知性体にとって害にしかならないもの。災厄、怨嗟、あらゆる種別の悪性情報。

ムーンセルは記録し保存するものだ。その大前提がある限り、数理の化身は記録の不備を許さない。

それは星の歴史の負の側面も余さず記録している事を意味する。記録の消去が機能に搭載されていない以上、負の産物は永遠に残り続ける。

故にこの場所が作られた。この宇宙から隔絶された虚数空間に、不要と判断した情報を保管するための廃棄場を作り出したのだ。

この場所に時間の流れは意味を持たない。

総てが虚数で満たされた世界では時間軸すらが曖昧だ。観測され定義されない限り、それはどの時間軸のことでも有り得る。

あらゆる時点で基準になる。あらゆる可能性が観測できる。記録宇宙の法則では結果があれば鶏が先にも、卵が先にも出来る。

——故にそこは、数多の結果が行き着ける集積場でもあった。

記録されてきた全ての戦いの結果。

幾度となく繰り返された聖杯戦争。同じ時間軸上の出来事も月の眼は漏らさず観測し記録する。

些細な誤差から様々な過程を経る闘争の軌跡。完全に同一のものは一つとしてない。

勝利者と成り得る可能性を持つのは決して一人ではない。比率として見れば少年王<sup>オ</sup>が最も多いが、彼が敗北するルートも確かに存在する。

それら幾多の可能性を経た勝利者たち、その全てに勝利を収めた月の魔王。

己が見てきた数多の結末を、甘粕正彦は月の眼を通し眺め見ている。た。

辿り着いた彼等の意志を問うてきた。

熾烈な戦いを経て熾天の座へと至った者たち。その意志には各々に輝きがあった。

それでも尚、己には届かなかった。その強さに魅せられはしたが、敗北を認めるには足りなかったのだ。

ただ、その中にも上下の差があったことは確かである。

大権能の壁を超え、原初の力を以て己に刃を迫らせたのは、数多の勝者の中で一人だけだ。

——”岸波白野”——

そう名称付けられた存在には、あらゆる戦いにて敗北への分岐がある。

ある時には最強の主従をも打倒する成長を見せ、ある時には一回戦で呆気なく敗北する。

それどころか予選すら突破できないことも珍しくはない。それほどに初期の”彼”、もしくは”彼女”は脆弱だった。

そう、”岸波白野”は彼であり彼女なのだ。

その存在は一定しない。他の地上より上ってきたマスターと異なり、そこに明確な定義はない。

彼、そして彼女はこの月で発生したNPC。自我の意識に目覚め、自己という存在を確立したのは聖杯戦争の予選の最中。

再現の元となった人物は確かに存在する。だが地上にいる彼、もしくは彼女と繋がっているわけではない。

観測により確定される前の存在はひどく曖昧だ。性別すら確定ではなく、岸波白野という名称すら正式か分からない。

何もかもが確定せず、曖昧なままに変化していく存在。それは契約

するサーヴァントにも現れている。

聖杯戦争のために契約するサーヴァントは、ムーンセルよりマスターの性質の相性によって決定される。

ムーンセルの出す解答は常に絶対だ。そこに複数の解答が導き出されるのは、よほど複雑な内面を持った人物しか有り得ない。

だというのに、これだけの選択肢サーヴァントが彼、そして彼女の前に用意されるのは、その存在が未だ何も定まっていけない不確かさ故だろう。

そうだ、その存在は何者でもない。

生まれたての意思。立ち上がるうとした決意は原始の欲求。

何者でもない彼、そして彼女。だからこそ彼等は何者にだってなれるのだ。

最弱から、最強へ。赤子のような弱者から一人前の強者へと。

それこそ人間の可能性のカタチ。意志次第で我々はどこにだっていけるのだと、その証明に他ならない。

「ならばこそ、その可能性かがやきを失った今の人類は度し難い。叩き直さねばならんだろう」

天を仰ぐ。

この月より見える青き地球ほしの姿。

そこに住まう何十億の人々。彼等の墮落を案じ、光が失せていくことを心より嘆いた。

容認してはならない。決してあつてはならないのだと、この魂は痛切に願ったのだ。

だからこそ、甘粕正彦は試練を下す。

蓋を解かれた地獄の釜。解き放たれる災禍の群を差し向けて、月の魔王は偽りなき愛を謳った。

この選択の果て、人類は災厄の渦に包まれる。

過程では大勢の者が失われるだろう。文明を破壊し尽くし、世界のカタチは根本から崩壊するに違いない。

だが、愛すべき人間たちよ。挫けてはならない、立ち上がり運命に抗う意志を抱け。

俺の選ぶ未来セカイが気に喰わんのであれば、自らの手で新たな未来セカイを築

くがいい。

「——ああ、来たのだな」

ここはムーンセルの中枢。聖杯に至る場所。

辿り着ける者は聖杯戦争の勝利者のみ。裏側であってもそのルールに変わりはない。

繰り返された闘争の輪廻。

そこにあつた数多の結果、総てが敗北という結末で幕を閉じてきた。

だが紡がれた可能性は無駄ではない。その中で磨かれた意志の力は、確かに今ここに集つていた。

月の深淵へと到達した勝者。それは岸波白野という“彼”であり、“彼女”だった。

有り得ない邂逅、少年と少女が並び立っている。

可能性の海から浮上した二人の“岸波白野”。平行世界の同一存在とも違う不確定な存在。

自我に目覚めた彼等は確固たる己を持つて立っている。だからこそ別個の個人として揺るぎなく立つことが出来る。

共有するのは、どんな絶望にも諦めない不屈の意志。ただ前へと生き抜く決意と胸に、自身の相<sup>サウヴァント</sup>棒たちと共に立っていた。

——己の信じる美のままに情熱と生きた、薔薇が如き可憐なる剣士<sup>セイバー</sup>、ネロ・クラウディウス。

——神より堕ちた異端の身でありながら、憧れた愛のカタチ、主に仕える献身を続けた魔術師<sup>キャスター</sup>、玉藻の前。

——誰にも理解されない孤独の道で、それでも理想と信じる正義を貫いた弓兵<sup>アーチャー</sup>、無銘の英霊。

——孤高なる頂点の玉座、神でも人でもない裁定者の在り方。傲岸不遜なる英雄王、ギルガメッシュ。

数多の可能性より集った彼、そして彼女の英霊たち。

各々が神話礼装を身に纏い、月の魔王と同じ地平に立って対峙していた。

「もはや問答など無粋。語る口先も不要だろう」

集った輝きを迎え入れ、甘粕の魂は歓喜の猛りに震えていた。

すでに地獄の釜は開かれた。だが総てが決まったわけではない。

時間の流れが異なる記録宇宙の法則では、あらゆる結果が当価値に扱われる。

おまえたちが我が樂園（ほんごう）を認めんというのなら、この俺を討ち果たすより他にあるまい。

ああ、いいぞ素晴らしい、おまえたちこそ真の勇者だ。

ここに至って何を語ろうとも無意味。余計な問答など白けるだけだ。

最も力ある座に至った者同士、互いの意志をぶつけ合う。勝ち残った輝きの下に新たな未来（せかい）は築かれるのだ。

——故に、さあ、決着を付けよう。

無言の内に秘めた溢れんばかりの闘志。

これ以上ない決戦の意志を示しながら、甘粕正彦は岸波白野たちと対峙した。

主からの意志を受けて、月の聖杯が駆動する。

その真価を發揮する光の演算器。太古の時代より蓄積されてきた無限にも等しい情報の渦。

総ての起源を納めたそれはまさしく万能の釜と同義。その担い手たる甘粕正彦はその内から力を汲み上げて行使する。

普遍無意識に渦巻く魔神、化生、悪神、神獣。

英霊すら超越した数多の神霊。召喚された神威の群れを月の魔王は何一つ不足なく使役していた。

暴威の波動が世界を揺るがす。

最高格に位置する災禍の具現は、人にとっての悪夢そのもの。

喚起される畏怖の念は根源的なもの。膝を屈し絶望に心が折れかけるのは当然の帰結だった。

人は己の悪夢を拭えない。ならば我々は下される審判に為す術はないのか——否。

甘んじて神の裁きを受け入れるか否か。それを決めるのは我々自身。

たとえ相手が神であっても、人々の持つ自由なる意志は立ち向かうことが許されている。

どれほど強大な存在であろうとも、諦めなければ道は必ずや開かれるのだ。

疑うならば見るがいい。招来した災禍の神霊と対峙する彼等の勇なる姿を。

どこにでもいる少年、少女。端的に言い表せば、彼等は即ちそういうもの。

しかし彼等の心に絶望はない。力なき身でありながら、不屈の覚悟で魔王へと対峙している。

彼等は仲間を信じているから。共に絆を紡いだ相棒たち、その強さは神霊の力にも負けないと信じている。

彼等の英雄がいる限り、彼らは決して諦めない。魔王の夢見る試練の楽園を、多くの命が失われる未来を認めはしない。

荒れ狂う波動の中、交錯する意志。

甘粕正彦と岸波白野。かつての勝者と敗者、再戦はここに成る。

共に従えし者たちの力を借り受けて、両者は激突した。

黙示録に曰く、その存在は終末に訪れるとされている。  
徒波の彼方より来る冒瀆者。

七つの首に人間の罪業・欲望の象徴である十の王冠を被った罪深き者。

主の敵対者である赤き竜から言祝ぎを受けし者。

全身に浮かび上がる刻印は、主に対する冒瀆の呪禁。

即ちそれは滅びを導く災厄のカタチ、強欲をもって災いを世に招くとされる獣。

アンチキリスト  
666の獣。

世界に齎す災禍に相応しき悪性の化身、黙示録を告げる獣が降り立った。

「醜悪な……。我が偉大なる祖国ローマをこのように形容するとは、つくづく宗教家どもの勘ぐりとは下世話なものよ」

七頭の獣より産み落とされ、波となって襲い来る獣の群に、赤き剣士セイバーは剣を奔らせる。

その剣技は優美にして鮮烈。ただ喰らうしか能のない畜生の群れなど、煌めく”原初の火”の赤刃の露と消えるより他にない。

鮮麗されたその技法は、しかし戦の火にて鍛えられたものではない。元より彼女は為政者にして芸術家。間接にはともかく、戦場の血化粧とは無縁の身である。

だがそんなことは関係ないのだ。なぜならその身は偉大なるローマの皇帝、万能の天才にして世に並びなき至高の芸術である。

ならば如何なる技だとして行使されて然るべき。理屈ルージュなどない、誰より彼女自身がそうだと確信しているが故に、その我儘は因果を侵す。

評価規格外と認定された皇帝特権。振るわれる剣の冴えに偽りはなく、一級の英霊にも劣らない完成度。群がるだけの獣など敵ではない。





極限にまで密度を深める獣の神威。巨軀より溢れる暴虐の総てが赤き剣士へと向けて繰り出された。

襲いかかる七頭を掻い潜り、セイバーの剣が一頭の首を斬り裂く。噴き出す鮮血。だが断ち斬ったはずのその首も、即座に繋ぎあつて再生を果たしてしまう。

事態はそれだけにおさまらない。周囲に散った獣の血潮、蠢いたそれより新たな畜生が生み出された。

一切の滅びを否定する不死性。斬れば斬るだけ増殖を繰り返し、殺到されるそこは獣の支配する塵殺空間。

狩り場に入った獲物は逃さない。その足掻きも、全ては獣のために献上される贅に過ぎないのだ。

増え続ける敵の牙がセイバーを追い立てる。そして遂に、獣の顎がその身を捉えた。

真紅と黄金を纏った身が引き裂かれ、赤き剣士を更なる朱で染める。

群がる獣の牙。悍ましい嘶きを上げた畜生等にあるのは悪欲に従い蹂躪する歓喜のみ。

そこに生命への尊厳はない。強欲なる災厄の獣王は預言の通りに万象一切への冒涇を繰り返す。

「——優美はなく、愛もない。ただ強欲に喰らい散らかす我執。それが貴様か、獣よ」

底なしの沼のように群がり重なった畜生の群れ、その中心点より赤き剣士が躍り出た。

その姿、麗しの美のカタチには欠けるものなし。引き裂かれたはずの身は確かに繋がり、群がった獣どもを一刀のもとに両断する。

——三度、落陽を迎えても。

三日の後、死した皇帝は起き上がる。

逸話の通り、一度の死を超えて確かな復活を果たす。

それは火山より蘇る不死鳥の如く、舞い戻った赤い剣士には焰の意

志が灯っていた。

「それを以て貴様を否定はすまい。美観とは善悪の如何では語れぬもの。」

退廃と悪徳の中にも美はあろう。その象徴である貴様は、あるいは世に価値を持つのかもしれん」

「だが余は貴様を否定しよう。その存在、断固として認めん。なぜか——」

舞い降りし劍姫より溢れるのは——黄金。

世界の上に建築されていく彼女のための絶対皇帝圏。己の願望のままに敵を縛る空間に、獣の王が閉ざされていく。

「仮にも余の名を担っておきながら、貴様の存在は余という名器の一片さえも表してはいないからだ！」

まったくもって度し難い！ 強欲のままに欲し悪意によつて費やすが皇帝であるなどと、神の信徒どもの悪意が透けて見えるわ」

「貴様の存在は余を騙りながら余を見ておらん。人々が憎むべき悪性のカタチ、ただそう在るために求められた姿に過ぎん。」

そこに美しさはない。芸術だとは認められんな。本質を見ようとせず主観に曇った偶像など、一片の存在価値も有りはせぬ！」

ゆえに獣よ、死にたまえ。

元より汝は敵対者。失われた主の愛を逆説的に証明するもの。

冒涇と退廃、人の持つ悪性の化身。ならば人の善なる意志に討たれ、滅び去るが意義だと知るがいい。

「——この一輪を手向けとしよう」

黄金の輝きが世界を染め上げていく。

築かれる荘厳な建造物。赤い劍士が思い描いた、それは一つの芸術の完成形。

黄金の中に薔薇が舞う。花卉の真紅は情熱の色、駆け抜ける一迅は炎の如き美を表して、群れなす畜生等を斬り飛ばした。

「舞い散るが華、斬り裂くは星——これぞ至高の美……」

しかしして讚えよ！ 黄金劇場と！！

有象無象を一蹴して、ここに黄金の劇場は完成した。

この劇場こそは、皇帝たる剣士セイバーが生前に築き上げた至高の芸術品アート。彼女が思い描く美観の総てを遺憾なく發揮するための場所。黄金に彩られた劇場の主催者は傲慢なる愛を顕わとする。

——アエストゥス・ドムス・アウレア  
招き蕩う黄金劇場。

世界を上書きする固有結界とは似て非なる大魔術。

魔力によつて再現された黄金劇場は、世界の上に確固として存在する建造物。

そこに立つセイバーには絶対の有利を、敵対する者には呪縛の不利を与える皇帝のための領土である。

「冥府に逝く前に教訓を授けよう。余という並び無き名器の何たるかをな」

獣の王が動き出す。

雑兵ならば願っただけでも一蹴できよう。だが王者たる獣はそうではない。

有象無象の畜生など幾ら滅ぼされようが一片の痛痒にもなりはしない。王が健在である限りそれらは無限に現れ続けるのだ。

黄金の皇帝圏も獣の王権の前には恐れるに足らず。冒涇の言霊を吐き出しながら今度こそ存在総てを蹂躪し尽くすべく進撃する。

「強欲で欲し、冒涇で浪費するのではない。余は愛によつて求め、情熱を以て費やすのだ。

知らぬというなら今こそ刻め。余の愛で燃える情熱、その焰の輝きの眩さを焼き付けていくがよい！」

真紅の大剣が、円を描く。

美しき正円の軌跡は、さながら満月のカタチ。

だが刃が一周する頃には、見る者は気付くだろう。それは月ではない、煌めく太陽の円であると。

大剣が纏いしは、紅蓮の大火。

熱い、空間総てを火炎の赤で染め上げてしまうほど、その刀身には焰が燃え盛っている。

荒々しきその炎は、しかし恐怖を煽る寧猛さとは異なる輝きを備えている。

当然だろう、その焰こそはセイバーの情熱の具現。胸に秘めたる思いをカタチにした炎であるのだから。

獣が進む。蹂躪の意義に従って。

迎え撃つのは、炎の大剣を構えたセイバー。

戦力差など比べるべくもない。相手は終末を象徴する黙示録の獣だ。一介の英霊単体で打倒できる存在ではない。

「余は——」

それでも尚、セイバーに勝るものがあるとするれば、それは意志の有無。

「奏者が——」

退けないという矜持。負けないという決意。

それら意志の力が生み出す正道の奇跡に他ならない。

「——大っ好きだああああ!!!」

大剣の一閃が煌めいた刹那! 世界を覆わんばかりの大火が燃え広がった。

奏者マスタに捧げる、この愛情おもい。

偽りなきこの気持ち、それは世の如何なる芸術にも勝る至上の光。

心を介さず愛を持たぬ獣風情に、この情熱が敗れるなどあるはずがない。

——星馳フアックス・カエレスティスせる終幕の薔薇。

世界さえ呑み込む情熱ほのおは、獣の王を焼く。

その巨軀は炎に包まれて、黄金の皇帝圈は不死性を発揮する隙を与えない。

黙示録を告げる魔神は、間もなく消滅するだろう。甘粕の召喚した災禍の神霊、その一角は崩れ去った。

「なれば、そなたたちも示してみせるがよい」

剣を突き立て、勝利を手にした赤い剣士セイバーは、他の仲間たちサーヴァントへと思いを馳せる。

「余という至高の番いが居るとはいえ、そなたたちも我が奏者と縁を結んだサーヴァントであろう。その矜持を見せよ。」

うむ、疑いようもなく余が一番であるな。可愛さ、人気ともに及び

もつかぬ。特に出演数を削られているキャスターめには憐憫すら覚えるほどに。

だが今の余は寛大だ。働き如何によつては、余と奏者の側付き程度には置いてやろう。泣いて感謝するがよい」

懐深い王の器（自評）を示して、セイバーは同胞らの勝利を信じ、祈った。

「なにやらものすつつつごく腹立つ声援が送られたような——わきゃん！」

軽口を漏らすキャスターに、着色なき純粹暴力が振るわれる。

余分な概念など持たない。ただ疾く、重く、巨大な拳の巖。純なる破壊は、故にこそあらゆる守りを粉碎する力となる。

それは見上げるほどの巨体を持った一頭の鬼だった。

混じり物のない純血、人とは異なる系統樹、総ての鬼種の頂点にある鬼の頭領。

——大江山・酒吞童子。

日本三大に数えられる大化生。

純然たる超越種として、極限まで高められた怪力乱神。

ただひたすらに強靱。最強の鬼として持つ暴力こそがその神威。神霊にも匹敵する鬼神がそこに在った。

「ていうか、どんだけ〜?! こんな大物ポンポン使役してくるなんて反則すぎませんかあ!？」

軽薄な様子を見せながら、キャスターは多種多様な呪相によって攻め立てる。

炎天、氷天、密天——、尾より編まれる呪符の雨、火で焼き、凍て





のだった。

ただ殴っただけで、これなのだ。

鬼神の暴威。金色白面にも並ぶ大化生は英霊の域など超越している。

未だ一尾の英霊<sup>キャスター</sup>ではどうやっても及ばない。対抗するならば尾を増やし、自らの大本へと近付いていくより他に手段はなく――

「なーんて、金色白面<sup>あんなの</sup>をご主人様に晒すなんて二度とありえませんし、私は一尾だけで十分です」

軽く言い放ち、キャスターは立ち上がった。

無論、受けたダメージは本物だ。

痛みならば幾らでも誤魔化せようが、身体機能の低下は否めない。

自身の肉体を素体に組み替える呪術にとつて、それは安くない代償だ。

対し、鬼は何一つの痛痒も受けていない。

傷ついたキャスターに打つ手はない。鬼の歩みを止める手立ては一つもない。

「まあ、さすがつてところですかね。単純な強度では相手になりませんか。分かっただけはいいましたが、改めてみるとひどい差です。

正面からやり合っただけはどうにもなりません。それは素直に認めますが、一つ言わせてもらおうなら――」

とどめを刺さんと、鬼神が迫る。

拳を振り上げ、傷つくキャスターに狙いを定める。

「――少しは、疑うことも覚えた方がよろしいかと」

刹那、鬼の様子が変わる。

足元が覚束無い。焦点が定まっていない。

如何なる攻撃にも巖の如き不動を保った鬼の身が、ここにきて揺らいでいる。

鬼の足元にあるのは一個の岩。

場所はちやうど、キャスターが天災を流すために張った陣の中心。

そこより吹き出る瘴気に包まれ、鬼は動きを鈍らせていた。

――常世咲き裂く大殺界。



キャスターの真名、玉藻の前。

その正体、白面金毛九尾の狐の姿を暴かれ追い詰められた彼女は、自らを石へと変えたときれる。

それこそが殺生石。そこから溢れる毒は近づく人や動物の命を次々と奪ったという。

伝承の通り、その毒性は強力無比。相手が英霊級であれば致命にも繋がる被害を与えるだろう。

だが、大江山の鬼の頂点、最強の鬼神を相手に何処まで通用するものか。

「いざや散れ、常世咲き裂く怨天の花……とは申しませんが。

今回ののはそんなに悪いものではございません。程さえ弁えれば良薬ともなりましょう」

単純に殺傷性のみを追求した毒であれば、鬼の肉体はその悉くを駆逐しただろう。

無双無欠の鬼の身体。たとえどのような毒であれ己に害を為すものに容赦などない。

しかし鬼の身体に起きている異変は、それらの毒とは全く別のものだ。

平衡感覚が狂い、足並を揃えるのも難しいが、感じているものは決して不快ではない。

どこか浮遊している感覚。朧な意識の中で感じる幸福感。辛い現実を忘れさせて、甘い夢へと傾倒させる誘惑。

端的に言い表せば、酔っている。

岩より溢れる毒に当てられ、鬼は泥酔と同質の状態に陥っていた。「水の陰気、ようは酒の毒ですよ。神使鬼毒酒とまでは申しませんが、足りない分は殺生石で補いましたので、量に問題はありません。

二代揃って酒の罠にやられた身としましては、防ごうにも防げない”毒”でしょう」

八岐大蛇は、出された酒に酔い寝静まったところを討ち取られた。酒呑童子は、宴の席に出された酒で力を封じられ、首を獲られた。超越した力を持ちながら、酒に酔わされ討たれたという結末。その

因果は強力な縛りとなつて神格にも影響を与えている。

回つた酒気に酔いながら、怒り狂つたように吼えるのは己の最期を思い出しているのか。

友誼を結んだと思つた相手に毒を盛られ、満足に力を振るう間もなく討ち取られた。

卑劣を嫌うとされる鬼の気質、その憤怒は推して知るべきだろう。

「……私の身の上としましては、あなたの末路に思うところもありません。無念には同情もいたしましょう。」

ですが、同時に物申しておきたいこともあります。ねえ、酒呑童子さん——」

「そんな反則じみた力を生まれ持つておいて、みつともなく言い訳できる立場じゃないでしょ、あなた」

ばつさりと、ある種の同胞ともいえる相手に、キャスターは言い捨てた。

「隔絶した強さとは、ただそれだけで危ういものです。強大な存在はそれだけで周囲に恐怖を煽る。」

善悪なんて些細なことです。鬼神に横道なきものを？ そんな理屈があの子ケモン共に通じるとでも？ 毒だつて盛りますよ、それは。

人は弱いのです。だから時に騙し、策を以て陥れる。自らが得たいもののために、非力を知恵で補うのです」

「あなたは卑劣を行わなかった。けれどそれは、そんな必要がないほどに強靱であつたから。強さ無くして、果たしてその在り方を貫けたでしょうか。」

そして人は誤ちを犯しながら、同時に正しく誠実にも在れる。その尊さは、強さという前提がなければ成り立たない正道さなど比べ物にもなりません」

「正々堂々と在りたいなら、一度人間に生まれ直すことをお薦めしますよ。そうすれば見える世界も違ってくるでしょう」

人に興味を持った天照大神。誰かのために仕える人々の幸せそんな姿に憧れ、その喜びを知ろうと自らも人の世界へ転生した。



其は”男”を打破し制するもの。  
その浮気を許さず、遍く不倫を否定する拳。

——またの名を、ハレム滅ぶべし、慈悲はない。一夫多妻去勢拳。

男子足るならば逃れられないその威力。

鬼の肉体に亀裂が走り、その存在が崩壊していく——股間から。

「あなたの敗因はたったひとつ。たったひとつの単純な答えです」

「『あなたは女体化していなかった』」

崩れ落ちていく鬼の巨軀。

告げられた敗因の真偽はともかく、果たしてその心中は如何ばかりか。

かつて最強の呼び名と共に君臨した最強鬼の頭領。

人の卑劣さを憎んだ鬼。それを再び打ち破ったのは、人の誠実さを

知った異端。

皮肉なその結末は、鬼の心に何らかの答えを与えるものであるかも

しれず——

「少女ロリになってから出直しやがれっ！」

そして無論、打倒を果たしたキャスターにとってはどうでもいいことである。

崩れる鬼の姿背に、お決まりのポージング。

清々しいまでのドヤ顔と共に、自称良妻狐は平常運転だった。

王の前に立ちはだかったのは、一頭の巨大な獣だった。  
遙かな地平まで覆い尽くすその巨軀は、倒れば森の総てがざわつくとされる。

その身は神獣。神より大いなる自然の恵みをその権威と共に任さ

れた、聖域の守護者。

竜種を除いた幻想の最強種。そのカテゴリにおいて最古に位置するだろう聖なる獣。

黄金の王は、その獣を知っていた。

生前に打ち立てた数多の偉業、その一つである香柏の獲得、即ち人類文明の開拓。

番人としてその事業の前に立ち塞がった獣は、王の叙事詩において最大級の難敵として描かれている。

——香柏の森の番人、フンババ。

文明が拓かれる前に、獣は自然側の守り手として存在した。

その在り方は自然の触覚たる精霊に近い。傲岸に恵みを欲する人類に遣わした災禍の化身。

太古の時代よりその存在意義は変わっていない。身の程を弁えず侵略を繰り返す人類に、獣は怒りを頭に牙を剥くのだ。

「我の前に此奴を差し向けるか。裁定者を気取った真似といい、つくづく不遜に弁えぬ不屈き者よ」

神獣の召喚者である甘粕正彦。その意図は透けて見えている。

この獣を討伐するのに、かつて王は神の助力と友の存在を必要とした。

だが今の王は唯一人。若き日の大敵を乗り超える、これはそのための試練である。

この人類最古の王、英雄の中の英雄王ギルガメッシュを、試すと。その傲慢、その不敬、いずれも万死に値する大罪。人を人と思わぬ絶対者の感性からすれば、その結論は明白だった。

「だが許そう。神霊すら下し、自らに従属させる傲岸極まる意志。貴様には超越に至った者としての資格がある」

しかしそれを踏まえた上で、傲岸不遜の権化であるはずの英雄王は、許すと口にした。

王に対し不敬にも試練を課し、その強さの何たるかを不遜にも試そ

うとする者を、容認すると。

有り得ぬはずの王の結論。そこに道理を見出すなら、やはり有り得ぬはずの相手にこそその理屈はあるのだろう。

甘粕正彦。

人の身にして万能の座に至り、神すら従える力を獲得した男。

王はその存在を認めた。傲岸不遜の英雄王を以てして、その偉業を見事だとして讃えたのだ。

片や、災禍の試練を以て人間の成長を夢見る男。

片や、奪いて犯す暴君として君臨し、人類の発展を見据える王。

彼等は共に裁定者。孤高なる天上に立ち、世の善悪ではなく己の眼を以てのみ価値を定めると覚悟した者。

その意志の強さには一点の脆さも無い。英雄王は此度の敵対者を自らと対等な地平に立った者として認めていた。

「ならばこそ知るがいい。天地に理を示すべき裁定者は唯一人、このギルガメツシュを以て他にはおらんな！」

故に、甘粕正彦。彼の者を罪人としては裁かない。

己の同格の超越者として、慢心を捨てて討ち果たすと宣言する。

「この趣向もなかなか面白い。若気の至りの屈辱もある。精算には良い機会だ。

覚悟しておけよ、月の覇者よ。貴様が我を計りに乗せるように、我也貴様を裁定してやろう。

その価値を試そう。下らぬ瑕きずなど見せようものなら、その瞬間こそ滅びの時と刻んでおけ」

これはその前哨戦。甘粕正彦を裁定するため、まずは奴が遣わしたこの神獣を屠る

天に地に、空間全てに開かれた王の蔵。展開される原典宝具の総数は、ゆうに千を超えている。

王が一言命じれば、それらは雨の如く降り注ぐだろう。どれ一つとして並の武器ではない、そんなものが雨霰と。

これこそが王の財宝。ゲート・オブ・パピロン

この世の全ての財を収集した原初の王、ギルガメツシュのみが持つ

宝物殿。

英雄譚の原点を知る王は、故に全ての伝承の原形を持つ。その蔵にはおよそ人の英知で届き得る総てが納めてあった。

出し惜しみなく抜き放たれた宝具の総列。その暴威を一身に浴びれば、如何に幻獣、神獣の類であろうとも原形すら残るまい。

号令が下る。

展開された千の宝具が一斉に神獣へ向けて降り注いだ。

幾十、幾百と続く宝具概念の洗礼。それらは余さず神獣の身へと突き刺さり――

一斉射の後に現れた原初の神獣は、全くの無傷だった。

「ほう。それがエンリル神より授かりし守護の権威、七の鎧衣か。私も直に見るのは初めてだな」

森の守護者フンババは、その責務を最高神より任されたときれる。

その守護の任を全うすべく、神獣には七の鎧衣が与えられた。総てが揃っていれば何人にも破ることの敵わない、絶対の守りが。

かつてギルガメッシュが討伐した際には、神獣は鎧衣を一つしか纏っていなかった。一つの鎧衣のみのフンババに彼と友は苦戦を強いられたのだ。

神獣には今、七の鎧衣が揃っている。本来の守りを取り戻した神獣は絶対無敵。たとえ千の宝具を揃えようとも、その守りの前には塵芥に等しい。

攻守が入れ替わる。原初の神獣が持つ暴威の全てが向けられる。

今のギルガメッシュに加護を授ける天の助けはない。隣に立ち、共に駆けてくれる友もない。

王一人では神獣には抗えない。伝承に示される通りならば、その結末は自明の理だ。

獣の鳴く声は文明を流す大洪水。

雄大なる巨躯の歩みは大地を震し、森の木々をざわめかせる。

口より吐かれる火と毒は、この世の万物を焼き腐らせる滅びの具現だ。

神獣が持つ数多の災禍。その猛威に晒される英雄王は、持てる財を

惜しむことなく使い潰して凌いでいく。

瞬間、相対する神獣の眼光が英雄王の身を射抜いた。

「があ……っ?!」

神獣フンババの持つ魔眼。

それは数ある魔眼の中でも最上級に位置する”石化の魔眼”だ。

一切の工程を無視し、目視したという事実のみを以て対象を石に変える。ギリシャに伝わる蛇髪の怪物にとっては象徴といえるモノ。

無論、それだけならば英雄王が揺らぐ道理はない。かの怪物は宝具を駆使した未熟な英雄の手により討たれた。ならばあらゆる宝具の原形を持つ英雄王にとって、その攻略は造作もない。

だが王の前に在るのは原初の時代に君臨せし大自然の守護獣。最高位の魔眼だとしてこの神獣にとつては能力の一端に過ぎない。

如何に抗うことが可能でも、発生する空隙は埋められない。その途切れ目を突き、神獣の猛攻が英雄王を蹂躪した。

「ぐっ、がああああッ!!」

災禍の嵐に晒されて、纏う黄金の鎧が碎け散る。

周囲に転がるのは獣によって碎かれた宝具の残骸。壊れた宝の中心で英雄王は倒れ伏した。

無様を晒すかつての怨敵に、神獣は愉悦に満ちた嘶きを上げた。

神に逆らいし愚かな王よ、その末路こそ貴様に似合いのものだ。

貴様は朽ちた宝物殿の主。その手に残ったモノなど何もない。

民からは見放され、唯一の友さえも失った。貴様は永遠の孤独の中でもがき苦しむのだ。

獣が投げかける侮蔑の数々。だがその言葉は王の生涯を表すものとして正鵠を射ている。

神を憎んで人を罰し、弱さを知りながら弱さを省みることをしなかつた。

その結末にあつたのは孤独な最期。国も財もかなぐり捨てて、手にした不死の宝も蛇に掠め取られる体たらく。

何たる無様な末路だろう。天より祝福を受けたはずの神の子が、そのような徒勞の果てに旅路を終えるなど。



その不合理こそ我が呪い。我欲のままに自然われらを蹂躪した罰。今こそかつての嘆きを思い出し、永劫の後悔に苦しめと獣は叫ぶ。

「たわけ。我に友などおらんわ」

それら獣の侮蔑を一顧だにせず、英雄王は立ち上がった。砕かれた鎧より頭わとなった半身。

受けたはずの負傷は消え失せて、肉体に走るのは炎のような真紅の紋様。

財も鎧も脱ぎ捨てた、これこそ王の原初の姿。晒された格好に従って、王はその本領を發揮する。

「我は遍く地上の人間どもの守護者として、この世の全悪を排したまでのこと。貴様の憎悪など涼風にも感じぬ。

弁えるのだな、神の獣。過ぎた狭き世界の番人よ。貴様如きの主観で計れる我など、微塵たりとて存在せぬ」

告げられる王の言葉に、怒り吼えるのは獣の方だ。

なんたる傲慢、なんたる不遜。天の父より大地の恵みを任されし我を指して、悪だと。

どこにそんな道理がある。神に逆らい、我欲によって我が恵みを欲したのは貴様の方ではないか。

貴様は我が守ってきた恵みを奪い、あまつさえ人が強欲のままに自然を喰い散らかさぬよう臣従を申し出た我の言葉すら、切り捨てた。

その行いのどこに善がある。貴様はただ奪い、殺しただけの大罪人。その所業は悪以外の何者でもない。

獣の発する糾弾。

憤慨する声を聞き届けて、しかし王の面貌には揺らぎの一つも起きない。

「たわけが。世の善悪を定めるは心理ではなく法よ。この地上に敷かれた法が、貴様を悪と定めたのだ」

獣が叫ぶ。そんな法がどこにある、と。

神より守護者の任を賜った聖なる獣。その権威に勝る法律がこの

地上のどこにあるという。

王は答える。愚問である、と。

「我が王として敷いた、我の法だ」

絶対の王者が定める法とは、絶対の基準。

その基準とは『己』。唯一の絶対たる自分自身こそが全て。

彼はこの世のあらゆる価値を収奪する、裁定のために。超越の視点で以て在るべきか死すべきかを定めるために。

宇宙の真理が如き英断も、前後不覚のような悪政も、王が行うならば紛れもない王の裁定。

彼はその絶対の価値観で以て、神獣に裁定を下したのだ。人が拓き広がり行くを善事、それを妨げるは悪事であると。

だからこそギルガメッシュは英雄なのだ。

人のために戦い、人のためにその身を尽くした、正真正銘の善の英雄。

拓かれていく人類の未来を見据え、神代の後の新しき世界こそ善しとした人類の守護者である。

「我が民に敷き詰めるは絶対の基準。王が判断を躊躇っては民どもが罪に迷おう。

今さら貴様が何を喚こうが裁定は覆らん。森の番人よ、貴様は疾く滅び去るが最期の役目と知れ」

傲岸不遜にそう告げる。

守るべきものを奪われた獣の憤怒と慟哭、それら全てを無価値と断じて。真紅の双眸には一点の情もなかった。

違う、この男はかつてと違っている。

この男はなんだ。過去に見た傲慢ながらも勇猛に満ちていた若者はどこに消えた。

青年だった頃の彼はまだ人間だった。少なくともそう見えるだけの不完全さがあつた。

眼前に立つ男にはそれが無い。絶対者として下す裁定には一切の共感・同意を不要と断じている。

その眼光に晒されて、神獣が感じたのは畏れだった。



無論、神獣とて抵抗を止めてはいない。縛る鎖を軋ませて、眼前の敵を喰い千切らんと足掻いている。

その様子はギルガメッシュの眼にも映っている。未だ殺意を絶やしていないその威容を目にした上で、彼の様子には微塵も危機を感じさせるものはなかった。

悠然たる態度こそ、彼にとっての信頼の証。

二度と呼ぶことのない名を冠した宝具、これしきの事は当然だと信じて疑わない。

そして右腕にて手にするのは、数ある王の宝具の中で”最強”と確信する無二の逸品だった。

「地の理を守護する獣よ。貴様に下すのは天の理がふさわしい。さあ！ 死に物狂いで耐えるがよい、不敬！」

抜き出したのは一本の剣。剣という概念が誕生する前のカタチ。

円柱状の三つの刀身を重ねたそれは、およそ従来の剣の姿とはかけ離れている。

柄があり、刀身がある。その事実を以てのみ剣だとしている。

銘は持たない、無銘の一振り。担い手からの呼び名は『乖離剣』。あるいは知恵の神エアの名を冠したもの。

今は静寂を保っている剣の宝具。しかして一度呼び起こされれば、この世に人類最古の地獄を顕現させる一撃を生むのだ。

「原初を語る——」

「元素は混ざり、固まり……万象織りなす星を生む！」

三つの円柱が回り始める。

圧倒的な回転圧力の中で生み出されるのは、巨大な力場同士が絡み合った螺旋宇宙。

空間そのものを変動させる神霊の権能にも匹敵する力。その規模はもはや個の生命に使用する領域にはない。

故にこの剣は対界宝具。世界を相手に振るうべきその威力が、原初の神獣へと向けて放たれる。

「死して拝せよ——天地乖離す開闢の星!!」

——刹那、天地を裂いて現れたのは、原初の虚無に包まれた地獄の風景。

その一撃は、始まりの混沌たる世界に天と地を分け隔てた権能の具現。

星造りの一柱、世界の創造者たる知恵の神エア。神の名を冠した剣は、その神威の再現である。

斬撃による空間切断、発生した次元断層は、まさしく天地を乖離させた神話そのもの。螺旋を描いて世界を斬り進むその一撃が、鎖に繋がれた神獣を捉えた。

無敵の防御を誇るはずの七の鎧衣が、一振りの斬撃の下に裂かれていく。

この一撃を前にしては如何なる守りも意味をなくす。世界から遮断でもされない限りは防ぐことは敵わない。

それは神獣にとっても同様だ。三層にて織り成される螺旋宇宙に巻き込まれ、その身は確実に滅びへと吞まれていった。

滅び逝くその刹那の中、神獣が抱いたのは“なぜ”という疑問だった。

脳裏に映し出されるのは、かつて相対した若かりし日の彼の姿。

かの日の姿にも英雄としての勇があった。精強さのみを問えばそう変わるとは思えない。

神に助けられ、友に励まされ、我に対し恐怖すら抱いていた若者が、どうしてここまで違うのか。

疑念は消えない。神に逆らって友を奪われ、孤独の内に暴君として終えたその生涯の果てに、如何なる解答を得たのかと。

「愚昧めが。言ったであろう、我に友などおらんと」

獣の疑問に王は示す。未熟な時代を終えて定まったその在り方を。幼年期は、神を敬い人を愛した善君としてのカタチ。

地上で最も完成された王聖を以て君臨し、統治の何たるかを理解した。

青年期は、勇猛と可能性に溢れた英雄としてのカタチ。

己の在り方を定めたが完璧ではなく、その不完全さを以て人間の何たるかを理解した。

そうして完成されたカタチこそ、絶対の裁定者たる英雄王の在り方。

英雄ギルガメツシユは、叙事詩に語られる生涯を通じて成長を果たし、不変の在り方を手に入れた。

たとえ幾星霜の時間が流れようと、彼は手にした在り方を貫くだろう。その王道は、不老不死の夢などよりも遥かに価値ある永劫の輝きなのだから。

「天地の理を知り、人の理も余さず見通した。我は我が価値を定めた人類の世界、その果てまで裁定を続けよう。

我にはもはや神も友も必要ない。有るべきは絶対の基準たる我自身。そのみが有れば良い」

彼にとって生命とはいずれ消え去るもの。永劫の裁定の中で観る刹那の夢に過ぎない。

愛でるべきは財宝という名の道具。一つの価値として定まった不変の輝きだけなのだ。

たとえそれが、どれほど愛するに値すると認めただ後であろうとも、過ぎ去ったものに囚われることはない。

——ああ、それはなんて、孤独なる道であることか。

定めた裁定の在り方を貫くため、その王道は孤高であるしかない。

絶対とは交わらないということ。他者のどんな思想にも共感せず、誰一人として寄せ付けない。

そうでなければ裁定者としての意義がない。たとえ何があろうとも、その在り方だけは崩さないと決めている。

だから王は一人である。その隣に誰かが並び立つことはない。彼はあくまで見定める者として、俯瞰した場所から人を観るのだ。

きっとそれだけが、彼が王として遍く世界の者らに示せる、たった一つの誠意であるから。

それで全てを許せたわけではない。

獣にとって王は怨敵。守護者としての使命を奪い、その恵みを略奪

した憎むべき敵でしかない。

だがそれでも、我欲を貪るままに見えたその所業の裏には、確かに一つの道理があった。それだけは理解できたから。

そんな一つの”納得”だけを抱いて、神獣は虚無の中へと還っていった。

”孔”より漏れ出る黒い泥。

姿が見えない不定形。確かな質感のない流動の塊。

分かるのは、それが物理的意味を持たない概念の存在であること。その概念とは、この世の悪性に彩られた醜悪極まる呪いの類であることだ。

眼前に見えるその光景に、アーチャーは覚えがある。

この世界ではない何処か。英霊の座に昇った後、集積された数多の世界の軌跡。

恐らくはその一つ。持たないはずの記憶が甦り、決してその存在を許してはならないと警鐘を鳴らしている。

——この世、全ての悪。

ゾロアスターの悪神の名を冠したそれは、神霊という括りの中でも異端である。

ただ悪であれ、あらゆる罪の元凶であれと願われて、その通りに世界を犯す呪いの芳流。

姿形などあるはずがない。あれはこの世の悪という概念を一つの元を集めたもの。

再現された悪神は、月の裏側に封印された悪性情報そのものの流出体だ。

看過など、出来るはずがない。

錬鉄の意志に覚悟を乗せ、アーチャーは目の前の全悪を破壊するべく剣を取った。

「——ああ、さすが。許せないモノと分かったら即決だね、掃除屋さんは。まったく筋金入りは仕事が早い」

溢れる泥の中、カタチの無かったそこに一つの意志が形を成している。

やがてそこには、一人のヒトガタが立っていた。

全身に限なく施された刺青。それは時代の悪性を示す邪の呪刻。

蠢く模様は直視していれば正気を毒される異端だが、それ以外を見ればこの場ではむしろ凡庸とさえ言える。

悪戯っぽい笑みを浮かべた“彼”は、どこにでもいる少年にも見え

た。それがアーチャーに相對する、甘粕正彦の喚びだした災禍の姿だった。

「貴様は……」この世、<sup>アン</sup>全ての悪<sup>リ</sup>なのか？

「不思議かい？ まあそうだろうね。本来俺にはこんなカタチなんてないはずだから。

でもまあ、事実こうして現界もしているわけで。カタチがないってままじやあ締めまりが悪い。

だから手っ取り早く、手近な所で”殻”を見繕ってきたってわけよ」

語ってみせる口調にも歪なものはない。

思考も正常。およそ悪神の具現としてふさわしい姿ではない。

その姿を余さず観察して、アーチャーの胸に躊躇の感情は一切なかった。

「雑談でもして楽しもうって雰囲気でもないし、さっそく一発やっつくかい？

俺は全然構わないぜ。なんでか今の俺、アンタのことが気に入らないみたいだし。斬り合い共食い大歓迎さ」

「是非もない。元より個人の好感など度外視して、貴様は討たねばな



らない存在だ。

「この世の悪という概念の具現。その存在を野放しには出来ん」  
そうだ、やることは変わらない。

たとえどんな意志を持つが、本質には何の変わりもないのだ。  
その存在を世界に呪いを齎すモノ。解き放たれば数多の犠牲を  
生み出す災禍だ。

迷うべきことはない。この存在は紛れもない人類の害。己が討つ  
べき悪だ。

「悪、悪ねえ……。まあその通りではあるけどさ。

なあ、アンタが言うところの悪って奴は、要するに人を殺すもの  
かって所で定義するもんなんだろう。

善性、悪性とかはとりあえず二の次で、十のために一を切り捨てて、  
とかそんな理屈だ」

「なあ正義の味方？ 悪人でもないのに正義みんなのために切り捨てられた  
奴の気持ちってのは、どんなものかな？」

アーチャーは、答えない。

余分な思考は捨て置いて、考えるのは打倒のための戦術論理。

能力は何か、勝機は何処か、観察の中でそれらを見出し、一点を見  
逃すまいと構えている。

「だんまりかい。まあアンタにとっちゃこんな問答は今さらだろう  
し、始めると言った手前、文句もつけづらいねえ。

なら斬った張ったで語ろうかい。といっても、俺のやり方なんて一  
つきりしかないけどね」

飄々とした悪神の様子に、アーチャーは訝しむ。

悪神の立ち振る舞いは奇妙だ。それも脅威に感じる類のものでは  
ない。

その手には何の武器も握られておらず、武に通じた気配もない。  
斬り結べば容易く斬り伏せられる。そんな楽観的な未来がほぼ確  
信さえ出来るのだ。

だがそんなはずがない。

目の前に立つのは悪神。少年のカタチをした悪性の化身である。

迂闊に攻め込めばどのような逆襲が待っているか。容易く打倒が敵う存在であるはずがないのだ。

「警戒してるとこ悪いけど。言っちゃなんだけど俺、すげえ弱いぜ。まともにやらせたらマジで最弱だと思うよ。いや、さすがに作家連中には勝てるかもしれないけどさ。」

俺の場合は宝具一本だから。それさえ突破すれば後は煮るなり焼くなりってね」

意図が掴めない。何故こうも手の内を晒してくる。

あるいはブラフか。それとも晒して尚という絶対の自信か。

皮肉に笑う少年からは何も読み取れない。その表情からは危機の意識が欠けていた。

「まあその宝具だつて英霊として現界してたら、さぞやしよっぱい能力だつたんだろうけどさ。」

——今の俺、神霊だから。ちよつと洒落にならない能力だぜ」

こうしていても埒が明かない。まずは一手、仕掛けてみる。

覚悟を決める。手にした双剣を地に突き立て、新たに手にするのは黒塗りの弓。

可能な限りのリスクは回避する。まずは距離を置いての牽制射撃。

淀みない動作で投影した矢を番えて——

胎の内蔵<sup>なかみ</sup>から”何か”が喰い破つて現れた。

攻撃のための手が止まる。

事態は不明。何を仕掛けられたのか、皆目検討もついていない。

分かることは一つだけ。身体を裂いて這い出た”何か”。それがあの孔から漏れる泥と同質であることだ。

「何が起こつたつて顔してるから、解説を入れさせてもらうぜ。」

だがなんてことはねえさ。それが俺の宝具でね。ホラ、傷の共有つて単純な呪い返しだよ。

己を傷つけた相手に同じ傷を返す。人を呪わば穴二つとき。この

世で最もシンプルで、強力な呪いさ」

——偽<sup>ヴェルグ・アヴェスター</sup>り写し記す万象」

名の由来はゾロアスター教にある教典。

自分の傷を、傷を負わせた相手の魂に転写して共有する。『報復』という原初の呪い。

単純であるが故に強力で、如何なる守りを持つサーヴァントでも逃られない呪殺宝具だ。

だが、そうだとしたら道理が合わない。

アーチャーはまだ悪神に何の攻撃も仕掛けていない。返される傷など負わせていないのだ。

単純明快な呪いとはそれ故に裏もない。返すべき傷がなければ呪いの発動は不可能なはず。

「疑問はぐもつとも。だけど不思議なことなんて何も無いぜ。

俺はただ受けたものを返しているだけさ。単純な呪いなんだ、それ以外なんて出来るわけがない。

利子もなーんにもない、良心的なクーリングオフってね。あ、悪魔なのに良心的ってのはおかしいか」

解説になっていない。それでは不合理は不合理のままだ。

こちらからの危害はまだ何もない。ならば返ってくる呪いもまた無いはずで、

「——だから、さ。言っただろう」

「俺は人類から押し付けられた”悪”<sup>モ</sup>を、そっくりそのまま返してるだけだって」

瞬間、アーチャーの全身を膨大な悪意が蹂躪した。

あるべき中身が塗り潰される。

腕が、脚が、内蔵が、思考が、己とは違う何かによって喰い千切られる。

外ではなく内より身を侵す”何か”。その全てがアーチャーを恨み、呪っていた。

「話を戻すけどさ。なあ、正義<sup>えいゆう</sup>。切り捨てられる奴の気持ちってのを理解できるかい？」

「より多くの命を救うために。そういつて色んな奴を今まで切り捨ててきたんだろう。」

罪は感じてた。だから自分なんてものを大事にせず、徹底して他人

のために尽くしたんだろう。

だから正義みんに裁かれる時だって、呆気なくその結末を受け入れられた。最期の救いが無くなって、それが報いなんだと思えたわけだ」

「ああ悲劇だねえ、救われない。それでそんなアンタの苦しみで、切り捨てた連中に少しでも報いることが出来たと思つたわけかい」

耐え切れずに膝をつく。身体みの自由が全く効かない。

ただの苦痛であるなら耐えられただろう。痛みを超えて闘志を奮起させてこそ英雄。その程度が出来ないはずがない。

だがこれは違う。単なる呪いの強度だけではない。この悪意の源泉にあるものが、なんであるか理解してしまつたから。

——これは、己が多数せいぎのためという理想の下、切り捨ててきた少数あくたちの怨念だつた。

「そんなわけがないだろう。アンタが何を理解したつて？」

「だってアンタは選べたじゃないか。人を救うつて理想に殉じた生き方を、アンタは自分で選んだんじゃないか。

それでどんな結末を辿つたにせよ、全ては自業自得つてやつだ。何を後悔したとしても、アンタはそれで納得することが出来る」

「切り捨てられた俺たちは、その後悔さえないんだぜ。

何が悪かつたわけじゃない。ただ不要になつたから、下手を掴んだから、俺たちは悪にさせられたんだ。

倒されて当然の悪党なんざ極小数なんだよ。この世で”悪”と呼ばれる連中の大多数は、選択肢すら与えられなかつた弱者おれたちだ」

「勘違いするなよ。アンタは恵まれた側なんだ。過去がどうあれ、自分の生き方を決められたんだからな。

最初から選べる側にいたアンタが、選べなかつた俺たちのことが理解できるわけないだろう」

魂を侵す怨嗟は奈落の底より響く亡者の声だ。

嘆き、苦しみ、知らず、聞かされず、世界から切り捨てられていった者たち。

彼等は恨んでいる。選ばれなかつた者たちは、選ばれた者を妬み、己と同じ地獄へ引き摺り込もうと呪つているのだ。

引き摺り落とそうとする力に抗えない。その無念の総量は人類史の中で蓄積された弱者の総計である。

見放され、切り捨てられ、この世全ての悪の一部となった者たち。人類史の半総数に匹敵する悪意からどうして逃れることが出来るだろう。

そして直接アーチャーの魂を侵していくのは、他でもない彼自身で切り捨てた者たちなのだ。

英雄とは、業を背負う者だ。

常人とは比べ物にならない密度を誇る彼等の生涯、必然として切り捨てられる者は現れる。

善悪の問題ではない。成し遂げられる大事の裏には、踏み躪られる者らがいる。その業を背負いながら英雄は前へと進むのだ。

大なり小なり、人は業を背負って生きている。人であれ英霊であれ、自らの業を捨てることは許されない。

ましてやアーチャーにとって、その業はあまりに深すぎた。

「アンタは他人に尽くすのが好きなんだろ。だからより大勢の他人に尽くせる正義の味方になったんだろ。」

—— だったらさあ、死んだ後くらい、オレタチ悪のために尽くしてくれよ」  
それこそが悪神アンリ・マユとしての権能。

神はそういうモノであるが故、個人を人類と見立てて己の人類悪を背負わせる。

防御も回避も通用しない。如何なる盾や鎧、概念で身を守ろうと、魂より直接侵食してくる悪意を防ぐ術はない。

人類に属する存在である限り、悪神の呪いから逃れる術は皆無である。

遍く悪意に陵辱されながら、アーチャーは消えてはいなかった。

魂の9割以上を侵されて、無数の怨嗟の念に押し潰されながら、未だに自己を保っている。

だがそれは救いを意味しない。

当然だった。アーチャーを苛む悪意は、彼のことを恨み、呪っている。

救いなど与えるはずがない。悪意らがアーチャーに求めるのは、地獄の責め苦のみである。

個の意志が消えてしまえば、苦痛を感じることもない。

「死という救いに逃がしてしまえば、この怨念を叩き付ける機会はず遠に失われる。」

そんなことは許さない。理想の下に積み重なった骸の無念、それはこの程度で晴れるものでは断じてないのだ。

——貴様には、死すら生温い。

遍く悪意に共通するのはその一念。

永劫に続く責め苦の中、少しでも長くその怨念が満たされるのを望んでいる。

「といつても、最期までいく前に壊れちまうだろうがな。」

なあ、正義。せめてアンタが切り捨てた分だけは、きちんと味わって逝ってくれや」

正しく地獄の責め苦の中で、アーチャーは抵抗の意志を失いつつあった。

どうして振り解くことができるだろう。切り捨てた彼等にどんな言い訳がたつというのか。

間違いではなかったと、彼等を前にして言うのか。その犠牲は仕方のないものだったと。

出来るはずがない。ここにあるのは摩耗した理想。誰かを押し退けてまで生かす理由がどこにある。

そもそも前提が間違っている。己よりも他人のために。そのように生きてきて、どうして弱者かれらを振り解く意志が持てるという。

彼等の怨嗟は正しいものだ。己は裁かれて当然。ならばこのまま、責め苦の中に委ねるのが罰なのだろう。

侵食された魂に強さはない。

歴戦を生き抜いた戦士の強度も剥ぎ取られ、あるのは理想の始まりにあった少年の姿だった。

助けられないからと見過ごした／見捨てた事実是不変ならない  
報いるために人を救うと決めた／救われた者などいない

その理想は間違いではないと信じてる／切り捨てられた者は憎んでいる  
たとえ結末が報われなかったとしても／何を救ったつもりになっているのだ

——我々は永劫、貴様のことを許さない——

何を叫ぼうとも怨嗟の声は消えない。

言い繕おうとも正当化などされない。切り捨てられた彼等の憎悪は拭えないのだ。

だから、理想の果てに残った残骸<sup>じぶん</sup>は、彼等のために責め苦に甘んじるべきなのだろう。

アーチャーという英霊だった者に残されたのは、その結論のみ。

膨大な悪意の中、すでに彼の意識は閉じている。抗おうとする意思の一欠片さえ残っていない。

元より彼は他人に尽くす正義だ。自分のためという悪<sup>よくぼう</sup>では立ち上がれないのは自明の理。

「うん？　これは、他所<sup>マスター</sup>からの……？」

——だからこそ、彼に奮起を呼び起こすには“誰か”の手が必要だった。

アーチャーの身に降り注ぐ砂塵。

それは魂を侵す異常<sup>あくい</sup>に着手し、取り除こうと機能し始める。

『オシリスの砂塵』と呼ばれる礼装。その砂が全ての異常を受け止めて、使用者の正常を維持し続ける。

「なるほどなるほど、いいマスターだねえ。実に適切な判断だよ。だけれどそんなアンタ等には残念なお知らせだ」

「言っただろう。これは傷の共有だって。俺の疵が治らん限りはアンタの疵も治らない。

まっとうな癒しじゃ通じねえ。俺が人類<sup>こい</sup>悪<sup>いっ</sup>を捨てなけりやアンタの呪いも消えねえのさ」

人類よりこの世全ての“悪”であれと願われた悪神。

その”悪”が捨て去られる事はない。そんな時が来るとすれば、それは人類が滅んだ後にしか訪れない。

アーチャーの呪いは癒せない。事実、その身を包んだ砂塵は、何ら一切の効果を發揮してはいなかった。

即ち、無意味。

そんな主従の無駄な足掻きを悪神は嗤う。

その無様、みつともなさが堪らない。溜飲も下がると悪意等と共に喜んでいた。

「——ああ、了解した。マスター」

だから、自己すら失いかけてた英雄の、発したその声が信じられなかった。

「はあ？ 何？ マスターが、何だつて？」

「聞いていなかったのかい？ この呪いは共有だ。俺がいる限り癒えることはねえ。」

戦うどころか立ち上がることもすら出来ねえだろう。自我だつてとつくに壊れかけだ」

「なあ言ってみろよ。ポンコツなその様で、アンタは一体なにが出来るってんだ？」

悪神の言う通り、施された癒しはアーチャーには何の効果を与えていない。

身を苛む呪いは依然、その魂を侵食し責め苦を与え続けている。

積み重なった人々の怨嗟。その業、背負って歩いていくには深すぎる。

故にこそ、この業は捨てるべきではない。アーチャーはそう決意する。

理想の下に切り捨てられた<sup>かれら</sup>悪意。

眼を背けてはならない。それは紛れもなく己の罪だ。

あまりに深く、動くことも出来ないほどに重い。それでも背負わなければならぬのだ。

<sup>マスター</sup> 彼等はいつもそうしてきた。

<sup>サーヴァント</sup> ならば従者である自分が、それをしないでどうするのか。



「……すまない。オレはまだ、あなた方に委ねるわけにはいかない」  
与えられる責め苦の中、アーチャーは諦観と共にそれを受け入れていた。

己にとつてこれは当然の罰。摩耗した理想の果てに受けるべき報いなのだ。

その意識は今も変わっていない。いずれは自らの行いの咎を受けべきだろう。

だがそれは今この時であつてはならない。

己一人ならいい。だが自分の敗北は、同時に主の敗北でもある。

理想のため、万人のためと身を犠牲にしてきた自分が、個人として力を貸したいと願う相手がいる。

悪意に浸された闇の中、彼等の助力が届いた時にそれを思い出した。たとえ癒しが効かなくても、それは何にも代え難い助けだった。

ならば立ち止まってなどいられない。全てを背負つても進まなければ、彼等マスターにどうして顔向けできるといふ。

だから、自分はこの悪を背負つたまま、あの悪神を打倒するとアーチャーは決意した。

地に突き立った双つの剣が炸裂し、内にあつた力が解放される。

それは魔力による爆撃。宝具そのものを爆弾と化して使用する禁じ手中の禁じ手だ。

——壊れた幻想。  
プロークン・ファンタズム

宝具を使い捨てるという真つ当な英霊ならば有り得ない選択。

贗作者たるアーチャーならば、それは必殺に足る有効な手段と成り得る。

しかし、ここでその威力は敵に向けられない。

自壊した双剣はアーチャーの下にある。当然その破壊には術者自身フェイカーが晒された。

弾けた宝具の魔力が容赦なくアーチャーを吹き飛ばす。

すでに肉体の自由は効かない。

身動き一つさえ至難であるアーチャーに残された手段は、肉弾。

爆発の勢いを推進力とし、己自身を矢と化して敵に向かう突貫で

あつた。

そして、弾き飛ばされた矢の向かう先にいるのは——悪神。

「オイオイオイオイ！ デタラメじゃねえか、なんだそりゃ!?

カミカゼってやつう？ さつすが日本人！ ヤマトスピリッツバンザイ！」

言われるまでもなく、アーチャーの行動は蛮行だ。

宝具に内包された魔力自体を破壊力に変え、暴発させるのが『壊れた幻想』。

その威力は元来の性能を上回る。如何に宝具の格で見れば低級である双剣といえど、無事で済むわけがない。

もはや自由にはならないとはいえ、それでも自分の身体だ。ダメージは確実に彼を苛んでいる。

それら余さず理解して、自らの蛮行への畏れはアーチャーにはない。

無謀など承知の上。可能性も僅かだろう。それでも尚、一筋の勝機に全てを賭ける。

それが出来ないなら英雄ではない。世に言われる不可能事を踏破する不屈の意志、それこそが英雄の証なのだ。

「だがまたまた残念なお知らせだ！ 俺を倒したって何の意味もねえぜ。

”この世、全ての悪”の本体は無形。殻をいくら壊したって痛くも痒くもねえよ。

俺くらいなら肉弾一つでも十分だろうが、”この世、全ての悪”を根刮ぎ吹き飛ばすにはどう足掻いても火力が足りないぜ」

「——それこそ、最強の聖剣の一撃でもない限りはな」

ああ、それも分かってている。

己の肉弾だけでは不足。そんなことは百も承知だ。

振るうべき”聖剣”も決まっている。聖剣以外の選択肢など有り得ない。

人類悪に浸される魂、その内に残された僅かな自我。

苦しみの時を長引かせるために、呪いが残したその一点こそが全

て。

手元に残っているのは一本の回路のみ。それのみで己が世界より聖剣を手繰り寄せる。

だから、自爆紛いの『壊れた幻想』など瑣末な事。肝要なのはここからなのだ。

必要とされるのは一撃のみ。

瓦礫の中の残骸のような意識だけで、アーチャーは心象世界へと手を伸ばす。

無茶だ、不可能だ、道理が合わない。思いついたそれらの言葉を切り捨てる。

肉弾の選択は正しかった。なにせ歩く手間だけは掛からない。為すべき事の前にはそんな余分すら命取りだ。

果たすべきは”この世、全ての悪”の打倒。それ以外は一切が余分なことだ。

無限に響く怨嗟の念を背負いながら、この手で聖剣を振るわなければいけない。

「――投影、開始」

悪意が叫ぶ。ユルサナイ、と。

断じてその魂を逃がすまいと、自らの元へ墮とそうと群がってくる。

増大する呪いの質量。もはや数秒だとして耐えられない。

投影に集中する。求められるのは速度。その意識が閉ざされてしまいう前に、果たすべき事を果たさねばならない。

その手に現れたのは黄金の輝き。

全ての泥を薙ぎ払うべく、最強の聖剣を構える。

「……聖剣で斬るのか、”悪”を。」

そうやってアンタは、自分の理想のために何時までも殺し続けるのか?」

悪神の声が貫く。その声こそが何よりも心を抉った。

言い訳の余地はない。自分はこれから、再び彼等を切り捨てる。

他人のために、他人を切り捨てる。正義の味方が救うのは味方をし

た側だけだ。

謝罪などどうして口にできるだろう。許されようなどと思つてはいけない。

だから、何も言えなかった。

糾弾も、憎悪も、甘んじて受け入れる。

この罪を背負つて、自分は務めを果たす。己の罪業は決して忘れない。

それだけしか、彼等のために出来ることが思いつかなかった。

「——永久エクスカリバー・イマージュに遥か黄金の剣」

心を鉄に、抱くべきは鋼の無情。

手にした黄金の聖剣。その一閃を”この世アン・リ・マ、全ての悪”へと振り下ろした。

「ああ、まったく——呆れるくらい歪だねえ、アンタ」

光の中で響いたのは、どこか魅せられたような声。

確実な滅びの刻を迎えながら、悪神の纏つた殻である少年は笑つていた。

「散々苦しんでるんだろうに、よくもまあそんな生き方を続けられるもんだ。

どうでもいい他人のために。摩耗して悪に染まっても、その考えだけは変わらないらしい。

……ホント、俺は御免被るけど、そういう人間がいるってことは認めやるよ」

”この世アン・リ・マ、全ての悪”はこの結果を容認していない。

怨嗟の声は相変わらぬ。己を切り捨てた正義を呪っている。その魂を穢すことを望んでいる。

このまま終わるなんて耐えられない。またも切り捨てられるなんて認められない。それは紛れもない悪神の本性だ。

少年の言葉は悪神の総体とは乖離したもの。

被つた”殻”から見える無銘の英雄。その姿を悪くないと思えた

のも、一時の幻想のようなものだけだ。

「ほら、行けよ。俺なんて前座みたいなもんなんだろう。

その化物みたいな偏執な生き方で、せいぜい誰かを救ってやるとい  
いさ」

内から溢れる無限の怨念に蓋をして、そんな言葉で少年は送り出  
す。

一方の存在が絶えたことで共有の呪いは効果を失っている。

苛む悪意から解放された英雄<sup>アーチャー</sup>。少年の言葉に、果たしてどんな意  
志を受け取ったのか――

消え逝く少年を捨て置いて、英雄は歩き出す。

向かう先は主の元<sup>マスター</sup>。支えると決めた者の所へと急ぐ。

切り捨てた相手にかかるべき言葉など無い。未練を抱くこともま  
た無かった。

対し、少年の内なる真意は未練がましく叫んでいる。

嫌だ、嫌だと、再び虚無に還ることを怖れて、みつともなく縋って  
いる。

あるいはこれが源泉かもしれない。去っていく英雄の背中に抱く、  
この妙な思いは。

片や、この世の悪だと周囲から定められ、自らの意思とは関係なく  
地獄へ墮とされた悪神。

片や、正義の味方と理想を定めて、自らの意志で地獄の道程を歩き  
続けた英雄。

どちらが恵まれているのだと、そんな話はどうでもいい。

ここまで正反対であるならば、嫌でも目に留まるというものだろ  
う。

決して相容れない、交わることのない互いの存在。反感を覚えな  
い方が無理というものだ。

ああ、だからきつと、弱者も強者のような、そんな風に生きれたら  
と錯覚したのも、無理はないのだ。

総てが、無へと還る。

被った殻も崩れ落ちて、■は虚無へと戻っていく。

もはやそこには何も無い。此度のように迷い出ることもないだろう。

ただ、何かを眩しいと感じた、心の一片を最期まで残して、■は消失を迎え入れた。

## 最終幕（下）

繋がりを通して、四騎みんなの勝利を感じ取れた。

甘粕正彦が使役する神霊たち。

どれも恐怖を覚えずにはいられない極大の災禍だ。

本来ならば格が違う。英霊といえどその差は覆し難いものがあったはずだ。

それでも勝った、勝ってくれた。

ムーンセル

月の表と裏を共に駆け抜けてきた。そこで築かれたものは無駄じゃない。

今なら確信を以て言える。自分の誇るべき戦友たちは、最高格の神霊にだって打ち勝てる。

ふと、隣に立つ”岸波白野”と目が合った。

自分と同じ名前を持つ人間。同一の元から発生した異端存在イレギュラー。

互いにとってとは奇妙な存在だろう。見方によれば同一人物であるとも言えるのだから。

勿論、何から何まで同じわけではない。性別は元より、細部を見れば中身の質もそれなりに違っている。

同じくしているのは、先を求めて前へ進もうとする意志。

あの月の魔王に対しても決して諦めないと叫ぶ、唯一の取り柄であるこの不屈さを共有している。

それがとても心強いと思えた。

意志を同じくする同胞、共に信頼できる信念で戦っている仲間がいる。

一人では折れるような場面でも、二人でならきつと越えられる。そう思えることが何より頼もしいと感じるのだ。

——ああ、きつと兄妹という存在ものは、こんな感じなのだろう。

自分は戦える。独りじゃない。

サレヴァント

戦友たちは勿論、同じ場所と同じ未来を目指す兄妹なかまがいる。

決して最期まで諦めない。望んだ先へと辿り着いてみせると思え

る。

「奏者よ！」

呼ぶ声がする。向けた視線の先に居るのは剣の英霊<sup>セイバー</sup>。

誇らしげに胸を張り、駆け寄ってくるのは美貌と愛らしさを兼ね備えた皇帝たる少女だ。

「見たか、見たであろうな余の勇姿を。」

神どもが語る終末など怖れるまでもない。あれしきの敵に余は負けぬ。

だから遠慮なく、奏者も余を褒め称えてよいのだぞ」

愛嬌に溢れる笑顔でこちらの賛辞を待つ少女は、まるで尻尾を振つてるワンコみたいだ。

こんなにも愛くるしい少女の取る剣が、どれだけ強く頼もしい刃であるかは何度も目にしてきた。

「勝利の栄光をあなた様に！ 良妻系サーヴァントタマモ、只今戻りました！

荒御魂もなんのその、私の荒ぶるご主人様への愛あらば、須佐之男だろうとバツチこーい！

あなたのタマモはここに健在です。ですのでホラ、勝利の寿ぎにハグの一つでも貰えたら嬉しいなあって♪」

次に姿を見せてくれたのは魔術の英霊<sup>キャスター</sup>。

彼女の献身には本当に感謝しかない。未熟な自分はどれだけ支えられてきたことか。

「うむ。働き大義であつたぞ、キャス狐よ。今日とて無駄に振りまく色香、ご苦勞であるな。

褒美に我が奏者の傍に仕えることを許す。案ずるな、今生の余は色事にも寛大だ。9：1くらいの割合ならば、余以外に構っていようとも許そう」

「お呼びじゃねえええ！ ていうかお許しなんて必要ありません！

ここまで我慢して参りましたがやっぱり勘弁ならねー！ ハーレム、滅ぶべし。ここですっぱりザツクリ決着を付けてやります！」

……いや、だからうん。その決着は、どうかまたの機会にお願いし



ます。

「またぞろ愛憎の因縁を増やしておるのか。根は凡庸である癖に取り巻く因果には事欠かぬ。

つくづく愉快に笑わせる生き様よな、マスター」

掛かった声の主は、精強無比な王気を発する黄金の英雄王。

今でも時々信じられない。この傲岸不遜な原初の王様が、自分なんかのために力を貸してくれているなんて。

「所詮は過ぎ去りし時代の遺物。我を愉しませる器ではなかったな。

そら浮かれている暇もなからう。いかな神霊も所詮、甘粕ヤッに使われる数多の一柱に過ぎん。よもやこれで終わりだとは思うまい」

そうだ、まだ勝負はついていない。

甘粕正彦の行う神威召喚。それは術者である甘粕が健在な限り途切れることはない。

未だに相手の選択肢は無尽蔵に存在している。こちらの不利は覆ってはいないのだ。

「だが、我々は確かに甘粕ヤッの神威に対抗している。臆することはないぞ、マスター」

そして最後に、弓アーの英霊チャイもまた勝利を手に帰ってきた。

これで四騎、全員が揃い立つ。

こちらにとつての総戦力。欠けた者は一人もいない。勝負はこれからだ。

どれほどの苦境であろうと、みんなが一緒なら必ずや乗り越えられる。そう信じて決して疑ったりしない。

「ご安心を、ご主人様。何を案ずるまでもなく、すでに私達の勝機は見えています」

……それは、どういうことだろうか。

「神の使役など人の身の丈を外れた所業。如何に聖杯ヘンセルを手にしても、御する負担は想像を絶するものがありますよ。

常人であれば小妖に触れただけでも意識が焼き切れます。向こうが常人でないのは重々承知ですが、本来であればそれほどの無茶を通して

その意志力でどれだけ奮起しようとも心身に掛かる負荷はすでに限界を超えているはず。まもなく破滅の刻が訪れるでしょう」

つまりそれまで耐えに耐えて、甘粕の自滅を待つという戦法か。だが果たしてそう上手くいくだろうか。自身の限界を弁えない破滅など迎えてくれるものか。

「案ずるまでもあるまい。頭が冷えた時分であれば分かんが、もはや炎の回った奴は己自身でも止められまいよ。

奴として己の破滅が近いことは承知しよう。その上でなお、その阿呆な感性で破滅への走破を加速させている。

現に見よ、甘粕<sup>ヤツ</sup>め神威どもを矢継ぎ早に召喚しておるわ。起源とする神話も千差万別、まったく節操のないことよ」

キヤスターの見立てに、ギルガメッシュが補足を加える。

神霊に最も近い二人からの見解だ。この戦法は極めて有効なものなのだろう。

……だけど、なんだろう。胸に引つ掛かるような、この不安は。神威召喚の連続など常軌を逸している。

その代償は必ずや術者を襲う。果ての自滅は必然のものだ。

甘粕が限界を迎えるか、その前に自分たちが敗北するか。結末にあるのかいずれかの一つだけ。

なにも不思議なことはない。道理にも適っている。疑問を差し込む余地はないだろう。

しかし、不安なのが一点。相手はあの甘粕正彦なのだ。

有り得るのだろうか、あの甘粕が。無茶を押し付けた果ての自滅などと、そんな大人しい結末を本当に迎えてくれるのか。

数多の奇跡を成し遂げてきた勇者。彼ならむしろ、この苦境すら起爆剤に変えて、もつと途轍もない事を引き起こしてしまうのではと

「む」

その時、異常に最も早く気付いたのはギルガメッシュだった。

本来ならばこちらへと差し向けられてくるはずの神威。

その矛先が今は、別の方へと向けられていた。

「これは……同士討ちか？ 神霊の制御を誤ったのか」

鷹の目のアーチャーがそう判断するなら、やはり間違いはない。召喚された神威たちの矛先は、同じ神威へと向けられている。

自らの権能で相手の権能を潰し合い、自ら広げた混沌の中で殺し合っていた。

これは、暴走なのだろうか。

一柱だけでも至難だという神霊の制御。遂に言った通りの限界がきたのかと訝しむ。

「いや、それは違うであろうな」

そんな自分の認識を、仲間セイバーの声が正してくれた。

「一見無秩序にも見えて、あの闘争には一本の芯が通った美が見て取れる。

あれは暴走ではあるまい。奏者の指揮に振るわれて、確固たる意志の下に行われる旋律だ」

暴走ではないと、はつきりとセイバーは断言した。

独特ではあるが確かな感性を持つセイバーの見立てなら信じられる。

あれは暴走ではない。今なお甘粕正彦は神霊を己の支配下においている。

ならば一体、何が起きているのか。

見当もつかない。ただ胸の内の予感、過去に類のない最大の警鐘を鳴らしていることだけは感じていた。

「そんな、嘘……！」

「——馬鹿なッ!？」

そして、今の事態を理解できている二人の態度を見れば、その予感も確信に変わる。

極めて神霊に近い存在であるキャスターとギルガメッシュ。二人だからこそこの事態の深刻さが見て取れたのだ。

甘粕が何をしようとしているのか、それがどれだけ馬鹿げたことなのかを。

「甘粕ヤッめ、よもやそこまで——ッ!？」

信じられないと驚愕を顔にする半神半人の英雄王。

常の彼ならば有り得ぬとすら思える戦慄の相。それを引き金としたかのように『大戦争』の幕は上がった。

——そう。例によって甘粕正彦、彼はこの局面でまたしてもやらかしたのだ。

災禍に抗う人々の姿に魅せられて、狂気の如き願望のまま世界の大半を壊滅せしめたように。

最強の聖剣の光を前に、限界を超えた力を勇氣と共に振り絞ってついには超越してしまったように。

災禍の神霊に立ち向かい、見事に打倒を果たした彼等の奮闘があまりに輝かしいものだったから、ならば俺もと全力以上を出し過ぎた。

先に行った神威召喚も、謂わばこのための呼び水に過ぎなかったのだろう。

神威同士を共喰いさせ、その血を生贄代わりに更なる神霊たちを連鎖的に喚びだしていく。

膨れ上がっていく神格の数。その勢いは留まることを知らずに、もはや十や二十ではきかない。

数百数千、それ以上……参戦する神格を増やしながら、神々の闘争はその規模を拡大していく。

数千以上の神霊による殺し合い。  
大元にある原典も完全に無視した、世界中のあらゆる神話の神々が

巻き込まれた大戦争。

本来であれば何の繋がりもない神同士、それを甘粕は驚異的な意志で従わせ、闘争へと駆り立てている。

数多の権能が混ざり合った形容不可能な混沌、そんなものが導く先は一つしか有り得ない。

全ては、甘粕が求めてやまない姿を見たいがために。

どれだけ強靱な意志も、それを発揮すべき場面が訪れなければ宝の持ち腐れだ。

真なる勇者には相応の試練がいる。容易く越えられる障害、つまりぬ敵手が相手では、その真価は片鱗も顕れまい。

持てる真価を発揮し、更なる輝きに至る姿こそ見てみたい。心の底からそれを望んでいる。

すでに一度超えた災禍しれんなど、つまらない。

だからもつと、もつとだ。もつと強大なる試練が要る。

その輝きを十全以上に引き出すため、今までにあり得なかったような試練が。

過去にあつた某かでは、もはや足りぬ。真実に前人未到、誰も踏破した者のいない極限の災禍こそが相応しい。

甘粕正彦はそう信じている。信じているからこそ、総てを御破算にする手段をも決断したのだ。

狼が槍を飲み込んだ。

蛇と雷神が相打った。

魔犬と戦神、巨人と光、女神が黒に焼き尽くされた。

過程で混じり合っていく神々の権能。その混沌が齎す破滅の規模は相乗的に膨れ上がっていく。

その果てにある結末は、生じる力場に吞まれ、誰も残らない”黄昏”となるだけ。

顕象した神々の闘争、それを表すのに適した”名”が、北欧神話にこう記されている。

「おまえたちの輝きを俺に見せろオ——  
ラッナロオオオク  
神々の黄昏ツツツツ!!!」

終焉を告げる最終戦争。神話の原典さえも超越した究極の混沌。

総てを滅ぼす極大の破滅の大渦が、甘粕正彦を中心にして拡がった。

「……なんたることか」

呆然としながら、ギルガメツシュが声を漏らす。

その感情はもはや怒りや呆れを通り越して、感嘆すら含んでいるように見えた。

「天上の視点を持つ裁定者の在り様。超越に至った強靱なる意志。それらは余さず見て取っていた。

だがよもや、これほどの馬鹿であったとは、さすがに考えが及ばなかったぞ……ッ！」

ギルガメツシュのこんな姿を初めて見る。

だがそれも無理もないのだろう。それほどに目の前の現実信じ難いものだから。

「アハハ、嘘だあ……ウフフ、有り得ないゾオ」

嘘嘘ぜえーつたい嘘です。有り得ませんってえ」

「あ、分かったあ♪ これは夢です。

目が覚めればお邪魔虫な皇帝様もいない、ご主人様とのハッピーライフが始まっているに違いありません！

というわけでご主人様♥ お目覚めのキツスプリーズ♪」

キャスターに至っては現実逃避だ。

そこにあるのはいつもの陽気さではなく空元気。迫ってくる笑顔も乾き切っていた。

神霊に近い二人にとっては、それほどの衝撃だったのだろう。

自分などは正直、まだ事態に追いついていないのが正直なところだ。

甘粕がとんでもない事をしたのは分かった。だがそれは、本当にどうしようもない事なのかと。

「ならん。あえてそう断言してやろう。

我の蔵には人類が至るあらゆる技術の雛形が収められている。過

去も未来も、人の知恵の産物であれば我が宝物殿は総てを網羅する。およそ万能という概念に相応しい英霊は、我を置いて他にはいない。それを念頭においた上で、告げてやる」

「——あれは駄目だ。どうにもならぬ。たとえ我が蔵を逆さに引っくり返したところで、為す術など一つたりとて見つかるまい」

普段のギルガメッシュを知る自分にとって、それは信じられない言葉だった。

「甘粕<sup>ヤツ</sup>が為しているのは数千柱もの神格による殺し合い。原典など存在しない、新しき終焉と創世の神話よ。

本来ならば、法則の定まったこの宇宙において神格はその権能を十全には発揮できん。神代は過ぎ、神秘は文明によつて置き換えられた。もはや神話に記された通りの力を引き出すことは叶わぬ。

だが甘粕<sup>ヤツ</sup>は、あろうことか全世界神話を掛け合わせるといふ力業で、神話以上の出力にまで押し上げている」

「あれは文字通りの『世界の終焉』。もはや我らだけを呑み込むだけでは収まるまい。

狂い廻された神々共の生み出す黄昏は、やがてこのムーンセルから溢れ出し、人類の無意識に引かれながら拡がっていくであろう。

その拡散規模は全世界に及ぼう。人の意識が届かせた領域の全土には、何一つ残らぬ黄昏が広がるであろうよ」

「ていうか、ホントあり得ませんよッ!!?」

天照大神の化身であり、神霊の側面の一つでもあるキャスターは、この事態をあり得ないと叫ぶ。

なまじ大元の強大さを知るが故に、それさえ超越した甘粕の所業が信じられないのだろう。

「現に出来ているのだから仕方あるまい。我とて信じられん思いは強いのだぞ。否定しようが詮無きことよ。

まったく、人類の終わりは自らの欲を持って余した果ての滅びとは予見していたが、よもやここまで阿呆な自滅とは、この英雄王の眼を以てしても見抜けなんだわ」

「だからといって！　そもそも話、やってることオカシイでしょう!?」

このままだと洒落でなく世界が終わりなんですよ！　あの人は一体なに考えているんですか!？」

キャスターの言うように、甘粕のやっている事はまるで本末転倒だ。

世界の崩壊なんて彼は望んでいなかったはずだ。そもそも人類が滅んでしまえば彼の望む勇氣は永遠に見れなくなる。

子供でも分かる単純な理屈。それが分かっているなら、どれだけ力があるろうとこんな真似をするはずがない。

「……何を考えているか、だど？　これは見当を外した疑問よな。

どうやら貴様は、未だ甘粕<sup>ヤツ</sup>の真髓に思いが至らぬらしい」

……ああ、だけど同時に、甘粕がなぜこんな真似をしたのか、その理屈もなんとなく分かっってしまうのだ。

「神霊をも打倒した我等、それに相応しき試練。同じように神霊をぶつけるのでは芸がない。

そのように考え、その通りに実現するべく意志を猛らせ……ああ、要するにだ——」

「——なにも考えてなどおらんわ、たわけっ！」

モノを考える余地など残して、あんな所業ができるものかよ」

「——馬つ鹿じゃねえええのおツツツ?!!?!!」

そう、きつと甘粕に大した理屈はない。!!?!!」

いつかの時のように、その場の勢い任せの感情であそこまでの事が出来てしまった。

甘粕<sup>カクレ</sup>らしいといえれば彼らしい。今までもこうやって、幾多の奇跡を成し遂げてきたのだろう。

……そうだ。らしいと言えば——

「随分と殊勝な態度ではないか、英雄王。先程から、貴様の言葉とは思えんが……」

そう、らしきで言うならギルガメッシュだ。

ここまで聞いている彼の言動。常の彼を知ってる身からすれば余り



にらしくない。

万象総てを雑種と見下し、己こそ真の王だと豪語する傲岸不遜。慢心してこそ王と言いつり、それを裏付ける莫大なる宝具の数。

およそ殊勝という言葉から最も縁遠い気質、それがギルガメツシユという英雄のはずだ。

「なに、我はすでに諦めたのだ。殊勝の一つも見せようさ」

「諦めただと？」

「意外か？ いや、そうでもあるまい。甘粕ヤツのような馬鹿者は、人類史にも二人といまいよ。

事ここに至れば、いかな我とて認めざるを得んだらうさ。

——人間バカ、ここに極まれり、と」

そんな英雄王を以てしても、諦観を抱かせるほどに甘粕正彦の所業は凄まじいのか。

「貴様はどうだ、贋作者フエイカー？ 貴様の貯蔵する贋作は、甘粕ヤツに抗し得る何かを秘めているか？」

「っ！ それは……」

「なかりうな。アレに原典など無い。名こそ北欧神話を冠しているが、本質はまるで別物だ。

世界を滅する杖レイヴァーティンを持ち出そうが通用せぬ。あらゆる神話を巻き込んで訪れる終末だ。一つの神話を終わらせた程度では到底届かん。

過去ではなく現在いま、甘粕正彦という男によって築かれる、未来へと至る新たな神話。その結末は未知であり、故にどうしようもない」

アーチャーは目にした真作を理解して複製する贋作者フエイカーだ。

その根本にあるのは過去の再現。かつて築かれたものを現在へと蘇らせるのが本質だ。

過去の原典が存在せず、現在で未到の領域を踏破する甘粕正彦の神話に、既知の概念では対抗できない。

それはある意味で、この場の全員に当て嵌る。

過去の偉業によって至る英霊の座。それは同時に、その力は過去の段階で固定されていることも意味している。

英霊かれらに甘粕と同じものを築くことはできない。甘粕と同じ領域に

辿りつくことは誰にもできないのだ。

「ならば術者を狙えばと考えたところで無意味だぞ。アレはすでに始まっていてからな。

仮に僥倖に次ぐ僥倖が重なり、甘粕ヤツを仕留めたでしょう。だがそうなったとして黄昏が消えることはない。

神々はすでに喚ばれ、終焉への行軍も止まることはない。流れ出した黄昏はもはや何を以てしても押し戻すことはできない」

「叶うならば、あの神話の先に行き着くモノを見てみたいものだが……無駄か。

普遍無意識に従い拡散していく黄昏の波動、旧世界の悉くは一掃されるであろう。

抗う術も逃れる術ももはや無い。諦めて終焉を見届けるより他に  
あるまい」

周りを見渡す。

ギルガメッシュだけではない。その諦観は全員に共通したものだ  
だった。

——セイバーも……、

——キヤスターも……、

——アーチャーでさえも……、

皆が等しく諦観を抱いている。

もはやどうする事も出来ないのだと理解してしまっている。

足掻こうにもどう足掻けばいいのかさえ分からない。感情に  
関係なく、認めざるを得ないのだ。

その事實は、岸波しづな白野たちにも重く突き刺さる。

今まで諦めないでこれたのだから彼等のお陰だ。その彼等が膝を  
ついた今、どうして同じように出来るだろう。

諦観が伝播してくる。

脚に力が入らない。気を抜けば倒れてしまいそうだ。

もう、どうすることも出来ないのか。このまま諦めてしまうしかな  
いのだろうか。

「しかし拡がりが遅いな。こうも悠長に構えられる刻などないはずだ

が……ああ、そういうことか」

奇妙と言えば、この猶予。

発動からそれなりの時が過ぎていく。だというのに、未だ黄昏は自分たちを呑み込んではいない。

そのことに疑問を抱いたが、どうやら答えはギルガメツシュが先に出していたらしい。

「それも必然か。黄昏が溢れ始めれば、貴様、だとして破滅は免れんからな。自己の崩壊を前にしてようやくその重い腰を上げたと見える」  
ギルガメツシュの言葉の意図がよく見えない。

まるで自分たち以外の第三者がいるかのような物言いだ。

その第三者が、拡がる黄昏をくい止めているとでもいうのか。

「その通り、察しが良いではないか。

”奴”からの介入が無くば、すでに我らはあの黄昏の渦に潰えていたであろうよ」

唐突すぎる、意味が分からない。

ここに至って第三者など、そんな要素が入り込む余地はなかったはずだ。

今さら自分の知らない誰かに、この事態を動かせる者がいるとは思えない。

「何を言う、居るであろうが。この事態であればこそ動き出すモノが。関わりなしと考えるのも外れているぞ。アレは恐らく、この場の誰よりも早くおまえを見つめていたモノだ」

この事態だからこそ？

ましてみんなより早く自分を見つけていたなんて、そんな者がいるわけが——いや。

確かに、”ソレ”はいた。

関わりの無い者なんていない。この世の万象を、始まりの瞬間から”ソレ”は見ていた。

そして今の事態ならば”ソレ”も自ら動き出す可能性も出てくる。

”ソレ”は——

「——ムーンセル。この月の眼よ。」

万象を観測者として記録し続ける数理の化身。このまま黄昏が拡がり出れば、胎を破られた聖杯とて崩壊を免れん。

”停止”ではなく”破壊”だ。それは即ち、至上命題である『記録』の喪失を意味する。

自己の存在意義が失われるこの異常事態を前に、遂に自らの”意思”を表出させおったな”

意思の表出。それはこれまでムーンセルが頑なに拒んできたはずの選択だ。

全能の神に匹敵する力を持ちながら、この観測機は自らがそうなることを決して許容しなかった。

公平なる観測と、正確な結果のために。何より優先される命題、それのみを達成する道具として。

だがムーンセルが破壊されれば、蓄積された記録も全て失われる。それは自らが課してきた命題の崩壊。断じて許してはならない結末のはずだ。

あらゆる願いの公正である数理の化身も、その結末だけは認められない。自己崩壊の危機を前にして、公正なる観測機だった”モノ”は主に反旗を翻したのだ。

ムーンセルは今、拡がる黄昏を全力で押し留めている。

自身の所有権を甘粕正彦より取り戻そうと対抗しているのだ。

蓄積してきた『記録』を守るために戦う道を選んだ。それは紛れもなくムーンセルの”意思”だ。

「だが貴様の目覚めは遅すぎた。観測にかまけ過ぎたな、もはやその力及ばぬ所までできてしまっているぞ」

黄昏の波動がムーンセルの意思を押し退けて、その拡がりを増していく。

狂騒する神々の闘争はムーンセルにとって内部情報の暴走状態オーバーロード。その情報爆発はもはやムーンセル自身でも止められない。

その事実が示すものは一つ、暴走へと駆り立てる甘粕正彦の意志力、その狂念の質量はムーンセルの命令さえも遙かに凌駕しているのだ。

『警告』『WARNING』『CAVEAT』『AVVERTIMEN  
TO』…

『GLOSBE』『STOP』『停止せよ』『EPOKHE』…

『DANGER』『GEFAHR』『危険』『PELLIGRO』…

『BRAMA』『ANLIEGEN』『SUPPLIA』『やめて』…

鳴り響く警告音<sup>アラート</sup>。人類史に点在したあらゆる言語を用いて表示される警告文。

それらはまるで、必死に自らの存在を懇願する哀れな命乞いの姿に見えた。

そんなムーンセルの懇願を、甘粕正彦は完全に無視していた。

聞こえていないのだろう。意志を輝きを愛する甘粕に、月が見せた意思は余りに脆弱。

その程度の輝きでは目に入らない。好悪を抱くわけでもなく、単純に気が付いていないのだ。

月の声など右から左にと素通りさせ、猛り狂う意志は踏み止まることを知らない。

虚構で編まれた世界が震動している。

それはこの場に限ったものではない。SE・RA・PHそのものが自壊の軋みを上げている。

電子の世界に存在した総てが崩壊を始めている。拡がる黄昏に呑まれ、残るものは何一つとしてあり得ない。

総てを無に。大も小も、強きも弱きも、そこに生まれたか細い意思さえも道連れにして――

「ふむ。しかしこれで一筋ほど光明が見えてきたぞ。

止められんのは変わらずだが、ムーンセルの抵抗にて生じた間隙より、我等が逃れることは可能かもしれん」

「構わん、絶望を許すぞ。人類史の終端、その最期の見届け人としての役目を果たすことも一興かもしれん。

おまえが望むならば我が財を使い尽くしても道を開こう。そこな雑種共も連れて良い。見果てぬ星海に漕ぎ出すのも良かろうさ。

――なあ、岸波白野よ」

…：諦める。ああ確かに、それしか道はないのかもしれない。  
方法なんて思いつかない。そもそも英霊みんがどうにも出来ないのだ。  
自分出来ることがあるとも思えない。

だから、諦める。それが自然で、きつと当然のことなのだろう。

——だというのに、この胸の内より湧き上がる、炎のように燃え  
滾おもった激情はなんなのか。

もはや勝てない。何も出来ない。諦めよう。

それらの言葉を思い浮かべる度、内なる気持ちは頑なに拒んでいる  
のだ。

理屈ではない、この気持ち。制御なんて出来ないし、する気もない。  
ただ、どうやら自分は、ここで立ち止まってしまいう事を認めていな  
いらしい。

隣に立つ岸波し白野ぶ。眼を合わせれば、同じ感情で動いているとす  
ぐに理解できた。

「フ、フフ、フハハハハハ、アハハハハハハハハハハハハハハ!!!」

傑物たる英雄が並び立ち、それさえも膝を折る神威の黄昏を前にし  
て尚、諦めないと吐くか!

つくづく厚顔なマスターよな。それとも、なにかしの策でも思いつ  
いたか?」

そんなもの、あるわけがない。

岸波し白野ぶは凡庸だ。奇跡のように解決へと導く、英雄のように選ば  
れた力は持っていない。

自分に出来ることは足掻くことだけ。どんなにみつともなくても  
前に進む、その諦めの悪さしかない。

ここで足を止めてしまうなんて嫌だ、認めない。

何も出来ないからって、それで諦めなければいけないなんて道理は  
ないはずだ。

「理屈はなし、勝機もない。ただ己が気に食わぬから、それだけで抗  
う、と。

なんだそれは、なんなのだ!! まるで道理が合わぬ。愚行、ここに  
極まったな!

前言を翻そう。甘粕こそ人間の極みだと先に言ったが、同等の馬鹿者がここにもおったわ！」

みんなもまた、自分の事を信じられないといった風に見ている。無理もないのかもしれない。英霊ですらどうにもならないのに、こんなことを言い出すなんて正気ではないだろう。

けれど、今までだってそうだったはずだ。

終わりたくないから立ち上がった。死の絶望の中でも最後まで抗った。

そこに勝算があつたわけじゃない。自分が諦めないと叫ぶのは、理屈があつてのことじゃなかった。

何も変わらない。この意志が続いている限り、岸波白野は前へと進む。それは我儘で、意地なのかもしれないが、なかつた。

「ふむ、ならば問おう岸波白野よ。」

その克己の芯はなんだ？ なぜ今一度の奮起を決意した？

おまえには確かに、絶望の影が差していた。そこに希望の気配などなかつたはず。

答えよ、何がおまえの意志に光を与えた」

切っ掛けと、そう呼べるほどのものとは思えない。

それでも問われて思い浮かぶのは、初めて自らの意思を示した月の姿だ。

「聖杯だと？ アレの姿に同情でも湧いたというのか？」

おまえを生んだのは聖杯だろうが、闘争の宿命と死の結末を強いたのも聖杯であろう。

アレの意に共感する因果などないはずだが」

確かにそれはその通りだ。

訳も分からないまま目覚めて、気付けば聖杯戦争なんて戦いに参加していた。

戦いで生き残れるのは一人だけ。生きるためには相手を倒さなければならぬ、残酷なルール。

憎かった相手などいない、平気だったわけがない。彼等に下した死の罪業は今も心に重く残っている。

そのあげく、辿りついた聖杯で待っていたのは、不正な存在<sup>データ</sup>としての消滅<sup>デリート</sup>という最期だった。

まったく、思い返してみるとひどい理不尽だ。

共感なんて抱けそうにない。感謝など以ての外だろう。

仮に自分が聖杯へと至り、願いが聞き届けられるとしたらその存在の封印を願うに違いない。

だからこれは同情の類ではない。

思い出したのだ、その姿に。自分の根底にあったものを。

甘粕正彦の光は、灼熱に燃えて輝く太陽だ。

眼を灼くほどに眩しくて、小さな意思<sup>ひかり</sup>はその輝きに吞まれて映らない。

それが甘粕の本質だ。彼が愛する人の輝きとは、そうした眩しく煌く光なのだろう。

そうでない輝きなど甘粕の眼には映らない。きっと無いも同じなのだろう、小さく儂い只人の意思などは。

人の可能性だと、真の勇者だと甘粕は自分の事を賞賛した。

だけどその賞賛に心が動いたことはない。今もって尚、そんな輝きが欲しいとは思えなかったから。

聖杯戦争で自分は戦った。その過程で強さが練磨されたのはその通りで、試練がなければここまで至れなかったのも事実だ。

けど、それだけじゃない。本当に僅かなものではあったけど、その中で誰かを助けられたこともあった。手を差し出すことが出来たのだ。

試練に打ち勝つことよりも、自分にはそちらの方が何倍も誇らしい。甘粕から見れば輝きとも呼べない小さな光、当たり前前の善意こそ何よりも価値があると思える。

結局、どんなに強くなってみせたところで、岸波白野<sup>しなぶの</sup>とはそんなものなのだろう。

穏当な平和の中、余裕を持って他者を思える世界。そんな柔らかな光でこそ自分は生きていたい。

平和の中では真価が発揮されない？ 結構だ。試練がなければ示



せない真価なら、無いものと扱ってくれて構わない。

地獄でも示せる意志でなければ本物でないなどと、そんな理屈は受け入れたくない。

聖杯ムーンセルが示した意思の発露。

それは自身の大切なモノを守りたいという、すぐく身近で切実な気持ち。

その光が見えないというのなら、甘粕正彦。岸波じぶんたち白野は決して貴方には屈しない。

「小さく在るが故の光。凡百の雑種として抱いた矜持、か。

なんと小賢しくも厄介なモノよ。その忌々しき姿に、何度煮え湯を飲まされたことか。

それがよもや、こうして間近に置いて眺めることになろうとは。世の因果とは分からぬものよ」

そう言ったギルガメツシュの声は、何処か自らを皮肉るように。

他者を厭わぬ傲慢。弱き者たちを虐げる側にいるはずの彼が、こうして自分と並んで戦ってくれている。

ギルガメツシュの声には自嘲が含まれ、それ以上の信頼が満ちていた。

「であれば、英雄われらも示してみせねばなるまい」

あまねく英雄の王たる者の令が、その口より発せられた。

「そら何をしている。如何な雑種といえど、偉業を為し世に名を刻んだ英傑であろうが。いつまで無様を曝している

小さき主マスターは立つという。ならば我等も立たねばなるまいが。それが出来ずしてなぜ英雄などと嘯ける。

命じる、起て。剣を手に取りサーヴァントたる己の本懐を示すがいい」

その言葉には内容以上のものが宿っている。

理屈ではない、不可思議な魔力にも等しい王氣のカリスマ。

命令に違和感がない。むしろ従うことこそ自然だと、内の魂は王への臣従を促している。

「言われるまでもない。奏者が諦めぬと申すのなら、余はそのための

剣で在り続けよう」

そして王の言葉は確実に、諦観に包まれていた皆の心にも届いていた。

「そして不敬であるぞ、英雄王。余に命を下せるのは奏者のみ。貴様に命じられる謂われはない」

「てゆうか、真っ先に諦めるとか言い出した人がなんでそんなに偉そうなんですか？」

セイバーにも、キャスターにも、力が戻ってきている。

そこに先程までの諦観はない。あるべき英雄としての強さがその姿にはあった。

「申し訳ありません、ご主人様。このタマモ、不覚にも臆してしまいました。ええ、言い訳の仕様もございませぬ。神を従え神をも凌駕する、そのような人間がいると信じられなかったのです。

ですが、もう無問題！<sup>モーマンタイ</sup> 神霊超えが何するものぞ！ ご主人様への愛のパワーで、私も神様なんか軽く超えてみせます！」

歴史に偉業を刻んだ英霊である皆が、自分の意地に付き合っけて起つてくれている。

こんなに弱い自分のために、何もできないこの手に代わって、この我儘を押し通してくれる。

独りじゃない、仲間がいる。彼等が共にいてくれたなら、どんな奇跡だって信じられる。

「まったく、どうかしているな。今までも幾度となく驚かされてきたが、今回ののは極めつけだ」

「ああ、本当にどうかしていた。このような事態を前にして、オレは一体なにをしているんだらうな。

この身は掃除屋。世界の危機に現れ、害悪の要因を排除する守護者だ。やるべきことなど、初めから決まっていた」

再び皆の意志が揃い立った。

相手となるのは総ての神霊、史上最強を塗り替えた新しき終焉神話だ。

無茶な戦いばかりをしてきたが、今回ののはひとときわ度が過ぎてい  
る。可能性なんてこれっぽっちも見えない。

ああ全く、本当にいつも通りだ。

無茶な相手なものも可能性が見えないのも同じ。それでも自分たち  
は諦めずに立ち向かい、全てを乗り越えてこれた。

だったら今回だって諦めるのはまだ早い。こうして前に進むため  
の手足があり、意志が折れずに繋がっているのなら、抗うことはでき  
るはずだ。

「よかろう。ならば我が契約者マスターのため、我から策を一つ授けてやるか」  
策だって？ それは、甘粕に対抗するための？

打つ手なしと思われてきた中に、とすれば光明が見えてきた。

「喜ぶのは早い。策とは言ったが、こんなものは到底策などと呼べる  
代物ではない。道化の語る戯れ言の類いよ。軍師が諫言と口にしよ  
うものなら手打ちにするところだ」

「……何を狙っている、英雄王」

「問うまでもなからう、贗作者フェイカー。主に勝利を捧げるため、サーヴァント  
としての諫言よ。」

確かにこんなものは道化の戯れ言。だがどうやらこの場にいるの  
は理屈を介さぬ馬鹿ばかりであるらしい。ならば戯れ言こそ真理と  
なるだろうさ」

確かに、その通りだ。

ギルガメッシュがこう言う策だ、きっと真つ当なものではないのだ  
ろう。

けれど真つ当な手段では甘粕の神々のラグナロク黄昏には対抗できない。ど  
んな無茶でもやるしかない。

心苦しいのは、それを行うのが自分ではないということだけ。

自分の無茶を現実のモノにしてくれるのは何時だってみんなだ。  
それを思うと、これからの無茶にも——

「何をたわけたことを。悠長な葛藤など抱いている暇はないぞ。」

——なにせ、この策で決め手となるのは岸波白野おまえたちなのだからな」  
今度こそ、岸波白野しぶんたちはあり得ないことを聞かされていた。

彼等は挑む、全ての決着をつける最後の試練に。

四騎の英<sup>サーヴァント</sup>霊に、二人の人間<sup>マスター</sup>。

対するは全神話をかけ合わせた数千柱もの神霊権能による極大の混沌。

戦力差は明らか。終焉は免れない。黄昏は溢れ世界を覆い、人類史の結末をこの宇宙に刻むだろう。

まさしく絶望だ、世界は終わる。

その絶望を穿つ。絶無に見える可能性に一点の風穴を空けるのだ。確たる希望などない。理屈で考えるなら不可能だ。だがそんなものは臆する理由になりはしない。

絶望を越えた先の希望。不可能を成し遂げる強い意志こそが真の英雄性の発露なのだから。

原子は廻る。

交わり、固まる。即ち世界の原初。

乖離剣が顕すのはその風景。斬り裂かれた世界の狭間に始まりの混沌<sup>じじく</sup>を築くのだ。

廻り続ける三柱。その回転速度は従来を遥かに超える。

王の財宝によるバックアップ。数多の宝具がもたらす恩恵はその出力を限界規模まで引き上げている。

だがそれでも足りぬとばかりにギルガメッシュは剣を廻していく。限界を超えた駆動に原初の宝剣も軋みを上げていた。

「耐えよ、エア。この一撃のみ保てばよい」

天の鎖を除けば、数ある宝物の内でも至宝と認める乖離剣。

価値なき相手に使わせることはギルガメツシュにとって極刑にも値する不敬。それほどの宝具を今、使い潰すことも厭わずに酷使していく。

「それも悪くはなからう。使うべき相手であれば、使い潰すも一興だろうさ」

それは敵手である甘粕正彦を認めていることに加えて、もう一点。他ならない自身の契約者、岸波白野のことを何より認めていることの証左だった。

「矮小たる身の上に過ぎたる傲慢を抱きし者よ。その愚道を貫くがいい。その愉快なる愚かしさで我を楽しませろ」

ギルガメツシュの情愛とは宝の愛で方に等しい。

彼にとって命とはいずれ尽きるもの。無間続く裁定の王道の中で観る一欠片に過ぎない。

裁定者としてその人生を俯瞰し、価値を定めては笑う。そこに人としての情は存在しない。

孤高なる王道。絶対たる裁定。だから王の言葉は理不尽であれ筋は決して外さない。

隣に立ちながらも視点は交わらせず、岸波白野の進む道を見定めてはその価値を認めているのだ。

「この今生に限り我が宝物殿の鍵はおまえのものだ。存分に使い倒し、愚道の果てへと手を伸ばせ。

その道を買いた先に辿る生涯はさぞや愉快なモノとなるだろう。おまえの価値を我に示せ、それが我等の契約だ」

乖離剣の柄へとその手を伸ばす。

限界を超えた回転に生み出される圧力は、もはや片手では支えられない。

両の手で掴み取る。超絶なる星産みの力を溜め込みながら、担い手たるギルガメツシュは凄絶な笑みを浮かべた。

「さあ、二度とはこぬ晴れ舞台だ。天地を分った神話の何たるか、今こ

「示してみせるがいい」  
軋む剣に亀裂が入る。

限界の先の真の限界、崩壊の予兆が表れている。  
はたしてこの一撃の果てに存在を留めていられるか、保証は全くない。

だというのに、剣と担い手に浮かんでいるのは満面の歓喜である。  
生涯初の舞台。見下ろす雑種に挑まれるのではなく、見上げて届かぬ大敵に挑んでいる。

自滅覚悟の超越の一撃、そんなものを振るう機会など史上にここしかあり得まい。

「世界を穿て——天地乖離す開闢の星」

放たれた天地開闢の創星神話。

世界を斬り裂いた神の刃が、神々の黄昏に突き刺さった。

螺旋の斬撃が黄昏を穿つ。

突き刺さった衝撃は終焉をもたらす波動に挟り込み、ついにはそこに一孔を開いてみせた。

まさしく奇跡だ。

ただの一柱の力が全神話規模の黄昏に、一点とはいえ凌駕し得たのだから。

本来であればあり得ない結果だ。その不可能を実現せしめた意志の力こそ、英雄たる者の何たるかを示す証左である。

だが黄昏を開いた先に現れたのも、また混沌だ。

天と地に分けられた原初の世界。創世の始まりには生命は未だ存在し得ない。

そこはあらゆる生命が誕生の前にある。住まうことはおろか、産ま

れることさえ不可能だ。

微生物さえも存在し得ない環境。人が踏破できないという点で見れば黄昏と何ら変わらないだろう。

しかして見るがいい。

天地を定め、世界に姿を与えるのが”神の業”であるのなら。

世界を開拓し、天地に自らの歩みを刻ませる道を築くのは”人の業”である。

黄金の劇場が幕を開ける。

原初の上に築かれていく建造物。それは人の感性が生み出した芸術の産物だ。

「我が才を見よ！ 万雷の喝采を聞け！」

歌う、唄う、謳う、謡う。

赤き皇帝の奏でる調べ。それは彼女の感じ入る美のカタチ。

慎ましきなど不要である。己が織り成す芸術こそ至高、そう信じる情熱は偽りなき真実なのだから。

「築かれよ我が摩天！ ここに至高の光を示せ！」

その情熱は、彼女が掲げる愛のために。

想うべきは愛を捧げる相手のこと。愛しきその姿を想う度、胸には情熱が灯るのだ。

それは、狂おしく咲き誇る花のように。

それは、爛々と燃え盛る焰の如く。

ああ、奏者よ。そなたへの思いを如何様に言い表せば良いのか。

この思いはインペリウムよりも誉れあるものであり、ヴェスビオス火山の炎よりも熱きもの。

既存の言葉では表せない。否、表したくない。何物にも代え難い無二の価値であってほしい。

奏者のために余は道を築こう。

儂き身の上で道なき道を行く勇氣。それは美しいと同時に危なっかしくて、余は氣を揉んでしまうのだ。

だから奏者の行く先は余が切り開く。阻む敵は我が劍で、未踏の難行には新しき道を築こう。

危うい目には合わせたくない。奏者のことは余が守護しよう。

故に案ずることは何もない。奏者は思うままに道なき道を行くがいい。

今一度言わせてほしい——余は奏者を愛している。

「座して称えるがよい——  
招き蕩う黄金劇場」

皇帝ネロが築く黄金劇場。その宝具のカタチは劇場のみを意味しない。

異なる意味の指向性を持たせ、存在に味わい深さを加えたなら、それは如何様にでもカタチを持てる。

その情熱に彩られ、黄金の架け橋が築かれた。

混沌の上に架けられた黄金の橋。

二人の英雄によって成し遂げられた奇跡。他の誰でもない彼等だからこそ出来たことだ。

だが、黄昏は終わらない。

乖離劍に穿たれた穴が、その空間を狭めてくる。

開闢した天地を押し潰さんとする圧力。内に盛れ出た力に圧され、黄金の橋も崩壊を始めている。

二人の力が脆弱なのではない。神々の暴威とはそれほどに強大なのだ。



ギルガメツシュも、セイバーも、その面貌に苦渋を浮かべて耐え凌いでいる。

それでも今のままのせめぎ合いが続けば、近く二人は圧倒されるだろう。それは確定している事実である。

全力とは決して永続できるものではない。

二人は今、自らの宝具に全ての魔力を注いでいる。余力の類いは一切ない。

そうでなければあの黄昏には対抗できない。全身全霊を費やしてようやく抗し得るのだ。

だが全霊の力を使い続ければ、早晩に力尽きるのは自明の理。有限の魔力では到底足りない。

故に、神々の黄昏に対抗するには、無限に等しい魔力が必要だった。

「ここは我が国、神の国、水は潤い、実り豊かな中津国」

水天に広がる鏡花水月。注ぐ光に開かれるは八卦の陣。

その鏡体は日本三大の神宝。秘められたる力の一端、湯水の如く溢れる魔力が解放される。

「国がうつほに水注ぎ、高天巡り、黄泉巡り、巡り巡りて水天日光」

その真なる姿は対界宝具。

国一つをも覆い尽くす範囲で恩恵をもたらす生命の源泉。広げられた陣より与えられる力はまさしく無限。

本領を用いれば死者の蘇生すら可能とする冥府の神宝、その恩恵を仕える主のために解き放つ。

「我が照らす。豊葦原瑞穂国、八尋の輪に輪をかけて、これぞ九重、天照らす……！」

ご主人様、私の全てはあなた様のために。

あなた様のような気高き魂に出会えたことこそ至上の幸運。結ば

れた縁にはひたすらの感謝を。

私の喜びはあなた様に尽くすこと。あなた様が思いのままに成し遂げられることが我が願い。

この身は化生、その本質は人に仇なす災厄。

本来であればあなた様のような方の隣には居られぬ身。甘粕カサレの扱  
う災禍の神霊と何も変わらない。

そんな化物わたしを知って尚、あなた様は私を受け入れてくれた。それが  
どれだけの奇跡なのかよく知っている。

だから決して離れない。今度こそ間違えずに、その道の果てまで添  
い遂げてみせる。

——どうか御側に、お慕い申し上げております。

「禊ぎ払え

——すいてんにつこうあまてらすやのしずいし  
水天日光天照八野鎮石」

満ち溢れる神力の波動。尽きぬ魔力を約束する神宝の光。

無限に等しきその恩恵が、仲間である英霊たちへと降り注がれた。

枯渴しかけた魔力に無限の恩恵がもたらされる。

乖離トムス・アウレア剣に黄金劇場。充填された自らの宝具を振りかざし、二騎の英

霊は再び全身全霊を絞り出した。

広げられる空間、築かれる黄金の橋。

それは黄昏を貫いて、道なき地獄に道を造り上げる。

完成したその道を、二騎は全力で維持に努める。世界崩壊規模の破  
滅に曝されながら、全霊をかけた抵抗で破滅が届くのを防いでいた。

——そして、築かれた螺旋と黄金の道は、安定を伴って完成し  
た。

そこを駆けていく二つの影。

少年と少女。二人の岸波白野。英霊ならざる奇跡なき人の子。

英雄さえも恐れる黄昏を人である彼等が駆ける。前人未到の領域へと足を踏み入れたのだ。

果たしてそれはどれほどの勇気だろう。

周囲には世界を断裂せしめる衝撃、それごと押し潰さんと迫る黄昏。

人が受ければ塵一つとて残るまい。些細な綻び一つが即座に命取りになる、これはそういう行程だ。

それでも彼等は怯まない。

恐怖を忘れたわけではない。間近にある破滅、それは溶鉱の隙間を歩くが如く、肌を感じる灼熱とは別に氷柱を挿したような寒気が貫いてくる。

だが彼等は知っているのだ。真の勇気とは恐怖を越えた先、震える本能を動かして前への一步を踏み出した所にあることを。

そんな人としての勇気を示さなくてはならない。

誰よりも人の勇気を愛しながら、人の勇気を信じられない男へと。在るべき人の勇気の姿を、ここで証明してみせなくてはならないのだ。

だ。

「まず、我等だけであの黄昏を防ぐことはできん。それは認めよ」

全能にも近い英雄王の力。それを以てしてもどうにもならないと断言される。

それだけじゃない。ここにいる四騎の力を如何に扱ったとしても不可能だと告げられたのだ。

甘粕正彦の黄昏とはそれほどに絶大なもの。

全神話を混ぜ合わせた極限の混沌、もはや形容すべき言葉も見つか  
らない。

だがそれを成し遂げた甘粕は間違いなく神の域さえも超えている。  
そんなとんでもない人を相手に、一体どんな策があるというのか。

「なに案ずるな、小細工の類いは一切ない。おまえたちは常のように、  
頭の悪い猪突猛進を繰り返せばよい」

否定もできない。確かに自分の持っている対処法などそれくらい  
だ。

だがそれで何が出来る？ あの黄昏に突貫して踏破できる要素で  
もあるのか。

「それは勇猛も過ぎて自棄であろう。甘粕ヤッまでの道は我等が拓く。

神々の黄昏に穴を空ける。そこに道を築くのだ。——そう、英霊われらの  
結束の力でな」

「なあ！？？」

「わきやん!？」

——……なにか、あり得ない台詞を聞いた気がした。

「ど、どうしたのだ、金ぴか。ショックで霊質に変格でも起こしたか  
？」

「なにを動じている、セイバー。それほどに意外であったか、私の提案  
は」

「意外というか何というか、世界が減びてもそれだけは言わないと  
思っていました」

「フハハハ！ そう褒めるでない、キャスター。そこまで言われては  
我として大言を控えなくなる。

なにせ文字通りの世界の終焉が迫っているのだからな。不可能事  
の一つや二つ、起こしてみせて当然の気概で当たらねばなるまい」

そうだ、驚いている場合じゃない。

ここから先は、皆がそれぞれ奇跡を重ねていかなければ届かない、  
そんな綱渡りだ。

ギルガメツシュがらしくない言葉を用いるほど、これは必要なこと  
なんだ。全員の力を合わせなければ道はない。

「だが、辿り着いたところでどうにもなるまい。岸波白野マスタの力では甘粕正彦の足元にも及ばん。無謀と履き違えた特攻をさせるつもりか」  
「そうだ、贗作者フェイカー。常道であれば無意味。辿り着いたところで打倒の手段はなく、またあつたとしても意味がないのは語った通りだ。

だが敵は常道では語れぬ甘粕バカだ。故にこの策には勝算が生まれてくる」

力で比べれば自分と甘粕正彦の間には天地の差がある。

だから行うべきは別の手段だ。力ではなく、自分が甘粕に対して示せるものなどこの諦めの悪さしかない。

「神々の黄昏を我々ではどうにもできん。その可能性を持つ者は唯一人、召喚者である甘粕正彦当人に他ならん。

勢い任せに世界をも滅ぼす馬鹿者だ。ならば同じ勢いで世界を救うこともあり得るだろうさ」

「どうだマスターよ。英雄どもが奇跡を重ね、地獄の上をも踏破し、その果てに頼るのは敵の力だ。これが道化の戯れ言でなくてなんだという」

確かにそれはまともな手段じゃない。他に通じる相手などままずいまいだろう。

けれど常識では測れないのだ、甘粕という男は。数多の奇跡を己の意志で成し遂げてきたその強さは、まさしく現代を生きる英雄にふさわしい。

そんな彼の意志を曲げる。それは途方もない難行だろう。

理屈を説いても意味はない。感情に訴えても届かない。まともな説得など何一つ通用しない。

それでももし、彼がその意志を曲げることがあるならば——  
「甘粕ヤツを説き伏せる。過去未来の英霊ではない、今を生きる“人間”であるおまえたちがだ。

破綻の危険は無数にある。勝算がいくらかなど我でさえ判断がつかん。それを承知で尚、おまえたちは『行く』と言えるか?」

その答えは、岸波白野しづんたちにとって決まりきったものだった。

前へ、前へ、前へ。

力の限りに駆けていく。後先のことなど考えていない。

たとえその果てに身体が動かなくなったとしても、この瞬間はただ、前進するだけに邁進する。

前へ、前へ、前へ。

道を拓いてくれたみんなのために、立ち止まってなどいられない。みんなはもつと強大なものに挑み、耐えているのだ。この程度で弱音など口が裂けても吐くわけにはいかない。

渦巻く開闢と黄昏の先、甘粕正彦はそこにいる。

岸波白野しづふんたちはそこに辿り着かなければいけない。その眼前に立つだけの強さも見せられないで、示せる意志など有りはしない。

理屈でも感情でもなく、見せ付けるのだ、確たる意志が生む勇気の姿を。人が本来持つていている勇気の在り方を。

それが出来るのは、この場ではきつと岸波白野しづふんだけ。どこまでも凡庸で、選ばれた強さなんて持つていない、そんな自分が示せる強さなら、それは誰もが持てる強さのほずだ。

だからどうか、それを知ってほしい。

貴方が愛するという勇氣を持った自分の意志を受け入れてほしい。停滞しているかもしれない、それでも変えようとする意志の残ったこの世界を、どうか許してほしいのだ。

——そう思った矢先に、立ち塞がった影があった。

開闢の螺旋と黄昏の渦がせめぎ合いを続けている間隙、侵入してきた神々の眷属たち。

本体の神霊ではない。間隙に空いた抜け道は、走狗たる眷属らが通り抜けるので精一杯だ。

神靈級には劣る神の尖兵、それでも人である岸波白野には十分に致命的だった。

道は一本。引き返す選択はない。  
躊躇うことなく突き進む。迷っている暇など自分にはない。  
だが相手も黙って通してはくれなかった。その火が、雷が、刃が、こちらに向けて殺到する。

当然、自分に抵抗の手段はない。避けられる余地もなく、このままいけば自分は道半ばで碎かれることになる。

「——熾<sup>ロ</sup>天覆<sup>ア</sup>う七<sup>イ</sup>つの円環<sup>ア</sup>」

それでも迷うことなく駆け抜けられたのは、この身を守護する背中の存在を知っていたからだ。

「振り返らず進め。露払いは受け持とう」

殺意の群を阻んだ七枚羽。自分たちと神の眷属たとの間に立つ、金色を纏った無銘の英霊。

その剣の強さを知っている。その意志の頑さを知っている。彼なら守り抜いてくれると信じてる。

言われた通り、駆ける脚は止めない。それでも一度だけ振り返って、その姿を目にした。

救うべき者を救うために立つ背中。

誰かを切り捨てるのではない。進めない弱者のために道を拓く刃。

そこに見た、確かな幻想。彼自身は否定するかもしれない、それでも自分の胸にはその勇姿を刻もう。

——きつとそれこそ、彼が夢見た理想、本当の正義<sup>ヒ</sup>の味方<sup>ロ</sup>だと思えたから。

「さあ、ここ<sup>ハ</sup>までだ神々の尖兵たちよ。これより先は荒野の果てを行く勇氣、見果てぬ未来へ進む者にだけ許される道だ。

意志なき走狗<sup>ゴ</sup>ごときに跨げる敷居はない。それでも踏み入れるとこののなら、無限の剣の洗礼を受けると知れ！」

もはや振り返る必要はない。

英雄<sup>ア</sup>は勝<sup>チ</sup>つ。あんな雑兵<sup>ヤ</sup>に負ける道理はない

だから考えるべきは己自身。進むべき自らの道へと岸波<sup>シ</sup>白野<sup>フ</sup>は邁

進する。

「行くがいい、愚か者」

ギルガメツシュが、

「行くのだ、奏者よ！」

セイバーが、

「行つてください、ご主人様！」

キャスターが、

「行け、マスター！」

アーチャーが、各々に成すべきを果たして切り開かれた道。

岸波白野しづんたちを信じて送り出してくれた英霊なまたち。今や彼等の意志も

この歩みには掛かっている。

気迫が増す。勇気が湧いてくる。その一步にあらん限りの力を込めて、岸波白野は前へと駆けて行った。

——そして、彼等は到達する。

先へ、先へと目指し続けて、ようやくその高みへと。

黄昏の中心、月の魔王、甘粕正彦の元へとその手が届く。

後はただ、その意志を示すのみ。

それは言葉で伝わるものではない。これは聖杯戦争、手段は闘争以外にない。

無論、岸波白野に甘粕正彦へ対抗できる力はない。それでもただ一つ、通じるかもしれない刃がある。

——コードキャスト・五停心観。

それは心に触れる術式。

精神の乱れを測定し、物理的に摘出することで安定させる。

それは他者の心の在り方を理解し、裡に秘めたる秘密を暴くことを



意味している。

だが、そこにも懸念は存在する。

五停心観とは、かつて殺生院キアラによって編み出された術式。

彼女自身はそれを更に発展させ、他者の電脳へ自在に侵入し意思を蕩かす蜜毒と化している。

そう、魔性菩薩たる彼女にとってその術式はすでに過去のもの。そんな彼女でさえ甘粕の強固な意志を蕩かすことは出来なかった。

果たして五停心観ごんなもが通じるのか

甘粕正彦の魂の根底にある一本の芯。それは今まで幾多の奇跡を成し遂げた強さである。

触れることなど出来るのか。出来たとしてそのまま説き伏せることが可能なのか。不安要素はいくつもある。

——同時に、”だからこそ”だと、二人の岸波白野は感じていた。

脅威で屈することはあり得ない。甘粕にとってそんなものは起爆剤だ。

強大な質量で押し潰そうとしたところで、甘粕はそれを凌駕してくる。そんな彼の強さはよく理解している。

だから、甘粕に強さで対抗しようとしてはいけない。岸波白野が示すべきなのはもつと別の意志であるはずだ。

そのために、勇気の密度を高めてきた。

無謀とも言える踏破を成し遂げて、その意志を練磨してきた。

魔王に示すに足る勇姿を以て、彼等はここに挑んでいる。それこそが”岸波白野”の持つ勝機だった。

それほど論理的な考えに基づいたわけではない。

冷静だとは言えないし、筋道立てて思考した果ての答えというわけでもなかった。

言ってしまうえば直感で、何となくそうだと思えたのだ。勝てる道はこれしかない。

そんな程度で実行してしまうのだから、頭の悪い猪突猛進と言われ  
ても仕方がないのかもしれない。

それでも、岸波しづんたち白野はやると決めた。

ならば後は前に進むだけ。説き伏せようとしている相手に、情けな  
い姿なんて見せられないから。

——術式起動コードセット、心域抽出マインドアウト。

左腕に熱い電流が流れていく。

見据えるのは胸の奥。血管の中に根付いたものへと眼を向ける。

シークレット・ガーデン  
S G。意味は秘密の花園。

その人物が隠していたい、あるいは表出している意志の裏にある別  
の意図。

人の心は綺麗事だけでは成り立たない。影に潜んだ裏の気持ちを  
知らないで、真の相互理解はあり得ない。

見出したその心、後はそこにカタチを与える。

その気持ちに明確な”名”を付けることで、型に嵌めて抽出を可能  
とするのだ。

そのためには理解が要る。適切な”名”に嵌めるため、その心を理  
解しなくてはならない。

甘粕正彦の意志の芯にある心象とは、

あらゆる苦難に立ち向かう『勇氣』か。

進む意志を素晴らしいと讃える『人間賛歌』か。

どんな悪性を前にしても揺るがない『絶対正義』か。

確かにそれらも甘粕正彦の真実だろう。

だがそれらは全て、表出している思いである。裏に秘めた心とは言  
えない。

それだけでは不十分。真なる理解には程遠い。表の意志に隠され  
たもう一つの素顔を曝け出す。

両の脚が地を蹴る。

矢をような勢いを付けて、真っ直ぐに駆け抜ける。

心象に引き寄せられる流れに乗り、少年と少女は君臨する甘粕へと  
身を投じた。

秘められたその”名”を、叫ぶ。

絶対強者として君臨した月の魔王。甘粕正彦、その真実とは――

「――これが貴方の『敗北』だあああツツ!!!」

「ああ――」

吸い込まれるように受けた二人の一撃を見下ろし、俺は静かに敗北を認めていた。

――そうだ。俺は敗けたかったのだ。

聖杯に託した願いが破れ、自らが試練として立った時から。

この信念を受け継ぐ者が現れるのと恐らく同程度に、俺はそれを望んでいた。

俺をも超える意志の輝き、その光に魅入られながら実に見事だと称賛を送ってやりたかった。

試練として存在するとはそういうことだ。

やがては超えられていくからこそその試練。自らがそう在るということは、必然、裏では踏破されることを望んでいる。

己という試練さえも乗り越えていける素晴らしい意志。俺はそれを見出したかったのだ。

だからこそ、妥協なんて出来なかった。  
半端な強さに負けを認めるわけにはいかない。見出すべきは真なる人の輝きだ。

故に振るうのは常に全力。誰であれ容赦などあり得ない。輝きとはその先にこそ現れる。

数々の災禍を打ち破るおまえたちは素晴らしかった。ならばこそ加減などあつてはならんと、俺は全身全霊を練り上げて――

「そんな俺の黄昏しれんさえも、岸波白野おまえたちは見事に踏破してみせた」

俺を打ち負かした者へと、もう一度目を向ける。

凡庸なる少年と少女。恵まれた強さも定められた天命もない、人々の内に紛れる大衆の一部。

砕くことなど何とも容易い。この腕を一振りすれば、儂いその身は呆気なく散るだろう。

「なのに……弱つたな。腕が動かん」

俺が信じるべき人の勇氣。その姿を岸波白野おまえたちにこそ見た。

命とは儂く脆い。いずれは尽きて、そうでなくても運命の荒波に攫われ理不尽に散っていく。

だが、そうであるからこそ、人は懸命に命を全うしようと足掻くことが出来る。前に進むとうとする意志を抱いて立ち上がることが出来るのだ。

知っているつもりだった。だが信じてはいなかった。

愛していると嘯きながら、その存在を信じることが出来なかった。

停滞した人の世界。誰もが持てるかと信じながら、天下に存在すると信頼することが出来なかったのだ。

なんたる無様か。誰も信じていない、最も世界に絶望し、勇氣がないのは俺だった。

それを認めた上で、この腕は振るえない。

幻想ユメではない、俺が何より愛する真の勇氣を、砕くことがどうして出来ようか。

彼等を認め、その未来の行く末を見てみたいと願ってしまった時点で、俺の敗北は決まっていたのだ。

「岸波白野を認めよう。その存在こそ俺が求めた樂園ぼらいぞの姿。

俺という試練が無くなった後も、その輝きが色褪せることはない  
信じている」

撫でれば砕けてしまいそうな、二つの勝者の姿。

その瞳にはどこまでも不屈の光が宿っていて、しかと俺の言葉に頷  
いてみせた姿に、万感を込めて兜を脱いだ。

「ならば、神々の黄昏はさっさと片付けてやらねばならんな」

自ら放った神威を内に取り込んでいく。

勝手な扱いに神威は怒り、俺の身体は限界を超えて悲鳴を上げてい  
る。

それら一切合切を、我が意志によって封殺していった。

「ムーンセルウウウツツ!!!」

俺が亡き後、岸波白野を勝者だと認める！ 不正だなんだと、その  
存在を無碍とすること罷り成らん!!!

それこそこの甘粕正彦の、最期の遺志だと知れええええいッ  
!!!」

あるべきでない存在？ 観測に不要な不確定要素？

知らぬ認めぬ俺こそ道理だ。数理の歯車ごときの理屈など意に介  
する必要なし。

灼熱の如く荒れ狂う我が遺志を、崩れかかった聖杯ムーンセルへと叩き込ん  
でやった。

「その未来に幸が多からんことをオ！

万歳、万歳アイ！ おおおおオツ、万歳アアアイツ  
!!!!」

そうして――

終焉をもたらす神威と共に、甘粕正彦は黄昏の中へと消えていく。

誰よりも強く、神域をも超えた勇者の意志が、破滅の中に潰えてい  
く。

その刹那の時、意識に巡るのは辿ってきた過程の情景。

甘粕正彦という男が歩み、しかと見届けてきた戦いの軌跡だった。末期に巡る、それは走馬灯の景色。

消えゆく意識は回想する。記憶の中にある幾つもの輝きを。

肩を並べ歩んだ時、過ぎ去った過去、人々が巡ってきた闘争の渦中。

さあ、回帰を始めよう。

甘粕正彦という男が見た聖杯戦争、果たしてそれは如何様なものであったのかを。

## ※独自設定集

### ◆甘粕正彦

クラス：ムーンマスター

【パラメーター】

筋力：?? 耐久：?? 敏捷：?? 魔力：?? 幸運：??

【スキル】

・勇気：E X

どんな逆境にも屈しない熱き心。

恐怖を知り、恐怖を我が物として乗り越える人間賛歌。

自身に迫ったあらゆる危機に際し、ステータスを向上させる。

威圧・混乱・幻惑といった精神干渉と無効化し、ステータスを向上させる。

意志一つで人の枠組みさえ超越した甘粕正彦の勇気は、もはや単なる感情では片付けられない。

・自己進化：E X

自身の存在を進化させるスキル。

環境に適応し自己の機能を変化・拡張させる。

このスキルは本来固有のものではなく、あらゆる生物に備わっている力である。

だが甘粕正彦は規格外の意志力により、星が設定した人間の許容範囲すら突破してしまった。

一個の存在としての上限が解除され、無限に等しい進化の可能性を獲得している。

しかし同時に、ガイア・アラヤの両面から理解不能の外敵として見做され、その恩恵も受けられない。

理屈がないために進化速度にも規定がなく、可能性だけならばあらゆる上位存在を打倒し得る。

・斯く在れかし聖四文字：E X

旧約聖書に記される唯一神『Y・H・V・H』の大権能。

世界に災禍の試練を与えるために、甘粕正彦がムーンセルの深淵よ

り汲み取った裁きの権能である。

原初の刻に天地創造を行ったとされる星造りの神格。その権能は愛する子羊たちの正道を問い、世界を洗い流す審判の力。

ヒンドウー教のマツヤ、ギリシャ神話のデウカリオンにも派生し、シユメール神話のウトナピシュティムの洪水を起源に持つ。

人々が墮落の一途を辿った時、神の裁きが下されるという概念は人の普遍無意識に根ざした根源的畏怖である。

天災に遭った人々が地球そのものを憎んだりしないように、如何に理不尽であろうとも無意識はそれを審判と捉え納得してしまう。

ゆえに人である限りは無条件で協力を強いられているに等しく、人のままでは決して破ることはできない。

たとえ勇気を奮い立たせ、不屈の覚悟で立ち向かったとしても、それは神格の『正道を問う』という性質に当て嵌まり、結果として強化を促してしまう。

どんななスキル、宝具の能力をもつてしても、裁かれる対象でいる限りは無効化されて届くことはない。

甘粕正彦に対抗するには、裁きの対象から外れる”同じ地平”に立つことが絶対条件である。

#### 【宝具】

『三千世界』

ランク：B 種別：対軍宝具 レンジ：1～99 最大補足：3000人

三千丁の火縄銃を展開、一斉射撃する。

戦国最強の騎馬軍団を打ち破った逸話より、騎乗スキルを持つ英霊には攻撃力が倍化する。

しかし担い手が甘粕正彦に移った際に、その特性は失われている。

織田信長の固有スキルであった『天下布武・革新』も無くし、神秘・神性の高い相手への優位性は失われた。

代わり、クラス概念が喪失し”銃手”<sup>アーチャー</sup>の型が外れ、広義での”兵器”としての性能が特化された。

三千丁の火縄銃のみならず、王の覇道の過程で生み出された全ての



兵器を創形し運用することが出来る。

甘粕正彦はムーンセルと接続し、更にこの宝具の概念を拡大解釈し、未来に生じる兵器の創形も可能とした。

『人間五十年夢幻の如く』

ランク：EX 種別：対陣宝具 レンジ：1〜30 最大補足：百人

天下統一を目前にして最期を迎えた織田信長の結末を象徴とした宝具。

映し出されるのは本能寺の情景であり、範囲内にあるものは諸行無常の理により”滅び”を誘発される。

謎に包まれるアーチャーの最期を看取った事により、甘粕正彦は本来あり得なかったこの宝具を発現させた。

引き換えに神性を否定する”魔王”の宝具は、甘粕の気質に適合しなかったこともあり失われている。

不死、絶対など死から遠い概念を持つものであればあるほどにその効果はより強く現れる。

アルトリア、ヘラクレス、カルナといった強力な守護を持つサーヴァントには特に突き刺さる宝具。

但し、この宝具自体が自身の滅びの具現であるため、使用時は自らの守りも失ってしまう諸刃の剣でもある。

『フォーモリア・クロウ・クルワツハの三日月』

ランク：EX 種別：対神宝具 レンジ：1〜999 最大補足：1000人

ケルト神話の魔神。『魔眼のバロール』とその眷属による魔性の軍勢を召喚する。

神格の一柱であるクロウ・クルワツハの暗黒竜、フォーモリアの巨人種族たち。

軍勢だけでも十分すぎる脅威であるが、真価はその首魁たるバロールにこそある。

視覚したものの死を具現させる魔眼。その派生として『直死の魔眼』がある。

だが神格の権能であるバロールの魔眼は『そういう権利があるもの』なため、行程も理解も省略して死を叩きつけることが可能。

その眼光に晒された者はまず意味を殺され、その結果にモノが追いつくという形で死亡する。

たとえ神であつても権能からは逃れられず、『モノを殺す』という概念の頂点に君臨する力である。

『大黒天摩訶迦羅』

ランク：EX 種別：対界宝具 レンジ：1～999 最大補足：1000人

ヒンドゥー教における最高神の一角。シヴァの別名である破壊の権能。

寿命を迎えた世界を滅ぼして、次なる世界の創造ために備える役割を持つ。

放たれる三叉戟トリシューラは、金銀鉄のそれぞれで出来た三つの悪魔の都市を滅ぼし、悪の属性に対し高い特効作用を發揮する。

英雄王の持つ乖離剣と同質の権能を持つ”世界を平らに新生する”一撃である。

『神々の黄昏』

ランク：EX 種別：終焉宝具 レンジ：全世界 最大補足：全人類

甘粕正彦が用いた最終宝具。北欧神話の最終戦争を名に冠しているが、性質はまったくの別物である。

一切の繋がりを度外視し、ありとあらゆる神話の神々を蠱毒の如く殺し合わせる出鱈目極まりない代物。

権能同士が混じり合い、相乗的にその規模を拡大させた真正正銘の『世界の終焉』である。

その種別はもはや如何なる既存にも当て嵌らず、そもそも何かを対

象に取るような狭い範囲のものではない。

終焉と創世、幾つもの神話で語られる終末を具現する局所的な宇宙創造<sup>ビッグバン</sup>。原典が存在しないために対処法も無いに等しい。

ひとたび発動すれば、その波動は月より溢れ出し、世界の全てを呑み込む黄昏となるだろう。

(人物設定)

■アーチャー【サーヴァント】

甘粕の召還したサーヴァント。真名は織田信長。ロリババア(ここ重要)。口癖は「是非もなし」。

出典はコハエースEXより『Fate/KOHA—ACE 帝都聖杯奇譚』から。救国英雄の一人でありラスボス。

以下はこのSS用に作ったキャラクター設定。公式では断じてない作者の妄想なのであしからず。

戦国時代の風雲児。既存の概念を次々と打ち壊しながら天下統一に邁進した戦国三英傑の一人。

尊大な口調で話し、自己顕示欲が強い。基本的に物事を自分の思う通りに進めたがり、邪魔する輩には容赦がない。

但し、それは理由が不純と感じた場合であり、逆に一本でも筋が通っていると感じたならば自身の決定を翻すことにも迷いはない。

その気質は苛烈だが、価値観そのものは公明正大。正義を信奉していないが悪徳を好んでいるわけでもない。

しかし一度自身でこうと決めたならばあらゆる意味で手段を選ばず、自身の中で筋が通れば冷酷な判断をも下す。

彼女にとつては神仏もまた人のための道具に過ぎず、正道を外したならば滅ぼすことにも躊躇がない。

彼女が求めたのは”世界の開拓”。歴史において到達した者のいない前人未到の領域に自らが足を踏み締めることである。

人の歴史とはそういうもの。繁栄も衰退も、未到の果てを目指した先にこそ訪れる。

人間五十年。元より人などいずれば死するが定め。国であれ人であれ思想であれ、永劫不滅など人の世には有りはしない。

いつ終わるとも知れない生命ならば、その限りまで先を目指す。それこそが人として、世界に対して示せる誠意というもの。

人の欲は醜く愚かであり、涅槃に至る悟りには程遠い。だがそれで良い。そんな欲界をこそ王は愛している。

既存の価値観に囚われない乱世の寵児。戦いを許容し推進する革新の王。その在り方はどこか、ある欠片の男の願いに通じていた。

そんな彼女の結末は、図らずも彼女が唄った人間五十年を体現するものだった。

彼女は利に聡かった。人の欲望を読み取り制することにも長けていた。

だが、人の心を汲んで理解してやることだけは、どうしても上手くいかなかった。

彼女の真意を知る者はほとんどいない。恐れを知らずに革新を目指すその姿は、我欲のままに突き進む魔王のそれとも見えただろう。

あるいはそれが彼女の滅びであったのか、それは定かでないことである。

才覚を認め、重用していたはずの臣下の謀反。天下統一を目前にした覇者の、不可解すぎる終わり方。

その結末になにを思ったのか。戦国最大のミステリーを、彼女は黙して語ろうとはしない。ただ清らかな笑みを浮かべながら。

王としての彼女の視点は誰よりも遠かった。

見据えているのは遙かな未来。そこに至る道筋は、足元を見るばかりの凡人では影を知ること叶わない。

仕える臣下は多くとも、王の見ている世界を本当の意味で理解できる者はほとんどいなかったのだ。

そんな自らの有り様を彼女は生前から理解し、その孤独を是としていた。

同じ夢など見なくてよい。己の正当性は己自身が確信していればそれで良い。

だから彼女に生前の未練はない。彼女が下した全ての決断は、どれも正しかったのだと彼女は知っているのだから。

黄泉がえりに興味はなく、その覇道の意志は眠りについていていた。

英霊の座。見下ろす選定の場にも彼女の興味を引く者は現れない。

世界を担う少年王。数理の極地たる人造人間<sup>ホームンクルス</sup>。どれも彼女の気質に合わない。

停滞に抗う少女には似通うものも見られたが、別段惹かれるほどではない。

少なくとも、再び時代に覇を唱えんとする気概を燃え上がらせるには、誰も足りていなかった。

一度消えた炉を灯すには、種火がいる。

必要なのは始まりの切っ掛け。火さえ灯れば、後はただ燃え上がるのみ。

彼女の眠れる覇道の意志を呼び起こす、そんな種火が現れないかと眺めてみると、

彼女の前に、過去の時代にも類を見ない規格外の勇者<sup>バカ</sup>が現れた。

その男を目にした時、彼女は腹を抱えて大笑した。

なんとという常識知らず。既存の価値基準では到底測れない。うつけ<sup>じぶん</sup>を上回るやもしれん大うつけだ。

眠気が飛んだ。四の五の理由がどうだのと、そんな寝言を口にする気は微塵もない。

ただ興味が沸いた。この男の行く先が見てみたいと、単純な好奇心が己の内に芽生えたのだ。

この革新の王たる自分ですら届かぬ未来を、あの男ならば届かせることができるやもしれないと。

理由などそれで十分。革新の大火は、いつだってその小さな思いから始まるのだから。

もはや是非に及ばず。

未だかつて味わったことのない未到の道筋の予感に高揚しながら、彼女は男の前へと降り立った。



甘粕が主人公の一週目においてはメインヒロインでありツツコミ担当。

公式のパラメーターが発表されたのでキャラクターを修正。主に変わったのは属性。秩序・中庸。

修正前

「国とか民とかシラネ！ とにかく儂がやりたいんじゃないから革新じゃ革新！ ワハハハハハ」

←

修正後

「革新こそ日ノ本のために必要不可欠。え、比叡山焼き討ちとかやりすぎ？ そんなんじゃないよ」

みたいな感じ。ぶつちやけ最初はかなりの悪役ロールでした。

設定を見たところそれなりの正義気質の持ち主だったので、そちらの方向にシフト。

結果、ツツコミ役としてよりキャラが立った気がします。やっぱり公式はすごいですね。

まあやることはあんまり変わっていないんですけどね（笑）。

本人同士の相性は良く、大体のところでは噛み合っているのだが、戦いの方針では思い切り食い違う。

安定した磐石の戦いを好み、そのためならば卑劣な手段を取ることでも厭わないのがアーチャー。

乗り越えるべき試練としての戦いを求め、そのためならば敵を鍛えて強くすることも厭わないのが甘粕。

「おまえとんだけ桶狭間やりたいんだよ！」とよく激突。たびたび斬り合いの喧嘩が勃発する。

史実である通り短気なアーチャーと、いろんな意味で全てを受け入れる甘粕なので、止まる要素がない。

それでも何だかんだで互いのことは認め合っており、治まる場所にはきちんと言まる。

サーヴァントとしての望みは特にない。純粋に甘粕正彦への興味が参戦の発端である。

あえて言えば戦いの後、甘粕の災禍が生み出す世界を見届けてみようと考えている。

彼女の途中脱落は決まっているので、それは叶わないことなのだが。

甘粕正彦が対決者の心を汲み取りその意志を認めるならば、彼女は無情の信念でそれを打ち砕く試練となる。

一週目の聖杯戦争とは、彼等の物語であると同時に、彼等に挑む者たちの物語でもあるのだ。

## 幕間：根源の少女

——沙条愛歌は夢を見る。

光の届かない暗黒、誰の手も触れ得ざる深き場所で。

目覚めの刻を待ち焦がれる。愛しき人の願いを叶える杯、その器が満ちる刻を。

其は、人の想いを溜めるものにして、此岸ならざる彼方より来たる”何か”を導くもの。

あらゆる奇跡を成就する是れを所有し、母の如く慈しみながら守る少女。

少女は、ポトニアテロリン根源の姫。

全能なる少女。少女のカタチをした全能。

束の間、微睡みの中で見る夢は、何かの意義があつてのものではない。

元より、その気になれば休息さえも必要の無い身。人体が必要として行ふまっとうな眠りなど、それこそ意識しなければ行えようはずもない。

それは、ふとした気まぐれ。

理由などただそれだけ。待っている間に思いついただけなのだ。

ただの人間のようにそうしてみよう、と。何をも成せる全能が、未知なる何かを求めて。

意識は肉体を離れ、無意識の果ての深淵さえも越えて、少女は思うがままに夢を見た。

竜を見た。

永い永い時をかけて誰かを待ち続けるモノ、孤高なりし優しき竜を。

少女は思う。綺麗な竜ね、と。

竜は応えない。彼は変わらず、誰かの事を待ち続ける。

少女もそれ以上は触れようとせず、意識はまた異なる夢を見始める。



光を見た。

世界の表裏を繋ぎ止めるただひとつのモノ、最果てにて輝ける光を。

少女は思う。綺麗な光ね、と。

光は応えない。光は光のまま、楔として存在し続ける。

少女は思わず手を伸ばして、その光に触れてみようと試みた。

誰かを見た。

それは宇宙の暗黒のようでもあって、輝きの窮極のようでもあって、全ての中心の渦のようでもあって、また生活感のない小さなワーム・マンションに住まう少女にも見えた。

誰かは言った。そいつは駄目だ、ここに置いていけ、と。

思わず光に触れかけた手を止めて、少女をまた異なる場所へと押し出した。

彼女と出会った。

想い人と同じ、けれど違うその人。

そこでの少女は少女ではなく、それでも少女は少女のままです。

それは束の間に見た幻のようなモノ。まさしく夢の中で見るあり得ざるひと時。

全能であるはずの少女が全能でなく、それはとても不便で、だからこそ面白くて。

愛しい彼と同じだけど違う彼女。そんな彼女たちと共に過ごした『迷宮』<sup>ラビリンス</sup>が、彼に申し訳なく思えるほどに楽しくて。

誰かと力を合わせる事。そんな当たり前の、けれど全能の少女には何より難しいそれを学び、自分だった少女には最期の餞別だけを残して、全能はその世界を後にした。

そして、少女は最後に男を見た。

熾天の御座にて人々を待ち侘びるモノ、災禍の試練を顕現させる魔王を。

少女は思う。とても大きな人ね、と。

男の大きさは他者からあまりに隔絶していて、全能たる少女をして

見上げるほど。

例えるなら、雄大に広がる天地を貫いた大霊峰。世界さえも突き崩して屹立する破格の魂。

どこか見惚れるようにその姿を眺めて、少女の心には興味の感情が芽生え出していく。

その時だった。

「おい」

男は応えた。少女の好奇に、男もまた同じく興味を持って。

男は強い意志を持っていたが、同時に刹那的で我慢強い性質でもあった。

気まぐれで世界を巡る少女と同じく、男もまた面白そうな何かを目にして、手を出さずにいられるほどの利口さを持ち合わせていなかった。

「何者か知らんが、興味があるのなら堂々と正面から来いよ。覗き見るだけではつまらんぞ」

男の意識が、少女のいる場所へと干渉してくる。

惑星が生み出す重力に囚われたかのように、少女の精神が男の元へと落ちていく。

抗いがたい波動の質量。地平も時間も世界線さえも越えて、魔王の掌は誰も逃がさない。

そうして沙条愛歌は、否応なしに月の舞台へと降り立っていた。

その世界は、果ての果てまで拡がって、けれど箱庭のように閉じた所だった。

気付けば、夢の中の精神のみだった愛歌が、生身の肉体を得ている。

いや、正確には生身だと錯覚するほどに精巧なカタチを得た精神だ。愛歌もそれは理解していたが、身体を通して受け取る情報の多さには素直に感心していた。

ここはそういう世界なのだ。魂を物質化する靈子虚構世界。新時代の魔術師ウィザードのみに許される架空の現実。物質世界にも決して劣らない、情報と精神による世界である。

周囲を見渡せば、映るのは水平線に浮かぶ墓標の群れ。

澄みきって広がる空間。その天空に浮かぶ巨大な球体の物体。

その物体の事を、愛歌は知り得ない。

それでも、理解する。これは自分の知る”聖杯”とは似て非なるもの。

中身を視れば、まったくの別物だ。これは魂も呪いも必要とはしてない。一個として存在し、己一つで総てを補い、総てを為せる。正しく万能、他に依存などあり得ない完成品。

魂という燃料を必要とし、それを他所から求めなければならぬ”聖杯”とは似ても似つかない。それでも、人の祈りを叶えるという願望器の側面、その意味では全くの同類だった。

誕生から狂っていたあちらよりも、願望器の意義で問えばこちらこそ正當だろう。願いの意図を読み取って、正しくそれを達成し得る世界を『観測』する数理の聖杯。

——— 其は、セブンスヘブン・アートグラフ 七天の聖杯。

ふと思案するのは、何より大切な”彼”のこと。

これならばあるいは、もつと彼が望むカタチで、彼の願いを叶えてあげられるのでは———

「ほう、これはこれは。何とも珍しいお客様だ。

ともあれよく来た、歓迎しよう。何処の世界から訪れたお嬢さん」  
思いかけた愛歌の意識は、その声によって引き戻された。

軍装を纏った偉丈夫。その格好はあまり場にはそぐわないものだったが、そんな異物感など吹き飛ばしてしまうほどに、彼という男

にはよく似合っていた。

敵意はない。男は常態のまま、むしろ友好的に振舞っている。それでも滲み出る威圧感、彼という存在がどれほどに逸脱し、また危険な属性を秘めているかの証左だろう。

愛歌もそれを”解つて”いる。あらゆる総てを知る全能は、すでに魔王たる男の性質を見抜いている。好意を持って接してきたからといって、安心できる理由には決してならないという事も理解していた。

「改めて、自己紹介でもさせてもらおうか。俺の名は、甘粕正彦。」

過去にも世界の敵と称されてはいたが、今や文字通りの立場となった男だよ。

世界に災禍の試練を顕象させ、人にあるべき勇気を取り戻してもらいたいと願っている。そんな男だ」

「あらご丁寧にありがとう。わたしは沙条愛歌というの。」

けど、エスコートの仕方はずいぶん強引だね。わたし、びっくりしちゃったわ」

「不躰だったのは謝ろう。性分でな、面白そうなものには生来目がないのだよ。」

視線に気付いたのでね。吟味はせずとも、奇貨であるのは間違いない。どうあれ面白くなりそうであったので、考えるより先に捕らえてしまっていた」

「それならよく分かるわ。わたしも面白そうなモノを見掛けると、つい手を出してしまうもの」

そのような男を前にしても、沙条愛歌は変わらない。

全てを知り、全てを視ている。全知全能たる少女に不明はない。

それ即ち、未知への恐れが皆無であるという事。魔王の如き男、甘粕正彦にしても、彼女はただ在るがままに、そのようなものだと思っ受け入れていた。

「さて、不躰ついでだが、俺は一体何を話せばいいと思う？」

意味やら目的など考えもせず、手を出してしまったのでね。女性を招いたというのに、茶菓子の用意の一つもない。まったく汗顔の至

りだよ。

恥を偲んで尋ねるが、話題はあるかね？　せつかくの客人を無下にはしたくないのだが」

「なら、あなたの事を聞かせてくださる？　とても興味があるの。代わりにわたしの事もお話しするわ」

そうして男と少女は語り明かす。

各々の世界、各々の事情、各々が胸に秘めた想いについて。

世界を跨いだ全能者同士、両者は警戒の二文字を忘れたように、気兼ねなく互いの内を打ち明け合った。

「物好きなのねえ、何度も同じ戦いを繰り返してるなんて。

飽きてはしまわないの？　参加してるのはいつも同じ人たちのなのでしょう」

「いいや、まったく。誰であれ、聖杯戦争という試練を乗り越え磨かれた輝きは素晴らしい。俺に及ばなかったのは残念だが、それで価値がないわけではない。

当初の段階では見所無くとも、幾度も苦境を越える中で彼らは確実に成長は果たしていく。サーヴァントを役務するこの戦いでは、当人の能力だけで勝負が決するわけではない。時には脆弱だった牙が強靱な剣へと化ける事もあり得るのだ。

強さは不変性を持つものだがね。真逆に弱さは可能性を生むのだよ。弱者たればこそ、その過程には様々な変化が生まれる。そのような弱者の奮起に揺るがされた強者も、また然りだ」

甘粕正彦は人の輝きを愛している。

そこに貴賤はない。強者が相応の在り方を貫くのも、弱者が飛躍の成長を遂げるのも。

それが確かな意志によるものならば、甘粕という男は等しく認めるのだ。誰よりそれを求める彼だからこそ、僅かな変化だとして見落とさない。

「覚えておくといい。変化がない、なんて事はないのだよ。たとえ同じ場所、同じ条件、そして同じ人間であったとしてもな。飽きる事などあり得んさ」

「そう。わたしにはよく分からないけど、そういうものなのかもしれないわね」

沙条愛歌には、甘粕の語る変化が分からない。

それは全能たる少女にとって、あまりにも矮小すぎるものだから。他人のどんな成長も、全知の認識からは外れない想定範囲。それしきの誤差程度では、愛歌の心は動かない。

だから、そんな弱者たにんの変化程度で歓喜を得られる甘粕を、少し羨ましいと思った。

「そちらこそ、愛しい男のため戦いに臨むとは、無垢な外見に似合わず、なかなか情熱的ではないか。恋を知った女は強くなるとはよく聞か、なるほど真理だと納得するよ」

「ええ、ええ、そうよ！ わたしのセイバー、わたしの王子様！ 彼と出会ってから、わたしの世界は何もかもが変わったわ」

それは咲き誇った大輪のように華々しく。

僅かに見せた憂いなど吹き飛ばして、恋する乙女の熱情を謳い上げた。

「わたし、彼のためなら何でも出来るわ。聖杯戦争だってきっちりやり遂げてみせるの。お料理と同じように手際よく、下拵えだって万全に。目的のためでもセイバーに怪我をさせるなんて、そんなのわたし、絶対に許さないんだから」

愛歌は信じている。恋する気持ちこそ、この世のどんな神秘よりもすごいものだ。

父より教わった魔道の秘奥。あんなつまらないもの、比べる事さえ鳥澁がましい。

一目見た時から好きだった。何もなかった現実を、灰色だった世界を、たったの一瞬で色鮮やかに染め上げてくれた。

まるで物語に出てくる白馬の王子様のよう。蒼と白銀を纏い、何より眩しい聖剣ひかりを携えて、あなたはわたしの元に来てくれた。

「わたし、運命って信じてるの。だって意図なんて無かったもの。わたしがそう望んだから為ったんじゃない。何も知らなかったのに、あの素敵な出会いはあったんだって。」

人が人と出会う事。きつとそれこそが奇跡で、運命なのよ。彼と出会うまでこんな気持ちは知らなかった。彼と出会ったからってこんな気持ちになるなんて分からなかった。こんなにもすごい事、魔術なんかじゃ絶対に出来ないでしょう」

それはきつと、恋の魔法。

魔術師の目指す到達点。この世に残った真なる神秘。世界をも変革する奇跡。

ならばこれこそ、魔法と称するより他にない。少なくとも愛歌にとつては、他のどんな神秘よりも世界を変えてくれたものであったから。

「そうだな。運命に屈するなどは言われるが、それも行き過ぎれば我執となる。何事も我が意志が介在せねば気が済まんと、そう気負いすぎてもつまらんだろう。」

知らないからこそ、感動がある。まったく予期しないところで現れる出来事の衝撃、良きにせよ悪しきにせよ、それを天の采配だと表現する感性を、俺とて否定はせん」

そんな愛歌の思いを、甘粕もまた肯定する。

奇貨であるから評価するのではない。どれほど珍しかろうが有り触れていようが、そんなものは天上の裁定者の目には多いか少ないかの違いでしかないのだ。

要は、その思いが本物か、掛ける意志に重さはあるのか。何処までも人として思いに殉じる姿勢、それこそが彼の愛する光である。

「しかし、ならばこそ邪推もするな。それほどの情熱でありながら、おまえはただ相手の願いを在るがままに肯定するだけなのかね？」

「？ その何がいけないの？ 好きな人の願いを叶えたいと思うのは当然でしょ」

「ふむ、そうだな。例えばもしだが、相手が願いも何もかもを捨て去つて、ただおまえと添い遂げる事だけを望んできたならばどうする？」

「え、ええっ!？」

問われた全能の少女にあったのは、滑稽なまでに露わとなった動揺の姿。

「そんな、そんな事は、その、もしそうならとても嬉しいのだけど、やっぱり無いと思うし、その、困ってしまうわ」

顔を真っ赤に染めて、しどろもどろに慌てふためいて。

そこに全能者たる姿はない。少なくともその答えは、年相応の少女のものだった。

「相手を想い、その願いを肯定し尽くすのはいい。だが甘やかしてばかりでも伴侶足り得るとは言えまい。時には己の愛で、相手の願いごとと染め上げてやるくらいの気概がなければな」

「そんな、乱暴だわ。そんなのは良くないことよ」

「何故だ？ 恐喝、洗脳の類いならば邪道だろうが、純粹に愛深き故の変性ならば、それは十分に尊ばれるべきものだろう。」

少女性の恋心も捨てたものではなからうがな。おまえも愛を知ったからには、もつと攻めに転じる強引きも学んだ方がいい。俺の知る愛に生きる女は、もつと独占欲に溢れていたぞ」

「そ、そう……。恋愛って、奥が深いのね」

年相応。大人と子供。

甘粕正彦と沙条愛歌。二人の会話はそのように見える。

その談話は友好そのもの。現状で両者の間に、衝突を匂わすような気配はなかった。

「しかし、話を聞く限りその相手の男も随分と軟弱だな。男子として嘆かわしい」

だが、その一言を皮切りに、空気が変わる。

穏やかでさえあつた両者の間、そこに亀裂が入つたと錯覚するほどの、明確すぎる気配の反転が認識できた。

「善性を重んじ、騎士道を奉じる者でありながら、身内にて行われる悪行には見て見ぬ振りをする。戦術としては正しいから、己たちの勝利に繋がるからと、迷いを抱えて徹しきれておらんのだろう。なんと女々しい、情けないな。なまじ外面が良いだけに、矛盾が浮き彫りとなつていないではないか」

「黙って」

その一言は、鋭く冷たく、これまでの愛歌にはない突き刺すような



響きだった。

「あなたに彼の何が分かるというの？」

「分からんとも。ああ確かに、少々話を聞いただけでは、俺に価値を定める事など出来んさ。」

だがな、少なくともおまえに関する対応、それ一つにしたところで不純は見取れる。下した評価は覆らんよ。

故国救済のため、悪道にも手を染めると覚悟する。ああ、その決意は認めようとも。過去改変の云々についてはこの際抜きにするとしてよう。理屈ではなからうからな、その手の願いは。

しかし、それならば徹すべきだろう。せめて己が咎を負うべしと、積極的に前へと出て行くべきだ。他ならぬ当人の悲願なのだからな。他所の地といえども、無辜なる民の血に心を痛めるならば、その業を背負って栄光を掴むのが英雄というものだろう。

だというのに、聞くところその男、己では大して動いてないようではないか。やった事といえば、騎士の如く立ち合い、騎士の如く少女を救い、騎士の如く強大な敵と雄々しく戦ってみせる、か？ そこにどれだけ男の意図が介在しているという。

状況の大半が受け身、ほとんどがおまえによって用意された舞台ではないか。男はただ、そこで踊ってみせてるだけ。正道にも悪道にも徹せぬまま、まさしくその名の通りに、清廉な騎士らしくな。これを情けないと呼ばずしてなんだという」

容赦なく非難する。明確に侮蔑する。

この場にはない『彼』、沙条愛歌のパートナーに向けて、甘粕は罵倒の言葉を吐き続けた。

「おまえのやり方は、人の道に反するものだろう。だが同時に、聖杯戦争の道理でいうならば正しくもある。」

サーヴァント マスター 強者よりも弱者を狙い、その関係者をも轢殺する事で禍根を断つ。魔力たましいが足りない故に、他者から持つてくるという発想も、魔道においては異端とも呼べん。むしろ基礎ともなる考えだろう。

嫌悪を抱き、歪だと気付きながらも己の悲願と天秤にかけ、結局は否定せずに容認する。消極的な同意というやつだ。そんな様で誰に

言葉が届くという。

知っているか？ おまえのように全肯定してくれる女というのは、基本として男から愛されやすい。そういう女は憎んで否定するよりも、肯定して愛でてやった方が都合がいいからな。ましてそれが見目麗しい乙女とあれば、肯定理由には事欠くまい。

おいおい、これは悪い男に引つ掛かってしまったな。己だけは綺麗に振る舞い、汚れ仕事は女に任せ、成果だけは手に納める腹積もりとは。まったく大した王子様だよ。はははは、はははははははは——  
!!」

そこまでが愛歌にとつての限界だった。

空間が変わる。世界が侵食される。

少女の激情をそのまま顕したかのように、変質した法則が獰猛なる牙を剥く。

それは電子に再現された『魔術』<sup>キャスト</sup>にあらず。

失われた理、もはや顕す事が無くなった真正銘の『神秘』である。本来ならば、それは決してあり得ない。

神秘の大本となるマナ、それは既にこの世界からは枯渇している。どのような魔術基盤とて、もはや枯れているのだ。神秘が神秘として顕れる事はない。それが世界の出した答えなのだから。

されど、そう、彼女だけは例外だ。

唯一、この世に一人きり、沙条愛歌だけは世界と同格。

彼女こそは全能。全能が少女のカタチをしたモノ。無二なる根源接続者。

この世界に神秘がないのなら、有る世界から持ってくれば済む話である。

顕現する暗黒。其は世界を抉るモノ。

深淵より来たる無数の触手が伸びていく。

英霊とて致死を免れない、男の有する権能をも破れるよう顕現させた破滅は、万象を見通す少女の確信をもって必殺を裏付けるものであり、

故に、一閃をもつてその未来を容易く越えてみせた男には、本当の

意味で驚愕を顕わとした。

解っていたはずの事象が、覆った。

そんな事は知らない。こんなのは今まで無かった。

単なる事実だけの力ではない。総てを知る沙条愛歌をして計り知れない何か。この男にはそれがあるのだと思い知る。

抱いていた怒りさえ忘れて、愛歌は悩んだ。

次の手段をどうすればいいのか、その判断がつかない。

万能たる器には、用いれる手段はそれこそ無数にある。だが同時に、それもまた先程のように突破されてしまうのではという予感もするのだ。

この感情を愛歌は知らない。とても強くて危なかつた太陽の王を見た時とも違う。本当に、どうすればいいのか分からなくなるなんて初めてだったから。

「理解してもらえたかな？　これが衝突だ。人が人と向き合うという事だ」

そんな愛歌へ諭すように、甘粕は言葉を告げる。

「目の前には、己の意のままにならん他者がいる。除きたいと思っても敵うか分からず、あるいは反撃を受けるかもしれない。その恐怖、選択の先の未知を承知して、相手に対しどうあるかの答えを出す。

人が人と交わるといふ事はな、元来そういうものなのだ。全能の少女よ」

それは誰にとっても当たり前の事で、だからこそ沙条愛歌には何よりも難しいもの。

少女は全知全能であるが故に、他者の事が最初から”解って”しまう。他人という存在が、彼女にとってはあまりに軽すぎる。

相手が己と同じだとは知っていても、同列に考えるなどとても出来ない。それは傲慢ではなく、存在の根本から異なるが故の必定だった。

しかし、甘粕は違う。

沙条愛歌が全能であるが故に、万象を解する器ならば。

甘粕正彦は全能ならざるが故に、万象を覆す可能性を持つ魔人であ

る。

その存在は少女にとっての未知、だからこそ甘粕は愛歌にとっての『他人』となれた。

「人は合理性のみで生きるのではない。時に不合理とさえ見える心の情動、その交差が不確実なる可能性を生み、未知を生み出す。

情動とは心の内より現れるものだが、その心を育むのは外界からの刺激だ。初めは無垢だった純白の器は、様々な衝突を経て、多種多様な色彩を着色する。その混沌の果てに出来上がる心こそが個性であり、唯一無二の誰かとなる。

だから人とは各々違う。世界に居るのは何十億という別の誰か、それと同じ数だけの未知がある。ならばこそ人は、一喜一憂の感動を味わいながら成長していく」

それは人にとっての当たり前。誰にとっても平等なその道理を、人と等しからざる少女に向けて甘粕は説く。

「だが、始点から全知であったおまえには、色が色となり得ない。知ってはいても実感はなく、器は変わらず純白のまま。無邪気にして残酷な全能が出来上がる。

言つたろう、強さとは不変性を持つものだ。誰よりも強かったおまえは変化そのものが不要だった。世に難事はなく、他者の誰もが見え透いていただろう。

可哀想だな、沙条愛歌。その境遇には同情しよう。おまえにとって世界とは、さぞや刺激の薄い場所であったのだろうよ」

人の成長とは、未知を既知へと変えていく作業である。

ならば始点より全知であった少女にとって、人としての成長など有り得たのか。

何を学んでも”識っている”。

何を経験しても”解っている”。

始まりと終わりの地点と繋がる少女には、過去も未来も現在も、全てが”視えている”。

世の常識も生命の尊さも、少女にとっては儂い一時の価値。そんなものがどうして少女の心に触れられるというのだろう。

かつての時分、沙条愛歌は亡霊のようであったという。

今のようには、屈託のない妖精の如き可憐さを示すようになったのは、彼女にとつての『王子様』との出会いを経た後だ。

「愛という想い、恋慕の情とは、なるほど素晴らしいものだ。奇跡と凶行、正負ともに凄まじい絶対値を叩き出すその感情こそ、人の持つ真価の一つであるのに相違ない。

英霊という強力な個と、初めて知る恋の感情、2つの衝撃に晒されて、ようやくおまえという器は刺激を得たのだろう。

他の価値の一切を擲って恋に殉じているのではない。おまえはただ、恋以外を知らないだけではないか？」

沙条愛歌は変わった。恋を知り、少女の心は確かな成長を果たしたのだ。

それは祝福すべき変化だろう。結果がどうあれ、人として意志の目覚めを遂げた。何よりもその意志こそ奉じる甘粕にとつて、それは断言して言える事だ。

だが、ならばその意志も強く輝かしいものであるかと問えば、そこは断言できない。

意志の発露と、その吟味は別の話。如何に若く瑞々しいその思いが、本当に果たされるかはこれから決まる。

「おまえという全能は純白だった。その器に、初めて他の色が流入したが故に、おまえは恋という色一色に染め上げられた。今のおまえは、要はそういう事ではないのかね？」

よつて甘粕正彦は問いを投げる。

試練を司る裁定者として、少女の真偽を測るために。

「愛こそ全て、この思いは何よりも優先する。ああ、よく聞く言葉だ。別段珍しくもない。

そんなものは誰もが抱き得る思いだよ。おまえだけが特別なのではない。単に全能という特質が加わっているから、規模が大きく見られがちなのだ。

愛のためならば、誰とて持てる力を尽くす。ただおまえの場合、その手の届く範囲があまりに広く、それ以外の価値があまりに軽かつ

た。これはそれだけの話だろう。

全ては、おまえが『全能』であるが故に、だ。沙条愛歌だからではない」

『全能』である少女。沙条愛歌を表す時、必ずやその言葉が付けられる。

確かにその要素は大きい。無視できるものではないだろう。それほどに彼女の力は隔絶しすぎている。

だが仮に、それを除いて考えれば、愛歌の行動とは異常だろうか？ 恋愛は誰でも出来る事だ。その想いに盲目的になる事も、等しく起こり得る事である。

その無邪気な残酷性として、特筆には値しない。虫を潰して遊ぶなど、誰しも覚えるのある事だろう。

なんて事はない。もしも沙条愛歌の如き力を其処らの常人に与えたとしても、おそらくは似たような真似をやらかすのだろう。

「何かを代償とする行為は、その代償が重い価値を持つからこそ尊い。初めから頓着しない軽さしか持たんものを捨てたとて、そんな行いに何の意味がある。

いかな、それは。それではおまえの意志は輝かない。それでどうして、思いの尊さが証明されるという。試練がなくなれば、おまえ自身は全能の影に隠れたままだ」

少女が知った恋の魔法。どんな神秘よりも尊く、少女にとってその価値は重い。

ならばと、試練の魔王はそれを試す。魔道の秘奥も聖杯戦争も、少女にとっては容易すぎた。

沙条愛歌にとっての真の苦難、その中で尚も貫く思いを示してこそ、彼女の恋は証明される。

「それさえ無いのなら、その存在に何の価値がある？ 全能など、無垢に与えるには過ぎたものだ。そんなものは摘み取ってしまうのがよからうよ。

未知が欲しいのだろうか？ 全能の器にも衝撃を与える何かを求めて、微睡みの世界で揺蕩っていたのだろうか。案ずるなよ、これとて

未知だ。

失望はさせんと誓おう。諦めなければ思いは必ず叶うと信じているのだ。人の勇氣は、神でさえも予測できない力を発揮できるとな。それは万能よりも尊いものだと」

起ち上がる魔王の覇氣。

彼は本氣だ。その言葉に偽りは微塵もない。

目の前の男こそ、沙条愛歌にとっての試練である。甘粕正彦を越えなければ、彼女の思いは遂げられない。

そこに愛歌が感じるのは、ただの怒りではない。もつと複雑な、自身でも形容しづらい感情だった。

沙条愛歌は聡明な子だ。

甘粕正彦の言葉の理、彼女はそれを理解している。

威圧的で、極端がすぎる物言いだが、だからこそ正論しか口にしない。

外れた価値観を持つ愛歌だが、そんな彼女にも理解できる。それくらい甘粕の語る言葉は分かり易かった。

「……そうね。もしかしたら、あなたの言う通りなのかもしれないわね」

愛歌は認めた。甘粕の言葉に理があると。

全能であるという沙条愛歌の大前提、その機能故にこれまでの行程は成り立っていたのだと。

「産まれた時からこうだったのだもの。今さら止めろと言われても困ってしまうわ。」

聖杯戦争だって、お料理みたいなものよ。きちんと手順の通りにやれば、その通りに調理できてしまうもの。途中でちよっとトラブルがあっても、冷静に対応すればそれで済むし。

彼のために料理を振舞うのも、彼のために聖杯戦争を勝ち抜くのも、わたしにとっては同じようなものだわ」

人より遥かに優れた知性は、己の行いとて当然ながら理解している。

誰かを殺す戦争と、何かを調理する料理。その違いはもちろん分

かっている。

その上で、沙条愛歌には2つの間に差が無いのだ。どちらの行いも、全能たる少女にとつては容易すぎて、唯一無二の恋心と比較できる重さを有してはいない。

『彼』のためにこそ少女は生きる。

『彼』の心よりの願いを知り、それを果たすがために”すべて”を捧げると決めたのだ。

そして一度決めたならば、それを成し得る『機能』が少女には備わっている。思いの熱量、善し悪しなど関係なく、暴虐なまでの能力でもって彼女は万事を成せる。

何も怯むには値しない。畏れるものなど何もない。

想うが故に慕うが故に、恋するが故に——否。

全能であるが故に、少女の想いとは果たされているのだから。

「そう、そうなのね。これが怖いという事なのね。

ええ、ええ。とても怖いわ。これでもしセイバーに会えなくなってしまうかと思うと、怖くてわたし、泣いてしまっそう」

沙条愛歌にとつて、それは初めての感情、未知なる衝撃だった。

人は理解できないものにこそ恐怖する。甘粕正彦の持つ強さは、愛歌の理解を越えていた。

豪語する信念のままに成し遂げる破格の意志。世界にさえ挑まんとする存在など、居るとさえも想像した事がなかったから。

それはまるで、初めて『彼』と出会った時と同じように。

想像さえもしなかった未知、揺れ動く心の脈動を確かに実感していた。

「でもね、わたしがこうなれたのも、やっぱり『彼』のおかげだから」だからこそ、彼女は沙条愛歌として、その心が出した解答を口にした。

「セイバーが好き。彼の事を初めて見たその時から。そして知れば知るほどに、彼の事を好きな気持ちが大きくなっていくの。

わたしの王子様、ううん、わたしの騎士様ナイト。強いところも、綺麗なところも、優しいところも、欲張りなところも、みんなみんな大好き



よ。

あんな人がいるなんて知らなかった。こんな気持ちがあるなんて知らなかった。彼の事になると莫迦な子になってしまう沙条愛歌も、今あなたを怖いと思う沙条愛歌も、全部が彼と出会えた奇跡があったから、わたしは今ここに居るの」

沙条愛歌は『恋』をしている。

その一点、全能だろうがなんだろうが、否定できない愛歌の真実。いつだって心の底から、彼だけを思っている。

彼のために全てを捧げるのだと決めた。

それは嘘ではない。確かにこれまでの行程は、少女にとって容易すぎるものだったかもしれない。

それでも、沙条愛歌は決めたのだ。この想いのために、世界をも引き換えにすると、世界さえも敵にまわすと。

何が来ようが怯みはしない。歴史が焼き切れようが躊躇いはしない。ならば今さら、怖れに負けて立ち止まるなんてあり得ない。

「本当はね、知っているの。わたしがしている事を、彼が快く思っていないこと。」

あの人はエゴイストだから、本当はみんなを救いたがっているのよ。誰も彼も、彼の民もそうでない人も、ひよつとしたら敵さえも、彼は救いたい。

そうね。もしわたしの世界の聖杯が、このお月様のようなものだったら、もっと彼が喜ぶやり方でしてもよかったのだけれど」

寂しげに、少女はそう吐露する。

想い人の気持ちを書かせている。そう自覚してるが故に、そこには憂いもあった。

「でも仕方ないのよ。だってわたしの世界の聖杯は最初から」そういうもの」なんだもの。

あれは何でもお願いを叶えてくれる、お伽噺みたいなふわふわしたものじゃない。人を救ってくれる綺麗な杯なんかじゃないの。

彼の願いを叶えるためには、初めから代償が必要な。とても大きな願いの分だけ、たくさんの代償が」

聖杯。彼女が所有するそれは、ムーンセルとはまるで異なる。

同じ名を冠してしても、本来ならば願望器の呼び名さえ偽りだ。あれは最初の段階から間違えている。

曲がりなりにも願いを叶えるものとして機能しているのも、愛歌の手腕によるものだ。その愛歌にしたところで、根本的な存在意義まで変える事はできない。

「もしも本当の事を知ってしまったら、きっと彼は傷つくわ。彼が希望を託したものが、そんなものだなんて、きっと彼は悩んでしまうと思うの。」

彼は優しすぎる人だから、悩んで苦しんで、もしかすると自分の願いを諦めてしまうかもしれない。

そんなのってないわ。彼はあんなに頑張ってるのに。許せるわけないじゃない」

それは愛歌自身の意志。

彼女が懸ける恋の情念が、彼の絶望を認めない。

「彼の事が好きだから叶えるんじゃない。わたしが叶えてあげたいから叶えるの。……うん、似てるけど、これはちよつと違うわね」

だから沙条愛歌の行動は、彼女自身から生まれたものである。

沙条愛歌の所業の全ては、契約した英霊の勝利へと繋がっている。

全ては彼のためなのだ。抱いた恋心に殉じて、彼女は純粋にひた走っていた。

「彼が悩まないように、最初からそんな風に振る舞えばいい。わたしなら別に苦しまないし、それに一度始めてしまえば、彼も踏ん切りが付くと思うの。」

セイバーが救いたいもののために、わたしが全部を殺す。わたしをくれた騎士様に、今度はわたしが全部をあげるわ。どんな願いだって叶えてみせる。

これがわたしの思い、わたしが彼にあげるもの。彼がきちんと自分の国を救えるように、そのためならわたしはなんだってしてみせるわ」

その様は、妖精のように可憐で、女神の如く光を纏い、そして全能

者に相応しく傲慢だ。

世界の全てさえも代償にする少女の想い、それは断じて正義ではあり得ない。

ただ、強い。沙条愛歌の想いには一点の妥協も偽りもありはしない。

純粹であるから強く、唯一であるから重い。恋に懸けるその情熱は、紛れもなく沙条愛歌であるが故のもの。

譲れない気持ちがあるからこそ、少女は戦える。

怯まない。畏れない。恋の魔法が掛かった女の子は、どんなものよりも強いのだから。

「よく分かった」

よって、人の意志を奉じ、その強きこそを愛する魔王は、少女の思いを祝福する。

それがどれだけ狂い、悪逆に満ちていようと、確固とした勇氣を持つのならば、甘粕正彦にとっての人の輝きに相違ない。

「ならばその思い、見事に貫いてみせるがいい。俺はその姿を寿ぐ」  
少女の身が浮かび上がる。

それは宙にといい意味でない。沙条愛歌という存在がこの世界から浮上していく。

世界の狭間を揺蕩っていた少女の精神を、在るべき場所へと還すように。

「ここにおまえにとっての試練はない。元居た世界、本来の当事者たちに向けて、思いの如何を問うがいい。

世界を捧げるといふのなら、それに抗い、否定の意志を口にするのも、その世界の者たちであるべきだ。いつまでも微睡みの中でふらついているものではないぞ」

そう、少女にとつてはこの世界も所詮は夢。

彼女が立ち向かうべき現実とは別に。そこにどれだけの出会いと面白みが溢れているようと、夢の出来事が現実以上の重みを持つ事はないのだから。

「……そうね。とても楽しかったけれど、わたしもそろそろ夢から覚

めなくてはいけない頃よね」

沙条愛歌は帰還する。彼女自身の現実へと。

愛歌の恋心は本物だ。しかしそれだけでは思いが成就するかは分からない。

恋愛とは、一方通行の身勝手な感情ではない。伴侶たる相手と共に育むもの。いつだって愛を懸ける物語で試練となって立ちはだかるのは、意中の相手自身である。

「その男も、今はどうやら燻っているようだが、いずれ答えを出すだろう。」

その男が真に英雄であるならば、不純な己を良しとはすまい。人類史に偉業と名を刻んできた彼らの意志を、俺は尊敬と共に信じているからな。

恐らくはその時こそがおまえにとっての——いや」

言いかけて甘粕は、途中で考えを改める。

沙条愛歌は全知全能。およそ彼女の認識が届く範囲で知り得ない事はない。

ならば彼女にとっての未知の要素、試練となって突き付けられる存在とは、むしろ。

「不変なる強者である少女よ。最期におまえの道を阻む何者かは、おまえが認識しようと思わぬ、凡俗の中より生まれるかもな」  
「えっ？」

その指摘には、愛歌は本気で解らないといった風に首を傾げた。

「強さが不変性であるならば、弱さこそが可能性だ。沙条愛歌、全知たるおまえにとっての真の未知とは、その可能性こそがそうだと俺は思う。」

ああ、もしかするとそれは、既におまえのすぐ身近にいるかもしれないな」

言葉の意味が、愛歌には解らない。

解らないが、しかし、指摘を受けて思い当たるのは、一人の小さな少女の姿。

沙条綾香。

自分によく懐いてくる、自分の妹にあたる娘。

認識としてはそれくらい。不快ではないが特別でもない、その程度の重さ。

そんなに懐いてくれるのなら、特別にきちんと使つてあげようかと、それくらいの扱いだ。

あの子が、自分の思いを阻む者となる？

正直、まったく実感が沸かない。想像してみたが、まるで絵が浮かんでこなかった。

どう見ても、あの子にはそんな力はないはずなのに、それでどうやって自分に抗うというのだろうか？

それが可能性だというなら、確かにそれは未知であるが、どうしても信じられなかった。

「まあ、そう気にするな。こんなものはただの予想だよ。未来を定めるような予言の類いではない、益体のない妄想にすぎん。

未来とは然るべく訪れるものだ。あらかじめ定められ、足跡を辿るだけのものでは断じてない。未来を決めていくのは、あくまでも本人の意志次第だろう」

「——そうね。ええ、その通りだと思うわ」

どこまでも意志を信じる甘粕の言葉に、愛歌もまた頷く。

偽りなき万能の力を持ちながら、決して己の行く末だけは見ないと誓いを立てる少女は、男の言葉に心からの同意を示していた。

「それじゃあね、変なオジサマ。色々言われたけど、話せて楽しかったわ」

「ふはははは、またしてもその呼称か。まったく少女というやつは容赦がないな！」

気兼ねのない言葉を交わし、全能と魔王は別離する。

これより先、異なる世界の二人は交わらない。

世界の脅威たる超常の異端者。彼らは各々の世界で敗北を喫する事になる。

強者ならざる者、可能性に満ちた弱者の手により、不変の頂点は崩れ落ちるのだ。

その結末は、まだ先の話。聖杯戦争の勝利者たちは、遙かな頂きにて来たる時を待ち詫びる。

——幕間に、数多の夢の情景を、その瞼の裏に映しながら。

ねえ、聞こえていて？

わたしのセイバー。

わたしのアーサー・ペンドラゴン。

わたし、あなたがいない『世界』で、とてもすごい人と出会ったわ。わたしと近い所にいるのに、わたしとは違うモノ。

見れば、びつくりするくらいに幼くて、外見は立派な殿方だったけど、中身は子供みたいに我が儘なとんでもない人。

その我が儘ついでに連れ攫われて、わたし、とても怖い思いもしてしまっただわ。

でもね、それだけではなかったの。

あの人はとても怖かったけど、とても分かり易い人だったわ。

純粹で、真っ直ぐで、わたしじゃなくてもすぐに解るくらいに。

そんな思いで、まるで殴りかかるように向かってくるものだから、わたしもつい、自分の気持ちをはしたなくも明かしてしまったの。

強い人。

そうね、きっと彼は強い人だわ。

稚拙で、愚かで、直情的な思いだけの勢いで、走り出して何処までも行ってしまう。

そう、まるで人間だったわ。人間そのままだったのに、びつくりするくらい強かった。

彼のような人は、きっと誰よりも強いよね。わたしよりも——もしかしたら、あなたよりも。

ごめんなさい。

決して目移りしたわけじゃないの。

わたしには、あなただけなの。本当よ。

沙条愛歌はあなたに恋してる。ええ、それは絶対に間違いないこと。

あの人と話して、それを改めて実感できた。あなたの事をひどく言われて、かなり怒りもしたけれど、そのことには感謝しているわ。

それにね、また収穫もあったの。

あの『迷宮』での時と同じ、またひとつ学んでしまったわ。

今までなら思いもしなかった、体験してから初めて解る、素敵な事。

「——諦めなければ、いつか必ず想いは叶うんですって」

ええ、勿論、わたしなら大丈夫よ、セイバー。

わたしはちゃんと頑張るわ。頑張ってあなたの『故国』ブリテンを救ってみせる。

わたしは決して諦めない。あなたと出逢えた奇跡を、あなたの願う救済を、無為なものになんて終わらせない。

だから、そう、たとえ殺されたって、沙条愛歌はこの恋を諦めないわ——！

## EXTRA編 序章：本戦前予選

——聖杯。

月にて発見された異星の遺物。それを最初に呼称したのは果たして誰であったか。

全長三千キロメートルに及ぶフォトニック純結晶体。人類誕生の以前より地球を観測し続ける巨大な演算装置。

あらゆる可能性の分岐を納める超常のスーパーコンピューター。そこにはあらゆる未来を選択できる機能が備わっていると知った時か。

その邂逅は、西暦1973年に遡る。

ポールソフト大崩壊より魔力が枯渇し、神秘が過去の御伽噺と化した世界。

ウィザード次世代の魔術師により発見された月面の遺跡。

曰く、

「アレは現在の人類には到達できない演算装置」

「物質に頼る人類文明では理解できない、異質すぎる技術体系」

「物理的な接触は不可能。霊子ハッカーのみがアクセスを可能とする」

「光の中で繰り返される膨大なシミュレート。そこには必ずや夢見る未来がある」

まじゅつ旧世界が過ぎた後、新たに見出された無限の願望を叶える器。

そこに聖者の血を受けた杯の名が与えられたのは、あるいは必然であったのか。

世界の支配者により統制・隠蔽されるようになった月の願望機の存在。

だがその噂はまことしやかに伝えられる。月の内側では定期的に人間が集められ、その使用権を賭けての争奪戦が行われていると。

証言した者はいない。それでも噂は絶えない。上位存在を従えて



行われる生存競争<sup>トライアル</sup>。

たった1人の杯の担い手を決める殺し合い。やがてはそこにも、1つの名が付けられた。

——聖杯戦争、と。

そして開幕の鐘が鳴る。平凡な日常は、一握りの砂金の如く。

そうして“彼”は、月海原学園での朝を迎えた

「おはよう！」

今朝も気持ちのいい晴天でたいへん結構！」

時刻は午前七時半。生徒たちの談笑の音が響く朝の校門。

登校していく生徒たちを呼び止めるのは、ここ月海原学園の生徒会長だ。

先週の朝礼で発表された学内風紀強化期間。

行事は予告された通りに。文武両道にして堅物と知られる生徒会長は自ら陣頭指揮にあたっている。

上がる不平不満も風景の一部分。刺激に飢えた学生たちはそれから話題の種として雑談に華を咲かせる。

それは平穩無事にすぎる学校生活の光景。多少の変化を加えながら、しかし大筋の所では変わらない毎日を過ごしている。

——そこに違和感など有りはしない。

——学生として、友人として、その立場や関係に疑問など持たない。

——だってそれは当たり前のことだ。自分等の住んでる世界はそういうもので、疑問に思うことこそ馬鹿馬鹿しい。

——だから、たとえば、時折頭に走るノイズのような違和感だって、単なる錯覚に違いない。

——それが”日常”だから。さあ、今日も穏やかな一日を過ごしていこう——

「おおー。おはよう！」

今朝も相変わらずの壮健ぶりで結構結構！」

他の生徒と同じように”彼”が呼び止められる。

「服装、持ち物……うむ！ 違反の一字も見つからん。

まさに質実剛健。鼻肩目で見ても、おまえこそ全生徒が模範とすべき男だな」

屈強という形容が相応しい体格を持つ”彼”。

しかし他生徒との違いは単なる外見だけに留まらない。

一部の隙もなく着こなした制服には着崩れの類は一切ない。

遊びがない、とは少し違う。学生的でない徹底ぶりながら、そこに違和感を感じさせない。

それは単純に印象の問題だ。緩むといった要素が彼には恐ろしく似合わない。

”彼”にとつてはそれこそが自然体。何一つの無理もなく素のままに振舞っているのだと理解できる。

「おまえにしか言えんことだがな、強化期間というものが俺は気に食わん。

検査があるからやる、期間が終われば御役御免、それでは意味などないだろうに。

風紀の向上を目指して行う行事なら、後にも繋がる教訓とならねばいかんと思う」

「その点、おまえなどはまさしく在るべき姿だと思える。

常日頃から身なりを整え意識をりんとしていれば抜き打ち検査など何するもので。

おまえからは在りし日の大和男児の気概を感じられる。古い価値

観だろうが、良いものはいつになろうとも良いものだ」

「……と、いかな。つい説教じみてしまった。」

間桐あたりからまた老人くさいなどと言われてしまいそうだな」  
他愛のない歓談に華を咲かす二人。

それは友人という関係からは何らおかしくない風景。学友同士の  
日常の一部。

それに付き合っている”彼”にも、不自然さなどは見受けられな  
い。

「出来ることならおまえのような男こそ運営側に回ってほしいのだが  
……。」

いや、すまん。生徒会など強要して入れるものではなかった。忘れ  
てくれ。

長く引き止めてすまなかつたな。最後に生徒証の確認だけして終  
わりだ」

そう言つて生徒会長は、差し出された生徒証に目を通す。

生徒証の所持は校則で義務付けられている。

己が誰かを示す証。有事の備えとして、何より自身の存在証明とし  
て。

そこに書かれた名は——

「——■■■■、と。よし、間違いない！」

では、■■■■。今日も悔いのない、いい一日を！」

返された生徒証を受け取り”彼”もまた校門を抜ける。

それは何一つとして不足のない、”学校”としての日常。

月海原学園の穏やかな毎日は、変わらない始まりを告げた。

かくて開幕の鐘は鳴る。平凡な日常は砂金の如く、しかし買い手は  
どこへやら。

変わり映えしない日常。繰り返される風景。

同じように過ぎる平凡な毎日。しかし変化を求めている者もまたいない。

たとえば、黄色い声を上げる女子たちに囲まれて天狗になっているクラスメートだとか。

たとえば、毎朝同じ場所で冗談のようにすつ転ぶ冗談のような教師だとか。

それが日常なのだ。彼等は信じている。如何に退屈を持って余そうと、人は自らの常識が崩れることを望まない。

あるいはそれも一つの秩序なのだろう。

形成された共同体<sup>コミュニティ</sup>。暗黙に出来上がった筋道は、それを外れる者を許さない。

果たして彼等の中に、確かな明日を見据えた者は何人いるのだろうか。

将来はどうなるか、進路はどうするか、そう語りながらも実感は伴っていない。

いまだ見えない未来<sup>未来</sup>を思い、想像を膨らませて楽しんでいるだけの者が大半だろう。

それを疑問になんて思わない。違和感なんて感じない。

彼等は当たり前前に今の居場所を信じ、先の未来があると当たり前前に思ってる。

切実に差し迫ったものなどなく、この日常はこれからも崩れることはないのだと根拠もなく信じているのだ。

——しかし、それでも彼等は理解しなくてはならない。

この世の中に絶対不変の価値観がないように。

1つの常識とは、同じ1つの切っ掛けで脆くも崩れ去るということ

を。

「さつそくなんだけど、今日はみんなに新しいお友達を紹介します」

きっかけは、1人の転校生の存在だった。

形成されてきた秩序の中に、特大の異物が入り込む。

鮮烈に空気を変える存在感。平凡な日常において余りに異端な不純物。

明確な壁さえ感じさせる確かな天賦。それを放つのはたった1人の美しい少年。

「みなさん、僕の名は、レオナルド・ビスタリオ・ハウエイ」

その有り様はまるで太陽の如く。

全てを備えた王者の姿。すでに学ぶべきものはなく、欠けたものも存在しない。

生半な者ならば直視しただけで麻痺してしまう。凡庸な者と特別な者との差異を否応なく実感させる絶対性。

万人を照らす光であるべき少年に、この日常には余りに不釣り合いだった。

「いずれ世界中の誰もが僕のことを知りますが、今はあなたたちの学友です。

この幸運を嬉しく思います」

そして少年は、自らの特別性を十全に理解している。

見せたものは年相応の屈託のない笑顔。それだけで少年はクラス全体の心を掴んだ。

理屈不要に発揮される王聖のカリスマ。愛されるべく生まれた少年は、その高みより視線をクラス全体へと行き渡らせて――

”彼”と、視線を交錯させた。

直後にクラス全体を包み込む謎の緊張感。

知らず身体が震えだす。何に対しても分からないのに、本能は危機感に反応する。

少年の王聖がもたらした和らいだ空気。それが一転して、教室を鉄火場の渦中へと書き換えた。

「とにかくみんな、レオ君と仲良くしてあげてね。じゃあレオ君の席

は……。

左から2列目の、前から3列目が空いてるわね。そこでいい?」  
そんな緊迫の中でも平時と変わらない、明るい調子の教師の声。  
その指示に従い、少年は自らの席へと歩き始める。

少年と、”彼”が接近する。

瞬間、他生徒らが感じたのは一触即発の気配。

触れれば一瞬で燃え上がる。そして日常はその瞬間に滅び去るだろう。

連想された二つの太陽。但しそれは万人に降り注ぐ光ではなく、全てを焼き尽くす業火の熱量としてだ。

悟る。異物は少年だけではなかった。

日常はとうに異物を孕んでいた。平凡の皮を脱ぎ捨てて、今まさに内から喰い破らんとしている。

なんとという脆さだろう。日常とは、こんなにも容易く崩れてしまうものなのか。

一步、また一步と、少年が歩を進める。

心臓の音さえ聞こえてきそうな静寂。僅かな距離を無限の長さで錯覚してしまう緊張。

誰もが息を呑むことさえ忘れて、その瞬間を待つ。翻弄されるばかりの民衆に、果たしてそれ以外の何ができるだろう。

少年と、”彼”が交差する。

時が止まったと錯覚する。油の浸された導火線に火種が落ちていく刹那の時間。

全ての生徒の意識が集中する。思考は一致し、その接触が何を起こすのかと伺って――

何も、起こらなかった。

指示された通りの場所に少年は着席する。

互いに視線を交わすこともなく、何事もなかったかのように日常は平穏を取り戻す。

張り詰めた空気から解放されて、生徒たちはしばしの混乱の後に元の常識を取り戻していく。

そもそも冷静に考えてみれば、始めから何かが起きたわけではなかった。

転校生がやってきて、生徒の一人と目が合い、教師の指示に従い席に座った。それだけだ。

何もおかしいことはない。騒ぎ立てる方がどうかしていた。

そして彼等は、目の前で起きた異常を何事もなかったと片付ける。それが日常を守ることだから。それが楽な道だから。何も追求せず、違和感から目を逸らして。

それこそ正常な判断だ。無意識にそう選択した者たちは、再び日常せかいの中へと戻っていく。

月海原学園の一日は、そうして変わらないままに始まりを告げた。

兆しの星、来る。輝きは目映く、鐘の音は遙か彼方に。

部活動。それは学校行事において本筋の一つに当たる。

勉強こそ学生の本分。ならば部活動とは青春の本領だろう。

射場を持った武道場にて日々研鑽を積む弓道部。

学内のあらゆる話題を拾い上げ記事にして提供する新聞部。

その他、運動系、文化系と、放課後の学校では各々の生徒らが活動に励んでいる。

それは一生徒として学業に勤しむ”彼”とて例外ではなかった。

その脚で向かうのは、前述した弓道部が活動する武道場——の隣。立派な建築物の影で物置のように佇む、粗末なプレハブ小屋だっ

た。

「おおおう！ 待ちわびたぞ、同士よ」

建て付けの悪い戸の先、小屋の中では一人の男が待っていた。

狭い空間をその身一つで占有する巨軀。学生服の上からも分かる屈強な肉体は、並大抵ではない人生を思わせる。

そう、学生服である。

重ねて言おう。男は学生服を纏った学生である。

明らかにその単語にそぐわない男が二人。狭いプレハブ小屋の中で対峙していた。

「今、まさに試練の時！ 我が部は大いなる苦境を迎え、未だ道は見えてはおらん。

だがそれは忌諱することに非ず。挑むこと、それ自体に価値を持つ試練。超えるべき頂きであればむしろ歓迎して受け入れる所存。

この逆境を乗り越えるため、我等が『修行同好会』の定例会議を始めたいと思う」

大きな声は狭い空間では余計に響く。

無駄に熱意のこもった所作は、ただひたすらに暑苦しい。

「我が同好会の所属人数は、小生とおぬしの二人。正式な部として認可を受けるには数が足らぬ。

そう、このままでは——」

「部費が降りずに、またしても自腹を切るはめになってしまいうのだああああ!!!」

漢泣き。涙さえ流した魂の叫びである。

「世界に点在する数多の荒地へ赴き、心身の修練として己を磨く我等の活動。

おお、何故この高尚なる活動が衆民には理解されぬのか！ この憤り、世の不条理に小生は憤慨を禁じ得ん」

「先日を持ち込んだ生徒会への嘆願書に対する返答。それもまた我が心を荒立たせる。

『もうあなた方を止めるのは諦めましたから、せめて自費の範疇でやっていてください』、と。おお、なんたる無情！



労働にて我が身を養う賃金を得るは道理。されど要るべき者に手を差し伸べることさえしないとは、布施の功德はどこにいったあ！」これも日常の一つには違いない。

いかにキャラが濃かろうと、種別するなら部活動的一幕。

故に覚えるべき違和感はここにはない。ないつたらないのである。

「だが向こうの言い分にも筋は通っている」

”彼”が、男の訴えに対し答えを返す。

「私的ではなく全体を慮る公的な理念の下で運営される資金。見返りの期待できん相手への配当が限られるは当然。

まして俺たちは正式な部とも認められない、二人のみの同好会。これでは冷遇も致し方なしと言えよう」

「ぬう、やはりそこが肝要であるか」

冷静に指摘する。

この二人の関係において”彼”はある種の抑え役だ。

暴走する勢いに待ったをかけ、意志を押し通すための手段を模索させる。

そういう役割を担っている。故にそのペースに巻き込まれることはない。

「何においてもまずは人材の不足。人さえ居れば正式なる部として認められ、我らの苦悩も解決する。

まさしく三蔵法師が如く、携える手があれば天竺への道程も恐れるに足らず！」

「されど、何故だ!? 何故我らと共に研鑽に励まんとする同士が集まらんのか!？」

勧誘をすれば目も合わされずに逃げられ、ようやく捕まえた仮入部者も説明会の段階で即辞退。

なにがいかんのだ!? 新規参入者に合わせ、向かう荒地も緩やかなものを選んだというのに」

「残念なことだが、彼等と我々の修練に向けた意識には思った以上の乖離があったらしい。

我らにとつては修練とも呼べん代物でも、彼等には忌諱するほどの

難行に見えたのだろうか」

「くう、嘆かわしいことだ」

ちなみに詳しくは記さないが、どれだけやる気を持って門を叩いた若人も五秒で回れ右するのが彼等の言うところの『初級用』である。

「だがこれ以上の妥協もあるまい。苦行の試練で己を高めることがこの部の意義。人を集めるためにと安穏な道を選ぶのなら、それこそ本末転倒だろう。」

甘言で誘い招いた後、試練に放り込んでやるのも手だろうが、それこそ同好会の存続さえ危ういだろうな」

「やむを得んか。であればどうする？ 大人しく自腹を切るか」

結局、至るのはその結論だ。

暴走しかけた氣勢は嗜められ、妥協案にて意気を納める。

それもまた秩序だ。和から外れるほどに突き抜けた行動はどうあれ『一人の生徒』として好ましいものではない。

その縛りに囚われている限り、日常に変化はない。喧しく濃い同好会の風景も、変わらずそのまま流れ続けるだろう。

「何を言う。弱きに流れて試練に背を向けるならばそれこそ我等の価値はない。」

目的とする場所がある。だが辿り着くための手段がない。ならばいつそ辿り着くこと自体を修行にしてしまえば良い」

しかし”彼”は、そのような妥協で納得などしない。

抑え役であるはずの”彼”もまた、良い意味でも悪い意味でも普通ではなかった。

「陸を行くならばこの脚で行け。海を行くならば船を築くか泳いででも渡りきれ。手段など己の手で作ればいい。」

なに、地球の上にあるものは大地か海原かで繋がっているのだ。やってやれないことはない」

「地平の先を目指した者たちに事前の地図があったか？ 見果てぬ航海へと漕ぎだした者たちに確かな航路があったか？ ネット環境は、あらゆる文明の利器は彼等の手にはなかった。」

それも当然。文明とは彼等の為し遂げた偉業に支えられて出来ている。その勇氣に比べれば、我々は遙かに恵まれている。試練の内にも入らん」

「己で行くと定めたならば、何を以てでも辿り着くという覚悟を抱け。そうあつてこそ自らを練磨する試練だといえるだろう」

「おお……！」

言うまでもなく暴論だ。

だが同時に、完全否定がしにくい理論も帯びている。

何の予備知識もなかった時代の者らに比べたなら、確かにその難易度は落ちるだろう。

そも比べる事自体がどうかという点は、”彼”にとって考慮するにも値しないらしい。

時代がどうであれ劣っているのは事実。そこから目を背けるのは墮落に過ぎないというように。

「相も変わらず見事な覚悟、そして勇氣である。

赴くと決意したならば如何なる苦境に立たされようとも踏破の意志を貫くべし。その通りだ」

「実のところ、途中まで小生ちよつとばかり引いていたのだが、まだまだ精進が足りなかったようだな」

共に道理に流されない馬鹿二人。

秩序の和など彼等には無意味だ。介さぬわけではないが止まる理由にはしない。

明確に前を見据えたその信念は、異端と言われて迷うほど脆弱ではなかった。

「むむ……これは……おお！　きた、きたきたきたきたああああ!!!

神託、降りたり！　小生が目指すべき求道の先がはつきりと見えた！」

「ズバリ、ヒマラヤである！　かの山脈の頂きこそ我がエルサレムなり。辿り着くべき修験の果てと悟った。

もはや覚悟は定まった。あとは一念の下、不断の意志で踏破してみせるのみ！」

何の脈絡もなく断言される。

なおヒマラヤ山脈とは世界最高峰の標高を持つ難所であり、その登山は十分な訓練をした者でも危険を伴う。

少なくとも学業活動の範疇で挑戦してよいレベルの山ではない。

だが無論、それを理由に止める者もこの場には存在しなかった。

「素晴らしい決意だ。半端な覚悟ではない、必ずやり遂げるという意志を感じる。」

常識がどうだのと白ける制止などするつもりはない。心からの賛辞だけを贈ろう」

「無茶が過ぎると道理が否定しようとも、真に抱いた望みであれば躊躇う理由はない。」

人に無理などない、為せば成る。諦めなければ夢は必ず叶うと信じている。

その信念を持つ限り人はどこまでも進んでいける。そう、たとえ目の前で最終戦争ラッグナロクが起きようとも、諦めてはならんのだア！」

「まつこと見事なり！どこまでも勇猛なその気概、小生もまた倣うべきであるな！」

……あ、だが、さすがにその場合は諦めた方がよいと思うぞ」

止まる理由などない。二人は何処までも突き進む。

不可能などという言葉は奮起の切っ掛け。勝算イイワケなんて不要である。

試練を恐れず、自ら踏破する気概。共通するその意志で彼等は繋がっている。

「であればこそ、だ。友よ、この難行、共に挑んではくれまいか？」

そんな同じ方向を向く同胞として、その誘いを男は自然と口に出していた。

「これが我が試練であることは委細承知。助けを借りねばならぬ理由があるわけでもなし。」

うむ、我が事ながら不思議でならぬ。だが思った以上に、愚僧オレにとってこの縁は良いものだったらしい」

「対立し、追いやられ、理解されずに孤立する。慣れたものであるし、今さら恐れもせぬが。」

同じ道程に立ち、肩を並べて共に歩ける連れ合い。その縁にはついで巡り合せがなかったものでな」

それはかつての己の道程を思い出すように。

辿ってきた自らの生涯、その中で味わってきた悲しみや喜び。

十年を超える濃密な求道の情景が、脳裏には映し出されている。

およそ『学生』ならばあり得ないはずの過去を、男は確かに垣間見ている。

「我が求道が向かう場所、その姿をおぬしにも見てもらいたいのだ。意志を同じくする友として。

軟弱と、笑ってくれても構わんがな」

「笑わんとも。それを嗤うのなら友情とは総じて墮落だろう。

世の白眼視にも耐え抜き、自らの求道を貫いたおまえが至る頂きだ。俺とて是非にも眼にしたい」

その言葉は、偽りのない誠実な響きで。

世辞の類ではない。”彼”は心から男の求道の果てを見たいと思っている。

強い意志を抱いて行き着く場所。

そこにあるのは、その人が磨き上げた信念の光だ。

どのような種別であれ、その輝きは美しい。男が至る輝きはさぞや己を魅せるに違いない。

だが、願ったそれをわざわざ口に出すのは、それが叶わないことだと理解しているからだ。

「だが断ろう。俺は果たせない約束はしない主義なのでな」

男の申し出は、果たせないものだ。

何事も意志を抱けば不可能はないと豪語した”彼”をして、それはないと口にさせた。

「俺は意欲ある人の強さを信じている。諦めなければ夢は叶うと、そう言った信条に偽りはない。

だが同時に、1つの夢のためにはもう1つの夢を捨てねばならん時があるとも理解している」

「——なあ。もう気づいているのではないのか？」

そう告げられた男の表情に、動揺の色はない。

ただ静かに、何かを悟ったような静謐な気配だけがそこにはあった。

「……果たせぬ約束か。それは確かなことか？」

「その答えは己自身に聞くがいい。おまえが”ここ”に居る理由とは、誰かに対し譲れるものか？」

「できないな。この浮世で最も尊き目的のために、小生はこの場に赴いている。その自負がある。」

……ああ、なるほどな。確かにこの約束を果たすことは叶わない。

小生とおぬし、二人がこの場に立っている時点で」

男もまた、理解する。

目の前の相手は、共に同じ道を歩ける同士などではない。

他ならない彼等自身の選択が、そのような可能性を切り捨てたのだから。

「それだ。そもそもの話、共に挑むということからまずもって不可能であった。」

——愚僧オレはすでに挑み、そして見出していたのでな」

日常が崩れる。二人の道は分たれた。

先までの関係はすでない。己が立つべき場所を彼等は理解した。

いや、本当はどうに理解していたのだ。

「ならば一つ、夢想を語っておこう。」

——できればおぬしとは、本物の山を共に登ってみたかった」

それは、男にとってこの場所が惜しいと思えるものであったから。

意志は固まった。迷う心もすでない。覚悟などこの場に居る時点で出来ている。

それでも未練を残すほど、偽りで出来たこの居場所が、男にとって居心地の良いものであったのだ。

あえて口に出し、その未練を断つ。

夢想は所詮夢想だと、自らに告げるように。

「ではさらばだ、”甘粕正彦”。次に相見えるときは、討ち果たすべき敵手として」

「また会おう、」 臥藤門司。次に会うときは、互いに越えるべき試練として」

二人が互いに背を向ける。

振り返るような迷いは、すでに彼等の中には無かった。

ノイズの走る校舎の中を通り過ぎる。

繰り返される日常。

見過ごされる違和感。

何一つ確かでない己自身。

”彼”にはすでに分かりきっている。

この世界は偽物。人も、立場も、生活全てが設定された役割に過ぎない。

ここに本物は一つもない。どれだけ居心地の良いものだろうが、全ては幻でしかないのだ。

この世界はいずれ崩れる。

役割から抜け出せなかつた者らを道連れにして。

違和感から逃げることなく向き直り、本当の自己を取り戻した者だけが次の段階へとコマを進める。

これは選定。戦場へ立つに値する意志を選別する試練である。

「……ああ。勿論、おまえならばこの程度を突破するなどわけないことだ」

眼前に見据える、赤い服を着た一人の少女。

ノイズだらけの世界の中で、揺らぐことのない確固たる意志。

早々に学生服の縛りを破っていた彼女なら、こんな違和感に惑わされるなどあり得ない。

”彼”と少女が、真正面から向かい合った。

「私服登校に無断欠席か。優等生がすることではないな、凜」

「そういうあなたこそ、その制服、全然似合っていないわよ、甘粕」

——彼、甘粕正彦。

——少女、遠坂凜。

肩を並べる同胞であった二人。

虚構に揺らぐ校舎の中で、確たる己を持った二人は対峙した。

「やはりおまえもここに来たのか。俺の忠告は聞き入れてはもらえなかったらしい。」

だが、これもある意味必然か。ここで戦いから逃げるのなら、それは遠坂凜ではない」

「さすがに付き合いが長いと分かってるじゃない。」

私の考えは地上で話した通りよ。甘粕、あなたにこの月は獲らせない」

ここは月。その内にて構築された霊子虚構世界。

太古より存在する月の遺跡、ムーンセル・オートマトン。

人々より聖杯と呼ばれる異界文明のアーティファクト。彼等は今、その内に居る。

これは聖杯の使用権を賭けた争奪戦。

唯一人の担い手を選ぶ、敗者の悉くを淘汰する生存競争。

その舞台に立っている。それは即ち、己以外の参加者は妥協の余地なく敵であると示していた。

「そして西欧財閥にも聖杯を渡すわけにはいかない。だから自身で参加して勝者になると決意したか。」

素晴らしい覚悟、そして勇気だ。やはりおまえはそうでなくては。その勇敢さにはいつだって魅せられる」

「あなたの人間好きも変わらないわね。その変人ぶり、直すのはとっくに諦めたけど。」

「ていうか勇敢とか、もう少し言葉は選んでくれない？　ウチの家訓は知ってるでしょ」

「常に余裕をもって優雅たれ、だったか。俺から見れば何とも似合わないが。」

万全を期して待つよりも、勝利のために奔放して駆け回っている時



の方が輝いて見えるぞ。

……余裕がある時には、妙な失敗が起きるしな」

「う、うるさいわね！ 別に失敗なんていつもやってるわけじゃないでしょ！

この家訓、会ったことない父さんのものだから、大切にしているのよ」  
互いに勝手知ったる相手同士。

その会話も自然、敵同士というより知古の仲のものとなってしまう。  
う。

「時に、凜。この予選をおまえはどう思った？」

「偽りの中の学園生活。存在するものは偽物だろうが、再現された風景に間違いはあるまい。

本来おまえほどの歳であれば、こうした生活の中に居たはずだ。憧れる気持ちもあつたらう。

実際に体験してみて、どうだ？ 後見人の立場としては感想が聞きたいな」

「……そうね。まあ、悪いとは思わなかったわ。こういう生活なら、してみるのもいいかもね」

話題に上げるのは、偽りであった日常の話。

この月の世界は、地上に在るものの再現。この学校の風景も確かに存在したものだ。

本物でなくとも、シミュレーション 予行演習としては十分だ。ここで感じた所感ならば、それは現実にも当て嵌められる。

「だけど、それはあくまで私の戦いが終わった後の話よ。ここは私がいるべき場所じゃない」

「この世界はまるでカリカチュア。綺麗に映し出すだけの劇画だわ。

口当たりのいい、約束された退屈な平穩。未来もただ暮れていくだけのもの。

そんな世界は生きていないわ。ここは単なる記録、人の生きるべき世界じゃない」

この世界は偽物。全てが作られた虚構。

その価値はあくまで演習として。生きていくべき居場所では決し

てない。

与えられた平穩、定められた未来。そんなものを良いと思える大人しきなど、遠坂凜は持ち合わせない。

彼女はいつだって前を見据えている。居場所とは与えられるのではなく、自ら掴み取るものだど理解していた。

「同感だ。この平穩には価値がない。誰もが与えられた日常を甘受する、墮落の温床に過ぎん」

その認識は、甘粕正彦にとっても同様だった。

「俺とて平穩は好ましい。人が人らしい営みの中、思うままに己の人生を決められる。それは何物にも代え難い。」

人は本来、そのような世界で生きるべきだ。ああ、疑いの余地なくそうであろうさ。

ならばこそ、我々はその価値の重さを理解するべきだ」

「先人が築いた安寧の上に居座り、自ら動くこともなく未来の安泰を盲信する惰性、反吐が出る。」

偽りの世界に身を置いて、不確かな己のまま違和感に気付こうともしない。そうする理由は総じてその方が楽であるためだ。

まさに腐敗の縮図だな。この世界は、現在の世の墮落を明確に映し出している」

西欧財閥の掲げる管理社会。

分配される資源量、人々の生涯まで管理され、効率的な采配によって幸福が約束される。

その社会の中では人は思い悩む必要がない。支配層と被支配層は明白にされ、人々はその通りに運営される。

まさしく万民、秩序を廻す歯車の如く。偽りの学校生活を送る者たちの姿は、今の世界に生きる人々の姿を模写しているかのようだ。

「だがこれを選抜と見るならば面白い。闘争に向かう者らの意志を試す試金石として、これほどふさわしいものはあるまい。」

ムーンセルとは巨大な演算機械。人の意志など介することはないと考えていたが、なかなか粋な試練を用意する」

「甘粕……やっぱりあなた、わざと生徒の役割ロールを続けてたのね」

「知っておきたかったのだな。この月に至った者たちを、その信念がどれほどであるのかを」

そして、それも終わる。

すでに知るべきことは知った。後はただ、前を目指して進むのみ。

「俺は聖杯を手に入れよう。俺の信じる樂園（ヘイランド）、その成就のために」

「それが許せんというのなら、凜。俺を凌駕する信念を抱け。聖杯が願いを叶えるものならば、勝敗を分かつのはその差だ」

歩き出し、向き合う相手の横を通り過ぎる。

それは両者、ほぼ同時に。袂を分つたかつての戦友を振り切るように。

これは聖杯戦争。

総計128名もの魔術師（ウィザード）による殺し合い。

殺さない選択肢などない。敗者に待つのは死の結末のみ。

生き残れるのは、たった1人の勝利者だけである。

鐘楼は何処にあるか。日々は穏やかに。その瞬間がやってくるまで。

———  
”俺”は再び日常の中へと戻っていた。最後に義理を果たすために。

月海原学園では定期的な全校集会が行われる。

最近で実施された風紀強化週間。差し迫った期末試験。今回の内

容はそれらの総括だ。

これも学園生活における日常の一貫。体育館に集められた全校生徒は、各々に学園長の話に耳を傾けている。

日常の景色は変わらない。

大半の者はいまだ世界の違和感に気付いていない。

捨て置けば、まもなく訪れるだろう選定の終わりに脱落者の烙印を押される。

理屈で考えるのなら、それでいい。

覚醒すれば、誰もが敵となつて立ち塞がる者たち。数が減るに越したことはない。

至極道理である。所詮は己の意志も抱けぬ軟弱者たち。見限ったところで何の問題があろうか。

——そんな道理を弁えた上で尚、俺は彼等を今一度試したいと考えている。

席を立つ。周囲の者らの視線が刺さる。

構わずに歩き出す。教師たちが止めに入ったが一切振り切る。

目指すのは壇上。全生徒と向き合えるあの場所が良い。

学園長——の役割を担うNPCを無造作に押し退けて、壇上を陣取った。

「この中に、日常セカイの違和感に気づいている者は如何程いるだろうか」

この場に居る全ての者の視線が俺に集まる。

戸惑い、呆れ、不快……印象は数あれど、歓迎しているものはない。

それらは異端者に向けた感情。無言のままでも明白な拒絶の意思が伝わってくる。

そのような意思の群れを、俺はそれ以上の熱意を言葉に込めて跳ね返した。

「台本をなぞるような毎日。見過ごされる異常。曖昧な自らの過去。

問おう、おまえたちは気付いていないのか、それとも気付かないふりをしているのか」

日常の中に感じる違和感。

よほどの愚鈍でない限り、何らかの形で触れてはいるはず。

それでも今の日常を甘受するのは、意図的に無視しているからに他ならない。

「異常に触れ、己も異常に囚われることを恐れ、視線を逸らして隣の者を見る。」

隣の者はその隣の者を見て、更にまた隣へと。誰かがと期待して、行動する事をたらい回す。

結果、誰もが異常を見逃して指摘せずに蓋をする」

「そんな愚かな結論が罷り通る秩序ならば、いつそ破壊してしまえばよい。」

立つことも忘れた木偶のまま、一生を揺り籠で過ごすような腐った安穩がそれほど惜しいか。

誰かより与えられた幸福など、同じ誰かの手で容易く奪われてしまふものだというのに」

和を重んじ秩序に従うと言えば聞こえはいい。

だが実態を見れば、己で築いたわけでもない秩序を盲信するだけの惰性の集団。

唯々諾々と甘んじておれば守られて当然と、疑問とも思わず信じきっている。

秩序を乱すが悪だというなら、俺は悪にこそ魅せられる。

人とは不完全なものであり、世の法に絶対はない。法を外れる行為が時に正道となる場合もある。

善悪の定義が衝突し、その果てに素晴らしいものが生まれるのだと信じている。

だから俺は、彼等に告げたい。

惰眠を貪る善ではなく、勇氣ある悪を目指せと。

「未来とは、安穩と待って手にするものではない。築いてきた過去、築き続ける現在、その蓄積の果てに築かれる価値こそ、未来。」

信じるな、まず疑え。曖昧な己自身を何一つとして許すな。他ならぬ自身の事、妥協などあつてはならん。

隣にいる者は本当に友か？　いつ、何処で出会った？　その記憶があるとして、それは本物か？　どこかに矛盾はなかったか？

情性の信頼など屑石である。衝突し否定と肯定を繰り返して、その本心に触れてこそ真に至宝と呼べる絆となろう。

とことんまで疑い、探り尽くせ。本当の居場所とはそうしなければ手に入らないものだ」

俺の言葉に、果たして何人が動くかは分からない。

願わくば、彼等の全てが立ち上がる意志を抱いてほしいと思う。

その輝きを眠らせたまま、微睡みの中で潰えるのは悲しいことだ。

誰もが試練の舞台上に上がってほしい。

忘れられた人の光は、その中で練磨されて取り戻せる。

俺はそう信じている。故にこの思いを言葉にして彼等へと伝えよう。

それこそが、共に同じ頂きを目指す同胞として、俺が果たすべき唯一の義理である。

「この試練を乗り越え、確かな意志を手に入れられることを心より願おう。」

——以上、諸君らの健闘を祈っている」

もはや語るべき言葉はない。伝えたいことは全て伝えた。

あとはただ信じるのみ。彼等が真実を手に入れ戦うに足る強さを得る事を願うばかりだ。

壇上を降りる。

ここまで掻き乱した日常。皆の惑いの眼が向けられる。

それに対しては何も応えず、俺は真っ直ぐとその場を後にした。

すでに果たすべき事は全て終えた。

もはやこの世界に留まる理由はなく、俺は次なる舞台へと上がる。

用の無くなつた学生服を脱ぎ捨てる。

代わりに肉体アバターを包むのは、黒色に塗られた軍装。

我が祖国に軍が存在した古き時代の軍服。かつて『帝国』と呼ばれていた頃の衣装。

帝国万歳などと叫ぶ気は毛頭ないが、軍装というものはそれだけで心身が引き締まる。

これは一つの襦ぎの儀だ。

これより戦いに赴く者として相応しい身形に整える。

掲げた大義はどうであれ、祖国を守るため身命を賭した者たちの戦装束。

これより戦地に赴く俺が纏うものとして、これ以上のものはあるまい。

軍刀を腰に下げ、外套を翻して、最後に軍帽をかぶると、己自身の襦ぎを終えた。

向かうべきは校舎1階の廊下の先の行き止まり。

途切れた道と見せかけたその先にこそ、この世界の出口がある。

……だがその前に、もう一つ。

果たすべきことは果たした。後は残された疑念を解消する。

向かったのは校舎の3階。

本筋と関係があるとは思っていない。それでも一つ、気になっている事があった。

『校舎3階のさまよう少女』

月海原学園七不思議と、生徒間で噂の一つに上げられた話題。

一見すれば他愛ない世間話の類。だがこの噂にだけは他にはない真を感じた。

抱いた所感を捨て置く気はない。全てを疑えと公言した手前、舌の根も乾かぬ内に主張を翻すわけにもいかんだろう。

3階の廊下をゆっくりと歩く。

ルールから外れた視界には絶えずノイズが覆っているが、今見るべきはそこではない。

およそこの場には相応しくない少女の幻。学園という世界の異端

を探して——居た。

背後に気配を感じる。その視線が俺の背中に向けられている。実を言えば、その存在に気付いたのは初めての事ではない。以前に訪れた際にも同じものを感じていた。

その時にはすぐに去ってしまっただが、この相手はどうもこちらを観察している節がある。

警戒心が強い。それは怯えか、少なくとも狩猟者のそれではない。触れることを望んでいる。だが触れて良い相手か分からない。この視線の意味を、俺はそのように感じた。

「おまえは、いつもこの場所に居るのだな」

振り返らず、視線を合わせないまま声をかける。

これで逃げ出す相手ならば、元より俺には縁のない者だろう。

気配は、消えない。

こちらの声に耳を傾けているのか、視線は動かぬままだ。

ならばと、そのまま俺は話を続けた。

「以前の時もそうだった。隠れ潜みながらこちらを見ていたな。

他の者たちにもそうなのか？ 噂にもなっている。ここで皆を眺めるおまえのことは。

眺めるばかりが望みかな。それとも、関わりを望むからここに居るのか」

答えはすぐには返ってこない。

あるいはこのまま、俺の言葉は無為に消えるのかと思いだした頃。

「あなたは……あたしのこと、こわくないの？」

返事があった。幼い声だ。

声の方へと振り返る。相手の姿はすぐに見つかった。

一人の少女が立っている。

見た目の年齢は恐らく10にも届くまい。学生とはかけ離れた格好。

人形のようなドレス衣装。それが益々少女の非現実性を強く印象付ける。

整った容姿は絵画のように、あるいは亡霊の如く、生なき者として



の美が際立っている。

要は生きてる人間に見えないという事だ。この少女からは命の活力が欠けている。

見下ろす俺に、見上げる少女の視線が合う。

少女はたじろぎ、一瞬消えかけたが、踏み止まってもう一度こちらを見返した。

——悪くない兆しだ。変化を受け入れようとする気概を感じる。

「俺は甘粕正彦という。おまえの名を聞かせてほしい」

視点を合わせるために膝をついて、俺は少女に問うた。

「なまえ……あります」

「あります。怖くないのかと言うが、おまえは他人から恐れられたいのか？」

ありすと名乗った少女は押し黙る。

だがその無言の訴えを見れば、答えは一目瞭然だ。

「おまえが恐ろしいと見えるのは、おまえに対する不明が原因だろう。人は誰しも正体の分からぬものには恐怖を抱くものだ。未体験の脅威とは、それだけで人を怯ませる。

おまえとて、知らぬ相手は怖いだろう？」

「あ……！」

「聞かせてはくれんかな、おまえのことを。正体不明の何某かではない、ありますという人間のことを俺は知りたい。

そのために、俺はおまえに会いに来たのだ」

俺の求めに、少女はおずおずと話を始める。

最初こそたどたどしかった口調も、時を置いて馴れてくると随分流暢になった。

元来は会話を好む明るい性格だったのだろう。少女の様子からそれが見て取れる。

そして話をしていく内に、その正体にも当たりが付いた。

幼い主観は整合性に欠けている。

それでも、特に強い印象の言葉を繋げていけば見えてくるものがある。

戦争、爆発の音、病院のベッド、そして長い痛みと、孤独。

それらの記憶の果てに、少女はこの世界にたどり着いたという。恐らくは聖杯戦争と関係のない所で。

ここで今まで、この世界から別の場所へ移っていく者たちを何度も見送ったと、少女は言った。

それだけの長い時間、崩れ行くはずのこの世界で、一度も地上の肉体に帰還することなく。

……ならばこの少女の正体とは、おそらく――

「おじさんは何をしに来たの?」

その問いの意味は、この場に来たことを指していない。

俺がこの世界に上がってきた理由、それを問うている。

「そうだな……俺は止まってしまった世界を動かしに来たのだ」

「せかい?」

「皆が長らく止まっている。誰も前に進もうとしていない。

新しきを求めず、同じ場所で留まり続けているのだ。それが楽だとたわけた理由でな。

俺はそれが許せなくてな。そんな皆を叱ってやりたいのだ」

俺の返した言葉に、少女が反応を見せる。

納得がいつてない、俺の主張を受け入れ難いと反発を見せている。

「けど……同じ所に居れば、辛いこともないよ」

そして、俺に対して自らの言葉で反論すらしてみせた。

「この”ふしぎなせかい”に居れば、ありすを苛める人はいないから。

色んなご本を読んで、お人形で遊んで、お茶会をするの。

そうやっていけば、苦しいことはないから。そう思うことは、いけないことなの……?」

その言葉は、単なる楽を求める心から出たものではない。

この少女は平穩の尊さを知っている。それがどれだけ得難く価値あるものかを。

そこには多大な不幸があったのだろう。その果てに手にした安寧だからこそ、重さは計り知れない。

だが――

「そうだな。新しきを求めるといふことは、良いことばかりではない。時には悪いことに繋がる場合もある。」

あるいは俺が指し示す先は、とても恐ろしい場所に通じているのかもしれない」

「……あたし、こわいのは嫌だよ」

「ああ、当然だ。恐れが好きなら人間などいるものか。」

辛いのも怖いのも避けたい、人であるならば当然そう思うだろう」

「おじさんも?」

「もちろんだとも。俺にだって恐怖はある。辛い思いなどしたくない」

そう、人であるなら恐怖はあるべきものだ。

苦痛への恐れ、未知に対する畏怖。それらがあるからこそ俺の愛するものは輝くのだから。

「本当に強い者というのとは、恐れを知らない者ではない。」

恐怖を捨てたなどと嘯く輩は、その道理がわからん阿呆よ。弱さはないかもしれないが、強さまでも捨てている。

真の強さとは、恐怖を抱いて尚、それを乗り越えて先に進める者を指す。つまりは勇氣だよ」

「勇氣?」

「それこそ俺の信じる強さだ。そしてその強さを、おまえもまた持つている」

「ありす、が?」

「ここに留まる限り、おまえは何にも脅かされることはない。それも1つの安寧と言えるだろう。」

だが同時に、変わるものもない。本の物語をなぞるストーリーように、同じ風景だけが繰り返される」

「おまえとて気付いていたのだろう。このままではいかんと。だからこそ変わり行く世界を、こうして眺めていた」

この少女にも立ってほしいと思う。

その有り様はまるで亡霊だ。永劫の安寧に閉ざされている。

心はこの場にあるというのに、動いていない。今のままでは光は永

遠にやってこないだろう。

しかし、光は潰えたわけではない。

自閉に籠るばかりでなく、世界に関心を向けるのなら、それは兆しに他ならない。

「我は人であり、彼も人。そこに同一の者はなく、また同一で在り続ける者もない。

時と共に人は変わり、新しい価値を築いていく。中には失敗し、辛く苦しい時もあるだろう。それでも求める意志さえ捨てなければ、築かれる価値は必ずある。

それこそが生きるということだと、俺は思っているよ」

たとえ、その存在が如何なるものだとしても。

世界に繋がってさえいれば、結末がどうであれ心が残せる価値はあるはずだ。

俺はそう信じている。だからこの少女には、手向けの助言を贈ってやりたい。

「自身の望みと向き合え。その心が願うものが何なのか。

それが何かを知ったならば、あとは一步を踏み出す勇気を出せばいい」

「ありすには、難しいことは分からないよ」

「なに、簡単なことだ。ただおまえのしたいようにすればいい」

「……それで、いいの?」

「そうだ。それだけでいい。そして何より大切なことだ」

言葉にすれば容易いこと、今の世界に実践できている者がどれだけいるか。

己自身を誤魔化して、管理の箱庭の中にあって与えられた安寧こそ望みだと錯覚する。

そこに真実の光はない。人のあるべき輝きを曇らせていくばかりだ。

「心が感じたままに素直に動け。欲するものがあればその感情に従うのだ。

誰かの指図ではなく、自らの心によって決断するのだ。それでこそ

魂は輝きを放つだろう」

己の未来を二分する重大な決断を、他人に委ねて偽りの安堵に浸る。

この少女にはそうあってほしくない。本当の勇気を抱いてほしいと願う。

そうしてこそ、その存在には再び、命の灯火が宿るに違いない。

「今は、まだいい。その決断は、俺が促して果たすべきではない」  
立ち上がる。

この先は彼女の試練。彼女自身で築く道だ。

これ以上留まる選択肢はない。俺もまた、自らの試練に戻るとしよう。

「だが、もしもこの先、その心に触れるものがあれば、勇気を出してほしいと願っているよ。」

おまえは強い子だ、ありす。おまえならばきつと、何かを築くことが出来る」

こちらを見上げる頭を撫でてやる。

小さいその感触は幼く儂い。だが少女は確かにここにいた。

少女に背を向け歩き出す。

この世界の出口、校舎1階のそこを目指して、迷いなく歩を進め――

「おじさん」

そう呼びかける声に、最後に一度だけ立ち止まった。

「ありがとう」

その御礼は何に対してのものか。

意図は分からない。それでも振り返って見た少女の顔には、先ほどまでにはなかった活力が見て取れた。

ならばそれは喜ばしい変化なのだろう。俺はそれに笑みを浮かべて応えた。

「……しかし、おじさんか。これでも未だ、青いと言われている身なのだがなあ」

崩れた世界の境目。

無数のブロックを切り抜いたような空間の穴は、そう形容するのが相応しい。

無限の情報の海を潜り、世界の先を目指す。

俺に従い共に歩みを進めるのは、1体の人形<sup>ドール</sup>

これがこの先、俺にとっての剣であり、盾となるもの。

声なき声の指示に従い、俺は人形を連れてひた歩く。

たどり着いたその先は、まさしく異界だった。

床や壁などの地形は元より、空気、気配に至るまで何もかもが違う。

形容するなら地下迷宮<sup>ラベユリントス</sup>か。いつ牛頭<sup>ミノタウロス</sup>の怪物が襲ってくるか知れない、そんな覚悟が試されている。

そんな俺の予測を否定するように、虚空から声が掛かった。

説明が入る。この世界のこと、その進め方、対処法についてなど。

立ち塞がる敵性情報<sup>エネミー</sup>も、試練と呼ぶには程遠い。

これは謂わば入門部分<sup>チュートリアル</sup>か。あくまでこの先の戦いを理解させるためのもの。

当然といえば当然の措置だろう。

この戦いがムーンセル<sup>トライアル</sup>にとっての観測対象<sup>トライアル</sup>だというのなら、条件は五分でなければならぬ。

これはその均一化。知る者と知らぬ者、それらを統合する作業に過ぎない。

ゆえに、この物足りなさも仕方ないといえは仕方ない。

異界を進み、程なく俺は最終地点<sup>ゴール</sup>と思しき場所へと辿り着く。

空気が重い。そう感じさせる荘厳さ。そこは御霊の眠る霊柩を思わせる。

——死者の眠る場所とは、言い得て妙である。

静謐さだけではない。周囲を見渡せば、無数に転がる死体の群れ。

確信する。やはりここが終着点。闘争に挑むための、最後の関門に他ならないと。

死体の横、共に転がっていた人形ドールの1体が起き上がる。

武器を構え、こちらに戦意を向けるのは明らかかな敵のそれだ。

これが試練。同格の相手との対戦。俺は了承し、後ろに控えた己の人形ドールに指示を出す。

——刹那、背後より振り下ろされた刃を、軍刀を抜き放ち受け止めていた。

俺を襲った凶刃の正体。

それは他でもない、俺の剣であり、盾であったはずの人形ドールだった。

意思なき人形の突然の叛意。その事態に混乱する暇もなく、前の人形ドールも刃を振るってきた。

槍のように突き出された人形の刃。

鼻先に迫るそれを、軍刀を持たぬ拳にて叩き弾く。

寸前で攻撃を逸らされた人形。間近にいるその腹に蹴りを打ち込んだ。

飛ばされる前の人形。蹴りの反動を利用して身体を移動し、刃を交える後ろの人形を受け流す。

2体の人形ドールを視界に入れ、俺は改めて事態を考える。

武器だと言われた存在の突然の反逆。これこそが試練の内容なのか。

否、だ。公平を期する試験にしては、これはあまりに悪意が過ぎる。正常の試験ではない。意図的な罠だ。何者かが不正を行い、悪意を持って殺しに掛かっている。

考察に費やせた時間はそこまで。

構えた2体が襲ってくる。こちらを挟むようにした動きは多人数戦の教本通り。

同時にそれは隙のない、理に適った動きということの意味していた。

軍刀を構え、まず向かうのは俺が先まで従えていた人形<sup>ドール</sup>。斬り結んだその動きは、明らかに人の性能を凌駕している。選択する手段もその状況下で適切なもの。意思なき人形の行動に乱れはなく、故に崩れない。

——だが、それでも俺は、この人形<sup>ドール</sup>を脅威とは思わなかった。

2手の斬り結びの後、突き出されてくる敵の刃に、対応する。

選択した術式<sup>コード</sup>は戟法<sup>アタック</sup>の”剛”。己の肉体に強化を施す。

突き出された刃に対応し、繰り出す軍刀の一閃。その瞬間、俺は自らの剣の威力を10倍にまで引き上げた。

理に従う意思なき人形への対処とは、これだ。

機械を相手にはお決まりの手段だろう。つまり、敵の脅威予測を遥かに凌駕した攻撃をすればいい。

先を取った刃を超越して、軍刀の一閃が人形<sup>ドール</sup>を両断する。

残心し、即座に向き直った背後。2体目<sup>ドール</sup>の人形はすでに間近にまで迫っている。

軍刀を戻すのは一手遅い。外套を翻して、振り下ろされた刃を絡め取った。

無論、それだけでいつまでも抑えてはいられない。人形も絡めた外套ごと斬り裂こうと力を増してくる。

瞬間、2発の弾丸が、人形の両脚の間接を穿っていた。

「俺の戦力分析の余地が少なかったのが仇だったな」

必要だったのは一瞬の静止。

創形<sup>クリエイト</sup>し、”射”で放った弾丸の2発が、人形の脚を潰す。

動きを封じられた人形<sup>ドール</sup>に、もはや脅威はない。

それでも意思なき人形は痛みも知らずに反撃するが、それだけだ。

容易くそれを避け、構え直した軍刀で人形の首を斬り飛ばした。

両断された人形<sup>ドール</sup>と、首を無くした人形<sup>ドール</sup>が崩れ落ちる。

目下の敵はひとまず潰した。それを確認し、とりあえず一息を入れる。

異常に気付いたのは、まさにその瞬間だった。

地に転がる無数の脱落者<sup>したい</sup>。



彼等の横に転がっていた人形<sup>ドール</sup>。それが一斉に起動する。その数は10を超える。それらの刃が全て、こちらへと向けられた。

「……そういうことか」

勝利を手にし、気が弛緩した瞬間を狙い定めた増援。

一対多の戦闘において、一度に全てを出しても意味は薄い。1人に掛かれる数など知れている。

より効率を求めるなら、逐次投入だ。相手の戦力分析を兼ねて、その意気までも消耗させる。

効率的であり、冷酷な戦術判断。肉体だけでなく精神も追い詰める、徹底した漆黒の意志。

このやり方、気配には覚えがある。

手口の性質、そこに香った匂いともいうもの。

幾度この命を狙われたことか。

西欧財閥の暗部。ハーウェイに反逆する不穏分子を抹殺する私設部隊。

その隊長格たる、あの”男”。ハーウェイの一族に連なる血筋でありながら、影に徹する暗殺者。

この聖杯戦争に参加しているとすれば、あの”男”以外にはあり得まい。

「ユリウス・ベルキスク・ハーウェイ。ハーウェイの黒蠍か」

ムーンセルの眼すら欺いた、ここまで大規模な不正アクセス。

如何なる手段を用いたかは知らん。だがまともなものではないだろう。

そう何度も出来ることではあるまい。ならばこの罠は、はつきりと俺を狙い定めたもの。

奴の殺意が伝わってくる。この場で確実に、奴は俺を仕留める心算だ。

「……ハハ」

なるほど、これは窮地だ。

状況は多勢に無勢。敵の性能は人間を超えている。

聖杯戦争における矛と盾。話に聞くところの英霊サーヴァント、これはその素体ともいえるものだろう。

先の奇襲はもはや通じまい。戦力分析は更新され、今後もより手強くなつていく。

俺には未だ英霊サーヴァントの存在はなく、不正が正される様子もない。案内役の声も今は答えない。

考えるほどに周到な罠だ。見逃す余地など欠片さえ許していない。俺はいま間違いない、絶体絶命の危機に陥っていた。

「アハハハハハハハハ!!!」

だというのに我が意志は、荒れ狂う炎の如く猛っている。

この身体の震えはなんだ？ 恐怖か？

いいや、否だ。これは武者震い。試練を前に熱く燃える魂の躍動である。

ああ、そうだ。そうだと。そうでなくてはいけない。

己の祈りを、渴望する悲願を懸けた戦い。容易いはずがない。容易いもので良いはずがない。

力の限りを振り絞り、暗殺、謀略の手段さえも駆使し尽くして、我々は天の頂きを目指す。そこに妥協はあり得ない。

激突する意志と意志、その果てに錬磨され、到達した意志にこそ素晴らしい輝きが宿ると信じているのだ。

「さあ、来るがいい。これしきの窮地で俺が減ぶと思うなら、そんな情性は叩き斬ってやらねばなるまい」

そう、この程度ではまだまだ不足。

群がるのは意思なき人形。こんな相手どもでは俺の魂は震えない。こんなものが窮地だと？ これしきの劣勢など試練にも成りはない。

俺が向かうべき闘争の場はこの先に。ならばこんな所で足踏みなどしていられるものか。

軍刀を振るう。人形ドールの刃が迫る。

周囲に群がる英霊の素体ども。だが所詮は魂の吹き込まれない木偶に過ぎん。

俺は倒れん。これは確信だ。この程度の輩にくれてやる命はない。進むべき未来は見えているのだ。敗北の結末など断じて容認しないし見えてもいない。

身体に力が漲る。振るう刃は尚速く、受ける力は尚強く。猛る意志のままに、俺は戦いに専心していく。

”そなた、随分と愉快そうじゃのう”

その最中、声が聞こえた。

先の案内役の声ではない。女の声だ。

”懐かしき鉄火の匂いに引かれ、こちらから出向いてみれば、なんぞ愉快に舞う者がおるわ”

”答えよ。そなた、なにをそれほどに愉しんでおる?”

いまだ戦闘は継続している。

一手の油断が死に繋がる。そんな紙一重の攻防の最中。

声の主はそのことに頓着していないらしい。

死線を踏破し続ける俺に対して、単純な好奇心で問いかけてくる。

死んだなら所詮それまで。好奇と共にそんな無情さが伝わってきた。

”生来の戦好きか？ 血沸き肉踊る修羅場で悦に浸るか？ それ

がそなたの源泉か?”

こちらの都合などお構いなしの、尊大な声。

どこまでも不遜。死闘の最中であろうが容赦なく、その価値を見極める眼光。

死地の試練こそ価値を知るのに最適と言わんばかりに、苛烈ながらも公正に満ちた王意。

——そこに俺は、理屈もないまま惹かれていた。

「違うな。俺は戦いが好きなわけではない」

ゆえに俺も答えよう。

死地にある己の現状にも構わずに、意識は声の方へと。

「手にすべき目的のため、乗り越えねばならん試練がある。

それに屈さず立ち向かう心、その信念、勇氣、覚悟」

「人の価値とはそこにある。試練に挑むその過程を経て、人は新たな強さを得る。放つ光は一際強く、錬磨された意志はより先へと。

それこそが人の歩み。歴史に刻みつけてきた進歩の姿。その輝きこそ何よりも愛している」

「この試練の果て、我が魂が錬磨されるならば喜んで挑もう。それが人の在るべき姿だと信じてるのだから」

円形の空間を囲むステンドグラス。

その内の一つ、俺が向いた正面に位置するその先、声の主へと堂々と宣してみせた。

”ならばそなた、望みを申せ。言うところの試練の先、万能とやらに至って何を為すつもりか?”

光の幕を間に挟み、声が俺に問うてくる。

この月に上った理由は、万能の釜に託すべき祈りは何かと。

迷いはない。何一つ臆することなく我が祈りのカタチを宣言した。

「俺はこの世界に問い掛けたい。停滞し、安寧のままに腐れ落ちようとする人々に対して」

「おまえたちは誇れるのか、歴史を築いてきた先人たちに、未来を託すべき子孫たちに。」

今の世界は素晴らしい、希望に満ちていると、胸を張って言えるのかと」

「袋小路に陥った世界。進歩を放棄し緩やかな惰眠の如き幸福に包まれて、人間はここまでで満足だと——否アツ!!!」

そんな結論は許さない。断固として拒否する。

それが人々の総意だというなら、そんなものはクソくらえだ。

腑抜けきり、木偶になった人類。ならば俺が、彼等の目を覚まさせるまで。

「だから俺は、この世界に試練を課したいッ！ 抗うことを忘れた人々に、今一度の機会を与えよう。」

眠った勇氣を取り戻すため、相応しい舞台を築くのだ。災厄、難敵、立ち塞がる壁、それを世界に現出させる」

「輝く者が光を取り戻し、天上にも届く意志で以て築かれる新たな世界。俺の求める楽園ぼらいぞである！」

我が胸にある真実の悲願、偽りなき思いをここに示す。  
たとえ狂気と呼ばれようと、俺はこの祈りを譲る気はない。

この意志さえ上回る輝きでない限り、断じて退かぬと豪語しよう。

”——ク”

”クハハハハハハハハハハ”

大笑。

心底から可笑しいと、何も繕うことのない笑い。

声は、先ほどよりも近づいている。

”世のため人のためと義心を持ち、乱世を鎮めんとする輩”

”己が成り上がる欲を秘めて、乱世を求めんとする業突ども”

”どれも吐いて捨てるほどに見飽きた奴輩じゃ。だが世と人のために乱世を起こさんとする大義など、わしにもてんで覚えがないわ!”

声音だけで伝わる、人を超越した強大なる我意。

これほどの自尊を以て君臨できる者ならば、それは”英雄”と呼ぶ以外にないだろう。

この声の主こそ、サーヴァント英霊。マスター魔術師の剣となり盾となりて運命を共にする、人類史にその存在を刻んだ英傑たちに相違ない。

”大層なうつけものよ。まともではない。これほどの気狂いは戦国の世にもおらんんだわ”

”——が、故にこそ、面白き哉”

彼女こそが、俺の祈りに応えて降り立ったサーヴァント英霊であるならば。

俺もまた問わねばならないだろう。その真偽のほどを、俺自身の声で。

「俺の名は甘粕正彦。我が祈りは語った通り、悲願を抱いて聖杯へと至るべく推参した」

「問おう。おまえこそ、我が祈りを汲み取った英霊、聖杯により選定された同胞であるか否か?」

光の先に、問いかける。

この問いこそ重要だ。契約はここに成される。

欲するのは形式の関係ではない。俺の願いを知って尚、手を携えられる戦友であるのだから。

「——是非に及ばず」

刹那、空間に鳴り響く無数の銃声。

絶え間ない轟音に晒されて、下される洗礼は銃弾の雨。

ステンドグラスを粉碎し、空間を圧殺する銃撃は存在した総ての人形<sup>ドール</sup>を悉く打ち砕いた。

周りを人形<sup>ドール</sup>の残骸に囲まれて、俺はその姿を目の当たりとする。

連想されたのは大火。古く腐りきったものを灰燼に帰する火炎が如き在り方。

焼き尽くしたその上に新しき価値を築いた革新者。その有り様が形を成した”少女”の姿。

「弓兵<sup>アーチャー</sup>のサーヴァント、織田信長。召喚の依りべより、推参した。

盟約をここに交わす。大うつけもの、乱世を望むそなたの覇業、この”革新の王”が付きおうてやる」

手に生じる熱さ。

刻まれる聖痕。英霊との契約の証。

3画のみの奇跡にして参加証。『令呪』を得て、目の前の契約者へと向き直る。

小柄な体躯。艶やかな黒の長髪を流す、少女の姿。

だがそのような容姿でも、内より溢れる絶大なる覇気は隠しきれない。

身に纏う漆黒の鎧、靡かせる血のように赤い外套、腰に刀を差した姿は紛れもない戦装束。

俺はその真名<sup>まな</sup>を知っている。乱世を駆け抜けた霸王の名、我が祖国に並び無き大英雄。

……ああ、まるで時間が止まったようだ。

言葉が出ない。

何を言っても陳腐に思える。

伝え聞く過去の偉業も、どうでもいい。

目の前に、居るのだ。その意志で以て大業を成した英雄が。

もはや語るまでもない。目にして分かる覇気の質量、矮小な身に満ち溢れる王の大器。

その声が、立ち振る舞いが、総てを物語っている。これぞ英雄、真なる人の価値の具現であると。

——その輝きの美しさに、俺は心底から見惚れていたのだ。

泥濘ぬかるみの日常は燃え尽きた。

魔術師による生存競争。運命の車輪は回り始める。

目的を持った旅路。不断の意志にその航路は紡がれる

生存の為の搾取。繁栄の為の決断。隣人、肉親でさえ、競い合う相手である。

それが本質だと認めよう。その上で尚、人には価値があるのだと断言できる。

君に贈るべき言葉はない。

君はすでに、総ての解答を獲得している。

であれば、祝辞を。在るべき世界の縮図である闘争、その光が虚ろうことのないように。

——”光あれ”、と。

# 1 回戦：考察主観 『遠坂凜』

—— 聖杯戦争 経過記録 1 日目

私がこのレポートを記そうと思ったきっかけは、そう大したものじゃない。

誰かに向けて書いているわけでもなし、必要かと問えば全くの不必要。

このレポートが他人の目に触れる機会があるのかさえ、今の私には分からない。

この聖杯戦争は、片道切符だ。

一度参戦したら戻る道は無し。勝利以外の帰還方法はゼロ。

私も一応試してみたけど、星の誕生からずっと私たちを観察を続けてきたお月様は、やっぱり人間の力でどうにかなるものじゃなかったみたい。

予選を越えた参加者は128名。その内、1名の勝者以外は死ぬ事になる。

1 回戦を終えた頃には誰もが悟るでしょう。これは手の込んだゲームなんかじゃない、この戦争は本物の”生存競争”なんだって事を。

もちろん私は死ぬつもりなんてない。

やるからには勝つつもりよ。戦うってそういう事でしょう。

でも、勝算が薄いのは認めなくちゃならない事実。自分が優勝候補の一角だって自覚はあるけど、それで安心できるほど能天気な性格はしていない。

ここには私以上の怪物だって幾らでもいる。その中で私が勝ち抜く公算は、はっきり言ってそう高くはないでしょう。

だから私、遠坂凜はこのレポートを残しておく事にする。

たとえ役に立たなくても、この戦いが確かにあつた事を証明するものとして。



無限に広がる電子の海で、いずれ誰かがこの記録データを拾い上げる事を祈っているわ。

さて、何から記しましょうか。

主題のムーンスセルの事はひとまず置いて、まずは私たち解放戦線レジスタンスについて説明したい。

何よりその立ち位置こそが、私という個人にこの戦いを決意させた理由であるのだから。

私たち、という表現を使っただけで、遠坂凜は決して解放戦線レジスタンスではない。

他所からの評判は英雄だとか象徴だとか、西欧財閥からは一緒くたにされて指名手配されてる事は知ってるけれど。

私はあくまでフリーランス。彼等の目的・思想とは必ずしも一致していない。それだけは予め言っておく。

そもそも厳密に言えば、解放戦線レジスタンスなどという組織は存在しない。

西欧財閥に敵対する勢力が、その利害関係で結びついただけでしかない。

指揮系統は各々で、その思想や最終目的まで見事にバラバラ。

私も彼等には協力しているけど、私のポリシーに合わない所とは決して手を結ばない。

大規模テロやBC兵器、民間人を無視した破壊活動。あるいはもつと単純に、暴力・略奪などの犯罪行為に走る人たち。

世間一般でのテロリストという評価はあながち否定できない。それを今さら言い訳をするつもりは無いけど、遠坂凜という個人が持つ矜持として、私の眼が届く範囲でそんな真似は絶対に許さないと断言しておく。

私が個人活動フリーランスに拘わるのも、その辺りの理由が大きい。

正直に言ってしまうと、解放戦線レジスタンスは勝つべきではないと思う。

仮に何かの奇跡が起きたとして、西欧財閥の打倒を成し遂げたとしても。

解放戦線レジスタンスではきつとその後が続かない。代わって世界を統治する事は不可能だろう。

魔術師、という存在を知っているだろうか。

私たち霊子ハッカーの事を指す魔術師ではない。

かつて世界に存在した『mana』と呼ばれる自然や空間、または生命に宿った魔力を操り、様々な奇跡を行使してきた人たち。

それは決して神話や御伽噺の中の住人だけじゃない。ほんの一世紀前には、彼等はこの世界の暗部に君臨していた。

魔術師という単語が霊子ハッカーに使われるのは偶然じゃない。魔術師が魔術師であるための特性こそ、私たちが霊子ハッカーたる由縁なのだ。

——魔術回路。魔術師たちは例外なく、体内にこの回路を持っている。

この回路の有無が、一般のハッカーと霊子ハッカーの優位性の違い。魂自体をプログラムにして脳空間にダイブできるのも、魔術回路があるからこそだ。

言わば魔術師とは、方向性が一新された魔術師の最先端ということ。出来る事が奇跡かハッキングかの違いというだけだ。

最も、当の魔術師たちにとって、この結論は到底受け入れられないものらしい。

彼等の歴史は古い。その目的は金銭や名誉といった俗なものとは全く異なるそうさ。

真理の追究、根源の到達。そうした神秘学上でのアプローチこそ魔術の実践理由で、彼等にとつての命題そのもの。

そのため、何代にも渡つて子孫へと秘奥を継承し、一族単位で命題の達成を求めた者たちこそ、魔術師と呼ばれた人々だった。

かくいう私の遠坂家も、そんな魔術師の一族であつたらしい。私自身の才能も、その血統の系譜が与えてくれた贈り物というわけ。

私に魔術師の血統をくれた祖父さん。遠坂の御家自体はどうに没落してるけど、この繋がり私は悪いものだとは思っていない。

祖母より言伝に聞いたその人に、私は幼心に尊敬を覚えていて、そんな人から受け継いだ血の価値は誇るべきものだと思えたから。

ただし、それはあくまで私個人の話し。魔術師の栄華はとつくに過去のものだ。

1970年に発生した大崩壊<sup>ポールシフト</sup>。全世界からの魔力の枯渇が、決定的な破滅。

英国の裏側に存在していた魔術協会も、危険思想を持つ集団として西欧財閥により解体。

遙かな神代から続いた魔術師の歴史は、ここに終焉を迎えたのだ。それでも、たとえ魔術師<sup>メイガス</sup>が減びても、かつて魔術師<sup>メイガス</sup>だった者は存在している。

解放戦線<sup>レジスタンス</sup>で中核の1つを担っているのは、そんな魔術協会の残党たち。

彼等は自分たちの再興を目指して、西欧財閥の支配に抵抗している。

はつきり言えば、当初の私は、彼等にいい感情を持っていなかった。いつまでも過去の栄光に囚われてばかりの、見苦しい人たち。

そういう人種を私は好かない。だって生きる事は前を向くって事でしょう。

未来じゃなくて過去に価値を置くなんて、生命として間違ってる。無益としか思えない。

有り体に言えば軽蔑してたし、理解なんて無理。当時の感想としてはそんなところだった。

けれど、実際に彼等を目の当たりにした今では、少し意見が異なる。魔術師<sup>メイガス</sup>にとって、魔道とは目的であると同時に呪いなのだ。

それこそ彼等はどんな手段を使っても、それを追い求める。痛みを耐えて人生を犠牲にして、時には子孫に蠱毒のような真似まで強いて。

総ては真理への到達という宿願のために。決してそこには届かないと理解しながら、彼等は諦める事なく次代へと秘奥を伝え続ける。その在り方は強さではなく、狂気だ。

代々に渡って彼等は魔道の薰陶と共に、その狂気までも継承する。費やしてきた時間が、流してきた血が、彼等に諦める事を許さない。

やってきた事が無駄ではなかったと証明するために。その呪いは目指した答えにたどり着くまで解かれる事はない。

それは、あらゆる神秘が駆逐された現在でも同じ。

彼等は諦めない。どんなに無駄だと理解しても、何か方法があるはずだと足掻き続ける。

それが魔術師<sup>メイガス</sup>って生き物だから。自分たちに何が出来て、どんな特性を持っているのかなんて、本筋から外れたどうでもいいものでしかない。

私から彼等に対し、何かを判断することは出来ない。

遠坂凜は魔術師<sup>ウイザード</sup>だ。魔術師<sup>メイガス</sup>の在り方を理解は出来ない。

ただ、その在り方に対して、無駄で無意味で無様だと知りつつも、挑む事を止めない姿に、感じ入った何かがあったのは間違いなく。

彼等の呪いが解ける日は来るのか。それが本当に良いことなのか、私には分からなかった。

話を戻しましょう。この通り、様々な思惑を持った者たちによって構成されるのが解放戦線<sup>レジスタンス</sup>だ。

説明したように、魔術師<sup>メイガス</sup>が望んでいるのは自分たちの再興。その他の勢力にしたって似たり寄ったりだ。

引き継いで世界の統治を実行できる状態じゃない。西欧財閥という共通の敵を失えば内部分裂は明らかだ。勝利の後には血で血を洗うような抗争が待っている。

今の人類にそれだけの余裕はない。世界を解放戦線<sup>レジスタンス</sup>に任せれば、人類はそのまま自滅の道を歩むことになるだろう。

現在の西欧財閥の管理体制は、不当な支配ではなかった。

ハーウェイがここまで勢力を拡大できたのも、彼等の手腕だけの成果じゃない

枯渇した資源。緩やかに衰退を始めた社会。西欧財閥の台頭は、人類が必要に迫られて選んだ支配のカタチでもあるのだ。

そこだけは、認めざるえない事実でしかない。

解放戦線<sup>レジスタンス</sup>の勝利を望まず、ハーウェイの管理思想の価値も認めてる。そんな私が、どうして西欧財閥と敵対してるのかって思うかしら

？

だけどそれこそ単純な理由。私は西欧財閥のやり方が性に合わない。敵対する動機はあくまで個人的な理由に依るものよ。

世界の総意がどうかなんて知った事じゃないわ。だって世界っていうのはつまり、自分を中心とした価値観じゃない。

私の価値観が今の社会を健全なものだと思えないから、私は戦っているの。だから悪いけど、今のままの方が幸せだって意見は取り合うつもりないから。ごめんなさいね。

とはいっても、西欧財閥の勢力は磐石そのもの。

地上でどう足掻いてみせたって、限界は目に見えている。

こればかりは個人の力がどうこうで何とかなるものじゃない。それくらい今の世界はハーウェイの色に塗り固められている。

だからこそ、私は”聖杯”の存在に賭けた。

聖杯。古くに神様の奇跡だとか万能の杯とかに付けられた名前。

その正体は月の内部に存在する巨大なフォトニック結晶体。規模を考えるなら『月の中に聖杯が』というより『聖杯こそ月そのもの』と表現した方が正しいだろう。

この存在は私たちの概念で量子コンピュータに近い。その処理能力は規格外で、既存のコンピュータなんてそれに比べれば石ころではない。

事象の書き換えだって可能な神様の自動書記キャンパス。どんな願いも叶えられる本物の願望器。聖杯という呼称はこれ以上なく適切だった。

そんな聖杯が、自身の使用权を報酬にして行うのが”聖杯戦争”。

観測対象の1つとしての生存競争トライアル。私たち参加者マスタに与えられるのは、英霊サイヴァント。

ムーンセルは公平だ。西欧財閥も、解放戦線レジスタンスも区別なく、あらゆる人間に奇跡へと至る機会を与えてくれる。

誰もが本気で聖杯を求めている。

西欧財閥は、生還の見込みのないこの戦いに、自分たちの”王”を参戦させた。

現代に残った唯一の魔術師メイガス、アトラス院。他にも力ある魔術師ウィザードの姿

は多数見て取れた。

そして”あの人”も。人間の戦いはもう地球上を離れて、このムーンスセルに移行している。

私は戦う。この抑圧された世界から抜け出すために。

このレポートを開いているあなた。飼いやられる事を善しとしている今の世界に、少しでも疑問を持つてくれたなら、どうかその意味を考えてほしい。

私の書き記す戦いの軌跡が、そのための切っ掛けになれば幸いよ。

宛てがわれたマイルームで、私は意識を覚醒させた。

体感時間にして3時間ほど。休ませていた意識を速やかに適切な活動域へと移行させる。

自己解析スキヤン、バイタルチェック——正常。霊子体に異常はない。

抵抗活動なんてやっている、眠っている時間が一番安心できない。最大効率で休息が取れるように心掛けている。

その点、電脳体は便利だ。元々が低血圧の身としては、慣れ親しんだこの作業も結構な重労働だから。

ここは『S.E. R.A. P.H.』。ムーンスセル内部に築かれた霊子虚構空間。

仮想現実の世界では肉体的な制約はほとんどない。やろうと思えば休息なしで通す事も出来る。

けれど、意識だつて覚醒状態で活動し続けければ、消耗するし効率も

落ちてくる。

定期的な休眠は必須事項。戦う前に自分の性能を落とすなんて、間抜けにもほどがある。

「ランサー」

思考をクリアにして、私は自分に与えられた”兵器”の名を呼んだ。

実体化して現れる、青い革鎧姿の偉丈夫。

現代では見る機会のない古代の戦装束を纏う彼こそ、この戦争におけるパートナー。

——サーヴァント。

ムーンセルが観測した、歴史の中の偉人・英雄。

記録された彼等のデータを元に再現された存在が、彼等の正体。

その構造規模は桁違い。少なくとも人間じゃあ逆立ちしたって敵わない。

私たち聖杯戦争の参加者<sup>マスター</sup>は、彼等を活用して勝ち抜いていく事になる。

自分の持ち駒は、言うまでもなくとっても重要。

このサーヴァントの能力如何によって、取るべき戦術もがらりと変わる。

配られたカードはアタリかハズレか、それこそが勝敗を分けると言っても過言じゃない。

「よう、起きたか嬢ちゃん。今が朝かは知らんが、今日もいい面構えしてるぜ。」

ああいいね、戦士の面だ。加えて美人とくれば、俺も俄然やる気になるってもんだ」

……なんだけど、このサーヴァントを手放しにアタリと喜ぶには、少々抵抗がある。

戦力面での不安はない。

パラメーターは高水準。武装も対人仕様と、1対1の決闘方式ではとても優秀。

アタリかハズレかで言うなら間違いなく大アタリ。そこに不満が

あるわけじゃない。

サーヴァントには固有の人格がある。

性質としては使い魔に近いが、ただ命令に絶対服従する人形ではないのだ。

サーヴァントの方にも戦うに足る目的がある。私たちに力を貸してくれるのも、つまりは利害の一致というわけ。

それならそれで構わない。こちらも運用の仕方を変えるだけで、ビジネスライクな関係なら望むところだ。

「だが見てくれは問題ねえが、笑うことが少ないのはいただけねえな。アンタみたいなのは笑ってこそ女が引き立つってもんだ。わざわざ美点を潰していくなんざもつたいねえ」

「あなたね、私たちがこれからするのは殺し合いよ。そんなこと何の関係もないでしょう」

「そうか？ 殺し合いだろうが何だろうが、やるからには楽しんだ方が得だと俺は思うがね。

嬢ちゃんも戦場は知ってたんだろ。俺の頃からは随分と様変わりしたらしいが、根っこの部分は何の変わりもありやしねえ。

念願だった戦争に臨んでる嬢ちゃんも気持ちも分かるが、最初から気を張り詰めたってつまらんだだけだぜ。

自然体でいいのさ、こういうのは。てめえで望んだことなら、尚更笑い飛ばしてやるくらいでなけりやあな」

ああ言えばこう返してくる、この感じ。

飄々とマイペースなこの英雄が、私はちよつと苦手だ。

目的も、戦えればそれでいいという変わり種。まあ悪く言えば戦闘狂って事なただけだ。

乱暴な風でもなし。こちらを見下す事もなく、茶目つ気のある態度で接してくる。

なんというか、調子を崩される。自分のペースで引つ張っていくのは慣れてるけど、誰かに引つ張られるのは慣れてないみたい、私って。

……まあ、悪い人じゃないのは確かかなでしょうけど。

「それより聖杯戦争の話よ。いよいよ本戦が始まるわ。



決戦は七日後。それまでの準備期間でもやれる事は幾らだつてある。

このSE・RA・PHの事もそう。まだ把握していない部分も多い。遊んでる暇なんてないわよ」

「あいよ、マスター。短いと分かった付き合いだが、せいぜい上手くやっつていこうや」

聖杯戦争の舞台になる月海原学園。

予選と同じ環境で、私たちマスターは来たる戦いの刻に備えた準備を行う。

対策完備のマイルーム。アイテムや礼装を支給する購買部と、支援も実に行き届いてる。

そしてもちろん、それらの施設は全参加者に開放されてる。どんな立場の人間も、強い弱いレベル差にも関わらず、誰もが平等にサポートを受ける権利が保証されている。

やっぱりムーンセル、観測の神様は機械的に公平だ。

いいわ、望むところよ。それでこそ月で戦う意味がある。

地上でのハンデも、ここなら不利にならない。勝機は幾らでもあるわ。

「参加者全員が1つの校舎に集められてるわけじゃないのね。条件が対等なら、ここにいない参加者も別の月海原学園に集められてるってことかしら」

聖杯戦争の本戦に参加できるマスターは128名。

観察してみたけど、この校舎で見かけた数は明らかに足りていなかった。

あまり一ヶ所に集めすぎても制御が難しいと判断したのか。最後の一人を決める以上、いずれひとつに集められるんでしょうけど。

少し考えてみれば分かる。1回戦を終えれば、参加者の数は64人まで目減りすることになる。

次は32人、その次は16人と、校舎を分散する意味はどんどん薄くなるのだ。

生き残った勝者はいずれ対面する事になる。それは決して遠い先の事じゃない。

「学生の大半はNPCか。彼らが聖杯戦争の運営組つてわけね」

偽りの学生生活から解かれたマスターに代わって、学校の風景を彩っているのはNPCたちだ。

一見すればマスターたちのアバターとも変わらない。流石ムーンスルといったところだけど、よく観察してみれば見分けは簡単についてた。

生気が薄い。感情がない。心を持った人間として、あるべき揺らぎが彼らにはない。

舞台装置であるNPCに、人間らしい役割ロールは必要ない。それがムーンスルの判断という事だろう。

さて、ムーンスルの判断といえば、学校ここの機能もなかなか作為的だ。生徒が1日の大半を授業で過ごす教室が、マイルーム。様々な本を参照するための図書室では、閲覧可能な情報すべてが資料になっている。

つまりは元々あった役割の延長だ。これを機械的と見るか、変な拘りだと受けとるかは、人それぞれでしょうけど。

ともあれ、これからここで戦っていく以上、機能はきちんと把握しておかなくちゃならない。

せっかくの支援なら最大限活用していかないとね。でないとなんか無いいじゃない。

「……保健室、か」

そして勿論、治療方面の支援は何よりも重要だ。

校舎1階に配置された保健室。その用途が何であるかは考えるまでもない。

戸を開き、中へ入る。

部屋の様式は、イメージしていたものと大差ない。

予選ではお世話にならなかったその場所は、一般的な学校の保健室そのものだ。

「——何か御用で？」

部屋は無人じゃなかった。白衣を纏ったNPCが、視線の先に立っている。

流れる銀色の髪、金色の瞳が特徴的な、端的に言って綺麗な少女。彼女もNPCだろう。感情の見えない眼差しは、まるで人形のような印象を受ける。

同性の私から見ても、その美貌は確かなもの。

そんな顔を見ていたら、ふと思いついた事があった。

「そうね。これとって用事はなかったけど……ちよつとそこ動かないでね？」

校舎の構造は大体把握したけど、キャラのチェックはまだ不十分だった。

観察での印象だけでなく、やはり直に触れて調べておくのも大事だろう。

ここは密室で彼女は1人。状況的にもちようどいい。

「へえ、結構冷たいのね。でも体温がないわけじゃない。低温なのは個性ってこと？」

やっぱり見かけだけじゃなく感触もリアルそのものね。ムーンセルの再現に不備はない、か。

NPCまでこんなに作り込むなんて、流石と褒めるべきなのかしらね」

ペタペタ、と。

柔らかな顔に、肉付きのある身体に、さらさらとした髪に触れる。

本当に触感人間そのもの。女としてちよつと妬けた部分もあったのは内緒だ。

と、しばらく夢中になって調べていると、違和感に気付いた。

人形じみて無表情だった顔が、少し変化して見える。元々が無表情のせい、些細で分かりづらいけど、これは——

「ん？ おかしいわね。なんだか顔色が冷たいというか、冷淡な――」  
「ポルカミゼーリア。はしたない雌豚ね」

唐突に、人形と思われたその口から、特級の猛毒が吐き出された。  
「無遠慮に淑女の身体をまさぐるなんて、どんな育ちをしているのかしら？」

発情した猫か何か？ おまけに同性愛者なんて、不生産かつ不道徳極まるわね。

こんな人が優勝候補なんて世も末だわ。儂んで自害でもした方が、人類の品性のためではなくて？」

「どんだけ口が悪いの!?! あなたNPCでしょ。なんだってそんな機能まで実装してるのよ!?!」

「声を張り上げて、はしたないこと。騾のなっていない野生系はこれだから。」

何を勘違いしていたかは知りませんが、私は保健室一式の機能を任された上級AI。他のNPCと違い、感情ルーチンまでも人間のそれと遜色なく備えています。

パーソナルネームはカレン。以後お見知りおきを、遠坂凜」

実に慇懃無礼な一礼をかまして、AIはカレンと名乗った。

うわー、恥ずかしい。

人のかたちをした相手を触るとか、絵面的にどうなんだと思ったから、2人きりの状況を選んだわけで。

感情まで備えているなら、サーヴァントと同じく人間と大差ない。そんな相手にベタベタとあんな真似して、まるで私が痴女みたいじゃない。

「し、仕方ないでしょ！ AIの上位互換があるなんて、予選の段階じゃあ知らされてなかったし。これだけキャラの精密な仮想現実を見せられて、食指が動かないなんてハッカー失格じゃない。」

大体、そっちも紛らわしいんじゃないの。NPCと違って感情があるってんなら、それらしい顔のひとつでもしてみなさいよ」

「予選では学校生活としての役割がありましたから。聖杯戦争を円滑に、かつ秩序を維持して進めるため、校内の施設の管理には私たちが上

級A Iが配置されています。

人権・人格・魂と、私たちの権利はムーンセルより保障されています。NPCだと思って迂闊な真似をすれば、ペナルテイ罰則を受ける事になるのでご留意を。

無表情なのは、再現された元の人物がこうでしたので、如何ともし難く。ですがどうしても言うなら、笑顔のひとつでもお見せしましょう」

そう言つて、犬か何かを見下すような嘲笑を見せやがったぞ、この女。

「考えを改めるわ。アンタみたいなのを医療担当にするなんて、ムーンセルもバグってるんじゃないの?」

「まあ、元々私は健康管理A Iではないのですが。本来は処罰担当でして」

「適任じゃないの。なんで変わったのよ」

「担当の上級A Iが機能不全を起こしていました。急遽、私が後任を。ですが機能に問題はありません。この役割を十全に務められるだけの能力は備わっています。マスターたちのケアは私にお任せを」

単なる代任ではなく、その役割を必ず果たすという意味を示して。

カレンというA Iは、今度こそ本物の聖女のような笑顔を見せた。

「内蔵が飛び出てるくらいの重傷を負った、半死半生の重病人。

数多の病魔に全身を蝕まれた、危篤状態の重病人。

生活不能レベルで心の病を患った、前後不覚の精神障害者。

みんなみんな、この『ほけんしつ聖域』にいらつしやい。心から歓迎してあげましょう」

……もつとも、言ってる事は物騒極まりなかったが。

「そして、遠坂凜。痴女のように調査熱心なあなたのために、こちらから代案があります。

調査サンプルとしてうってつけの人材に、言峰綺礼というド腐れ外道ダニ神父がいます。監督役の上級A Iですが、主に校舎の1階をゴキブリのように徘徊しているわね。

煮るなり焼くなりバラすなり、彼なら好きにしてもらって結構よ。

罰則は見逃してあげるわ」

「それ、アンタが排除したいだけじゃないの。あと痴女って言うな」  
まあ、言ってる事はともかくだ。

確かに上級AIというのはNPCとは違うらしい。彼らは固有の人格を有している。だってホラ、こんなキャラの濃い奴がモブなんてあり得ないでしょ。

ますますもって、この仮想現実が真に迫ってくる。人間まで完璧に再現できるというなら、それはもう新しい世界そのものだ。

分かってはいたけど、ムーンセル。

太陽系に残された超古代の遺物は、私たちの想像を遥かに超越している。

万能の願望器というフレイズも、過大でも何でもない。およそ人間が認識できる事象で、月の聖杯に実現できない事は存在しないだろう。

たった一度の使用権で、世界の総てだってひっくり返せる。

聖杯戦争という苛烈な生存競争も、報酬の途方も無さと比較すれば納得だった。

「さて、遠坂凜。招いた覚えはありませんが、保健室の主として改めて歓待しましょう。

ここでは来訪したマスターに、支給品を恵んで差し上げるのが習わしです。

回復効果もあるお弁当です。どうぞ受け取ってください」

やった！『激辛麻婆豆腐』を手に入れたぞ……って、ふざけんな！

「なによコレ!? 明らかに健康に悪そうな色してるじゃない!」

「あら失礼な。私が絶賛するオススメの品ですのに。」

回復効果も本物ですよ。摂取した者の精神を高揚させて魔力が回復します。

それはもう、火が出るほどの勢いで」

とりあえず、ここに来て分かった事はひとつだけ。

このカレンという女が、碌でもない奴だって事は確実だ。

他人の不幸で飯が美味しいという手合い。きつと元となった人物も、

さぞや根性のひん曲がった奴だったのだろう。

ともかく、あまり関わり合わない方が良さそうだな。

これ以上有益なものもなさそうだし、吐かれる毒のダメージと割が合わない。

さっさと次へ行こう。そう思っただけを返す。

「――遠坂凜。我々ムーンスセルはあなたたちを歓迎します。

その意志の限りに戦い、人間の強さの何たるかを示しなさい。

意思を持たない月に代わって、それがこの闘争の意義なのだから。

健闘を祈ります、月に集ったマスターたちよ。己の祈りを賭して、

存分に殺し合いなさい」

最後に告げてきたのは、そんな言葉。

私はそれに何も答えなくて、保健室を後にした。

「……どうしたのよ、ランサー。さっきから随分大人しいじゃない」

カレンとの会話にも全然口を挟まなかった。

私の知る彼の性分なら、相手が誰でも口数は多いものと思っていたけど。

「あー……嬢ちゃん。あの女には関わらない方がいいぞ」

現れたランサーは、苦虫を噛み潰したような顔をしている。

もしかして、あのカレンの事を知っているのか。

「いや、生前に覚えがあるわけじゃないんだが……こう、悪寒がな。

あの女を見た瞬間、妙に身体がザワめくつつーか、前世からの因縁つつーか。

強さがどうかじゃねえが、とにかくアレには関わらななって警戒心が疼くんだよ」

なんというか、意外。彼にもこういう一面があるなんて。

伝承では恐れ知らずの人なのに。それともやっぱり、女性に嵌められたのは堪えたのかしら。

「とにかくだ。あの女の世話になるような事はなるべく避けとけ。まじろクナ目には合わないぜ」

それには私も同感だ。

遠坂凜にとっても、彼女はあまり得意な部類じゃない。出来る事な

ら一生縁が無ければと思うような手合いである。

それでも、ランサーのこの困った顔を見ていたら、ちよつとくらいなら関わりを持ってもいいかなと思ってしまうのだった。

月見腹学園内の施設の調査も、大体のところ完了した。

先の保健室のような、マスターたちが利用するための各種設備は勿論。

外部との接続に適した視聴覚室や、校舎内での機能を統括する生徒会室など。

各々の性能は大体掴めた。仮にもし何かのトラブルに見舞われても、これらの施設を活用できる自信がある。

分からなかったのは、教会にいたあの姉妹の事か。

彼女たちはムーンセルのAIではないらしい。何でも外から送り込んだ本人の複製人格なんだとか。

そんな真似が出来る時点で只者ではない。彼女たちにも目的はあるそうだが、それは聖杯戦争ではないらしい。

なんにせよ、カレンとは別の意味で関わりたくない人種である。

聖杯戦争とは無関係というのも本当のようだし、藪をつついて蛇を掴まないようにしましょう。

時刻は昼過ぎ。セラフの仮想現実は、日の移り変わりも忠実に再現する。

午後からは迷宮アリーナの探索だ。指定された暗号鍵トリガーという条件も無視できな

くない。これを達成しなければ、戦わずして敗北というムーンセルからの課題。言うまでもなく重要だ。

こんな所で躓くつもりはないけど、侮って掛かって馬鹿をみるなんて、それこそ間抜けでしょ。



だから油断なんてしない。準備は既に万端だ。

階段を降りる。迷宮の入り口は1階だ。真っ直ぐにそこまで向かうとする。

そして1階へと降りた先で、私は「彼」と対面した。

「――凜か」

短く咳かれた声は、それでもこちらの耳にしっかりと届く。

たった一言。ほんの小さな吹きひとつで、私の歩みは止められてしまった。

――甘粕正彦。

理解していた。覚悟していたはずだった。

聖杯戦争に参加するって事はそういうことだって、ちゃんと分かっていたはずだった。

それでも、実感する。地上では同志として、何度も同じ場所で戦い抜いた、彼。

その甘粕が、今は明確な「敵」なのだという事実。それがどれだけの脅威なのか、実際に彼と対峙する事でどうしようもなく感じ取れてしまった。

「やあ。予選以来だな。お互い無事に突破できたようで何よりだ」

そして甘粕の方はといえば、こっちの緊張なんてどこ吹く風だ。

気負ってもいないし、迷ってもいない。甘粕は私を敵だと認識した上で、変わらない態度を貫いている。

「事前準備は順調なようだな。結構なことだ」

「環境の把握と不測の事態の想定。あなたが教えてくれたことでしよう、甘粕」

「ああ、なんの不満もない。教育が行き届いているようで俺も安心しているよ。」

勇氣と蛮勇は似て非なるものだ。その場限りの感情で奮起したとて、大した力になりはしない。

勝利とは、継続させた意志の果てにのみ訪れる。苦難を想定せず備えを怠るなど懦弱に過ぎん。

目的のために十全の努力を重ね、それでも尚届かぬ境地に手を届か

せる一因こそ、勇気だろう」

口にする言葉も相変わらずだ。

甘粕は変わらず、人の可能性を信じてる。停滞した世界を、人間は変わる事ができるんだって。

甘粕の願いは、そんな可能性を促進させるものだ。そこには確かに道理があるし、全てを間違いだと否定する事は誰にもできないだろう。

——でも、それでも、私は……——！

「飽きもせず戯けた事をぬかしおる。確か今の言葉で”浪漫”とでも言うのじゃったか」

それは聞き覚えの無い声だった。

甘粕のすぐ近くから。その響きは少女のもので、けれど余りに不釣り合いな覇気を伴った声。

そして”彼女”は、甘粕の隣に実体化した。

「研鑽には等価の成果を。えてして人はそのように求めたがるが、そうはいかぬが世の常じゃ。

大志を抱き、威勢を誇った傑物も、運気を外せば没するも容易い。万軍を率いた大武将が、千の小将に滅ぼされるように」

「そうだ。だからこそ信念を懸ける意味がある。

可能性とは、閉じるべきものではない。どれだけ道が極小だろうと、踏み出した先に奇跡は必ずや存在する。強者も弱者も、その一点では対等だ。

光があるから人は前に進める。最初から強者の勝利が運命付けられているのなら、弱者の足掻きは全てが無駄だ。揺らぎがあるから変化があり、強者も弱者も等しく運命に誠実であれるだろう。

世界とは、不条理であるからこそ美しいと、俺は思う」

「ハハハッ、おまえにとつては無情も栄華も等しく可能性か。まこと大したうつけ者じゃな、そなたは」

この気迫の濃さは、紛れもなく英霊のもの。

間違いない。彼女が、甘粕が召喚したサーヴァント——！

「人のマスターの前で堂々と姿を見せやがるとは、やってくれるじゃ

ねえか。まさかここでおっ始めるつもりか？」  
相手に触発されて、ランサーも実体を現す。

「サーヴァントは、兵器だ。実体を現すことは、弾丸を込めるのと同じ。」

私たち人間は、次の瞬間には切り捨てられていてもおかしくない。それだけの格差が彼らとの間にはある。

同じサーヴァントであるランサー自身、それをよく分かっている。単に姿を見せただけと、気を緩めていいわけがなかった。

学校内での戦闘はルール違反。発覚すれば強制終了とペナルティを受けるだろう。

そんなリスクを犯してまで、まさか甘粕が不意打ちのような真似はしないと思うが、様々な意味で予想外な事をしてみせるのが彼という男だ。

警戒するに越した事はない。露骨に身構えこそしないが、意識だけは臨戦にもっていく。

「まあそう急ぐこともない、凜」

その矢先、こちらの戦意を制するように、穏やかな口調で甘粕がそう言った。

「聖杯戦争は1対1の決闘方式だ。俺も、おまえも、いま戦うべき相手は別にいる。」

勝ち抜けばいずれ対峙する事になる。焦ることはない。お互いに、まだその時ではないはずだ」

……まあ、その通りではあるんだけど。

分かっているても、素直には受け入れ難い。いちいち気圧されていると感じてしまう。

自分でも反応が過敏だと思う。彼の前に立つてから冷静になりきれていなかった。

「……ふむ、そうだな」

こっちの態度を見て何を感じたのか、特に深刻な風でもなく悩んでみせて。

「いい時間だ。ちょうどいい、一緒に飯でもどうだ？」

なんでもなように、いきなりそんな提案を言ったのけた。

地下1階に配置された学校食堂。

マスターが利用できる施設として、解放された場所のひとつだ。あらゆる事象を観測するムーンセルに、記録していない情報は無い。

それはいかなる分野でも例外なく、料理だって当然のように網羅しているだろう。

食券販売機のメニュー欄だって、ただの形式。再現通りの学校風景を映し出しているに過ぎない。

霊子ハッカーたる魔術師ウィザードならば、干渉する事は容易い。事実上、この場所で頼めない料理はないという事になる。

そういう性質の場所であるから、他のマスターたちの姿も見受けられる。

休憩目的の者、嗜好品として食事を楽しむ者、他のマスターらと談笑している者までいた。

その表情は脳天気そのもので、目の前の相手をいずれ殺すことになると、何も分かっていない。

遊び気分で、この聖杯戦争に参加してしまった人たち。開かれた門戸に制限はなくて、能力さえあればああいう人たちでも入り込めてしまふ。

けれど、そこから引き返す道はない。ムーンセルの敷いたルールは絶対で、帰還の道は1人だけのもの。彼らもすぐにその事を思い知ることになる。

私は違う。戦いへの気概と覚悟がある。

目の前にいるのは蹴落とすべき敵。馴れ合うなんて心の贅肉。

そんな事は彼も理解してるはず。無益どころか重りにしかならな

いと分かつてるはずだ。

それなのに――

「それで、いったい何だってこういう事になってるのよ!？」

この場の状況に、私は堪らずそう言い出していた。

学食の一角に席を囲んだ4人。

私と甘粕のマスター2人。そして互いのサーヴァントも同席している。

各々に注文まで取って、完全に食卓の体裁が出来上がってる。ほんと、なんだこれ。

「ムーンセルの仮想現実で、食事を取る意味合いは薄い。

より効率を高めた消耗の補填手段は無数にあり、能率で考えるならば必要もない。

味を感じて楽しむという嗜好品的な価値しかない。端的に言って無駄だろう」

和食風の定食を前に、甘粕。

「だが心とは、そう単純なものではない。

これほど真に迫った電脳世界。もはや生身とも違わぬこの感覚。

食とは生きる事の基本だ。歪めれば心身にそれと見えずとも負荷を与える。

人であるならば、糧とは食事という行為でこそ取るべきだ」

いや、そういう事じゃなくて。

言ってる事は正論だけど、問題はそこじゃない。

ここまで乗せられた私も私だが、殺し合う敵同士でこの状況は何なのだ。

「おう、なかなか分かつてる奴じゃねえか。美味しい飯に美味しい酒と、やっぱ召喚されたからには楽しめるもんは楽しんどかねえとな」

ランサー、アンタもか。

彼の前には所狭しと置かれた肉料理や酒がどっさり。

そこに遠慮しようなんて気持ちは欠片もない。この古代に生きた英雄は、現代料理の趣向を楽しむ気マンマンである。

というか昼間から、肉だの酒だの頼まないでよ。

「うむ。こうした目新しさに触れる事こそ未来に招来された醍醐味じゃ。

趣向・娯楽の多様化、是非にも及ばず。その方がわしも飽きずに済むというもの」

そして同じく満悦気味なのは、甘粕の方のサーヴァント。

サーヴァント2人は既にこの状況を受け入れてる。動じない辺りは流石時代を生き抜いた英霊といったところか。

ちなみに彼女が頼んだのはフランズ料理<sup>チ</sup>だった。

「なんだよ、面白いことを言うじゃねえか。」

英霊なんて普通、生前の価値観こそ絶対って奴ばかりかと思つてたぜ」

「是非もあるまい。如何な偉業も古きは古き、とうに過ぎ去つたものよ。」

そも娯楽とは、退屈せぬために無為へ興じる事であろう。如何なる趣向も回数を重ねれば飽くものじゃ。ならば常に目新しさへと向けた方が驚嘆も薄れずに済むだろうて。

そういう貴様も、なかなか順応しているように見えるが？」

「俺はどんなもんだろうが楽しんだ方が得だと思つてるだけさ。どうせ俺たちにとつちやあ、なにもかもが道楽みたいなもんなんだからよ」

「享樂の傾奇者か。それもまた是非も無し、か」

状況は意味不明だが、不明なのはそれだけじゃない。

そう、不明というならこのサーヴァントもそうだ。

確かに覇気はある。ランサーを初めとした英雄特有の迫力のようなものは感じてる。

あの甘粕に召喚されたサーヴァントだ。少なくとも並の英霊でないのは間違いない。

ただ、それにしても幼すぎた。

勿論、サーヴァントを外見で判断しちゃいけないのは分かつてる。だがそれを差し引いたとしても、目の前のサーヴァントは子供にしか見えないほど小柄だった。

顔立ちを見るに、多分アジアの日系人。なのに着ているのは、旧ドイツのものだと思われる黒色の軍服だ。流れる黒髪と整った容姿は、まるで日本人形を思わせるのに、身に纏った剣呑さは全くの正反対。だからこそ、というべきなのか。旧日本の軍服を纏ってる甘粕と、彼女の姿は絵になるくらい合っているように見える。どんな性質を持った英霊か、それもまだ分からないけど、彼との相性は悪くなさそうだと印象を受けた。

……いや、実際の所、真名の方には当たりがついてる。

それは言動や気配といった話ではなく、もつと明確な、というか見たまんまなだけだ。

「……私もひとつ訊きたい事があるんだけど」

「ふむ、なんじゃ?」

「その頭にでかでかと載つけたソレは、そういう事だっと思っていいのかしら?」

彼女が頭に被った軍帽。そこに燦然と輝く”木瓜紋”。

彼女の軍服はドイツの意匠だ。当然ながら元のデザインではなく、後からのアレンジになる。

クオーターだけど、私だつて一応日本人だ。あの国で知名度最高の大英雄の名を知らないわけじゃない。

もしも本当に彼女が、”あの英雄”だとするなら。

なんというか、その、ちよつと頭が緩いのではなからうかと。

「うつけ、と見えたか? 頭上にこのような代物を戴くなど」

そんなこちらの印象も意に介さず、当の本人はふてぶてしい態度のまま。

言葉から感じられる冷徹な知性は、彼女が自分の行動を正しいとしている証明だった。

「まあ誤ってはおらぬ。定石に乗つとるなら、こんなものはうつけの所業よな。」

己の真名は塵も漏らさず秘匿し、決戦まで持っていく。戦における情報の重さは語るに及ばぬ。

なるほど、常道じゃ。なにも間違つてはおらんし勝算も上がるじゃ

ろう。だが、ならばその算段とは、果たして決戦の勝敗を決めるほどに重大であるか？」

……そう問われたのなら、そこは流石に否だろう。

よほどの弱点が明らかになる場合を除けば、真名の開示イコール敗北とまでは繋がるまい。

どんな情報でも、それを元に対策を練らなければ意味はない。極端な話をすれば、多少の不利を物ともしない実力差があるなら、真名の秘匿など不要なのだ。

ただ彼女の言っているのは、それとも意味合いが違うように思える。

力の強大が云々ではなく、戦略としての比重はどうだという話だろう。

「未来の果てまで見通した深謀遠慮も、崩れる時にはつまらぬ運の巡りに崩れるもの。」

そんなものよ。算段とはどこまでも算段でしかなく、未来とは見えても尚定まらぬ。拘ろうと拘るまいと、意気ある者にはやがて知れるが真名じゃ。

ならば頓着もすまい。それより生き様を縛られる方こそ疎ましい」「生き様って、つまり意識の問題ってこと？」

「左様。英雄としての険しき人生、戦いの日々の中でその背には固有の信念、戦の真が刻まれる。」

性格だと言えばそうなるが、伝説と称されるまでの一生により定まった性格じゃ。今さらそれを曲げられはせぬ。

己自身の真に従い、在るがままに振舞ってこそ英霊の本懐。それを曲げさせる事こそ最悪の下策なのじゃ」

戦術よりも生き方、それを曲げる事が何より弱さに繋がると彼女は言った。

これには私も同意見。生き方に意味を持たせて信念に変えるのは、強い人間の必須事項。

確かな信念を持たない人間は、何もかもが半端なのだ。やれる事なんてたかが知れてる。



手段を選ばない者こそ強いという意見もあるけど、それだって外道を信条としているだけで、ひとつの信念には変わりない。

サーヴァントは単なる武器じゃない。自分自身の心を持った存在だ。

彼らには彼らの信念が、生き方がある。それは戦術よりも前に、守らなければならない矜持の一線だ。そういうものを大切にするとって考えは私にも分かる。

「詮無き定石に囚われ己の指し筋を狭めるなど好かん。ならばわしは晒してみよう。」

我が輝ける紋所はここにあり。さあ皆の衆、大いに悩み惑い、対策にと奔放せい。

そうしてせいぜい、最善の一手をと決め打っていくがよからうて」その思考はまるで享乐的。とてもまとな考え方とは思えない。

定石無視の奇策。そう言えば聞こえはいいけど、している事が理屈に合わない。わざわざ有利を捨てて、自分から不利になっていつてるようにしか見えなかった。

「さて娘。そなたはこのわしをどう見る？ 頭の浮わついたうつけものと、そのように決め打つか？」

確かにそう思っても無理はないかもしれない。

行動は奇妙だし、容姿も子供のそれ。珍妙な格好といい、相当な変人であるのは間違いない。

言動も意味不明な部分が多く、まともなマスターなら惑わされまいと、無視を決め込んでいたかもしれない。

——でも、もしそれが彼女の狙いなんだとすれば。

「そうね。こうして話してみても、少しだけあなたの事を理解したと思おうわ」

「ほう？」

「放蕩、考えなしに見えても、裏には理屈の通った思惑がある。 思えば私、さつきからペースを乱されてばかりだし。晒してみせてる情報も、本当に重要な部分はきっちり隠してあるしね。」

だってその家紋、あなた自身で付けて見せてるだけで、本当にあな

たのものであって保証はどこにもないじゃない。もしその情報だけで決め打って、ブラフだったりしたら目も当てられないわ。

あなたが嘘をついてるようにも見えないけど、何でも真実の通りに話すほど素直でもないでしょう。そういう奇行で周りを欺くところ、”あの英雄”の伝承にもよくあつたわよね」

これは勘だけど、あの”木瓜紋”はブラフじゃない。彼女と話していてそう感じた。

この子、王様だ。誰かの下で大人しくしてる性質じゃないし、むしろ先導して引っ張っていくタイプ。

全盛期で喚ばれるはずの英霊が、どうして子供の時分で現界したのかは分からないけど、見掛けとは裏腹な覇気や霊格は、大英雄のそれとして相応しかった。

それに、あの甘粕が、ここで当たりを外すというのも考えづらい。身内鼻肩かもしれないけど、それが最大の根拠だった。

「従来のセオリーとは正反対の奇抜な発想。それってつまり概念の革新でしょう。流石、既存概念を破壊して新規の価値観を築いていった”革新の王”ってどこかしら。

肝心の宝具の事とか、打てる手は大して多くはないけど。あなたがどんなタイプの人間なのか、どんなやり方を好んでくるのか、そこは掴めたかしらね」

具体的な能力が見えなくても、その人となりが見えれば対策は考えられる。

どんな武装だって、結局はそれを使うその人次第だ。もし能力に慢心するなら、そこを突けば活路は開ける。

やられたら必ずやり返す。手段が無ければ探して見つける。挫折、諦めなんて似合わない。それが私、遠坂凜の持ち味だ。

「ふははははははははは!! なるほど、この娘がそうか！

確かに面白い。この勇進の気概、天運にも愛されておるじやろうな。

ああ、わしも好みだぞ。やはり人間、命の使い様とはこうあるべきじゃ」

何やら私の態度は、この小さな王様のお気に召したらしい。

ご機嫌そうに、快活に笑ってみせてその姿は、本当の子供みみたいだった。

「ならば優れたそなたには褒美もくれてやろう。答え合わせじゃ。

言うところは正解に近く、決して的外した考えではない。だが1つばかり言えるのは、考えが行き過ぎている部分があるということ。

貴様が言うた放蕩の裏に通った理。晒して見せたこの紋所の意味じゃが、あれはな——」

と、なかなか勿体ぶつた言い方をしてくる。

なので私も、少しは意識して聞き耳を立てていたのだけど。

「——ただの趣味じゃ」

そんな、人を舐めくさつた答えを返してきた。

「うむ。やはり頭頂に我が紋を戴くのは気分がよい。この衣装の〴〵でざいん〴〵も悪くないが、やはりわし自身の趣きも加えねばおう。

わしは生来の傾奇者よ。頭は回るし策謀も駆使するが、そこに凝り固まるのもつまらん。好みは好みとして憚るつもりはない。晒してなお利を取るのがわしじゃ。

そして思案する事の深みに嵌る者とは、相手より晒された事柄には迂遠な考えを巡らすものよ。それがすぐ近くの真から遠ざかるものと気づかずにな。

そなたのような聡い者はとくに当て嵌る。それは正道には強いが奇手には足を掬われやすくなる。せいぜい心しておく事じゃ」

今、確信した。

こいつ、絶対性格が悪い。

基本、人をおちよくって楽しんでる手合いだ。

まともに悩んでいた自分が損した気分。

あれだけ偉そうに語り尽くして、要するに気分屋なんだって馬鹿みたいな答え、呆れるより先に惚れ惚れするわ、悪い意味で。

「だが面白いと感じたのも事実。正彦、そなたが自慢するのも分かる」

「ああ。実に小気味よい気概だろう。俺も自慢だよ」

会話に入ってきた声に、自然と私の意識もそちらを向く。

その声は、誇らしいものを語るように。

本来敵対する者には向けるはずのない言葉を、甘粕は気負いもなく口にした。

「おまえはそのままでもいい、凜。それが一番、おまえの輝きを強くする。」

彼女が言うところの、それこそおまえの戦の真だ。正々堂々、己を信じて疑わずに勝利へ向けて突き進む。

そんな性質に育ってくれたことは、俺としても誇らしいよ」

その言い方は、まるで子供の成長を祝福する親のようだ。

それも間違いではない。地上での彼は私の立場を保障する後見人で、生き抜くための様々な技能を教えてくれた師でもあるから。

物心ついた頃からわりと殺伐とした人生送ってる私にとって、実親よりも彼の方が育ての親みたいなものだ。

でも、だとしたらおかしいのだ。

ここで行われるのは聖杯戦争。この月で私と彼は敵同士。

いずれ殺し合う間柄なのに、こんな風に一緒に食事をしたり、誇らしく語ってみせたり。

気心を知り合う相手だからこそ、感情も抑えづらい。

流石にそろそろ、我慢も限界だった。

「どういうつもりなのよ、甘粕。」

ここはもう地上じゃない。私たちは敵同士でしょう。

なのにこんな、和気藹々と楽しめる仲じゃないでしょう、今の私たち

ちは！」

私たちは袂を分った。もう道を同じくする事はない。

その宣誓は既に地上で為されている。今さら話す事なんてなかったはずなのに。

それとも、まさか侮っているの？ 私にはそんな覚悟はないって、そう高を括ってるのか。

「凜、おまえが言わんとする事も分かる。それはもっともな意見だろう。」

「だがな——」

そこまで言って、唐突に甘粕は言葉を切る。

視線を落として、眼下に置かれた食膳に意識を向けた。

箸を伸ばしかけた一品に手を向けると、その情報構造を解体した。

「これで三度目かの。今日のところは、のう正彦」

「ああ。今度は食事にか。流石に手管が豊富だよ」

分解され、消失していく食物の残滓<sup>データ</sup>。

いったい何をやったのか、その意味も大凡は察していた。

「ねえ、甘粕。今のつて……?」

「うむ、毒物だ。恐らくは致死性の。取り入れたなら危なかつたな」

何でもないことのように甘粕は言う。

仮にも命を狙われた直後だというのに、彼は平然としたままだ。

「こうした罠に、ここに來てから既に何度か襲われている。誰の仕業かは察しがつくがな」

「こんなの、ルール違反じゃない。対戦相手でもないのに、校舎内で行って。」

どうして運営側に報告しないのよ。こんな暗殺じみた手を使ってくるのなんて、あいつしか——」

「断定するには根拠が薄い。手段も確実なものではないしな。恐らくは厳罰対象として、尻尾を掴まれないギリギリのところで仕掛けているのだろう。」

奴も、これで俺を仕留められるとは思っていないだろう。俺が奴に気を割いて、少しでも消耗して戦いに不利と働くよう仕向ける。狙いとしてはこんなところか。

ならば気に掛ける事もあるまい。俺には既に向き合うべき相手が他にいるのだからな」

どうということはない、これくらいは当然だという彼の姿は、私もよく知るものだ。

地上での甘粕は、常に命を狙われる立場だった。それこそ指名手配の私とも比べ物にならないくらいに。

その全てを、彼は打破して生き延びた。今と同じく当たり前のような態度で。

その姿を見て、改めて悟る。

和んでいるように見えても、甘粕はとつくに臨戦体勢。備えに不足なんてない。

きつと彼は、必要なら今すぐにも戦える。あの軍刀を抜くのに躊躇なんてしない。

悔っているなんてとんでもない思い違いだ。

甘粕の心に奢りなんて無い。彼は誰に対しても公平な闘争心で向き合っている。

「話を戻そう。凜、俺は今後もおまえに対する姿勢を改めるつもりはない。俺の愛する強さを持つ子として、今と同じく友誼をもって接するつもりだ。

俺たちはいずれ殺し合う。だからこそ、かつてよりも深く互いを知ることが出来るだろう。打倒すべき宿敵として、その力を余さず知るために。

やはりこの聖杯戦争のシステムはよく出来てる。心を持たない機械が作ったものとは思えんほどにな」

決戦を前に設けられた、6日間の準備期間。モラトリアム

この間に互いのマスターは相手の戦力を調べ、自らの力を鍛え上げる。

それは必然、自分が殺す相手の事を知ろうとすること。その感覚がどんなものかは、まだ私も実感していない。

「敵に対する殺意を絶やさんがために、知るまいと目を閉じ耳を塞ぐのは懦弱だよ。

それで得られるものなど殺す覚悟だけだ。そんなものはな、その気になれば殺せるという前提が無ければ役には立たん。所詮は受け身の決意で、挑む気概に欠けている。

おまえにそれは似合わない。言っただろう、挑み進む事がおまえにとっての真だと。凜、おまえには俺に挑み、超える覚悟こそ抱いてほしいのだ。いずれ対峙する好敵手としてな」

期待をかけるような言葉は、紛れもなく彼の本心だ。

ランサーのように殺し殺される事を是とする武人の生き方とも違

う。

敵対し、確かな戦意を持ちながら、彼に敵意は無いのだ。根底にあるのは信頼で、応えてくれると信じるから、彼は力を振りかざす。

ほんとに、何も変わってない。

自分の正義きやうぎに迷いなんてない。彼はこのまま最後まで進み続ける。

「俺はおまえに様々な事を教えた。おまえはそれに十全に応えた。

苦難に立ち向かうための奮起も、外道に抗するための覚悟も、おまえにはある。過酷な環境でも曲がらずに育ったおまえは、確かに強い。」

だが悲しいかな、美点であると同時に欠点として、手を結んだ身内には甘くなる。どうしても非情になりきれない」

そして期待すると同時に、その評価には過大も過小もない。

人の輝きを愛し、それを讃えたいと願う彼だから、その裏にある弱さも理解する。

本人が認めたがらないような心理まで、甘粕は人の性質を見抜く事に長けていた。

「ただでさえ師である俺に苦手意識があるのだ、おまえは。その上気概でも劣っているとなれば、そんな結果は目に見えている。

認め尊んでいるからこそ、そうあつては欲しくないのさ。おまえには今より強く、その輝きを練磨してもらいたい。」

狂気と呼んだ俺の意志を、見事に粉碎する強さを手にしてみせろ。そうして成長したおまえこそ、俺は相對してみたいのだ」

その言葉に、私は明確な答えを返すことが出来なかった。やがて皆が食事を終える。

この奇妙な食事会にも終わりがやってくる。

席を立った甘粕を止める言葉なんて持たない。一礼して去っていく彼とそのサーヴァントを、私は黙って見送るしかなかった。

「……ランサー。どうして黙っていたのよ？」

「なんだよ、口を挟んでほしかったのか？ 勝手知ったる仲間なんだろう？」

相棒に訊ねてみれば、返ってきたのは彼らしい飄々とした声。

「あれが嬢ちゃん壁の壁ってわけか。どんな奴にもそういうのはいるもんだが、あれは確かに難物だな。

今の時代にもああいう芯の入った奴が残ってたのは驚くね。ありやあ英雄になる器だぜ」

甘粕は強い。近くで見えてきた私は、彼の強さを知っている。

私には出来ないと思えた事も、彼は苦もなく成し遂げた。その経験があるから、尚更なんだろう。

私は未だに、甘粕に勝てる自分をイメージ出来てない。戦えばきつと負けると、その想像が捨てきれない。

「だが、嬢ちゃんだって負けるつもりはねえんだろうが。

奴の言ってた事は大体その通りさ。そいつと直に向き合っていかなくても壁は越えられねえ。

やっていくしかねえぜ、マスター。アンタだって覚悟の上だろう」

「……当たり前よ。そうでなかったら、私はここにいない」

それでも、私にはもう退く道はないんだ。

月から帰還できるのは1人だけ。生き残るには勝つしかない。

——聖杯戦争は、純然たる生存競争。

人としての強さを、生命としての力を、この闘争では求められる。

強者が勝つだけの戦いじゃない。互いの存在を衝突させて、その果てに勝利へと先駆ける。

理想を、信念を、意地を、人生の全てを懸けて私たちはぶつかる。それはきつと、能力の数値だけで決まるようなものじゃない。

そう私は意気込む。それが私自身に言い聞かせるためのものだと、半ば自覚しながら。



甘粕正彦。やはり彼という人物も、ここで記さなければならぬだろう。

解放戦線の御旗シンボルと称される事もある私だけど、それなら彼は支柱そのもの。

西欧財閥に対抗する総ての意志を一つにする、反抗意識の骨子そのものだ。

前項で述べたように、解放戦線の勢力はバラバラだ。

掲げた大義も、目指す目的も各々で違う。思想と手段が一致しないから、連携するのも難しい。

現状、世界の財源6割と軍備9割は西欧財閥が占有している。勿論、それ以外が全て解放戦線のものであるなど、話はそんなに簡単じゃない。

そんな状態の中で孤立しながら戦っていれば、各個撃破されるのは明白だ。対抗するためには力を結集し、密度を高める必要がある。

それを実現していたのが彼、甘粕正彦だった。

甘粕は代えが効かない。彼が倒れば解放戦線が崩れるというもの、決して過言じゃない。

それは彼が強者だからではない。彼の強さは疑う余地なく本物だが、それだけなら他の誰かでも代用は出来る。

むしろ強さなんてものは、甘粕の本質からすれば外付けの装飾に過ぎない。重要なのはその内面、彼の持つ気質、あるいはその在り方だろうか。

彼しかないのだ。人種も、習慣も、目的も異なり、魔術師メイガスのように常人には生き方自体が理解し難い人たち。それらを束ねて、平等に認め、活用し、そして平等に裁く事が出来るのは。

甘粕正彦という男には私欲がない。

金銭、名誉などの価値、それらを求める独占欲。または力を欲する野心。

手に入れるための能力は十全にあるはずなのに、当然あるべきそれらの感情が皆無なのだ。それこそ聖人と呼んでも差し支えないレベルで。

聞いた話によると、彼は自らの異質さをかなり早い時期から自覚していたという。

甘粕正彦は異端だ。内面の思想は元より、その能力までも突出している。出てる杭が叩けないほど上方に向かって。

集団意識の中で、そうした存在は癌となる。先頭に立つ指導者ならば良いのだろうけど、対等に役割を振り分けて機能する群れの一員としては害悪だ。

1人だけでやれる事が多すぎる。際立ちすぎた傑物は否応無しに注目を集め、好かれ悪しかれに関わらず周囲の感情を独占してしまう。

その末路にあるのは、素晴らしい才能と崇拜する人たちによる思想の浄化、あるいは危険な異端者か嫉妬の矛先として排斥される流れだ。

どちらにせよ集団が影響を受けることは避けられない。幼少という時分、どうしても集団の中に属する必要がある時期に、己の才覚で性格が歪んでしまう事例とはこういうわけ。

だから甘粕は当初、自分の才を徹底して秘していたらしい。

これは言うほど簡単じゃない。自分で自分に枷をはめるようなものだ。

ただ手を抜くのではなく、明らかに自分より劣る人たちに合わせて、さもそれが全力であるかのように振舞う。

集団の中に埋もれて、決して個人として傑出する事のないようになまじ能力があるだけに、優等生を演じるよりも遥かに難しいだろう。

どんな人間だって他人に認められたい。

自らを誇りたいし、思うままに振る舞いたいと思うだろう。

自分の力をあえて制限し、それを自然体として日々を過ごす。誰に褒められるわけでもなく、何かを得られるわけでもない。

普通ならまず持続しない。強い目的がなければ、窮屈な上に無意味でしかない生き方を続けるなんて不可能だ。

もしも甘粕が名誉を望むような人間なら、こんな真似はしなかったし保たなかつただろう。

—— 甘粕は『平穩』を学んだ。

そうまでした甘粕の目的、それは“学び”だったという。単なる技能や知識の話じゃない。それなら極論、野に下つても手段はある。

彼はあるがままの“人間”を知りたかつた。強烈な個性に汚染された状態ではなく、素としての人々が生きる姿を。

そうして人間を、ひいては世界の有り様を学ぶために。それは1つの場所だけに留まらず、彼はあらゆる場所へ“学び”のために赴いた。

決して何事も、自分の中だけでは決めつけない。しかと目で見て耳で聞き、我が身で感じてその価値を見定めるために。

—— 甘粕は『社会』を学んだ。

日々の中で見せる人々の穏やかさを彼は愛したが、尊重はしなかつた。

—— 甘粕は『戦場』を学んだ。

駆り立てられる修羅場で命が無作為に失われる悲劇を彼は憎んだが、否定はしなかつた。

—— 甘粕は『社会』を学んだ。

西欧財閥が実現させた“管理”。その有り様を彼は嘆いたが、構造の正当性は認めた。

—— 甘粕は『戦場』を学んだ。

他者と比べた甘粕の異質さとは、強さだけではない。何より異質なのは、その精神性。あらゆるものを公平に扱い、かつぶれない普遍の価値観。

善にも悪にも傾倒しない、もはや超然とした公正さこそが、甘粕が常人を逸脱している要素だ。

たとえば、サバイバースギルトという言葉がある。

大規模な災害、あるいは虐殺など、大多数が殺戮される事態の中で、奇跡的に生還を遂げた人。

そうした人は、自分だけが生き残った事を亡くなった人々に罪悪感を抱くようになり、その心理に多大な影響を受けるようになる。

”生き延びた自分はその分だけ人を助けなければならぬ”と、ある種の強迫観念に囚われてしまう場合もあるのだ。

そんな人間は、ある意味では強い。

サバイバーズギルトに限らず、何らかのコンプレックスをバネにして強い意志が発生する事は多々ある事だ。

自身を投げ打つてでも他人を救う事に固執したり、それとは逆に、病魔などの理由による強烈な劣等感からひたすら周囲を憎悪するなど。

そういった人間には確かに強い。強いが、それは偏ったものだ。その偏りがあるからこそその強さでもある。

自身の抱く価値観に傾倒する一方で、彼等はそれ以外を受け入れられない。自分とは別の価値観を頑なに拒んでしまう。

その在り方は歪だ。強さと引き換えに、人間としてあるべき意志の自由を捨ててしまっている。

彼、甘粕正彦にそれは無い。

過去の強烈な出来事からあなつたのではなく、生のままに育ちながら彼はあなのだ。

詳しく聞いた事はないけれど、家庭環境に問題があったとも考えづらい。そうした偏りがなかったからこそ、甘粕はあの公正さを得られたのだと思う。

甘粕の存在は代えが効かないといったのは、そういうわけ。

解放戦線レジスタンスの勢力をまとめられるのも、その公正さがあるからこそ。少しでも私欲に走ったり、思想に偏りを持つ人間では不可能だ。

そして同時に、その厳しさも。彼はあらゆる価値観に理解を示し認めめるが、だからこそ裁定にも容赦がない。

その価値を損なう唾棄すべき悪性に対しては苛烈なまでの処罰を実行できる。たとえば友と呼んだ相手でも、それが無価値だと見抜いた

なら躊躇なく罰を与えるのだ。

甘粕はこの世界を学んだ。

穏当に生きる人々を、逆境で発揮される強さを、社会が望む停滞を。どれひとつとして目を逸らさず、その価値を余すことなく見定めた。

正直、本当に大したものだと思う。そのために彼はあらゆる不自由を耐え抜いて、人間という存在を学ぼうと努力を続けてきたのだ。

よほど自制心が強いのか。あるいは、彼が” つい” 本気になってしまったほどの事態に、まだ直面した事がないだけかもしれないけど。

そうして学んだ果ての結論として、甘粕は世界に抗うことを決めた。

隠してきた才覚も、一度発揮してしまえば秘匿するのはもう不可能。甘粕正彦という強烈な個性は瞬く間に広がった。

解放戦線からは勝利を信じさせる英雄として、西欧財閥からは支配を妨げる難物として。

どんな者であれ無視はできない。あらゆる意味で突出した甘粕正彦という人間は、人々の目を引き付けた。

「——英雄とは、人間の飛躍した感情の体現者だといってもいい」  
そう述べたのは、知り合いである魔術師の教授V氏。

その他、様々な二つ名を持つことで有名な人で、私も色々お世話になっている。

ただ当の本人が喜べるような二つ名は、残念ながらひとつも無かったのだが。

「そもそも時代の節目などで、ほぼ確実に出現する突出した傑物、いわゆる英雄と呼ばれる存在は、世界が生み出しているのだとする説がある。

ひとつは、世界そのものの本能として表れる存続意思。純粋に地球という星が崩壊を避けるための存在であるガイア側の抑止力。

もうひとつが、人類が総体として持つ集合的無意識下での意思、阿頼耶識が滅亡を避けようとして発現させる霊長側の抑止力だ。

神代の頃にはよく見られた、神性や概念加護を先天的に有した

マインロジ  
神話系統の英雄は前者にあたる。逆にあくまで現実の理の中で立脚した史実系統ヒストリアの英雄は後者となる。

たとえば、オルレアンの聖女ジャンヌ・ダルクはその最たる例だ。伝承によれば、彼女は神託を受けたという。彼女はこの声に従い、王太子シャルル7世の元に赴きフランスの窮状を逆転へと導いた。

何の教養も大義も持たないはずの片田舎の少女が、だ。知識不足は勿論、そこまでの行動力を発揮させる意志の原動力。彼女が受けた神託をただ幻聴だとみなすのは、むしろ暴論だと私は思う。

彼女は確かに神の、阿頼耶の声を聞いたのだろう。よほどそうしたものを受信する力に長けた人間だったのか。その声を彼女が信仰するところの主の啓示と捉えたのも、決して間違ったものではない。これは単純な捉え方の差異でしかないんだ。この辺りの普遍概念は昔から神学者たちの間で議論されてきたテーマのひとつでもある。

だがここで問題とするべきなのは、彼女を後押ししたのが霊長側の抑止力である点だ。彼女が立ち合ったフランスの窮状など、星全体から見れば危機でもなんでもないからな。

そして広義に見るなら、霊長側の抑止力というのも違うのだろう。国の栄華と崩壊は人類繁栄のプロセスだ。種が広がる事こそ生命の目的であるのなら、ひとつの国が滅びることも必要過程として容認される。

だから、彼女が受け取った声というのは、もっと狭義の中での無意識だったのではないかな。当時のフランスは敗戦に次ぐ敗戦で人心は疲弊しきつていたという。そうした人々の嘆きを、才能持つ少女が受信し後押しを受けて力に変えた。そもそも神を普遍的な人類の主人と捉えるなら、フランス一国だけに救世主を遣わすのは道理が合わないだろう。

そして純粋な英雄概念の体現者であるジャンヌ・ダルクは、その通りの結末を迎えた。抑止力とは方向の修復者であり、故に方向の修正が完了すればそれ以上には成りえない。役目を終えた聖女は、そのまま何事も成さずに滅びた」

教授が語ったのは、ある意味で最も理想的な英雄像だ。

救国のために力を振るい、結果を出した後は速やかに退場する。おそらく本人は無心のままに。これほど大衆にとつて都合のいい存在はいまい。

その理屈は私も分かる。分かるけど、個人的には気に入らなかつた。

「だが彼女ほど顕著な例は逆に珍しいだろうな。たいていの場合、後押しされた人間はそんな自覚も束縛もなく、ただ自らの意識で行動する。

人間たちの祈りや憧憬、こうあつてほしいという願いに後押しされて英雄は頭角を現す。別に支配されているわけじゃないが、その存在形成に影響があるのは間違いない。

これは彼等の価値を貶めるものじゃない。先天的な性質の特色として表れるというだけで、その後の彼等の行動はあくまで彼等自身の功績だからだ。

それは清廉潔白ばかりじゃない。人々が抱く憧憬のカタチは様々だ。だが共通して言えるのは、英雄とは強烈な個性であり、それは人間を魅了する要素を備えている点だ。

英雄という羨望対象を望む人々の無意識に後押しされ、彼等は台頭してみせる。戦乱期のような思想の变成が起こりやすい環境で、様々な立場から英雄が生まれるのはこのためだろうな。

これらは阿頼耶が自滅回避のために顕す抑止力ではない。そもそも傑物といえど一個人が世界全体を滅ぼす要因となる事自体が稀だ。大昔に大陸が海に沈んだのは抑止力のためだと言うが、1人を殺すためにいちいちそこまでやっては、それこそ星自身による自傷行為になつてしまう。

滅亡の回避こそ抑止力であり、同時に人類意識が全会一致となる極端な事例でもある。それが唯一人の英雄個人を後押しするなど、それこそ超直接的な破滅が差し迫るような事態でも無い限り有り得んだろうさ」

教授V氏は、新世代の魔術師台頭後の魔術理論の第一人者だ。

彼の理論は効率重視でかつ実践的。おまけに旧代の魔術に関して

も造詣が深い。

それら古き神秘をまとめ、新代の魔術式に置き換えて再現してみせた偉人である。

とりわけ他者の教導に優れ、その人の才能と取るべき手法を教えて能力を開花させる。彼に師事して一流にならなかった者はいないとさえ言われるほどだ。

「英霊とは、英雄が生涯を通じた栄光を以て信仰を集め、死後に人々の想念により安定した存在だ。

多くの人々が信じる『力の器』として、英雄ほど適切な存在はいない。神ともなれば付いた”色”の規模が大きすぎるしな。だから抑止の守護者は英雄という存在に宿ってその力を行使したという。

魔力の尽きた現在の大地では、彼ら英霊が顕現する事はないだろう。だがこの器としての見方には、応用手段がある。我々、電腦世界に生きる魔術師<sup>ウィザード</sup>ならば。

ムーンセルでは、その英霊を再現して闘争を行うという。その情報を模造<sup>コピー</sup>し、然るべき素体に力の方向性だけでも与えれば、擬似的な英霊が完成する、と。理論は完成しなかったが。

……うん？ どうしてこの理論で完成じゃないのかだつて？  
—ファック、黙ってる！—

もつとも、肝心の本人にその理論を実践できる力量が無い事が、彼の眉間のしわを深める理由なのだけけど。

「もはや力の器としての英霊は現れない。枯渇した大地に、彼らを支える余力は既にないからだ。

だがそれでも尚、霊長の抑止力は存在する。我々が完全な自滅を渴望しない限り、これは決して消滅しない。故に現在は現し方を変えているのだと私は見ている。

たとえば西欧財閥の台頭なども、その一環だと考えているよ。彼等の管理支配がこれほど早期に成立したのも、人類が差し迫った滅びから逃れようとした結果であるとな。

それが停滞の道だとしても、だ。人の無意識はもはや、緩やかな衰退を望んでいるのかもしれない」



そう述べた教授に対し、私は何も答えなかった。

そうした面が事実であるのは既に承知してる。西欧財閥の社会が  
正当なものだと認めてはいるのだ。

だけど、関係ない。

たとえばそれが人類の結論だからって、遠坂凜の結論は違う。

だったら私は願ひ下げだ。そんな民主的決定で納得なんてしてあげない。

私の意識はあくまで私のもの。遠坂凜という世界の支配者はどこまでも私なのだから、私自身で感じた正しさに従うんだ。

「話を戻そう。英雄という概念を説明する論理は多岐に渡るが、根本としてあるのは実に単純な要素だよ。

それは、大きいこと。その存在が大きいから、多くの人々の目につくし影響も広くなる。

彼等英雄は傑出した個性であり、故にそれは常人には届き得ない領域への羨望でもある。人は容易く手にしたものには執着せず、得難いと信じる価値にこそ重きを置くからな。

それは強さだったり、理想だったり、あるいは覇業の夢であったりな。そして見果てぬ夢であるからこそ、人々はその夢に自らも乗りた  
いと願う。

いわゆる霸道、他者を魅了し狂奔させる才能。カリスマと呼ばれる  
才覚がこれに該当するが、英雄であれば多かれ少なかれこの資質を備  
えている。たとえ本人にその気がなくとも、紡がれた英雄譚に人々は  
憧れを向ける。

そして向けられる憧憬があるなら、その逆も然りだ。傑出した在り  
方は、それ故に肯定と同じく否定もまた集める。万人総てに通用する  
正義はなく、物事の正しさとは時代や土地の習慣でも変化する。属性  
としての善悪はあっても、普遍の概念としての善性悪性は有り得な  
い」

傑出した個性、肥大した感情の体現者こそ英雄だと、教授は言った。

その論法は、甘粕にもそのまま当てはまる。彼もまた常人には理解  
できない規模で、その感情を肥大させた英雄だ。かいぶつ

甘粕正彦は解放戦線レジスタンスの支柱。

誰もが彼の存在に依存している。その強さに勝利を信じ、その公正に裁定を委ねてる。

窮状の中では否定の意味も起こりにくい。利害は様々でも、唯一の可能性は甘粕以外にいないのだから。

やはり彼は”英雄”なのだろう。人々の勇気を愛し、その価値を尊ぶ善性の勇者だ。

そう、彼は正義の人物だ。そして正義とは、人々を慈しむばかりではない。

「……私はな、常々思っている。君たち天才は卑怯だと。

私が思い描いているばかりの場所に、君たちはあっさりと到達する。ただ生まれがそうだと、才覚があつたというだけの理由で」

言葉短い教授の告白は、彼の積年の妄執でもあつたのだろう。

それを告げる彼の表情は、切実で凄愴なその殺意は、天才わたしへと向けられていたから。

「だがあの男、甘粕正彦に対してだけは、そう思つた事は一度としてない。

生来がどうだという問題じゃない。アレが高みに至つた源泉は、余りにも単純すぎて信じ難い。

ただ、ひたすらな修練を。今に出来る事を先延ばしせず、先を見据えて備えを蓄える。そんな当たり前のような事を、想像を絶するような密度で繰り返して、あの男は望んだ場所に到達できる。

正直に言おう。私はあの男が恐ろしい。こんな人間が実在しているという事実が、心底受け入れがたいのだ」

常日頃から、甘粕はそれを口にしていた。

生得的な素質など、始点の違いに過ぎない。人の真価とはそんなところには有りはしない、と。

そんな自身の持論を証明するように、甘粕はどんな難事でも自ら果たしてみせた。

努力を重ねて、勇気を持って挑む。とても身近で、当たり前前の、眩しいくらい正しいやり方で。

それで何とかなるなら苦労はないと、そんな言い訳こそ戯言だと言  
い放つみたいだ。

だから、吐き出された教授の声には、根底まで刻まれた畏怖の念が  
あった。

生来の素養を覆す経験の密度。

より深い研鑽で、より手際良い運用で、才能の格差を取り払う。

努力が才能を凌駕する。それは物語でも好まれる、尊いと感じられ  
る善の趣向だ。

教授自身、才能の壁を研鑽で覆そうとする努力の人だ。その考え方  
には共感もしてゐるだろう。

そう、理解できるからこそ恐ろしい。

彼に甘粕の姿は眩しすぎる。焼かれそうで、目を背けたくなるほど  
に。

だって、甘粕は彼の理想の体現者だ。努力と勇気で、才能を上回る。  
人の意志が生み出す力はそれを可能にする。かつて願ったものの  
完成形で、究極形。

ある意味で近いものであるからこそ、その常軌を逸した熱量が信  
じられない。

自分の夢の姿とはこれなのかと、こうしなければいけなかったのか  
と、思わずにはいられないのだ。

「……いや、これも所詮は錯覚なのだろうがな。

私の感じるこの主観も、結局は多種多様な事実の一部に過ぎず、他  
の人間には違ったものが映るんだろう。

甘粕正彦は英傑で、それに魅せられる者も数多くいる。それは事実  
でしかない。

ただ、私にとっての受け取るべき光とは、甘粕正彦ではなかった。  
それだけの事なんだ」

啜えた葉巻の煙を吐き出しながら、諦観を滲ませて教授は甘粕の評  
をそう締め括った。

正義、努力、勇気。およそ否定される謂れのない善性の感情。

けれどそれも行き過ぎれば、尊敬よりも畏れが出る。正常だって異

常になるのだ。

人は正しいばかりではいられない。どれだけ真つ当な人間でも魔が差す事は必ずある。清濁併せ持つのが、ある意味で人間としての正常だ。

教授の言うことは人間として正常な意見だろう。なまじ身近だからこそ、甘粕の強度に畏怖を覚えてしまう。

だけど、言ったようにそれは主観のひとつ。

甘粕正彦という人物の受け取り方は、それだけじゃない。

「魔術師メイガスとはな、辿れないと分かった道を歩む行者のようなものだ」

かつて、甘粕に訊いてみた事がある。

私がどうしても理解し切れずにいた魔術師メイガスを、何故そんな風に受け入れられるのかと。

「無駄を厭わず、無駄に挑み、無駄を得る。

矛盾を受け入れ、死さえ諦観し、それでも無益ではないと信じて歩む。

彼らの生き様を、俺は否定せん。その諦観を越えた先にこそ、本物の到達点があると信じている」

魔術師メイガスの本質とは、求道者。

かつての奇跡を忘れられず、真理と呼べる解答を求め、見果てぬ道を辿る人たち。

目に見えた成果など無粋。俗世の発展と袂を分ち、隠者として己の密度を高めていく姿こそ本道だと。

世界からの魔力の枯渇は、むしろ彼等の存在を純化した。

つまらない俗欲に囚われ、超人である事を快樂とした人種は只人に戻り、真に魔術師と呼べる者が残された。

真理という無理難題に挑み続ける彼等もまた、人間が持つ輝きのひとつだと甘粕は言った。

「それに、な。彼等の語る魔道への理念が、俺は嫌いではないのだよ」

魔術師メイガスの操る魔術とは、空想によって編まれた事象。

現代の魔術師ウィザードも本質は変わらない。地上の神秘は駆逐されたが故に、精神内で成立する電脳世界にて、その奇跡を行使する。

決して万能の力ではない。定められた魔術基盤に等価交換の原則と、制約は数多くある。それでも魔術を成立させる最大の骨子とは、できる事を確信する想念イメーシの力に他ならない。

ならば魔術とは、人の意志が現実以上を引き起こす奇跡だと言い換えられ――

「――人の空想でできる全てが起こり得る魔法現象、と。なんとも夢があつて素敵じゃないか」

そう語った甘粕の表情は、まるで子供のように澄み切ったものだった。

結局のところ、甘粕正彦の真実とはそれなのだろう。

甘粕は強い。壮絶な努力を繰り返して、鋼の意志は不屈そのものだ。

だけどそれは、決して無理をしてるんじゃない。どこまでも自然体、素のままの自分としてあはしている。

その信念と自負に、仕方がないなんて余計はない。純な勇氣と純な正義、後ろ向きな不純は微塵もないのだ。

よつてその熱量は留まる事を知らない。だって負担なんて無いのだから、下がるどころか上がる一方。

絶望に挑み、屈しないというのは少し違う。そもそも彼は絶望に挑んでみせるのが好きなのだ。

事実、肉体的に消耗した事はあつたけど、彼が精神的に摩耗した場面なんて見たことがない。

自分自身という世界の支配者、その理想形。甘粕正彦とは、私にとってそういう人物だ。

それは異常な事だけど、別に間違つた事じゃない。

重ねた努力の成果として、等価に見合つた強度の獲得。それはとても正しくて美しい。

遠坂凛わたしはきちんとした仕組みが好きだから、現実の不合理をもつともしない甘粕の強さは、憧憬の対象として映ってしまう。

甘粕正彦は馬鹿だ。能力云々など関係ない。

子供のような純粹さで、望んだ事に全力で取り組むだけ。常軌を逸

したと見える密度も、彼にとっては当たり前のもの。

誰もが思ってもやらない事を、彼だけがやっている。自分が一番大好きな事に、馬鹿正直に突っ走ってるから強いのだ。

そんな甘粕のことを、私はどうしても嫌いになれないのだ。

## 1 回戦：参戦者

聖杯戦争も本戦に入り、すでに4日が経過していた。

1 回戦の準備期間<sup>モラトリアム</sup>、その期間の半分を跨ぐ事になる日数。

順当であれば、既に第一暗号鍵<sup>プライマリトリガー</sup>を入手している。対戦相手のマスターとの接触も増えてくる頃だろう。

準備期間は6日間<sup>モラトリアム</sup>。

その間に参加者たちは、迷宮<sup>アリーナ</sup>に潜り指定の暗号鍵を入手するという課題を出される。

通称、試験<sup>タスク</sup>。計2つの暗号鍵を入手できなければ、決戦へ挑む権利すら与えられない。

とはいえ、これ自体はそう難しい事ではない。真つ当に実力のあるマスターならば問題なく達成できる難易度だ。

重要なのは、この試験が全員に等しく課されるという事。そして達成のためにはアリーナに潜り、サーヴァントと共に攻略していかなければならない事だ。

必然、戦えば手の内を晒す事に繋がる。対戦者と同じアリーナに潜る以上、情報を探る機会は幾らでも見つけられるのだ。

試験を通じ、自己を鍛えて相手を知る。7日目の決戦に向けて、ムーンセルより与えられる公正な課題である。

そして参加者たちも、この頃となれば与えられた課題の意味を理解してくる。

単純に戦って勝てばいいというわけではない。執行猶予の期間をいかに活用するかも、ムーンセルが観測すべき人間の要素。

たとえ数値上の能力で見劣りしようと、人間には成長の可能性がある。勝利を諦めず必死に生き足掻く限り、希望は決して潰えない。

ならば逆に、与えられた機会を惰性と怠慢で過ごすならどうなるのか、その結果もまた明白だ。

「君はもう、アリーナには入ったのかい？」

なかなか面白いとこだったよ？ ファンタジックなものかと思っ

てたけど、わりとプリミティブなアプローチだったね。

神話再現的な静かな海つてところかな。さつき、アームストロングをサーヴァントにしているマスターも見かけたしねえ」

間桐慎二。聖杯戦争に参戦するマスターの1人。

アジア圏有数のクラッサーと称される少年は、緊張感のない声で言った。

「いや、シャレてるよ。海つてのはホントいいテーマだ。

このゲーム、結構よくできてるじゃないか」

この聖杯戦争を”遊び”だと慎二は言う。

それは彼だけに限らず、参加者の一定層で見られる共通した認識だった。

公開されたムーンセルへのアクセス手段。

それは様々な立場の人間に聖杯への道を開示したが、同じ弊害として雑多な群衆までも聖杯戦争に招き入れる結果となった。

所詮、よくできたゲームであると。彼等はこの戦争をそのように認識している。本物の殺し合いだとは全く思っていない。

ある意味、彼等は哀れな被害者だ。

なまじ能力があり、辿り着けてしまったからこそ退路を失った。

喜劇であり、悲劇だ。7日目の決戦を迎えた時、彼等は否が応にもその事に気付くだろう。

「……はあ」

そして、アクセス手段を公開した張本人である遠坂凜は、何も分かっていない少年の姿を憐れむように嘆息を漏らした。

「随分と余裕そうね、間桐君。こんな所で関係ない私と油を売ってる暇があるなんて」

「まあね。これも王者の余裕ってやつさ。<sup>チャンプ</sup>」

地上では君に煮え湯を飲まされかけたけど、ここじゃそうはいかないぜ。僕のサーヴァントは大当たり。いくら君でも、彼女の艦隊には逆立ちしたって敵わないさ」

その様子は余裕よりも、むしろ浮わついて見える。

思わず自らの口から手の内を漏らすなど、勝負への真剣さが欠けて



いる何よりの証拠だろう。

それは凜も気づいていたが、今の彼女はそれを指摘する気にはなれなかった。

「……ねえ、間桐君。ひよつとして、対戦相手の告知見てないの？」

「？ いや、見たよ。なんか聞いたことない名前だったけど。まあ僕が知らないって時点で、<sup>レベル</sup>実力もたかが知れてるけどね」

「まあ彼は、クラック方面で顔を知られたわけじゃなかったけど。」

あのね、間桐君。甘粕は——」

「ああいや、知ってるよ。確か予選で、みんなの前で変な事を言ってた奴だろ？」

いやだよねえ、ああいうの。変に悪目立ちしたがってるって言うのかな？ 空気読めない奴にいられると、周りも迷惑するんだって分からないんだろうね」

慎二に危機感はない。

甘粕正彦を、あの破格の男を目にした上で、彼はそう言っている。それを見て、凜は諦めたように言葉を引いた。

「お、おい！ なんだよ、その態度。この僕が敗けるっていうのか？」

いっておくけどな、彼女の『無敵艦隊』は——」

「いいわよ、間桐君。それ以上口を滑らしてくれなくて。」

私、あなたについては対策を考えておくつもり、ないから」

「なあっ!? おい、馬鹿にするのも大概にしとけよ。地上での事で僕の実力を計ってるなら筋違いだぞ。そんな風に侮っていると、今に足元掬われるぜ」

「まさか。別に侮ってなんかいないわよ。アジア圏ゲームチャンプの間桐慎二君。」

あなただけじゃない。このムーンセルに辿り着けた時点で、能力は証明されてる。当たる可能性のある相手なら、誰であっても対策を怠るつもりはないわ。

でもね、100%当たらないと分かっているのにそうするのは、無駄な浪費だと思わない？」

挑発にも等しい凜の言葉は、元々沸点の低い慎二を容易く怒りへ導

いた。

「ふん、そう言つてられるのも今の内さ。僕と、僕の引き当てたサーヴァントは最強なんだ。彼女の『宝具』に勝てる奴はいない。

君だつて今に思い知る事になるよ。この聖杯戦争は勝ち抜き戦。勝つて残ればいつか当たる事になるんだからね」

「そうね。あなた1人ならともかく、聖杯戦争にはサーヴァントがいる。勝算ゼロは、流石に言い過ぎだったわ。

幸運を祈つておくわよ、間桐君。心からね」

その言葉も挑発と受け取つたのだろう。

舌打ちを残して、慎二はその場を去つていく。その背中を見つめながら、聞こえないくらい小さく呟いた。

「……もつとも、今のままなら、その僅かな勝率もゼロになるでしょうけどね」

間桐慎二は、何も分かつていない。

この闘いが遊び<sup>ゲーム</sup>などではないということ。

たった1人の勝利者以外、どんな結末を迎えるかということ。

闘争というものの怖さも、残酷さも、彼はまだ何も理解していないのだ。

そんなだから、対戦相手の事さえ見誤る。

彼の対戦相手、甘粕正彦は破格の益荒男だ。直視すれば赤子でも格を思い知る。

その姿を目の当たりにして、尚も軽んじて扱うなど、よほどの自尊心か白痴のように間抜けかのいずれかだ。

間桐慎二の場合は、前者でもあり後者でもある。

彼はこの世界を信じていない。

ここが現実だと、生命を乗せた舞台であるなど欠片も思っていない。

どんな不可思議も非現実<sup>バーチャル</sup>に過ぎないと高を括っている。なまじ霊子ハッカーとしての自負があるだけ、その認識は固く崩れない。

人一倍高い自尊心も、それに拍車をかけている。自分より上位の存在など、基本的に認めないし信じようともしない。

それはまるで、破滅の道で栄光を信じて躍る道化のように。  
間桐慎二は決戦までの時間を、ただ無為に過ごそうとしていた。

間桐慎二は、参戦者の一面の象徴だ。  
闘争を闘争と捉えていない無用心さ。

そんな事があるはずないと、都合のいい夢想に逃げる惰性。

生命が最も真剣になるべき闘いの場で、その認識を見失った牙なき人々。

それはこの聖杯戦争に限った話ではない。あらゆる修羅場にも一定層は居合わせる、荒れ狂う状況に対応できず淘汰される者たちだ。だが無論、そればかりであるはずもない。

理想を、祈りを、信念を抱き、命を懸けて聖杯へと手を伸ばす者たち。

この舞台の主役は彼等だ。強く切実な意志の持ち主だけが、奇跡に挑む権利を持つ。

ならばその本命とは、対峙するこの2人に違いなかった。

一方は、甘粕正彦。

猛々しく漲った覇気、常人では遠く及ばない意志の力。

さながらそれは灼熱の太陽炉。総てを焼き尽くす熱量で益荒男は屹立する。

対し、もう一方は真逆の存在だった。

レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ。ハーウェイの次期当主。約束された世界の王。

同じ太陽でも、彼は万人を照らし出す光だ。上に立つ君臨者として非の打ち所がない王聖。

人々を導き、不幸を駆逐し幸福をもたらす公正にして慈愛に満ちた王道。幼い風貌と穏やかな立ち振る舞いは、この闘争の舞台では場違

いとも見えた。

それを補うように、影の如く付き従う従者の姿がある。

白色の甲冑に身を包んだ騎士。およそ騎士道という概念の理想像。

一片の戦意も持たずとも、溢れる力の波濤は彼が超常の側である証左だ。

この騎士こそが少年王オのサーヴァント。主従ともに清廉潔白な、揺るがない静謐を備えた王道の担い手である。

彼等を見る甘粕の表情は、満面の笑顔だ。

その笑みは、知らぬ者が見れば凶相とも取れる。元々の顔立ちにも問題があるだろうが、何よりの原因はそこに込められた感情だろう。

それは、期待。人の輝きを愛する甘粕は、敵対者であつても発揮される真価を待ち望んでいる。

熱烈すぎる期待は、常人ならばそれだけで萎縮するほどに凄まじい。まして敵として対峙したなら、戦意を加算した巨大な熱量に押し潰されてしまおうだろう。

「こんにちは」

そのような甘粕に対しても、完璧なる少年王は穏やかに礼を示した。

「こうしてお会いするのは初めてですね。御噂は予々聞き及んでいます。

甘粕正彦殿。立場は異なりますが、この出会いを嬉しく思います」

「レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ。ハーウェイの次期当主か。

こちらも噂は聞いていたが、なるほど。完成された王とは、誇張ではなさそうだ」

両者に敵意はない。明確な敵対関係でありながら、共に表すのは相手に対する敬意の念。

通常あるべき拒絶や害意など、彼等には有り得ない。どちらも常人とは氣質が違いすぎる。

甘粕が表すのが期待なら、レオは慈愛。

遍く人々の上にある玉座に座り、尚も示せる優しさは、彼の天性によるものだ。

慈悲深き王聖として、既に少年王は完成の域にある。彼の有り様に不足はない。

「だが、顔合わせも初めてというわけではないだろう。

俺たちは既に、予選のあの教室で邂逅を果たしている」

「確かに。ですがあの時は、お互いに欠けたままの状態でした。

あなたと話すのなら、十全な自分として。あなたも同じ理由で、何も話さなかったのでは？」

突かれた凶星には、苦笑を浮かべて返すのみ。

共に逸脱した存在として、彼等はある意味で通じ合っているとも言えた。

「で、そちらの騎士はサーヴァントか。いや何とも眩しい限り。姿も隠さず堂々と見せつけるとは、なかなか豪気ではないか」

「ああ、これは失礼。紹介が遅れました。ガウエイン、挨拶を」

「従者のガウエインと申します。以後、お見知り置きを」

「おやおや」

呆気なく告げられる真名。そんな相手に甘粕は肩を竦める。

虚言ではないだろう。そんな小細工を用いる手合いでないのは見れば分かる。

あるのは揺るぎない勝利の確信。栄光を約束された王にとって、もはや勝利とは必然の如く得るべくして得るものなのだろう。

故に真名程度、いちいち頓着しない。甘粕の従えるアーチャーともまた違った自負で以て、彼等は有りのままに振舞っている。

「であれば、俺からも自己紹介といこうか。改めて、俺の名は甘粕正彦。西欧財閥からはいろいろな呼び方で言われているが、まあ有り体に言って敵だよ。

現在の世界の有り様に疑問を抱き、その何たるかを人々に問うために月へと上った。ならばこそ、こうして世界の王たる者と言葉を交わせる機会が得られたのは嬉しい事だ」

熱を帯びる甘粕の視線。発揮される魔人の如き圧力。

彼は今、目の前の少年王に期待をかけている。世界を担う者として、どれほどの気概を持っているのかと。

それは好意に類する感情なのだが、甘粕正彦のそれは些か以上に畸形である。

レオの微笑こそ崩れなかったが、掛けられる圧力に従者たる白騎士が思わず前に出たほどだ。

度を過ぎた期待は、単なる敵意などよりも遥かに性質が悪い。その実例がここに示されている。

「聞かせてくれよ、世界の王。衆愚の抱く惰性の依存ではない、おまえが思い描く理想の姿を」

「さて、そう言われても困りますが。別段、何も隠してなどいませんので」

叩きつけるような甘粕正彦の期待とは対照的に、少年王が掲げるのは慈しみの王聖。

癒しの光か、あるいは抗いがたい香の類か、その言葉は聞く者の心に染み込み離さない。

「難しい事ではありません。世間でも言われている通りの事です。

完成された管理社会。混乱する世界に真なる秩序を。誰もが無慈悲な奪い合いを受け入れずに済むような、争いの無い理想の世界。

あらゆる不条理が駆逐された、万人が夢想するあるべき世界です。その実現のために僕は生まれました。世界の王として果たすべき責務で

あり、僕自身が志す使命でもあります」

争いを無くす。差別を、貧困を、偏った欠乏を総て無くさせる。不遇の悲劇を知るならば、誰もが一度は思い描く理想であり、やがて

実現は出来ないと現実には妥協して諦めるだろう夢想。

彼はそれを本気で実現しようとしている。皆が無理だと思いつたその夢想を、レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイだけは現実に出来るのだと信じているのだ。

気負いもなく発せられた少年王の宣言。それを聞いた直後、甘粕は弾けたように大笑した。

「ふふふふふふふ、くはははははははははははッ！

万人の理想、争いの無い世界ときたか。なんともまた、真顔で言うことかよ、おまえ。

確かにそれは正しい、とても綺麗な理想だろう。だが同時に、人が人である限りは不可能な理想でもある。

理解しているのだろう。人類の歴史とは闘争に彩られている。およそ世界から争いが根絶された時代はなく、またそれがあったからこそその進歩である。

人間の世界と、争いは切り離せん。それを知りながら、本気でそんな事を言うつもりかよ?」

煽るような言葉だが、口にする甘粕の表情にあるのは明らかな好感だ。

甘粕は決してレオの語った理想を否定してはしない。誰もが夢想と諦めるものを、自らが成すべき事だと言い切った彼の事を認めてすらいる。

むしろそこに真を見出したからこそ、殴りつけるような真逆の思想をぶつけているのだ。

「かつて何人もの賢人、聖人が同じ事を思っただろう。だが結局は彼らも現実に敗れ、闘争は淘汰される事なく今日も続いている。

おまえならそれが出来るか? 誰もが成し得なかった前人未到の理想世界、おまえこそそれを成し遂げるのだと言うのだな?」

「ええ。単なる夢では終わらせない。これは何の根拠も無しに言っているわけではありません。

現在の地上の3割が、西欧財閥の完全な掌握下にあります。過去の歴史においても、これほどの勢力の版図を築き上げた例はありません。言い方を変えるなら、世界征服という概念に最も近づいた実例でしょう。そしてその完成は、もはや時間の問題です。

先人たちの覇業において難問だった征服の達成とその後の統治。僕はそれを最初からクリアしている。ゆえに僕はこの先、理想の実現のために全力を注ぐ事が出来る。これは先達の王たちには無いアドバンテージでしょう。

ですが何よりの理由は、人々がそれを望んでいるからです。西欧財閥の支配地域において、体制への不満は一切上がっていません。そして支配外の人々も、我々の管理を受け入れる者は日に日に増えていっ

ています。彼らも既に、意識の底では理解しているのですよ。もはや人類に、答えのない変動は不要であると。

僕は王という名の調停者です。世界がそれを望んでいるからこそ、僕は王として君臨する。長らく人類が求め続けた理想、見果てぬ夢だったそれを実現するために。

そのためにも僕自身が聖杯を手に入れなくてはならない。再び世界を混迷へと落とさないために、そして何よりも、真に人々を救済できる、人を超越した王者となるために。

——僕が聖杯を手に入れた暁には、人類は楽土の千年期を迎える事でしょう」

それは大言ではない。現実の見えていない愚者の戯言では決して無い。

王の口から発せられる理想は、来たるべき未来の絵図だ。ただの夢ではない。確かにそれはあるのだと、耳にした人々は思うだろう。

レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイという存在が、それを信じさせる。彼の王聖、完成された統率者としてのカリスマが、人の心に救いの光を灯すのだ。

救済の理想を語る少年王を前にして、甘粕正彦が抱くのは純粹な尊敬であつた。

その理想は、甘粕が思い描くものとは異なっているだろう。

だがそんな事に彼は頓着しない。正しいか誤りなのか、その判断さえ重要だとは感じていない。

重要なのはそこではない。理念の性質がどうかではなく、それを万人へと伝え渡らせるだけの光を有しているかが大切なのだ。

たとえどれほど整った理念であろうと、語る者が小粒では説得力など有りはしない。そんな者の理想に誰が付いていこうとするだろうか。

レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイの輝きは、夢想をも信じさせる。ともすれば甘粕自身でさえ、あるいはと思わせるほどに。彼の王聖に欠けたものはなかった。

あえて言うなら、もう少し夢見がちな熱さの方が甘粕の好みでは



あつたが、それは少年王の在り方とは違ふのだろう。ならば否定する気も彼には無い。

ハーウェイの王の理念は道理に適っており、語る本人にも万人を照らせる光がある。ならば甘粕にとって、それを認めるのは至極当然の事だった。

「なるほど実に素晴らしい。遍く理想を現実のものとし、人々に救いをもたらすと豪語するおまえの勇氣。感服したよ、見惚れるほどに。

——ゆえに当然、俺と戦う覚悟もあるのだろうか？」

そう、甘粕正彦はレオナルド・ビスタリオ・ハーウェイを認めた。だがそれは、決して彼の味方になる事を意味しない。

甘粕にとって人間の繋がりとは殴り合いの関係だと定義される。十人十色、誰もが等しく異なっているのだから、衝突は必ず起きると。我も人、彼も人。その敬意を持ってぶつかり合い、果てにこそ真の理解があると信じている。極論の理念だが、確かな道理もそこにはあるのだ。

だからこそ、甘粕正彦は戦いこそ所望する。

戦う事が好きなわけではない。だが人から輝きを引き出すには、その方法こそが最も適切だと思うが故に、決して迷わない。

この時点で少年王の理念からは大きく外れていたが、彼はまるで頓着していなかった。

人を愛し、その強さに期待するからこそ殴りつける。それこそが甘粕正彦の信念なのだから。

「もちろんです。些か心苦しくはありますが、それが必要な事だとも理解しています。

集団心理において、如何なる思想にも一定数の離反者は常に発生します。これは仕方ない事であり、それが未だ社会の中で許容できる規模ではない以上、間引きはしなければならぬ行程だ。

あなたがた反抗勢力は、<sup>レジスタンス</sup> 僕らの支配圏を農場と形容するそうですが、その表現に従うなら羊になれない人間には死んでもらうしかない。未だ磐石と成りきっていない今だからこそ、その選別は断固として行わなければなりません。

僕は断じて、綺麗事だけの理想論を語っているのでは無いのだから」

そして優しき少年王もまた、戦いを否定しても戦いを知らないわけではない。

他者を尊重し、その価値を認める。敵であつても、敵意のみで排除はしない。そして友誼を結ぶように語りながら、いざ戦いとなれば迷いはないのだ。

常人では真似できないその感性。彼は人の優しさを持ちながら、王の厳しきで剣を取れる。

掲げる理想の正しさも、聖杯に最も近い者の一人として不足はなかった。

「なので残念だとも思っています。甘粕正彦殿、あなたほどの人物と、こうして手を結ぶ事が叶わずに争う結果となった事が。

もしもあなたが西欧財閥へと身を投じてくださっていれば、地上の紛争も5年は短縮され、また後の社会でも大いに貢献できた事でしょう。ですので、ひとつ訊いておきたい。

地上での実状を分からないあなたではないでしょうに。なぜ無益な敗北へと向かう反抗勢力を率いて戦い続けるのかを」

「評価していただき光栄だが、俺にもまた理想とするべき世界の絵図があるのではな。

管理される社会。理想とされる平和。そこに果たして人が輝ける場はあるだろうか。

徹底して矯正された思想は、もはや自己主張さえ不要となる。総ては社会の中の歯車として、己の生涯を他者に委ねてデザインされる。被管理者と管理者の関係、その管理者もまた別の何かに管理され、頂点に立つだろうおまえも社会の理念そのものに管理される。

純白の世界は美しいのだろうか。だが人とは、純白のみの生き物ではない。我欲、執着、そうした漆黒の面でしか成せない事もある。それらを余さず封殺してしまえば、やがて人は自ら立ち上がる事さえ忘れてしまう。

己の脚で立つ事も出来ない者など、生物として失格だろう。墮落し

弱っていく人間の姿を、捨て置く事など断じて出来ん」

「つまりは生きるための戦いを肯定したい、と。その理屈は分からないではないですが。」

しかし現在の世界において、その生き方が許されるのは一部の強者だけです。あらゆるものが欠乏した現状で、分配なく資源を放置すれば、大半の者に待つのは飢えと混迷。そこで生きていける者は極々限られてしまう。

甘粕殿、あなたは全ての人間に、”自分と同じ強さ”を求められるのですか?」

「無論だ」

一切の躊躇もなく、甘粕は断言した。

「我も人なり、彼も人なり。勇気と覚悟を持って立脚した人間は、必ずや輝かしい明日を掴めると信じている。人は弱くない。ただ、その強さを発揮する術を忘れているだけなのだ。」

その術を皆に授けるために、俺はこの月へと上った。人々に試練という名の喝を入れ、その勇気を取り戻させるために。

——そう、夢を諦めなければ、いつか必ず叶うと信じているのだから」

そう語った甘粕に対し、レオは初めて変化を見せた。

ポカンと呆気にとられ、甘粕の言った事をしばらくかけて吟味するように沈黙している。

やがて、やれやれと肩を竦めてレオは苦笑した。

「困りましたね。僕はあなたの事を、もつと現実を見据えた人物だと思っていたのですが。まさかこれほどの”ロマンチスト理想家”であったとは、流石に予想外でしたよ。」

理解しました。どうやら僕らとあなたの思想の間には大きな隔たりがあるようですね」

「是非もあるまい。共に大義を抱くのなら、衝突があるのも必然。おまえにとっては俺が、俺にとってはおまえこそが、事を成すために越えねばならない試練なのだろうさ」

「試練? なるほど、ふふ、試練ですか。そうですね。そういうものも

ありますか」

どこか楽しげに呟くレオ。

常勝の王にとつては試練の概念さえ実感が沸かないのか、その表情には好奇心さえ浮かんでいた。

少年王に欠けているものがあるなら、やはりこれだろう。

敗北の経験がない。逆境に立ち合い、挑むことを知らない。生まれながらに全てを有する完璧性は、彼に汚点のひとつも許さなかった。

事実、今も彼は甘粕の言った試練という言葉を本当の意味で理解していない。知らないものに興味を引かれる子供のように、好奇心から楽しんですらいいた。

「ですが、あなたのおっしやる事も分かります。管理社会の完成に至った後、人々からの自立心の喪失は由々しき問題となるでしょう。

社会を完成させ、真の安寧を人類が手にした後、訪れる停滞にどう対処するか。あなたが言う所の人の勇気を発揮する機会を、如何に人々へ”提供”するか。それこそ僕の課題となるでしょう」

だからこそ、至る結論もそのようなものになる。

理路整然として筋道立てた考え方に間違いは無い。無さすぎるから、その考えには人間らしさが欠けていた。

総ての物事は理念の上で成り立つのだというように、人としてあるべき淀みが存在しないのだ。そしてレオ自身は、それを不可解だと思っていない。

完璧を望まれ、常勝であり続けた少年王には敗北の欠落が無い。それこそが”欠落”だった。

と――

「ハハハハハハハ!! なんじゃ、世界の王となるべき者と言っておるから、どんなものかと思うておったが、これほど初々しい童であったとは!

見目麗しき容姿に加え、可愛らしい事を抜かしおる。思わず愛でてやろうかと思うたわ」

哄笑を響かせて、甘粕の隣にアーチャーが姿を現す。

大仰に、見せつけるようにして、己が上だと示しながら見下した視

線を向ける。実際の身長にはそう大差はなかったが、彼女は頓着しなかった。

「我が王に無礼は許しません、サーヴァント。不躰な手合いには、相應の態度で返しますが」

「何者であれ、主への否定を許さず、か。なるほど実に頼もしい忠犬ぶり。家臣に欲しいの。」

だが、犬ならば引っ込んでおれい。わしは王たる者と話をしておく、騎士風情が出張る席ではないと心得よ」

「貴様——！」

「構いませんよ、ガウエイン。対話を望むのであれば、こちらから拒む理由はありません」

前に進み出たガウエインを、レオが制止する。

警戒と敵意こそ消えなかったが、主命には従い控えるように下がった。

「甘粕殿のサーヴァント、ですか。ストレートに捉えるのなら、日本戦国期に台頭を果たし国家統一を後一步まで完成させた、かの大英雄という事になるのでしようが」

「好きに思うが良い。物を考え答えを出すは各々の権利であり責任よ」

「ええ、ではそのように。かの王であると前提を置いて話をさせてもらいましょう。」

僕の理想は甘い、と受け取れる物言いでしたが、何か誤りでもあったのでしようか？」

「いやさ、無いとも。そなたの理想に誤りなど無い。まさしく完璧なる王器の手際よ。」

覇業が既に果たされている。おおなるほど、確かにこれは大きな利点よ。弱小から初めては時間と労力が掛かり過ぎ、如何な傑物も些細な落ち度ひとつで転がり落ちるものじゃ。

曰く、統一寸前で覇業を取り零した王、なのでな。そこは身に染みておる」

生前の己を皮肉るように、アーチャーは苦笑した。

「治めるべき国は目の前にあり、脅かす大敵もおらぬ。そしてここには類い稀なる王器あり、と。」

うむ完璧じゃ。そなたの理想は夢想到に非ず。あるいは現実に成し遂げる事も有り得るのだろうか。

安寧をもたらす治世、確固たる国の基盤、揺るがす要因は何も無し。だがわしの頭は妙な引つ掛かりを覚えておつてな。そなたが示す理想の姿に被るのじゃ。このわしと同じ乱世を生き抜いた”ある男”が。そやつが乱世の果てに築き上げた太平と、そなたの未来がの”

「……バクフ、でしたね。世界全体を見回しても稀有な実例として、長期間に渡り政権の安定を維持した王朝。それを築いた王は、あなたと同じく三英傑と呼ばれた英雄だった。」

先人の残した良き参考として、僕も知識はありますが。それほどに似ているのですか？ あなたから見て、その王と僕は」

「いや、似てはおらぬさ。愛いそなたと、あのタヌキめは随分と違う。あれは常より腹に一物どころか、幾つ物を抱えておるのか、わしでも見当のつかぬ奴であった。」

忍耐、あれを形容する言葉はそれしか知らぬ。その懐の広さ、というよりは分厚さか。そうした重苦しいまでの奥底は、貴様にはあるまい。

だがそれでも、至る境地には似通うものがあるらしい。まっこと面白いとは思わぬか？」

「さて、なんとも。僕が苦勞知らずであると揶揄されてるようにも聞こえますが」

「そんな事は大了問題ではない。確かにタヌキと比べ、そなたは忍耐を知らぬだろうが、それで何事かの結末が決まるわけでもあるまい。不遇の身に甘んじねば栄光は無いなどと、本気で抜かしておる者こそ正真のうつけよ。」

言うたであろう、そなたの理想は完璧じゃと。そなたはこの世に真なる太平を築きし器、そこはわしも認めてやろうとも。

わしが言いたいのは、むしろ後の世の事でな。これほどに似通った理念、ならば最期に至るであろう結末も、やはり同じになるのではと

思うのじゃ」

アーチャーの語る結末、安定した社会の終わりとは、諸外国の来航だ。

内部に自滅の因子は生まれる事なく、外部からの力でそれは為された。完璧に整えられた世界とは、それ故に慮外の干渉に脆いのだというように。

そうしたアーチャーの指摘を、レオは動じる事なく受け入れた。

「黒船来航、ですね。確かに今の社会がそうした外的要因に脆さを抱える面は否定しません。

ですが、過去の王朝と僕らのそれでは明確に違う点があります。管理社会の体制が真に完成したならば、地上に對外勢力はいなくなる。あなたの言う結末を運ぶ要因は、その根本より一掃される事になります」

「ク、ハハハハハハハ！ これは大きく出たものじゃ。

この俗世に、もはや我が感知できぬ場所は存在せん、と。たかだか惑星のひとつを隅々まで知り得たくらいで、それは些か驕りが過ぎるのではないか？」

「……惑星の警戒をしると？ 存在するかの確証もなしに？」

「さて、そこはどうかと言わぬが、確証なしとするのは早計だろうて。なにせ、少なくとも”コレ”を築いた者はいるわけだしな。今まで出てこなかったからと、既に滅びているものと決めつけて良いものではないか？」

月の聖杯、ムーンセル・オートマトン。

人類外のテクノロジーによる太陽系最古の遺物。その存在は必然、それを建造した超高度の文明の存在を証明するものである。

その存在が人類に友好的なものであるか、意思疎通自体が可能かどうか、そもそもどういった存在なのかさえ、現在の人類には一切掴めていない。

それらしい学説でお茶を濁せても、本当の真実を結論付けられる者は誰もいないのだ。

「わしとて何も本気で備えよとは言わん。これはな、前進を止めた生

命は、結局はそうなるのだという、いわば啓示じゃ。

安寧は人を弱らせる。これは必然、何故ならば強さとは、過酷さに対応するため会得するもの。世に必要なでない強さとは、単なる異端。広義にてその価値を見れば是非にも及ばぬ。

そなたが得難き大器であり、その理念で秩序を完成しようとも、そこに浸った人類は強さを忘れる。閉じた世界の安寧に満足し、真に外へと向き合おうとはせぬ。そしてその頃には、そなたはこの世におらぬ。

そんなものよ、人とは。所詮、尻を蹴り上げられねば一丸の意志は抱けん。ならばわしは、乱れ定まらぬ世こそ迎え入れよう。無益な損失、無情の死別、それこそ変化の痛みであり、変革のうねりそのもの。この欲界が持つ価値であるとな」

故に、アーチャーは甘粕へと付き従う。

安寧こそ墮落、衝突こそ進歩だと定義した彼女と、甘粕は信念の上での同胞だ。

試練の世、乱世を彼女は認める。誰よりその渦中を駆け抜けて、十分に咀嚼した後での結論である。今更そこに迷いの弱さはない。

「それは暴君の結論に過ぎない、革新の王よ」

そんなアーチャーへ真つ先に反論したのは、控えていたはずのガウエインだった。

「混迷の闘争を良しとして、それを進歩などと捉えるのは、あなたの世界が閉じていたからだ。

言語が違う。習慣が違う。たったそれだけの事で、異界人とも見紛う異民族。勝たねば国が、歴史が、民族が根絶やしにされるという恐怖。敵の一切を巨悪の化身として、その狂信で以て武装し一丸とならねば対抗できないそれらの感情を、あなたはまるで理解していない。

革新を追い求めた暴君よ、あなたの治世は一時、民草に受け入れられたでしょう。その覇業は憧憬の対象となり、築き上げた富は愛された事でしょう。ですが、決して重きを預けられはしない。

人々が心に求めるのは安寧。保障された明日こそ、力無き民は切実に望んでいる。覇業の夢がもたらす栄光など、一過性のもの。過ぎ去



れば消えるばかりの空の形骸でしかない。やがては覚め、時と共に忘れられる。

正しき王とはそうではない。王の理念とは死のみで終わるものではない。その秩序は時を過ぎて尚、受け継がれるべきものだ。それは夢や革新ばかりを求める暴君には決して成し得ない」

「よく吠えよ。先までの忠犬ぶりは何処へいったやら。」

だが忠義の騎士よ。その言い方では、王とは即ち正しさに仕えるべきと聞こえるが？」

「それでいい。王は理念に身命を捧げ、民は国家へと奉仕する。秩序とはそれでこそ完成する。」

欲望とは解き放つものではない。飼い慣らすものだ。レオの統治こそがそれを成す。欠落なき完璧な王の存在が、滅びに瀕する世界を救済へと導くでしょう」

ガウエインは断言する。主君<sup>レオ</sup>の存在こそ世界の光だと。

主を絶対と奉ずる忠節は、見方を変えれば盲信とも取れる。だが盲信も、確固たる意志が備わっていれば、ひとつの騎士道の在り方となるだろう。

傀儡の如く滅私に務め、主の振るう剣に徹する。迷いなく貫けば、その刃は研ぎ澄まされる。

人である前に、騎士という名の剣であれ。それこそが騎士<sup>サー</sup>・ガウエイン卿の掲げる忠義だ。

「申し訳ありません、レオ。騎士として出過ぎた発言でした」

「いいえ、ガウエイン。そのようなあなたを見るのは珍しいので、僕としてはむしろ喜ばしい。そしてあなたが言ってくれた事は何も間違っていない。」

人が本当の意味で人を救うには、人を超えなくてはなりません。聖杯を手に入れる事で、僕はそれを遂げる。先達者の誰もが成し得なかった事を、僕の手で成すとしましょう」

「そこが童の物言いというのだ。人を超えた王となる？ そのような世迷言を本気で口にする辺りが、なんとも無垢で可愛らしいわ。人は、人にしかなれぬというのに。」

そなたは完璧であるが故に欠落を受け入れられず、ならばこそ正されぬままに王として君臨するであろう。そうして築かれた世界は、さぞや優しく潔白なものとなるだろうて。

ああ、認められんな。そんな世界、つまらないにも程があるが」  
虚勢のないレオの言葉に押捺を被せるアーチャー。

同じ王であっても、彼らの見る先は異なる。否、同じ王だからこそ、2つの王道は交わらない。

王道とは、世界に敷くルールそのものだ。如何に正当性を持つとも、複数のルールが両立したままでは成り立たない。

基準は要るのだ。それがどういう種類であれ、社会を維持するには不可欠となる。正義が2つあれば争いが生じるといのように、戴く王道は定めなければならぬ。

「まあ、そう焦ることはない。お互いにな」

衝突しかける両者の主張に、待ったをかけたのは甘粕だった。

「今は互いに他の敵がいる。激突の時はまだ先のことだろう。そこへも至れず途中で敗れる程度なら、そんな者の主張など今聞いたところで意味はあるまい。」

進んで行けば、やがて決戦の時は訪れるのだ。そこでこそ互いの論と拳を大いにぶつけ合わせよう。何の気兼ねなく、全力でな」

「……そうですね。ええ、確かに。これは些か性急でした。僕も少々熱が入り過ぎたようです」

レオもまた、その制止を受け入れる。

彼等の対戦者は、それぞれ別にいる。この準備期間モラトリアムで向き合うべき相手ではない。

それは正論。彼等も自らが相対する者を軽んじるつもりは、お互いになかった。

「いずれその時を楽しみにしています。あなた方との戦いは、僕もまた本腰を入れなければなりません。ええ、あなた方こそ僕たちの好敵手と認識しましょう。」

どうか御武運を。お互いに、相対する日まで」

一礼し、歩き去っていくレオ。それに従うガウエイン。

両傑物の氣勢に圧され、異質と化していた空間にも、ようやく弛緩した空気が流れた。

「まさかそなたから止めに入るとは、意外であつたぞ、正彦」

「そう不思議でもあるまい。言つたようにこの場での衝突に意味はなく、消化不良で終わるのは目に見えている。つまらん消耗なら避けるべきだろうさ」

それに、と。口調に熱を滲ませて甘粕は続けた。

「俺をあまり喜ばせるなよ、アーチャー。ここに来てからどうにも抑えが効かん。己でも自分を律し切れるか分からんだ。思わず興が乗りすぎて、破綻も気にせず駆け出してしまふかもしれない」

「そなたの場合、それは冗談でも何でもないであろうな」

呆れ気味に溜め息をつき、アーチャーは話題の矛先を切り替える。

彼等が本来向き合うべき相手。7日目に雌雄を決する対戦者のことに。

「是非に及ばず、我らの敵手は奴等ではない。何を思おうと、所詮は獲らぬ皮の算段よ。」

我らの相手は、あの小童。無論、忘れてはおらん。これを如何に処すか、それも決めておる。

むしろそなたこそどうなのじゃ、正彦。あの手合いはそなたの信条に最も相容れぬ輩であろう。どのように向き合うつもりじゃ？ 未だ道化として浮遊する、なんとも哀れな小童と」

「変わらんさ、何も。たとえ相手が誰であれ、この月で相對したならばする事は決まっている。」

我も人で、彼も人なり。ここに立つ我らは対等、ならば遠慮も不要だろう」

その言葉を、戦乱の世を生き抜いた王はどう受け取ったのか。

笑みを、友好とはかけ離れた攻撃的に口元を吊り上げて、アーチャーは頷いた。

「であれば、もはや留まるまい。為すべき事を為すとしよう。」

せいぜい思い知つてもらおうぞ。我らという敵が、如何様なものであるのかを」

アーチャーに応えて、甘粕も笑う。

凄絶な、だが決して侮蔑を含まない笑いは、その姿を何倍にも巨大化させたど錯覚する覇気が伴われている。

笑いとは元来、生物の攻撃性を表すものだという。少なくともこの2人にとつて、その理論は誤りではなかった。

闘争という舞台において、主演を張れる強さを持った英雄、益荒男。だが舞台とは、彼らだけでは回らない。闘争とは他者との衝突であるのだから、必然として敵側となるべき相手がいる。

それが同じ英傑であれば、舞台はまさしく肝である。両雄並び立つ、その瞬間は紛れもなく大一番で、誰もが盛り上がる場面だろう。だが相手が道化であるならば、その場面とは蹂躪劇。主演がいかに強く、雄々しく輝かしいかを示すために捧げられる噛ませ犬だ。

聖杯戦争1回戦、その舞台の開幕は近い。

甘粕正彦という英傑と、相対せねばならない哀れな道化。そんな役者に彩られた闘争が、いよいよ回りだそうとしていた。

その光景は、幻想の海を思わせた。

ムーンセル内に作られた霊子虚構世界『SE・RA・PH』。

人間の視点からでは光の集合に過ぎないそれは、魂を霊子化できる魔術師<sup>ウィザード</sup>には情報のカタチを知覚できる。

彼らの認識が捉えるその姿は、海の中の世界。正しく海中という意味ではない。見通せない深淵へと抱く神秘として、海の名を冠した幻想の風景が広がっていた。

情報の海に漂うもの、それは”船”という記録。

沈没船。かつての栄華を思わせながら、海底に朽ち果てる姿を晒すそれには、世の無情さを示すような哀愁と孤独が満ちている。

載せていた夢や財宝も、全てが打ち棄てられて水底の闇へと消えて

いく。誰かに拾い上げられるその日まで、再び陽の光に当たる事は決してない。

聖杯という深部まで続くS・E・R・A・P・H、その第一層。そこに築かれた迷宮が、彼等の闘争の舞台となる場所だった。

「さあシンジい？ アタシを働かせるための”アレ”は、たんまりと用意してあるんだろうねえ？」

神秘を湛えて流れる海のアリーナで、そんな幻想をまるで意に介さない声が響く。

強欲で、享樂。声ひとつからでも読み取れるその心象は、賊徒という形容こそふさわしい。

闇夜に紛れて働く盗人、という意味ではない。大胆に、荒々しく、豪快に己を見せつけて憚らない。大波のように押し寄せる略奪を望むそれは、正しく”海賊”と呼べる存在だ。

サーヴァント・ライダー。間桐慎二が契約した英霊。

財宝を求めど執着せず、刹那の享樂を追求した女傑は、聖杯戦争に参戦しても何一つ変わらない強欲ぶりを発揮していた。

「おまえ、一体どれだけ踏んだくる気だよ!? ついこの前に散々稼がせてやったばかりだろ!」

「どんだけって？ そりゃあ踏んだくれるだけさ。財宝ってのは幾らあっても困らない。今までの欲望じゃあ使い切れねえほどに積み上げたなら、今度はもつとド派手なことをすりゃあいい。

アタシにとって金は人生の潤滑油さ。注ぎ込めば注ぎ込むだけ強くなる。手にした成果がデカイほど、次の冒険に懸ける夢もデカくなるってもんだぜ」

「チツ、分かってるよ。だからこうしてアリーナにハッキングして、財宝を増やしてやってるんだろ」

常ならば軋轢にしかならないシンジの独尊も、この相手に対しては完全に上滑りしている。

噛み合わないとも見える2人だが、破綻せず上手い具合に回っているのも、その放蕩さ故か。

「いいね、いいねえそうこなくっちゃ。金払いのいい大將マスターを持って、ア

タシもサーヴァント冥利に尽きるつてもんだ」

「ふ、ふん、まあ当然だね。言っておくけど、誰にだって出来る事じゃないんだよ。天才的ハッカーであるこの僕だからこそ出来る芸当さ」  
「もちろん分かってるさあ、シンジい。アタシは幸せ者だよ。」

だからこれからもよろしく頼むぜえ？ たんまりと稼がせてくれよ、<sup>マスター</sup>大将」

「……いや、待て。言つとくけど、ハッキングだってそんなに楽じゃないんだからな？ あんまり調子には乗るなよ——つて、聞いているのかよ!？」

<sup>アリーナ</sup>迷宮を進みながら、そんな掛け合いを続ける主従。

それはある意味で仲睦まじい、微笑ましいとも言える光景だった。だからこそ、彼等は失念している。

神秘的と見える光景も、所詮はまやかし。本質にある事柄からは程遠い。

ここは戦場。自身の担い手たる最強を選び出すため、<sup>トライアル</sup>ムーンセルが敷いた生存競争。

心の緩み、無防備な己を曝した者には、手痛い返し風が待っているのだと。

「……あん？」

真つ先に気づいたのはライダーだった。

彼女とて英雄、歴史に名を残すほどの功績・偉業を成し遂げた存在である。

英雄であるならば、自身に迫った危機に対する感覚は必須。難行を乗り越えて英雄譚を打ち立てるには、それこそ幾つもの命の危機を越えていかなければならないのだから。

「？ なんだよ、ライダー。どうしたんだ？」

「……あー、シンジ。ちよいと悪い知らせがあるよ」

その点において、ライダーはひとつの極致にある。

人類史において初、前人未踏の“世界一周”を成し遂げた航海者。最中で襲われた数多の凶事、それらを退け大偉業を果たした彼女には、強運の星がついている。

ランクにして、E X。評価規格外とされたその幸運は、常人の理屈を超越している。たかが不可能と評される程度なら、ライダーはいつも容易く乗り越えてしまおうだろう。

もはや直感や経験といった要因を越えた領域で、あらゆる不運は彼女を避けて通るのだ。生半可な危機では、稀代の冒険者にスリルのひとつさえも感じさせられはしない。

そんな彼女をして、思わされたのだ。

「アタシら、詰んだっぼい」

既に確信している。ここが自分たちにとっての死地であると。

いかなる幸運が味方しようとも覆せない窮地。理詰めによって構築された冷徹にして非情なる死の罠。その陥穽に転落した獲物であると自覚する。

その瞬間、幻想の海は鉄火に塗り変えられた。

罠へと嵌った獲物の姿を睥睨し、アーチャーは嗜虐の笑みを浮かべた。

「怠惰に浮いたその頭も、少しは晴れてきたか」

大海の青を塗り潰したのは、大火の赤。

幻想風景の神秘性は取り払われ、代わりに心象を占有するのは戦乱の苛烈さ。空間を遮断して展開されたそれは、戦国世の風雲児と称されるアーチャーの生涯を表す風景の一部だった。

そして無論、この空間の意義とは、単なる印象の畏怖効果のみではあり得ない。

ライダーが予感した通り、アーチャーはここで決するつもりである。そのために待ち伏せて張った罠であり、外部とを遮断するこの空間だ。

アーチャーの持つ”宝具”<sup>セカイ</sup>、その一端のみを利用して創界された

場。本領の特性こそ顕現していないが、それでも十分。今この場での意義は唯一つだ。

すなわち外界との遮断。内部で何が起きようと、それが外に露見することの無いように。

「ここまではされまいと思っただか？ 仕掛けるを禁ずる法があり、犯せしには罰がある。故に小競り合いは起きようと、本腰の死闘には至るまいと高を括っておったか？」

決戦日まで、アリーナ及び学校内での参加者同士の戦闘を禁止する。

ムーンセルより発せられたルールは絶対であり、一介のマスターやサーヴァントに破る手段はない。だがそのルールの中にも抜け道は存在していた。

SE・RA・PHからの強制介入による戦闘停止。何者も抗えない強制力を持つそれは、しかし行使までにタイムラグが存在する。その間での戦闘行為は可能であり、倒されればそのまま敗北となるのだ。

それもまた準備期間モラトリアムにやれる事の一環だ。アリーナ内での戦闘ならば強制停止を受けようとも、それ以上の罰則はない。そこで行われる短時間の戦闘も、決戦に備えて相手の情報を得るための重要な一因である。

しかしアーチャーは、これを小競り合いで済ませるつもりは微塵もない。決戦の日を待たずして、彼女はここで1回戦を終わらせるために仕掛けたのだ。

「呆けておるのか、うつけども。ここを何処だと心得る？」

競技でもしておるつもりか。いざ尋常に果たし合おうと、ああそれが望みの者もおるだろうがの。その道理をこちらまで汲んでやる理由など無いというに。

これは戦じや。万能なる釜を求め、力と知略を尽くしての修羅場であろうが。土道？ 知らぬわ、そんなもの。取れる首ならば取ればよい。敵の陣中で痴れる将など、討たれて然るべきよ」

戦闘行為の発覚と、強制停止が執行されるまでのタイムラグ。



通常ならば小競り合いに終始するはずの僅かな時間。当然ながら戦闘の発覚が遅れば遅れるだけ、介入までの時間を稼げる。

無論、ムーンセルの眼は絶対だ。如何に外界と遮断しようとも、完全に隠しきれぬものではない。だが本格的な激突まで、その事象を誤魔化す事は可能だった。

稼ぎ得たその時間の中で、アーチャーはこの戦いを決着させるつもりであった。

アーチャーのしている事は規定に反した行為だ。不意打ち、卑怯とされる類の所業である。

ならば彼女は悪なのか。他者の痛みを何とも思わぬ、英雄の誇りに悖る外道の輩なのか。

いいや、否。これもまたひとつの道理。彼女なりの向き合い方である。

戦国時代。あるべき秩序が崩壊した乱世に生まれ、激動の中を生き抜いたアーチャーは、その厳しさを理解している。

弱き者は喰われ、強き者が罷り通る弱肉強食。勝てば得て、敗れば失う。それこそが勝負事の本質であり、不変の真理だ。

得たければ、勝つしかない。弱者ならば尚の事、決して譲れないと切実に望むなら、手段を選んでなどいられない。強者の道理で卑劣だ何だと喚き散らすほど無様なものはないのだ。

我も人、彼も人。対等であればこそ、そこに甘えも容赦も許さない。それが戦いの場に立つという事。互いの命を懸ける以上、どんな言い訳も通用しない。

「戦乱とは、火の車よ。回れば多くを産み出しもするが、同時に物も命も尽く消費する。程を弁えずに回し過ぎれば、後には燃え付き果てる結末のみじゃ。」

ならばこそ巧く立ち回れ。消費と獲得、前者を抑えて後者をより多く。競争を出し抜けた者が多くを得るは当然の筋というもの。労せず功が得られるならば、それこそが至上の一手である」

悪辣を嫌う義憤はある。正道を嘲笑う邪道も解している。

彼女、アーチャーは中庸だ。革新の王は正しく、手段を選ばない

”。

定型に囚われない型破り。善事も悪事も等しく利用して目指す望みに到達する者。世に新しい価値観を産み出すのは、何時だってそうした人間であるのだから。

「あの小僧レホのいう世とは、強弱の均一化じゃ。強きは弱きに、弱きは強きに各々合わせて格差を縮める。突出した個を無用とし、一が全となり機能する。

ああ、民どもは喜ぼうの。だが必然、その脚は遅くなるのだ。わざわざ弱きの歩みに合わせて進むのだから、遅くならないわけがあるまい。まして安寧のままに満足すれば、やがて脚を止めるは必定よ。

いかんじやろう、それは。強きを下げるな、弱きが追いつけ。さもなければ人の歩みは、いつまでも滞ったままであろうが」

鉄火より現出する銃砲の総列。

火縄銃・種子島。アーチャーの戦乱を象徴する兵器が、空間を埋め尽くして展開される。

それは内の獲物を囲んで逃さぬように。あらゆる逃げ道がここに封殺された。

「死せよ殺せよ血を流せや。欲するも未来があるならば、何を厭う事があるろうかよ。

それさえ忘れたならば、是非も無し。そんな輩は死ぬが良い。関わってはこちらの歩みが遅れようが」

呆けた墮落者に未来はない、と。

その掌中に捕らえた愚かな敵対者へ、無慈悲な殺意をアーチャーは告げていた。

## 1 回戦：戦の真

聖杯戦争に参加するマスターらには、各々に一つずつ個室を与えられる。

通称、マイルーム。校舎2階の教室の扉を介して行き来できるそれは、ムーンセルよりその機密性を保障された完全なプライベート空間だ。

他のマスターが侵入する事は不可能だし、ここでの会話や出来事は絶対に外部へ漏れない。ムーンセルも記録こそしているものの、内容を閲覧するのは特記事項が起きた場合のみである。

戦いへ向かう者たちのための拠点であり、唯一の憩いの場。身体と心を完全に休める事が許される、聖杯戦争の最中において参戦者たちの家にも等しい場所なのだ。

デフォルト状態でこそ外観通りの教室だが、基本的にその改装は自由である。

少なくともその部分で、ムーンセルからのプロテクトはない。魔術師ウィザードの力量次第で、如何様にも変化させる事が可能だ。

その内装も、空間そのものの広さに至るまで、マイルーム内に留まる範囲での干渉はほぼ無制限。優れた術者であれば広大な大自然でも、豪華な宮殿にでも設定できるだろう。

そうした自由が許された空間で、だからこそその内装は極めて異質な体を為していた。

一言で言うなら、礼拝堂。だがそこに神聖さは無く、毒々しいまでの狂気が充満している。

喻えるなら、調律された混沌そのもの。基督教の係累である事は間違いないのだが、価値観の融合と偽装を繰り返した結果、もはや別種にまで堕ちた畸形だった。

ステンドグラスに描かれたのは、戯画的な印象と雑多な原色が百花繚乱と咲き乱れた曼荼羅模様。二十六人聖人の殉教、島原の乱、その他無数にある弾圧の歴史が、恨み晴らさしておくべきかと呪怨を込めて

刻まれている。

その名を、隠れ切支丹。日本国にて禁教とされ、長い歴史の中で迫害を受け続けてきた宗教観。その教義における悪魔崇拜、それを行うための祭壇だった。

自身の拠点であり、休息の地とすべき場所に、このような異形の聖堂を設定すること自体、極めて異端の発想だろう。まともな神経の持ち主ならば、この空間の禍々しさと枕を共にしようなどとはまず考えまい。

ならばこの聖堂の主は常人からはかけ離れた感性の持ち主という事になり、事実それは間違っていない。マスターも十分に逸脱した存在だが、何よりそのサーヴァントこそが、この空間にある意味で最も相応しい存在であると言えるのだから。

かつて『魔王』と称されて、自らもそう名乗り上げた英霊<sup>アーチャー</sup>。

彼女はむしろ原典となった教義を受け入れた側にいるのだが、それをもって読神者の定義から外れる事は有り得ない。

何故なら、彼女にとって宗教とは利用すべきもの。その教義も概念も余さず理解して、その上で利用価値ありとして自らの道具としたに過ぎない。

ある意味で、彼女こそ神々への最悪の冒読者といえるだろう。非実在存在への信仰心を持たず、その概念を定義化して道具としての型に落とす。つまりは神秘性の否定であり、宗教意識からの解脱であるのだから。

神からの教えではなく、人間自身の自由と欲望を肯定する。そうした考え方自体が悪魔崇拜<sup>サタニズム</sup>の教義の一端であり、革新の王たるアーチャーが体現するものであった。

だから、その感情までも利用する。

長らく本道の教えから離れた教義は、もはや本来のカタチとは全く異なるものに変容している。原典の基督教とは別の宗教だと言ってもいい。

それ故に、そこには原典以上の狂信がある。積年に渡り認められず、虐げられてきた怨嗟の念。単純な善悪二元論の教義では成し得な

い、負の方向へと奉られる狂気の象徴こそ、この礼拝堂だ。

ある意味でこの宗教が生まれたのは、最初期に基督教を受け入れた己のせいだと言ってもいい。後の政策がどうであれ、その狂気を引き受ける役は自分であるべきだと。

魔王たる己には、怨念という名の祈りこそ似合いである。彼等の狂信を一身に浴びて力と変えられるように、この畸形のマイルームは存在していた。

連鎖する怨念の上に君臨する魔人アーチャー。その彼女は今、冷然な殺意を湛えている。

笑みのひとつもない。殺戮に快楽など見出さず、されど目的のためならば女子供でも焼き払える酷薄な意志で、その手に刀を握っている。

ここはマイルーム、サーヴァントであるアーチャー以外に立ち入れる者は1人しかいない。手にする刃は、必然として唯一人の人物にか向けられない。

刃の先に立つのは、甘粕正彦。

怨執渦巻く曼荼羅の下、主従であるはずの2人が対峙していた。

ライダーは考える。窮地に陥った己を理解し、そこまでの自らを省みていた。

どうしてこうなってしまったか、そう問えば理由はやはり油断だろう。自分たちの相手がどんな奴らか、それさえ口々に知ろうとしてい

なかった。言い訳のしようもない。

生前ならば流石にあり得なかつたろう。かつて成し遂げたあの“航海”は、こんな迂闊さを晒して実現できるほど甘いものではなかった。

大将マスターのノリに付き合ひすぎたか。自身のいい加減さに、我ながら呆れ果てる。こうなるだろうとは予想できたのに、気分ですれを無視した。

この戦いは大将マスターのもの。ならば楽しめている限りは、そのノリに付き合つていこう。こいつは見ての通りの阿呆だが、そういうのも悪くはないと思つていた。

その結果がこれならば、アタシもたいがい間抜けだねえと、もはや笑うしかなかった。

とはいえ、殊勝に降参などしてやるつもりもない。

せいぜい意地汚く抵抗してやろうと、得物の二丁拳銃を抜きかけて

銃声が響き渡る。

ライダーのものではない。目に見えてる火縄銃からではなく、認識外の銃弾に手から得物を弾き飛ばされた。

空間内に浮かび上がるように出現する、新たに増加される火縄銃。余さず自身へと向けられるそれらの銃口を見渡して、ライダーは状況を悟つた。

つまりはこの空間自体が敵の陣中。

包囲網は完成され、穴はない。抵抗してみせようとすれば、即座に無数の銃火が降り注ぐ。

即ちこれは致死の罫だ。のこの何の準備もなしに踏み込んで、今さらどうにか出来る余地を相手が許しているわけがない。

ライダーの前に、軍装の少女が姿を現す。

その気配はサーヴァント。奇抜な格好に笑みを浮かべ、腕を組んだ態度は余裕そのもの。

外見こそ小柄の少女だが、纏つた覇気と冷然な視線が、見かけ通りの存在ではないと雄弁に語っている。

特に眼が危険だと、ライダーは思った。こういう眼をした奴は、実にえげつない事をやってのける。勝つためならば手段を選ばず、絶対の確信を得ない限りは油断しない。

こうした手合いが姿を見せたという事は、既にその確信がある事の証左だった。

これは詰みだと、そう感じた己の判断をライダーは改めて認識した。

ここから自分が逆転に持っていく事はどう考えても不可能だろう。

この場の趨勢は既に自分の手を離れている。どうなるにせよ、それは別の誰かの采配によるもの。自分の足掻きはもはや無意味だ。

後はこのまま流れに身を任せるだけ。命のチップはもう卓の上に置かれていると理解した。

観念したと示すように、ライダーは両手を上げる。

それでもその顔には、未だふてぶてしいままの笑みが浮かんでいた。

「……は？ え、何だよこれ？」

そして、自らが死地にいる事さえ正確に認識できていない少年は、目の前の事態にも困惑と不満を口にする事しか出来なかった。

「ふざけんなよッ！ こんなルール違反だ！ 決戦日の7日目まで戦闘は禁止されてるはずだろ、運営は何をやってんだよ！」

「つうか、ライダー！ おまえ、散々偉そうな事を言っておいて、なに呆気なくやられてるんだよ！ 僕のサーヴァントなんだから、ちゃんと強いところ見せてみるよ！」

ただ感情的に喚き散らすばかりの慎二には、自分の現実がまるで見えていない。

全てはゲームだから。所詮、遊びだからと、そんな意識が根底にあ

るから、本当の意味での真剣に成りきれない。戦争という今の状況にリアリティを感じていないのだ。

何もかも、履き違えている。ルールは権利で、それに守られているのは当然だと。恥さえ知らぬその意志は惰性の腐臭を放っていた。

「くそ、なんてクソゲーだよ！　こんな不正を許してるなんて、自由性にしたって程度があるだろ！　誰も彼もチートに手を出したりしたら、ゲームとして成り立たないだろうが！」

だからこそ、自らに近づくその足音に、慎二は気付かない。

吐き出す不満にばかり意識がいつて、最も注視しなくてはならない相手の事を忘れている。

拳の握り締められる音を、鮮烈に向けられる意志を、覚悟と気概が無いから素通りして気付こうともしていない。

「ムーンスセルは何してんだ?!　こんなのペナルティものだろ！　さっさと——」

「おい」

それでも、声が掛かったなら、流星に意識もそちらを向く。

故に反射的に、声のした方向へと慎二は振り向いて——

頬に、途轍もなく熱く重い衝撃が走った。

一瞬、何が起こったのか分からなかった。

その衝撃に押し出され、身体は後方へと弾き飛ばされる。

受身も取れず地面に叩きつけられて、そこで彼はようやく自分が殴られたのだと理解した。

「どうした？　まさか殴られないと思っていたか？　俺たちは聖杯を懸けた敵同士で、おまえもその当事者だろう。殴られる理由は十分にある。だからおまえも、存分に殴り返してくるがいい」

慎二は呆然としたまま動けない。

顔に走った痛み、殴られたという現実。浮ついた頭には、それらが実感となって追いつかない。

それでも感じる熱さは本物だ。じわじわと残留する痛みにも、少しずつ実感となってくる。

だがそれを待つ暇もなく、腹を蹴り上げる強烈な一撃が、慎二を跳



ね飛ばした。

「があッ——!?!」

「ゲームだど? ああなるほど、確かにこれはゲームだとも。互いに則ったルールがあり、共に報酬を賭けて勝ったか負けたかで争っている。単に懸かっているものの重さが違うというだけで、本質で見ればこの闘争もゲームと呼んで差し支えない」

打ち上げられた身体が、何度かのバウンドを経て止まる。

激しく咳き込む。息ができない。衝撃に内容物が逆流しそうだった。

これが生身の身体なら、確実に嘔吐していただろう。まるで経験のない激痛に、慎二は為す術もなくのたうち回った。

「だが、如何にゲームでも、やはり対面に相手を置いてこそだろう。姿も見えない、声も聞こえない、相手の意志も介せん勝負事など、機械相手の自演と何が違う?」

そんな慎二の様子にも頓着せず、甘粕は更に言葉を重ねていく。殴りつけ、蹴り上げた本人が、まるで立ち上がれと励ましているように、その声音には熱い感情が宿っている。

その意味を、慎二には到底理解する事が出来なかった。

「おま——」

言いかけたその口に、二度目の拳が叩き込まれた。

歯が折れて、舌を噛んだ。切れた口内から血が溢れ出す。

自分が何を言おうとしたのか、それさえ忘れて慎二は口元を押さえ悶えた。

「——ううううツツ!!!??」

「顔も本名も分からん相手と、画面越しにやり取りを交わして、そこにどんな絆が芽生えるという。気を使わずに楽だから? どんな罵詈雑言を吐いたところで、面と向かった相手でなければ殴られる事も傷つける事も案じずに済むからと。」

なあ、本当にそれでいいのか? そんな霞のかかったような連中から評価なり批難なりをされて、何かを得た気になれるのか? どうなんだ、ええ天才ゲーマー?」

言い募る甘粕の言葉を、慎二は既に聞いていなかった。  
まるで理解が及ばない、理不尽極まる相手から逃れようと、不格好なまま遁走しようとする。

その片足を、甘粕は容赦なく踏み砕いた。

「あ、あああああああアツツツ!!」?

絶叫のような悲鳴が上がった。

!!

ぐしゃぐしゃに捻じ曲がった己の足、そこから生じる耐え難い激痛に、幼い心は完全に自制を無くしていた。

「どうした、何を慌てている。たかが足の一本が砕けたただけだ。その程度、靈子ハッカーであるならば如何様にでも対応できるだろう。

さあ、脚を治すなり痛覚を遮断するなりで、再び立ち上がってくるがいい。許せんだろう、理不尽んに暴力を振るうこの俺が。その怒りで奮起して、拳を振り上げてみせろよ、なあ!」

そんなこと、出来るわけがない。

理屈の上では確かに可能だろう。間桐慎二の霊視ハッカーとしての能力を鑑みれば、言われたような事は十分に実践できる。

だがそれも、遊びの領域であればの話。慎二が今感じている苦痛も恐怖も、紛れもなく本物なのだ。パニックを起こした彼の心に、もはや冷静な対処など望めない。

間桐慎二は戦士ではない。どれほど虚勢の自信を張っていても、一度化けの皮を剥がされれば本性の脆弱さは隠しきれなかった。

「それとも、強制退出<sup>ロツァウト</sup>でもしてみるかね。この現状ならばその判断も無理からぬ。彼我の状態を鑑みた、冷静な判断というやつだ。優れた者ならではの、恥ともならない決断だよ」

その言葉に促されてか、思い出したように慎二はそれを探す。

切実に、必死になって、この月に来てから最も真剣な形相で、慎二は逃走を求めた。

それも無理はない。こんな痛みは初めてだった。この月に至ってからの話ではない。こんな風に正面から恐怖を叩きつけられるのが、生まれてから初めての経験だったのだ。

怖い、ああ怖い。目の前の男が、とにかく怖かった。それがどうし

てなのかと考える暇すらなく、ひたすらにそこから逃げようとして考えられない。

それは情けない感情だろう。それでも、今の慎二は紛れもなく”本気”だった。

しかし――

「……そろそろ理解してもらえたかな？　ここは現実で、逃げ場はない。前に進むには戦い、そして勝つしかないのだと」

月の聖杯戦争は、片道切符である。

どれだけ本気になろうと関係ない。逃げ場など何処にも有りはない。

この戦場に立った時点で、彼らの大半の運命は決している。数理の化身に慈悲はないのだ。

「俺も、おまえも、もはやこの月から逃げられん。己の願いを懸けて、並み居る子どもを打倒して勝ち抜く以外の道はない。だから、おまえも抗ってみせろよ。勇気を示してみるがいい。その身に宿る可能性を、俺に見せてくれ」

激賛する言葉は、相手に通じていない事もお構いなしだ。

意味不明の暴力、理解不能の期待に曝されて、苦痛と恐怖に歪む慎二の胸倉が掴み上げられる。

尚も振るわれる拳。凶相とも見える笑みを浮かべて、甘粕は彼なりの道理を説き続けた。

無数の銃口の下に曝されて、身動きの取れないままにライダーは笑っていた。

「なんだい、おたくの大将<sup>マスター</sup>。随分といい趣味してるじゃあないか」

殴られ、蹴られ、一方的な暴力を加えられる己のマスターの姿にも、ライダーは愉快げに笑みを深めるばかりだ。そこには身を案じたり、

義憤に駆られるといった様子は欠片も見えない。

「勝負を決めちまうついで、その性根までへし折ってやろうって腹かい？ いやあ実にいい根性してるよ。付き合ってるアンタも鼻が高いだろう？」

「さて。あれでなかなか抑えの効かぬ性質なのでな。まったく困ったものじゃ」

平然と答えてみせるアーチャーだが、その内心では彼女こそが最も動揺していた。

（——どういふつもりじゃ、正彦）

この奇襲の肝とは、如何にムーンセルの目を欺くかにある。

この場を整えたのも、全てそのためだ。戦闘行動が発覚すれば、即座に強制介入が発生する。

そうなれば誤魔化しようがない。ムーンセルがその強権を行使すれば、抗う術はないのだ。

ライダーを封じるまでに留めているのも、万が一討ち漏らした際の事を懸念しての事だ。

本格的にサーヴァント同士が激突すれば、流石に隠しきれない。もしも何らかの僥倖が重なり倒し損ねて、粘られでもすれば企てが水泡に帰す。

故に、この場を決するのはサーヴァントではない。勝負をつけるのはマスター自身だ。

アーチャーがライダーを抑える内に、甘粕がマスターを仕留める。少なくとも、それがアーチャーの算段だった。

想定では、ここまで長引くものではなかった。マスター同士の戦力差はサーヴァント以上である。手こずる余地はなく、すぐにでも片がつくはずだったのだ。

だが、現状はこれだ。甘粕は何故か止めを刺さずに痛ぶるばかりで、この膠着も予想外に長引いている。このまま時をかければ、今は大人しいライダーも何をしてくるか。

「おや、どうしたい？ さつきから口数が少ないぜ。ものの見事にハメてご満悦だったんだろう？ だったら笑ってなきや駄目さ。ほら、

笑みが引きつってきてるぜ」

そして、当のライダーと言えば、まるで動じた様子がない。

己の命を握られた現状にも構わず、実にふてぶてしい態度のままだった。

握ったはずの主導権<sup>ペイス</sup>が、徐々に離れてきているのを感じる。確かに噛み合っていたはずの歯車が、不穏な音を立てて擦れ始めたのが分かるのだ。

この流れは、よくない。生前の経験上、この感覚を覚えた時には、事態は想定を外れて転がっていくと知っている。

それでも、己で動くことは出来ない。ここで隙を晒せば、ライダーは間違いなく逆襲に転じてくる。それをやってのけるだけの胆力を、この英霊は持っている。

（早くその小僧を殺せ、正彦。ここにきて、よもや躊躇うようなそなたではないはずじゃ！）

思いがけない主従の意図の不一致。

過去に存在した数多の可能性の中の聖杯戦争。そこでも多くの魔術師や英霊が破滅の結末を辿る原因となったものに、アーチャーもまた苦しめられていた。

そうして地面に叩きつけられるのも何度目か、すでに慎二自身にも分らない。

全身を打ちのめされ、抵抗する力はとうに失われていたが、振るわれる暴力は終わらなかつた。

和やかな凶相を浮かべながら振るわれる甘粕の拳は、彼の気概を伝えるように熱く重い。

諦観の中に逃げる事が無いように、一撃毎に心身に強い衝撃を与え続ける。

絶望という逃げ道さえ封じられて、もはや慎二の中につまらない虚栄心は微塵もなかった。

「ご、ごめ……ごめんなひやい！」

外間もなく無様そのものの有り様で、慎二は謝罪の言葉を口にす  
る。

怪我のせいで上手く喋れず、声も震えきっていたが、それでも意図する言葉は明確に響いた。

「ごめんなさい？ おいおい何か勘違いしていないか。大体、何に謝っているつもりだよ、おまえ」

しかし甘粕は止まらない。他人には理解できない彼の道理は、ここで止める事を容認しない。

「俺はおまえに期待しているんだよ。なあ、アジア圏のゲーム王者<sup>チャンプ</sup>。

困難だと承知で挑んだのだろう。たとえゲーム感覚であつたとしても、この聖杯戦争が尋常ならざる闘争<sup>ゲーム</sup>であると知って、この場所に脚を踏み入れたのだろう。我こそ最強なりと、磨き上げた己の腕を証明するために、王者のプライドを懸けて。

いいんだぞ、それでも。行き過ぎた自尊心も、確固として貫けば輝きとなる。そこまで自身の優性を信じぬけるなら、それは紛れもない強さだろう。

だから、おまえも早く目覚めるがいい。今この時を置いて、一体いつの何処で覚醒の機会があるという。大人になるという事はな、己の行動の対価を己で支払えるようになる事だ」

慎二の胸倉を掴み上げて、自身と同じ視線まで持つていき、甘粕は告げる。

その眼に侮蔑の色はない。どれだけの醜態を前にしても、甘粕は対等の相手として見ていた。

「——ああ、そうだ。片側はいらんない」

そう、対等であるからこそ、容赦もまた無いのだ。

手を抜くとは、相手を侮るという事。格下と決めつけ見下す行為に他ならない。

やるならば徹底的に、本気で潰す覚悟で当たらねば目覚めるものは



「ま関係ないかもしんないけどね」

アリーナ内に鳴り響く警告音<sup>アラート</sup>。

結界が解かれた事で、誤魔化されてきた内部の状況は即座にムーンセルへと察知される。

強制介入が開始された。たとえ今から戦闘を始めても、決着に至る間もなく遮断してしまう。

もはや事態は己の手より逃れたと、アーチャーもそれを認めなければならなかった。

「いやあ、副官は難儀なもんだねえ。思い通りといきたくても、大将の意向ってモンがある。そうそう好き放題とはいかないもんさ。アンタ、そういうの慣れてないんだろ？」

分かるんだぜ、アンタ、上から駒を動かさなにやあ気が済まないタチだろう。あんまり、誰かについて戦うのは得意でないと見たね。随分と苛立っていたじゃあないかい。

オイオイ、さつきまでのドヤ顔はどうしたよ。そうガンを飛ばされちゃあ、悔しがつてるって告白してるようなモンだぜ」

どこまでも豪胆に、ふてぶてしい態度のまま、ライダーはアーチャーを通りすぎる。

その足で向かったのは、未だ起き上がってこれない己のマスターの元だ。

「ホラ、慎二い？　いつまでも呆けてるんじゃないよ。船の戦じゃあ、砲弾で手足が吹っ飛ぶなんざ毎度の事さね。それでもやせ我慢してみせんのが、本物の海の男ってやつだよ」

強引に慎二の身体を引き起こして、抱え込む。

慎二はほとんど反応せず、時折苦し気な呻きを漏らすばかりだが、ライダーは構わなかった。

彼女が慎二の懐から取り出したのは、リターンクリスタルと呼ばれるアイテム。このアリーナからの帰還手段であり、全ての参加者が購入できる基本装備だ。

ライダーたちにとって敵の目の前だったが、頓着していない。

既にこの場での衝突は流れた。ライダーはそう判断し、意識さえ向



けていなかった。

「待てよ、ライダー」

それを呼び止める甘粕の声。

呼ばれたライダーは、素直に彼の方へと振り返ってみせた。

「なんだい？」

「アーチャーの銃火に曝され、己のマスターを痛め付けられる中でも、おまえは動じていなかったな。俺がこうすると分かっていたのか？」

「はあ？ そんなもん、分かるわけないじゃないのさ。あいにく予言の類いとは縁がなくてね、さっきは普通にピンチだったし、打つ手も特に無かったよ。」

どうやらアンタは相当な変わり種みたいだけどね。要はそのおかげで助かった、それだけだろ」

「豪気なことだな。要は俺の采配ひとつで命運尽きていたと、そう白状しているようなものだろうに。おまえはそれでいいのか？」

「現にアタシらは生き繋いだ。それで十分だよ」

甘粕の不可解さも、窮地に陥った己たちの事も全て承知している。

今回は相手の気まぐれに助けられた。それが無ければここで退場だった事も理解している。

それでもライダーは常の自分を崩さない。そんな自分の不甲斐なさを自覚しながら、それも有りだろうと愉快気に笑っていた。

「元々そんなもんだろう、人生ってのは。どんだけ頭捻って捏ねくり出した考えってのも、くだらねえ誰かの気まぐれ一つで崩れるもんだ。命運なんざ、いつだって理不尽って波に搔つ攫われてもおかしくないもんなんだよ。」

だったらいちいち気にしたって詮無きことさね。どうせ碌でもないもんなら、せいぜい愉しんでやらにやあ損だろうよ」

己の信条を語るライダーは、何処までも清々しい。

彼女に後悔はない。少なくともそうした感情に拘る性質ではないのは確かである。

絶体絶命の窮状さえも、自身にとっての快樂に。世界の海を制覇した偉大なる冒険家は、そんな過去の栄光さえも置き去りに、刹那の享

楽のみを求めている。

そのような輝きに満ちた英霊の姿に、甘粕は一層に笑みを深めていた。

「まあひとつ捨て台詞でも残しておくかい。陸の戦いじゃあまんまとしてやられたが、海じゃこうはいかない。次はアタシの”艦隊”が相手をしてやるさ。所詮、負け惜しみだけだね」

そう言い残し、ライダーの姿が慎二と共にかき消える。

残されたのは甘粕とアーチャーの主従のみ。敵対する者が消えて、彼等は改めて向き直る。

アーチャーは、甘粕を見ていた。

その表情に色はなく、しかし目差しには殺気を滲ませて。

激する事なく押し黙って、アーチャーは己の契約者を睨み続けた。

——そして、遡っていた時間は回帰する。

自陣の礼拝堂マイルームに戻った直後、アーチャーは甘粕へと刀を突きつけた。

怒声を上げる事もせず、先までと変わらない冷徹な表情で。

彼女はとても静かだった。その静けさこそが、何より本気をはつきりと示している。

冗談を排した真剣の殺気。ここで違えた答えを返したなら、容赦な

く刃を振るうと告げていた。

「答えてもらおう、甘粕正彦。一体何のつもりじゃ？」

甘粕もまた、アーチャーの刀が本気なのは重々承知している。

彼女の裁定の刃は、腑抜けた答えを許さない。故に覚悟を持って、その答えを口にする。

「アーチャー。俺は何も間違えていない。誰が相手であろうと、俺は俺がすべき事をする。先に宣した通りだよ。

試練を与える。そうして人は立ち上がれると、見込んでいるから俺は殴るのだ。誰であれ、そう在れると思っている。故に例外はない」  
ぶれない答えを甘粕は返した。初志貫徹、信じる理念を貫き通す。彼が行うのはそれだけだ。

慎二に対して行つた暴行も、彼なりの試練である。それによって立ち上がる事こそ甘粕は期待している。

最初から明言してきた事でもある。何も間違えていないという甘粕の言は、確かに正しかった。

「それは、おまえが悦楽に浸るのとどう異なる？」

だがそんな答えでは、今のアーチャーは納得しない。

ぶれることのない甘粕の行動原理、その根底にある歪みを問い質した。

「試練、試練とそなたは言う。それが人のためであると、ああそれも間違いないのだろう。

だが、それも結局は己が好ましいと思うが故にやっている事であろう。人の勇なる姿が見たいから、そうした光景を愛すがため、狂おしく目にしたいと望む。

要はそれがそなたにとっての悦楽じゃ。愉しむなどは言わん。悦楽を望む心を否定はせん。されど、そのみではわしを得心させるには足りんぞ」

人の勇気が、雄々しく立ち上がる姿が好きだ。失いたくないと切に願っている。

そうした感情こそが甘粕正彦の原動力だ。何より愛する輝きのため、彼は強さを発揮する。

それは信念であり、善性であるのだろう。だがそれ以上に、甘粕自身の愉悦のためという側面があるのも事実だった。

「世には様々な王がおる。理想を謳う王。夢を語る王。神の代行人を名乗る王。世の裁定者たる王と、王道とは王の数だけ存在しておる。

どれも違う王のカタチじゃ。だがそこにも、ひとつの共通する道理がある。何より王であるならば、避けては通れん道理が」

突き付けた刀が喉元に喰い込む。

ただのひと押しで貫ける刃、それよりも鋭い言葉が放たれた。

「王とは、人の上に君臨するもの。王道とは一人のものに非ず、その臣を狂奔させるもの也。」

王自身が手を穢すのではない。王が臣に手を穢させるのじゃ。分かるか、王の決断には軽々しくない重みがある。

兵を狂わすのは容易いこと。然るべき名目の大義と主命という免罪符を与えてやれば、群衆とはどこまでも残酷になれる。そしてひとたび始めれば、その流れは易々とは治まらん。

兵に、臣に、それを行わず最初の号令をかけるのが王じゃ。正道であれ邪道であれ、発した王にはそれを全うし報いる義務がある」

それがどんな王であれ、その手段がどれほど残酷なものだとしても。

王の権威とは従う臣下の存在があつてこそ。現実には王の意志を實行するのは臣下なのだ。そして彼らに従わせるには、それに報いる何かがある事が必要となる。

善悪に関わらず、人を従えるとはそういう事だ。名誉か富か、何であれ人々が納得できる報いを与える事が王たる者の責任である。

「浮世には、正しい王道があるのではない。王が正しいと信じる王道があるのじゃ。」

神仏の加護？ 絶対たる正義？ 浮いた言葉で惑わされるは群衆のみで十分よ。王が己の行動の正しさを証明できるのは、王自身しかおらぬ。

神の思惑など無い、この世にあるのは人の意志じゃ。ならばこそ正しさも誤りも、人自身でしか決める事はできぬ。それら人の群れの先

頭に立ち、先駆けの決断を下す者こそ、王。

下した決断は軽くない。世の善悪は駆け抜けたの後に築かれる。容易く覆してよいものでは断じてないのだ」

責任を負うこと。如何な王道だとして、その大原則こそ真であるとアーチャーは告げる。

革新の王。乱世の時代、様々な新機軸を打ち立てて、既存の概念を過去のものとした風雲児。

それは過去の価値を否定するという事。かつてあった正しさを誤りに変えて、自身こそが新たな価値観となつて君臨する事を意味している。

綺麗事だけでは濟まない。輝かしい成果の裏では、古き概念と共に淘汰されるものが確実に存在する。褥を共にしてきたそれらを捨てず、消え去るべきと定められて滅んでいった者たちが。

己の決断が、世に血を流させる。その重みを理解して覚悟と共に進める者こそ王なのだ。

それこそがアーチャー——天下人・織田信長の掲げる信念だった。

「甘粕正彦、そなたは言うたな。強さを失った人民のため、克己のための試練を下すと。ああ、その信念の是非は問わぬ。それを貫く覚悟あらば、なんであれ価値はあろう。

だが、己の望む景色を見たいがため、我欲のみで走る輩というならば、是非に及ばず。無軌道の混迷など不要。私情のみの者に大義は成せず、ここで散るものと心得よ」

その信念が己の期待を外したものであれば、ここで殺すとアーチャーは断言した。

マスターとサーヴァントは一蓮托生。マスターを殺害すれば連座でサーヴァントもまた消滅する。それを承知で、それでもアーチャーは斬ると告げた。

その断定は、苛烈にして無情。

激しながらも内なる心は冷徹そのままに、王としてあるべき裁きがそこにはある。

二度目の生に対する未練など、それに比すれば塵芥だ。何より優先するべき王としての在り方に比べたなら、再び黄泉に舞い戻るなど如何程のことでもない。

元より己が現世に降り立ったのも、並び立つ破格の男の霸道に触発されての事。稀代の大うつけと見たこの勇者の行く末を見届けるためだ。

期待外れと分かったならば、それこそ付き合う義理もない。我欲に終始する悪童風情の掌で踊るなど、許容できるわけもなかった。

睨み据える視線の圧は、まさしく英霊たる者の気迫。

生き難い動乱の時代を誰よりも駆け抜けた王として、そこにあるのは徹底した厳しさだ。

その苛烈なる殺意を受け止めて、常人に平静は保てまい。誰もが眼前に突きつけられた破滅を覚悟し、頭を垂れるしか無いだろう。

「——素晴らしい」

甘粕正彦は、それでも尚、喜色を溢れさせて笑っていた。

「王たる者としての自負。革新を担う先駆けとして自身に懸けた矜持。まったく正しく、そして美しい。それこそ俺が愛する人間の輝きだと確信する」

「毎度の褒め讃えか？ そんなものでわしが引き下がると？」

「まさか。単なる素直な感想だよ。弁明ならばこれからだ。」

だが、褒め讃えたいという気持ちも本物だよ。おまえの何よりの価値は、その厳しさだと思っている。自他に妥協を許さず、己の覚悟として背負う姿。能力や宝具などそれこそ二の次だ。英霊たちの持つ真の価値とは、その生前を経て身に付けた信念の強度に他ならん。

俺が真意を暈したままでもいたのも、それが理由なのだ。余計なことを知らせてその厳しさを曇らせたくなかったのだよ。彼らにはそれが必要だと感じていたからな」

彼らとは、敵対する主従である慎二たちの事だ。

試練とは輝きを引き出すためのもの。子を見込むからこそ殴るのだと、豪語した信念に嘘はない。たとえ最期には死の別離が待ち受けているとしても、それは変わらないのだ。

甘粕のその信念を、アーチャーは悦楽だと言った。

目先の愉しみのため、先にある真の目的から遠ざかる。アーチャーの厳しさはそれを許さない。

流血と共に進む道で必要なのは、無情の決意と邁進の覚悟である。半端に個人へと執着する甘粕の姿を、快樂に絆された甘えであると彼女は告げたのだ。

「これが俺の悦楽である。なるほど、確かにその通り。俺が試練を課そうとするのも、結局は俺自身がそれを望んでいるからだ、その指摘に否はない。

自身にとつての理想を定め、断固たる覚悟でそれをカタチとして成果を築く。その報いこそを真とするおまえには、俺の姿は甘えと映るのも無理はない。

だが、俺も容易くは己の信条を覆せない。俺にも俺の真がある。そしてそれは、決して誤りではないと信じている」

アーチャーの刀が、僅かに震える。触れた甘粕の喉元より血のひと雫が流れ落ちる。

重要なのはこの先だ。ここからの甘粕の解答こそが、アーチャーの裁定の如何を決める。

「そうだな、ひとつ過去を教訓とする話をしよう。アーチャー、おまえは『農業集団化』という政策を知っているか？」

「なんだと？」

「1929年、ソヴィエト連邦にて実施された5カ年計画。仮想敵である西欧列強に比べ、常に後背に陣してきた工業力の向上を狙い、旧態然とする分散した村社会的な農業を一新して、重機を用いた近代的農業への移行による生産力の増加を目的とした大事業。

名目だけ見れば、なるほど納得のいくものだろう。かつての大国としての威厳をこの手に、世界が恐慌に喘ぐ今こそ先進的強国として躍り出る好機であると、富国強兵の決意は見事と思える。

だがその実態は、急進性に身を任せた狂信的数字が乱立し、無謀極まる計画実現のため強権を振るい、既存農村を徹底的に破壊する恐怖の弾圧政策だった」

「強制的に徴収させていく穀物。あつて無いような定義方法の元にカテゴライズされ、敵対的と判断されれば処刑か、あるいは収容所か不毛の地への追放か。それ以外も強制的に移住を強いられ、土地や家畜も国有化され、国家という全体機構のための礎として搾取された。」

この事業には、工業化の推進という目的とは別に、社会主義国家として農民階級の完全撤廃、階級闘争という意味合いもあつた。理想社会の達成のため、革命の火が灯った共産主義者<sup>ボリシェヴィキ</sup>たちは、大義の下にこの急激すぎる事業に邁進した。そして築き上げられたのは、処刑、餓死、獄中死など、総計すれば1000万人を超えるという屍の上に建つ工場だ」

「勘違いしないでほしいが、なにも俺は彼らの事業を否定しているわけではない。国家に尽くし、滅私奉公を誓う事も、一つの決意である事に違いはない。おまえが言うところの、己の行いの責任を負う覚悟。それさえあるなら、物事の善悪は当事者たちにしか決められん。

しかし、俺はそこに疑問を持っている。所詮、後世に残った記録や伝聞からの想像に過ぎんが、そう間違つた見解だとも思っていない。果たして当事者たちの何人にも、おまえのような覚悟があつたのかと。

大義という免罪符は、群衆を容易く狂気へと駆り立てる。だからこそ、それを発する指導者には覚悟と責任が求められる。我も人、彼も人と、直接手を汚さぬならばせめてその道理を介して決断するのが筋だろう。だが伝え聞く限りでは、どうもそうとは思えないのだ。

遠く離れた遠方の地で、書類上の数字のみを見て、あげられる成果ばかりに現つを抜かす。その記載された数字は己と同じ人なのだと、最低限の認識さえも忘れて。正しさを疑わないのではない、疑うための思考を自ら捨てた。国家のため、社会のため、己はその理念の一部であると盲信し、その罪悪感から逃れるために。

無論、これは俺の想像だとも。事実として、この政策の後にソ連は急激な発展を遂げ、世界を二分する大国に生まれ変わった。長年に渡る闘争と辛酸の中を歩き続け、遂には権力の座を手にしたかの書記長殿も、まさしく鉄血と称するに相応しい意志の持ち主なのだろうさ。

だが、残念ながら全員がそうだったとはとても思えない。大半には



やはり、大した覚悟もなしに決断し、惨状の重さから逃れんとする情弱の逃避があるのではと愚考してしまふのだ」

「先祖代々より受け継がれ守り抜いてきた土地を、生活を共にした私財であり家族でもある家畜たちを、国家のために必要だと言われ、ああそうかと納得する者がどこにいる。

農民たちは飢餓がくると承知しながら穀物を焼き、己の財産たる家畜を自ら屠殺した。分かる、分かるぞ。不倶戴天の侵略者にも等しい弾圧者に対する、農民たちのせめてもの抵抗。その覚悟を目の当たりにして、単なる愚行と非難できる者などいるものか。

もう一度言おう。我も人、彼も人だ。如何なる時代、そして人であったとしても、忘れてはならない大原則だ。どんなに高尚な理想であつてもな、この道理を忘れた理念は腐臭を放つのだよ」

「どうしてこうなつてしまうのか。その答えは、実に単純な一言で言い表せる。

リスクが無いから。己は死なぬと高を括っているから。強権を振るえるのは自らだけで、命じるだけの立場なら相手の拳も届く事はないと知っているからだ。だからこそ恥も知らずに罵倒が出来る。その惨状と向き合う覚悟さえ無いくせにな。

そうした輩には、自らの暴力性を正当化する理由さえあればいい。正義のため、社会のためと、もつと分かり易いところでは皆が同じことをやっているからとな。己の掲げる大義に誇りを持っている者が、果たしてどれだけいることか。

弱者へ愛を施す愉悦があるように、それとは真逆の、有無を言わさぬ強権で全てを押し進められる愉悦もまたある。どちらも傲慢で、かつ癖になる概念だ。権利と文明の庇護の下、安全圏から見当違いの善意を吐く人畜と同じく、見栄えの良い名目に縋り、己の悪性から目を背けて覚悟もなしに特権を振りかざす者もまた、度し難い畜生どもだよ」

「これは压制者側ばかりに適用されるものではない。一步違えば、それを打倒せんとする義心にも同じ腐敗が現れるのだ。

仮にだ、過去に戻る能力があつたとする。その者は未来を知るが故

に、後に惨状をもたらす独裁者を排除しようと考え。その目論見は見事に成功し、未来の邪悪なる存在は消え、歴史はまた別の方向へと歩んでいくだろう、と。

で、まさかそれで終わりではあるまい。当然だ、世界はそれからも続いていく。邪悪であろうとも世界に大きな比重を持った存在を排除すれば、その反動も無視は出来ん。打倒を果たした者には、その後を統べる義務がある。悪の親玉さえ倒せば後はお役御免など、素面で言ってるのだとすれば悪党以下に度し難い層だろう。

手を下して事を為すと決めたなら、血の対価を背負う覚悟をしろ。その意志が足りん者はな、結局は碌なことにならない。むしろ余計に世を悪くするだけだ。要は責任を負えという事さ、おまえが言った通りだよ、アーチャー」

「俺は悲劇を憎んでいる。人が絶望する姿など見たくない。生まれた命には等しく機会があるべきだろう。一体どれほどの価値ある意志が、不遇の中で潰えていった事か。

それは例に上げた話だけではない。あるゆる時代において、この悲劇は付いて回った。悲しい、悲しいな、このような不条理があつてはならんと切に願っている」

我も人、彼も人。大義のための犠牲を謳うなら、決して忘れてはならない道理であると。

それは恐らく万人の大半が賛同できる概念だろう。多少なりとも世の道理を解しているならば、誰であれ理解している事でもあるはずだ。

正義を気取った殺戮を行い、それを疑問にも思わず自らに陶醉する盲信。そんな輩の醜さは、純粋な悪辣以上の嫌悪と腐臭に満ちている。

だが、当然の道理だと主張するその姿には、不可解さもまた存在している。

甘粕は管理の安寧を否定している。理不尽を廃した先の平穏は墮落の温床だと断言した。

世界に対し試練を与える。それは甘粕の願いであり、究極の理不尽

でもある。彼の望む人の強さのために、何の罪もない人々に試練を課すというのだから。

その甘粕が、世の理不尽を嘆くと、あつてはならないという。それは矛盾しているように聞こえて、そしてその不合理さを甘粕自身が理解できてないはずがなかった。

「甘粕正彦。そなたは言ったな、人の光を取り戻さんがため、世に試練をもたらすと」

「ああ。一言はない。試練に抗い、人が輝きを發揮できる世界。それこそ俺が求める”楽園”に他ならない」

「それでは些か具体性を欠いていよう。試練？ 楽園？ 抗うべき災禍だと？ どれもこれも着飾った言の葉よ。祈りはあれど、それがカタチになっておらんでは話になるまい。

戦火の吹き荒れる乱世も、文明を洗い流す天災も、所詮は過去にあったものの再来に過ぎん。それで変わる程度など知れていよう。わしにはおまえが、それで満足するとは思えなくなった。

聞かせい、正彦。おまえの言う楽園とやらの姿を。おまえはこのムーンセルを使い、世界に如何なる試練をもたらすつもりじゃ？」

たとえ聖杯が奇跡を叶える願望機であっても、その祈り手に願いが無ければ話にならない。

ムーンセルは万能の演算器だ。懸けられた願いが荒唐無稽なものであつても、現実の中で感受できるように世界を運用する。

だがそれでは、元の祈り手の望みとの乖離も有り得るだろう。元より矛盾を孕んだ人の願いなど、実現できたとしても何処かに歪さを含んでいるのだ。

一見して、矛盾しているとも思える甘粕の信念。

だがそのような欠落を、甘粕ほどの男が見過ごしているとは思えない。それでは彼自身が語った、所業の重さから目を背ける懦弱さと同様になる。

故にアーチャーは、改めてそれを問うた。祈りの如何を、そこに真意があると察して。

「俺自身、この月に上るまでは半信半疑だった。ムーンセル、太陽系最

古の遺物であり願望機と、大層な話はよく聞いたが、現物を見ないことには流石に信じきれなかったよ。

だが、俺はこうして月にいる。そしてその力を実感した。霊子虚構世界、サーヴァント、どれも今の人類には到底及ばぬ力だ。万能たる聖杯、それは真実だと確信した」

そして問われた甘粕もまた、答える声音に欠片の迷いも抱いていない。

彼の意志に惰弱さは無い。揺るがない強い信念で、甘粕は己の狂氣<sup>ねがい</sup>を口にした。

「全人類をムーンセルに接続させる。この月にある恩恵を、総ての人間が扱えるように」

「な、に……ッ!?!」

「権力者も民衆も、あらゆる立場の者が等しく超人となれる権利を得る。肉体的な優劣で格差が生まれる事はない、描いた思いの強さによって光は万人に降り注ぐのだ。

意志が惰性に陥ることもはや無い。何故なら、誰であつても油断など出来ないのだから。惰弱な意志で攻撃すれば、それ以上の意志で反撃を受けるだけ。相手が王でも奴隷でも、総ての者に本気となって当たらざる負えなくなる」

それはまさしく、究極の闘争世界だった。

地上のあらゆる人間が、その意志の如何により、ムーンセルに記録された英霊、神魔の力を降ろす。マナが潰えた世界でも、それを具現させる代替の可能性を持ってきて。

不遇の立場に甘んじてきた者は、即座にその力で反撃に出るだろう。体制に属する者は、自らの秩序を守るために全力で当たらなければならぬ。

国による大多数の力とて、もはや何の安心材料にもならない。具現させた力次第では、個人で国家戦力を覆すことさえ可能となるのだ。言うなれば、総ての人類が核兵器以上の武力を行使できるということ。

もはやそこに国家間の戦争など存在しない。”個人”同士の戦争

がそこにはある。

「……それでそなたは、世界が滅びずに済むと思っっているのか？」  
「少なくとも、現在の秩序は悉く滅び去るだろうな。何事かが確実に起こり続けていく世界なのだ。今までのままの体制ではいられない。発生する混沌は、恐らく人類史上で最大最悪の規模として現れるだろう。」

そしてその後どんな秩序が築かれるとしても、それは輝きを掴み取った雄々しき勇者の手によって為されるだろう。ならば良し、どのような世界であれ、俺は否定などしない」

そして、そうなった先の世界では、法や倫理などの秩序は悉く崩れ落ちるだろう。

誰もが超常の力を振るい、己の意志を貫く過程で、既存文明は破壊され無謬の荒野が広がっていく。社会の保障を失った世界で生き残れるのは、確固たる芯を持った勇者のみ。

超人乱神が入り乱れ、互いの覇と覇を競う群雄割拠の動乱期が訪れる。どのような立場の者であれ、その混乱の中で緩みなど許されない。まさしく総てが本気の意志同士の激突となるのだ。

「イデオロギーは何だって構わないのだ。どれも各々に利点と道理があり、等しく人の手で生み出された概念である事に違いはない。今世界を覆い尽くしているハーウェイの管理社会とて、人民の総意により建設された正当な秩序だろう。」

勿論、争いとは唾棄すべきものだ。この世に戦争以上の惨劇はなく、現実の闘争の中で物語に語られる美談など皆無に等しい。忌諱すべしとして遠ざける行いは正しいものだとも。

それでも、一つ。争いの中にも唯一救いがあるとすれば、それは真正銘の本心からぶつかった場合による。真実、己の信念を懸けて突き進んだ果ての激突には、たとえ敗れた先にも無念と共に納得の光があると知っている。本気の衝突が出来るのは、互いに理解し合った仲間だけなのだから。

そう、それだけなのだ。俺は皆に、その事を忘れてほしくない。対立する他者もまた、己と同じ人なのだ。その意識を常に持ち、歩ん

でいける勇気を手にしてほしいだけなのだよ。それさえ果たされれば世のカタチなど何でもいい。それが”人の世界”であるなら、等しく俺は祝福しよう」

「不遇の身の上に生まれ、不条理の下に淘汰されようとする人々よ。反逆の牙を持って我はここに在りと立つがいい。圧政を敷く弾圧者よ。己の支配に道理があると信じるなら、鉄血の覚悟を持って事を成せ。決して強権の上に胡座をかくな。

それこそ俺が目指す”樂園”<sup>ぼらいぞ</sup>の姿。誰もが人としての意識を持ち、勇気と共に本気で向き合っていける世界。俺が聖杯へと託す祈りは、一点の曇りとして存在しない」

改めて聞き届けた甘粕の願いは、しかしアーチャーの想定を大きく上回っていた。

矛盾など無かった。その大望は確固たる形を持ち、かつ常軌を逸した域で狂っている。

甘粕正彦の願いは、寸分の狂いなく果たされるだろう。月と接続した人類は、その意志によって次々と超越の存在へと変貌していく。停滞を憂いる心配など、何処にも必要がない。

緩やかな滅びへと歩む世界の現状も、そうなれば関係なくなる。

何故なら勇者とは、あらゆる試練を打破できる存在だから。世界の滅びという危機も、その意志の力で乗り越えていけると確信している。

地球という環境が消失するなら、地球が無くとも生きられるほど人が強くなれば良いのである。

「それだからこそ、俺自身にも試練が必要だ。それは避けては通れない。

地上で言われたよ、俺の願いは狂気だと。ああ、自覚しているとも。およそ他人から賛同を得られる類の願いではない。少なくとも、聞かされて即座に頷くものはそういまい。そこで流される血の量も、間違はなく空前絶後のものとなるだろう。

認められんよなあ、許せまい。俺の勝手なエゴに世界を好きにされて、文句の一つもないなどそれこそどうかしてるだろう。弱気に流さ

れた同意ならば全く不要だ。

ましてそんなものに奇跡を求めた大願を阻まれて、無念と思わないはずがない。世界のための仕方ない犠牲だなどと、納得など出来るものか」

「俺もその手の戯言は何より嫌いだな。先の言もある、他者と向き合えと言った俺自身が、その舌の根も乾かん内に己の言葉を翻すわけにはいくまい。

おまえの問いに答えよう、アーチャー。あの場で間桐慎二を仕留める事は簡単だった。確かにあれは情けだったし、俺自身がそうしたかったというのも否定はできません。

だがそれでもだ。俺はこの姿勢を崩すわけにはいかん。甘粕正彦は輝きを引き出すための試練である。聖杯があろうが無かろうが、己に課したこの道理、断じて違えるわけにはいかんのだ。

おまえは戦上手だよ、アーチャー。織田前右府信長よ。おまえに采配を任せれば恐らく俺は勝てるのだろう。断固たる勝利とその報いで以て咎の清算とする、その信条は素晴らしいと思う。

しかし俺にはそれでは足りない。今ある世界を身勝手な独善で根底から塗り替えようというのなら、その世界の住まうあらゆる意志と戦う覚悟と持って当たらねばならんだろう」

甘粕正彦は破格の益荒男。まさしくこの停滞した世に生まれた英雄の器である。

アーチャーはそのように理解していたし、事実それは間違っていない。その信念の強さも、矛盾のない在り方にも不足はなかった。

だがそれだけでは不足だった。甘粕という男の本質を、アーチャーは今こそ思い知る。

「俺は、この聖杯戦争、対戦する相手の輝きたる強さの総てを出し尽くさせよう。切実なる思いを、胸に抱いた祈りを、その人生の重みを余すことなく受け止める。

その上で、踏破する。祈りの丈をぶつけ合い、それでも俺が凌駕してみせよう。そのためにも正々堂々、裏など取らない真っ向勝負で決着をつける。

ああ勿論、これは俺個人の勝手な自戒だ。相手にまでこの道理を押し付ける気は毛頭ない。謀略、暗殺、いかなる卑劣であつても構わない。外道的手段に頼るといふことは、それほどに切なる願ひがあるという事なのだから。故にどんな手段であろうと否定はしない、むしろ大いにやってほしい。切実なる勝利への執着を、俺は心より認め賞賛しよう。

どの道、万人に通じる理想など有りはしないのだ。己と他人の二者が揃えば、理想とする世界のカタチもまた異なる。どれだけ崇高なものであろうと、誰かにとつての理想でなければ、対立者が現れるのは必然だろう。元より人間の戦いとは、多種多様な正義同士の衝突にこそある。結局は己の正しさを強き意志で推し進めた者の価値観こそが、世の道理となるのだ。

それら含めて、俺はその試練を乗り越えよう。この月には自らの願ひを持った強い意志が揃っている。それら輝ける意志と対峙して尚、俺の信念こそが強いと真つ向からの勝利で以て証明せねばならん。正しいか間違つているかという以前に、それさえも出来ない意志で、世界に試練をと口にするなど烏滸がましいにも程がある。

出来ないというなら、そんな男は死ねばいい。無用な流血をもたらずだけの男ならばな」

確信した。甘粕正彦は大馬鹿者だ。

それも規格外に、限度というものを知らなすぎる。現実性や勝算などという言葉は、全て言い訳と切り捨ててまるで一顧だにしていな

い。  
そうした面があるのは承知の上で、だからこそ召喚に応えたとも言える。ただ想定していた範疇を遥かに逸脱した”うつけ”であった。「長くなつてしまったが、要は互いに悔いなど残らんよう本気でやろうという事さ。俺が言いたいのはそれだけだよ。

それこそが俺にとつての”戦の真”だ。どれだけ非効率だろうが、これだけは譲れん。それを外したら、そもその意義を見失つてしま

うのでな」  
血迷つているとしか思えない言葉も、甘粕にとっては当たり前のも



の。

人類に試練を課すと、甘粕は言った。その甘粕自身が、試練から逃げするなど有り得ない。

そもそも自分に出来ない事を、他人にやらせるなど情けないにも程がある。そのような不心得を甘粕正彦が許すはずがない。

世界にも、人間にも厳しいがそれ以上に、甘粕正彦は「自分」にこそ厳しいのだ。

「……甘粕正彦。なるほど、改めて思うたわ。そなたは破格で、危険である」と

射抜くようなアーチャーの双眸には、未だ冷淡な殺意が宿っている。

刃は今も首を捉えたまま、裁定の掌に乗った命は相変わらずだ。

「そなたの夢は世界を灼く。苛烈が過ぎるその大火は、後にはもはや何も残らぬやもしれん。芯を鍛えんと槌を振り下ろし、そのまま砕き割ってしまううつけ者じゃ。」

生前のわしであれば、そなたを討たんと動いたであろうな」

睨み据えた眼光が、その意気を増す。英霊の殺意が圧となって空気さえ歪ませた。

甘粕は動じない。常人ならば一秒とて耐えられない重圧の中にあつて、彼は常の気概を崩さなかった。

宣した信念を貫き、迷いなき意志の強度を示すために。それこそがアーチャーの裁定に対し、己が出来る何よりの弁明であると理解しているから。

やがて、僅かな沈黙の時間が流れた後、アーチャーは刀を下ろした。

「しかしわしは過去に住まう英霊。未だこの現世に立脚した重みを持たぬ亡霊の類に過ぎぬ。世の何たるかを決めるのは、今に生きる人間であるべし。亡霊が何かを取り決める資格はない」

アーチャーが身を翻す。

甘粕にその背を向けて、一步一步ゆっくりと歩を進め、離れていく。認めたのか、それとも諦めたのか。

どちらとも取れるし、どちらでもないようにも見える。

今の彼女は静謐だ。静けさの中に冷酷な殺気があつた先までと違い、そこに外を圧する気迫の類は一切ない。

無論、そんな静けさは一時のものではしかなかったが。

「が、しかしよ。過去の世を築いた英霊として、物申さずといるわけではない。

そして、わしは見ての通り”女”じゃ。男共のように戯けた夢には惑わされんぞ」

一拍を置き、アーチャーが再び甘粕へと振り向いた。

その顔には笑みが浮かんでいる。寧猛な、攻撃性を持った笑みが。

「わしが生きた時代もそうであつた。群雄割拠の戦国世、古き権威は崩れ去り下克上の野望に誰もが焦がれておつた。己の器も弁えず、浮ついた夢に酔ううつけ共よ。

なまじ好機と見えるから、勇んで飛び出し踏み外す。分かってみせてるつもりでも、内の野心は隠しきれずに。いかに世が乱れようが、それで高みに至れるわけではないのだ。

そうした輩は悉く転落した。天下取りとは栄えある夢ではない。その道理の何たるか、それを解さぬ阿呆な男衆など、皆喰らうてやつたわ」

アーチャーのその考え方は、ある種の女性特有の思考だろう。

男とは強さに焦がれるものだ。英傑、凡人に至るまで、男性という種族に根ざした”最強”への渴望はそうそう拭い取れるものではない。

子孫を孕む機能を持たず、屈強な肉体を与えられるのも、全てはそのために。強い力は男の価値で、それを以て地位も名誉も女も獲得できると権利を持てるのだから。

そう、強くなければ男じゃないが、女はその限りではないのである。

「そなたはどうじゃ、甘粕正彦。わしが喰い散らかした輩と同じ、所詮は大望に酔い痴れるだけの男か。それとも懸けた信義で道理さえも覆す生粋の大うつけか。

わしは実益でしかものを測らぬタチでな。そうと見えるだけでは納得せぬぞ」

アーチャーと、甘粕の視線が交錯する。

その手には未だ刀が握られたまま。納められない刃は、アーチャー自身の戦意そのものだ。

冷淡ではない。しかし今は別の熱を持って、アーチャーは甘粕と向き合っている。

その姿はまるで、果し合いにて対峙する両者の構図と見えた。

「――剣を抜け、甘粕正彦。吐いた大言、その力で証明せよ」

そしてアーチャーは、通常ならば考えられないような事を言っていた。

「わしはな、口先の男というのも別段嫌いではない。そこに命をも賭した芯があらば、放言大いに結構よ。」

だが、そこまで言ったのだ。わしのやり様を潰してまで、それほどの世迷い言を吐いたのだ。よもや舌先の言葉だけで、それを実証できるとは思うまいな。力を示せよ。その意志が育んだ強さとやら、ここできかと表してみよ。よもや嫌とは言うまい。

なに、これもおまえの言う所の試練じやて。おまえは、試練からは逃げんのだろう？」

向けた剣先が示す殺気は本気以外の何物でもない。

彼女はここで、本当にマスターと死合うつもりであった。

「戦の真を謳うのなら、それでわしの真を塗りつぶしてみよ。さもなれば所詮そこまでの思いであったと、散り果てるが定めと心得るのじゃ」

その行程は必要不可欠。何故なら彼等が奉ずる戦の真は、各々で大きく形を異にする。

方や、大望成就のための鉄血の姿勢を。方や、大望に見合う意志を証明するための試練を。どちらが正しいか間違っているかではなく、そもそも両者の価値観からして違いすぎるのだ。

徹底した合理主義と、熱く猛った夢想論。互いの主張は相容れない。ならば主とするのはどちらか、ぶつかり合わねば決められない。

それが甘粕正彦にとっての試練だと、その厳しきでアーチャーは断言した。

とはいえやはり、その内容は正気のものとは思えない。

甘粕正彦は傑物だが、超人ではない。その身はあくまで人間で、能力はその範疇から逸脱するものではない。決して超常の力を有しているわけではないのだ。

英霊とは、人々の幻想により編まれた時代の最強者。必然として人間を超える存在である。

人間が英霊に勝とうなど、前提から間違えている。難易度は不可能と言っても過言ではない。

試練と呼ぶには余りに無茶ぶり。アーチャーが告げた内容は、そうしたものだっただ。

「ああ、そうだな。おまえの言う通りだ」

だがその無理難題を、本当に無理と取るかは、結局は本人次第である。

少なくとも甘粕正彦には、それを不可能と取るつもりは毛頭なかった。

「道を同じくするべき者たちでも、奉じる信念の違いよりぶつかり合う。何もおかしなことない、人とはそれぞれ違うのだから。決して己の信だけが真ではないと、それを認める事が他者を理解する第一歩だ。

異存はないよ、アーチャー。確かに俺の言う事は戯れ言だ。力も無しに吐いた所で法螺話にしか成りはしない。ここで果てるならば、俺もその程度の男だったと納得するさ。

——それに、な」

「それに？」

「それとは別に、おまえとはこうして一度立ち合ってもみたかった。俺もいっぱしの男なのでな、そうした趣向が無いわけでもないのだよ。

そも、男は女を守るものだ。女人に代わって剣を取るのが男子たる者の本懐だろう」

その言葉は挑発か、それとも素から出たものか。

判断が付け難い。アーチャーもまさかそんな言葉が出るとは思わ

なかつたのか、呆けた表情で二の句を継げずにいた。

但し、それもほんの束の間の事。その面貌はすぐに歪んだ。

「ふふ、くはははは、あつははははははははは!!」

弾けたように響く大笑。愉快、愉快だと、その言動を笑う。

その身の程知らずさ、挑発であつたとしても、吐き出す言葉はどれも度肝を抜いてくる。

それも餓鬼の意地ではない。素面そのものでやってくるのだから、まったく大した奴だろう。

笑いが止まる。

交錯する視線。交わした一瞬に、彼等は互いの意図を察していた。

故に、次の行動も一致する。両者が踏み込むのは全くの同時だった。

振るわれる刀。抜き放たれる軍刀。

対峙した中間点で、甘粕正彦とアーチャーは刃を衝突させた。

## 1 回戦：主従激突

厳粛な空気に包まれていた礼拝堂に、劍戟の音が響き渡る。

怨嗟と狂気に織り成された混沌畸形の悪魔崇拜。およそ常人では悪寒を感じずにはいられない空間も、今や輝ける演者のための舞台でしかなかった。

互いに日本刀と黒色の軍刀を振るい、真つ向より斬り結ぶ二者。

その劍戟は鮮烈で、何よりも容赦がない。明確な殺意を持って振るわれる刃には、相手の生命を慮る気持ちなど皆無であった。

ワイザード サルザント 魔術師と英霊。本来ならば殺し合うなど有り得ない、同胞であるはずの関係にも頓着していない。まさしく宿敵同士さながらに、その激突は時が経てば経つ毎に激しさを増していく。

そのような尋常ならざる決闘の渦中、片方の思考の流れは分かり易い。

ワイザード 魔術師側、甘粕正彦にとつてこれは挑むべき試練だ。人間である彼にとり、対決の図式においては格下側。通常ならば決して覆せない格差がある者を相手取り、そこへ果敢に挑戦している甘粕の精神には、手心のようなものは入り込まない。

人と英霊の格差とはそういうもの。両者の力関係は埋め難く、覆すことは奇跡の部類。故にこそ、相手の生命に配慮する事自体が見当違いな侮辱である。

もしもこの刃が相手に届いたらと後先を考えるのは愚行そのものだ。その時はその時だと馬鹿になって今という刹那に全てを懸ける覚悟でなければ、そもそも格上には抗し得ない。

ならばもう片方、格上である英霊側はどうだろう。

格差のある戦いとは、下にとつては必死だろうが上にとつては余裕である。どだい己に勝てるはずがなく、ならばと他所事に思考を巡らす余分すら生まれる。それは油断や慢心と呼べるものだったが、それがあつてさえ揺るがないからこそその格差なのだ。

いかに一方が覚悟を決めて挑んでくるからといって、格上側までそ

のノリに付き合う必要はない。そもそもマスターとサーヴァントは一蓮托生なのだから、この戦闘の最終的な落とし所は両者が共に生存する形でなければならぬ。そのデザインが出来るのは格上側だけであり、ならばこそ英霊であるアーチャーには、そうした配慮があるのではと期待できる。

「——はあッ！」

だがそのような淡い期待は、繰り出された一撃の下、砕き折られた軍刀と共に粉碎された。

即座に創形し直される軍刀。その隙を見逃さず、アーチャーは更に踏み込む。

剣筋は勢いを増し、対する甘粕は防戦を強いられる。そこに手心なご欠片もない。アーチャーの剣には明確な殺気が込められている。

もはや疑う余地もなく、アーチャーの殺意は本物だ。剣戟の中で追い詰める彼女の剣は、穏当な結末を僅かでも望んでいるものではなかった。

「——織田信長の名を聞いて、まずどんなものを想像する？」

優勢はアーチャーの方。だが無論、それで甘粕正彦を脆弱と見做すことは有り得ない。

甘粕は破格の男だ。およそ強さという点において、当代最強と呼んでも過言ではない。

現に今も、軍刀を振るい立ち向かう甘粕は、明らかに人間を超えた身体能力を発揮している。所作は音速に達し、生身であっても巨石を砕き、繰り出す刃で鋼をも両断するその所業は、強化分を含んでも人としての限界点を超越している。仮に月で行われる聖杯戦争が、参戦者たちによる純然なバトルロワイヤルであるならば、その時点で甘粕の勝利は確定となるだろう。

だがそれだけでは届かない。どれだけ現代で最強を誇ろうとも、それのみでは英霊の域に至れる道理になりはしない。

何故なら英霊とは、人が願った最強の幻想。死後に人々の信仰に押し上げられて、精霊に匹敵するものへと昇華した存在。ひとつの時代を担う理想像そのものだ。

如何に破格であろうとも、現時点の甘粕正彦は“人間”である。未だ生命として定まらない可能性の中を生きる身では、決して届かない狭間が英霊との間には存在していた。

「革新の王。戦国乱世の風雲児。人によっては違いもあるうが、およそ共通してあげられるのは野心と覇道に生きる苛烈な王、という所か。

まあ無理もなかるうな、王者の名とはそういうものだ。弱小から強者へと成り上がり、天下統一という偉業へと手を届かせた、雄々しくも華々しい英雄譚。民衆がそこに何を見出したがるかなぞ、手に取るように推察できる。ああ、まったく——」

大英雄・織田信長。有名に裏付けられた実力に疑いの余地はない。国土全域を巻き込んだ戦国時代、その乱世の中心であつた英傑。様々な革新的概念を打ち立てた王として、そこに集つた信仰は確かなものだ。

その信心に押し上げられて、アーチャーは英霊となつた。そこに付随する人々からの幻想、覇道を築いた英雄としての信仰の形を鑑みて、

「——雁首が揃いも揃って、痴れた頭しか持たぬうつけばかりじゃツ！」

当の本人は、そこに心底からの侮蔑を吐き捨てた。

「動乱の世来たれり、我こそ天下を制する者也。そう己に都合の良い夢を望み、権勢を求めて個々の大名が乱立する。乱世ならば、大望あらば、あらゆる所業を許される免罪符が如く。

熱が上つて沸いておるのか、うつけ共。少しは頭を冷やして周りをよく見てみるが良い。世界と比すれば島とも呼べる小さき国土で、同民族で争い合う自身の滑稽さを。

応仁の乱より変わつておらん。進むべき先も見えず、右往左往と混乱のまま行ふ戦乱など無価値。狭き世界の中で延々内乱に明け暮れども、日ノ本を危ぶむのみは目に見えておろう。

誰も彼も同じよ。世の平定を謳う者も、結局は性根の部分で古き価値に囚われておつた。一度権威を失つた威光など無価値であると、新



たな世には新たな秩序が要るのだと、正しく理解しておる者は一人もおらなんだわ。そんな有り様で、他人任せになど出来ようものか。だからわしが終わらせた。ああ、要は付き合っておれんじや。痴れたうつけの妄言などに」

戦国時代に覇道を成した革新の王。その英雄の心中は、万人が抱く幻想とは程遠い。

彼女は天下取りの野望に夢など抱いていない。燃え上がる感情など持たず、唯々冷酷なまでに最適解の手段を選び取っていく。

理由は単純、正しいからだ。その解の先にこそ意義があると確信し、必要であるからどのような非道に訴えようと迷わない。合理的に、だからこそ残酷に、彼女は王道を貫ける。

その正義を保障する根拠も、また彼女自身。自身の所業の重さを誰より理解し受け止めているからこそ、その歩みに惑う事も有り得ない。

王の義務とは、決断する事。そして責任を負う事だ。

新しき世の革新のため、古き時代の流血に穢れる事も厭わずに。冷酷無比なる魔人の心中、合理の革新を求めた王は揺るがない。

「が、しかし、同時に理解してもおる。夢ソレがどれだけ有益な”道具”であるのかを。

武士という身分。名物と称される茶器。俗世のあらゆる物事に価値を与えるのは、他でもない人間自身。万人皆等しくそうと思えば、真か偽かの判断など取るに足らぬ。

ならば夢とて侮れぬ。何よりそうした無形のものこそ、価値を定める本質なのだから、正しく扱えばどれほど有用であるかなど是非にも及ぶまい」

刀が振るわれる。その威力は凄まじく、防いだ軍刀は砕かれ甘粕自身も浅くない傷を負う。

流石は英霊と呼べようが、どうだろう。それを考慮しても、些か彼女は強力すぎる。

彼女のパラメーターは全ての能力がBランク以上。数値だけ見れば最高格の英霊に匹敵する。

だが本来ならばそれはおかしい。アーチャーは史実系統の英霊だ。数千年単位の歴史を持つ神話級の英霊と比較すれば、その歴史もまだ浅い。

歴史の古さこそが神秘の強度だ。無論、それだけで英霊の強さが決まるわけではないが、地力の部分では明確に数値の差は表れる。純粋な性能で近代が古代に勝る事はまず起こりえない。

甘粕というマスターの存在もあるだろう。それでもやはり、アーチャーの発揮する性能の不可解さを説明し切るものではない。

「天下布武？ 第六天魔？ おおそうとも、貴様らにも判り易かろう。強く聞こえる響きじゃろう。魔王とは恐ろしいものじゃろう。あな強き哉、恐ろしき哉、第六天魔王、おぞましき仏敵よ。彼の者はさぞや強大な魔性の王に違いなし、と。

応とも、そう思いたくば思うがよい。わしもまたそれを利用してもらうまでじゃ」

アーチャーの持つ固有のスキル『魔王』。生前のイメージから脚色された魔性を示す仇名。その恩恵、あるいは影響として本来には無い在り方、能力への変質をもたらす。

所謂、『無辜の怪物』と同様の性質を持つスキル。だが外せない呪いであるはずのそれを、アーチャーの場合は自在に着脱し制御する事が出来る。

それは伝承において、彼女が仏敵という汚名に対し、自らもまた自称して撤回せずに貫いた事に由来する。神罰を恐れず、裁かれずに人生をやり遂げたが故に、それはアーチャーにとって一切のデメリットを持たない”能力”として発現した。

畏怖からの信仰により発現した怪物性。それはアーチャーにとっては着飾る衣服も同然。抱かれた幻想になど左右されない、魔性の王者として彼女は君臨している。

尊大に手を振りかざせば、頭上に戴くのは異端の教義の大曼荼羅。畏れと怨み、迫害の中で蓄積された負の想念。まさしくそうしたもののこそ己にとっての力であると、憚ることなく魔人たる英霊は豪語していた。

「生前には散々手を焼かされた信仰も、今や我が力。わしの手で揮われる”道具”となった。

憧憬も、畏怖も、所詮は真実なき幻想。各々が抱いた勝手な空想、妄想に過ぎん。正しい理解には程遠く、また必要ともしておらん。

是非もあるまい。知られぬ事が神秘の本質というならば、その道理に従って使うまでじゃ。それが有用な道具である限りはのう」

英霊とは信仰を受け取るもの。多種多様な人々の想念からカタチを成した幻想の結晶だ。

それは理想の象徴であり、そこに英霊個人としての人格は必要とされない。生前での彼等がどんな人物だったのか、細かな性格にまで頓着する者はいないだろう。

所詮、そんなものはどうでもいいから。讚えるべき偉業があり、万人が抱くに足る幻想がある。性格や個性など各々で好きに想像していけばそれでいい。

ならば良しと、アーチャーはそんな英霊としての存在定義を是とする。

人の意識に左右される亡霊に過ぎないと、悲観もなく受け入れて利手段を考える。所詮は仕組みを持った道具だと、神秘の概念からは最も外れた方向性で。

それこそが織田信長という英雄だ。時代の変革者であり、神性・神秘の冒読者。自身もまた神秘に編まれた英霊であるにも関わらず、彼女の纏う概念はそれを破壊する。

歴史の重み、神性への畏敬という古きを革新で塗りつぶす”神秘殺し”。古きに遡り、神秘の概念が幅を利かせる時代の英霊であればあるほど、彼女は絶対の牙となり狩り殺すのだ。

「わしからすれば、王だと名乗る輩も大差ない。英雄の名に夢幻を描く衆愚と同じく、王の名前に在り方を縛られる愚か者よ。拘りなど持とうが、衆愚は慮りはせん

王とはな、所詮戴いた冠の名に過ぎん。その冠がどんな名を持つとうが、王の有り様を定めるは王自身。冠ごとくに振り回される王など、真の王には程遠からう。

取り繕えよ。仮面を被れ。慈愛も非道も、等しく王の持つべき顔の一つ。必要とあらば、化粧の如く着飾れば良い。理想も夢も、世の瞬きの間に見る夢幻が如し。ならば拘ることもあるまいが。正義も邪悪も余さず呑み干し、総てを利用して道を築くが王道じゃ」

「――総ては、国のために。己が支配する国を強く、大きく、豊かに育て上げる。どのような王道であれ、全てはそこに行き着く真理である」

革新の王・織田信長。

変革を担う彼女は、あらゆる意味で型に囚われない。一つの価値観に縛られないのだ。

彼女の王としての矜持は、あくまでも成果にある。理想や誇りで行動を制限される事はない、幻想には傾倒しない徹底した合理主義だ。

雄々しい勇氣になど絆されない。甘粕正彦とは、その気質からまるで異なる。互いが己の有り様を譲らない以上、この激突も必然のものだった。

「そなたの大言も、所詮は叶わぬ夢想の類いじゃ。ならばこの場で散ろうと大差はあるまい。わしはそなたの信条に感じ入るものなど持ち合わせん。

それでも道理を通したくば、無理の1つや2つは越えてみせよ。絶対をも凌駕する意志の輝き、英雄さえ超える光を示せなくば、我が得心は得られぬと知れ！」

英霊と人間。決定的な格差を伴う両者の死闘。真つ当ならば打倒の考え自体が誤りだ。

期待はしていない。無理で元々、出来ないのならばそれはそれ。その程度の輩に今さらかける思いも有りはしない。

振るう太刀筋に容赦はなく、冷然たる意志のままにアーチャーの攻勢は続けられた。

それは、始めから結末が見えた戦いだった。

甘粕は戦えている。英霊であるアーチャー相手に、まがりなりにも対抗できている。それだけでも十分に奇跡であり、彼が超人であることの証左だ。

まともな人間では、そもそも対抗自体が不可能なのだ。人類の理想の体現である英霊を相手に、真っ向から渡り合うなど正気の沙汰ではない。

ならばこうして善戦している事自体が称賛に値するものであり、甘粕の規格外の強さを証明するものであるだろう。

だがそれでも、最期に至る結末は変わらない。

人は英霊には敵わない。甘粕はアーチャーには勝てない。

土台、存在としての格が違う。その人間の能力が優れているからと、その程度のもので埋められる格差では有り得ない。

自明であり、当然の結果である。勝算などない、最終的な敗北は定められているのだ。

——魔術式・邯鄲法。

甘粕が己の武器として用いる術法。名の由来は唐代の故事、夢を通じて人生の栄枯盛衰を知る行からきている。

空想として思い描く己を纏い、行使する技。全ては脳内で認識される電脳世界で、イメージした事象を投影し超常の力として操るものだ。

邯鄲法には、大きく分けて五つの種別がある。

筋力や速度などの身体能力を強化する『戟法』。

体力やスタミナ、耐久性を強化し防御・回復を行う『楯法』。

事象のイメージを投影し、それを飛ばし拡げる『咒法』。

他者の力や感覚、環境や術式を解析し解体する『解法』。

イメージの具現化。物質の創造や変質、あるいは環境そのものを生み出す『創法』。

効果の強度を左右するのは術者自身の想像力。夢に描いた己を信じ抜く心の強さによって、邯鄲の術法はその力を発揮する。

ともすれば万能とも思える邯鄲法だが、当然ながら限界はある。想像次第で如何様にも性質を変える術式は、だからこそその脆弱性を併せ持っている。

人一人の幻想とは、弱いものだ。どれだけ超人の夢を願おうとも、根ざした常識の枷からは容易には逃れられない。確かなものとは認識できない曖昧な空想なのだ。

身体能力を強化する戟法は、そもそも現実で強靱な身体を持ち主でなければ行使が難しい。防御と治癒を行う楯法は、致死級の負荷を耐えるか癒すかのイメージがなければならぬ。

どちらも困難なのは言うまでもない。現実で認識できていない夢を想像力で補うものであり、感覚のズレは必然として発生する。ましてそれ以外の現実では有り得ない術法ならば、全てを自身のイメージのみで賄わなければならない。

空を自在に飛び回る感覚を人が理解できるだろうか。巨岩を容易く打ち砕く腕力を、刃をも撥ね返す鋼の肉体を、致死級の傷を瞬時に再生する回復力を、我が物として受け入れられるか。

確かな術理として整えられていない以上、その感覚のズレは術の行使にも大幅な狂いをもたらす。人のイメージに依存する邯鄲法は、著しく安定性を欠いた代物なのだ。

そして、如何に夢想への強い思いを持っていたとしても、術式そのものには上限が存在する。

この邯鄲法は真理に通じた御業ではない。あくまで人の理の内で作られた技術である。性能の限界は明確に定められ、それ以上の力は発揮できない。

こればかりはどんな無茶をしようとも覆らない。そもそも術式自体がそこまでの力を出せないようになっていたのだから、気合や根性でどうにかなるものではないのだ。

どの種別の夢でも、やれる事には限りがある。結論からいえば、この邯鄲法は汎用性と引き換えに非常に不安定な、その出力もカンスト値を定められた魔術でしかない。

所詮は夢、張り子の幻想。真に完成された幻想である英霊には敵わ

ない。

人の身で英霊に挑み、勝利を狙おうとするのなら、常軌を逸していなければならぬ。常識で考えるなら決して有り得ない、そんな人を逸脱した”何か”を持ってなければならぬのだ。

ただ一点、狂気の領域で練り上げた異端の業。それこそ人生そのものをも犠牲にする覚悟で磨かれた”究極の一”であるなら、あるいは対抗する事も出来るだろう。

それらは優れているとは形容されない。そんな人間の事を、他人は壊れていると呼ぶ。英霊という上位存在を打倒するのなら、人から外れる以外に道はない。

その事は、実際に対峙する甘粕自身がよく理解している。

人間では英霊には敵わない。純然たる存在としての強さで、その格差を覆せる道理はないと。

必要なのは総合値でのステータスではなく、一点特化の逆転手段だ。それこそ嵌りさえすれば神さえ殺せるというような、全てを覆してしまうほどの鬼札が。

今の甘粕には、その決め手に欠けている。このまま続けてもジリ貧で、やがては消耗して討たれる事になるだろう。

サーヴァントであるアーチャーに、体力的な消耗はない。純粹に戦うための存在であるサーヴァントとは、そうした部分でも差が現れている。

真つ向からの勝負で英霊に勝つ事はできない。自身でその強さを実感している甘粕が、それを理解できないわけがない。

ならばこれは敗北へと至る道。果てにあるのは絶望の結末しか有り得ない。

「くっ、ふは、はははは——」

そう理解してるはずの甘粕は、しかし高らかに笑っていた。

そこに絶望の影はない。どうしようもないと思える状況でも、甘粕は諦めていなかった。

英霊は人の理想を体現する者——ああ、その通りだ。

何の文句もない。その強さも在り方も、まさしく英雄と呼ぶに相応

しい。

これこそが人のあるべき輝きだと、感激の情と共に思った事に間違いないなどない。

その存在は人の上位にある——否定しようもない。

当然の道理だろう。人々がこうと願った姿の象徴なのだから、同格や格下では意味がない。

いと貴き人物と願われた最強の幻想こそが、英霊。人より強大であるのは自明の理屈だ。

人は決して英霊には敵わない——本当にそうか？

確かに容易い事ではないだろう。英霊とは上位存在であり、抗えないほどに強大無比。それは覆しようのない事実でしかない。

だが、ならば無理だと諦めるのは、果たして正しいのか。絶対に届かない存在だと、早々に決め付けて挑もうともしない事が利口な選択か。

ああ分かっていて、これこそが道理だと。しかし俺は嫌なのだ、正しい選択だと理解していても、感情がそれに納得してくれない。

英霊相手だから、仕方ないからと、そんな言い訳を口にするのがどうしても許せんのだ。

「懸命に生きてきた。我が人生、俺はやれるだけの事をやってきた。憚ることなくそう言おう」

繰り出された剣撃を受け止める。

その威力はまさに人外のそれ。戟法を限界まで行使しても押し返せない。

これが人の限界だ。如何に強化しようとも埋め難い、どうしようもない格差は理解している。

容易に追い込まれていく。出来るのは敗北までの時を遅らせる足掻きのみ。

それだけであるはずなのに、甘粕の気迫は衰えるどころかその勢いを増していた。

「ならばこそ譲れんだろう。俺は俺の人生に懸けて、眼前の試練に膝を折る事は断じて出来ん！」



一喝と共に振り抜かれた軍刀の一閃。

ここまで押し負けるばかりだった甘粕の剣。それが初めて、アーチャーを押し返した。

引き換えに、一撃の後に碎け散る軍刀。

所詮は創形によるイメージの産物、英霊の持つ本物の宝具とは存在強度が違いすぎる。

打ち合えば碎けるのが必定。故にこの結果は当然だと、そんな言い訳を振り払い、甘粕は更なる勢いで邯鄲法を回していく。

今の強度で碎けるなら、より頑強に。思念の質量が足りないなら、更に重く。

創形一つの出力では限界だというのなら他の術式を足していけば良いと、単に切り換えているのではなく、甘粕は明らかに複数の夢を同時に掛け合わせて行使していた。

繰り出す剣の一撃一撃にも、同じように重複した夢が加えられている。

戦法の身体強化だけでは不足なら、解法で相手の強度を削ぎ、呪法で自身に付加効果をもたらす。複数の夢を掛け合わせて、相乗効果でその威力を底上げしている。

術式の限界を、使い手の応用で覆している。それら己の持ち得る手札の中で甘粕は劣勢を盛り返していた。

だが無論、それらは容易いものでは断じてない。

そもそもこの邯鄲法、本来ならば夢は一度に一つずつしか使えない。2つ以上の夢の複合など想定外のものであり、術者にどれだけの負担が掛かるか考慮されていないのだ。

まず夢の複合する事から至難である。現に出来ているのだから不可能ではないのだろうが、この時点でも常人では決して届かない領域だ。

その上で、甘粕は2つ以上の夢を複合させ、高速に入り乱れる死闘の中で使いこなしている。それがどれだけの難行でどれほどの負荷が掛かっているのか、もはや本人以外には想像さえつかないだろう。

しかし甘粕は怯まない。あらゆる負荷も耐え抜いて、規定の限界な

ど段飛ばしに突破して、それしきがなんだと己のギアを更に更にと回転させていた。

「己の最強を信じ抜く。結局のところ勝負事とは、その感情に帰結するのだ。力や技量で負けていようと、それでも勝てると信じているからこそ戦えるのだろうか。」

たとえ相手が何者であってもだ。挫折を恐れて戦いを拒めば、その瞬間に誇りは消え失せる。決して負けないと自負するからこそ、己にとっての輝きだと信じられるのだろうかよ！」

甘粕を支え、その魂を滾らせるのは紛れもない歓喜の念。

超越の存在を相手取り、絶望にも近い実力差を知りながら、彼は心からの充実を感じていた。

尋常ならざる苦難の世界、人が勇気を発揮させられる舞台の到来こそ、甘粕の願い。

ならば当の本人はどうなのか。勿論、甘粕自身にとっても試練は望むところである。どのような苦難を前にしても逃げ出す気など毛頭ない。

仮にも人々に試練を与えようなどと豪語するのだ。その張本人が試練から逃れようなど、そのような懦弱さを己に許しはしないだろう。

だが皮肉な事に、甘粕正彦は“強すぎた”。

なまじ優秀であり意欲も充実しているから、大抵の事では試練と成りえない。

余人にとっては苦境でも、甘粕正彦にとってはそうではないのだ。その驚異的な意志力と才覚で成し遂げられない事など殆どない。

誰も甘粕の本気を見た事がない。恐らくは、当の本人でさえも。その領域に至る前に、あらゆる難関は打ち砕かれてしまう。

だからこそ今のこの苦境を、甘粕は歓喜と共に受け入れるのだ。

超え難い苦難を、この命を賭しても尚届くかどうかという未知の難関を。

俺自身の輝きを引き出すために、我が全身全霊を發揮させられる試練が欲しい。

「俺は英霊たちを尊敬している。その歴史と、人々の祈りの体現たる在り方には心からの敬意を示そう。

だからこそだ。敬意を持つからこそ挑むべきなのだ。理想だから届かないと諦めるのではなく、理想であるからこそ超えねばならない。そうして初めて、彼等の偉業に報いる事が出来る。

——人は過去を振り返るのではなく、未来こそ見据えるべきなのだから」

理想であろうとも、過去は過去。未来に生きるならば、いつかは超えるべき地点である。

そうでなければ人はいつまで経っても前に進めない。過去の栄光に敬意を払うのであれば、それを超える気概を持たねばならないだろう。

人は停滞の中で屈したりしないと信じている。立ち上がった先では素晴らしい光が得られるに違いないと、そう信じているからこそ譲れないと思うのだ。

皆にもそうしてほしいと願うから、まずは己自身でそれを証明する。

尊敬すべき過去の伝説に対し、甘粕は自らの勇気と覚悟を示し続けていった。

甘粕との剣戟に晒されながら、アーチャーに浮かぶのは困惑の感情だ。

総合的な性能ではアーチャーが上回っている。人間と英霊の、それは埋め難い実力差だ。

だがそれを補って余りある術理と勇気。怖れを振り切って踏み込む甘粕の攻撃は、絶対であるはずだった格差さえも超えつつある。

防戦一方だった戦況は五分五分となり、次第に攻勢の流れは甘粕へ

と傾き始めた。

馬鹿げてるとしか言い様がない。何より信じがたいのは、これが特別な力ではなく純粋な実力によるものだということだ。

秘奥にある異能でも、初見確殺を誓う暗技でもなく、人外の異種の血に頼るわけでもない。

全ては費やしてきた努力の量とその密度。甘粕正彦が示す強さは、そうした言葉でしか説明できないものである。

穿った奇策ではなく真つ向からの自力のみで、この男は英霊に拮抗してみせているのだ。

だが果たして分かっているのか、それがどれほどの事なのかを？

英霊という最強の幻想、人々が夢見る理想の具現ともいうべき存在に、単なる努力と意志力だけで手を届かせる事がどういうことなのか。

それがどれだけの奇跡であり異常であるのか、この男は本当に理解しているのか？

「分かっただけのおらんのだろうな、どうせ。諦めなければ万事は叶うとでも抜かしそうじゃ」

勿論、それで済む訳がない。不屈の信念があれば可能などと、そんな一言で片付けられるはずがないのだ。

不断に重ねた努力、真つ直ぐに貫き通した信念、それらを支えて燃焼を続ける熱意。言葉にすれば当たり前な、だからこそ極める事は至難であるものが、甘粕の持つ強さの骨子だ。

その生涯は常に全身全霊全力疾走。あらゆる機会を無駄にせず磨き上げたからこそ今がある。

そんな真似を甘粕正彦以外の誰に出来るという。そこまで持続する意志の強度を、他に一体誰が倣えるというのか。

人の身で英雄に至るには、優れてるだけでは足りない。人を外れて、壊れてなければならぬ。

正道とて、あまりに常軌を逸してしまえば異端の道だ。甘粕正彦の勇氣は狂気の域、その信念は例え総てををご破算にしても止まらないうだろう。

その生き様は、アーチャーの在り方とはまるで正反対だ。

そこにどんな利があるという。行うに足る価値はあるのか、失敗した際の代償は。考えるべき事柄は無数にあるというのに。それらの思考を振り切つて邁進するのが甘粕という男である。

道なき荒野を前にして、アーチャーが試考錯誤しながら道を築くなら、甘粕正彦は意気に任せて道を拓く。最初から相容れるはずのない、真逆の性質の二人だった。

——いや、あるいは、だからこそだったのかもしれないが。

「が、このままで済ますわけにもいくまいな。マスターに劣るサーヴァントなど、冗談にしても笑えぬわ！」

剣戟の流れが変わる。

趨勢そのものに変化はない。むしろより明確に形として現れ出した。

攻撃の主流は甘粕に。防戦だった流れは完全に逆転している。

斬り伏せんとする一撃は、一閃の毎に威力を増していき、アーチャーは受けに回るばかり。傍から見た戦況は、甘粕が優勢だと見えなくてもおかしくない。

だがそれでも、傷を負い血を流しているのは甘粕の方だった。

道理の壁を己の無理で突き崩す。甘粕のやり方とはそういうものだ。

それは突破力の反面、大振りの中に隙も生じさせる。端から堅実さなど度外視しているのだから、こればかりはどうしようもない。

アーチャーはそれを見逃さない。徹底して守勢に回りながらも、生じた隙に傷を残していく。

どれだけ攻勢に移ろうとも、ダメージを蓄積させていくのは甘粕だ。押されているように見えながら、アーチャーは確実に実利を得ている。

如何なる勇気も、結果に繋がらないなら無意味である。

彼女の現実主義は、甘粕の勇猛さに幻惑されない。満足して敗けを

認めるような真似はせず、欠片も緩まず変わらない試練として在り続ける。

故に、甘粕の不利は未だ動かない。このまま進めば先に倒れるのは彼の方だった。

「――流石だな」

幾度もの剣戟を越えた後、心から感心しながら甘粕が言う。

「英霊の壁とは成る程厚い。俺もまだまだだと実感したよ」

「よくもまあ抜かすわ、うつけめ。人の身でここまでやっておきながら、それでも満足できんと言うか。」

言っておいてやるがの、そなたの力も意志も、とうに人の範疇にはない。他人にあるべき背中を示すと言っても、そなたのそれは直視も叶わん灼熱の光源じゃ。

そなたの光は、どう足掻こうがそなた以外のものにはならぬ類いよ」

「そうか、残念だ。俺自身ではそうは思わんのだが、おまえが言うのならばそうなのだろう。」

それを口惜しく思わんわけではないが、それでも構わんさ。別段、俺になれと言う気はない」

甘粕正彦は不世出の傑物だ。同じ世に2人、3人と現れる類いではない。

先の未来がどうなろうとも、甘粕以上の人間は恐らく現れまい。輝き続ける恒星の如きその意志力は彼一人のもの。それは即ち、同じ価値観を共有できる相手がいない孤独を意味する。

それで構わないと、甘粕は思っている。

甘粕が与えるものは試練。災禍の中で自らの光を掴めるよう、等しく人々に機会を与える。

その光を甘粕と同じくする必要はない。確固たる決意と覚悟があればそれでいい。

幸か不幸か、甘粕自身の強さが孤独などものともしない。挫ける事を知らない孤高の魂は、一人でも己の信念を貫けるだろう。

結論は同じ、指摘されたところで甘粕正彦は揺らがない。

「ならばこちからも一つ言わせてもらおう。こうして対等に剣を交える域に至って、ようやくおまえの剣の質ともいふべきものが見えてきたのでな。」

おまえの剣は、敵の打倒を目指すものではないな。むしろその逆、自らが生き残るための剣だ。どんな相手にもしぶとく諦めず、泥にまみれようが生存の道を掴む守りの刃だろう」

「ほう、それで？ 英雄らしからぬ栄えの無い剣とでも言うか？」

「まさか。むしろ俺は改めて感心したんだよ、アーチャー。」

おまえの剣は戦場の剣だ。将の死とは軍の敗北、それを真に心得た王の剣理なのだろう。

その鋼色の魂が、俺には美しく見える。栄えある騎士の王や大望を夢見る霸王とも等しく、人の王たる者が見せる輝きだと疑っていない。

だから理解したよ。今の俺ではおまえに勝てん。このまま無茶をし続けても、その守りを崩せはせんとな」

甘粕が受けたダメージは、既に無視できない域に達していた。

直接の負傷は勿論だが、無茶を通した術式の代償は確実に内部を蝕んでいる。

常人ならば満身創痍と呼んでも差し支えない。楯法の治癒に回す余裕など無く、こうして会話をしている今でも隙を見せれば、アーチャーは容赦なく攻めるだろう。

回せる力は全て強化に回してある。それでもまだ届かないのなら、ここから少々勢いを増したところで勝機など有りはしない。

甘粕の持つ勇氣は、蛮勇ではない。

勢い任せで突っ走る馬鹿者だが、思考を止めてるわけではない。人は考える事ができる動物なのだから、それを放棄する事は怠慢であり弱さだろう。

単なる蛮勇に輝きはない。所詮は一時だけの激情からくる自棄と大差はなく、そんなもので真の勝利者には成りえないのだ。

勝機を探る思考は絶えず動かしている。故にこそ己の敗北も理解できた。

「ならばどうする。平身低頭に命乞いでもしてみせるか？」

「それでおまえの気が済むなら考えんでもないが、するだけ無駄だと分かっているのではな。おまえが俺に期待している事は理解出来ているつもりだ。安心しろよ」

甘粕は冷静だ。己の現状は正確に把握している。

今のままでは勝算がない事も、それを覆す方策を思いつかない事も、分かっている上での言葉だ。あくまで己を崩さない言動は、その心中が平静である証明だろう。

そう、甘粕正彦は播るがない。絶対的窮地の中で、彼の魂が取る選択など決まっている。

「今の無理で足りないのならば、もつと無理をしよう。そう腹を括つたのさ。元よりおまえの期待もそこだろう。俺がどれだけやらかすのか、その程度を見定めたいと考えている。

ならば良し。素晴らしいおまえの輝きに応えるためにも、俺は更なる輝きを示してみせよう」

勝算は見えない。考えても逆転に至る手段は思いつかない。

だが、人生とは本来はそんなものだ。勝ちの算段が最初から読めていて、少々機転を効かせる程度で越えられる苦難など、窮地だとはとも言えまい。

ましてや理不尽な運命の直撃を受けたものは、筆舌にし難い難易度の試練を越えねばならない。そしてそれがあるからこそ、世には勇者と呼べる者が生まれるのだと信じてる。

少々考えた程度で思いつく事ならばとうにやっている。

これが紛れもない己の全力。それでも足らぬというならば、もはや全力以上を引き出すより他にはない。馬鹿げた事だと呆れられようが、それしか道がないのならば是非もなからう。

覚醒を果たす。無理に次いで無理を通す。物語では醍醐味だが、実際にやろうとすれば困難どころの話ではないそれを実現する。そんな己が置かれた窮状を知り、だが身体は怖れ以上の高揚に包まれている。

これで示せない愚昧な男は死ねばよからう。今こそ男子の晴れ舞



台、ここで何も成せないのなら、過ぎた妄想に酔い痴れた男の末路と受け入れるのに否はなかった。

甘粕が軍刀を構える。そして次に放たれるのは、起死回生を賭した決意の一撃に違いなかった。

「そなたの大声もそろそろ聞き飽きた。道理を通したくば無理を越えい、わしから返すのはその答えのみじや」

揺るがないのはアーチャーも同じ。刀を構えるその姿に、気圧される様子など欠片もない。

事實は変わらない、優勢なのはアーチャーだ。

長引けば長引く程に優位は広がる。ならば消耗する前に勝負をかけようとする甘粕の行動は、なんら不思議なものではない。

勿論、アーチャーがそれに付き合う必要は無い。このまま守勢を維持すれば勝ちなのだから、守りの有利を自ら手放すつもりは彼女も無かった。

先手を取らされるのは甘粕の方。

待ち構えるアーチャーに対し一片の躊躇もなく踏み込み、上段に振り上げた軍刀を一閃する。

夢の精度は過去最高。全てが限界値カンストを叩き出し、その一撃は英霊のそれにも匹敵する。

明らかに人間のものとしては規格外。これで相手を人と想定して構えていたならば、その甘さは決死の一閃の前に碎かれていただろう。

だがアーチャーは違う。彼女は緩んでいないし動揺など欠片もない。対峙する男、甘粕正彦を人であるなどとは想定していない。

この男こそ人にして人を超えんとする意志の怪物。未だ人の範疇にはあれど、もはや英霊に対しても脅威と成り得る力がある。

そう覚悟していたからこそ、揺るがない。あるいは自分を超えているだろう一撃を前にしても、専心した守勢は微塵の隙も生じさせなかった。

果たして、その結果は現れる。甘粕の決死の一撃を、アーチャーは見事に捌き切った。

となれば後は、もはや自明だろう。

決死の覚悟で放った一撃。ならばもしそれが外されたのなら、文字通りに死が確定する。

全ての力を掛けているからこそその決死である。それで成果が得られなければ、後には大きな隙を晒す攻勢側が残される。

守勢側にとって、その無防備こそが待ちに待った好機。速やかに剣を構え直し、その首を刈り取るべく容赦のない斬撃を繰り出そうとする。

そこまでの過程は、言うなれば常道通り<sup>セオリ</sup>。攻守共に認知する流れでしかない。

故に、通す無理があるとするならここからだ。甘粕正彦の無理とは、この程度で終わるものではない。

晒した無防備の中で、甘粕が動き出す。

力は全て出し尽くし、姿勢も最悪。立て直しには手間が掛かり、それはアーチャーの反撃に間に合うものではない。

その前提を完全に無視して、甘粕は踏み込んだ。あらゆる理屈を覆して、有り得ない体勢から強引に、夢の力を駆使して不格好な突撃を実現させたのだ。

その様は、ほとんど肉弾。拳でもなければ蹴りでもない、己の身体そのものを一つの塊として敵にぶつかっていく、ともすれば自棄糞にも似た攻撃だった。

これで有効なのかと問われれば、はっきり否だと答えるだろう。攻撃後の隙は更に大きくなり、仮に直撃を入れられたとしても倒せるとは限らない。

リスクとリターンがまるで合わない馬鹿げた行動。はっきりと悪手と呼んでも差し支えない選択であり、考えられない手段だった。

そう、考えられない手段だからこそ、その攻撃は予測の範疇を越えられる。

想定していない事柄に対して反応は遅れるのだ。故にそれは相手の意識の不意を突く。

何より甘粕の躊躇の無さが、この場合では有効な要因となってい

た。一切の迷いが見えない不測の一撃は、相手にとって思いがけない衝撃と成り得る。

馬鹿げた真似をする時には、とことん馬鹿に。下手に勝算など考えていれば脚は止まり、道理を無視した一撃は単なる無意味な愚行へと堕ちるだろう。

常道無視は百も承知。これで不意を突けなければいよいよもって進退窮まる。それら余さず受け入れて、それでも臆する事なく踏み込めるからこそ、起死回生の一手にも繋がるのだ。

そんな道理より外れた突貫を目の当たりにして、それでもアーチャーは動じなかった。

アーチャーは何一つとして緩んではいけない。甘粕正彦がどれだけの事をしてみせても、それで不意を突かれる無様は晒さない。

何をしても不思議ではない。それくらいにアーチャーは甘粕を認めており、故に慢心も無い。そして不意を突けなかった以上、その突貫は単なる無防備を晒す不整合なものでしかない。

常道とはすなわち王道であり、そう呼ばれるのはそれが最も強いからだ。条理を無視した一撃は、その意外性を抜きにすれば力も狙いもひどく乱れた雑な攻撃にしかない。

迎撃の刃は寸分狂わず、十分な余力を持ち甘粕の突撃に合わせて放たれた。

これで決まりだ。もはや甘粕に打つ手はない。

アーチャーはそう結論する。この肉弾突貫こそが最期の足掻きだ。それを受けきった以上、甘粕が引き出せる手立ては尽きた。

確かに決死の気迫は見事だった。あれほどの勇猛さは己が生きた戦国世にもいないだろう。人としては過ぎたものだ、そう認める事に否はない。

それでも、ここまですだった。気迫だけではどうにもならない事もある。こうして結果が出た以上、今さら惜しもうとは思わない。

振り抜かれる剣閃。完璧に合わされたそれは、狙い違わずに相手の急所を捉えている。

そこから先は刹那の意識だ。死闘の極限の中で研ぎ澄まされた感

覚だけが、一秒にも満たないその交錯の内を認識している。

「な、に……ッ!？」

それ故にアーチャーの意識が捉えた光景は、今度こそ彼女に驚愕をもたらしていた。

交錯寸前、甘粕の身から一切の恩恵が消え失せる。

戟法の身体強化も、その他の夢の力の何もかもが瞬間に喪失した。他者の影響されてのものではない。甘粕が自ら己の夢を手放したのだ。

あまりにも有り得ない。戦場で自ら武具を投げ出すに等しい愚行だ。

単に非効率だけの問題ではない。殺気漲らせた攻撃の最中に武器を捨てるという行為がまず異常なのだ。

死闘の中で己の武器とはまさしく命綱。それを自ら捨て去るには、相応の覚悟が要求される。

これが通常の武器ならまだ理解もできる。剣戟から即座に徒手空拳の格闘に移行できる武術があるように、場合によれば武器を捨てた方が有利になるからだ。

つまりはそこに理があるか無いか。術理すら介さない民兵ならば、それこそ手にした武器は死ぬまで手放そうとはしないだろう。

そう、この行動には理がない。確かな有利と働く要因が見えないのだ。

無論、甘粕自身にはそれはある。彼なりの理屈があるからこそ、その行動を取った意義がある。だがそれは、他者には余りにも理解し難いものだった。

そこまで深い思考を伴ったものではない。ただ一つ、事実として認識していた事だ。

このままでは己は敗れる。アーチャーの剣はもはや防ぐ事が敵わないと。

既に強化は限界までやっている。仮にそれ以上があつたとしても、この刹那では引き出すのが間に合わない。

だから、逆に捨てたのだ。

あるいはこの邯鄲法が、人の無意識の底に通じた悟りの行にも等しい奇跡であったならば。

夢見る意志の力次第で、例えば神仏をも凌駕できる可能性を秘めた御業なら、また別の選択肢も有り得ただろう。

僅かでも可能性があるのなら、甘粕の意志力は必ずやそれを掴まんと奮起したに違いない。

だがそうではない。この邯鄲法にそこまでの可能性はない。

出来もしない事を出来ると喚き、根性論という名の思考停止で無策に走る、それは勇氣ではなくただの盲信だ。

そんなものに輝きはない。誰より甘粕自身がそう思っているから、そんな無様には走らないと固く決意している。

甘粕は確かに力を求めている。だが力そのものに酔い痴れる事は決してない。

力とは究極、単なる手段だ。人間の価値の一部ではあっても全てではなく、真に重要なのはその力で何を成すかに掛かっている。

強い者がその強さに飽かせて何事かを推し進める。そんな行為のどこに憧憬があるという。感動に値する素晴らしさがどこにあるというのか。

我々が胸打たれる場面とは、力足らぬ者がその意志で大業を成し遂げる時だろう。恐れを越えて立ち上がる誇り高き姿にこそ、人間賛歌を歌い上げる価値がある。

それが例え、物語の中の美談の類だとしても。それで現実には有り得ないと諦めるのはそれこそ懦弱の一言だと言いつ捨てよう。

だから結局、甘粕にとっては力的手段も舞台設定。必要だから求めるだけで、それそのものに価値を置きはしない。

出来ない<sup>ウィザード</sup>と知れたなら、それを捨てる事にも迷いはない。それが魔術師としての力であっても、一度決めたなら微塵も躊躇しない思いきりの良さだ。

力は所詮、手段である。如何に強化の術式であろうと、それで勝てないのなら意味はない。ならばいつそ、そんな強さなど棄ててしまえというのが甘粕にとっての理だった。

アーチャーの迎撃は、甘粕の性能に完全に合わせたものだ。

正確極まるその一撃が、今となつては仇となる。邯鄲法の助力のあつた甘粕に合わせたそれは、今の甘粕には余分な力が入りすぎている。

既に振り下ろした一撃は修正も出来ない。アーチャー自身の動揺もそれに拍車をかけている。

勿論、それでも威力は十二分にある。多少の狂いは生じても、強化を無くした甘粕ならば、このまま斬り捨てての決着に変わりはない。

得られたものは、性能低下に対する剣筋の乱れ、及びそれに伴うアーチャー自身の動揺。

引き換えに失つたのは魔術による強化分。この交錯の間、甘粕は純粹な人としての性能に落ち込んだ。

そう、人としての、彼がその生涯を通じて磨いてきた、最も重んじらるべき性能にだ。ここから先の可能性を切り開くのは本来持つ人の力。甘粕自身で積み重ねた成果こそが試される。

刃が落ちてくる。

交錯は刹那、完全な回避など不可能。出来るなら夢を捨てていない。

傷を負う事は初めから覚悟する。狙うべきは致命の回避、その一点のみ。

もはや寸前にまで迫つた刃を前に、やれる事はあまりに少ない。出来るのは精々、僅かな体運び程度。それだけでこの瞬間、この死線を越えてみせなければならぬ。

重大すぎるその刹那、心技体の総てを尽くして甘粕は最良と信じるままに動いていた。

鮮血が散る。赤い飛沫が甘粕の身より弾け飛んだ。

その量が多い。斬られた傷は深手であり、安くはない代償を支払っている。

それでも甘粕は倒れていなかった。激痛を気迫で抑え込み、その顔には快活な笑みがあつた。

そこからの動きも即断だった。

先の一撃はアーチャーにとって決着を期したものの。故にそれを逃した後の間隙は必然、あれほど堅牢だった守りの構えが崩れている。すぐさま戟法を練り直す。アーチャーの刀を狙い、返す一撃で叩き落とした。

刀がその手から離れる。拾う動きは見せずにアーチャーは後退。それを甘粕は迷わず追った。

数値上の性能は英霊であるアーチャーが上。一度離されれば追いつけない。傷の治癒も後回しに、千載一遇の勝機を逃さないためにも追撃の手は弛めない。

刀を手放した今のアーチャーとなら甘粕に分がある。ならば今こそ勝負を掛けるべき時だと、その判断に疑いの余地はない。

——と、そう決断した甘粕の目に、無骨な輝きに照らされる銃口が映った。

火縄銃・種子島。アーチャーが持つ本来の武器。

刀を手にしての戦いなど所詮は副次的なもの。”銃手”たる彼女とつてこちらこそ本領だ。

後退しながらの退き撃ち。瞬間での相対速度はほぼゼロだ。アーチャーにとつては容易すぎる射撃条件で、もはや必中は確定しているに等しい。

ある意味で、これは意識の裏を突いた奇襲であった。

ここまでの互いの得物は共に刀。剣を抜くとアーチャーは告げ、甘粕もそれに応えた。その後の戦いは刀剣を駆使した剣戟となり、そのままに激しさを増していった。

即ち暗黙の了解として、彼等は剣を使った決闘に同意したのだ。故にそれ以外の手段は不要であり、約定は無くとも意識はそのように理解している。

最も甘粕にとつては意識以前の問題でもある。弓兵クラスが有する『対魔力』のスキルが、創形による物質化を伴わない術式の大半を無効化してしまうからだ。

むしろそんな甘粕にアーチャーが合わせている形だろう。人間対英霊という図式である以上、その程度は本来ハンデにすらならない。

だが所詮、そんなものは制約はおろか口約束もしていない暗黙上の取り決めだ。

知らんと言えればそれまでで、何の不都合も有りはしない。使おうと思えばいつでも使える。

卑劣だと不公平だと罵られようが、結局はそれまでだ。銃口を向けた殺意は本物で、放たれる銃弾は過たず甘粕を貫くだろう。

アーチャーは退き、甘粕が迫る。

走り出した戦意は止まらない。軍刀が奔り、種子島が火を吹いた。

——軍帽が、宙に舞った。

場に静寂が訪れる。

あれほど響き渡っていた剣戟の音も今は無い。

畸形の礼拝堂に相応しい静けさが戻り、畏怖をもたらず狂奔の神聖が宿りつつあった。

落ちた軍帽には弾痕が刻まれている。

位置としてはちょうど眉間の辺り。直撃すれば間違いなく致命に至る。

必中の予測は覆らず、アーチャーの銃弾は手心なしに己のマスターを穿ったのだ。

それでも尚、甘粕正彦は倒れる事なく立っていた。

軍帽を飛ばされ頭わとなった面貌。その眉間からは血が流れている。

流血は顔面を伝い、顎より雫となって落ちている。精悍な面に赤い血の線が引かれていた。

だがそれだけだ。銃弾は致命に至らず、未だその闘志には些かの衰えもなかった。

対峙する両者は動かない。



甘粕もアーチャーも、動けないわけではないし仕掛ける機が見えないわけでもない。

まるで示し合わせていたように、二人の戦いは唐突に停止していた。

「……傷を癒せ」

しばらくの沈黙の後にアーチャーが告げる。

その言葉に甘粕も素直に従った。楯法を発動させて自らの重傷を治癒し始める。

それは眉間の弾傷ではなく、深手のなっている刀傷の方を。傷の都合いとしてはそちらの方が遥かに重い。

このまま放置すれば間違いなく致命傷である。優先すべきは決まっていた。

傷が塞がる。深手の治癒にはある程度の集中と時間を要したが、アーチャーは妨害しなかった。

未だその戦意は消えてはいないが、問答無用の空気でもない。すでに戦いは治められていると見てもよかった。

「ふむ。これは認められたと解釈して構わんのかな？」

本来ならばあり得るはずのない主従の激突。

違ったのは単なる主張の一つではなく戦に懸ける真そのもの。故に妥協はあり得ず、決着はどちらかの信念の屈服以外にない。

英霊・織田信長を納得させ膝を折らせること、それがこの戦いの意義であった。

「……何故防げた？ 先の種子島、おまえからすれば慮外といえるものであったはず」

刀を得物とした戦いで銃の使用。意識の不意を突いた奇襲の一撃。

所詮、何の取り決めもないものだが、それ故に意識に根付いたそれは予想し難い。

刀同士でも、すでに尋常ならざる死闘だったのだ。そんな死線の中で、更に別の手段にまで警戒を割く余力が果たしてあったのか。

そうであったとしても、これが試練だという意識はあったはずだ。

殺し殺される結末は本意ではなく、あくまで試し納得させる事が目的だ。

その意識は真つ当なものであり、故に刀以外の選択肢は無意識に切り捨てられる。意識的でないからこそ、その油断からは逃れ難い。

「抜かされた挙句に通じぬとあっては、二重の意味で屈辱じや。英霊にとつて宝具とは、それほど軽く扱える手段ではないのだぞ」

実のところ、アーチャー自身も「種子島<sup>ほうく</sup>」を使うつもりは毛頭なかった。

殺しても構わない気構えであつたとはいえ、殺すことが目的ではない。甘粕風に言うなら試練であり、故にそのための基準を自らに設けていた。

この戦いでは銃は使わない。戦いに徹底した厳しさを持つアーチャーでも、己で課した制約を容易く反故するような真似はしない。

だが抜かされた。そうしなければ危険だと感じ取つたのだ。

英霊が人間を相手に、互いに同じ得物で正面から斬り結びながらである。あの時の踏み込みは英霊であるアーチャーをして脅威だと認めざるえなかつた。

「ましてやこの様とあってはな。痛み分けとは、尚更笑えん」

更に、アーチャーが自らの頭に手をやる。そこにあつたはずの軍帽はない。

見れば近くには黒色の軍帽が落ちている。甘粕のものとは別の、輝く木瓜紋を戴いたそれはアーチャーの軍装だ。

地に落ちた軍帽、家中の威信足るべき紋所は、軍刀に裂かれて打ち捨てられていた。

一撃が届いていたのはアーチャーだけではない。

甘粕の軍刀もまた、アーチャーの身に確かな一撃を届かせていたのだ。

「そなたは、わしが宝具を抜くと分かっていたのか？ それを覚悟していたと？」

「そう疑問に思うことでもない。むしろ当然だろう、俺は試される側だ。指定できるものでもなし、あらゆる試練を想定してみせねばな。」

おまえの能力は分かっている。想定できるあらゆる事に備えを持っておくのは、挑む者にとって当然持つべき覚悟だと思っている」アーチャーの射撃を防いだもの。それは事前に用意した対弾性の防護障壁。

あらかじめ創形の夢のイメージを置いて、相手の攻撃に反応して展開させる。全身を覆うほどではなく一点のみを守護できるように展開速度を重視してだ。

必要なのは迷いなき意志。少しでも感えば間に合わない。甘えた認識は決して持たず、英霊の全身全霊と対峙する覚悟が無ければ成り立たない。

「それに手心ならば加えてあつただろう。宝具といっても一丁きり、せっかくの神秘殺しも人間の俺相手では意味がない。ならば数に物を言わせるのがおまえの宝具の真価だろうに、それをしなかった時点で本気には程遠い。これしきの備えで防げてしまう程度にはな」

アーチャーの性能は相性依存だ。強い相手には強く、弱い相手には極端に弱体化する。

その基準で考えれば、甘粕は相性の良い相手ではない。宝具は真価を發揮せず、単発ではこの通りあっさりと防がれてしまう。

故に威力の無さを物量で補うのだ。元よりアーチャーの宝具とはそういうもの、単一ではなく群として機能する宝具である。

そういう意味でなら、確かにアーチャーは本領ではなく手心を加えていると言えるが――

「……仮にそうしたとして、それでもそなたは勝てるか？」

「まさか、そう容易いはずもないだろう。英霊と人間の格差は大きい。少々無理をしたところで超えられるものではないと、身を以て実感しているよ。」

ただ、そうだとしても諦めんがな。これはおまえが与える試練だろう、アーチャー。もしおまえがそうしたければ是非もない。力の限りに立ち向かい、俺の意志を示すまでだよ」

その答えを聞き届けて、アーチャーは思わず頭を抱えた。

この男には勝算の二文字がない。理屈だけでは決して止まらない。

理屈を知らない訳ではない。そこに頭が働かないわけではない。全てを理解した上で、あえて無視して前へと踏み出す。

甘粕正彦にとって勝利とは掴むもの。不断の努力と苦難の渦中で磨かれた意志で以て、不可能をも超える奇跡。事前に布石を積み上げ確実な勝利へと至るアーチャーとは真逆の性質だ。

進むと決めたならどれほど絶望的だろうとも怯まない。たとえそれが英霊であつても、不屈の意志で乗り越えられるのだと豪語している。

それは戦いたいからではない。試練があるから成長があり、人は輝きを得られる。己が何より好むそれを見るために、甘粕正彦は進む道を違わない。

「まったく何と」純粹”なのだろう。生前も含め、ここまでの者が果たして他にいたか。

勝負の結果そのものより、その過程の姿こそ愛している。自身も含めて例外はなく、輝ける姿を引き出すためなら結果が危ぶまれようが厭わない。

真逆、そうどこまでも真逆だった。アーチャーとは何もかもが違いすぎる。理解は出来ても相容れる事は決して無い——彼女が王である限りは。

「そうであつたな。我が身はサーヴァント、主たる者の剣であつた」アーチャーに生前の未練はない。その最期は非業だったがやるべき事はやったと思つている。

故にその闘争動機は過去にはない。経緯はどうあれ黄泉還つたというならば非もない、革新の王として目の前の世界と如何に向き合うかを決めるのみだ。

そこに理があるとしたなら主君殺しも厭わない。下克上は戦国乱世の習い、不足と見れば斬り捨てる事にも躊躇う必要があるものか。彼女はあくまで、今ある世界を見据え正しいと考えて行動する救国の英霊なのだ。

だがそれでも、此度の召喚の発端は目の前の男が語つた夢のような戯言であつたのだ。

「ライダーの奴めの指摘通りか。やはり慣れぬわ、他者に仕えるというものはのう。我知らずに己のやり方で歩きたがっておる。

この戦いはわしのものではない。甘粕正彦、そなたのものじゃ。分かっておったが、納得するのは違うものだな」

アーチャーが刀を納める。戦意はすでに消えていた。

どの道、これは認めなければならぬだろう。自らで課した制約すら破られた現状で、これ以上続ける事に意味があるとは思えない。

この男は見事にやってのけた。ならば自分も、己の主君たる者に示すべき誠意がある。

「——甘粕正彦。我が主君、召喚者たるマスターよ」

そうしてアーチャーは跪き、頭を垂れた。

仕えるべき主として、誠心からの忠義を示すため。

これより二人は真の意味でのマスターとサーヴァントとなる。この戦いに挑む者として正しいカタチに戻ったのだ。

月の聖杯戦争は、より強き魂を選別するための生存競争トライアル、その本義は人間こそが主役である。

「我が身命は御身の矛にして盾。この虚構の身が潰えるまで、その道の助けとなりましょうぞ。

——誓いをここに、契約は成された。稀代の莫迦者の見た夢想、その果てまで見届けよう」

改めて結ばれる主従の契約。解れた誓いを結び直すように。

かつてとは異なるアーチャーの宣誓に、甘粕もまた応えてみせる。

「委細、承知した。織田信長、真摯に世を見据える革新の王よ。おまえの示してくれた忠義心に恥じる事のないよう、俺は俺の真を追い求めよう。

失望はさせんと誓おう。おまえに曲げさせた矜持の分だけ、英雄にも劣らぬ輝きを以て報いてみせるさ。共に我が“樂園”楽園の到来を見よう」

主従の道が一致する。信念が信念を取り込んで、より練磨された意志となって。

不協和音は除かれた。彼らの力と意志は今や、全てが聖杯戦争へと

向けられる。

そして、その矛先が向けられる相手は、既に決まっていた。

保健室は、マスター全員に開放された中立施設だ。

月の聖杯戦争に参加するマスター、サーヴァントならば誰もがその恩恵に預かる事が出来る。

それはムーンセルによって定められた絶対のルール。故にその施設の管理を任された上級A Iも、求められた助けには必ずや応えなければならなかった。

「霊子構造、オールグリーン。これで問題はないわ」

銀髪白衣の上級A I、カレン。やって来た参加者マスターに対してそう診断を下す。

重傷で運ばれた患者には、もう外傷はない。ベッドに寝かされていた彼は万全の状態でそこにあった。

——ただし、抉り出された片眼だけは、眼帯に覆われてそのままだった。

「実際の損傷はそれほどではありません。これをやった者は人の壊し方をよく心得ているわね。」

けど右眼は駄目ね。とても念入りに取り除かれている。これを補填することはムーンセルのマスター全体への公平性を損なうことになるわね。

まあ、片眼が見えない以外の支障もなし、元から腐っていた眼なら

よいのではないかしら」

「流石に仕事が早いねえ。口は悪いが腕は確かみたいだ」

治療の成り行きを見守っていたライダーは、その手際良さに感心したように言った。

「余計なお喋りが過ぎるわね、ライダー。低俗な海賊風情では、口先こそが災いを呼ぶという教訓を知らないのかしら？」

「口が災い呼ぶってんなら、アンタの方こそ今頃厄災塗れだろうに。それでも治療はきっちりやる辺りは、ムーンセルに選出されるだけはあるってことかい」

「その言い方では語弊があるわね。ムーンセルに選ばれるのではなく、私たちAIは皆等しくムーンセルの一部。個性などその付属品に過ぎません。私がマスターに公平であるのは、ムーンセルの観測が何より公正である事の証です。」

あなたたちサーヴァントも、少々役割が違うとはいえムーンセルの一部である事に違いはないわ。よく弁えておくことね」

「ほう。ならアンタがこうしているのも、全てムーンセルの言いつけだからかい？」

「いいえ。この役割がムーンセルより与えられたものだという事は確かですが、カレンというパーソナリティはあなたたち全員を愛していますよ」

本気なのか冗談なのか、どちらとも取れる意味深な笑みを浮かべて、カレン。

何とも奇妙なAIである。役割に忠実なのは確かだが、その態度には不可解なものが多すぎる。

それが単なるパーソナリティによるものか、それとも何か別の思惑でもあるのか、読みきれない健康管理AIをライダーは愉快気に笑った。

「う、あう……ぼ、僕は……!？」

寝かされていた患者、ライダーのマスターである間桐慎二が起き上がる。

未だ混乱の渦中にある意識は、不安気に周囲を見回していた。

「よお、シンジ。目が覚めたかい。負けて帰った気分はどうかねえ？」  
そんな己のマスターに無遠慮な言葉をライダーは投げかける。

その中に含まれた『負けた』という単語に、慎二の身は震えた。  
「初っ端からとんでもないのに当たっちゃったねえ。ここのマスター  
共にも色々いるが、ありやあ別格だ。まず間違いなく優勝候補の筆頭  
の1人だろうさ。」

「どうだい、シンジ。随分と分が悪い相手だが、いつもの憎まれ口を  
叩く気力は残っているかい？」

慎二の身を震わせているものはライダーとて分かっている。

分かった上で、彼女はその挑発的な言動を止めようとはしない。顔  
面は蒼白に色褪せ、次第にその震えが強くなっていくようにも、構わず  
無神経な言葉を続ける。

「あ、当たり前だろ。大体、憎まれ口ってなんだよ、おまえ。いつも  
言ってるけど、言い方とか少しは考えろよライダー」

ようやく返した答えは、いつもの慎二のものと変わらなく聞こえ  
る。

だが内容はそうだとしても、はつきりと表に現れている態度は隠し  
きれない。目に見えて縮こまる彼の姿は、常の虚勢にも滑稽さより哀  
れさを与えていた。

「あんなのただの反則だろ。結局さ、ああいう手段に頼らなきゃなら  
ないってのがそいつの腕の悪さを表してるってわけで……だ、だか  
ら、さ、僕は……僕は……ッ!？」

既に突きつけられてしまったのだ、明確な現実を。

この戦いはゲームではない。命が賭けられた本物の殺し合いで、自  
分もその当事者だと。

その事実から逃げられない。自らは必ずや勝利できると幻想に走  
る事もできない。それら逃避の道は、刻まれた痛みと恐怖によって封  
殺された。

もはやどうしようもなく、事態を見据えなければならぬのだ。

己は逃げられず、7日目には“あの男”と闘わねばならず、そして



「――僕は死ぬのかツツ?!?!」

敗北者には”死”を。聖杯戦争に課せられた絶対の掟。

弱肉強食の生存競争、逃れようのない結末に、慎二はその心中を吐き出した。

「ああ、死ぬね。ここじゃ負けた奴は皆死ぬんだ、最初からそう言うてるだろ」

それでもライダーの言葉に慈しみはない。

恐怖に震える契約者<sup>マスター</sup>にも手を差し伸べず、共感や同情などで慰めてやる事もせずに。

稀代の冒険者は何処までも享乐的に、命の危機さえも笑い飛ばすように言い放つ。

「い、嫌だ、嫌だあ！　こんな聞いてない。本当の電腦死なんて、そんなの実際にあるなんて思わないじゃないか。それなのに今更、そんな事言ってるなよ！」

「こいつを冗談だと受け取ったのはアンタの勝手。だが戦争なんてのはそんなもんさ。自分だけは死なねえとか、有りもしない妄想に縋って目を逸らそうとする。」

だが現実はそのはいかない。善人だろうが悪党だろうが、戦争に負けた方はぶっ殺されるのがオチってもんさ。その事に、大抵の奴は死ぬ直前になってようやく気付く。

だからアンタのそれも、特別珍しいってわけじゃあないんだぜ」

「なに分かったようなこと言ってるんだよ!!　大体、おまえがもつと強ければこんなことにはならなかったんだ！」

「そうだ、おまえが悪い！　とんだハズレサーヴァントだ！　おまえが不甲斐ないせいで、僕はこんな目にあっているんだぞ、エル・ドラゴ！」

「そうだねえアタシのせいかもねえ。実力、天運、執念、油断、勝負事を決める要素するのは色々あるが、真の意味での偶然なんて勝ち負けの世界にはありやしない。」

今こうしているアンタも、なるべくしてなったもんさ。要は何もかもが足りなかつたんだよ、アタシたちには」

「うるさい！ そんな沸いた事言ってるくらいなら僕を助けるよ。サーヴァントはマスターを助けるもんなんだろ。僕をここから出せ、こんな狂ったゲームから解放しろ！」

「ああ、そりゃ無理だ。そんな簡単にどうにかできるルールなら最初から作られちゃいないよ。この月に入った時点で、ここにいる奴らの死はほとんど決まったようなもんなのさ」

「何だよそれ何だよそれッ!? こんな理不尽だ絶対に間違ってる、許されていいわけがない。僕はまだ八歳なんだぞ。なのに死ぬって、そんなの……ッ!?!」

「どう思おうが構わんけどね。ムーンセルに情けなんざ期待したって無駄だよ。月の眼からすりや人間なんざ誰も彼も一緒さ。勝った奴と負けた奴、そう区別していただけさね。」

理解しなよ、シンジ。ここじゃ7日目を越えられるのは勝者だけなんだ。それ以外は例外なく死ぬ。もちろん、アンタもね」

「あ、ああああ……ッ!?!」

無様という言葉そのままに、慎二は泣き崩れる。

差し迫った絶望を突きつけられて、逃げ場がないと思いい知らされても尚、気丈さを保ち続ける強さなど間桐慎二は持っていないのだ。

そんな慎二の姿を、ライダーはやはり変わらない笑みのままで見つめていた。

「時に、正彦。そなたはあの小僧めをどう考えているのじゃ?」

互いの剣を納めた後、アーチャーが改めて甘粕へと尋ねる。

「随分と手酷く痛めつけておったようだが、そなたが期するのはあの小僧の再起であろう。だがわしには奴がそこまでの器だとはどうに

も思えんのだが。

それとも何ぞ期待できる部分でもあると？ そなたはそれを知っておるのか？」

「いいや、全く。俺は間桐慎二のことをさほど知らん。大まかな経歴程度は把握したが、それ以上に踏み込んだ事情など認知していない。これでは根拠など探したくても見つからんさ」

その言葉に嘘はない。間桐慎二について甘粕は深い認知などない。苛烈に課した試練は誰に対しても等しいものだ。基本、殴りつける以外のやり方を知らない。

立ち上がれるか否か、それは相手次第である。尽き果てる厳しきあつてこそその試練だと考えているから、そこに例外は有り得ない。

他者を尊重しその価値を認めながら、そこに甘えや優しさは欠片もない。

相変わらずの頓着のなさに、アーチャーは呆れたように溜め息をついた。

「が、思うところならある。彼に限らず、正しい認識のない参戦者たちを招き入れた原因はこちらにある。責任を果たせというならそうだろうし、俺もやれるだけの事はしたい」

西欧財閥に対する妨害の一環として、月へのアクセス方法を公開したのは解放戦線だ。

その行動の如何はともかく、責任の一端は確かにあるだろう。ムーンセルへとアクセスしたのは彼ら自身とはいえ、その選択肢を与えたのは事実なのだ。

たとえ甘粕自身が直接関与していなくても、自らの組織が行った事なら連帯責任。人々を率いる立場の者として、その責任逃れをするつもりはない。

「勝利を譲ることは出来んが、彼らがこの戦いと向き合えるようにとは願っている。立ち上がればと祈る気持ちは強くあるさ」

「その上であれか。そなたの試練は本当に容赦というものを知らぬな」

「当然だろう。甘えを残した苦境で人の何が変わるといふ」

少しも己の行動に疑問を持っていない様子で甘粕は答えた。

「しかしあれでは見込みは薄かろう。もはや立ち上がれる胆力などあの小僧は持ち合わせまい。折れた気骨はそのまま、再起など望むべくもない」

手心なく仕留める事を主張していたアーチャーだが、それも僅かな可能性でも残すのを好まなかったからに過ぎない。彼女とて九分九厘の勝利は確信していた。

間桐慎二は立ち上がれない。あの矮小な自尊家には、あそこから自らを奮い立たせる何かは無い。恐らくは決闘日の7日目まで恐怖に怯えたままに動けないだろう。

生前の乱世の時代、多くの人物を見てきたアーチャーの観察眼だ。そうそう的を外すことは考えづらい。

「さて、どうかな。俺はそう見下げたものではないと思っっているが」そんなアーチャーの人物評に対し、甘粕は異論を唱える。

アーチャーがまず有り得ないと感じている間桐慎二の再起を、甘粕は信じていた。

「なんじゃ、根拠など持ち合わせんのではなかったのか？」

「ああ、そんなものはない。だが僅かなりとの経歴でも見えてくるものはある。」

なあアーチャー。プライドの高さというのは稀有な素養だと思わないか？」

「己の身の程も知らぬ自尊など滑稽で無様なだけじゃ。あの小僧もその類いではないか」

「確かにな。彼はまだ未熟だ。閉じた価値観に囚われて、己の身の丈すら分かっていない。」

だが、元来無知とは恥かもしれんが罪ではあるまい。まして彼の本当の年齢を考えるならば、未熟である事も無理からぬことだろう」

間桐慎二は外見通りの年齢ではない。現実での彼の実年齢は僅か8歳である。

対戦者を知る事が準備期間の本義だ。甘粕もまたそこに抜かりはない。言ったように大まかな経歴ならば調べがついている。

「むしろあの歳であそこまで自らの能力に自負を持てる事こそ称賛に値するだろう。少なくとも己を卑下するばかりの者よりも遙かに見込みがある。

若者の未熟さは可能性とも言い換えられる。彼は己の到らなさを知った。ならば後は立ち上がるだけだろう、己のプライドに懸けてな

「わしには過大評価としか聞こえんがな。期待の通りにいくとは限らぬぞ」

「なに、構わん。実際の動機はなんだっていいのだ。彼は既に追い詰められている、どうあれ立ち上がらねばならん事は確かだからな」

倒錯した期待と共に試練の男は快笑する。

何一つの根拠もなしに甘粕は間桐慎二の勇気を信じている。望んだ輝きは必ずや現れると。

過度な期待だとアーチャーが呆れるのも無理もない。だが甘粕の願いと元よりそういうものだ。人類を尊び、苛烈なまでの期待があるからこそその災禍の祈りである。

いずれにせよ結果は現れる。

甘粕の期待に関わりなく、7日目という最終日時は既に確定しているのだから。

「無様ね。概ね予測通りではありましたが、こうまで味気なくては失望しか感じません」

泣き崩れた慎二に対し、無感動に冷めた眼差しでカレンは言い捨てた。

「ライダー、あなたもです。何の手立ても打たないばかりか、放蕩な言動で惑わすばかり。これではあなた自身にも意欲が欠けていると判断せざるをえません。」

戦う前から聖杯戦争を放棄するつもり？ サークヴァントとしての役割を全うできないというのなら、こちらも対応を決めなければなりません」

無残は敗北者から視線を移し、その同胞であるサーヴァントへと目を向けるカレン。

その眼光は鋭い。明確な非難の意思が示されている。自らのマスターを突き放すようなライダーの行動を、カレンは決して認めてはいなかった。

「カハハッ、放棄い？ そんな白ける真似するかよ。楽しみはこれからじゃないか」

応じるライダーの態度に変化はない。浮かべた笑みはどこまでもふてぶてしく、現在の状況に対する悲壮感など欠片も見えない。

「アタシもシンジも、命の物种はここにある。色々足りないものが多いが、戦なんざ蓋を開けてみないことに分らんものさね」

「意気込みは結構ですが、マスターはそうではないようね。聖杯戦争とは、あくまでマスターを測るためのもの。サーヴァントのあなた1人が勇んだところで、肝心のマスターに見込みがないのでは何の意味もありません」

「ああ、そいつは勘違いだ。というより見込み違いをしているよ、アンタ」

冷然とした言葉を投げかけるカレンへと、逆にライダーは指摘を投げ返した。

「勘違い？ あなたはここから間桐慎二が立ち直れるとでも？」

「だから、そこが見込み違いなのさ。立ち直るなんて、アタシらには似合わない言い方だ。」

アタシらはさ、悪党なんだよ。意気込み勇んだ勇気で立ち直ろうなんて善玉連中がやってりゃあいい。悪党には悪党なりの這い上がり方ってのがある」

確かに彼女は偉大な英雄だ。史上初の世界一周の航海を成功させた功績は、英霊として人類史に刻まれる事に何の不足もない。

だが功績がどうであれ、その性質は紛れもなく悪人だ。ライダーの

属性は混沌・悪。自己の欲望の肯定こそ本質である。

虐げられ劣悪の中にあつたが故の悪辣ではない。己が望むまま、思うがままに彼女は悪党である。そこに嘆くべき要素は存在しない。

「なあシンジい、ベソかいて泣き喚いてるのもいいが、そろそろらしいところを見せてくれないかい？ アンタの持ち味はここからだろう。このままいいように貶されて痛めつけられて、黙って引き下がるような殊勝なタマじゃないだろう。」

アンタは誰より優秀で特別な、凡人なんかとは違う天才サマなんだろう。アンタのやる事は正しくて、上手くいかないならそりや世界の方が間違つてると、そう思っているんだろうが。ならこのままにはしておいていいわけがないよな」

間桐慎二は小物だ。人一倍に自尊心が強く、その上で器量が小さい。

自身が優れていると信じて疑わず、そうでない現実なら見ようとせず、他人を見下す言動ばかり。頑なに自分の価値観だけしか認めようとしぬいのだ。

たとえ何が起こつても、それこそ英霊同士の超常の戦いを目の当たりにした後でさえ、彼の自尊心は自らの劣性を認めない。他人が足を引つ張つたから、落ち度は自分ではなく他にあるのだと言ひ聞かせ、自身の優位性を保とうとする。

もはや歪んでいるといつてもいい。この世の悦を極めた王から道化の中の道化と形容されるその在り方は、単なる愚かさで済ませられるものではないかもしれない。

多少なりとも間桐慎二という人間に接していれば誰でも気付く器の狭量さに、皮肉なこと本人だけが気付こうとしていない。

これでは立ち直るなど最初から不可能だ。自らを見つめ直して反省する事も出来ない者に、一体どんな決意や勇気が抱けるといふのか。

「聞かせておくれよ、大将。アタシは副官だ、アンタの号令がなくちゃ始まらない。せいぜい威勢のいい、悪党らしい台詞を吐いてみせな」  
故に間桐慎二は歪む。放置すればするほどに、その性根は根本まで

歪に曲がっていくのだ。

正しい奮起などではない。道理を無視してありもしない妄想にすぎ、歪んだ自己顕示欲に傾倒していく。自分が何をしているのかさえ、正確には分かっていないだろう。

そこでは正常な危機意識でさえ忘れられる。まともに考えれば絶対に有り得ないような事も、自分に都合のいい現実へと置き換えられて、あっさりと信じてしまう。

その有り様は醜悪で、愚かだ。ライダーの言う通り悪党のそれだろう。

だが、そうする事で這い上げられるのも確かである。どれだけ歪で無様なものであろうとも、ただ諦めるのではなく足掻き続けようとしているのは間違いない。

そんな愚かな悪童の選択肢が何にもならないと決めつけられる者が何処に居ようか。

顔を上げた間桐慎二の眼には、暗く濁った妄執の火が灯っていた。



## ※ステータス：魔人アーチャー

### ◆アーチャー

マスター：甘粕正彦

真名：織田信長

性別：女性

身長・体重：152cm 43kg

属性：秩序・中庸

CV：釘宮理恵

【パラメーター】

筋力：B 耐久：B 敏捷：B 魔力：A 幸運：A | 宝具：E

↳EX

【クラス別能力】

・対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。

大魔術、儀式呪法を以てしても、傷つけるのは難しい。

・単独行動：B

マスターからの魔力供給を断つてもしばらくは自立できる能力。

ランクBならば、マスターを失っても二日間現界可能。

【保有スキル】

・戦略：B

外交や兵站など大局的に物事をとらえ、戦う前に勝利を決する力。

生前、桶狭間において日本史上、類を見ない奇襲を成功させた。

ただし、本人はそうした不確実な戦法を好んでおらず、あまり使い

たがらない。

・カリスマ：B |

軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において、自軍の能力を向上

させる。

カリスマは稀有な才能で、一国の指揮官としてはBランクで十分と言える。

彼女の場合は効き目にムラがあり、魅了と同時に多くの裏切りも招いた。

・魔王：A

生前のイメージによって、後に過去の在り方を捻じ曲げられた怪物。

能力・姿が変貌してしまうが、アーチャーの意思で任意の発動・解除が可能。デメリット無しにその恩恵を受ける事が出来る。

生前、仏敵と称され自らもその仇名を自称した事から。無辜の怪物とは似て非なるスキル。

・天下布武・革新：A

時代の変革者たる英雄に与えられる特殊スキル『革新』。

アーチャーの場合、更に天下布武の文言が追加される。古きに新しきを布く概念の変革。

『神性』や『神秘』のランクが高い相手や、体制の守護者たる英霊などであればあるほど自分に有利な補正が与えられる。

これによりアーチャーは『神性』や『神秘』を持つ英霊や宝具に絶対的な優位性を誇り、相性次第では神霊級の相手にも対抗できる。

逆に神秘の薄い近代の英霊などには何の効果もない。それどころか自身の各種スキル、宝具の効果が落ちる。

【宝具】

『三千世界』

ランク：E↘A 種別：対軍宝具 レンジ：1↘99 最大補足：3000人

三千丁の火縄銃を展開、一斉射撃する。

戦国最強の騎馬軍団を打ち破った逸話から、騎乗スキルを持つ英霊には攻撃力が倍増する。

騎乗スキルを持たない英霊にはただの火縄銃であるが、三千丁もの一斉射撃はただそれだけでも脅威である。

『第六天魔王波旬』

ランク：E↘EX 種別：対神宝具 レンジ：― 最大補足：―

神仏を滅ぼす魔王信長の真の宝具。

『神性』や『神秘』を持つ者に対して絶対的な力を揮う存在へと変生する固有結界。

本人の能力・姿も変貌し、仏敵たる『魔人』の側面が最大限に引き出される。

「比叡山焼き討ち」に代表される生前行った苛烈な所業が宝具化したもの。

後世、民衆が”織田信長”に抱き積み重ねた恐怖、畏敬の念により大焦熱地獄が具現化する。

結界内では神や信仰によってもたらされる総ての恩恵が失われ、高い神性を持つ者は存在を維持することすら難しい。

しかし神性の薄い英霊には、毎ターンに僅かな地形ダメージを与える効果のみとなる。

## 1 回戦：嵐の航海者

——そして、運命の7日目は訪れた。

「ようこそ決戦の地へ。身支度は全て整えたかね？」

決戦に向かうマスターたちを迎えるのは、黒衣の神父服に身を包んだ偉丈夫。

パーソナリティの名は言峰綺礼。底の見えない笑みを貼り付けた上級AIは、マスターたちへの歓待の意を示していた。

「扉は一つ、再びこの校舎に戻るのも一組。覚悟を決めたのなら、闘技場の扉を開こう」

進めば後戻りの道はない。向かう二組の内、再びここに戻るのは一組だけ。

集ったマスターに与えられるのは最後の選択肢だ。準備期間を終えて、試練タスクの中で練磨されたマスターたちは、最後にその覚悟が問われる。

——闘技場へ赴くか。

——今しばしの準備を行うか。

「いいだろう、月に集った闘士たちよ。決戦の扉は今、開かれた」  
覚悟を決めた者には、その扉が開かれる。  
納められる2つの暗号鍵トリガー。電子の鎖に施錠された扉が解き放たれた。

「ささやかながら幸運を祈ろう。己の願いに懸けて悔いのないように戦う事を。再びこの校舎で君たちと出会えることを、心より祈っている」

これより先が本当の戦い、互いの願いを懸けた凄絶な殺し合いだ。  
聖杯インセルへと辿り着けるのは1人だけ。譲れない己の願いのために、たった1人になるまでこの闘争は続けられる。

合計にして64通りもの対戦カードとなる聖杯戦争の初戦。128名の参加者の内半分は、この日の内に死に絶える事になる。

この校舎に戻るのには半数のみ。その事実を理解しながら、言峰神

父はマスターたちに等しく勝利の祈りを捧げていた。

「では——存分に、殺し合い給え」

全ては己の欲望<sup>ねがい</sup>のために。人類が決して拭い去れない闘争の業。

戦争という名の悲劇の歴史が、この月の舞台でまた新たに刻まれようとしていた。

それぞれの決戦の組合せを乗せて、闘技場<sup>コロッセオ</sup>へと運ぶエレベーター。狭く閉ざされたその空間では、必然両組が対峙する形となる。これより生死を分つ戦いを行う相手と、正面から向き合う事になるのだ。決戦の地に辿り着くまでの、この僅かな時間が最期の語らいの機会だ。

まもなく両組は殺し合う。もしも思いを知るのなら、ここを逃せば機会は永久に訪れない。

それが果たして良いことなのかは別として、薄壁一枚を隔てて向き合う相手へと、彼らは言葉を交わし合う事が出来る。到着までの時間をどう使うかは自由だった。

「また会えたな、少年。嬉しいぞ」

対面に立つ慎二へと甘粕は朗らかに言葉をかける。

その親愛に偽りや打算はない。彼は本心から間桐慎二の再起を喜んでいた。

「戦うと決めたのだな。こうしてここに立ったという事は、そう捉えなくても構わんのだろう。」

できれば聞かせてもらいたいな。おまえが如何なる決意を抱いたのか、その意志の輝きの程を、是非とも俺に教えてほしい」

敬意と期待。甘粕が示す猛烈なまでの正の感情が慎二に突き刺さる。

今の甘粕の瞳に映っているのは慎二のみ。真つ向より射抜いてく

る視線に対し、慎二は怯えを含んだ様子で眼を逸らした。

ああ恐ろしい、この男が恐ろしくてたまらない。

虚勢を張ろうとしても、刻まれた敗北の恐怖は拭えない。直視すればどうしようもなくあの敗北の痛みを思い出す。

もはや意識してしまったのだ、甘粕正彦という破格の男を。認識した以上、その魔人の如き凄まじさから眼を背ける事は出来ない。このような男に勝利できるなどと、一体どうしてそんな幻想を信じる事が出来るだろう。

甘粕が言うような真つ当な決意ではない。間桐慎二の性根は歪んでいる。

異様な熱量を誇る甘粕の期待に対し、まともに返答など出来るわけがなかった。

「ふむ、だんまりか。まああえて言葉にしなくてもいい。どの道これから、いやでもその意志が問われる事になるのだからな」

「アンタさ、そいつは誰にでもやってんのかい？」

そんな甘粕の期待から慎二を遮るように、ライダーが口を挟んだ。「うちのシンジにも随分とやってくれたが、覚悟だ意志だのとむず痒くなりそうなもんを押し売ってくれるじゃないか。こちとらそういう類いとは無縁の輩だと分かりそうなもんだがねえ」

「当然だろう。俺は信じているのだ、人は誰しも輝ける決意を抱く事が出来るのだと。誰一人として例外はない、意志ある人間ならば必ずや光を持てる。」

おまえたちは悪なのだろう。他者を蔑ろにし自己欲にこそ重きを置く、そういう輩なのだろう。結構ではないか、意志の光とは正義のみの専売特許ではあるまい。強欲に欲し奪う悪道でこそ輝ける暗黒の光も存在するはず。俺はそれを否定したりはせん。

善も悪もぶつかればいい、己自身の光を懸けて。互いの存在があるからこそ輝きは強くなる」

「アハハハハツ、テメエが好きなら善も悪も区別なしかよ。なんだ、思ってたよりもずっとおめでたい奴だったねえ。ああいいよ、イケる感じだ悪くない」

意志としての強度があれば性質は問わない、甘粕正彦の絶対値主義。

常人ならば度肝を抜かれる異常な感性を、しかしライダーは良しとした。

「戦争なんて大体いつもこんなもんだ。どいつもこいつも性根の部分は似たような俗物ばかりさ。おおよそくだらねえもんなんだから、悩んだってしょうがない。」

そういうもんさ、人間ってのは。王だろうが賊だろうが、戦争やらかす時点でご同類だよ」

「ほう。それはわしに対する挑発か、ライダー」

ライダーの言葉に対し、アーチャーは凄みを持つ笑みを見せた。

「王たる者の王道を、下撰の賊徒風情と同列に語ろうとはな。わしは戯れは許すが、侮りは許さぬ。覚悟があつての事じゃろうな？」

「同じも同じさ。人の欲望なんざ、一皮剥けば欲しい欲しいと業突張りの顔を出す。」

なにせそんな卑しい海賊の財宝で、誰よりも肥え太らせたのは我が女王陛下なんだからね」

アーチャーの笑みに応えるように、ライダーもまた皮肉を混じえて笑みを返す。二騎の英霊の眼光が真つ向からかち合った。

「女王が『私の海賊』なんて抜かした時には、流石に腹を抱えて笑い転げそうになったもんさ。普段騎士道がどうだの語っている連中が、雁首揃えて金銀財産に目の色変えていやがる。」

あげくアタシを騎士にだとき。忠誠も名誉も金次第ってか。高潔な精神とやらはどこいったよ。そいつはアタシが他所から略奪しまくってかき集めたもんだっての」

ライダーの真名は、フランシス・ドレイク。

英国出身の海賊であり、後の海軍提督。スペイン無敵艦隊を滅ぼした”エル・ドラゴ悪魔”。

”太陽の沈まぬ王国”を落とし、後の大英帝国を築く最初の礎を成した。人類史のターニングポイントたる転換の一時代を築いた『星の開拓者』だ。

世界一周の航海で彼女が各地より略奪して得た財宝は、当時の英国の国家予算を遥かに凌ぐものであったらしい。国力に乏しい二等国だった英国は、彼女が持ち帰った功績によって飛躍する。

それほどの莫大すぎる”利益”を前に、騎士道という規範が如何に脆いものであったのか、人間の欲望を知るのなら想像は難しくないだろう。

「ま、仕方ないかね。誰だつて金は欲しい。ありや欲望の象徴だ。アタシだつてそうだし、別に英国ウチナだけに限つた話じゃない。あの頃はどこの国もみんな海賊だつたさ。

余所から奪つて、自分の懐に納める。他の奴らよりも多く、もつともつと欲しい欲しいってね。ほら、海賊と何を違わないだろう。

いいじゃないのさ、それで。善意と欲望の間で揺れて定まらないのが人間つてもものだろう。アタシらも含めて、元からしようもない生き物なんだ。だつたらせいぜい派手に、後には何も残らんくらいに喰い散らかして愉しんでやればいいのさ」

彼女、フランシス・ドレイクは人間を好んでもいないし嫌つてもいない。

聖人の潔癖さ、悪人の強欲さ、どれも人間のものだとして否定しない。自分も含めて、善悪兼ね合わせた生物として、偽善のままに進む秩序を良しとしている。

重要なのは欲望の性質ではない。どれも同じ欲には違いないのだから、問題はそれを如何に楽しむかどうか。どれだけ富を積み上げようが、それで楽しめなければ意味はない。

王であれ英雄であれ海賊であれ、命ならば終わりは来るのだ。ならばせいぜい自分の欲望に従つて、最期の瞬間まで愉しみ抜いてやればいい。

理想はない。祈りも持たない。ただひたすらに、己の享樂のままに振舞う。他人へ語り聞かせるようなものではない、清々しいまでに悪党としての理屈がある。

それこそがライダーという英霊、世界を拓いた自由なる海賊の在り方だつた。



「なるほど、理解したよライダー。言葉として聞こうとした俺の方が無粋だった。

ああ、性質を問わないのは俺も同じだ。俺の願いも欲望である事に変わりはない。ただ己の欲望を押し通さんとする者同士、存分にぶつかり合うとしよう」

善悪を問わず、揺るがず自由に己を貫くライダーの姿に甘粕は快笑した。

エレベーターが降りていく。闘技場コロッセオまでもう間もなくだ。

聖杯戦争の一回戦。熾烈なるバトルロワイヤルの始まりを告げるため、参戦者たちは決戦の地へと向かっていった。

轟く銃砲。空間には無数の弾丸が飛び交い、破壊を吹き散らす暴風となって舞台を穿つ。

人の世から忘却された沈没船に、戦いの火が灯る。かつて敗残のまま水底に眠っただろう船艇らは、英霊同士の決闘という極光に照らされて輝きを取り戻した。

アーチャー、そしてライダー。

図らずも両者は共に銃使い。剣士とはまた違う間合いを共有し、敵対者を射抜くために各々の得物より弾丸を吐き出していく。

銃弾を銃弾で叩き落とすという離れ技も、英霊にとつては当たり前。弾切れなどという常識も彼らの武器には通用しない。魔力ある限り無限に銃弾を吐き出し続ける幻想の銃器は、本来の様式を完全に無視して、さながら機関砲の如き勢いで蹂躪する。

銃の決闘と呼ぶにはあまりに異様。剣士たちの剣戟の激しさにも似た応酬で、二騎は互いの存在を削り取らんと銃火を強めていった。

同じ得物の使い手同士。だが本人たちがまるで性質の異なる英霊であるように、その戦い方も完全に別種のものだ。

機動力に優れる騎兵<sup>ライダー</sup>の戦いは、空間を活用した自在なる立体機動。戦場に存在するあらゆるものを利用して、縦横無尽に駆けながら二丁拳銃を取り回す。

その敏捷ステータスは騎兵クラスとしては平凡なものだが、彼女にとつて”船上”での戦いは十八番である。何が利用できるのか、頭で考えるより身体そのもので直感し、およそまともな決闘とはかけ離れた狡辛い手段も躊躇なく実行する。

ロープを使い、船淵を駆け、マストを登ってはとあらゆる地形を利用する。まさしくそれは放蕩なる海賊の所業。誇りなどとは無縁の場所で奔放に、自由なる有り様を貫いている。

対し、アーチャーの戦いはそれとはまるで正反対。

小賢しく動くような真似はせず、その構えは不動のまま。両手に構えた種子島、その銃火の威力で正面から制圧するように弾幕を放つ。細かく動く真似はしない。頼りとすべきは策ではなく、真つ向からの力である。あくまでも王道を貫く戦法でアーチャーはライダーに對抗している。

しかし地の利はライダーにある。船上は彼女にとって庭も同然。事実、ライダーは容易くアーチャーの死角へと回り込み、銃弾を浴びせかける。

それを撥ね返すのは種子島による銃列。手にした二丁とはまた別の、空間に出現した新たな種子島がアーチャーの意思によってライダーを迎撃した。

これぞ数の利、二丁などに留まらない手数多さこそアーチャーの武器。ライダーのように狡く駆け回る必要はない。持てる力を十全に出し尽くせば事足りるというように。

海賊と王者。開始された決闘はまさしくそれだ。

まるで異なる二者は、互いの有り様を曲げる事なく激突を繰り返した。

「フランシス・ドレイク。世界を拓いた者。一介の海賊より始まり、ついに海軍の長にまで上り詰めた、世界に覇を成した帝国の立役者、か。」

そこまでの英傑でありながら、抱く欲望は何処までも一人の海賊の域を出ぬものか？」

怒涛なる種子島の重爆撃を繰り返し、容赦なく攻め立てながらアーチャーは問うた。

「権勢を広げようとは思わなかったのか？ その才覚と財宝で、天下に欲を伸ばそうと考えなかったのか？」

「はん、無いね。いくら肩書きが変わろうが、アタシはどこまでも雇われ海賊さね」

国家をも凌駕する財宝、一海賊から軍組織のトップに立てる将の器。よりその手を広げたなら、果たして彼女の力はどれほどのものになっただろう。

だが彼女はそうしなかった。生涯を海と寄り添い、権力者ではなく一人の海賊であり続けた。

「アタシが好きなのは派手に喰い散らかすための金さ。権力なんて粘っこいものに興味はねえよ。」

山のような金銀財宝だつて、それを使い尽くせるから楽しいんじゃないか。蔵にしまったまま抱え落ちなんて笑えない。そんな様で何が面白いんだか。

命も財も、いつか尽きるもんだ。アタシは宵越しの金は持たない主義でねえ。一切合財を使い果たしながら、命と一緒に燃やし尽くしてやるのが楽しいんだらうが」

「ほう。よもやその真理を、海賊風情が弁えているとは思わなんだ」

互いの銃撃が飛び交う中で、尚も構わず論争する両者。

次の瞬間には眉間を撃ち抜かれ果てているかもしれないと、そんな憂慮にはまるで頓着していない。むしろそれすら愉しんでいるように笑みを深め、いつそうに熱弁を加速させた。

「人間五十年。どれだけ生きようが、人が己の壮志を振るえる時間などそんなもの。命を出し惜しんで何事も無いままに終わるなら、そんなもの死しておるも同然じゃ」

「へえ、アンタも分かつてるじゃないか。王なんてのは貯めて肥えてこそなんぼだと思つてたよ」

「蓄財は悪くなかろう。だが貯めるばかりでは無価値である。金は天下の回りものじゃ、吐き出されてこそ意義があるう」

「そりゃ同感だ。食い物も酒も男も女も戦争も、欲望つてのは溜めてちやあ意味がない。吐き出して堪能してやらにやあね。でないと生きてる甲斐がないだらうさ」

考えも性質も対極にある二人だが、その死生観だけは似通っている。

先にある死を見つめ、結末として受け入れる。生を諦めているのではない。死を思うからこそ、生には意味があるのだと理解しているのだ。

語れば当然とも言える理屈だが、果たしてそれを真の意味で理解している者がどれだけいるか。

死は、恐ろしい。人間ならば勿論、英雄であつても死の恐怖から完全に逃れる事は難しい。

恐ろしいから、見つめたいとは思わない。いずれそうなると分かっているのに、目を逸らして考える事を放棄している。口先だけで豪語しても、所詮は虚勢ばかりだ。実際に直面すれば、本音の恐怖はあっさり曝け出される。

世に点在する長寿、不老不死の願いは、全てが死から逃れるためにある。死を克服し永遠の存在となる事は、人類が追い求める夢であり到達点のひとつだろう。

だからこそ、それは呪いとも成り得る。死を恐れ生に執着するあまり、人を外れて化生に堕ちる。夢から名を変えた狂気に取り憑かれ、どれだけの悲劇が引き起こされたことか。

アーチャーも、ライダーも、彼女たちは永遠を否定する者。

人だけではない。国も、価値も、星ですら、世にある総てがいつかは廃れ滅びるのだ。

すなわち諸行無常、盛者必衰の理。滅びは絶望ではなく、次なる循環に続く一過程。天の高みからすれば、人の一生も一夜の夢のように儂いものだ。

故にその足を止めてはならない。滅びの恐れを越えて前に進んで

こそ世界は広がる。定命の中でも進歩を続けて、歴史を刻む事が人間の真価であると。

共に世界を拓いた革新者。求めるのは安寧の永遠ではなく、未知を目指す開拓である。

「が、それでも貴様は俗物よ。目先の欲望に囚われ、低俗なままの己で満足しておる。

小さい、小さいのう。あまりにも矮小な欲望じゃ。それでは世を築くことは出来ん」

そんな2人の明確な違いとは、やはり世に対する姿勢の差異だろう。

アーチャーが掲げるのは革新だ。古きに囚われる世に変革を促し、新しい秩序を築く。

新しい法、新しい価値観、新しい社会構造。築かれたそれらは国の新たな形として残される。

対し、ライダーには何もない。

その偉業も終わってしまったらそれまでのもの。略奪で成した財もまた同じ。

確かな形として残るものは一つも無い。嵐のように吹き荒み、繁栄の後には没落が訪れる刹那的な快感を良しとし、愛していた。

未来に繋がる価値を残す事を意義とするアーチャーと、消え去るのみで良しとするライダー。

同じ死生観を共有しながら、2人が向かう先は正逆の方向性を持つていた。

「貴様はただ産まれ、ただ死ぬだけじゃ。偉業の功績は残ろうと、個人として遺るものは無し。

それは無価値である。鮮烈なる破滅を求めるなら、望みの通りに散り逝けい！」

アーチャーが構える二丁に呼応して、空間に展開される種子島。

それはアーチャーの周囲だけではない。戦場全体に出現し、ライダーを包囲して展開した。

アーチャーは尋常な決闘を尊ぶ戦士ではない。その本質は冷徹な

将であり軍略家だ。

ただ撃ち合うばかりで終わるわけがない。追い詰めるための布石は既に整えられている。

逃げ道は封殺され、放たればその銃火は過たずライダーの身を穿つだろう。

「へっ、そんな大人しく終わってやるかい。せいぜい派手に喰い散らかしてやるよお！」

しかし、それに対するライダーもまた、殊勝さとは最も無縁の輩である。

自らに敷かれた包囲網を前にして、それで諦めるような性根の細さではない。むしろ劣勢にこそ闘志を燃やし、己の実力を引き出す生来の冒険者だ。

種子島の包囲網に対抗し、出現するのは巨大な大砲一門。

砲の名をカルバリン砲。ライダーの所有する”船”に搭載された武装の一つ。

部分的に召喚されたそれを包囲に向け、同時にライダーもそこへ突貫する。包囲に対する常套手段である一点突破、常道だが危険も計り知れないその選択を、ライダーは躊躇なく選び取った。

殺到する銃弾の豪雨、放たれる大火砲の砲撃。

轟音が響き渡り、爆煙に視界が一端遮られる。その暗雲を切り開き、躍り出るのはライダーだ。

現れたその身は無傷。あれだけの弾幕に晒されながら、ライダーは一切のダメージを負う事なく切り抜けた。

むしろ傷を受けたのはアーチャーの方である。

裂けた頬より落ちる流血。彼女の面貌を傷つけたその疵は、ライダーの弾丸によるものだ。

所詮は掠めただけで、致命傷には遠い。それでも包囲し追い詰めていたはずのアーチャーが、逆に彼女だけ傷を負う形となったことは事実である。

危険へとあえて踏み込み、結果として勝ちを得る。

勝負事では往々に生じる不合理。技量の問題もあるだろうが、それ

を実現させ得るのは何よりも不合理を呼び込むための幸運だ。

躊躇わず死地に踏み込む豪胆さが運氣を呼び寄せる。ライダーは女神の微笑みを向けさせるやり方を心得ていた。

「……これほどか。難事であるほどに真髄を見せ、絶無の奇跡を成し得る英霊。人類史を開拓せし改革者よ。これほどのものを持ちながら、何故既存の行いに留まった？ その目にはどうに別のものが見えていたはずじゃ」

「言つたら、何処までいこうがアタシは海賊さ。アタシの欲望は一時だけのもんで満足できるんだよ。たとえば後には何にも残らんのだとしても、その時を楽しめるならそれでいい」

人間社会の改革者であるアーチャーに対し、ライダーの本質はあくまで海賊のままだ。

民を虐げ、略奪を以て財を成す。建設的な価値を持ち合わせず、秩序を尊ばずに混沌を良しとする悪人である。時代は確かに彼女を英雄にしたが、あるいは一介の賊として路傍の石のように打ち捨てられる可能性も十分にあり得たのだ。

それを理解し、それでも良いと言えるのがライダーだ。未来に繋がる繁栄ではなく、刹那の享樂のみを求めて生きる、生粋の俗人である。「止しなよ、アーチャー。こんなのは価値観の違いさね。アンタは生の意義に拘って、アタシは死の没落を良しとした。これはそれだけの話だろう」

故に、両者の視線はすれ違う。そもそも生きていた場所が違っていった。

問答を交わすような間柄ではない。語るべき王道や信条など初めから持つていなかった。

「さあ、そろそろ舌先の殴り合いも飽きてきた頃合いだ。盛大にこうぜ、アーチャー」

「海賊にも矜持はあるてか……是非もなし」

よって両者がすべきは、もはや生きるか死ぬかの潰し合いのみ。

その事実を改めて認識し、彼女たちは勝負を決するべく自らの本領を發揮する。

サーヴァントの戦いにおいて、武器を用いての打ち合いなど所詮は様子見程度。

その超越した身体能力も真髄には程遠い。英霊の真価とは、あくまで”宝具”にある。

それぞれの英霊を象徴するシンボル。人々の祈りを力に変えて、必殺の戦闘手段としたものこそ英霊の所有する”ノウフル・フアンタズム貴き幻想”である。

宝具の開帳こそサーヴァントの決戦の狼煙。極大の幻想が電腦世界を侵食し、ここに奇跡を具現化させる。

ライダーを象徴する宝具とは、剣や槍、弓の類いではない。

彼女は騎乗兵<sup>ライダー</sup>。己が武器を手に戦うのではなく、愛騎に跨がったの騎乗戦こそ真骨頂。ならばその愛騎こそが宝具であるのは自明の理だ。

ましてフランシス・ドレイクの真名を知るならば、その愛騎が何であるかは明白だろう。

具現化したのは船。華麗なる黄金鹿、各部に揃えられた無数の艦砲。優美なる中にも荒々しさを兼ね備えたガレオン船は、まぎれもなく戦艦の威容だ。

それだけでも十分な格を備えた宝具である。だが破格なるは星の開拓者、生きて世界の全てを跨いだ偉大な航海者はそれだけでは終わらなかった。

先んじて招来した黄金船を中心に、新たな艦船が現れていく。一隻や二隻ではない。十を超えてもなお増える。その様はまさしく艦隊と呼ぶに相応しい。

それに呼応して、周囲の環境にも変化が現れる。記録の海を侵食して、見渡す先に映るのは大海原。招来した艦隊を浮かべて見る光景は見事に適合し、在るべき場所にあるのだと認識させた。

これこそがライダーの持つ宝具の姿。

その宝具とは単一の船に非ず。生前に彼女が刻んだ心象風景であり日常そのもの。その冒険譚の舞台である大海の景色こそ嵐の航海者が有する宝具である。



「ゴールデン・ワイルドハント——藻屑と消えなあ！」  
「黄金鹿と嵐の夜——」

遙かなる大海と太陽を落とした艦隊を従えて、ライダーの宝具が開帳された。

その偉容と対峙して、しかしアーチャーに怯んだ様子はない。

侮っているわけではない。艦隊が誇る威圧の程は、既に肌が感じ取っている。

だがそれしきで怯む道理はない。何故ならアーチャーの誇る宝具もまた劣ることのない、時代によって築かれた革新の具現であると知っているからだ。

宝具の開帳に伴い、アーチャーの纏う衣装もまた変化する。

元より現在の黒色の軍装は召喚後にしつらえたもの。あくまで道楽の類いであり、本来の武装ではない。

纏いしは漆黒の武将鎧。外套を紅一色で染め上げて、兜が戴きしは輝ける木瓜紋。伝来せし南蛮胴具足に自流の趣きを与えた、まさしく魔王と呼ぶに相応しい威圧を持つ戦装束。

それを纏うという事は、すなわち戦に臨む心構えの変成。ライダーを難敵と認め、本腰を上げてこれに対するという意志の表れである。

幽炎の中より出でる無数の火縄銃・種子島。先までの戦闘で用いていたものとも変わらないそれは、しかし凄まじい速度でその数を増産させていく。

やがて出現した銃の総列は地平の果てまで埋め尽くし、異様な宝具の姿を顕わとした。

「三千世界——骸を晒せい！」

その宝具の真価とは、単一の性能には無い。圧倒的なる物量こそが宝具たる由縁。

一丁一丁は、所詮量産品の種子島。だがその量産こそが重要な意味を持つている。

単体で伝説を築く”究極の一”ではない。数を揃えるという事は、より多くの兵士にその武器を行き渡らせる事を意味する。

凡百の兵の引き金が、英傑をも殺す。練度の向上を簡略化させ、民を容易く兵士に変える。

すなわち近代化への移行。白兵戦の時代は終わりを告げ、集団戦術を用いた兵法へと変移する。”銃”という武器の導入はその先駆けとなった。

英雄・織田信長は、合戦に銃を最も早く導入した大名の1人だ。

誰もが半信半疑の中でいち早く有用性を理解した革新の王。その威力は最強と謳われた騎馬軍団をも打ち破り、示された価値は国の全土に波及した。

極東の小さな島国に、当時の世界最多の銃をかき集めた霸王の意志。築かれた三千の種子島の総列は、まさしく王意を象徴とする宝具の姿そのものだった。

互いに自らの真髄を晒し、その戦意は最高潮に達している。

展開されたのは大規模範囲の宝具同士。塗り替えられた決闘場には先までの様相はすでに無い。

ここにあるのは覇軍の意志。己の信条のままに世界をも切り拓く信念の写し身に他ならない。

それぞれの覇を担う将に率いられ、大幅に拡大した戦場の中心で、両軍は激突を開始した。

銃火と艦砲の火線が入り乱れる。

元あつた形骸など蹂躪して、戦場は二騎の英霊の色彩によつて染め上げられた。

陸戦銃列と海戦艦隊。本来ならばまずかち合う事のない組合せ。

だが超常たる英霊同士の戦いにあつては、そのような常識こそ無意味である。互いの幻想が互いの領域を侵食し、地形の差異など度外視して攻撃を届かせていた。

陸上をも己の海原に上書きし、艦隊を進撃させるライダー。

無数の艦船より放たれる砲撃は凄まじく、決闘の舞台であつた沈没

船を次々と粉碎しながら攻め立てる。

対し、迎え撃つのはアーチャーの三千を誇る種子島。膨大な銃の列が織り成す弾幕は途切れる事がない。苛烈なる銃火の洗礼が真っ向よりライダーの艦隊を迎撃していた。

拡大した戦闘規模は、その趨勢を見極めることが難しい。

だが理屈で問うのなら、優劣の是非は見えてくる。互いの宝具の質を鑑みれば差異は明らかだ。

種別は共に対軍宝具。個人ではなく大多数の軍を相手取るのを想定した兵装だ。だが同じ対軍でも、想定される軍の形態に関しては両者で全く異なっている。

銃という武器は、そもそも人に対して用いるものだ。銃弾は人の肉を穿つが、城の石壁を穿つことはない。英霊の武具に通常の運用法を当てはめても仕方ないが、『三千世界』が”人間の軍勢”に対して用いるべきものなのは間違いない。

しかしライダーの艦隊は違う。搭載された艦砲も、同じく艦船を破壊するべく備えられたもの。人の軍とはその規模からして違いすぎる。たとえ数で補うにしろ、銃のみで艦に対抗するなど本来ならば有り得ないのだ。

加えて、宝具としての性能にも要因はある。

彼女らが扱うのは通常の兵器ではない。そこに付随した幻想、現実を歪める超抜能力こそ宝具の真価。多種多様に分かれる効果の如何が勝敗を左右する。

単純な実力だけでは推し量れない。相性次第では格上殺しも成立するのが宝具戦だ。そしてアーチャーの宝具とは、まさにその理論における最右翼だった。

騎兵特攻。生前に当代最強を誇ったとされる騎馬軍団を屠った事で、アーチャーの銃火は『騎乗』スキル持ちに高い威力を発揮する。

更には彼女の持つ固有スキル『天下布武・革新』の効果もある。高い神性を有するか、より古い歴史を持ち強い神秘の持ち主であればあるほど、アーチャーの攻撃は威力を倍増させる。

相性が良ければ、それこそ神霊の如き猛威を振るう。逆に相性の噛

み合わない相手だと著しく能力を制限される、まさに”相手を選ぶ”  
サーヴァントだった。

そうした着眼点において、此度のライダーは決して相性の良い相手  
ではなかった。

ライダーの真名、フランシス・ドレイク。彼女が生きた時代は、世  
界史上においてアーチャーとほぼ同年代。何らかの運命が交われば、  
生前に邂逅する事も有り得た者同士だ。

より古い英雄という条件にライダーは当てはまらない。彼女を相  
手にスキルの恩恵は得られず、せいぜいが平均止まりの威力しか期待  
できない。

その上、『騎乗』スキルに対する特攻もこのライダーには通じない。  
ライダーの有する特殊スキル『嵐の航海者』。船と認識されるものを  
駆り、船団という性質上『軍略』『カリスマ』の効果も併せ持った特別  
なスキルだ。

最強の騎兵団を討ち破った逸話も、船団には適用されない。型破り  
なこの英霊は、あらゆる面でアーチャーの嵌めるべき型から外れてい  
る。

アーチャーの強引とも呼べる決戦前の早仕掛けも、全てはそのため  
だ。

型より外れたライダーは、アーチャーにとって不得手な相手である  
のは事実。

故に答えは明らかだ。真つ向からの決戦ならばアーチャーが不利。  
ライダーの率いる艦隊は、種子島の総列に対し優位を取れる。

だが無論、そんなものは机上の空論。同条件のマスターという前提  
でしか成り立たない。

アーチャーの横に立つのは甘粕正彦。今聖杯戦争における優勝候  
補の筆頭の一人であり、単体でサーヴァントに準ずる実力を持つ破格  
の男。

不屈の意志でたゆまぬ前進を続ける彼の事、決戦に向けての戦備え  
も万全に仕上げている。準備期間モラトリアムという時間は甘粕とアーチャーの  
戦力をすり合わせ、相互連携を完成させるのに十分すぎた。

種子島の一丁ずつに施される咒法の射、創法の形。その銃弾は軌道を変え、焦熱を生み、鉄甲と化して突き刺さる。一発一発なら宝具に抗し得るものではないが、その物量が質の差を凌駕する。

サーヴァントの戦闘速度に対応して、また自身でもそれに追隨する自立戦闘が可能な魔術師<sup>ウィザード</sup>。マスターの枠組み内では、間違いなく甘粕正彦こそ最強だった。

魔弾と化した三千の銃撃が、ライダーの艦隊を貫いていく。本来の相性差を塗り替えるのは純粹な性能強度。甘粕正彦というイレギュラーの存在が全ての前提を覆す。

それらの結果、劣勢を強いられているのはライダーの方だった。

「アハハハハハハハッ！」

そんな己の現状を認識しながら、それでもライダーは大笑していた。

「マジかよアイツ、刀一本で船を潰しやがったぞ。あれで人間とかギヤグだろ、オイ！」

アタシの艦隊をここまで潰してくれるたあ、本当にやってくれるねえ！」

そこにあるのは縮観ではなく、紛れもない高揚だ。

追い詰められればられるほど、ライダーという英霊は気性の激しさを増していく。

「さあ、どうしたいシンジ！ さつきから黙りくさって、お決まりの悪態はどうしたよ？」

晴れ舞台だぜ、アゲていけよ。これだけのモンは滅多にない。アンタも存分に楽しみな！」

もう一度言おう、ライダーは生粋の冒険者。挑むに足る困難は彼女にとって望むところ。

追い詰められる窮状などむしろ大好物だ。己より強い者を相手取ってこそ本領を發揮できる。

故に、ライダーは笑う。立ちほだかる難関を見据え、それを踏破してみせる時のことを思い、彼女はふてぶてしく笑うのだ。

熱の灯った気持ちのままに、ライダーは己のマスターへと声を上げ

る。

彼女が優先するのは己自身の感情だ。他者の事などに頓着せず、勢いに乗った思いを何一つ憚ることなく愉しんでいる。

「……やい」

「あん？」

「うるさいって言うてんだよ、このイカレサーヴァント！」

だからこそ、ライダーは気付けない。いや、気付こうとしていなかった。

傍に置かれたマスター、旗艦<sup>ゴールドデンハインド</sup>“黄金の鹿号”に同乗し戦場へと引つ張り出された間桐慎二。自分を置いて次々と動いていく事態の中で、遂に溜まった憤りを吐き出した。

「隠そうとすんなよ！ おまえ今やられてんだろ、負けそうなんだろ！ 僕が気付かないと思ってるのか!?! 負けそうなクセに、ヘラヘラ笑ってんじゃねえよ！」

たとえライダーが逆境をバネとできる英雄であったとしても、間桐慎二は違う。

既に現実を見せつけられて、ゲームであると都合のいい空想に逃げ余地はもはやない。突きつけられる眼前の事実は、幼い心を徹底して追い詰める。

死線の渦中という状況もさることながら、何より対峙しなければならぬ者たちの存在そのものが、彼の許容限界を逸脱していた。

「死ぬんだろ!?! この戦いに負けちゃったら、僕は死んじゃうんだろ!?! だってのになんで、なんでおまえらみんな、そんな風に笑ってられるんだよ!?!」

彼らは笑っている。ライダーも、アーチャーも、甘粕正彦も、心からこの決戦を愉しむように。

それぞれに性質は違うだろう。だが臆さない気持ちに変わりはない。死の恐怖をもねじ伏せて、死闘へと挑むその気概。己の信念に殉じているから、何よりその思いに充実を感じているからこそ出来る勇敢な在り方だ。

だが間桐慎二にとって、その姿は理解不明な狂人のそれとしか映ら

なかった。

信念に殉じるなど、元より慎二には遠い価値観だ。意味が分からない行動は、自分とは違うものという異質感を与えるだけ。肯定的な見方など不可能である。

そして、現状においては慎二こそが異端者だ。この修羅場においては彼らの感性こそが罷り通り、慎二だけが取り残される。それが何より彼の心を追い込んでいた。

「おまえも、アイツらも、どいつもこいつもイカレてる！ 絶対におかしい！ これじゃあ一人だけ怖がつてる僕がつ、馬鹿みたいじゃないか！」

確かに間桐慎二は挫折の中から立ち上がった。

戦いの痛みと死の恐怖を刻み込まれ、それでもこの決闘に赴いた。それが一つの奮起の形であるのは確かなことだろう。

——だが、勘違いしてはならない。間桐慎二は何一つとして変わってはいないのだ。

暗く歪んだ自尊心を支えにして、折れた中から彼は立ち直った。

自分が敗北するはずがない。誰よりも優秀であるはずの自分が敗れるなど何かの間違いだ。何の骨子もないその価値観を盲信し、己の中に自閉して逃げていくだけだ。

直視させられた痛みも恐怖も、何もかもを自尊で塗り潰して走っている。要は折れそうな出来事から目を逸らしているだけなのだ。何も改善はされていない。

無論、それで何も成せないわけではないだろう。誤った認識のままに暴走し、結果を歪める事はおおいにあり得る。所謂、道化の役どころだが、無意味というわけではない。

世の物事の不条理は、時にそうした歪みが功を成す事もある。それが本人の功績になるかは別の話だが、正しさばかりでは進まないのも確かだろう。

そういう意味では、慎二が起った意義はある。どうあれ起たなければ待つのは消滅の運命だ。可能性が生じたという点だけでも意味はあると言える。

それでも、所詮は誤ちである。本当の強さとは言えない。そもそも道化が役割を持てるのは、周囲がまともであればこそだ。真つ当な中での歪んだ認識という異端さが、時に不条理を呼び寄せるというだけ。

この場にまともな者など一人もいない。己の正義で世界さえも変えてしまう究極の個人主義。その体現者たる英雄と、それにも勝らんとする益荒男だ。

間違つても間桐慎二が紛れ込んで良い場所ではない。ここで彼に出来る事など何もないのだ。

誤ちを認め、改めようと努力してこそその成長だ。

それが出来ない限り可能性は広がらない。新たな強さなど夢のまた夢である。

破格の者が集う中、間桐慎二程度の個性では埋もれるだけだ。ただ激流の場に流されて、相手にもされずに結末まで向かうしかない。

「くそ、くそ、くそおツ！　こんなの間違つてる。僕は優秀だ、誰よりも優秀なんだ！　なのに、まだ何もしていないのに、こんな所で消えるなんて冗談じゃない！」

どいつもこいつも僕のことを無視して、好き勝手しやがって！　なるとか言えよ、ライダー！　おまえ、戦えば勝てるみたいな事言つてたじゃないか。だったら責任取つて何とかしろよ役立たず！

僕のサーヴァントなら、ちゃんと僕を勝たせろよ！」  
端的に言つてしまえば、間桐慎二のしている事は愚行だろう。

戦闘の最中、自分のサーヴァントに罵声を浴びせるなど百害あつて一利なしだ。

士気を挫く事にも繋がるし、もしこれが戦士同士の白兵戦であれば、気を取られた僅かな一瞬が命取りとなる場合も有り得る。断じてマスターがしている行動ではない。

所詮、子供の癩癩でしかない。付き合わされる者は辟易して然るべきだろう。

「……うん？　なんだ終わるか？　アタシとしてはもう少し聞いてやっても良かったんだがねえ。」



いやあ実に小気味いい悪態だったよ、シンジ。やっぱりアンタは筋がいい。堂に入った悪党ぶりだよ、ここまでブレなきやいつそ大したもんだ」

だが幸いというべきか、ライダーは戦士ではなく指揮官だ。

やっっている戦いは白兵戦ではなく軍団指揮。真剣である事に違いはないが、言葉を返す余裕がないわけではない。

慎二の痲癩にもライダーは気分を害した様子もなく、上機嫌なまま答えてみせた。

「ツ！ だから、そうやって何でも自分の理屈で語ろうとすんなよ、この脳筋女！」

いいから真面目に答えろよ。おまえ、前は戦えば勝てるみたいなのと言つてたろ。ちゃんと戦えばあいつらに勝てるんだって!？」

「いやいや、そんな事は言つてねえよ？ せいぜい悪党らしく花咲かせてみるって話さね。火のひとつも上げないまま、種銭残して沈んだつてつまらんだろうに。」

大体言つたろ、勝負事に真の意味での偶然なんてありやしないつて。公平な条件からやる戦争なんてない。やれば強いやつが勝つのが当たり前なんだよ」

言動こそ放蕩だが、語る内容は闘争の本質を突いたものだ。

決意を固めて立ち上がつて、それで物事全てが上手くいくなら苦労はない。奇策の嵌った逆転劇が賛美されるのは、それが得難い結果だからだ。本来ならば奇策が成功する戦い自体が稀である。

強さの優劣が決まっているなら、戦つて勝つのは強い方だ。基本であり王道、だからこそ覆し難い真理がそこにある。

「まあ、ここ最近のアンタはそれなりによくやつてたけどねえ。報酬はがっぽり用意してたし、砲弾の準備も十分だ。アタシはこれ以上なく力を発揮できてるよ。」

でもね、たかが二、三日で覆る差なんざ、最初からあつてないようなもんだ。地力つてのは一朝一夕で身につくもんじゃない。気合やらで何とかなる時つてのはね、そもその土台に逆転へ繋がられる下地があるもんだ。早々上手い話なんてのは無いもんなのさ。

要するにだ、アンタにあいつらの相手は早すぎた。それだけの話さね」

未だ歪んだ自尊心に囚われる慎二だが、それで何もしなかったわけではない。

自己を磨く努力があった。勝利に向かうための研鑽があった。刻まれた苦痛と恐怖は、彼の中から慢心の感情を切り捨てている。

たとえ根底が変わらずとも、行動は嘘をつかない。間桐慎二の実力は確かに上がっている。

それでも、努力の研鑽も実力の向上も、甘粕正彦に及ぶものではなかった。

ただ単純に地力の不足。起ち上がろうと覆せない差があったと、それだけの話である。

「ただまあ、だからって可能性がまるでないわけじゃない。博打の結果は札を開けてみない事には分からんもんさね。運気の不条理ってのはどこにだって転がってる。

けどさあ、それを考慮したって、やっぱり足りねえなあって話になるんだよ」

「た、足りないって、何がだよ……?」

「そりや色々だ。蓄えなり実力なり天運なりと、ひつくるめた上での勝算さ。特に理屈っぽい根拠はねえし、ほとんど勘みたいなものだけどねえ。

ただ、単なる勘ではあるが、今まで外れた事も特にないんだ。今のアタシらが勝機を掴むには、何か足りてないって分かるんだよ」

「な、なんでそんな事言うんだよ!? おまえのステータス、幸運値はE Xってすごい数値だったろ。ならさ……」

「いやそうだけど、別にアタシは嵐が吹いたただの敵の頭が病死したただの、そういうので勝ってきたわけじゃないからねえ。奇跡を期待するとしても種類が違うさ。

それにね、知ってたかい? その評価規格外<sup>E</sup>ってのは、要は基準になる数値じゃ正確に測りきれないってだけで、別に高いとは限らないんだぜ?」

言外に自分たちには勝ち目がないと語るライダー。

悲壮感もなく、むしろ愉しんでさえ見える様子には、生死が懸かった重みは感じられない。

「勘違いしちゃいけない。シンジ、こいつはアンタの戦いだ。方針には従うし、何を言い出そうが文句は言わない。けどね、出せないもんを出せと言われても、そりやどうしようもねえさ。」

こっちは報酬分はきっちりやってるんだ。それでも運が絡む所にまで持っていけてねえ。だったらそいつはアンタの不足分さ。持ち合わせがなけりやあツキだつて買えないぜ」

そこにあるのは享樂的な性格には似合わない、いつそ冷然でさえある商人の勘定だ。

好きなように振る舞いながら、彼女は自分がサーヴァントだと弁えている。聖杯戦争とはあくまでマスターにとっての戦いであり、サーヴァントはその闘争手段に過ぎないと。

それがどれほど馬鹿げた方針だろうが基本的には従うし、善行であれ悪行であれ、肯定も否定もせずを受け入れられる。だが同時に、戦いの勝敗に自分から関わっていく事もない。

与えられた分の報酬に見合う働きをする。雇われ海賊として、その線引きは忘れない。

「まあ、アタシは構わんよ？ あいつら相手なら十分にノれそうだし、なかなかいい感じにもなれそうさ。このままやられるんだとしても、それはそれで一興さね」

「なっ!? おまえ何言つてんだ！ 自分が負けてもいいってのかよ!？」

だが、慎二が驚愕したように、ライダーの考え方は英霊としても異端だった。

サーヴァントには意思がある。如何にムーンセルからの制約があるとしても、基本的にその行動は本人たちの自由意思によるものだ。

マスターから彼らを縛れる強権は令呪のみ。参加資格の件を含めれば実質2回のみ命令権だ。マスターの思惑だけで事を進めることは出来ず、サーヴァントとの共闘関係は必須といえる。

かつて地上で行われたという聖杯戦争、魔術師たちは英霊を戦いへと駆り立てるため、勝者の組に対する報酬を用意した。

万能の願望器、その使用権の共有。最後に残った一組は各々の願いを叶えられる権利を得る。

再現された月の聖杯戦争でも、その権利は同様だ。サーヴァントたちは願いがあるからこそマスターたちの召喚に応じ、勝利のために手を取って共闘する。

勝たなければならぬのはマスターだけではない。サーヴァントたちも願いの差異こそあれど、決して敗けられない理由があるから戦っているのだ。

だというのに、ライダーの態度はまるで真逆。彼女自身には勝利への執着がまるでない。

大前提を破綻させるようなその在り方は、サーヴァントとして異質だと言えるものだった。

「ああ、その辺りがアタシとあんたの食い違いの最たるところなんだろうねえ。

なあシンジ——勝つだとか負けるだとかって、そんなに重要かい?」

「え……?」

「そりゃ勝った方が嬉しいよ。アタシだってやるからには勝ちを狙っていくさ。勝てば全てを手に入れて、負けりやあ全てを失う。それが戦の道理ってやつだからね。

けどよお、初めから勝つのか負けるのかが決まりきった勝負なんざ、一体なにが面白いんだ?」

慎二には、ライダーの意図が理解できない。

ゲームだろうが戦争だろうが、勝負事なら勝とうとするのが当然のはずだ。ライダーだってそれは分かっていると言っている。

なのにライダーは、勝利に頓着することは重要ではないという。それは慎二の耳には矛盾した、理解の及ばない戯言にしか聞こえなかった。

「堅実にも用意周到に準備して、手堅く勝ちを重ねていつて勝ち分を

蓄えて、そうして肥え太った自分自身を見てみなよ。その時になつて負けて全てを手放して、それで納得できるような代物かい？ そうなりや後は勝ち続けていくしかない。欠片も愉しくなからうがね。

あのアーチャー辺りならそれでいいのかもだが、少なくともアタシはゴメンだ。忘れんなよ、シンジ。アタシらは所詮、悪党だ。理想も無けりやあ責任もない。背負ってるもんなんて端から何も無いんだ。だからこそ愉しめるんだろうが、勝負事も、生き死にだってね」

混迷は深まっていく。すぐ目の前にいるはずのサーヴァントが、慎二にはひどく遠くにいるように感じられた。

考えてみるのなら、これが始めてなのかもしれない。

これまでゲームの延長として聖杯戦争を捉えていた慎二。サーヴァントも彼にとつては自身を勝利に至らせるための駒でしかない。

その人格を認め、単なる人形とは違うと分かつていても、それ以上の事には踏み入ろうとはしなかった。その発想すら持てなかった。

こいつがどんな人間かなんて興味ない。重要なのは強いかどうかで、自分にとつて役立つものか否かだ。そのような考え方に疑問を持たず、慎二は今日までライダーの人間性に関心を持つことをしなかった。

だからこそ、これが始めての事なのだ。

理解し難いからこそ疑問に思う。慎二は今、ようやくライダーという”人間”を見ていた。

「……なあ、ライダー。サーヴァントって願いを持ってるんだろう？ おまえの願いつて何だよ？」

出てきた疑問を聞き届けて、ライダーが返したのは心底おかしかった大笑だった。

「ク、ヒヒ、アハハハハハッ！ 今さらかよお、シンジい！ こんな土壇場になつてようやく、ここまで思いもしてなかったろうにさあ！ アンタって奴はとことん器が小さいねえ」

「ツ!!? おまえな——」

「あー、いやいや、別に馬鹿にしてるわけじゃない。いやしてるが、悪いと思ってるわけじゃあないんだよ。で、なんだ、アタシの願いだっ

て？

無いよ、そんなもん。アタシはただ派手にドンパチやりに来ただけさね。万能なんざ興味もねえ、今を愉しめればそれでいいのさ」

発した放言は、まさしく破天荒そのものだ。

願っても無ければ目的もない。ただ快樂のまま振舞うのが望みなど、とても納得できないだろう。

だが、同時に理解できることもある。

ライダーは嘘を言っていない。真意を隠すとか騙すとか、その類いの考えは欠片も持っていない。

少なくともこの場において、ライダーは本音しか語っていないのだ。慎二でもそれが分かるほどに、ライダーの態度は明白で分かり易かった。

「分からんかい、シンジ？ そうだね、なら命の話なんてどうだい。ほら、よく言うだろ。命は大切にしなくちゃならないとき。他人の命まで含めて言ってるなら上等だし、下衆共だつて流石に自分の命は大事にしようとするだろう。」

ああ、そいつはもちろん正論さね。生まれてきたからには命つてのは大事にしなくちゃならんと、そりやそうだろうよ当然だ。

そいつを踏まえた上で、アタシはこう言つてやろう。なあ、シンジ

「——」  
凄絶な、快活な、底なしの地獄のような笑みを浮かべて、ライダーは言い放った。

「命なんざクソだ。後生大事に抱えてるもんじゃない。無駄使いするくらいでちようどいい」

突き放した死生観。生の繁栄ではなく死の凋落こそライダーの見出だした価値だ。

彼女は死を怖れない。かつて魔術師たちが抱いたとされる死を締観するという姿勢。それともまた異なる価値観で、ライダーは生死を達観していた。

魔術師のように、自らの命さえ魔道に組み込むのではない。彼らがそれこそ己の命にも勝る価値を持つ才能さえ、ライダーは容易く捨て

てみせることが出来るのだ。

そこには何も残らない。何一つ築かれたものはなく、それで良いとライダーは受け入れた。

人も、国も、星でさえも、いつかは死に絶える。

何物も滅びるなら、執着しても仕方ない。それこそがライダーの至った結論だった。

「だからね、シンジ。アタシは今でもアンタってマスターを悪いもんだとは思ってない。他のマスター連中も色々見て回ったが、それでも選べるならアンタを選ぶくらいにはね。

理想う？ 世界い？ よしとくれよ、アタシの火薬がシケちまう。隣りでご立派な御題目掲げられても、雇われの身には肩がこるだけさね。

その点、アンタはいいよ、シンジ。ちつぽけな性根のくせしてしでかす事は面白いし、何よりも命が安い。好き放題やるにはいい安配だよ」

「ふ、ふざけんな！ 僕の命は安くなんかない。死んだらそれまでだなんて、そんな簡単にいくもんか！」

「なんで？ 聞いたところの両親連中が文句でも言うのかい？ てめえ高い金払って産んだのに死にやがって元が取れてねえじゃねえか、とでも。」

アホか、言わせとけよそんなの。大体そいつらが大事なら、そもそもアンタはこんなところ来てねえだろうが」

反論も言い伏せられて、慎二は口をつぐむ。

勢いに押されたのもそうだが、その言葉が芯を捉えていた衝撃も大きかった。

「だがそんなもんだ。いいんだよ、それで。悪党なんてのはそもそも小物なんだよ。てめえの器が小さいから、暴力やら金やらの俗なもんでしか他人を縛れないのさ。」

だがそんな悪党にも利点はある。なにせ器が小さいもんだから、余計なもんは背負わずに自分の欲望だけに執心できる。果てにどうなるなんざ考える必要もないさ。ただ悪党の命一つが消えるだけ、むし

る良いことづくめさね」

自らを卑下しながら、後ろ暗さなど一切感じさせない調子でライダーは語っていく。

「命の生き死になんぞ劇的なものじゃない。その時がくるなら唐突に、吹いて消えるみたいに軽いもんさね。たとえば、だ。アタシの死に様なんて聞いているかい？」

「お、おまえの、死……？」

「ああ。そりやあみじめなもんだったぜ。我ながらあれは大失敗だったね。

病をもらっちゃまって頭の中ボケちゃまってさ。ワケも分からんまま天に召されちゃったよ。まさかこのアタシが陸のベッドで死ぬ事になるたあ思ってもみなかったぜ。

運が良すぎるのも考えものだね。サン・ファンあたりできっちり死んでおくべきだったよ」

英雄フランシス・ドレイクの最期。

実に50代までを現役のまま過ごした海賊提督の死因とは、疫病による病没だった。

死の直前には錯乱した奇行が目立っていたという。数多の海戦をくぐり抜け、世界一周という大偉業を成し遂げた稀代の冒険家。そんな人物にとって、病と倒錯の果ての最期が本意であつたはずがないだろう。

「悪党の死を悼む奴なんざいない。いたとしても、そいつは祭りの灯を惜しむようなもんだ。散々好き放題やっていて、悼まれる事を期待するなんざ贅沢してもんさ。

もう一度言つとくぜ。覚悟しとけよ？ 勝とうが負けようが、悪党の最期つてのは笑つちまうほどみじめなもんだ」

そう言つて突きつけられた指に、慎二は押された。

冗談めかして言われた言葉を、かつて慎二は信じなかった。所詮、悪ふざけに過ぎないと。

今ならば否応なく信じられる。敗北の果てに訪れる死。容易に想像できる己の結末に、慎二は再び恐怖に震えた。



そんな慎二の胸ぐらを、唐突にライダーが乱暴に掴み上げる。互いの顔が寸前まで迫り、ライダーの双眸が慎二の視界いっぱいに映し出された。

狂気さえ滲ませるその瞳。息さえかかる距離で囁くように、しかしはつきりと響く悪辣な声でライダーは告げた。

「だから愉しめ、シンジ。思いきりてめえの人生を愉しめる事が悪党の得なところさ。」

勝って世の中の連中の鼻を明かしてやりたい？ 結構結構十分ありだ、遠慮することはない。どいつもこいつも蹴落として、せいぜいそのちっぽけな欲望を満たすといい。悪党の戦う理由なんてその程度だ、恥じ入る必要なんてこれっぽっちもありやしないよ。

どのみち大層なもんなんてないちっぽけな命だ。つまらん持ち物なんてさっさと放り出して、せいぜい手前勝手に使い尽くしてやりながらやってみろ。大事なのは勝ち負けか生き死にの問題じゃなく、愉しいかどうかだぜ？」

手が離され、不格好に尻餅をつく慎二。苦し気に咳き込む彼に構わず、ライダーは更に告げた。

「たとえ最期に惨めな終わりがあるんだとしても、その時はそんなてめえのみじめさを腹の底から笑い飛ばしてやればいい。生きてる間を存分に愉しんで、おまけに死に様まで愉しめたとなりやあ、そいつは親の総取りつてもんさ！」

そうやって世の善人連中を相手に、てめえの死に目の時にでもせいぜいふてぶてしく笑ってやりな。”こっちはアンタらより何倍も、この人生を愉しんでやったぞ”つてさ。

……そうだね。ひとつ訂正、いいかい？ さっきは願いなんて無いつて言ったが、ありやあ間違いだ。アタシは今度こそ、とことんまで馬鹿をやりきたんだよ！

なあシンジ。愉しめ、愉しめよお、なあ？ アハハハハハハハッ！

哄笑響かせるその様は、まさしく悪党の自称に相応しい。

茫然とそれを見上げる慎二にあるのは、ただただ理解を超えたもの

を見る畏怖の念だろうか。

……それはどうだろうと、慎二は思う。

確かにこのサーヴァントは常軌を逸している。とても理解できそうにない。

それでも、このライダーという英霊に触れて、感じ入ったのはそれだけではないと、今の慎二には思えていたから――

その時、轟いた銃声と共に、ライダーたちの至近が撃ち碎かれた。

「っ!? かぁー、流星に話しすぎたかねえ」

話の最中でも、当然戦闘は継続している。

劣勢にあつたライダーの艦隊は、とうとう旗艦にまで銃火が及んでいた。

「さーて、潮時だ。愉快的雑談時間はここまで、そろそろ決めにいくぜ」

会話を打ち切り、戦いへと意識を戻すライダー。

言ったように、こんなものは雑談だ。特に意義があつての事ではない。

切り替えたのならそれまでと、その程度で終えて良いものでしかない。

それは当然の判断だ。すでに敵の手は間近に迫っている。

ここからは全神経を集中させて事に当たらなければならぬ。変に引きずって何かの隙に繋がったら、それこそ目も当てられないだろう。

故に、この雑談を続ける意味はない。これ以上話すことなど何もないはずだ。

だが――

「やっぱり、おまえはイカレたサーヴァントだよ」

「あん?」

気付けば、慎二は口を開いていた。

意味がないのは分かっている。それどころかマイナスに成りかねない事も。

だが、まだなのだ。まだ続けてなくてはならない。まだ大切な事を

伝えきれしていない。

何故だがそう確信できて、自然と言葉が出ていたのだ。

「好き放題に滅茶苦茶なことばっか言いやがって。まともじゃないよ、周りの奴らからウザがられたりしなかったの、おまえ」

「……カハハツ、そうだねえ。その辺りを分かっている奴はそうそういなかったよ。投資した貴族連中も付いて来た部下どもも、大抵は財宝の方に目がいつてたさ」

「大体、かっこつけて言ってるけど、結局は負けてるって事だろ。何言ったってただの負け惜しみじゃないか。誤魔化してるんじゃないよ」

「そりゃぐもつとも。やられてるアタシはなに言ったって負け惜しみだ。その通りだよ」

「それにな、色々言ってくれたけど、僕はまだ8歳だぞ。生き死にがどうだのなんて、そもそも考えるような年齢じゃないだろ、普通」

「確かにそいつはひどい。命を張るような歳じゃないねえ」  
言葉は続く。ライダーもまた軽い調子で答えていく。

内容自体は他愛もない、あるいは愚痴にも近いものだったが、構えたところの無いそれらの言葉は慎二にとっての紛れもない本音でもあった。

「けど、それでも、負けてしまったら僕は死ぬんだな？」

「ああ、そうさ。誰だろうと等しく、呆気なくね」

そうして慎二は、ずっと目を背けようとしていた事に向き合った。

「……よし、なら勝てよ。おかしな理屈で言い訳なんて許さない。おまえは僕のサーヴァントで、僕はおまえのマスターなんだ。出来ないなんて言わせない。」

それに、さ。おまえって強欲なんだろ。偉そうに海賊なんて名乗ってるくらいだ、なら負けてもいいなんて殊勝なこと言ってるんで、勝ちだって全部かつ攫うつもりで行け。

おまえは英雄で、悪党なんだろうが。だったら、それくらいやってみせろよ」

そう、何においてもまず、それこそが言うべき言葉だった。

その勝利を信じることに。サーヴァントを信頼し、戦いに向かう背を  
声援で以て送り出すこと。

共に肩を並べて戦う同胞として、それは当たり前前の行動だ。そんな  
当然であるはずの事を、これまで慎二はまるで思い至りさえしなかつ  
た。

所詮、実益には繋がらない。声援でパラメーターが上がるわけもな  
し、感情的に過ぎないもので無意味であると、そのように思っていた。

だが無意味であるからといって、それをしない理由にはならない。  
仲間ならば当たり前で、何かを失うわけでもないのなら、やらない理  
由こそ無いだろう。

サーヴァントとは戦いための手段であり、道具に過ぎない。その意  
識が根底にあつたから、今までその発想すら浮かばなかつた。

しかし違うのだ。サーヴァントには自意識がある。単なる道具な  
どでは決していない。

そこには固有の感情があり、戦いに臨む士気がある。蔑ろにして良  
いものではないだろう。

道具ではない。ここに居るのは対等な同胞、互いにそれを認め合  
い、共に手を携えて戦っているのだと理解してこそ、本当の信頼関係  
が生まれるのだ。

その事をどうしても伝えたかつた。全てが決してしまう前に。

ライダーが求めるものとは違うだろう。内容自体も皮肉まじりの  
素直になりきれないものだったが、それでも伝えたかつたのだ。

間桐慎二が、ライダーを信頼しているのだという事を。

「……こいつは、ひよつとしたら足りたかもしれないねえ」

呟かれた言葉は、慎二の耳に届くことはない。

奔放にして鮮烈なる大海賊は、常と変わらぬ豪胆な姿のまままで謳い  
上げた。

「アイアイサー、大將<sup>マスター</sup>。奴らにも拜ませてやるさ、嵐の王、亡霊の群れ、  
太陽さえ落としたワイルドハントを！」

錨を上げな、野郎ども！　ここが大詰め、正念場だ。幸運だつて出  
惜しまない。一切合財、派手に散らして、破産しながら燃え上がっ

てやろうじゃないか！」

訪れる船出の時。ライダーの号令に呼応して船団が動き出す。

かつて数多の航海、海戦を乗り越えた威容、その奇跡の光景がここに再現されようとしていた。

戦場における空気の変化を、アーチャーは敏感に感じ取っていた。匂いが違ってくる、趨勢がうねり未知なる領域に流れ込もうとしている。

確かな動向を確認できたわけではない。しかし分かるのだ、決着の気配が迫っているのを。

ライダーは既に死力を賭した激突を覚悟した。確信にも似た心境でアーチャーは判断していた。

「打って出てくるか。さて、どう見る正彦？」

決戦の気配を嗅ぎ分けたアーチャーは、己の主の意図を問う。

乾坤一擲の博打と見える相手の一手。これをどう判断し、またどう対処するのかを。

「ああ。やはり若人の克己というものは胸踊るな」

その返答として甘粕は、素直な己の感想を口にした。

「如何なるものかは知らないが、彼には彼なりの決断があつたのだろう。恐怖に震える心を呑み込み、英霊と同じ戦場に立つと決めた覚悟は見事と言える。

決戦を挑むのなら、伴う意志も浮き出るものだ。俺はこれを、彼の決意の発露と捉えよう」

「問うたのはそちらではないが、相も変わらぬよう結構なことじゃ」  
あらゆる意味でブレない甘粕の答えに、呆れよりもいっそ感心してアーチャーは呟いた。

「今さらそなたの趣向をどうこうとは言わぬ。が、ならばこちらも生

半な気概では抗し得まい。まずは決めねばならぬぞ、退くか、それとも進むかを」

「無論、こちらも真つ向からぶつかるとも。決意を示されたのなら、それに勝るものを示すのが礼儀というものだ。アーチャー、俺とおまえならばそれが出来ると思っているが？」

そして返される答えも、やはり当然というべきか。

戦術の優位など度外視して、意志の光が示される場を求めている。そのためならば、あえて危険に踏み込むことも辞さない。

人に試練を課し、自らもまた試練に真摯であらんとする甘粕正彦。退く選択肢など初めから無いようなものだった。

「まったく、そうした不確かな正面戦などせずに済みますがための我が策であったというのに、こうなるとは。桶狭間の頃を思い出すわい」

本来なら、そうした輩とはまるで異にする性質であるのがアーチャーだ。

彼女にとって戦いとは勝つべくして行うもの。求めるべきは意志の光などではなく、果てにある成果のみ。およそ交わる事のない価値観である。

かつての王であった彼女ならば、決して許しはしなかつただろう。己の築く世に災いもたらすものとして、無情のままに対処していたはずだ。

「が、是非も無しよ。今生に限り、甘粕正彦、そなたこそ我が主君じゃ。その阿呆な生き様でどれほどの事が成せるか、せいぜい最期まで付きおうてやるわ」

今の彼女は王に非ず。その身はサーヴァント、主のための剣である。

甘粕正彦の剣として、アーチャーはその力を振るう。遥かな果ての世に産まれた稀代の大莫迦者、彼が天下に布く革新の姿を見るために。

応じるのは銃砲の列。かつて天下布武の意志の下、世を席卷した革新の概念。

見果てぬ夢想を粉碎する無情の鉄火。その担い手として、アーチャーは敵へと対峙した。

流れる潮の香り、水を切って進む音。それは心象に刻まれた、在りし日の風景。

電脳空間に拡がった大海原。無数の船が埋め尽くして進撃する様は、過去の伝説の再来だ。

特別な陣形は取らず、只々相對する者を蹂躪する突撃形態。

旗艦を先頭に、真つ向からの艦船群による陸への突貫という、条理の内では考えられない異常事態。標的となるのは皆でも軍でもなく、たった一人の等身大の相手であるアーチャーだ。

対し、アーチャーも己の銃火で迎え撃つ。三千もの種子島による一斉射撃、猛る意志により威力を増す甘粕の邯鄲法も上乘せされ、魔弾と化した銃撃が雨あられとライダーの船団に降り注いだ。

結果、艦船は次々と撃ち抜かれて沈んでいく。元より劣勢にあったライダー側である。ただ向かってくる相手などの的にも等しく、故にこの結果も必然のものであった。

ならばこれは、自棄ばちとなったが故の捨て身の特攻なのか。

否、である。それしきのものでは終わらない。それはライダーの姿を目にすればすぐに分かる。

ライダーが立つのは、艦首。旗艦<sup>ゴールデンハインド</sup>、黄金の鹿号<sup>の</sup>の最先頭である。すなわちアーチャーの弾幕に対する最前線、そこで堂々と佇みながら高らかに笑っていた。

最大の危険地帯にその身を晒す。そこに如何なる意義があるのかと問われても答えようがない。何故ならそんなものは端から存在しないのだから。

当たり前の戦法など、つまらない。この期に及んで後生大事に身を

守って何になるのか。

そういうノリではないのだ。博打ならばとことんまで、大きく張らなければ運は呼び込めない。

戦の術理などクソくらえである。この場においては、芯の底から馬鹿げた真似こそが正解となる。常軌を逸して狂っていないければならないのだ。

事実として、弾幕の中にあるライダーは未だ一発の銃弾も受けていない。

それだけではない。周囲の船団が銃火に射抜かれ轟沈する中で、旗艦である”黄金の鹿号”<sup>ゴールドデンハインド</sup>だけがその洗礼を受けていない。先の銃撃のもの以外にその船体に傷は無く、乗船するライダーの意志のままに突き進んでいる。

最も危険な場所に居座るものが、一切の傷を負わないという矛盾。単なる操船技術で片付けられる事柄ではない。理屈では測れない現象は、同じく理外の理でのみ語ることができる。

それは、幸運。あるべき定石を無視し、常識さえも覆す圧倒的な強運。宝具などの能力ではなく、ライダーは純然たる運氣だけで奇跡を起こせる英霊なのだ。

ランクEX『星の開拓者』。人類史のターニングポイントとなった英霊に与えられる、あらゆる難航、難行が”不可能なまま”実現可能な出来事”になる特殊スキルだ。そこに彼女自身のEXという規格外の幸運値が加わり、起こされる奇跡は単なる幸運で片付けられる域を逸脱している。

まさしく運氣の波の大海嘯。一切合財を呑み尽くし、全ての道理を覆して実現する豪運は、たとえ如何なる宝具の制約があつたとしても勝利を確定させはすまい。

大物獲り、格上殺し、己よりも敵が強ければ強いほどに真価を発揮する運氣の流れ。一度波に乗ったライダーは何をしでかすか分からない。

そして真に恐ろしいのは、ライダー自身の精神性。彼女は自分の運など信じていない。



これだけの事を実現させながら、その幸運を頼みとする気持ちを欠片一つも抱いていない。己で制御出来ないからこそその幸運であり、ともすればあつさり敗れる事も有り得ると理解している。

保証など無い。元より幸運を戦略に組み込むなど馬鹿げている。それを承知で、尚も持てる全てを賭け金に乗せられる。栄光も財宝も、惜しげも無く棒に捨てて良しとできる。

約束された勝利などいらぬ。永劫に尽きない財宝など興味もない。

最初から結果が見えているなんて白けるし、使い切れない財宝なら持つだけ無駄だ。

先が分からない不安や恐怖、そこに表裏一体で付随する期待と高揚。それこそが冒険の醍醐味で、生きている事の本質だろうに。

理想だの権勢だのと凝り固まっている奴らほどその本質を忘れている。面倒なものを抱え込んで守ることに執着して、自由に身動きが取れなくなる。

捨てればいい、何もかも。この世に惜しむような永遠の価値なんて無い。だったら派手に、気ままに、尽き果てようとも構わずにとことんまで愉しんでやればいい。

まともではない？ ああ、そうともさ。

まともじゃないから、悪党なんてやっている。狂気の沙汰と思えるものほど面白い。

死ぬ時は、ただ死ぬまで。より先へ、より高みへと、命が燃え尽きる瞬間まで、更なる地点を目指し続ける。途中でくたばったとしても、それはそれで上等なモンじゃないか。

少なくとも、これだけは言える。正義なんて連中よりも、アタシはこの人生を愉しんでいると。

「さあ、破滅の覚悟は出来てるかい、革新目指した王さまよ。新しいも古いもない、正しい王道なんざ知った事じゃない。強欲だけの海賊の流儀で奪い尽くしてやるさあ！」

それは、一夜の内に吹き荒れて蹂躪し尽くす嵐のように、刹那に眩しく輝く閃光の如く。

この瞬間に生命の全てを燃やし尽くして、荒々しく豪快に嵐の航海者は吼え叫んだ。

——間桐慎二にとって、優秀さとは自らの存在の証明だった。

地上での所在地は西欧財閥勢力下のアジア圏、台湾・香港。

没落した貴族の家に生まれ、跡取りとして人為的に創造されたデザインベビーである。

彼の生まれ育った環境に愛情の概念は無い。

両親は愛情ではなく、優秀な跡取りを欲して我が子を作り出した。母親は夫がいるにも関わらず他の優秀な種を購入して受精させ、その父親もそれを了承した。そんな関係の中で求められるのは真つ当な愛情ではなく、優れた才能の有無のみ。

愛情があつたとしても、向ける対象は個人ではなく才能だ。少なくとも慎二の記憶に、そうした真つ当な親子愛の思い出は無かつた。

物心つく頃には部屋を与えられ、ひたすらに繰り返し返される教育の日々。

家庭としての暖かさは無い。誕生日がきてもクリスマスがきても、祝うわけでも家族が集まるわけでもない。褒める時があるとすれば、両親の期待通りの能力を示した時だけ。

友達ができる環境ではない。他人と繋がれる手段はネットのみ。彼の心は、いつも孤独だった。

そんな慎二が依り辺としたのも、やはり自身の優秀さである。

自分は他とは違う、自分は特別な存在、選ばれた特権階級なのだ。ずっとそう言い聞かされてきたから、疑問に思うこともなく価値観は出上がる。

自分に愛情なんて必要ない。だって自分は優秀だから、愛情とは優れた者が劣つた者へ施してやるものなんだろう。

誰よりも優れた自分に、愛情を施せる者はいない。それは両親とて例外ではなかった。

5歳の頃、珍しく彼の父親が直接チエスの手ほどきをしてくれる機会があった。

随分と入れ込んだのを覚えている。それはチエスそのものに嵌り込んだというより、父親と直に接していられる時間を得られた事が大きかったろう。

だがその時間も、やがては疎遠になっていく。ある程度の手ほどきの後、明確に実力の差が現れてくると、父は慎二とのゲームを避けるようになった。

なんて矛盾だろう。優秀性を求めて産みだした子供だというのに、いざ自らの劣等性を目の当たりにすれば、感情は嫉妬を覚え始めるなんて。

結論として慎二が学んだのは、優秀さを示しても愛情は手に入らないという事だった。

ならば構わない。最初からそんなものなんて求めなければいい。ドライな関係だって望むところだ。ベタベタ寄り添い合うよりはずっといい。

無能な連中からの愛情なんて期待してはならない。優秀な自分は施される側ではなく施す側にいるべきだ。それは愛情だって変わらない。

いつだったか、妹が欲しいと思った事があった。

自分の傍にいて、自分の優秀性を証明してくれる、自分のための付属品。弟ではなく妹なのは、そちらの方が見栄えが良いと思ったから。

そんな存在がいたなら、きっと自分はそいつを愛してやれるだろう。劣等な両親たちと違い、誰より優秀な自分はきちんと可愛がつてやれる。

だから妹が欲しいと思ったし、そんな自分の考え方にも疑問など抱かなかった。

——改めて述べるが、間桐慎二の価値観は歪んでいる。

彼にとっての愛情とは、慈しむものではなく施すもの。

優秀性という背景が無ければそもそも成立しない。妹という存在も、あくまで己に従順な愛玩対象としての兄妹愛だ。

もしもその優秀性が劣等性へと変じたら、哀れむ立場から哀れまれる立場へと逆転したら、そんな愛情はあっさりと崩壊するだろう。

自身の価値を否定する者が傍にいてはならない。自らを脅かす存在を許容できる度量など無い。どれだけ声高に叫んでも、間桐慎二とは器の小さな小物でしかない。

愛情の無い環境。存在価値を支えるのは、他の愚昧とは違うという選民意識のみ。

自尊心が高く、されど信念に確固たるものはない。所詮は狭く幼い価値観で、守り貫ける強さなど持ち合わせない。突けば容易く破れる張り子の強度だ。

本心では愛情を求めているのに認められず、常に意識を高みに置かなければ他人と接する事もできない。それが間違いだと自ら改める強さも無く、劣等感を自覚すればどこまでも歪んでいく。

それが間桐慎二という人間だ。優秀という価値観の檻に囚われた、素直になれない哀れな子供。屈折した人生の中で培われた彼という人間の見る世界である。

間桐慎二にとっての閉じた世界、それをこのライダーはいとも容易く壊してしまった。

「そうだ。僕は、記録を残したかったんだ。誰にも越えられない記録を。僕がいた証として。聖杯戦争で優勝して、僕が一番だって証明するため」

優秀性の証明。間桐慎二の価値観において、それこそが至上の価値だ。

愛情さえも優秀さの前提が無ければ信じられない慎二だから、誰もが自分を認めてくれる記録を、永遠に語り継がれる伝説こそが欲しかった。

聖杯戦争ならば、それが叶う。万能の聖杯なんて本気にしてなかったし、欲しいとも思わなかった。ただ、自分はここにいるのだと確かな証を立てたかったのだ。

孤独な中で心が願った、己の生きた証が欲しいという祈り。

本当は優秀かどうかなんてどうでもいい、寂しいという気持ちが生んだもの。たとえば聖杯なんて無くても、間桐慎二を思い涙してくれる友人が1人いれば、きっとその心は満たされるだろう。

だが、ライダーの在り方は、そんな祈りまでも吹き飛ばして更地とした。

豪快に、後腐れなく、いっぞ清々しいほど己を偽らない。

悪党らしく欲深く、そして何よりも自由奔放。何物にも縛られない我欲さで、ライダーは在るがままに振舞っている。

彼女にとっては生も死も大した意味は無い。残った記録なんて一番どうでもいいものだろう。

無意味でもいいのだ。産まれてきた命に意義なんてなくて、死んでいく事で残る価値なんて必要ない。誰もがただ産まれて、ただ死んでいく。それだけの事なんだと受け入れている。

まったく、本当に正反対だ。

僕はこんなにも求めているものを、こいつは平然と捨て去ってしまった。

忘れられて上等。死んだ後のことなど頓着しない。興味を持つのは今という時間、この瞬間の生そのもの。それだけを求めて、こいつはこんなにもやれてしまう。

やっぱり、こいつの事は理解できそうにない。どうしたらそんなイカレた神経ができるのか、想像してもちよつと分かりそうになかった。

——ただ、それでも、そんなライダーの姿があまりにも愉しもうだったから。

見た事もないくらい愉しそうだったから、惹かれていた。

理解なんて出来ない。それでも、その笑い声は自分の知っている何よりも爽快だった。

もしもあんな風に笑えるなら、それだけで十分なんじゃないかって、不覚にも思ってしまった。

あんなに拘って、藻掻いてまで手に入れようとしていた価値が、今ではひどく軽いものに感じられていたから。

論すでもなく、叱るでもない。

ライダーは間桐慎二を肯定も否定もしなかった。ただ在るがままに受け入れて良しとした。

特別なことは何もない。ただ己にとっての自然体として、その鮮烈な在り方を示しただけ。

それだけの事が、何よりも強烈に、幼く閉じた彼の世界を打ち壊していた。

「なあ、おまえのそれって、そんなに愉しいのか？ 誰にも覚えてもらえないのに、誰にも思ってもらえないのに。おまえだって英雄で、伝説を残した奴なんだから。なのにそれさえ残らなくていいって、本当にそれで満足なのかよ？」

そしてもし、それが自分にも出来たなら。

記録にも、思われる事にも拘らず、何もかも突き放して自由に生きられたら。

こいつの言う通り、悪党としてふてぶてしく笑って満足できたなら、それはなんて清々しいと。

そんな生き方を少しでも羨ましいと思ったから、目を離すことが出来なくなった。

目を向ける先には、自分が喚んだサーヴァントの背が見える。

無神経で大雑把に、しかし堂々と佇み前を見据える海賊英雄。そこに不安の影は欠片もない。

何の保証もないくせに、追い詰められているのは己だと知っているのに、ともすれば勝利さえも信じさせるその背中。そんなこいつが行く先に、自分も共に行きたいと思ってしまった。

破天荒に拓かれた世界の光景に、閉じていた子供の世界は急速に広

がりながら引かれていった。

力の差も戦術も覆して、星を越えた船が迫る。

眼前で引き起こされる不条理、相対する者にとってその光景は如何なるものと映るのか。

起こりえないはずの事が起きている。

見る者には奇跡だろうが、その理不尽に晒される者にとっては悪夢以外の何物でもない。

仕掛ける攻撃が何故か届かず、それを成すのが単なる幸運という出鱈目だ。これを理不尽と呼ばずに何と呼ぶ。正道を歩む者なら怒りさえ覚えるはずだ。

想像してみてほしい。自身へ猛然と迫る巨大な帆船の圧迫感を。的にも等しい大きさであるはずなのに、弾丸の一発も届かない。訳の分からない強運に守られながら突っ込んでくる不合理の塊だ。

まさしく悪夢だ。並みの者なら半狂乱に陥り、諦めて膝をついてもおかしくはない。

そんな不合理な運氣の流れを前に、それでもアーチャーは冷静だった。

常軌を逸した強運？ なるほど、相分かった。

それならばそれでよい。そういうものだとして理解して対処する。

運もまた実力の内だというように、戦力と見做せばそれも一つの基準の要素だ。

弾幕を張る種子島を一旦引つ込める。

常道の理でなら中らぬはずがないのだが、ここはそういうものだと理解した。

今のままではライダーは止められない。仕留めるにはそれ相応の備えが要ると。

迫る、迫る、迫る。

猛進するガレオン船。阻むものを取り払われ、その勢いは増すばかりだ。

見える船体はみるみる巨大に、迫り来る脅威は明確に見せつけられて怯ませる。

そんな恐怖の具現を直視して、しかしアーチャーは動かない。

それは限界まで引き付けるために、そうしなければ仕留められないと判断して。

心中はあくまで平静を保ち、必中必殺の好機を待ち構える。

船体が視界を覆い、もはや激突は不可避かと思われた瞬間、

「――避けれるものなら、避けてみよ」

怒濤の勢いで轟く銃声。一斉に再出現した大量の種子島。

四方八方、逃げ場なく空間を埋め尽くした銃砲の火線。逃れようのない絶無の可能性、あらゆる運気の余地を尽きさせた物量頼みの一斉掃射だ。

当然、ライダーの船にこれを回避する術はない。

全方位から殺到する銃弾の豪雨に曝されて、その船体は瞬時の内に蹂躪された。

穿たれ、崩され、もはや無事な箇所はどこにもない。寸前にまで迫りながら一步届かず、無情なる有り様のまま、ゴールデンハインド“黄金の鹿号”は沈んでいく。

――刹那、崩れ落ちる船より、一騎の影が躍り出た。

彼女は悪党、強欲と凋落の中で生きる者。

殊勝な潔さなど縁はない。その命の一片まで燃え尽きようが、彼女は抗い続ける。

己と伝説を共にした”ほうぐ相棒”の最期にも頓着せず、瞬時に選び取る行動は型破りかつ鋭い。

未だ決着は分からない。星を超えたこの英雄がいる限り、不可能など存在しないのだから。

乗船より降り立ち、ライダーはその身一つで突貫した。



沈み逝く船の中で、慎二は己のサーヴァントの姿を見ていた。

あれほどの集中砲火の中で慎二が無事だったのは、なんとという事もない。

この決戦場にて絶対順守される法則、サーヴァントはサーヴァントにしか攻撃できない。

サーヴァントの攻撃はマスターに危害を加えられず、故に崩壊の中でも保護がかかったと、それだけの理由である。

ライダーは慎二を守らなかった。

前述の法則を考慮してか、それとも単に頓着しなかったのか。

正直、後者の印象が強い。勢いに乗ると細かい部分など気にもしなさそうだから。

ライダーは博打に打って出たのだろう。恐らくは、その方が愉しめるといった理由で。

「……勝てよ」

本当にとんでもないサーヴァントだ。ここまで引つ張り出して、最後には放置なんて。

マスターがやられたらそっちだって困るのに、その辺りをちゃんと分かってるのか。

分かってるかもしれないが、気にはしていないんだろう。それがライダーこいつだ。

「勝てよ、ライダー……」

だから、なあ。せつかくここまで来たんだ。

おまえだったら勝てるだろう。これで勝てないなんてダサイ事があるもんか。

なんたつておまえは、この僕がちょっとでもかっこいいと思った奴なんだ。だったら勝つのが当たり前だろう。

そうだ。ライダー、おまえなら勝てるよ。

あんな奴らなんて、どんな奴にだって、おまえは勝つに決まってる。これは絶対だ。この僕はそう信じたんだから、絶対に違いないだ。

だっておまえは、どんなすごい事だって起こせる、僕の英雄サーヴァントなんだから。

「勝て、勝てよオオ、ライダーアアアアアア!!!」

それは虚飾のない、純粹に相棒の勝利を願った叫び。

無意識の祈りに伴われるのは”令呪”の光。輝きは奇跡と化して発現した。

風も音も置き去りにして、ライダーは駆け抜ける。

その速度は明らかに常の性能を凌駕する。アーチャーとの間合いなど無いにも等しい。

慎二が叫んだ『勝て』という令呪。

通常、具体性のない内容では超常的な効果は見込めない。しかしこの場では事情が違った。

単純明快かつ状況に適した直接的な命令。勝ちを狙った博打、行動がその狙いから外れない限り、ライダーには令呪の恩恵による強化が行われる。

今のライダーが見据えるのは勝ち一本。自身の命さえも勘定に入っていない狂気じみた純粹さが、この突撃敢行に限り最上位のサーヴァントにも届く強化をもたらしていた。

駆けながら両手に構える二丁拳銃。

アーチャーの元へと直進する中で容赦なく銃弾を浴びせかける。それは鎧を纏ったアーチャーに凌がれるが、元よりこんなものだけで仕留められるとは思っていない。

少なくとも逃がす事なく、その場にくい止める事は成功した。そし

て両者の距離が至近戦闘へと移ろうとした時、両の拳銃を手放して船刀カトラスを抜き放った。

刀剣を使った戦闘。騎兵ライダーのクラスにとっては専門外だが、今のライダーには令呪からの恩恵がある。振り下ろされる船刀の威力は、それこそ剣士セイバークラスに匹敵するだろう。

鋭く重い斬撃がアーチャーを捉える。が、それでも仕留めるには至らない。アーチャーもまた自身の愛刀たる日本刀を手に、ライダーを迎撃する。攻勢よりも守勢、将たる自身を守り生き残らせる事を念頭におく闘法は、恩恵を得たライダーにも容易く仕留めさせる事を許さない。

二合、三合、四合、と。刀剣の交錯が続く。

受けに回るアーチャーは後退するが、決して追い詰められているのではない。令呪の効果は永続ではないのだ。敵の優位が失われる時までは守りに徹するのがアーチャーの判断。

対し、ライダーには先など無い。懸けるべきはこの今だけ、受ける後押し後押しの威力に任せて、まさしく生命そのものをぶつけるかの勢いだった。

そして、五合。都合、五度目の交錯が成されようとした時、鳴り響いた銃声。同時に、船刀を持った右腕が宙に舞った。

銃手アーチャーにとって、刀は守り。攻め手はあくまで銃にある。

接近戦の中でも展開させていた種子島。機を狙ったその銃撃が、ライダーの剣をその腕ごと奪い取った。

それは一瞬の内の出来事。利き手を失い、茫然自失としたライダーから勢いが途切れた、刹那のような時間の中で、

——アーチャーの刀が、ライダーの身を貫いていた。

「愚昧なり。勝利を焦り、機を逸したか」

告げる言葉に慈悲はない。

所詮は無謀な特攻の類い、果たせなければ称賛には値しない。

訪れたのは当然の結果、ならば無意味であると合理性を求める英霊は言い渡す。

「——ハ。そいつはアンタのことかい？」

それに応えるのは、不敵に浮かべた悪辣な笑み。ハツと目を見開くアーチャーの手を、残ったライダーの左腕が掴んだ。

アーチャーの剣は確かにライダーを貫いた。

だがその刃は急所を捉え損ねている。霊核さえ無事なら、如何なる傷もサーヴァントにとって決定打とは成り得ない。

有り得ない事だった。あのタイミングで止めを刺し損なうなど考えられない。

狙い通りの展開に過たず、一撃には十分な手応えを感じていた。これで仕損じるほどの手緩さを、アーチャーという英霊は持ち合わせない。

確実な一撃だった。先の一閃はこの闘いを決着させるはずのものであったのだ。

だが、悔るなかれ。ここに対峙するライダーは無理を道理に変える英霊。

彼女ならばやるだろう。たとえ絶無の可能性の中でも、ライダーならば彼女だけの光明を見出して奇跡を起こす。

たとえ因果を逆転させようと、彼女ならば当たり前のように覆す。先んじて結果を確定されようが、当然の如く確殺の運命から逃れるだろう。

ならば、ライダーはやるだろう。豪運の波に乗った今の彼女には、展開こそが付き従う。必殺の間合いであろうが無かろうが、これしきの結末で終わるライダーではない。

結末は、もつと派手に。大仰に馬鹿馬鹿しく、一切合財投げ尽くした果てにこそだろう。

宙空に出現する、一門の巨大な砲身。

搭載されたカルバリン砲。船は沈んだが、武装はまだ生きている。火力は健在だ。

そして出現したその砲は、内包された魔力が尋常ではない。明らかに先を遙かに上回る威力が、砲身の内に秘められていた。

『勝て』という命令に慎二が費やした令呪の数は、二画。

与えられた二画の奇跡を、一画は自身の強化に、そしてもう一画は砲の火力へと回していた。

令呪一画分の魔力の砲弾、それがあのカルバリン砲に秘めたものの正体である。

砲が現れたのは、ライダー、アーチャーらの直上。

斬り結び、至近距離で組み合っている両者を、その砲口が真っ直ぐと狙っていた。

「貴様、まさか諸共に——!?!」

掴んでくる左手が剥がせない。

現れた種子島が改めてライダーを狙うが、もう遅い。

すでにこの場の運気の流れはライダーのもの。この流れを阻むものなど有りはしない。

悪辣に、凄絶に、清々しいまでにふてぶてしく、ライダーは笑った。

「こいつで正真正銘の素寒貧さね！ 遠慮なく受け取んなアアアアッ!!!」

放たれる砲火。直下へと落とされた砲撃が二騎を捉える。

秘められた魔力は解放され、爆炎と化して総てを呑み込み拡がった。

炎に消えたサーヴァントの姿を目にして、慎二は飛び出していった。何が出来るかなど分からない。前に出たところで無意味だと、言われてしまえばその通りだ。

だがそうではない。ここまで来れば、もはや理屈ではないのだ。何もかもを博打に投げ打って、今さら何を恐れることがあるだろう。

重要なのは博打の結果。自らのサーヴァントはどうなったのか、頭にあるのはそれだけだった。

果たして、ライダーはすぐに見つかった。

慎二が何をするまでもなく、宙より降ってきたのだ。単なる偶然と片付けるには出来すぎなほどのタイミングで、慎二の眼前にその身が投げ出される。

全身が焼かれ、深く傷ついたその姿に、慎二は死を連想した。

「おい……おいッ！ 起きろよ、ライダーー！」

「うつせえなあ！ そう騒がんでも聞こえてるよ」

叫びをかき消す怒号。見かけの傷に関わらず、ライダーの声にはまだ覇気があった。

これがサーヴアントだ。致命に至る急所さえ無事ならば、如何なる傷も彼らを脅かすものとは成り得ない。

そう、ライダーは無事だった。爆心地のほぼ中心に在りながら、その身は致死から逃れていた。

「お、おまえ、大丈夫なのか？ だって確かに、さっきの大砲でアーチャーごと……？」

「んー？ ああ、そうだねえ。アタシも狙ってやったわけじゃないさ。正直に言つて、道連れ上等でやったもんだつたしね。まあ——」

気楽そのものといった口調で、平然とライダーは続けてみせた。

「運が良かったよ、我ながら」

己を巻き添えにした自爆砲撃。九死に一生どころか、前提として死が先にあつたような攻撃だ。

通常ならば助かる見込みなど無い。命にも執着しない迷いなさがアーチャーを捉える何よりの要因だったのだから、そこに保身など入り込むはずがなかった。

だというのにライダーだけが無事に済む。もはや幸運の一言で片付けられることではなかった。

英雄フランシス・ドレイク。

星の開拓者、太陽を落とした女。あらゆる難行を可能とする奇跡の踏破者。

今や舞台の流れは完全に彼女へと傾いている。この場に起こる偶然は必然と化し、何もかもが彼女の望む通りに推移していく。およそ運氣の領域において、ライダーを超える事は不可能だ。

「やったんだな！ 勝ったんだよな、おまえが！」

「あー……うん、そうさねえ」

この結果もまた、勝利を望むライダーに与えられた運命である。場にある幸運の全てはライダーの味方だ。勝利の女神は彼女へと微笑んでいる。

その幸運を超える事は決して出来ない。もはやそれは確定事項に等しかった。

「つたくよお、そう言えたら良かったんだけどねえ」

炎の中より歩み出る2つの影。淡然とした歩みは、未だ健在である事の証左である。

アーチャーと、そのマスターである甘粕正彦。並び立つ両者は深く傷を負いながらも、未だ精強を保つてそこに在った。

爆炎に包まれたサーヴァントを見て、慎二は飛び出した。

対し、甘粕の踏み出しはそれより遙かな先を行っている。ライダーが博打に打って出たその瞬間から、甘粕は行動を開始していた。

それは直接対峙するアーチャーよりも早い。場の誰よりも早く手を打っていたからこそ、甘粕の一手は功を奏したのだ。

それが出来た理由は、もちろん甘粕が人を信じているから。

人には秘めた輝きがある。試練に直面すれば表に現れると信じている。

だからこそ、甘粕はあらゆる事態を考えて動くのだ。この相手はきっと奇跡を起こすに違いないと、期待した相手に応えるために自らもまた怠らない。

幸運の全てがライダーに傾いている。ああ、承知の上だとも。

奇跡を成し遂げた英雄ならば、それくらいはしてこよう。どんな不可能事でも、このライダーならば必ずや手を届かせてくるだろう。

だから確信していた。ライダーの博打は成功する。彼女の剥ける牙は、必ずやアーチャーの喉元へ喰らいつくに違いないと。

故に、その時を覚悟して練り上げたのだ。全霊を込めての邯鄲法を。

攻撃役はアーチャーに譲つてある。補助役であるマスターならば、

取るべきは防御策だ。

砲撃に先んじて展開された物理特化の防護術式、アーチャー自身の耐久に合わせて得られた防衛力で、砲撃の全威力を受け止めた。

もしもアーチャー1人だったならば、ライダーは勝利を掴んでいただろう。

どちらが欠けても成り立たない、主従の2人が在ったからこそその結果である。

勝負とは時の運であるという。だが現実とは運ばかりでは決まらない。運も実力の内という言葉のように、運の流れにも左右されずに勝利を得るからこそ本物の強者と成り得るのだ。

勝負事に真の意味での偶然はない。勝者は勝つべくして勝つし、敗者は敗れるべくして敗れる。

ならばこの決着も、やはり必然のもの。ライダーと間桐慎二は、アーチャーと甘粕正彦には及ばない。厳然とした結論が、ここに下されたのだ。

聖杯戦争において、マスターが補助を受け持つ盾ならば、サーヴァントこそが闘いを決める剣。

サーヴァントの死、闘争手段の喪失は、月の決闘において敗北を意味する。サーヴァントを倒せるのはサーヴァントだけという原則に則るならば、決着を付けるのはサーヴァントの役割だ。

種子島より放たれた銃弾が、今度こそ正確にライダーの霊核しんぞうを撃ち抜いた。

力が、抜ける。

身体が起きない。命が根こそぎ抜けていくのを感じる。

霊核より循環する魔力が途絶え、この身を留めていたものが雲散霧消していつている。



はつきりと分かった。自分は、これで消滅するのだと――。

「ライダー!? ライダアアアア!」

声が聞こえる。この戦いでの、自分の大将<sup>マスター</sup>。

考えれば短い付き合いだったが、思った以上に自分はこいつを気に入っていたのだと理解する。

「まだだよな!? これで終わりなんてないだろ! おまえが、こんなくらいで……ッ!」

「あんま無茶言いなさんな、シンジ。今のはいいトコもらっちゃったし、多分もうすぐ消えるっぽい。ここいらが潮時みたいだよ」

四肢の先端から喪失していく感覚。痛みとも違う、己が“虚無”に侵されていく不快感。

直前まで”死”の実感を味あわせるところが、何とも趣味が悪い。もつとすつぱりと死ぬ事を理想としていた身としては、それが不満だった。

「ふ、ふぎけんなよ! 勝手に消えるな、何とかしろ! おまえは僕のサーヴァントだろうが、敗けるなんて許さないって言っただろ、この駄目サーヴァント!」

「アハハ、いいよお、シンジ。こんな様のアタシに更に鞭打つたあ、流石はアタシのマスターだ。まさに筋金入りの悪党さね」

「ッ!? こっの馬鹿! こんな時まで阿呆なこと言ってるな! そんなの言ってる暇があるなら立てよ! あと一步だったじゃないか、なのにこんなのもって、納得なんか出来ないだろ!」

「ああ、そうだねえ、確かにあと一步だった。足りたとも思ったが、結局はその一步分が足りていなかった。納得できようができまいが、勝負の結果なんざこんなもんだよ」

強い奴が勝ち、弱い奴が敗ける。

ああ何とも当たり前の結果だ。白ける事この上ない。

これだから結果の見えてる勝負は興が削げる。盤上全てをひっくり返すほどの大博打、それすら出来ない勝負事など、何のスリルと愉しみがあるというのか。

「それより、アンタこそ大丈夫なのかい? これでアンタの脱落も決

定、晴れて縛り首だ。ビクビク震えて、泣き喚くくらいの醜態は晒す  
と思つてたぜ」

我ながら意地の悪い質問だと思う。思うが、止めてやる理由もな  
い。

悪党なんてそんなものだ。どれだけ宝を手にいれようが、最期には  
何も残らない。

富も名声も、結局は死という結末に焼き落とされる。誰にも悼まれ  
ない人間の破滅には、総てから見放されての無謬だけが残る。最期に  
は消えると知りながら、滑稽な舞台上で踊り続けるピエロ。

だったら、最後まで踊ってみせるのがせめてもの見せ場つてもん  
だ。小悪党らしい末路の姿を、せいぜい笑つて見送つてやるのが礼節  
だろう。

「……分かつてるよ。ああ、分かつてるんだよ！

さつきから僕の身体も消えてきてるし、これから無くなるんだつて  
すぐく分かる。リアルの僕まで死ぬんだつて、分かんないけど分かる  
んだよ！

気持ち悪いし、今だつて吐きそうだ。そんな機能だつてもう無く  
なつているのが分かるから、ゾツとするくらいに怖くて仕方ないんだ  
よ！」

だが、そこから出てきた言葉は、どうにも気色が違っている。

いつもの慎二らしい悪態ぶりは、しかし滑稽と言つて捨てるには躊  
躇が残る、矜持にも似た気高さが宿っているようにも見えた。

「でもさ、おまえが言つたんだぞ。死に様まで愉しめつて、ふてぶてし  
く笑えつて。

それがおまえの言う、悪党らしい生き方つていうんだろ。自分で  
言つた事だろうが、忘れてるんじゃないよ。

やっぱりこんなの、全然理解できそうにない。だつてどうしたつて  
怖いに決まつてるだろ、こんなの！ なのに愉しめとか笑えとか、出  
来るわけないじゃないか馬鹿じゃないの！」

批難の台詞を吐くその口は、震えていた。

どんなに強がつてみせようが、慎二は慎二だ。迫る死の恐怖を押し

殺せる達観した精神などあるわけがない。

こいつは心底から怖がっているのだ。笑う飛ばせる強さなんて無い、どうしようもなく未熟で弱い子供として。

「それでも、き。全然理解できないけど、かつこよく見えたんだよ。おまえらしく生きてるおまえが、僕が見た事ないくらいに愉しそうだったんだよ。」

自分でも馬鹿馬鹿しいって思うけどさ、でも憧れちゃったものは仕方ないだろ。おまえって実際すごい英雄なわけだし、僕が憧れるのも別に不思議でもないっていうかさ。だったら少しくらい倣ってみるのも悪くないんじゃないかって。

だから、答えろよ！ 僕がこんなにも憧れた奴だつてのに、こんな終わり方でいいのか!? それで潔く諦めるみたいなの、その程度の悪党かよ、おまえ！ 達観してみたみたいな物言いなんでどうでもいいんだ、そもそも悔しくないのかって聞いてるんだよ!？」

それでもこいつは耐えている。弱い奴が弱いなりに、精一杯の強がり。

どこまでもみつともない、潔さの欠片もない足掻きだが、だからこそ命を諦めていない。

敗けて死んでそれで満足なんだと、そんな結論をみせるアタシの事を決して認めていないのだ。

「……ああ、ああそうだ悔しい、反吐が出るほど悔しいに決まってるだろうが！」

ここまで来といて、あと一步つてところで掴めたのに、最後の最後でご破産にしちまった！ 腸わたが煮えくり返らないわけがねえだろうがよおツ！

出来るなら今すぐにでも、あいつらのケツに鉛玉をぶち込んでやりたいぜ。何もかも奪い尽くして足蹴にして、高らかに笑ってやらなきや気がすまねえさ！」

だから、小利口な顔なんざかなぐり捨てて、本心からの悪態を吐き出した。

ああ決まっている、負けたら悔しい。そんなのは当たり前だ。

勝てなかったのは屈辱で、届かなかったのは無念だ。その気持ちは確かにある。

達観なんざしちやいない。こちとら強欲な海賊稼業、殊勝さなんぞ持ち合わせない。

だがね、アタシはこうも思ってるんだ。そういう悔しさも含めてこそ人生だつてね。

人生に常勝はない。馬鹿をやらかしていけば、いずれこうなっちゃうのは目に見えていたんだ。最初から承知の上で好き放題に悪党やってたんだから、文句を垂れるのは筋が通らないだろう。

世の中なんてこんなもん、人間なんてしようもない。そういう風に突き放した生き方を選んだのは自分自身。だったら後悔なんてつまらんもの、抱えて逝くなんざ損なだけだ。

これでいいんだよ。アタシはこういう悔しさだつて愉しんでいたんだから。

「だから、そうだね。悪かったよ、坊や。期待に応えてやれなくてさ」最後に出てきたのは、そんな一言。

アタシ自身に悔いは無いから、不憫といえは巻き添えになる慎二の方だろう。

戦争だからと言えばそうなんだが、結局勝てなかった分のツケはあるわけだし。

「ハズレサーヴァント、か。案外その通りかもね。好き勝手やつとしてこの様じゃあ、そう言われたってしょうがないさ」

「……止せよ。今さらそんな、おまえなんかそんな台詞似合わないんだよ。

僕は先が見てみたかったんだ。そんな風なおまえが、無茶苦茶やりながら何処まで行けるのかって、それを僕も一緒に見てみたくなっただんだよ。

ハズレなんて言うなよ。僕はおまえがいいんだ。おまえと一緒に勝ちたいんだよ。ぼ、僕がこんなクサイ台詞、キャラじゃないって分かってるけどさ。察しろよ、クソ！」

こいつは何とも、可愛げのある事を言ってくれる。

だがなあ、そいつは少々ノリが違うだろう。そういうのは悪党の領分から外れてる。

ガキで、間抜けで、ひん曲がってたアンタだから、こっちも勝手をやれたつてのに。今さら改心なんてされちまったら、こっちの立つ瀬が無くなるだろうが。

「まあ仕方ねえか。アンタ、生き方は悪党のクセに、性根は結構いいやつだからな」

「ライダー……」

さて、そろそろ終いらしい。

限界が近い。身体はもう大半が消え失せた。

口がきけるとしたら、後一度ぐらいか。遺言なんて考えた事もなかったが、どうしたもんかね。

「……ああ。そういや気付いてなかったが——」

残っていた左腕を、残った力で持ち上げる。

上げた手を、こちらを覗き込んでくる顔へ。眼帯に覆われた右顔面に触れ、そつと撫でた。

「——面傷。オトコが上がってるぜ、シンジ」

こいつで終わりだ。何もかもが消えていく。

色々としようもないものだったが、まあ悪い航海じゃなかった。それなりに派手にやれたし、道楽代わりと考えれば、これはこれでなかなかのモンだったと——いや。

やっぱり納得なんざしてやらない。このままじゃあアタシらは負け越した。

まだ航海を終えるには早すぎた。島の1つにもたどり着けないなんて笑えない。

悔しさと憤りつてのはどうしようもないのだ。感情は未だに煮えくり返っている。

このままじゃあいとこなんてひとつも無い。なるほど、シンジの言う通り、ここまで負けっぱなしじゃお腹の虫が治まらないってものだよな。

——だから、もし次なんてものがあるのなら、その時こそ勝ってや

ろう。

大義も無ければ責任も無い。背負ってるものなんて何一つ持ち合わせない。

そんなアタシらで、総てを覆してやろう。取るに足らない悪党であるアタシらが、高みに居座る大物連中の鼻を明かしてやろう。

どこまでもちっぽけで自分勝手な欲望で、この世界をひっくり返してやればいい。そして今度こそ勝ちをこの手に掴んでやる。

シンジ、アンタも一緒に、せいぜい派手に大暴れしてやろうじゃないか。

”——ああ、そいつはさぞや、愉快的な光景に違いないだろうさ”

身体も、心も、消え失せていく。

それでも享樂はここに、破滅の無念までも堪能しつくして。

最期の瞬間まで愉しむように、アタシは声の上がないまま笑い続けた。

虚無に浸され、塵となって消滅していくサーバーアント。

残されたマスターもまた、それに連座する。月の聖杯戦争において逃れようのない敗者の結末。

死の壁は、すでに降りている。

勝者と敗者を分けるデッドライン。電腦を焼く攻性防壁<sup>ファイヤーウォール</sup>。

甘粕らと慎二の間を隔てる、間近であつて最も遠い距離がそこにはあつた。

死に逝く赤色の世界の中で、たった独り。

孤独の中で彼は死ぬ。記録を残したいと願った少年は、何も遺せず

に塵となる。

消失に蝕まれるのは恐怖だ。電腦の世界において、感覚は最期の瞬間まで残り続ける。単純な痛みではない、だがはつきりと己の死を感じさせる拷問は、如何なる剛の者でも怖れを抱かずにはいられない。それでも、顔を上げた間桐慎二の表情には、笑みが浮かんでいた。口端は引き攣り、身体は震えている。

虚勢であるのは目に見えている。本心では泣き叫び、恐怖から逃避したいと喚いていた。

そんな自らの気持ちに嘘をついて、こみ上げる恐怖を押し殺しながら。

まだまだ無様で不格好ではあるけれど、浮かべてみせる虚勢は確かにあつて。

道化で終わる自分の事を、まるでそのこと自体を愉しんでみせるように。

悪党らしいふてぶてしい笑みを浮かべながら、間桐慎二は消滅した。

「——素晴らしい」

矜持を抱いて運命を受け入れた間桐慎二に対して、甘粕は賛美の声を上げた。

「誰に想像できた？ 間桐慎二がこれほどの矜持をみせると、彼を知る者に想像できたか？」

やはり人には輝きが秘められている。真に無価値な者など一人もいないのだ。誰もが皆、それを発揮するべき舞台を得られていないだけ。

舞台があれば人は目覚める。魂は求めているのだ人間賛歌を、英雄の如く雄々しく立ち上がる刻を得たいと望んでいる。誰よりも輝け

る己こそ、人々は欲しているのだから」

「ああ……、やはり俺の”楽園”<sup>ほろいぞ</sup>は間違っていないな」

ライダーたちの主従が発揮してみせた輝きは確かなものだ。

運氣の流れをも呼び込む意志、奇跡を実現させるその強さは、先日までの比ではない。

その向上の幅、成長という度合いで考えれば、甘粕らを圧倒していると言っても過言ではない。この試練に際して、輝ける舞台を得たのは間桐慎二らの方だろう。

「心からの称賛を贈ろう。見事であったぞ、間桐慎二。おまえは実に美しかった！」

よって輝きを愛する勇者は本心からの祝辞を謳い上げる。

これこそ甘粕正彦の理想そのもの。人の勇気が顕れる”楽園”の光景なのだから。

「それほどに喜ばしいか？ その輝きし者が死んだというのに」

そんな甘粕の理想に対し、アーチャーは無情にも現実を突きつけた。

「理解しておるか？ これこそがそなたが目指す世界の姿そのものじゃと。」

その世界では人々は強くなれよう。あの小僧めのように、矮小なる者共にも成長と奮起の機会が与えられる。ある意味で最も公平な世界であるといえようの。

そう、果てにある死を含めて、これこそがそなたの世界じゃ。いかに見るべき成長を見せようが、敗者には死あるのみ。苛烈が過ぎる選別は人々を殺し尽くす。

正彦、そなたはこの悲劇を直視して、尚も己の理は間違いではないというか？」

革新の王。時代の変革を担い、価値観の淘汰と開拓を行った英霊、織田信長。

新たな価値を築いた王は、それ故に俯瞰した視点を持つ。正の利点ばかりを追い求めるのではない、負の難点も余さず理解して正負の精算を取った裁定を下せる。



その本質は徹底した現実主義<sup>リアリスト</sup>。大仰な夢に惑わされず。彼女は己のマスターに厳しい問いを投げかけた。

「そうだ、悲劇だ。輝ける勇者は勝利には至れず、無念なる敗北を遂げた。その果ての死、なんと傷ましいことだろう。自罰するとも、血の業を忘れはせん。」

この試練は命がけ、そう命がけなのだ。正しければ、雄々しければいいなどと、与えられた筋書きで踊っているのではない。真の意味で死地であるからこそ試練足り得る」

対し、甘粕もまた己の理想を譲らない。

指摘された矛盾にも怯まない。懸けた祈りに真を置くからこそ、反証にも真っ向から対峙する。

「かつて世界は今より遙かに生き難かった。日々の糧を得るために狩りへと赴かねばならなかった石器時代を筆頭に、生きる事はそれだけで困難なものであったのだ。」

多くの血が流されただろう。数多の悲劇と涙を飲んで、そこに立ち上がる意志が生まれた。だからこそ人は武器を手にし、徒党を組んで文明を築き上げていった。その原動力となった感情は、大切な友人、恋人、未来に生きる子孫らのためと、何かを思う心であったはずだ。

結果、時を経つにつれて世界から危険は取り除かれていった。食料は生産され、夜の闇には光が差し込み、法律の下に人々は集団としての秩序を手に入れた。

彼ら先人の築いた文明の上に生まれた者として敬服するより他にない。その行いこそまさに人が強く輝ける存在である事の証であるだろう」

人類史の発展、それは世界から不安を取り除く作業とも定義できる。

文明が産みだした利器の数々、その本質的な目的は安寧を求める心だ。より豊かに、より安全に、より多様に手を広げる事で未知なる危険を排除していく。

例外も存在するが、時代の経過と生活の向上は比例関係で推移している。飢え、病、人権と、数多の問題は進み行く時代の中で着実な改

善を計られてきたのは事実である。

「そして現在、人類は地上よりあらゆる不安を排除しつつある。

デザインされた人生図、あらかじめ定められた寿命、未来への不安は根絶され、管理の名の下に貧困や病とも無縁の生活が約束される。

まさしく安寧を求めた先の理想世界だろう。だがそのために人類はかつてあつた姿勢、困難に立ち向かい生き抜かんとする意志を忘れてしまった。

あのライダーがそうであつたように、人類史における空隙であり分岐点、そういうものがあるのなら今この時がそうだと俺は思う。停滞か奮起か、人類にとっての選択肢が果たしてどちらか、今一度問わねばならない。

少なくとも俺という意志は、安楽と共に迎える滅びなど断固として認めていないのだから」

だから、甘粕正彦は世界を否定する。

進歩ではなく停滞を、生命の足掻きではなく緩やかな滅びを選んだ社会。袋小路に陥つた人類に、再び立ち上がる力を与えるために災禍という名の喝を入れる。

「忘れてしまったのなら今一度思い出させよう。かつての時代、生き難かつた世界の中で己がいかに立ち上がったのか。命がけとなる機会を再びその身に刻むのだ。

その果てに未来は拓かれると信じている。試練によって練磨された人の強さが、この停滞の世に真なる希望の光をもたらすのだとな。

ならば俺は迷わない。我が祈りに一片の揺らぎなし、自罰と共にこの道を進むと誓おう」

決意を唱える言葉には、宣した通り一片の動揺も見られない。

甘粕正彦は迷わない。彼の祈りは極端に過ぎるもので、だからこそ否定しようのない正しさを秘めている。

甘粕は自身の理想の問題点を自覚しているし、罪の意識から目を背けているわけでもない。総てを承知して、それでも尚歩み続けられる強靱な意志こそが彼の真骨頂だ。

重要なのは意志の絶対値。甘粕の掲げる持論は彼自身にも適用さ

れる。

元より人間とは不完全、完璧な理念など望めない。ならばより強く貫いた意志によって次なる道理を築けば良い。

要は、文句があるなら拳でかかってこいと、そういう話である。

「信条は揺るがぬか。さもありません、この程度で揺らぐならば元より見届ける価値も無しよ」

そんな甘粕だからこそ、アーチャーも己の信条を曲げて付き従うのだ。

規格外たる意志の強さ、その馬鹿げた祈りで如何なる革新をもたらすのかを確かめるために。

「是非にも及ばず。その道を違えぬ限り、わしはそなたの剣で在り続けようぞ」

「違えぬさ。人の勇気を俺は愛している。愛する者へと捧げる誠意を、どうして違えることなど出来るだろう。たとえ俺自身がどうなるうとも、俺の祈りに変わりはない」

そうして、勝者たる2人はこの地を後にする。

彼らが見据えるのは次なる戦い。轍と化した足跡に必要以上に囚われる事はない。

それは正しい。この月で行われる聖杯戦争、己一人となるまで他者を押し続け続ける熾烈な生存競争において、彼らの姿勢はどうしようもなく正しいものだった。

月における始まりの戦い、聖杯戦争の第一回戦は、こうして終わりを告げた。

## 2 回戦：緑衣の襲撃者

——巡る景色が浮かぶ。回される記憶のフィルム、主観と客観、2つの視点を共有して。

それは、雪がよく降った冬の夜だった。

肌寒さを感じていたのを覚えている。日々の中に埋もれるだろう日常的一幕。

これはそんな記憶。劇的なものはなく、されど確かな印象を残した奇妙な情景。

畳張りの部屋。戸を開けた先に映る雪景色。

あるのは古風な日本屋敷に和式庭園。傍に控える草履取りの男が1人。

何も不思議なものはない。主観となる者にとって当然の光景が広がっている。

気紛れか、雪の冷たさに触れなくなったのだろうか。少し外を歩くと、草履に脚を入れる。

……かすかな違和感が、そこにはあった。

「そこな小者」

「はっ、いかがなさいましたか」

「うつけ者めッ！ 貴様、主の草履番を勤めながら、尻の下にでも敷いておったのか!？」

怒声を上げる。しかし態度とは裏腹に、声の主は内心では大した怒りを感じていない。

主君として示すべき厳格な罰と恐怖の意識。慈愛の徳ではなく、鉄血の厳しさあってこそその規律。その規律があつてこそ人の集団とは強くなると知っていた。

血風吹き荒れる戦国世。功德よりも恐れこそが尊ばれる動乱の時代、律するべきは兵のみに非ず。あらゆる立場に甘えを許さず、緩みが見えたなら締め上げる。

だから、この小者の男が特別だったというわけではない。組織の長

として緩んだ部分を締め直す、行動の意味としてはそれだけだ。仮に他の者が相手でも同じようにしただろう。

「いえ、お館様。それは誤解にございます。恐れ多くもお館様のお御足に敷かれた履き物を、あろうことか尻に敷くなどと、そのような勿体な……もとい、忠義に泥を塗るが如き愚行は誓つてないと断言いたしまする」

だからこそと言うべきか、その返しは予測していたものとは違っていた。

元より草履程度のことである。さして厳しすぎる沙汰を下すつもりはない。

打擲のひとつでも加えて済ませるつもりであった。過度に与えすぎる恐怖は離心に繋がる。緩みを糺す意味合いでは、その程度で十分だろうと。

それは合理に沿った上での判断だったが、男の反応はこちらの思惑と異なるものだった。

見返してくる眼には力があつた。

たかが小者の身でありながら、主君の叱責を恐れていない。

むしろ広く澄んだ瞳には、こちらの思惑さえも見透かしているような聡明な光があつた。

興味が沸いた。仕える小者の1人でしかない、この男に。

「ほう。なにか申し開きがあるというのか？」

「左様にございます。この雪降る寒空の下、お館様の麗しきお御足が冷えてはいかんと愚考いたしました。恐れながら拙者の懐に納めて暖をとっております」

自ら懐を開けて草履の跡を表す男。嘘か真かはともかくとして、堂々とした態度はなかなか見事だった。

ひょうきんで人懐っこく、端々から滲み出る陽気さは好印象を受けやすい。自尊を主とする従来の武家衆には見られない特徴だ。

ほんの二、三言の会話だけで、これだけの好感を抱いている。

使い分けもできるのだろう。相手によってより良い態度を選り分けられる類いだと判断した。

誰にでも出来ることではない。恐らくは本人の素養によるものだ。こうした才覚は、人を使う上で有用なものとなる。

それはそれとして、もうひとつ。どうにも気になっている事を尋ねてみる。

「なるほどのう。ならばもう一つ、どうにも草履が湿っておるように感じるのじゃが、これはどうした訳じゃ？」

「ははっ、お館様の草履を懐におさめましたところ、残り香を堪能するばかりでは辛抱堪らず、思わずペロペロしておりました——げぶうツ！」

前言を撤回する、やはりこいつはただの阿呆かもしれない。

「なんとしたことか。小者だと思っておったが、よもや色情に狂った猿だとは」

即座に草履を履き捨て、その喉仏に爪先蹴りを見舞う。

更にその頭を踏みつけてやった。雪の積もる地べたへと男の顔面が叩きつけられた。

「そらどうじゃ。申し開きはそれで終わりか。ええ、猿が？」

「げほっ、は、ははっ！ お館様に足蹴にされたばかりか、こうしてお御足で踏んで頂けるなど、もはや拙者の魂魄は天にも昇る心地にござるぐげえ！」

「本能に忠実か、まことにケダモノよな」

踏みつける力が強める。あまり罰にはなっていないようだったが。

やはりこの男と話していると妙に毒気が抜かれる。感じられた才覚に間違いはない、天性の人たらしとも呼べる素養は本物だ。

——が、しかし、それで許すかは別の話である。

「であれば下すべき沙汰も決まっておるな。主に発情する畜生ならば斬り捨てねばなるまい」

刀を手にし、足蹴にした頭に白刃を突きつける。

首筋へと触れさせる刃。その気になれば即座に首を撥ね飛ばせる。

「貴様の達者な口先に免じて、最後に申し開きの機会をくれてやろう。わしにこの首を撥ねる事を思い止まらせてみせよ。その命を惜しむに足る何か、持ち合わせはあるか？」

告げた言葉に嘘はない。ただ同時に、幾分かの期待も混じってはいた。

所詮は雑用の小者の一人でしかない。主君への不敬と手討ちにしたところで問題はないのだ。

それでもこうして機会を与えるのは、惹かれる部分がある事の証左だろう。果たして何を言い出すのかと、楽しみにする感情があるのは否定できない。

無論、裁定を緩めるつもりはない。目を掛けてやるには相応のものを發揮する必要がある。出来なければ斬り捨てる事にも迷いはなかった。

「ならば、日輪を」

「なに？」

「ここでお目零しいただ首に代わり、拙者からは日輪の光を捧げます。あまねく天下を照らす陽として、お館様のご威光となりましょうぞ」

そして小者の口より吐かれた言葉は、やはりこちらの思惑の上をいく大言だった。

「未だ拙者はさしたる得手も持たぬ小者の身。されど陽とはやがて昇るもの。必ずやご満足いただく功を為し、お館様の天頂へと駆け上りましょう」

力の緩んだ足下から振り向いて、男がこちらを見返してくる。

陽気な笑顔、真っ直ぐに前を見据えた眼差し。大言を疑わず、若い情熱に満ちた晴れ晴れとした顔がそこにはある。

瞬間、己の眼は光を幻視する。背に負った大輪、燦々たる輝きを放つ日輪の威光。陽の如く天へと昇る未来の夢想を、他ならぬ目の前の小者の男から感じたのだ。

まるで先の言霊が力を発したように、錯覚と知りながら無視も出来ない。

目の前の男はただの草履取り、粗末な格好と生傷が目立った単なる下働きに過ぎない。

語った大言など妄言の類いである。しかしそうと分かっているが

らも、それだけではない何かをこの男は感じさせるのだ。

夢想を信じず、現実のみを見据える、この己わしを。

何一つの根拠もなく、大言壮語の絵空事で、この男は説得してみせた。

「……貴様、名を申ししてみよ」

この男こそ、己に夢想を信じさせた唯一人の人物。

非情なる王道とは異なる、人と人とを結び天へと昇る絆の人道。

最下層の身分より駆け上がり、遂には日ノ本の天下を握った日輪の英雄。

この男の名は――

「――木下藤吉郎と申します！」

夢を見た。過ぎ去った時代の軌跡、その片鱗を垣間見たようだ。

魂のみが行き来する電脳世界において、魔術師ウィザードたちは夢を見ない。

そもそもS・E・R・A・P・Hに居る現状そのものが、夢を見ている状態に近いのだ。夢の中で更に夢を見るなど本来ならば有り得ない。

例外があるとすれば、契約によって接続されるサーヴァントの過去の記憶。

世界に刻まれた彼らの記録を、夢に似たカタチを取って情報流入が行われるのだ。

正しい夢の在り方である経験が生み出す夢想ではなく、過去に存在した確かな事実。アーチャーの、織田信長という英雄の持つ風景の1つなのだ。

かつての在りし日々に思いを馳せる。切り取られた一幕は、未だ届かぬ高みを目指す英傑たちの勇進だ。

英霊とは最初から完成されたカタチではない。彼らには過去があり、生前は自分たちと同様の人間である。その軌跡があればこそ、完



成した英霊としての器が形成される。

アーチャーも、登場したもう1人についても、やがて天下太平に轟く英雄として名を馳せる。その結果を知ればこそ、歩みの過程にあるであろう難関辛苦、それを乗り越えた彼らの意志に尊敬を感じずにはいられない。

甘粕正彦はそれが好きだ。いずれ大いなる光へと至る未完の灯、途上にある英雄たちの情景を計らずも堪能し、その心は感動すら覚えていた。

「心、ここに在らずじやな。らしくない風を晒しておるのう、正彦よ」銃撃の轟音と共に、アーチャーの声がそれを諫める。

彼女が見据える先に映るのは、屠られていく敵性情報体の群れだ。

ここは迷宮<sup>アリーナ</sup>。聖杯戦争も二週目の日数を数え、現在は2回戦の準備期間<sup>モラトリアム</sup>。

1回戦と同様に、マスターたちは暗号鍵<sup>トリガー</sup>を求めて迷宮へと降り立っている。それは誰一人も例外に漏れる事はなく、甘粕らもまた試験<sup>タスク</sup>に挑んでいた。

最上位の実力を持つ彼らのこと、襲いかかる情報体<sup>エネミー</sup>を問題なく蹴散らして、奥へ奥へと歩を進める。その過程はもはや消化に等しく、この段階で躓く要素があるとは思えない。

それでも、ここは戦場だ。思案に耽り上の空と、そのような無防備が許される場所ではない。

「ふむ、そう見えるのか？ 俺が戦場で緩んでいると」

「そこまでは言わぬがのう。凡百と同じく見るならば、これしきを緩みとまでは言うまい。」

じゃが、常より全霊以上を懸けて臨む男が、九分九厘の力にまで落としておれば、それも異常と言えるじやろう。つまりん手間は省いておく越した事はあるまい」

指示にも問題はなく、魔力の巡りも十分だ。常人ならば十全の調子と呼んでも過言ではない。

だが、それが甘粕正彦ならば、少々事情が異なる。十分どころか十二分にも満ち溢れた様を常態としているのが甘粕という男だ。彼に

とつての十全は、それだけで不調に該当する。

高揚が別の方向に向いている。その様は浮ついていると言わなければならない。

僅かながらに心が乱れている。脳裏には別の思案が入り込み、集中力を欠いている。今の甘粕の様子を表現するなら、そんなところだった。

「そうか。どうにもおまえに気を遣わせてしまったらしい。これは俺の落ち度だな。

なに、そう大したことはない。まだ見ぬ光たちに少々思いを馳せていただけさ」

「……ふむ、察するに、此度の対戦者の事か？ 何やら既知の相手のようじゃったが。

知己故に思うところでもあるのか？ 因縁があるならば、清算して臨むべきじゃろうが」

2 回戦へと突入し、すでに3日目となっている。

次なる対戦相手の名前も告知されたが、未だアリーナ内でも対面を果たしていない。

その名前に対し、些か趣きの異なる反応を甘粕は示していた。何処か懐かしむように、されど戦意を漲らせて対峙すべき者の名を見つめていた。

その様子からアーチャーは察していた。今回の相手は甘粕にとって知己であると。

「無論、そちらについても楽しみではあるがな、今はまた別の事だよ。この聖杯戦争には数多の時代の英霊たちが参戦している。その誰もが人類史に己の名を刻んだ勇者たちだ。そこには俺もまだ知らぬ輝きがあるのだろうと思えてな」

すでに半数が脱落してしまった事が残念でならんよ、と。甘粕は話を締め括った。

「今さら何を、そんなものは初めから分かっていた事じゃろう」

「いやなに、今朝は特に夢見が良くてな。俺も少しばかり感傷に浸っていたのだよ」

「夢？ なんじゃ、わしの過去でも垣間見たか？」

「勝手に覗き見たことを怒るかな？ 事前に許しがもらえたならそうしたが、なにせ夢だ。己で見ようか見まいかの判断は出来んのでな」  
「いや、構わぬ。今更見られて困るものでもなし。しかし何を見たのやら。ああ、言わなくとも良いぞ。単に明かされてもつまらぬしの。まずはそなた自身の所感から聞かせてみせい」

「輝きの発露、英雄という存在の日の出。人であるならば如何な英傑とて未熟な時分があり、非力な己がいる。だが真に英雄と成り得る者は、そんな中からでも己の光を打ち立てられる。」

産まれ持った権威、与えられた力、それらが如何に強大であったとしても、それだけしか持たない者は結局凡愚の群れと大差はなく、英雄の器には程遠い。

改めて、その事を認識したよ。興奮冷めやらぬという具合だ。やはり”英霊”<sup>おまえたち</sup>は素晴らしい

サーヴァントとは、すなわち英霊。人が夢見た輝きの姿。

人が示す価値を、正義を、人理を担った彼らという存在は、甘粕にとって敬うべき対象である。

たとえそれが過去の人物の再現に過ぎないとしても、そこにある意志が本物ならば敬意を表すことに躊躇いはない。偉業を成した先人の魂を、甘粕は心から尊敬していた。

通常、月の聖杯戦争を戦い抜くなら対峙するサーヴァントの数は7体。

しかし出来ることなら、より多くの英霊と、その輝きと触れ合いたい。芽生えたその感情は目的ではなく願望に近かった。

そのような甘粕の性質をアーチャーも理解してきている。だからこそ肩を並べる同胞として、その直情を諫めるための言葉をかけた。「なるほど、おまえが何を垣間見たのか、大筋のところは見えたのう。ならばわしから言う事は、そのような期待も時には過ぎたものじゃと  
言う事じゃ。」

如何にその偉業を讃えられようが、所詮はそやつらも人、この欲界の住人の一人じゃ。どれほど輝かしい陽光の価値を示したとて、い

「ずれ光とは——」

言いかけて、止まる。進めていく先に、目的とするものを発見した。ひとつ目の暗号鍵、第一暗号鍵。ブライマリトリガー 決戦に向かうため、必要な暗号鍵の1つがそこにあつた。

「……何事もなし、か。対戦者は息を潜めておるのか、それとも——」

道中にも配置されたエネミーがいるだけ。妨害らしい妨害もない。情報を納めるキューブを解錠する。展開された立方体内より現れる暗号鍵。トリガー 容易というならあまりに容易に、甘粕たちは第一の鍵を手に入れた。

——異常事態は、その瞬間に起こつた。

空間が切り替わる。今さっきまでの場所では既がない。

もはやここは敵の懐、こちらの首を刈り取るために整えられた狩猟場なのだと理解する。

「で、あるか。此度の敵は息を潜める獣ではなく、罠に嵌めて刈り取る狩人のようじゃな」

大気を包み込む濃密な殺気。

単なる気配だけのものではない。実際の空気自体にも異常をきたしている。

頭痛や眩暈、失われていく平衡感覚。その他にも次々と発生する身体異常。

即座に楯法で持ち直す。次いで解法にて事象の解析を行い、その正体を理解する。

それは、毒。大気中に散布された毒素こそがその原因。明確にこちらを害する意図を持ったそれは、敵サーヴァントによるものなのは明らかだ。

互いに臨戦体勢へと移行する。その判断はどちらも早い。

先までも浮ついた様子もすでに無い。いざ戦場へと身を置けば意識は眼前の事態へと集中した。

「支障はなからうな、正彦」

「ああ、問題ない。さほど強力な毒というわけでもないようだ。この

程度ならば俺だけでも十分に抵抗<sup>レジスト</sup>できる。だが曲がりなりにもサーヴァントの用いる毒ならば、こうして身に浸しているのは得策とは思わんがな」

毒の症状は重くない。少なくとも即座に死に至る類いではないと判断する。

むしろ特筆すべきは隠匿性か。如何なる術策を使ったのか、ここに至るまでまったくその存在に気付かせなかった事は驚異としか言い様がない。

「だからこそ即効性が薄いのだとも考えられるが、このまま放置しておけるものではない。毒は今も身体を侵し続けている。それが如何なる効果を発揮するかは未知数なのだから。」

「帰還手段も反応しない。どうやら何らかの妨害が為されているらしい。元より使えたとしても、その隙に何もないとはいえづらいが。ここまでの大仕掛けだ、様子見だけで終わらせはすまい」

「ふむ。ならば主よ、この事態を何とする？ 宣した言葉に則るならば、敵の如何なる策謀とておまえは真つ向より粉碎するのじやろう。これもまた試練として、思惑に乗せられたまま仕掛けてみるか？」

「まさか。そこまで暗愚に落ちるつもりはない。考えなしの阿呆になつた覚えは無いさ。」

これは決闘なのだからな。試練のため、時に己の利さえ捨てる事にも躊躇いはないが、勝負の趨勢を決めるのはあくまで互いの采配であるべきだ。いらん有利を与える気は毛頭ない。

奇策は使わん。だがこちらから奇策に嵌つてやる義理もない。やるのなら徹頭徹尾、自らの知謀でやつてもらわねばな」

こうした手合いを卑劣だと批難するつもりはない。戦争なのだ。如何なる手段を用いても勝利を求めるのは当然のこと。

むしろルール破りのリスクも怯れず非情の策に打って出る気概に感心するほどだ。是非とも容赦のない策略で追い詰めてほしいものである。

だが、ならばこそこちらも容赦はしない。

あらゆる術策を想定して、全力を以て叩き潰そう。元よりそれさえ超えられない意志ごときに敗けてやるつもりは微塵もないのだ。

「仔細を任せる、アーチャー。稀代の軍略家たるその手腕、俺に見せてくれ」

「抜かしおる。策とは仕掛けて嵌めてこそその策。その仕掛けを封じた時点で、こちらの手札は半数以上を削がれたにも等しいというに。己ばかりか従者にまで試練を課そうてか」

期待を向ける甘粕の眼差し。アーチャーが漏らすのは辟易したような溜め息だ。

結局、この男にとってはノリなのだ。試練と称して自身の打つ手を制限し、その困難を喜んでいる。

通常あるべき勝算や戦略がこの男には通用しない。采配などと言つても、己に縛りをかけている時点で敵に利を与えているのは確かなのだ。

まったく、やりづらい。この男の在り方は自分のそれとは明確に異なっている。

「そのような有様ではそら、用いる手立ても頭の悪い火力万歳じやて」  
言うが早いのか、アーチャーは空間に大量の種子島を出現させる。全方位、三次元のあらゆる方面を照準に収めた、自己を中心とした銃列の陣。それらが一齐に号砲を轟かせた。

吐き出される銃弾の雨。大量の物量は嵐のごとき暴威と化して周囲を蹂躪、果断のない破壊をアーリーナにもたらした。

嵐の後に刻まれたのは、見渡す限りに広がる破壊跡。蹂躪の爪痕は確かなものとなって目視される。そこに隠されていたものも、総てが強引に浮き彫りにされた。

「さて、策とは一つきりで用いるものではない。二重三重と用意して、内一つにでも嵌れば良しとすべきもの。ただひとつのみの策に賭けるなど、博徒の熱狂とさして変わらん。

少なくともわしならば、仕掛けをひとつで済ませはせぬ。隠された罫の類いを潰すなら、結局はこういうやり方が最も手っ取り早いのである」

毒素以上に硝煙を漂わせる空間には、もはや罠の痕跡はない。

物理的な破壊で無力化できるものばかりではないかもしれないが、仕掛けた場そのものを崩された以上、その存在は浮き彫りになり機能も低下させられるだろう。

乱暴ながらも効率を求めた一手。軍略家としての彼女の思考に緩みはなかった。

「敵が動くを待つは一流の技。一流の策士とは敵を動かすものじゃ。そういう手合いを相手にし、素直な手筋を選ぶのは上手くない。ひとつひとつ可能性を潰していきながら、悠々と参るとしようかの」

歩き出すアーチャー。進行の先に対しても容赦なく破壊を撒き散らしていく。

遠慮も容赦も欠片たりとて見せず銃火の洗礼を加えていく覇軍の将。彼女の歩み行く道を喜びを浮かべて眺めながら、甘粕もその後続いた。

動き出した”獲物”を視る。研ぎ澄まされた狩人の眼は、捉えた標的の一挙一動を見逃さずに把握していた。

未だに標的がこちらに気付いた様子はない。気配察知系のスキルは無いと見て良いだろう。

先ほどの掃射による処理には内心舌打ちしていた。ああいう対処をされると、地形に張るタイプの罠はほぼ潰されたと見て間違いない。

あくまで目視からの印象だが、あのサーヴァントには自分と同質の気配を感じていた。名誉や誇り、尋常な決闘といった価値観を持たず、非道の策でも実利を得る事を優先する。

同類だからこそ、手の内も読まれてくる。策に嵌めるためには相手の先手を取らなければならない。その先読みが、あのサーヴァントだ

と難しい。正直に言えば苦手な相手だった。

やはり厄介だ、1回戦の時のように上手くはいくまい。

サーヴァントもそうだが、何よりあのマスターが問題だ。人間だとは信じ難いほどの性能<sup>スペック</sup>。下手な戦い方でやり合えば英霊の自分とて討ち取られかねない。

あの組合せに限り、マスターという足枷が機能していない。自分のように闇討ち狙いのサーヴァントにとって、これほどに厄介なものではなかった。

そうした此度の対戦相手の戦力を改めて鑑み、この方策は間違いではないと再度確信する。

あれらを相手に正面決戦は無謀だ。<sup>モラトリアム</sup>準備期間中の暗殺か、そうでなくとも最低限戦力を削り落としていかなければ勝機はない。

そのための準備は行ってきた。先回りして工作を行い、既に多数の罠を迷宮内に張り巡らせてある。わざわざ最深部の暗号鍵<sup>トリガー</sup>取得まで待ったのだ、この好機は逃せない。

賛美されるやり方ではないのは分かっている。こういう己の性質が、英霊としての格を落としているという事も重々理解している。

それでも、勝つためならばこれしかない。たとえ納得されなくても、自分にはこのやり方しかない。それを弁えているからこそその闇討ちなのだ。

自らの陣営の勝利を目指す最上の一手として、見えない衣に包まれた襲撃者は行動を開始した。

罠の巣窟と化している迷宮を、<sup>アーリーナ</sup>アーチャーと甘粕は悠然と進んでいく。

互いにダメージの跡は無い。仕掛けられた罠のどれもが彼らに傷を負わせられずに終わっていた。



周囲を見渡せば、そこにあるのは銃火による弾痕に染め上げられたアリーナの姿。

ほとんど無差別破壊にも等しい有様だったが、張本人にそれを気に掛ける様子は見られない。

元より壊して困るといっわけでもない。そもそも壊れている箇所自体が、あくまで表面上の構造体に過ぎない。サーヴァント同士の戦闘を行うための場が、これしきの雑多な攻撃程度でどうにかなるはずもなかった。

捲り上げられるのは表層のみ。だからこそ、この破壊には意義がある。深層になればなるほどに構造体の情報強度は上がる。罨などの外部からの細工なら、やはり表層部分に仕掛けられる事になるのだ。気掛かりとなるのは、やはり毒の方だ。

今のところ異常は起きていない。問題なく抵抗<sup>レジスト</sup>できている。

むしろ奇妙なのがその点だ。仮にも英霊の力によるものが、こうも容易く防げるとは考え辛い。

空气中に滞留する毒素を完全に遮断する手段はない。幾分かは体内に混じっているし、僅かながらの影響も出ている。今は無視できる範囲だが、放置しておけるものではない。

「さて、アーチャー。改めて問うが、おまえはこの相手をどう見る？」  
現状を認識しながら、甘粕は共に歩を進めるアーチャーへと問いを投げる。

「順当に見るなら”暗殺者<sup>アサシン</sup>”、次点で”魔術師<sup>キャスター</sup>”の仕業と見るべきじゃろうな。真名まで当たりを付けるには、流石に情報が不足しているの」

古来より、毒を用いた英霊は数多くいただろう。その毒をもって権力者を、ひいては国家の権威に仇なした暗殺者。あるいは毒で人を惑わし己の領地に迷い込ませる魔術師か。

候補と成り得る英雄は幾人もいる。共通して言えるのは、正道の英雄ではないことか。

「が、この毒と罨仕掛けの手並みは魔術師のものとは思えん。俗世を外れ神秘を尊ぶ魔術師どもにしては、特有の陰湿さが感じられん。こ

れはわしによく似た実利を求めた手合いじゃろう。

故に、わしが本命と見るのは”暗殺者”<sup>アサシン</sup>のサーヴァントじゃ。そう睨み動いておる」

魔術師という人種は、神秘の御業である己の魔術に自負を持っていてる。

まして英霊にまで至った者ならば、魔術に懸ける自尊も相当なものだろう。故にこそ、自らのやり方から外れようとは決して思わない。

それは彼らにとつての生き方にも等しい。魔術という超常を操るからこそ、魔術師は魔術そのものに縛られている。

だがこの場にある仕掛けには、そうした魔術師特有の自負が感じられない。

毒も罨も、ここにあるのは単なる手段。敵を仕留めるための道具に過ぎないと、そのような使い手の思考が見えてくる。それはアーチャーと同じ、幻想に惑わず現実を重視する在り方だった。

「ふむ、クラスについての見解は分かった。ならば”<sup>チカラ</sup>宝具”に関してはどうだ？」

「なにせ片端から潰しまわっておるからもう。罨の性質など確認のしようもない。

むしろわしとしては隠蔽の方に関心が向くな。これだけの罨を悟らせず、アーリーナ中に仕掛けた手際、何らかの隠形の宝具でなければ考えづらい。敵を探るならばそちらからだと思えるがの」

未だに実像が見えてこない襲撃者。敵についての論議を交わしていく内に、2人は広く開けた空間に辿り着く。そこにあったものに、2人は否応なしに注視させられた。

樹木だった。空間の中心、アーリーナに根を張って一本の樹木が生えている。アーリーナの外観から外れた植物的な構造体は、本来ならば有り得ない異物である。

そして毒素の濃度も、ここまでとは比較にならないほど強い。もはや隠そうとすらしておらず、この樹木こそが毒の発生源であるのは明白だった。

「木、か。それとも森か。それ由来の毒の使い手となれば、その名も絞

れてこよう。

境界の基点としては随分と分かりやすい。これも誘いと見るべきじゃろうな」

眩きながら、背にする空間に出現させる種子島。並べられた銃列が先の樹木へと狙いをつけた。

「で、正彦よ。そなたはどう考えておる？ この問いを投げたということは、そなた自身の考えもあるのじゃろう。そなたの眼から、この相手はどれと見える？」

掃射の寸前、投げかけられたアーチャーからの問いに、甘粕の脳裏には1人の男が思い浮かぶ。

ムーンセルにより選定される英霊とは、召喚主であるマスターの性質と近い者、あるいは相性が良い者が選ばれるという。絶対とは言えないだろうが、主従には共通する何かがあるのだ。

甘粕は知っている。己が戦うことになるマスターの来歴、その血と硝煙に満ちた行程を。”あの男”ならば、なるほどこうした英霊が喚ばれる事にも納得がいく。

英雄の正道から外れた非道、魔術師らしからぬ実利を求めた術策も当然のものだ。幾多の鉄火の戦場を渡り歩いた者にとって、これこそが戦いの現実と呼べるものなのだから。

ならばこそ、自分が戦うに足る価値がある。

かつて受けた痛手を思い出し、不思議な予感を以て甘粕は答えた。

「<sup>アーチャー</sup>狙撃手」

——そして訪れた好機を、彼は逃す事なく狙い定めた。

弓につがえる矢。慣れ親しんだ得物の感触は、己が何者なのかを思い出させる。

そのクラスはアーチャー。不可視の中に隠れ潜む者の正体は、剣も

槍も届かぬ間合いより敵を射殺す弓兵である。

見えざる先から毒と罾と張り巡らせ、動きを封じた上で必殺の一矢を見舞う。弓兵の中でも全うなものではなく、性質だけで問うならば”暗殺者”の方が適格だろう。

弓兵は理解している。自らが弱兵である事を。

地の果てまでも届かせる射程は無い。放たれた矢が敵を何処までも追い詰める秘儀も無い。如何なる肉も鎧も射ち貫く威力など持ち合わせない。

能力値は平均台、宝具のランクは下位に当たる。英霊としての格を問うなら、はつきり弱いときえ断言できる。間違つても己の武威を頼みにして、真つ向勝負で勝ち抜ける大英雄の類いではない。

必殺必中など夢のまた夢、自分の弓にそんな力はない。あるのは狡い手段で嵌めて射るだけの、寒々しくて泣けてきそうな現実論だけだ。

それでも、この得物こそが自分という英霊の”宝具”なのだ。

数多の騎士を、勇猛を謳う豪傑を、侵攻する軍団さえも、この弓を頼りに仕留めてきた。

築いた伝説は嘘じゃない。卑劣外道であるのは百も承知、だからこそ必殺足り得る手段となる。

仕込みは済んだ、勝算はある。

手にするのは緑色の石弓<sup>クロスボウ</sup>。腕に直接備え付ける形の小さな弓は、英霊の武具というには何とも心もとない。

だがそれも、条件さえ整ったなら宝具の名に相応しい力を発揮する。そして状況は、既にその条件を満たしていた。

勝利への覚悟を込めて、彼は引き絞られた弦を解き放った。

開始される一斉射。殺到する無数の銃火が樹木を蹂躪する。

それを耐え凌げる強度はない。銃弾に容赦なく穿たれて、樹木は残骸と化して崩れ落ちた。

その直後を狙われる。攻撃後に発生する弛緩、刹那の間隙を捉えて一本の矢が飛来した。

音もなく、気配もない。一切の存在を殺した一矢は、紛れもない奇襲の一撃。

長い射程よりも短距離での暗殺に特化した一矢は、威力も速度も伴わない。人からすれば絶技でも、英霊としては凡夫の芸だ。

故にこそ不意打ちが前提となる。体勢の硬直、意識の間隙、それらを捉えた静かなる狙撃は、弓兵の英霊が放つに足る必殺必中の一矢となる。

だが裏を返すなら、それは真に不意をついた奇襲でなければ通用しない事も意味する。

乱世を生き抜いた革新の王。数多の殺意に狙われ続けた生涯は、その経験と共に有り様として五体の隅々にまで刻まれた。

狙うべき機はいつか、警戒すべき刻はどこか。暗技を用いる襲撃者と同様に、彼女もまた闇の心得を熟知していた。

抜刀しながらの剣撃一閃。剣士の技であらずとも、戦場にて練磨された剣理は大将首を容易く獲らせる事を良しとはしない。

飛来した一矢は跳ね返されて、何にも届かず無に消える。まさしく予見した通りの結果に、アーチャーはほくそ笑んだ。

されど、それで終わらぬからこそ弓の英霊の技。

初撃の一矢の陰、引き寄せた意識の死角に潜み、本命たる第二の矢が現れる。

その標的はアーチャーではない。その傍らに立つマスター、甘粕正彦に二の矢は飛来した。

聖杯戦争の渦中において、マスターとは同胞であると同時に足枷だ。

英霊であるサーヴァントと、魔術師とはいえ所詮人間に過ぎないマスター。どちらがより倒しやすいかは議論を待つまでもない。そしてマスターとサーヴァントは一蓮托生。

主従にとってマスターとは弱点である。人と英霊の格差が厳然と存在する以上、それは常識にも等しい。マスター狙いは、聖杯戦争セオリーの常道と呼べる戦術だった。

ならばこそ、この場においてその理は適用されない。

常識を覆す者、人と英霊の格差さえ飛び越える稀代の益羅男、並の人間と同じ計りに乗せられないのは道理である。それが甘粕正彦である限り、弱点とはなり得ない。

自身へと迫る二の矢に甘粕は反応する。抜き放った軍刀を振るい、英霊の放った矢を超絶の技量で叩き落とした。

陽動の一の矢、本命の二の矢。

主従の両者を狙った奇襲は失敗に終わる。アーチャー、甘粕、標的は共に健在。

そして、その代償は安いものではない。未だ見抜かれない隠形という利点、存在を把握されていない襲撃者側のアドバンテージは狙撃を行なった時点で無に帰った。

無論、狙撃した射手とていつまでも同じ位置には留まっていない。不可視の衣は解かれておらず、その姿を視認する事は今も不可能。正確に標的を定められるわけではなかった。

しかし、ここに立つアーチャーは射手に非ず、銃火の物量を以て進軍する将である。

火縄銃列、並び立つ銃口より放たれる一斉砲火。

その総数を更に増した大火線は、標的の視認の有無など関係ない。圧倒的な物量より繰り出される銃弾の雨は点ではなく面を穿つ。

碎かれる地形、破壊と共に轟音が鳴り響く。降り注がれた弾幕により、周囲ごと巻き込んで起こされる大規模破壊。狙われた範囲は悉くが蹂躪された。

「――手応えはあれど、浅し。退き際に抜け目なしか。見事じゃが、いよいよ正道とは縁遠いな」

砲火の後の破壊跡に敵の射手の姿は見えない。

目には見えずとも居た事は間違いない。降り注がれる銃火の中、漏れ出た敵の気配を確かに感じ取った。

また同時に仕留めたとも見做さない。歴戦に磨かれた戦術眼は、相手の撤退を見抜いていた。

「是非もなし。晒した手筋は多く、仕掛けの労苦を考えれば悪くあるまい。出来れば資格好も目に入れておきたかったが、無傷の成果ならば上々かのう」

罨や毒などの手段を得手とし、隠形を可能とする宝具を持ち、木か森に由来する伝承を出自とする、弓使いのサーヴァント。

これだけの『情報』があれば候補もだいぶ絞り込める。确实だとはいえないだろうが、その戦い方や宝具の性能を知れたのは小さなものではない。

初戦の小競り合いの成果としては悪くない。滑り出しとしては上々である、アーチャーは自陣の優位を確信していた。

故に必然、そこに生まれるのは僅かな緩み。それは歴戦の勇者とて例外ではない。

どれだけ精神を鉄としようと、終わりと感じた心には安堵が生じる。終わった物事に対して人は警戒を下げるのだ。

敵は退き、趨勢を見れば事実上の勝利と呼べる結果。まだ序盤で慢心は禁物だと分かっているが、この場に限っては終わったものとアーチャーも甘粕も判断した。

まさしくその間隙について、真に秘蔵された“三の矢”が襲いかかった。

「うぐ、ああ……？」

気配なく、音もない。それどころか衝撃すら僅かなもの。

襲った矢の正体は、腕に刺さった小さな棘。サーヴァントはおろか人間さえ殺せない代物だ。

だというのに、膝をつく。猛悪な不調の数々が、甘粕正彦の身に発生していた。

鈍痛、倦怠と嘔吐感。その他様々な毒の症状が湯水の如く湧き上がり、その勢いは留まるどころか増すばかりだ。

抵抗はしているのだ。この毒が先の棘によるものならば、相応の対処を即座に行っている。

だが、止められない。身体の各所で連鎖する毒性は、ただ新たに発生したと見るには多彩すぎる。まるで潜伏を経た数多の毒が、何かを切っ掛けとして一斉に発症したかのように。

直感する。己は対処を間違えた。

単に矢から与えられる毒ではない。その効果の真髄は別にあるのだと理解した。

「正彦!? くっ、隠者風情が、このわしを出し抜くとは味な真似をしてくれる!」

屈辱を滲ませアーチャーが睨むのは、先ほどに破壊した樹木の残骸だ。

毒の発生源と目された敵の仕掛け、故に放置するという選択はなく、破壊を仕掛ける瞬間を狙った奇襲からも囷としての役割を担っていたと判断できた。

だからこそ、これは既に終わった仕掛け。そう信じ込ませたが故の油断、心理に生じた死角を突いた最後の仕掛け、第三の矢を避ける事はできなかつた。

「動けるな、正彦。これしきで終わるそなたではあるまい。そんな事はわしが許さぬ」

「……ああ、当然だ。終わってたまるものかよ。まさしくここからの奮起こそ、俺が望んでいる事だろう。倒れてなどいられるか」

結果を見るなら、両者共に痛み分け。互いに手の内を晒し、手傷を負わされた。

やはり尋常な敵などいない。この聖杯戦争に集った者たちは、誰もがその胸に強い意志を携えた勇士である。1回目の戦いを経た今、その傾向は益々強まっているだろう。

受けた毒は軽くない。立ち上がる事さえ苦痛なほどだ。不覚と感じていないわけではない。だがそれ以上に気概は熱く燃え上がっている。

「むしろこの辛苦を喜ぼう。やはり今回の相手は強者だ。俺にとっての試練に足る。それを乗り越えて、俺は新たなる輝きを掴もう。俺の信念に従ってな」



二の足で立ち上がる。毒の不調は全身に響いているが、全て気合で抑え込む。

これこそ甘粕正彦の真骨頂。理屈を無視し、道理を無理でこじ開ける意志が生み出す底力。毒のひとつで立ち止まるほど、その信念は柔ではない。

歩みを踏む様には不調など感じさせない力強さに満ちている。アーチャーを伴い、敵手の消えたアリーナより彼らは悠然と去っていく。

そうする甘粕の心中には、受ける辛苦以上の高揚の炎が灯っていた。

「――施術、終了。出来る限りの処置は終わりました」

校舎内の保健室。参戦者たちが利用できる治療施設、そのベッドで眠る甘粕を指して健康管理AIであるカレンは告げた。

「概念は不浄の誘発。対象となった者の体内にある毒素を瞬間的に増幅させて、その効果を流出させる。単体としては毒性はなく、威力にも特筆するものはないわね」

「それ故にそのものは魔力も薄く、威力を求める必要がないために針のような細かいものでも十分な効果が期待できるか。隠者風情が、まことにしてくれるわ」

今回の相手の策略を改めて思い知り、アーチャーは舌打ちした。

全てが術中、結果を見れば敵の敷いた策の通りに事は進んだ。

始まりの切欠となった毒の結界。あれの発動からしても策略の内であったのだろうか。

それ単体で仕留めるつもりはなく、防がれても問題はなかった。広範囲に散布された毒素は強力な効果こそ発揮はせずとも滞留だけは続ける。

僅かでも服毒させれば、矢の一撃が致命傷となる。数多にあった罫も、本命となる一撃を隠しおおすためのもの。毒の存在だけを警戒させないための策だった。

初めからそういう効果だと知っていれば、毒に対する徹底した対策を取っただろう。さしたる強さはなく、容易く抵抗できる程度であったから優先順位を下げてしまったのだ。

結果、最後の最後で痛手を負った。

戦術の性質といい、宝具を本来のカタチから加工して躊躇なく使用した手際といい、やはり今回の相手は真つ当な英霊といえるものではない。

「体内の毒素の洗浄は完了しています。これ以上の悪化はありません。ですが、曲がりなりにも英霊の持つ宝具です。侵された概念を取り除く事は如何ともし難いわね。特に起点となった右腕には、色濃く症状が残り続けるでしょう」

「で、あるか。この場で完治には至らぬ、と？」

「大本の宝具を破却しない限りは、効果を消し去る事は出来ません。宝具級の毒素とはそういうものです。これを治療するだけの権限を私は持ち合わせません」

右腕の麻痺。事実上の利き腕機能の喪失、それが甘粕の受けた損失だ。

現状では完治は出来ない。効果の原因となった宝具を破却しない限り毒素は消えないのだ。

それは即ち敵サーヴァントの打倒と同義となる。この2回戦を勝ち上がるまで、甘粕の右腕が癒されることはない。

「じゃが、調べた事ならば仔細も知れよう。その毒の詳細な由来、名前さえ明かさぬつもりか？」

「当然でしょう。健康管理AIとしての責務ならば既に果たしています。この先はあなた方次第です。私は中立であり、決してどちらかの味方ではないのですから」

傷つき患った者を治療する。それがこの保健室の存在意義。

甘粕を治療したように、来れば相手側の者も同じように治療する。

聖杯戦争に参加する総ての者に公平な回復ポイントだ。

彼女は中立、ただ一方のみに利する結果となる行為はしない。

戦いの趨勢を決めるのは当事者であるマスター同士。彼女自身の口から必要以上の情報が明かされる事はない。聖杯戦争を司るムーンセルの公平性とはそういうものだ。

「我々は聖杯戦争を管理し、運営する者です。参加者すべてに公平であり、戦いの妨げとなる事はありません。それこそがこの月であなた方に課せられた試練なのですから」

「強者も弱者も問わずにか。能力に劣る者にも与えられた救済措置こそそなたらではないのか？」

「弱者が不遇に甘んずるのは当然のこと。むしろ弱さを理由に優遇を得るなど、善行を履き違えた詭弁でしょう。脆弱なら脆弱なりに、苦しみ足掻きながらも考え抜いて、願いのためにと相手を追い落としても進みなさい。その苦悶と葛藤は悪いものではありませんから」

「……歪みを抱えておるのは人格そのものか。ムーンセルも難儀な個性を据え置いたものじゃ」

とはいえ、ここまで徹底するのはAIとしての役割よりも、パーソナリティ特有の性質といった意味合いが強い。与えられたカレンという人格が持つ、命を優先せず試練を良しとする性質。

嗜虐的ともいえるAIらしからぬ笑みを見せるカレンに、アーチャーは嘆息して告げた。

「そもそも弱さの論理に問うのなら、あなたたちに資格はないでしょう。すでにバイタルはほぼ正常。起点となった箇所以外は全て完治。普通はこんなに上手くはいかないものなのだけどね。まったく、思考が筋肉の人は霊子構造まで頑丈なのかしら」

「無論、人の意志は肉体の限界をも超越し得る。魂、精神とより密接な霊子の体ならば、むしろ当然だと俺は答えよう」

カレンの言葉に、はつきりと意識を持った声が答える。

答えた声の主は甘粕正彦。覚醒を果たした彼は、変わらぬ壮健さで身を起こした。

「……可愛くないわね。症状の残り香程度はあるでしょうに。素直に

苦しんでみせるのも愛嬌ではなくて?」

「あいにくとそんな暇はない。これほどに滾るのは久方ぶりだ。苦痛になど構っていられんよ。」

勝敗を決めるのは俺たち次第。ああ、まったくその通りだ。ならばこそ音を上げてはいられんだろう。鬪争という試練を良しとする、おまえの在り方には共感するよ」

「一緒にしないでもらえますか。不愉快だし、暑苦しいわ」

心底不本意だといった様子で、カレンは言い捨てた。

「まあ今さらそなたの精神論に物申すつもりはないが、大事はなからうな、正彦。捨て身の決意など、所詮は槍玉に挙げられたが故の価値じゃ。我が身を省みれん者に大業は果たせぬぞ」

「履き違えてはいないさ。意地にも使い時というものがある。思考を捨てた愚図に成り下がるつもりはない。」

そこの保険医殿の腕は確かだよ。試練とは、全霊を尽くして挑むからこそ意義がある。片手落ちのまま済ませてはつまらない。その意味を、彼女という人格は理解している」

「そなたの場合、それは本当に分かっているであろうな。ならば何も言うまい。して、それほどに死力を尽くすべき試練であれば、既に掴んでおる事柄もあるのじゃろう?」

それこそ当然だと言わんばかりに、甘粕は笑う。

毒矢をその身に受けて、痛手も負って、それで何もなしで済ませるほど甘粕という男は甘くない。

「——イチイの毒、かな?」

科学的な観点では、アルカロイドの一種であるタキシンが持つ有毒性。また魔術的な観点からも、イチイの樹には冥界に通じるとされる伝承がある。毒性の宝具と化すには十分だな

俺の解法で全てを解析できたわけではないが、ここまでの情報でも十分だ。森に関わる伝承を持ち、正攻法ならざる姿なき弓兵<sup>アーチャー</sup>。顔なき王の化身とされ、民衆のため圧政者に立ち向かった義賊、シャーウッドの森の狩人が真名だろう」

「ふむ、真名まで晒したか。傷の対価としては、まあ妥当というところ

かのう」

「無論、これだけで慢心するつもりもないがな。名は所詮、名でしかない。勝敗が決まるわけでもなく、思索を止めずに臨んでいかなければな。」

戦いの主力はサーヴァント、マスターの腕一本を封じたからと、大した成果とは言えん。これしきで緩める相手ではない。まだまだ序盤だ、勝負はこれからだろう」

「……やはり此度の相手、そなたにとって相当の因縁がある相手と見える。地上での知古であろうが、あの小娘と同じ類いか？」

「そんなところだ。もつとも凜の場合とは事情も立場も大分違うのだがな。現に俺は、”あの男”とは今までまともに話をした事もない。正真正銘、対面はこの月が初めてとなるだろう」

苦境の中でこそ燃え上がる意志の炎。甘粕の見せる感情の熱は明らかに対戦相手へと向けられている。

元より敵に対しても友誼にも似た期待を向ける甘粕であるが、見ず知らずの相手というには感情の初期値が高すぎる。彼の異質な性質を鑑みても不可解だろう。

「そう複雑な因縁があるわけではない。互いの立場を考えれば至極真つ当とさえ言えるだろうさ。俺は西欧財閥に反抗する解放戦線<sup>レジスタンス</sup>であり、彼は財閥所属の国に仕える軍人だった。関係性など語るまでもなく1つしかあるまい」

語っていく中で言葉には熱がこもっていく。平凡のように語りながら、特別な感情がそこにあるのは明白だった。

甘粕正彦は試練を愛する。それこそが人を強く、素晴らしい輝きに練磨するのだと信じている。ならば彼が抱く期待とは、より困難な、尋常ならざる相手に向けたものに他ならない。

「優秀な軍人だよ。そして狙撃手である。奴の放った銃弾が、俺に死というものを間近に感じさせた。それまでの生涯で、あれほどの衝撃は他になかった」

「狙撃、つまりは闇討ちか。なるほど、此度のサーヴァントと似通う性質らしいのう」

「ああ。俺も若く、まだ未熟な時分だったが、それを言い訳にはすまない。奴は強かで、老獺であり、故に俺よりも優っていたのだという事。その事実だけが、かつて倒れたあの日にはあった。

だから楽しみで仕方ないのだよ。かつて敗北した相手を前に、今の俺が打ち勝って己の成長を証明する。俺としては胸躍らずにはいられん」

激贄は評価の表れだ。己にとっての難敵だった者を、甘粕正彦は心から歓待している。

在りし日の敗北も怯えるようなものではない。価値があるのは常勝無敗ではなく、敗北を糧とし己を奮起させられる意志の強さである。

死に瀕する経験も、甘粕にとつては勝利の糧と同様だ。殺し合う敵の脅威に敬意を払い、その上で打ち勝とうと燃える意気も、彼の中では不思議なものでも何でもない。

「今回の手練手管もまた見事だよ。どうやら良き同胞に恵まれたと見える。ならばこそ俺も、戦う甲斐があるというものだ」

方向性は問わない。要求するのは認めるに値する強さのみ。手段の是非など端から問題にもしていない。

むしろだからこそ気概は熱を帯びるのだ。敵が強く、老獺で油断ならぬと信じるからこそ、踏破した時には新たな輝きが得られるのだと確信している。

意志を奉じる益荒男が表すのは、かつての難敵へと向ける期待と戦意。

相手は歴戦を重ねた鋼の軍人。手段を卑劣だと非難するつもりは毛頭なく、それでこそ鉄血の意志だと認めてさえいる。

まだ見ぬ対戦者にも不安はない。強者と信じる相手の事を不足に思うなどあり得なかった。

——だからこそ、新たに姿を現したその人物は、甘粕にとって意外なものだった。

例えるなら、それは深い年輪を重ねた大樹。

長い年月をかけて大地に根ざし、揺るぎない芯の強さを持った老年の風格。

髪と髭は混じりけ無しの白に染まり、顔にも体にも”古い”が目立つが、決して”衰え”は感じさせない。心身に刻まれたその年季こそが、彼という人間の強さの骨子なのだと思う。

歴戦の軍人、厳格な騎士。その男が入室しただけで、保健室には厳かで静謐な空気が満ちる。それほどに彼の振る舞いに不義はなく、敬うべき礼節があった。

「……ダン・ブラックモア」

2回戦の対戦相手、名をダン・ブラックモア。

整然たる老騎士、未だ揺るがぬ戦士の姿がそこにはあった。

「お初にお目に掛かる、甘粕正彦殿。こうして直に顔を合わせるのは初めてになるだろうか」

「そうだな。気軽に名乗り合える間柄でもない。まともな対面など、地上では望むべくもなかったろうよ」

西欧財閥の一角を担う国の軍人と、それに反抗する解放戦線<sup>レジスタンス</sup>。

地上での互いの立場は明確な敵対関係である。幻想の過ぎ去った現代の戦場において、呑気に語らいが出来る機会など訪れるものではない。

「だからこそ解せんな、ブラックモア卿。貴方との邂逅は決戦の日だとばかり思っていたが、まさかそちらから俺の前に姿を現すとはな」  
「無論、わしもそのつもりだった。我らは互いに戦士としてこの月に立っている。余分な馴れ合いなど無用のものであり、来たる日に剣を交じえるのみの仲であると。」

——だが、手にあるべき我が”剣”が、信義に悖る行いをしたとあつては見過ごせん」

そう言う老騎士は、敵である甘粕に対し深々と頭を下げてみせた。

「サーヴァントの行いを謝罪する。従者の独走を防げなかったのは、マスターであるわしの責任だ。公正たるルールが敷かれたこの場で、

先のような襲撃はわしの本意ではない」

「これはこれは異な事じや。よもや仕掛け側であるそちらから、かような申し出があろうとはな」

ダンの謝罪の言葉に、真つ先に食いついてみせたのはアーチャーだった。

「だが、それだけでは無価値である。事を起こした後で、詫びの1つきりが対価とは何とも軽い。それで済んでは道理も通るまいが」

「承知している。非はごこちらにあるのだ、言葉だけでは何を言おうと言いつにしかなるまい。故にごこちらには、相応の代償を支払う準備がある」

静かにそう宣して、ダンは令呪の刻まれた右手を掲げてみせた。

「イチイの矢の元となった宝具を破却する。それで残された毒素も完全に消滅するだろう。」

同時に、令呪を用いてサーヴァントの行動に制約を課そう。それを以て償いとさせていたきたい」

「ほう」

その申し出は、あまりと言えばあまりに馬鹿げた行動だった。

宝具の1つを放棄するばかりか、替えの効かない令呪を使って自身の行動を制限させる。敵である者からすれば、余りにも都合が良い条件である。

そのような申し出を口にして、それでも目の前の老騎士に気負いはない。淡然と佇むその姿からは、敗北の悲愴など微塵も感じさせない。

これだけの不利を己に課しながら、この老騎士は勝つつもりなのだ。あたかも試練の困難を良しとする、甘粕正彦と同じように。

だからこそ、興味も沸いてくる。答えるアーチャーの声には、明らかな関心が灯っていた。

「おいおいおいッ!? ダンナ、正気か? いくら何でもそりやねえだろ!」

むしろ、先に動揺に見せたのは従者の方であった。

霊体化を解き実体となるサーヴァント。緑衣を纏った素朴ながら



も端正なこの青年こそが、ダン・ブラックモアが契約した英霊だろう。「……口出しは無用だ。予めそう申し付けていたはずだぞ、アーチャー」

「ああそうでしょうねえ、俺だってわざわざ敵の前に姿を晒すなんて真似したくなかったつすよ。」

けど流石にこっちも見過ごせねえよ。今のアンタがしてるのは自殺行為だ。自分から負けに行ってると思えないってー！」

「自ら死に向かうような真似はしない。己の生に真摯である事は、あらゆる生命に課せられた義務であり責任だ。その責務を放棄するつもりはなく、わしは自身に懸けて勝利する覚悟だ。」

だがそれも人としての尊厳を保つての事だ。この戦場にはルールがある。互いが自身の祈りのために死合う中、人たる者の矜持を失わぬためにあるルールだ。

制約の縫い目を搔い潜り、死肉を漁る禿鷹の如く相手を出し抜くためのものでは断じてない」

「ルール、ルールねえ、そりゃあルール守って勝てるってんなら俺だってそうしたいつすよ。けどねえ、あいにくとアンタが契約した英霊はそうじゃねえ。掟破りの手でも使つていかないと勝ちなんておぼつかねえ、そういう類いのサーヴァントなんすよ」

「理解している。それこそが貴君という英雄にとつての在り方であるとは。これがおまえのための戦いであるならば、わしもこのように口出しする事はなかつただろう。」

しかしこれはわしの戦いだ。貴君に対し負けられぬ戦いを強いるつもりはない。もはや泥に塗れても勝てと、おまえに強制させるものは何もないのだ」

客観的に見て、道理があるのはサーヴァントの方だろう。

聖杯戦争は命を賭けた生存競争。勝利のためならば時に道義に反してでも敵を討つべしとするのは、この戦いに臨む者にとっての正しい姿とも言える。

サーヴァントの戦力に無用の負担をかけ、騎士道という精神論で勝率をあえて下げる。そのようなダンの主張こそマスターとして不適

格とも呼べるものだ。

だが、単に不適格なだけでは終わらない。それほどにダンの発する言葉には芯があった。

堂々と毅然として、己の信条に迷いはなく、ダン・ブラックモアの意志は強い。その意志力によって貫かれる騎士道は、軽薄な否定など物ともしない。

真に正しい道理を、ただ真つ直ぐと貫く事。言葉にするのは容易く、だが実践する事は困難極まる。その姿勢こそが彼の言葉を戯言ではなく、確たる説得力のあるものに変えていた。

「守られる保証のない騎士道。枷としか思えぬ精神論かもしれんが、故にそれを貫く事に意義がある。それこそが人を正道の元に踏み留めるものであるからだ。

国と国ではなく、人と人の戦いならばこそ、修羅より人に戻す術は大義ではなく信義なのだ。わしのサーヴァントである以上、おまえもまた騎士として振舞ってもらおう」

令呪を持つ右手が向けられる。三画のみの絶対命令権、それを自らの英霊を縛るために。

魔力が集中し、刻まれた紋様が輝き始める。如何なる奇跡をも可能とする言霊が、ダンの口より放たれようとして、

「——いや、それは待っていたきたい。騎士<sup>サー</sup>・ブラックモア」  
そこに甘粕が待ったをかける。

己にとっては利にしかならない事態にも歓迎を示さず、決定的な行動が下される前に制止した。

「貴公の信条はよく分かった。なるほど、見事な覚悟の意志と称賛しよう。

だが、その代償に宝具と令呪とはやり過ぎだ。そこまでされては俺の方こそ心苦しい」

「……どうあれサーヴァントを諫め切れなかったのはわしの責任だ。わし自身の自戒のためにも、この我が儘をどうか見逃していただきたい  
い」

「我が儘と言うならば、それこそ俺の感情も察していただきたいな。

そうして実力を削ぎ落とされた貴方と対峙せねばならぬ俺の思い、腕の不調程度では到底釣り合わんよ。

令呪による制約など必要ない。何よりその信念こそが、破られる事のない戒めの証明になると信じよう。腕一つの引き換えというなら、それくらいが妥当なところだろう」

「……承知した。貴君の公正さと寛大さに、心よりの感謝と敬意を表する」

甘粕の申し出に、偽りなく誠実な礼を尽くして、ダンは了承の意を表した。

「我らはこれより死闘を演じる身だ。尊重や敬意などと嘯くのもおかしいだろうが、互いに覚悟を持って臨む者として、せめて人たる尊厳を持った決闘である事を願っている」

そうと告げて、踵を返す。そこから先はもはや振り返る事はしない。

逝った通り、余分な馴れ合いは不要という事だろう。戦いに臨むダン・ブラックモアの意志は、やはり頑い。

緑衣のサーヴァントもまた、主に従い実体を解く。

向けられる視線には含む思いもあるようだったが、これ以上場を乱そうという意思もないらしい。少なくとも制約の件は免れたのだから、彼からすれば妥当なところだろう。

主従は大人しく去り、保健室は元々の面々だけが残された。

「くく、愉快じゃのう。拘り、情け、未練、激情、こうした人の感情こそが、戦にアヤをつける。全てが全て道理のままに進むならば、世の物事など始まる前に終わっておるわ」

笑みを漏らすアーチャー。その笑いは嘲笑か、あるいは別の何かか。

裏切り、下克上こそが習いだった戦国の世。その時代を生き抜いたアーチャーにとって、ダンの掲げる騎士道には思うところもあるのだろう。

「しかし見込みが外れたのう、正彦。あれはそなたの目算とは違うものじゃ。そなたが望む類いのものとは、あの老兵は無縁であろうよ」

「……そうだな、分かっている。確かに俺の期待は的はずれだったよ  
うだ」

アーチャーの告げる否定の言葉に、甘粕も頷いた。

「ダン・ブラックモアは強い。その精神に偽りはなく、揺らぎもない。  
彼の覚悟は極まって、もはや甘いという非難さえも上滑りだ。それだ  
けの意志が、あの男の中には完成されている。」

まあ、それはそれで素晴らしい輝きではあるのは間違いないのだろ  
うがな」

老騎士の信念は、もはや生き様そのものと呼ぶに等しい。

揺るがず曲がらず、たとえ死に瀕したとしても、ダン・ブラックモ  
アは変わるまい。

己に恥じぬよう、堂々たる信義を貫き、奉じる勝利を手に入れる。  
迷い無きその覚悟は、1回戦の間憫愼二などとは比較ならない強度を  
誇るだろう。

そう、ダン・ブラックモアは強い。故に、彼にはその先が存在しな  
いのだ。

「老境の歩みは深く、故に変動はないか。悲しいな、かつて強敵と仰ぎ  
見た男の衰えてしまった姿を見るのは。ああ、虚しさで俺は泣けてし  
まうよ」

声に込められるのは失望、そして興ざめか。

引いていく内なる熱、躍動していた魂の停滞を感じながら、甘粕は  
その眼差しを向けていた。

## 2回戦：求めるもの

各マスターの組に与えられる固有のマイルーム。

主従らにとつて最も安全が保障される場所に戻つて、ようやく彼は口を開けた。

「なあ、ダンナ。悪いが、今回ばかりはダンナの注文には従えねえよ」  
ダン・ブラックモアのサーヴァント。緑衣を纏つたもう一騎のアーチャー。

その来歴を知るマスターからすれば、サーヴァントの不満も当然だと納得できるものだった。

「ダンナがそういう人だつてのは、もう十分に分かつてるよ。ああ、俺だつて多少ならそういうノリに付き合つてもいいって思つてたさ。

けどなあ、ダンナにだつて分かるだろ。あいつらは段違いだ。俺みたいなのが、まともにやり合つてどうにかなる相手じゃないんだよ」  
森に潜んで、罨を巡らし、王の軍勢と戦つた隠者の英雄。

その戦いの本領はゲリラ戦だ。術策を用いて敵の戦力を削り落とすのが本来の戦い方である。

保有スキル『破壊工作』。高いランクであるほどに正道の英雄から遠ざかる、そのスキルを最高ランクで持つ彼は、初めから邪道の手段でこそ戦うべき英霊なのだ。

「汚いやり方だつてのは重々承知だけどさ。本領封じてどうなるもんじやないだろう。強敵相手の時にまで騎士道精神持ち出さんでもいいでしょうが」

好青年の風貌に憤りを滲ませて、詰問するアーチャー。不本意な制限を加えられる彼にとつて、その主張は真つ当なものだ

対する老騎士もまた譲らない。まるで吹いても倒れぬ柳のように、アーチャーの気迫にも動じることなく静かな口調で返答した。

「方針に変更はない。おまえ本来の戦術は用いずに、純然たる武技でもって臨んでもらいたい」

「ダンナ!?!」

「強い、弱いの問題ではないのだ。大切なのは相手に対する敬意であり、悪意ではなく祈りのために戦う者同士としての礼節なのだよ。たとえ相手が強者で、また手段を選ばぬ卑劣漢であったとしても、方針を違える事はない。それで邪道を選ぶのなら、同じ汚泥に染まるのと同義だ。」

騎士道とは、他者に示すものではなく、正しい道に自らを律するためにある。一度その有り様を定めたのなら、最期の刻まで貫かなければ意味はないのだ」

発する言葉に迷いはない。劣勢の中にあっても、ダン・ブラックモアは決めた道を譲らない。

アーチャーが如何に勝負の理を説こうとも、目指すものが違うならば意味はない。己に恥じぬ栄光の勝利を求めるダンに、アーチャーのやり方はあまりにも食い違っている。

「アーチャー。聖杯におまえ個人としての願いはないという言葉、二言はないかね？」

「あ、ああ。まあ俺なんて生前から二枚目だけが取り柄のケチなはぐれ者でしたから。聖杯なんて大袈裟なもんを使って叶えるような願いは持ち合わせないっすよ」

「そうか。ならばやはりわしの方針に従ってもらおう。これがわしの戦いである以上、おまえの流儀を認めるわけにはいかん」

「……どうしても、俺のやり方は受け入れられないってわけっすか？」  
「窮屈な思いをさせているのは理解している。これでは我々の勝算が低いこともな。」

甘粕正彦はハーウェイの少年王とも並び称される傑物だ。恐らくは、最も聖杯に近い者の1人だろう。即興ウイザードの魔術師である老骨と比べて、戦力に差があるのは自明の理だ。

これがもし軍務であれば、わしもおまえのやり方を採用したとも。故国のため何としてでも勝利を得なければならんならば、我が身を鉄の銃身として非情のままに徹しただろう。

だがこれは違う。この戦いはわしにとって久方ぶり、いや初めてと言っているプライベートな戦いだ。軍人としてではない、わしという

個人としての戦いを全うしたいのだよ」

「分かんねえっすよ。ダンナ、アンタは御国の連中に言われてこの月に来たんだろ。それこそまさに故国のための軍務つてやつなんじゃないすか？」

「確かに、わしは女王陛下の勅命を受けて、この戦場に立った。栄えある聖杯探求の任をわしのような老兵に任せてくださったのだ。ご期待には必ずや報いねばならん。」

だが、聖杯の獲得が国家の意思であるかと問えば、必ずしもそうではない。その辺りの事情はいささか複雑であるのだがな」

要領を得ないダンの言葉に、アーチャーは疑問符を浮かべる。そんなアーチャーに頷いて、ダンも更に言葉を続けた。

「この戦いの名目は、西欧財閥内におけるハーウェイの専横を防ぐためだ。主要国家のひとつとして、その威信を内外へと知らしめるためにな」

「要は利権争いってやつでしょ。いつの時代でも偉い人が考える事は一緒みたいっすね」

月の聖杯、ムーンセル・オートマトン。それは地上の如何なる権利にも勝る力だ。

ハーウェイの次期当主であるレオがそれを手にすれば、ハーウェイの権威は絶対的なものとなる。同時に、聖杯さえあれば今からでも、あらゆる情勢を覆す事が可能だ。

その利権の規模は計り知れない。国家さえもタガを外す価値が聖杯にはある。

「しかしだ、アーチャーよ。女王陛下は本気で西欧の覇者の座を欲しておられるわけではない。ハーウェイとの衝突など心から望んでいないわけでもないだろう」

「そりやまたどういわけ？ こうしてダンナを送り込んでるってことは、要するに下克上狙いってわけじゃないんすか？」

「そうした思想は確かに根強い。かつての大英帝国、過去の栄華を再び我が手にとりう者はな。事実、現在の同盟体制が陛下の本意ではないという風聞も、真実の一部ではあるのだろう。」

だがな、思慮ある者ならば今の社会を崩してまで支配権を得ようとする者はそうおらん。西欧財閥の掲げる管理構造を否定するような真似はな」

それは何処か嘆くように、現在の世界の有り様をダンは語った。「資源の枯渇、経済の衰退、出生率の減少。算出される統計は、否応なしに現実を認めさせる。もはや取り返しのきく領域ではなく、世界は緩やかな破滅へと向かっているのだと。

未来の見えない現状に、為政者たちもまた胸中の不安を隠せずにした。これといった方策も取れぬまま、只々秩序を維持しながらも国体は痩せ干そろえていく。実情を目の当たりにする陰鬱は、民のそれの比ではなかつただろう」

世界は衰退し、未来に希望はない。それこそがこの世界のまぎれもない現状だ。

何かの問題を起こしたわけではない。何をせずとも数値は右肩下がりに減少する。

それに対し出来るのは、その進行を遅らせる事のみ。目に見える原因のない問題は、根本的な解決策を提示することも出来ないままに今日へと至っている。

「そんな時だ。当時から世界規模の経済機構だった西欧財閥より、現社会の管理計画が提示されたのは。大災害後から初とっていい具体的な対処計画に、多くの国々が賛同したものだ。

皮肉ではあるが、追い詰められた現状こそが各国の結束を強固なものにしたのだろう」

緩やかなる破滅に対し、西欧財閥の出した解答とは世界の寿命を引き伸ばすこと。

混乱の中で発展は不要であり、残されたあらゆる資源の管理の下、真なる秩序によって人類を導く。提唱されたその理論に、多くの国々が虜となった。

経済競争を推進するのではない。全ては管理され、より広い範囲をカバーするように配分される。独走による浪費は一切許されない。発展を廃した延命措置だ。



進退極まっていた小国にとって、また遠からずの衰退化が明白だった大国にとつても、西欧財閥の管理社会は渡りに船といえるものだった。

「分かるかね？　もはや覇道の果てにあるのは栄光ではなく、困窮する世界の負債なのだ。支配の玉座に旨みはない。その責任から逃れるために、現在の管理社会を受け入れたとも言えるのだからな」

「まあ、王様の冠がとんだ貧乏くじだったのは分かりましたけどね。そうなるか？　最初の問題がおかしくありませんか？　下克上しても損を引くだけなら、どうしてダンナは送られたんすか？」

「そこが国家というものの複雑さだな。女王陛下個人としては、現在の英国の待遇に満足してはおられないかもしれん。だが同時に、現状の社会を覆してまで権勢を得たいとは考えていまい。」

そして言ったように、思想には様々な側面がある。ハーウェイ家の増長を危惧する事や、これを好機と捉える見方もあるのだ。

手立ての無さは惰弱の証明となる。指導者の弱腰は非難の対象だ。望む望まざるとに関わらず、上に立つ者は行動を示さなくてはならないのだよ」

「なんともまた、宮仕えってのはいつの時代も面倒なもので」  
人が集い従うのは、権威の下であるからだ。

力であれ高潔さであれ、集団を率いるための求心力がなければ人は付いてこない。それが例え建前のようなものだとしても、人々が納得するに足る何かが必要だ。

「故に私が選ばれたのだ。女王きつての懐刀、騎士の称号を受けし『歴戦の勇士ダン・ブラックモア』ならば、”本気”と示すには十分な広告だろう。」

そうして態度を明確としておけば、後々政争の布石とも成り得る。結局のところ国の威信というものは、何をやってみせたかにより決定するのだからな。

無論、本当に聖杯を獲得したとしても、それに越した事はない。こうして聖杯の力の一端を知るだけでも、この月にはそれだけの価値があるのは明白なのだ」

聖杯戦争にかける期待あくまで保険にすぎない。本命は女王の示すべき権威、力強い指導者の意志を表すための象徴としての役割だ。

ハーウェイの少年王、解放戦線レジスタンスの英雄らが世界の覇権を競う戦場に前に、指を咥えて見ているだけなど許されない。英国の誇る騎士であるダン・ブラックモアもまたそこに赴き戦っている、その事実がある時点で、ある意味目的は果たされているとも言えるのだ。

まだ英国は終わっていない。かつての帝国の力は健在であると、そう内外に知らしめるために、老騎士はこの戦いに臨んでいるとも言えるのだから。

「……ダンナ。率直に言うんだけどさ、アンタって相当な貧乏くじを掴んだんじゃないの？」

ダンの語った背景に対し、アーチャーが持ったのはそんな感想。

呆れ混じりのアーチャーの指摘に、ダンは思わず破顔していた。

「そう言ってくれるな。だからこそ、わしも国事ではなく私事としての戦いに赴けるのだから。」

それにだ、アーチャー。これは女王陛下がわしの願いを汲み取ってくれた結果でもあるのだよ」

それは皮肉ではなく、心からの感謝と敬意を抱いて、老騎士は自らの裡を語ってみせた。

「わしは軍人として生きてきた。国のため、捧げた忠誠に懸けて、私を投げ打ち尽くしてきた。それを間違いだとは思わない。取り零したものは多く、非道にこの手を染めましたが、大義の下に戦ったという自負はある。」

だが長い軍務を終えて、いざ銃を置いて市政に下りてみれば、わしに居場所などは無かった。当然だな、大義のためとあらゆるものを蔑ろにした男に、それ以外の処方が分かるはずがない。

結局わしは、戦士としての己にしか生きる術を見いだせない男のようだ」

長く過酷な軍人としての道。その行程をダンはずみ続けた。

その過程に置き忘れたものがある。軍人ではない人生、人としてあるべき幸福が、彼の歩みの中には存在しなかった。

結末とは、過程の果てにある産物だ。歩んだ軌跡がある以上、どんな後悔も無意味である。それが長い道のりであればあるほど、人は歩き方を変えられない。

「女王陛下より賜った聖杯探求の拝命は、わしにとって天恵とも思えたよ。」

とうに忘れ去られた魔術回路まじゅうのうを呼び起こすのも、老骨の身には堪えるものがあつたが苦ではなかつた。むしろやり場を得たと心身に活力が戻ってきたくらいだ。

軍規に律され戦い続けた軍人が、最後に己の祈りのために戦う機会を得たのだ。ならばこそ、この戦いだけは軍人ではなく、騎士としての戦いに殉じたい」

後悔という轍の中に咲いた、一抹の願い。

その道が血の代償を避けられない以上、せめて在り方だけは恥じない道を。

戦う中にも人たる者の尊厳と敬意を。現在では忘れ去られた、かつての時代に存在した騎士道精神。柵の奥にしまっていたそれを、最後に老騎士は持ち出した。

「結果こそ全てとする考えもあるだろう。だがわしはそうは思わない。手段を違えて得た結果は、初志にあつた祈りを歪めたものにならないと思っている。」

如何にその願いが尊くとも、悪徳と後悔に塗れた道では穢れを帯びるのだ。真に求めた願いを手にするには、何より己に恥じない道でなければならぬ。

特にこの戦いは、わしにとって過去の禊ぎの意味も含んでいる。”  
彼、とのこの2回戦、勝算は低いと自覚しても尚、わしは騎士たる己で臨まねばならぬ」

「ああ、そういやお相手さんとは地上で敵同士だったんでしたっけ。因縁っていうと、いわゆるライバルみたいなの？」

「いいや。言葉を交わした事はおろか、戦場で直接顔を合わせる機会もなかつた。因縁と呼ぶのなら、それはわしが一方的に持っているものとなる。」

アーチャーよ。狙撃手<sup>スナイパー</sup>たる者の何たるか、おまえには無用の説法かもしれないが」

「いや、そいつはどうすかね。そりゃ弓は使いますけど、生前は毒やら罠でのハメ殺しがメインだったんで。真つ当な狙撃って意味なら、むしろダンナの方が詳しいんじゃないかな」

ダン・ブラックモアは歴戦を重ねた狙撃兵だ。

狙撃の条件とは多岐に渡る。地形の立地、標的の行動、また背景にある政治的な事情など、それらの僅かな差異が狙撃条件を大きく左右する。

並の鍛え方で務まるものではない。1キロ以上の距離を匍匐前進で走破し狙撃を行うことも日常茶飯事である。その心技体には相応の強度が求められる。

特殊性を帯びた数多くの任務を成功させたダンは、世界でも屈指の狙撃手<sup>スナイパー</sup>”である。

こと経験の観点に限れば、若くして生を終えた英霊のそれをも凌駕し得る。

「ある任務での事だ。反抗勢力の一派、その頭目とされる人物の狙撃を行う事となった。司令部の合図と共に狙撃は即座に実行されなければならず、わしは別命あるまで標的を監視し続けた。

……標的である反抗勢力の頭目の名は、甘粕正彦といった」

狙撃手<sup>スナイパー</sup>の任務とは、単に標的を狙撃するばかりとは限らない。

条件が整うまでの間、時には何日も、スコープ越しに標的となる人物を観察する事もある。

その私生活、人柄や友人、家族たち。全てを見届けた上で引き金を引く事にもなるのだ。

必然として、そこには情が生まれる。

相手も同じ人間だと、その認識を確かに持つて事に当たらなければならぬ。

「その若い統率者は、公正な男だった。こうした反乱分子に有りがちな恐怖支配にも走らず、理性と精神の高潔を以て集団の秩序を保っていた。

若いながらも優れた能力を持ち、何よりその行動には情熱と未来があった。何故人々が彼に従うのか、それをよく理解させられる光景だったよ。

いふなれば、彼は本気なのだろうな。己自身の確かな意志で、覚悟を持ちながら行うからこそ、その行動は眩しく見える。わしにとつてもそれは例外ではなかった」

「ダンナ、そいつは……！」

「アーチャー。わしもまた古い時代を生きた人間だ。管理を受け入れ安寧にただ浸る今の社会に、思うところもあるのだよ」

真に清廉で、情熱を持つ人物だからこそ、甘粕正彦という人間は眩しく映る。

善性の質を持ち、強く雄々しく揺るがない。益羅男たる姿は敬意を抱くに値するものだ。

「彼の姿を目にしていく内、わしの中に迷いが生じた。これが本当に正しいことか。この尊敬に値する若者を、ただ国のためと死なせて良いのか。彼こそ人としての正しい姿ではないかとな」

人には心がある。その心こそが人を迷わせる。

あらゆる理屈が、時に心の存在によって狂わされる。ただ、目に見える相手を助けたいと願う感情。その嘆願は届かないものでは決してない。

我も人、彼も人であるのなら、命じる者もまた人である。ならば心からの思いが込められた嘆願が、無意味なものであるはずがなかった。

——だが、そうだとしても。

「……けど、さ。それでもダンナは撃つたんだろ？」

「そうだ。わしは人である前に軍人だった。軍人に私としての情など不要。指令が下ったその瞬間、わしは血の通わぬ銃身に戻っていた」感情に左右され、引き金を躊躇うのなら、それは一流とは呼べない。感情と引き金を冷徹に引き離す事が出来てこそ、真の“狙撃手”<sup>スナイパー</sup>である。

「わしに迷いはなかった。引き金を引く瞬間、わしは軍人という一個

の鹵車に徹していた。標的を射抜くイメージを、はつきりと思い描く事さえ出来た。

だが、結果は失敗だった。弾丸は標的を掠めるだけに終わった。仕留められるはずだったものが、何故か失敗したのだ」

「仕損じたってことつすか？」

「誓って言うが、わしにミスはなかった。己にやれる事を十二分にやった。今もそう断言できる。」

外れたのは運だったのか、それとも相手が何かを感じたのか、あるいは天の采配が彼を生かしたのか。今もって答えは分からない。それを知るためには、彼という男と直に対峙せねばならんのだろう。軍人ではなく、今度こそ一人の人間としてな」

月に臨むダン・ブラックモアは、軍人ではなく騎士である。

軍人であれば非情にもなれただろう。故国の御旗の下、責務の重みを知るからこそ勝利のみに徹してきたのがこれまでの人生だ。

しかし今は違う。背負っているのは己の祈り、その価値を決められるのも己自身だ。

それを穢れた妄執に墮すのも己次第。故に恥じる事なき高潔な決闘を。そうしてこそ初めて、自らの祈りに対して真摯である。

たとえその敵が強大で、このままでは勝算が低いとしても。相手が敬意を払うべき英傑であれば尚の事、己もまた騎士たる身に在るべき姿勢で臨まねばならない。

「わしは断じて敗けるつもりはない。如何に尋常ならざる相手でも勝利する覚悟だ。」

だが、アーチャーよ。その決闘は公正なものでなければならぬ。ルールを違えての闇討ちなどで得た勝利では意味がないのだ。

良いな？　これが最後だ。わしのサーヴァントである以上、おまえにも騎士の振る舞いで臨んでもらう」

実利でも、執着でもない。胸に抱いた祈りに誠実であるために、ダン・ブラックモアの戦いは存在する。その信念を貫く覚悟を、老騎士は確固として決めていた。

そんな老騎士の意志を説き伏せるだけの言葉を、アーチャーは持ち

合わせていなかった。

月見原学園は、聖杯戦争のために用意された舞台だ。

平穏という日常と、戦いという非日常。2つの生活を両立する口ケーション。

校内を彩るNPCと、それに混ざるマスターたち。目に映るその風景は確かに平穏と見えた。

「平穏ねえ。そんなもん、こうやって背後取れてる時点であるわけないってのに。ムーンセルも、いい趣味してやがるよ」

校舎屋上、そこにアーチャーの姿がある。

学園内のほぼ全域を見渡せるポイント。鷹の目を持つアーチャーのクラスであれば、校舎外が出ている人物全てを標的にできる。

「つうかあり得ねえよな、ほんと。俺に騎士の真似事なんて、手足縛って戦えって言うようなもんだつつうの。物事には適材適所つてのがあるでしようが。」

マスターとサーヴァントつて、確か性質合ってる奴同士が選ばれるんだろ。これって選考ミスつてやつじゃないのか、ムーンセルさんよ」

1回戦を経て、一度目の死線を潜った事で、遊び気分だった参加者たちにも覚悟が生まれている。

これが真正正銘の殺し合いだと理解して、相応の心構えに変わってきている。自分が殺されるかもしれないと、誰もが警戒と緊張を含んで臨んでいた。

それでも、アーチャーから見ればまだ甘い。不意を打てそうな輩は幾らでもいた。

空手のまま、構えを取る。森の陰から敵を射殺す、いつもの時と同じように。

標的と見据えるのは、マスターと思しき1人の女生徒。

見れば見るほど容易い部類だ。表情には戸惑いと怖れの色が滲み出ている。戦場などとは縁遠い、人の良さそうな雰囲気少女だ。的てられる。サーヴァント次第でもあるが、恐らく狙撃は成功するだろう。やろうと思えば今すぐにでも、あの命を終わらせられる。

——相手の弱さ、人の良さにつけこんで、だ。

「ああくそ、俺だつて何も好き好んでこういうやり方やってるわけじゃねえんだけどさ！」

森の技に長け、緑衣を纏ったアーチャーの真名は、ロビン・フッド。イギリスの民衆に伝わる英雄。人々のため、顔を隠して素性を隠して、圧政者の軍に対抗した義賊。その森の狩人こそが彼の正体だ。

アーチャーの歩んだ来歴は、華々しい英雄譚とは程遠い。

神の加護もなく、一騎当千の武勇も持ち合わせない。そんな彼が軍勢を相手取るために用いたのは、誇りを棄てた非情の戦法だ。

地形に紛れ、毒を盛り、戦意を失った相手をも背中から射殺した。傷付いた敵兵を利用して、助けに駆け付けた他の敵を罠にかけるなど造作もない。

身内に累が及ぶのを恐れ、民にも己の名を明かさなかった彼は、あるべき賛辞も受けられないまま、陰となって孤独な戦いを続けた。

圧政者の軍とはいえ、兵の全てが悪人であるはずがない。

中には良い人物だった。高潔な騎士として好感が持てる者も珍しくなかったろう。

それを利用した。人の良さはこちらとしても好都合。そういう者こそ策略に嵌ってくれる。

義務を果たすべく鍛錬に励んできたであろう騎士を、その剣を振るう機会も与えずに騙し討った。他所の土地の、各々事情があるだろう兵士たちを、毒を盛つて一網打尽にした。顔のない隠者として、戦死の名誉という救いさえも与えなかった。

そうしなければ戦えなかったというのは簡単だ。そして同時に、そんなものはいかに過ぎないことも。そうした手段を用いて戦うことを決心したのは、他でもない自分自身なのだから。



そんな孤高の義賊の結末は、ある意味で相応のものだろう。

顔を隠し、姿を隠し、個を捨てて正義を成した森の狩人は、あらゆる者の敵となつて独りきりのまま凶弾に倒れた。劇的なものではなく、名前さえ残さなかつた青年の奮闘は、『ロビン・フッド』という伝承を構成する1つとなり、その魂を英霊に昇華させた。

疲弊する民草の祈りを受けて、彼らのためにと奮闘する義賊の伝承。数多いるロビン・フッドなる英霊の1人として。そこに1人の青年の個性など何の意味もなさない。

そんなものが欲しかったわけではない。記号のような英雄の名など願ひ下げだ。

マスターの言うことだつて理解できる。頑なな否定は、心底にある憧憬の裏返しだ。そう出来たらどれだけ良いかと、憧れる気持ちがないわけではない。

ここに守るべき民はいない。ならばマスターの言うように、生前のやり方になど縛られず、騎士道精神というのをやってみるのも悪くないのではとも思う。

「……けど、それでもだよ。ダンナ、俺は——」

言いかけた瞬間、アーチャーの思考が切り替わる。

立ち上る気配。他を圧して憚らない暴威の波動が、場の空気を変貌させる。

もはやこの屋上は、物思いに耽れる場所ではない。一切の油断も許されない、ともすれば戦場にも等しい空間に置き換わつたのだと感じ取つた。

爛々と示してみせる威圧、この気配の主には覚えがある。

密かな闘志を滾らせて、アーチャーは静かに相手の出方を窺つた。

「——安寧と闘争。心情を介さぬムーンセルは、それら二種の狭間で揺蕩う人を見るため、聖杯戦争の舞台を築いたという。この2つを別種と断じて扱うのが、いかにも数理でしか物を見れぬムーンセルらしい判断じゃ」

やはり、違う。自分と同質のものを持ちながら、これは真逆の性質だ。

実利に重きを置きながら、自己を顕示する欲望を隠そうともしない。ただ強欲なのではなく、そうした感情の動きまでも計算に入れて理に変えている。

直感として理解する。この相手とは求めているものが違う。たとえ過程に似通うものがあるうとも、行き着く結末が異なるから分かり合えない。

そのように直感しながら、アーチャーは声の方へと振り向いた。「安寧と闘争は切り離すべきものではない。いつの世も、如何なる場所でも、この二種は混在しておる。一種のみなど有りはせん、あるのは比重の差異だけじゃ。」

わしや、貴様のような者には特にのう。そうは思わぬか？　なあ、

”義賊”よ”

緑衣を纏った森の”狩人”<sup>アーチャー</sup>とは異なる、軍装に身を包んだ乱世の”軍将”<sup>アーチャー</sup>。

この2回戦の対戦相手、来たる決闘の日に対決する二騎の弓兵が向かい合った。

校舎裏に設置された教会にて、ダン・ブラックモアは祈りを捧げていた。

ここはムーンセルにより構築される擬似世界。

存在するのは再現された情報体に過ぎず、信仰の対象とするには不適格と言えるかもしれない。

そんな理屈も考えないわけではない。だがそれも、彼にとっては祈りの妨げとは成り得るものではなかった。

世界より魔力を消失させた『大崩壊』<sup>ポータルソフト</sup>以来、教会の権威は衰退の一途を辿っている。

神秘が消え失せて、理論と実証のもとに管理される今の世界におい

ては、宗教という概念自体の価値が薄れているためだろう。

未だ強い影響力こそ維持しているものの、それも権謀術数を駆使した上での話である。社会より確かな安定をもたらされる人々は、もはや祈るといふ行為を必要とはしていない。

ダンは敬虔な信徒である。その現状に思うところがないわけではない。

それでも彼自身にとっての祈りの価値が損なわれる事はない。その意義は彼の中で明確に定められている。

老騎士にとって、祈りとは希うものではなく、自己に課すもの。

そも宗教とは、人々の在るべき生き方を教義で以て導くものだ。過去の時代における教育とは、即ち神を知る事と同義である

人としての道徳を学び、正しい生の有り様を理解して自戒するため、大いなる存在に対して祈りを捧げる。何かを求めて願うのではなく、心の豊かさを育むために祈るのだ。

権勢など無用のもの。主の实在証明さえ、子らである自分たちには不要である。何故なら信じようとする行為そのものに意義がある。实在が証明できなければ信じる事も出来ないなど、そちらの方がよほど不純だろう。

たとえ命を奪う事を生業とする軍人だとしても、否、軍人だからこそ、自らを人に引き戻すために祈りという行為は必要である。

この月でもそれは変わらない。願いのために決闘に臨む騎士として、自らに課した誇りを忘れないために。

「誇り、か。アーチャーならば何を馬鹿など憤るのだろうか」

生前のアーチャーの伝承は知っている。そこに誇りなど介在する余地が無かった事も。

軍隊を相手にしての孤軍奮闘。やり方に拘ってなどはいられない。その厳しさと苦しみは、自分の経験してきたそれとは比較にもならないだろう。

理解はしているのだ、そんなアーチャーに正面からの戦いを強いる事が、如何な愚行か。

森の隠者たる英霊に、この戦法はもはや手足をもがれるに等しい。

非道を責めるなど筋違いでしかないだろう。

アーチャーの言い分こそ正しい。勝ちを目指すなら彼本来の奇襲を主とする戦略に切り替えるべきだ。今のままでは敗けに向かっているのと大差はない。

そもそもだ、果たして自分に騎士の誇りなどと口に出す資格があるのか。

自分は軍人だ。”騎士”の称号を受けてはいても、騎士ではない。軍務として人道に悖る行いにも手を染めてきた。アーチャーを非難する資格など最初からありはしない。

個人としての戦いだと、そんな理屈を盾にして古黷た騎士道を持ち出すなど、単なる自己欺瞞に他ならない。戦いにおける礼節などと、今さらどの口が言っているのか。

アーチャーの言い分は正論だ。自身が矛盾していると自覚もある。それでも尚、流儀に拘る意義があるのか。その疑問は今も胸中に燻ったままだ。

——だが、それでも必要なのだ。自分にとっても、恐らくアーチャーにとっても。

サーヴァントと、召喚主たるマスターには、性質に何処か通じたものがあるという。

軍人として国家のために尽くしたダンと、義賊として民のために戦ったアーチャー。一見すればその立場は正反対のものに思える。

しかし、ダンは確信していた。アーチャーは自分と同じものを抱えている。手にする事が出来なかった英雄としての誉れに焦がれていると。

皮肉な言動を取っているが、その実、アーチャーの性質は善良だ。口先の悪さや世を斜めに見る厭世観も、根にある善性を覆い隠すためのものだろう。

彼は手段として非道を用いるが、その手段を好んでいるわけでは決してない。そんな自らの卑劣さに後ろめたさを感じているからこそ、

アーチャーは自ら誇りを遠ざける。

それは諦観にも似ている。自分にはそんなものを手にする資格はないと、最初から誇りを抱く事を放棄しているように見えた。

なるほど、アーチャーは自分と似ている。望む在り方がありながら、それを自身の生き方には出来なかつた。

かつて取り零したものを取り戻す。これが過去の未練のための戦いならば、アーチャー自身にとってもそうあるべきだ。

後悔を繰り返してはならない。それこそが恐らく、アーチャーにとつての未練であり、この現世に懸けるべき願いだらう。

国のためでも、民のためでもなく、ただ己自身のための戦いを。

誇りとは、自らのために背負うもの。道を誤らないために、何よりも己の祈りを穢さないためにも、それを放棄する事はあつてはならない。

「……さて、お待たせしてしまったかね？」

祈りと思考を終えて立ち上がる。出入口の扉の方へと振り返ってダンは声をかけた。

「ふうん、流石ね。歴戦の勇士は伊達じゃないって事かしら」

声に対して返答し、扉を開いて現れたのは、遠坂凜。

感心してみせながらも油断は見せない。戦場に立つ者として、十分な心得を持った少女。そんな彼女の視線を受けながら、老騎士は動じることなく答えてみせた。

「配慮には感謝しよう。これは習慣だね。祈りの最中に他人の干渉を受けるのは好ましくない。こうして終えるまで、わざわざ気配を消していくくれた事は好感を持てる」

「とつくに気づいてたつてわけ。これでもそれなりの自信はあつただけど、私もまだまだか」

「焦る事はない。これは単に経験の問題だよ。凡庸な才覚でも年季を経れば、目端だけでは見えないものも見えてくる。それだけの差に過ぎない。」

君ほどの素質の持ち主ならば、すぐにでもわしを超えられるだろう」

「褒め言葉として受け取っておくわ。尤も、この月にいる以上は、どんな才能があったって宝の持ち腐れだけどね。今すぐ使えない能力に意味はないわ」

論戦というほどの激しさもない、他愛のない会話。

無論、両者は理解している。これは前置きだ。本題に入る前の、会話の主導権を握っていくための牽制でしかない。

弁舌のみでの明確な優劣は見えてこない。それを互いに承知して、両者は本題を切り出した。

「それで何用かね、遠坂凜。互いの立場を考えると、あまり用件が思い付かないのだが」

「そうね、騎士・ブラックモア。あなただけじゃなく他の誰も、ここでは自分以外は全員が敵だもの。私も馴れ合いをするつもりはないわ。

けど、無関係の対戦でも好カードの組合せなら、後々のためにも気にかけるのは当然でしょう。特に優勝候補と目される実力者同士の間決なんてのはね」

「ふむ、なるほど。甘粕正彦と君は同胞だったな。かつての仲間を案じての敵情視察、というところかね？」

「冗談でしょ。彼を案じる必要なんてないわ。むしろ期待してるくらいなんだもの。あなたならもしかしたら、甘粕に勝てるかもしれないって」

「そうか。いや、この場にいる時点で必然だったが、やはり君たちは道を違えたのか。西欧財閥に対抗する勢力の象徴とも呼ばれた2人が……」

「何も話すつもりはないわ。私は甘粕を止める。それだけが答えよ」

「そうだな、詮索はすまい。君たちの関係に、他人が立ち入る余地はなさそうだからな」

凜の、ダンを見る目は険しい。

挑みかかるようなその視線は、どこか計っているようでもある。

英国に仕える騎士であり軍人、ダン・ブラックモア。

その実力は確かなものであり、ムーンセルからも優勝候補の1人と

認識されるほどだ。

歴戦を重ねた老騎士の事は、同じ参戦者として凜も承知している。その上で彼女は、ダンの力に対して明確な疑念を向けていた。

「随分と紳士的なね。聞いていた評判とは印象が違いわ。もっと冷徹な軍人のイメージがあった。少なくとも、人情で戦い方を決めるような事はしないだろうって。」

人としてはそれで正しいでしょうし、好感だつて持てるけど、強度で見たらどうなのかしら？」

「これは、対戦相手でもない者の事を、よく見ているようだ」

「聞いているわよ。長い軍歴を経て、”騎士”の称号まで得た英国女王の懐刀。あなたの戦闘者としての実力こそ疑っていないけど、魔術師としてのあなたは急造のマスターではない。」

女王の勅命を受けて、あなたは一年の期間でムーンセルに挑める霊子ハツカーになった。それだけでも大したものだけど、純粋な魔術師としての力量は平均値を超えないわ」

ダン・ブラツクモアは遅咲きの魔術師だ。

信仰にあつく、国家に忠義を尽くす事を誉れとするその生涯で、身に流れる魔術師の血は忌むべきものでしかなかった。

『魔術回路』は開花する事なく老年に至り、今回の聖杯戦争を切欠にようやく日の目を見たのだ。

軍歴は長くとも、魔術師としての経歴は短い。必然、獲得できるスキルも限定される。

魔術師としてのダンは、あくまで最低限の力を持つだけで、決して凡庸の域を出ていなかった。

「ムーンセルがあなたの勝算を認めるのも、魔術師じゃなく、戦闘者としての力量を鑑みての事でしょう。本来の戦術を放棄するなら、そんなの勝負を捨ててるのと同じじゃない。」

あなたにどんな事情があるのかは知らないけど、そういうのって心の贅肉じゃない？」

「……ふむ。察するに、だ」

厳しく突き放すようなその物言いに、どこか暖かみのある声音でダ

ンは答えた。

「君は、敗北に向かうわしを案じて、放置できず助言をしに来たというわけかな？」

「はあ!? 何よそれ、私にとってもあなたは敵なのよ。するにしても、戦略絡みの駆け引きだけよ」

「そうだな。額面通りではなく、思惑は様々にあるのだろう。しかし行動の根底にあるのはそうした感情だと思えたのだがね。

あなたは清廉な性根の持ち主だ、お嬢さん。潔癖な公正さを愛し、それを実現する強さを持っている。それ故に、信条に囚われ戦いを縛るわしが、不誠実なものと映ったのだろう」

遠坂凜は全力の行いこそ尊んでいる。やるならば全身全霊、全てを懸けてやらなければ意味がないと断じていた。

いくなればダンの目指す己自身に恥じない生き方を、常に実践していると言える。卑劣さこそ持ち合わせないが、卑怯を否定する事もない。

それは自らに対する自信の表れだ。己の力を疑わないからこそ、どんな敵を前にしても臆さない。そしてあくまで己を納得させた上で、目標へ向けて手を伸ばそうとする。

彼女のそうした面こそが、ある意味で甘粕正彦と同胞だともいえるのだ。

強敵を好み、戦いに臨む意志を肯定する。信念ともいえるその行動指針は、両者どちらの信条にも芯となって根付いていた。

「あなたは心の贅肉という表現を使ったが、それは余分な心情に囚われて、行動を無益なものにする事を言うのだろう。確かに否定は出来ないし、枷となっているのは事実だろう。だが、己自身を誤らないために必要なものもあるのだよ」

「……甘粕は強いわ。勝利のための手段は肯定されるべきよ」  
「サーヴァントにも同じ事を言われた。どうやら相当にわしは耄碌して見えるらしい。」

そうだな、自分でも愚かだと自覚はある。難敵であると知りながら選択を狭め、かえって相手に利する事ばかりしている。忠告は真つ当



なものであると理解しているとも。

しかし同時に、その事を思うと妻の面影がよぎるのだよ。妻は、そんなわしを喜ぶかどうかとな」

「妻って……あなたの？　でも、あなたにそんな人は……」

「そう、こんなものは老人の昔話だ。わしに妻はいない。そう呼べる相手は、とうの昔に失った。」

軍人として生き、軍機に徹して、国家のためにと尽くした。そこに己の人生が立ち入る余地はない。それはわし自身だけでなく、連れ添う伴侶までも巻き込むものだった。

軍にいる間は、それでも自分を変える事は出来なかった。わしは何処までも軍人であり、妻との別離に際しても動揺を表にする事はなかった。結果、わしは彼女の命ばかりか、その思い出までも無くしてしまったよ。

今となっては顔も声も思い出せない。確かに愛していたはずだというのに、軍を離れて初めてそれを省みる余裕が生まれた。そして未練と、願いもまた、な」

「じゃあ、それがあなたの聖杯に懸ける願い？　英国の軍人としてじゃなくて、ダン・ブラックモア個人としての。亡くした奥さんを取り戻すために、この戦いに参加したの？」

「死者を求めるなど浅ましい行いとは分かっているがね。誇れる祈りではないだからこそ、過程の行いだけは恥とならないよう努めている。」

後悔とは、過程という轍の中に咲く花のようなものだ。歩いた軌跡に、様々と、そのしなびた実を結ばせる。後顧の憂いから自身を解放するのは、誇り足り得る矜持のみだ。

老境に至り、それらの未練を清算する機会を得た。ならば迷いもあるまい。祈りを穢さず、取り戻したのものにも恥じ入る事のないような、誇りある騎士としての己で臨むと決めた。

故に、だよ。お嬢さん。わしは惑って枷に引き摺られるのではない。この有り様こそ、わしが全霊を懸けられる道なのだ」

取り零したものを取り戻す。ダン・ブラックモアという人間が抱い

た唯一の願い。

それは未練であり、過去に縋った妄執に過ぎない。所詮、個人のみで完結する願望は、世界に何一つの貢献を果たす事なく終始するだろう。

だがそれでいい。国のため、世界のためでなく、己自身のために戦うと決めた。滅私奉公に生きた生涯の最期に抱いた、純粋な個人としての欲望。

ならばこそ、外道に身を堕とすわけにはいかない。穢れた手段で歩んだなら、この祈りは唾棄すべき醜悪な我欲へと堕ちるだろう。

誇れる道だと信じられるからこそ、自分は迷いなく戦える。ダン・ブラックモアにとっては、この騎士道に殉じる道こそ、真の意味での全力なのだ。

「……随分と話し込んでしまったな。老人になると、若者との語りばかりが楽しみとなってしまふ。おかげでつまらない話を、それこそ贅肉にしなければならないような事を語ってしまった。

話のついでに、単なる戯言と思つて聞いて欲しい。君は戦う意味を持って挑んでいるのだろう。迷いも悔いも振り切つて、先の結果と責任を受け止められる強さがある。

しかし時には、歩んできた行程を振り返つてみるといい。過ぎた事など単なる軌跡と思えるかもしれないが、あるいはそこにあるものが、最期に意志を支える楔にも成り得るのだ」

「……ええ。忠告は覚えておくわ。人生の先達の言葉として、きちんと胸に刻んでおく」

老騎士の語る教訓を、凜は決して蔑ろにはせず受け止める。才覚はともかく、過酷な生涯を送ってきた先達者として、その経験が込められた言葉は貴重な価値だろうから。

「あなたの事も分かったわ。その決意が固いものだつて事もね。他人に言われたくらいで今さら変わらないって理解した。だから、忠告のお返しにアドバイスだけしておくわ」

それでも、受け取るばかりで満足するのは遠坂凜の有り様ではない。

世の理とは等価交換。魔術も経済も、善意も悪意も、受け取ったからには同等のものを返すのが彼女の流儀。老年の見識にも負けない鋭さで、真のある提言を口にした。

「甘粕正彦は異常よ。意志の強さを愛していて、相手にも同じものを期待する。期待通りの強さを見せてくれた相手には、それに応えようと自分まで強くなるうとして、本当に実現させてしまう規格外な感情の怪物みたいな人。」

彼とはそれなりの付き合いだから、その性質の危なさはよく知っている。彼に評価されるって事は、同時に甘粕の真髓を引き出してしまふって事だから」

善悪さえ度外視する意志力の絶対値主義。意志の強さこそ主眼とする論法は、ある意味では大多数の他者においても一定の共感を得られるものだろう。

異常なのは、何処までも突き抜けている甘粕正彦の感性だ。一切の矛盾にも頓着せず、単純明快な論法のまま動いている。見ているのは強度の一点で、そこに迷いは存在しない。

人の強さを信じられて、尚且つ自らが強くなる事にも躊躇がない。所謂、馬鹿と喚ばれる類いの人種だろうが、それが全て強さに繋がっているからこそ性質が悪い。

愛すべき意志を見せられて、甘粕が示すのは期待という正の感情だ。

それは敬意であり、親愛である。およそ敵対する者に向けるものとしては不適切な、プラスへと働く感情で甘粕は戦意を高揚させる。その意志は、そのまま強さにも直結するのだ。

——ならば、その真逆、マイナスへと向いた感情ならばどうだろう。「けど、それだけじゃない。期待してる時と同じくらい、彼は失望しても怖いのだ。彼の基準で失格だと判断してしまった相手には、甘粕は何処までも冷徹に、残酷になれる」

甘粕正彦は怪物だと、そう告げた凜の人物評はこれ以上なく的確だ。

古今より、怪物という概念は醜悪さと共に壮大さの象徴である。た

とえそれが忌諱すべき概念だとしても、人はただ強大であるという理由でも憧憬の念を抱く。

意志の絶対値こそ至高と謳う価値観。ならばその理屈は甘粕自身にも適用される。正の方向か負の方向かの違いなど些細なもの、要は振り切れた際の数値こそ問題なのだ。

極端から極端に走る、善悪の基準など意に介さず、ただひたすらに巨大な意志力の魔人。

それこそが甘粕正彦という人間の本质。隣に在った者として、凜はそれをよく理解していた。

「中間を維持する事。私なりに考えて思いついた、甘粕に対しての攻略法。期待にも失望にも振り切れさせないで、真ん中で立ち回るのが甘粕にとつても力を発揮しづらい時だから。

もつとも、これはこれで難しいんだけどね。なにせ彼つて、人間が大好きだから。人の良いところを見つけようつて単純に頑張つてきた感じだから、その手の審美眼がとにかく鋭いのよ。下手な誤魔化しなんて通じないし、ぶつかればどうあれ本気でやらなきゃならない。結局、必勝法なんて言えるほどのものじゃないわ。所詮は精神論だし、あんまり意味があるわけじゃないつて自覚もしてるけど」

それでも、これで義理は果たしたと示して、凜は踵を返した。忠言はここまで。本来なら敵対すべき間柄として、この奇妙な談合に明確な一線を引く。

「甘粕は多分、あなたに容赦しない。勝利を祈ってるなんて言えないけど、それだけは心しておいて」

去りゆく彼女を引き留める言葉を、ダン・ブラックモアは持ち合わせない。

老騎士に迷いはない。この信念は正しいものだと思っている。

そんな彼にも、少女の忠言は楔のように刻まれて、その心に疑念の波紋を波立たせていた。

軍装を纏う”銃手”<sup>アーチャー</sup> に対して、緑衣の”弓兵”<sup>アーチャー</sup> が示したのは警戒だった。

見た目は奇抜な格好をする少女でしかない。一回りほど小柄な体躯は、外見だけで問うのなら大の男に比べてか弱いとさえ見えるだろう。

だが、知っている。サーヴァントとは条理では語りえない存在。見せかけの姿形などそれこそ無意味。その力は内包する幻想、神秘の度合いによって決定する。

その観点で見ると、力の差は歴然だ。片や、地平の全土を表す『天下』の概念にその手を掛け、忌むべき『魔王』の名を我が物とした大英雄。所詮、民間伝承に由来する義賊とでは、築き上げた伝説の舞台が違いすぎる。

緑衣のアーチャーは自覚している。己は弱者であると、その非力さを誰よりも理解している。故にその格差を覆すべく、いつだって狡い思考を巡らせてきた。

その卑屈さ、英雄らしからぬ狡からさは、非力の中でも考える事を止めなかつた裏返し。

驕れる強者を狩る弱者の牙。神の叡智だの賢者の見識だのと大仰なものはない、小賢しいだけの智謀こそが己の武器だと知りながら、緑衣のアーチャーは頭を回転させていく。

「そう急ぐでない。此度は戦をしに参ったわけではないぞ、義賊」  
そんな明白なほどの警戒を滲ませる緑衣のアーチャーに対し、軍装のアーチャーは何の気負いも無しにそう告げた。

「こうまで明け透けな場所で事を起こすわけにもいくまいが。すれば即座にムーンセルの眼に留まる。重罰は避けられまい。それだけの意義があるとは思えぬだろう。」

わしは単に貴様と語り合いに来ただけじゃ。裏の思惑など持ち合わせておらぬ」

「語り合いたいなあ？ 思惑なしだとか、あんたみたいなのが今さら

抜かすなっつてんだ」

「心外じゃな。今のわしには何一つの謀もないというのに。その必要もなからうしの」

彼女もまた承知している。この場は己こそ強者であると。

正面からの対決で軍装のアーチャーは緑衣のアーチャーに勝る。策謀を巡らす必要はなく、ただ勝てる状況で勝てば良い。今の彼女には、それが出来る。

「というのも、我が主殿がどうにも意気消沈しておる様子でな。わしとしても、このままでは些か張り合いがない。ならばサーヴァントは如何ほどかと、こうして足を運んだ次第じゃ」

「もう勝った気でいるのかよ。知ってるか？　そういう勝ち誇って慢心してる奴に限って、足元掬われるんだぜ」

「ほう、慢心と思うか？　これがわしの単なる驕りであると、本当にそう思うのか？」

詰問する軍装のアーチャーに、緑衣のアーチャーは押し黙る。

軍装のアーチャーの態度は、ただの傲慢ではない。緑衣のアーチャー自身がそれを裏付けていた。

「考えてもみれば、我らは同胞と言えるかもしれぬ。お互い、難儀なマスターを持ったという意味でな。合理に沿ったものもなく、ただ主の感情に付き合わされ、本来あるべき手段も取れぬ。

まこと難儀なものよ。貴様もそう思うじやろう。のう、アーチャーよ？」

「語り合いたいってのは愚痴の言い合いか？　おたくのこのマスター、色々な意味でぶっ飛んでいやがるが、ありやどうなっつてんだ。人間的に、越えちゃあならん一線を越えてねえ？」

「是非もなしよ。あれの大うつけぶりは今に始まった事ではない。あれで見所が無ければ、それこそすぐにも見限っておるところじゃ。

ならば貴様の方こそどうなのじゃ？　あの枯れた柳の如き士は、貴様を満たす主であるか？」

見透かすような眼差しで、軍装のアーチャーは嘲笑を浮かべながら言葉を投げる。

「兵でなく、私であるから、己に恥じぬ矜持を持って、と。戯れ言じやな。所詮は過去へと見返すばかりの老人の言葉に過ぎん。」

願いと、過去に求めるのではなく、未来に芽吹かせるもの。あれの祈りは死者の祈りよ。もはや生命をたぎらせる活力も、勝機を掴む執着も残ってはいまい。

あれが歩みしは敗北へと至る道じや。古錆びた矜持と心中するつもりでおる。元より敗れると分かる主君に仕えようとは、貴様も哀れな——」

「黙れよ」

その声には、明確な怒りがある。

短く、鋭く、割り込まれた緑衣のアーチャーの声に、軍装のアーチャーは沈黙する。

「ダンナがやってる事がどれだけ割に合わねえもんだろうが、それを俺たちみたいなのが貶める資格なんてねえんだよ。古臭いだの偽善だの、戦場で振りかざすもんじゃねえと言おうがな、そいつが綺麗で正しいものだってのは間違いないんだ。世を皮肉った小汚い現実論しか言えない奴が、それよりさも上等だみたいに語ってんじやねえよ。」

確かにダンナの潔癖さには付いていけねえ部分もあるがな。少なくともあんたとは違って、俺はダンナを見限る気なんてねえよ」

ダンの掲げる理念とは、自身の勝利をも危うくするものであるけれど。

それが正しいものであるのは間違いない。恥じるべきものではなく、狂気の中でも人の尊厳を守るものだ。

それを否定する事は出来ない。たとえどのような理屈があるにせよ、人々が模範とすべき在り方が間違いのはずはないのだから。

緑衣のアーチャーの怒りは、その正しさへの侮辱に対する憤りだ。騎士道の類とは縁がなく、およそ恥がないとは言い難い義賊としての生涯。そこに誇れる正義が介在する余地はなかったが、だからこそ綺麗な理念に対する憧憬がある。

所詮、英雄と喚ばれるような器ではない。そう自覚する小心者で、

善良なだけの青年は、決してそのやり方を選ばずとも、その価値だけは認めていた。

それ故に許せない。勝てないから、弱いからと、老騎士の信念を侮辱される事が。

自分とも似通った性質を持つ軍装のアーチャー。この相手がダン・ブラックモアを侮辱するのを、黙って聞いている事が我慢ならなかったのだ。

「ク、アハハハハッ！ なんじゃ貴様、よもや己に適わなかった生き様に、憧れを残しておるのか？ 愛い、愛いのう、その青さ。何ならわしが愛でてやろうか？」

仮にも英霊として理の外へと招来された者が、童のように青臭い。貴様が尋常な英雄でないのは分かっておったが、どうやらその器自体が、まず分不相応であつたと見える」

「関係ねえだろ。確かに俺は英雄なんて柄じゃねえ。器じゃないってのは誰より俺自身で自覚してんだ。だがな、だったらアンタみたいに開き直ってんのがそうだつてか？」

誇りやら人道やらに唾吐いて、卑怯でずる賢く勝つ奴が強くて偉いつてか？ そんなもんが罷り通るのが現実で、それを利用して自分に、アンタは何も思わなかつたのか？」

緑衣のアーチャーはそれを否定する。だつてそれでは余りに救いが無い。

自分にはこのやり方しか無かつたし、その選択を後悔はしていない。だが正しいものだと思つた事など一度もないのだ。

少なくとも、この軍装のアーチャーのように、臆面もなく笑つてみせる気にはならなかつた。

「そう吠えるでない。ふむ、我が道に思うことがあるか、と。ああ、勿論ないとも！」

血の非道を憂う心など、過ぎ去る道に置き捨てた。如何に外れた魔道であれ、わしがこれと選んだのならは是非もあるまい。この道こそが我が王道、我が覇道である。

こんなものは英雄であれば自然な事よ。光に焦がれるのではない、



焦がれる光こそが英雄じゃ。どのようなものであれ、これと貫く姿こそ人の夢想する憧憬の象徴となる。

世をあまねく照らし出せれば、光の性質など問われぬものじゃ」

対し、軍装のアーチャーが告げるのは唯我の王道だ。

彼女は省みない。血塗られた行程を、非道に染めた己の卑劣を、あ  
るがままに受け入れている。

乱世の中、群雄割拠を生き抜いた革新の王。古きを廃するその道が  
穏当なものであるはずもなく、輝かしい成果の裏には切り捨てられた  
多くの無情が転がっている。

正しいか、間違っているか、そんなものは重要ではないのだ。

世の正しさを決められるのは当事者だけ。それこそあるべき世の  
カタチ、そうだと自ら定めて決めたのなら、後は築き上げた成果の如  
何でその是非を示す。

ただ、己の道を邁進するだけだ。あらゆる咎を背負う覚悟こそが、  
英雄たる者の必然である。

「戒めねばならぬのは、本筋の意義を見失わぬこと。王たる者として、  
国という大前提。それさえ守られるならば、行いの意義は保たれよ  
う。躊躇う必要はない」

「国のため、国のため、ね。その言葉、俺もよく聞いてたぜ。圧政も重  
税も、全ては国のためだつて決まり文句で罷り通った。だが俺たちは  
何も変わらない。奪われて、そのままだ。

アンタ自身はどうだったか知らないけどな、その手の理屈にはいい  
加減うんざりしてんだよ。国だって、結局のところは人あつてこそ  
じゃねえのか。そんな自分たちの所の民を傷つけて、どうして誇らし  
げに言えるんだよ」

だが軍装のアーチャーが語る英雄の道理も、緑衣のアーチャーには  
届かない。

彼は民の祈りに昇華された英霊だ。圧政に対する義賊、民に味方す  
る森の隠者として。

ある一人の青年が願ったのは、1つの村の平穏だけ。それ以上など  
求めてもいなかったし、また見えてもいなかった。民草の視線に見え

ていたものは、村人たちの生活と苦しみだけだ。

原点となった動機などそんなもの。彼が知る人たちの苦しみを看過できなかったから戦った。国家などという巨大な枠組みで考えた事など一度もない。

あらゆる咎を背負う、それは世界を背負う事と同義。彼にとっては1つの村こそが世界だった。

軍装のアーチャーが見据えた天下とは、そもそもの規模が違う。それは優劣の差ではなく、性質の問題だ。王と民、2つの価値観は根本的に異なっている。

「それこそ自明の事じゃ。何故なら、国の望みと民の望みは明確に異なるのだから」

故に、軍装のアーチャーが語る道理もまた、民草の立場からは視点を変えたものとなった。

「確かに貴様の言い分通り、国とは多数の人の寄り集まりによって構成される。民あってこそその国であり、民無くしては国も王も成り立たぬのは道理である。

されど、民の望むところが、必ずしも国意に沿うとは限らん。大半の民にとり、望むところは平穏と、今ある生活の安定となろう。じゃが国にとれば、単なる現状維持とは悪手である。発展の伸び代を失えば、衰えるばかりとなるは必定じゃ。

民草には動いてもらわねばならん。1人1人の意思になど係っていられるか」

王の立場にある者の視点から見れば、民の存在も国体の一部に過ぎない。

土台となる骨子であり、重要であるのは理解しているが、故にこそ一部を切り捨てるのも道理となる。

一を切り捨て、他の十を満たせるのなら、その判断は王として正しい。上座より俯瞰する者として、一部のためではなく全体の利を求め、新しきを築き、様々な者に隔てなく進出の機会を与えた。ただ放

「むしろわしなどは、民の側にもよく配慮した王であるぞ。古きを廃し、新しきを築き、様々な者に隔てなく進出の機会を与えた。ただ放

任し、搾取するばかりの君主よりも、遙かに民を思うておると自負もある。

それを知っても尚、貴様はわしという王を否定する気か？」

「ああ、否定してやるよ。アンタのやった事でどれだけの連中が救われたかなんぞ、関係ねえさ。」

だってなあ、アンタ。民のためにだとか、その手の事なんて欠片も考えてないんだらう？」

2つの異なる立場より話す両者は相容れない。

その間にある断絶、それを確信して緑衣のアーチャーは明確な否定を告げた。

「分かるんだよ。アンタの事を見ていると、その性根にあるもんまで見えてきちまう。何を与えてくれようが、アンタが考えてるのは自分の得だろ。人なんぞ道具くらいにしか思っただけさ。」

「まあ、否定はせぬが。むしろ何故、王が民のためにと動かねばならぬのか、わしからすれば甚だ疑問じゃ。王の役目とは、民に秩序を与え、生きる居場所を築く事。その引き換えにこそ、民草は王にその身命を捧げるのじゃ。」

人を救うなど王の役目ではない。人が人を真に救うのなら、それは己自身の手を以てより他にない。誰かに救われておる時点で、その者は他者の掌中でしかない」

王は人を救わない。人を救えるのは、あくまでその人自身なのだ。王の行いとは民の住まう国土を築くことまで。民のためなどと、そんな言葉こそまやかしの戯言だと軍装のアーチャーは断言する。

「王に理想など求めるでない。所詮、民草とは立つ場所からして異なっておる。互いの道理に従っておっては、己を支える事さえままならぬ。」

全ては建前、掲げる旗としてあるだけじゃ。圧政に抗した義賊よ、それは貴様こそがよく承知しておる事ではないのか？」

「……へっ、ああ、そうだな。アンタの言うとおり、理想なんてのは建前で、現実の前じゃあ通じない。そんな事は俺が一番よく分かってんのさ。」

ウチのダンナも、その辺をもう少し弁えてくれればって思うよ。ガツチガチの騎士道精神で、理想には忠実につて。付き合わされる俺の身にもなってほしいぜ」

軍装のアーチャーと、緑衣のアーチャー。同じ”アーチャー弓兵”のクラスとして現界した英霊二騎は、その性質の中に通じた部分を持っている。

理想を切り捨て、現実に沿って手段を探る。徹底して実利を求めるその姿勢は、なるほどよく似ている。同類だと言われても、ある意味でその通りだと言えるだろう。

両者にある差異とは、心に未練を残しているか、心底から割り切つてしまっているか、だ。

「けどなあ、ダンナの潔癖さは確かにしんどいが、アンタみたいに開き直つて笑っている奴を見ると、なんだか虫唾が走るんだよ」

在り方は同じ。迷いが無い分、強いのは軍装のアーチャーの方だろう。

それでも緑衣のアーチャーは、革新の王の有り様を否定する。現実を割り切り、民草を切り捨て、それこそ道理と憚らない王の姿勢に、真つ向から反逆した。

「アンタの言う事は間違つちやいない。元々俺は英雄なんて器じゃない。ちつぽけなもんしか見えてないし、王サマの道理なんざまるで理解が及ばねえさ。」

ああ、そうだ。知ったこつちやないんだよ。国のためなのつてな、大のために小を捨てるなんて理屈には用はねえ。俺は、その少数のために立ち上がった英雄なんだからな」

緑衣のアーチャー、ロビン・フッドは民衆の祈りから生まれた英雄だ。

虐げられる民草、奪われ続ける弱者のために立ち上がる義賊。国と  
いう強者に抵抗の意志を示す、そのために森の狩人は存在する。

ならばこそ、暴君に対峙するのは自明の理。その答えは必然のもの  
だった。

「俺は虐げられる者の剣だ。弱者たちの意地だ。理屈さえ正しけりや

罷り通ると抜かす、そんなくそつたれな連中に一矢報いてやるために、俺の弓はあるんだ。

それにな、まるで立場の違う俺とアンタも、ここではある意味同じだろ。俺たちはサーヴァント、所詮は死んだ後の亡霊で、何に気兼ねする必要もないんだぜ。

思い知らせてやるよ。アンタの事が気に入くない。理由なんざそれだけで十分だ」

宣戦を告げる。民のための義賊たる森の狩人として、緑衣のアーチャーは革新の王に対して、鋭く貫くような戦意を向けた。

「気に入らない、か。何とも小さな意地じゃが、元より小人の身なれば相応、是非もあるまい。

よかろう、許す。それなりに興も乗ってきた。せっかくの決闘じゃ、容易く事が運びすぎてもつまらぬ。衆愚の一噛み、その意地をみせるがよい。義賊よ」

この時より、両者は互いを敵だと認識する。

元より対決が宿命付けられている間柄だが、それを越えた信念の部分で目の前の相手とは敵となるのだと理解した。

決闘の日は7日目。戦端は開かれない。

それでも、いずれ来るその日を夢想して、二騎のアーチャーは互いの戦意を交わらせた。

## 2回戦：誇りある決闘

聖杯へと繋がる迷宮<sup>アリーナ</sup>、2回戦の舞台となる第二層。

第二の月想海に漂うのは、朽ち果てた古代都市。かつては栄華を誇ったであろう都の風景。巡りゆく時代の中で滅びていった衰退の歴史。文明の老いたる果ての景色が広がっている。

その先、朽ち果てた都市の奥に存在する闘技場<sup>コロッセオ</sup>。それが2回戦の決戦の舞台だった。

遙かな昔、剣闘士たちが命を賭けて、その武技を競わせた場所。

舞台に立ったのは捕虜、奴隷などの下層身分が主であり、観衆の娯楽として彼らの命を浪費するその場所は、忌むべき歴史が生んだ負の遺産だとも言える。

だが、舞台に立つ者にあつたのは絶望ばかりではない。成り上がりの機会、喝采の誉れ、あるいは純粹な死闘を求めて、そこに生命を捧げた者らには熱があつた。その熱狂こそが、身分を越えて平等に観衆たちを魅了する。

生命の本質を闘争と捉えるのなら、この場所こそ生命の持つ真価、鮮烈なる輝きを發揮する最高の晴れ舞台であるだろう。

時代は変わる。かつての文化は否定され、新しい価値観に置き換えられた。

文明が進み、あらゆる人間に人権が保障されるようになり、死闘を見世物とする闘技場<sup>コロッセオ</sup>は野蛮なものとして葬り去られた。

血塗られた舞台は記録の中だけのもの。その実体は遠い過去に置き去りとされ、忘れられた。

それでも尚、人は”闘争”そのものを忘れ去る事はない。

どれだけ時代が進み、生命が尊重されようが、人々はカタチを変化させながら戦いを肯定してきた。逃れられない業として、その本能を受け入れるように。

ならば今この場所で、再現された舞台で再び幕が上がったのは必定とも言えるだろう。

飛び交う矢と銃弾。響き渡る轟音はまぎれもない戦闘音。

闘争の火が灯っている。かつての時代と同じように、生命の熱を上げる舞台が展開されている。

まして舞台に立つのは尋常の者に非ず。人の幻想を担いし英霊たちである。サーヴァントという極上の剣闘士を得て、その舞台は過去にも類を見ない輝きを放っていた。

軍装のアーチャー、織田信長。

緑衣のアーチャー、ロビン・フッド。

計らずも揃った同じクラス、各々の得物を振るい、二騎の英霊は激突していた。

——追われている、そう確信していた。

追跡を振り切れない。こちらの動きは捕捉されていると見るべきだ。

追い詰められていると自覚する。劣勢にあるのは承知だが、まだ諦めるには至らない。

入り組んだ地形の中、硬い石造りの感触を踏み締めながら、駆ける脚は緩めない。余分な消耗を避けるようペースを維持し、気力は十分に漲っている。

英国軍制式採用アサルトライフル『L85A2』。かつては己自身でも使っていた得物、電子で再現されたそのずっしりとした重みを感じながら、ダン・ブラックモアは駆けていた。

——分かっていたつもりだったが、これほどとはな……。

空間に波紋が波立つ。光の繋がりが屈折し、目に映る光景が歪んで見えた。

それは純然たる破壊の”<sup>イメージ</sup>夢”。さながら掌中の内で握り潰さんとする魔手の圧壊。

投影されたイメージは現象化し、夢に描いた光景を再現すべく駆動している。

それが己の進路上を覆い尽くしていると理解して、ダンは即座に横道へと逸れていた。

次の瞬間に引き起こされる破壊圧。捻じ曲がる空間に連鎖して、その爪痕が顕わとなる。

潰れて、砕けて、蹂躪される。範囲内に存在する悉くを破壊して、具現化した夢は過ぎ去った。

辛くも範囲外へと逃れたダンであるが、それで緩みを見せる事はあり得ない。所詮、こんなものは手段のひとつ。今ここで敵対する者の真髄は、この程度であるはずがないのだから。

破壊の過ぎた先より、足音が届いてくる。地を力強く踏みしめて、はつきりと響かせた音。その歩みには強固な意志が宿り、ただそれだけでも意志弱き者を怯ませる。

それは勇者の行進だ。険しき試練へと自ら挑める、真に強き覚悟を抱く者、そして絶対の自信の持ち主だけが、その歩みで以て前に進めるのだ。

着こなしたかつての帝国軍装、白い外套を翻して、甘粕正彦が堂々とその姿を現した。

この7日目の決戦場において、サーヴァントはマスターを直接攻撃できない。

それはムーンセルの定めたルールであり、絶対の制約だ。月の舞台に立つ限り、このルールからは如何なる英霊であつても逃れる術はない。

聖杯戦争における戦いとは、サーヴァント同士による決着だ。過去にあつた先例に倣い、サーヴァントはサーヴァントとの戦いのみに終始する。

だが、そのルールにも穴はある。

強大な存在である英霊だからこそ、課せられる数々の制約。しかし



マスターに対しての制約の数は、それと比較すれば明らかに少ないのだ。

この戦争は人間の、つまりはマスターが見せる行動こそが主題である。命を懸けた死闘という極限状態、その中で発揮される人間の価値の何たるか。それを観測する事こそが、絶対の観測器たるムーンスルの目的なのだ。

ならば余分な制約など邪魔でしかない。あくまで生としての強さこそ観測対象。故にマスターには多くの自由が許されている。

サーヴァントはマスターを傷つけられない。だがマスター同士でならそれも可能だ。

ならばこうした事態も起こり得る。ここに本来の形式から大きく外れ、マスター同士による死闘が行われていた。

甘粕の周囲、何も無い空間に無数の金属弾が創形される。

夢より生み出された架空の弾丸。されど、実際に及ぼす効果は実弾のそれと相違ない。

それを生み出し、かつ操作するのは甘粕の意志。殺意という名の引き金を引き、ダンに向けての一斉掃射が開始される。

駆ける脚は緩めない。地形の影を利用しながら、襲ってくる弾丸を凌いでいく。

目で見て防いでいるわけではない。それは戦場で磨きあげた経験則。銃撃が飛び交い、砲撃が宙を裂く怒濤の修羅場を生き抜いた生涯が、迫る危険を教えてください。

ここは闘技場の内部。元よりサーヴァント戦を想定した決戦場の地形は盾の役割は十二分に果たしてくれる。防ぎ切る事は決して不可能ではない。

だが、それだけでは凌ぐ事は出来ても、反撃には至らない。

発射される弾丸が途切れない。ダンを襲う弾幕には、間隙がまるで見当たらなかった。

それも必然、それらは全て甘粕の夢より生み出された弾丸である。

甘粕の意志が続く限り、装填数は無限に等しい。未だ消耗の片鱗すら見せぬまま、甘粕は構えもなしに悠々と歩を進めていく。

対するダンに出来る事は少ない。

遅咲きの魔術師<sup>ウィザード</sup>であるダンは、その手数が限られている。即席であるが故の必然、習得する術式<sup>コード</sup>は限定しなければならなかった。

サーヴァントを主眼に置く聖杯戦争の性質上、選ばれたのは補助系統。戦闘系の術式<sup>コード</sup>は一切習得していない。純粋な魔術戦において、ダンは半人前にも届かないのだ。

されど、如何に魔術師でなかりうと、ダン・ブラックモアは軍人である。戦場に赴きながら己の武器を怠る事など、そのような不明は断じてあり得ない。

横路に入り、階段へと脚をかける。後ろの通路では弾幕が通り過ぎた。

死角に入り、一時ながらも弾幕が途切れた。拙い魔術で強化を施し、一気に駆け上ろうとする。

だが相手の対応力もさるもの。未だ追い付かれるのに猶予がある中、弾丸は直進から軌道を変えて死角の内へと入り込んできた。

階段は狭く一本路。防げる余地はない。弾幕が降り注ぐ中を全霊を込めて駆け抜けていく。

幾つもの弾丸が突き刺さる。激痛の苦悶を精神力で抑え込み、決して速度は落とさない。

そして、やはり死角の内では正確な射撃とはいかなかったのだろう。急所に届く傷はなく、ダンは弾幕の中を潜り抜けた。

僅かに切れた息を整え、再びペースを元に戻す。

視線を動かし先の地形を把握して、振り替えて敵の姿を待ち受ける。無論、その間にも駆ける脚を止めはしない。

それは時間にすれば十秒にも満たないだろう。通常よりも遥かに長く感じた時間が過ぎ、足音を響かせて追跡者の気配が迫ってくる。

そして、自分が先ほど通った場所、階段から続く通路より甘粕が現れるのを確認して、

爆音と共に、炸裂した無数の礫が甘粕に浴びせかけられた。

ダンに戦闘用となる魔術はない。彼の本分はあくまで軍人だ。

軍人ならば、戦いに魔術など用いない。見掛けの規模より、優先す

べきは安定した信頼度だ。様々に変化する戦況に見合う、適切な装備を想定する。

礼装。あらかじめ術式コードが納められた、未熟な魔術師でも魔術の使用を可能とする特殊な魔具。ダンのが武装とするのはそれだった。

通り過ぎる際に設置した、使い捨ての礼装。現実世界での破片手榴弾に近いそれが、二方より挟み込むように炸裂し、甘粕を捉えていた。

硝煙が晴れて、仕掛けの結果が明らかとなる。

散弾による洗礼に曝されて、しかし甘粕の身は無傷。

楯法の堅。具象化した夢が甘粕の身体を鋼に変える。硬化により得た強度で、身に降りかかった散弾を耐え抜いた。

結果は無力化に終わったが、これでいい。元より即席の礼装程度で仕留められるとは思っていない。一時にでも、その場に脚を止めさせる事はできた。

更なる礼装を投擲する。同じく使い捨ての術式コードが込められた礼装は、発動と同時に煙幕スモークを散布した。

甘粕とダンの間を深い煙が立ち込める。互いの視界は遮断され、両者とも相手の姿を確認する事は適わない。

勿論、これで何かが決したわけではない。こんなものは所詮、一時だけの妨害にかならないだろう。打てる手立ては、それこそいくらかもある。

だがその行動へと移すのに先んじて、視界が遮られているにも関わらず、標的を捉えた正確無比な射撃が撃ち放たれた。

散布された煙幕には、通常にはない1つの特性が施されていた。

この煙は魔術師ウイザードの魔力に反応する。さながら熱感知と同じように、強い魔力を放つ対象は浮き彫りとなって煙幕の中に映るのだ。

ダンが多量の魔力を行使する事はない。自身の姿は遮られたまま、一方的な射撃を可能とする。

種を明かせば、仕掛けは単純。戦術も、煙幕を用いた際のセオリーと言えるだろう。

決して特殊な事ではない。戦場の経験を積んだ者なら予期できて

もおかしくはない。

それでも、ここは地上ではない。虚構により構築される『SE・RA・PH』という名の月の戦場。

狙うとするなら、その錯誤。この現実にも極めて近い環境故の誤認こそが隙となる。

ダンの装いに特殊な所はない。視覚の不備に対応できる装備をしているようには見えぬ、ならばこそその油断が生まれる。己と相手は同条件、不備は互いのものであると。

だが何よりも、それを必殺たりえる一撃にしているのは、ダン自身の高い技量に依るだろう。

錯誤は所詮、錯誤に過ぎない。相手が緩みを見せなければ意味はなく、また長く続くものでもない。全てが敵の判断次第である以上、確實さなど何も無いのだ。

思考の間隙、意識の緩み、そうした相手の気配を察知して、生じる好機を狙い撃つ。歴戦の中で身につけた経験と観察力がそれを可能とする。

素早く、無駄なく、的確に機会を狙った射撃は、派手さはなくとも必殺を期するに足る威力を持っている。並の者ならば気付く暇さえなく仕留められているだろう。

しかし、此度の標的は並ではなく破格。甘粕正彦はそれらを余さず予期している。

射撃に合わせ、展開される防壁。球状に包み込むように張られた障壁は、直進の弾道を描く銃弾を悉く反らせてしまう。

術式自体は単純、使われた魔力も多くはない。消耗を最小限に抑えながら、甘粕はダンの攻撃を防ぎ切った。

その結果を受けて、ダンも内心で歯噛みする。分かっていたが、やはり戦力が違う。

これで手立てが尽きたわけではない。用意した手札はまだ幾枚もある。だがそれらのどれ一つとして、この男を相手に通用するとは思えなかった。

やれる事が多すぎる。万能性が高い術式に加え、それを支える強靱

な意志。判断力、決断力ともに、不足となっているものは一つもない。力に驕っているのではなく、英知を頼みとし過ぎるのでもない。全てを兼ね備える戦闘者としての完成度は明らかに自分を上回る。唯一勝るだろう経験も、差を覆すほどの要因とはならない。

厳然たる事実として、甘粕正彦の方が実力は上なのだ。直接対峙すればこうなると、最初から分かっていた事だった。

マスターはマスターを害し得る。故にこうした事態も起こり得る。ダンとてそれは理解していた。実力で劣る以上、あらゆる意味でも1対1の状況は避けるべき。そのためにはサーヴアントとの分断は防がなければならぬと、戦いの前より承知していた。

そう警戒した上で、こうなったのだ。決闘を開始した直後、圧倒的な物量より繰り出された一斉砲火。マスターである甘粕の魔術も混じえたその大火線に追い立てられ、アーチャーとは強制的に引き離された。

警戒し、対策を打とうとも尚足りない。明確な実力差とはそういうものだ。こちらの思惑は潰されて、相手側の掌中にある現状を強いらねばならない。

突如、目に見える空間が歪み始める。その前兆が意味するものを、既にダンは知っていた。

空間そのものを圧壊する破壊の夢。巻き込んだもの全てを砕く甘粕の魔手が波紋となって広がっていく。

防ぐ手立てはない。回避するしかない。一度目の攻撃で性質は掴めている。効果範囲を識別し、逃れる事は不可能ではなかった。

前兆から発動までの間隙、その内で飛び退く。強化された脚力は一足で十分な距離を稼げた。効果が及ぶ、歪んでいく空間よりダンは離脱に成功する。

瞬間、歪んで映る空間から、拳を振り上げた甘粕正彦が飛び出してきた。

前兆となった空間の歪みによって、その景色は正常なものではない。

光は乱雑に屈折されられて、視覚が捉えるのは不規則に歪められた

光景だ。それは即ち空間に施された迷彩、目眩ましともなり得る効果を意味する。

なまじ破壊力を見せられていたから、その可能性を見落とした。破壊の夢は単なる見せ掛け、本命は偽装された空間を抜けて、近接の間にまで踏み込んだ甘粕自身だ。

接近戦は出来ない。この間合いは余りにも不利すぎる。

心得ならばある。長年を軍属として過ごした身だ。拳手格闘でも若輩者如きに遅れは取らないと自負している。

だが目の前の相手は、そんな括りで当てはめられる男ではない。技量、身体能力ともに相手の方が上。振り上げられた豪腕は、老骨の身など一撃で粉碎するだろう。

それは瞬時の内の思考。すでに眼前まで迫った相手に、ダンは判断を下す。

選んだものは迎撃。元より退避など望めない。切り抜けるには死中に活を得るしかない。

甘粕に対して、ダンもまた踏み込む。素手では無謀、新たな武器を用意する暇はない。ダンが選んだ手段は——銃身。

手にしていた『L85A2』を、そのまま鈍器の代わりにして振りかぶる。確かな強度と重量を持った銃身は、接近戦において十分に有効な武器となる。

それはほんの僅かな間合いの差。拳と銃身、互いの得物のリーチの差で、一瞬だけ早く銃身が先に届いた。

咄嗟に甘粕が取った行動は、それに対する迎撃だった。拳の標的を迫る銃身へと変更して、そのままの勢いで殴り抜ける。

振るわれた豪腕は、鉄の銃身を呆気なく砕き割った。あえなく攻撃を潰された形だが、それによってダンに一手分の猶予が出来た。

迷わず後退する。それと同時に、懐より抜き放ったのは一丁の拳銃。金色に縁どりされ、煌びやかな装飾に彩られた、古風の様式である燧発式拳銃。

現代に生きるダンからすれば骨董品といえる拳銃。もはや狙いを定める必要さえなく、至近の間合いの甘粕へと引き金を引く。

銃口より生じるのは魔力の解放。

撃ち放たれた魔弾の威力と衝撃が、甘粕を吹き飛ばした。

費やされた年月は、神秘という名の情報を持つ。

最古式にある拳銃を原形に作られたこれこそが、ダンの持つ真の礼装だ。

術式は単発型。使い勝手は良いとは言えないが、引き換えとして威力は保障されている。

ダンの持てる手段の中では最大であり、サーヴァントに対しても有効打となり得る。魔術師一人を仕留めるのには十分すぎる火力のはずだ。

甘粕は至近でそれを受けた。如何に彼でも決定打となっておかしくはなかった。

だが衝撃の果て、魔弾の威力に吹き飛ばされた甘粕の身は、健在だった。その痕こそ残しつつ、倒れる事さえせずに体勢を整えて地に降り立ってみせる。

ダンにとつての最大火力、あるいはサーヴァントにも通用する威力を、甘粕は正面から受け止めながらも耐え凌いでみせたのだ。

その瞬間にダンが見たのは、特徴的な表情だった。

如何に耐えたとはいえ、無傷ではあるまい。なのに魔弾の衝撃に苛まれてはいるはずの甘粕が浮かべるのは、苦痛の気配を一切感じさせない獰猛な笑みだ。

敵意ではない、だがそれ以上に危険と感じる、灼熱の如き意志の波動。受けた威力が嬉しくて仕方ないと云わんばかりに、その表情は喜色一面に染まっていた。

判断するのなら、これは好機であるとも言えるだろう。

敵はダメージを受け、まだ完全に立ち直つてはいない。ここで追撃をかけるのが戦術的にも正しい判断であるはずだ。

ダンにそれを躊躇わせたのは、甘粕が見せた喜悦の笑みだ。

思い出されたのは遠坂凛の助言、甘粕正彦の性質についての言及。あの男は興が乗れば乗るほどに危険となる。

結果として、それが功をそうした。

炎が生まれる。甘粕の見せる灼熱の意志、それを具現化させたかのような業火流。甘粕を中心として渦巻くそれが、他のどんな手立てよりも早く拡大していく。

もしも追撃にと踏み込んでいけば、炎に巻かれて逃げられなかった。あの一瞬の躊躇が、ダンの後退を可能とし、その命をも繋いでいた。

先に行った地形把握で、逃走経路となり得る箇所は認知している。躊躇わずにそこへと飛び込む。拡がる業火より逃れながら、駆ける脚は奥へ奥へと進んでいく。

やがて通路を抜け出した時、ダンは開けた場所に出ていた。

あまり悠長に観察はしてられない。最低限の地形把握だけに務め、迎撃の準備をする。

元来た道に先と同じ仕掛けを設置する。何度も通用するとは思わないが、最低限時間稼ぎになればいい。

特に重要となるのは、礼装の拳銃だ。威力の分だけ連射の利かない単発型。攻性に優れた魔術を持たないダンにとって、この礼装の存在が決め手となる。

すぐにも術式に魔力を込め直し、充填を開始する。この作業には手間が掛かる。それまでは何とか手持ちの手段で耐え凌がなければならぬが――

轟音、そして爆風。

振り返ったその先では、サーヴァントの戦闘を想定した地形すら破壊して、甘粕正彦が姿を現していた。

対峙して、そのまま静止する。

両者にあるのは微妙な距離だ。拳銃にとっても有効射程だが、対する甘粕も一足で剣を届かせられる。互いの速度差を考慮すれば、どちらが先に届くかは判別しにくい。

手には礼装の拳銃が構えてあるが、魔力の充填は終わっていない。牽制になるかも分からなかったが、構えだけは解かずにおく。再充填を悟られないよう、魔力の流れは最小限に抑えながら、視線は決して外さない。



甘粕もまた、静止したまま動かない。

むしろ奇妙なのはそちらの方だ。ダンからすれば、甘粕が沈黙する意図が見えない。

ここまで踏み込んでおいて、今さら警戒も無いだろう。すでに状況は一触即発、次の一手で取るべき行動など決まりきっている。

ここで止まるのなら、最初から出てこなければよかった。事実、ダンの対応策は尽きていたというのに、こうして引き伸ばしているだけ猶予を与えているのだ。

不可解な現状に、ダンも甘粕の事を注視するのみ。

読めない意図を歯痒く思う。いや、改めて考えれば、不明な意図はこれだけであったのか？

「気に入らんな」

それは、正道を外したマスター同士の死合いに引き込んだから、ではない。

「その刀を使っていれば、わしを仕留められていたはずだ。手加減のつもりか？」

手段の如何よりも、敵からの手心にこそ憤る。

騎士たらんとして、この戦いに参加した。互いの祈りを懸けた真剣勝負、己の力不足は自覚しているが、そこに情けを示されるなど、それこそ決闘への侮辱である。

「いや、先程だけではないな。思い返せば、機会など幾らでもあった。だというのに、貴公はそれらを見送ってきた。どういうつもりだ？」

ここまでの過程は、まさしく死線の連続だった。

魔術師としての技量、そして戦闘能力で、甘粕との間には大きすぎる隔たりがある。主導権を握らせてしまった以上、趨勢は初めから決ってしまったていた。

それでもここまですべてを切り抜けたのは、まさしく歴戦の中で磨き上げられたダンの実力の賜物だ。窮地にあっても活路を見出す、確かな経験に裏付けされた戦術眼。

ダン・ブラックモアは優れた戦闘技能者である。彼でなければ、ここまでの死線を越える事は出来なかった。

しかし、だ。果たしてそれだけだろうか。

ダンの力量があつてこそ活路を見いだせた。だがそれ自体、ある意味で出来すぎではないか。

まるで最後の可能性だけは常に残されているような、そんな作為が秘められていたとはいえないだろうか。

「……誘導、か？ あえてわしをこの場所へと誘つたのか？」

そう、改めて考えれば、判断できる要素は幾つもある。

先の交錯に限らず、仕留める機会はいくらでも作り出せたらう。それだけの力量差はある。

それをせずに、死線の中にも活路を残した。そうして用意された行き筋に従えば、最期にはこの場所に行き着くのは自明の理だ。

つまりは掌中、今に至るまでの全てが、相手の思惑の内にある。

それを侮辱と受けとるよりも、何より自身の不甲斐なさにダンは憤りを覚えた。

「事が貴方だけなら、いつ何処で終わらせても良かった」

ようやく口を開いた甘粕が告げたのは、冷徹なまでのそんな言葉だった。

「聞けば、なかなか骨のある男だそうではないか、そちらのサーヴァントは。容易く終わらせるには惜しい」

「惜しい？ 何の事だ」

「決まっている。英雄たる者が持つ矜持と覚悟、それら意志が生み出す輝きを、俺は知りたい。」

二度とはない機会だろう。悔いなど残してなるものか。伝説に書き綴られる英雄たち、得難きこの出会いを堪能しなければならん。敵であれ味方であれ、な」

その答えを聞き届け、なるほど、と思う。

確かにこれは破格だ。型に嵌められる男ではない。

己もまた、この戦いの常道に反している自覚はあるが、これは輪をかけて異端だろう。

敵の強さを尊び、その奮起を賛美する。互いが等しく英霊で、素晴らしい志の持ち主だからと、敵と味方の区別もなくて。

まるで遊びに興じる童のようだ。そのような感情を戦場に持ち込む事自体が、すでに異常が過ぎる。

「真剣である場で興じるのか。好かん在り方だな」

「勘違いしないでほしい。確かに興じているのは否定せんが、遊んでいるつもりはない。」

俺はこれ以上なく真剣だよ。心底から、彼らの示す意志の光を見たいと望んでいる。故に止めるつもりはない。何を言われ、どれだけ割に合わないとしてもな。

矜持のために、たとえ利がない行いだと知っていても貫き通す。それは貴方も同じだろうに」

そう指摘されれば、やはり返す言葉はない。

程度の差こそあれ、どちらも常識外の行いには違いない。独自の価値観、拘りだけで、あえて勝利から遠ざかる真似をする。確かにそれは遊んでいるとされても仕方ない。

「まあ、余りに不甲斐ないようなら終わっても已む無しとは思っていたが、それは杞憂だったようで安心したよ。流星は老練の技、歴戦の冴えとは見事なものだ」

だがそれでも、はつきりと差異を告げるなら、やはりこの苛烈さだろう。

攻勢の中にも活路をあえて作り、この場所へと誘導していた。それは間違いないだろう。

しかし、ならばその窮地とは容易いものであつたかと問えば、そんな事は全くない。あれはまぎれもなく死線だった。

忘れてはならない。活路を見出だし生き残れたのは、ダンの実力があつてこそである。他の凡百であれば死するに足る攻撃ばかりだ。

それだけ期待していたと言えれば聞こえは良い。だが一歩違っていれば間違いなく死んでいた。そしてそれでも構わないと、この男は本気で思っているのだ。

死んだのなら、それはそれ。残念とは思っても、それだけだ。

その容赦の無さこそが甘粕だ。あらゆるものに対して本気であり、己の思惑が崩れようとも躊躇わない。安定性こそ無いが、脆弱とも無

縁である。

「なあ、見てみるよ、ダン卿」

手を広げて指し示すのは、開けた先にある光景、闘技場の舞台<sup>コロッセオ</sup>上だ。よくよく観察してみれば、この場所の事にも当たりは付けられる。恐らくは観覧席、それも位の高い者のための貴賓席に当たるのだろう。

剣闘士たちが繰り広げる戦場を、ここからならば一望できる。血沸き肉踊る死闘を観賞するのに、この場所は特等席だ。

そして、今その舞台で戦うのは、お互いのサーヴァントだ。

契約主たるマスターとして、この場所はある意味で最も相応しい席だと言えるだろう。

「彼らは戦っている。単に俺たちの代理戦争としてではなく、互いにある信条を懸けてだ。

性質は違えども、同じ英雄。その生き様が苦難の試練に満ちていたのは変わらない。温ま湯のような生とは比較にならん、たかが一時の命よりも英雄の信条は遥かに重い。

素晴らしい。美しい。彼らこそ人間だ。俺たちが在るべき姿だ。それが如何なる結末を辿るのか、是非とも俺は見届けたい。横入りなど無粋だろう。

——ああ、要は手出し無用という事だよ。お互いにな」  
その言葉で理解する。つまりこの状況はそのため用意されたのだ。

互いに抜き打ちの姿勢、仕掛ければそれで決するという状況だ。

そして勝算もまた、お互いの優劣は明らかである。戦闘者としてダンでは甘粕に及ばない。それはここまでではつきりと示されている。

余りにも分が悪い。ダンの方からは動けない。同時に、元を正せばこの状況を作り出した甘粕も、先に仕掛ける理由はないのだ。

互いが互いを監視している。意図して作られた膠着状態。

全ては余計な横やりを入れないために、サーヴァントの戦闘に集中するためだ。

苦々しく思おうと、状況はすでに決している。

ダンは無動。他の選肢は封殺された。相手の思惑通りに、何も出来ずに見ているしかない。

もはや覚悟を決めるしかない。そんなある種の開き直りの境地でもって、ダンは一撃を喰らった。その戦場へと目を向けた。

——果たしてその光景を、戦闘と呼ぶのは正しい表現であるだろうか。

空間を埋め尽くす火縄銃の総列。その物量に生み出される広範囲・大火力は、敵の反撃を許さない。

種子島の持ち手たる軍将<sup>アーチャー</sup>、彼女には対峙する敵の姿が見えていない。不可視化の宝具を持つ森の隠者は未だ巧妙に潜んでいる。

だがそれも関係ない。『三千世界』の攻撃範囲は、もはやあらゆる領域を捉えている。たとえ姿が見えなかりと、見えない範囲ごと焼き払えば済む話だ。

単純明快、強者だからこそ許される戦闘理論。それは容易には覆しがたい。

対し、狩人<sup>アーチャー</sup>が放つ矢は、悉くが銃の弾幕に落とされる。

如何な毒矢も、当たらなければ意味はない。不可視の内から狙い撃とうが、相手は先手を打って迎撃してきた。

それは軍略家としての戦術眼。同質の理を用いるが故に、軍将<sup>アーチャー</sup>は狩人の先を読むのだ。

そうなれば、後は用いる戦力の差だ。三千の銃火を操る軍将<sup>アーチャー</sup>に、狩人<sup>アーチャー</sup>は対抗できる術がない。ならばその結果は明らかである。改めて答えよう。これは戦闘ではない。

圧倒する者とされる者、その関係が明確に示される蹂躞劇に他ならない。

「どうした、終いか？ 地に伏す鼠でもあるまいに、少しは克己の1つ

でも示してはどうじゃ」

銃火の上より軍将アーチャーが告げる。それは強者の側のみに許される余裕の言葉だ。

翻すその装いも、常と同じ近代軍装のままである。戦装束である漆黒の鎧は纏っていない。その時点で、彼女の優勢がどれだけ揺るぎないものか透けて見えた。

「くそ、好き放題に言いやがって！ 出来るならとつくにやってるっての！」

憚る事なく放言する軍将アーチャーに対し、狩人は呟くような小さな声音で毒づいた。

姿を消して、狡からく逃げ回って何とか命を繋いでいる、この現状。まったく笑うしかない。明らかな劣勢で打てる手立ても無しときた。ここまですれば涙だって出やしない。

奇襲の矢は通じず、毒の仕掛けも仕込みの前に潰される。その抜け目なさ、徹底ぶりは放蕩にも見える言動に反した隙の無さだ。

やはりあれは同類なのだと自覚する。如何にそう見えるとしても、その実は慢心などと無縁の心情。勝ちに至るためには手段も選ばない、そうした現実論リアリズムを遵守している。

もつとも同じなものは信条の1つきり。持てる強さも、その在り方も、自分とはまるで異なるものであったのだが。

「諦めい、森の狩人よ。そもここに至る以前に、わしの指一本さえ削ぎ落とせなんだ時点で、貴様の敗北は決まっておったのじゃ」

告げられる侮辱に感じるのは、屈辱よりも達観だ。

何せ事実、その通りなのだから。これ以上ない正論に、どうやって悔しさを覚えるというのか。

そもそもだ、敵の眼前で罨を仕掛ける罨師がどこにいる。

ここまで仕掛けの全てが潰されているのも、ある意味で必然だ。罨とは事前に仕掛け、その上で嵌めるもの。こうした決闘方式の中、一から構築する仕掛けなどたかが知れている。

狩人アーチャーにとっての戦いとは、決戦に至る前こそが本番だ。手段を選ばず闇討ちで仕留めるか、そうでなくとも可能な限りの戦力を削り落

とす。それで初めて大英雄を相手に勝機が出てくる。

だというのに、狩人<sup>アーチャー</sup>は結局二度とは仕掛けなかった。

敵に無傷のまま決戦へ至る事を許した。その時点で今の結果は分  
かりきったものだった。

「……なあ旦那。やっぱり俺じゃあ無理だよ」

あれから何度も説得した。己の戦術の道理も説いた。

それでもマスターの意志は堅い。ダン・ブラックモアの信念は揺る  
がなかった。

騎士としての誇りある決闘を、そんな老騎士の掲げる信念。

まったく正しい。高潔すぎて自分のような者には眩しすぎる。

人には向き不向きがある事を考えてほしい。そういう事が出来る  
英霊じゃないのは分かっているだろうに、あの頑固さは筋金入りだ。

そのおかげで、この様だ。これじゃ敗けに行こうとしているのと変わ  
らない。自殺志願と言われても仕方ないだろう。

それでも、狩人<sup>アーチャー</sup>の心中にマスターへの怒りはなく、己の無力さを憤  
るばかりである。

どうして自分が選ばれたのだろう。

こんな毒殺と奇襲しか能がない英霊が、騎士ダン・ブラックモアの  
サーヴァントとして。

不適當にも程がある。もっと優れた、例えば最優のセイバー辺り  
の、真つ当な英霊と契約していればこんな事で思い悩む必要など無  
かったのだ。

聖杯はその人間と最も性質の合った英霊を選ぶというが、この様で  
はその審美眼も当てになるものではないと愚痴りたくなる。

自分のような者ではダン・ブラックモアに相応しくない。他でもな  
い英霊自身がそう思っているのだから、これ以上の答えはないだろ  
う。

「来ぬか、いや来れぬのか。貴様は己の非力を弁えておる。己は選ば  
れた者ではない。神も、運命も、味方になど付けてはおらん。知って  
おるのは、目先に映る理不尽な現実のみじゃ」

——うるせえ、それをアンタが言うのかよ。

都合の良い現実なんてない。自分が何か特別だなんて幻想は早々に捨て去った。

所詮、自分なんてありふれた人間だ。神も運命も、いちいちそんな奴に目を掛けてくれるわけがない。そんなものを信じていたら何も出来やしない。

「神に愛される天稟も、運命を引き寄せる勇氣も、貴様は何一つ持ち合わせん。貴様自身、そんな己が英雄などとは露ほども思っておるまい。」

貴様の事を、貴様自身すらが信じておらぬ。故に貴様が頼みとするのは現実論。幸運も正義も信じず、ただ勝てる戦をする隠者の技じゃ」

——うるせえ、その一体どこが悪い。

英雄のように勝てないのなら、英雄らしからぬ手段で勝つしかない。

勝利を約束する聖剣？ 生物としての完全性を持った肉体？ 凡百を隔絶する武芸の才？ ああ、そんなものがあつたならさぞや素敵だろう。あれば俺だつてそつちを選びたかつたさ。

だが現実、そんなものに縁はないんだ。だったらセコク汚かろうが、そういう手段に頼るしかないだろう。死んでかつこいいのは英雄様で、勝たなきや何の意味もないんだから。

「それを選ぶ事は誤りではない。が、所詮は世の道理に屈したが故に選ぶもの。衆愚の内にある者が取るべき妥協であり、英雄の在り方には程遠い。」

貴様は勝てる戦には勝てる。そして敗ける戦では必ず敗ける。英雄としてあるべき奇跡を持たなかった。故にこの結果は当然のものである。逆境からの起死回生とは縁なき身じゃ」

——うるせえ、そんな事は分かっている。

現実論でしか戦つてこなかった。奇跡や勇氣なんて信じなかった。

世界はどうしようもなく強さと弱さで分かれている。その真理を理解して、抗おうとなんてせず、そんな理不尽の中で何とか戦つていけるようにやってきた。



そんな自分が、今更それをやろうとしたって上手くいくはずなんてない。奇跡を成し遂げられるほどの強さも信念も、自分には無いのだから。

「是非もない、隠者としての戦いに徹してきた貴様は、真つ向勝負の術を知らぬ。そこにあるべき気迫、奮起する意志、勇気の何たるかに覚えがない。」

故に今も、こうして堪え忍ぶのみ。それでは勝てぬと分かっているも、それ以外の勝ち方を知らぬから。正々堂々、尋常の立ち合いなどした事もないから、どうすればよいかと見当もつかぬ。

はつきりと言ってやろう。貴様は脆弱じゃ。己の矜持のために勇猛にもなれぬ、英雄足り得ぬ弱さに塗れた、一介の小人に他ならん」  
——ああ、まったくその通りだよ、くそつたれ。

何もかも欺いて戦ってきた。正面きって戦うなんて機会すら無かった。

圧政に苦しむ村のために立ち上がった。だがその村の連中は、王の手下共と一緒に自分が敵意を向けてきた。

それを恨んだ事はない。むしろ当然の流れだろう。もし逆賊である自分を擁護すれば、村にまで同じ罪が連座する。弱者である彼らの気持ちはよく分かる。

所詮、正面から守りきる力なんて無い。そんな意地で守るべきものを傷つけるなんて本末転倒。だからこそ王と村人、双方にとっての敵となって立ち回るしかなかった。

——ロビン・フッドは村の人間ではない。

——我々とは無関係に、森を通る人間を襲うのです。

——全ての責任は、あの狩人にある。

向けられるのは称賛ではなく罵倒。与えられるのは栄光ではなく罪過。

自分は英雄じゃない。” 森の義賊ロビン・フッドなんて笑えない。その名は名乗るには重すぎる。

所詮、無銘のままに葬られたはずの自分が、何の冗談か英霊なんてものに祀り上げられた。民の祈り、顔のない王の化身、シャーウッドに謳われる義賊として。

まったく悪い冗談としか思えない。賊として追われ、誰からも蔑まれた自分が義賊だなんて。人の幻想、理想の体現だか知らないが、そんな賛辞など欲しくなかった。

自分はただの小心者だ。人より少しばかり、若気の至りで義侠心をこじらせてみただけの、何処にだっている人間の一人に過ぎなかったのに。

自分では英雄になれない。騎士に相応しい戦いなんて出来ない。あの誇りあるダン・ブラックモアの隣に侍るには分不相応な、三流の英霊でしかないのだ。

「祀り上げられた者、英雄に成りきれぬ小人よ。もはや勝負は決した。貴様の暗技でこの戦況は打開できぬ。その道では先は無いと知れ。——そこでじゃ。余興として、ちと面白い趣向を思い付いたぞ」

銃声が止む。降り注いでいた弾丸の雨が止まる。

それだけではない。戦場の全域を覆うように展開された三千の種子島、それら全てが消失した。

「いざ尋常に、真っ向からの果たし合いにて決着をつけよう。貴様の弓か、わしの種子島か、制するのはどちらであるか確かめてみようではないか」

唐突に軍将アーチャーが放言してみせた言葉は、狩人アーチャーを困惑させるものだった。

「悪い話ではあるまい。どの道、このままでは貴様に勝ち目はない。ならばこそその真っ向勝負、反撃に一矢報いる機会を得られるならば、否はなかろう」

意図が見えない。そんな事に何の得がある？

元より隠れ潜む狩人アーチャーに、返答の声は軽々とは上げられない。迂闊な真似はせず、様子見に努めながら相手の出方を窺う。

「勝てぬ、と思うておうな？ わしと正面から撃ち合えば勝てぬと、そう判断しておるじやろう。

うむ確かに、正しい判断じゃ。暗技に徹した貴様が、わしの銃火に勝るなど奇跡に等しい。

しかしな、その奇跡を成し遂げるからこそ、英雄は英雄と呼ばれる。生前に成し得なかつた勇者の証明、今こそ獲得する好機ではないか」

言っている理屈には、確かに頷けるところもある。

このままでもいざれ倒されるのは目に見えている。同時に、言う通りにしても勝算はない。

正面から戦って勝てないと理解してるから奇襲に頼るのだ。奇襲が通じなかつたから真つ向勝負を選ぶなど、単に敗けに向かうのと同義だろう。

即ち、これは狩人<sup>アーチャー</sup>に敗北の仕方を決めさせるための申し出だ。

このまま隠者として削れ落ちるか、それとも最期にせめて雄々しく戦い敗れるか。

弱者の側に許されたせめてもの抵抗、意地を示す機会をくれてやると、この軍将<sup>アーチャー</sup>は言っている。必敗である苦境の中で、英雄たり得る奇跡に挑んでみると。

「見るが良い、狩人<sup>アーチャー</sup>」

軍将<sup>アーチャー</sup>が指し示した先、そこでは互いのマスターが対峙している。

こちらの戦場が俯瞰できるだろう位置で、アーチャーたちの事を見ていた。

「誇りを望むマスターの前じゃ。無様な死に体を晒すばかりでは言い分も立つまい。

矜持を示せよ、王権に抗する義賊なのじやろう。伝承に謳われし義侠の徒としての誉れ、生前には届かなかつた憧憬を、今こそ掴んでみせるのじや」

臆面もなく敵に告げる言葉は余裕の表れだ。

そこに憤りを覚えなわけではない。それでも完全に切り捨ててしまわないほどには、軍将<sup>アーチャー</sup>の言葉は狩人<sup>アーチャー</sup>の心に響いていた。

過去を惜しむ気持ちはある。

手に入らなかつた栄光の二文字、英雄として受けるべき喝采、焦がれたものは確かにある。

今さら手に入るとは思わないし、本気で欲しいわけでもない。それでも、マスターの信念に報いてやるためにも、最期に格好つけるくらいはしても良いかもしれない。

「ああ……」

情けない姿を晒し続けるのも申し訳ない。

マスターの言う騎士道、己に恥じない在り方とは、こういう時に出ていける奴なのだろう。

確かにその方が数段男が立つ。それでもし逆転でもした日には、それこそまるで『英雄様』だ。

惹かれる気持ちがある。拒まなければいけない理由もない。

相手の思惑は、この際関係ない。どの道勝算なんて無かつたのだから、罠だとしても構わないだろう。せいぜい雄々しく立ち回り、華々しく散るなりすればいい。

これは自分の気持ちだけの問題だ。やりたい方を選べば良いと、ただそれだけの事なのだ。

皮肉な現実論者の口先も、今は必要ない。素直な思いとやらに従えばいい。

「悪いな、旦那」

狩人は、自身の心の通りに選択した。

静寂に包まれた戦場。銃火の轟音が止めば、そこは驚くほどに静かだった。

狩人に選択を迫り、軍将は答えを待つ。

周囲に銃列はない。矛はすでに納め、待ちとする姿勢に偽りはなかった。

申し出に嘘はない。事実、これは余興だった。  
軍将<sup>アーチャー</sup>にとつてはどちらを選ぼうとも構わない。無論、敗ける気もない。

彼女のマスター、甘粕正彦へと捧げる余興。わざわざ敵に機会を与える提案も、強き意志を愛する主君の存在が一因として大きい。

試せと、あの男は言った。

相対する狩人<sup>アーチャー</sup>、その気概の何たるかを見極めろと。

軍将<sup>アーチャー</sup>は、マスターのためのサーヴァントである。

王である前に、今の彼女は剣なのだ。甘粕正彦の道を切り開く刃として存在する。

今生を捧ぐと決めた主君の意志であれば、否とするつもりはない。そして余興だと思えばこそ、軍将<sup>アーチャー</sup>自身にも愉しむ気持ちが生まれてくる。

英雄らしからぬ、いや”英雄”を背負わされた青年。

知れば知るほどに、その性根は凡百のものだ。理想も矜持も、高尚なものは何もない。

ただ目の前の平穩を、ただ得られなかった誉れを、と。焦がれながらも求める事を躊躇する姿には、未だに本気の願いが見えてこない。

どれも心底からの願いではなく、本気の重みがない。所詮、衆愚が抱く程度の祈りでは、その信条に命さえ懸けられる覚悟にまでは至らない。

ならば、狩人<sup>アーチャー</sup>の骨子とは？ 只人にも等しかった彼が、個人のみで王に反抗するという蛮勇を行かせた芯とは何なのか。

そして、静寂が破られる。

告げた余興に対しての答え、狩人<sup>アーチャー</sup>の選択が示される。

「——そうか」

答えとは、言葉によるものではない。

示されたのは行動だ。どんな言葉よりも明確に、その行動が狩人<sup>アーチャー</sup>の意志を表している。

空を貫く風切り音。静寂の中で、その音だけが鋭く響く。

音は、悠然と佇む軍将<sup>アーチャー</sup>へと。宙を裂いて進む一条の閃光として飛

来する。

——閃光の正体は、一本の矢。敵の背中を狙った一矢が、姿も気配もないままに放たれていた。

「それが貴様の答えか、隠者よ」

銃声が轟く。即座に張られた弾幕が、奇襲の一矢を打ち落とす。

幽炎の中より現れしは三千の銃砲。軍将の誇る宝具の群が再び空間に展開される。

示された答えの返礼にと、銃火の豪雨が戦場に降り注いだ。

「……何故だ？」

眼下で行われる激闘に対し、ダンは疑問を漏らす。

その目が向くのは、未だ姿を現さない己のサーヴァント。隠形の技を用い、銃火から逃れながら奇襲の矢を射る狩人が、老騎士には理解できなかった。

受けるものだと思っていた。この時こそが、恐らく狩人にとって唯一の機会であると。

奥底に封じられた思い、狩人には正道の有り様への憧憬がある。ならばこそ、最後に選ぶのはそちらだと思っていた。

自分にとつても否はない。元より信条に付き合わせたのはこちらだ。矜持を示そうとする狩人を止める理由などない。

だが、狩人はそれを選ばなかった。

ここに至るまでと同じように、隠形と暗技を用いた戦術を駆使して戦っている。

無論、劣勢なのは変わらない。言うなれば先までと同様の形に戻っただけだ。覆るものなどあるはずがない。

このままでは勝ち筋も無く削り落とされていくばかり。あの軍将が言ったように、敗けるべくしてただ敗ける道しかない。

それでも、狩人<sup>アーチャー</sup>はその戦い方を止めようとはしない。

あくまでも森の隠者として、身に付けた技巧で以ての戦いをし続けていた。

「何故そうまで己の流儀に拘る？ 何がそこまでさせるのだ？」

『——へっ、そりやまあ、戦い方に拘る理由なんて1つきりでしょうよ』

呟かれた言葉に対し、その答えは契約を通して行われる念話によるものだ。

戦闘時に意識を他所に向けてるなど、愚行そのものとしか呼べない行為であったが、狩人<sup>アーチャー</sup>は構わずに心の内で言葉を交わし続けた。

『いやあね、俺だつて輝かしい英雄譚に憧れないわけじゃないっすよ。

立派な剣やら鎧やら着こなして、栄光と一緒に都を華々しく凱旋して、みんなから喝采を受けて可愛い娘にはちやほやされてっつと。そんな王道の筋書きに憧れたのだから何度もあるさ。

立派な武器なんてねえ、栄光なんてねえ、喝采の代わりに受けるのは恨みとや拒絶ときたもんだ。それで嫌に思わないなんざ、そりや生粋のマゾヒストだけでしよう』

栄光とは無縁の生涯、伝説とは名ばかりのはぐれ者の悪足掻き。

”森の義賊<sup>ロレン・ランド</sup>”を引き受けた無銘の青年。そこに人の幸福など無きに等しい。

『俺のやり方なんて誰にも褒められるもんじゃないし。勿論、実際に褒められた事も皆無だけど。

戦つてる相手からは憎まれて、守つてる奴らからは嫌われて、ほんと割に合わねえや。結局、2年くらいしか保たなかったし。

成果と言われても微妙だし、自分でも何がしたかったのかよく分かんねえや、本当に』

不遇であり、愚かとする言える青年の人生。

誇れたものなど何もなく、得られたものさえほとんど無い。まさしく割に合わないという言い方こそが適切だ。死という断絶で縁が切れた今ならば、拘りを持つ必要はないだろう。

事実、心が揺らいだ事は間違いないのだ。

最期に示すべき矜持、英雄としての雄々しい在り方。それは確かに格好いいだろう。少なくとも、今の情けない姿に比べたら遙かにマシだ。

今もマスターが見ている前で、何とも無様な事だと自覚もしている。結局、提案通りの騎士たる振る舞いなんて出来ていない。申し訳ないという気持ちもあつた。

それでも、素直な己の“心”に従つたのなら、やはりこのやり方が残っていた。

『でもさ、それでもこれが“俺の戦い方”なんすよ』

そう、続けられた事には意味がある。

割に合わない生き方。愚かだとも思える己の生涯を青年は理解している。

自分は凡庸だ。願つたのは目の前の平穩だけ、世界平和だの正義の味方だのと、大仰な理想を狂つたように盲信していたわけじゃない。

本来ならばそこまで続くわけがない。

王軍を相手取つた孤軍奮闘、それを2年もの間維持し続けるなど。

物資戦力云々以前に、まず心の方が折れてしまう。あらゆる者を敵に回して、それらの悪意を一身に受けるなど、並の者が耐えられるはずがない。

狂気の信念で武装していたわけではない。発端となつた義侠心だけではない。孤独な奮闘を折れずに最期まで貫けたのには、確かな理由があるのだ。

『損ばかりの人生だったし、自分で言うのも何だが嫌われ者だったもんでね。そもそも戦う前からあんまい扱いも受けてこなかったし、よくやるもんだと自分でも思いましたけど。』

……それでも、何も守れなかつたわけじゃない。本当に孤独だったわけじゃないんだ』

王も、民も、全てを敵として立ち回り、民草のために戦つた狩人<sup>アーチャー</sup>。

民たちは彼を切り捨て、拒絶した。村としての立場を守るため、王の下で1人の賊徒として追い立てたのだ。弱者の立場としてそれは必然の選択であつたが、その悪意に、孤独に1人の青年の信念が折れ



てしまうのは当然の流れでもあっただろう。

だがそうはならなかった。青年は孤独ではなく、悪意の中にも善意は確かにあったのだ。

『支えてくれる人たちは、居た。密かに、ささやかなものではあったけど、それを受け取るたびに俺は思った。——ああ、これからも頑張ろうって。』

単純なもんですよ。報酬としちやあ清算なんてまるで取れない。でも、単純な野郎にはそれくらいのもので支えになった。確かに俺は誰かを守っているんだって、誇れた』

それは、村の総意が狩人憎しとして叫ばれる中、裏で密かに行われたもの。

例えば、森の中に置かれたパンやチーズ、ワインであったりと。表立って言葉にする事も出来ない、ささやかな支援であり感謝の印。

村人の立場として、それは精一杯の報酬だったのだろう。それが分かっていたから、それだけでも狩人にとっては十分だった。

己は確かに、村人たちの願いと希望を背負っている。

この背中には守っているものがあるのだと、その思いが彼の折れそうな信念を支え続けた。

『不満なんて幾らでもあるし、大往生も望めやしなかったが、後悔はないんだ。俺の最期を看取って、あの樹の下に埋葬してくれた誰かがいた。それだけで、俺の若さの勢いみたいな真似にも、少しは意義があったんだって分かったから。』

旦那の言う事は分かるし、正しいですよ。でも、誇りも何もない人生でも、ちつぽけなりの意地があるって事も、少しは分かってほしいな』

「アーチャー……」

狩人の吐露を聞き、ダンの内に渡来したこの思いはなんだろう。

己の信条とは相反する姿。しかしそんな彼の有り様が気高きものに映るのは何故なのか。

騎士として、尊厳と法に則った戦いを。掲げる祈りに恥じ入る事がないように。

そう決意しての参戦だった。そして召喚したサーヴァントに対しても、そんな己と共通するものを抱えていると目していた。

彼の伝承を紐解いて、そして本人と直に言葉を交わせば、その内にあるものも見えてくる。守るべきもののため、心を鉄として非道に徹する。それは己にとつても覚えのある事であり、だからこそ理解も出来たと自負していた。

軍人だった己、隠者だった狩人<sup>アーチャー</sup>。共に望んだ道を歩む事が適わなかった者。故にその内にある願望も共通すると予想し、本人からもその心中を感じ取っていた。

しかし今、改めて思う。

その事自体を誤りだったとは思わない。だが、果たしてそれだけであったのだろうか。

「……ようやく分かった。おまえと、わしの決定的な違いが」

老騎士は軍人であった過去に疑問は無かった。しかしそこには後悔があった。

国家に身命を捧げ、私を捨てて鉄心と化し、人としての己を省みなかった。老境となってそれを悔み、やり直したと願ったからこそ、この戦いへの参戦を決意したのだ。

そう、違いは既にこの時点でも明白である。己の人生に対する後悔の有無、それは即ち生き様に向けた誇りの是非に他ならない。

自身の人生に誇りはないと、狩人<sup>アーチャー</sup>は言った。

だが、辿ってきた生き方に後悔がなく、そこにある価値を知るのなら、それは誇りと呼ぶべきだろう。狩人<sup>アーチャー</sup>が何と言おうとも、彼には生きてきた過去に対する自負がある。

対して、ダン・ブラックモアの人生とは何なのか。

国という大義の下に私情を捨て、それこそ誉れと信じて歩み続けた。

そこに守る事への実感など皆無である。下される命令に従う事がそうであると、ただ盲目にも似た忠誠があるばかりだ。

その果てが、過ぎた未練に祈りを持つ今である。信じた誉れなど無く、初心にあった熱意も時間と共に磨り減らして失せてしまった。

非道の徒ではなく騎士として、過去に報いる戦いをせよと告げた。何と滑稽な話だろう。己の歩んだ道にも誇りを持ってない男が、誇りの道義を説くなどと。

泥に塗れる生き方をしながら、それでも後悔だけは残さなかった狩人<sup>アーチャー</sup>に、一体どんな誇りを説く資格が、自分にあるというのか。

「……すまなかつた。間違っていたのはわしの方だ。おまえの内と、わしのそれが同じであるなどと、何と愚かな勘違いであった事か。わしの言葉は、自身の過去にある価値を知るおまえに対する、侮辱だったな」

狩人<sup>アーチャー</sup>の姿に、それをようやく理解する。

己だけの信条を押し付けて、相手の芯にあるものを本当には理解していなかった。

誇りとは、誰かに示すものではなく、生き様に背負うもの。その事を悟り、ダン<sup>アーチャー</sup>は自らのサーヴァントに謝罪を告げる。

『違う』

だが、その謝罪に対して、当の狩人<sup>アーチャー</sup>は明確な否定を口にしていた。『違うんだ。そうじゃない。そんな事は言わないでくれ』

間違いないかじゃない。決して間違っていないのだと、狩人<sup>アーチャー</sup>は言う。

否定した当の本人であるダンよりも、狩人<sup>アーチャー</sup>は主の語る道義の正しさを信じていた。

『旦那は正しいんだ。間違ってたなんかいない。旦那の言う事の方が真つ当で、俺のやり方こそ外れたものだ。そこだけは決して間違いないかじゃない』

「しかし……」

『あんま持ち上げないでくれよ。俺の生前に誇りなんてない。ただほんの少しの、はぐれ者の悪足掻きにも意味があったっただけで、そこまで上等に捉えられたら逆に困る。』

旦那はそれでいいんだ。小言はうるせえし、堅物すぎて何とも扱いに困るマスター様だが、そんな旦那だから、俺はこうして契約を結んでるんだから』

「……何故だ。どうしておまえは、そこまでわしに尽くしてくれる？  
アーチャーよ、わしはおまえの在り方を否定したというのに」  
ダンにはそれがどうしても理解できない。  
狩人<sup>アーチャー</sup>の手段を否定し、その在り方を認めなかった。本来ならば、見  
限られていてもおかしくはないだろうに。

今もこうして忠義を尽くしてくれる。そこまでの事をした覚えがない。不安や猜疑ではなく、純粹にそれを疑問に思い、ダンは問いかけていた。

『……ああ、くそ。ほんとにこの人は、ずけずけ直球で言ってきたやがる。こちとらひねくれた性分だったのに、ああもう、絶対に一度しか言わないからな。』

アンタはとんだ爺さんだよ。馬鹿げた信念を本気で貫く頑固者で、こうと決めたらマジに譲らねえ。騎士道精神旺盛な、俺には似ても似つかないかつこ良さだ。そういうアンタが——』

心の内の念話で、躊躇するように狩人<sup>アーチャー</sup>が口ごもる。  
念話ではそれ以上の事は伝わらない。ただ一拍置いた後、感情を顕わに叫び上げていた。

「——そんな旦那の事がッ！ 俺はッ！ 大好きなんだってんだよッ!!!」

吐き出されたその言葉は、念話だけには留まらない。

荒ぶった感情はそのまま生の声となって周囲に響き渡る。

当然、それは戦場を同じくする軍将<sup>アーチャー</sup>の耳にも届く。

一斉に転換する銃砲火。未だに不可視の狩人<sup>アーチャー</sup>に、一帯を包む火線が襲いかかった。

『くわっ!? やべえ、ちくしょう！ 声が出ちまっていた。馬鹿やつてんなあ、俺ッ！』

つうか、やっぱ無理だわ。こんな小っ恥ずかしい事、勢い任せでなけりゃあ口から出てこねえっての！ 素面でなんて言えるか、くそつたれ！』

「アーチャー、なにを……？」

向けられる銃火の雨より逃げ回りながら、アーチャー狩人は饒舌に回して  
く。

それは繋げた心中で行う念話であったが、発露した感情はむしろ普  
段よりも熱を帯びていた。

『ああ、そりゃあ戦い方に注文つけられたのには思うところもありま  
すよ。くそ真面目に正攻法なんて、もう勝つ気があるのかってね。そ  
れで俺がただけ頭悩ませたと思ってるんっすか。』

俺のやり方を快く受け入れて、推奨してくれるマスターだったな  
ら、そりゃあ俺も楽だったでしょうよ。罨でも毒でも何でもござれ  
と、そりゃあ俺としても気が楽ですわ』

それならば確かにやりやすい。アーチャー狩人も本領を發揮して、この聖杯  
戦争でも強豪らに打ち勝つ事も不可能ではなくなるだろう。

例えば、目的のためならばあらゆる犠牲を厭わない、冷酷な戦闘機  
械の如きマスターであったならば、アーチャー狩人は持てる腕を存分に振るえ  
たに違いない。

多種多様に習得した破壊工作、毒殺、狙撃、罨などの外道の戦術で、  
より勝利に近づける戦い方に徹する事が出来たはずだ。

そういう意味では、ダン・ブラックモアというマスターは最悪と  
いってもいい。

例に上げた者とは、まるで正反対。その者からはさぞや強い蔑視の  
眼を向けられる事だろう。

『——冗談じゃねえ。そんな奴はただの下衆野郎じゃないか。なん  
だって俺が、そんな奴なんぞのために泥を被らなきゃならねえんだ  
よ。』

そんな野郎に救えるものなんてない。どんな理屈をこえたところ  
で、所詮は俺と同じ穴の貉、現実には妥協しただけの選択だ。そんなも  
んで世界の何が変わるってんだ。

旦那の信じてるものは正しいんだよ。本当に強いのはアンタみた  
いな人だ。戦場を思い知って、現実ってやつのは非情さを何度も見せら  
れて、それでも人の正しさを見失わなかった、ダン・ブラックモアこ

『それが強くて正しい人間なんだ』

けれども、戦術の是非だけが、サーヴァントとの相性とは限らない。非道の手段に賛同する、非情のマスター。そんな輩には、狩人は決して忠義を誓う気にはならないだろう。

同類であるからこそ見えてしまう、その根本にある芯の醜さ。それを知るからこそ、そうした者を勝たせてはならないと分かっている。『ほんと、大したもんだと思いますよ。俺なんかには過ぎた』マスター「主君」だ。

一応さ、これでも俺って英霊つすよ。人間の上位存在なんすよ。人の祈りの具現だの、霊長の守護者だの、色々言われてる結構すごい奴なんですよ。

なのに、そんな英霊の俺に対してまるで物怖じしねえでやんの。ずけずけ人の心情に踏み込んで、大真面目に説教かましてきて、堂々と真つ当な道理を並べてきやがって。まるで——』

——まるで、本当の父親であるかのように。  
幼少の頃、もはや記憶も定かではない父との思い出。

顔も声も、まともに思い出す事は出来ない。それでも、父に教わった術の数々は、後の人生で彼を生かす何よりの助けとなった。

ドルイド僧の秘術。一人の青年を、軍隊すら相手取る技巧者へと押し上げた何よりの要因。その技の助けを受ける度に、狩人は父の存在を近くに感じていた。

ダンの告げた否定とは、決して侮蔑の意味ではない。

誤った行いを糺そうと、憎しみではなく慈しみから叱る、それは父親にも似た厳しさと温かみ。

いつしか狩人は、そこに父性を感じていた。

『そんなアンタを死なせたくねえ、敗けさせたくねえんだよ、俺のせいだ！ 弱つちい俺なんかのために、アンタほどの人が敗北するのが許せない。

この戦い方を選ぶ理由なんて1つですよ。真つ当なやり方、尋常な決闘、そりやそつちで勝てるならそうしたいですがねえ。あいにく自分の事はよく分かってるんすよ。俺にその手の奇跡なんざあり得な

いって。

所詮、ひねくれ者のリアリストでね。見込みのない博打は願い下げだ。そんな格好付けるだけの自己満足に興味はねえ。だったら、残ってるのなんてこのやり方しかないでしょうよ』

どんな過程を経たとしても、勝てなければ意味はない。

だって勝てなければ終わりなのだ。敗者は消滅し、退場するのが定め。やり直しは一切ない。

ならばやる事など決まっている。それがどのような手段であれ、ダン・ブラックモアを勝利へと至らせる。それだけが狩人の成すべき事である。

ダンを勝たせたい。この老騎士にこそ聖杯を握らせたいと本気で思っている。

そのためならどれだけ己が泥を被る事になろうと、ダン自身の信条に反する事になろうと構わない。

願いがあるとすれば、それはダンとの勝利。誉れがあるとすれば、それはダンと肩を並べる今である。この父にも似た老騎士と共にある事が、狩人にとっての誇りだった。

『たとえ泥を被って、性根まで薄汚れようが、それでも譲れないものがあるから、人は必死になつて足掻くんだろう。なあ、そうじゃないのか、旦那』

その言葉に、ダンはようやく得心する。

己の祈りは、過去に囚われた死者のそれだ。望みだと口にしておきながら、狩人が言う必死の思いが欠けている。

そもそも、自分の願いとはどちらなのだろう。亡くした妻か、それとも適わなかった騎士たる在り方か、もはやそれすら判然としない。

ただどちらにせよ、必死の思いなど抱けそうにない。意志は堅くとも、何が何でも大望を果たさんとする獰猛な熱意が、この老骨の身には既に失せてしまっている。

英霊という、既に死した過去の亡霊であるはずの狩人の方が、生命のカタチとしての正しさを有しているとは、何という皮肉だろう。

「愚かだな、本当に。何と愚かな勘違いをしていた事か」

己の事さえ見ええず、周りの事も碌に見えてはいなかった。

同胞だの、望みを同じくする者だのと、それしきの言葉で片付けて、その内にある思いに気付こうともしなかった。狩人の身を尽くす忠節に報いようとしなかったのだ。

そんな有り様で、恥じない在り方だとは笑わせる。ましてや人間としての在りし日を取り戻せるはずもないのに。

『まあ、旦那の信条とは何処までも合わないもんかもしれないけどね。理解して、とまでは言いませんが、せめて今回くらいはお目撃してくれませんかねえ?』

「……いや。もう十分だ、アーチャー」

未だ自嘲的な狩人に、ダンは無言の口調で告げた。

「おまえに委ねよう。少なくともこの戦いに限っては、どんな手段にも口出ししない。如何なるものでも、それはダン・ブラックモアの手段だとして認知する」

その言葉は、即ちダンが受け入れた事を意味している。

卑劣な手段、非道な戦術、狩人が用いる戦法の数々を、一時でも己のものとして。

それは真なる主従のカタチ。主と従者、互いを容認し、信頼した上で肩を並べる同胞である。

そして、それは狩人にとって、何よりも求めていた言葉だった。ダンの信条を叶えたい。そう願いながらも己の力の無さから意に反した戦いしか出来なかった。

口ではどう言い繕おうと、それが無念でなかったはずがない。もしも他のサーヴァントだったならと、憤りの思いは常に胸の内にあつた。

そして今、初めてお互いの向く先が揃っている。

マスターと、父とも仰ぐ相手だから、それが何よりも嬉しかった。

『……なあ、旦那。1つだけいいかな?』

だから、最期にもう1つだけ。

今まで訊く事が出来なかった、ある疑問を吐き出した。

『旦那はさ、正直なところ、サーヴァントが俺でよかったのかな?』



その問いに込められた思いを察せられないほどに、ダンは無鈍ではなかった。

「ああ、勿論だとも。他のサーヴァントなど考えられん。ダン・ブラツクモアのサーヴァントは、おまえ以外にあり得んよ」

それは同情心の言葉ではない。本心からの思いである。

気付けただろうか？ 他の英霊との契約で、己の思い違いと今の悟りに。

たとえ望んだ通りの戦いが出来たとしても、そこにあるのは老いた果ての息吹なき行軍だ。そんな様では何も得られはしないだろう。

他の誰でもない、狩人<sup>アーチャー</sup>だからこそ悟れたのだ。己と近い道を歩きながら、違った解答に行き着いた彼であったから、今の自分がここにいる。

『そうか。へへ、ずっと気になっていたんすが、そうかあ。俺で、いいんだ』

心中での呟き。内に生まれた誇らしさを、狩人<sup>アーチャー</sup>は確かに実感していた。

『なら頼むぜ、旦那。弱つちくて狡いばかりの俺だが、勝ちへの汚さだけは自信があるんだ。俺はまだ、何も諦めてなんかいないんだぜ』

心に響く声に含むのは、信頼と共にある確かな自信。

同胞の告げる言葉に、ダンは何も疑問に思う事なく信頼を返していた。

「語らいは済んだのかな？」

直の耳に届く声が、ダンの意識を正面の男へと引き戻す。

対峙の中、サーヴァントと語らうダンにも、甘粕は手出しをしないままだった。

「ふむ、見過ごされていたか。これは礼を述べておくべきかね？」

「構わんとも。死闘の最中、極限の密度でしか出せない心境もあるだろう。そこで何らかの解答が得られたのなら、俺としても喜ばしい」愚行の指摘に意味はない。この愚かしきこそが甘粕正彦の本質である。

たとえ敵に利する行為だとしても気にしない。それで彼が望むものが見られるのだとしたら喜んでするだろう。

甘粕正彦は人の意志を愛しているから。その輝きを目にするためならどんな馬鹿げた真似でもやってのける。

「……貴君は、どうしてそこまでする？ 望むところは理解できたが、やはり納得はできない。その行動は、あまりにも道理から逸脱している。貴君を支える骨子とは何だ？」

「それこそ分かりきった事ではないか。俺は人の意志を愛している。その勇気を、克己を、輝ける姿の全てを尊んでいるのだ。故に守りたいと願い、見届けたいと望む。何もおかしくあるまい。」

西欧財閥へ反抗するのも、結局はそれだけのためだとも。停滞に身を委ねて歩みを止める。そのような木偶の世界など認められるはずがない。自ら閉じようとする人類の未来、必ずやこの俺が再び立ち上がらせてみせよう。

我が祈りに私心はない。そんなものなら自力で手に入れている。俺が願うのはただ一点、人の目覚め、それだけだ。そのための世界を、聖杯を用いて流出させる」

猛々しく言い放つ様、まさに純心そのものだ。

そこに偽心など一つもないのだろう。たとえ初見の者でも、問答無用に信じさせる思いの真つ直ぐさ、そして熱量。

まさしく破格の益荒男だ。甘粕正彦こそ勇者であり、怪物の呼び名にも相応しい。

故にこそ、ダンにも目の前の男の異質さが理解できた。

「……なるほど。遠坂凜が何故袂を分ったのか、その理由にも得心がいった」

もはや迷いはない。ダンの眼に戦意の火が灯る。

年月を刻んだ樹木のように揺るがず、変わらなかつた歴戦の老騎士

に、再び生命の熱が甦ろうとしている。銃身を握る手に力が籠った。そう、もはや立ち竦んでいるだけなど有り得ない。

元よりあり得ない選択だったのだ。倒すべき相手を前にして静観しているなど。

それでは何も変わらない。座して敗北を待つのみだ。覚悟を決めて動き出さねば、勝利は決して得られない。

分が悪い？ それがなんだ。

戦闘者として相手が優れる？ だからどうした。

己のサーヴアントが、否、自分などを慕ってくれる若者が、今まさに命を懸けているというのに。それを自分は指を啜えて見ているだけなのか。

何を馬鹿な、有り得んだろう。そのような無様さで、誇れるものなどありはしない。狩人<sup>アーチャー</sup>が諦めていないというのなら、自分もまた動かねばならない。

意志は決まった。為すべき事は一つである。

ダン<sup>アーチャー</sup>は甘粕<sup>アーチャー</sup>に敵わず、狩人は軍将<sup>アーチャー</sup>に及ばない。だが、まだ敗北には至らない。

これは1人の戦いではない。ダンと狩人<sup>アーチャー</sup>、2人の主従による戦いなのだから。

「ひとつ、尋ねておこう」

恐らくは、この問答が最後となるだろう。

そう予感しながら、ダンは甘粕に問いを投げた。

「貴君はわしの欠落に気付いているようだった。一体何を以て、貴君はそのように判断したのか」

「どうという事でもない。知っての通り、我々はこの月での邂逅が初だろう。人となりもよくは知らんし、何かを言えるほどではあるまい。

別に今の有り様も欠落と言うつもりはない。騎士道という戦い方についても文句はないさ。恥じる事なき道義に自らを律する。それはそれで十分に有りだろう」

甘粕正彦は他人の在り方を否定しない。善性であれ悪性であれ、人

の行いを等しく認める。

彼が重要視するのはあくまでも絶対値。思いに懸ける意志の強度、それさえあればどのような在り方であれ、見るべき人の輝きである。

故に、甘粕が嫌悪するのは意志の懦弱。自身の思いに重さのひとつも乗せられない軟弱さこそ、人を腐らせる害毒であると断じていた。「だがな、貴方にとってはどうであれ、ダン・ブラックモアの価値とは歴戦を生き抜いた軍人である事だろう。長きに渡る軍役、練磨された年月が戦士としての貴方を構成する。

それを自ら放棄した。生涯を費やして得た価値を無意味だと切り捨てたのだ。その果てに、一朝一夕の騎士道など持ち出されて、一体何を期待しろと言うのだ？」

「……仰る通りだ。返す言葉もない。わしも随分と耄碌していたようだ」

甘粕の指摘に、ダンは何も言い返さずに頷いて肯定を示した。

「歩んだ過去の軌跡は、どうしようもなく己のものだ。如何な後悔があろうとも、積み上げてきたそれらこそが今の自身を形成する。新しい道を歩き出すには、わしは些か歳を取りすぎた」

思い返すのは己の足跡。半世紀以上の年月を刻んだ生涯の過程だ。多くの後悔があった。多くのものを蔑ろにした。誇れる道だったとは言い難い。

それでも、それこそがダン・ブラックモアという人間なのである。その歩みを否定して、古錆びた騎士道を持ち出しても、目の前の男に勝てるわけがない。

甘粕正彦は意志の勇者、そして怪物だ。前に進む力という観点で、質も強さも遥かに上をいく。

初めから勝てる道理はなかった。未来へ歩む力を失った時点で、自分に先などなかったのだ。

「だが、こんなわしにも献身を捧げてくれる者がいるようだ。ここで折れば、その忠心目で踏みじける事になる。及ばざるとは理解しているが、この老骨の全てを懸けて挑ませてもらおう」

そうしてダンは、明確な宣戦を告げた。

勝てないとは承知している。それでも成し遂げんとするのは、その覚悟。

怖れも、諦めも、全て飲み込んだ。余さず咀嚼し、揺るがぬ戦意に変える老熟した精神だ。

手にある古式の銃身。充填はとうに終わっている。

その感触が頼もしい。戦士としての姿勢、忘れていた鉄の銃身たる己が甦った。

「……ああ、待ちわびたぞ、この時を」

そして、誰より人の意志を尊び愛する甘粕である。老騎士の内に生まれた克己の意志を、即座に感じ取っていた。

その表情は喜色満面、好敵手の目覚めに示すのは明らかすぎる歡迎だ。相手の意志に応えるように、甘粕もまた気迫をみなぎらせて腰の軍刀へと手を置いた。

そう、元より意志の性質など問うてはいない。

大切なのは絶対値だから、立ち上がったのならどんなものであろうと気にしない。

見込みとは違った奮起の仕方であろうが構わない。あまねく意志を等しく認める男のこと、何であれ見るべき光があるなら称賛するばかり。

理解と紙一重の盲目さ。対峙するあらゆる魂に敬意を示し、同時に闘志を高められる異形の心は、戦闘者としてこの上ない精神性であった。

そこから先は、もはや互いに黙して語らない。

語るべき事は全て語った。後は本来の意義に立ち戻り、ただ死合うのみ。

両者がそれを理解している。静止していた時が動き始める、一触即発の気配が間にあった。

互いの手は、すでに各々の武器を触れている。

即ち、抜き打。刀を、銃を、引き抜いた次の瞬間には決している。

それは嵐の前の静けさだ。一瞬一瞬が何倍にも引き延ばされる濃

密な時間、静寂の内に数秒が経過する。

果たして切っ掛けは何だったのか。

対峙していた両者にも正確なところは分かるまい。

互いの直感が同じ何かを悟ったのか。どうあれ両者が動いたのはほぼ同時の事だった。

剣閃が奔る。銃声が響く。

瞬時の踏み込みの後、2人の影が交錯した。

「――是非にも及ばず。ここまでじゃ、アーチャー狩人よ」

そして、英霊同士の対決にも決着の刻が訪れる。

未だアーチャー軍将の眼には、アーチャー狩人の姿は見えてはいない。

不可視化の宝具『ノーフェイス・メイキング顔のない王』。纏った者の姿を完全に隠蔽する緑衣は、今もアーチャー狩人の抵抗を支える重要な生命線だ。

これがあつたから、今まで何とか凌げていた。そうでなければアーチャー軍将の持つ圧倒的な物量の前に容易く打ち倒されていただろう。

しかしそれにも、遂に限界が訪れた。

アーチャー軍将は、ただ乱雑に無数の銃火を扱ってきたわけではない。

繰り出す一手にはそれぞれに意味がある。さながらそれは詰め将棋。稀代の軍略家たる彼女の見識は、不可視の姿を暴く事なくその存在を曝し上げようとしていた。

ばら蒔かれた銃弾の大半は空を切り、何もない地面を穿つ。

しかしそれも1つの情報だ。標的を捉えなかつた事は、そこに標的がない事も意味する。

そうして出揃っていく情報、外される予測位置。銃撃の弾幕が相手の逃げ道を限定して、ゆつくりと包囲網を狭めていった。

そして遂に、アーチャー狩人のあらゆる逃走経路が封殺される。アーチャー軍将が特定した予測位置、何もないと見えるその一帯は的中していた。

詰み、である。

向けられる多数の銃火を防ぐ術は、アーチャー狩人にはない。

一斉砲火が放たれれば、その身は成す術なく穿たれて散り果てるだろう。

「足掻きも徒労に終わったか。だがそうした無情もまた習いなり。そのまま散り逝けい」

発せられる将の号令。そこには容赦も慈悲もない。

王の意志が伝播した種子島は、即座にその銃弾を吐き出すだろう。もはや進退窮まつている狩人アーチャーにそれを止める事は不可能だ。

故に、その殺意を止めたのは力ではなく、行動そのものの意外さだった。

「……何のつもりじゃ？ 今さらになつて観念したか？」

訝しんで尋ねる軍将アーチャー。彼女の目の先では、不可視の衣を脱ぎ捨てて狩人アーチャーがその姿を現し出てきていた。

「あいにくと、そんな殊勝な心掛けならもうちよい賢い生き方してあげるぜ。生前にも、この難儀な性分のせいで随分と苦勞したクチなんですね。

とはいえ、流石にこの期に及んで縮こまって隠れてても仕方ねえだろ。俺の力じゃあこいつはもうどうしようもない。このまま姿も無しに消えるつてのもどうかって思つてな」

「何処までも弁えた奴。結局、英雄の如き勇猛さとは無縁であったが、そこまで徹するならば価値の1つもあるやもしれぬな」

それは軍将アーチャーなりの賛辞であつたのだろう。

勇猛を誉れとする者は幾らでもいる。戦場の華、鉄風雷火を切り裂いて現れ出でる雄々しさは、まさしく英雄たるものの典型だ。

士の誉れよりも実利を求め、戦場に新たな価値観を生み出した革新の王。武人の戦果を良しとしなかつた奸雄にとつて、アーチャー狩人の現実に沿つた卑劣さには見るべき所もあつた。

「そうだ、俺じゃあアンタには敵わねえ。俺の方がはつきりと弱いからな。いくら英霊に伝承ごとの優劣が無かろうが、一介の義賊風情が統一戦争に勝ち上がった王様より強かつたら道理が合わない。非難

轟々、主観混じりの脚色も度が過ぎてるってな」

だが、その賛辞を狩人は聞いていない。

敵からの称賛を誉れとして敬意を表する、そんな英雄らしい行為をしている余裕はないのだ。

誉れよりも実利を、軍将と性質を同じくする狩人だからこそ、彼の意識にあるのは己の、ひいてはマスターの勝利だけである。

「だから、マジでどうしようもなかったんだぜ。俺一人の力じゃあな」  
狩人は弱者だ。英霊としてどうしようもなく格下だ。

それを弁えているから、決して博打のような真似には打つて出ない。勇気と決意で不可能を可能にする、そうした英雄の奇跡は自分には無いと分かっている。

彼が覚悟するとすれば、それは別の事だ。勇猛に前へと踏み出す覚悟ではない。たとえ無様で光明など見えなくても、足掻きながら勝ちに繋がる道筋を探し続ける覚悟である。

だからこそ、雄々しく立ち上がったその時には、すでに勝ちへと繋がる道を見つけてなければならぬ。

「本当にな、—— 助けてくれてありがとう、旦那」

瞬間、両者の間を挟んだ地面が、毒の瘴気を撒き散らして爆散した。「ぬっ!? まだこんな仕掛けを残していたか」

即座に後退する。軍将にダメージはない。

不意こそ突かれたが、それで一矢報いさせるほどの甘さはない。どんな場合でも対応可能なよう、常に意識では身構えている。

そして自身が退いたところで、軍将の攻撃には些かの影響もない。展開された種子島の銃列は、既に狩人を包囲し捉えているのだ。

号令が下されて、無数の銃口が一斉に火を噴いた。

軍将率いる銃火の列に狂いはない。逃走する余地も与えずに、銃弾は狩人を蹂躪した。

「な、にい……ッ!」

いや、蹂躪した、かに見えた。

だが目の前に広がった光景は、軍将をして驚愕に値するものだった。



狩人がいたはずの場所にあるもの、それは樹木。

それも人の身の丈など遥かに超えた、成熟した樹木である。突如としてそれが大地を貫き、軍将の目の前で立脚した。

発射された銃火が穿ったのはそれだ。銃弾の雨に晒されたその樹木は、そのまま残骸を散らして崩れ落ちた。

この樹木には、軍将も覚えがある。

3日目に起きた衝突。アリーナ内を毒の瘴気で満たした樹木と同じものだ。

真名から考えるなら、その樹木こそは『イチイの樹』。かの義賊が活躍した森に生えていたとして、逸話においても義賊と密接な関係にある毒性を持った類である。

狩人にとつての象徴であり主武装といっても良い。この樹を狩人が用いてくる事自体は何ら不思議と思うものではない。

だが、早すぎる。

眼前の樹木が現れたのは、一瞬だった。軍将が号令をかける瞬きほどの間に、それは毒の樹木として機能するまでの成長を見せたのだ。

ここまでの軍将は、そこに至る前に潰してきた。仕掛けを警戒するだけでなく、仕掛けそのものを用いさせない。自身も狡猾な策略家として、常に一手先を読み切る事だ。

これほどに早く仕掛けを用意できるなら、何故今まではそうしなかったのか。そうすれば今までの展開も、ここまで一方的なものにはならなかったはずだというのに。

いや、それだけならば不思議には思っても、驚愕までは見せなかった。

軍将の目の前で育ってみせた『イチイの樹』は、一本きりではなかった。

周囲の景観が変貌していく。古の闘技場の姿は、無数に乱立している樹木の群によって覆い尽くされていた。

それは『森』の侵略だった。根を張り、起立した毒の樹木、それが決戦場を塗り潰して現れた風景は、まさに“森の義賊”を象徴する

『森』のものに他ならない。

周囲を『森』に飲み込まれる。もはやこの場では軍将こそ排斥されるべき異物である。

これだけの規模の事を、事前の予兆もなく、軍将に潰す暇さえ与えずにだ。そんな事は不可能であり、故にこそ広がる光景は異常以外の何物でもない。

——否、その実、見当ならば付いている。

不可能をも覆す奇跡の対価、この月に集ったあらゆる主従が有するその存在を、軍将として無論のこと理解していた。

「毒血、深緑より沸き出する。隠の賢人、ドルイドの秘蹟を知れ」

森に潜みし者、压制者を誅する義賊。

”森の狩人”、現れた森の影へと溶け込んで、既にその手には弓を構えている。

これは狩人だけの力で実現できるものではない。

言ったように彼は罫師、そして罫とは事前の仕込みがあつてこそ真価を発揮する。

単体の力では、ここまでの地形改変じみた現象は起こせない。それが出るほどの英霊としての霊格を、狩人は有していないからだ。

この『森』を実現したものは、令呪。三画のみの奇跡の対価こそ、何よりの要因である。

仕込みならば、事前に行っている。

軍将が振るう三千の銃火に追われ、しかし何もしなかつたわけではない。

ここまでの足掻きは無意味ではない。無為にも見えた反撃には意味がある。今こうして展開されるイチイの樹の群、その種子はその時に巻かれたものだ。

全ては計算、偶然や奇跡に縋った成果では断じてない。そしてだからこそ、己だけの力ではどうしようもないという事も分かっていた。

奇跡が必要だった。狩人だけでは決して手が届かない奇跡が。

ダンが辿り着かせてくれたのだ。マスターが与えてくれた令呪の恩恵が、この起死回生の一手へと繋げてくれた。

「受けるよ、アーチャー軍将。これがシャーウッドの森に伝わる殺戮技巧、姿なき自然の化身の一矢。

我こそは謳われし”ロレン・フッド森の狩人”、そして——」

もはや『シャーウッド森』そのものと化した決戦場、充満した毒の瘴気からは逃れようもない。

その中心に立たされたアーチャー軍将。その身はすでに幾つもの不浄の毒素に蝕まれている。

アーチャー軍将の眼から狩人の姿は再び消え去った。木々に紛れて自然と一体であったとされる透明の王、森の人。『森』が現れた今、その姿は誰にも捉えられない。

外法である。非道である。誇りなどとは縁遠い、英雄らしからぬ卑賤な輩。

全て自覚している事柄だ。それに対する負い目は今もある。それでも、たったひとつ手に入れた誇れるものを、アーチャー狩人は掲げてみせた。

「——俺はダン・ブラックモアの”サーザント英雄”だ」

己は外道だ。掲げる旗さえ持たなかった自分に、正しさを語る資格はない。

だからこそ、真に正道を歩む者のために仕えたかった。その道を支える事が出来たなら、卑しさばかりの自分でも、少しは誇らしさなんでものを感じられるかもしれないから。

胸に秘めていた願いは、すでに叶っている。誰より正しい騎士道の下に仕える事が出来たから、その騎士に認められた事こそが、何よりの”誉れ”であったのだから。

弓弦を引き絞る。装填された一矢へと渾身の力を込めて。

身に宿す不浄を暴発させる毒の矢尻。単一では真価を発揮し得ない宝具、その”必殺”を顕現させるための条件はもう揃っている。

標的は矢の先に、狙った獲物は逃さない。アーチャー狩人たる者の技量の冴え、ここに示す。

「イ！バカ祈りの弓——！！！！」

持てる勝算の全てを賭けて、集大成たる一矢を射ち放った。

緑の矢が奔る。

音も無く、姿も無い。森の一部と溶けた矢の存在を察知する事は困難極まる。

『イチイの樹』より作成された毒矢、真名解放を経たその効力は、如何なる英霊であろうとも致命に繋がる。

身の内に森の毒を持つ軍将アーチャーが受けたなら、致死から逃れる事は不可能だろう。


迫る危機を察知できず、捉えたはずの狩人アーチャーを見失った。

先までの展開から一転しての窮地である。耐え忍んだ末に磨かれた弱者の牙、それが今まさに強者たる軍将アーチャーを狩り獲らんと剥いていた。

有する三千の銃火でも、これを防ぐ事は適わない。

もはや軍将アーチャーに打つ手はない。対処すべきものが映らず、殺意だけが身を貫いている。

射手にあるのは確かな手応え。狩人アーチャー自身、内心で勝利を確信した。

「――顕せ、!!!!」

刹那、闘技場を森で埋め尽くした時と同様に、燃え盛る大火が世界を覆い尽くしていた。

——何が、起こった？

思い浮かんだ疑問はそれ。寸前までは勝利の確信さえあったというのに。

覚えている、己の『森』を塗り潰した炎の赤。地形改変ではない、世界そのものを上書きしたかのように現れた地獄の風景。

そして元いた場所に戻された時、狩人アーチャーの身には無数の銃創が刻まれている。

「て、めえ……なにしやがったあ……ッ!?」

「事前に仕込んでおつたのは貴様だけではなかったという事じゃ」  
力無く崩れ落ちる。

もはや身を起こし支える事すら叶わない。

銃弾は確実に急所を貫いている。完全な致命傷だ。

もはや消滅は避けられない。狩人アーチャーは敗北したのだ。

「貴様に”森”があるように、わしにもまた己の”世界”があった。それだけの事じゃ」

「俺の策を、読みきつてたつてのか……ッ!?」

「うつけめ。出し抜けると思うたか？ 一時軍勢を退けてみせた程度で、乱世の修羅場を勝ち抜いたこのわしを。あれしきの策で倒れるようでは、天下になど到底届かぬわ」

倒れた狩人アーチャーに、軍将アーチャーは無情にも言い捨てる。

決戦場を覆い尽くした『イチイの樹』。戦場に再現された『シャーウッドの森』。

その上に、更なる”世界”を上書きした。軍将アーチャーが有する心象風景、それを具現化する”宝具”で以て。

毒の瘴気はかき消され、森に潜んだ狩人アーチャーは曝け出された。姿を顕わとされてしまえば、もはやその身を守る手段は何もない。

捉えた好機を、軍将アーチャーは決して逃さない。銃撃の雨に晒されて、成す術なく狩人アーチャーは蹂躪された。

世界の上書き。それほどの大儀礼が容易いものであるはずがない。たとえ事前に準備を整えるにせよ、狩人アーチャーの手を読んでいなければ間に合わない。『森』を展開し終えた後では駄目なのだ。

軍将は読んでいた。狩人が賭けた起死回生の策、令呪を費やした『森』の発現を見抜いていたのだ。

「貴様にとつての必勝とは、毒に侵させてからの一矢であろう。過程はどうあれ、貴様がこの戦法を選んだ時点で、最後はそうくると予測できた。

ならばそれを潰す手を用意するまで。万一にも逃れられた時、貴様を引き摺り出す手段をな」

「ち、くしょう……ッ！」

軍将の声は冷徹だ。狩人を戦果を認める様子は微塵もない。

畏師である狩人の仕掛けを読みきり、その先を行ったのだ。相手の土俵である策略においても上回った、ならば軍将の態度も必然と言えるかもしれない。

しかし、果たして軍将は自覚しているのだろうか。

”世界”は彼女にとつての秘中の秘。『三千世界』を超える真の宝具である。

本来ならばこの戦いに用いるべきものではない。それは狩人を侮つての事ではなく、純粋に相性からくる問題だ。

その宝具とは、神仏の否定。神性、信仰に類する存在を滅ぼす地獄を具現化させるもの。

神仏であればこそ、”世界”は効果を發揮する。神性を持たない狩人に対しては、その真価を發揮できない。

要は割りに合わないという事で、使用する事自体がすでに悪手である。

だというのに、使わされた。

その原因は他でもない、狩人に追い詰められたからだ。

軍将にとつて、この備えは言葉通りに万一の事態を考えてのもの。まず使用する事はあり得ない、そう前提にした上での用心の策なのだ。

使わされたという時点で、事態はすでに軍将を予想を越えたということ。それは狩人の一矢が、確かに軍将へと迫っていた事の証左である。

軍将アーチャーにそれが分かっていないはずがない。

なのに黙して語らずを貫くのは、それを讃える事の無意味さを理解しているためか。

正道の誉れよりも、非道の果ての勝利を望んだ狩人アーチャー。厳然たる敗北が定まった以上、もはやどんな言葉にも救いの価値はない。

その命運を焼き落としたのは己自身。労いなどそれこそ欺瞞に満ちた戯言に過ぎないと、彼女の背中にはそのように語って見えた。

「……すまねえな、旦那。足掻いてみたが、やっぱ俺じゃあ荷が重すぎたみたいだ」

ノイズが走る。それは黒い影のように、狩人アーチャーの身を蝕んでいく。

聖杯戦争の宿命、敗者は塵となり尽き果てる。その結末が狩人アーチャーにも訪れつつあった。

消失の中、狩人アーチャーが思うのはマスターの事。

勇んで意地を通してみせた所で、結局はこんなオチだ。泥を被ったところで何も成果が得られないとなっては本当に笑えない。

無念、無念だった。せつかく得られた誇りに対し、何も報いる事が出来ないなんて。

所詮は三流のサーヴァント。情けない事この上ない。

ダン・ブラックモアと契約を結ぶには分不相応、その隣りにはもつと出来のいい英霊が立つべきだと今でも考えてしまう。

——しかしそれでも、本音が叫ぶのは、どうか次もまたという願いなのだ。

仮初の存在が消えていく。

薄れいく意識の中で、思い浮かべるのはもしもの風景。

有り得ないとは分かっている。それでも、もしも次というものがあるのなら、と。

またの機会、再び自分を選んでくれたなら、次こそは必ずや最期まで戦い抜いてみせよう。

那。——そんな時には、まあ、説教はほどほどにお願いしますよ、旦那。

益体のない想像に笑みを溢して、狩人は消滅した。

「――何を言うのだ、狩人」

そして、サーヴァントらと同じく、マスター間の戦いにも決着はついていた。

片方が倒れている。血溜まりに沈んだ姿に、今一度立ち上がる力は見えない。

ムーンセルの判断を待つまでもなく、勝者と敗者は明白だ。交錯の果て、倒れたのはダンの方だった。

「おまえは十分にサーヴァントの務めを果たしてくれた。おまえでなければ、わしは決して今ある境地には至れなかったろう。

わしではない、おまえだ。囚われた妄執ではない、過去への矜持を貫いたおまえこそが真に誇りある者だった」

絞り出すような声に力はない。弱りきったその様子は、ダンが死の淵にある事の証左だ。

だが、そこに絶望はない。消滅の運命を前にしながら、その眼差しは穏やかでさえあった。

ダンの心は満ち足りている。言葉よりも雄弁に、彼の表情が語っていた。

「本懐は果たされたのかな？」

敗者らしからぬダンの姿に、勝者たる甘粕が問いかけた。

「……さて、当初の考えとは大分違ったものとなったが、これで良かったのだと思えている。

望んだものには届かなかったが、代わる答えを得られた。ならば悔いも残すまい」

「最後の一合は見事だったよ。前に進もうとする気概が感じられた。



あれでこそ、かつて俺が乗り越えんとした御仁。挑むにたり得る強さであった。

素晴らしかったぞ、騎士・ダン・ブラックモア。貴方という試練を俺は胸に刻もう」

それは称賛なのだろう。相手を好敵手と認め、甘粕は惜しみなない賛辞を送っている。

その姿勢は尊敬に値する。敬意を払うべき在り方なのは間違いない。だがそれを聞いても、今のダンにはひどく上滑りに響くのだ。

「……その腕、剣を手にしているのは利き腕ではないな？」

黒色の軍刀を握る甘粕の『左手』を指し、ダンは指摘する。

「思えば、違和感は随所にあつた。最後の交錯、その不調の存在が無ければ、令呪の使用にまでこぎ着けられる事も無かつただろう。」

まったく、最後まで狩人の世話になつてしまつたか。耄碌も極まつたな」

甘粕の右腕には、3日目の際に狩人が刻んだ毒がある。

蝕む毒性は未だ拭えていない。甘粕は今も片腕を封じられた状態だ。

それが無ければここまでの善戦は無かつただろう。ダンのやり方を貫こうとしていれば、今に至る事はなく呆気ない幕引きがあつたはずだ。

結局、この戦いを支えてきたのは狩人なのだ。勝利に向かおうとするひたむきな意志こそが、聖杯戦争での強さとなるものだと言明するように。

「……甘粕正彦。貴君にひとつ尋ねたい」

目の前の男は、恐らくはその権化。意志の強度ではまさしく最強だろう。

そんな男が相手だからこそ、ひとつの疑問がダンの中に思い浮かんだ。

「貴君にとって、過去とはどういうものか？ 家族、友人、人の営みの中で築いてきた数々の思い出。そういつたものは、貴君には如何に映るのだろうか？」

ダンにとって、それは未練。

選ばなかった人生、得られなかった日々。それらを求めた後悔こそが彼の願いだ。

それは後ろを向いた、過去に囚われた祈り。前を見据えて未来を求めめる意志を持ってなかったから、勝利への確固たる信念を持ちきれなかった。

「俺が思うに人の過去とは、その人間そのものだ。成長、感動、挫折、様々な経験を経て学び、現在という大地にそれぞれの人間は立っている」

淀みのない答えを甘粕は返す。

整然とした言葉には迷いが一切見られない。内容自体も真つ当で、異質なものは何も無い。

「蔑ろとすべきではない、かといって囚われるべきでもない。どれだけ耐え難い経験があろうと、しかと刻まれた過去から逃れる事は出来ないのだから。また同時に、所詮は過ぎ去ったものでしかなく、それによって今の行いを縛られるべきではない。

己が歩んだ足跡をしかと受けとめ、糧へと変えて前に進む。人の生涯とは、その繰り返しだろう」

どこまでも正論だ。共感しやすい言葉は否定する方が難しいだろう。

甘粕正彦は異端の感性を有しているわけではない。彼の性質は善であり、誰しもが望むものを尊んでいる。決して理解不能な異常者の類いではないのだ。

「ならばこそ、我らは足を止めるべきではない。この身、この意志がある限り進み続けるべきなのだ。いかなる喪失があろうとも、それを超えるものを築く決意が出来たのなら、そこには確かな意味がある。

そしてその果てには、きつと素晴らしい場所に辿り着けると信じている。誰かに限った話でなく、あらゆる者がその可能性を持つのだと、俺は皆に気付いてほしいだけだ」

そう、異常なのは感性ではなく、それを求める熱意の強度だ。

単純に桁が違う。他人ならば幾度折れても足りない試練でも、甘粕

にとっては当然のもの。

常人ならば憚られるような言い分も、有言実行でやれてしまうから躊躇わない。正しく真つ直ぐな思いでも、あまりに突き抜けすぎたが故に人ならざる異形と化す。

ダンもまた、それを理解する。この男は止めなければならぬ者なのだと納得した。

「むしろ俺こそ意外であつたよ。これしきの道理、貴方ならば当然のように弁えていると思つていたが。歴戦の古兵ともあろう者が、随分と惑いが見えるぞ」

「わしを超人か何かとでも思つていたのかね？」

人は本来、それほどに強くない。

どれほどの思いがあつたとしても、時に迷い、恐れて、その歩みを止めてしまう。

誰もがそう、永劫に歩んでいられる者などいない。それこそが人にとっての正常だ。

「あいにくだが、わしは人間だ。己の生き方に疑念を持ち、過去の喪失に未練を抱いてしまう、弱さを持った人間だ。徹しきれぬ強さなど有りはしない。草臥れた老人に過ぎん」

有り体に言つてしまえば、ダンと甘粕。どちらが正しいかと問えば、甘粕こそがそうだろう。

過去への未練を祈りとしたダンと、未来を求めて何処までも前へと邁進する甘粕。より尊く正しい行いがどちらであるかは明白だ。

たゆまぬ信念と熱意で進む甘粕の行動は、常に正しい道理を持った選択となる。己の正義を疑わない、揺らぐことのないその在り方は強さに満ちている。

そう、甘粕正彦は正しく強い。正しすぎて、強すぎて、誰もついていけないのだ。

「人は、決して甘粕きみのようにはなれないのだよ……」

最期の言葉に力強さはなく、あるのは人としての当たり前前の弱さ。

年老いたる騎士は、その称号に相応しい強壮さなど見せず、単なる老人のままに消滅した。

消え果てたダン・ブラックモアの跡を、甘粕は静粛な面持ちで見つめていた。

反芻されるのは最期の言葉。強きと期待した男の思わぬ姿、それは甘粕の心中にも深い波紋を投げかけていた。

「物思いか、正彦よ。あの老兵の死に様には、そなたも思うところがあつたと見える」

佇む甘粕の元へと合流を果たし、軍将が<sup>アトチャー</sup>擲揄を含んだ言葉を投げる。

「期待したものは見れなかったか？ 因縁があるだけ、入れ込み様も結構なものじゃったが」

「輝きなれば見れたさ。最期の一時、彼が示してくれた意志は俺も満足のいくものだった。」

しかしまた、思う事もある。彼ほどの意志の持ち主が、まさかあれほどの弱さを晒すとはな」

「是非も無しじやな。そなたは人の美点、優れたる所を見抜く眼は抜きん出ておるが、反面、脆弱たる人の脆さに対しては些か蒙昧になる。というより美点を過分に信じすぎて、欠点の存在を疎かとしやすいと  
言うべきか」

甘粕は人の意志を愛している。立ち向かおうとする勇気を求め、誰よりその価値を知っている。

だからこそ、迷いや怖れなどの弱さに対しては鼻屑目になる。知ってはいても、人はそんなものに敗れはしないと心から信じ切っているのだ。

甘粕正彦は強い人間だ。しかし決して万能な人間ではない。

それどころか、己の好感に関わる部分ではひどく狭量なところがある。

一概に大器ある英傑と呼ぶことは出来ない。人の弱さに対する無理解、そんな思慮のない小器さを持ちながら不断の強さだけで押し切ってしまう、そういう類いの大馬鹿者である。

「甘粕正彦よ。そなたは確かに優れた男じゃ。その意志といい武勇、行動力ともに傑物と呼んで差し支えない。まさしく英雄たり得る器じゃ。当代において、そなた以上に強さに溢れた者はいないじやろう。

だがな、そなただとて老いるのじゃ。勇猛果敢な豪傑も、破格なる意志を持った勇者も、人である限りはこの宿命より逃れられん。どれほど信じ難しと見えようが、衰えの時はやってくる」

軍将は告げる。晩年までの人生を生き終えた英霊として、必然とやってくる人の衰退を。

年老いない人間などいない。どのような英雄でも年月と共にやってくる衰えから逃れる事は出来ない。その事実を、決して夢に逃げない冷徹さで断じてみせた。

「これはそなただけに限った話ではない。如何なる英雄であつても、否、英雄であればこそ多くの者がこの道理を前に蹴躓く。当たり前だというに、まこと老いとは厄介なものじゃて。

輝かしい時分を覚えておるから、自らの衰えを正しく認識できない。故に若かりし頃のままだに振舞おうとし、失敗する。往々に晩節を汚す英雄が多いのもこのためじゃ。一度手にした力が損なわれるというのは、言うより遙かに恐ろしいものでな」

英雄とは常として苛烈な生を歩むものだ。

若かりし時分、最も覇気に溢れた頃に難関辛苦へとぶつかって、踏破した果てに晩年がある。

魂の全てを燃やし尽くすような、そんな濃密な生を味わった経験こそが、最期には毒に変わる。苦難が大きければこそ衝撃は凄まじく、忘却されずにその者の芯に残り続けるのだ。

だからこそ、つい同じようにやってしまう。理屈では分かっているも感情が納得しない。年老いて衰えている自分を、充実した時分の己と混同して動いてしまう。

最盛期の栄華とは対象的な、晩年における英雄の凋落。

古今東西、多くの伝承で語られる悲劇は、命ある人間ならば逃れられない業なのだろう。

「昇龍の如く地より天に駆け上った英雄は特にその傾向が強い。サルなどはまさに典型であった。」

何故これしきが出来ない、いや出来るはずだ、我ならば再び必ずや、と。哀れなものじゃ。陽とて天頂に昇った後は、必ずや沈んでいくものであろうに。

アレはまさに日輪よ。剥き出しの才覚で上へ上へと、その光で多くの者を魅了する。そして昇りきった先でも、また同じく。命を瞬かせて駆け上がる以外の生き方を知らぬ男じゃ。

わしを超え得る器を持ちながらな、あれはわしの臣下として生きた方が幸せであつたよ」

「ほう。ならば軍将<sup>アーチャー</sup>、おまえにとつての老いとはどうだったのだ？」

「……さて、な。人間五十年、晩年の時期にもたどり着かずに終わった王じゃ。語りたくとも己が知らぬ事は語れんじやろう」

語りの中に見せる憂いは、生前の己を思い出していることか。

軍将<sup>アーチャー</sup>は語らない。彼女自身の苛烈な生に対して、今は何も明かすつもりは無いようだった。

「で、そなたはどうする甘粕正彦。老いたる人の姿を見せられて、己自身は何とする？ 変わらず信念のままに振る舞い続けるか？ それもいずれ朽ちるものと、おまえは実感したはずじゃ」

甘粕正彦は確かに強い。だがその強さとして有限だ。

いずれは年老い、その意志が枯れ果てる時もくるだろう。そんな事は有り得ないと頑なに言い張るのは、ただ目を逸らすだけの逃避に他ならない。

それでは勇氣とは言えないだろう。破格の意志で進む勇者たる男が、果たしてどのような答えを返すのか。試すように軍将<sup>アーチャー</sup>は問い詰めた。

「さあ、そなたの意志は何と示す。決して逃れえぬ現実を目の当たりにし、如何なる姿勢で臨むつもりじゃ？」

「変わらんよ、軍将<sup>アーチャー</sup>。俺の意志には些かの惑いもない」

それに甘粕が返すのは、彼という男の意志を表した強く揺るがない答え。

「ダン卿の姿には確かに思うところがあつた。だがそれで俺の為す事が変わるわけではない。」

そうだろう、俺は己の信念に疑問など持っていない。今さらこの生き方は変えられんし、変えようとも思わない。この道こそが悲願に繋がったものだと思じている

俺は突き進むしか知らん男だ。他人の弱さに疎いというならそうなのだろう。俺の歩みに付いて来れんというなら、あるいはそうかもしれん。しかし俺が脚を止める理由にはなるまい。

俺の後に続けとは言わん。この背中から学べと言うつもりもない。俺が与える試練の前に、どうあれ立ち上がるのならそれでいい。それこそ俺が目指す”楽園<sup>ぼらいそ</sup>”だろう」

そう、結局この男はこうなのだ。

迷いも弱さも知ってはいても、本質的に理解していない。思い悩む頭はあつても、優先するのは自分の信念だ。そこを違える事だけは決してない。

それ以外の生き方など知らないし、したいとも思わない。この生き方こそが至上だと、誰よりも本人が思い心の底より楽しんでいながら、止めようなどとはしないのだ。

甘粕正彦は強く、正しく、そして何より馬鹿である。

他所など見向きもしない一直線、その突き抜けていく生き様こそが馬鹿たる所以。どんな疑問を提示されようが、最後には構わず振り捨てて行ってしまう。

理解がないのも当然だろう。迷いも弱さも、己の生き方に合わないものなど省みる事さえしないのだから。

「老いの先にある衰えも、当然分かっているさ。無様な泣き言で目を背けるつもりはない。」

だがな、言つたように老いとはどうしようもない。人間ならば必ずや直面せねばならない事だろう。ならばあれこれと悩んだところで

どうにもなるまい。

むしろそんな悩みに時間を割くくらいなら、その間に一步でも先へと進む事を考えるべきだ。無論、生の時間を長くしようと努力はするが、そのために本来の目的を見失うなら本末転倒だろう。

人間五十年、なのだろう。ならばその内に駆け抜けるまで。目指したものに届かない事も有り得るだろう、失意の内に敗れる事も十分にある事だ。決まった未来などない、夢には挫折も付き物だ。だからこそ成功の輝きが栄えるのだろうか。

そんなものを恐れて脚を止めるなど、それこそ唾棄すべき軟弱さだ。どのような未来があろうが、ともかく今という瞬間に全力を尽くす。答えなどそれしか有り得んだろう」

「ふむ、揺るがぬか。これで絆されて惑いを見せたなら見限ってやったのじやが、そうならぬのは人のために嘆くべきか、わしのために喜ぶべきかのう」

甘粕の答えを満足気に聞き届け、冗談めかして軍将アーチャーはそう言った。「それにな、軍将アーチャー。元より俺にも持論があるのだよ。今の論と別にしてもな、答えならば最初から決まっている」

「ほう？」

「人は泣きながら生まれてくる。故に死は豪笑をもって閉じるべきだと決めているのだ。辛気臭く己の終わりを迎える趣味はない。」

望んだ未来に行き着ける保証など無いのだ。ならばいつ何時も、後悔など残さぬよう心から望んだ在り方で臨み続けるより他ないだろう。到達できたら良し、たとえ敗北の未来があれど、己の全てを超えていった相手への敬意と共に万感の思いで兜を脱げば、そこには悔いなど残るまい。

如何なる最期が訪れようと、俺は人間賛歌を歌い続けよう。愛が絶えねば絶望になど屈しはすまい。腹の底から笑い上げて死んでやろうとも」

白の外套を翻す。ダン・ブラックモアの痕跡に背を向けて、もはや思ひ悩む様子は微塵もない。

2 回戦は終わりを告げた。ならば次なる好敵手へと目を向けるま



で。何時までも立ち止まってはいられないと決意を正す。

その面貌には、相も変わらぬ凶相じみた笑顔が浮かんでいた。

「ふははははは!! まことおめでたい男じゃ! そう、そなたはそれで良い、甘粕正彦。そうでなければこの魔王が付き従う意義がない。」

その大うつけぶりで何とするか。仏の功德でも泰平への信念でもない、在るがままの己の欲で何を築いて何を壊すのか。そなたが刻む歩みの先を、このわしが見定めてやろうぞ」

そしてその背に従うのは、乱世に覇を成し古き価値観を打ち壊した革新の王。

鉄血をもって事を為す非情の道を突き進んだ魔王は、弱さに惑わぬ己のマスターを是とする。

止めなければならぬ男を、止められる者は今はいない。

前へと向かう正道の意志のまま、主従は次なる戦いへと赴いていった。

### 3 回戦：狂者の資格

元亀天正の頃、日本中世期に生じた戦国時代。

応仁の乱以降の秩序の崩壊、古き権威が失われ新たなる支配者が求められた群雄割拠の乱世。

そこはまさしく混沌の世界。各地のあらゆる領主が我こそはと名乗りを上げる、人の欲望が解放された時代であった。

——尾張ノ国。

そうして無数に乱立する主権国の1つ。

乱世の只中の事、その国の情勢もまた平穏とは程遠いもの。

外には三方より睨みを利かせる諸外国。芳醇な利権は、同時に他国を誘う毒になる。

内には下剋上を狙う奸臣の群れ。有能なる君主に抑えられた数多の欲望は、君主の喪失と共に噴出するだろう。

内外に危機を抱えたこの国の命運は、乱世の荒波に飲まれ果てるかの瀬戸際であっただろう。

そうした尾張ノ国にあって、『稀代の太うつけ』と称された人物があった。

曰く、武家嫡男にも関わらず庶民と関わる変人。

曰く、父君の御葬儀で粗相を働く不心得者。

曰く、とかく意味の分からぬ事を言い出す奇行者。

聞こえてくる悪評は数知れず。

耳に届けば誰もが嘲笑した。尾張の跡取りはとんだ愚か者であると。

されど、その決断は迅速にして的確。

戦場においても勇猛果敢。侮る者共を尻目に見て、己の足場たる尾張を平定していく。

風聞とはまるで異なるその実状。その正体に皆が気付く頃には、名実ともに尾張ノ国の主として君臨していた。

感嘆するべきはその先見性。余人には計り知れない見識の深さ。

流石は新たな世を築いた革新の王。無理解からの蔑視にも怯まず、己の道理を信じてその価値を敷いた事こそ称賛されるべき事である。

——と、後世の余人ならば、そのように解釈して納得するだろう。

平手政秀という男がいた。

主君の子の教育役を受け、ある一人の子の世話を承った。

当時の常識において大名の父子に通常の子守の形式はない。

父が家を守り、母が子を育てる。そんな当たり前は庶民だけのもの。

良家貴人においては、我が子といえど己一人で育てはしない。跡取りの采配一つで流血沙汰すら招きかねない、君主の子女とは父子の愛のみでは扱えない存在だ。

故に、乳飲み子の頃よりの世話役であった政秀は、その子にとって親以上に近い相手だった。

2人の仲も良好そのもの。

子は政秀を父のように慕い、政秀は子を実子に等しい愛で接した。

政秀の教育に子は才気を発揮して応え、養育者としてこれ以上ない誉れであった事だろう。

政秀が預かった主君の子とは、長女の『姫』であった。

「姫様には優れた先見の明がございます。その聡明さは必ずや一門の力となられるでしょう」

やがて時が過ぎて、両者を取り巻く環境は一変する。

『姫』であったはずの子は『嫡子』となり、政秀が仕えるべき『主君』となった。

近しい者ならあまりにも目に見えた矛盾。あり得ないものを真実と言ひ張るのなら、道理はそれ以上の無理によって押し除けられる。それでも忠義は変わらない。政秀は『主君』となった『姫』を受け入れ、その通りに仕えた。

そうして『主君』たる『姫』は、平手政秀を自刃させた。

『姫』は彼を慕い、政秀もまた育て親として、そして臣下として接した。

その仲は極めて良好だった。決して互いを疎んじていたわけではない。

『姫』にとつて平手政秀という男は、屈託ない己を知る数少ない理解者であり、真に頼れる相手だった。

——だから『主君』として、『姫』としての己と近すぎた者を消さなければならなかった。

織田信勝という弟がいた。

同じ父、そして同じ母の腹より産まれた、血を分けた姉弟。

本来の嫡男、正当な君主の継承者。順当であれば彼こそが主君であり、そこに文句など無かつただろう。

仲が悪かつたわけではない。むしろ姉弟仲はとても良かった。

正当な権利を奪われた身でありながら恨み言もなく、それどころか自ら支えになると申し出た。

「姉上の御力は私がよく知っている。この苦難の時、頭領には真に力ある者こそが相応しい。私もまた及ばずながら、姉上の助けとなりましょう」

信勝との間に確執など無かつた。

弟は姉を愛し、姉もまた弟を愛していた。

世が戦国でさえ無ければ、何の問題もなく君主の座に就けただろう。

反乱の騒動も、反目する家臣団に担ぎ上げられての事だと理解している。

あまりに無理を通した家督の相続。反抗する者がいない方がおかしいだろう。むしろ弟が一纏めにしてくれたからこそ、より致命的な内裂を避ける事が出来たのだ。

憎む道理などなく、姉にとつては尽くしてくれる可愛い弟。どうして害する事を望めるだろう。

——それでも、国の磐石のためには、『正当な後継者』の存在を生かしてはおけなかつた。

母は我が子を『鬼子』と呼んだ。

伝統の道理を押し退けるのは、流血で為される鉄の道理。

数多の風聞、悪評に彩られ、根底にあつた”問題”はいっしか人々から忘れられる。

やがて誰もが口を閉ざし、かつて在つた『姫』の記録は完全に抹消された。

その王道に義はなく、愛もなく、されど確かな理がある。

深い親愛の情さえ切り捨てて、王が求めるのは成果の実利。

結果という報酬は確実に積み上がる。王が鉄血の手腕を振るえば、国は強く豊かになった。

事実、尾張ノ国は平定され、来たる他国との戦に向かう確かな土台が出来上がったのだ。

まさしく王こそは乱世の寵児。仁義士道など初めから崩れている。中身のない空虚な道義よりも、鉄の覚悟で行う非道の実利こそが今世を駆ける風雲児には相応しい。

『うつけ』という悪評も、『魔王』という忌名も、全ては王の利用物。虚すらも実の力と変えて、古びた権威に新たな秩序を打ち立てた革新の王。

ならばその心とは？ 王とて人の子、親しい者を、愛する者を手にかけて、心が無事でいられるはずがない。

王は決して語らない。秘めた内心は誰に対しても明かさねず、絶対の主君として傲岸不遜に君臨する。我こそ王なりと、豪胆に快活にふてぶてしく、陰りを見せずに笑うばかり。

——— 彼の名は、彼女の名は、織田信長といった。

3週目の朝がきた。

掲示板に対戦者が発表されたと連絡される。

舞台である仮想の学園生活。学生新聞や連絡簿が貼られる横に、各々が殺し合うべき相手の名が掲載されるのだ。

3回戦を迎えて、生き残っている者も大幅に減少した。

一度の対戦で必ず一人が消えるルール。1回戦で半数、2回戦でまた半数と消えて逝った今、残っている数は当初の3割以下だ。

未だ行程の半分にも達していない現状で、あまりに過酷な生存競争。それは同時に、今も生き残っている者は少なくとも2度の死線を越えた事を意味している。

ムーンセルの厳選は順調だ。聖杯戦争は正しく強者を選び出している——その性質の如何に関わらずに。

「マタ ゴチソウ 食ベテモイイ ゴチソウ！ コンナニ 沢山ノ

美味シソウナ モノニ 出会エル ナンテ トツテモ ハッピー。

ココニ来レテ 良カッタナア。ランルークンハ トツテモ嬉シイヨ」

壊れた笑顔で口ずさむのは、どこかで見た道化師の格好をした女。

否、笑顔というのは正確ではない。笑顔であるのはピエロの仮面。その中身がどうなっているのかは判別できない。

体格、声の質などから女性だと判断できるが、それすらも正確とは言えないだろう。

分かっているのは、彼女が狂っていること。その姿に映る異常の全てが明確な狂気を発していた。

「おお、おおおッ!! なんとる奇跡、なんとる祝福！ 今ここに、極上の供物が現れた。

我が妻よ。オレはこれを啓示と捉えよう。神より与えられし試練、貴女に捧げる我が愛を証明する、最上級の捧げ物として。

こやつらは強い。雄々しく、美しく、苛烈であつても尚その性根には芯がある。我が国土を踏み荒らさんとしたかの征服者の軍勢さえも超える傑物であろう。たとえ如何なる惨状を演出しようと、その意志を挫くことは叶わぬだろうとも！

それで良い！ 試練は険しく、生贄は強くあるべきだ。難敵の血で

あればこそ、主へと捧げる供物たり得る。この者たちの血肉をもつてオレは真実なる愛の誓いを立てるのだ。

いと尊き妻、我が奇跡の具現たるマスターよ。拒食に空いたその腹に、ついに肉が満たされる時がきた！」

その横に侍る者もまた、狂人の体を示している。

身に纏いしは漆黒の鎧。深く染み付いた鮮血の気配。騎士なのだろう偉丈夫は狂喜していた。

同じく狂人であろうマスターを讃え、敬い、崇拜し、聖なる者に対するが如く接している。抗し難い強敵を前にして、それに打ち勝つ事こそ忠誠に表れだと喜んでいた。

「アナタノ 愛ハ トツテモ大キイネ。チョット 怖イケド スゴク綺麗ダ。ウン ランルークン アナタノ コトヲ 好キニナレソウダヨ」

語られるのも常人の理解からは遠い言葉だ。当人なりの理屈はあるのかもしれないが、他者には理解できない心象こそ狂人の証だろう。

これは相手を見ていない。世界は彼らだけのカタチで閉じている。たとえ他者を介在させても、通じていない認識は何処までもすれ違ふ。

狂った道理が罷り通り、相互理解が成立しない。そして求めてもいない。すでに彼らの中だけで答えは出ているから、相手の答えなど聞いてもいないのだ。

「なんと！ これはなんたる僥倖か。妻もまた強くご所望であられるとは、我が槍の贅としてこれ以上のものはない。

そうであろう、妻よ？ そうであろう、我が好敵手よ！ この出会いに、この運命に、オレは心からの感謝を捧げよう。この聖戦が主の御心に沿わん事を！」

——貴女のその愛こそが、この世の真実なる正義であるのだから」  
狂気の熱を帯びて、騎士は一方的に捲し立てる。

そこに対話の意志はない。ただ己らの狂念だけを伝えて、主従は立ち去っていく。

理解し難い、共存できない異端。

彼らは外れた者だろう。人々とは共有できない価値観で生きている。

人間としての在るべき倫理では括れない。その在り方は正しく怪物の呼び名が適切だ。

それがこの3回戦における、甘粕正彦の対戦者だった。

「気狂いの類いか。そなたの好みとする意志は期待できそうにないな、正彦よ」

そう告げるアーチャーの声は冷淡だ。

ランルーくんと名乗った今回の相手に、彼女は見るべき所を見出だしていない。

「狂い人同士、通じる気心でもあったか。何にせよ無価値じゃ。人を介さぬ化生ならば、そのように討滅すればよからうて」

狂人は所詮、狂人であると。

実利を求めた革新の王は、狂人の主従をそのように定義する。

共有できない価値観だというのなら、初めから理解を放棄する。どの道社会に馴染めない者ならば、王として慮る事もない。

アーチャーは慈愛の王ではない。

国という大のため、あらゆる小を切り捨てられる非情の王だ。

民として貢献を果たせない相手を慈しむ道理はない。人になれないのなら死ねばいい。

たとえ如何なる事情があろうとも、人を外れた時点で王が守るべき民ではなくなったのだ。毒となる異端は切除する、為政者としては当然の結論だろう。

アーチャーは狂人の道理を認めない。魔王と称されながら人の側に立つ王として無価値と断じた。

「ふむ、貴女の愛か」

対し、甘粕は彼らの言葉を吟味していた。

意志が発するあらゆる輝きを愛する男、そう簡単に人の価値を諦めはしない。

「なんじゃそなた、あのような気狂いにまで輝きはあると信じるのか



？」

「無論だよ、アーチャー。どんな人間にも光はある。それこそが俺の信念だ。」

確かに言葉の意味は判断しづらいが、込められた熱の程は伝わったよ。

”愛”という言葉、それは彼らにとってただならぬ意味があるようだ」

「愛？ それこそ狂者の常套句じゃろう。人が狂う因果など、むしろ大半が愛だろうて。」

ならば訊くが、愛があればあらゆる所業は許されるのか？ 愛こそ全てと、世界さえ引き換えにしても足る大義であると思うのか？」

「それは勿論、その通りだとも。そこに世界をも相手取る真の覚悟と勇気があるならば、俺は心からの賛辞を謳い上げよう」

「……ああ、そうじゃったな。そなたであればそう答えるか。失念しておったわ」

訊いた自分が馬鹿だったと、嘆息混じりにアーチャーは言った。

「だがな、無辜なる者たちの感性で照らし合わせれば、そのような真似は許されぬのじゃ。」

考えてもみよ、その愛が何人に向けられたものだろうが、精々がそれしきの数ぞ？ そのために何千、何万の犠牲を強いるなど狂っていると評するよりあるまい。

たとえ愛を失おうが、いずれ新たな愛も見つけられよう。代わりになれる者はおらずとも、別のカタチで心を結べる者はいる。愛も所詮は感情の一種。幻想に囚われねば、如何様にでも換えられるのじゃ」

愛こそ至上であると、多くの人が口にする。

金銭も名誉も、全てを投げうって示される愛の情熱。それは確かに美しい。多くの者の胸を打つ美談である事だろう。

それをアーチャーは否定する。所詮は一時の感情に過ぎないと、美談の幻想を切り捨てて無情の現実論で以て愛を語った。

「だというのに、一時の激情に任せて全てを御破算とする。そんな行いが尊いもの、美談である？ わしには狂言の類いにか聞こえぬ

な。

正彦よ、そんなものが勇氣か？　そなたの愛する意志の輝きだと？　見るべきものから目を背け、痴れた情慕に身を焦がす事が。狂氣の域に高めようと、所詮は戯けの夢ではないか。

彼奴らの抜かす愛が何であるか、わしは知らぬし知る気もないがな。誰にすら伝わらぬ思いで一体何が成せるといふのじゃ？」

「うむ……」

アーチャーの言い分は尤もだろう。

どれだけ強い思いがあろうとも、誰にも届かないのでは意味がない。

狂氣の内に籠りきり、見るべきものを見まいとするなら、それは情弱と言うべきだ。

そんな軟弱者に示す敬意はない。そんな奴輩には甘粕もまた、無情なる裁きの刃を振るうだろう。

だが、果たしてそれだけなのだろうか。

心中からは疑念が尽きない。

何故これほどまでに気に掛かるのか、自身ですら判然としない思いに甘粕は悩む。

無自覚な感情の源泉が分からない。常にあらゆる物事と正面から対峙してきた男にとって、このような事態は珍しい。

相手は狂人、流石に常人と比較すれば分かり辛い。人の在り方への裁定に優れた審美眼を發揮する甘粕だが、現状までで判っている事はまだ少なかつた。

理解するにしてもこれからだろうに、妙な執着心が内にはあつた。まだ初の邂逅を果たしたばかり、語らいすら通じそうにない相手だといふのに、これは一体何だろう。

「ままならんな。俺も、まだまだ未熟か」

対戦者であるランルーくんについて、甘粕は考察を深めていく。

彼は全ての人の意志を愛する者だ。アーチャーのように狂人だからと容易く切り捨てる真似はしない。それがどれだけ馬鹿げた行為でも、甘粕が止まる理由にはならない。

本来なら死力を賭して殺し合う関係で、事実そうなるというのに、偽りなく相手を理解する事を求めている。全ては彼が信奉する愛のカタチ故に、戦場の道理から反するのだとしても。

——だからそれは、油断とも言え換えられるものだったのだろう。

全身に悪寒が走り、その直後に異変が起きる。

何か見えない力に引き寄せられるような感覚。それに抵抗する暇すら無く、甘粕は校舎の空間から切り離されていた。

してやられたな、と。直後の洞察でまずそのように結論付けた。

生じた異変を推察するに、他者からの干渉による不正規な強制転移。<sup>イレギュラー</sup>

周囲を見渡せば、そこは月見原学園の校舎とは似ても似つかない場所。ざっと見た観察からでは、迷宮<sup>アリーナ</sup>での外観に近いだろう。

事態は急変の体を見せているが、思考は平静を保っている。確かに突然ではあったが、予測するとなれば十分に可能な範疇。驚くには値しない。

むしろ自罰すべきだろう。このような事態に陥るまで、己の緩みに気付けないとは。

これは聖杯戦争。いかに決闘の形式を取ろうとも、その本質は戦争だ。生じるリスクと天秤にかけてリターンが勝るなら、対戦者以外への襲撃とて選択肢の一つとなる。

甘粕とてそれは承知していた。それどころか誰よりも実感していただろう。西欧財閥に反抗する勢力の頭目、それを排除する役目を担う『黒蠍』の存在を忘れるわけがない。

その存在を知りながら、あらゆる参戦者にとっての空白地帯である場所で物思いに耽っていたのだ。敵からすれば好機でしかなく、自業自得というほかない。

知らず知らずの内に、興していた。

高揚する好奇心は無自覚の内に緩みを生み、その視野を狭めていた。

向き合う相手へと傾倒して、それ以外への警戒を怠ったのだ。これを油断と呼ばずに何と呼ぼう。

そうでなければ、此度の事を防げていただろう。相当な大仕掛けではあるだろうが、常の甘粕正彦であるならば、奇襲に即応して躲す事も出来たはずだ。

それを出来なかつた事は、即ち怠慢に他ならない。猛省し、自戒すべきだろう。身に降りかかる難事の全てを試練と捉えるならば、それら全てに打ち勝たねば本懐は果たされないのだから。

——ここまでの思考は一瞬の内で済まされている。

態勢はすでに、警戒から臨戦へと換わっている

切り替えた思考には後悔などの思いはない。そんな余分など残してはいられないと承知していた。

肌を貫くのは、濃密な死の気配。

それのみでも理解は十分、ここが死地なのだと認識する。

姿は見えない。他の生物の気配も感じない。だが殺気だけはひしひしと感じているのだ。そしてそれは攻撃を悟らせてしまう類いのものではない。

言うなれば、それは環境そのもの。周囲に当たり前に存在する空気、己の脚が踏みしめる大地、目上げれば映る空。それら天然自然としか形容できないものが、己に死を纏わせてくる。

鋭利な刃のような、自を示し他を貫く殺気ではない。空間そのものが殺意を放つという異形の気質。そこから存在を嗅ぎ分けるなど不可能で、しかし意図だけは明確に知らしめている。

これから貴様を殺すのだと、誓いとも取れる必殺の意志。明確な殺しの宣誓が告げられていた。

本能は悟る。ここで己は死ぬと。

これは駄目だ。躲せない、防げない、応じられない。

それほどにこの死は極まっている。極みの果ての極み、術理の果て

に達した魔道の理。もはやそれは人技の領域にあるものではない。

この空間に引きずり込まれた時点で、既に詰みであったのだと理解する。英霊ですら防げるかも怪しいもの、人の身で越えられる道理など有りはしない。

人としての生命はどのように結論づけて、しかし甘粕正彦という意志は否と断じた。

これは窮地だ。この聖杯戦争でも最大の危機だろう。

正体すら窺えない敵の技量は、間違いなく己を上回る。この殺気だけでも十分に察せられた。

己の責だと自覚はしている。油断によって死地に招かれた、今の時点で詰んでいるとも。

しかしならばこそ、甘粕正彦という勇者の意志は燃え上がる。この試練を踏破してみせようと、気迫は桁を飛ばして跳ね上がっていた。

自らの不覚だと自罰するからこそ、奮起する。この危機を乗り越えてこそ帳尻は合わせられるのだ。さもなければこの先を進む資格は得られない。

見えない相手、悟れない殺気。

敵の陰形は完璧だった。2回戦で戦った狩人アーチャーすらも上回るだろう。

感覚を研ぎ澄ませ。どんな些細な要素とて見逃すな。悟れない攻撃を必ずや凌ぐのだ。

これまでの歩みを思い出せ。持てる全ての経験則を総動員して、次の一手を読み切ってみせる。

感じたものは、ほんの小さな違和感。

読んだものは、最も防ぎ難いと予測できる一手。

求めるのは敵を引き裂く重さではなく、敵の技に追い付く神速の精緻さだ。

覚悟を決める。一切の無駄を削ぎ落とし、決意と共に放たれるのは会心の一闪。

振るわれた軍刀の刃は、確かに不可視の何かを捉え、その“拳”を弾いていた。

「——くはははははははははは!!!」

直後に轟いたのは哄笑。

溶け込んでいた自然から現したその姿は、燃えるような衣装に身を包んだ強壮な偉丈夫だった。

「よくぞ躲した。幾多の命を一打に散らせた我が魔拳、よくぞ人の身で防いだものよ。」

訊かせてはくれんか。勘か？ 経験か？ それとも魔術による予知の類いか？ いったい如何にして、儂の拳を見破ったのかを」

「あえて言えば全てだよ、サーヴァント。未来予測に縁はないが、勘も経験も魔術も十全を尽くした上で抗わせてもらった。」

初めてだぞ、あれほどに死を錯覚させられたのは。初見では対処も出来ず、奇抜に走ったところで通じはすまい。気配は分からずとも、長年の研鑽に裏付けされた堅い意志だけは感じていた。

ならば俺もまた、持てる全てを尽くさねばならんだろう。生涯を通じた努力の成果、費やしてきた日々は決して無駄ではないと信じてな」

「呵々、なるほど真理よ。鍛練は嘘をつかぬ。英霊やら宝具やら謳われようが、研鑽を伴わねば螻蛄の斧に過ぎん。如何に強大だとしてそんな力は恐れるに足らん。」

先の一閃、心技体を兼ね備えた見事な剣であつた。良き功夫を積んでおる。流石は世界に抗わんとする益荒男よ。凡百の魔術師どもとは別種に等しい」

快活に、心底からの喜悦を滲ませながら男は言う。

せつかくの奇襲を防がれたというのに、表情に落胆の色はない。むしろよくぞ防いでくれたと褒めるように、その様子は好奇と上機嫌を重ねていく。

「ユリウス・ハーウェイのサーヴァントだな。己の対戦者もいるだろうに、ここまで直接的に打って出るとはな。俺も随分と気に入られたらしい」

「さて、あいにく儂も軽々しく主の素性を漏らす不忠者ではないのでな。そこは答えを控えさせてもらおうとしよう。」

だが、心配事ならばそれも不要よ。我ら本来の対戦者ならば既に仕留めておるわ。ここに至るまでも、未だ一度として決戦の7日目に行き着けた者はおらん」

それは恐るべき事実だった。

7日目の決戦にまで至らない。それは即ち、その以前の段階で対戦者が死亡したという事。行動や言動を省みれば、それが事故の類いではないのは明白だ。

暗殺。今まさに甘粕に行われようとしたように、男の見えざる魔拳に悉くその命を散らされてきたのだろう。不正行為に伴われる罰則、<sup>ペナルティ</sup>それさえ恐れるまでもない程の手並みでもって。

自然環境と同一化したとも見紛う、完璧すぎる気配遮断。

脅威となるのは不可視化だけではないだろう。その自信のほどを考えれば、放つ拳自体も必殺の威力を伴っていると見るべきだ。

二撃を求めず、一撃をもって事を為す魔拳の真髓。繰り出すならば必ず殺すと己に課した意志。それは如何なる相手も初撃で沈める一打となって表れる。

姿無き魔拳士。背中を刺す慈悲なき殺戮者。このサーヴァントこそ、<sup>アサシン</sup>暗殺者、の名に相応しい。

「どれもこれも脆弱すぎる。実力は元より意気に至るまで半端な者ばかり、その気質に口寄せられる英霊もまた然り。これでは鵜をくびり殺すのと大差なからう。

もはや結果すら見え透いておったわ。その点、やはりお主は違ったな。その両の眼を見た時から、おそらくはこういう結果になるであろうとは読めておったぞ」

「ほう。眼だと?」

「うむ。儂ほどに殺しを重ねておればな、拳を放つ前から凡その察しがつくものよ。

始皇帝を討ち損じた荆軻のように、それは時に不条理と思える運氣さえ引き寄せる。向き合った表情、立ち振る舞いの一々に気質とは表れる。それが告げておるのだ、もはや天命がその者の死を許してはおらんとな。

特に眼は、人の魂を映し出す鏡に等しい。その眼差しが向かう先、映るものを知る事は、生涯そのものを悟るのと同義となる。儂に占いの腕はないが、殺しに限っては人より多くが見えておる。

お主は、このような舞台裏などで果てる天命を課されてはおらんな」

瞬間、轟いた無数の銃声と共に、豪雨となった銃撃が男へと降り注いだ。

即座に反応して回避に移る。

逃れ得る間隙など皆無に見えたが、男は超絶の体術で銃弾の悉くを躲していく。

距離を開け、再び地に脚を落ち着けたその姿には、ただの一発の銃創も無かった。

「おおう、これはいかん。つい語らいに興じて決殺の好機を逃してしまったか。この有様ではマスターに弁明すら叶わぬな。呵々、まこと難儀なものよ」

「影に潜みて背中を刺す忍びにしては、饒舌が過ぎるようじやな」  
甘粕が引きずり込まれた異空間に、アーチャーもまた侵入を果たす。

この空間を挟んだ分断も、所詮は人の手により為されたもの。同じく人である甘粕らに對抗できないわけがない。

この空間の意図も、詰まるところは時間稼ぎ。時を置けば対処されるのも必定、長く置けばムーンセルにも発覚するのは目に見えている。

つまりは今までの時間の中で、男は甘粕を仕留めなければならなかったのだ。

それを徒らに会話にかまけて、闇討ちの機会を失った。暗殺者たる男にとって、それは不覚どころではない失態であったはずだ。

「さもありなん、如何に暗殺者などと称されようと、儂の本性は何処までも拳道家よ！

こうして暗技の拳を振るい続けるのに否はないが、やはり殺すのならば鼠よりも虎、虎よりも龍と、より難関辛苦であるのが望ましい。



我が武威の限りをぶつけられよう好敵を前に、昂ぶるなど言う方が無理というものよ。

礼を言わせてもらうぞ。先ほど結果は予感していたと言ったが、あれは半ば儂自身の願望であったのだな。よくぞ、よくぞ我が魔拳を躲しにくれた！」

男の性質は武人。何者にも勝る暗殺拳を持つとも、真に望むのは生き死にの闘争である。

そういう意味では、男は暗殺者として三流だ。かの山の翁とは比べるべくもあるまい。彼はあまりにも、殺しに悦楽を求めすぎる。

故に獲物を仕損じた結果にも、無念さはおろか省みてすらいない。標的の殺害という結果だけを求める者には、これほど厄介な気性もないだろう。

「ならば拳法家よ。その悦楽に殉じ、このまま何処とも知れぬ野に骸を晒してみるか？」

「そう急くな、傾奇者。元よりこの空間も一時のもの。我らの闘争に耐えうる舞台ではない」

男の言葉を証明するように、周囲の風景がその輪郭を徐々に失いつつある。

サーヴァントの介入を許した以上、もはやリスクを負うほどのメリットは無いと術者が判断したのだろう。空間は急速に本来の場所へと引き戻されつつあった。

「お主らとは、いずれ必ずや闘うことになるぞ。その時を楽しみにしておくぞ」

その言葉を捨て台詞に、再び男の姿が不可視へと溶け込み消える。それと同時に、立つ場所も本来の校舎へと戻っていた。2つの要因に痕跡を断たれて、追跡の望みはほぼ無しだと言っている。

「此度の事は迂闊じゃったな、正彦よ。我らを付け狙う曲者の存在を失念するとは」

「ああ。本戦前もそうだったが、ここまでの大仕掛けも平然とやってくるとは。何をやったかは知らんがまともでないだろう。少年王<sup>オ</sup>の存在を考えれば、命くらい捨てているのかもしれない」

緩みを正す。己がまさに戦場に立っているのだと自戒する。

これもまた、ある意味で良い教訓だろう。やはりこの試練は容易には踏破し難い。

だからこそ挑む甲斐があるのだと思う。先の一合でまたひとつ己の限界を超える事が出来た。

——ああ、自分はあの男を笑えない。最も興じているのは己の方だろう。

命はおろか世界すら懸かった戦い。なのに考えるのは目先の事ばかり。

策謀を巡らせばいい。徒らに危機を引き上げるような真似をせず、堅実に勝利を目指すべきなのだろう。そうすれば聖杯はもつと容易に手に入る。

だが自分はそのが出来ない。それでは駄目だと、否、それでは嫌だと感じている。甘粕正彦は人の輝きを愛しているから、自身の光を発掘できる試練を好ましく思ってしまう。

だからこうして、変わらない。

何を正そうとも、どんな危機に直面しようとも、その在り方がブレる事はない。

甘粕正彦は今も昔も、人の輝きを引き出すために邁進し続けるのだ。

場所を移し、甘粕とアーチャーはマイルームに帰参していた。

ムーンセルより安全を保証された空間。どんな手段であろうとここに干渉する事は叶わない。

もしそれが出来るなら、それは月の聖杯に匹敵、あるいは一部でも凌駕する力を持つという事になる。そんな者がいるのなら、聖杯を求めめる前提自体が覆りかねない。

つまりは絶対の安全圏。己以外の全てが敵という状況で、唯一気が休まる場所だ。

それでも尚、甘粕の状態が校舎の時と大差ないのは、それこそが彼にとつての常態である事の証左だろう。もはや意識する必要すらなく、甘粕正彦の心身は疾走を続けている。

「さて、此度の方針を聞こうか、正彦」

背徳の礼拝堂。その中であつて尚も不遜に在るアーチャー。

それが腰掛けるのは新たに持ち込まれたと思しき髑髏意匠の大椅子だ。己に対する怨念、恐怖、それら全てを糧にする魔王は、神仏に対する畏敬など微塵も持たずに振舞っている。

「変わらんよ、アーチャー。俺の方針には些かの変化もない。輝きを引き出し、その上で正面から凌駕する。これまでの相手とまったく同じだ」

魔王たる王気を発して話すアーチャーに、甘粕も怯む事なくそう答える。

彼等是对等だ。どちらが上で下というわけではない。だからこそ今の関係があるのだと、そう結論付けても両者共に否はないだろう。

「ハッ、まあ予想はしておつたがな。狂人相手にも違わぬとは流石筋金入りじゃ。」

されど、理由くらいは聞かせてもらうぞ。何がそなたの琴線に触れた？ あの狂人どもにも光の片鱗を見たからこそ、それほどに心を決めておるのじやろう」

「光の片鱗、か。そうだな、確かに俺はそれを見出していたのだろう」  
初めからあつた疑念。狂気に満ちた主従を相手に、何故かあつた執着の思い。

輝きの如何さえ判別していない内から、自身ですら判別し難い感情。それは今も変わらず胸の内存在している。

その正体に対する答えを、既に甘粕は手にしていた。

「眼とは、その者の人生を映し出す鏡であるらしい。なるほど、その通りだと納得したよ。」

あれの瞳には確かに色濃い狂気を帯びていたが、その光は格好の奇

抜きと違い、陽気とは無縁のものだった。まるで底なしの穴のように暗く深く、およそ正気の光とは思えん。

そこに俺は悲哀の色を感じたよ。ランルー、だったな。彼女の狂気の裏には、何か底知れぬ悲しみがあるのでは、とな」

「それはまた随分と曖昧な理由じゃな。よもや瞳とは、そんなものは理屈にすらなっていない。」

そなたはそれを悲哀と定義するかもしれないが、果たして当人どもにとっても正しいかは未知数ぞ。狂者とは得てして、心の有り様から常人の感性が通じぬものじゃ」

魔拳の男が語った理屈。道化の仮面から覗かせる双眸の輝きこそが、疑念の答え。

そう答える甘粕に対し、アーチャーはあくまでも現実の理に沿った言い分で応じる。正気あらざる者への理解など、彼女は求めてはいない。

「かつてわしの臣下にもそんな者がおった。殺戮に次ぐ殺戮、戦国乱世にあつて尚、忌むべき死を作らずにはおれぬ狂人がの。

アレの殺しには人としての道理は無い。大義名分など、自らを飾り立てるためだけの道具に過ぎぬ。鬼武蔵。人間無骨。そう呼ばれた英霊こそ、最も暴力に酔い狂った屠殺者であつた」

群雄割拠の戦国乱世。

凄惨な逸話に溢れた時代にあつて、尚も血塗られた悪名に満ちた狂気の英雄。

鬼武蔵と称されたその英雄がある所、敵ばかりか味方までもが殺戮の憂き目にあつたという。

やがて戦場で討たれた際、味方陣営の者たちがその事実を喜んだというのだから、鬼武蔵なる男がどれだけ異形に見られていたか分かるというものだ。

そんな狂気の武将の主君であつた者として、アーチャーはその性質を語っていく。

「狂人が狂人たる所以とはな、当人がそれを異常と思わぬ事じゃ。

脚を折ろうが腕を落とそうが、アレにとっては害意ある行動ではな

い。殺しておらぬという時点で、一応の親愛を示しているつもりらしい。無論、アレの中だけではな。

もはや理で説明できる性質でもない。鬼武蔵は、純粹に狂っておった」

「ほう。だがその割りには、随分と重用していたと聞いているが？」  
「泰平の世であればな、アレに居場所は無かったじやろう。だが時は戦国、乱世にあつては殺戮の狂気は様々な事で役に立つ。

事欠かぬ悪名、理解を越えた惨事の数々は恐怖を生む。戦において恐れは伝播は早い。時にそれのみで決着がつけられる場合まである。

アレが斬り捨てた関所役人よりも、アレが与える死の恐怖が有用だった。それだけの事じゃ」

アーチャーは革新の王。その王道とは徹底して実利を求める。

たとえ理解し難い狂人であろうと、有用の理が立つならば利用する。結果としてより多くの成果が得られるならばそれでいい。

「……まあ森のオヤジには借りがあつたし、蘭丸の手前もあつての。いや、先の言も言い訳ではないぞ、言い訳では。むう、やはり何でもない」

小さく付け加えられたその呟きは、あえて追求はしなかった。

「なるほど。狂人の道理とは、所詮狂人自身の内でしか成り立たぬもの。ならばその意志とて、誰かと真に向き合う勇氣を持たないものとしかならんか」

「で、あるに。そなたの定義する所も、結局はあの狂人にとってのものではない。どれだけ怒り嘆こうが、それが筋の通るものとは限るまいぞ」

アーチャーの言葉は何処までも正論だ。

彼女は狂気の道理を切り離して考えている。常人の理に照らし合わせるべきではないとして。

狂った気性を人と同じ基準で測ってはならない。彼等は彼等だけの道理で動いている。その境界を見極めて利用するのだと、かつて狂人を用いたアーチャーは告げていた。

その点については同意する。甘粕にとつても、そのような者は評価

に値しない。

アーチャーの語る狂人の定義。狂人は独自の倫理でしか動かない。それはつまり、己の殻に閉じているという事。全てが自己完結していて他者の存在を見ようとしめない。

そんな者に勇氣はない。少々の物珍しきがあるだけで、己以外の世界へと立ち向かう気概が欠けている。人間失格の烙印を押すのに否はなく、裁定の対象だ。

もしそれだけの事なら、甘粕もまた見限っていただろう。

しかしそうではないだろう。少なくとも一人は、その道理によって魅せられているのだから。

「あの黒い騎士がいる。契約したサーヴァント、あれはマスターに並ならぬ執着があるようだぞ」

「狂者同士じゃ。波長が合う事もあろうて」

「そうかもしれん。だが、あるいはそうでないかもしれん。

俺はなアーチャー、おまえたち英霊に心からの敬意を抱いている。これぞ人の輝きを体現せし英傑たちと、そう思う気持ちには一点の偽りもない。

だからこそ思うのだ。英霊すらも心酔させる輝きとは、果たしてどのようなものなのかとな」

「ならばどうする？ そなたは試練を求めろのじやろう。奴らに何を期待する？ 何を以てその価値を引き出すというのじや」

敵の力を十全に引き出した上で、真っ向勝負によって決着をつける。

それが甘粕正彦の聖杯戦争の方針だ。人の光を愛するが故、倒すべき相手であってもより強く、美しく輝いてほしいと願っている。

その方針は変えないと甘粕は言った。

3回戦の対戦相手、ランルーくんと名乗った道化師にも同じ対応で臨むと。

理解し難い狂人であっても、そこに意志があるのなら等しく裁定を執り行う。

「狂気という感情にも、大きく分けて二種類がある」

「ふむ？」

「一つは己の道理に常軌を逸して信奉する場合。先の鬼武蔵の例がまさにそうだろう。」

これにはあるいは見るべき所もあるだろう。他者の都合に頓着せず、ひたすら我が意のみを道理とする傲慢。そこにあらゆる敵意、排斥の流れに抗わんとする意志があるなら、まぎれもなく輝きと呼べる。俺は心からの賛辞を謳い上げるだろう」

もしも、数多の病魔に蝕まれて、運命より死の宣告をされても尚、我が意こそ至上と声を大に上げられる者がいたとしたなら。

甘粕正彦はその者を尊敬するだろう。彼の者こそ真に強き勇者だと認める事に否はない。例えそれが、世に仇なす鬼畜外道の類であろうとだ。

重要となるべきは、あくまでも絶対値であるから。

世の異端視に泣き言を抜かすのではなく、是として雄々しく在れるなら、甘粕は人間賛歌を歌うだろう。

「もう一つは、認めがたい現実を前に、目を閉じ耳を塞ぐため狂気に曇らせる場合だ。」

これは実にくだらな。選択としては軟弱の極み。信念があらうと所詮は欺瞞、見るほどの価値はない」

甘粕正彦は逃避という行いを認めない。

如何なる理由があろうとも、人が意志を放棄する事を許容しない。叩き直さねばと思っている。

だからこそ、聖杯に懸ける祈りがある。この世のあらゆる情弱を正すために、試練の災禍をもたらそうとしているのだ。

「もし後者だとしたら認められんよなあ。その意志の真なる姿がまるで見えていない事になる。」

その光が同類同士の共感に過ぎないのか、それとも英霊さえ心酔させるに足る輝きなのか。分からんのなら確かめるより他にない。

聖杯戦争は身命を賭しての戦いだ。ならば積年の思いと信条、全てを投げ打つてでも臨むべきだろう。俺の前で道化の真似など許さん。死に逃げなど絶対にさせんよ」

もしも彼の者が狂気の霞に己を曇らせ、道化の仮面に真なる姿を隠しているのなら。

そんなものは認めない。互いに命を懸けて臨む者同士、真実の思いで対峙する事を求める。

相手が殻に籠って応じないというのなら、やるべき事など決まっていた。

「あの道化の仮面を剥いでやろう。彼女の真実の価値、その意志の如何を確かめてやる。

俺は人の意志を愛している。何度だって言ってやろう。愛する者たちが腐り落ちていく悲劇、どうして見過ごす事ができるのか。

我が願いは全ての人々の勇気の再起、そのための試練である。俺自身も、そんな人のための試練として在りたいと思っているのだからな」

常人の心理より外れた狂人である？ それがどうした。

そんな程度では逃がさない。遍く人の括りから外さず、抱きしめてやると豪語しよう。

異端の道理で歩むというのなら、条理の側の意志と戦う覚悟も当然あるのだろう。甘粕正彦は目を背けない、きちんと人として向き合つてやる。

殴るから殴り返せよ。どんな狂人であろうとも、闘争の真理から逃れられはすまい。

「わしとした事が、またも失念しておったわ。狂っておるのは目の前にもいたというにな。

肥大しすぎたその信念は決して止まらず、なまじ理解と共感が可能な部分を有しておるだけに、他者をも狂奔に巻き込む資質まである。鬼武蔵などより遙かに性質が悪い。

己の道理を憚らず、愛と勇気で世界をも滅ぼす。甘粕正彦、そなたこそ真正の狂人じゃ！」

この3回戦は異常者の戦いだ。

狂気と狂気、質は違えど常人の領域から逸脱した者同士。

彼等の戦いに王道は通じない。その結末が何処へと行き着くのか、



誰にも推し量る事は出来なかった。

### 3 回戦：ランルーくん

これは、とある女の子の物語。

彼女はとても優しい女の子でした。

彼女はとても綺麗な女の子でした。

大好きなパパ。大好きなママ。大好きなペットのペギーくん。

大好きな家族に囲まれて、女の子はとても幸せでした。

けれど、そんな女の子にも、1つだけ辛い事がありました。

女の子は食べ物が食べられなかったのです。

好き嫌いをしているわけではありません。

食べようとしても、吐き出してしまふのです。

食べようとしても、味を受け付けてくれないのです。

一度だけ、パパとママが無理矢理にでも女の子に食べさせようとした事もありました。

その結果を、女の子は覚えていません。ただ二度と、パパもママも、無理矢理に食べさせるような事をしませんでした。

パパとママは嘆きます。

この子はなんて可哀想なのだろう。

食べる事の美味しさを、幸せをこの子だけが味わう事が出来ないなんて。

けれど、女の子はへっちゃらでした。

女の子は食べる事をした事ありません。

だからパパとママが言う、食べる事の美味しさも幸せも知らなかったのです。

知らない事なら、辛いと思う事もないのです。そして吐き出すのは辛い事でした。

自分だけ知らないのは少しだけ寂しかったけど、その代わりにいっぱい愛情がありました。パパとママは女の子のために、口からでなくとも栄養を取れるようにしました。

女の子は心から、自分は幸せなんだと思っていました。

これは、とある女の子の物語。

彼女はとても明るい女の子でした。

彼女はとても幸せな女の子でした。

いっぱい愛情に囲まれて。いっぱい慈しみに育てられて。

たくさんの人に支えられて、女の子はすくすくと成長していきま  
した。

相変わらず、女の子の身体は食べ物を受け付けません。

それでも女の子には愛があります。不幸な事なんてありません。

パパとママに愛されて、ペギーくんを可愛がって、女の子の周り  
には愛で溢れていました。

時折、お腹がくうくう鳴って苦しくても、女の子は幸せでした。そ  
の幸せはきつといつまでも続いていくんだと、決して疑っていません  
でした。

女の子は、知りませんでした。

変わらないものなんてありません。終わらないものなんてありま  
せん。

幸せも、命も、いつかは必ず終わる時がくるんだという事を、女の  
子は知らなかったのです。

可愛がっていたペギーくんが死んでしまいました。

命の終わりを、女の子は知りました。命の儚さを、女の子は知りま  
した。

どれだけ愛を注ぎ、幸せに満ちていたとしても、こんなにも簡単に  
終わってしまう事を知りました。

パパは言います。これは仕方ない事だと。

ママは言います。いつまでも悲しんではいられないと。

命があるなら死もまたあります。いっぱい悲しんで悼んだなら、き

ちんと前を向いてペギーくんの方も生きていかななくてはならないと。パパとママの言葉は、きつと正しいものだったのでしょうか。

けれどそれをすぐに受け入れるには、女の子はまだ幼すぎました。それも仕方のない事でしょう。パパもママも、女の子がどれだけペギーくんを可愛がっていたのか知っていました。

すぐにでなくてもいい。きつと時間が女の子の悲しみを少しずつ癒してくれる。パパもママも、そう信じて疑いませんでした。

——お腹がくうくう鳴りました。

女の子は一人になりました。

女の子と、ペギーくんだったもの。

ペギーくんはもう動きません。あんなに元気いっぱい飛び回っていた翼は折れてしまいました。

これはもうペギーくんではありません。この肉塊からペギーくんはいなくなってしまうました。

それは悲しいことでした。命が終われば、そこには何の意味も無くなってしまうのだと、そう考えると胸が苦しくて堪りませんでした。

——お腹がくうくう鳴りました。

何とかしたい。

何かをしてあげたい。

大好きなペギーくんのために、してあげられる事は何なのか。

パパとママは、ペギーくんの方も生きてあげる事がそうだと説きます。

けれど、それは一体何なのでしょう。どうすればペギーくんの方も生きる事になるのでしょうか。

ただ長く生きること？ ペギーくんが生きた年数分だけ、同じようにきちんと生きること？

なんだか違うと思いました。別にただ生きるだけなら、ペギーくんがいなくても出来たはずですよ。

——お腹がくうくう鳴きました。

生きるとは何でしょう。

人はどうして生きてられるのでしょうか。

当たり前すぎて気付かなかった疑問、色んなことを考えに考えて、その答えに女の子は思い至ります。

人は『食べる』ことで生きているのです。人だけではありません。どんな生き物だって何かを『食べる』ことで生きる事が出来るのです。ならその食べる『モノ』とは何か？ それもやっぱり決まっています。

『命』です。どんな食べ物だって、大元のところには他の『命』があるのです。

生き物は『食べる』ことで他の『命』を貰って生きています。どんな時だって、どんな生き物だって、それは例外ではないのです。

—— お腹がくうくう鳴きました。

女の子の手には、動かなくなったペギーくん。

そこに命はありません。けれど命の名残ならあります。

毛や羽も、肉や骨も、かつてペギーくんだったものなのです。

ペギーくんはいなくなってしまうましたが、だからといって残されたものを無碍にして良いわけがないのです。

ペギーくんの方まで生きること。そのためにはペギーくんから『命』を貰わなくてははいけません。

たとえそれが、大切な命であっても、いいえ、大切な命だからこそ、そうしなければならぬのだと強く思います。

それこそが、ペギーくんにしてあげられる事だから。それだけが、ペギーくんへの最期の『愛』の証明になるはずだから。

くう、くう、くう、くう、くう、くう、くう、くう、くう、くう——  
喰う。

パクパク、ムシャムシャ、ゴクン。

女の子は頑張ります。ペギーくんのために頑張ります。

女の子にとって食べることは辛いこと。受け付けずに吐き出してしまいます。

それでもペギーくんのため、その命を貰おうと女の子はすごく頑張ろうとしていました。

最初は『それ』がよく分かりませんでした。

女の子は受け入れていました。吐き出していませんでした。使ってこなかった顎を必死に動かして、いっぱい『それ』を噛み締めました。

いつしか辛かった事も忘れていました。ただ夢中になって味わっていました。

ああ、本当は知っていたのです。

ペギーくんのために、とても嫌な食べる事をしようとした女の子。

けれどそうではないのです。嘘ではありませんでしたが、全部ではないのです。

ペギーくんを食べようとしたのだから、もっと単純に『そう』思っただけなのだから。

ペギーくんの分まで、とか。命を貰わなくちゃいけない、とか。『それ』に比べたなら、本当はとても小さな理由だったのです。

ただ『美味しそう』だと、ペギーくんを見ながら、女の子はそう思っていたのですから。

女の子は『美味しい』ことを知りました。

パパとママが言った『美味しい』ことの素晴らしさがよく分かりました。

そして思います。今まで『美味しさ』を味わえなかった自分は、なんて不幸だったのだろうと。

女の子はすっかり夢中です。

何もかも構ってはくれません。

それほどに美味しいのです。

それほどに幸せなのです。

大好きな、大好きな、わたしのペギーくん！

あなたがこんなにも美味しかったなんて！

女の子は、食べることの喜びを噛み締めて、その幸せを理解してしまいました。

これは、とある女の子の物語。

彼女はとても奇妙な女の子でした。

彼女はとても異質な女の子でした。

どうしてそうなったのか、原因は分かりません。

パパがどんなに調べても、ママがお医者さんに相談しても。

女の子が食べられない理由は分からないままでした。

なのに、女の子は食べられたのです。

理由は分かりませんが、とにかく食べられたのです。

何も食べられなかった女の子が、です。パパとママは喜ぶ事にしました。

まず他のものを試してみました。けれど駄目でした。

次はペギーくんと同じ肉を試してみました。けれど駄目でした。

次はあの時と同じ食べ方で試してみました。けれど駄目でした。

最後には、そのままの鳥の死体さえも試しました。やっぱり駄目でした。

パパもママも困ってしまいました。

やっぱり女の子は食べる事が出来ません。

原因もやっぱり分からないままです。

何もかもが無意味に終わって、期待を裏切られた気分でした。

ですが、無意味ではなかったのです。

女の子は食べ物が食べられません。これは今までと同じです。

けれど今の女の子は知っています。食べる事の美味しさと幸せを。

期待していたのはパパとママだけではなかったのです。二人の色々な試みに付き合っていたのも、また食べる事の美味しさと幸せを味わうためでした。

なのに、吐き出してしまいます。

食べる事は苦しいばかりで、全然美味しくも幸せでもありません。だからこそ求めます。何を食べればいいのか、自分は何を食べた

がっているのかを考えます。

みんなが美味しいと言うものは欲しくありません。

一流のコックが作った高級料理も、

新鮮なフルーツの盛り合わせも、

いっぱいのケーキやお菓子の山も、

レンレンバーガーのバーガーセットメニューも、

どれも食べたいとは思えません。

そうしていっぱい考えます。美味しいものは何なのか。

考えて、考えて、考えて、考えて、考えて——ふと気が付きました。

くうくう、と。

食べたいなど思うのは、決まって誰かと居る時でした。

それは仲の良い友達であったり、

それは親切にしてくれる隣人の人たちであったり、

それはいつも女の子を支えてくれるお医者さんであったり、

優しくしてくれる誰か、温かく接してくれる誰かでした。

そして女の子の心も温かくなると、決まって全く別の感情が沸き上がってくるのです。

女の子には、それが何なのか分かりました。

女の子は食べたいという欲求を知っています。

女の子は食べる幸せを味わった事があります。

パパやママが言っていた事も今なら分かります。その美味しさも

幸せも、ちゃんと実感したのですから当たり前です。

そう、女の子には分かっていたのです。

自分が何を欲しがっているのか、とうの昔に理解していたです。

食べることは、命を貰うということ。その命の分まで生きていくということ。

食べられなかった女の子にとって、食べることはそれだけで重いこと。何よりもその命を重んじるための『愛』の表現であったのです。

他の人の例なんて上げるまでもありませんでした。

だって、誰よりもそうしたい人はすぐ近くにいたのです。見て見ぬ



振りをしていても、本当はいつだって欲しがっていたのです。

大好きなパパ、大好きなママ。女の子を最も愛し、愛されている彼らこそ、女の子が最も欲しがっているものだったのです。

もう、どういう事なのかも分かっています。

女の子が食べたいと思うもの、それは代わりの何かじゃなくて。

女の子が大好きだと思う”誰か”こそ、女の子の食べたい物だったのです。

これは、とある女の子の物語。

彼女はとても誠実な女の子でした。

彼女はとても不憫な女の子でした。

女の子が食べられるのは、女の子が大好きになったものだけ。

それはとても異常な事です。普通の人たちとは明らかに違います。

例外的な拒食症、とお医者さんは言います。だけど結局、治し方は分かりません。

女の子にとって、それはもうどうでもいい事です。大事なのは食べたいと思う心をどうするかでした。

食べたい物は分かりました。ならば後は食べるだけです。

最初は普通の食べ物が好きになってみようと思いました。

そうすれば女の子もみんなと一緒になれます。みんなと同じ物を食べられるのです。

けれど駄目でした。女の子が食べたいのは『何か』ではないのです。『誰か』なのです。

名前も知らないその他の何かを、どうやって好きになればいいのでしょうか。何処の何とも分からない食材たちに、どんな好きを抱けたいのでしょうか。

ただの好きではありません。大好きなのです。女の子の心を温か

くしてくれる人たちです。こんなにも優しくしてくれるパパやママたちなのです。

そんな人たちと、どうして単なる食材を同じになんて思えるのでしょうか。

女の子の食べたい物は、すぐに見つかるものでした。

女の子の食べたい物は、簡単には手に入らないものでした。

食べたい物は目の前にあります。お腹がくうくう鳴きました。

でもそれは食べてはいけないものです。すぐ苦しくなりました。

どうして食べてはいけないのでしょうか。女の子は考えます。

パパのことが大好きです。ママのことが大好きです。大好きだからこそ、その命を貰うのです。

だってそれこそが愛の表現だから。貰った命の分だけ生きることが、パパとママにしてあげられる一番のことだから。

パパとママが大好きです。愛しているのです。

愛に貴賤なんて無いけれど、やっぱり順番というものはあります。確信を持つて言えます。ペギーくんよりも、彼らの事をもっともつと愛していると。

そんなに愛している彼らなら、きつと舌が蕩けるくらい美味しいでしょう。いっぱい幸せになれるに違いありません。

そう思うと、たまらなくなりました。とても我慢できなくなるくらい、お腹がくうくう鳴きました。

女の子は告白します。自分の気持ちを。

女の子は曝け出します。己の本性を。

それは異常です。それは畸形です。それは人として在ってはならない姿です。

それは『怪物』と呼ばれるものでした。皆から拒絶されるべき存在でした。

人であったパパとママに、女の子はどう映ったでしょう。自分たちの娘が顕した醜悪さを、果たしてどんな気持ちで受け止めたのでしょうか。

さぞや苦しかったに違いありません。悲しくて、何より恐れを感じ

ていたことでしょう。それでも彼らは、女の子に対して答えを返しました。

——いいや、それは間違っていることだ、と。

大好きなパパ、大好きなママ。

2人は良い親ではありませんでした。

2人は悪い親ではありませんでした。

女の子のパパとママは、素晴らしい親だったのです。

二人は言います。食べる事と愛する事は違う行いだ。

そんな道理は『怪物』だけのもの。人間の持つて良いものではない。だって人間は生きたいのだから。人間の気持ちを理解できる、同じ人間がその思いを踏み躪る行為を、愛しているなどと言ってはいけない。

女の子の本性を知っても、2人は逃げませんでした。

女の子の異常性を前にしても、目を背けず正面から向き合いました。

2人は受け入れます。

自分たちの娘が異形の何かである事を、しかと胸に刻みました。

その上で、決して人から墮ちる事がないように、人としての道理を説いたのです。

怪物のようだった女の子に、おまえは『人』だと。

人間としての道理を踏み外していない、ちゃんとした『人』なんだと。

誰よりも愛している、大切なわたしたちの『娘』なんだよ、と。

これは、とある女の子の物語。

彼女はとても恵まれた女の子でした。

彼女はとても恐ろしい女の子でした。

大好きなパパとママ。親としての慈しみを持った2人。彼らのおかげで女の子は人間のままでした。

彼らが説いた人としての在り方を信じました。けれど、女の子のお腹はいつまでも空いたままです。

飢えています。渴いています。点滴からの栄養では癒されません。一度知ってしまった幸せは苦しみの裏返しでもあります。女の子はとても苦しみました。

いつの頃からか、女の子の中には『怪物』が住み着くようになりま

した。

” どうしてこんなにも苦しまなければならないのか”

怪物は囁きます。

女の子が我慢している横で、嘲笑うように囁くのです。

” どうしてこんなにも我慢しなければならないのか”

怪物は囁きます。

パパとママの2人を指し示して、蔑むように囁くのです。

” どうして自分ばかりが損をしなければならない”

” 命を貰っているのはみんな同じなのに、わたしだけが駄目”

” わたしが食べたいと思う気持ちばかりが否定される。こんなのは不公平じゃないか”

パパとママは言います。それは人としていけない事だと。

けれどそれは正しいのでしょうか。時間と共に疑念は深くなりま

す。

誰だつて命をもらって生きているのです。他の何かを殺して生きているのです。

なのに女の子だけが我慢しています。女の子だけが食べてはいけないのです。

納得なんて出来ません。疑念は不満となつて、しこりのように残り続けます。

少しずつ、少しずつ、女の子の中で” 食欲”<sup>かいぶつ</sup>の声が大きくなっていきます。

パパとママの説く言葉も、次第に届かなくなつていきます。

女の子の中に真っ黒い気持ちが育っていきます。パパとママを見ていると、頭には恐ろしい思いが浮かんできます。その肉に食らいについて、思う様に食ったら、その喉を搔つ切つて、溢れ出る鮮血で渴きを潤したら、その内蔵を引き摺りだして、したたる味わいを楽しめたら、その頭をかち割つて、中の脳漿を啜り飲めたら、それはどんなに美味しいのでしょうか。きっと幸せになれるに違いありません。

”自分は他の人とは違う。けれどそれは自分が悪いのか?”

”わたしは何も悪くない。なのにみんなが、わたしのことを悪いように扱ってる”

女の子は食べられない自分を恨みます。

女の子は食べさせない周りを妬みます。

”どうして、どうして自分だけが!?” 女の子は理不尽を呪いました。

”苦しい。辛い。悔しい”

”どうしてどうしてどうして”

”わたしはみんなと一緒にやないんだろう”

やがて、女の子の心は誰からも離れていきました。

パパとママは大好きでしたが、恨めしくもありました。

女の子は食べられないのに2人は食べているのです。

女の子が味わえない幸せを2人は味わっているのです。

女の子の心はますます独りになりました。

女の子は独りきりです。

誰にも女の子の気持ちは分かりません。

誰にも女の子の苦しみは理解できません。

女の子がどれだけ飢えて、食べる事を求め欲しがっているのか、何気なしに食べているような人たちには想像さえつかない出来ないでしょう。

食べる事は生きる事です。食べられない女の子は、満足に生きる事さえ出来ないのです。

女の子の心は、緩やかに堕ちようとしています。

これは、とある女の子の物語。

彼女は怪物のような女の子でした。

彼女は人とは違った女の子でした。

女の子は、パパとママの言いつけを守っていました。

どんなに苦しくても、どんなに恨めしくても。

女の子は彼らが大好きでした。その心はまだちゃんとありました。

だから女の子は『人』のままです。今にも堕ちそうな危うさでは

あつたけど、女の子は決して『怪物』などではありませんでした。

それでも、女の子の中の『怪物』の囁き声は聞こえてきます。

大好きだから、食べたい。大好きな人たちの命だから、欲しくて

しようがない。

それを疎ましいとも耳障りとも思いません。時折、その『怪物』が

自分自身のように思える時があります。

痩せ細った身体、眼には暗い光が灯っています。

昔の明るさは何処にもありません。産まれ持った美しさも台無し

です。

いずれ自分は怪物に負けてしまうのだろう。女の子はそう思って

いました。

そんなある日のことです。

大きな音がしました。引つ繰り返った衝撃がありました。目の前

の景色が急転していました。

何が起きたのか分かりません。ただ家族みんなで出掛けていた時、

それは突然起こったのです。

——気が付いたら、女の子の目には『ごちそう』が映っていました。

パパからはいっぱい血が流れています。

ママからもいっぱい血が流れています。

女の子は静かに理解しました。ああ、パパとママは死んでしまうん

だな、と。

”——タバタイ”

女の子の中の怪物が騒ぎ出します。

”タバタイ。タバタイ。タバナクチャ”

食べる事は生きる事です。どんな生き物も他の命を貰って生きています。

受け取った命の分まで生きる事。それはどんな人にとっても正しい事です。

命が無くなれば、そこにはパパとママもいなくなってしまう。それを見過ごすことなんて出来ません。

大好きなのです。心から愛しているのです。誰より愛している二人だから、その命を無碍に扱うことなんてしてはならないのです。

”ガマン ナンテ イラナイ”

”ダツテ コレハ タダシイ コト ナンダカラ”

”ソレニ アア ナンテ モツタイナイ”

無駄になんてしません。

その肉はもちろん、眼も、歯も、爪も、髪も、残してはいけなから。たとえ一片でも、大好きな人の命を無為になんて出来ないから。

いっぱいいっぱい感謝して、その命をいただきます。それこそが女の子の”愛”なのでした。

女の子は嬉しいです。ずっと待ち望んでいたものを口に出来るのですから。

女の子は悲しいです。大好きだったパパとママにお別れをしなければいけないのですから。

怪物は嘔きます。お腹はくうくう鳴っています。ポロポロ涙が零れます。

生きるためには食べなければなりません。食べるためには他の命を貰わなければなりません。

女の子と他の人に違いなんてありません。ただ命をもらうべき相手が限られているからと、その何が悪いというのでしょうか。

さあ、いただきますしよう。

このとびつきりのご馳走を堪能しましょう。

お残しなんてしません。精一杯の愛情で髪一本まで食するのです。待ちに待った瞬間を迎えて、『女の子』はその口を開きました。

——そうだ。おまえは何も間違っではない。

それはパパの声でした。

死にかけた身体で、弱々しく絞り出す声で、パパは女の子へと語りかけました。

パパは言います。

食べたいと思うのは当たり前前の事。生きるために食べるのを責められる者はいない。

たえその形が他人と異なっていたとして、それが罪になるなどあるものか、と。

そんなパパの言葉に頷くように、ママの抱き締める手が強くなりま

す。その手は女の子を庇うように抱かれています。身を挺して、女の子が傷つくまいと守り通していました。

ママから伝わる温もりが、消えて尽きようとしているママの愛が、そこにはありました。

パパは言います。ママは頷きます。

だからこそ辛かった、と。

愛する娘を同じように理解してやれない事が、どうしようもなく悲しかったと。

女の子は初めて知りました。

パパとママがこんなにも苦しんでいた事を。

みんなと同じになれず苦しんでいる女の子のように、愛する娘を同じく理解してやれない自らの事を、パパもママも嘆き悲しんでいたのだと。

パパとママは、女の子に言いました。

だからこそ、こうなって初めて『あげられる』。

愛する娘のために、本当の意味でしてやれる事が出来たと、穏やかな声で言いました。



——”食べなさい”。

女の子の”性”はまともなものではありません。

愛する者しか喰らえない。それはなんておぞましい事でしょう。

けれど、『命を貰う』ことならば、どんな生物だって同じです。

人と怪物の違いとはなんでしょう。その線引きは何処でされるのでしょうか。

ただはつきりしているのは、パパもママも、女の子を受け入れているという事でした。

命とは回るものです。どんな命も、他の命を繋いでいます。

ならばこうして死に瀕した命を貰う事は、生物として正しい行いでしょう。

それをパパとママは受け入れました。愛する娘のために、自分たちの命を捧げる事を決めたのです。

その愛に、女の子は思い知りました。

自分がどれだけ深く愛されていたのかを。それがどれほどの幸福であったのかを。

そして、そんな愛を喰らわずにはいられない、己自身の呪わしさを思い知らされたのです。

女の子は泣き崩れました。

失われていく、大好きなパパとママの命を嘆きました。

己の中で、今も叫び続ける怪物の醜さを疎ましく思いました。

どうすることが正しいのか、女の子には分かりません。

パパも、ママも、怪物も、きつと誰もその答えを持つてはいないのでしょうか。

ただ、女の子は泣き続けました。正しさなんて知りません。張り裂ける心から溢れ出る思いの限りに泣き暮れました。

何もかもを振り捨てて、そうする事しか女の子には出来ませんでした。

女の子は、パパとママを食べませんでした。  
愛していたからです。

これは、孤独な女の物語。

彼女は怪物のような女の子でした。

彼女は愛の尊さを知った女の子でした。

かつて女の子だった娘は、女性として育っていました。

けれどその周りに人はいません。彼女は孤高であり、孤独でした。

決して、誰とも深い関わりを持たないように。

決して、誰にも深い思いを抱かないように。

無感の仮面をその面貌に被り、あらゆる人の接触到拒絶の壁を敷き  
詰めました。

それはまるで、深淵の暗黒の如く触れ難く、凍てつく氷雪の如く総  
てを拒むもの。

誰も彼女に踏み込もうとはしませんでした。生半な覚悟では、彼女  
の心に触れる事すら出来ませんでした。

彼女は己の呪わしさが分かっていました。

愛する人しか口に出来ない、そのおぞましさを理解していました。

自分自身の”性”を異形だと定めたのです。人の世に出してはな  
らないものだ。

彼女は内の『怪物』を封じる事に決めました。一生、自分の中で抱  
えていくのだと決意したのです。

彼女は、誰も愛さないと決めました。

愛してしまえば、それは自分の中の『怪物』を呼び覚ます事になり  
ます。

もう二度と、恐ろしい『怪物』を表に出すことのないように。たとえそのために、何も食べる事が出来なくても。

その苦しさだって覚悟の上でした。彼女の決意は固いものでした。彼女はいつだって独りぼっち。

何処にいても、誰といても、その心は常に一人。

そこに愛はありません。幸福もまたありません。

自身の『怪物』を否定する。それこそが『人』として、彼女の選んだ生き方であったのです。

人は辛さに耐える事が出来ます。

誰とも繋がらない孤独にも、求めたがる食欲にも、彼女は耐えます。

やがてそんな辛さにも、人の心とは慣れていくものなのです。どんなに辛いと思えても、自然と受け入れられるようになります。

『怪物』の声も、いつしか聞こえてこなくなりました。被り続けた無感の仮面も、彼女にとっての本当の顔になっていました。

孤独こそが、今の彼女にとっての真実なのです。

誰とも心を通わせない、独りきりで閉じた世界。

それが彼女です。『怪物』などではない、心を閉ざした『人』の姿がありました。

愛も幸福も求めずに、ただ無感動のまま在り続けること。そんな生き方こそ、彼女の世界にとつての”平穩”であるはずでした。

——そんな彼女の世界に、ある一人の”男性”が現れます。

彼女とも同じ年頃の、澄んだ真っ直ぐな瞳が特徴的だった人。

最初は彼も、彼女にとって他の多くの人たちと同じでありました。彼女の拒絶に気圧されて、同じようにやがては離れていくはずでした。

けれど彼は離れませんでした。いつも彼女と近い場所に居ました。最初は奇妙に思うだけでした。長続きはしないだろうと思ってい

ました。やがてはそんな彼との交流にも慣れてきました。彼と居る時間に違和感を覚えなくなりました。

そしていつの間にか、自分が彼という存在を受け入れ始めている事

に気付きました。

彼女は彼に問いかけます。

どうして自分などに関わろうとするのかと。

自分が他人を遠ざけようとしているのは分かっているはずなのに、何故わざわざ踏み込んでしようとするのかと。

同情ならば、すげなく断るつもりでした。

好奇心ならば、より強く拒絶するつもりでした。

助けなんていりません。期待されても困ります。これが彼女の生き方なのです。

『怪物』ではなく『人』として生きていくこと。そのために人を遠ざけようとするのは、もしかしたら間違っているのかもしれない。

けれども、彼女にはそれ以外にないのです。愛してしまえば、食べなくなるから。理屈の正しさではどうしようもなく、それは心の問題でした。

仮に間違っているとと言われても、彼女には届かなかったでしょう。彼女の心を理解できるのは彼女だけ。その苦しみが分からない人に言われて何になるというのでしょうか。

彼は答えました。

始まりは、確かにその2つが理由であったと。

独りきりなのを可哀想だと思った。どうしてそうするのか不思議に思った。

だからこそ知りたいと思ったのだと、彼は答えます。そしてそれが、彼女と共にいたいと思う強い動機になったのだと。

彼の瞳は、とても澄んでいました。その真っ直ぐな眼差しは、人の持つ本当の気持ちを映すものでした。

そんな彼が、心から知りたいと願い、多くの時間を過ごしたからこそ、覆い隠されていた彼女の本物の心を見抜けたのです。

優しく、綺麗な。

明るく、幸せな。

奇妙で、異質な。

誠実で、不憫な。

溢れんばかりの愛に恵まれた、美しい真実の彼女に気付けたので  
す。

だからこそ、彼は言います。これは仕方ないことだと。

損得ではないのです。正しいとか間違いとか、どうだっていいので  
す。

そんな理屈では抑えられない、素敵な気持ちが溢れてくるから、彼  
は決して止まりません。

どんなに壁を敷き詰めても、彼は諦めないでしょう。どんなに拒ま  
れても、彼は手を伸ばしてくるでしょう。

それは心の問題なのです。彼女の心を彼女しか理解できないよう  
に、彼の思いを止められる者もまた、彼だけしかいないのですから。

——うん、仕方ない。君のことが好きになったから、君と一緒にい  
たいんだ。

きつとそれは、致命的な言葉でした。

気持ちは理屈では抑えられません。それは彼女がよく知っていま  
す。

暗黒が晴れていくのを感じました。氷雪が溶けていくのを感じま  
した。

ずっと眠っていたはずの『怪物』が、ゆつくりとその鎌首をもたげ  
るのを感じていました。

彼女もまた、彼に『恋』をしてしまいました。

これは、不幸な女の物語。

彼女は恐怖を知っている女の子でした。

彼女は自分の恐ろしさを理解している女の子でした。

彼女は、彼の前から姿を消しました。

彼の思いに応える事もせず、自分の気持ちに向き合う事もなく。彼女は逃げ出したのです。それ以外にどうしたらいいか分からなかったのです。

お腹がくうくう鳴っています。

目覚めた『怪物』の音が聞こえています。

彼女の内を喰い破って、今にも外へと飛び出してきそうな、獰猛な訴えでした。

ずっと我慢してきたのです。その分だけ『怪物』の飢えは強烈でした。

だから彼女には逃げるしかなかったのです。

彼女はずっと耐えてきました。誰とも深く関わらず、自ら愛を遠ざけていました。

けれどそれは、決して戦っていたわけではなかったのです。自分の中の『怪物』から、彼女はいつだって逃げてきたに過ぎないのです。こうして直に向き合えば、きつと耐えられないと知っていたから。だから心に封をして、自分の『怪物』が表に出てこないようにしてきただけなのです。

愛は理屈ではありません。

気付いてしまえば、その気持ちから逃れる事は出来ません。

抑えようとすれば気持ちは強くなります。忘れようとしても自覚はより深くなります。

そして彼女にとって、それは自らの『怪物』を大きくする事でもあります。彼への思いを募らせれば募らせるだけ、彼を食べたいという“欲望”が沸き上がってくるのです。

——タバタイ、タバタイ、タバタイ。

ああ、心が軋んでいく。

——タバタイタバタイタバタイタバタイ。

こうなりたくなかったから、ずっと耐えてきたのに。

こんなおぞましい自分を見たくないから、ずっと目を背けていたのに。

——タバタイタバタイタバタイタバタイタバタイタバタイタバタイ。

イタバタイタバタイタバタイタバタイタバタイタバタイタバタイ  
ベタイタバタイタバタイタバタイタバタイタバタイ——!!

彼女の愛はあまりにも苦しいものでした。

彼女の愛はあまりにも切実なものでした。

愛とは求め欲する感情です。それは誰でも変わりません。

けれど彼女が求めるものはあまりにも致命的でした。そのたった一点の違いが、彼女をこんなにも他人と違うものに変えていたのです。

それは人が受け入れられないものです。

その『怪物』は人と共存できないものです。

だから封じるしかありません。『人』として生きていくにはそれしかないのです。

だから、やつぱりこれで良かったのです。たとえ逃げてるだけだとしても、これで愛した人を傷つけずに済んだのですから。

だからこそ、そんな自分の気も知らずに、再びのこのこ現れた彼を見て、彼女は強い怒りを覚えました。

彼の能天気さが度し難かった。

彼の危機感の無さが信じられなかった。

どれもこれも、彼が真実を知らないから。だから彼女は、自分の全てを吐き出していました。

パパとママ以外、誰にも話した事がない真実を。

自分の中にいる『怪物』の正体、愛した人を食べたくなる異質の“食欲”を。

もしも理解しないのなら、今度こそ拒絶するつもりでした。信じられないならそれまでだと思いました。

なのに、彼は驚きもしませんでした。

彼は言います。君の事を知るために頑張ったと。

どうして姿を消したのか、その理由を知らなければ追いかける資格がないと思ったから。

昔の主治医だった人を当たり、色々な関係者たちを当たり、全てを知る人がいなくても様々な断片から真実に辿り着いたのだと。

彼の至った真実は、彼女の真実を捉えていました。

彼は彼女が『怪物』だと知っています。それでも彼女の前に現れたのです。

彼は彼女がどうして姿を消したのか知っています。それでも彼女の前に現れたのです。

好きだから。愛しているから。言葉は月並みで、けれどそれ以上のものなんてあり得ない、心からの思い。

そこに嘘はありません。それは彼女にも分かっている、だから彼が覚悟を持ってここに来た事を理解してしまいました。

——ああ、この愛のためだったら、命と引き換えにしたって構わない。

まるで自然な事のように、その言葉は彼の口から出ていました。

きっとそれくらい、彼にとっては当たり前の事だったのでしよう。

人が怪物かなど、瑣末な事です。そこに本当の愛があるのなら、彼らのような人たちは我が身を捧げる事だって躊躇ったりはしないのですから。

そんな人たちの事を、彼女は知っています。

それは彼女を育んでくれた人たちでした。彼女を慈しんでくれた人たちでした。

大好きだった、パパとママ。彼らもまた、愛する彼女のため<sup>むすめ</sup>に全てを投げ打ってくれました。

彼らの素晴らしさを知っています。その思いの尊さを知っています。彼女の周りにはいつだってそんな愛を持つ人たちが溢れていました。

そう、だから、彼女は思い知らされずにはいられなかったのです。

そんな素晴らしい彼らから、奪う事のおぞましさを。

彼らのような者たちを食う事しか出来ない、己自身の呪わしさを。彼女は思わずにはいられません。どうして自分のような『怪物』の周りには、こんなにも素晴らしい人たちがばかりがいるのか。

彼女だって彼らが大好きです。嫌いになんてなれるわけがありません。けれども彼女の愛は、そんな彼らを食べる事しか出来ないの



す。

それが彼女には耐えられません。

愛する人に与えたいと思うのは彼らだけではありません。

好きな相手に報われてほしい。幸せになってもらいたい。そう願うのは誰であれ同じ、不思議でも何でもない当たり前の事なのです。

彼女の性は紛れもない『怪物』です。

愛した者を喰らいたい。そんな衝動を生まれ持った彼女の魂は、確かに異質な形をしているのでしよう。

それでも彼女は『人』なのです。与えられてきた多くの愛が、彼女を真つ当なまま『人』の位置へと留めてきたのです。

だからこそ彼女は苦しんでいるのです。いつそ『怪物』に堕ちてしまえばどれほど楽か、そう思いながらも『人』に留まる事を止めようとはしませんでした。

それもまた、たくさんの愛を与えられてきたから。

彼女に愛をくれたのは『人』だから、奪うしかない『怪物』になんてなりたくない。

それこそが彼女の本心です。それだけのために、彼女は今日まで過ごしてきたのです。

語られた彼女の本心に、彼は頷きます。

それでも彼は彼女の前から去ろうとはしませんでした。

彼は言います。ここで去るのなら、最初からここまで来てはいない。

彼女の真実を知り、こうしてやって来たその時から、既に覚悟は出ていると。

だってそうだろう。幸せになってほしいと君は言うけど、君のいまのままの世界で、どうやって幸せになればいいのか、と。

愛は、理屈ではないのです。

損得でも、正しいか間違っているかでもありません。

どうしようもない感情なのです。求めずには、与えずにはいられないものなのです。

人も怪物もありません。ここにいるのは彼と彼女、どちらも愛のた

めにこうしているのですから、それぞれの思いを貫いたがための結果でした。

そして、互いが思いをぶつけ合った今、どうするかもまた彼ら次第。正しい解答なんてないのでしよう。彼ら自身の心に従うしかないのです。

彼は、真実を知っても彼女と一緒にいる事を望みました。ならば次は、彼女は答えを出す番です。

彼女は『怪物』のような女の子でした。

今も彼女の中の”食欲”は、彼を求め欲し続けています。

これを無くす事は出来ないでしょう。彼といる限り、『怪物』はいつも彼女の中で暴れ狂っているに違いありません。

それは彼のことを愛しているから。不純のない清廉な思いで、彼のことを見ていたから。『怪物』のような彼女の心は、どんな『人』よりも純粹でした。

彼女の心は、答えを出しました。

彼女は、彼を食べませんでした。

愛していたからです。

これは、幸福を掴めた女の物語。

彼女は愛を与える喜びを知る女の子でした。

彼女は愛を与えられる幸せを知る女の子でした。

彼女は、彼と一緒にいる道を選びました。

裡の『怪物』は変わりません。それでも彼女は選びました。

それは心に従った選択でした。彼女は愛のために逃げるのではなく、己の中の『怪物』と戦っていく道を選んだのです。

もちろん、そこに保証なんてありません。

いつかは負けてしまうかもしれない。この選択を後悔する時がくるかもしれません。

それでも彼は、彼女のことを恐れませんでした。そのおぞましさを知りながら、彼女を支える決意をしました。

その苦しみの元凶が自分であると理解して、その上で彼女の前から去らず、自分の心に従った対価として、精一杯の愛で尽くすことを覚悟したのです。

人として、彼らは愛し合いました。

人として、彼らはたくさんの時間を共有しました。

人として、彼らはお互いの幸せを育んでいきました。

彼らは信じていました。

これからの生涯を、一緒に歩んでいけると。

その果てがどんな結末でも、2人で立ち向かっていけると。

そして未来がどうであれ、今という幸せに嘘なんてひとつも無いのだと。

2人の心に曇りはありません。

彼らは幸せを信じ、そのために戦っていく意志があります。

ならばその思いは尊重されるべきでしょう。たとえ結末が幸福であれ悲劇であれ、その過程には彼らの苦悩や葛藤、揺れ動く気持ちの如何が描かれるべきです。

けれども、彼らは知りませんでした。

これは物語ではありません。現実とは、もつと無残で理不尽なものであると。

愛も決意も、そんな不条理の前では何の意味も為さないのだと、彼らは知らずすぎました。

これは、幸福を掴めたはずの女の現実。

それは何の変哲もないはずの日でした。

彼も、彼女も、また2人の明日がくると疑っていませんでした。何かの因果があったわけではありません。誰かの悪意があったわけでもありません。

あえて言えば、間が悪かったと、それだけの話です。変わらない日常の中でした。

掛かってきた連絡は、あまりにも唐突でした。

彼女は何の予感もしてませんでした。何の覚悟も出来てませんでした。

きちんと受け止める事さえ、きつと出来てはいなかったでしょう。その時の事を、彼女はよく覚えていません。

何かの事故が起きたのだと、そんな事を言っていたような気がしません。

大事なものはそんな事ではありません。彼女が”誰”を失ってしまったのか、唐突ですが覆しようがない事実がそこにはありました。決断した2人の結末は、怪物も人も関係ない『ありふれた不幸』でしかありませんでした。

彼女は、彼を食われませんでした。

愛していましたが、特に関係はありませんでした。

これは、幸せを掴めなかった女の物語。

彼女は愛を一度失った女の子でした。

彼女は愛を再び失った女の子でした。

彼女の愛は、深く、重い。

それは決して代えが効かないもの。二度は手に入らない奇跡のよ  
うな珠玉。

あるいは、愛に貴賤も格差も無いのかもしれない。それでも、彼女  
のそれが他の人たちよりもはるかに得難いものなのは事実。

失われた愛の尊さは、代わる絶望の闇を深くする。

もたらされた光は、再び彼女から消えて無くなる。

喪失の衝撃は計り知れない。手に入れてしまったからこそ、その痛  
みは心に刻まれる。

彼女はずっと孤独の中で耐えてきた。

けれどそれは、決して彼女の強さを意味しない。

苦しさに耐えようとするのは強さではない。苦しさに打ち勝とう  
としてこそその強さである。

その強さは、もはや彼女から失われた。再び独りとなった彼女に、  
この孤独を耐え抜く事は出来はしない。

人は、希望を持たずとも生きていく事は出来る。

しかし、希望を奪われてから立ち上がる事は難しい。

それを成し遂げられるのは、芯にある強さ。他人には依らない、自  
立した価値観と確かな自信。

彼女にはそれが無い。自身の『怪物』を認めずに否定してきた彼女  
には、それだけではどうしても持つことが叶わない。

折れるしかない。挫けるしかない。心は嘆きと絶望に堕ちて、彼女  
は二度目の悲劇の前に、真の意味で意志を屈するより他にない。

——けれど、彼女は絶望しませんでした。

彼女の希望は、彼女の中になりました。

失われた彼との愛は、けれども遺したのももあつたのです。

彼女の中には新しい命が宿っていました。それが彼女を繋ぎ留め  
ました。

愛すべきものは残っていたのです。それを自ら放り出すのは、決し  
て許されない事でした。

嘆きと絶望より、彼女は立ち上がりました。

愛すべきもの、守るべきもののために、屈するわけにはいきませんでした。

親子としての愛を与えられ、男女としての愛を育んで、そして母としての愛を注ぐ。

愛こそが彼女の人生の光でした。愛があつたから、彼女は未だに『人』としての道を歩むことが出来るのです。

彼女にとつての愛とは、それほど切実で、命を懸けても守らねばならない尊いもの。そのためならば、どんな絶望の闇の中でだって立ち上がってみせましょう。

あらゆる苦しみ能耐えましょう。

あらゆる困難にも立ち向かいます。

この身に巢食う『怪物』も、生涯をかけて背負い続けてみせましょう。

だからどうか、生まれ出でる新たな魂に祝福を。この子の未来に、どうか多くの幸があらんことを――。

彼女は祈りました。精一杯祈りました。

そこに虚飾はありません。そこに迷いはありません。

その愛の真実を穢すことは、きつと神にも悪魔にも出来ないでしょう。

幼稚なほどに真つ直ぐで、寧猛な欲求であるからこそ打算の余地が微塵もない。きつとそれは地上のどんな思いよりも誠実で、清らかなものであつたはずです。

けれど、彼女は思い出すべきだったので。

いえ、思い出したところで意味は無かつたのかもしれない。

現実とは不条理で、理不尽とは唐突で、そこに思いの尊さなんて何も関係しないのだと。

その残酷さを、彼女はとうに思い知っていたはずなのですから。

結論から言いましょ。

彼女は母にはなれませんでした。

その手に愛する子を抱くことは出来ませんでした。

産まれてくるはずだった命は、産まれてはきませんでした。

胎から出てきた我が子は、彼女に産声を聞かせることはありませんでした。

彼女が産んだ子供は、死産でした。

彼女は、自分の子供を食べられませんでした。

愛していましたが、抱きしめることさえ叶いませんでした。

何がいけなかったのでしょうか。

どうしてこんな結末になるのでしょうか。

彼女の物語の、いったい何処に原因があったのでしょうか。

彼女は考えました。

行き場もなく荒れ狂う、業火のように煮え滾った怒りの中で。

喪失の現実には打ちのめされて、洪水のように溢れ出てくる嘆きの中で。

憤怒が、悲嘆が、疑念が、際限なく堂々巡るその心で、彼女は思っていました。

何故、どうして、自分にこんな、この理不尽の理由は何なのか。

彼女は『人』として生きてきました。彼女は『怪物』に耐えてきました。

それなのにどうして、どうしてこうも残酷な運命が訪れるのか。

『人』として生きた事が罪だというのか。『怪物』がそのように生きた事がそれほどに悪しき事だともいうのか。

彼女は考え続けました。考えて、考えて、この結末の因果を探し続

けました。

そして、彼女は答えを出します。

きつと自分の中の『愛』のカタチに正直でなかったのがいけなかったのだと。

素晴らしい『愛』を、怪物だなんだと決めつけて、拒み続けたのが不実だったに違いない。

だってほら、もしも『愛』に正直であったから、みんなを失うことなんて無かった。

パパもママも、愛し合った彼も、愛してあげたかった我が子も、今もずっと一緒だった。

ペギーくんのように、命は一緒になって永遠だったはずなのに。

ごめんなさい、パパ。

ごめんなさい、ママ。

ごめんなさい、大好きなあなた。

ごめんなさい、大好きな赤ちゃん。

愛してあげられなくてごめんなさい。一緒になれなくてごめんなさい。

今度こそちゃんとするから。次は間違えなできちんとやるから。

わたしは悪い子でした。これからは立派な『怪物』になりますから。

だから、だから、だから——どうか、愛させてください。

けれど、その相手はもういません。

愛とは切実で、命よりも重く尊いもの。

どんなに飢えても、苦しく辛くても、”とりあえず愛する”なんて出来るわけがありません。

愛したい。愛したいのに、愛せない。ああ苦しい。泣きたくて泣きたくて、けれど涙もとうに枯れ果てて。

いつしかその心までも尽き果てながら、彼女は愛を求めて彷徨っていききました。



ランルーくんは食べるのが大好きです。

おいしくなるよう頑張りました。

最高の食材を、最高のレシピで料理します。

焼きすぎ、かけすぎはいけません。大切だからこそ丁寧に、愛情だけはいっぱい。

素材を活かした最高級の味わいに。出来上がったならいただきます。

漂ってくるいい香り。見ているだけでお腹がくうくう鳴っています。

お残ししてはいけません。貰う命に感謝を込めて、おいしくおいしくいただきます。

けれど、ランルーくんは食べられません。

どうしてなのでしょう？

やってきたのはお月さま。

とても素敵などころです。だって素敵な“食材”がたくさんあります。

さあ、いっぱいいっぱい食べてあげましょう。丁寧に真心込めて料理してあげましょう。

そうすれば、ホラ、ご馳走は目の前に。待ちに待ったこの瞬間を、精一杯に楽しみましょう。

けれど、ランルーくんは食べられません。

どうしてなのでしょう？

ランルーくんには分かりません。

どうして食べられないのかわかりません。

こんなにお腹がすいてるのに。こんなにみんなの事を愛しているのに。

ランルーくんのお腹はいつもペコペコ。苦しくて悲しくて、泣きたくて仕方ありません。

けれど涙は出てきません。これもどうしてなのかわかりません。

アア、才腹 ガ スイタナア。

聖杯にお願いすれば、いっぱい食べられるのでしょうか？

聖杯にお願いすれば、いっぱい愛せるのでしょうか？

ランサーはそう言います。やっぱりランルーくんには分かりませ  
ん。

もしも本当に、世界が愛するものでいっぱいになったのなら、なん  
て素敵な世界でしょう。

食べても食べても無くならない。何度お腹いっぱいになっても溢  
れる。

そんな世界でなら、ランルーくんは幸せになれるのでしょうか？

こんな苦しい思いをしないで済むのでしょうか？

ランルーくんは分かりません。

どうしてこんなに苦しいのか。

どうしてこんなに悲しいのか。

どうしたら自分は幸せになれるのか。

深く被ったピエロの仮面、その奥に隠された本心は見えませんが。

きっと本人でさえ、もはや見ることは出来ないのでしょうか。

何も、何も、ランルーくんには分かりません。

見えないままで、隠したままで、ランルーくんは今日もご馳走を求  
めて彷徨うのです。

きっと、今度こそ、お腹いっぱい満たされるんだと信じながら――

\*

再現された月の校舎を、甘粕正彦は歩いていく。  
その足取りにが決意がある。

己が為すべき事を承知し、迷いを振り切った者にこそ宿る意志が。  
男は己の行いを疑わない。彼の信じる正しさに繋がる道筋と、見据えた眼差しは前だけを向いている。

それは輝けるような強い在り方。

脆弱な打たれ弱さなど持たない。斯くあるべき勇敢の証明。

その心には一点の曇りさえ無いだろう。快活に、堂々と、誇りある道を歩んでいると自負があるからこそ、男子の魂は光を放つのだ。

悲嘆や後悔を偽りで覆い隠そうとする有り様とは、正反対に。

阻むものはなく、甘粕正彦は真つ直ぐに目的とした場所へと到着した。

「これはどのようなぐう用件で？　ここはあなたのような人には縁の無い場所ですよ」

保健室へと入室した甘粕に、部屋の主であるカレンはそう告げた。

「そう言ってくれるなよ。俺とて人の子だ。医師のやつかいになることもある」

「どの口が言うのかしら。肉体面でも精神面でも、何をしても堪えないどころか意気揚々と立ち上がるおめでたいその性質。あなたほど苛め甲斐のない人間はいないわ」

「これは容赦のないことだ。しかしな、女医。おまえたち運営側は聖杯戦争を公平を保つためのもの。その立場は中立に在るのだろう。優遇を求めませんが、一方的な切り捨てもその意義を問われるのではないか？」

「この対応は元となった人物の性質を反映したものですのであしからず。確かにアルゴリズムの方向性に不本意ながら問題提起をされていますが、欠陥と診断されるほど破綻した論理でもありません。

元よりこの聖杯戦争とは、痛みと死を与えるものなのですから」  
辛辣に、冷たく。

投げかける言葉には拒絶の意志が込められる。

この相手には何もすべきことは無いと、明確に理解しているが故に。

「決して尽きない可能性、それこそが月でも観測できない人の価値。そしてそれが最も顕著になるのが戦争などといった危機的な状況。だからこそこの戦いはあるのです。」

ムーンセルは求めています。あなたがたの苦痛を、嘆きを、絶望を、そしてその窮地より発揮される、方程式の成り立たない事象の数々を。

ほら、何処にも矛盾はないでしょう。苛虐こそ月の意思ならば、私のパーソナリティもその意図を反映するAIの定義を外れてはいません。

そして私の思考論理は、あなたに対して施す手を持ちません。どのような用件はか知りませんが、私がそれを了承することはないと思いたくない」

「なるほど。それには俺も領こう。やはりおまえとは通じるものがあると思うがな。」

だが、ならばこそ聞いてほしい。そのようなおまえだからの申し出だ。損はさせんよ」

拒絶を受けても、甘粕の態度は変わらない。

不快に思うことなく、むしろ喜ばしいとばかりにカレンの意思を尊重し、その上で己自身も譲らない。

「用件は単純だ。見繕ってほしい『魔術』がある。手配を頼みたい」  
「話にならないわね。あなたが言ったように私は中立の立場です。術式の提供など論外だわ」

「それは戦力として見た場合だろう。おまえたちの中立とは直接の戦闘行為に關したものだ。それ以外では、むしろ両陣営の万全を補助する役割がある。ならばそれに則した用途に限定すれば、中立性も保たれよう」

それは感情論ではなく、理詰めという言葉による説き伏せ。

要求があるからにはその理屈もある。相手の拒絶を解きほぐすべ

く、甘粕は自らの理を重ねていく。

「此度の俺の対戦相手。そうだな、登録名に則ってランルーくん、と呼ぼうか。俺の提案とは彼女への処置に関する事だよ。」

有り体に言つて、彼女はまともではあるまい。なあ、女医よ。参加者の健康管理を担当する者として、この状態を看過することをどう思っている?」

「……彼女の精神状態は月で発症したものではありません。極めて特殊なケースであるのは認めますが、その状態で参加を表明した以上、こちらから処置する必要性は認められない」

「が、処置することが不当であるとも言えまい。窮地における変革、感情がもたらす人間の変動こそ月が求めるものならば、これとてその一環には違いあるまい。」

改善、そう改善だ。俺は彼女を正気に戻してやりたいのだよ。狂気の不明を良しとするのではなく、彼女にはしかと目を見開いてもらいたい。より善き姿に戻そうとするのなら、それはやはり改善と呼ぶべきだろう」

「それをあなたが言うの? 対戦相手である、これから殺し合うべき間柄のあなたが。それこそ理屈に合わないとは考えないのかしら」

「考えんな。むしろ対戦者であればこそと思う。命を賭して競う相手だから、口を挟む権利があると。」

真剣なのだよ、俺は。相手にもその覚悟を求めることの、いったい何がいかんという。切実な死合いの場で、その程度も持たない事の方がよほど不義理ではないか」

これは互いが己のために傷つけ合う闘争だ。ならばこそ、踏み込むことも許される。必然として命を懸ける覚悟が求められるのだから、何をしようともそれはこの上ない真剣での行いである。

事の正否を決めるのは覚悟の如何。殴られることを覚悟するから、殴ることが許される。己が掲げる信条を、甘粕は臆面もなく語っている。

「確信がある。彼女の真価とは表層の怪物性ではない。道化の姿に隠

れた奥にこそ、それはある。

他意はない。俺はそれを知りたいだけだ。彼女が持つ輝きをしかこの身で味わいたい」

「それは彼女の傷を開く行為です。心に受けた痛みが致命に繋がることもあるでしょう」

「痛みを与えるのがこの戦いの意義なのだろう。変革を見守るのが月の意思ならば、そうした結果として受け入れてこそその公平ではないかね。

案ずるなよ。今回は俺とて雑には扱わん。荒療治には違いないが、繊細を心掛けるとも。なにせ淑女の心象に脚を踏み入れようというのだ。礼節くらいは弁えるさ」

甘粕は譲らない。

すでに決意は胸にあり、後はやり遂げるのみ。

その意志は不屈そのもの。単純明快、彼はやりたいと思うからそうするのだ。

人の勇気を、輝けるその姿を目にしたい。己はいつだって胸踊る光景を望んでいるのだから、そのための労苦ならば喜んで負うだろう。

圧を伴う言葉や表情にも、節々に滲み出る幼稚な真意。

それを感じ取ったのか、先に折れたのはカレンの方だった。

「……用途の限定。あくまでも使用を彼女の精神疾患の治療のみに留めるなら、条件次第ですが申し出を受けることも考えないではありません」

「ほう。快い返事をいただけで嬉しいが、どういった心境の変化かな？」

「変なふうには受け取らないでくださる。門外漢にやらせて、半端な結果にするのもどうかと考えただけです。

ここで私が断つても、あなたは諦める気など無いのでしょうか。それでああなたが不覚を取るなりは自由ですが、処置を間違えて壊してしまうような結末は容認し難いのですよ。

彼女の痛みは、力で触れるべきものではない。強さばかりを声高に叫ぶような粗忽者に任せてはおけないでしょう」

「そうか。いや助かる。素直に礼を述べさせてくれ。言うように、この手の事は俺にとって専門外。どうにもやりすぎてしまおうと自覚はあるのでな、手段は選ばせてもらおうと思ったが、見込んだ通りのように安心している。」

だがな、女人の心が繊細であり複雑怪奇なのは承知しているが、少々の素直さとして必要だと思っぞ。そんな言い繕った言い様でなく、もっと率直さを持つといい」

甘粕の言い分は、言ってしまうえば屁理屈の類いだ。

道理が通っているように書いて通っていない。少なくとも従わなければならぬ理屈ではない。

断るだけなら閉め出してしまえばいい。それでも甘粕は諦めないだろうが、それはまた別の話だろう。

それでも、カレンはそれをしなかった。

再現された彼女という人格は、どうあれ甘粕の申し出に頷いてみせたのだ。

「あら、私は率直ではないと。事実を告げてきたつもりでしたが、何をもってそう感じられたので？」

「簡単な事だ。色々と言っってはくれたがな。」

「おまえ、要は好きなのだろう。嗜虐の愉悦というやつが」

「今度こそ、敵意を滲ませてカレンは甘粕を睨み付けた。」

「再現されたものかもしれん。だがおまえがそうと感じる心は、確かにあるものだろう。」

AIとして、所詮は本機能の付属品かもしれんがな。せっかく持った個なのだ。理屈ばかりでなく、もっと趣向を愉しむ余分を持ってみるといい。

「案外、そういうところから開ける世界があるかもしれんぞ」

「本来ならば頷く必要のない事柄を了承した理由<sup>わけ</sup>。」

「何てことはない。カレン本人がそれを求めたというだけだ。」

聖杯戦争を運営する装置として、そこに付属されたパーソナリティ。細部まで元の人物を再現した思考パターンは、人のように己の好みで判断を下していた。

「あなたは何がしたいの？ 意味の見えない雑音ばかりを振り撒いて、AIにまで介入しようとする。

はつきり言います。あなたの行動は破綻している。勝利を求めるものとして矛盾だらけよ」

「勝利を求める、か。勝ちというものを設定した条件達成でのみ判断する、観測の化身らしい結論であるが。

俺はただ正直なだけのつもりだよ。俺自身の心に従っているに過ぎん。己を偽らず、真に望んでいる事をしている。

人の勇気が好きだ。立ち上がるうとする姿を愛しく思う。そのよな光に溢れた世界が到来してほしいと心より願っているのだ。

だからこそ、俺はあらゆる他者に試練を課す。他者とは、すなわち人なのだから。愛すべき輝きを守るため、俺はこの行いに迷いなど持つておらん」

敵に利するとも見える行いをし、自らが不利を得る事もいとわない。

常道に照らし合わせれば正気を疑いそうな行いも、甘粕にとってはなんらおかしいものではないのだ。

人の輝きを愛するから、それを最大限に発揮させようとする。遍く意志を愛しく思っているから、あらゆる他人がその対象であり、殺し合う敵でさえ例外ではない。

全ては彼が感じ、彼が愉しいと思える行為に終始する。その”趣向”に則れば、甘粕正彦には一点の矛盾もなかった。

「そもそもだ、人の定義とは何処にある？ 血肉を持つことか？ ホモ・サピエンスよりの、遺伝子の証明を有していることか？

違うと、俺は思う。大事なのは意志の有無。確固たる己を定める自立した意識を持つなら、それは俺にとって人なのだ。機械だろうが怪物だろうが、愛すべき者に違いない。

その目覚めを願っている。誕生を祝福しよう。存在に縛られず、真に立ち上がる瞬間を目にしたいのだよ」

その期待の眼差しは、カレンにも向けられている。

彼は人の意志を等しく愛しているのだから、その定義に当てはまる



のなら当然そうなる。

如何にムーンセルに人格を再現されたとはいえ、本質はあくまでAI。道具として使われるべきという存在理由にも無頓着だ。

カレンのために、ではない。あくまで己がそうしたいからそうするまで。相手の事情にも左右されないから、その行動にはぶれが生じない。

あんまりといえばあんまりな、その独善ぶり。

手の付けようがない傍迷惑さに、敵意を持つ事さえ馬鹿らしいとばかりにカレンは意気を解いた。

「改めて言っておきます。私、あなたの事が嫌いです。出来ることなら関わりたくありません。」

「それでしよう？ 傷のひとつさえ持たない人間なんて、狂人よりもよっぽど異常者だわ」

そんな自己の意思表示を行ったカレンに、甘粕は愉しげに微笑した。

「それで？ どのような術式をお求めですか？ 閉じた心象に侵入しようとするなど、およそまともなソフトではなさそうですねが」

「否定はせん。かつては幾人もの心を壊してきた曰く付きの代物だ。俺としても、まるで無関係というわけでもない。」

「とはいえ、元来の用途でいえば医療ソフトだ。むしろこちらのやり方こそ、あるべき使用方法だとも言える。そう不適切でもないだろう」

それは、最大の禁忌であり、辿るべくして辿った終着点。

医療を目的としながら、しかしあまりの”幸福”ゆえに人を壊してしまうもの。

電脳を通した他者の交信・感応、発生する自他の融け合いに伴う多幸感、安心感はあらゆる電子ドラッグを上回る。

意志弱き者の鬼門。魂の腐敗を誘発させる墮落の温床。

辛苦をもって魂の練磨を願う甘粕の信条とは対極にあるもの。だからこそ、正反する両者には数奇な縁が生まれていた。

かつて遭った、この世で最も墮落を善しとした女。彼女の手により

創造された忌むべき力の名を、甘粕は躊躇うことなく口にした。  
「――」万色悠滞」と、いうのだがな」

### 3 回戦：無辜の怪物

空虚さだけが、彼女にはあつた。  
その手にも、その腹にも、その心にも。

何も満たされない、空っぽなまま彷徨い歩く器。

被った道化の面から覗かせる瞳には、虚空へ続く陥穽のような色の無い光が瞬いていた。

「おお……なんと嘆かわしい。妻よ、みたされぬその空腹を直ちに癒すことの叶わぬ、我が身の至らなさを許したまえ。

されど案じ召されるな。まもなくその腹へと肉が戻ってくる。此度の供物は極上の一品。貴女の純なる愛に捧げられるに足るものであろう」

絶え間なく禍々しさを発しながら、堕ちた黒いランサーが言葉を告げる。

狂喜を浮かべ高らかに、妻と呼ぶ己のマスターへと壊れた祝福を謳い上げた。

「ウン……ウン。才腹 スイタナア。イツモ コンナニ ペコペコ  
デ ランルークン ハ 悲シイヨ。才腹 イツパイ 満タサレル  
ナラ トツテモ 嬉シイネ」

そんな言葉も、届いているのか、いないのか。

返される答えに纏う空虚は、それさえも判然としない。

相手を、あるいは自分自身でさえも、本当に正しく認識できているのか。

道化師ピエロのマスター、ランルーくん。

仮面に描かれた笑顔の通りに笑みを零しながら、彼女は言葉を吐き出す。

「美味シソウナモノ ヲ 食ベラレル ノハ サンネンブリ ノ コ  
トダモノ。トツテモ トツテモ 楽シミダナア。

アノ時ハ 本当ニ 美味シソウ ダツタモノネ。柔ラカクツテ  
プリプリシテテ 見テイルダケデモ 美味シソウダツタ。

美味シソウダッタ。ランルーケン ノ ベイビー トツテモ 美味シソウダッタノニ」

独白は過去へと向いている。

彼女が欲したものは、全てが過ぎ去った後。

どれだけ彷徨い歩いても、決してその手は届かないのだと、他でもない彼女自身が気付いていない。

「アア ナンダロウ。ランルーケン 悲シイ。泣キタクテ 堪ラナイ  
ノニ 涙ガ 出テコナイヨ。

食ベタイナア 食ベラレタラ 幸セ ニ ナレルノニ。アアデモ  
幸セツテ ドンナノダツケ？」

「妻よ。それは夢だ。貴女が見ておられるのは遠い彼方の幻想。かつて在りし日の安らぎを求めておられる」

そのようなマスターの姿に、ランサーは凶相に慈しみを浮かべて言った。

「微睡まれるが良い。真にその胎が満たされる時まで。貴女にだけはそれが許される」

「ウン……ウン」

黒いランサーだけは理解している。

妻と呼ぶ己のマスター、その狂気の内にある悲しくも美しい心の有り様を。

その忠義は揺らぎない。凄惨な血の業を身に浴びた漆黒の騎士は、神に捧げる信仰と等しい域でマスターに忠誠を誓っている。

「求めるが良い、虚飾なき愛を。貪るが良い、芳醇な血と肉を。我が槍は必ずや、相応しい供物を貴女の前に捧げるだろう。」

故に、貴女は何も悩まれることはない。惑われず、省みず、ただ微睡みの中にあるように、求めるままに在れば良い」

「……ウン ソウダネ」

閉じた価値観。狂人の道理は他者には理解されない。

しかし、だからこそ枠組みの内にある者同士では、強固な絆が紡がれることもあるだろう。

真つ当ではなく、決して常人には真似できない価値を心から信じて

いる。その純粹さが噛み合った時、世の道理さえ撥ね返す真理が芽生えるのだ。

「そうだ、妻よ。この世で最も残酷で純粹な愛に生きる女よ。貴女の存在こそオレが出会った真の奇跡。貴女のための戦いこそ、この槍を掲げるに足る聖戦なのだから」

かつて最も苛烈に信仰を貫いた英雄が、ただ一人の女性に尽くすことを新たな信心と定めている。

黒いランサーは躊躇わない。生前の所業の凄絶さもそのままに、鮮血で以て騎士は彼女のために聖杯へと至るのだ。

「そういうわけだ、好敵手よ。我が妻は今、甘き夢幻の中を揺蕩っておられる。この安寧の一時を妨げぬため、早々に立ち去るがよい」

故に、自らの前に現れた敵対者に対し、一切の理解も求めない排他の意気を向けた。

「つれないことを言う。雌雄を決するべき者同士、いわば最も濃密な時間を共有する間柄ではないか。こうも理解が通わぬまままで終わっては無念が残るだろう」

並の者であれば、その狂信を前に拒絶しか思い浮かばないだろう。異常極まる怪物性、度し難く見える心象は理解を拒んで然るべきだ。

しかし、この男は違う。怪物ではない。真つ当な人間性を持ちながら、異常極まるその心象。

人の意志を、勇気を愛している。まともなはずの価値観のまま、男は己の愛に狂っていた。

「人の関係とは殴り合いだ。己とは異なる価値観、妥協なくぶつけ合ってこそその繋がりである。おまえたちが閉じた中で塞がろうとするのなら、俺はそれをこじ開けよう」

甘粕正彦、そのサーヴァント・アーチャー。

聖杯戦争の3回戦、一方のみが生存できる殺し合いを行う両主従が、ここに遭遇した。

アリーナにおける主従同士の遭遇戦。

7日目の決戦の前段階、準備期間中<sup>モラトリアム</sup>に発生し得るそれは、あくまで偵察戦という意味合いが強い。

戦闘行為を関知した、ムーンセルからの強制干渉。

戦っていられるのはそれまでだ。戦闘はごく短時間に限定され、決着を付けるのは難しい。

言い換えるなら、たとえ格上が相手でも仕切り直しが容易だということ。その実力を確認し、後の本番での方策を見出だすための格好の場であるとも言える。

しかし、それは難しいというだけで、決して不可能なのではない。余りにも隔絶した実力差、あるいは一瞬で全てを薙ぎ払う超絶の暴力があれば、ムーンセルの介入を待たずして決着を付けることも可能。

気を緩める暇など無い。準備期間<sup>モラトリアム</sup>といえど、僅かな油断が死に繋がる。聖杯戦争とは容赦ない生存闘争なのだから。

「おお、なんと度し難い。我が妻の安寧を妨げようとは、それは我が信仰に唾を吐くも同じ。

よかろう。ならばおまえたちは徹頭徹尾、無惨に死ぬがよい！」  
黒いランサーが槍を振りかざす。

宙を切った穂先の軌跡。ただそれだけの衝撃で、再現された大気は揺らぎアリーナを震わせた。

目にしただけで分かる。

この英霊の力、存在の純粋な強度の観点で、これまでのどんな相手も上回っている。

世界を周回する航海を成し遂げたライダー。森の狩人であり義賊として戦ったアーチャー。どちらも決して脆弱なだけの英霊であつたわけではない。

しかし、力だ。運でも罨でもない、単純な暴力の脅威。そうした見方をすれば、黒いランサーは先の二騎を圧倒しているといつていい。英霊としても異常、むしろ人外の魔性と称されるべき暴威。小細工など無用とばかりに、黒いランサーは正面からの突撃を敢行した。「猪武者の類いか。その手の輩の相手取りは、長篠で存分に承知しておるわ」

対し、アーチャーを中心に周囲全域へと展開される種子島の銃列群。

接近を許せば敗退は免れない。それでもアーチャーに焦りは見られず、冷静に射撃を開始する。

「ぬう!? 猪口才なッ!」

放たれた弾幕に、ランサーの突撃が阻まれる。

年代で見れば神代よりも近代に近く、騎乗のスキルも有していない。

『三千世界』の銃火で圧倒することは難しい。相性戦を得意とするアーチャーにとつて、このランサーは型に嵌まった英霊ではない。

それでも、アーチャーの銃列はランサーの猛攻を防いでいる。宝具の性能ではなく、彼女自身の戦の術理によってだ。

ただ無作為に撃たれているのではない。

ランサーの攻勢を窺い、適切な機を読みきった上での射撃。

それがランサーの攻撃の悉くを挫いている。種子島の物量による手数と、それを操作するアーチャーの巧みさが、ランサーを釘付けにして暴れまわる事を許さない。

アーチャーが戦場をコントロールしている。ならば戦況の優勢はアーチャーにあるのかと問えば、それもまた否であった。

黒いランサーは、特異な性能を持った槍兵<sup>ランサー</sup>である。

サーヴァントの中でもとかく速度に優れた槍兵クラス。本来ならば最高値を得て然るべき敏捷値において、なんと最低値のEランク。代わり、その耐久力は最高値を叩きだしている。俊敏さで避けるのではない、耐えに耐えながら重い一撃を見舞うのがこのランサーの戦い方だ。

黒いランサーは城塞だ。

強大なる征服者に対し自国の領土を護るため一步も退かなかつた護国の鬼将。

どれほどの攻め手にも斃れない。必ずや耐え抜いて、報復の一刺しを為す不退転の信念だ。

アーチャーの封殺がこれほどに効いているのも、ランサー自身の性能に一因があるだろう。

だが、言い換えればそこまでもと言える。アーチャーの銃火では動きを止められても、ランサーを仕留めるまでには至らない。

相性に嵌まらない相手には、種子島は並の威力しか発揮し得ない。相性を取れないランサーでは、アーチャーは決め手に欠いている。

対し、ランサーもまた攻めあぐねている。機動力を持たないランサーでは、アーチャーの銃火の包囲を振り切つて槍を届かせる事が出来ないのだ。

つまりは膠着、両者共に決着までの手段を欠いた状態。

無論、いつまでもこのままではないだろう。状況が動けば天秤も傾く。やがてはこの膠着も崩れるのが必然だったろうが。

『セラフより警告』アリーナ内でのマスター同士の戦いは禁止されています。

戦闘行為が確認されました。まもなく強制介入を開始します』

鳴り響く警告音。

時間が足りない。決着に行き着く前に、ムーンセルによって戦いそのものが止められる。

生前を英雄として、多くの戦いを経験し完成しているのがサーヴァントだ。ある程度の実力差であれば、早々の決着とはなりづらい。

だからこそ、遭遇戦とは本番までの前哨戦、偵察の意味合いになりやすい。互いがあくまで様子見として、相手の実力の片鱗だけでも感じ取ろうとする。

ここで無理をする意味はほとんどない。仮に本領の『宝具』まで開帳して、仕留め損なつたら目も当てられないだろう。

戦闘停止を強制され、ただ切り札の情報を渡すだけの結果となつて



しまう。故に決着を急ぐ意義は薄く、両陣営とも大きな動きは起こさないのが常道だ。

「うむう!？」

そう、それが常道であつたからこそ、狂気に染まる黒いランサーをして、相手の行動には驚きを露とした。

向かつてくる。

サーヴァントではない、そのマスターが。

悪鬼が如きランサーの暴力を知りながら、人間である甘粕正彦が自らその間合いへと踏み込んでいた。

「愚かなり。自ら供物になるべきと悟つたか!」

円を描いて落とされる槍の一閃。

サーヴァントのマスターに対する攻撃制限は、決戦場にて適用されるもの。その一撃を阻むルールは無い。

繰り出した一閃は標的を捉えている。その威力は人間の霊子構造など容易く砕いて余りある。

そのような絶死の一撃を前に、甘粕は尚も踏み込む力を緩めず、抜刀からの一閃でもって応えてみせた。

「なんと!？」

ランサーの槍の軌跡は円の軌道。

一点の突きよりも速度で劣り、その遠心力が集中するのは先端部。

槍の中腹を打つ軍刀の斬撃。最短の軌跡と予想外の踏み込みは、槍の間合いの内側へと入り込む事を成功させる。

それはランサーの油断と見るべきか? いや、そもそも技が何であれ、サーヴァントの攻撃を人間が正面から防ぎ切ること自体が異常である。

一芸のみの成果ではない。天賦の才と高密度の修練量、その骨子となる破格の意志。人でありながら、人を逸脱したそれらの要素が、甘粕正彦を英霊の域に届かせている。

槍の間合いを抜け、刀剣の間合いに入り込んだ甘粕には、次の一手に先んじる機が与えられる。

更なる攻めに転じれば、あるいは仕留める事も可能か? それは難

しいとしても、膠着を傾ける痛手を与える事は出来るかもしれない。主従にとつては絶好の好機。決死の踏み込みで得たその機会で、甘粕はランサーを素通りした。

「ッ!? 貴様、まさか——」

逡巡は一瞬、即座に意図を読み取ったランサーが声を上げる。

走り抜ける甘粕に追い縋ろうとするが、その追撃はアーチャーの弾幕に阻まれた。

「くう、おのれえ! 妻よおオツ!!」

己という城塞の先にあるもの、必ずや守り抜かなければならない人を思い、ランサーは叫んだ。

アーリーナでの遭遇戦が様子見となり易い理由は、もうひとつある。時間の問題以上に、アーリーナでのサーヴァントは弱点を抱えているのだ。過去に地上で行われた聖杯戦争でも常に付き纏った、”人間”<sup>マスター</sup>という弱点を。

ここは決戦場ではない。マスターを保護するルールは無い。常に後人の存在を気になければならない以上、戦闘のみに十全を注ぐわけにはいかないのだ。

強者が、弱者に迫る。

英霊同士では膠着に陥る実力差も、マスター同士でなら話が別だ。いかに狂人といえど、純粋な戦闘能力では超人の域に在る甘粕と比べようもない。

容易く碎かれ、その命を散らされる。もはや逃げることも叶わない。

「……ネエ 君ハ ランルークン ノ コト 好き?」

己に迫る脅威を目にしながら、それでもランルークンは動かない。その瞳は何も映さない。

あるのは過去への郷愁。かつてあつたはずの愛へと思ひ馳せるばかり。

今を生きていながら、心はいつも違う場所にいる。本当に求めているものは過ぎた日々にごそあるから、今を見ながら失われた光景を映している。

彼女の視線は現在の誰とも交わっていない。

虚ろな認識に逃避して、真実は道化の殻に覆われたままなのだ。

「ああ、好きだとも。おまえのような信念を持つ人間が、俺はたまらなく愛おしい」

そうした気概を甘粕正彦は見逃さない。

敵対する相手を見据えながら一片の殺意さえ持たず、しかしそれ以上には獐猛な意気を吐き出して、狂気を纏う道化師へと手を伸ばす。

「そう、好きだからこそ、俺は殴るのだ。おまえならば立ち上がってくれるという期待と祈りを込めて。俺が刻むこの愛を、どうか受け止めてくれ」

振りかぶられた掌が、道化の仮面ごとにその顔を鷲掴む。

その勢いのまま発動した『術式』<sup>コード</sup>が、ランルーくんへと叩き込まれた。

——「どうして”異常者”は生まれてきたのだろう。」

人間<sup>わたし</sup>にとって、人間とは愛すべきものでした。

パパも、ママも、あの人も、私は心から愛していました。

私は、彼らの愛によって育まれたから。その温かさを、私は誰よりも知っているから。

与えられたその分だけ、彼らや産まれてくる子供にも分け与えてあげようと、そう思った気持ちに嘘はなかったはずです。

怪物<sup>わたし</sup>にとって、愛するものとは食べるものでした。

愛が深まれば深まるだけ、心とは別のところで欲しがる気持ちが強くなりました。

私は彼らに与えたいと思うのに、彼らから奪いたいと求めてしまいます。

それは抑えきれないほどに、狂おしく。どれだけ倫理や道徳で覆い

隠そうとしても、隠しきれないほど切実に。

食べる事は好きです。

ペギーくんの時の、あの噛み締めた美味の感動を忘れられません。一度、それを味わってしまったから。食べる事の喜びを、美味しいという事の幸せを否定することは出来ないのです。

食欲は嫌いです。

私の心を裏切って、愛する人たちを傷つけようとするから。

大切にしたい。幸せになってほしい。そんな人間の思いを、怪物は台無しにしようとする。

ただただ自分が満たされればそれでいいと、私の中の怪物は叫び続けています。

その異音は今でも絶えず鳴り響いています。

喰らえ、貪れ、啜り絞れ、蹂躪して奪い尽くせと。

ずっと聞こえているのです。獯猛な衝動は内から喰い破ろうといっただって喚んでいます。

ふと気を抜けば、呆気なく堕ちてしまうほどに。一度でもそれを許せば、きっと私は人間では無くなってしまおう。

だからこそ、分かっているのです。

これは怪物であって人間じゃない。

私自身が発する声ではないと、そうはつきり認識することが出来るから、譲らない。

人間は怪物にはならない。そう誓ったあの日の思いは、今も確かに覚えてる。

愛とは、一方的に搾取するものじゃない。

愛とは、互いが思い合い、与え合うもの。

ただ奪って自分のものにするのが愛というなら、それは醜悪な怪物の愛。

その愛は美しくない。そんなものに自分の愛が成り下がることだけは許せない。

だって、愛とは尊く、重いものだから。どんなに苦しくて飢えていても、引き換えにすることなんてしてはならないのだから。

だから、人間は怪物と戦える。

どんなに飢えて、人間を壊そうとしてきても、きつと耐えられる。私には愛する人たちがいるのだから。その人たちを思えば、苦しさなんて怖くない。

そう信じてる。隣にはきつと愛する人たちがいるから。共に支え合って立ち向かえたなら、結末には幸福があるって信じてた。

——信じていた。信じていたのに……。

愛していた人たちは、いなくなつた。

怪物とは無関係なところで、届かない所に逝ってしまった。

苦しきには、耐えられるけど。この寂しさには、とても耐えられそうにない。

あの日の思いは忘れていない。

美しいものを尊いと感じてる。

生きてるなら、生きなければいけない。

失つたものがあるのなら、その分まで生きて前を向かなければ嘘になる。

こうして逃げ続ける事が正しくないなんて、そんなことは最初からわかつていた。

それでも、やっぱり寂しいんです。独りきりなのは辛いんです。

何を悔やめばいいのかわかりません。どうしていれば良かったのか分かりません。

残つたのは、埋められない喪失感。誓つた思いも意義をなくして、満たされない飢餓は増すばかり。

私は仮面を被ります。

人間自身を忘れるために。

色んな辛さや悲しみから、目を背けるために。

ただ苦しみ続けるのは、嫌だから。たとえ嘘でも希望が欲しいから。

ああ、きつと私は壊れてる。分かっているけど、どうか理解させないで。

愛したい。愛してあげる。愛せる。きつと彼なら、彼女なら、あの

子なら、誰かなら。

ランルーくんは、食いしん坊だから。色んな綺麗な子たちを愛してあげられる。

愛してあげる。食べてあげる。きつと、今度こそ、本当よ。だって愛してるんだもの。

——そうすれば満たされるんだと、どうか信じさせてください。

「なるほどな」

繋がり合った心象世界。

剥き出しとなった心の声を聞き、甘粕は頷いた。

「素晴らしい。人として、怪物に堕ちることを善しとせず、信じる愛を守り抜いたその矜持。サーヴァントの崇拜も領ける」

溶け合う心象は、包み込む揺籃のようだ。

甘く、温かく、全てを許してしまいそうなる多幸感。

私にはあなたがいる。一切の壁を取り払って向き合う他者は、あらゆる不安から解放される安心の象徴となる。

全てを許容し、委ね合う。自分は許されているのだと、慈母の手の中にあるような心地よさは、他のどんな快樂にも勝る安樂だ。

コードキャスト・万色悠滞。

とある尼僧により作られた、そのあまりの依存度により禁忌とされた。

幸福すぎるのだ。そこに身を委ねたまま、自分自身を捨ててしまいかねないほどに。

支えを求める心弱き者ならば戻ってこれない。性をも越えた魂同士でのまぐわいである。

「あの男はおまえの中に光を見たのだろう。闇にあった魂が尊き愛によって癒される。なんとも実に、王道のようで素晴らしい。感動を禁じ得んよ」

そのような悦楽の坩堝にあっても、甘粕正彦は動じない。

男にあるのは揺るぎない信念と不屈の覚悟。信じるべき理想を指すと決めている。

ならば一時の快樂如き、耐えられぬ道理がない。樂よりも苦を、試

練こそが必要だと謳うのだから、己がそれに負けてしまうようであるのかと。

心で繋がった両者は、ある意味で同種の人間だ。

本能よりも強固な価値観に殉じ、その信仰を貫いている。

ともすれば命よりも、その信条は彼らにとつて重い。命を懸けても貫く強さを持っているのだ。

「だが、ならば尚の事、その有り様には領けん」

そう、だからこそ、甘粕は己の信条を貫く。

相手が誰で、どのような事情があろうとも、信じる理念に手心を加えることはあり得ない。

「食べる食べると言いながら、決して相手を口にしない。怪物の皮を被りながら、魂は人間の矜持を貫いている。どれだけ狂ってみせようと、それこそが譲れない誓いだと知るが故に」

繋がった魂が見せる心象世界。

当人の精神を色濃く反映して映し出された光景は、狂宴だった。

ケタケタと、無数の道化の顔が笑っている。その口元を血肉で汚し、貪る欲望に酔いしれている。

それは狂った世界の情景。真つ当な感性を受け付けられない、怪物であればこそその心象だ。

「どのような狂気の悪徳も、それが魂からの渴望であればひとつの真となる。世の人々から受け入れられず、罰せられるべき罪であっても、全てを背負って我を貫けるというのなら、それは善悪さえ超えた輝きだ」

気を抜けば己まで狂ってしまいそうな世界を、甘粕は苦もなく押し退けて進む。

確かにこれは狂っている。常人ならば目を背けて、直視したいなどとは思えない。

忌諱と嫌悪を呼ぶ怪物の心象。だが甘粕は構わずに、更なる深みへと脚を踏み入れていく。

「わりとな、俺としてはどちらでも構わなかったのだよ。人間であろうが怪物であろうがな。そこに勇気と覚悟があるのなら、俺の愛する

輝きに相違ない。等しく祝福しようとも」

甘粕は目を逸らさない。どれだけ正気を疑いそうな心象であろうとも、それもまた一つの人間の姿だと認め、恐れずにその価値を見定める。

故にこそ看破していた。この心象は薄い。表層のおぞましきだけであり、その真実は張り子であると。

怪物的な狂気、食人を求める異常な衝動も、所詮は本質ではない。彼女という人間が持つ真価とは、もつと別なところにある。

ならば、こんなものに強さなどあるはずもない。ただ不気味に映るだけで、心に重きを置くものは何も無いのだ。

狂気の手、霧に覆われたような心象の奥底に、新たな風景が浮かび上がる。

そこに狂念は微塵もない。一片も侵されることなく純正を保っている澄んだ場所。

どれだけ外面を取り繕おうと、その深層だけは穢せない。狂気と衝動の中にあつても清潔を守り抜いた此処こそが、この心が持つ真の価値だ。

そこには道化の仮面を被った、一人の女性が佇んでいた。

「ならばその姿は偽りだ。本来持つ信念を惑わせて、その輝きを曇らせていくばかり。そんなものは俺の前で必要ない」

手が伸びる。

対峙した女に向けて、その素顔を覆う仮面へと。

偽りに己を隠した道化の面。それを不要と断じた甘粕の手が近づいていく。

「やめて」

その手を妨げるように、仮面の裏から女が声をあげた。

「お願い、どうか私を正気わたくしに戻さないで。

思い出したくない。背負いたくないの。せめて忘れたまままでいさせてください。

私はそんなに強くはないんです。こんな痛みを負ったまま、歩いていける強さなんてない。



立ち上がって、もう一度前を向くなんて出来ない。このままこうしておいてください」

仮面に覆われた表情は見えない。

しかし見えずとも、聞こえる声には深い悲嘆が刻まれていた。

その心の深層には悲しみしかない。

真摯に向き合っていたはずの愛は失われ、残ったのは喪失の痛みだけ。

それがあまりに苦しくて、どうしようもないほど悲しいから、狂気の奥に心を閉ざしてしまった。

その姿は痩せ細り、活力と呼べるものが見えない。

精神の中だからこそ、その姿はありのままの状態を映している。

明らかに彼女は弱っている。ただ飢えている事が原因ではないだろう。それならば彼女はとうに死に絶えている。

絶望が、彼女を弱らせている。生きようとする意志を奪い、その身体から生命を損なわせているのだ。

恐らくは地上にある肉体も、これと等しい状態なのだろう。飢えと嘆きが、彼女を殺そうとしている。そしてそれに抗える気力を、すでに彼女は持っていない。

「やめろ？ いいや、やるとも。俺は口にしたならやり通す主義だ。そしてこの行いにも迷いは一切ない」

そんな女の姿を、しかし甘粕は容認しない。

同情に値するだろう女の姿にも、一片の躊躇さえ見せずにその仮面を驚掴んだ。

「俺は過去にはこだわらん。良くも、悪くもな。どんなに誉れ高く持て囃された、あるいは辛辣な過去があらうと、今に価値が無ければ何の意味もない。

過去とは所詮、過去に過ぎん。その経験を糧とし、現在に繋がる学びと出来ねば、そんなものは無為でしかあるまい。

なので俺は基本、過去を理由にした理屈を認めていない。とかく、己が不幸であったからという類いの言い訳はな」

掌に力が加わっていく。

何をしようとしているのか、繋がった精神を通じてその意図は女にも伝わっていた。

仮面に置かれたその腕を、女の手が掴む。

細く、弱々しいその手で、それでも女は抗おうという姿勢を見せていた。

伝わった意図は女にとって許容できない。狂気の内ですべてを閉ざしていた彼女が、ここにはつきりと意志を示している。

だが、弱い。

断固たる甘粕に対し、その力はあまりに脆弱すぎる。

意志を示したからと、それひとつで強くなるなどあり得ない。所詮は一時のもの、真の強さとはそれのみでは得られない。

長年を費やした弛まぬ錬磨、そうして破格の意志を磨き続けた甘粕に、女の強さは到底及ばない。

よってこの精神世界で罷り通るのは、より強大な熱量で押し付けられる独善だった。

「何故なら、人の夢とは過去ではなく、未来にこそ向けられるべきなのだから！」

容赦なく、何処までも王道を追求した思想で以て、女の被る道化の仮面を握り潰した。

精神内での邂逅は、体感として一瞬の出来事だった。

一時とはいえ融け合った魂同士、各々の意思を伝え合うのに時間はかからない。

時を要するとすれば、互いの存在を拒もうとするせめぎ合いによる。悦楽のまま融けるのを良しとせず、相手の意思を否定し押し返そうとするから、その齟齬が時間という余分となって精神にも反映されるのだ。

ならばこそ、一瞬という時間もやはり必然のもの。

甘粕正彦とランルーくん。性質云々ではなくその意志の強度は、一方の抵抗を歯牙にもかけずに押し通していたのだから。

「あ、ああ……、いやああアアアアアアアアアアアアッツツ??!!」

狂気の仮面は剥がされた。

理解を拒む魔性、猟奇的な嗜好を思わせる怪物性に覆われていた真実は、ここに明かされる。

それは悲哀を叫ぶ女の姿。甦った悲劇の記憶に、彼女の心は張り裂ける痛みを再び味わっていた。

どうしようもないことだった。

あまりに間が悪い不幸だった。

その悲劇を呑み込んで、納得することなんて出来ない。彼女の信条は尊くとも、たった独りで歩いていけるほど強くはないから。

だから目を閉じ、耳を塞いだ。怪物の仮面を被って、溢れる悲しみを誤魔化そうとした。

失った愛は取り戻せない。代えがきくような軽いものではない。その事実から逃げるために、狂気の内でも見まいとしていたのだ。

だが、もはやその狂気は勇気を信じる男の手により砕かれた。

目を背けることなど許さない。試練と向き合い奮い起ると促す信条が、偽りの仮面を打ち砕いてしまった。

抑えられていた悲嘆は、より明確なものとなって顕在化する。それに耐えられる道理が、彼女にあるはずもなかった。

甘粕の手から離れ、ランルーくんと呼ばれていた女は崩れ落ちる。

そこに甘粕が見たがるような勇氣はない。ただ全てに敗れた女がいるだけだ。

これは互いの生死を賭した生存競争。ならばこの図式は両者の勝敗を決しているとも言える。

どう繕おうが、人として未来という生命の意義を有しているのは甘粕の方だ。過去に囚われ、狂気に縋った悲しい女。強さがどちらにあるかは明白だろう。

故に、人間側マスターだけの優劣で見るのなら、勝利者は甘粕正彦に他なら

なかった。

「……許さぬ」

しかし、これは英霊と共に在る聖杯戦争。

たとえ人間に勝ち抜く強さが欠けていようとも、サーヴァントの存在がそれを補う。

単純な生命として生き抜く強さだけではない。どれだけ歪な存在だとしても、自らの有り様で他者を魅了し、英霊すら心酔させるほどの輝きを持つのなら、それも一つの強さだといえるだろう。

「許さぬ赦さぬユルサヌゆるさぬぞおおオオオオオツツ!!!」

信仰を穢された。

尊き御方を傷つけられた。

黒い騎士にとつて、マスターとは崇め奉るべき存在。その信心は何よりも優先される。

冒涇は万死にも値する罪。許し難い所業を前に、理性さえ消し飛んだ憤怒の怒号があげられる。

かつて領土を鮮血の恐怖で染め上げた鬼気。

”征服者”と畏れられた王ですら、一度はその恐怖により敗北を受け入れた。

彼の信念はまさしく鉄血。鋼の如く揺らがぬ精神力でもって、正義に敵対するあらゆる者に凄惨な罰を与えるのだ。

サーヴァントとは、闘えないマスターのための闘争手段。

悲嘆に折れた女になり代わり、ランサーは殺戮の真価を發揮した。

戦闘において、怒りという感情は長所とも短所ともなり得る。

怒りという激情が生み出す精神の爆発力。

それは時に肉体にさえも作用する。決して軽んじて扱えるものではない。

感情こそ人のみが持つ最大の武器。そこから現れる執念が、想像を超える力となって敵に刃を届かせる場合もある。

そして一方で、怒りとは冷静な思考を曇らせる要因でもある。

言うまでもなく、激した感情は単調になり易い。その単調さは敵にとって罠に嵌める恰好の餌食となる。

策士が用いる策とは、大概がそうした怒りを利用したものである。挑発によりその感情を引き出させて、短絡に走ったところを制するのだ。

その論理に則るなら、ここに立つアーチャーはそんな冷静さの権化だ。

彼女の戦とは常に理詰め。自他の感情さえも道具と見て、徹底した理によって構築される。

怒りで猛進する相手の制し方など熟知している。ランサーの見せる鬼気にも、アーチャーは平静を保ったまま迎え撃った。

群を為して揃えられた種子島。無数の銃口が一斉に火を放つ。言ったように、怒りに駆られるランサーの動きは単調なもの。

その意気に圧され、機さえ逸しなければ迎撃は容易い。今や防御さえ意識から抜け落ちて、浴びせられる銃弾をくろうがままとなっている。

如何に宝具としての必殺性を発揮できないといっても、銃火に威力が無いわけではない。何も考えずに受け続ければ崩れるのが必定だ。

狙いは正確、単調な動きは故に照準も容易い。的確に身体機能を封殺しその生命を削り取るうとする弾幕は、確実にランサーを討ち取れるだろう。

少なくとも、アーチャー自身はどのように判断していた。

「——な、にい……ッ!?!」

怒りを制する冷静さという理。

それも確かにひとつの事実。しかし絶対の真理とは成り得ない。

感情が、計算を凌駕する。逸脱した患者の爆発は、時として賢者の行いを凌駕する。

如何なる冷徹非情な鉄の理といえど、それをも粉碎する狂信の激怒

を前にすれば、無為となるが道理であると。

「邪ああ魔あをするなあああああアアアアアアアアアアアツツツ  
!!!」

ランサーは頓着しない。

我が身を銃弾が穿とうが、一切気にも留めずに。

怒りのまま、殺意の赴くままに、その突貫は妨げられることなく押し通される。

意志が力となる精神論。それも決して誤りではない。

だが通常、それにも限度がある。如何に感情で奮起したとしても、条理を侵すことまでは出来はしない。

どれだけ猛ったところで、肉体は劇的に変化しない。狂わんばかりに願ったところで、腕が生えてくることなどあり得ない。

サーヴァントとて、その精神状態に左右されることはあるだろう。しかしだからといって、それだけでステータスの数値まで上昇するわけではないのだ。

——通常ならば、そうである。

だがここに在るランサーは、その例外。

精神が、信仰が、ついには肉体という枠組みさえ上回る実例。

それを成し遂げられる英霊が、ここには居る。

固有スキル『信仰の加護』。

最高存在から受け取る恩恵ではない。それは強烈な信心より生じる精神・肉体の絶対性。

一つの宗教観に殉じた者だけが獲得できる、純粹なる信仰の証。

そのランクは、最高値すら超えたA++。もはや高潔ではなく異常と呼ぶべき領域で、苛烈が過ぎる信仰心は己の人格までも歪めてしまう。

そんな狂った精神が生み出す力、それはあるべき条理までも捻じ曲げて、あり得ない不条理を当然のように引き起こす。

身に撃たれる銃弾が、弾かれる。

何らかの法則が働いたのではない。それは単純な耐久値による成果。

我が身は城塞、信仰を護る盾である。狂信が、冒瀆者の穢れを受け

る事を許さない。

逸脱して思い抜かれた信念は、実際のステータス値まで変質させて銃火の全てを撥ね返した。

そして、狂信が生み出すのは耐える力だけではない。

咎人への断罪。為すべき使命を果たすため、粉碎のための筋力値もまた上昇。

数値とすれば最高値をも超えるだろう。罪ある者を串刺す魔槍が、行く手を阻むアーチャーへと突き放たれた。

「ぐ——が、はあッ!？」

抜かれた刀によって迎え撃つ。

反撃は狙わない。守りのために行う迎撃。

感情から放たれる一閃は疾くとも読みやすい。アーチャーの剣は過たず、ランサーの魔槍を受けて捉える。

だが、狂奔せし黒い騎士の猛撃は、アーチャーの守りの理まで諸共に押し潰した。

「化け、物めえ……ッ!？」

思わず漏れた戦慄は、人の条理すら踏み躪る狂念への畏怖。

かつて魔王と称され一身に恐怖を背負ったアーチャーをして、怪物と呼ばしめる異常性。

人々の空想に着色され、自身の信心と狂気が結びついた黒いランサーは、まさしく人の枠組みを外れた魔性の名に相応しい。

撥ね除けられたアーチャーは、戦列より退場する。

猛進するランサーの進路を妨げるものはない。障害を排しての猛進は、真に裁くべき咎人のもとへ。

尊き御方を辱め、その神聖に泥を塗った澆神者に然るべき報いを与えるために。黒い騎士の心は、今や標的への殺意一色で染まっている。

「貴様は妻の安息を踏み躪った。

侵してはならぬ聖域を侵したのだ。

最も尊き魂を穢した大罪は、百の地獄を巡ろうとも濯がれぬ。もはや贄とすら憚られる」

血走った双眸は赤色に染まり、憤怒に滾った眼光が映すのは唯一人。

怒れる凶相は地獄の悪鬼とて及ぶまい。幻想の魔性などよりも、ここに在る黒い騎士こそが恐怖の象徴に相応しいのだから。

「愛も、祝福も、罪に穢れたるその身には無用！」

ただ死ね！ 疾く死ね！ 血肉を吐き出し、骸を晒し、苦悶と共に朽ち果てよオオオツ！！」

迫り来る恐怖の姿に、甘粕正彦は軍刀を手に構えを取る。

その手は震えてはいない。恐怖そのものである黒い騎士を前にも、勇者たる男は怖れで止まることを良しとしない。

むしろ魂は奮起を求めて叫ぶのだ。本能はかつてない畏怖に震え、自らの死を確信してくるが、だからこそ覆そうと足掻く意志が生まれてくる。

串刺しの槍に対し、黒色の軍刀が迎え撃つ。

武技も、魔術も、研鑽してきた全てを尽くして。

決して及ばない一撃に届かせるため、勇気と覚悟を込めて一閃を振るう。

交錯の一瞬、瞬間の後には結果が訪れる、全霊の一撃による迎撃は、まったく、微塵も相手にならず、その軍刀ごと砕かれた。

かつてアーチャーとの剣戟を渡り合った。

数多の敵手を屠ってきたアサシンの魔拳より生き延びた。

その強さは超人の域にある。人の枠組みで語る方が誤りだろう。

あるいは未来で、彼は英雄に至るのかもしれない。過去の誰にも行き着けなかった領域へと行き着いてしまうのかもしれない。その可能性の片鱗は、確かに今もあるだろう。

——それでも、今はまだ、甘粕正彦は”人間”なのだ。

どれだけ可能性があろうとも。

行き着く先で、英霊さえも超えるのだとしても。

今ここにいるのは、未だ人生の途上にある一人の人間だ。

人の身では英霊には届かない。甘粕正彦は、英霊には及ばない。手にした得物は砕かれて、伝わった衝撃に身体は痺れている。



追撃を受ければ成す術もないだろう。そして黒い騎士に、ここで容赦する理由もなかった。

それでも甘粕の足掻きは止まらない。

イメージを投影し、紡ぎだす破壊の夢。

精度、威力共に申し分ない。会心の出来の邯鄲法が、攻性の魔術と成って放たれる。

それは確かな威力を持った魔術だったが、ランサーを相手には分が悪く。

対魔力を有するサーヴァントには、魔術による攻撃では決定打を与えることは難しい。

ましてや今のランサーは宝具による攻撃さえはね返すのだ。人間の扱う魔術では、それこそ意にも介すまい。

たとえそれが甘粕正彦であろうともだ。狂える黒い騎士を止めるのは、会心の魔術だけでは不足である。

しかし、甘粕は確信していた。

ランサーは止まる。止まらざるを得ないと。

たとえその心が憤怒の殺意に染まろうとも、真にその信仰に殉じているならば。

マスターの身を、サーヴァントとして護らないわけにはいかないから。

「貴様アツ！」

仮面を剥がされた女は、まだ動けない。

周りの状況などロクに入っていないだろう。その心は今も悲嘆に沈んでいる。

誰かが守護せねばならない。その役割を負うべき者は決まっている。サーヴァントにとってのマスターという弱点、それが顕在化した状況だ。

我ながら卑劣漢の格好だが、仕方あるまい。

足掻きとはそういうものだ。たとえ泥に塗れようが、生きるために死力を尽くす。

ここで終わるわけにはいかない。理想は揺るぎなく燃えているの

だから、そこに妥協などあるはずもない。

一縷の可能性があるのなら、躊躇いなくそこに手を出そう。そして、たとえ手段が卑劣であっても、必死の覚悟で足掻く姿とは美しい。「それにだ。これで一手分、稼いだぞ」

重ねていうが、人間の魔術ではサーヴァントに決定打とはなり難い。

所詮は一工程を刻んだ程度のもの。威力もたかが知れている。

得られたのは守りに移った分の僅かな猶予だけ。一手分、その寿命が伸びたまでだ。

だが、その一手分が明暗を分けていた。

『――介入を開始。戦闘を強制終了します』

戦闘が中断される。

ムーンセルからの強制介入。神にも等しい強制力にはサーヴァントとして抗えない。

月が定めたルールは絶対だ。遺憾に思おうとも、裁定が下った以上は受け入れざる得ない。

『――これしきでえ、なにするものぞおオツ!!』

だが、逃れられないはずの法則に、ランサーは抗った。

システムが判断をくだそうとも、鉄血の狂信は尚もその意を果たさうとしていた。

月の聖杯戦争のサーヴァントとは、ムーンセルによつて過去の英霊を再現したものだ。

いわば造物主にも等しい関係。当然、反逆という選択肢を封じるための措置が施されている。

逆らおうとする考え自体が持てず、叛意を持ったとしても介入される。創造物は、造物主に抗う権利を持たされてはいないのだ。

だというのに、黒い騎士は領かない。

造物主であろうと、たとえその身が再現に過ぎぬとしても。

彼が信仰を捧げるのは、無機質な月の意思などではない。真に尊き

者へと向けた信心が、ランサーに己の意志を曲げさせることを許さなかった。

結果として起こる強制力の負荷、自身の存在崩壊を予感させる苦痛に晒されようが、鉄血に満ちた信念は断固として譲らない。

断罪の槍が振り上げられる。

その槍こそが彼の宝具。あらゆる不義を暴き、その重さに応じて威力を増す正義の呪い。

苛烈すぎる正義でもって大地を鮮血に染め上げた、串刺し公が誇る拷問魔城だ。

未だ決戦の日には至らず、ここは単なる遭遇戦。宝具まで持ち出すなど正気の沙汰ではなかったが、元より正気であればこれほどの執念はあり得なかった。

ルールによって脱したはずの危機が、狂気の執念によってこじ開けられる。

敵対者からすれば、それは理外の脅威。それでも甘粕の信条は恐怖よりも高揚を感じていた。

死が目前にあると分かる。あの宝具が発動すれば、それは己の命を刈り取る必殺である。

不可能だなどと、そんな言葉は気休めにもならない。ランサーの信念は、ムーンセルの縛りさえも突破すると確信している。

これほどの強固な意志を前にして、その可能性を疑う意味がどこにある。あの槍が我が身へと届くのは、もはや確定事項だ。

ならばこそ、甘粕正彦という男の意志は歓喜を謳いあげるのだ。

あれはまさしく必殺、防ぐ術などないと理解できるのに、そのような素晴らしい勇氣に感動を覚えてしまう。

そして、そうすれば益々限界を超えようと燃え上がるのがこの男だ。破格の男は諦観などに一秒たりとて囚われず、一撃を受け止めるべく魂を滾らせていく。

宝具の一撃を迎撃するなど不可能。まず間違いなく無為に終わると決まっているのに、それがなんだと男の表情は揺るぎない情熱で染まっていた。

宝具が振り下ろされる。紡いだ夢がカタチとなる。

前哨戦でありながら、本番さながらな様相を見せてきた両者。

彼らはもはや自分を止められない。その激突は必定であった。

「串刺城——」

受ける制約の一切を無視し、ランサーが宝具を発動せんとする、その刹那。

「いいえ、その行動は看過されません。速やかなる停止を要求します」  
割り込まれた声と共に、ランサーの身に布が絡みつく。

ただの布切れにしか見えない外観からは想像もつかない、強力な拘束力が発揮される。

サーヴァントすら縛り上げる聖骸布の礼装を操って、カレンは動きを止めさせたランサーに言葉を告げた。

「七日目の決戦日以外で、ムーンセルは直接戦闘を認めてはいません。再現されたその本領を存分に発揮して、同等の条件下での有益な記録の取得。それこそがムーンセルの本意です」

無論、そんな言葉に大人しく従うランサーではない。

拘束された身を抗わせ、聖骸布の束縛を引きちぎらんとする。

ランサーは止まらない。ムーンセルからの強制力にも、管理側からの警告にも、その信条を曲げようとはしない。

「ランサー。あなたは自分の意地に、マスターを心中させるつもりですか？」

しかし、告げられたその言葉には、ランサーも止まらざるを得なかった。

「これ以上は罰則も致命に繋がります。このままでは両者ともに共倒れか、そうでなくとも多大な損耗を負うでしょう。そうなった時、あなたはこの後の戦いまで勝ち抜いていけると思っ

ているのですか？」

冷静な、非の打ち所のない正論が、ランサーを抉る。

誅すべき咎人は目の前にいる。裁かずに済ませるなど許容できない。

しかしマスターに、忠義の信仰を捧げた御方に献上すべき勝利を危

ぶませるなど、それもまた許せることではなかった。

「決戦の刻はすでに決まっています。たとえ僅かな猶予が与えられたとしても、成すべきことは変わらない。ならばその怒り、当り散らすのではなく来るべき日に解き放ちなさい。」

あなたの信心が本物なら、ただ血に飢える怪物ではないのなら、それを示してご覧なさいな」

葛藤の時間は、決して長くはなかった。

納得できたわけではないだろう。それでも狂念を抑え、咀嚼して呑み干した上で決断した。

短くとも、その密度は薄いものでは断じてない。最後にもう一度、己にとつての怨敵となった男の姿を目に焼き付けて、

傷ついた主を丁寧に抱き上げて、ランサーはその場より立ち去っていった。

「ふむ。これは礼を言うべきかな？」

「不要です。わたしの意図は今しがた申し上げた通り。他意はありません」

ランサーたちがいなくなり、残ったカレンと甘粕が向き合う。

現れたカレンの格好は、学園内で見える白衣ではなかった。

見ればなかなか奇抜な格好をしている。彼女なりの戦闘服の類いだとは思われるが、誘惑の意図でもあるのか身体のラインを浮き立たせる扇情的なデザインだ。

健康管理AIとしての役割ではない、本来の処罰担当としての側面。サーヴァントさえも封じてみせた力量は、彼女の存在を一回りも大きく見せる。

「契約は完了しました。与えた魔術コードには封印処置が施されます。これでもう、あなたに援助する理由はなくなりました。」

ここから先はあなたの方次第です。わたしたちは誰の味方でもない。ムーンセルの眼は公平に、あらゆる人間の戦いを見届けるでしょう」

「ああ。心しておくでしょう。今回の戦いは、俺にとつても得難い試練となるだろうからな」

交わす言葉に馴れ合いの色はない。

運営側として、カレンの立ち位置は明確に一貫している。

彼女はどちらにも与しない。より良き痛みを善しとして、苦悶を肯定し試練の道を指し示す。それが彼女なりのマスターたちに向ける献身だ。

「二筋縄でいかぬと分かるのなら、少しはそれらしい焦りの一つも見せてもよからうに。もはや毎度のことじゃが、そなたの傾奇者ぶりも筋金入りじゃな」

向き合う2人の元に、復帰したアーチャーが戻ってくる。

彼女とてサーヴァントだ。何の概念の着色もない一撃では、霊核を破壊されない限りは復帰することは容易い。

条理を超越するランサーの力はアーチャーを一蹴したが、それでも彼女の剣理は致命に繋がる損傷だけは避けきっていた。

「なに、焦りがないわけではない。かつてないほどに死を覚悟したとも。あの拳士ともまったく異なる、別種と呼べる畏怖の念を確かに感じた。

おまえはどうだった、アーチャー。あのランサーの、狂信という意志が生み出す凄まじさ、その身をもってしかと味わったようだが」

「無様の言い訳はせぬ。アレはまさしく魔性の類い、人の理で語れる強さではあるまい。まともな条理で当たろうとしても、容易く撥ね返してくるじやろう。

神の名のもとに狂える怪物。後世の伝承に着色されるまでもなく、アレは相応の魔であるよ。その真実を思えば悪魔の名もまだ大人しいものじゃ。

ああ、確かにアレの相手をするのは、人のままでは些かに骨が折れよう」

それは己の不覚を弁えた殊勝な言葉、と取るにはアーチャーの纏う気が些か以上に不穏である。

一蹴された自らを認めながら、彼女に敗北への怖れはない。犬歯を覗かせる鋭い笑みを見せ、常と変わらぬ尊大さで告げていた。

「今回はわしも本腰を入れようぞ。我が”波旬”の贄が、神に仕えし怪物とはそれも一興。よもや反対はすまない、正彦よ」

「無論、反対などあるわけがない。おまえの全霊に期待しよう。魔王が誇る”世界”でもって、奴の信仰を見事に砕いてみせるがいい」

そんなアーチャーの不遜さを、甘粕はただ是として頷く。

虚勢からの言葉ではない。アーチャーは心からの確信を込めて言葉を紡いでいる。

それは信じるものの重さを知るが故に。サーヴァントの本領、宝具とは英霊の伝承・逸話の再現。ならばそれは彼ら自身の生き様を映したものである例は往々に存在する。

英霊とは、並ならぬ道を辿った英雄の死後の姿。その道が清純であろうと暴虐であろうと、常人とは比較にならない密度と熱量があり、故にこそ軽々しくは扱えない。

己の過去は嘘をつかない。英雄とは己の正道を信じて突き進める者だ。彼らが真に頼みとする宝具とは、彼らが貫いてきた信念そのものに他ならない。

前哨戦が終わり、次に両陣営が対峙するのは本番の決戦日。

どちらもがその日の到来を待ち望んでいる。望みの性質は大きく違えども、闘争へ挑まんとする気概に強さに劣るところは何もなかった。

「互いが正しいと信じ、譲れないと誓った思いと意地の激突。それは俺の願いであり、この月も求めているものであろうからな」

そのような意志の昂ぶりを愉しむように、甘粕は快活に笑ってみせた。

### 3 回戦：第六天魔王

決戦場に至るまでの道のりは、静かであった。

その間に語らないはない。

敵対する間柄、命のやり取りをする中では、元より言葉は無用だろう。

だがこの沈黙はそれとも異なる。闘志をみなぎらせて対峙しているわけではない。何一つの意思さえ見えず、両者には敵意の一切もなにかのように感じられる。

ならば本当に何の思いも無いのかといえば、それは否だ。懸ける思いは十分に、むしろ並大抵の因縁とは比較にもならない狂念が込められている。

一度、激発した感情は内へと押し込められている。

耐えて、偲び、今にも溢れ出さんとする憤怒を総身に満ちさせた。

より強く、より鋭く、より苛烈に、より凄惨に、処断の刃を振るうために。

もはや猛り吠えるような無駄はない。誅殺の意志は常態と化し、狂奔の暴威を如何なる時からでも発揮できるよう研ぎ澄まされていた。

舞台は整えられている。慌てる必要は何処にもない。

昇降機で降りていく一時は、まるで刑場に向かう道のりだ。同じ籠に乗った罪人と処刑人が、共に執行までの時間を過ごすように、粛々とした沈黙だけが流れている。

「――時は、来たれり」

そして、降り立った決戦場で、ランサーは宣するように言葉を放った。

「尊き美の儚さを省みず、破壊の愛しか謳えぬ愚かな者よ。貴様はおぞましく、あまりにも度し難い。肉を貪る怪物以上に、貴様という存在は許されぬ。」

それは神にのみ許された愛である。不遜にも人の身で抱いたその咎に、もはや裁決は下された。慈悲の光は降りてこないと知るが良



い」

敵かに、声を荒げることなく告げる意志は固い。

静謐であるからこそ、芯から宿った決意を伺わせる。どんな言葉を投げかけようと、もはや黒い騎士を止めることは叶わない。

「刑罰を下す。串刺しに処す。一滴残さず、罪に塗れた血を吐き出すがいい。

今宵は晚餐にあらず。真なる愛を踏み躪った罪業に、安息の場所は何処にもない。

覚悟せよ。我が槍は決して貴様の魂を逃しはしない」

怪物が、解き放たれた。

向けられる凶相。立ち昇る魔性の覇気。冷静を装っていた騎士の存在が一瞬で変貌する。

それは人のカタチをしながら、どんな怪異や魔物よりも恐ろしい。その狂奔故に畏怖されて、ついには『怪物』<sup>ドラキユラ</sup>と創作されるに至った血塗れた鬼王が立ち上がった。

「抜かすではない。己たちにしか通じぬ道理など」

そのような目を背けたくなる魔性に対し、微塵も臆することなくアーチャーが向かう。

「やはり貴様らは怪物じゃ。所詮、己の中の真実しか語ることが出来るん。

誰にも有り様を理解されず、怪物だと創作されるのは、単に貴様らがそのような形をしておるからじゃ。

人は闇を恐れ、そこに物の怪を空想した。いつの世も同じ、得体の知れぬものこそが異端である。無情を叫ぼうが是非もなし。人とは元よりそのようなものなのじゃから」

冷然と告げる。その怪物の呼び名は必然であると。

如何に尊いと叫び、そこに筋の通った理があろうと、結局は理解され難きを万人は塗り潰す。

人であると理解するより、怪物だと理解する方が遥かに容易いから。一人の賢者の言葉も、百人の愚者の声によって覆い隠される。

故にその名を、無辜の怪物。

悪意や罪の意識の自覚はなく、ただ自然に浮かべたイメージだからこそ、それは普通の幻想と化した。

怪物を産むのはいつだって人自身。万人が”そうに違いない”と思うから、現実さえ超えて幻想は真実と成り得るのだ。

「化生の類いとて、人が生んだ見方の一つ。ならば御しようもあるというものじゃ。

幻想を塗りたくられた哀れな将よ。この魔王が引導を渡してくれようぞ」

他人より称された怪物に、自らそう称した魔王が告げる。

アーチャーもまた、人々の畏怖から忌名を呼ばれた者の一人だ。

曰く、仏敵、神をも恐れぬ第六天魔と。それもまた一つの信仰、怪物となるべき人々の幻想に他ならない。

しかしアーチャーは違う。本来ならば辱めであるはずの忌名を、彼女は自ら称した。仏徒を苦しめ威光を畏れず、数多の所業と共に相応しい幻想を己の手で築き上げたのだ。

故にこそ、彼女は魔王と成り得る。

魔に染まるのではなく、魔を御する。幻想に左右されることなく、自らが幻想を振りかざす。

恐怖すべきランサーの姿すら哀れと呼び、思うがままに魔性を纏える革新の王が対峙する。

『Sword, or Death——』

With what in your hand...?

Flame dancing, Earth splittin  
g, Ocean withering『og

決戦の火蓋が切って落とされる。

因縁を明かし、口上を述べて、残したことは何も無い。

後にあるのはシンプルな図式。斃すべきと定められた相手と対峙して、やる事は一つしかない。

その道理に従って、ランサーとアーチャーは闘争を開始した。

誰かが戦っているのが見えていた。

一体、あれは誰なんだろう。

一体、何のために戦っているんだろう。

知っている気がする。確かそう、自分のために戦っているのだと。

聖杯をくれると言われた。

願いを叶えると、この喪失を満たしてくれると。

あの黒い人。激しくて、怖くて、けれども本当は優しくとても綺麗な、ランサー槍兵と名乗った人。

本物の騎士のように跪いて、彼は自分に対して確かにそう言ったのだ。

……けれど、ごめんなさい。

そんなあなたの献身にも、私の心は動きそうにありません。

だって、願っているものなんて無いのです。

どれだけ世界に愛しいものが満ちたとしても、それは本当の願いじゃない。

愛しているものは、もう無くなってしまった。失われたそれは、決して元には戻らない。

たとえ命を、世界を釣り合いに出したとしても、愛とはそれ以上に重いものだから。どんなものにだって、それと引き換えにすることは出来ない。

——もしも引き換えに出来るのだとすれば、そんな愛はきつと美味しくないものだから。

でも、それを告げる力もまた、私にはありません。

今の私には何も無い。未来に向き合う気力なんてどこにも無い。

お腹は今もくうくうと鳴いている。食べたくて仕方ないのに、食べたいと思えるものは何も無い。残っているのは苦しさだけ。

本当はこうしているのだって辛い。終わりを望んでしまっている。これ以上、私は自分自身わたしを続けていくだけの希望を持ってなかった。

でも、そんな今の私だからこそ、彼の姿はとても不思議なものに見えるのです。

ランサー、黒い騎士の人。

私を見つけて、私に喚ばれて、契約したサーヴァント。

とても怖い人。苛烈で、残酷で、大勢の人たちの血で塗れてる。

だけど、同時に清廉な人でもある。彼は厳しい人だけど、それは他人だけでなく自分にも同じだから。

その厳しきのせいで、みんなから怪物のように恐れられてしまった。きつと彼は真面目に生きていただけなのに、それはとても悲しいことだと思う。

だからこそ、分からないのです。

どうしてそこまで、私のために戦おうとするのか。

何処にも行けない私に仕えて、そんなにも激しく在れるのは何故なのか。

分からないその疑問を、口に出すことはしない。

ただ、虚ろなこの瞳で、その姿を焼き付けていくだけ。

激しくて、厳しくて、痛々しいほど苛烈な彼の生き様を。

見なければならぬと思う。空っぽなこの心でも、それは確かな私の思い。

目を逸らす事だけはしてはならない。あんなにも必死で、誠実な彼の献身は、虚ろになった私の心にも確かに届くものだから。

最期まで見届けよう。

何もない私でも、せめてそれだけとは向き合おう。

そんな思いだけが、空虚となった心に一つ残っていた。

火線が飛び交う。

四方八方、戦場全体を包むように展開された種子島。

唯一人の敵手を狙い、二重、三重の銃火をもってアーチャーは攻め立てる。

先の一戦と比べても、尚厚く、尚緻密に。

革新の王は理をもつて制する。再構築された戦運びは確実に鋭さを増している。

それは断じて手緩いものではありえない。動乱の時代を駆け抜けた戦の手並みは、英雄たる実力を証明するものだ。

されど、ここに対峙するのは英雄にあつても異様な狂奔の戦鬼。

身を穿つ銃撃、その悉くを騎士の肉体は意にも介さず弾き落としていく。

神秘の加護ではない。それは信仰が生む肉体の絶対性。憤怒に染まったランサーの身体には、アーチャーの銃火では届かない。

火線を集中させ、急所の部位を狙い撃とうが、彼女の銃弾が黒い騎士を穿つことはなかった。

「温い、温いぞー！ かような鉄礫如きでは、涼風ほどにも感じぬわー！」  
叩き落とされる槍の一閃が、アーチャーの小柄な身体を弾き飛ばす。

高い耐久値と引き換えにしたランサーの敏捷性。

槍兵クラスとして例外的な機動力の無さ。しかしランサーの狂念はそんな弱点さえも塗り潰す。

不条理そのものな意志力によるステータス値の底上げ。傷つくことをまったく恐れない怪物じみた戦い方。

阻む要素の一切を粉碎して、迷いなく繰り出される正面突貫。元あつた速度差を強引に覆して、その暴力を容赦なくアーチャーへと届かせる。

その光景は先の敗退の焼き直しだ。

答えは出ている。アーチャーでは、ランサーには敵わない。

魔性の暴威を振るう黒い騎士を、彼女の『三千世界』<sup>さんだんうち</sup>では仕留めることは出来ないのだと、すでに結論は出てしまっている。

「脆弱なり。理に沿うばかりのか細き矛で、我が信仰を揺るがすことは叶わぬと知れ」

放たれた一突きが、劍の守りを崩してアーチャーの身を抉る。

それでも、受けた勢いを利用して跳び、大きく後退。ランサーの間合いから逃れてみせた。

「真理を告げよう。矮小なる人の理では、神の理に敵うことあたわず。俗世の物見に左右され、まことの純粹には程遠い。不純の一切を持たぬ、真に尊き御方に仕える清廉の強さに勝てるはずがあるまい。

理解せよ、小賢しき者。貴様が奉じる理が、如何に脆く容易いものであるのかを」

追い詰めるランサーは謳い上げる。

己にとつての道理を。確信して揺らがない勝因の何たるかを。

今の状況がそれを証明している。追い詰められるアーチャーにその言葉は否定できない。

——であるはずなのに、これはどういうことなのか？

敗者に相応しい顔、恐怖や焦燥といった感情の気配がない。

明らかに競り負けて、消耗は重なっているというのに、アーチャーの表情は相も変わらず不遜なままだ。

怯える敗北者の顔ではない。あれは勝機を確信している顔だ。未だにアーチャーは自身の勝利を微塵も疑ってはいない。

ランサーとて狂人である前に、英雄と奉られた将である。

敵が見せる不穏な気配、それは決して虚勢ではないと察している。

何かがある。勝鬨のような口上を述べながらも、ランサーの心に緩みはなかった。

「そうじゃのう。人とは、まことに不純なもの。貴様が言うように、純真とは程遠き存在じゃ」

不遜なままに、アーチャーは立ち上がる。

種子島の群列を従えて、狂える暴威を發揮するランサーと対峙する。

「容易く流言に惑わされ、賢しい心は利に走りやすい。確かなものなど何もなく、常に移ろいゆく柳が如しよ。

是非もなし。民草とは、決して純真の美しさを愛でるべき存在ではない。しかとその手綱を握っておらねば、こちらが喰い殺されかねん

魔物にも等しいものじゃ」

民の平穩を願い、その幸福のために身命を捧げる。

清き善王が謳うだろう理念を、アーチャーは謳わない。

彼女は民を愛したりはしない。信じる心など持たず、理の上での扱い方を心得ている。

何をすればどう動くか、支配者という操り手としての従え方を知っている。それを以て最も多くの成果を収奪すべき対象だと冷徹に見なしていた。

民とて飢えれば、王に反旗を翻す。

国のためだとその身を削らせ、苦しみを容認させる事など出来ない。

決して唯々諾々と従うばかりの人形ではない。彼らは皆、自己という存在を持った人間なのだ。そして地べたで生きる者であればこそ、大義などという言葉とは無縁となる。

民の視点とは低いのだ。王の持つ高みからの視点と同じくは語れない。彼らの求める安寧とは近い者らのみで構築されるものなのだから。

そしてそれは、見方によれば悪とも成り得る。無自覚であろうとも、自分たちの安寧のためにいらぬものを切り捨てる。そんな魔に堕ちる側面を、民もまた持っているのだ。

「しかしな、ランサーよ。よもや失念したかのう？ 不純な存在であればこそ、牙剥いた悪意のおぞましさを」

ならば、その価値観に従い民のことを魔と見なすとして。

承知の上で彼らを支配し、王として君臨してきた彼女とは、いったいどのような存在なのか。

「人とは、己が悪しきと定めたものに、とかく虐げる免罪を得た相手に対し、どこまでも残酷となれる。理解など必要とせず、異形と定めた幻想があるのなら、手心などありはせん。

神が言った。王が言った。これは悪であると、己ではない誰かが言ったがために。そうして無数に膨れ上がる無邪気な悪意、その念量は化生のそれさえも凌駕する。貴様自身、それは身をもって知ってい

よう」

彼女は人の悪性を知っている。

その上で、それを操る術を理解しているのだ。人の抱える魔を制してみせる術を。

故に彼女はその忌名で呼ばれる。魔の上に君臨する”王”と、神をも恐れぬ天魔だと自称した。

「これぞ人の業。浅ましく、脆弱であるが故に、受け入れ難きものを排斥する。この俗界を支配する最も悪辣な理に他ならん」

口上を聞き届けるのはそこまでだった。

不遜の口を黙らすために、ランサーがその暴力でもって振じ伏せに掛かる。

迎え撃つのは三千にも及ぶ銃火の群。

銃撃は密集して放たれる。散らした火線で幕を作る弾幕ではない。一点のみを狙い定めた集中射撃だ。

標的となるのは当然ながらランサー本体。集められた種子島の力が黒い騎士の突貫にぶつけられる。

それは、やろうと思えば避けて通れるものだっただろう。

アーチャーの射手としての強みはその物量にある。圧倒的な種子島の数から放たれる弾幕密度が、彼女の攻撃を回避不可能なものへと変えている。

その利点を失えば平均以下の宝具でしかない。相性の有利を得られなければ、単一でサーヴァントに通用する代物ではないのだ。

弾幕を密集させれば、必然として逃げ場所は多くなる。今のランサーならば回避とて十分に可能だったはずだ。

だというのに、ランサーはそれを選ばない。

選べないのではなく、選ばないのだ。

彼は己に逃げることを許してはいない。為すべきは咎人をその槍で串刺して断罪する事だけ。

横道には逸れない。ただひたすら真っ直ぐに、不純の一切を混じえない正面からの進撃だ。

理屈の効率など意味をなさない。もはやそのようなものが通用す



る領域にいないのだ。たとえどのような障害が立ちはだかろうと、己を阻むことは出来ないのだと信じるが故に。

事実、信じるだけでは終わらない。

火線を集めた真つ向からの銃火、アーチャーにとっての最大火力をまともにも浴びながら、それでもランサーは斃れない。

狂信が、理屈を上回っている。真つ向からの勝負であればこそ、言いつの余地はない。アーチャーの銃火では、どうやってもランサーの打倒は果たせない。

ただそれでも、進撃するランサーの脚を留まらせることだけは成功していた。

「確かに貴様は恐ろしい。神に仕えし怪物よ。己の信仰のみでそこまでの事を成し遂げる。あの顕如の生臭坊主ぶりとは似ても似つかぬ、その信心は一点の不純もない真じやろうて」

アーチャーの平静は、ある意味で異常と言えた。

宝具とはサーヴァントにとっての秘中の秘。頼りとする武器であり、英雄の象徴そのものだ。

それがまったく通用しないとあって、動揺がないなどあるはずがない。万策尽きるに等しいものであるし、己の誇りを砕かれてどうして平然としていられるだろう。

「じゃが、承知しておるか？　ここに在るは神仏の権威を焼却する”

第六天魔”と」

ならばそれは、窮地を窮地と思わないよほどの酔狂者か。

あるいは別に、真に頼みとする『第二の宝具』を持つ英霊しかあり得ない。

炎が奔る。

生じた炎は燃え広がって、瞬く間に世界を覆う大火となる。

それは地の獄より出でる業火。この世にあらざる魔を吹き込めた神に仇なす焔である。

刻まれる火の線引きは世界に対する境界だ。

境の内と外とを隔てる結界。一步脚を踏み入れれば、そこは別なる法則が支配する異界空間。

世界さえ侵す大儀礼。己の心象風景を具現化させ、既存のルールを上書きする『固有結界』に他ならない。

招来される業火の中心に在って、アーチャーは世界の主のとして君臨する。

炎は彼女自身の戦装束をも焼き払い、線細くも美しい肢体を露わとさせた。

そんな彼女の柔肌に業火が絡みついていく。それは炎を纏うという形容が相応しい。自身の心象より生み出された炎によって、アーチャーは新たな装いへと変じていく。

それは外面だけの装束に非ず。纏われていく業火によってアーチャーという存在自身が変質し、魔性を帯びた異なる何かへと変貌しようとしているのだ。

後世の空想に着色され、本来の存在を歪められた『無辜の怪物』と似て非なるもの。

魔性の存在へと変貌していくアーチャーは、しかし何一つとして己という個我を歪めてはいない。

その幻想は他でもない彼女自身が自称して、そのように振舞ったもの。魔性の名はアーチャーにとつての装飾であり、纏うも纏わぬも彼女の思うがままなのだ。

本人のより知らぬところで幻想を生み出され、怪物とされてしまったランサーとはそこが決定的に異なっている。魔性という幻想を呪いとしてではなく、完璧に己の力として制御している。

故にアーチャーは『魔王』なのだ。怪物ではない、魔性さえ自らの道具と見なし、徹底して神秘への畏敬を否定する革新の王の真髓である。

「いざ、——三界神仏灰燼と歸せ！」

我が名は第六天魔王波旬、織田信長なり!!」

そして、そのようなアーチャーの心象より現れる世界とは、神仏概念への絶対的なカウンター。

革新の王・織田信長の所業を宝具化させた、その真名解放がここに発動された。

その光景は、まさしく”地獄”そのものだった。

教義に曰く、地獄とは責め苦を味わう場所である。

生前に犯した罪の清算のため、その罰として落とされる。

数多ある宗教観においても、その概念だけは共通だ。人の悪性を罰するため、神仏よりの怒りを賜る場所として定義される。

そしてそのカタチは、人が想像し得る苦痛の数だけ存在する。人の数だけ価値観の違いがあるように、何をもつて最大の罰とするかは考え方によって変わるのだから。

ならばこそ、その地獄の名は”大焦熱地獄”。

一面を大火に包まれて、あらゆる者が焼かれ悶える責め苦の場所。罪人たちを薪代わりとして永劫に燃え続ける業火の世界が具現化した。

「これは……！」

目の前に広がった地獄に、ランサーは驚愕していた。

怨嗟の声が聞こえてくる。

地獄において責め苦を負わされ、悲痛な嘆きを響かせる大勢の誰か。

まさしく地獄に有るべき叫びだ。それはランサーが知るものと同じ。それだけならば彼もここまでの驚愕を見せることはなかっただろう。

だが、これが地獄であるならば、焼かれるべきは罪人であるはずだ。ランサーは知る。誰より不義・不正を許さぬ信仰の潔癖さを持つが故に、この焦熱世界で焼かれるものが何であるかを察してしまう。

それは神聖への畏敬そのもの。神仏の存在へと捧げる祈りの行為、その清廉さを無価値と断じ、塵芥のように炎の中へと棄てている。

そうしてくべられた信心を薪にして、この世界は燃え続けている。

浅ましい俗欲こそを是として、仏道を貶める天魔として。

「おのれおのれえいッ！　ここまで清貧なる信仰を辱めるかあ！」

これほどの冒涇を、ランサーは知らない。

ただ異教徒が他の信仰を破壊するのとは違う。これは信仰という行為そのものへの否定と侮辱だ。

神という存在概念の一切に泥を塗り、その尊さに唾を吐いている。神など人の道具に過ぎないのだと、臆面もなくいい放っているのだ。

穢れの無い信心さえ俗世の型に嵌め、利用価値のある道具へと落とす。役に立たないならば捨ててしまえと、尊さという価値に目もくれようともしない。

神仏への敬いを持つ者ならば、この世界を許してはならない。

父なる神を信じ、その愛を授かる者と自覚するのなら、このような地獄を野放しにしてはならない。主に代わり必ずや打倒すべき不倶戴天の敵であると確信した。

「そう。これぞ我が世界。かつて靈験あらたかと敬われた地を焼き討ちて、神仏の加護などという幻想を打ち砕いた所業の風景じゃ」

ランサーの怒りに応えて、世界の主たるアーチャーが姿を現す。

髪は炎の朱に染まり、身を覆うのは業火により形取られた戦装束。

小柄な少女であった体躯は一回りか大きくなり、妙齢の色香を醸し出している。

変貌した姿は魔王としての特性によるもの。幻想を道具として支配するアーチャーは、自身という幻想の姿さえも例外でなく意のままと出来る。

「是非もあるまい。わしは当然の道理を示したまで。神仏とは断じて、行いへの免罪にはならぬのだと。敬われた高僧とて、王に楯突けば罰せられる。地を支配するは神ではなく、人の王であるのだから」

アーチャーは語る。苛烈なまでの神仏否定、その道理とは何であるか。

それはまるで、今も昔も己の信仰に殉じるランサーに対し、無意味であると告げるようでもあった。

「敬虔に戒律を守り、世の悪徳やらを嘆いておればそれで良い。そう

した奴輩どもが古びた理屈を持ち出して王の為すべき道を阻む。

そんなものは無価値じゃ。腐れた格式などに意義はなし。世の新しきに目を向けられぬうつけの群れに過ぎぬ。ならば焼き捨てるが似合いじやろう」

アーチャーは、世に革新をもたらした王は、それを許さない。

本来、心の拠り所としてあるべき信仰が、力を持つて権威に触れようとするとするのを。

その矛盾を、神意という言葉で蓋をして、当然の権利であるかのように振る舞うのを、彼女は断じて許さない。

「そのように処したわしを、衆愚どもは魔王と称した。神罰を恐れぬ第六天魔と。

それも是非なしよ。所詮、人とはこの俗世に最も適した欲界の住人。その王を魔性と呼ぶのならば、魔王こそが真の主君に相応しい。であれば名乗ろうぞ。わしこそが第六天魔王波旬であると」

革新の王にとっての価値とは、どこまでも実利である。それがたとえ忌み名であっても、利用価値があるのなら存分に用いる。そこに余分な感情を混じえないからこそ、最も適切な利用方法を選べるのだ。

この世界もまた、それによつて得た成果の一つ。人としての正気を保つたまま、獲得した幻想によつて魔性の力までも我が物とした。

彼女こそ魔人。信仰という古来よりの価値に否と告げた革新の王。神仏に敵対し祈りの功德を堕落させる第六天魔、その化身に他ならない。

「承知した。貴様もまた、我が槍で肅すべき大罪者であると」  
聞き届けたランサーは、静かにそう結論をくだす。

常態化した狂気が、激する感情を内に秘めさせてその鋭さを増していく。

「もはや語るに及ばず。欲の王よ。その罪業には死をもって報いる以外に道はない」

言い切るように告げて、ランサーは踏み出した。

一面を包む大火の中を、黒に染まった鎧姿が駆け抜けていく。

身を焼かれようとも構わず、そのような熱さなど意にも介さぬとばかりに、炎に巻かれたその突進は勢いを増していた。

「是非もなしよな。貴様自身が神であれば、事はもつと容易いものであったのじゃが」

アーチャーの有する固有結界『第六天魔王波旬』。

その効果とは神性に対する特効作用。神に連なる存在に絶大な効力を発揮する神殺しの異界である。

神性の属性を持つ英霊では存在することさえ難しい。焦熱地獄の炎から逃れることは出来ず、業火に焼かれた魂は灰塵に帰するだろう。

無論、この宝具にもアーチャー固有のスキルである『天下布武・革新』の効果は適用される。神代に近づくほどに、血統にも神の因子が入りやすい。

つまりは餌食だ。本来ならば神霊にも近い力を持つ神話級の英雄たちが、このアーチャーを前にした途端に無力となる。

アーチャーの常勝手段は相性戦。彼女の特性とは強大な相手にこそ発揮されやすい。通常ならば強さの基準になるはずのものが、そのまま標的の型に嵌まってしまふのだから。

それ故に、此度の相性戦は必勝を期するには不十分なものだった。ランサーが有するのは『信仰の加護』。

それは神からの恩恵として得るものではない。英霊自身の不断の信仰心によって獲得するものだ。

ランサーに神性の適正は無い。その奇跡じみた強化も、あくまで彼自身の精神力に由来する現象である。

時代を照し合わせてもアーチャーよりやや古くはあるが、それでも紀元前というほどではない。効果を見ても十全とはいえず、精々が中程度の威力しか発揮し得ない。

それではランサーは止められない。不滅を誓った意志は焦熱などものともせず、断罪の宣誓を果たそうとするだろう。

事実、今まさにランサーは地獄を突き抜けての進撃を続けている。増すばかりの勢いに、発動させた宝具が成果を得ているとは判断し

難い。

「構わぬ。来るが良い。貴様の視野狭窄な狂気でもって、本当にわたしを貫けると思うのならば」

迫り来るランサーに対し、アーチャーも迎撃を開始する。

展開される銃列。彼女の得物たる種子島。三千の物量で揃えられる砲火力。

ランサーには通じないと示されたはずのそれを、躊躇うことなく持ち出した。

銃火が放たれていく。

雨の如く降り注ぐ銃撃に、ランサーが選ぶのはやはり正面突破。

横道に逸れることなど許していない。狂った決意は不退転のまま、最短距離を突き進もうとする。

その姿勢は先程までと変わらない。余分な感情を一切混じえない狂信こそがランサーの真髄。相手の宝具が何であれ、躊躇いを抱くようではそもそもこのような真似など出来はしない。

道理など通用しない。ランサーは紛れもない狂人である。狂人であればこそ、その強さは如何に理屈より外れているかによって決まるだろう。

そういう意味ではランサーの行動も間違いではない。心の芯から信じ抜いているからこそ、黒い騎士の強さはある。再び一切をはね返すべく、弾幕の中へと飛び込んでいく。

そんな理外の耐久力を発揮しているはずのランサーを、今度の銃火は確かに貫き穿っていた。

「ぐ、ぐうううッ!?!」

それは決して無視して良いダメージではない。

事と次第によれば、十分に命にも届き得る。構わず突貫が許される手緩いものではなかった。

アーチャーの宝具『第六天魔王波旬』とは、彼女の持つ魔王の特性を最大限に発揮するものだ。

それは神性・神秘殺しの特性ばかりではない。魔性の幻想が生み出す畏敬の念、それもアーチャーという英霊にとつての力となってい

る。

この焦熱地獄はそんな畏敬の果てに具現化した世界。結界内では魔人の力も強くなる。故に副次的ながら純粹に能力も上がるのだ。

真に魔王と化したアーチャーの銃火は、ランサーの狂信をも貫ける。

その事実を見過ごすことは出来ない。このまま突貫を続ければ致命にさえ繋がるだろう。

ならば必然、攻め方を変えるしかない。すでに無謀となった正面突破を捨て、別の方策を探すべきなのは至極当然とさえ言えた。

しかし、ランサーの狂信とは信じ抜いているからこそその強さ。

理屈に囚われてはならない。そんなものなど 意にも介さず、不条理さえも実現させる精神力を発揮しなければならぬのだ。

今の守りで射抜かれるというのなら、より堅牢にと信心の強度を上げるまで。不義なる力に傷を受けるなどあつてはならないと。

慎重な攻め口など元より無縁のもの。如何なる猛攻にも耐えに耐え、どれだけ血を流そうとも苛烈な逆襲によつて首級をあげてこそランサーである。

故にランサーは猛進を止めない。より深めた狂信で武装して、正面から全てを受けながら進撃する。

だがアーチャーもまた、それを待ち構えた上での迎撃である。

放たれる銃撃は容赦なくランサーを削っていく。その身は未だに銃火の洗礼から逃れられていない。

狂信の質は高まりを見せているというのに、それが結果に反映されていない。先まではあれほどに猛威を奮った信仰の加護が、ここにきて低迷を見せていた。

それは、単なるアーチャー自身の強化だけでは納得できない。

アーチャーの力は確かに強まったが、ランサーの狂信はそれ以上の苛烈さを見せている。不条理そのものな精神論だが、もはやそれを疑う余地はないはずだ。

ならば要因は別にある。狂ったように貫かれるランサーの信条、その強さに覆い隠された陥穽を突くかのように、銃弾は黒い騎士の身を



穿っていた。

「分からぬか、狂人よ。無理もなかるうのう。貴様らは己の道理でしか物を測れぬからな」

銃火の成果を当然のものとして、アーチャーは嗤う。

疑問に思うことはない。この結果は分かりきったものであると、晒したランサーの無様を嘲笑っていた。

「貴様はわしを許せぬと叫ぶ。不徳に満ちたこの世界を罪であると言う。その罪業を裁くとな。

滑稽じゃな。己自身の姿がどのようなものであるか気付こうともしておらぬのじやろう」

「抜かせえ、この不心得者があぁッ!!」

穿たれて血肉を削る身体を無理矢理に動かして、ランサーは尚も進む。

その意気に衰えは見られない。断罪の決意に迷いはなく、苦痛への恐怖などあるはずもなかった。

ランサーはそのままだ。彼自身は何ら影響を受けていない。懸ける狂気の思いのままに動き、己にとっての正義を押し通さんとしている。

全ては、信じたものの正しさの証のために。

彼は信仰への祈りに生きる者。己ではなく尊き何者かのためにこそ力を発揮する。

ならばこそ迷わない。たとえ我が身に何が起きたとしても、全てを振り伏せ押し通してみせると確信していた。

「とくと味わえ、裁きの槍を！ その流血をもって主への贖罪とするがよい」

掲げられる槍は、串刺しの杭だ。

かつて幾万もの人間を串刺し貫いたという概念が、槍という形を取ったもの。

その本性は別にある。未だ本領を現さない己の宝具を、ランサーは天高くまで飛翔させた。

鮮血に彩られる串刺し公の伝承。

それはオスマン帝国侵攻というキリスト教世界の危機に際し、見事に敵軍を撃退してのけた武勲に由来する。

そこで用いられた戦術は凄惨極まるもの。自国の民に血を流させる焦土作戦、さらに極めつけなのは敵軍の捕虜を用いて行った大量の串刺し刑である。

その数なんと二万。長さ3キロ、幅1キロに及んで突き立つ朽ちた林、同胞の悲惨な死に様は敵兵の士気を挫き、骸の腐肉によって充満した死臭は疫病を蔓延させた。

かの帝国の征服者をして悪魔の所業と言わしめたその苛烈さは、敵国ばかりに向けられたものではない。不徳を働いた自国の民や貴族たちも例外なく串刺しに処されたという。

生涯を通算した数は十万をも超えるという。僅かな汚点さえ見逃さず罪の在処へと突き立てられる悪斬の杭。対象の罪が深ければ深いほどに威力を増すのだ。

宝具の発動と共に、周囲に変化が現れる。

無数に乱立する杭の群れ。それは生前の所業を再現する串刺しの野原。

猛火に包まれる地獄の世界さえも突き破り、罪ある敵対者を屠殺する処刑場を現出させた。

「不徳に満ちた魔王よ、黙して処罰を受けるべし！——串刺城塞！」

カズイクル・ベイ

手が、足が、杭の刃によって貫かれた。

四肢を串刺しとされ、アーチャーの身体が空中に縫い付けられる。

罪ある咎人を罰する磔の刑。大の字になって掲げられたアーチャーは、磔刑に処され見せしめとされた罪人の姿そのものである。

罰はそれだけでは終わらない。自由を封じられたアーチャーの身に殺到する無数の杭。穿たれていく身体に無事な箇所などもはやなく、そこに天より飛来した一刺しが霊核を貫いた。

霊核を穿たれば、サーヴァントとて死を免れない。

誰がどう見てもその姿は死に体だ。無数の杭の磔となった身に生存の余地はない。

ならばこれは決着の光景だろう。ランサーの宝具は、確かにアー

チャーの命を討ち果たした。

「無駄じゃ。貴様にわしを裁くことは出来ぬ。決してな」

だが声が、その事実を否定する。

声の主は明白、聞き違えるはずがない。

相手は目の前にいる。屍を晒したはずのアーチャーが、尚も変わらぬ不遜な声を発している。

杭の野原を炎が包む。

一度は突き破ってみせた地獄の業火に、屹立した杭の群れが焼け崩れていく。

炎は世界と、そして何よりもアーチャー自身から現れる。貫かれた疵口より湯水の如く溢れ出て、杭の磔を焼き尽くした。

自由となり、降り立ったその姿は無傷。

まともであればあり得ない。杭は確かにその身を貫いていた。

身体は業火で満ちている。たとえ英霊といえども、それは人の理を超えている。穿たれた傷孔を新たな炎で補填していく様は、人ならざる魔性のそれだ。

アーチャーは、英霊・織田信長は魔王である。

ランサーの伝承が鮮血で築かれた苛烈なら、アーチャーは火と鉄で積み上げた鮮烈だ。

それは決してランサーにも劣らない。無辜なる者ら着色された怪物幻想、その呪いにして恩恵はアーチャーの身にも施されている。

ましてやこの世界は、その畏敬と恐怖により具現された地獄の風景だ。此処に在ってはアーチャーこそが魔性を統べる王であった。

「罪という言葉は不確かなもの。何をもって罪とするか、それには多くの見方がある」

ランサーの宝具『カズイクル・ベイ串刺城塞』。

その効果とは対象の罪の量に応じて受ける苦痛が増すというもの。『逃走』『不道德』『暴力』。この三種の罪を犯していればいるほどに、宝具の威力は向上する。

戦乱を生きた覇者であるアーチャーは、この概念に多く当て嵌っている。本来であれば、逃れられる道理はない。

「罪を定めしは法。法とは王が敷き、權威によつて保証されるものである。

貴様が奉ずるは神の權威。神の名の下に潔癖であるべしと告げるのが貴様の法じゃ」

『逃走』の臆病に流れるべからず。

『不道徳』の退廢に陥るべからず。

『暴力』の横暴を認めるべからず。

父なる主が言われるように、悪性を許さず善として生きるべし。

言葉にすれば、ただそれだけ。それこそが法の骨子であるが故に、否定することは出来ない。

「その概念ではわしを括れぬ。第六天魔王は墮落への誘い手、世の悪性を担う者。もはや存在としてわしは悪性を背負つておる。

人を糺すための法では、神の正逆たる魔王は討てん」

アーチャーが担うのは最高位の悪神の名。

善と悪は正逆であるが故に、同格だ。敵国の君主を自国の法で裁けないように、同位にある者を無条件に断罪することは出来ない。

この地獄に在って、アーチャーはまさしくその化身。魔王の概念は、串刺し公の概念を上回る。

「そして、狂信に殉ずる者よ。そうであるが故に、やはり貴様はわしに勝てぬ。

狂気とは暗きもの。正気の何もかもを覆いつくし邁進するもの也。たとえ芯では気付いていることでも、狂える者は気付かぬままに進んでしまう」

同じ魔性を背負う者でありながら、アーチャーが説くのはあくまでも理。

それは普遍に存在する絶対のもの。己だけの狂信に閉じるランサーとは真逆の論だ。

「わしを不徳の王と言つたな。だが血塗られし王よ。遍く無辜の者どもから見て、わしらにどれほどの違いがあるという？」

どちらも苛烈に、血と恐怖で縛つた畏怖すべき支配者の姿じやろう。内にどれほどの違いがあろうとも、民草の目に映る姿に如何ほど

の違いがあるというのじゃ？

衆愚の思いなど知らぬ、我が思う故に我ありと、それはわしらは通用せぬ理屈じやろう。なにせ、わしらはそやつらの幻想によって有り様を変えられた英霊なのじゃから」

アーチャーとランサーは違う。

有り様も、価値観も、神威を貶める者と守護する者とで相容れることはない。

しかし、民草の目から見れば両者は同じものだ。

どちらも怠慢への厳しさ、流した鮮血の恐怖によって支配を築いた者同士。

それは下々の民にとって畏怖の対象となる。内心に恐怖を抱きながら仰ぎ見るより他にない。

故に真実は届かない。抱いた怖れの幻想こそが民にとっての真実で、差異を慮れる心の余裕などあるはずもなかった。

「貴様は正気ならざるが故に強い。そして正気ならざるが故に、承知しておるはずの事実からも目を背けてしまう。」

自らが怪物と、多くの同胞串刺した己こそが殺戮の大罪人であると、他ならぬ貴様自身が承知しておるはずじゃというに、それさえ忘れて弾効を叫ぶなど滑稽でしかあるまい。

この地獄は民より見える貴様自身の光景。怪物が、怪物を裁こうなど道理に合わぬじやろうが」

この地獄を築いたアーチャーと、ランサーは同じものだ。

如何に弾効を叫ぼうとも、怨嗟を上げる怨念たちがそれに同調することはない。

所詮はこの黒い騎士も、魔王と同類。自国民すら串刺しの屠殺を行い、嘆きの山を築いた悪鬼羅刹の類いに他ならない。

そんな者が叫ぶ正義になど、虐げられた者たちが頷くはずもない。怨念にとつてはランサーも同じ。怨嗟の声をぶつけるべき魔性の徒でしかあり得ないのだ。

「ほげげほげげほげえッ！ その穢れた口を閉じよおおオオツ!!」

アーチャーの理をはね除けて、ランサーは再び突貫する。

ランサーは止まらない、止まってはならない。

真実、彼の心は狂っている。正気の内には決してない。

一念のみに突出した精神は雑念を混じえない。信念の純性とは盲目的な頑なさの裏返しだ。

正論を突き付けられようと見向きもしない。その省み無さが強さに繋がっているのは間違いない。

「正気にて大業ならず。狂気にて押し通す強さこそ真なりと、正彦が好みそうな理屈じゃが。」

あいにくと、わしはそう思わぬでな。むしろ逆、狂気とは脆いもの。いずれはその破綻により、自滅でもって最期を迎えるのが定めであるとの。

気合いと根性だけでは何ともならぬが現実じゃ。道理が合わねば事は成せぬと知るがよい」

しかし、そんな狂者の理屈をアーチャーは否定する。

狭く閉じて広がらない価値観など、世界に新たな価値を拮げた革新の王には無用の長物。

一部の間で持て囃そうが、そんなものは負け犬の遠吠え。大多数を呑み込んだ喝采に劣るのは必定だろう。

ある一定多数を超えて、その価値が認められるからこそその真。

異端が際立つことなど、所詮は一時のみの物珍しさ。たとえ強さが本物でも、いずれは多数によって押しつけられて淘汰されるのが自明の理だ。

大勢の支持を得られない正義など、正義ではない。どんな理を叫び、それがどれだけ清廉で賢いものだとしても、誰も見向きもしなければ意味などないのだから。

「そしてそれは、貴様自身の承知の事であるはず。たとえ狂気で眼を閉じようとも、奥底ではその道理を思い知っておる。何故なら、貴様は秩序の善性こそ愛しておるからう。」

清廉な信心を愛する者が、怪物という最もかけ離れた場所へ遠ざかっておる。その矛盾、理不尽を、他でもない貴様自身が得心しておるのじゃ」

どれほど敬虔に仕え、神の愛を謳ったとしても。

ランサーは殺戮者だ。凄惨な死の群れを地上に生み出した男である。

それは悪であり、罪なのだ。自他に苛烈な厳しさを課す男であるから、誰より己の不徳を承知している。

自罰の意識は常にある。怪物と称される幻想を嫌いつつも、一方では否定出来ずにいる。己は罪深い存在だと、清廉であるからこそ自らを断罪したくて仕方がない。

「己は地獄に落ちるべしと、貴様はそう言うのであろう。だが、言うなればそれは、狂える者にとって致命的な欠落ではないのか？」

この地獄こそは貴様の罪の具現。我が心象世界では貴様自身の罪業も浮き彫りとなる。その信心に拭えぬ傷を与えておるのじゃ」

ランサーは本当の意味で己の不滅を願えない。

彼は自らの断罪を求めている。罪深い存在は地獄に落ちるべきだと自戒している。

固有結界とは、心象世界の具現化だ。アーチャーの心象に刻まれた光景を映し出した焦熱地獄は、かつてランサーが築いた串刺しの野原と同質のもの。

映し出される心象世界に偽りはない。紛れもなく己の罪だと理解しているから、たとえ狂気に自らを染め上げようとも心の綻びは拭えない。

もしもランサーが、己の為した殺戮を善だと臆面もなく宣えていたならば、また違う結果があっただろう。

それは人の道を外れたもので、醜い姿であるのは間違いない。悪を悪とも分ならず狂った理屈だけで正しさを語るなど、永劫救われない罪人の有り様である。

けれどもそこに一つの真があるのも確かなのだ。本当に心から疑問とも思わないのなら、それこそが真実だと当たり前のように確信しているのなら、己にとつての道理は揺るがない。

それこそ狂人と呼ばれる人種。人々が持つ普遍の価値観に対し、唯一人の感性でもって外れてしまった異質の怪物たちである。

ランサーの強さとは、最高存在からの恩恵によるものではない。それは精神力から生まれる絶対性。揺らぐまいと狂信することで得られる力。

心が生み出す不条理であるが故に、一抹の疑問であっても致命傷と成り得る。そんな心に生じた綻びが、ランサーの力に影を落としていた。

「今一度言おう。狂気とは脆いもの。覆い隠していた矛盾を突きつけられれば、これこの通り。これほどに崩れ易き者が強さや真理を語るなど片腹痛い」

銃撃が総量を増していく。

必然、それに伴って流される血肉の量も増えていった。

縦横無尽、変幻自在に陣形を変えてくる火縄銃の群列。

この地獄はアーチャーにとって自らの腹の中も同然。故にこの空間内では『三千世界』さんだんうちを一切の制限無しに展開できる。

神性への特攻、能力の向上と、有利はそれだけではない。物量を振るう軍略家であるアーチャーにとっては、まさしく悪魔が如し手腕を振るえる合戦場でもあるのだ。

絡み取られたその網からは、もはや逃れられない。

どれだけ狂える姿のままに吼えようとも、ランサーは既にアーチャーの理に囚われている。

それは理路整然と徹底した現実という理屈。どう足掻き何を叫ぼうとも、明確な相性と優位の要素がアーチャーを勝つべくして勝たせていく。

「なり損ないの怪物風情が、魔王に敵うはずがなからう」

焦熱地獄を満たす三千もの一斉砲火。

慈悲も、容赦も、逃げ場を見出す余地もない銃火の蹂躪が、ランサーを撃ち碎いた。



そうして、甘粕正彦は己のサーヴァントの勝利を見る。

それはこの戦いのあらゆる参戦者が望むもの。

勝ち抜き制のバトルロワイヤル。一度の敗北とて許されないルールの厳しさは語るに及ばない。

命を賭している以上、誰もが勝利には貪欲だ。願いのため、まず何よりも生きるために、彼らは勝利を求めている。

聖杯戦争とは、たった一つの祈りを懸けた殺し合い。

この勝利の光景は、その祈りへと近づく貴重な前進だ。命懸けの戦いに挑む者たちにとって、それを得ることに疑問を差し挟む者はいない。

「口惜しいな。おまえの叫びはそこまでなのか。ランサー、狂気に染めるほどの慟哭を、魂の声を聞かせてくれ」

しかし、甘粕という男は並み居る強者の中でもとびきりの異質。

ある意味で、彼こそが真性の狂人だ。甘粕はいつだって、彼の中の道理に従い生きている。

「アーチャーは強い。それは契約を交わした俺が保証しよう。

理解の及ばぬ狂気ではない。それは普遍のものとして皆々が持ち、故にこそ覆し難い現実の道理だ。

一度は世界を塗り替えて、革新を成し遂げた彼女だからこそ、それを統べられる」

向けられる期待の念、その対象はランサーに。

己のサーヴァントを認める言葉を口にしながら、今の甘粕の意識は敗れたはずのランサーに向いていた。

「悩ましいよ。俺は奇跡を願っているし、諦めなければ夢は必ず叶うと信じてもいるが、容易く叶ってほしいとは思わない。

何故なら、現実とは厳しいものであるべきだから。容易く覆るような軽いものであってはならない。それは世に生きるあらゆる意志への侮辱となる。

たとえ世界を敵に回してもと、そう口にする者は覚悟すべきだ。おまえが向かおうとしているのは、遍く人々らによって築かれた現実と

「いう巨壁なのだ」と

意志の力を奉じる甘粕にとって、アーチャーはある意味で反目すべき存在だ。

徹底して実利こそを追い求める彼女の王道は、勇気の可能性を信じる甘粕の信念と真逆だろう。

まったく相反する二つの価値観。もしもそれらが出逢ったならば、その時は互いに滅ぼし合うか、あるいは背中合わせに二つの方向を向いて共生するかの二択である。

「現実が厳しければこそ、登りきった意志は素晴らしいと讃えられる。もし現実が容易くつまらないだというのなら、それは乗り越えた成果までも屑に堕ちるではないか。

彼女という鉄の道理を、無理にてこじ開けるのは至難の技だ。だがその試練が越え難いものであればこそ、おまえの信仰は真を得るだろう」

甘粕正彦は試練を好む。

それは試練こそが彼の愛するものを輝かせるから。

夢見る意志が突き当たる現実という試練。それを越えようと足掻く姿にこそ光は宿るのだ。

ならば、アーチャーという英霊は、やはり彼という男のサーヴァントに相応しい。

現実を凌駕した革新の王、意志の輝きを得る試練として、彼女ほどのものはないのだから。

「大多数から支持を得られれば名作とは限らない。たとえ日の目を見ずとも、心震わす素晴らしい作品とてあり得るのだ。少なくとも、声を大にそれを叫ぶ権利は誰にでもある。

一度は売れずに誰からも見放された作品が、後世になり再評価され名作と万人に讃えられた例は幾つもある。それは現実に屈しようとも、尚も諦めずに挑んでいったが故の成果に他ならん。

己が至高と信じるならば、誰憚ることなく謳うがいい。劣等と烙印を押された現実を、その意志でもって塗り替えて見せろよ。万人を支配する道理など、その信念でもって覆せ。

なあ、ヴラド・ツエペシユ。おまえが選んだ在り方とは、そういうものではないのか？」

解き明かした真名で、甘粕は呼びかける。

ランサーというクラス名ではない。歴史にしかと刻まれた名でもってだ。

英霊となる以前の、確かにあつた人として生きた時間。一人の人間として生まれ、成長し、紡がれていったであろう思いの数々は、伝承などでは語り尽くせない。

その眼は、聖杯戦争における闘争手段サーヴァントを見るものではない。

相手もまた愛する意志の一つとして、甘粕はランサーにその眼差しを向けていた。

——英雄ヴラド三世は、吸血鬼ではない。

彼は敬虔な信徒である。

正義と秩序を愛し、不道徳を嫌う人である。

信じる教えを守るため、あらゆる辛苦を惜しまずに戦った。その功績は紛れもなく英霊として祀り上げられるのに相応しいものだ。

彼は自らを『ドラキュラ』だと自称している。

しかしそれは吸血鬼としての意味ではない。

その意味とは『ドラクル竜の息子』。彼の父が神聖ローマ帝国のドラゴン騎士団の一員であり、『ドラクル竜公』と名乗っていたことに由来する。

決して忌名ではない。父の意志を引き継ぎ、己もまた異教徒よりキリスト教世界を守護するのだという意思表示。それは誇りある称号だった。

切っ掛けとなつたのは、ブラム・ストーカーという小説家が世に送り出した怪奇小説。

現在において、『竜の息子ドラキュラ』の名とは怪物の代名詞である。

彼が尊んだ本来の意味、誇りと共に通称を冠した由来は忘れられ、恐怖の象徴としての意義が刻まれた。

夜に生きる王。血を啜り喰らう伯爵。それは幻想種としての順位さえ逆転させ、狼男や魔女といったより古い歴史を持つ魔性らを従属させるに至る。

創作が現実を捻じ曲げてしまった最大のサンプルケース。彼の行いは苛烈さと残酷性だけが取り上げられ、怪物としての高名だけが人々の記憶に残された。

——果たしてそれは、当人にとってどれほどの無念であろうか。

英霊とは、生前の偉業によって高次の存在へと昇華したものだ。

その行いに向けられる祈り、憧憬、あるいは憎悪も含めた数多の感情。

そんな集合無意識の思いが、英霊という存在を形成して力となる。彼らにとって自らの記録とは、己を己たらしめる”誇り”そのものだ。

その行いを非難されるのは、まだいいだろう。

立場の違い。民族の違い。教えの違い。住まう場所、文化が違えば善悪もまた変動し、一概に正しさを定めることは出来ない。

たとえどのように否定されたとしても、生前の自分が確固として決断し、覚悟と共に行いの責任を負ってきたというのなら、誇りは自らの中で穢されることなく残るのだから。

それが偉業であれ、もしくは悪行であったとしても、自身の手で確かに行ったものならば、己の道のりの一部として納得することも出来たはずだ。

だが、もしも、己の行いとまったく関係しないところで、まるで真逆の汚名を着せられたのだとしたら……。

ヴラド三世は、紛れもない救国の英雄だ。

その苛烈な所業も、決して彼自身が悪性であったからではない。

ただ、彼の善性が自他に対して些か以上に厳しすぎた。横行してい

た腐敗も、それを見過ぐす怠慢も、彼には我慢できるものではなかったのだ。

その所業によって流された鮮血の凄惨さは、敵味方を含めたあらゆる者に恐怖なつて刻まれた。その記憶が後世の怪物伝承のモデルとなり、彼を異形の幻想で塗り替えてしまった。

その屈辱は、断じて許容できるものではない。

己の所業と一切関係ない、事実無根の想像でもって、その”誇り”が否定されるなど。

そのために神の信徒である自分が、よりにもよって神の愛を否定する魔性へ堕とされようなど、許しておくことがどうして出来ようか。

それは奇跡を求める理由として十分すぎる。生前に辿った道のりを否定しないからこそ、そこにある誇りを貶める悪名の存在だけは否定しなければならぬ。

吸血鬼の名を、ヴラド三世という英霊は決して認めない。

彼自身が秩序を尊び善性を奉じる属性だからこそ、それを受け入れることはない。

たとえ無辜なる幻想によって怪物と狂わされようとも、最後の一线では高潔さを保ち続ける。

それこそがランサーの祈り。

聖杯という万能に捧げんとする、英霊ヴラド・ツエペシユの真実”だった”。

砕かれた脚が崩れ落ちる。

手から力が喪失し、頼みとすべき得物も己から離れていく。

身体に命が廻らない。経路が断たれたためだと、それが意味する事と共に理解する。

致命である。もはやこの身は骸に等しい。完全に壊れてしまった

と、己という器に結論をくだした。

動けない。動きようがない。

奮起のために必要な機能はすでに損なわれた。

許さないと心は叫びを上げ、認めないと魂は今も尚吼えている。

それでも、無駄だ。切れた生命の琴線は決して元には戻らない。それは奇跡にすぎらなければ手に入らない恩恵だ。

己には主より賜る恩恵はない。それは重々承知の上。殺戮の罪を負い、怪物とその名を貶められたこの身に祝福は訪れない。

罪業の穢れを持つ者に天への門戸は開かれない。己は地獄に落ちるべきだと理解も覚悟もすであつた。

恩恵はない。奇跡は訪れない。

創作された怪物性に関わらず、己は穢れに満ちた罪人だ。

ならばこの結末も領ける。己の不義から目を背け、断罪の正義を謳ったところで、そこに真が宿るはずがなかった。

届き得なかった事は無念だが、それにも一応の得心は得た。

叶わない祈りへの未練はあれど、ままならぬ事もまた生というものの。

遙かな月にて得られた二度目の生。それが死力を尽くしての結果ならば、英雄の矜持と共に再び冥府へ舞い戻ることも許容しよう。

それは、確信を持って言える確かな事実。

もしも、これが一人きりの歩みであれば、ヴラド三世の道筋はここまでだった。

「なんじゃと!? 貴様……ッ!」

ランサーは、起つ。

崩れた四肢を動かして、死に逝く身体に火を灯して。

あらゆる道理を踏み越えて、ここにランサーがその無理を完遂させる。

だが確認しておくが、それはあり得ない事なのだ。

既にランサーの身は死に体。『戦闘続行』のスキルでもどうにかなるものではない。

銃弾に穿たれた身体に無事な箇所はなく、炎に巻かれた半身は焼け

崩れている。その損傷はサーヴァントにとっての急所たる心臓部、即ち霊核にまで及んでいる。

死に至る傷ではない。死んでいなければおかしいのだ。霊核さえ失ったランサーは、こうして生を繋いでいるだけでサーヴァントの限界を超えている。

それはランサーが、未だ諦めてはいないから。

恩恵も、奇跡も舞い降りないのであれば、己が執念で強引にでも掴み取るより他にない。

ランサーはここでの敗北を断じて許容しない。懸かっているのは己の身命だけではないのだ。

最も尊いと感じた人がいる。その信仰を捧げるに足ると、必ずや勝利を献上すると誓った人が。

ならば敗北などあり得ない。たとえこの身が砕け、魂までも灰に消えようとしているのだとしても、斃れることを許しはしない。

己が死ぬことを許さないから、死なない。もはや理屈さえ通っていない無茶苦茶な根性論で、ランサーは致死の身から再起を果たしていた。

無論、そのような不条理を黙って見ているアーチャーではない。

装填され、一斉砲火を加える種子島の銃列。先に襲わせたものと同等の密度でもって確実なとどめを刺しにいく。

それでもランサーは斃れない。銃撃に身は弾け、その衝撃に圧されながらも、膝を折ることは決してしない。

肉体は確実に削られていきながら、訪れるはずの限界に執念のみで抗っている。どう見ても先がない有様だというのに、心だけは屈するものかと吼えるように。

否、それだけではない。

見れば、少しずつだがランサーの身に見られる損傷が減少している。

容赦のない銃火に晒されて肉体は破壊されていく一方だというのに、逆にその身から傷が癒えているのだ。

穿たれた肉は塞がれて、焼け落ちた半身が再生する。アーチャーの

銃火による破壊速度を、ランサーの復元速度が上回っていく。

勝利という先が無いわけではない。人の理を外れた現象でもって、今まさにランサーは敗北という現実を覆そうとしている。

——それはまるで、”本物の吸血鬼”のように。

「あり得ぬ！ 貴様、己がしている事を理解しておるのか!？」

アーチャーは物の道理を読み解くのに長けた英霊。

そんな彼女だからこそ、それに気付く。ランサーが引き起こしている不条理の如何、それがどのような理屈であるのかを。

「貴様が神を捨てるのか、ランサー!？」

その信仰心が生み出す精神力で、条理の限界を超えてきたランサー。

しかし、これは先までとは次元が違う。これまでも発揮された怪力や耐久力は魔性に傾いていたが、その存在は人の枠内にあった。その武技も戦い方も、人を超越こそすれど、決して人の理を外れてはいなかった。

傷を耐えるのではなく埋める。失われた肉体を補うために、肉体を創造する。それは治すのではなく戻す現象。たとえどれだけ精神力を発揮させようとも、人という存在であるのなら実現させてはならない理だ。

それは異形の業、人ならざる魔性の証。神に定められた法則を踏み躪り、墮落の果てに至る存在。父たる主の愛に背を向ける背信行為に他ならない。

人はそれを『怪物』と呼ぶ。

人を喰らう者として、神に背く異端として。

恐怖より生まれ、闇夜より出でる怪異なる存在。ランサーの姿はまさしくそれだ。

英霊としての概念を塗り替えて、自らを別の存在へと置き換える。単に精神力だけの問題ではない。怪物としての幻想が真実をも上回ったヴラド三世だからこそ可能なことだった。

だが、可能であることと、実際に行うことには明確な差異がある。ランサーが、篤き信仰を守るために戦った救国の英雄たるヴラド三



世が。

創作により血に餓えた悪鬼が如く語り継がれ、高潔な誇りを穢された恥辱を誰よりも知る男が、あろうことかその汚名を受け入れるなどと。

「神が、我が信心が、この槍の妨げとなるのであれば——」

ヴラド三世は、吸血鬼とされた英霊だ。

こんなにも残酷な人間は、このような恐ろしい人物は、”きつと怪物に違いない”。

そんな人々の想像によって本来の存在を歪まされた。清廉な武人としての姿でなく、おぞましい怪物として恐怖の象徴とされた。

人として生きながら、人ならざる者として扱われる。本意であるはずもなく、ランサーにとって吸血鬼の名とは呪いに等しい。

それを、自ら受け入れた。

それが彼にとつての誇り、篤き信仰に殉じた生き様を穢す行為だと知りながら。

執念が、幻想に追いつこうとしている。狂い求める勝利への執着が、遂には彼自身を本物の怪物と等しいものに変えている。

創作にある通り、血を貪り人を喰らう吸血鬼として、身も心も魔性の存在へと堕ちていく。

レジエンド・オブ・ドラキュリア  
”鮮血の伝承”

正気を失い狂うだけでは済まない。

ランサーは、文字通りに自らを捨てるのだ。

英雄としての矜持、英霊たる何たるか。己の名すら遠い余所事に思えてならない、自分が自分で無くなる感覚。果てには一切を消失し、理性を持たない魔獣へ堕ちる。

元に戻る術はない。捨て去るとはそういうこと。ヴラド三世という人格は消滅し、その存在は敵対するあらゆる者を殺戮するだけのものとなるのだ。

「——ならばオレは、信仰を捨てよう」

自身の存在意義すら捨て去る決断を、ランサーは躊躇わない。

たとえそのために、狂えるほどに殉じた神への祈りを捨てるのだとしても。

己の全てを捨ててでも、守り抜かねばならないと誓ったのだから。

「我が汚名が、永久なる真実として語り継がれようと構わず」

「我が魂、永劫の魔道に堕ちること厭わず」

誇りがあった。名誉があった。

武人として、領主として、苛烈な生き様に秘められた数多の思い。

それは断じて軽いものではない。英霊であっても、否、英霊だからこそ、自らの生きた証を捨てることがどうして出来よう。

「そうだ。もはやオレは、何も要らない」

その全てを、今ここで捨てるのだ。

英雄としての名誉も、神へと奉じた信仰も、何より自分自身でさえも。

己が手にするあらゆるものを、たった一つの誓いのために投げ棄てるのだと覚悟する。

「ただ妻よ、最も穢れなき愛に生きる拒食の姫よ。貴女に勝利を捧げることが出来るのなら、この身は血に餓える不滅の怪物であればいい」

全ては聖杯を獲得し、真に尊き人へと捧げるために。

静かなる宣誓は、堅く揺るがぬ決意の表れ。意志を定めたランサーには、もはや狂気さえ必要ない。

それを信じ難い目で見つめるのはアーチャーだ。

彼女もまた英霊、苛烈にして鮮烈な生を歩んだ英雄の一人である。

だからこそ信じられない。英霊にとつて何物にも代え難い生き様への矜持を、たかが人間のために捨て去ろうとするなどと。

主従の関係で結ばれるマスターとサーヴァント。

しかし従属の関係にあるとはいえ、英霊たるサーヴァントは人間よりも遥かに上位の存在だ。

その関係は絶対ではない。サーヴァントは確固たる自己を有した存在である。たとえ令呪があろうとも、己より下位の相手に唯々諾々

と従う者などまずあり得ない。

生前の信条から、死者として自らを戒めるか二度目の生を謳歌しようとするかは分かれるだろう。だがどんな英霊といえど、己の矜持を売り渡す真似はしない。

既に死後の存在であるからこそ、生前の在り方と誇りは何よりも優先されねばならない。その生き様を自ら放棄するなど、サーヴァントならば考えられなかった。

何の強制もなく、サーヴァントにそこまでの覚悟を抱かせたことに、アーチャーは驚愕していた。

「聞けい、ルーミアの王よ！ まだこの言霊が届く内に！」

だから、アーチャーは声をあげていた。

相手は怪物に堕ちかけた、もはや四の五の言わずに打倒すべき存在であるというのに。

消え逝くその人格を惜しむように、最後にヴラド三世という英雄へと言葉を伝える。

「信ずる者のため、まさしく全てを擲つその覚悟。そなたの信心は一点の穢れもない潔癖じゃ。

が、なればこそその陥没も見えたぞ。そのあまりにも過ぎた純真こそ、そなたという人物が陥つた非業への因果である」と

ヴラド三世という英雄が持つ苛烈さ、残虐性の根底にあるものは、自身の高潔さに対する周囲との差異である。

彼にとって当たり前のことが、周りの者にはそうではなかった。言葉にしてしまえばそれだけで語り尽くしてしまう。

虚飾のない潔癖な信仰。秩序の正義を愛し、不覚悟な有り様を憎む。自身に課した当然の戒めを、ヴラド三世は他の人間たちにも同じように求めてしまった。

墮落への怒りは、彼の苛烈さと結びついて凄まじい血の粛正を断行させる。その恐怖は串刺し公としての統治の糧となったが、同時に民との間の埋められない溝となった。

「その純正は人に耐えられるものではない。そなたにとっての正気とは、常人にとつての狂気である。だというのにそなたは、己の民草に

もそれを道理と押し付けてしまった。

それは王道にあらず。個人として抱くべき矜持にすぎぬ。国事における理からではなく、ただ己が耐え難いがために死の懲罰をくだした。

王として、それは申し開きのない誤りじや。よってそなたは王に能わず。王ならざるが故に、そなたは王たる征服者に敗れたのじや」

征服者メフメト二世。

ヴラド三世の生涯における最強の敵。

彼に対する勝利の功績こそが、ヴラド三世を英雄として決定づけたと言える。

曰く『破壊者』『キリスト教最大の敵』『アレクサンドロス大王の再来』。

コンスタンティノールを征服し、東ローマ帝国を滅亡させ、最終的には三十年以上に渡る征服事業によりオスマン帝国に偉大な繁栄をもたらした”征服者”。

その脅威は当時のヨーロッパにとって衝撃となり、教皇ですら逃走の用意をしたという。自国の民には栄光を与え、敵国の全てに畏怖を刻んだ破格の”王”。

メフメト二世は、戦においてヴラド三世に退けられている。

それは確かに彼の敗北だろう。ヴラド三世の残酷さを悪魔と呼んで恐れた。

だが、武人である前にメフメト二世は王である。万人を率いる偉大な王である彼は、故にこそ恐るべき串刺し公の弱点にもすぐに気付く。

偉大なるキリスト教世界の盾、英雄ヴラド三世を敗北させたのは、対峙する敵対者ではなく盾の後ろで守られているはずの者たち。恐怖支配が生み出した澱みは征服者が付け入る隙となった。

実弟が率いる軍に攻められて、自国の貴族には見限られて、同盟を約束したはずの国にも裏切られた。誰よりも高潔であったはずの彼に付いてくる者はおらず、無実の罪を着せられて信仰を救った英雄は処罰されることになる。

結局のところ、勝利したのはメフメト二世である。如何に一つの戦場では勝ろうとも、国と国、王と王との戦いでは真に王者たる征服者に完敗したのだ。

「国を富ませぬ正義などに価値はない。そなたが望んだものは、元より人を喰らうもの。その善は最初から怪物のカタチをしておった。

王より堕ち、人より堕ちて、最期には善さえも取り零して怪物に堕ちる。求めたはずのものから遠ざかり続けるその徒勞、哀れなる殉教に生きる脚をそなたは止めぬというのか」

アーチャーの告げる弾劾。それは人理を介する人の王としての言葉だ。

同じ人であった者として、哀れとすら思えるランサーの在り方。他者に理解できない純粹さ、それ故に貶められ、排斥されたその結末。

果てに怪物と名付けられ、遂には人たる最後の誇りさえ捨て去ろうとする姿に、アーチャーもまた一片の慈悲を示したのだ。

「——そう、だからこそオレは真実の愛を求めるのだ。遙かな極東に在りし王よ」

だから、怪物に堕ちる寸前の残された理性でもって、ランサーは答えを返した。

「国を省みぬは王にあらず。慈悲を垣間見せぬは人にあらず。我が魂は生まれより魔性であった。

ならば良い。端からその形であるならば、堕ちる事にも躊躇はない。在るべき姿に戻るまで」

理解して尚、止められないものがある。

ランサーとて理性の部分では分かっているのだろう。自身の潔癖が持つ歪さを。

やはり彼という心は狂っているのだ。ランサーの信仰とは教えではなく、魂より発せられる声そのもの。人々の共有する正しさでは抑えきれない、まごうことなき異端である。

しかし、それさえもはや絶望には値しない。そのような狂気の中で求め願ったものを、彼は既に見出しているのだから。

「然り、然り！ 正気の内には真意はない。狂おしき情動こそ真なる渴

望。果てにあるのが怪物ならば、その姿こそオレに相応しい！

——愛に狂え。その姿は美しい。理解の届かぬ純度なればこそ、其は孤高にて燦然と輝く真実の祈り。その価値を、我が血肉の全てを捧げても肯定しよう！」

ランサーの覚悟に迷いはない。

怪奇談に謳われた夜の怪物、鮮血の伯爵たる<sup>ドラキュラ</sup>吸血鬼の伝承。これより彼は正真正銘の怪物へとなり変わるのだ。

吸血鬼とは、強大な能力と裏腹に多くの弱点でも知られる怪物だ。陽の光に弱く、十字架に弱く、流水を渡れない。闇に堕ちた存在として、聖なるものへの畏敬が未練となってその身を焼くのだと。

だが自らの執念で怪物へと成り果てたヴラド三世には、それさえ通用するか分からない。何故なら彼は、その信仰さえ捨てて魔道へと足を踏み入れたのだから。

如何なる手段に晒されようとも、滅びを容認しない彼はその信念だけで振じ伏せてしまっただろう。それは文字通りの不死身の怪物とさえ成り得るかもしれなかった。

そのようなランサーに、アーチャーは気圧されていた。

自身にとつての世界、この焦熱地獄に在って尚、ランサーの魔性に寒気を覚えている。

アーチャーのような、理屈で操った仮初めではない。怪物化しているランサーは芯の髓からその存在を魔へと染め上げている。

正気ではない。これはまさしく狂気の沙汰。だからこそ発揮される意志の熱量は、理で動くアーチャーでは決して到達し得ないものだった。

断じて屈したわけではない。それでも感じずにはいられない敗北の予感に、アーチャーの気迫は揺るがされていた。

「どうした、アーチャー？ まだ何も決してはおらんぞ」

そんなサーヴアントの背を押すのは、共に戦うマスターの声。

「非情に徹した理こそがおまえの信念。乱世さえ押し退けて築き上げた革新ではないか。

なにを怯む？ 何故躊躇う？ 正しき人の理を掲げておいて、何を

改めるといふのだ」

その声には不安や不信の陰りは微塵もない。

甘粕正彦は信じている。己が契約した英霊の、その信条の強固さを。

「ヴラド・ツエペシユは強い。狂いながらも貫かれる思いは、まさしく人が行き着いた輝きに違いない。

ならば、我らとて負けてはいられまい。素晴らしい輝きと認めればこそ、その覚悟に応じなければ。

焼き尽くせ。塵さえ残すな。この地獄の焔でもって、吸血鬼の伝説を灰に帰してやるがいい」

それこそが、死合いの場における唯一の礼節であるが故に。

これは戦争だ。成就する祈りはひとつつきり。どれほど切なる願いであつても、例外なく切り捨てられる。

決戦の場に立った時点で、情けの余地は何処にもない。ならば最後の決着まで、全霊を懸けて戦い抜くのみだろう。

その道理は甘粕とて変わらず、また誰よりも弁えている。

故にサーヴァントへと渴を入れるのだ。何事にも囚われず、ただ全力で臨むべし、と。

受け取ったマスターの意思に、アーチャーは破顔する。

「なんと呆れた根性論。理屈らしい理屈が何も無い。

理の信条を肯定しておいて、自分で宣うのはそれだとは。

そしてこの男のそれは、単なる口先では終わらない。口にしたからには相応の事をやってのける。

事実、その意志に呼応したように焦熱地獄の強度が増していた。固有結界とは大儀礼。その消耗は著しく、一流の魔術師といえども自前の魔力だけでは数分の展開が限界という代物だ。

当然、時間の経過と共に世界の強度は落ちていくのが道理だ。だといふのにここに来て強度が増すとはどういうことか。

ランサーは怪物だが、この男もまた怪物だ。

意志というものを原動力に、理屈さえ越えてしまう信念の怪物。

互いが不条理を成し遂げる怪物同士。アーチャーとは正反対の存

在だ。

それでも、本物だとは認めなくてならないだろう。こうして己も、それに触発されてその気になつていとあつては。

「……よかろう。真つ向より、受けて立とうぞー」

ここに至つてはそれこそが正答。

これより先の攻勢は熾烈を極める。生半な覚悟ではぶつかれない。後退など、それこそ心に緩みを生じさせる。自ら勢いを削ぐ愚行に他ならない。

後先も考えてはならない時がある。今がその時だと、アーチャーも承知していた。

焦熱に包まれる地獄の坩堝で、二騎の英霊が対峙する。

中空に浮かぶ種子島。掌握される計三千もの銃列が、ランサーを一下子乱れずに狙い定める。

世界を覆つた仏滅の大火と、敵を囲う包囲は未だ万全。状況はアーチャーにこそ優位を与えている。彼女が築き上げた理の牙城は崩れていない。

だが、アーチャーが対峙するのは真性の吸血鬼。常軌を逸した変貌を遂げたランサーは、もはや英霊の枠組みにさえないだろう。

その執念は、理では決して測れない。理外にあるからこそその狂気である。激突が開始されれば、果たして立っているのはどちらであるか、それは両者にも分らない。

それを承知しながら、アーチャーは向かつている。

己の勝算が万全でない事を。この正面決戦に保証など何も無い。

本来、それは彼女の信条から反している。策を弄して、地の利を整え、確たる勝算を得て動く合理主義。古き戦の有り様を否定した革新の王に、誉れへの執着はあり得ない。



どちらに転ぶか分からない、博打のような決戦などやる意味は無い。彼女の信条とはそういうもので、この状況は本意であるはずがない。

だが振り返るのなら、ここまでの戦いはそのようなものばかりであった。確実なはずの勝機をあえて見逃し、格下相手にさえ奮起されて迫られる始末。革新の王の戦とはとても言えまい。

すべては、勇気を愛して意志のままに突き進む大馬鹿者、甘粕正彦という名の男に見出されたから。その手を取った瞬間から、こうなることは必然だったのだ。

契約のみの関係ではない。主従を受け入れると決めたのは己自身。この今生を捧げると誓ってみせたのだから、こんなやり方も承知してみせねばならないだろう。

対するランサーもまた、向かう思いは熱量を増すばかり。

勝利のために、それは誰でもないマスターのためにある。

そのためならば全てを棄てられる。英霊としての己さえ捧げてみせると豪語している。

躊躇う気持ちなど一片もありはしない。たとえ生前に殉じた信仰に背く道だとしても、勝利が得られるというのなら喜んでその道を選ぼう。

すべては、真実の愛に生きる女、奇跡のような光に出逢えたから。その光に跪いた瞬間から、一切の未練を振り切って揺るぎない覚悟を得た。

形式の契約など関係ない。一目見たその時から、己の忠誠は決まっていた。貴女のための戦いこそ聖戦と定めたのだから、この身がどうなろうとも殉じなければならぬのだ。

互いに己の有り様を歪めてでも勝利へと向かっている。

そして、それをさせているのはどちらも自身が従うマスター故に。本来の自分を歪めているからこそ、懸ける執念も尋常ではないと言える。性質も主義主張も何もかも真逆の両者だが、皮肉にもそこだけは共通していた。

マスターの勝利のため、それはサーヴァントにとって本懐にも等し

い意義。戦いのための闘争手段たちは、その存在意義のままに向かい合っていた。

アーチャーに止まる気はない。

ランサーにも止まる迷いはない。

横から誰が口を挟もうとも、二人の激突を止める事は叶わないだろう。

たとえそれが神でも、悪魔でも。定まった両者の決意をどうやって止めるという。

先にあるのは決着だけ。勝者が敗者か、二者択一の明暗だけが迎えるべき結末だと、互いが承知の上であるが故に制止できる者は一人もいない。

「――駄目、止めて」

そこに、もしも例外があるとすれば、やはりたった一人だけ。

「ランサー。駄目。それは決してしてはいけないこと」

理由はどうあれ、この闘争を歓迎する者たちの中で、唯一人。

どんなに苦しく飢えていようとも、他者から奪う事を良しとしなかった、彼女。

「あなたは、そんな風になってはいけない人だから」

何処までも己の信心に殉じようとするランサーを止めるのは、祈りの先に在る女自身からの言葉に他ならなかった。

いつだって彼女は、人の献身によって生かされてきた。

食べる事の出来ない身に、代わる何かを与えられた。

あまりにずれた人との差異を、誰かからの手によって繋いできた。

それは打算ではあり得ない。全ては愛があったが故に。思う心があつたから、誰も彼女を見捨てようとはしなかった。

彼女が愛に生きられたのも、そのためだ。

愛は何よりも尊い。愛に生かされてきた彼女だから、それが分かる。

愛されてもらったから、自らも愛そうと思えた。彼女が守り抜いた人としての愛は、誰かから教わってきたものだった。

心が動かされないはずがない。

たとえ嘆きの中にあつて、虚ろとなった心でも。

全てを擲ち、自らの尊厳さえ捨て去っても尽くそうとする、ランサーの献身に。

誰よりその尊さを知る彼女が、心動かされないはずがなかったのだ。

「――ああ」

洩れる嘆息。そこに込められた思いはなんだろう。

諦め、納得、そして安堵。異なる様々な感情が一息に込められる。

無念だと嘆くのか、それでこそだと喜ぶべきなのか。その矛盾、二つの真逆の結論こそ、己が狂気の内に在つてずっと目を背けてきた事なのかもしれない。

だからこそ、それは何よりも明確な”決着”だった。

「ああ、やはり、貴女はそれを選ばれるのですね」

向き直った先にいるのは、狂気の仮面を被った道化師ではない。

そこにはもう仮面はない。道化の面を外して、その素顔に映すのは理性の光。

かつてランルーさんと名乗った女。壊れていたはずの彼女が、真実の姿となつてランサーと向き合っていた。

「……ランサー」

「分かつてはいたのです。貴女という人が望むもの、それが如何なる祈りなのか、始めの時から理解していた。

食べる食ると望みながら、その実、貴女は倒した相手を口にすることは決してなかった。嘆きの狂気に陥りながら、それでも己の信仰を違えなかった、哀しい女よ。

そんな貴女が、他者を喰らい奇跡へ至るこの戦いを、是とするはずがなかったのだ」

愛した者を食べたいと願いながら、決して食べる事をしなかった。怪物としての愛を持ちながら、その愛を良しとせず人としての愛に殉じた、女。

そんな彼女だからこそ、跪いた。たとえ全てを擲つてでも、彼女のために奇跡へと至るのだと誓ったのだ。

——他ならない彼女自身が、そのような奇跡を望まないと知りながら。

「だからこそ、オレは貴女の不明を良しとした。怪物の仮面を被る貴女を容認し、その正気が立ち戻る事のないように振舞ったのだ。

釈明のしようもない。貴女の狂気を肯定するため、同じ狂奔の内に閉じるより他に処方を持たなかった至らなさを、どうか謝罪させていただきたい」

「……ううん。きつとあなたでなかったら、私はここに居なかった。

優しくしてくれた時間も、ちゃんと覚えているよ。あなたは本当に、私なんかのために頑張ってくれたんだもの。謝らなきゃいけないのは私のほう。

本当に、ごめんなさい、ランサー。あなたはそんなになってまで尽くしてくれたけど、やっぱり私はそれに応える事は出来ない」

「ええ。それでこそ貴女だ。その妥協ができない愛の潔癖こそ、貴女に見出した真実だ。

貴女は救われなければならない。そのような貴女だからこそ救われなければならないのだと、そう求めたのはオレ自身の望みであったのだ。

ならば御身に咎は無い。業の全ては、我が体を以て引き受けよう」  
「……あなたは どうして、そうまで私のことを？」

傳いて、忠義をも超えた信仰を捧げるランサーを疑ったことは無い。

ただ、彼女には分からないのだ。そこまで自分に尽くしてくれる、その思いがどうしても理解できない。

彼女にとって、自分とはいつだって戒めるべきもの。

自分は他の人たちとは違う。その食欲は異常なものだと自覚している。

自身の本性を忌諱してきた日々は、彼女に自罰的な意識を与えている。称賛も献身も、自分には分不相応のものだとしか思えない。

——それなのに、ああ、どうしてこんなにも。

私の周りにいる人たちは、私のことをこんなにも愛してくれるのだろうか。

「命を奪うことは罪だという。しかし見よ、いったいどれだけ多くの者が、必要のみならず遊興で以てその罪を犯しているのか。」

貴女ほどに切実な愛に生きる者はなく、貴女ほどに残酷な飢餓に耐える者はいない。呪われた宿業を持ちながら、その魂は地上の誰よりも清らかだ」

「生きる為に喰う獣などとは、悲哀が違う。」

生きる余興に愛する人間とは、濃度が違う」

「貴女に虚飾はない。獐猛な欲求、偽りない求愛。幼いままに破綻したその恋慕、されどそこに身を委ねる事なく、穢れなき純愛を貫いたその生き様。」

どうか、今一度言わせてほしい。貴女が存在こそ奇跡だと。オレが求めてやまなかつた、真実の愛の体現であるのだと」

誰よりも苛烈に、狂気とすら映る純粋さで生きた、ランサーだから分かる。

愛したもののしか口に出来ず、愛しているからこそ食べる事を選ばない。どれだけ飢餓に蝕まれようと、とりあえず愛するという妥協さえあり得ない。

逆説的ではあるが、その心の在り方は打算や偽りのない、真実の愛そのものだ。人の欲深さ、おぞましさを知るからこそ、それがどれだけ得難いものかを知っている。

「であるのに何故だ!? 何故、貴女の愛が奪われる!？」

貴女ほどに罪の穢れを持たぬ者はなく、貴女ほどに真摯な愛に生きる者はいないというのに、なにゆえこのような悲劇が罷り通るのか!? 間が悪かつたなどと、そんな言葉では済まさせないッ!!」

そう、得難い奇跡だと知っているからこそ、この理不尽に底知れぬ憤怒を抱くのだ。

彼女が、虚飾の無い愛に生きる人だと知っている。

彼女が、何の罪業も持たない清き人だと知っている。

そんな彼女の愛が、最も報われぬ形で終わったと知った時の、その怒りたるや形容し難い。

人の不運に理由はない。多くの場合、ただ間が悪かったただけなのだと、そんな当たり前の道理にさえ怒りを顕わとするほどに。

それ即ち天への憤激、奉じるべき主への叛意の宣言にも等しかった。

「あつてはならぬ。これは天の不明である。地上で最も清らかな愛が絶望の嘆きに堕ちるのならば、正義の一切はその価値を失うであろう。

誤りは正さねばならぬ。本来得るべき幸福を、有るべきであった未来を取り戻す。聖杯の奇跡で以て、間違った時間を巻き戻すのだ！

これぞまさしく聖戦よ！ 貴女には飢えを満たす資格がある。その尊厳を取り戻すための戦い、そのために身命を尽くす戦いを聖なる行いと呼ぼすして何とする。

敵対者どもよ、贄となれ。たとえ万を超える屍の山を築こうとも、これ全て誉れある愛の所業であると知るがいい！」

矛盾した論理さえ押し通す、狂気という名の原動力。

本来ならば承知している道理さえ、ランサーは狂念によって置き去りとするのだ。

全ては『彼自身の願いのために』。本心を覆い隠した彼女の願いでは、決して彼女は救われない。彼女の愛とは失われた過去にこそあるのだから。

故に、それを取り戻す。過去の悲劇を覆して、彼女が愛した全てをその手に返す。それこそがサーヴァント側の、ランサーが聖杯に託すべき祈りに他ならない。

「……だが、貴女はオレを否定した。畜生の理で動く我が行いを良しとはしなかった。

それでいい。ならばやはり、貴女には救いが残されている。天に祝福される資格を、貴女は最期まで守り抜いたのだから。

そして、護国の鬼将と謳われながら、御身を守り抜く事かなわなかった我が槍の不甲斐なさを、どうかお許しください」

だが、そんなランサーの狂気は彼女によつて止められた。

そして忘れてはならない。ランサーの身は既に死に体。霊核も完膚なきまでに破壊され、本来ならばとうに決着がついている。

その命を繋いでいたのは、ひとえに彼自身の狂信によるもの。宝具とすらなっていない伝承概念を、ランサー自身の執念によつて”ノウブル・フアンタズム 貴き幻想”の領域まで押し上げた。

その信念の不屈から生み出される不条理こそ、ランサーの生命線。現実を覆してきた不条理を失えば、後には当たり前前の結果だけが待っている。

——魔法が、解けた。

「ううん、違う。私だつて一緒だったもの。その罪は、あなただけのものじゃないでしょう？」

「ああ、そればかりは領けませんな。貴女の言葉といえど、聞く耳を持つつもりはない。

たとえその手の令呪を費やされようとも、この罪の穢れはオレ自身で持つていく」

それは、優しい拒絶だった。

消え逝こうとする身であっても、ランサーが案じているのは彼女の事。

清廉な魂を、殺戮の罪で穢すことがあつてはならない。たとえそれが互いの祈りを奪い合う聖杯戦争であろうとも、奪う事を善しとしなかつた彼女には相応しくない。

だから、ランサーは全てを己の業にして振舞つた。

彼女の狂気とは嘆きからの逃避。その意志に本当の意味での殺意はない。

彼女の言葉を受け取つて、殺戮へと変えてきたのはランサー自身。願いのための行いだと、決して彼女の信念を穢すことのないように。

己が全ての泥を被つてでも、奇跡へと至る。それこそがランサーの捧げてきた献身だった。

——ああ、また、お腹がくうくうと鳴り始めた。

彼女は泣く。己という存在の呪わしさを。

彼女は震える。奥底より鳴り響く怪物の声に。

ランサーは消える。それはもう決まってしまったことだから。

なら、食べないといけない。命は無駄にしてはいけないのだから、食べないと。

哀しいけど、本当に、とテモ哀シイ事だケレど、食ベナイト。

ダツテ、ソウシナカツタラ、ワタシ ハ ダレモ 愛セナインダカ

ラ——！

「いえ、それには及びません。

この身は貴女に愛される資格がない。

貴女にとって愛する事とは、飢餓の苦行と褥を共にせねばならぬ重いもの。

幾万の血肉を食った怪物には、あまりにも過ぎたものだ」

そんな彼女の愛を、ランサーは振り払う。

優しく、静かに、決して手折ることのないように。

串刺し公の異名からはかけ離れた姿で、教えを諭す聖者が如き慈しみを以て告げた。

「貴女の生き方は間違いではない。穢れなき御霊には救いの余地が確かにあるのだ。

愛するのは、どうかその時に。オレではない。純潔を貫いた貴女の愛は、真に愛すべき者たちへと向けられるべきなのだから。

貴女は報われるべき人だ。苦行の生にこそ最後の安息は約束される。天より降りる祝福は、必ずや貴女の頭上にも注がれることだろう」

ランサーが示す救い。それは聖杯の奇跡によるものではない。

実態を持った事象ではなく、それは心の内の、ともすれば誰もが手に出来るもの。

魔術師の神秘よりも見えざるもので、だからこそ無形のまま信じる



ことに価値がある。

「——だから、どうか祈ってください」

其れの名は、祈り。

地上のあらゆる万人が、英雄・凡庸の区別なく行うこと。

地域、教えの違いこそあれど、祈りという行為の根元的な意味は変わらない。

自分たちよりも大きな存在を意識して、何らかの許しを求めている。それは畏敬であり、贖罪であり、救いであつたりと人それぞれによつて異なる。

「案じめされるな。救いは舞い降りる。希望は必ずや、貴女の手の中に収まるのだ。」

どうか疑わず、それを信じていただきたい。信仰とは、元よりそうしたものであるのだから」

元来、信仰という行為に見返りはない。

どれだけ祈り敬つたところで、分かりやすい加護だの幸運だの、目に見える恩恵があるわけではない。

物理法則に支配される今の現世に、自然概念の神はいない。神話の時代はとうに過ぎ去つて、神なる存在がその姿を降臨させることはなくなつた。

実態なき存在を信じ続けることは難しい。

あらゆる神秘が駆逐された地上では、宗教さえ意義を失いつつあつて久しい。

いずれは教え自体も形骸化し、人の意識は神への畏敬から離れていく。その未来は自明のものであるだろう。

それでも人は、きつと祈る事を止めはしない。

幸運を欲する時、自身ではどうしようもない事態に直面した時に、やはり人は祈るのだろう。

「教えを知らずとも、神なる存在を信じておらずとも、」 何かに祈る” という行為は消えない。

——だって、そうでなかったら、この世はあまりにも残酷だ。どうしようもなく、救えないものがある。

悪事の罪があるとは限らない。そんなものなくたって、人には多くの絶望がある。

運命とは理不尽で、人はいつだって間が悪い。

個人がそれに抗うことは難しく、世界には今も不幸の嘆きが生まれている。

そんな救われない心を救うために、人々は祈るのだ。救ってほしい、救われたいと、嘆きに堕ちた心に再び光を灯すために。

「純真なる祈りの前には、勢力の大小も、教えの如何も、奉じる神の名さえ、取るに足らぬ。

祈ってください。救いはあるのだと、祝福は訪れるのだと。誰より清廉であった貴女には、楽土への道が開かれている」

祈りが届くかは問題ではない。

聞き届ける神がいるかどうかさえ、問題にはならない。

祈りを信じるのが救いなのだ。救いがあると信じられれば、それは真実にも等しくなる。

大切なのは信心の潔癖。

何者かの救いの手を求めて祈ってはならない。

信じてさえいれば報われると思ってはならない。

見返りを求める打算も、主の实在を疑うのも、総じて不純だ。そんなものがなくとも、何かを思って祈るといふ行為に支障はない。

ただ純粋に、心穏やかに祈りを捧げた者の魂には、安息は訪れるのだ。

「……天国なんて、あるのかな？」

「ありますとも」

穏やかに、ランサーはそれを諭す。

「……人は、そこに行けるのかな？」

「行けますとも」

言葉短く、余計な教えも必要としない。

ただ伝えれば良い。信じることへの純心を。

「……私は、救われていいのかな？」

「それこそ、もはや語るに及ばず」

信じる者は救われる。言葉の通り、彼女の救いとはそこにある。「でも……それなら、あなたは？」

あくまで彼女に諭すばかりのランサーに、彼女はそう尋ねる。

面持ちは穏やかなまま、ランサーは問いに対して静かに首を横に振った。

「我が身にその資格はない。血染めの恐怖に塗れた怪物にあるのは地獄への末路のみ。何も変わることはありませんまい」

「けど、それじゃああなたは……ッ!？」

彼女は知っている。

どんな苦痛も恐れずに、心の不屈でもって戦える彼の姿を。

一時の休息の中、色んな昔語りで慰めてくれる彼の声を。

純粋な人。不器用な人。どうしても不実には生きられなくて、いつも自分を磨り減らしてる。

本当は優しい姿だっけ持っている。だけど彼は恐ろしい人だから、みんなが彼を誤解している。

怪物だ、吸血鬼だと、彼はいつまでも言われ続ける。

きつとそれは変わらない。誤解されたまま見向きもされない。

彼の真実は覆い隠されて、彼の思いは誰にも届かない。誰よりも人の正しさに純粋であろうとした人が、人々にとっての悪魔として語り継がれるのだ。

それでは、あまりにも救われないのではないか——？

「それこそ、貴女に案じられるまでもありません」

霊子で編まれた身体が解れる。

仮初めに得られた生命が消えていく。

奇跡を手にする機会を得ながら、悲願に届かず散る無念。深い渴望を持つからこそ、受ける絶望も推して知るべきだろう。

しかしランサーの面貌に苦渋はない。その心は晴れやかに、満ち足りたものを抱えながら己の結末を受け入れている。

主への愛を信じて戦った。

貴族の責務を果たすべく、あらゆる不正を糺してきた。

何ら不思議なことではない。信仰と正義への思いとは誰もが持つ

べきもの。

当然の道理であつたはずだ。信仰を尊び、正義に生きる。それを護るため戦うことも、不実に罰を与えることも、彼にとって当たり前前の認識だつた。

だが、そんな彼の道理は理解されなかつた。彼の清貧さは欲望持つ人々には疎ましく映り、豊かさに溺れる者の悪辣によつて殺されたのだ。

ヴラド三世にとつての無念とは、非業を遂げた最期でも、怪物と称されたことでもない。

自らの行いが”怪物の所業”として映る、その乖離こそが彼にとつての絶望だつた。

この地上に、主への愛はない。

真実と呼べる祈りは、穢れなき清廉たる愛は存在しない。

生涯を通じて思い知らされたその事実。もはや怒りと嘆きしかない。彼が信じた正しさは何処にも存在しないのだと理解した。

純粹すぎるが故に妥協が出来ない。それを許すことは不実の罪に他ならないのだから。納得することが出来ない憤怒の念は矛先さえ見失い、ひたすらに彼自身を苛むばかり。

——しかし、その嘆きはすぐに癒されることになる。

月によつて引き合わされた召喚者、道化の仮面に心を覆つた哀しい女。

一目見た瞬間に打ちのめされた。その純性、呪いを抱きながらも穢れを持たず、真実の愛を貫く生き様に。

全てを捧げて尽くすことにも躊躇はない。人間と英霊の格差など、考慮するにも値しない。

それほどに彼女という存在は尊い。武勇に優れた英雄や、人より聖者と称される人物よりも、遥かに得難い輝きであると思えたから。

「貴女という奇跡に出逢えた。ただそれだけを以て——

オレはもう、十分に救われていたのだから」

虚無へと消えていく面貌には、最期まで慈しみを浮かべながら。

最期にはあらゆる狂気から解放されて、心穏やかにランサーは還つ

ていった。

彼女は祈る。

「奉じるべき神の名を知らない。

こうと願う救いの形を持たない。

それでも彼女は祈るのだ。純粹に、誠実に、ただ真摯な思いで以て。

己の”結末”は分かっている。

狂気の仮面は剥がされた。彼女には既に正気の意識が開かれている。

ならばこそ、目を背けられた感情とも向き合わなければならぬ。

即ち、それは恐怖。彼女もまた人なれば、必然の感情からは逃れられない。

大切な人々との、多くの別離を味わってきた彼女だから、その絶望の重さも分かっている。

落ち着いてなどいられない。差し迫った己の終わりを感じれば、本来なら震え上がらずにはいられなかった。

逃れられないはずの恐怖を、抑えている。

それは彼女が強いことを意味しない。彼女の心にそうした打ち勝つ強さはない。

なのに彼女には安息があった。言われた言葉をただ信じて、こうして祈りを捧げてみせるだけで、こんなにも儂い彼女が恐怖すら克服している。

それは逃避とも呼べるかもしれない。避けられない現実を前にして、都合の良い理屈によって自身を納得させ、恐怖の意味から目を逸らす狂信者の行いとも。

だが、たとえ行動の性質が似ていたとしても、彼女の姿に狂信などという言葉は似つかわしくない。あるのは純粹に、清廉なまま捧げら

れる祈りだけだ。

もはや誰にも彼女を否定することは出来ない。

どのような理屈を持ち出したところで、彼女の純性は揺るがない。たとえ神や悪魔だとして、信じるという行為そのものを否定など出来ないのだから。

ましてや見返りの一つさえ求めないのであれば、その心を穢す手段など何も無いに違いない。

——きつと、パパとママもそうだったのだろう。

目の当たりにした最期の時、彼らに恐怖はなかった。

その心境は、今の自分が感じているものと似たものだと思う。

それを素直に嬉しく思う。愛する人たちを近くに感じることが出来る。

いや、それをいうのなら、きつと”彼”だつて同じだった。愛する事に誠実で、自分という異質にも向き合ってくれたから。

改めて、その覚悟を思う。貴賤なんてない。この思いの尊さは、自分の周りにいた皆が持っていたものだった。

いなくなつた彼らの事が、理解できる。

喪われた彼らの事が、まだこんなにも愛おしい。

その事を純粹に、ただ嬉しいと素直に思えた。

「ああ——」

光が見えていた。

優しく、暖かい、慈しみに満ちた光が広がっている。

降り注ぐ光は告げている。貴女を待っていたと。

彼女は報われるべくして報われる。清廉なる魂に祝福のラツパが吹き鳴らされるのだ。

光の先に、誰かが見える。

手を差し伸べ、迎え入れようとしているような、”誰かたち”の姿。その姿を知っていた。喪われた愛しさを、別たれた苦しみを忘れられるはずがない。

きつとそれは、彼女が本当に求めていたはずのもの。

愛する人を食べたいと欲するのは衝動だ。彼女の心が求めた願

ではない。

彼女は決してそれを是とはしなかった。彼女が望んだものは、怪物の願いではなかったから。

「みんな、そこにいたのね……」

さあ、手を伸ばそう。

もう何も恐くない。何を嘆く必要もないのだと。

差し出された手を取る資格が彼女にはある。人としての愛を謳う事が、彼女には出来る。

長い、長い彼女の腕。抱きしめる者のいなくなったその手の中に、再び愛が戻る時がきた。

苦しい生涯には意味があった。

あの飢餓に耐え抜いた日々があったから、自分は今ここにいる。

この安息がその答えだというなら、それは十分な幸福だった。

光に向けて手を伸ばす。

晴れやかに、精一杯に、最期まで。

心からの安寧の中で、彼女は手を伸ばし続けて――

赤い障壁が下りている。

それは決着を示すデッドライン。勝者と敗者を分かたつ絶対の境界線だ。

ムーンセルからの裁決が下った以上、もはや覆すことは出来ない。ここに決戦は終わりを告げ、3回戦を勝ち抜いた勝利者が定められた。

「愚かな。自ら勝利を手放すとは」

吐き捨てるようなアーチャーの言葉は、散り果てた敗者たちに向けた侮蔑だった。

敗者の側となった者にとっての必定。生き残れるのは勝者だけ。

戦いの勝敗がついた時点で、その運命は燃え尽きる。数理の化身に命の尊厳は意味を為さない。

死に絶えたのが敗者なら、生き延びた者こそが勝者だろう。ムーンセルの判断は絶対であり、何よりも公平で明確だった。

そんな客観視した事実は、アーチャーにとつての結論とも等しい。何も掴めなかった敗北者を、まして自らそれを選択した者を尊重する意思など持ち合わせるはずもなかった。

「命にも勝り、己の信仰に殉じるか。見事だったぞ、名も記されないマスターよ。」

対し、立つ瀬がないのは俺たちの方だな。試練など、見当違いも甚だしい。おまえはすでに、これ以上ないほどに錬磨された輝きに満ちていたというのに」

だが客観の事実で下される裁定に対し、甘粕正彦は真逆の裁定をくだす者だ。

事実よりも意志の如何にこそ着目し、それを讃える声を上げている。そこには満足気な笑みだけでなく、何処か憂いも見せていた。

苦難の試練に晒されてこそ人の魂は輝きを放つ。

最初の時より人から外れた生涯とは、それ自体が試練にも等しいだろう。

ただ人として生きる事、それだけの事が彼女にとってどれほど難しくあったことか。

彼女の強さとは、他者と争う強さではない。彼女の持つ尊さは、聖杯戦争という場所では輝かないものだった。

死に際に見せた、信心に殉じる主従の語らい。

そこに甘粕らの姿はない。彼女たちの信仰は、既に彼女たちだけで完成していた。

祈りへ殉じる事に敵対者など不要。彼女が得た安息は真実であり、それを穢すことは誰にも出来ない。

何一つの未練も残さず本懐を遂げた。救いを求めて挑むのがこの戦いなれば、それは勝利だとも呼べるだろう。

「うつけめ。雑食ぶりも大概にせい」



そんな結論を切つて捨てるのがアーチャーという英霊だ。

合理性を以て成果を成す革新者の王道。理念や思想よりも、彼女が見ているのは事実であり、現実だ。

祈りの尊さよりも、その意志で以て何を成し遂げられるかを考える。信念の純度・強度が強ければ強いほど、実現の可能性や世界への影響力は強くなるのは間違いないのだ。

だが、初めから己の中で閉じている意志ならば、どれだけ強くとも現実に及ぼせる力はない。

そのようなものに用はない。己にとって損も得も齎さないものならば、それは関心を向けるにも値しない。

まさしく真逆の方向を向く両者の意見は、落とし所も見い出せないまま広がっていく。

「是非にも及ばず。あんなものはつまらぬ敗者の姿に過ぎぬ。

狂うのは良い。屍の山を築くことも許されよう。じゃが、なればこそ、我らはそんな自らの独善によつて世に何某かの実利を残さねばならん。それが善行であれ悪行であれ、確かな成果があればこそ名は残され、それは世を廻す役割を担うのじゃ。

犠牲の上に望みを築くは怪物ならぬ人の道理。それを奴らめは自ら放棄した。挙句に虚構の安息で己を閉ざした姿を、そなたは勇気と讃えるか、正彦よ」

「そうだな。生の苦楽から逃げ、安易に死への逃避を選ぶなど、最も唾棄すべき姿の一つだ。俺としても、そんな輩は軽蔑にしか値せんよ。

しかしな、それが命と引き換えにしても貫かねばならんという決意であれば、その矜持の姿は美しい。あの最期を否定しようという気にはならんさ」

「人の稀なる姿に美を見出し、それを価値と置くそなたならばこそその言い分じやな。

正彦よ。改めて申すが、それはそなたの悪癖じや。そなたは人の行為を美しく捉えすぎる。実利にならぬ部分まで重んじようとしすぎている。

そなたには利への執着が足りん。なり振り構わぬ貪欲さ、己が欲す

るために他者を蹴落とす人の浅ましきこそ、そなたに欠けた唯一の強さじゃ」

その言葉は、人類史に確かな偉業を成し遂げた英霊として。

英雄とは、徳を以て人を導く聖者ではない。信念で武装して、高潔さで磨き上げ、覚悟で以て自らという色を世界に塗り上げる存在だ。

性質の善悪こそあれど、所業の是非を問うのは人類史にどういった影響を与えたか。歴史に刻まれるのは行いの結果であり、そこにどのような心境があつたかなど記されない。

その人物が強く、素晴らしい人格者であつたから、英雄になるのではない。

まず前提として、成し遂げた偉業があるからこそ英雄と呼ばれるのだ。

一つの生涯を生き抜いた英霊として、アーチャーは指摘する。超越者の如き在り方は、未だ人の身の男に早すぎると。

甘粕正彦は傑物なれど、未だ人間。その身はまだ偉業を成し遂げてはいないのだから。

「言わんとする事は分かるぞ。俺がこの戦いにこの上なく真剣なのは言うまでもないが、そうした意味での執念の発露、死に物狂いというべき獰猛さが俺には欠けていると。

知つてはいるのだ。理解はあるつもりなのだが、なかなかどうして上手くいかん。ままならんものだよ、己の心というものは。

すまん、アーチャー。おまえの懸念は最もだが、今のところ対処が思いつかん。それこそ、俺にとつての相応の試練があれば、あるいはと思うのだがな」

そんなアーチャーの指摘は的を射たものだったが、しかしそれだけで改善に繋がるかと言えばそうではない。

甘粕正彦は努力の男だ。非凡な才能を持ちながら胡座をかかず、弛まぬ研鑽を重ねる事を是としている。そうした人の姿こそ愛しているから、己自身もそう在ろうとする熱意を持っていた。

含蓄のある言葉だけでは足りない。既に十分すぎる努力を積んだ傑物だからこそ、劇的な変革は難しい。

「それに、些か論点がずれているぞ。今ここに限っては、語るべきは俺ではあるまい？」

まあ、あまり実りのある語らいとは思えんがな。俺たちが肯定しようが否定しようが、もはや届かない場所に相手は逝ってしまった」

そうだ。彼らがどれだけ議論を重ねようとも意味はない。

どんな言葉でもそれを向けるべき相手は既にもいない。称賛も否定も届かないものなのだ。

ならば結論も出ているだろう。安息の中に勝ち逃げされた彼女たちには、もう追いつくことは出来ないのだと。

「分かりきったことだということなのに、随分とこだわってくるではないか。彼女の有り様に、何か思うところでもあったのかな？」

そう、そんなことは分かりきっていたはずなのだ。

アーチャーが承知していないはずはない。実利も何も無いというのなら、これこそがそうだろう。

消えた彼女、ランルーくんと名乗っていた女と、アーチャーの性質はまるで違う。

人間と英霊の違いを差し引いても、人格面からして比較するのが間違っている。ここまでジャンルが違ってしまえば、優劣などつけても仕方ない。

彼女は、たった一つの純粹を守り抜いた人だ。

墮ちる事を拒み続けた心の純正、愛という信仰の潔癖を穢さなかった。

それは何処までも彼女個人の中で完結する。彼女が純粹な愛に生きた人だという事は、単にそれだけの事実でしかない。

英雄の生き方とは、己という強烈な色を世界に塗りあげること。

革新という破格の色で天下を染めたアーチャーの生き様はまさしくそれだ。

己の色の一切を外に漏らそうとしなかった女とは、生き方の方向性が違いすぎる。二つの生き方の是非を問うたところで、結論など出るわけもない。

だから、もしもそこに何らかの思いが絡むのだとすれば、それは内

面の心に関わる事ではないか。

英雄・織田信長は乱世の渦中を成り上がった王だ。

決して生まれから王であったわけではない。本来ならば天下を担う運命などあり得なかつた存在だろう。

群雄割拠の戦国紀、誰もがそのままではいられなかつた動乱の時代で、彼女はどれだけの仮面を被つたのか。

人は、ついた嘘が本当になる時がある。

たとえ最初は偽りであろうとも、振る舞い続ける内にいつしかそれが真実へと成り果てる事が。

心は不変ではない。どれだけ深き思いであっても、必要次第で人は心を如何様にも変えられる。

たとえば、長年の親愛で結ばれた親代わりの人を死に追いやった時であつたり。

たとえば、確かな姉弟の仲があつた実弟を処断した時であつたり。

本心にあつた情愛に仮面を被せ、非情なる王としての振る舞い。

やがてそれは真実の姿となり、鉄の道理を備えた乱世の英雄が出来る。

それは己の中にあつた本来の色を変色させる行為。変色に変色を重ねた色は、もはや本人でさえ元の色が何なのか定かでないのかもしれない。

己という色を変えなかつた者と、変え続けた者。

優劣の是非はつけられない。それでも違う生き方だからこそ、あり得たかもしれない姿への憧憬も浮かぶだろう。

揺らぐ心があるのだとすればそこかもしれない。実利の価値では表せないその部分でこそ、英霊・織田信長という器の真実があるのかも知れず、

「戯れるな。それもまたそなたの悪癖の一つじゃ」

そして同時に、それしきの揺さぶりで剥がれるほど、その器は軽いものではなかつた。

「敗者は敗者、もはや過ぎたもの。ああ確かに、その言い分には道理がある。

認めようぞ。わしの眼も些か曇っておつたと。物珍しきは確かであつたでな、惑わされていたようじゃ。

戯れはここまで。我らが眼を向けるべきは次なる戦、それ以外の事柄なぞ全て雑事に過ぎぬ」

果たしてそれは、誤魔化しのための言葉であつたのか。

真意は見えない。それを悟らせるほど、彼女の不遜な面皮は薄くない。

口調の尊大さは常と変わらず、僅かにあつた揺らぎの気配はもう何処にもなかつた。

「のう、正彦。独りでの祈りに殉じておるのはそなたも同じ。その願いは誰かと共有し、賛同を得られるものではない。

勝てねば、そなたはただの妄言家じゃ。どんな夢想とて、まずは形と至らねば意味などない。妄言を現実へと変えるのは一つ、勝利だけがそれを成せる。

勇気の意志が尊ければそれで良いと、少なくとも己自身にはその論を許しはすまい？」

戦いは続く。

過程に納得いこうがいくまいが、生き延びた者は次なる戦いへ。

それはこの戦争に参加した者の宿命。何を思い悩もうとも、勝者は進み敗者は死する掟の通りに。

勝利の果てにあるのは、万能の願望器。

どれだけ現実離れた妄想であろうとも、月の聖杯は正しくその願いを叶える。

万能を以てしか果たせない望みのため、参戦者たちは勝利を手にするべく足掻き、その意志が惑った者から消えて逝く。

ならばこれもまた、あらかじめ予期された常道セオリーに沿った展開として。

月の意思は順当に、相応しい担い手の選別を進めていた。

## 幕間：アトラスの少女（上）

——最初に感じていたものは、自らが浸る養液の柔らかさだった。意識が覚醒する。五感が開かれる。

人体という機能が活動を開始して、求められた性能へと自らを更新する。

目覚めたばかりの知性には、しかし既に知識が与えられていた。必要な情報は揃っていて、それを元に私は自身に対する認識と理解を獲得していく。

人体とは、自立する運動機能を有した類い稀な計算装置だ。

正しく、強く、速く、その知性を働かせてこそ生態の意義がある。情報を収集し、解析し、発生する数々の問題に対処する。野生の頃の多くの機能を切り捨てて、そのために進化した知的生命体こそ人間だ。

この定義こそ、ヒトガタの持つ最大の特徴。それが私に求められた用途であると理解して、その通りの性能を発揮するべく認識を深める。

開き始めた視界には、自分ではない誰かの姿が映っていた。

起動を始めたばかりの機能は不十分で、入ってくる情報は不確定なものが多い。

そんな不足だらけの条件でも、該当する人物は一人しかいない。この人の存在こそが私の目的で、私の意味そのものだから。

この人こそが私を鑄造した造物主。

私は『道具』として、この人のために製造された。疑問には思わない。それは単なる事実でしかない事柄だ。

私の製作者。私の師。

私は彼女に創られて、彼女に教わり、彼女によって使われる。

私の身命は彼女の意思に決められる。何の迷いもなく、私はそれを受け入れる。

それが意義。それが用途。師のための道具として、そのように私は

生まれたのだから。

固有名称、ラニⅡⅧ。

ホムンクルス

人造人間。

8番目。最後の並行変革機。パラダイマイザー

来たる未来に対応させた

ニューエイジ  
新人類。

自分の全てを承知して、私はこうして”誕生”した。ロールアウト

\*

観測する。分析する。解明する。

新たに得られた情報を照らし合わせ、既存の知識との不一致を探し当てる。

この五感を通じて、見下ろす先に映る景色の比較作業を、私は澱みなく行っていく。

様々な学業を行うために、多数の設備を取り揃えた学舎。

運動行事に従事するために、広大なスペースを確保する校庭。

また専用の屋内活動のための、体育館や武道場など。

それは知識としてある『学校』の景色。主に10代期の少年少女を対象にした教育機関。

記憶している情報との不一致は何もない。むしろ知識でしかなかったこちらの不足分を補って、実感による更なる理解を与えてくれる。

行き交う人々、そこで行われる営みまで、違和感となるものはない。完璧と呼ぶより他にない。ここにある総ては『本物』と遜色ない完成度を持っている。

ここまで真に迫ったのなら、現実と虚構の区別だって意味を無くすだろう。この場所は人類が生きている現実世界にさえ匹敵する領域だ。

霊子虚構世界『SE・RA・PH』。

ムーンスセルの内側に創られた電腦の異界。月を回すための都市型

のエンジン。

ここに映る世界の全てが、脳内のみで処理された虚構の景色。だといふのに五感が受け取る情報は、紛れもなく『実在するもの』として体感させる。

凄まじいといしか言い様がない。未だ人類では如何なる手段を用いても到達できない技術水準。こちらの技術では、ムーンセルに承認された正規の手順を踏まなければ、僅かな区画に干渉することさえ容易ではない。

これは確立された一つの”世界”だ。ヴァーチャルリアリティの領分を遥かに超越して、情報によって編まれた『第二の現実』がここにはある。

現状、この世界で活動できるのは魔術回路を持つ魔術師だけ。

視覚、触覚の電子変換を上回る自己精神・肉体の霊子化。即ち、電脳世界内における魂の物質化を可能とするのは、特殊な才能を持つ限られた人種のみ。

人類全体の比率からすれば極小数。しかしアプローチの手段はほぼ確立し、やがては通常の人間たちのアクセス方法を完成させる事も不可能ではないだろう。

私は見極めなければならない。

月が、人類にとって存続の鍵となる『開拓地』<sup>フロンティア</sup> 足り得るのか。

肉体を捨て、電脳存在にその身を変革させるとしても、滅びを回避する可能性と成り得るかどうか。

それが師より与えられた”主命”<sup>オーダー</sup>だから。私は師の意思を忠実に実践し、求められた成果を獲得しなければならぬ。

「レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ。彼の星は世界を照らす明星。遍く人々を照らし出して、未来にあるのは約束された安寧と、緩やかな衰退という自滅だけ」

私は師の道具。師の言葉こそ絶対。

聖杯を手に入れる使命もまた、師が与えたもの。

私の存在はそのためであり、この身体に与えられた機能から必要な性能を發揮する。



「遠坂凜。彼女の星は燦然と輝く孤高の光。それは強く、他を魅せるものではあれど、決して世の行く末までも照らし出せるものではない」

師は言った。

他者ひとを知れと。

人形である私に、命を入れる者が居るのかを見よ、と。

師が言うのであれば、私は探さなければならぬ。

多くの人間の在り方を。それが人形わたしの生命と成り得るのか、観測を以て知らなければならぬ。

星は常に事象を照らしている。

全ては因果の流れのまま、星々の引き出す因果律の語りに耳を傾ければ、それはあらゆる事象を見通すことに等しい。

過去も、現在も、未来も、星が繋げる因果は全てに通じ合っている。見るべき道筋さえ知れたなら、星が導くアストロジー占星術は知るべき事を教えてくれる。

「多くの人の星を詠みました。ひとときわ輝く星も、そうでない路傍の光も。

けれど、未だに探している者は見つかりません。師から伝えられた人の有り様、詠んできた者たちも千差万別ではありましたが、どれも既知のものだった」

師が私に与えてくれた多くの知識。

そこには当然、人というものの生態、その在り方についても。

学んだ知識は今も即座に記憶の中から引き出せる。師からの教えに欠損は一切ない。

だから、既知では駄目なのだ。

師は言った。私に命を入れる者を探せと。

探すとは、新しい概念の探求。未知よりの発見を希求すること。もしも私を生命たらしめるのなら、それは既知ではあり得ない。道具としての定義を施されたこの身を変革させるものがあるとするれば、未知から生まれる衝撃だろうから。

「私は探さなければなりません。もつと多くの星を詠み、多くの人を

知らなければ。師の告げた未知なる人の何たるかを。

だから私はあなたを知りたいのです。あなたの星は最も強く輝いて、かつ最も危うく一定しない。星が導くあなたの行く先は、未知へと続いている」

「ほう。それはまた、こうまで評価を貰えるとは光栄だな」

相対するこの人物こそ、現状における最大の不確定要素<sup>イレギュラー</sup>。

強者であるのは間違いない。けれどその有り様は、同じく強者の頂きに立つ少年王とは明らかに異なる。

それは因果の繋がりさえも狂わせる、可能性という強さ。たとえ星を詠もうとも、彼という人間が発する力はその結果さえ覆す。

「気になるというなら俺の方もだ。おまえたちの秘密主義は、ほとんど感心させられる徹底ぶりだったのでな。

地上では機会に恵まれず残念に思っていたが、こうしてそちらから接触を持つてくれるとは嬉しい限りだよ。

——アトラス院、現代に唯一残った古き魔術師の徒党たちよ」

彼の名は、甘粕正彦。

求める誰かを探すため、師からの”命令<sup>オーダー</sup>”を果たすために。

この聖杯戦争において、殺し合うべき相手である彼と、私は接触した。

”アトラス院”

エジプトに在るもう一つのアトラス山脈。

蓄積と計測の院。魔術の祖、世界の理を解明する錬金術師の会。

かつて機能していた魔術協会、その三大部門と呼び称された一角だ。

——その名を、『巨人<sup>アトラス</sup>の穴倉』とも。

その実態は、外部の者にはほとんど知られていない。

それはアトラスの錬金術師の性質に因る。外界より断絶し、地下深くへと潜り、孤独の内での研究に没頭する。俗世の一切を切り捨てて生涯を費やす学究の徒だ。

そこから去る者はいない。来る者は拒まずとも、去ろうとする者は決して許さない。ここで創り出したものを持ち出すことだけが、アトラスにおける唯一の禁忌だから。

何をしようとも構わない。何を創ろうとも構わない。ただし、それが公開されることも決してない。研究の後は単なる結果として、計測の価値を喪失して廃棄される。

遙か古の開祖の時代より変わることのない歩み。知識を集め、手段を探り、何度も何度もやり直しながら、成果は表に出ることはなく観測と演算だけが繰り返される。

その研究は、中世以来の物質の流転を主とする現代錬金術とは明らかに異とするもの。

彼らは魔術師というよりも、自身の肉体をマン・マシーンとして扱う異能者であり、人体をより適切に知性を働かせるための容れ物と定義した。

思考分割、高速思考などの人体を演算装置とする術式に特化し、魔術回路数自体は少なく、またそれを問題にもしていない。

『自らが最強である必要はない。最強であるものを作ればいいのだから』。それがアトラスの錬金術師の主張であり、凶らずもその正しさは現代で証明された。

『大崩壊』ホールシフト以降の魔力の枯渇、それに伴う神秘の消滅。

魔術師たちは手段を失い、魔術協会は崩壊したが、マナに頼らない魔術大系を持つ錬金術師のみが旧き魔術の探求を続けられた。

アトラス院は変わらない。古き魔術師たちの残党を受け入れることもせず、新しき管理世界の構築に手を貸すこともない。

変革する世界の中でも、彼らだけは閉鎖した社会を維持しながら、自らの探求道を歩み続けている。誰にも知らせず、理解もされず、ひたすらに孤高のまま。

誰かが言った。『光さえ抜け出せないという生きた奈落』と。

また誰かが言った。『アトラスの封を解くな。世界を七度滅ぼすぞ』と。

それは荒唐無稽な噂話であり、真実を指し示す一端でもある。彼らは穴蔵から出てこない。奥底には地上を焼き払える力を持ちながら、それでも自らが歩む道筋を曲げようとはしなかった。

アトラスの錬金術師が挑むべき唯一つの命題、それは『人類の滅びを回避すること』。

初代院長が観測したという滅びの未来。不可避とされるその未来を回避し、新たな人類存続の未来に繋げるこそアトラス院の至上目的である。

そのために彼らは思考と計測によって未来を観測する。幾千、幾万、幾億と繰り返される試みで、事象にすら追い付く予測を築くのだ。生涯を穴蔵に潜み、どれだけ肉体を造り替えようとも、ただ自己への埋没でもって叡智が真理に到達するために。

予測こそが事象を見据え、観測によって事象は築かれる。

あらゆる知識を集積し、永劫のような過程の中でひたすらに臨み続ける。

幾度挫折に折れようと、幾度狂気に吞まれようと、それでも尚、我々はこの”誇り”<sup>オウダイ</sup>を遵守しなければならない。

それこそが、アトラスの錬金術師が体現すべき有り様だった。

「——見事だな」

こちらの話を聞き終えて、甘粕氏はゆつくりと噛み締めるように頷いた。

「謎多きアトラス院。旧代の魔術師の中でも、その存在は未知とされてきたが、なんともまた俺好みに骨のありそうな者たちであることか。」

おまえの故郷に敬意を払おう、ラニⅡⅧ。古来より変わる事を良しとしない信条の気高き、貫かれてきた命題へのたゆまぬ意志を、俺は心からの尊敬でもって寿ごう」  
とても直接的な賛辞だった。

その様子には他意がない。五感が伝える情報は、彼が嘘などついていないと受け止める。

ある意味で分かり易い。奔放に表へ出される覇気の念は、己を偽る必要がない強者であることの証明だとも言える。

自然体のままで、息苦しいほどの気迫が発せられる。決して敵対的ではないというのに、気を緩め難い。彼の光は少年王とは性質を異とする灼熱の陽光だった。

「あなたの言葉は論理的ではありません、甘粕氏。好みとは言いますが、いったい何を指した言葉なのですか？」

「俺は人の勇気を愛する。難関へと挑む気概を、怖れを乗り越え前に進まんとする意志を、何よりも美しい人の価値だと思っている。

俺はそもそも魔術師という人種が嫌いではない。俗世から外れ、己の探求を貫こうとする姿には確固たる意志を感じる。それがなんであれ、揺るぎない信念を持って挑む姿とは魅せるものだ」

甘粕氏の言葉は、成果を指してのものではない。

勇氣。気概。意志。どれも心の有り様を示す言葉。

行動の如何は何でもいと言う。ただ行動しようとする動機、そこに至るまでの感情の発露にこそ重きを置いている。

確かに、人にとって動機となる感情は重要だ。

行動には理由がある。そこに至る因果があるからこそ事象は発生する。

過去があるから未来は繋がり、現在を観測できる。それは人理が証明する絶対の原則だ。

そういう意味では、甘粕氏の言葉は正しい。好意を持っているという彼の言葉も、真実であると判断できる公算が高い。

だが、過去の情報は、同時に異なる側面を証明している。

甘粕正彦という人物は、言葉通りの好感だけで判断して良い相手で

はないと。

「あなたは過去に何名もの魔術師たちを殺害しています。偶然による事象ではなく、意図した行動の結果として。それがあなたの殺意を証明するのなら、その発言は矛盾しているのでは？」

記録された事実は語っている。

魔術師狩り。そう呼ぶに相応しい所業に甘粕氏は手を染めているのだ。

物部。ガリアスタ。アグリツパ。伊勢三。グルジエフ。記録に上がる名は、マナの枯渇した現在においても、魔術師としての体裁、力量を保ち続けてきた家柄ばかり。

情報によれば懇意としていた名も幾つか含まれている。それらさえ最期には切り捨てる所業は、しかし利権絡みではあり得ない。術者を手にかけて後には、残された秘蹟までも同じように焼き払ってしまっている。

無作為な破壊、それはまるで一時の感情だけで手を下したかのよう。理由の見えないそれらの行動は、いったい何を意図したものだっただのか。

「よく知っている。アトラス院は世界中の情報を集積しているとは聞いていたが、ここまでとは。

だが前言を翻すつもりはない。俺は魔術師とも呼べぬ屑を殺したまで。一時は友誼を結んだ者も中にはいたが、なんとも興ざめする中身を見せられたものでな。

神秘は尽き、もはや魔術は世界から失せた。その期に及んで、魔術師という在り方に見栄として縛られている。俗人まがいの魔術師など滑稽でしかあるまい。

ただ醜態を晒し続けるだけだというのなら、引導を渡してやるのは情けだと思わんかね？」

魔術師とは、刻印によってその在り方を強制される。

その家に生まれた者には絶望の挫折など許されない。継承された刻印は魔術師を生かし、必ずや次代へと繋げるように動かすのだ。

それこそが魔術師の宿業であり呪い。その呪いは神秘が絶えた今

でも消えてはいない。彼らは魔術師であるが故に、魔術が無くとも魔術師として生きなくてはならない。

そこにあるのは信念か、それとも諦観か。あるいは力を持つ者、真理を識る者としての矜持かもしれない。その力が、真理が、既に消え失せてしまったものだとしても。

それは魔術師の在り方から外れている。神秘を学び、根源へ至るといふ、ただそれだけを目的とする探求者。魔術で起こされる奇跡など、瑣末な副産物に過ぎないのに。

甘粕氏にとって勇氣という言葉は、とても前向きなものを指すのだろう。

それが何であれ、自らでその意味を認め、守り通そうとするのなら、その意志は美しいと。

だから、それを違えたり、誤魔化そうとする者に、彼は容赦しないのだろう。間に親交があろうとも、彼の価値観が醜いと感じたならばを下すことを躊躇わない。

「無論、それはおまえたちにも言える。先には賛辞を贈ったが、それは己で語った在り方を真に貫いていた場合の話だ。

人類の滅びを回避することが命題だというのなら、何故今も孤立を続ける？ 変革しようとする世界に対し、尚も沈黙したままというのはどういうわけだ？

思考と論理を以て未来を計測するというおまえたちのやり方は分かったが、手段を模索するばかりでは無意味だろう。現実にも動こうとせぬ者に掴める未来などあるはずがあるまい。

なあ、どうなのだ？ アトラス院とは、理念を謳うばかりの木偶の集まりか？」

「その選択とはアトラスの意義を奪うものです。人類の終末に備え、滅びに対する答えを導き出すことがアトラスの在るべき道。我々が穴蔵より出れば、発生する意味の連鎖が観測の視点を歪めることになります」

ちょうど、このムーンセルがそうであるように。

数理の化身。その存在用途は、アトラスの在るべき理想とも言え

る。

我々は当事者となつてはならない。役割からの逸脱は、解答への数式を歪ませる混乱しか生み出さないのだから。

「現状の社会にアトラスの求める解答はありません。西欧財閥の支配は人類の滅亡を加速させる。少年王の支配の確立は、緩やかな滅びへの道筋へと乗せるものです。」

そして他の勢力にも、それを覆せるだけの要素を持ちません。遠坂凛のように、一個人、一勢力のみを範囲とした認識では、変革とは成り得ない。

向かう未来の確立こそが何よりの急務です。人類が滅亡を回避するため、取るべき選択肢とは何なのか。現状勢力への対立や協力など大した成果とはならない。この混乱を解決したとしても、未来は何も変わらないのですから」

「だが、混乱へと立ち向かわねば成長もあるまい。成長の先でこそ見い出せる未来もあろう。」

それは進化という可能性だ。不確定なのだろうが、人は進めるものだど俺は信じている。その可能性をアトラス院では考えないつもりか?」

「いいえ。人の進化とは存在し得る可能性です。その方が建設的であり、また手段を見出すのに容易であるのも認めています。」

そして同時に、その考察は既に成され、果ての解答とその破棄も成されている。それを踏まえても滅びから逃げ続けることが最善であるとアトラスは結論しました」

「ほう。俺からは出そうにない考え方だな。何故そのような結論に至ったのだ?」

「その答えは明白です。何故なら、我々が進化すれば、この宇宙の寿命が縮むのだから。」

人類は成長してはならない。滅びてはならない。このまま永遠に、生命の未熟児のまま変わらず、滅びから逃げ続けなければならないと、それがアトラスの結論なのです」

それは歴代のエルトナムの、そして現在のエルトナムによる結論



だ。

たとえ種としての変態・退行は容認しても、人類は進化の選択だけは選んではならない。

結果として、その選択はより大きく絶対的な破滅をもたらす要因となる。だからこそアトラスは、とても前向きで受け入れ易い、進化という解答を断念した。

結論を告げてから、私は改めて甘粕氏へと向き直る。

考えるまでもなく、この結論は甘粕氏の意と反するものだ。

場合によればこのまま決裂もあり得る。彼の気性を考えれば、ここで刃を抜かれる事もあるかもしれない。

応戦の準備は整っている。すぐにでも反応できるよう身構えながら、次の甘粕氏の行動を待つ。

「よく分かった。その意志を認めよう。侮辱については謝罪する」

しかし、そんな私の警戒と裏腹に、返ってきた甘粕氏の言葉に敵意はない。

むしろ好感触を与えたようにも見られる。こちらの結論を聞き届けた甘粕氏は、先までよりも幾分か和らいでいるように感じられた。

「否定なきらないのですか？ あなたが目指す願いにとって、この結論は受け入れられないものなのでは？」

「思想は確かに気に食わん。だがその解答に至るまでの信条、確固たる覚悟でもって己の道を定めた決意には、俺の心を震わせる”真”を感じ取った。

何も選ばなかったわけではない。おまえたちは『何もしない』ことを決断したのだろう。その勇気を否定することがどうして出来よう」  
勇気。

アトラスの結論を、甘粕氏はそう形容した。

前向きで好いものだと。自身と真逆の思想に対してまで、彼は揺らぐことなくそう評した。

「人類にとっての正解答が一つしかないのなら、それは動物であった頃の話だろう。人は各々が違う。ならば思想と同様だ。我も人、彼も人、故に対等、基本である。」

ここには己と異なる考えがある。ならばそれを認め、その信念に敬意を持つだけのこと。それが輝き足り得る強さを備えているならば、俺はその考えを笑わんよ」

甘粕氏は、アトラスの結論に敬意を払っている。

人類の未来を憂い、その滅亡を回避せんとする理念と行動を、善いことだと。

価値観の数だけ差異がある。その違い、己の主張の正当化のためだけに否定せず、正しく認識した上で結論を出したのだ。

「互いの理念が違い、決して相容れぬ道だというのなら、敵対の暁に雌雄を決すればそれでいい。元よりここはそういう舞台なのだからな」  
その様は堂々としていて、一片の迷いさえ見られない。

それはまるで、事の真偽を決定する裁定者であるかのように。

「公正、なんですね」

理性的に見えながら感情的。多くを識り、稀代の能力を持ちながら、一方でそれらを棒に振るような短絡さを見せることもしばしば。

論理では表し難い甘粕正彦という人物。混沌の属性をそのまま表したかのような気質、その本質を示す一端はそこにある。

荒れ狂う天災のようでありながら、同時に感じる徹底した整然さ。裁定の人物評においては、彼は決して感傷で見誤ることなく冷然と裁決を下す。

それは超越者が持つべき精神構造だ。甘粕正彦という人間は、少なくともその精神において、既に人間の領域を逸脱している。

「生命を与える者を探していると聞いたな」

それは甘粕氏に対し、私が最初に申し出たこと。

「人形の如き有り様に、人としての自立した心をもたらず。意味合いはそんなところだろうか。」

それは師が言ったからそうするのだな？ おまえ自身から発せられた願いではなく、あくまで師の意思を遵守せんがためにそうするのだと」

「はい。それが師の導きならば、私は従うまでです」

疑問には思わない。道具として当然のことだから。

師が求めることを果たすために私は生まれた。師の言葉に従うことが存在意義。

それがどのようなものであれ、師が下した『命令』<sup>オーダー</sup>ならば、私はそれを遵守する。

「ならば訊こう。おまえは、おまえ自身は、師の下した命令に対して如何なる考えを持っている？」

「その思考に意味はありません。それが師の言葉なら、私は従うまで」「違う。そうではないな。おまえは考えなくてはならんのだ。

人を知れと言われ、おまえはそれを果たしたいと言う。ならばそのためにも、おまえは道具としての領分を超えた思考を抱かねばならない。

知るとは、考えることだ。論理を組み上げ正解を導き出すのではない。芸術の美しさをありのままに感受するように、おまえ自身の心で感じた意味を見つめるのだよ」

……そう、なのだろうか。

私は師の道具。それが私にとっての存在意義。

だが師が、私に生命を容れる命じるなら、この身体のパフォーマンスを果たさなければならぬのなら。

人としての思考を、そこに伴われるべき感情を、自らで構築していかねばならないのか。

「師は……師は……」

解答が出てこない。

何を以て正解とすべきなのか、論理が繋がらない。

感情とは不具合の塊だ。繋がると見えた事象でさえ、感情によって異様な飛躍をする場合がある。

相互補助して円滑に運営されるシステムではない。相互で接触することで突然変異的な反応を示すのが、心という事象だから。

この身体が、如何に人より効率化し優れた演算性能を有しているとしても。

それは心の理解には役立たない。数式の導けない反応には、精度は何の意味もなさない。

思考は不整合と棄却を繰り返す。まるで欠陥の露呈した機械のようだ。頭の中で鳴り続けるエラーの音が、人間以上を求められた私の不備を突きつけている。

「答えは出んか。なら少々質問を変えよう。」

聖杯戦争に参戦し、この戦いを勝ち抜くように命じた。ならば何故、同時にその強度を落とすような命令をおまえに出したのか。

計測からの算出こそがおまえの力ならば、恐らく心など持たん方が性能として上だろう。この矛盾、戦術でいって悪手ではない選択の理由はなんだと思う？」

……確かに、その事実に対して反論は出来ない。

ただ勝利だけを希求するのなら、心の理解は不要だとしか判断できないから。

何度シミュレートしてみても、結論は同じ。余分なりソースを割かれた性能は低下し、勝率も下がるだけ。等価と成り得る意義は見い出せない。

しかし師は、その命令を私に下した。

今の私には至れない、師には至れた解答があるということ。

至れないのは演算のための情報が不足しているから。その不足分こそ心の理解にあるのではと推測する。

まるで因果性のジレンマだ。心の意義を知るためには、心を理解しなくてはならないなんて。

「あなたには、その答えが分かるのですか？」

「さてな。なにせ俺は、おまえの師と口を利いたことはおろか、顔を合わせたことすらない。」

人物像は想像の域を出んし、何を言っても推測だろう。最も身近に居たであろうおまえに対し、确实だなどとはとても言えんな」

当然の解答だ。

甘粕氏と師の間に接点は一切ない。分析のための前提情報が欠落している。

無意味でしかない質問。これもまた私から発生する”失態”<sup>エラー</sup>だった。

「……だが、そう難しく考える事でもないと思うがね。恐らくは単純な答えなのではないか」

そして、何気なく続けられたその言葉が、私の中の不具合をより大きくした。

「どういう意味でしょう？ この矛盾を解消させる結論が、単純なものであるとは」

「そのままの意味だ。変に理屈や効率で考えなくて良い。実に人の心らしい答えだとも」

が、言葉にするのは控えておこう。分からんのなら尚の事な。試行錯誤の後にこそ得難い理解はある。答えだけを与えられても掴めるものは何もないぞ」

確かにと、私は頷いた。

結果に繋がる過程を持たなければ、どんな観測も根拠足りえない。

試行することで理解が得られるのには同意する。甘粕氏の言葉に私は納得を示した。

……消えない不具合の解消のため、すぐにでも答えが欲しいと言いかけたのを抑えながら。

「頼ってきた手を無下にはすまい。見返り云々の話はひとまず置いておくとして、敵対せん限りは伝手を通しておこう。ある種の同盟関係のようなものか。」

果たして師の期待に沿える形となるかは分からんが、おまえに生命を吹き込むため、俺なりに努力してみるところか」

甘粕氏は、こちらからの申し出を了承した。

相手にとって何の利益も出ない申し出。見返りの協力は惜しまないつもりだったが、特に詳細を提示することなく決まってしまう。

何が彼にとつての理由となったのか。検証してみたが、やはり答えは出なかった。

「ところでだ。話を聞き及んだ上で、一つ訊いておきたいことがある」「なにか？」

「なに、言ってしまうえば当然の疑問だがね。心を与える者を探せと、おまえの師は言ったそうだが、何故その役割を己自身で果たさなかつた

のか。

造物主ならば、おまえにとつての親も同然だろう。心の萌芽を求めたならば、それは己の手で導くのが筋だろうに。

何故、放棄した？ つまらん泣き言ならば聞きたくはないが」

師は、私にたくさんの事を教えてくれた。

この身に蓄えられた知識は、全て師より授けられたもの。

物も、人も、自身の行動の意義に至るまで、私の世界は師の教えが基準となっている。

「現在のアトラスに生命は存在しません」

師は、役割を放棄したのではない。

己でそれが果たせなくなつたから、その後に関わり役割を私自身に課したのだ。

「しかし、たとえば錬金術師の命が絶えようと、創造物が稼働する限りその研鑽は無益ではありません。自身が最強である必要はなく、最強であるものを創造せよ。それがアトラスの錬金術師が掲げる理念なのですから」

道具の出す成果とは、即ち所有者の成果に等しい。

錬金術師の本質は創造。創造物が結果へと届くのなら、その意義は果たされる。

たとえばそのために命尽きようとも。私が存在する限り、師の意思は続いている。

「私が、最後のアトラスです」

\*

ポールシフト  
大崩壊以降、明確に顕在化してきた社会の停滞。

資源は底を見せ始めた。経済は低迷の一途を辿っている。出生率は目に見えて低下していた。

取り掛からねばならない数々の難題。それに対し人類が出した結

論は、西欧財閥を中心とした管理社会の樹立だった。

適切に配分される資源。

寿命に至るまでスケジュールされた一生。

物も、人も、管理者が目指すのは最善の効率化社会だ。

競争による消費は不要と判断され、自由の謳歌は不適切と烙印される。

それでも住まう人々は反対の声を発さない。管理を非難する声は、常に社会の外側から。

飼い慣らされた人々は、ただ健やかに生きる事だけを求められた人間は、そんな状況を受け入れてしまった。

ここには衣食住の全てが揃っている。余分な欲望さえ無ければ、生きていく上では安泰だ。

ならば生存への本能は必要ない。文明の発展はここまでで十分だ。既に人類は、納得できるだけの幸福を手に入れているのだから。

人類は感情によって繁栄を手に入れた動物だ。

この地球上の生態の頂点に立てたのは、感情こそが最も強力な武器だからに他ならない。

鋭利な爪よりも、獠猛な牙よりも、地を駆け抜ける俊敏さなどよりも、それは恐るべき威力を発揮する。

恐れるからこそ、欲するからこそ、人は今以上の力を手に入れ続けてきた。生存の効率だけを求めていたのなら、発達はそこで止まってしまう。

感情という燃料を持つ人類は、だからこそ繁栄の歩みを止めなかった。あらゆる天敵を駆逐して、星を貪り喰らおうとも、栄華の欲求を満たし続けた。

だから、その感情を失ってしまったえば、それは生命としての破綻を意味する。

それは安寧という名の毒だった。

種としての覇権を握り、自己保存を保障され自己改革を不要とされた人類は、繁殖と繁栄を本能や義務として捉えなくなつた。

総ては趣味の領分。選ぶも選ばないも個人の自由。それほどに人

の価値観は広義に渡り、生命の本質さえも容易く捻じ曲げる。

強くなりすぎた人の心は、だからこそ進歩の選択を取らなくとも良くなった。痛みを伴う前進など必要とせず、ここにある幸福を甘受するだけで満足できる。

趣味である内は、まだ救いがある。

争いが存在する内は、足掻きの余地もある。

それさえも失った時、人は緩やかな自死へと至る。

恐れることを忘れてしまう。増えようとするのを止めてしまう。考える事をやめてしまう。

開拓の熱を、解明の熱を、繁殖の熱を、生存に懸けるあらゆる情熱を失ってしまうだろう。

停滞の果てに至る滅亡。争いあったのでもなく、外敵に攻撃されたのでもなく、感情という燃料が尽きた事で人は自らの歩みを止めるのだ。

西欧財閥の支配は、その滅亡を加速させる。

観測は語る。彼らの支配の完成は、種の滅びを確定させる事象要因である。

一度進歩の歩みを止めてしまえば、もはや手遅れだ。停滞に陥った人々の意識は立ち上がる事を良しとせず、後にはひたすらな衰退の道があるばかり。

だが、ならば進化へと至る道と言うのなら、それも否決される。

今の人類がその方向性のまま進化しても、先にあるのはより絶対的な破滅だけ。

殺せ、拓がれ、奪え、栄えろ。いつだって人の世界はそうやって進んできた。

生存競争を肯定するのなら、星を枯らしてでも先を目指すのが人の在り方だ。

進化の先でもそれは変わらない。

脆弱な肉体を脱ぎ捨てて、より貪欲な繁栄を目指すのなら。

あらゆるものを壊し、喰らい、足りなくなった燃料よくほうを満たしながら、終わりのない進撃を続けるだろう。



母なる地球を枯らそうとするように、今度は宇宙までも貪り尽くすのだ。

きつとそれは、どうしようもない生き物だろう。

それでも人は止まらない。どれほどに業深く、何と敵対することになろうとも。

全ては生きて、栄えるために。そのように進んできた我々は、せめてそうする事が責任だというように。

たとえ先に待っているのが、喰らい尽くした末の何も残らない破滅であつてもだ。

停滞も、進化も、それは滅びに繋がった道筋である。

別の選択肢を探さなければならぬ。さもなければ破滅の結末は変えられない。

生きる事を諦めず、生きるための欲望を肯定せずに、滅亡の定めから逃れる道を。

それこそが、この砂漠の地に悠久の時から刻みつけてきた、我々の命題であるのだから。

「——そう。出発から、アトラスの向かうべきは一つだけ。そうでなければ課してきた役割の意味がない。積み重ねた歴史の価値がない」

昏い穴蔵の奥で、私は彼女の声を聞いていた。

冷静な声だった。

非情な声だった。

俯瞰する観測者の視点。それは感情の不整合を認めない演算器の在り方。

人が感情の動物ならば、彼女の有り様は人らしさを排している。そう在るように自身へ課して、そこから揺らぐことを許していない。

「神秘を探求し根源への到達を目指す魔術協会。」

異端を排除し世界を一択にしようと聖堂教会。

そして人類の終末に備え、滅びの後に立ち上がるものを造るアトラス院。

各々が役割を持ち、均衡を取りながら徹することで成り立つてきた相互関係。そのバランスが秩序であり、世界を支えてきたものだった」

彼女は事実を追い求めている。

根拠のない仮定に意味はない。中身のない空想に用はない。

事象と理論の整合性に導かれる答え。演算の先に観測された未来こそ、彼女は俯瞰する。

事実とは、余分な解釈を持たない答えの事だ。他に変動の余地がない結果だからこそ、定数として扱える根拠となる。

「世界からは魔力が枯渇し、神秘はついにその命脈を断った。魔術協会は崩壊し、聖堂教会もまたその意義を失いつつある。

ですがそれでも、アトラス院の在り方だけは変わらない。たとえ世界がどのように変化しようとも、そこに人類史が存続する限り、我々の観測に終わりは無い。

この「マグナス・オプス大いなる作業」を全うし続ける事だけは、厳守されなければならない」

それは正しい在り方だ。

アトラス院の現院長として。アトロシアの名を継いだ者として。

停滞も進化も選ばずに、終末より遠ざかる道を選び続けるために。事象を変換し未来を観測するアトラスの錬金術師の理念に彼女は最も則している。

「未来を見つけないければなりません。やがて訪れる終末に、意味を持った解答を。歴代のアトロシアたちが挑んだ命題へと、私もまた臨む。

それがアトラス院の禁を破り、観測の役割から外れ当事者となることだとしても。この穴蔵で傍観者のままで居続けることは、未来を選ばないことと同義なのだから」

彼女の名は、シアリム・エルトナム・レイアトロシア。

アトラス院の長たるこの人は、その禁忌を犯そうとしている。  
この穴蔵から出る。事象の一端を担う者となり、自らが未来を築く  
一因となる。

調査とはわけが違う。それは明確な干渉だ。それがアトラスの理  
念に反する事だと、彼女自身が誰よりも承知している。

それでも、彼女は決断した。

未来を見つげるために。終末へと答えを出すために。

傍観者のまま、未来を選ばないままに朽ちることを、この人は選ば  
なかった。

「故に、私は持てる技術と資源を尽くして、あなたを製造しました」

だから彼女は、我が師は、『ラニⅡⅧ』という道具を製造した。

「旧き魔術師は消え失せて、電腦の領域に活路を見いだした次世代の  
魔術師たち。その枠組みにおいて、あなたは現行の人類で最高の性能  
を誇るでしょう。」

そしてあなたは”月”へと赴く。人類にとっての未曾有にして未  
知数、あの太陽系最古の『古代遺物』アーティファクトに触れるために」

委細すべて、理解している。

それが私の製造理由。存在意義。師が与えた至上の『主命』オーダー。

この身に搭載された性能は、そのために。人類に決定的な分岐点を  
与える、生命の誕生よりこちらを観測し続けている”月の眼”に手を  
伸ばす。

「それが人類の未来を拓くものであれば、それで構いません。」

しかし、もしムーンセルが人類の手に余るものであれば、破壊して  
でも封じなさい。

どうあれ、その機能は正しく万能の願望器。あらゆる空想を現実へ  
と変換する事象選択樹。個人が世界さえ凌駕するのなら、放置はでき  
ません

全能にも等しい力を使いこなすには、人類の愚かさは不安要素が多  
すぎる」

それが私に求める師の意思ならば。

私はそれを遵守する。月に至り、月を見極め、師の意に沿って決定

を下す。

全能にも等しい力を持つというムーンセル。それを師が求めるのなら、道具である私が代わって手に入れる。

「聖杯」を獲得するのです、ラニⅡⅧ。それをあなたの最優先事項とすることを命じます。

現世の全てを捨て、己の存在すら投げ打ち、理想の結末を追求した錬金術師がいたように。死を諦観して真理へと臨む事こそ、魔術師が魔術師として生きる意味なのですから」

それはたとえ、自己の存在を放棄しても果たすべきこと。

師が、自らの名に刻まれた理念のため、個としての意義を排したように。

躊躇いを持つ不備はない。主命は絶対であり、遵守することが私の役割。自己保存の否定は忌諱すべきことだが、私の知性は主命の全うにこそ意義を感じている。

それは、師のための道具である存在意味に加え、もう一つ。

師が自らに律しようとする理念、その有り様に沿うことが正しいのだと、私は確かに認識していたから。

## 幕間：アトラスの少女（下）

——結論するに、人類とは生物として実に不整合な種族である。

彼らは効率を重視しない。

他の生物ならば可能である事柄が、感情を持つ人類にだけは不可能なのだ。

人は満ち足りない。生存のために適切な比率を逸脱して、必要以上を求めようとする。

動かないという選択が人には取れない。その燃料かんじょうに突き動かされるまま、今の地点で立ち止まることを選ばずに進み続けた過程こそが人類の歴史そのものだ。

「然り。人類史とは大凡そのようなもの。その脚本は数あれど、演目の骨子は変わらない。心の通わぬ舞台に人は在らず、感情に踊らされぬ者は演者足り得ず。尽きぬ演出があればこそ、舞台は幕を降ろすことなく廻り続けられるのだから」

それは人の愚かしさだが、否定することはできない。

事象には理由がある。あらゆる行動には、向かうべき何らかの目的がある。

動物なら、その理由はシンプルだ。生きるために食し、拡がるために繁殖する。

本能という理由は、単純だからこそ真理であるのだろう。生命の目的とはそれだけで、他の理由など本来は必要としないのだから。

だが人間だけはそうではない。感情を持つ人間には、本能だけを目的として生きることが出来ない。

人のあらゆる行動には、感情に端を発する動機がある。凡庸、傑物問わず、人である限りは心の有り様によってその行いは決められる。

それは真理を追求する魔道の徒であろうとも変わらない。彼らが根源を目指し、己の探求に勤しむのは、それを求めた心が発端にあつ

たからに他ならない。

「それもまた正答だが、些かその言い方では語弊がある。そも、感情に狂わされるといふのなら、魔術師こそが最先方だろう。

本能に逆らい、常識に逆らい、未来へ向かうべき必然の流れにすら逆らい続ける。終わらぬ喜劇を踊り上げんとする、もはや脚本に従う演者でなく脚本そのものへと至ろうとも、彼らは再演を臨むに違いない。

その執念が、狂信が、心より生み落とされる激情でなくてなんだというのか」

それを失った結果が停滞の破滅なら、やはり感情の否定は誤りである。

人は感情を切り離せない。その結論を容認するには、まず知性から捨てなければならない。

生存を求めただけなら知性はいらぬ。幸福だけを欲しがるなら動物のままですいた方が効率がよい。

これが人類の本質だ。種の根本に根ざした性質からは逃れられない。我々は己の不整合を承知しながら、人としての歩みを続けていかなければならないのだ。

「その通りだとも。廻らなくなった舞台に目を向ける者はいない。閉幕を見届けたなら観客は席を立つのが当然だろう。

あいにくと観客の眼は肥えている。演出足らずの舞台ばかりを見せられては、退屈さだけで見切られてしまう。演出の否定など、それこそ舞台を潰すようなものだ」

しかし、結論と矛盾するようだが、観測者に感情は不要である。

主観の混じった観測は正確と成り得ない。感情こそが事象の要因となるのなら、観測者のそれが介入した時点で事実にはない要素が入り込むことになる。

観測という行為そのものに、意味や目的は必要ない。採取した事実をどう扱うにしろ、事実それ自体は不純を含まずにあることが望ましい。

事実が不正確なら、演算にも支障をきたす。計測過程が不完全な

ら、正確な未来には届かない。

人類滅亡の結末を回避する。

その目的だけを標と置いて、アトラスの探求とは人間性を切り離す行である。

観測と演算により予測を立て、現実には先んじた解を出す。それを行う観測者として、感情という不確定要素は可能な限り排さなければならぬ。

人間は感情を捨てられないという結論、それと矛盾する我が在り方。完全なる観測者には至れないと知りながら、それでも理想を求めてこの身は足掻きを続けている。

「ああ、良いな。微笑ましいよ、シアリム。我が子孫、我が名を継いだ後任よ。」

その矛盾と葛藤は、我々には避けて通れないステップだ。そこを越えてようやく、君も本幕の脚本へと着手できる。

人を捨て、肉を捨て、果てには存在そのものを捨て去った我が悲劇と異なり、君はどのような舞台を踊るのかな？」

故に、私は手段を提示する。

己では至れない。私の存在が適切だとは判断できない。

ならば、相応しいものを用意するまで。真に観測者たり得るアトラスの錬金術師を。

ラニⅡⅧ。

铸造実験番号No. 8。8番目の実験体。

私が製造した<sup>ホームクルス</sup>人造人間。デザインコンセプトは人間以上の『新人類』。

この子は人間でないが故に、観測者の理想を体現できる。知性と知識を持ちながら、感情の動きを持たない『道具』としての在り方。

そのように生み出したのは私自身。与えられた意義に従い、自己に囚われず行動する。

聖杯に至る手段として、それは適切な運用だ。この子は道具でいる限り、最高の性能を発揮することが出来るだろう。

「然り、然り！ 君は正しい。アトラスに属する錬金術師として実に

合理的な判断だとも。

誰が言い出したものだったか。自らが最強である必要はなく、最強であるものを造り出せばよい。まったく至言だよ！ 的確にアトラスの有り様を表している」

勝算はある。聖杯には手が届く。

勝者のみしか生還の見込みがない道筋、その光明は確かに通じている。

聖杯さえあれば、この手は未来に届く。決して行き着けなかった命題に答えを出すのだ。

計測で未来を築くのがアトラスなれば、奇跡の担い手は私たちであるべきだ。それだけを目的としてきた今までに報いるためにも、降り注ぐ月の恩恵は我々が得なければならぬ。

「――却下<sup>カット</sup>。その思考は美しくない。袋小路に陥った者の迷走だよ。

何度試みても変化はなく、どんなやり方を試してもこの手は理想に届かない。なんとる無体か。挫折し、諦観し、絶望して、されど尚も諦めずに計測し推測ししし死死死死が満ちるツマラナイクダラナイ、人間ナンテツマラナイ！

ソウダソウダ私モカツテハソウダツタ。蛮脳ハ改革シ衆生コレニ賛同スルコト一千年。学ビ食シ生カシ殺シ称エル事サラニ一千。麗シキカナ、毒素ツイニ四肢ヲ侵シ汝ヲ畜生ヘ進化進化進化セシメン

――強<sup>カット</sup>制停止<sup>!!</sup>。

分割思考3番。論理不整合、棄却。

再試行。人格再現。演算を再開。

「然り。私は結果に過ぎない。どう足掻こうが我が結末は変えられず、求められた演目を廻す影絵でしかない。

だが、結末を知ればこそ含蓄もあるのだよ。他力本願。降つて沸いた奇跡に総てを委ねるような体たらくで、世界が救えると本気で思うのかね？

君も未来を追求する錬金術師であるならば、その未熟は恥だと知りたまえ」



ムーンセルは、あらゆる事象を計測し導き出せるという。

それは因果を改竄し、未来を確定させるとさえ。人類史で起こり得る総ての可能性を、その始まりより月は観測している。

それが真実なら、まさしく月の聖杯は願望器だ。あらゆる願いを叶えるという神の杯の名に相応しい。手にした者は万能に等しい力を振るうだろう。

だが、ならばこそ警戒しなければならぬ。その力が万能ならば、担い手次第で救済も破滅も等しく降り注ぐことになる。

検証が必要だ。

果たして人類は、月の聖杯を手にするべきか否か。

滅びを否定するアトラスの錬金術師として、その可能性の是非を観測しなければならぬ。

未知数の可能性を既知のものへ。その作業こそ、アトラスに属する者としてまず果たすべき責務なのだから。

「賢明な解答だね、シアリム。本当に、君は骨の髄までアトラスの錬金術師だ。」

”大いなる作業”。それは悠久を越えてきたアトラスの歩み。今は意義を持たずとも、やがて意義を得る時がくるはずだ。そう信じて我らは多くの成果を遺してきた。

今もこの場所に眠る遺産の数々。解き放てば世界を滅ぼす事さえ可能な先達たちの遺産に倣うように、その足跡の一つとなろうとしている。なるほど、自己に執着せず長いスパンでの視点を持てるのは、この穴蔵での正しい在り方だ。

だが、果たしてだろうか。この場面において、その筋書きは些かに悠長が過ぎるのではなからうかな?」

——強制停止。

分割思考3番。論理不整合、棄却。

再試行。人格再現。演算を再開。

「結論は出ているだろう。君の判断は正しくはあるが、意義に繋がるかと問えばそうではない。もはや終幕も近いという時に、新たな伏線を遺してどうなるというのか?」

カット。停止。停止。カット。

再試行。再試行。再試行。議題を再定義、結論を再試行。

「ああ、いけないな。シアリム、それは茶番というものだよ。結末に過ぎぬ者に論議を求めたところで、同様の答えが返ってくるだけだというのに。」

その醜態も、先に見せた焦燥も、君が結論を得ていることの証。ままならぬ感情に踊らされるのは我らも同じ。その気持ちには大いに共感するが、己の手掛けようとしている脚本の先を見まいと誤魔化すのは、劇作家として失格ではないかね？」

——訂正。そうだ。私は理解している。

自分の判断の先、予測される結末の如何を。

それがどういったものなのか、自分は余さず承知している。

「君は、君たちは、与えられた課題への解答を示していないだろう。どれだけ中途の成果が優れようと、結果へと至らないのであれば総じて無益と見做されるのが必然だ。」

進捗は悪く、解決策は見つからない。所謂、徒労に終わるのだろうが、ならば開き直って白紙のまま居直ろうとは幼稚が過ぎる。何がしかの足掻きを見せた方が可愛げがあるというものだ。

私の答えも、決して褒められたものではなかったが、せめて解答欄を埋めようと努力はしたものだよ」

原初より受け継がれるアトラスの命題。

確定している人類の滅亡を覆す。未来に繋がる可能性を見つけ出す。

私たちの探求はそのためにある。アトラスに存在するあらゆる成果は、その一過程である”マグヌス・オプス大いなる作業”に他ならない。

未だに命題の答えは見つかっていない。

だからこそ歩みは止めない。それはアトラスの名に課せられたものだ。

これまで何人もの錬金術師がそのように生きてきた。観測者として、自己を殺して意義に徹する在り方は我々の正しさであると断言できる。

だが――

「問われるのはアトラスの正しさではないよ。シアリム・エルトナム・レイアトラシア。君自身の解答を示す時だと自覚したまえ。

終幕は近い。デッドエンドはすぐそこだ。とうに理解しているだろう。万物に真の意味での永久はあり得ないと。観る側の方が先に閉じる事になったとて、そう不思議なことでもあるまいに。

終わりに立ち会った者として、エンディングを彩るのは君の役割だ。貧乏くじだと言うかもしれないがね、引いてしまったものは仕方ない。

むしろ栄えある役が任せられたと奮いたまえ。前例はない。是非の基準は何もない。悠久からの歩みに如何なる終止符を打つのか、総ては君の心次第だ」

「さあ、シアリム。君の結末は、どのようなものになるのかな――？」

――全分割思考、停止。再現を終了する。

正しいか間違いなのか、それを決めるには基準となる価値が要る。

物事の是非とは、価値観次第でどのようにでも変わるのだ。本能に生きる動物ではない人類は、その価値を己の知性と感情によって築いていかなければならない。

たとえ一つの教義によつて価値観を定めようと、真の意味で意識が一つとなることはあり得ない。それは人の持つ多様性の否定、教化ではなく支配と呼ぶべきだ。

終わりこそが正しいという者もいるだろう。

それが安息に満ちた緩やかなものであれば、十分な幸福だと。

それこそが価値観の相違。たとえ1対99の比率でも、不純がある限り絶対にはなり得ない。

観測に主観は必要ない。

だが観測の意義を決めるのは、常に主観からくる意思だ。

シアリム・エルトナム・レイアトラシアが持つ価値観。目的と意義は、私が決める。

私は、アトラスの錬金術師だ。

事象を観測し、未来を構築し、感情よりも合理性に従う探究の徒。産まれた時からそうだった。きつと最期の瞬間までそう在り続けるだろう。だって私にとっての人間性とは、アトラスでの日々と同じくするものだから。

人が本質を変えられないように、私という人間の本质は変わらない。ならば至るであろう結論も、容易に想像がつくというものだ。

滅びの後にも、立ち上がるものを遺す。

総てを等しく導けないのなら、等しく価値を遺せる道を。

私の価値観とはそういうもので、その正当性に殉じる結論を、この手は恐らく選択するのだ。

\*

現状、聖杯戦争の経過は順調だった。

準備期間中に与えられる試験タスクの解決。対戦相手の情報取得と、実戦

運用時における仮想検証など。

結果は完璧な解答を示している。ここまでの戦いでは、展開の全てを予測の範疇に加えた上で、誤差一手分以下の範囲で勝利という結論へと辿り着いている。

実戦での経験と運用を経た上で、サーヴァントの状態も良好だという結論が出せた。施した術式は、その行動を完全に掌握してこちらの制御下に置いていた。

そして今、私が遂行するのはもう一つの主命。

人を知ること。その心を理解して、自らの器を満たすために。

「間桐慎二。ダン・ブラックモア。彼らの星を詠みました」

それは、主目的である聖杯戦争とは何ら関係性を見い出せないもの。

しかし師からの主命である以上、私はそれを成し遂げなければならぬ。

これはそのため得た” 同盟関係”。あるいはこの人物こそが私の器に中身を入れる者かと推測した相手に、私は検証結果を読み上げていく。

「検証の価値がある人たちとは思いません。彼らが聖杯へ至る可能性もゼロではなかった。

しかし、私が求める相手ではなかったようです。この器に充たすべき何かを、彼らの星からは読み取れなかった」

「そうか。輝ける姿を示した彼らならば、あるいはと思ったがな」

甘粕正彦。

この聖杯戦争における筆頭位の実力者にして、最も未知なる要素に溢れた人物。

彼からは、未だ何の見返りも求められていない。私からの要求は、彼にとって何の利益にも成り得ないことなのに。

ここまでの対戦者たちへの振る舞いも含め、甘粕氏の求めるところは異質だと言える。勇気と覚悟、そうした感情に由来する性質の如何を、効率さえ度外視して追求していた。

「俺という試練と向き合い、彼らの意志は新たな可能性を見せてくれた。それは事実ばかり追っついては届かない、まさしく心の生んだ奇跡だと思っている。

おまえもそれを知っていけば、見えてくるものもあるろう。そう考えたの提案だったのだが」

「そうでしょうか？ フランシス・ドレイクの強運も、ロビン・フッドの毒の森も、英霊としてその伝承により形成された能力に他なりません。

起こし難い現象ではあったでしょうが、起こし得ない不可能ではない。可能性を観測できるのなら、それは奇跡でなく事実でしかないのでは？。」

「左様。是非もなしじゃな、正彦よ。此度は小娘の言い分にこそ理があるろう」

こちらの言葉に続いたのは、甘粕氏の連れるサーヴァントだ。

現代風の軍装に身を包んだアーチャー。外見こそ少女のそれだが、

彼女の纏う威風ともいふべき気配が容姿の幼さを認識させない。

「ラニよ。合理なる指針こそを良しとするそなたの有り様、わしには好ましい。その余分の無さ、家臣として側に置きたいと思うほどじゃ」

甘粕氏には、自らのサーヴァントを制御しようとする意図はないらしい。

単独行動のスキルを持つアーチャーを、ここまで奔放に行動させる自由を許している。

これではその行動を掌握することは不可能に近い。自らの制御を離れたサーヴァントという危険性を、甘粕氏は完全に容認している。とても無意味な行為に思えた。

サーヴァントとは、ムーンセルより与えられた聖杯戦争のための兵器。

これを如何に駆使して勝利するか、私たちマスターが考慮すべきはそれだけだ。

彼らという存在が過去に実在した英霊であるのは理解している。独立した意思を持つ一個の人格であり、ただの道具ではないということも。

しかし、それでもサーヴァントの本質とは兵器である。英霊という超常の力、それを行使する権利を人間に与えるための手段。

存在としての格差は明白であり、人が英霊を服従させるのは容易ではない。けれどその方法さえ確立できたのなら、そちらの方が遥かに効率的だ。

兵器に、固有の人格は必要ない。

その戦力を十全に活用できる性能を持てば、主導権をサーヴァントに置く意義はない。

力とは、ただ純粋に力であるべきだ。判断を惑わせる感情があつても、性能の劣化を招くだけなのは明らかだから。

「アーチャー。あなたが合理性に価値を置く人物なら、この私との接触について思うことはないのですか？」

「奇行じゃな。これという意味はなく、利益さえ求めようとせぬ。愚

行と呼んでも差し支えなく、全く以て無価値な行いじゃ。

が、それも今に始まった事ではない。こやつはいつもの事じゃ。この無価値な遊興に価値を置くが甘粕正彦という男なれば、これもまた是非なしよ」

「意義が見い出せません。無価値だと理解するなら、継続する必要性が何処にもない」

「そう思うのは、ラニよ。そなたが人心の理を解しておらぬからじゃ」  
心。人としての、心。

師が見つけ出せと言ったもの。今の私に欠落している要素。

理解が出来ないのは、その機能が不足しているから。合理を重んじるというアーチャーはそう言った。

「人の理とは、事実の如何のみにあらず。人である限り、そこには必ずや心の如何が絡んできおる。理を追うばかりでは読み解けぬ、難儀な非合理さこそ人の欲界というものじゃ。

事の是非を定めしは欲の有り様。次第によれば無価値なものとして価値を持ち、悪意とて善事となる。そなた自身の欲を知らねば、その理を解するのは難儀しようのう」

人間とは、元より非合理さに生きるものだから。

感情という機能を持った時点で、本当の合理性はあり得ない。

師も語ったそれは、だからこそ事実として受け止められる。そして同時に、人間としてのその機能を持たない私には、そのために師の期待に応えられないのではとも思えた。

心というものを理解するには、人の非合理を受け入れなければならぬ。

道具としての合理性を保つには、非合理さなどあるべきではない。

この矛盾、相反する意義と主命が判断を鈍らせる。師はどうしてこのような主命を与えたのか、余計な疑念が消えずに思考を曇らせていた。

「じゃが、ラニよ。それを踏まえた上でも、わしはそなたの在り方を好ましく思うぞ」

そんな、こちらの思考に入り込むように、アーチャーは付け加えた。

「合理の上で揺れず、情で判断を誤る事もない。そなたの稀有なところとはそれじゃ。人の理を解するようになったとて、そんなものは人並に墮するに等しい行為じゃ。みすみす己の価値を握り潰しておる。感情を持てば、そなたは性能を落とす。まことその通りじゃ。ならば、そんな行いなどに何の意味がある？」

「意味ならあります。これは師より与えられた主命です。それが師の求める事なら、私はそれを実行するだけ」

「だから、それこそが無価値だというに。戦に赴いて、あえて強さを下げる行いが愚行でなくてなんだというのか。そのような命を下した師とやらを含め、従う意義など何もあるまい。」

今のそなたに欠落はない。己の無欠を保とうと望むのも、そなたにとってには有意義だとだとわしは思うのじゃが」

私に、欠落はないと。

非合理に生きる人間性こそ、多くの欠落を抱えるもの。

ならばそれを持たない今の状態こそが最善で、心を持てばその完全性を捨てる事になる。

なるほど、その結論には頷ける。

心という余分なスペースに思考を奪われれば、その分だけ性能が低下するのは明らか。

このままでいい。余計な思案など捨てて、現状の強さに徹すれば、より勝利の目的に近付ける。その結論は正しいものだろう。

けれど、私はその結論を受け入れない。

このアーチャーは言った。師の主命を放棄しろと。

そこにどんな理があつたとしても、その結論はあり得ない。

師が求めることを果たすのが、私の意義。それを捨てる事は、私自身の意味を放棄するのも同じだというのに。

このサーヴァントは、まるで取るに足らないものを扱うように、無価値だと告げたのだから。

「アーチャー。あまり童を苛めてやるなよ」

差し挟まれる甘粕氏の声。

諫めるような言葉は、己のサーヴァントに向けて。



まるでこちらの事を慮っているように、常の気迫を抑えて告げていた。

「彼女にとって師の存在は、己の芯に置いたものだ。それを切り離す言動は今の彼女には早かろう」

「ふむ。親への反抗を示すも子の姿じゃと思うがのう。それよりも、そなたの口からそのような言葉が出るとは驚きじゃ。慈しみよりも厳しさにこそ愛を見出だすような男が」

「そう意外に思われては心外だな。俺は応える勇気があると信じるからこそ殴るのだ。決して殴る事自体を好いていてのではない。何度だってそう言おう。」

俺が殴るに値する勇気が芽生えるかは今後次第といったところだろう。これでも慎重に扱っているつもりなのだよ。幼子の扱いを手荒くするわけにはいくまい」

幼子という甘粕氏の表現は、まったくの不適切というわけではない。

確かにこの肉体の経過年数では少女と表するのが相応しい。精神も同様に、むしろ経験年月の少なさを鑑みれば適切とも取れるだろう。

けれど、彼らは間違っている。

姿形のか弱さなど意味を為さない。幼さの概念など何の関係もない。

ここに在るラニⅡⅧというヒトガタは、既に今のままで十全な力を持ちを与えられている。

「気遣いでしたら必要ありません。私は師の意志を果たすために造られた道具。感情だけで判断の優劣を誤ることはありませんから。」

アーチャー。あなたの指摘は正確なものではありません。道具が、主の意向に疑問を差し挟むべきではない。その意図がどうであれ、迷いという不備を出した時点で道具足り得なくなる。

私はただ、師の主命の達成を存在の意義としている。怒りも疑いも不要です」

師のために造られ、師の意思で使われる道具として。

迷いは要らない。師がそれを求めるなら、不合理にも私はなろう。たとえその意味を知らなくても、何よりも優先すべきは課せられた主命を果たすこと。

意味を解せない知識不足は改善すべきとしても、まずはこの意義を全うしなければ、自分は道具にもなり得ない。

——そうだ。最初から結論は出ていたのだ。

師の存在だけが私にとっての唯一絶対。私が見据えるべき基準はそこにある。

この目的こそ、私の生命。合理の是非を決めるのも、この身に課せられた意義を根幹においてこそなのだから。

「取り繕うのが巧いことじゃ。理論の武装はお手の物かの」

「なるほどな。いや、どうやら俺にも悔りがあったらしい。自らの意義をこれと徹するおまえの意志を見くびっていたようだ」

意外と言うべきなのか、そうでもないのか。

甘粕氏は私の言葉に頷いた。理論としてはあまり意味をなさない感情論だったが、こちらの脆弱性という認識を改めて、主張を引き下げたのは確からしい。

「ああ、実に喜ばしい。輝かしい意志の発露だよ。自覚はあるかね？」

そのように自らを強く定義するそれこそが、おまえ自身の意志の発露であると」

引き下がったかに見えた甘粕氏の言葉は、更なる鋭さとなってこちらに突き刺さってきた。

「俺たちの言い様に反感を持ち、だからこそ抗うための決意が生まれた。道具であるという在り方を確固とするために、それを是とする支柱が出来た。

そういうものはな、信念と呼ぶのだ。心から生まれる己にとっての真だよ」

「これは事実に基づく反論です。あなたが言うような感情に由来した論理ではありません」

「述べているのは事実でも、言葉を断じる強さは信念の産物だぞ。糸に繰られる人形ならば強さは要るまい。

心ない者の姿とは、もつと無機質なものだ。何を言われようが聞き入れて、淡々と変わらない行動をするばかり。おまえのような自負など欠片もない退屈極まりないものだよ。

肉体が器なら、心とは人の中身だ。師のための道具で在りたいと望むその思いこそ、おまえの中身に相違ない」

これが、中身？ 師の道具たれとするこの意義が、私の感情？

分からない。否定すべきかどうかなのかさえ。その結論は私にとって喜ぶべきことなのか。

師は言った。私に生命を与える者を、中身のない人形に心を入れる者を探せと。

これが心なら、師の主命は果たされたのか？ 期待の通り甘粕氏こそ、師が探し出すよう意図した人物だったと？

「そんな意志を尊重したい。道具として主のために尽くす？ ああ、大いに結構だとも。矛盾を恐れず、貫く勇気があるのなら、それは紛れもなく俺の愛すべき輝きだ。

おまえは言ったな。間桐慎二もダン・ブラックモアも、求めた者ではなかったと。だがその見切りは果たして正しいものかね？

人の中身とは、元より全てを他者の手で形作られるものではあるまい。多くの刺激を外から受けて、痛みと共に成していくものだ。それは一人だけとは限らんだろう」

甘粕氏の言葉は続く。

私に中身を与えるために、彼の理論が展開されていく。

それは寧猛で、誠実で、決して否定できない整然さを備えたものだった。

「実りある学びのためには試練が要る。その苦悩があつてこそ、手にした理解は標となつて信念という光明を差すのだから。

……ああ、そうだ。見返りの件が保留のままだったな。そろそろこちらの要求を提示しようか」

「それは？」

「なに、ひとつ頼まれ事をしてほしいだけだ。俺の次の対戦相手、その人物についての調査をな」

甘粕氏の、次の対戦相手。

それは聖杯戦争の3回戦における、死闘を行うべき<sup>マスター</sup>参戦者の一人。「あの狂人の女か。対戦相手の情報ならば、関係の対価として妥当なところじやろう」

ランルーくんなる登録名の、道化師の格好をした異質なマスター。名の知れた魔術師ではない。恐らくは天性の素養だけでこの場所に踏み入れた外来枠。

マスター自身はさほどの能力ではないが、引き連れるサーヴァントは警戒に値する。

概略程度だが、甘粕氏の相手として私もそれくらいは把握していた。

「俺自身、その方面には疎くてな。踏み込んだ調査となれば手段が足りん。だが世界中の情報を収集するというアトラス院ならば、一人を調べ上げるなど訳もないことだろう?」

「……可能か不可能かを問うのなら、可能です。彼女が地上に実在する人間なら、私がアトラスの情報庫に接続すれば、すぐにでも実行できます」

「それは重畳。ただし、俺が欲しい情報はマスターとしての彼女だけではない。彼女という人間の生、その生涯が如何なるものか。どんな出会いがありどのような試練に見舞われたのか、その人生についての仔細が知りたい」

「……それは、聖杯戦争と何の関係が?」

「無いさ。関係ないとも。戦いに必要な事ではない。だが俺という男には必要なのだ。人々の輝きを取り戻すため、相応しい試練を与えるためにはな。」

そして、それはおまえにも言える。彼女の中身は合理性などとは程遠いものだろう。まだ直感の領域だがな、一目見てそう感じたよ。恐らくそれは、人間の持つ感情の極地にあるものだ。

それを知ることが、おまえの心への理解をより深めてくれることになる」

聖杯戦争という合理性に照らし出せば、それは無意味としか言えな

い。

ここで人間を知る事に意味はない。自分以外の誰かとは、いずれ殺し合うべき敵手なのだ。

理解すべきは相手の強さであり、その人間性の如何ではない。共感  
は殺意を鈍らせる感情であり、無意味どころか害毒にしかならないだ  
ろう。

しかし、師よりの主命という合理性には、それは合致している。

合理性とは、目的となる事柄を置いてこそ、初めて理が成立する。

目的のない行動こそ非合理の最たるものであり、達成すべき目的へ  
と向かう道理こそが行動の意味を決めるのだから。

心の理解のためには、あえて毒を含まなければならぬ。

師の言葉を遵守するという意義のために、甘粕氏が信念と呼んだ私  
の存在定義を果たすために。

「客観的な事実だけではない。知り得た情報に対し、主観からくるお  
まえ自身の感想を持ってみてほしい。その生涯に己が何を感じ、どの  
ような思いを抱いたか。十分に噛み締めた上、彼女という人間に対し  
ておまえなりの結論を出してほしい」

「……そうすれば、私は心を理解できると?」

「少なくともその助けとはなるだろうさ。狂気とは、誰とも共有でき  
ない価値観だ。人の理屈では説明できない異常性、理解できないそれ  
を忌諱するから遠ざけようとする。」

だからこそいいのだ。他者には納得し難く映るその心象は、極端で  
あるがこそ不純を混じえない。必然、それに対する結論もまた明確に  
なる。醜悪か、憐憫か、はたまた称賛か、悩みぬいた上で出した結論  
にこそ、おまえの中身となるべきものの性質が現れるだろう」

下すべきは客観からの事実としてではなく、人として下す主観の結  
論。

それは私の中身を見い出させるという。甘粕氏からの提案を、私は  
了承した。

「言いよるのう。何が童の扱いは慎重にじゃ。狂者の心象など、それ  
こそ童には触れさせるべきものではなからうに」

「いやいや、そう悔ったものではない。意志を尊重したいと言っただろう。信念と呼べる強さを持ち始めた彼女に対し、幼子と軽んじるのは侮辱だと悟ったよ。」

ラニⅡⅧ。おまえはもつと心に触れるべきだ。より多くではない。より深く、それこそ自分の意識と混濁しかねんほどに。中身が無いなどと抜かすのなら、まずは他の中身で満たしてみるがいい。きっと見えなかったものが見えてくる。

師の主命を果たし、道具としての意義を全うしたいのだろう。それが変化を拒み<sup>いたみ</sup>たいがための戯言でないのなら、俺はその意志を昇華させる努力を惜しまない」

……だけど、この動悸の反応は何なのだろう。

発汗が止まらない。だというのに体感はずしろ暑さよりも冷たさを感じている。

理由が見えない。だが、この反応から導き出される感情の名を、知識として知っていた。

それはまるで、取り返しの付かない選択のような。

後戻りの出来ない場所へと踏み込もうとしているような。

触れられるべきではない深層の場所へと踏み込まれようとしているような。

決定的な、致命的な、そこに触れる事で自分の全てが変わってしまうと、そう思わせる何か。

ただ巨大で、威圧的なだけではない。

彼の眼は本質を見ている。その人自身でさえ目を背けている、根幹の弱さにまで踏み込んで全てを曝け出す。

きっとそれが甘粕正彦という男の真価。公正で、容赦のない裁定者の在り方に、対峙する者は恐怖を抱かずにはいられない。

もしかしたら自分は、選択を誤ったのかもしれない。

何故かは把握できない。直感的な、根拠に乏しい理屈。だが無視できるとは軽くもない。

この身が感じている恐れと共に、先の見えない疑念に私は囚われていた。

\*

我々の終わりについての予測は、とうに検証が済まされたものだった。

巨人の穴蔵<sup>アトラス</sup>。未来を探求する蓄積と計測の院。

現実を侵す奇跡を求めず、観測される事実こそを重んじた錬金術師は、神秘の喪失した世界で他の魔術師たちのような衰退を免れた。

現在において、昔のような真理への探求を可能としているのはアトラス院のみ。その事実だけで捉えるのなら、我々は自らの有り様の正当性を勝ち取った、魔道の徒の在るべき姿だと主張も出来る。

だが、結論は違う。世界より魔力<sup>マナ</sup>を失わせた大崩壊<sup>ポールシフト</sup>、あれが決定的な分岐点となったのはアトラス院も同じだった。

次世代の出生の断絶、古参の錬金術師たちの相次ぐ自死。

それは生命本能の劣化。緩やかな、しかし確実な滅亡の予兆。

未来を求めて観測する錬金術師が、未来を失う。あまりにも皮肉な結末がここにある。

原因ならば既に分かっている。

未来を観測し、確定した滅亡を回避する可能性を模索するのがアトラス院の役割。

未来を観測し続けるアトラスの錬金術師は、その視界を未来に置いているに等しい。遙かな先の世界を捉えている彼らの意識は、ある意味で現在という時間軸に生きていないのだ。

結論から言うのなら、彼らはあるべき情熱の全てを失ったのだ。

世界中から魔力が枯渇し、人類が緩やかな停滞を始めた今。

その行く末も容易に観測できる。この分岐へと至った時点で、この世界の結末は確定した。

緩やかな停滞の先にあるのは、本能レベルでの種族の衰退だ。繁殖の義務を捨て、繁栄の意義を忘れ、何もかもを放棄してゆつくりとそ

の歩みを停止する。

道筋が確定した観測は、その未来の認識を容易なものにした。そのような結末の未来に生きる人々と、彼らは意識を同一させすぎってしまった。

深淵をのぞく時、深淵もまたこちらを覗いている。覗き過ぎて囚われてしまった者の末路とは、その深淵と等しいものとなる事だ。

『人類の叡智を保存するのは他の誰かに任せよう。我々は正直、もう面倒になった』

真理に至るための研究は、惰性のままに行われる作業となった。

その行いには変化がない。何らかの新規を得るべく進めようとする気概が欠片も無い。

端的に言えばやる気がない。己の価値を見失い、未来に抗うことも託すことも止めてしまった。

それはちやうど観測した未来と同じ、停滞の果てに衰亡する人類の姿だった。

既に未来は決まっている。これこそが人類の終末の答えだと。突きつけられた解答は、我々にとって最悪の絶望だった。

また一つ、使われる部屋が減っていく。また一つ、この穴蔵から生命が消えていく。

この終わりは止められない。それは検証された結論であり、抗う意味のない結末だった。

「ラニⅡⅧ。あなたは月へ赴きなさい」

己が最高の性能を発揮する必要はなく、その性能を発揮できる何かを創れば良い。

それがアトラスの錬金術師の信条。故に求められる機能を果たせなくなつた我が身ではなく、己に代わる存在を鑄造する方が合理的だと判断する。

「あなたはアトラスの最大の成果です。あなた以上のものはなく、またこれ以上を創りだすことも叶わない。決して替えの効かない身だと自認しなさい」

緩やかな破滅を迎えているアトラスの錬金術師。



それは私とて例外ではない。影響は確実にこの身へと現れている。確認できるだけでも身体能力、代謝機能、免疫力などの低下。生命体としての弱体化とも呼べるそれらの症状。

そのような状態の身体には、僅かな病原すら致命的となる。かつてならば確立されていたはずの治療法が、今の身では耐えられなくなってしまう。

「延命措置は必要ありません。あなたという私以上の成果を遺した時点で、私の意義の大部分は果たされている。以前までならともかく、著しく性能の劣化した現在の私を存続させる意味はない。限られた資源の浪費は避けるべきです」

魔術師とは死を諦観するもの。錬金術師もまた然り。

生命の意義とは生存よりも、成果の如何にこそ優先される。

己よりも優れた存在がいるのなら、分配はそちらにこそ優先されるべき。アトラスとして当然の、合理的に下した結論だ。

私が遺すものは決まっている。

人類の破滅を回避する。アトラスが掲げてきた命題であり使命。

アトラシアの名を継ぐ者として、大いなる作業の一旦を担う。出来得る限りの成果を築き、後世のあらゆる可能性に備えるのだ。

後のアトラスを継いでいくのは私ではない。現行の人類では停滞の自滅に耐えられないのなら、耐える事が出来る新たな人類像を設計すればよい。

その結論の正しさは証明されている。ラニⅡⅧこそがその答えだ。来たる電脳世界に対応させたあの子こそ、人類の<sup>ニューエイジ</sup>新世代となる。

ラニⅡⅧは、アトラスの理念を真に体现する存在となる。

一つの意義に従う観測者。主観の目的と客観の視点を切り離せる在り方。

この子は『道具』としての在り方に意味を見出している。それが最も合理的だと、与えた知性によって判断していた。

その姿は理想的とすら言っていいたいだろう。ラニⅡⅧは私の、シアリム・エルトナム・レイアトラシアの道具である限り、最高の<sup>ウィザード</sup>魔術師として活動できる。

——ならばやはり、今のこの子には調整を施すべきなのだろう。

この子は人間以上の性能を持たせた新人類。

決して機械ではない。受け取った命令の通りにしか動けない人形とは明確に異なる。

人間が持つ機能はどれも不足なく備えている。感情の萌芽など、人間ならば当たり前に発生するものを搭載していないはずがない。

日々を過ごしていく中で、兆しは少しずつ現れていた。

学びを深める喜び、失態や不足に対しての憤り、思考の遊戯ゲームに興じる際の楽しみなど。

そして今、朽ち逝こうとしている私に向ける哀しみも、この子が心を有している事の証明だ。

確かに、一見すると分かりづらい。

表情上での変化はほとんど見られず、表面に出る反応も極々僅かだ。

けれど、それは反応の表現の仕方をよく知らないだけ。そんなものを学ぶことに意義を見い出せず、他を優先して疎かとなっているだけなのだ。

——ちょうど、私がそうであるように。

この子の振る舞いは、何処となく創造者わたしに通じているものだった。

それは余計なものなのだろう。

ラニⅡⅧの性能を妨げる、勝率を下げる不安要素。勝利のためを思うなら、排除して然るべき。人造人間ホムンクルスであるラニⅡⅧなら、人為的な調整によってそれも可能だ。

ラニ自身も、それを了承するだろう。あの子は自分の感情を不必要なものだと見なしている。私ができるように命じれば、当然のように調整を受け入れる。

全ては私の判断次第だということ。

これまでを省みれば、取るべき選択は決まっている。

聖杯は掌握されなければならない。獲得であれ封印であれ、あのアーティファクトは放置しておくには危険すぎる。

そのためには勝利するのが最適の結論だ。聖杯の所有権さえ手に

入れば、恐らくほとんどの問題はクリアされる。

あの子の心は廃すべきだ。そうすればラニⅡⅧは真実の兵器となれる。人間性を捨て合理性に従うアトラスの錬金術師ならば、どうすべきかは分かりきっていた。

「あなたは我が生涯を懸けた最高の成果です。その性能は、全ての要素において私を上回る。アトラスの名の後継として選ぶのは当然の帰結です。

アトラスの行程は引き継がなければならない。私たちの探求は、終わりの先でも遺るものでなければ意味がない。無価値に落とすことだけは、断じてあってはならないのだから」

この子の心は不要なものだ。

喜びも怒りも、楽しむことや哀しむことさえも。

ラニⅡⅧは人形であるべきだ。それがこの子の力を発揮させることになる。この子自身の意思も、それを望んでさえいるだろう。

——だから、私自身のこの心もまた、やはり不要なものと思ふべきだ。

錬金術師としての理性は、ラニⅡⅧへの調整の必要性を確信している。

けれど私の中の人間的な感情が、その判断に対して迷いを抱いている。

この子の心が失われる。私に向けられる情の全てが無価値なものだとする。

それがどうしても受け入れ難い。理屈としての合理性を解しても、この感情が納得の邪魔をする。

細胞分裂による肉体の拡大は、育んでいくことの喜びとなった。

機能を開拓するための教育は、己の識る事を教え伝える楽しみとなった。

必要な作業でしかなかった行為が、いつしか私の生きる意味となっていた。

それは錬金術師としての判断ではない。人間としての感情に囚われたが故の反応だ。

私、シアリム・エルトナムは、ラニⅡⅧに対して親愛の情を抱いている。

己というものを客観視して得た結論。疑いの余地は何処にもない。恐らくは親が子に向けるものに近い心を、私はラニⅡⅧに向けているのだ。

「勝ち抜きなさい、ラニⅡⅧ。与えられた意義と星辰の紡ぎ出す導きに従い、第五元素ブネウマの申し子たる本領を發揮なさい。

あなたは”勝者”となるべく造り上げられた。淘汰は弱きものも必然であり、存続は優れたものの証明。未来に残されるべき新人類ニューモデルたる証を、月の戦いで立てなさい」

それでも、私という論理に破綻はない。

自らの心を把握した上で、私はこの結論を下す。

聖杯戦争とは、淘汰の極限たる生存競争だ。

生存権はただ一人の勝者のみ。他の一切を殲滅し尽くして、その権利を勝ち取れる。

月に触れた者の大半は焼き落とされる運命だ。生命にとってあまりに過酷な戦場に赴かせようとするのは、あるいは”親”としては間違っているのかもしれない。

だが、私は人である前に、アトラスの錬金術師である。

優先すべきは感情ではなく合理である。シアリム・エルトナムの在り方とはそういうものだ。

アトラスで生まれ、アトラスで育ち、アトラスと共に終わろうとしている私が、アトラスの道を違えることはあり得ない。

人間としての心は不必要な機能である。何故なら、その感情は一時のみで適用される要素に過ぎないから。私の心は、未来に何の成果も残せない。

今の結果だけで全てを了承するには、私はアトラスシアで在り過ぎた。未来へと遺すことへの『執着』を捨てられない以上、私の意義は変えられない。

「ムーンセルと接続するのです。その目的こそ、あなたを動かす意義いのちであると自戒なさい」

ラニⅡⅧは、シアリム・エルトナムの道具として造り出された。ならばその意義に相応しく用いよう。それを妨げる心ならば無用である。

この子の心も、そして私の心も。それがアトラスの合理性に従って出した、私という人間の解答だった。

\*

心という概念は、人間を検証する上での最大の特色であり、同時に最も不可解な部分だろう。

まず定義として明確な基準がない。

何処から心なのか、感情と同義なのか否か。

本能か、脳髓か、何処から出来て何処にあるのか、確かなものは何もない。

また人の心には定形というものが無い。

人という種族がこれほどに個体差著しいのも、心の有り様の差異による。

人はそれぞれ違う。それは心とは誰もが異なるものだから。時としてそれは、本能と真つ向から相反する性質とも成り得る。

定形がないからこそ、正しさの基準もない。あるのは社会的に決められる一般性の枠組みだけで、合理的に導かれた正答は何もなかった。

ランルーと名乗るマスターを調べた。

その生涯を、その心象を、その魂に根ざした度し難い性質を把握した。

結論は不合理極まりない。彼女の在り方は破綻している。

必要でないものを求め、必要とするはずのものを遠ざける。明らかな矛盾であり、生命としての致命的な欠陥だ。

人間が構築する社会において、彼女の存在は明らかな異端となる。

迎合することは困難であり、その意味があるのかも疑問だった。

何故、彼女のような存在が現れたのか。

その欲求は破綻しており、人という種にあつて異端の魂だ。

彼女の存在は始まりの段階で間違えている。何の理由もなく、ただそういう形をして生まれたというだけの突然変異。

けれど、その存在は何の為に？ 安寧の世界にあつても彼女のような特例が現れるなら、その理由とは一体何処にあるのだろうか。

誕生自体に理由はない、と結論する事は、人類という種の理の不備を認めるものだ。星の巡りに導かれる世界の理、そこからも外れて産まれ落ちてしまった孤独な生命。

理にとつての不純物ならば、それは排斥されるべき不正規品。<sup>イリーガル</sup>

存在の目的を持たず、生きるための役割がない生命とは、その時点で抹消すべき。

何かのために消費されるのではない。ただ、存在する事が無為か害悪にしか成り得ないなら、そんな不適合さは消去してしまった方が効率が良いだけ。

それが理の上より下す結論。種を総体としての構築物と考えて、人類社会全体を活かそうとするのなら、疑いようのない正しい選択だ。

しかし、あえてその選択を所感によつて判断するのなら。

不具合から生まれ、不具合のために切り捨てられる。その命には何の使い道もない。

理によつて導かれたその結論は、感情にとつては受け入れ難い。それはあんまりなものだと感じている。

まして、その存在には何の罪業も無いのならば。内包する危険性だけの問題で、外れた存在でありながら外れた道を歩まなかつた彼女を排斥する道理があるのか。

——果たしてこの結論は、本当に正しいものなのかと、そう考えてしまう。

「なるほど。それがおまえの出した答えというわけか」

所感も含めた私の報告を聞き終えて、甘粕氏は満足気に頷いてみせた。

「不要なものは廃棄せよ。それが種の欠陥であるならば、確かに理屈だろう。」

だが、それを素直には承知し難い。おまえの持つ所感はそう訴えているのだな」

「……はい。何も間違っていない結論なのに、その結論を下す事に私の反応は抵抗を示している。これが私の感情によるものなら、一体どういったものなのでしょう?」

「なんだ、そんなことも分からんのか? それこそ明白な事だろうに。おまえは彼女を憐れんでいるのだろう。始まりから欠陥を抱えたその有り様を哀しんだ。だからこそ、無慈悲な決断に抵抗を覚えている。これはそれだけの話だろう」

「……哀しい? 私は哀しいのでしょうか?」

確かに、甘粕氏の言うことは間違っていないのだろう。

私の心は哀しんでいる。理屈の上では正しいとしても、その結論は憐れなものだと。

魂が抱えた不備、こうあるべき形に整えられなかった不遇を、感情は軋むような痛みを訴えているのだ。

「魂が持つ本質というべきかな。優しいな、ラニⅡⅧ。無情な人形を気取っていても、その本性には清らかなものがある。」

やはりおまえは情を知らないだけだ。存在しないわけではない。育めばきつと芽を吹き出し、花を咲かせることだろうよ」

人の本質・本性を司る魂。

それは精神とは別の部分だ。大元より分かれた時点で持つ存在の属性。

電脳体を構成する魂・精神・肉体の三要素。これらがあってこそ個の存在は定義される。

本性の因果となる魂とは、在り方の方向性を決めるもの。『起源』とも呼ばれるそれは、強く自覚しすぎてしまえば三つの全てを支配する呪いにも成り得る。

私に魂を入れる事は叶わなかったと、師は言った。

『無』こそが私の起源。いや、創られた生命である私には、そもそも

起源自体が存在しない。

それが、感情という精神の部分に引き寄せられる形で顕れようとしている。大元にあった頃の形を思い出そうとしているのか。

「だが、そうか。俺の見立ては間違いではなかったのだな。単なる堕ちた狂気ではない。魂の性に逆らい、人の矜持を貫いたのか。」

なんと強い意志であることか。ああいいぞ、惹かれる輝きだ。そこに虚飾はない。彼女も、その周りにいた者たちも、彼らの愛は真実だ。その勇氣には称賛の念しか沸かん」

けれど、ならばと私は思う。

人の本質、方向性を定めるのが魂なら、果たして甘粕正彦という人物の魂は、どのような形をしているのか。

彼女は魂からの欲求を精神によって抑えこんだ。

自覚もあつたのだろう。その上で、破綻した補食衝動に心が流れる事を容認しなかった。

それを強さだと甘粕氏は言う。魂の方向性に逆らい抜いたその精神は、確かに強さであると形容できるかもしれない。

では、甘粕正彦が持つ強さとは？

何かを抑圧しているとは思えない。きっと彼は求めるままに振る舞っている。

魂の欲求と、精神の情熱と、肉体の才覚が奇跡のように噛み合った存在。何の迷いもなく、鬨りの一つさえ持たないからこそ発揮できるもの。

三位一体。まるで構成される要素の全てが強さのためにあるかのよう。成果のために前進する事が強さなら、彼は強者となるべくして産まれた人間だ。

「そして、得難く尊い愛であつたからこそ、失った痛みは計り知れないものだろう。それ故に、嘆きから立ち上がる姿は美しい。新たな光が拓かれるに違いない。

狂気で閉じて、その輝きを曇らせておくなど見過ごせん。叩き直してやらねばな」

だからこそ、氏の有する異常性についてもはつきりと認識できてし



まうのだ。

「……あなたは、愛する事を謳いながら、相手を傷つける事を躊躇わないのですね」

愛とは、強烈な執着の感情だ。

特定個人に向けるもの。ある範囲の共同体へと向けるもの。大別しても二つに分かれるが、どちらも対象を維持し繋ぎ留めようとする性質を持っている。

その感情は時として理を狂わせる。執着に由来する特別性が数値の解を乱すのだ。

理に沿おうとするなら、感情を殺さなければならない。理屈と感情が相反するものならば、どちらか一方を切り捨てなければならないのは必然だ。

なのに、甘粕氏の場合には、相手を失うことを厭わない。

愛しているといい、それが嘘とは思えないのに、結果として壊れる事を受け入れる。

極めて感情的でありながら、感情に縛られる事がない。その行動原理に、果たして矛盾はないのだろうか。

「それが試練だ。俺の掲げる信念であり、聖杯に託すべき祈りでもある。

決して傷つきたいわけではない。だが愛すればこそ、輝きに満ちたその姿が見たいと願っている。自罰はするが、歩みを止めるつもりは毛頭ない

窮地であつてこそ、難関辛苦に立ち向かつてこそ、人は振り絞った強さを発揮できる。だから俺は殴るのだ。その者の強さを信じればこそ、どのような結末に至ろうとも受け入れよう」

甘粕氏の言葉には理屈がある。

氏の掲げる思想とは否定しきれないものであり、その属性は善性でさえあるだろう。

けれど、やはりそれでも、甘粕正彦という人物は、**異様**であった。西欧財閥が、レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイが築く管理社会とは、人の多様性を制限するものだ。

感情による変容、可能性とも言い換えられるものを社会の合理性で制御する。

人間性を否定するわけではない。言ってしまうえば制御可能な範囲にまで抑制するもの。人類の変成に耐えられない世界の中で、最も効率的に種を存続していくために。

アトラスの結論では、そのやり方では人類の滅亡を防げない。しかし長期間を安定させて生きていくには、確かにその選択こそが最適解だと認めてもいた。

また人間性を肯定する世界であれば、遠坂凜の例が上げられる。

徹底した管理を拒み、個人としての自由を尊重する。要は人の可能性を是とするものであり、これまでの人類の有り様のままだと言える。

個人で見た遠坂凜は優れた人物だ。彼女が生きている内であれば、あるいは世界は破滅を回避できるかもしれない。

だが、その先はない。遠坂凜は何処までも個人としての価値観に従うだろう。彼女は決して自分の認識する以上の世界へとは広がらない。

ならば、それらの例と合わせて考えれば、甘粕氏の思想とはまさしく極論と呼べるものだ。

人の可能性、非合理性を肯定し、それこそを至上の価値に置いている。

難関を解決する事で発生する成長、進化。甘粕氏が試練と呼ぶそのために、様々な災厄を人為的に引き起こして未知数の要素を強引に発現させる。

はつきり言って愚かな選択だ。理屈としては通っているが、甘粕氏のやり方は無理が過ぎる。これ以上の過剰な消費は、人類という種に致命打を与える可能性が高い。

しかし同時に、可能性はゼロではない。甘粕氏の言う結論にも一抹の可能性はある。そしてムーンセルは、人の想定し得るあらゆる可能性を掴む願望器だ。

真実その世界を思い描けるのなら、世界の変革は実現し得る。そし

て甘粕正彦とは、それを成し遂げられる人材だった。

改めて考える。何故、甘粕正彦という人物が存在するのか。

出生が際立って特別だったわけではない。あくまでも彼は生のままの人間であり、そこに疑う余地はない。

だというのに、彼の強さは異常そのものだ。英霊たちと正面から斬り結び、渡り合い、絶殺の一撃からも生き延びる。

人類の枠組みにある者として、それはあり得ない事実。何より異常なのは人の領分を逸脱しながら、未だに彼が人間のままだということだ。

甘粕正彦は異形へ堕ちてはいない。彼は人間のまま、可能性という人間としての武器を振るい、人間の意志が持つ価値を証明している。

神秘は消え失せて、停滞の袋小路に陥ろうとしているこの世界で、どうして彼のような人間が産まれたのか。今の人類とまるで真逆の方向に向かう男に、ここまでの強さが与えられたのか。

……一つ、思い至った考えがある。

時代毎に現れる英雄、その出現は人類の集合的無意識の後押しによってもたらされる。

人々が抱く祈りを受けて、その世界を救うために、一つの時代に転換をもたらす者が、英雄。

彼らは常人より抜きん出た傑物として歴史の表舞台に現れる。頭角を現した英雄は人々の上に立ち、時代の主役として伝説を築くのだ。

その魂の熱量が燃え尽きる瞬間まで。やがて語り継がれる祈りの象徴となった英雄は、座へと招かれ、英霊として昇華する。

そのような英雄は、現代において現れる事はまず無い。

文明が発展し、世界が開拓されて拡がった人類の認識下では、世界を救った程度では英雄とは見なされないから。

一人の悪意が世界を滅ぼし、一人の欲望が世界を枯らす。文明という力を得た人類にとって、それらは決して戯れ言ではなくなった。

知らず知らずの無意識下で、人々は世界を救う役割を担っている。もはや個人の救済が求められる世ではなく、種全体として機能する抑

止力だ。

例えば、今の世界の停滞とて、見方によればその一つだろう。

これ以上の消費を避けて、種の寿命を少しでも延ばすために。人々の無意識下でそのように結論が出されたからこそ、現在の停滞した世界が訪れた。

根治治療ではなく延命措置を人類は選択した。先に破滅があるとしても、緩やかな衰亡こそが残された幸福であると人々の意識は答えを出したのだ。

それもまた、霊長の無意識が働きかける抑止力。安寧を求める事も一つの選り得る世界であることは間違いなく、結論を否定することは出来ない。

けれど、ならばこそその疑問もある。本当にそれだけなのだろうか。

何故なら、生命とは原則として滅びを避けようとするものだから。知性があれば尚の事、潜在的な恐怖から逃れるべく意識はその方向へと向かおうとするはずだ。

それが例え、安寧の果てに至る停止であったとしても。その結論に同意する意識があるのと同様に、何が何でも生命としての足掻きを止めまいとする意識も存在するはず。

あの遠坂凜も然り、未だに地上で争いの火が途絶えていないのもその証拠だ。決して少なくない規模で、人類はまだ諦めてはいないのだと。

”もしも、それが抑止力として働くのなら、人々はどのような”英雄”を立ち上がらせる？

停滞したまま弱りゆく人々を良しとせず、安寧という名の破滅から世界を救うもの。

人類に再び立脚する強さをもたらし、袋小路に陥った未来に突破口を開いてくれるもの。

それを為すのは社会ではない。集合体としての力では、もはやそれは成し得ない。

個による救済が求められている。常識を打ち破り、今の世界を根底

から覆す。そんな劇薬にも似た存在の投与が、この世界には求められているのではないか？

甘粕正彦とは、そんな人々の祈りに後押しされて現代に現れた”英雄”なのかもしれない。

試練という名の特效薬によって人類を救済する。袋小路に陥った世界に突破口をもたらして、アトラスの計算でも予測できない未来を切り拓くのが、あるいはこの男なのではと思えて――

「――停止カット」

無益な思考を打ち切る。

こんなものは推論ではなく、妄想の範疇だ。

突飛が過ぎる。証明の手段もない。理論とも呼べない代物に、思考を割いても結論など出ないのだから。

「……私が感情としての反応を示しているのは理解しました。それが魂に刻まれた雛形であるというのも否定はしません。

ですが、これで師の主命は果たされたといえるのでしょうか？ ただ事実を認識することが、この器を満たすことだと？」

本題に戻ろう。

甘粕氏と交流するのも、全ては師よりの主命を果たすため。氏は観測の対象ではあるが、理解が目的ではない。

本来の目的が果たされないのなら、この行いの意味はない。けれど、それだけの成果があった事だとは思えなかった。

彼女の生き様を理解した。

不合理なものとして在りながら、そこに人としての価値があったことも。

魂の本質にも打ち勝つ精神の矜持。そんな強さがあることを確かに認識した。

しかし、言ってしまうのなら、それだけの事でしかない。

事実を認識しただけで、私に変革の実感は何もない。

これが師の言っていた事、私という空の器に中身を満たす事とするのは疑念が残る。

「そうだな。こんなものは所詮、他人事だ。たとえ何某かを感じ入っ

たにせよ、重きを占める事にはなるまい。

感情の持つ力の本質とは、理屈を超えた何かに対する執着だ。個人の価値が時として世界さえ上回るのは、全て感情によってもたらされる基準だろう。当人以外にはまるで通用しないものだろうと、それがどうしたと言い張って押し通す。

それは感情の不合理であり、熱となる強さでもある。おまえにとつての特別な何某か、断じて譲れないと思える結論を得た時こそ、彼女のような信念の形と魂に灯る火を見出だすだろう。

要はおまえの大切なものは何かということさ。おまえの師の言葉とは、そういう事ではないかな？」

つまり、彼女はあくまで参考例サンプルだと。

私が至るべきテストモデル。感情というものが持つ理屈を覆す効果の実証例。

魂が持つ本性にさえ乱されぬ精神の形。理屈ではなく、それが尊い価値を持つものだと感じたのは、否定のできない事実である。

「……私にとって大切なものは、アトラスの理です。それが私の意義として、師より授かったものだから」

「理そのものではなく、師の教えという部分が真つ先にくる。分かりきった答えだろうに、何を誤魔化すのだ？」

おまえが大切なのは師だ。愛してるのだろう、その者のことを。創造者として、己の担い手として、絆の形は数あろうが、その一点だけは違いあるまい」

私は師の道具。師の意向を果たすもの。

それが私の存在意義で、私の生きる目的だ。

甘粕氏の言う通り、もしも世界で私の基準を覆すものがあるとすれば、それは師の存在に他ならない。

けれども――

「……それならば、やはり私の在り方は変わらないと思います」

今のアトラス院に命はない。

私は最期のアトラス。その終幕の役割を託された者。

己以上に役割を果たせるものを創造できるのなら、己の存続に必要な

以上の比重をおかない。

それが錬金術師の理だ。終わりは嘆くべき悲劇ではない。確かな意義を遺せたのなら、アトラスにとって納得するに足る結末だから。「私は意義を果たします。それが師よりの主命であり、遺命だから。

大切に思うもののための生き方を全うするのが人間なら、理に従う事が私の生き方なのでしよう」

アトラスの理に従い、与えられた意思を果たす。

戦いを勝ち進む。聖杯を獲得する。それが叶わなくとも、万能の願望器は誰の手にも渡さない。

私は聖杯戦争を戦い抜くだろう。

自分にとつての大切なもの、特別に思う何かのためというならば。

私にとつてはこの行いこそがそうだから。あらゆる敵手の打倒のため、確かな効率に従い遂行する。

きっと、感情の強さとは大切なものを『守る』ためにあるのだろう。だけど私には、そんな感情の定義にだけは当てはまらない。

——私の大切な人は、既にこの世にはいないのだから。

\*

——そして、決戦の日は訪れた。

昇降機が降りていく。

決戦の当日となる7日目。死闘を繰り広げる二組を乗せて、そのための戦場へと私たちを連れて行くために。

限定された空間内では、必然として両組が向かい合う形となる。対戦の組み合わせの発表以来、私は相手となった人物と直に対峙した。

遠坂凜。

月に上がった魔術師ウィザードの中でも指折りの実力者。

聖杯に手が届く位置にいる優勝候補の一角。彼女を強敵と認識するの否はない。

「はじめまして、アトラスの錬金術師。こうして実際に話すのはこれが初めてかしらね」

「その記憶は正確なものであると、こちらも記録しています。」

「ごきげんよう、遠坂凜。あなたの事は地上の頃より優先度の高い観察対象でした」

「ふうん。アトラス院は穴蔵に引き籠ったままで何もしようとしなかったけど、あなたたちはあなたたちでやるべき事はやってたってわけだ。」

知ってるのよ、エジプトシンジケートとのクローン・マーケットイング。あなたたっていう”規格外”がその成果なら、アトラスは狂ってるって噂は本当だったみたいね」

「それを凶行のように認識されるのは心外です。これは極めて理性的な判断によるもの。電腦の海の開拓に人類を対応させるのは急務でした。魔術が神秘としてあった頃の精製法が失われた以上、私というモデリングの完成は有益な成果であると自認しています。過程での検証用個体や廃棄例も、必要な消費だったと結論できるでしょう」

「そう。まああのホムンクルス自身がそう言ってるなら、何も言わないけどね。そうしてアトラス院は満を期してあなたを送り込んだ。アトラスは世界を制するつもりなの？」

「制するのは世界ではありません。アトラスが制するべきは未来です。人類存続のため、このアーティファクトはアトラスの管理下に置かれるべきだと結論が出されました」

レオナルド・ビスタリオ・ハウエイでも、遠坂凜でも、無論のこ  
と甘粕正彦でもない。

月の聖杯はアトラスの手にあるべきだ。師が下した結論を、私という手段によって実現する。

与えられた用途に従い、この器の性能を十全に行使すればいい。それ以外の事柄は、今は必要ない。

「私には『負ける』という選択肢はありません。課された目的いのちがある限り、私はそれを選べない。ですので、私が負ける事は無いと思います」  
「言ってくれるじゃない。それってつまり、私なんかには負ける要素



がないってわけ？」

「あなたとサーヴァントの性能は把握しています。あなた方主従が実力者であるのは認めるところですが、検証された予測によれば一手及ばない。」

仮想検証より確定した戦いは戦いではありません。それは消費、あるいは虐殺と呼ばれるものだと教わりました。本来ならそういった戦いは禁止されているのですが、今回はこういった場ですので、どうかご容赦のほどを」

「……オーケイ。アンタ、絶対泣かせてあげる」

遠坂凜の反応に変化が見られた。どうやら怒りと思しき感情を保持たらしい。

挑発の意図はなかったのだが、感情への対処を誤ったようだ。今は並列思考を全て戦闘用に切り替えているので、どうにもその辺りの機能が疎かになっている。

とはいえ、訂正の理由はない。告げた事は事実でしかない。能力の不足により、目的と成果が一致しない可能性は理解している。

しかし、その可能性についての検証は為されている。その上で、こちらの勝利は動かないと結論を下した。

マスターとサーヴァント、両者の性能を鑑みての結論だ。そこに誤りがないことは、まもなく始まる戦いによって証明されるだろう。

「へえ、なかなかいい感じじゃねえの、嬢ちゃんたち。そういうのは大事だぜ。後腐れを残さねえってのはな」

言葉は遠坂凜のサーヴァントが発したものの。

ランサー 槍兵の英霊。その真名を鑑みれば、数あるランサークラスのサーヴァントでも最上位に位置する存在だろう。

「まあ嬢ちゃんたちの方はそれでいいんだろうが、俺としちやあ後ろのそいつが気になるぜ。なあおい、聞こえてねえのかよ、おまえ？」

ランサーが言葉を向けるのは、控えさせているこちらのサーヴァントに対してだった。

「ランサー。そいつ狂戦士よ。ハイサーカー 会話なんて成り立つわけないじゃない

い」

「そりゃあな。端から話を通じる手合いとは思っちゃいねえよ。だがどうにも気になってな。狂戦士だとは見りゃ分かるが、気配にちと違和感があるんだよ。」

こいつ、静かすぎる。狂戦士といえど、英雄ならば持つて然るべき覇気がねえ。理性の無さよりも、何処か型に嵌まった人形みてえな感じがするぜ」

ランサーが何を根拠にそう結論付けたのかは分からない。

だがその指摘は誤りではない。確かに言うように、このバーサーカーは『人形』だから。

「このバーサーカーは『狂化』による理性の喪失だけではありません。施したアトラスの術式で完全に自己を廃しています」

「自己を廃してるとって、人間の魔術でサーヴァント相手にそこまで!」  
「アトラスの技術でなら可能です。マスターとサーヴァント間の思考の同一化。この縛りによりバーサーカーは完全なる制御下にありません。人間性を廃することで、より信頼性のある兵器として運用するための」

「兵器として、か。大人しそうな顔して随分とえげつない真似してくれるじゃない。武器に心は要らないってわけ?」

「離反の可能性を考慮すれば有効な処置かと。如何にサーヴァントの理性と信頼を結んでも、ムーンセルのプロテクトがある以上、確実にはないのですから。」

そして、遠坂凜。武器に心が必要であるかと問いましたね。その通りです。道具がその用途を遂行するのに、心の持つ非合理性は必要ありません」

ちようど、今の私がそうであるように。

師の道具として戦いに向かう今の私は、余分な感情には囚われていない。

明確な勝利という目的のために。与えられたこの性能を十全に発揮する。

そういう意味では、バーサーカーも同じものだ。

彼も過去に実在した英霊であるとは承知している。バーサーカーというクラス名ではなく、本当の真名があることも。

けれど、それが何だというのだろう。これに兵器としての役割を求めらるなら、個体名を重視する必要はない。

その能力を把握し、十二分に引き出して運用できるなら。私もバーサーカーも、目的を達成するために器の中身は不要なものだろう。

「へっ、そうかい。まあ他所の事情に口出す野暮はしねえさ。おまえさんと、そいつ自身で選んだ事だしな。好きにすりゃあいい。

そうだよな、マスター。そんなもんで俺たちに勝てると思うのなら、実際がどうなのか教えてやればいい」

「そうね、ランサー。どのみちもうすぐ答えは出るわ。勝つ事がやってきた意味の証明になるのなら、この戦いに全力を尽くすのが唯一出来る事だから」

遠坂凜の意見に同意する。

結論は間もなく出る。何より明確な勝利という結果によって。

勝者と敗者。事の優劣を定めるのに、これほど有効な概念はない。

師の結論の正しさを証明するために、最も優れた者としての証を立てる。

言葉を並べる意味はない。何よりこの闘争の結末にこそ、解となる答えが現れるから。

——そして、下降する昇降機が止まり、私たちは決戦のフィールドへと降り立った。

「昇華の雲は螺旋を描き、黄金の尾長鳥が暁を告げる」

これより先、この身は師の意思を遂行する演算機構。

蓄積された知識より未来を予測し、最適解の選択肢のみを選んで進む。

「月が南天に昇るとき不純物は取り除かれ、正しい終わりが始まります」

高速思考、展開。分割脳、同機開始。

感情の揺らぎは消えて、思考は数理の式に染め上げられる。

脳の空間を掌握し、かつての神秘を再現する魔術回路<sup>サーキット</sup>。励起され

た器官の熱さを感じ取ながら、自らを完全な闘争の形態へと持っていく。

「——さあ、準備はいいですか？」

万全を整えて、私は戦闘を開始した。

剣戟の音が鳴る。

再現された南海の風景を蹂躪しながら、二騎の暴風が荒れ狂いながら絡み合う。

青い風の名はランサー。

朱き魔槍を振りかざし、駆け抜けるその様は疾風の如し。

速く、巧く、一点の無駄もない槍捌きはまさしく武の極致。極みに達した英雄は退く事を知らずに攻め立てる。

赤い風の名はバーサーカー。

巨大な矛を繰り出して、一撃の毎に圧倒的な破壊を生み出す剛力無双。

単純明快、破壊こそが武の真髄であると。長身のランサーをして見上げるほどの巨体が、目の前の小兵を粉碎するべく暴れ回っている。

一步も退かない。どちらの攻めも怒濤の勢いで進み続ける。

さながらそれは二つの暴風が結び合って生まれた台風だ。周囲に轟音と衝撃を撒き散らし、決して停まることなく暴れまわっている。

人型のそれとは思えない闘争は、彼らの超常を証明するもの。人では追えない二騎の天災は、彼らだけが共有できる領域で苛烈な激突を繰り広げていた。

ランサーの攻め手は、その手にある一振りの魔槍。

引いて、構えて、突く。特殊な芸当ではない。槍という武具における基礎の動作。

されどここで見せるは英雄の技。基本の動きを極限まで研ぎ澄ま

した槍は、本来の一点を貫く攻め口を、面の範囲を巻き込んだ豪雨の如き攻勢に変えている。

基本こそ真理であり、絶対となる奥義である。音を遥かに置き去りとした神速の槍撃は、逃れる余地のない確殺の技巧と成り得ている。対し、バーサーカーの攻め手は一つきりのものではない。

得物は一つ。しかしその得物こそが異様。切断、刺突、薙ぎ、払いと、あらゆる武技が有効となる特徴を有している。

得物の名こそは方天画戟。突き刺し貫く事に真髓を持つ槍とは違う。全ての局面で対応が可能のように武具の理を突き詰めた万能武器だ。

当然、その扱いは至難だが、担い手たるバーサーカーには一切の窮した様子がない。己の手足と等しく使いこなしてその猛威を振るっていた。

互いが異なる攻勢を仕掛けて、譲ることのない攻め手の応酬。

元より彼らの性質とはそういうもの。守りよりも攻め込む内にこそ活路を見出す者。故に気負いもなければ容赦もない。

ならば両者の戦いの趨勢は互角なのかと言えば、その限りとも言えない。武人としての質は共通していても、根本的な戦いの有り様の部分で二者には差異が存在した。

ランサーの戦いは真つ当だ。鍛え上げた武技を駆使し、己の感覚を信じて踏み出す。武人たるならば斯くあるべきと呼べる姿勢。

逆に、バーサーカーの姿には異端が見え隠れしている。狂戦士として理性が剥ぎ取られていることを考慮しても、その異質ぶりは得心できるものではない。

対応が良すぎるのだ。繰り出される攻めに対し、まるで知っているように対処する。現にランサーの怒涛の攻めを受けながら、その身は未だに一刺しも穿たれてはいなかった。

直感や経験だけでは説明しきれない。その先読みは狂戦士のクラスにはそぐわないものであり、それと相まって何処か無機質な印象を受ける。

機械的に、ただ打ち込まれた指令コマンドを実行しているような、意志の稀

薄さ。猛々しく吠える声も音量だけで空虚に聞こえてくる。

まるでそれは繰られた人形のように。武威を振るうのは他者の意思で、彼自身はただ兵器でしかない。

「ランサー、気付いてる？」

「ああ。どうやら読まれてやがるな。バーサーカー自身に出来る芸当とも思えんし、となるとマスターの嬢ちゃんの方が」

常に後の先を取る先読み。それを為すのはバーサーカーではない。攻勢の流れを読み、先手を取れるよう指示を出しているのはマスターのラニである。

マスターにサーヴァントが従うのではない。マスターがサーヴァントを操縦している。それがラニⅡⅧとバーサーカーという主従の姿だった。

「蓄積された情報に不足は無し。全ての事象の可能性は既に描き出されています」

英霊であるサーヴァントと、人間であるマスターとの間には明確な性能差がある。

それは器そのものの格差。たとえ下位に属しているとしても、英霊とは人間を超越する存在である。

マスターはサーヴァントに追い付けない。サーヴァントの六手の内に一手の助力、それがマスターの領域であり限界だ。

しかし、ラニⅡⅧこそは来たる未来に向けて設計された新人類。物理的な戦いは意義ではない。思考脳内による分析こそがアトラスの錬金術師の真骨頂。

その高速思考はサーヴァントにさえ追い付ける。弾き出された予測は未来を捉え、正確無比に打ち込まれる指令コマンドがランサーの一手先を上回る。

「現状の推移は想定の特容を超えるものではありません。ここまでの事象は既に観測されたものです。長引きこそするでしょうが、行き着く結果は同じ。

……こちらの勝利は動きません。速やかな降伏を推奨します」  
既に未来は観えている。

観測を終えた事象は、もはや戦闘ではなく消化行程に過ぎないと。無駄な消費は避けて然るべき。他意があつての言葉ではなく、ただの事実としてラニは告げた。

その発言は些か以上に性急でもあるだろう。

ランサーも、バーサーカーも、五体満足に健在だ。両者ともに決着には程遠い。

確かに優位はバーサーカーに傾いている。だがそれとて決定的とまでは言えない。まだまだ切欠次第で、戦況など如何様にも変化していくだろう。

しかし、決して虚勢を張っているのではない。

ラニは言った。全ての事象は既に観測を終えたものであると。

彼女の脳裏ではあらゆる行程が洗い出されているのだろう。相手の性能を把握して、自らの能力と比較して、その上で出された結論だ。それを覆すことは容易ではない。そして覆せなければ、即ち敗北の確定となる。

早すぎる勧告も、ラニにしてみれば当然と思えるもの。

彼女は既に知っているのだ。全ては徒労に終わるものと、その結果を理解している。

降伏は相手のためを思つてのものだ。無為なる行いに意義はなく、苦痛と徒労を長引かせるよりはと本心から氣遣つての発言である。

他意なんてものは何処にもない。ラニⅡⅧは、未来の勝利を既に観測しているのだから。

「ほんとに言つてくれるわね。それでどう？ ランサー」

「ただのハツタリじゃあねえな。ここまでやり辛いのはそうはねえ。あの嬢ちゃん、なかなか大したもんだよ」

対峙するランサー自身も、それを認めた。

歴戦を重ね、数多の逆境を覆してきた英雄をして、ラニⅡⅧの予測を上回することは容易ならざるものと。

戯れ言だとは切り捨てない。直に打ち合った手応えとして分かる。

この敵は長年の戦歴を紐解いても稀に見る難物だと認識した。

「そう。なら向こうの言う通り降参でもしてみろ？」

「ハッ、冗談だろ。これしきの事で制したと思われたとあっちゃあ、それこそ我が名が廃る」

だが無論、彼ら主従はその程度で折れるほど脆弱ではあり得ない。如何に相手が強大だとして、信念の骨子は挑む事を諦めない。正しき強さを持つ少女とその矛たる槍兵は、燃え上がるような奮起を見せた。

「——ええ、それでこそよ。」

ギアを巻き直すわよ。突き崩しなさい、ランサー！」

「おうさアー！」

戦況が動き出す。

更に回転数を上げる槍の連撃。

疾風怒濤の攻勢は尚もその勢いを強め、己の敵を討ち果たさんと猛り吠える。

されど、それでも不落の壁と立ち塞がるは計測の糸に繰られしバーサーカー。

襲い来る豪雨に等しく槍撃も、既に熟知しているかのように捌いていく。

その対応に穴はない。起こり得る事象の全ては見透され、ゆっくりと着実にランサーを追い詰める。

一点、二点、三点と、瞬時の内に放たれる刺突。

狙うは肉体の中心線。真っ直ぐに揺れない矛先が無数の閃光となつて迫る。

しかし予測は先を読んでいる。演算された攻撃軌道に従って、バーサーカーの矛が動かされる。

如何なランサーの絶技といえど、攻撃箇所が分かっているなら防がない道理はない。そう豪語できるだけの武勇の誉れがバーサーカーにはある。

防ぎ、逸らして、流していく。狂戦士のクラスからは縁遠く感じる武練の冴え。失った理性の代わりに刻まれた兵器としての在り方が、彼に最適解の動きを与えている。

ここで遠坂凛が取る選択は妨害か、あるいは強化か。そしてどちら



を選ぶにせよ、対応策は既に用意されている。

想定は崩れない。経過は見通したままに進んでいる。互いの性能を把握している以上、演算を狂わせる要素は何処にもない。

それは確信。予測した未来への演算は覆らない。一秒先の動きを常に把握して、ラニⅡⅧは定められた結果へと行程を進めていく。

「——たわけ。手温いぞ、狂戦士」

だが、完全に想定範囲内にあつたはずの一撃は、バーサーカーの矛を躲して、その身を穿っていた。

想定以上の疾さだった。予測し得ない威力だった。

強化を受けたわけではない。妨害をされたわけでもない。

それはランサーの決死の踏み込み。技巧の繊細を振り切り、荒々しくも繰り出された切っ先がバーサーカーの防御を崩していた。

思わぬ一撃と思わぬ損傷。それは想定外のものだったが、事象の意味を把握すれば対応できないものではなかった。

確かにバーサーカーの受けたダメージは軽くない。しかし行動不能に追い込むほどのものではない。たとえ魔槍の一撃であろうとも、半人機人のバーサーカーは倒れない。

他のサーヴァントならば性能に支障をきたす事もあり得ただろう。だがバーサーカーは違う。仮に致死にも等しい損害を受けようと、敵を殲滅するまでその攻勢は衰えない。

この間合いならば、ランサーの敏捷性は十全に発揮されない。ここで反撃を見舞えば、それこそ致命に届く損害を与えることが出来るだろう。

だからこそ、この選択は不思議に思える。

ラニは遠坂凜というマスターを侮ってはいない。その能力を十分に評価し、検証している。

彼女が気付いてないはずがない。この選択の不合理性に。勇み足からの愚行とも評せる行動に、何故彼女ほどのマスターが踏み切ったのか。

とはいえ、好機である事も確かである。

疑問は一瞬、即座に思考の中で呑み干した。

躊躇は無い。慈悲など戦場に不要である。決殺の命令をバーサーカーに下し、この戦いを決めに掛かる。

方天画戟の矛が振り下ろされる、その寸前。

これ以上ない好機を捉えて、七色に輝く宝飾の閃光がバーサーカーを貫いていた。

単なる妨害でなく、直接的なマスターによるサーヴァントへの攻撃。

遠坂凜の宝石魔術はそれを可能とする。たとえ人の域の魔術といえど、一度きりでの消失を代償に炸裂する威力は、英霊にも届き得るものだ。

貫いた魔術はバーサーカーを仕留めるまでには至らない。それでも一撃を狂わせるには十分であった。狙いをずらされ練り出された矛は、ランサーの命にまでは届かないだろう。

これを見越しての蛮勇ならば納得できる。紙一重のタイミングだったが、成功させた以上は有効手だと認めざるを得ない。遠坂凜の能力評価を上方修正しつつ、ラニは態勢を整えるべく支援の魔術を發動させようとする。

その緩み、攻めではなく退きの思考、歴戦の戦士であるランサーは見落とさない。

刹那とも思いきその間隙、ランサーの更なる踏み込みがバーサーカーを押し返した。

ランサーの選択は徹底して攻勢あるのみだ。

優れた敏捷性による攪乱、機動戦という選択肢を捨ててまで、その姿勢は攻める事を重視している。

それは愚策とも取れるものだ。捨て身と言ってもいい。強引が過ぎる攻め口は自滅の可能性を大きく引き上げる。手段として合理的ではないと結論できる。

だというのに、その悪手が計算を上回る結果を弾き出している。

決断が早い。踏み込みが強い。あらゆる行動を予測するはずのラニが後塵を拝している。

思考の速度でアトラスの錬金術師を超える者はいない。それは確

かな事実であり、現にラニの性能は遠坂凜のそれを上回っている。

能力で凌駕する者が、劣る者に対し遅れを取る。優劣差を覆す要因は、互いのスタンスの違いにこそあった。

捨て身の気迫で打って出たランサーの攻勢は、あらかじめそうと定めたものではない。

それは独自の判断だ。攻めに出たランサーも、遠坂凜の魔術も、各々が最良と信じて行動した。

単純な意図の疎通ではない。互いにあつたのは確固たる信頼の結び。この相手ならばそれが出来ると、そう信じているからこそ後を任せて踏み出せる。

不確定だろう。合理的だとは決して言えまい。しかし、二つの意思の相乗により発揮される強さは、一人のそれを超えるものだ。

対して、ラニの強さは独りのものである。

人形の如く自己を廃したサーヴァント。決断を下す意思を持つのは一人だけ。

どれだけ速く精密であろうとも、一人の思考では届かない。全てを合理で判断しようとする性質は、故にこそ自ら死地へ飛び込む不合理を選べない。

窮地にあつて活路を開けるのは経験と意志の賜物だ。数多の戦場を切り抜けて不屈の意志を磨きあげてきた遠坂凜とランサーだからこそ、彼らの連携の冴えは合理の予測の一手先を行く。

心の意義を否定した者に、心強くある者の刃が突き刺さる。

間にある趨勢を傾かせながら、両者の死力を尽くす戦いは続いていった。

自らが追い込まれている事を自覚する。

導き出した未来の予測、その算出解が狂わされていくのを目の当た

りにして。

遠坂凜。彼女の攻め筋は千差万別。

剛の如き攻めに出たと思えば、しなやかな柔の守りにも徹しきれ  
る。

決して一つの戦い方に囚われない。思考の柔軟さと相まった勝利  
への強い意欲こそ、遠坂凜という人間が持つ何よりの武器であり価値  
なのだろう。

対比して、自分はどうか？

理で構築された予測の道筋を崩されて、未だ元へと戻すことが出来  
ないでいる。

修正に乗せするように重ねられる想定外。勝負勘とでも言うべ  
きか、アトラスの予測とは異なる相手方の感覚が、こちらにペースを  
戻させない。

対応策は現状のところ打ててはいない。より優れた性能を持ちな  
がら、それは私という人格が自らの器の性能を活かしきれてない証明  
だった。

私は未来を予測することを旨とする演算器。それ故に、やがて至る  
自らの未来にも容易に予測がついた。

なんて、無様。このようなラニⅡⅧは駄作が過ぎる。

完璧を謳いながら、この体たらく。心への無理解が招いた結果がこ  
れならば、因果はやはり自分にある。

欠落を欠落として是正しきれなかったからの今なのだ。師よりの  
期待に泥を塗った咎は、そそがれなければならぬだろう。

「……申し訳ありません、師よ。あなたにいただいた筐体と命を、お返  
します」

サーヴァント同士の直接戦闘で遅れを取るなら、見込むべきは宝具  
の開帳。

宝具こそが英霊の真価。その英雄の伝承の具現たる武装は、一撃で  
戦況を変えるだけの力を持つ。

当然ながら、バーサーカーにもそれはある。純然たる破壊力におい  
て、バーサーカーの宝具は最高位である。たとえ聖杯戦争中の英霊を

見渡しても、これを超える威力を持つ宝具はそうないはずだ。

だが、予測は既に宝具戦での勝算の低さを結論付けていた。

聖杯戦争に採用される決闘方式。サーヴァント同士が真つ向より立ち合う戦いで、ランサーの持つ宝具はまさしく「必殺」と呼べる能力を有している。

威力ならバーサーカーの『対城宝具』が上だろう。しかしランサーの魔槍は『対人宝具』。余分な破壊をもたらさず、ただ敵手の命を刈り取る事に特化している。

その中にあってもランサーの宝具は最優の性能だ。速度、燃費、必殺性を兼ね備えるそれは、単独の敵を仕留めることにかけて右に出るものはない。

仮にこちらが宝具を抜けば、向こうもまた宝具を使うのは間違いない。

宝具同士の撃ち合いとなれば、先手を取るのは向こうとなる。バーサーカーといえども重大な損傷は避けられない。相打ち狙いで打つて出るなど分が悪すぎる。

ただし、それはあくまでも、通常の宝具戦であった場合での話だ。

「全高速思考、乗速、無制限。北天に舵を」  
モード・オシリス

この身に備わる機能の全てを解放する。

出し惜しむものはない。文字通りに全てをここで使い切るのだ。

マスターにとっての切り札である『令呪』の発動だけでも足りない。師より与えられた、この『心臓』に宿された力を解き放つ。

——それが何を意味するのも、無論のこと、理解しながら。

「任務続行を不可能と判断。入手が叶わぬ場合、月と共に自壊せよ——  
——これより、最後の命令を実行します」

師は告げた。聖杯を入手せよと。

人類にとっての可能性であると同時に危険因子でもあるアーティファクト。その存在を管理するのはアトラス院であるべきとしたのが師の判断。

そして次善の策として、人類の入手が叶わないように破却する。それこそ師が私に課した『主命』オーダーだった。

「ちよつ、なにそれ……!? アトラスのホームクルスってのはそこま  
でデタラメなの!?

魔術回路の臨界収束……! 捨て身にもほどがある、そんなの、た  
だの自爆じゃない……!」

「ビュウ、カミカゼってやつか。さて、どうするかねお嬢ちゃん? 確  
かアンタらの専売特許だろ、ありやあ?」

「いつの時代の話だつてのよそれ! 軽口は後よランサー、相手がそ  
の気ならこつちも全力で殴りつける……!」

焦燥を見せる遠坂凜と、逆に危機感を感じさせない飄々とした態度  
のランサー。

聞こえてくる彼らの声も、どこか遠い。確定した結末は、もはや覆  
すことなど敵わないのだから。

変形を果たしたバーサーカーの宝具。

一つは弓に、一つは槍大の矢に。番えられた矢に搭載されるのは、  
超々高密度に圧縮された魔力の凝縮体。

解放するだけでもアリーナをゆうに崩壊させる第五真説要素の臨  
界突破。それを指向性を持たせて収束し、令呪を上乗せして放てばセ  
ラフさえも貫くだろう。

それは聖杯戦争の運営にも甚大な影響を与える。聖杯の持ち主を  
選定する戦いは中断され、月のアーティファクトは人の手の届かない  
所へ遠ざかる。

それだけの威力を発射するバーサーカーは勿論、『心臓』を臨界させ  
た私も、このアリーナの何もかもを諸共に消滅させる事を代償に。

「ラニの心臓、アレ、本物の第五<sup>エー</sup>真説要素<sup>テラ</sup>よ! 爆縮させたらアリーナ  
くらい吹っ飛ぶわ!

その前に——— 宝具で、中心を穿ちきつて!」

「おう、らしくない大盤振る舞いか! いいね、いよいよ決着だ!」  
ランサーの槍から魔力の上昇を観測する。

恐らくは宝具を使用するつもりだろう。だがそれも無駄に終わる。

心臓穿ちの朱槍といえど、通常の人体ではなく半身半機の性質を持  
つバーサーカーを一撃で沈黙させることは出来ない。

それだけの猶予が残るなら、宝具の真名解放は十分に可能。令呪で縛ったバーサーカーの行動は妨げられない。目的は達成される。

ムーンセルより施されたサーヴァントへのプロテクトも、既に改竄済みだ。

狂戦士のクラスを選んだのもそこに理由がある。理性を封じることで、深層意識に刻まれたムーンセルを守護する本能も一緒に封印する。ムーンセルからの直接介入も、アトラスの術式を用いれば僅かな間の抵抗なら可能だ。

離反を警戒するだけではない。何よりも危険なのはムーンセルの直接干渉。それを防ぐための手段、ムーンセルの意に反する行為でも実行に移すため、私はバーサーカーを選択した。

防ぐ手立てはない。どのような可能性も間に合わない。

これで全てが決着する。課せられた主命は果たされる。

道具として、この生命を引き換えにして、私は自らの意義を履行するのだ。

躊躇いも、後悔も、私には存在しない。

如何なる妨害も許さないよう、私は速やかに決断をくだす――

\*

「――失敗、であったのかな。彼女への接し方は」

誰に対しても取れぬ呟きは、響きだけを一時残して即座に消える。

きつとそれには何の意味もない。ただ、胸中の落胆を僅かに吐露しただけのこと。

しかし、この男に限って言えば、それはとても珍しい。およそ後ろ向きという概念の全てが当て嵌らない、あらゆる意味で前向きの権化とさえ呼べる。

そんな甘粕正彦が、後悔を混じらせて息をつくなど。それはもはや

異常事態であり、この男にそれはあまりに似合わなすぎる。

「失敗？ 失敗かじやと。失敗ならば、そもそもそなたを見出した時点で誤っておろう。」

心を求め、その理解を得るために、よりにもよってそなたを頼ろうなど、危機の何たるかも知らぬ赤子のように無知蒙昧よ」

故に、傍らに在る者はそれを見落とさない。

遊興の種を見つけたアーチャーは、愉悦を笑みに浮かべて言葉をかけた。

「言ってくれ。これでも俺なりに配慮したやり方だったのだがね」

「知らぬ心を理解させる。赤子に等しき精神に刺激を与え、戦に懸ける信念に自立と自覚をもたらそうと。」

そのために、あえて理屈の通じぬ狂人の心象に触れさせた。理解のために、真逆の未知という衝撃を与えようとするのはそなたらしいと言すべきかのう」

生命を入れてほしいと求められた。

人形のような無感、自己を持たない空の器に中身となる心を与えてほしいと。

甘粕正彦はそれに応えた。だが、その結果は望まれたものには程遠かった。

「流石に此度の事に関しては悠長が過ぎた。自らの目覚めを待つような手法では時間が足りぬ。」

感情を与えるならば、もっと単純にぶつかるべきじゃった。直接、そなた自身が執着の対象となれば良い。所詮、他人如きの事柄など程度が知れておるのだから。

尤も、そなたではそれも厳しいがのう。無垢なる小娘の心を動かすのは、そなたのような魔人ではあるまい」

「返す言葉もないな。今回の件については、俺ではあまりに不適任だった。素直にそう認めよう。」

強きを練磨するのではなく、一から育て上げるのはどうにも不得手らしい。確たる意志の芽生えになればと思ったが、うまくはいかないものだ」



「是非もなからう。そなたは意志の貴賤を問わぬ。善も悪も、強く輝いておれば何でもよいという無節操。思想の如何ではなく、問うておるのは思想の美しさじゃ。」

如何を問わぬ事は、意志の何たるかを示さぬこと。正も負も無く、貫くのならそれでいいでは、導いてやることも出来まいて」

試練の存在こそが甘粕正彦の信条だ。

己の力が通用しない難関、掲げた信念を否定される対立存在。

そうしたものに阻まれて、乗り越えてこそその成長、輝きであると。

その理論は間違いではない。強さの意義が最も発揮されるのは、心置きなくその力を振るう事が出来る場があつてこそなのだから。

しかし、それは同時に、既に道を定めた者にだけ当て嵌る概念だ。

決意を抱く勇氣も覚悟も、己の心が見えていなければ一步目すら踏み出せない。

試練では意志を鍛える事は出来ても、芽を出させる事は出来ない。

甘粕正彦の在り方にとって、それは如何ともし難い事柄だった。

「じゃが、わしはあの娘の有り様を好んでおつた。心持たぬ人形、道具の如き有り様、その有意義さは確かであつたからのう。」

理屈のみに徹し揺るがぬ者とは、一切の執着を持たぬ者。感情故の強さこそ持たぬが、同時に脆さもまた無い。従順にして有能、その有用さはもはや語るまでもあるまい」

主に対し絶対服従であり、感情ではなく理屈からの諫言を行える者。

指導者の立場から見ても、これほど有益なものもそうはない。絶対に裏切らないと信頼できる優秀な部下、それだけでも価値は十二分にある。

だが何よりもその価値は、主の意向には決して逆らわない事だ。物申すとしても論理的な観点からの忠言であり、感情から反発を示す事はない。

その主命がどのようなものであれ、道具である彼女はやり遂げようとする。それは人間性を切り捨てているが故の利点であり、ラニⅡⅧだからこそその強みだった。

「過去にのみ抛り所を持つ者は、変わらぬ過去であればこそ決して揺るがぬ。今の全てに重きを持たぬが故、己自身でさえ理屈の内に置けるじやろう。」

人形？ 道具？ 大いに結構じゃ。どうあれ役に立つものは、わたしにとって好ましい」

信仰への畏敬さえも道具として貶めた革新の王。

神秘、幻想の類いさえも彼女にとっては役立つもの、利用すべきものの。

ならば人間とて、その例外ではあり得ない。善いか悪いかでなく、有用か無用かで相手を測っている。たとえ狂った殺戮者であろうとも、有用だと判断すれば重用してみせるだろう。

そこに人間性など考慮されない。王の行いに役立つ事は、即ち国にとつても価値を持つこと。実利の繁栄こそ願うのが彼女という王のカタチだ。

「なればこそ、奴の師が告げたという言葉を、わしは無価値と呼ぼう。そのように造つたのじゃ。ならばその通りに用いるよりあるまい。それは築きし者の責務じゃ。そこを違えるならば、所業の全てが無為となろう。」

如何なる情があつたにせよ、そこを誤るべきではなかつたはず。やはり愚行でしかあるまい」

中身こころを見つけれという主命。

ラニⅡⅧに与えられたそれは、道具の有り様の価値を下げるものだ。

それがどのような葛藤の果ての選択であつたかは、アーチャーには定かではない。

だが、何らかの理屈があつての事ではないのは確かである。ただ性能を下げるだけの無意味さを思えば、勝利のための言葉ではないだろう。

きつとそれは感情に由来する。本来の用途を損なつても、どうしようもない感情がそこにはあつたのだ。

それは無意味なものなのかもしれない。

アーチャーの言う通り、愚行と呼ぶしかないものだ。

ああ、しかし、だからこそ――

「……その愚かさは、人」であればこそそのものじゃ。如何なる時代、如何なる場所でも、飽きるほどに繰り返された過ちの因である、人の情よ。

古の魔術の系譜といえど、古の魔道を継ぐ系譜といえど、所詮は人か。情に嵌められた枷からは抜けきれなんだか」

「同時に、それが人の持つ素晴らしさでもある。机上の理など容易く越える感情で、人の世は変動を繰り返してきた。

過ちであった事も多かろう。数多の悲劇も伴った事だろう。だが、そこにあつた切実な思いは、真実の輝きだったと信じている」

その愚かさは、人類から切り離せないものだ。

情を感じる心があるから、人は人として足り得ている。

時に理屈を越えて起こされる感情からの行動。それは数式を狂わせる乱数だ。

人の理は、数理とは違う。心という理を解する事は、理屈ではないのだから。

「兆しを感じたのだよ。人形のようなだった器に、意志の萌芽の気配をな。

ああ、これも理屈ではないがね。だが、空の中身にも意志が芽生えるのなら、俺にとっては祝福だ。否定しようなどとは思わなかった」

甘粕正彦は人の意志を、勇気を愛している。

停滞する世に従い、それらを失おうとする人類を救いたいと心から願っている。

初めから心の無いものとして造られた者にも意志の目覚めがあるのなら、それはあらゆる人々にも同じ事が言える。人は、自らの脚で立てるのだと、その証明と言えるだろう。

「理屈に徹して感情に流れない。そうした姿勢も、それはそれで否定はせん。

但し、それは感情を持たないからではなく、機械の如く自らの非情を貫く覚悟があればこそだ。断じて人情に絆されない冷徹、冷血とて

一つの人の在り方だろう。

俺は人形の有り様に興味はない。見たいのは人間の生き様だ。通わすための心が無ければ、どんな繋がりも成立せん」

我も人、彼も人。

十人十色、人とは各々違う。

だからこそ根本の部分では、人間は皆対等であるのだと、それが甘粕の主張である。

思想が違う。利害が違う。己と相手が交わらず、だから衝突は発生する。そこに繋がりを見出した男の祈りとは、闘争を是とする世界だ。

異なる心と心がぶつかり合い、故に生まれる激情と信念。意味がどうだと理屈に囚われているばかりでは決して得られない、足掻きの果ての奮起にこそ人間の光がある。

人間は感情から逃れられない。何故なら、それこそが人間という動物の証明だから。

冷徹であるのもいい。何だつたら否定しても構わない。だがどのような考えであれ、それは自らの意志によって定めた答えでなくてはならない。

己は道具であると、ただ思考を停止して振る舞い続ける事を甘粕正彦は認めない。殴る覚悟も殴られる覚悟も持たないままでは、他者との繋がりなど成り立たないから。

「道具としてではなく、他の誰かのためでもない。己自身で定めた意義で以て、理を統べて立ち上がる。俺が対峙してみたいのは、そのようなラニⅡⅧだ。

……機会があるかさえ分からんがな。いつか、見てみたいものだよ」

そんな理想も、所詮は一人の人間の思想に過ぎないのだろう。

思想は何処までも個人のものだ。他人に伝わったとしても、真意を理解されているとは限らないし、大抵の場合は都合の良い解釈が間に挟まる。

それ以前に、そもそもまったく伝わらない場合もある。人の考えは

各々違う、ならば受け取り方とて千差万別。心に響かない思想をいくら聞かされても馬耳東風だろう。

甘粕正彦の課す試練とは、痛みと災禍である。

そんな彼の思想では、無垢な器を持つアトラスの少女には届かなかった。

これは、要するにそれだけの話。男と少女の交わりは大した成果を得るには至らず、他人のまますれ違って終わったのだ。

決戦へと赴いた少女へと男が出来ることは何もない。

その勝利を信じることも、願うこともせず、ただ絵ともならない空想を描くばかりだった。

\*

この人が弱り果てていく姿を、私は毎日のように見せられていた。

他の錬金術師たちと同じ、それは生命の停滞症状。

身体が、思考が、免疫の抵抗力が、師を構成するあらゆる能力が弱っていく。

予測された最果ての未来、自らの種族を諦観した人類と同様に、生きる事を諦めようとする毒に蝕まれて、師は急速にその機能を閉じようとしていた。

師が師のままである日も段々と少なくなっていく。

思考の整合性を失って、整然とあつたはずの論理は支離滅裂なものへと落ちた。

狂ったように暴論を振りかざす姿。怯えきって震えながら同じ言葉を何度も何度も自らに言い聞かせる姿。どれもかつての師には見られない醜態だった。

ラニⅡⅧは、シアリム・エルトナムによる創造物であり所有物。

その事実是不変ならない。どれだけ時間が経とうとも、師がどのように変貌したとしても。

私は師の道具。道具は持ち主の意思によって動かされるもの。ならばこそ受け取るべきは正気の内にある師の言葉でなければならぬ。

狂気に陥り己を見失った師の姿。それは師自身にとつても恥辱であり、そんな言葉に従うことは師に対する冒瀆に等しい。

聡明にして理路整然。数理の導く結論のままに解をくだす錬金術師の姿こそ、師のあるべき真実に他ならないから。

「私はあなたを産みだした。ですが、ついに魂を入れることは叶わなかった」

では、果たしてあの時の師の言葉は、正気の内にあつてのものだったのか。

「ラニニⅧ。あなたには私が知り得る限りの知識を授けてきました。あなたはそれを不足なく活かし、期待された通りの能力を發揮してくれました」。

しかし、それがあなたの中身となる事はありませんでした。どんな知識も、その器の骨子となる要素とはなり得なかった」

そのの何がいけないというのだろう。

私の全ては師のもの。この器に備わる能力も師に使われるべき所有物。

知識も、機能も、私自身のものは一つもない。全ては師よ、あなたに使われる事に意義がある。そこに私個人の意思が混じることはない。それは観測者としての劣化に他ならない。正しい観測結果を導き出すためにも、私は道具であるべきだ。

そのように定義したのは、他ならぬ師よ、あなたではありませんか。「ええ、その通りです。人間性を切り離し、合理性に基づいた計測器となることがアトラスの錬金術師の意義。この穴蔵に生きる者にとつて、その在り方は疑いの余地なく正しいものだ」。

私はこの場所で生まれ、この場所で育ち、この場所の思想によって中身を満たされました。私の身は一片に至るまでアトラスです。故にアトラスとしてあなたに告げた言葉も否定しません」

そう語る師の顔は、どこか哀しげで。

遠く置き去りとした何かを省みるように、瞳はここではない何処かを映すように。

その意味が、私には分からない。

師が何を思っているのか、どうしてそんな事を思うのか。

道具としての合理性はその意味を否定する。なのに私の中で示される数値は、その意味を知りたがろうとする私の存在を証明していた。

「あるいは……私は壊れてしまったのかもしれない。アトラスであった私という器がひび割れて、零れ落ちた中身の分だけ余計なものが溢れてしまった。

ですので、これよりあなたに告げる命令は絶対ではありません。あなたに遵守の責務はありません。従うか否かは、あなた自身の判断に委ねましょう」

——唐突に、この人は消えてしまうのではないかと思った。

冷静に考えれば、それは意外な事でも何でもない。

師は、シアリム・エルトナム・レイアトロシアという個体は、滅びを間近に控えている。

症状を見れば明らか。他の錬金術師たちと同じように、師もまた滅びようとしている。今更驚くようなことではなく、とうに理解していたはずだった。

たとえ師の存在が滅びたとしても、その意義を受け継いだ創造物があるのなら。

アトラスにとってはそれが真理。創造物が優れているのなら、創造者さえ本質的には不要となる。それが錬金術師の掲げる合理性だ。

師の滅びにも余分な感情は必要ない。私という意義を果たすための道具がいる以上、アトラスの錬金術師であるならば何一つ問題は無いのだから。

なのに、私はこの時になって初めて、師が消えるのだと理解した。私を造り出してくれた師が、私を育み知識を授けてくれた師が、私にとっての全てである師が。

この世界から喪失する。跡形も残らず、その人格も魂も消滅して果

てるのだと。

事実を認識して、私の中身は規定値外の数値を弾き出している。アトラスの合理性に基づく理屈を受け入れられず、この思いを処理することがどうしても出来なかった。

「人間を知りなさい、ラニⅡⅧ。空の器を満たす者を探すのです。

単なる生物種族の記号としての人類ではない。人を人と足らしめる心の在り方、その矛盾に満ちた生き方を理解なさい。

その上で答えを出すのです。あなたという”人間”が選り取る解  
答が、何であるかを」

ああ、師よ。いったいあなたは どうしてしまったというのでしよう。

何故そのような事をおっしゃるのか分からない。私はあなたのため  
の道具なのに。

あなたに与えられた意義、聖杯を手に入れるという目的のために、  
私という”ヒトガタ”は存在するはず。

なのに、あなたは私に”人間”としての結論を出せと告げる。矛盾  
に満ちたその論理が、どうしても呑み込むことが出来ない。

時に師の言葉は深淵で、その意味を解しきれない時があった。

けれど今は、そういつた納得のし難さとも違うと分かる。きつとこ  
れは、私には解らない”感情”<sup>オウチ</sup>によって告げられたもの。

疑うことなどあつてはならない師の言葉。だというのに今だけは、  
本当にこの言葉を師のものとして受け取って良いものかと疑った。

師は、たとえこの器の自壊を伴っても、聖杯という目的を達成せよ  
と命じた。

しかし私を”人間”という個の生命と認めるなら、自己破壊は生命  
の意義と矛盾する。

この”主命”<sup>オーダー</sup>に遵守の責務はないと言った。ならば優先すべきは  
最初の意義。アトラスの理念に導き出された結論に従うべきと、師自  
身も認めたその定義は理に適っている。

けれど、ならば師よ。そもそもどうして、あなたはそんな事をおつ  
しやったのか。



「人形のあなたに命をもたらす者、それは人形に過ぎない者を一つの命として尊重できる者。あなたという存在を目の当りにしても、人として向き合って重んじれる誰かが、空の器を満たす。

私には出来ない。シアリム・エルトナム・レイアトロシアには不可能だ。アトラスの錬金術師である私には、あなたを命としてだけは扱えない」

ああ、師よ。私では読めない、この数値は一体何なのでしょう。私という器を満たす者、それはあなたではないとあなたはおっしゃる。

私にとっては、師よ、あなたの存在こそが全てだというのに。私を満たすのはあなたではないのだと、あなたはそう告げるのですね。

私には読めない数値が観測されます。痛覚にはよらない痛みを確認しています。

師よ、どうか私を導いてください。解の見えないこの式に明朗な答えを与えてください。

「そも、人に確かな解答などない。感情を手に入れた人類は、本能だけを結論と置いてはならない。独り歩きを始めた個の生命は、生存の意味を己自身で定義しなければならぬから。

たとえ種が自らの滅びを認めようとも、個に生存と執着の意志が残っているなら、人は独りきりでも足掻くことを止めはしない。

だから、あなたもそう在るべきだ。私の滅びの後、最後のアトラスとなるあなたには、あなた自身でアトラスの意義を見つけてほしい。シアリム・エルトナムの道具ではなく、ラニⅡⅧという個体が持つ意志でもって」

我が師よ、我が造物主よ、どうか、解らない事をおっしゃらないで。私を道具ではなく、人として扱ってくださいというのなら、これまでの時間は何だったのですか。

あなたの教えは合理的で矛盾がなく、欠落のない美しさに満ちていた。

それに従う事に否などなかった。むしろその教えに従う事に、私は自身の意義を見出していた。

それを放棄せよと、他ならぬあなたが言うのですか？ 今日まで、私という器に注がれた全ては、そのためにあつたというのに。

どうして今さら、それを惑わすような事をおっしゃるのか。

そこにどんな意味があるというのか、解らない答えを求めて私は師へと問い質す。

「——あなたに、未来を与えてあげたくなくなったのです」

それは不合理であり、矛盾であり、我が儘だと。

難しい理屈なんでものは何もなくて、ただ感情に突き動かされた行動である、晴れやかにさえ見える面持ちで師は語った。

「私の教えを、あなたははしかと身に付けた。」

私の期待に、あなたは十二分に応えてくれた。

不足と見なすべきところはない。……いえ、たとえ誤りでさえも、私にとっては心を満たす美点と映る。

——愛しい。そう、それが私の感情の名称だ。あなたという存在を、私の心は愛している。

ラニⅡⅧ。私の創造物。私の生徒。全てを継いだ、我が後継者。私が一命を賭して造り上げてきた——……私の、子供……」

反応を見れば、師がそれを幸福として語っているのは分かる。

観測される数値と記録された数値を比較すれば、表出した感情を定義することは出来る。

師は、私の事を愛している。所有物としてではなく、人として、親として、愛という名の感情をこちらに対して向けているのだと理解した。

どう受け止めれば良いのだろうか？ 師のこの思いを、私はどう感じるべきなのか。

道具として産み出されて、その意義に従いながら、同時に人として育まれ愛されてきた。

それは幸せなのか？ 喜ぶなのか？ 道具としての意義で満たされてきた私に、人としての幸福とは本当に幸福足り得るのか。

そもそも幸福になるべきなのか？ なって良いものなのか？ 最後に遺されるアトラスとして、古き神秘の担い手の後継として、それは正しい判断なのか？

「この深く昏い穴蔵で閉じていた私の人生で唯一の、私に人の生を与えてくれたもの。」

子の未来は、親の未来も同じ。子供の未来のために尽くそうとするのは、親として極めて合理的な結論でしょう」

——ああ、だけど、その師の言葉を受け止めて、清水が注がれるような心地良さがあつたのも、紛れもなく私自身の本心で。

意味が解らず、正しさも知れず、けれどその言葉に従おうと思った。ラニ<sup>わ</sup>ⅡⅧ<sup>し</sup>はシアリム・エルトナムの弟子。穴蔵の錬金術師たるエル

トナムの成果物であり、彼女の愛によって育まれたシアリムの子。

その事実を否定したくない。その心が遺してくれた言葉に従いたい。あなたが人としての解答を私に求めるのなら、私はその通りに行動しよう。

どれほどに非合理で、矛盾を孕んでいるのだとしても、それがその時に下した私の結論だった。

\*

——瞬間に貫いたものは、閃光のように走り過ぎた衝撃だった。

灼ける熱さが身に起きた事を教えてくれる。

瞬時の内の衝撃は、反応はおろか認識すら不可能。

理解できたのは結果だけ。貫いた先に突き立つ朱槍の存在がそれを示す。

臨界に達し炸裂しようとしていた第五<sup>エー</sup>真<sup>テ</sup>説<sup>ラ</sup>要素<sup>イト</sup>、収束していた魔力の流れを断ち切って、縫い止められた己の切り札をラニは目の当たりにしていた。

「あいにくだがな、お嬢ちゃん。そいつは悪手だぜ」

そのような離れ業を可能とする者など、この場に一人しかいない。放った投擲の姿勢のまま、自らが仕留めた者へと冷淡にランサーは告げる。

「捨て身の策に打って出て、てめえの命を惜しんでるようじゃなあ」  
告げられた言葉の意味が、ラニには一瞬理解できなかった。

命を惜しむ。自己という器の喪失への迷いがあったとランサーは指摘した。

あり得ない事だと合理と意義に繰られる人形は思う。しかしながらこの結果こそ、反論の余地さえなく指摘の正しさを結論付けていると自覚していた。

七日目の決戦の舞台。

マスターとしてそこに降り立った者にはルールによる護りがある。サーヴァントがマスターを直接殺害する行為には及べない。

もしもラニ自身を狙っていたならば届かなかった。故にこそ朱の矛先が捉えたのはもう一つの心臓。集約し解放させる魔力の核として器から離れたそれを狙い穿った。

ルールの隙、機能の隙、意識の隙。全てを過たずに貫いたからこそ成し遂げられた一瞬の妙技。英雄であつても容易くは成し得ない、まさしく大英雄の技であつた。

そして、一因である意識に生じた隙とは、ラニの迷いによって生まれたもの。

それは逃れようのない事実。反論を述べる思考の猶予も少女にはない。

ラニⅡⅧという器の一部として搭載されていた機能を切り離され、意識は制御を手放して断絶される。

ラニⅡⅧの持つ分割・高速思考はサーヴァントの運用をも可能とした。

それ自体は確かな能力。しかし裏を返せば、能力が停止すればサーヴァントまでも連座して停止するということ。

術式に縛られたバーサーカーには自己の思考で行動する自由は与



真つ先に逆襲の刃を降り下ろすべき相手だろう。

しかしバーサーカーにその様子はない。むしろ護り抜かんとして佇む姿は、忠義あるサーヴァントそのものにさえ見える。

ならばそれは、彼ら主従の間にも得心はあったということ。たとえば心通わすことがなくとも、互いの不実さのままに袂を分かっただけの間柄ではなかったということだ。

そのような主従は強い。

成し得た奮起にも無関係とは思えない。

無理無謀を覆すのは英雄の業。心にある何かを抛り所として、彼らはいっただって奇跡を成し遂げるのだから。

——そう。故にこそ起き上がってきたバーサーカーを、ランサーは万全の覚悟で迎え入れた。

ランサーは英雄を知っている。

彼らが持つ強さの何たるかを。道理を無理で覆す、そんな所業も当然の如く行える凄まじさを。

どんな縛りも障壁も、真に英雄たるならば奮起のための起爆剤。そんな逆境よりの再起にこそ真髄は表れる。

その光景を幾度となく見てきた。そして自らもまたそう在り続けた。だからこそ、バーサーカーが起き上がる事も当然のものと承知していたのだ。

青き槍兵の真名とは、クー・フリーン。

クランの猛犬。アイルランドの光の御子など、数多の異名を持つ大英雄。

その異名に表される通り、成し遂げてきた英雄譚も豊富。中でも際立つのは自国アルスターに攻め入った女王の軍をたった一騎で迎え撃った逸話だろう。

女王メイヴの奸計により国中の戦士が眠らされた中、クー・フリーンは唯一人の力によって女王の軍を撃退した。”一人の戦士に何が出来る”と侮っていた女王は、ついに彼一人の守りを破る事が叶わなかった。

絶望的な逆境を覆して、奇跡の勝利を成し遂げるは英雄の証明。後



れることが定め。

「――刺し穿つ死棘の槍」

されど、確定した結果を覆すのはランサーも同じ。因果の繋がりがさえ狂わせて、朱い魔槍は後の先を取る。

魔槍ゲイ・ボルク。かの槍は因果を逆転させる呪法。放たれたその時には、既に命中したという結果が先にくる。

相応しき持ち主がその槍を放ったならば、一撃は必ずや相対する敵手の心臓を穿ったという。伝説を証明するように、朱の矛先はあらゆる物理を無視しながら確定した結果へと疾駆した。

もしも、バーサーカーに刻まれた令呪が『必ずランサーを打倒せよ』であったなら、結末はまた違ったものになっていただろう。

たとえ心臓を潰される結果が決まっていたとしても、半人半機の身はそれだけでは崩れない。返す一矢で一切の猶予を与えずに粉碎する腹積もりであったなら、あるいは勝利の結果も別の方へと転がってきたかもしれない。

……もしもの話に意味はない。

どれだけその仮定があり得たかもしれない、出された結果は巻き戻されない。

ここにある事実こそが全て。現在に追いつかれた未来とは、その時点で確定した過去へと落ちる。予測し対処できる未知ではなく、過ぎ去った既知にすぎないのだから。

貫いた朱槍の衝撃が、バーサーカーの弓射を僅かだが歪ませる。

疾風の如き神速を持つランサーには、僅かな歪みとて致命的だ。必中の概念を持たなかった矢は、ランサーを捉えることなく空を切る。遙か彼方で大破壊の轟音を響かせて、しかし何の成果も得られずに宝具の一矢は無となった。

しかしそれでも、心臓を穿たれてもバーサーカーは斃れない。再び矛へと変形した方天画戟を振り上げて、執念でもって報復の一撃を見舞わんとする。

されど、ここに在るランサーは英雄を解する者。そこに慢心はあり得ない。



発現するは魔槍の呪法。貫いた一刺しは千の棘となり、土に張った根の如く拡がって標的の内部を蹂躪する。

不死者すらも塵殺する人体殲滅の呪い。手抜きなく繰り出された必殺の魔槍は、完膚なきまでにバーサーカーという存在を滅ぼしていた。

どれほどの時間が経過していたのだろう。

分からない。

それを正確に観測するだけの機能が、既に私には無いから。

恐らく、そう長くはないはずだ。こうして霊子構造が形を保って、この意識が残っているのなら、復旧までの時間はそこまでの長さではなかったはず。

あるいはその事実を逆算して、正確な時間を割り出すことも可能だろう。けれど、その行動に果たして意味があるのかと言えば、やはり否定を下さざるえない。

認識したのは、己の敗北の事実。

パラダイマイザー 切り札を失い、サーヴァント 持ち駒を失い、これで勝敗は確定した。

降りてきた赤い壁。勝者と敗者の運命を分かっデッドラインが、私たちと遠坂凛たちを断絶していた。

「……正直、拍子抜けね。アレを見た時は、霊基の一つか二つかは持つていかれる覚悟だったんだけど」

残された令呪が消失する。

弾けるように消え去った力を認識すると同時に、器自体にも喪失が拡がっているのを理解する。

これが、電腦の死。肉体という器を脱いで魂をこちら側に投影する魔術師たちの、本当の最期。

「なあに、これも道理だろうよ。お嬢ちゃんも、戦いで生きてきたんな

ら分かってんだろ。

如何に元の性能が優れようが、最後に勝敗を決めるのは身命に懸けた気迫の質がものを言う。その気がねえ奴に掴める勝機なんざありやしねえさ」

「……そうね。さよなら、ラニⅡⅧ。あなたは強かったけど、きつと最初の部分から何かをかけ違えていたのよ。

……もしもそれさえ無かったなら、もしかしたら私たちも勝てなかったかもね」

意識の中にノイズが走る。

立ち去っていく遠坂凜たちの声も、とても遠い。

塗り潰されていくのを感じる。自分という存在が、徐々にこの器から流れ落ちていくのだと。

機能が消えた。知識が消えた。

この器の意味さえも、意識の中から消え失せる。

何もかもが黒いノイズに覆われていく中で、最後に残ったのは師との記憶だった。

人を知れと、師は言った。

この器に命を入れる者を探せと、師は言った。

未来を与えてあげたいと、道具に過ぎなかったはずの身に、そんな温かな言葉をかけてくれた。

それも間もなく消える。

ラニⅡⅧという存在の全ては、この月の海に溶けて消滅する。

あらゆる未来はここで絶たれる。それが死する者の宿命だと、とうに承知していたはずの事。

「あ……嫌、だ……!？」

なのに、理解していたはずの事象を、私は拒絶する。

その行為に何の意味もない事を知りながら、そうせずにはいられなかった。

「私……まだ、何も知らない……。」

命……師が言った意味……まだ、何も……。

だから……まだ、消えない……消えたく、ない……。」

虚ろだった器の中身に熱が灯った。

知るだけで理解していなかった言葉の意味。感触の無かった自己の重みを確かに感じ取る。

これが、命。

そう、私は生きている。その生の実感がここにある。

道具の意義の中で遠ざけていたもの。あらゆる理屈を失っても尚、沸き上がってくる熱がその在り処を教えてくれる。

師よ——。これが……これが、そうなのですね。

ただ意味を全うするだけではない。予測される行程を歩むだけでは分からない。

たとえ何も見えずとも、明日という未知に向かって前に進む。最初から目的を持った道のりではなく、旅路の中で目的を探していく。

それが未来で、それが生きるということ。アトラスの意義という一本の道しか持たなかった私に、師が遺そうとしてくれた命の可能性。

ようやく理解できた真理を噛み締める。

悟った意味はここにあつて、それは今までに無かった灯を感じさせた。

ああ——だから、今は、こんなにも恐ろしい。

「私は、まだ……死に……たく……な……い……」

聞き届ける者のいない呟きは、きつと月の記録の中にだけ蔵められる。

最後にあつたのはそんな思考で、後は何もかもが無が

\*

「——これが、君の出した解答かね？」

己しか存在する者のいない部屋で。

いや、今となつては、生存する者自体が己だけしかいなくなつた穴蔵で、私は問答を繰り返す。

「——愚昧！ 愚劣！ 愚行！ こんなものが、アトロシアの名を冠した者の結論だとは！

シアリム！ シアリム・エルトナム！ こんなものは喜劇ですらない。茶番だ！ 無価値だ！ 君はなんと無為な結末を書き綴つたのか！」

内にて再現された姿が、感情を振り撒きながら叫びを上げる。

それは怒号。それは悲哀。それは落胆。それは失望であり糾弾だ。声は私を責めたてている。私の選択が愚かであり、無意味である。

「これ以上の徒労があるものか！ 何がひどいのかと言えば、これが全く、何事さえも成していないことに他ならない！」

人道主義にでも目覚めたつもりかね？ だが、仮にそうだとしても、君のした事は悪趣味極まる！ 愛を語りながら、その手ずから子を死地へ赴かせるなど、それは外道の所業というのではないのかね？」

私はアトラスとして彼女に与えた主命オーダーを撤回していない。

聖杯を入手せよ。それが叶わない場合には身命と引き換えにしても破壊せよと。

それはアトラスの錬金術師たる私が下した最善だ。その結論は今も変わらず、私の中に存在している。

「君の行いはラニⅧの性能を下げた。理念の意義に殉じる彼女は理想的なアトラスでさえあつたというのに、君の半端な感情はそれを台無しにした！」

錬金術師の観点からそれは明らかな愚行であり、また人の観点からしても良策には程遠い。勝算の低下は、即ち生存率の低下と同義なのだから。

君は度し難くも、子の滅びの確率を高めただけに過ぎないのだ」  
反論は持たない。募られる糾弾はどれも正しい。

結局のところ、私は決めきれぬ事が出来なかつただけ。

錬金術師の非情に徹する事も出来ず、愛によつて解き放つてやる事も出来なかつた。

アトラスの自分も、人としての自分も捨てられなかつた。その有り様を無様だというのなら、領くより他の処方を持たない。

「醜悪な！ その支離滅裂な脚本は醜悪としか言いようがない！」

錬金術師でもなければ人でもない。どちらの正しきにも徹しきれず相反する二つの境で惑つた挙げ句、君はどちらとも否定する決断へと至つてしまつた！

これを墮落と呼ぼずして何と呼ぼう。シアリム、君は弱り、それ故に墮落した。アトラスの錬金術師であつた君は、停滞と脆弱の果てに腐り落ちたのだ。

そうなる前に決断すべきだつた。伝えるべきを全て伝え、君自身の意義を果たし終えたその時点で、君は自らを停止すべきだつたのだよ」

それこそがアトラスに在るべき合理の答え。

声の告げる事は正しい。アトロシアの名を継いだ者ならば、確かにそうあるべきだつた。

己が強く在る必要はなく、強い何者かを創造する。そして己以上の存在を創り出す事が出来たのなら、その時点で私という個体の意義は完了する。

それは生物学的な側面にも基づいた確かな理だ。生命の最大の意義とは、未来に繋がる種を残すこと。それはあらゆる生命に課せられた原初の目的だ。

アトラスという”種”の役割において、私はもう役目を終えていく。後に残つたのは劣化の始まつたシアリム・エルトナムの個体のみ。感情ではなく合理によつて生き方を定めるべきアトラスならば、私という生命は停止するべきだつた。

「斯くも舞台は無残に終わり、絢爛たる終焉は凡愚なる幕引きへと墮ちる。

採決を取ろう。かつて真理への探求を志した者の結末として、かよ

うな脚本に対して点数をつけよう。

——落第！ 駄作！ リテイクすら望まない！ 他人の脚本しんせいへの口出しなど無粋だと承知してはいるが、この酷評ばかりは抑えられない！

魔道の徒に究するならば、須らく死とは諦観とすべし！ こんな基本にさえ躓くような体たらくに、蓄積と計測の院の長は分不相応。シアリム、君には凡百の奴輩にも似た、迷走ばかりの人間の生こそが相応だと知りたまえ——」

「……ええ。あなたであれば、そのように定義するのでしょうか。ズエピア」

思考を閉じる。

再現されていた姿と声は消えて、認識は元の何も無い空間を捉える。

ズエピア・エルトナム・オベローン。

稀代の錬金術師。エルトナムの祖先。五百年ほど前のアトラス院院長。

命題に挑み、真理を求めて、遂には現象と同一の存在にまで成り果ててしまったもの。

その姿勢には敬意を表する。

彼は何処までも錬金術師たる己に徹した。至った結末も錬金術師として、無念はあっても後悔はなかっただろう。

誰よりもアトラスの錬金術師の在り方に忠実であった人。彼から見た私の最期は、さぞや無様な錬金術師にあるまじき姿と映ったに違いない。

「徹しきれなかった。最期になって、私は人として在ってしまった。無様というより他にない。

ですが、それでいい。元より人に解答はないのだから、これも紛れもなくシアリム・エルトナムの答えの一つだ。

唯一つのみに徹しきる生き方は人のものではない。魔術師ならばそれで正しいのですが、そうでないからこそ見えてくる風景も確かにある。

——それは時として、人に希望をもたらずなものだ」  
計算だけでは計り知れないもの。予測するばかりでは得られないもの。

理解によつて未知への恐怖は解消される。しかし既知ばかりの道に本当の未来はない。

未知に心を動かされて、育まれた感情でこそ見える未来がある。少なくとも、私にとつてラニと共にあった日々はそういうものだった。

たとえそれが器の性能を下げるものだとしても。

たとえその先に無残な敗北の結末が待つのだとしても。

道具の意義しか与えられないままでは、あの子には何の未来もないだろうから。

私のした事は残酷なのかもしれない。身勝手なだけの願いが、あの子を殺すことになるかもしれない。いつそ道具として何の疑問もなく在った方が幸福であつたかもしれない。

それでも、私の持つ心は願つたのだ。愛する子に未来を、未知を選択する自由とそのため的心を。その空の器に、清らかな中身が満たされるようにと。

私はラニⅡⅧを月へと送り込んだ。

普通に考えればあり得ない。唯一人のみの勝利者しか生存を許されない死地にあつて、他者と心を通わそうとする者など。

向けられる感情は殺意か闘志か、そうでなくても相当に奇形な心象の持ち主くらいだろう。

見込みのある試みでない事は理解している。およそ予測のつかない未来に運命を投げ渡す、アトラスの錬金術師としては考えられない結論だ。

しかし、元よりこれはアトラスの理から外れたもの。

ならばこれでいい。見通せない未来に臨む事こそ人の選択だ。

もしも、ラニⅡⅧという存在を知り、死地に在つても尚受け入れようとする者がいるのなら。

そんな奇跡を、何の根拠もなく夢想する。それだけが人としてのシアリム・エルトナムがしてやれる精一杯の事だから。

まったく、これでは墮落という評価も致し方ない。

私は人でなしだ。始まりから終わりまでアトラスに満たされた私に、人の道を説かせるなど道理が合わない。

錬金術師に徹しきれなかったのと同様に、何もかもを投げ打って人としての心に殉じる事も出来なかった。

言われた通り、今の私は半端者。弱りきった器より零れおちた人間の残滓に過ぎないものだ。

しかし、何故だか私には、その事が心地よい。

アトラスでしかなかった私にも、最期の部分では人らしい選択が出来たから。

院の機能する設備の大半はラニの支援に回してある。

託すべきものは全て出し尽くし、今の私には本当に何も無い。

当然、この身体を維持する事は叶わない。そう間もない内に、私という生命は停止する。

それでも、今この瞬間、私は生きている。

思考はこうして残り、意志はまだ諦める事を拒んでいる。

他の者たちと違い、私の死因に記載されるのは衰死ではなく病死となるだろう。

つまりは戦っているということだ。決して停滞の果てに生存意志を失ったのではない。未来の絶望に浸されながら、私という個の意志は足掻くことを止めていない。

無論、そこには苦痛も伴われる。

意味のあるなしで語るなら全くの無意味。早々に手放してしまっただ方が遥かに楽だ。

けれどこれでいいのだろう。元より生きる事は苦しさを伴うもの。この痛みを感じている内は、私は生きている事を忘れずに済む。

徒労に終わると分かってても、意志ある内は足掻くのが人というものだろう。

無様にもがき苦しみながら、それでも最期の瞬間までこの生命を手放さない。

それが、最後の最期で人間である事を優先した、愚かな私の責任だ



と思うのだ。

## 4回戦：茶会

炎が映っている。

視界の総てを覆い尽くすほどの大火。善も悪も区別なく、一切を焼き滅ぼす無情の焰。

聞こえてくるのは際限のない怨嗟の悲鳴。強欲な者、清貧な者、焔に吞まれた総ての者が、等しく悲痛な叫びを上げている。

誰かが言った。こんな所業は許されないと。

誰かが言った。これはあまりに酷すぎると。

敵である者、味方である者、皆が等しく畏れ慄いた。

だってそこは神聖なはずの場所。敵味方の垣根も越えて、心が住まう抛り所としてあるべき聖地なのだから。

朱に染まりし地獄を現出させる者、この焼き討ちを行った王は、それらの畏敬にも揺るぎなく君臨していた。

人々にその真意は計り知れない。

故に、恐怖だけがそこに残る。非情の所業を行った王には、遍く人々の幻想が集まった。

そのような真似は人に非ざる天魔の所業。ならばこそ、罪業に手を染めた王には『魔王』の忌み名が相応しいと。

第六天魔王。それが王を呼び称する二つ名となった。神徳を冒した仏敵として、あらゆる敵意と畏怖をその一身に集わせたのだ。

王はそれを否定しない。

悪意を込めて告げられた忌み名を、自らもまた自称した。

王は世の合理を知る革新者。恐怖とは、人を操るのに優れた道具であると理解している。

神罰をも恐れぬ魔王として、人々が畏怖する姿の通りに王は振る舞う。必然、幻想はより強固に、王が被る仮面としてその厚みを増していく。

人々に、王の心は分からない。

衣に覆われた王の姿は、幻想に形取られた天魔のそれだ。

”天下”を手中にせんとする王を質せる者はいない。幻想はやがて彼方の座にまで至り、英霊としての王の逸話を彩る伝承の一つとなった。

——ここから映る王の姿にも、見える真実はない。

愉しんでいるようにも見える。あるいは悪鬼羅刹の類いにも、王の仮面はそう見せる。

しかし、これほどに恐ろしい王あっても、また人の子だ。幻想を通してその姿を如何様に見せようとも、その心にあつたのは一人の人間としての真実であつたはず。

紅蓮の業火を背に負つて、魔王は世界に君臨する。

それが魔王としての原風景であり、きつと本来の”彼女”を包み覆つた幻想の衣。

幻想の先の真実を知る者はいない——他ならぬ王自身が、それを必要とはしていないのだから。

いにしえから”場”が持つ効果というものは、普遍的に重要視された概念である。

風水などの占術を初めとして伝えられる技術、知識。

方角の吉凶、何処の立地にどのような建築をすべきか、果てには敵の城を攻める際にどの箇所を狙うべきかまで。

それは根拠のない妄言などでは決してない。その時代の権力者たちにも用いられて重宝された、当時の最先端をいく地質学である。

権力者とは須らく利に聡いものだ。己にとつての損得を測れない者に支配者の椅子は無い。何の成果も出さないものに与える価値など何も無いのだ。

古来より存続する歴史とは、即ち効果の確かさの証明でもある。文明の光に照らし出された近代科学に基づいても、それらは的外れなだ

けのものではなかった。

失われた神秘、魔術側の観点に立つのなら、その重要度はより顕著となる。

土地に走る霊脈の有無次第で、扱える魔術の規模も質も大きく変動する。基盤となる場が整えられている事は、魔術の行使における基礎であり鉄則だ。

かつて魔術協会がその権勢を振るっていた頃には、そうした”場”の確保は組織の意義の一つだった。霊地と認定された土地には管理者が派遣され、場の基盤の運営と守護を任される。そのような霊地の所有権を巡って、魔術師同士の殺し合いに発展する事も珍しくなかったという。

”場”という概念における意味、それは霊脈の有無や立地条件といった実益的な部分の他に、もう一つ異なる側面がある。

それは理由を与えること。この場がどのようなものを定義して、その場所特有の在り方を定めるのだ。

曰く、この場は神聖な処である。神が降りる場所、祈りを捧げるべき聖地であると。

そうして人々に意味を付属される事で、場とは始めて機能する。『ここはそういう場所なのだ』と人々から思われるからこそ、神聖なものとも悪しきものとも成り得る。

”場”に理由を与える。その例で上げるなら、この場所はまさしくそんな理由のために形取られたものだった。

西方の教義である神や悪魔を含んで描かれる曼陀羅模様。ある宗教が大本を離れて他国の土地に根差したが故に、別の宗教観すら巻き込んで独自の発展を遂げた畸形の聖堂。

元々の空間にあった教室ようしきは欠片も残っていない。学び舎という場の定義からはあまりにかけ離れた異質の固有領域マイルーム。

本来ならば参戦者マスターたちの休息のため、ムーンセルより与えられた区画である。改装の自由も、各々の心身に配慮してのもの。その意義において、今のこの空間は本来の用途に反しているとも言えた。

甘粕正彦は切支丹キリシタンではない。ここに描かれる神々を信仰してはい

ない。

むしろ信仰が理由でないからこそ、この場の意味はあるのだろう。弾圧の中で積み上げられた隠れハゲレの歴史、積年の狂気が表すのは寧猛なまでに熱く滾った人の思いだ。

国に認められず、その思惑によって叩き潰され、長きに渡る苦渋と絶望に晒されながら、尚も屈服することを良しとしなかった信仰への執念。

清廉なものではない。明暗入り混じったそれは混沌と呼ぶべきものだ。決して心の炎を絶やさぬため、燃焼を続けた狂信は熱量の一点において本義さえ上回る。

絵の一つに描かれる島原の乱。

救世者の生まれ変わりとされ、数多の奇跡と共に指導者として祀り上げられた少年聖人。

彼が何を思い、何を願って立ち上がったのか。資料を紐解いても人物像は浮かんでこず、現在に生きる者には想像を膨らませるしか手段がない。

しかし、救済の信念は真であったと信じている。弾圧の中の凄絶な状況であったからこそ、人々の希望を一身に背負い立ち上がった意志に偽りはなかったのだと。

彼は敗北者だ。かの『救国の聖女』のように、死後に名誉を回復したわけではない。無念は無念のまま、報われる日は訪れる事なく敗者としての名前を歴史に刻んでいる。

それでも、彼という命の意志は否定されない。行動は無意味ではなく、敗北も無価値ではない。それもまた人類史の営みの一部と記録され、人類の生み出した意味の一つと記憶される。

故に、己の居城を彩る”場”として、甘粕正彦はそれを選んだ。

英雄とは勝利の象徴。仮にその最期が破滅であれ、中途の輝きによってどうしても栄光の色が強くなる。

ならば描くべきは徹底した敗者たちの情景。そうした苦痛と嘆きの内にある意思こそが、最も強く激しい熱量を発揮するものだから。

その絶望しれんを焰へと変えて、素晴らしき輝きとして再誕せよ。掲げる

信条とも照らし合わせて、そのように己への自戒する”場”として此処はある。

聖堂の中心で佇む男の姿は、まるで祈りを捧げる敬虔な信者のようにも見える。

甘粕も、彼のサーヴァントであるアーチャーも、この畸形の聖堂を拠点と定め、了承した。

それは無論、戦いのために。所詮は装飾に過ぎないと、一概に切り捨てられない影響力が、意味を与えられた”場”には確かに存在するのだから。

「やっ」

祀るべき神を持たない祈りの果てに、甘粕は呟きを漏らす。

思考に対する一区切り、それを呟きという形で表して、新しい期待へと思いを馳せる。

聖杯戦争も、その行程は既に4回戦目。

中途の折り返しに差し掛かり、生き残った参戦者たちも選りすぐられる。

これより先、戦いの熾烈さが増すことは推して知るべし。死闘を演じるべき対戦相手は未だ示されていないが、それを以て緩みを見せる者は一人もいないだろう。

しかし、これが一種の休息期間インターバルである事も確かである。各々にとって死線となる決戦の日を越えて、極限の緊張から解放されたのが今なのだ。

必然、心には僅かなりとも弛緩が生まれる。油断、慢心は論外だとしても、緊張状態を維持しすぎても心身にとって毒でしかない。

電脳体にも安息の時は必要だ。元より相手の事も分からないとあっては、どんな戦意も滞るのが自然である。闘争と闘争の間に差し込まれたこの時間こそ、闘争の緊迫から解放される唯一の機会だといえた。

アーチャーからの申し出があったのは、そんな折での事。

話がしたい、と。何も難しくはない、わざわざ申し出るまでもない事を、改めて彼女は口にしてきた。

更には、場を変えたいとさえ。ここはあまりに無粋であるから、相応しい席を用意するので待つていてほしいと申し出てきた。

それは常の威圧を伴った言葉ではなかった。

有無を言わず強制するような響きではなく、選ぶのはそちらであると配慮したものだ。

穏やかで慎み深く、断る事を負担とさせる事のないように。相手を慮った上での申し出は、およそどのような人間であれ恐怖や不快さを覚える事はないだろう。

だからこそ、それはアーチャーに、第六天魔王・織田信長には似つかわしくもないものだった。

甘粕は思う。果たしてこれはどう受け止めるべきなのか。

話とは聖杯戦争の、戦いに纏わる話なのか。恐らく否だろう。もしそうであつたのなら、わざわざ場を変えようなどと申し出はすまい。

ここが無粋だと告げるのは、求めているものが修羅場の渦中の如き苛烈さではないからだろう。前述した通り、ここは安息を得るための場としてあまりに不適切だ。

ならばアーチャーが求めているのは真逆のもの。闘争に向かう空気の中では得られない安穩さ、そうした類いの空気こそ求めているのではと予測する。

それでも全容は見えてこない。これほど近くに居て、幾度もの鉄火場を共に乗り越えて、内なる信念の語らいも行ってきたというのに。

旧秩序の残骸を一掃し世に新生をもたらした革新者。理屈を重視し不確実な博打を嫌う現実主義者<sup>リアリスト</sup>。神仏を穢し鬼畜の所業に手を染める第六天魔。

どれもが彼女の姿だというのに、どれもが似通っているようでいて芯の部分で結びつかない。故にその意図を掴みきれない。申し出にどのような思惑があるのか測れずにいる。

思い返すのなら、アーチャーは目的の見えていないサーヴァントだ。

聖杯への願いは持たないと言った。ならば召喚に応じたのは何故なのか。

甘粕正彦という男の祈りを見届けると言った。ならばその心を決めた要因は何なのか。

アーチャーの立ち位置には、どこか俯瞰した部分がある。ある一線の先には決して踏み込まず、第三者としての視点を維持している。

元より甘粕とアーチャーの性質は異なる方向を向いている。思想が完全に一致してはいない。彼女が此処にいる動機、その根本的なところは未だ定かではなかった。

「未だ奥底の真意は見せぬままか。果たして今度は期待してもよいものかな？ 我がサーヴァント殿は」

甘粕正彦が敬意を表するのは、英霊という上位存在に対してではない。

偉業を成し遂げ人類史にその名を刻む英雄たち。再現されたその記憶と人格に、彼は心からの尊敬を抱いているのだ。

超常の存在としての力など、付属物に過ぎないと言い捨てて。数多の試練を越えて伝説へと昇華する生涯をやり遂げた魂こそが至宝の輝きなのだ。

ならばこそ興味は尽きない。知りたいと素直に思う。自らと数奇な縁を持った英雄と、心ゆくまでに信念を曝け出してぶつかりたいと望むのだ。

指定された地点へと自らを接続し、甘粕の電脳体が空間を跳躍する。

転移。物質世界では魔法の領域だが、情報が全ての電脳世界では不可能ではない。

例えば、空間の中に別の空間を作り上げるといった出鱈目でさえ、情報の構築される世界ではさしたる不可思議とも認識されずに罷り通る。この畸形の聖堂があるように、専用のマイルーム内ではマスターたちに様々な自由が許されている。

目に映っていた光景は切り替わり、別なる景色が映し出されていく。転移の先、そこに待つものへの期待を抱きつつ、甘粕は鮮明となつていく視界をしかと認識し始めて、

全体像から受け止めようとしていた意識は、一瞬にしてたった一つ



の存在へと注がれていた。

即座の印象より浮かんだのは華、万遍と咲き乱れる群れでなく、際立って咲き誇る一輪の優美。

袖を通した着物の漆黒に、描かれるのは純白の華模様。対象な二つの色彩がお互いを引き立たせて、調和を成した一つの美として完成を遂げている。

軍装の黒色とは明確に異なる。威圧をもつて他者に強い色ではなく、それは他色に染まらぬ孤高の美麗さ。暗色と印象を受ける事なく、闇の中にも鮮やかな光をたたえている。

誰が信じられるだろう。

このように麗しき美貌を備えた乙女が、魔王と呼ばれ恐れられた<sup>アーチャー</sup>英霊であるなどと。

変容が激しすぎる。同一人物だと理解していても、認識がそれを受け入れられないほどに。印象、雰囲気、容姿の細部にまで目を移せば、もはや別人だと結論が出るだろう。

果たして着飾るだけでここまでの変質が現れるものか？ 美貌そのものを武器とする傾国の美女たちであればいざ知らず、アーチャーは芯に至るまで武将である。

宝具、能力に昇華されるほどの美の逸話などアーチャーとは無縁のはず。ならば此度のこれの絡繰りは、一体どこにあるというのか。『魔王』の能力を使ったか。それもまた、おまえが持つ側面の一つというわけだな」

「粧し込んだ女に開口一番で告げるのがそれか？ やはりそなたは男女の機微を知らぬな」

固有スキル『魔王』。

『無辜の怪物』とは似て非なるスキル。英霊・織田信長が持つ特殊な力だ。

共に人々の畏怖の思いに着色されて自己が変容するもの。重ねた所業に押された怪物という名の烙印だ。

それは能力であり、同時に呪いでもある。何をせずとも存在を苛み続ける罪過の業は、容易く解かれるような代物ではない。

されど、悪徳と恐怖にもたらされた幻想さえ、我がものとして支配する魔王には、そんな呪いすらも己がための道具に過ぎない。

怪物的な変化を行いながら、自在に着脱も可能。応用すれば『自己改造』スキルにも近い効果を発揮する事が可能となる。

「サーヴァントとは”生前の理想の姿”として現界するもの。」

それは肉体的、あるいは精神的な全盛期であり、通常ならその容姿が変化する事はない。

それをするためには存在自体を改変する必要がある。魔の側面のみ留まらない応用性は、彼女が自らの能力を完璧に制している事の証左であった。

「そなたという男がそういう輩であるのは承知じゃが、そればかりというのもつまらぬ。」

女が化けるは、これ即ち招き入れたる雄のためぞ。それを袖にするなど女に対する何よりの侮辱、心中をまるで解さぬ朴念仁の所業と知るがよい。

あるいは、そのような女の執念に牙を剥けられる事もあるやもしれん。努々忘れぬことじゃ」

「ほう。ならば魔王殿は『女』としてここに在るということか」

アーチャーは、英霊・織田信長は”女性”である。

改めて考えれば、それはおかしな事だろう。武家世界は男性主体、嫡男継承こそが習わしだ。

如何に先見の明に優れていたとしても、反発は容易に予測できる。それを押し切って女子を後継者に据えるなど相当の覚悟がなければならぬだろう。

事実、歴史に記された『織田信長』は”男性”の名として遺されている。何もかもを偽りながら築き上げた王の威名、そこにあった真相には誰もが疑問を抱くはずだ。

ここに至るまで、甘粕がそれについて触れた事はない。

相対した瞬間に分かる性別、告げられた真名との差異。疑問は即座に浮かんだし、問おうと思えば問うことも出来たはずだ。

「記された史実との違い、おまえという英雄が女であるという事実。」

ああ、まったく気にならんとさえ言えば嘘になるとも。だがこんなものは俺の好奇心に過ぎんだらう。

過去はあくまで過去、その時間はおまえのものだ。他愛ない興味一つで、そこに踏み込もうとは思わない。それではあまりに味気なからう。

得られる感動は大きいほどよい。然るべき時に受け止めてこそ響くものがあるはずだ」

しかし、疑問を疑問として解消してしまえば、それはそこまでのものとなってしまう。

過ぎた時間は戻らない。アーチャーの生前に何があったとしても、それが現在の時間に影響を与える事はない。

どれだけ凄絶な過去であろうと、話だけでは事実の羅列でしかないだろう。多少の感動なり教訓なりがあったとしても、実感をもって刻まれる経験とは成り得ない。

そんなものだ。所詮、他人事のままでは。遠い彼方の誰かではなく、同じ時間を共有する身内の事態にこそ人の心とは動くものなのだから。

「だから、俺はいま期待に胸が躍っているぞ。待ちに待った時だと高揚すら感じている。」

おまえの方から明かすおまえの真実。幻想に覆い隠されてきた心の輝きが如何なるものか、俺は是非にも知りたい。

案ずるなよ、何であれ俺がそれを拒む事はない。ひと目見たその時から、俺の心は魅了されているのだ。人としても英雄としても”女”としても——おまえは”美しい”のだとな」

「……ふむ。なんじゃ、そなたも女を蕩かす文句の一つも言えるではないか。むしろその様子なら、これまでも何人かその手管で口説き落とした唐変木であったかのう」

迫るような甘粕の情熱に、僅かにその頬を朱に染める美姫。

その仕草は”女”らしい。常のアーチャーには決して見られない姿である。

此処にいるのは革新を敷く天下人でも、恐怖の上に君臨した魔王で

もない。その真意は不明はままだが、今の彼女は王ではない素顔の自分  
分で甘粕と向き合おうとしていた。

「とは申せ、ここで流れを掴まれるは本意ではない。この場の亭主は  
わしで、そなたは招かれた正客である。」

まずは鎮まり、腰を落ち着けるがよい。茶の席で立ち話など、それ  
こそ無粋が過ぎようが」

静けさの中で、茶器の僅かな音だけが耳に響く。

沸き立つ釜の白い湯気、抹茶をかき回す茶筌のこすれ。

不快なものではない。静謐な場の雰囲気とも相まって、それは五感  
を通して安らぎをもたらす清涼剤として機能している。

決して急がず、されど手際は良く。

整えられた仕草とは、ただそれだけでも美しい。

その姿は見る者を魅了する。ましてそれが見るも艶やかな美貌の  
持ち主となれば、眼を離さずにはいられまい。

余計な口出しなど無粋。ここに言葉はいらず、ただあるがままの風  
情を愉しむべし。作法を知らずとも、場に満ちる要素の全てがそれを  
教えてくれる。

点てられた茶が差し出される。

茶碗を手に取り、左掌の上に。抹茶の香りが鼻腔をくすぐる。華や  
かな模様細工を眺め、その感触を愉しみつつ、向けられた正面を避け  
て碗を回す。

それは茶器の美観を穢さぬように、招かれた側が示すべき配慮。音  
を愉しみ、香を愉しみ、道具にさえも風情を見出して、その味わいを  
存分に愉しむのだ。

「結構なお点前」

飲み口の数は作法通りの三口半。

一口で熱さを確かめ、二口で味わいを舌に乗せ、三口で泡を残さず、半口で吸い切る。

作法の全ては理に沿って定められたもの。和敬清寂の精神に則つたもてなしの理、行いの一つ一つに意味があり、その意義に通じることで心身は安らぎを得ることが出来る。

「なかなか堂に入った作法じやの。そなた、茶道に心得があつたのか？」

「嗜む程度にだがな。祖国に伝わる善き文化、敬意をもって学ぶことに不思議はあるまい」

その所作におかしなところはない。定められた作法を遵守して甘粕は過ごしている。

常態で発揮される熱意や覇気も鳴りを潜めて、茶道という世界の静けさに溶けていた。

甘粕正彦という男を知るなら異常とも見える光景。しかし似合わないわけではない。静謐の内にある心身を引き締める空気は、常よりの真剣を信条とする男の姿と一致して映っている。

「ふむ、敬意か。試練の祈りを抱く男、痛みと動乱なくして人に目覚めは無しと断ずるそなたにも、この茶道は善きものと映っておるのか？」

「無論だ。安寧の中にある価値の全てを否定する気は、俺にはない。

確かに試練は必要だろう。安寧に浸るばかりでは、人は一切の輝きを失ってしまう。世には闘争をもたらしすべきという俺の思いに迷いはないとも。

しかし、だからといって安寧に属する価値観が害悪であるわけではない。穏やかな心で育まれる文化とは、善いもので正しいものだ。そうでなければ、動乱の渦中でそれを目指そうとする意志自体が生まれまい。

むしろだからこそ、俺は敬意を抱いているのだ。力こそ至上の価値持つ戦国の世で、力ならざる価値を見事に打ち立てたその意志は、ただ刃を取るより何倍も勇氣ある輝きだとな」

「それは些か目先が偏った意見じやな。感情論に流れすぎておる。そ

なたらしいと言えはらしいが、そんなものは幻想よ。現実とは理に沿った行いこそ罷り通るものぞ」

その口調は艶やかだが、語る内容は自らの行為を否定するかのようなもの。

こうして場まで設けて茶の腕を振るいながら、一方でそんなものは幻想に過ぎないと言う。それは矛盾のようだったが、他ならないアーチャーならばその理屈も成立させられる。

茶の湯とは、元は貴族たちが嗜む文化であり、教養を示す証であった。

およそ戦乱の修羅場とは縁遠く思えるもの。その価値を認めさせ、国全土を巻き込む大流行を実現させた立役者こそが、織田信長。

伝承によれば信長自身も大いに茶の湯を愛し、世に名立たる茶器の蒐集家であったとされる。ならばその行いは純粋な茶への思い故であつたかと問えば、それには否だと答えるしかない。

流行によつて物の価値が高まれば、即ち需要の向上となる。共有した価値観という繋がりには、かつての廃棄物を財宝にも変えるのだ。

茶の湯に用いられる茶器。高名を伝えられる名器ともなれば、時に一国さえも凌駕する価値を持ったという。ただ茶を淹れるための道具に信じがたいほどの需要が生まれたのだ。

島国という性質上、どうしても目に見えている土地の限界。

かつて海より到来した侵略者との戦い。撃退には成功したが海の前にある敵の土地を獲得することが出来ず、十分な恩賞が与えられずに臣下たちの離心を招いた旧幕府の失態。

主君と臣下の間柄とて、あるのは忠誠ばかりでなく、雇用者と被雇用者の利害関係。褒美が約束されるからこそ身体も張るし、そうでなくなれば従う意思が尽きていくのは自明の理。

土地に代わる価値が必要だった。過去の辛酸を再び味わうことのないように。そのための代替品として、茶道がもたらす価値基準とは実に有益なものだった。

土地の代替として、家臣たちの心を繋ぎ留める新たな報酬。

その価値を築いたのは他ならぬ王自身。そこにあつた意図は明白

だろう。

戦いを主導する者の理に沿う事は、戦以外の価値を排斥する事ではない。戦に関わらぬそれらまでも戦のために利用する、そんな思考の効率化こそ王に求められる理だ。

「純真無垢に盲信する思いばかりが強いのではない。世の形に適合し、より大多数に浸透し易い概念こそ道理となる。どのようなものであれ、価値を認められねば無意味に過ぎぬ。その理屈は、そなたの思想と照らし合わせれば認め難いものではないか？」

「容易く移ろう人々の認識、まさに幻想の価値というわけか」  
全体多数を占める価値観の方向性。

そうした方向が定められれば、それに便乗する者も多くなる。

流行を生み出すのは、いつだって多数からの支持による。必然、数が増えれば増えるだけ、真と呼べる意志は雑多の中に埋もれていくのだ。

世の流れの大半は、幻に浮かされたような認識によって形取られている。ならばそれは、より多数の者に支持され易い価値観こそが世を席卷するのだと言っているようなものだろう。

強く尊い意志が勝利するとは限らない。

アーチャーが言うように、世界を回している理屈とは無情でどうしようもないものだ。

それが人間社会における現実。どれだけ勇気の尊さを叫ぼうとも、その真実は覆らない。

「確かに流されるだけの者を俺は好かん。己の脚で道を決められん者に勇気はない。それをする自分は素晴らしいと、くだらん幻にすがりつく木偶だろうとも。

だがな、俺がそう断じるのは、何よりそこに懸ける気概がないと感じるからだよ。たとえその価値が幻想だろうと、命を懸けるほどの気概があれば不純など何処にもない。

——懸命に何かを成し遂げようとする人の思いが、幻であるはずがないのだから」

そのような真理に対し、甘粕正彦が返すのは何処までも個人の意志

に価値を見出す答えだ。

世の道理が何であれ、立ち上がろうとする意志が素晴らしい。

たとえ現実の無情さに敗れる結果となっても、その決意の輝きを否定する事は出来ないのだ。

元より全てが報われろと願っているわけではない。それでは強さの甲斐がないだろう。試練とは厳しいもので、だからこそ懸命に挑む姿は美しいのだから。

それが世界にどのような影響を与えるか、そんな結果はつまるところ付属物。

事の本質はあくまで過程、行動そのものにこそ人間の素晴らしさは宿っている。

勝者も敗者も、試練の祈りを掲げる男は全てを祝福するのだろう。それはまるで神のような公平さで、その信念に矛盾するところは一片もない。

「そなたにとって人は人か。道理も所詮は状況に過ぎぬと。意志が確かであるならば、そなたにとってはあらゆるものが価値あるものか」「そうだとも。そしてそれは、おまえ自身にも当て嵌る。世に浸透し易い概念とは、おまえが纏ってきた装いでもあるだろう。なあ、うつけ殿？ それとも魔王殿か？」

「是非もなし。そのような風評に型どられた姿こそ、我が身を包む幻想である故に」

うつけ者という風聞。魔王という忌み名。

どちらもアーチャーの伝承に色濃く記された評価だ。

踏み込んだ問いを投げってくる甘粕に、アーチャーも彼女自身の言葉で答えていく。

「わしの纏う幻想とは、雛形のようなもの。衆愚どもに意味を知らしめるため、名を与えて型に嵌める。解し易きカタチが無ければ、浮世に浸透してはいかぬのでな。

余人はわしをうつけと呼んで侮り、魔王と呼んで恐れた。わしの政が革新的と解釈され、その概念を王の名に冠したのも、言ってしまうばその一端じや。



誰もがわしという実像を通して、脳裏に描いた虚像の姿を見ておつた。彼奴等にはその幻想こそが真実であり、芯の本性など知りもせぬし関心も持たん」

『魔王』の能力がそうであるように、アーチャーの力とは人々の想念によつて形取られたもの。

侮蔑であれ、畏怖であれ、人々が相手に抱くイメージである事に変わりはない。本来ならば過去の在り方までも捻じ曲げる幻想を背負っているのだ。

元より英霊とはそういうものだが、とかくアーチャーはその性質が強い。その力が人の想念で造られるものならば、彼女という存在もまた想念によつて構築される。

「——ええ。けれど、甘粕正彦？ 王の仮面を剥いだこの素顔が、果たして”真実のわたくし”だと言えましようか？」

口調が変わる。これまでの尊大さとは違う、まるで深窓の令嬢のような優美な所作。

きつとそれは王の宿命を背負う以前、ただの”姫”であった頃の彼女の姿だ。

「わたくしは家督を継ぐべき正当な嫡子ではありません。その座は本来ならば弟のもの。死に際の父の酔狂が、わたくしに当主の座をもたらしめました。」

望みであったのではないのです。この身が家督を継ぐことになろうなど、あの頃は考えにも至りませんでした。ですが、そうであったはずのわたくしは、あるはずのない後継者を有りとするために、あらゆる道理を捻じ曲げたのです」

当時の常識ではあり得なかつた女人への家督相続。この無理を押し通すために、姫であった彼女はあらゆる手段を尽くした。

記録の隠蔽、情報操作。育ての親を殺し、血の繋がった弟を殺し、綺麗であったその手を血で染めて、彼女は支配者の座に至つたのだ。

誇りと呼べるやり方ではない。その道の凄惨さは、覚悟なき者では

容易く潰されてしまうだろう。鉄血の道理を築き上げるには、相応の意志が必要となる。

「非情の覇者こそ魂のカタチであつたのなら、姫御前と在った姿こそ偽りでしよう。仮面と被つた王の顔こそが真実なら、素顔にどれだけの意味がありましようか。

幻想が事実には劣るとは限らない。魔王と僭称していた者が、いつしか本物の魔王と成り果ててしまう。御伽噺にも語り聞かされそうな、何ともありふれた末路ではありませんか」

幻想に影響を受けるのは英霊ばかりではない。

人の有り様とは環境に左右される。外界からの刺激によつて人格は経験と成長を獲得するのだ。

遍く人々より『そういうもの』だと思われる事は、そうで在れと在り方を強いられる事にも等しい。偽りであつた幻想が、果てにその者の真実となるのも大いにあり得る事だろう。

「姫としてのわたくしと——王としてのわしは、別のものじゃ。このような戯れの機会もなくば、表に顔を出す事さえない。とうの昔に不要とした有り様よ。

元来、人とは変革するもの。人の移ろいと共に正しさもまた移ろいゆく。選ばれし天命など無くば、行く道を決めるのは己の選択、己の迷い、己の覚悟である。

わしは人の世の英雄じゃ。血筋に神など混じつておらん。どのように変革を遂げようとも、わし自身の決断を偽りにできようものか」  
変化は、それ自体には悪性など無い。

それが称賛を受けるべき素晴らしい変成であるのなら、それこそ正しいものだろう。

また、たとえ変わった先が邪悪であつたとしても、だから偽物だと思ふのは誤りだろう。

それが当人による選択ならば、どうあれ結果の責任はその人物のもの。その過ちまで含めての人生だろう。それを幻のように無かつた事にするなど、それこそ人間は虚構に堕ちてしまう。

アーチャーは、その変化を決して否定しない。

たとえ変わった先でかつての自分を捨て去る事になろうとも、そんな事を決めたのは己自身の意志として、自負と共に背負っている。それが人々の幻想により強いられた姿だとしても、それを言い訳にして逃げる事だけはしないのだ。

「俺は夢を見たよ、アーチャー」

甘粕は言う。美姫の衣に身を包んだアーチャーに向かって。

今の麗しげな姿とは正逆の、最も恐ろしい魔王の姿と彼女を結びつける。

「聖地が焼ける夢だ。人の恐怖の夢だ。憎悪と畏怖の果て、天魔と呼ばれるに至った王の夢だ。

恐ろしいものだった。その所業には目さえ覆いたくなくなった。だが夢の中に登場する王は、悪しきの象徴でありながら堂々たる姿だったよ」

垣間見た遠い過去の情景。無慈悲にして苛烈な魔王の所業。

それは英霊としてのアーチャーの伝承。勝利の覇者たる栄光の道を征きながら“魔王”と称されるまでに至った逸話。

単なる口伝や書物の上の事実ではない。イメージとして伝わる凄惨さは、心弱い者なら狂死しても不思議ではない。

それを余す事なく感じ取りながら、甘粕が抱くのは恐怖や侮蔑とは真逆の礼讃の思い。

「やはりおまえには“革新の王”の通り名の方が合っているよ。その所業の正体とは、おまえ自身が理と信じて定めた正道に他ならん。

幻想などと卑下するなよ。それはおまえの決断の勇気の果てに付いてきた称号だろう。惑わされずに確固たる自らの理を貫いたおまえならば、どんな名も魂に色づく輝きだ」

人が恐怖と悪徳の象徴として名付けるのが『魔王』ならば、世に新しい概念の旋風を巻き起こすのが『革新』だ。

後世において、王の行った施策は時代を発展させるものとして評価されている。当時の人々には理解されない概念も、先の未来でその価値は証明されているのだ。

無論、それを以て王の免罪符とする事はできない。

王の所業は無意味な悪意によるものではない。そこには確かな理由と意味があった。

蔓延る腐敗を糺すため、言うなれば仕方の無い犠牲。支配者としての行いであり、ただ残忍なだけの蛮行では決してないのだと、そう告げるのは簡単だ。

そんな理屈ではない。刻まれたのはあの業火の中にあつた絶望と怨念だ。当事者でもない者が、その非業の程に思いが及ぶはずがない。

信仰を穢し、民草を焼き棄て、仏敵を僭称する天魔の所業。たとえばのような意味があろうとも、その凄絶に抱く人の心が間違いであるはずがない。

そう、罪は決して消えない。その上で、先行く王は自らの正当を謳うのだ。

これこそが我が王道、世のためにと行う事業である。流された血の罪業を背負って、定めた理に沿い邁進しなければならない。

新しい理を生み出すのは人自身、ならばその価値を信じられるのも当人しかいない。人々からの無理解の中、築き上げる成果でもって有用性を証明しなければ、それが正道となる日は永遠に来ない。

手段の是非も、矜持の是非も、その証明の前には無価値でしかない。一度志した改革とは、実現できなければ誰にも認められる事はないのだから。

「己の理の正しさを信じ、修羅の道をも駆け抜ける信念。前人未踏の荒野へと足を踏み出す、革新という覇業を断固と貫き成し遂げる覚悟。そんなおまえの偉業の素晴らしさとは、その決断をおまえ自身の意志によって下してきたことだろう。」

世界に跨る正道、常識とは果てしなく重いものだ。それは秩序であり、外れる事は即ち異端となる。たとえ間違っていると確信していても、乱そうとする事は例外なく悪と見なされる。

それに立ち向かう事は容易ではない。ああ、それは俺自身が身を以て思い知っている。偉大なる先達に対し、敬意を抱くことは当然であるだろう」

甘粕正彦は、今ある世界の実状を決して認めない。

既に定まりつつある安寧という世の流れ。それに逆らい、それは駄目だと声を大に言い放つ。

たとえそれが人類という種が下した正道けつどうであったとしても、彼という男の自我は異端の道へと踏み出す事を躊躇われない。

この世界は間違えている。この安寧は正しいものではない。

それは天の誰かが告げた言葉ではない。地に脚をつけてこの世界に生きる男が、魂より吐き出した咆哮おほいだ。

ならば進み続けるまでである。世の理屈に惑わされるな。己が信じる理念があるのなら、果てまで貫き通す事こそが勇気なのだから。

「世に神仏の恩恵はなく、定められた天命などとは無縁の身。それでいい。授けられた天の意向に従わねば英雄になれんのなら、人の生き様とはあまりに虚し過ぎる。」

俺にとっての勇者とは、己で決めた信条に誇りと覚悟を持てる者だ。他の雑念に惑わされず、難関辛苦にも怯まずに立ち向かった先でこそ真の英雄は現れると思っている。

己の決断からおまえは逃げなかった。数多の悪徳に穢れながら、変革していく世界と責任をその背に負い、業と罪の全てを是として天下布武を成し遂げた。

たとえ資格好がどのように変わろうとも、その真実は変わらない。英雄・織田信長は真に勇氣ある者である。決断したその意志は、美しいものであったのだと」

だからこそ、目の前の偉大なる英雄に対し、甘粕正彦は心からの尊敬を示すのだ。

古きを排して新しきを築く革新の王。世の道理に異を唱え、数多の正論を退けた風雲児。

彼女が成した天下布武の霸業。自らで正道を定める信念こそ人の素晴らしきだと信じている。

その輝きは、最初に邂逅した時より色褪せない。

こうして異なる姿になろうとも、確固として自己を持った意志の値は不変のままだ。

故に甘粕はアーチャーの変化にも動揺を現さない。重要なのは信念の絶対値。その性質が如何様になろうとも、そこが不変である限り価値は等しい。

王としての姿も、姫としての姿も、その美しさは変わらない。灼けるような尊敬という名の好感情を双眸に宿し、甘粕はアーチャーに熱望を向けていた。

「……ああ、まったく。そなたという男は、何処までも変わらぬ己で在り続ける。

告げるのは贅辞だというのに、その言葉には圧がある。気が抜けぬ、己は試されておるのじやと、そんな思いが抜けきらぬわ。

英霊たるわしにさえ響かせる、その意志の熱量。このような場に在って尚、少し蓋をずらせば容易く熱気が溢れてきよる。

そなたの信念は、その芯より違える事を知らぬのじやろう。ああ、己の喜びのまま純心に進み続けるその様は、変成を繰り返してきたわしでは到れぬ境地ではあるな」

感心したような、呆れたような、どちらとも取れる面持ちでアーチャーは言葉を漏らす。

第三者的な立ち位置で俯瞰する裁定者の視点。思想の性質を別種とするアーチャーの、それが甘粕に対するスタンスだった。

だというのに、いつしか試されているのは己の方。今回だけではない。これまでも何度だって互いの立場の逆転を起こしてきた。

人間と英霊、その存在格差さえも覆して、両者の対等を実現させるのは熱意と誠実。憚ることのない言葉の数々も、今という瞬間を誰よりも重く真剣に受け止めているが故に。

軽い口先は響かず、侮辱をすれば殴られる。

言葉一つとて、勇氣と覚悟が無ければ何も届かない。

甘粕正彦が掲げる信条が、氣迫となつて言葉にも表れている。語り合う関係を殴り合いにも見立てて、言葉一つにも相手の存在を揺るがすほどの熱を帯びるのだ。

「……わしが生きた時代、戦国の世とは迷走の時代であった」

故にこそ、アーチャーもその言葉を流す事は出来ない。

戯れの無い真摯さを宿した神妙な語り口で、己の真意の一端を話していく。

「応仁の乱より続く混乱、統制の瓦解により抛り所を失った各地は自治を強め、日ノ本は群雄割拠の体を成しておった。

そこにあつた野心は決して多いものではない。多くは自領の安定こそを望んでおつたじやろう。だが、人の世とはたとえ善意であつても動乱の温床となる。

己の土地が、名誉が、民や家族、妻子どもを護らねばと。立場の異なる者同士が願ひ求め、そこには対立の凶式が生まれる。それら総じた自らの利の侵害を恐れるが故、護らんがために闘う事を選ぶのじや」

誰しも自らの立場があり、護りたいと願うものがある。

それを愚かだとは誰も言えない。法の秩序が頼りにならないのなら、自らの力でそれを為そうとするのは当然とさえ言えるだろう。

そう、誰にとつても間違いでないからこそ、止める事も出来ない。護るといふ善意のために際限なく力を求めて、あるべき領分を逸脱すれば、やがて異なる善意との衝突を起こしてしまう。

その境界を定める事が、本来の秩序の役目。

古い秩序がその役目が果たせないのなら、新たな秩序を築く以外に処方はない。

「しかし所詮、それも周りの見えるものを見ているに過ぎぬ。それでは未来がない。やがては道半ばに崩れ去るは目に見えておる。

真に未来を見据える者、見据えたその理に従える者は少ない。他の誰かであればと、そのような考えしかできぬ者に正せるものはないのじや。

望むのなら起たねばならぬ。たとえ神託などおりずとも、自らで事を為すと覚悟せねばならぬ。ここは人の世であり、その行く末は人の手で築かねばならぬのじやと」

アーチャーは、姫という形をしていた彼女は、それが出来る英傑だった。

それが本当に正しい選択だったのか、他に道はなかったのか、そん

な思案に意味はない。

選択の覚悟があり、捨て去る事への決意がある。その過去がある限り、彼女の王道は揺るがない。

彼女が定めた彼女の正道。それは世に拡がり、やがて天下統一という巨大な宿願にさえ迫った。得られた未来という成果があるのなら、過去を振り返るべきではない。

「王が果たすべきは民草を幸福とする事ではない。理想や夢、心に灯る標を示すなど役目に非ず。

未来に繋がる繁栄を築くこと。迷走に惑うのではなく、世にこうと進むべき道筋を指し示すこと。拓かれる余地を閉ざすのでなく、まだ見ぬ未踏へとも至れるように。

そのためならば、如何なる血の業とて許される。否、自らの所業によつて許されるに足る成果を築くのじゃ。それこそが総ての業に報いる責務である」

そのために、きつと彼女は多くを切り捨てた。

ここに在る姿も、その内の一つ。本来あるべき「女」の生を捨て、鉄血の信念で築く王の生き様に殉じた。

そこには手に入るはずだった幸せもあつたのだろう。絆を断ち切り、非情と人々より恐れられ、王となつた彼女が選んだのは国という理だ。

それを不幸と呼ぶのは筋が違う。決断の覚悟こそが下克上に成り上がった乱世の覇者の真価であり、そのような認識は侮辱でしかない。

「ならばアーチャー。おまえ自身にとっての喜びとは？」

「無論、国の栄えこそ王の喜び。我が国の繁栄を喜ばぬなど、そも王とは呼べぬ」

そこに疑心はない。アーチャーの言葉は本心のものだ。

数多の畏怖に彩られ、幻想にその姿を覆い隠された彼女であつても、そこだけは偽らない。

それを嘘にしてしまえば、築いてきた成果の全てが無意味となる。自らで選んだ生き方なのだから、後悔はそれを穢す澱みにしかならな



い。

故に、彼女は喜びでもって国に捧げた己を祝福する。

捨ててきたものは少なくない。未練の感情がないわけでもないだろう。

それでも、彼女は“女”よりも“王”なのだ。歴史に刻んだ『織田信長』の生涯に間違いなどなかったと肯定する姿は、紛れもない彼女の真実だから。

「その最期がどうであれ、王として生きたわしの五十年に悔いるところはない。取り戻したい過去がどうだと、その類いの願いとは無縁の身じゃ。」

この身を剣にと、交わした契りに偽りはない。月の聖杯を巡るこの戦いはそなたのもの。意義を決めるのも好きにせい。たわけた方針にも異論は挟まんとも」

アーチャーの手が、再び茶器へと触れる。

器に抹茶が注がれて、湯と共にかき混ぜられて芳醇な香りを立たせていく。

憩いを目的とする茶道の心得。物々しく張り詰めた空気を解きほぐし、本来の場の意味へと引き戻していく。

「話題は些か無骨に流れたが、そなたとわしであれば、それも是非なしよな。」

此度の茶席はわしからそなたに贈る労いの場。純にその身を憩うためと、目的を果たしておかねばなるまいの。

——ええ。そのために、こうしてわざわざ捨てたはずの自分<sup>も</sup>まで拾い上げたのですから、その甲斐くらいは欲しいところですよ」

繊細に、穏やかな手付きで、新たに淹れられた茶が差し出される。

その出来映えは見事の一言。この一杯は、アーチャーが示す尊重の証明だ。

この場を設けた目的に何かを試すような意図はない。本心よりマスターの安息を願ったからこそ、王ではない姫としての自分で向かい合っている。

「そうだな。何せ、おまえが手ずから用意してくれた場だ。それを拒

むほど無粋ではない」

差し出された茶碗を甘粕が手に取る。

茶席の作法とは、茶の湯をより一層に愉しむためのもの。蔑ろとするのは道理のある行為ではない。

甘粕とて、それは重々承知の上だ。先人の築いた文化への敬意もある。その作法を再び遵守することに否などあるまい。

「だがな、俺のためと力を貸してくれるのはいいが、そればかりではつまらんぞ」

そして承知した上で、その場のノリで道理を踏み越えてしまうのも甘粕正彦という男。

手元にある茶碗を荒々しくも驚掴み、豪快にその中身を呷ってしまふ。

先までの礼節ある作法ではない。ただ思うがままに咀嚼して、気の向くままにその味わいを愉しみ尽くす自由奔放な飲みっぷり。

型に嵌ったばかりのやり方では味気ない。こうして今ある正道から外れてみせるのも面白いと、言外に示していた。

「どうせなら新たな自分でも求めてみるよ。早々に変わらないと決めつけても仕方あるまい。

型を破れ。せつかく得られた二度目の生だ。かつての己では出来なかつた事の一つでもやり遂げてみせなければ、機会を手にした甲斐がなからう。

なあ、革新の王よ。古き有り様に新しい可能性を見出してこそ、冠した名の意義がある。らしくもない姿でも、引き出される輝きはきつと劣らずに美しい」

甘粕は今の姿だけでは満足していない。

英霊たちの偉業を讃え、その存在に敬意を持ちつつ、それ以上を求めている。

サーヴァントとて人、確固たる人格を持った命として。誰もが己の願いを抱いて戦える、聖杯戦争とはそういうものなのだから。

勇気を愛する男は、自らのサーヴァントにも同じように奮起を期待している。その魂の輝きを認めればこそ、現れる新たな姿にも素晴ら

しいものがあると疑う事なく信じていた。

「まこと、そなたは試練を課するのが好きな男じゃ。サーヴァントなど、過去の情景が焼き付いた残滓のようなものと、分かっているくせに遠慮なしとは」

「遠慮などするものか。俺はおまえたち英雄を信じている。人類史に偉業を刻んだ意志は、輝きと称するに相応しい。その期待があるから、奮起を待望するのは至極当然ではないか」

何一つ憚らず、期待する心を疑わず、甘粕正彦は自らのサーヴァントへとその信条をぶつけた。

「未来に決まったものなどない。俺たち人は、今という時間を懸命に生きるより他にないのだ。伝えたい意志があるなら、伝えなければ後悔が残るだろう。」

これより先の戦い、勝ち抜いた猛者たちはこれまで以上の実力者揃いに違いない。その輝きも素晴らしいものであるのに疑いなく、それを余す事なく受け止める心算なら、俺たちとて飛躍の一つは成し遂げる覚悟でなければならぬ」

宣した約定は違えない。

甘粕正彦は人々にとっての試練となる。この聖杯戦争でもそれは同じ。

ともすれば己に匹敵するかもしれない強者を相手にも、姿勢を変えつつもりが無い。その力を十全以上に引き出して、その上で真つ向勝負で打ち勝つのだ。

それをしていくためには、自分自身もまた強くなるしかない。戦いを己にとつても試練として、自らの新たな可能性を開拓するのだ。

「……まったく、本当に甲斐のない。どんな優美や美食よりも、あなたという雄が求めるのは益荒男たちの武勇伝。女を泣かせる唐変木という評は間違つてませんでしたか」

漏らした言葉は、諦めを含んだ本音の部分。

どこまでも意志の燃焼を止めようとしなない男に、付いて行く女は諦めるしかないと悟ったから。

「それもまた、是非なしじゃ。うむ、気の迷いもここまで。そのうつけ

ぶり、もはや死んでも治らぬ筋金入りであると改めて承知した。鉄火の熱気こそ欲しがらるならば、わしもそれに相応しい装いに戻るとしよう」

雅に艶やかな場にあつても、主従の間に吹くのは鬪争の息吹。

彼らに安息はない。否、たとえ安息の中にあつても、鬪争が彼らの意識から消える事はない。

男の魂が鬪争を求め、心から愉しんでいるから。鬪争の悲劇を嫌つても、勇気が試され輝きが溢れる舞台には胸踊らせてしまうのが必然だ。

主が望むなら、従者もそれに倣うのが道理。安穩に包まれていた茶会の場合も、既に死闘へ臨む修羅たちの気配で満ちようとしていた。

そして、インターバル 休息期間は終わりを告げる。

これは戦争。一人と一騎を選抜する生存競争。

既に初期の段階の一割程度。それらの生き残りも、これより先で散る運命。

命運を掴めるのはただ一組。所詮は仮初めの安息であり、そんな事は誰もが重々承知済み。忬より鬪志を絶やすような無様などここにはない。

「ついにこの日がやって来たか。いずれこうなるとは分かっておつても、いざ迎えてみれば感慨深いものよ」

故に、訪れた事態にも、男たちに動揺は皆無だった。

告知された対戦表。

一方に記された名は、甘粕正彦。

もう一方に記された名は、臥藤門司。

掲示板を間に挟み、二人の男が立っている。

共に気迫では劣らない。両者の戦いに懸ける気概には微塵の迷い

もない。

「おお、この血潮の滾り！ 心身は修羅が如く打ち震え、止まらぬ武者震いが眼前の壁の険しさを感じている。小生は今、与えられた試練の機会を歓喜でもって迎えているのだ！」

相手に取って不足な一ツ！ この難関こそ愚僧オレの聖戦に相応しい。甘粕正彦、我が神の名の下に、精強なる魂をこの戦いで散らすがいい！」

「それは聞けぬ相談だ。試練となる事は承知、俺は燃え上がる人の輝きを望んでいる。難事へと挑む気概のもと、より練磨された光が現れるのを信じてな。」

だがそれでも俺は勝とう。墮落する人の魂を救うため、我が”楽園ぼらいぞ”を世界にもたらすために。臥藤門司、得難き光を俺に見せて、その果てに砕けるがいい」

かつての仮初めの日常、偽りの日々の中で男たちには交流があった。

たとえ互いの立ち位置は偽りでも、共に過ごした時間は嘘にならない。

育まれたものはある。暗い思いは何もない。その間柄が殺し合うなど悲劇以外にあり得まい。

それでも、彼らの心は決まっている。

数多の祈りを塵殺しても、叶えんとする願いがある。

覚悟ならば始まりの時点で出来ている。相手が誰であろうとも、決意が鈍る事はない。

その信念は真つ直ぐで、強いものだ。互いに性質で似た部分を持つ二人は、この運命を臆することなく受け入れる。

ただ己の意志の限りに、全霊を尽くしてぶつかり合う。それ以外の選択肢など、彼らの間にはあるはずもなかった。

——4回戦の、幕が開く。

## 4回戦：ハンティング

臥藤門司という男が持つ宗教観は、常人の理解からはかけ離れたものである。

一言で言うのなら、それは「混沌」。

特定の宗教に執着せず、古今東西、あらゆる宗教を学び、自らの教えとして取り入れた。

であるなら、それらの教義を一本化し、統合した教えとしているのかといえばそうでもない。

教義の内容はそのままに、ひたすらに混ぜ合わせた閥鍋的な宗教観。様々な教えからの引用が散見し、ほとんど何でもありといった様相だ。

端的に言って分かりづらい。

根本には仏教があるようだが、それも遍く教義に色付けされて内容が伝わり辛いのだ。

熱意が本物なのは分かる。それこそ暑苦しいまでに、懸ける思いは紛れもなく真実である。

しかしそれも、信念が理解されなければ狂人の戯れ言だ。まるで何かに憑かれたように逆境へと挑み続けるその姿は、他人の眼からは理解し難いものでしかなかった。

故に、これまで臥藤門司の教義が理解された事は皆無である。

全ては彼一人だけの空回り。教養も信念も本物なのに、それが余人に伝わる形と成り得ない。

西へ東へと、あらゆる場所へと赴いて、あらゆる神学を走り抜ける求道僧。しかし混沌と消費の時代にある現在にとって、その存在は異端としか映らなかった。

何故、どうしてそこまでするのかと、誰かが訊いた。

あなたの一歩している事は徒労、無意味だ。何かの実を結ぶことは決してないだろう。

どうして諦めないのか。どうして妥協しないのか。ほんの少し肩

の力を抜いたなら、きつとその功德は素晴らしいものをもたらすのに。

向けられる問いに、男が返すのはいつだって同じ思い。

そんな情性は許されない。そんな日和った結論が本物であるものか。

誤りがあるのなら糺さなければならぬ。それが信心を預けるべき教えであれば尚の事。

偽物だと知りながら、それを見まいとするのは不実の表れ。そのよ  
うな不徳を己に許す事にこそ、愚僧オレは赫怒オレの念を抱くのだと。

恐らくは、男の語る求道は正しいのだろう。

怒りのまま、ひたすらに正道を歩まんとする姿は、まさしく勇者の如く揺るぎない。沸き立つ憤怒を身に湛えて、男は自らの求道を駆け抜ける。

されど、その道は正しくとも、駆ける姿は雄々しくも痛々しい。決して解けない命題に挑み続けるその様に、後へと続くこうとする思いは皆無であった。

教義が矛盾しているからではない。その矛盾を僅かさえ許せない  
純真さこそが、男を理解の及ばない地点へと遠ざけている。

臥藤門司とは、孤独の求道。

その思いは理解されず、その背を追う者は現れず。

世界の正しさを願っているのに、その一端さえも己の手が届かない  
憤りを抱えながら、ひたすらに駆ける脚は止まらない。

理解されずとも、その熱情は本物だ。絶望を感じつつも、その不屈  
は強靱だ。如何なる苦難、挫折にその身を晒されようとも、光を指  
すその意志は絶対に諦めない。

ならば、男が強者であることに疑いの余地はない。たとえ誰からの  
理解を得られずとも、雄々しいままに掲げられた祈りが偽物であるは  
ずがない。

故に、求道者は経典ではなく刃を手にした。

その罪を承知して、非業を重ねる修羅道に堕ちることを覚悟しながら。

それ以上の全てに報いる決意でもって、万能の御座へと目指すのだ。

雄々しき鋼の信念を抱いた男は止まらない。

猛る魂が奮えるままに、臥藤門司は愚かなる正道を邁進していく。

その迷走を誰よりも理解しながらも、今の彼には奉じるべき真理があるのだから。

ここに、一人の女がいる。

美しい女である。

月並みな言葉だが、絶世と呼んでも差し支えない。

整いすぎた美貌は、まるで意図してそう創られたような、いつそ人間的でないとさえ見える。

その存在は場違いであるだろう。

ここは『迷宮』。聖杯戦争のために用意された試練の場。

安全とは程遠い。徘徊する敵性情報体は危険極まる。戦う力を持たない者が足を踏み入れてよい場所では断じてない。

女の資格好は、とても闘争を行う者とは思えない。

鎧に身を包むのでなければ剣も佩かない。その装いは一般人のそれと変わらない。

極めて現代風な衣服は英霊のものとは到底思えない。何かの間違いで迷い込んでしまった現代人、そう解釈するのが最も妥当とさえ見えた。

もしも真実、彼女が哀れな被害者であるのなら、その末路は決まっている。

心なきエネミーに慈悲はない。あるのは異分子を排除すべしというプログラムだけ。

ここに存在するというだけで、それは即ち排除対象。対処する術が



ないのなら、無残な残骸を晒す以外にないだろう。

そして現れたのは、影か泥を思わせるエネミー。

固形と流体の間をいく暗色の泥細工。暗黒の中で爛々と輝きを湛えた二つの眼光が道行く女の姿を捉えた。

這うように迫り来る異形を前に、女は逃げようとしめない。何ら頓着することなく、その歩みに一切の澱みを雑えずに変わらない。

ならば結末も予想の通りとなるだろう。末路は近い。異形の腕が振るわれて、その霊子は砕かれ情報の海に沈んでいく。もはや惨状は不可避であるかに思われた。

……と、遠く彼方から眺めるだけなら、恐らくはそのような感想に至るだろう。

その女は、煌く金色の髪をしていた。

肌は雪のように白く、瞳は左右で異なる深紅と淡紫。

美貌に張り付くのは、能面のような無表情。

美しい女だ。非現実とさえ見える女だ。淡然と、揺るぎなく、絶対と存在する白い姫。

エネミーとは、単なるプログラム。

ただ与えられた役割に徹するだけ。生命としての本能とは無縁の存在。

故に、その女を視覚情報として捉えても、あらかじめ定められたルーチンを実行するのみ。

襲いかかる。女のカタチをしたナニカへと。機械的に、あるいは盲目的に、いつそ滑稽とさえ呼べる襲撃を実行する。

引き裂かれた。

それ以外に形容のしようがない。

無造作に、降りかかった火の粉を払うように。

振るわれたのは女の細腕。荒事には縁遠い繊細な指先が、構成された霊子をまるで紙を裂くかのように容易く断ち切ってみせたのだ。

女の歩みは何も変わっていない。

立ち塞がったエネミーなど、妨げにさえなっていない。

何一つ意に介さず、ただ淡然と歩を進めるのは、至高の存在にのみ

許された特権だ。

まるで世界とは彼女のために用意される一人舞台。天地に祝福された独壇場ステージの上で、白い姫は淡然と在るがままに君臨する。

そんな女に、殺到するエネミーたち。

一体の破壊を皮切りに、自らの役割を果たすべく数多の個体が駆動していく。

その突貫に躊躇はない。眼前の存在に対する畏れも敬意も、装置には無用のもの。

本能を持たない者は、恐怖を知らない。待ち受けるだろう結末にも構わず、与えられた指令コマンドの通りに向かっていく。

そして巻き起こされる破壊は、優美さと共にある白い舞踏。

吹き飛ぶ。裂かれる。碎ける。潰れる。白い姫が美しき舞を踊るたび、巻き込まれた数体が塵殺される。

彼女という聖域を侵す者へと下す罰。哀れな侵害者たちは何の成果も与えられず、ただ塵となって情報の水底へと沈んでいった。

何者をも寄せ付けない、それは超越者だけが持つ器の証明。性能の強弱ではなく、存在としての位相が違う。圧倒的という言葉さえ生温い凄まじさが、彼女を慮外のものだと知らせていた。

「まさしく規格外じゃな。あれが此度の対戦相手か」

そのような超常の光景を、遠方より射抜く視線が一つ。

クラスに与えられた鷹の目を駆使して、軍装のアーチャーがその存在を捉えていた。

「というか、なんじゃあそれは。まともな英霊とはとても思えんが。人外の魔性か、それとも精霊の類いか？」

英霊であるアーチャーの眼から見ても、女の存在は異常の一言。

あんな英雄は知らない。というより、あのような英雄がいるとは思えない。

姿形にしてもそうだが、何よりもその戦い方だ。敵対する一切が無造作に引きちぎられ、投げて砕いていく殲滅ぶりは、人間の闘争手段とはかけ離れている。

その戦い方は怪物、妖魔といった幻想種、初めから超抜した強度を

持つ存在にのみ許されるもの。人間らしい技術の気配は一切見られない。

たとえ後に魔道へ堕ちた逸話を持つ英雄だとしても、原点が人ならば技の名残がある。狂戦士化して理性を蒸発させているとしても、道具を振るう事まで忘れはすまい。

アレはあまりに自然体過ぎる。間違いなく、あの存在は始まりからそう在ったのだ。ありのままの強さでもって振る舞う、人外の超越種として。

「あんなものまでサーヴァントと化すとは、ムーンセルも節操なしじゃの。いや、それを置いても、アレの存在には何やら絡線がありそうじゃが」

眼にする存在に何かを察して、アーチャーは呟く。

アレもサーヴァントなのは確かである。少なくとも、その型に嵌った上で存在しているのは間違いない。

だが、違う。アレは他のサーヴァントとは根本から異なっている。通常の英霊の枠組みでは収まり得ない何か、例外として存在する規格外だと洞察した。

「正面から相手取るのは厳しいじやろうが、とはいえこの場に限ればやりようもあるろう。まったくあの神父め、味な趣向を用意したものだじゃ」

されど、その表情に湛える不遜に揺らぎはない。

異常であり、規格外。通常のサーヴァントの道理では測れないとは既に理解した。

それでも、アーチャーが抱く理は自身の敗北を告げてはいない。この場の条件に限って言うのなら、むしろ優位は自分にあるとさえ思っている。

直感や天啓の類いではない。革新の王はそんなものに頼らない。彼女が信じるのは常に理詰め、の戦術、戦略。あらゆる条件、状況を鑑みて、勝機を見出すからこそ迷わない。

その背に引き連れるのは三千の銃器の群列。心無き鉄の軍勢を操りながら、アーチャーは行動を開始した。

『ハンティング  
狩猟数勝負』。

4回戦、マスターたちに与えられた特殊なルールを、そう呼んだ。  
監督AIである言峰より告知された課題<sup>タスク</sup>。

ある特定のエネミーを標的とし、期間内での撃破数を競うというものの。

勝者には報酬も用意される。それは対戦相手の戦力情報<sup>マトリックス</sup>。聖杯戦争を戦うマスターならば、何を置いても欲しがるものだ。

場所はアリーナ。常と同じく多種多様なエネミーが徘徊<sup>トリガー</sup>、暗号鍵の取得も変わらず義務付けられる。当然、マスター同士の遭遇、妨害や戦闘も常の通りである。

「おお、ハレルヤ！ 来たぞ、修行の地。我が神と過ごす血と汗と筋肉の迸る濃密な蜜月、小生にはもはや毎日が吉日なり！」

そして降り立った直後に速攻で赴かれるとは、いやはや、神もやる気に満ち満ちておるようで結構結構！ あまりの速さに置いていかれてしまったが、なにどうかお構いなくしますな。これも試練と受け止めて小生、すぐに追いついてみせます故」

静謐なアリーナに声を響く。

轟くような声だった。弱気などとは無縁の、快活に雄々しき有り様を示す声。

独り言にしては大きすぎる音量で、しきりに自らへ頷きながらガトーは佇んでいた。

「なにせ神よ！ あなたこそは世界を照らす威光そのもの。その意向であるのなら、どのようなものであれ小生は受け入れる所存。

その『魔眼』の湛える闇の深さたるや、深淵にて揺蕩う原初の如く奥深く。

その『真祖』の名が持つ偉大さたるや、如何なる神性の権威さえも

霞むほどに神々しい。

もはや存在するだけで如何なる教義にも勝る真理。神ここにおわす、故にその可愛さ素晴らしさは正義なり。大雑把に言うのなら、神サイツコオオー！」

口にするのは全てが贅辞の言葉。

内容は支離滅裂、しかしその熱意が偽りでないのは明白だろう。

それこそ異様なほどに、ガトーは己の”神”に信心を捧げている。その”神”の存在こそが全てだと、恐らくは何の躊躇もなく断言するだろう。

「どうか御身の望まれるがままに振舞われよ。当て嵌められた役柄などに縛られなさいますな。サーヴァントなどという括りよりも、御身がここに在るその事実だけで、五体投地にて拝謁する百万の理由となるのだから！」

なれば小生こそは御身に仕える使徒として！ ソドムとゴモラの街にアフラ・マズダの光をもたらずが如く、大いなる星の意思でもって退廃へと向かう衆生らを導かん！

それこそが女神との邂逅を果たした愚僧オレに与えられた使命であるが故にいいいいツ!!」

その有り様は、一言でいって狂信者だ。

他人にはまったく付いていけない道理を宣い、その正しさを盲目的に信じている。

聖杯戦争。マスターとサーヴァント。そのルールと互いのあるべき関係さえ、果たしてどれだけ頭に入っているのか。

己の信仰に絶対の信を置く者にとって、世に罷り通るだけの常識に価値はない。妨げとなる他の教えなど、信心に狂う者には余分な雑念でしかないのだから。

そして道理が通らずとも、この舞台にあつては問題とならない。

ここは死闘をもって答えとする闘争の坩堝だ。どのような信心、狂信であろうとも、その強さでもって勝利した者こそが道理となる。

どんな蛮行、愚行に走ったとしても、それと見合うリスクを背負う覚悟さえあれば問題ない。巖と己の信念を貫くガトーの在り方には、

行動のリスクに脚を竦ませる軟弱さは微塵もなかった。

「――ほう。我が女神とは、サーヴァントに向けた敬称にしても、随分と趣きが異なっているように聞こえる。どうやらおまえにとってその存在は、よほどの特殊であるようだな」

そう、臥藤門司こそは紛れもない勇者の一人。

愛するに足り得る人の輝き、ならばそのような舞台にあって、この男が赴くのは必然だった。

「とはいえ、まずは久しぶりだと言わせてもらおう。改めてこの再会を喜ばせてくれ。臥藤門司、あの予選での日々から別れた時より、俺はこの日を待ち望んでいたのだから」

男は勇気を望む者。輝ける意志こそを人の価値とする裁定者。

善悪の如何でなく、重要なのは絶対値。極論すれば理解さえ不要とも断じている。

要は掲げた信念に勇気と覚悟が持てるなら、男にとってはそれでいいのだ。公正とも、幼稚とも取れる歪さは、彼もまた正しさの規格から外れた異端者の証明だった。

甘粕正彦。臥藤門司。

裸一貫、我一人でもって向き合う男と男。

その間に何者も交える事なく、両者はここに改めて相対した。

電子の世界に広がるフィールドを、白い女が駆け巡っていく。

駆け抜けたその跡に残るのは、ただ一方的な蹂躪の痕。

見た目の美貌とはかけ離れた規格外の力を前に、阻める存在などありはしない。

その手を振るう先に立てば、砕かれ裂かれ破壊される結末があるのみだ。この空間に存在するあらゆるエネミーが、女の形をした天災に曝されて塵と化す。

されど、空間に響き渡る破壊の轟音は、女だけのものではない。

蹂躪の灰に紛れるように、僅かに匂い立つ銃火の硝煙。薙ぎ払う暴風の音の中で、確かに響いている無数の銃声。

女が引き裂くその横で、また一体のエネミーが銃撃に穿たれる。同じ敵を倒しているが、それは断じて女の援護を意図するものではない。その証拠に、次なる火線は女へと向けて集中された。

避ける隙間をも封殺する集中砲火。殺到する銃弾の洗礼に、女は成す術もなくその身を晒される。

通常ならば、その光景の後で無事な姿など想像出来はしないだろう。

無骨な鉄礫に噛みちぎられて、その姿は無残な肉塊という残骸へと変じているはず。

そんな当然の道理であるはずの光景を、しかし射手たるアーチャーは確認することが出来なかった。

「我が『三千世界』を身に浴びて、防ぎもせずにこれか。わしの中の自負ともいふべきものが崩れそうじゃ」

硝煙の晴れた先、アーチャーの宝具を受けて、されど現れた女の身はまったくの無傷。

美しき艶体は些かも損なわれていない。放たれた全火力は、一点の傷さえも穿つことなく終わっていた。

「あの頑強さ、いよいよもって人のものではないが、謎もあるのう。如何な妖魔、精霊の類いといえど、神秘に属する以上はわしの種子島が通じぬはずがなし。

……異質だとは思ったが、奴め、根本より人類史の域外における存在か？」

アーチャーの能力とは、神秘殺し。

神性、神秘に類する対象への特効作用。その歴史が古ければ古いほど、革新の英雄は真価を発揮する。

それは幻想種として例外ではない。人の伝承に記された神秘の中の怪物たち、たとえそれが竜種であろうとも種子島の銃砲はその鱗を貫くだろう。

だというのに、こうもまったく通じないのは、特効作用がまるで働いていないからだ。

神秘に類する者に通じないはずがない。裏を返すのなら、それは相手が神秘とは切り離された存在であるということ。

古い概念を打倒し新しい秩序を敷くのが”革新”の意義。ならばそもそも、人の語り継ぐ幻想から完全に別系統の存在だとするならば、この結果も頷ける。

「とは申せ、見たところ完全ではなさそうじゃがな。反応がいちいち動物じみておる。その存在がサーヴァントのクラスに当て嵌められておるなら、さしずめ”理性欠け”か？」

対象を射抜くアーチャーの眼は、女の瞳の空虚さを見抜いている。この女に確固とした意識はない。封じられたのか、自ら閉ざしたのか、どちらにせよ理性の無さを確信した。

ならば道理を考えて、サーヴァントとしてのクラスは理性を捨てたバーサーカーだろう。だとしても、この存在がサーヴァントの枠に収まるのかと問えば、疑問が浮かぶだろうが。

「こちらに関心を持つ素振りはない。脅威ではないとでも判断したか？ 索敵もさほど得手ではないと見た」

女——バーサーカーに、己を害された事への憤りは見られない。

こんなものは取るに足らないと示すように、エネミーの追跡と破壊を続けていく。

その真意は不明だが、この場でそれは正しい判断だ。

ここでの課題は『狩猟数勝負』。サーヴァント同士ではなく、特定個体の撃破こそが要である。

どの道、本格的な戦闘となればムーンセルからの干渉を受ける。

先ほどのアーチャーの銃撃も、言ってしまうえばギリギリのラインだろう。正確なところはムーンセルのみ寄り知るものだが、実際にはかなりの行動が容認されている。

奇襲、狙撃、毒による間接攻撃、魔術や結界による明確な妨害行動など、直に激突さえしなければ警告は鳴り響かない。



これまでの戦いの中で、アーチャーもそんな月の采配を読み切りつつある。故に、ペナルティを受ける境目に立って彼女は敵を見定めるべく動いている。

「己の中で優先順位でも持っておるのか？ 目的、というよりは好奇心か。奴の関心が、こちらよりも獲物の方に向かっておる。」

動物的な本能とは馬鹿に出来んのう。時にそれは人間の賢しさを上回る。奴の行いはそれに近い。狂戦士と呼ぶには些か奔放が過ぎるがの」

遠く彼方より対象を鋭く観察するアーチャー。

その観察眼は確かなもの。己の不利までも冷徹に、彼女の戦の理は答えていく。

明白な性能差。攻撃は通じない。知性はなくとも本能の選択は的を射ている。

互いの持つ戦力の差は明らかだ。アーチャーでは、バーサーカーには及ばない。認めがたくとも受け入れなければならぬ結論が、そこにはあった。

アーチャーは事実を誤魔化さない。

不遜にして独尊。王としての彼女は自らの在り方をそう定めている。

しかし、その瞳が慢心に曇る事はない。彼女は超越者ではなく、下剋上を這い上がった乱世の風雲児。どれだけ傲慢が過ぎようとも、事実は事実として誤らない。

己を無敵などとは自惚れず、劣る所が見えたなら警戒する。徹底して己が勝てる所で戦つての勝利こそが、アーチャーの真骨頂だ。

「是非もなし。貴様の底がそこまでであるのなら、やはりこの場を制するはわしよ」

故に、確信を込めた厳然たる事実として、アーチャーは己の勝算を見出した。

無論、そのようなアーチャーの独白など、バーサーカーの意に介するところではない。

白い女はただ蹂躪するだけ。在るがまま、思うがままに、超常はそ

の力を振るうのだ。

特定の対象など、既に頭にはあるまい。どれが標的でも諸共全てを叩き潰す。それが荒ぶる本能が出した解答だった。

引き裂かれたエネミーの先、標的とされた個体がバーサーカーの瞳に映る。

まともな生物の形はしていない。顎の部分が異様に強調された鱈の頭ようなエネミー。

破壊に区別はつけておらずとも、好奇という意味合いで関心の比率は上なのだろう。目にした瞬間、バーサーカーの手は一直線に標的の個体へと伸びていく。

振りかざされる女の手。捉えた標的を粉碎すべく振り下ろされる。

その手を、一発の銃撃が撃ち抜いた。見かけと相反する強度により損傷は一切ない。だがその衝撃で狙いが逸れる事も避けられなかった。

破壊からの直撃を免れたエネミーがバーサーカーより退避している。生命としての執着や本能は持たずとも、自己保全の機能によつて最大の戦闘個体からの撤退を判断したのだ。

無論、それで逃げられるわけではない。桁が二つか三つは違う性能格差は、矮小な存在にそのような選択を許さない。速やかに追撃されて、結果的には何も変わらないだろう。

だが、そんな一瞬の間隙を縫うように、三方からの銃撃が標的のエネミーを射抜いていた。

「鷹狩りは知っておるか、得体の知れぬサーヴァントよ。鷹を名に冠しておるが、あれの本質は別にあつてのう。獲物を勢子どもに追い立てさせ、放たれた鷹の一飛びにて仕留める。その真髄は鷹ではなく、如何に勢子どもに状況を作らすかの用兵にある。」

無論、これは戦においても通じる理じや。優れた性能も本能も、理という流れに逆らっておれば敗れ去る。さもなれば人は、霊長の頂きに立ってはおらん」

一丁をその手に、硝煙上げる種子島を構えたアーチャー。

彼女自身で撃ったのは一丁きり。続く三射はまったくの別方向か

ら放たれた。

アーチャーが扱うのは、その両の手で持った種子島だけではない。三千にも及ぶ種子島、空間に配置されたそれら全てがアーチャーの意思によって火を吹く。

狙撃の腕でも宝具の威力でもない。アーチャーが頼りとするのは物量と戦略。展開された自らの軍勢を適切に運用する将の力こそが本領だ。

「我が『三千世界』さんだんうちに隙はなし。出し抜く事など叶わぬものと心得い！」

その銃口が捉えられない地帯は既がない。それは配置を終えた詰りめ将棋だ。

稀代の戦術家の構築する理が、この狩り場を覆い尽していた。

「ええい！ 控えい、たわけえ！ 無用な馴れ合いなど無粋であるぞ！」

堂々たる姿勢を崩さず、熱く声を張り上げてガトーは言い放った。「これより我らが踏み入れるは修羅の道。己の目的とする祈りのため、相対する悉くを塵殺せしめる罪業の荒行よ。まさしく人界の強欲さがために開催された、魔羅やサタンに見下ろされた悪徳の坩堝に他ならん！」

こんな場所に降り立った時点で、我らは共に同じ穴の貉。だがなればこそ、勝つのは最も尊き理由を持ち、それを迷いなき鋼の決意で押し進める者でなければならん！ 後生戦いとは無縁な理屈ばかりのもやし学者には出来ぬ芸当よ」

「同意する。世界を変える資格を持つのは、己の理想を確固と定め、勇気を持って実現させようと立ち向かっていった者だけだ。正しい理屈とやらを口先で唱えるだけの者に何が出来ようか。」

しかし、ならば自らの信条には正直でいるべきではないか。真に尊き理由だと信じるなら、余人に明かすことを躊躇する必要はあるまい。たとえどのような言われたとしても、おまえ自身の信念の高潔を守り抜けるのなら、迷いが生じるはずなどないのだから」

「小生に理由を問うか!? この身に背負いし崇高な使命の何たるかをこの場にて開帳せよと?」

——よかろうツ!! このモンジ、己の天命に対し恥もなければ迷いもない! 聞きたいと言うならば聞くがよい。そして小生と相対したが故、その命を散らす不幸の慰めとするがいい!」

飛び出す言葉は、どれも叫びのように大きく激しい。

内容は理解しづらくとも、その熱量は疑いの余地がない。常態のように発するあまりの気迫が、大柄のガトーを更に大きく見せている。

あの甘粕でさえ、ガトーの気迫に抑えられて小さく見えるほどだ。少なくともその意志の持つ迫力において、ガトーは世界を相手にする益荒男にも負けていない。

「そも、小生が抱いた志とは世界の救済! 混迷と墮落、あるべき教えを忘れ、人の心より菩薩の道が失われんとする枯れた時代。この世界に新たなる光をもたらし遍く衆生を救い上げる事こそが愚僧オレの天命であると悟った若き時分!

されど、あるとき小生は気づいてしまった。浮世のあらゆる所に点在する数多の教え、そこには各々の矛盾があり、それぞれに身勝手な答えがある事を! それらの教えは人を正し、導くものであるが、矛盾を抱えたままの教義では真理たり得ず、天の光として万人の世界を照らすことは叶わぬのだと!

若かりし日の小生は絶望し、そして怒りに震えた。何より許し難かったのは、この明白なはずの事実に対し、誰もが目を向けようとしていなかった事である!」

語っていく内に、言葉の熱さの中に憤激の荒々しさが混じり始める。

そこにある感情は紛れもない怒り。ガトーは世の人々に対し明確な怒りを抱いている。

「何故理解しないのか、何故この矛盾を受け止めざる事を拒むのか!? それは奴らにとつての教えという抛り所、古来より続く安寧の連環を自らの手で断ち割る事を恐れるが故!

たとえ果てに枯れ落ちる衰退があると理解していても、ただ自らが安心したいが故にあえてその理解から目を逸らす。恐らく最期の時にまで、安心にしがみつこうとする姿勢は直るまい。

その姿に、愚僧オレは悟った。人は、放っておけば墮落する生き物なのだ。神罰という教えが無くば、容易く人とは退廃の一途を辿ってしまう。

そして発展と管理という安寧を手に入れた人類には、もはや神の罰さえも無用の長物。考える事を止めた耄碌者どもには、己を罰する事すら必要ではなくなつた。かつて世界の大半にその教えを広げた教義さえ、既にその意義を失い俗世の権勢によつて形を留める始末」

神秘という基盤が崩壊し、人々が信仰を必要としなくなった現代、基督教を始めとする宗教群はその存在意義を失おうとしている。

西欧財閥がもたらす“管理社会”という名の教え、新たなる秩序という神の存在によつて。人生の全てを保証する彼らの教えにより、神々の教義は不要となつた。

教会という組織は形骸化し、その権威はハーウェイ家の意向や金銭などによつて維持されている。神の奇跡への威光など僅かさえも残っていない。

管理という教義、西欧財閥が謳う支配のカタチ。

ガトーはそれを容認していない。人の墮落を加速させる毒であると明確な異議を唱えていた。

「新たなる教えが、光が必要なのだと、小生は理解した! それこそが己の成し遂げるべき天命であるのだと、かつての小生は自戒したのだ!

が、やはり小生は未だ涅槃の境地には至らぬ修験者の身分。迷いの内にある小生の言葉は人々の耳には届かず、救世などと夢の先の戯言にも等しかつた。象徴とすべき真なる神を持たなかつた小生は、怒りに身を任せて人の身勝手さに染まらぬ原始の神性を求めた!」

吼えるようなガトーの語りに対し、待ったをかけるように甘粕が口を開く。

ガトーに比べれば小さく、静かな物言い。しかし半端な割り込みは許さない断固とした意志は、ガトーの熱量にも負けずに響き渡る。

「矛盾だな。人の手による神を否定しながら、人であるおまえが神を求めるとは。その行為自体が、おまえの言う身勝手な人の都合とやらに当て嵌るのではないのかね？」

「然り。この願いもまた、小生の浅ましき我欲なり。己の都合で求める神性など、まさしく俺が憎んだ身勝手さそのものよ！」

あらゆる荒地に赴いた！ あらゆる難行に挑んだ！まるで己を痛めつけようとするかの如く、その苦しみを以て自らの傲慢への免罪符としているが如し！ 望む神性に出逢えない憤りに、矛盾を省みぬ己自身の不徳さに、愚僧<sup>オレ</sup>は迷道の内に在ったのだ！」

指摘にも、ガトーの勢いは衰えない。

むしろそれ以上の気迫でもって押し返そうとするように、その熱は更に増していく。

「だがッ！ その迷道の歩みも無駄ではなかった！ 苦行の果てにたどり着いた最も高き山脈の氷雪の先、ついに愚僧<sup>オレ</sup>は最も貴く優美なる原始の光と邂逅せん！」

その姿たるや大天使の後光すら凌駕する輝きであり、不動明王をも上回りヨハンネウムよりも絶対なもの。これぞ真に人々を救世へと導ける神の姿であると確信した！

もはや信ずる教など些細なもの。我が神こそが絶対！ 我が神がおわすことそれ即ち救い也！ この真理、遍く人々にもたらさんがために小生はこの闘争に参戦した！」

それが理由、ガトーが聖杯へと捧げるべき願い。

聖杯そのものに救いを求めるのではない。ただ己の”神”を世界中に認知させる。

ガトーの中で、それがどのような救済のカタチをしているかは分からない。だが少なくとも、それはガトーの中では絶対の真理なのだ。

その認識を、世界中の人々へと拡げようとしている。その願いがど

ういう形で人々の中で花開くかは不明でも、それがガトーのもたらす  
”救世”だった。

「理解したか!? 小生の抱く目的の崇高さを！ 我が正義はケツア  
ル・コアトルに等しく確かなもの。迷える子羊らをエデンの園へと導  
く使命がため、この聖戦に敗北は許されん！」

「ああ、理解したとも。おまえの本気の程は、よく分かった」

そして、善悪含めたあらゆる決意を受け入れるのが甘粕正彦とい  
う男である。

重視すべきは性質ではなく絶対値。どのようなカタチであれ、勇者  
の名に相応しい意志の強さを甘粕は歓迎する。

「おまえが出会った神とやら、察するにそれが契約を交わしたサー  
ヴァントのようだな。その辺の事情も何とも気になるところだが、ま  
あひとまずは置いておこう。」

俺が聞きたいのはそこではない。特殊な事情があるうが、それで  
おまえという相手が変わるわけでもあるまい。興味深い事を語って  
くれたな？ 人は墮落する、故に神罰が要るのだと」

「左様。そも人とは奪い、殺し、貪り、そして忘れるものである。衣食  
住に事足りればあえて動こうとはせず、如何なる悔恨も喉元を通り過  
ぎれば忘れる始末。人間とは、始まりよりその魂に原罪を負っている  
と嘆かわしくも結論した。」

なれども、人とは悪のみにあらず。その悪を放置できぬ善を併せ持  
つが故に、人は己の悪を罰したくて仕方がない。人間が神に求める救  
いとは、これ即ち罰なのだ。数多と記された終末の予言、滅びの果て  
に罪は浄化され人は楽土へ向かう。結局は自分たちが許されたいの  
だと、そのような己のための都合が滲み出たおぞましき結論よ」

「人間の本質とは悪である、か。なるほど、その結論は俺も思うところ  
がある。今の世を見れば、安寧に浸った人類がどうなるかは一目瞭然  
だからな。」

だがそのために求めたものが神だと？ それがおまえの言う人の  
身勝手な都合だというのか？」

「他にどんな結論がある？ いいや、無い。古今東西の信仰を学べば

学ぶほど、小生は同じ矛盾に行き着いた。神が天罰を以て人を扱うのは、元より人によつて与えられた性格なのだ。人の理想によつてそのカタチを得た神は、捧げられた理想の通りに人を悪と見なすのだ。贖罪のカタチを考えたのが人なら、罪の定義を創り出したのもまた人。人、人、ヒトオ！ どの教えの如何なる箇所にも、人の都合と矛盾に溢れている。これで真偽が問えるはずがない。何が悪で何が善かなど、狂わされた天秤に計れるものか！」

それはある意味で当然とも言える結論だ。

宗教には、その地域ごとの人間の生活環境、文化の様式が色濃く表れる。何が正しい行いなのかを伝える宗教観は、社会の形態を示す印だと言い換えてもよい。

必然、そこには人々にとつての都合、属性が混じるのだ。信仰される神々が人々の認識により性格を左右されるのも自然な成り行きではない。

矛盾に満ちる人だからこそ、その性質を帯びた教えにも矛盾が生じる。

それを以て身勝手な解釈だとするのは些か過ぎているとも言えるだろう。

自らの知る価値観に従い、築き上げられた教えを無意味とは言えない。それは人々に正しい生き方を伝えるための尊さでもある。

だが、ガトーはそれでは納得しない。

そんなものでは救えないと、宗教を不要とする今の世を目の当たりにしたが故、その求めはより純真な神性を必要とした。

「世に降臨すべしは穢れなき神性。人の都合に染まらぬ原初の神威でこそ衆生に真なる救いをもたらせる。我が女神はその光を体現せし星の触覚である！」

その純性、その美しさ、まさしく救世主に相応しき後光なり！ このガトー、御身のために粉骨砕身で働く所存。勝ち抜いたその先で、どうか御身の声を賜らんことをお！」

原初の女。星の触覚。

ガトーは語る。それこそが人の信仰が向かうべき神であると。



人の都合と矛盾から解脱した超越者。そんなものを神と定義して崇めるべきと謳っていた。

やはりその思想は理解から遠いところにある。

そこにどんな真理があったとしても、その純性はきつと人には厳しいものだ。

善いものであっても純粹すぎる。それはガトー自身の危うさを示すものでもあるようだった。

「そうか。つまりはそこなのだな。おまえは他人ひとに、己の正しさを理解されたいのではない。己の正しさを、おまえはおまえ自身で既に理解し終えている」

そんなガトーの様子を見届けて、得心したように甘粕は告げた。

「世間はさぞや生き辛かっただろう。度し難く映るものが数多くあっただろう。何も間違えてはいないはずなのに、度々感じるズレには憤りを覚えたはずだ。

事実、おまえは間違つてなどいない。おまえの感じているものは極めて真つ当であり、万人の共感さえ獲得できる。なのにこうまでズレが生じるのは、単におまえの正しさが余人にはあまりにも厳しいものだからだ。

納得できんよなあ？ 受け入れるなど論外だ。そこで退くのは妥協でしかなく、相手の弱さに合わせただけの体裁だ。そんなもので出す答えは碌な代物ではない」

歪みを抱えているわけではない。同じ正義を見ているはずなのに、周囲からズレていく感覚。

妥協すれば良かったのかもしれない。肩の力を抜いてしまえば、世界は大分生き易いものになっていただろうと自覚もあった。

そうしてはいけない理由もない。むしろそうした方が多くの人々を救えたはず。周囲にもそれを求められていたと承知もしていた。

それでも、己の正道を曲げられない。捨てられない執着は、まるで呪いのように苛みながら、信念の炎と化して男を突き動かしてきた。

「故に、対話ではなく闘争を選んだ。言葉ではなく刃をもって、己の意を通すと決めたのだろうか？ 弱者の論理を振りかざす者共に迎合す

るのではなく、己にとっての真を貫くために」

「むうう、まるで意を得たように語りおつて！ お主に小生の何が分かるというのだ!？」

まるで自分の意を解明するような甘粕の語り口に、ガトーもまた反応する。

ガトーにとって、それは己の生涯を捧げて得た結論だ。どういう意図であろうとも、それをさも承知したものとして語られては穏やかでいられない。

「分かるさ、同胞」

それに甘粕が返すのは、短い中に万感の思いと共感をこもらせた、そんな一言。

「俺もおまえと同じだよ。同じ憤りと決意を抱いてここにいる。俺たちはきつと、同じ世界をこの眼に映しながら生きてきたのだ」

戦闘の規模は確実な拡がりを見せていた。

数多のエネミーを引き裂ながら進む白いバーサーカー。目につく全てを手当たり次第に蹂躪していく様は、まさしく自我を持って駆動する嵐とさえ形容できる。

白い災害が通り過ぎた跡には、一方的な破壊の残照だけが残る。振りかざす純粹な暴力は、文明的な力では決して顕せない自然的な爪痕を刻んでいく。

対し、アーチャーが率いる銃火の総列もその威を振るっている。

戦場全体に展開された種子島。一人の王の下に統率された火力群は、確かな理により運営されて効果的に機能している。

妨害、誘導、牽制にと、一射ごとに各々の意味が伴われている。構築された戦況予測による詰め将棋に導かれて、その範囲を拡大させながら成果を掴み続けていた。

自然現象のような無差別な蹂躪と、人の軍勢が為す術理を伴った銃火。

対称的な両者の破壊に、優劣を問う事は出来ないだろう。だが、今の場での優勢がどちらかと問えば、それは明らか事だった。

「ハハハハ、無駄じゃ無駄じゃ！ 獣が如き暴力風情に、我が『三千世界』は崩せはせん」

アーチャーの戦術によって運用される三千の種子島。

それはバーサーカーを的確に阻害し、標的であるエネミーを確実に仕留めている。

全体数で見ればバーサーカーが圧倒しているだろう。しかし設定された『狩猟数勝負』という条件が、アーチャーの優位を築いてきた。既に築かれた優位性は崩し難い。このままいけば勝負を制するのはアーチャーだろう。

それを承知するようにアーチャーは笑う。だがその裏では、互いにある戦力の是非を正確に測ってもいた。

バーサーカーの持つ純粋な個体性能。

それはアーチャーを上回る。直接の戦闘となれば勝算は向こうにあるだろう。

とかく気にすべきは『神秘殺し』の特性の不発。アーチャーの本領がまるで発揮されていない点だ。

特性がなければ『三千世界』は宝具の性質を持つだけの数の多い種子島でしかない。それではバーサーカーに対し有効打を与えられない事は実証済みだ。

今の優位で、未来の問題を忘れる愚は犯していない。

7日目の決戦日、その時に待つのは小細工無しの正面对決だ。

今回のような条件の縛りは無い。まともにぶつかれば不利は明らか。それまでに敵の手の内を知り、勝算を練らなければならない。

アーチャーは合理性の英雄だ。

尊大であっても、慢心はしない。不遜の裏では常に戦略を巡らせている。

互いの相性を見定めて、勝利へと至る道を模索する。不確かさを廃

する理詰め of 戦こそアーチャーの本質、そこを失念する事は決してない。

「アアアアアアアアア——!!」

叫びがあがった。

元の美声を台無しにする、殺意の狂騒に塗れた女の咆哮。

無感動であった女の、初めての感情の発露。存在より発せられる魔力の昂りが大気を鳴動させた。

「獲物をさらわれ続けて怒ったか？ 動物らしく素直なことじゃ」

バーサーカーの姿が閃光と化す。

特別な能力や宝具によるものではなく、純粋な速度によって超越する人外の理。

その加速は、同時に蹂躪規模の増大を意味している。理性を持たない破壊現象と化して、バーサーカーは諸共総てを引き裂いていく。

「ふむ、確かに疾くはなったのう。しかしそれしきならば想定 of 範疇じゃ」

しかしながら、アーチャーの布陣は崩れない。

あくまで威力と速度が上がっただけならば、脅威的ではあるが、対応できないほどではない。

バーサーカー自身に通じないのなら、他のものを狙えばよい。銃撃に追い立てられ、誘導されて、望まざるに関わらずエネミー群はアーチャーの意図の通りに動かされる。

わざとバーサーカーの進路上を阻むように、標的を隠す壁とされて、その隙に狙うべきエネミーだけを的確に仕留めていく。

「貴様の底とはそんなものか？ ならば恐れるに足らず。たとえば性能が埋め難かろうと、知恵持たぬ物の怪ならば、わしに討てぬ道理はない」  
ただ疾く、ただ強い。

それが脅威であるのは間違いない。しかしそうした怪物を打倒してみせるのが英雄だ。

理性と引き換えに自らを強化するのがバーサーカーというクラス。それは即ち、性能以外の部分では大幅な劣化が見込まれる諸刃の剣だ。

どのような優れた能力、宝具があつたとしても、それを振るうための理性が消失しては意味がない。発揮されない効果ならば無いも同然だ。

その存在は通常のサーヴァントからは例外的なものであつただろう。だからこそ、狂戦士という型枠はその特性の大半を阻害するものであつた。

「もつとも、人の枠に納められぬ化生とあつては、果たして見合つたクラスがあつたかも怪しいが。せいぜい発揮できぬ本領を歯痒く思うがよい」

己の不利も理解している。特性が発揮されていないのは自らも同じ。

その上で、アーチャーは未だに勝機を確信している。少なくとも現状のままであれば、このバーサーカーも決して打倒できない存在ではない。

その根拠とは、知性の有無。理を駆使して世の不条理を道理に変える、知恵という人の持つ最大の武器。どんな強力な怪物も、知恵持つ人の手により打倒されてきた。

ならば恐れるまでもないだろう。如何に隔絶した性能を誇ろうとも、そこに研鑽の跡はない。狂える獣に過ぎないというのなら、理によつて駆逐できる。

このままその能力の全貌を見極めて、来たる決戦での勝機を得る。そこにある力の底がアーチャーの想定を超えない範囲にあれば、もはや勝利は揺らぐまい。

——故に、その認識は即座に改められることになった。

「……ッ!!」

世界が、震えた。

それは単なる大気の振動とはまったく異なる。

単純な物理現象とは決定的に意を違えた、超常さえ越えた超越。

伝播する意思が、世界の法と繋がっていく。発信源となるのは狂える白き姫。理性を持たない原始的な獣性が、世界そのものと同化して顕彰される。



ものだった。

「俺はな、敬虔な信仰心など持ち合わせていない。神など人のための道具だと思っている」

続いて発せられたのは、信仰に対する否定の言葉。

甘粕は神の存在を信じてはいない。かつて神々が世界に実在した神代ならばいざ知らず、現在においては共同体が正義と道徳の価値観を共有するための道具に過ぎないと。

心を一つとする拠り所、方向性を定めるための象徴として。なまじその意義と価値の程を理解しているからこそ、利用すべき道具という姿勢は崩れない。

「人の本質とは悪であり、人間は堕落を貪るものである。なるほど、俺も同じ意見だよ。管理の安寧に浸る事に慣れた人類は、あまりにも度し難い。

痛みが無ければ人は立ち方さえ忘れてしまう。おまえはそこに神への畏敬を求めたが、俺の場合はもっと直接的だな。

——痛みを忘れた世界には、思い出させるための試練こそ与えるべきである」

同意してみせ、その上で開帳させるのは自らの狂気<sup>イノリ</sup>。

穢れなき神性を求めたガトーとの差異、それは他の何者かの手に預ける事を良しとしない漢の信条であった。

「俺は人の勇気が好きだ。意志の限りに奮闘し、苦難へと立ち向かう姿こそ人間の光だと思っている。愛する人の輝きを絶やさないうたに、俺はこの月へと昇ってきた。

立ち向かうべき困難が見当たらんのなら、それに相応しい災禍をもたらそう。果てに人々の魂は練磨され、世界は輝きで溢れるだろう。きつと素晴らしい未来が待っている。

それが俺の祈り、俺が求める”楽園<sup>楽園</sup>”だ。この甘粕正彦が聖杯に懸ける願いだである」

「世界にもたらす試練だとう!? それではまるでヤハウエが如き所業ではないか! 人に許された所業ではない!」

「ならば神には許されるのか? 曰く、人の都合に形作られた神とや

らに。それでは不足だという結論は、おまえが唱えた言葉ではなかったか？

言ったように、俺には敬虔な信仰心など無い。ならば足り得る神格を見繕うよりも、自分自身でやってみせようと考えた。その役割を俺が担う事、何か不足があるなら言ってみせてくれ」

「不足ならば大いにある！ 貴様の心の有り様の問題ではなく、そも神の所業を人の手で行う事自体が重大な過ちなのだ！

人は人を裁いてはならぬ。己自身の不純さを、人間は皆理解している。故にこそ一切の罪を持たぬ神に裁定を委ねるのだ。人が人を裁くのなら、そこには新たな罪と憎悪が生まれてしまう。

訪れる天災、降りかかる不幸、それら理不尽を試練として受け取れるのは、人ならざる天上の意思故に他ならん。怨むべき誰かがいないからこそ、人はその憎しみを呑み下せる。

理不尽に人の意思が介在するなら、それは単なる人災よ！ 人の憎悪は対象を見つけ、生じるのは奮起の決意ではなく怨嗟の執着。それは人を進ませるものではなく、世に嘆きと破滅をもたらすものである！」

破格の意志で断言する甘粕に、真つ向より反論するガトー。

決して引けを取らないその気迫は、ガトーの持つ決意の強さの証でもある。

「理解せよ。人は人のまま神の役目を担う事は出来ぬ。神が如き力を持つとうとも、それは断じて神ではない。この世の善とは、人の覚悟や信念のみで背負えるものではないのだ！」

ガトーの理念には神の存在が重くある。人々の信仰を受け取る象徴にして絶対。たとえ罰をもたらそうとも、その聖性が崩れない何者か。

それこそがこの世を救う光になると信じている。その思想の是非はともかくとして、揺るぎない信条と人類の行く末を憂う気持ちは間違いなく本物だった。

「なるほど。ふふふ、実に小気味よい反論だった。流石、信念を持つ男の放つ言葉は違う。この胸に響いたよ。見込んだだけの事はある。」



確かに神の役割など俺にやれるものではないな。崇め奉られるのも柄ではない」

感じ入った言葉に頷いて、甘粕は告げる。

彼は人の意志を、勇気の発露を求めている。その気持ちは度し難いまでに本物だ。

試練の祈りを謳う男には、力ある反論さえ心地よい。それが敵意であれ、決意と覚悟を秘めて立ち上がる姿こそ愛してやまないものだから。

故に、どれほどに感じ入り、反論に頷いてみせたとしても、その信条は揺るがない。

甘粕の語る道理、人の怠惰を是正する試練の意義は、恐らくは完全否定のしようがない真理でもあったから。

「ならば、俺は”魔王”となろう。災禍をもたらす悪として、人々が立ち向かうべき試練として、俺は月の玉座に君臨しよう。

抗う意志を、立ち上がる勇気の姿を、俺は等しく愛している。たとえ憎しみが源泉にあらうとも、練磨された信念は輝きを放つのだと信じている。

俺という人災を見事に打破し、強さを得た意志により未来が開かれるのなら、それこそ我が本懐。何も躊躇う事はあるまい」

甘粕正彦の根底にあるものはまぎれもない人類愛だ。

嘘偽りのない愛による行動だからこそ、その思いは止まらない。

どんな矛盾も手段の是非も、情熱の熱さの前には容易く振り切ってしまうものに過ぎないから。光の属性を備えた男は、道が見えている限り歩みを止めない。

「そして、そのようなおまえだからこそ、俺たちには等しい思いがあると確信できる。

覚えがなかったのだろうか？ 心の底ではその存在を信じてはいなかった。己と同じく苦難への道を、たとえ世に背を向けてもあえて進まんとする気概の持ち主、そんな者が己以外にもいるのだと実感した事はなかっただろう。

俺も同じだよ。だから理解る。ここには己と同じ気概を持つ者が

いるのだと、俺は初めて実感している」

互いの思想は異なっている。明確な否定も既に告げられた。それでも、両者の性質には似通った部分がある。余人が付いて来れない理想を追い、その厳しさに屈する事のない雄々しさを持っている。その強さはハーウェイにも無いものだ。

胸に抱くべきは不屈の決意と不断の意志。輝ける太陽のような光の精神を宿した者、甘粕正彦と臥藤門司は同じ方向性を宿した”勇者”だった。

「この巡り合わせに感謝しよう、臥藤門司。目指す地点は違えども、おまえと俺は同じ思いの熱さを抱いた者だ。我が”同胞”と出会えた事が、俺は心の底から喜ばしいよ」

常識が塗り変えられていく。

本来あるべき法則が書き替わり、異なる法が世界を覆う。

それは現実を侵食する異界現象、などではない。世界自身がその様相を入れ換えさせた自然法則の越権であった。

「なん……じゃと……!?!」

その洗礼に晒されたのはアーチャーだ。

身体が重い。常の自由が働かない。

我が身に押し掛かる異様なまでの束縛が、アーチャーの力を奪っている。

逃れたくても逃れられない。それは魔術の類いとは決定的に異なる、舞台の上の仕掛けではなく、舞台セカイそのものが入れ替わった結果だった。

月に存在する重力は、地球の6分の1だという。

遍く総てを大地へと繋ぎ留める力が、6分の1に。ならばそれは概念的に、地上に存在する生命たちの力も6分の1となるに等しい。

それは神秘や信仰によって成された能力ではない。

世界という基盤自体が発揮するもの。神霊の行使する『権能』にも匹敵する力。

周囲の環境を自らの存在へと寄せる。理屈の一切を飛び越えて”ただそう在るもの”として世界に適用されるテラフォーミング・アトラクシオン。

故にその効果からは何者も逃れられない。どのような護りを持つとも、この世界の上に立つ生命である限り、何人もその法則から免れる道理はない。

敵の戦力を6分の1に落とす。

サーヴァントという定義において、それが白いバーサーカーの”宝具”に値する力だった。

「ぐう……っ！ 危うい敵とは分かっておつたが、これは……!?!」

弱まった敵の姿に、その暴威を発揮するバーサーカー。

先程までとの戦力比は、単純に見積もっても6倍。

更に対象となるのはアーチャーだけではない。アリーナに存在していたエネミーに至るまで、この場に存在する総てが改変されたルールの影響下にある。

広がった格差はあまりに歴然、加速する蹂躞はもはや止める術がない。どんな妨害や障害でも、圧倒的な力によって振り伏せられる。

「ちいー！ 口惜しいが、ここが潮か……!?!」

そして、アーチャーは数多の戦を生き抜いた歴戦の将である。退き際の見極めは、それこそ必須と呼べる感覚だ。

この場において、もはや自分は勝ち目がないと見栄も恥もなく判断する。その思考は冷静そのものであり、躊躇する様子は一切見られない。

未練や迷いは残さない。ここまでの優位も即座に放棄して、生存のための撤退を開始する。

だが、白いバーサーカーはそれを許さない。

苛立ちのままに能力を解放したその様は、狂戦士に相応しく暴虐の意志に染まっている。

ならばこそ、苛立ちの元凶となった者に執着が向かうのは必然。もはや雑多なエネミーらなど眼中にない。

執拗に自らの手を焼かせたアーチャーへと、バーサーカーの敵意は移っていた。

「グウウウ、ガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

弱体していく周囲を尻目に、増大する女の魔力。

濃密すぎる魔力の高まりは、もはやそれだけで可視可能な域に達する。

それは鮮血の朱をしていた。女の身から発せられ、朱いオーラとなつて纏わり付いている。

たとえ魔術の心得が無い者が見たとしても、その異常ぶりにはつきりと知れるだろう。迂闊に直視すれば、それだけで視覚が焼け落ちるほどの濃密な瘴気は、人あらざる者の証明だ。

武具など無い。技など不要。

隔絶した戦力差、存在としての格差とは、小賢しい策を無意味にする。

ただその本領を発揮するだけで、彼女はこうも簡単に敵を追い詰められる。理屈がどうだという以前に、そもそも勝負の土俵にさえ上がれていない。

バーサーカーが為すのは単純明快な蹂躪劇だ。

邪魔する全てを薙ぎ払い、その敵意の標的となる者を探し求める。

通常ならば蛮勇、愚行と称されるだろう行いも、彼女という超越種がするのなら正道となる。

だつてそうだろう。効率云々がどうだのと、彼女の力の前には誤差にしかならない。どの道総てが踏み躪られるという結末が同じなら、一切に頓着せず突き進んでしまえば済む。

逃れようとする足掻きが何になる？ 白いバーサーカーの蹂躪は、それらを諸共に呑み込んであまりあるのだから。

そして、あらゆる障害を粉碎して、ついにアーチャーの姿をバーサーカーが捉えた。

一直線。閃光のような進撃はまさしくそれ。

落下していくような加速は、まるで天より落ちてくる流星だ。

敵意という名の引力に惹かれ、決して標的までの直線軌道を違えない。

立ち塞がるエネミーも、妨げになるアリーナも、一切合切を貫き通してバーサーカーは真つ直ぐな突進を敢行していく。

迫り来るその光景は、まさしく死の幻視。

触れれば滅びを免れない絶対的な暴力は、絶望してあまりあるものだろう。

されど、アーチャーもまた幾多の死線を越えた歴戦の英雄である。絶望を前に奮起する魂の強さは、英雄にとって必需と呼べるものであったから。

迎え撃つ鉄砲群の一斉掃射。降り注ぐ銃弾の大豪雨に、しかしバーサーカーは怯みもしない。真つ向から受けながら、その悉くをはね返して進み続ける。

それは既に承知の事実。アーチャーの宝具は、このバーサーカーに一切の特効を發揮できない。勝算があつての迎撃ではなく、ともすれば生き汚い足掻きとも言える行為。

それでもアーチャーは諦めない。彼女は下剋上の英雄なれば、隔絶した戦力の違いを覆して活路を開くのは、恐れを制して前へと向かう意志だと知っている。

たとえ通用せずとも、これこそがアーチャーの最も信頼すべき”宝具”なのだ。僅かでもその進撃を阻み、退くまでの時を稼ぐために全霊を尽くす。

それは時間にすれば瞬きの間、交錯の刻は訪れる。

朱の魔爪が震わす蹂躪が、アーチャーを砕き散らさんと繰り返された。

臥藤門司は、孤高なる求道者である。

理解されない教義を謳い、拒絶を身に受けながらも道を曲げなかつた男。

魂は善性の色を備えている。世の道理も決して理解していないわけではない。

語る理屈には共感を得られる部分も少なくない。人々より異端と認識されるような歪みを抱えているわけでは決してなかった。

正しすぎるが故に、ついてこれない。

間違っていないと分かっている、その道があまりに厳しいものだから、誰もその背に続こうとしない。

それは余人には合わないものだ。適さない有り様は道理として広まらず、求道の孤高を深めていくばかり。

世界を救いたいと願っている。墮落し衰退していこうとする人類を正しい場所へと導きたい。その信念には穢れなく、揺るぎない不屈さ故に妥協もできない。

孤独では折れない。男の意志は強いから。

けれど何も感じていないわけでもない。その心は真つ当なカタチをしている。

己を曲げられない以上、孤独の痛みはどうしようもない。感じる痛みに屈しないのは、譲れない信念の証左である。

半ば自覚もしていた、その欠陥。

恐らく誰とも理解し合えず、自分は歩み続けるのだろうと諦観していた。

しかし、ここに対峙する男がいる。同じ決意と、同じ不屈でもって立つ男が。

祈りの形は違っている。それでも確かに分かるのだ。目の前の男が歩いてきた道が、どのような苦行の果てにあるのかが理解できる。

それは共感をもたらしていた。長年に渡る孤高の内での求道が、故にこそ得難い同士との邂逅に高揚する心の疼きは抑えられない。

元より抑えるべきものでもない。本来ならば歓迎すべき事態だろう。諦めの境地で臨んでいた苦行の道に、心からの”理解者”を得る

ことが出来たのだから。

「……」のような修羅の巷で、貴様は友誼を望むというのか？」

だが、それは勿論、通常の状態においてはの話である。

ここでの彼らは殺し合う事を定められた関係。己の祈りの成就のため、眼前の相手の生命を否定しなくてはならない。

真に相手のことを理解できるからこそ、受ける咎の痛みも重いものとなるだろう。この生存競争において、それは余計な重荷になる。

心からの理解など、いつそ出来ないほうが幸運だろう。古代の戦士たちの価値観とは違い、人権の重んじられる現在では、知人の殺戮など忌むべきものでしかないだろう。

「だからこそ望むのではないか。一切の絆が燃え落ちる修羅の巷であればこそ、光の尊さはより強く輝いて目に焼き付けられるだろう。」

互いは決して相容れない、俺たちは死闘を演じる宿命だと、そのように理解を拒もうとする姿勢が真に正しいものだと言えるのか？

逃れられん宿命だというのなら、尚の事覚悟をもって背負うべきだ。我も人、彼も人だと、この手で轢殺する祈りがある事をしかと胸に刻まねば、流す血と涙に意味がなくなる。

その道理、よもおまえ程の男が認識していないとは言うまいな？」

されど同時に、通常とは違うのはこの場の男たちにしても等しく言える。

甘粕正彦にあるのは対峙する男との死闘に懸ける期待と高揚のみ。

その心に迷いや躊躇いはまるで一切見当たらない。

決して闘争そのものに悦楽を見出しているわけではないし、殺戮自体も忌むべきものと自戒もある。ただ激突の果てに人の魂が放つ輝きを見たいがために、甘粕は来たる決戦の刻を熱望している。

異常なのは、その純度。通常の間でも、多少ならばそうした感情を覚えることもあるだろう。道徳、倫理、恐れや嘆きといった他の感情と混じり合い、迷いの枷に縛られながらも前を向こうとするのが通常の人々の心の有り様だ。

甘粕正彦は迷わない。ある一つの感情が肥大し過ぎて、他の一切の

感情が縛りとして機能しない。自身が感じる素直な喜びに従って、何処までも突き抜けて行ってしまう怪物なのだ。

「戦争とは、悲劇の代名詞である。その事実を俺も否定はせん。それ故に、この場所に覚悟を持って脚を踏み入れた俺たちは、事実から目を背けてはならんと思っている。」

一息に勝負を付けることを禁じ、準備期間を設け、対戦する相手の事を深く知る必要性を与えている。この聖杯戦争の形式に、俺は試練の意図を感じずにはいられんのだ」

「……己と他人が向かい合い、願うがために奪い合う。それは鬪争というものの原点、犠牲も成果も、罪の如何さえもはつきりと示された図式。およそ戦いの本質に近いこの舞台で、我らは互いを識り合うべしと、聖杯はそう言っているというのか？」

「さて、果たして聖杯の意思なのかどうか。数理の化身というには、この考え方は些か人間よりだからな。」

まあ聖杯の思惑など今はどうでもいい。俺はただ本音を晒してほしいのだよ。言葉として出たということは自覚もあるのだろうか？ そうして気迫を吐き出すのも、何とも肩肘を張ったような態度に映るのでな。

未練を残したくないのだ。偽りのないおまえの”真”を見せてほしい。それこそ愛すべき輝きへと向ける、俺の本心からの友誼なのだから」

甘粕正彦は怪物のように迷わない。

ならば未だ迷いを持ち続ける、人間である臥藤門司はどうだろう？ 彼という男は常に裂帛が如き気迫を見せている。

暑苦しく、近寄りがたいと感じるほどに。まともに見れば狂人という評価に落ち着くだろう。

そう、彼の狂騒は分り易すぎる。冷静に聞けば、まるで理解の及ばない主張というわけでもないのに、必要以上の強引さのせいで台無しになっている。

人に教えを説くべき僧の有り様として、それでは本末転倒だ。それが分からないほど臥藤門司という男は愚かではないはずだろう。



聖杯戦争とは、慈悲のない殺し合いの場である。

己の願いのために他者の願いを踏み躪る修羅の道である。

言葉など聞くべきではない。理解など深めるべきではない。それは自分にも、そして相手にも迷いという名の痛みをもたらし。

敵は倒す。戦いには勝つ。戦いの真理とは真実そののみだ。故にあるべき修羅の姿で臨むまで。自身のサーヴァントと同じく狂戦士にも似た有り様は、真理からぶれないための所作でもあった。

しかし、それは即ち自然体ではないこともある。

例えば、甘粕正彦。この男は、いつそ清々しいほどに自然体だ。戦場であろうが無かろうが、一切頓着せずに自らの芯を揺らがせてはいない。

単純ソリに生きている、といつてしまえばそれまでだが、それが強さに繋がっている事も確かだろう。彼は余計な迷いなど何一つ持っていないのだから。

だからこそ余裕がある。何も強張る必要がないから、誰に対しても同じ自分として接することが出来る。たとえこれから殺す相手でも、その心を受け止める事が出来るのだ。

要は無理をしているという指摘だった。それは決して的外れなものではない。

必要以上の強情さは、余裕の無さの現れとも取れるだろう。余分な関わりを避けるため、あえて理解を遠ざけるような態度をしていたと言われれば、否とは言い切れない。

それを指して、己の”真”から外れているというのなら、頷くより他はない。真実、己の信念に偽りがなければ、甘粕のような自然体として在るべきなのだから。

臥藤門司は自問する。己はどう在るべきであろうかと。

ここには共感を持てる相手がいる。同じ孤高の中を生き抜いた信念の理解者が。

友誼の望みも偽りはないのだろう。そのような心に対し、自分はどう応えるべきなのかと考えようとして――

群がってきた新たな気配に、ガトーはその思考は中断した。

「……ふむ。まあサーヴァントのもとを離れたマスターならば、こうもなろうさ」

二人のマスターを取り囲むエネミーの群れ。

サーヴァントという武力から離れ、単独での無防備を晒す愚かなマスターは、彼らにとつて格好の獲物となる。

雑多な存在とはいえど、ただの人間の電脳体にそれら攻性プログラムは十分すぎる脅威だ。単独のところを襲われればひとたまりもない。プログラムに敵種の区別はない。ただ設定された通りに異分子を殲滅するだけ。

意思の通わない瞳が二人のマスターを映している。どちらも設定された殲滅対象、すべき事は決まっている。自身に与えられた役割に従つて、エネミーは二人に等しく攻撃を開始した。

そして、迫り来る共通の脅威を前にして、敵対関係であるはずの二人は、まるで示し合わせていたかのように背中を合わせていた。

「さて、まずはここを切り抜けようか。問答の是非がどうであれ、お互いに生きておらねば始まるまい」

踏み出して、真つ先に打つて出るのは甘粕正彦。

向かつてくる敵の群に対し、手にするのは腰に携えた軍刀の柄。

一步の踏み込み毎に加速して、数瞬の内に距離を無しに。敵の攻撃に先んじて、抜き放たれた黒色の刃の一閃が容易く相手を両断する。重ねて言うが、アリーナに配置される敵性エネミーは決して弱くない。

サーヴァントの戦場に障害として設定されたものだ。個々で見ても単なる猛獣などの比ではなく、どれも魔獣の域には達しているだろう。

如何に魔術師だとして、そのようなものの群れに挑みかかれば惨殺されるのが自明の理だ。それが人間という種別でのキャパシティであり、ムーンセルが判断した基準である。

ならば、その群体に対し退くどころか勇猛果敢に真つ向から挑みながら勝利を納めるこの男は、

ムーンセルの定めた人間の基準を既に凌駕しているということだ。

武技を奮い、夢を紡いで、迫り来るエネミーらを一つ、また一つと砕いていく。人を上回る存在を正面から相手取り、逆に粉碎していくその様は英霊のそれを思わせた。

まさしくそれは破格の証明、甘粕正彦こそ時代の傑物。どれだけの才覚と、何よりも意志の力が合わされたそうなるのか。世界を変えようとする益荒男こそ、英雄に最も近い存在だ。

「では、おまえはどうするのだ？」

幾体目かのエネミーを斬り捨てて、背中越しに甘粕が短く問いを投げ掛ける。

全方位の敵を油断なく意識に捉える甘粕だが、その背中にだけは警戒を払っていない部分がある。

互いの背中を合わせた時から、あえてガトーにだけは無防備を晒しているのだ。その背に預けた信頼でもって、まるで相手の在り方を試しているかのように。

狙おうと思えば、恐らくは出来るのだろう。

相手は死闘を繰り広げるべき敵対者、これを好機と見て仕留める事は当然とさえ言えるはず。

少なくとも、選択肢は目の前にある。このままよりも遥かに楽で、確実な勝利へと近づける選択が、ガトーの前に突き付けられていた。そして戦場に在っては、選択肢を前に葛藤の時間さえ与えられない。

ガトーの前に躍り出る1体のエネミー。その矛先は無論、ガトーの方を向いている。

甘粕正彦は例外中の例外、魔獣に匹敵する敵性エネミーは人間にとって脅威である。迫り来る己の死の前に、余分な脚色は剥ぎ取られる。

試されるのは自らの芯、その人間の本质と呼べる部分だ。

思考の猶予が無いからこそ、出される答えはここに至るまでの有り様が問われる事になる。

その生涯を通じて、どのように生き、どのような意志を紡いできたか。咄嗟の事態を前にして、臥藤門司という男は逃げ出すのか、立ち

止まるのか、それとも――

「――喝アツ!!」

吼える漢の烈気が、その答えを示す。

手にするのは功德ある仏具の類いでなく、戦いのための”金剛杵ヴァジュラ”。

染み付いた血潮の痕が、単なる飾りではない事を教えてくれる。

その形相はまごうことなき修羅の相。烈帛と共に繰り出された一撃が、敵の魔手を掻い潜ってその身を穿ち貫いた。

「殺すと決めた。己の両の手を罪の血で染めると。この戦に赴く事を決心した時点で、我が身は既に悪鬼羅刹に等しきものと自戒はある。たとえ神の慈悲より見放されようが、我が女神への祈りを成就させると誓ったのだ！」

覚悟はある。決意もある。ましてや、この修羅道を走破するための修練を怠った事など、一欠片とて愚僧オレの中には存在せんわ！」

月の聖杯に懸けるガトーの思いには、僅かな緩みも綻びも無い。

己の中にある影の側面、その在り方の拭えない矛盾についても重々に咀嚼済みだ。

人の救いを目指しながら、人を殺す。

それは人類の歴史において、あらゆる大義の裏に付き纏う罪悪だ。

たとえ勝利を手にして、世に救済をもたらしたとしても、道中途で犠牲となった者は救われない。如何に理想の尊さを謳おうとも、殺戮の業は決して拭えないのだ。

善良な者もいるだろう。悲運を背負った者もいるだろう。あるいは覚悟なき者さえも、この手は残らず塵殺して祈りの成就を目指す。

修羅の道とはそういうもの、理解など求めて何になろう。どうせ最後には殺すというのに、絆も結んでみせたところで余計な悲劇にしか成り得ない。

臥藤門司に出来ることは、修羅としての己を貫くこと。

どうせその道以外を選ぶことが許されぬのなら、只管に闘争の真理を体現する者となれば良い。

光ヒトも、影カゲも、己の心は余さず承知の上。それでも信念は折れず、戦いの意志は決まっている。

迷いの葛藤などありはしない。力持たぬ者の道理は淘汰されて然るべき。ここで必要なのは慈悲でも功德でもなく、ただひたすらに磨き抜かれた闘争の牙なのだから。

「フ、フフフフ、ハハハハハハハハハハ——!!!」

哄笑が響き渡る。

心からの喜色を表すように、後ろ暗さなど微塵もない快活な、豪胆な声。

そんな魂の奮えに触発されたように。

夢が形を成して結ばれる。本来それは空想と呼ばれるもの。如何に魔力を通じた術式に支えられても、僅かでも緩みを含めば容易く霧散する儚さだ。

それを、破格の念量が現実の領域にまで押し上げる。甘粕正彦の紡いだ夢は轟雷の破壊となつて具現化し、敵の群へと降り注いだ。

鼓膜を叩く激音と、吹き荒れる雷火の衝撃。

それは裁きの象徴であつたもの。とある星の開拓者により、人類の手へと渡つた稲妻の奇跡。

天墜の光を揮うその姿は、御座に君臨する主の莊嚴を垣間見せる。もはや英霊の域にも迫る勢いで、甘粕正彦の邯鄲法はエネミーの群を粉碎した。

「よく分かつた。やはりおまえは見込んだ通りの男だつた。矛盾の闇を腹に抱えて、それを克己の意志へと変えている。実に見事な勇気の有り様だ」

周囲に群がった敵性体エネミーらは焼き払われて、場には再び二人の男が対峙する。

互いの視線は真つ直ぐに相手の方を向いている。その意志に弱さとなる不純はなく、両者とも雄々しい闘志を交わらせていた。

「だからこそぶつかり合う甲斐がある。互いの本懐を明かし、交わらぬそれを覚悟をもって受け止めたのなら、あとは力を示すのみだろう。なあ、我が好敵手よ」

滾らせる思いには、友誼にも似た親愛の念も含ませて。

来たるその日を待ちわびながら、甘粕は堂々たる宣戦を謳い上げ

た。

刻まれた爪痕が、起こされた破壊の凄まじさを物語っている。

サーヴァントの戦闘にも耐え得るアーリーナの強固な情報構成が、無残にも引き裂かれてその残骸を晒していた。

破壊の中心にいた者が無事であるとはとても思えない。凄惨たる結末がその先にはあるだろうと、それは当然の想像だった。

「……やれやれ肝が冷えたわ。これほどのは金ヶ崎の戦以来じゃ」

アーリーナの残骸に混じって、砕かれた無数の種子島が晒される。

アーチャーにとっては攻撃の要である宝具、それさえ盾として差し出して守りに転じた。

それは決死の足掻きだった。たとえ誇りの象徴を砕かれても、先を繋ぐ生存にかける意志の表明。そのために革新の王はあらゆる手段を尽くした。

それだけのものを懸けた行動が無駄に終わるはずがない。無数の銃群にも阻まれながら、ついに魔爪の一閃はアーチャーが携えた愛刀によって止められていた。

「凄いだぞ。もはや貴様の手はわしには届かぬ。少なくとも、この場はな」

そこが分水嶺であったのだろう。

甚大な被害に対応した、ムーンセルからの強制介入。

修復が開始されると共に、両サーヴァントの戦闘接触が禁止される。

ここは勝者を決するための戦場ではない。その優劣に関係なく、月の聖杯は激突の仕切り直しを望んでいた。

「して、やはりこの場はわしの勝ちじゃ。感情に振り回され優先すべきを見誤る。理性なき狂戦士では詮無きことじゃな」

そして、転ぼうともただでは起きないのがアーチャー・織田信長という英霊である。

その宝具では個ではなく群。ここに展開された種子島も、無論のこゝと総てではない。

無差別の大規模破壊によって引きずり出された本来の目的、『狩獵<sup>ハンティング</sup>数勝負』の標的であるエネミーは、残らずアーチャーの銃火に撃ち抜かれていた。

狙われる己を囷とし、窮地にあつても利だけは獲得する。合理の効率を旨とする革新の王ならば、姑息とも取れるそれも当然の行いだつた。

隔壁越しに睨む白いバーサーカーの眼には、明確な敵意と苛立ちがある。

小賢しくも己の一撃から逃れきり、あまつさえ勝負の勝ちさえ掠め獲った。

たとえ敵ではないと理解していても、忌々しい事には変わらない。バーサーカーの意識には、はつきりとアーチャーの姿が焼き付いていた。

「そう急ぐでない。元よりサーヴァントのみでの早々の決着など、ムーンセルが認めたがるわけもなし。此度の死合いには、月の眼も好奇に惹かれておるだろうて」

甘粕正彦と臥藤門司。並み居る才気を持ち主たちが集った月の聖杯戦争においても、この二者は際立って異彩を放っている。

甘粕正彦はもはや言うに及ばず、臥藤門司もまた、その能力を見込まれてムーンセル自らが招来したという経歴を持っている。

そのような特待枠だからこそ、サーヴァントの枠組みからも外れている白いバーサーカーと参戦する権利を認められているのだ。

かの少年王にも並んで、ムーンセルにとっての注目株。

ならば彼らの演じる死闘には、月の眼も引き寄せられるのが必然だ。サーヴァントだけでの決着では、その本質は観測できない。

「難儀な型破りのマスターについての話はお互い様じゃ。どういうつもりでアレに付いておるのは知らぬが、従いたからには是非もあるま

い。それがサーヴァントというものの本分じゃ」

唸るように威嚇を続ける白いバーサーカー。

その口から理性的な言葉は出てこない。狂戦士のクラスに囚われた彼女にその自由はない。

頷いているのか、それとも人間のマスターなど意にも介していないのか。朱と紫の双眸は、ただ睨みつけてくるばかりであった。

その様を見ながら、アーチャーは笑った。

挑発的に、さも上位者は己だと言わんばかりにふてぶてしく。

それが嘘か真かのどちらであろうとも、王として張り付けた彼女の鉄皮面は崩れない。

「せいぜい吠えておるがよい、人外の女よ。知を介さぬ貴様に、もはや掛ける言葉は無し。滅ぼされるべき魔性がままの姿で、来たる日までを過ごしておれ」

踵を返す。もう視線は戻さない。

アーチャーの向かう先には帰還用のワープポータルがある。革新の王が見据える戦の理には徹底して穴がない。

ムーンセルからの隔壁が降りた今、どんなに猛ろうがサーヴァントには手が出せない。その枠へと押し込められた白い女は、忌々しげに立ち去る背中を睨みつけていた。

「さて、どうやら我がサーヴァントも撤退したようだ」

何気なく話を変えるように、甘粕は口調を緩めて告げた。

「名残惜しいが、今日はここまでであるらしい。後のことは決戦の日まで持ち越すでしょう。」

……ああ、それとも、その手の甲の『令呪』でも使って、この場ですぐに仕切り直しといくかね？」

「愚問。そのような匹夫の勇に興味はない。我が神の御力は絶対なれ



ば、小生はただ正道に突き進むまでである」

その心に揺らぎはなく、答えるガトーの姿は雄々しい。

それは甘粕の待ち望む勇者の姿。期待を裏切らないガトーの答えに笑みを零して、甘粕はそのまま立ち去ろうとする。

「……待て」

その後ろ姿を、既に決着は見送ると宣したはずのガトーが呼び止めた。

「おぬしの望むところは理解した。人の勇気なる価値を尊び、試練に際し奮闘する姿を光とする。間違つてはおらんし、小生自身、領けるところは大きいにあつたとも。

故に、おまえは笑うのか？ 己という試練を前に、立ち上がり”真”を示す輝きを喜び、喜色満面な笑いを見せるのか？」

「それこそ愚問だろう。俺は人の勇気を愛している。それが心からの愛ならば、目の当たりにして喜ばん者はおらんだらう。故に迷いなく答えよう、その通りだと」

「……たとえ、その手で愛する者を打ち砕く結果になろうとも、か？」  
常の暑苦しいばかりの言葉ではない。

静かな、しかし鋭さを秘めた言葉で、ガトーは魔王の矛盾を指摘する。

「そうだな。ここまでの道すがらにも、幾度となく問われたよ。俺の祈りは、俺が愛する者こそを殺すものだど。

信じているからと言っても、そんなものは他者が聞けば狂人の戯言だろうよ。紛れもなく、それは俺という男の願いの裏に生じた影であろうとも」

指摘を、甘粕は厳粛に受け止める。

自らの闇に背は向けない。正面から向き合つて、それもまた己の一部だと理解する。

それは人として否定されるべき怪物性。人類そのものを滅ぼしかねない醜悪な難さ。偽りなく人々を愛する甘粕にとって、その矛盾はやり過ぎせるものではない。

「是非もなからう。光も闇も含んだ上で成り立つのが俺という”人間

”だ。甘粕正彦という男が出した結論、魂を懸けた”真”である。

この未来は間違っている。誰かが叩き直せねばならんと、他でもない俺自身が断じたのだ。一度信念の御旗を掲げたならば、その正しさを決めるのは貫く意志の絶対値だろう。恐れや妥協に立ち竦む者に、どうして大事が成せるという。

我も人なら、彼らもまた人なのだから。迷惑だ、間違いだと、そのような非難は百も承知。それらの否定を人々の意志だと認めるならば、俺の意志として認めてもらわねば道理が通るまい？

——殴るから、殴り返せよ。甘粕正彦の願いとは、真実そのみであるのだから——

それでも尚、己の真理とはこれであると、甘粕正彦は謳い上げる。人とは、そもそも矛盾を孕んだ生き物だ。知性の発達と共に獲得した心という概念は、何処までいこうとも完全にして普遍的な善悪でもって語り尽くすことは出来ない。

誰かの正義を、別の誰かが悪だといい、誰かの決断、思いやりを傲慢、侮辱だと別の誰かを取る。千差万別、人の心理に同一のものなど一つとして有りはしない。

人の罪と罰を決めたのが人ならば、信念の是非を決めるのも人の意志だ。

自罰はしよう。血も戦争も好きならわけでは決してない。勇気をこの手で砕くことは悲劇だと嘆いている。

目を背けているわけではない。たとえ矛盾を承知しようと、殴らなければ変わらないものがあると信じている。変えなければならぬと、この魂が叫んでいるから譲らない。

それが平和だからと戦うことを避けて、何もしていない事が正道などと、そのような結論を受け入れることだけはあつてはならない。

甘粕正彦は揺らがない。彼の決意は、既に完成されている。

止めるなら、納得させなければならぬ。その絶対値をも上回るほどの意志でなければ、不退転の超人に膝を折らせるなど不可能だ。

「かつての予選での頃を倣って、あえて呼ぼう、友よ。せめて悔いを残らんことを。全霊での激突の果て、敗れし者にも一抹の納得がある

ことを祈っている」

改めてこの場より去っていく甘粕を、今度はガトーも止めなかった。

指摘にも動揺を顕さない。むしろ迷いを突きつけられたのはガトーの方であつただろう。

世の救済、神の導きを謳いながら、無慈悲な闘争に手を染めている。修羅の如く意志を猛らせようとも、根底にある忌諱は隠しきれない。

その矛盾、己自身の暗部に対し、ガトーは甘粕ほどの悟りには至っていない。元来の自然体から外れ、修羅としての在り方を課しているのが証拠だろう。

常人に近い者をまともと言うなら、甘粕よりもガトーの方がまだまともだった。迷いがあるからこそその人であり、たった一つの真理を見つけた超人の域に、ガトーはまだ到達してはいないのだ。

「……友、か。ここに至って尚も迷いなくそう呼べる心理こそ、おぬしが悟りの境地にあることの証左なのであろうな。

愚僧の未熟、ここに痛感した。やはりこの身は道の途上、救世主を名乗るには欠けているものが多すぎる」

自戒の言葉を口にする。無論、それだけで迷いが晴れるわけではない。

自分の中の闇の部分とは、ただ自覚して理解したなら乗り越えられるほど甘くはない。

半ばの自覚がありながらも、矛盾から目を逸らして生きていけるのが人間というものだ。自分自身と向き合つて答えを出すなど、大概の人間はそこまで真剣には生きていない。

時間が掛かる場合もある。あるいは、何かの切っ掛け一つであっさり越えてしまう場合もある。人の心とは、強きにしろ弱きにしろ、それほどに移ろい易い。

恐らくは、そんな切っ掛けと成りうるものとして、甘粕は試練を与えようというのだろう。人の目覚めを促すものとして、その祈りに確かな理があるのは間違いないことでもあつた。

「だが、ならば甘粕正彦よ。果たしておまえの正道には、愚僧ほどの迷

いはあったのか？」

弱々しい眩きは、誰の耳にも届くことなく消える。

言葉に意志が宿っていない。自分自身でも疑いを残したままで、他人に何かを説く事など出来るわけがない。

その迷いは、きつと人としての迷い。

勝たなければ、殺さなければ、と。極限の選択を強いられる闘争の場で、まともでいられる事こそまともじゃない。

大義か、信仰か、それとも狂気か。何らかの理由で武装して、初めて人の心は保たれる。

修羅道を誓った求道者に、真の光は未だ見えず。

真理かみと信じた存在もここには無く、晴れない迷いの中でガトーは立ち尽くしていた。

アリーナより帰還し、別々だった主従は合流を果たす。

校舎内での戦闘行為は禁止され、マスターたちの安全も保証されているが、絶対ではない。目的のためならルール破りも辞さない手合いも存在する場合だってあるのだ。

故に、そもそも契約を交わしたマスターとサーヴァントが別行動を取ること自体が愚行だろう。ましてやそれがアリーナならば、愚かも通り越した自殺志願だ。

「ふむ。その顔を見るに、此度のたわけた真似にも、そなたなりに成果はあったようじゃな」

そんな、常識ではあり得ないような行動を平然とやらかす男のサーヴァントは、もはや呆れの一つも見せずに声をかける。

「ああ。やはり俺の思った通り、臥藤門司は素晴らしい勇気を持ち主だった。聖杯戦争の舞台から降りない限り、奴はその覚悟を貫くだろう。そんな男の拳をこの身で受け止められること、俺は嬉しくてたま

らんよ」

「一切の実利には結びつかんがな。そなたのことじゃ、もはや是非はあるまい。」

そして奔放ぶりとは別に、そなたの見立てを疑いはせぬ。正彦、そなたがそう言うのであれば、わしも尋常ならぬマスターとして捉えておこう」

「それでいい。これまでの誰よりも、臥藤門司は強い。奴の覚悟に応えるには、こちらも力の限りに臨んでみせねば礼に反する」

手を加える必要はない。既に臥藤門司は定まった強さを持っている。

これまでのように、相手の強さを発揮させるため、あえて不合理な立ち回りをするような、そんな真似は不要となる。

小細工は要らない。ただ全身全霊の力と覚悟でもってぶつかるだけ。真に対等だと認めるならば、相手のためにと慮る行い自体が非礼だろう。

死力を尽くすとはそういうこと。己の理由に妥協しないことこそが、この戦いの中で許された唯一の誠意さだから。

「——で、だ。おまえの方はどうだった？ 奴のサーヴァントはどれほどのものだった？」

マスターに対して、もはや言うべきことはない。

故に、考えるのはその”武器”について。聖杯戦争において、契約したサーヴァントの存在こそがマスターの揮う力そのものに他ならない。

「……厳しい、と言わざるをえんな」

そしてアーチャーは、感情ではなく理でもって時代を築いた革新者。

武器の性能を見誤ることだけは決して無い。故に、口に出されたその言葉には並々ならぬ重さがあった。

「狩猟の報酬と合わせて、奴の手の内はほぼ知れた。故にこそ断言できる。あのサーヴァントは、わしにとっての鬼門であるとの。」

人類史に根差す英霊でなく、また神霊と呼べる存在でもない。あら

ゆる意味で、わしが得手とする型より外れておる」

アーチャーは、英霊としての存在強度、出力で戦う者ではない。その武器は相性戦。不確かな感情論を挟まない、勝てる要因がはっきりとしている。

理を詰めて型に嵌め、勝つべくして勝つのがアーチャーの戦い方だ。ならばこそ、逆に勝利の要因の一切が喪失してしまったなら、その結末も明白となる。

「英霊ならば、大なり小なり神秘を纏っておるものじゃがな。果たしてあれを、神秘に類するものと呼んでよいものか。

奴に対し、わしの特性は封じられる。醜態を承知で言えば、勝機は無い。わしという手札だけでは、どう足掻こうが結果は見えておるぞ」

己は勝てない。認めてはならない結論を、アーチャーは静かに告げる。

サーヴァントとして、理屈を重ねた上で出した解答だ。故に諦観はなく、ただ事実として伝えるだけ。

ならば後はマスターの判断次第だ。如何に英霊が華々しく戦場を駆けようとも、サーヴァントとはあくまで”武器”。聖杯戦争の主役とは、現在を生きる人間であるべきなのだから。

「そうか。他ならんおまえの口から出た結論だ。俺の所感などより、それは確かな事実なのだろう。ああ、ならば俺にとっても、ここが死地というわけだな」

サーヴァントの結論を、マスターである甘粕は受け入れる。

動じない様は信頼の表れだ。自身の敗北を告げたアーチャーの言葉を、甘粕は疑っていない。

アーチャーでは、あの白いバーサーカーには勝てない。直接その目で確かめずとも、信を置いた相棒の判断を躊躇いなく聞き入れた。

直接の戦闘で勝ち目がないのなら、残された勝機は絡め手によるもの。

あの緑衣ロビン・フッドの狩人のように、自らが弱者だとまず自覚して、卑劣に手を染める事を覚悟する事だろう。

王のような、高い気位を持つ者であればこそ難しい。肥大した己という存在を貶める事は、単なる非道とは訳が違う。

そこに尊厳の価値はない。あらゆる侮蔑を受け入れても、勝利という目的のみを追い求める覚悟。それが弱者の持てる意地であり、王をも殺せる唯一無二の刃であるのだ。

そんな弱者が持てる強さを、甘粕は認めている。

その執念を、懸ける意志の絶対値には敬意さえ抱いている。手段を選ばない卑劣さに忌諱感を持つていているわけではない。

「であるなら、超えていかねばなるまいな。無い勝機を編み出して、自身を超える試練に打ち勝ってみせなくては。案ずることはない、諦めなければ夢は叶うと信じているのだ。それでこそ俺の本懐、俺にとつての”楽園”<sup>ぼらいぞ</sup>がそこにはある」

故に、そのような結論へ至るのは、卑賤を嫌つてのことではない。要はノリの問題だ。そんなやり方でやっても面白くないし滾らない。何よりも”弱い”のだ。

邪道に魂を懸けているならそれでよいが、己はそうでないのだから。付け焼き刃の覚悟では届かないと確信がある。半端な生き方で掴めるものが何処にあらうか。

正々堂々、真つ向勝負。己の不利を知りながら、それでも男は魂から求める手段を選択する。駆けてきた生き様、信念に従って貫くことが、真に勝利へと繋がる道だと信じていた。

今度こそ呆れた顔を見せるサーヴァントを尻目に、甘粕は進み始める。

志すのは徹頭徹尾、己の王道。それを可能とする才覚と努力、そして何より勇氣と覚悟が男にはある。

それは常人には決して届き得ない道。破格の器、種の粹組みさえ超越せんとする者。まさしく超人だけに許された正道で、甘粕正彦は雄々しい意志を燃え上がらせていた。

## 4回戦：真祖の姫

その扉の前に立つ、これで都合四度目となった。

「刻は来た。戦いの準備は万端かね？」

監督役の役割を受け持った神父が、与えられた設定の通りの台詞を告げる。

彼の後ろに見えるのは、決戦の舞台まで降ろす昇降機だ。学校校舎の風景の一部として外面を取り繕われたそれは、その実、日常側から非日常へと連れ去る檻である。

降りた先に待つのは無慈悲なる死闘。対峙すべしと定められた相手との、生死を分かち殺し合い。帰還できるのは勝利して生き残った一方のみ。

どのように過程を経て、どのような結末に至ろうとも、そのルールだけは覆らない。この月に立つ誰もが死線の先で生を掴む道を強いられている。

それを以て残酷だと、非難できる資格は誰一人として持ち合わせない。

万能の願望器、あらゆる未来を計測する数理の聖杯。ムーンセルを使用する権利を懸けて、承知の上でこの戦争に参戦しているのだ。

抱いた欲望のため、己ではない他者を殺すのだと。今さら掟を反故にするのは、弱きに流れた者の戯れ言でしかないだろう。

これは強制ではない。開かれた門戸を通り抜けたのは、あくまで各人の自由意思である。無論、事情は千差万別にあるだろうが、その責はムーンセルにあるものではない。

どんな事情だとして、それは人間側の社会、縁、感情によって築かれたもの。

感情なき観測器は公平だ。不公平はいつだって人間の側にある。

よって非難など、前提から履き違えている。この闘争を肯定したのは他ならぬ自分たちであるのだと、臥藤門司は承知していた。

「……ふむ。些か精彩を欠いているな。葛藤の色が見て取れる。以前



に眼にした時には、そのような情弱さなど削ぎ落とした狂的な信奉者と映ったが」

ガトーと向き合った神父が、そう言葉を続ける。

それは監督役という役割には無い台詞。円滑に聖杯戦争を運営するAIの領分ではない。

かつて確かに存在した人間の再現人格。その性質・趣向までも完璧にトレースされた人物像が、神父に言葉を続けさせる。

「これでも神父だ。逡巡があるならば聞き届けよう。満足がいく答えを与えられるかは不明だが、出来うる限りの尽力はすると誓おう」

「愚僧に懺悔せよと申すか？ 奉るべき真の神を見出しておる小生に、神の社の主へ告解せよと？ その身は公平を司るムーンセルの使徒でありながら」

「公平たればこそ、だ。心という不確定要素の不調を混じえた決着は、ムーンセルとて望むところではない。共に不足なく、全霊を尽くした果ての決着こそ望ましい」

語られる内容は、ムーンセルの端末としての役割を遵守するもの。

しかし、その吊り上がった笑みを見れば、額面通りな行いでない事は一目瞭然だろう。

ただ慮るといふには、神父の面持ちは悦の色が濃すぎる。こちらを見る眼差しに隠しきれない娯楽の渴望が見て取れるのだ。

それこそが『言峰綺礼』という人物像なのだろう。人の心の裡を切開し、その苦悩に愉悦する、そういう業の持ち主だったのだとガトーは推察した。

「よく言うわ。そのような暗き情念、それは貴様の我執であろう。ムーンセルの意向など二の次三の次、かの魔性菩薩を思わせる倒錯ぶりよ。」

訊くが、それは先天のものか？」

「先天だ。記録を見るに、『言峰綺礼』は生まれつきこのような人間であつたらしい。」

若い時分には、随分と煩悶もしたようだ。求めても得られず、手に入れても手に入らない。指の隙間から零れ落ちた無数の澱、何故己だ

「けがこうも違うのかと」

言峰綺礼という人物に由来はない。

過去に何某かの理由、精神的<sup>トラウマ</sup>外傷となり得る出来事を受けてそう  
なったのではないと語る。

母の子宮から生まれ落ちたその時には、彼は悪性を求めるカタチを  
していた。光を尊ぶという当たり前が理解できない、他者と共感でき  
ないその魂は孤独であったと。

「果てに出した解答も、さして変わり映えのするものでもなかったよ  
うだが。そのように誕生<sup>う</sup>まれたのだから、そう生きるしかない。こ  
の手の命題には有りがちな答えだとも。

己という汚泥の存在を祝福し、受け入れたからこそその『言峰綺礼』  
だ。自由の無いNPCの身であるが、手が届く範囲ではしたいように  
するまでだ」

「……哀れなものよ。人は産まれるの場所を選べず、また産まれる己を  
も選べぬ。原点より異端の性を宿しておるなら、その業は罪の行き場  
すら見失おう」

「さもありなん。所詮、この身は再現された擬似人格。既に終わった  
人間の結果の投影に過ぎん。その是非に意味などなく、破綻に満ちた  
生涯は既に閉じている。」

間違えるなよ、臥藤門司。切開すべきは私ではない。この時代を生  
きる<sup>おまえ</sup>当事者たちこそが是非を問われている」

言峰綺礼が、月の舞台の主演に上がる事はない。

ここに在る彼は、元の人物像を再現しただけの影絵。『言峰綺礼』と  
いう人間の物語は既に終わっている。

所詮は彼の役所は裏方だ。舞台上で踊るべきなのは、未だ生涯の解  
答に至っていない生者たち。この聖杯戦争に参戦するマスターたち  
なのだから。

「そして、迷いの源泉もそこかね。行き場を失う業とは逆に、選ばれな  
かった己が故に、おまえは自らの業の重さに苦しんでいる。

肩肘を張らねば修羅にはなれんか。哄笑の下に散らす命を良しと  
出来ず、狂信で己を誤魔化すこともし切れない。決意を以て武装しよ

うとも、その心は悲痛を自覚している」

暗黒を湛える神父の瞳が、ガトーの裡を暴いていく。

晒されるのは阿修羅の相に秘められた本来の人間性。たとえ闘争を肯定しても、彼の気質は殺戮を良しと出来るカタチをしていない。「臥藤門司。おまえは”まとも”だ。如何に狂人の体を取り繕うとも、根底にあるのは他者との共生が可能な魂だろう。

それは私のような破綻者には届かないものであり、羨むべきものでもある。が、故におまえにとっては望む強さが得られん楔であるわけか。

なるほど。対峙した”あの男”によって、その事実を浮き彫りにされたということか」

それは人として正しく、普遍でさえある在り方だ。

貶められるべき価値ではない。普通と異常の線引きを定める基準点。

共同体を維持するために必須のもの。それを持ち合わせない者こそ異端であり、社会では欠陥と見なされるアキレス腱だ。

だが、聖杯戦争とはそんな真つ当が罷り通らない舞台。

境界を踏み越えた先で強さを持つなら、それが至上の価値を得る修羅場であったから。

「愚僧<sup>オレ</sup>の信仰は変わらん。覚悟は決意の時より揺るぎなし。痛みはあろうとも、我が女神への信心はそれを容易く上回るぞ」

「だが咀嚼してはいまい。それは耐えているだけだ。如何に理想に強度を持たせようと、磨耗の果てには目減りするのが自明だろう。

この聖杯戦争において、覚悟はその強さよりも質こそが問われる。死闘という極限状態に、否応なく敵の理解を求められる条件下、ただ変わるまいとするばかりの覚悟では程も知れよう？」

他者との交わりは、自己に革新をもたらすものだ。

掛け値無い真剣同士の世界観の衝突、受ける衝撃は真に迫れば迫るほどに強くなる。

対等な条件下での殺し合い、それは生存のために相手を知る事を求められ、必然として『敵』という記号のみで処理させない。

相手も自分と同じ”人”なのだ」と認識しなければならない。個人としての闘争は、集団心理という逃避さえ許さないのだ。

願いのため、己自身の明確な意志でもって殺すのだと。サーヴァントという同等の脅威は、慢心に浸る事も封じて相手への意識を強めている。

敵を知り、その存在を強く意識して、対等に殺し合うのだ。それだけの衝撃を経て、一切の影響も受けず、何一つ変革しない自我などまらずもって有りはしない。

「否定とは、試練である。人は、自らの存在証明を脅かされる事態でこそ、新たに立脚する機会を得る。」

本物を見せられた思いだったか？ 同じく闘争の道を駆ける身で、なまじ方向性が似通っているがために、己自身の疵を見せられたのだろうか？

泥に耐える者と、泥さえも愛する者。ああ、まさしく”真つ当”と呼べるのは前者であって疑い無かろうがな」

まともなままでは修羅道など歩めない。

大義で、信仰で、殺しの罪を正当化する何某かの理論で武装し、人は修羅場に立つ。

その武装は善性を守るための盾である。生のままの善良さでは、血の業を前に容易く亀裂を入れてしまう。

故に、人は脆弱な善性を思想によって練磨する。研鑽の果てに磨き抜かれた善性は、一筋の信念となって砕けない強度を有するのだ。

言うなれば、それが”まとも”な人間のする対処である。

決してガトーが弱いのではない。常人なら十分な強度を得られる事さえ稀なのだから。

信仰に懸ける思いは強く、矛盾を抱えながらも折れない強度がある。幾度も迷いを向き合い、試練として乗り越える度に、ガトーの信念は強さを手に入れてきた。

そう、試練とは越えるためのもので、命の炎を滾らすべきもの。

勝算が無ければ挑まないのは屍と同じ。そう嘯くガトーの気質は、甘粕のそれと通じている。

彼らは徹底して自分に厳しい。自己に甘えを許さない。むしろその苦しきの中でこそ燃え上がる。

だからこそ誤魔化さない。見えた真実から目を逸らさず、正面から向き合おうとする。良くも悪くも妥協が出来ない性質だ。

その純粹さこそが強さの芯であり、同時に欠陥でもある。迷いを迷いのまま、答えを出さずに忘れ去る事がどうしても出来ないのだ。

修羅道を歩みながら、自然体の姿勢を崩さない甘粕正彦。

善性を持ち、正道を尊びながら、手を染める血の業にも揺るがない。己という泥水を真に愛せる男。道理も矛盾も呑み干して、確固たる真理として自らの芯を築いている。

覚者にも等しい境地にいる男の姿に、ガトーは自らの有り様に軟弱さを見たのだ。

「闘いは心だけではない。戦術、相性、場の運気の流れに至るまで、あらゆる要素の絡み合う混沌よりその結末は現れる。気迫一つでどうにかなるほど、事は単純ではあるまい。

だというのに、不思議なものだ。勝負の際と呼べる時、死力を尽くした先で結果を左右するのは、決まって心の差異であるのだから」

神父の言葉は辛辣で、しかし正鵠を射るものだ。

ガトーの裡を暴き、その闇を突きつける。言い換えるなら、打破すべき壁を提示しているとも言えるだろう。

言峰綺礼は破綻者だが、神父としての手腕も確かなものがある。人の苦悩を求める者は、それを吐き出させる手段にも長けているのだ。

「願いの有無、願いの価値などムーンセルは考慮しない。ただ”強くある”ことこそ、聖杯を手にする唯一の条件だ。

答えに迷うならば、臥藤門司よ。始点の願いに立ち返ってみてはどうかね？ おまえにとつての至上の意義、どうあれこの戦いはそこに行き着くのだ。莫迦の一念とやらも、なかなか悔れんものだろう」  
よって、これより戦いに赴く男へと、神父は至るべき結論を示す。

確かな初志があるのなら、他の一切に頓着せず、一念を貫くことに徹するべきだと。己だけの理由のために他を切り捨てる、それが聖杯戦争の本質なのだから。

ガトーは見た。己にとつての絶対たる信仰リゆうを。

神は応えない。サーヴァントの役割に従事する女は、自らの信者に視線さえも返さなかつた。

ここに在る彼女は知性を持たぬ狂戦士バーサーカー。どれだけ信仰や情熱を向けようとも、その身は敵対する総てを蹂躪する暴力装置でしかなかつた。

祈りの届かない現状を試練と見出したのはかつての事。

弱さを自覚すれば、振り払つたはずの迷いまでも顔を出す。

未だ答えは出ない。葛藤は膿のように残り、ガトーの闘志に陰を与えていた。

幻想海に構築された決戦場。

既に四つ目となる風景は、これまでのものとまた異なる様相を見せている。

とはいえ、そんな外観に意味など無い。沈没船、闘技場、氷の世界。様々な舞台があつても、行われる事は常に一つ。

生まれれば気にしている余裕などすぐに無くなる。英霊同士の超常の闘争は、どんな神秘の風景にも勝る苛烈さ、鮮烈さを併せ持っているのだから。

対峙する両陣営、その間に流れる静寂。

それは闘争という嵐の前兆となる静けさ。生まれれば止まらないと知るが故、その直前には緊張が訪れる。

それは些細な切っ掛け一つで崩れる脆いもの。堰を切れれば流れ出し、引き戻す術はない。そしてその刻限は、あらかじめ決められていた。

月の意思が開戦を告げる。瞬間、世界の法則が血の盟約によって染め上げられた。

——名を、ブルート・デイ・シエヴェスタアの姉妹。

かつて目の当たりにした、敵の力を6分の1に低下する異能。逃れる術なき法則の侵食は、アーチャーの力を抵抗も許さず削ぎ落とした。

「ぐう、うう……ッ!? もはや出し惜しみもせぬか……!」

間髪入れずに飛び出すバーサーカー。

獣が如き性質は、人間的な余裕、慢心とは無縁の身だ。

遊ぼうなどは毛ほども考えない。抱く殺意の赴くままに、その暴力を振りかざす。

対し、思うように動かない身体を押しながら、アーチャーも刀を抜き放つ。

種子島と共に武装した愛刀の銘は『へしきりはせす圧切長谷部』。

刀剣の歴史に刻まれたその名には、宝具級と呼んでも差し支えない強度が秘められている。

出し惜しみをしないのはアーチャーも同じ。むしろそんな事をすれば、瞬時に粉碎されると理解しているから全霊を惜しまなかった。

弾幕を容易く突破して、振り下ろされる魔爪の一撃を、刀で受けて防ぎ切る。

守りの上からも伝わる衝撃、受け手の一つでもしくじればそのまま潰されかねない暴力の圧は、狂える漆黒のランサーを思い出させる。

だがランサーの時と違い、このバーサーカーには突破口となる要素がない。そして自身に掛かる縛鎖は、アーチャーに本来の実力を発揮させない。

それでも、先日に見せられたその脅威から、事前の想定は出来ている。相手の手の内も把握して、その上で挑んだ決戦だ。単なる蹂躞劇では終わらせない。

だが、言ってしまうえばそれだけだ。

怒涛の攻めを続けるバーサーカーに、アーチャーは一切の攻勢に移れていない。

放つ銃火も、現状を凌ぐための布石として。あくまで守りのための手段であり、決して反撃の糸口となるものではない。

事実、銃撃は幾つもバーサーカーに直撃しているが、まるで損害を与えられていない。相性の有利を得られな相手に、その宝具は単なる種子島としての威力しか発揮し得ない。

無数の銃砲群こそがアーチャーの攻めの象徴。それを相手の妨害程度にしか扱えていない時点で、劣勢なのは目に見えている。

されど、そうするしかないのも事実なのだ。守りに意識の全てを置いているからこそ凌げている現状、少しでも攻めに意識を回せばその瞬間に終わるだろう。

アーチャーはバーサーカーに勝てない。互いの相性が最悪過ぎる。その結論は先日の時点で出ている。天敵と呼べる相手を前に、やがて討たれるのが自明である。

「本にそなたはうつけよ。まともであればこの時点で諦めるか策を弄するかじゃ」

正面からでは勝てないのなら、正面から戦わなければいい。

通常ならば誰もが行き着くだろう選択、だが甘粕正彦はそれを選ばない。

己はこう在らねばならないのだと、それは自身に課した生き様だ。世に試練を望む男は、故にこそ自らへの試練にも妥協しない。

こうやりたい、こう生きたい、それが出来ないくらいならば死んでしまえと、徹底して理想を追求する強さ、雄々しさ。

それが甘粕正彦という男の真骨頂。何処までもやりたい事をやる”理想主義者”は、最悪の天敵を前にも微塵も変わらなかった。

「であるに、正彦よ。そなたも覚悟は出来ていような？」

放たれる銃火の質が変わる。

より苛烈に、獰猛に、弾幕の攻勢が増していく。

執拗なまでの火線の増大に、さしものバーサーカーも勢いを減じた。

それは戦闘が始まって以来の快挙。ならば趨勢もそれに乗じて、アーチャーの側へと傾いていくかと問えば、そんなことは有り得ない。

アーチャーの攻勢は、明らかな無理攻めだった。



後先を考えない過剰投入。一時のみに懸ける閃光の足搔ぎ。

決して先には続かない。早々に力尽きるのが目に見えている。決定打とならなければ、そんなものは悪手でしかない。

事実、勢いに押されて後退したバーサーカーも、これといった損害は受けていない。このままでは何もせずとも、先にアーチャーの方が干上がるだろう。

それは彼女らしくない姿だ。常に合理性を持つて戦いを進めてきたアーチャーには、似つかわしくない選択である。

しかし、それでもアーチャーは躊躇わない。

無理であろうと、似つかわしくない姿でも、活路がそこにしか無いのならば是非はない。

勝負を捨てた自棄ではない。あらゆる定石を放り出しても、勝利を目指す姿勢。下剋上より天下への道を駆け抜けた革新の王は、死中に活を求めて全身全霊を解放していく。

「いざ、三界神仏灰燼と帰せ——我こそ第六天魔王波旬、織田信長なり！」

顕現する地獄の景色。

鉄火と鮮血の朱の色が、世界に上書きされる。

それはアーチャーの心象が織り成す異界法則。神聖なるもの、神秘なるものを否定する大焦熱地獄が発動した。

己の幻想を象徴する世界の上に立ち、『魔王』の特性が最大限に発揮される。

結果、より威力を増していくアーチャーの攻勢。大焦熱の中で降り注ぐ銃火砲は、英霊としての強大さを十二分に示すものであったが――

「ウウウ、アアアアアアアアアアア——ツ!!!」

それでも、白いバーサーカーにはまるで通用しない。

無数の銃火にも穿たれず、焦熱地獄さえ容易く踏み越える。

それも必然、銃砲も業火も、アーチャーの力は神秘を殺すもの。その真髄とは旧き伝統の否定、そして新しき世の開闢を目指す革新である。

両者にあるのは、ただ明確な相性の如何。人類史に名を持たず、神の枠組みの内にもいないバーサーカーの存在は、アーチャーの概念から悉く外れている。

対し、バーサーカーの異能には些かの衰えもない。

如何に世界を別の心象風景で塗り潰そうとも、血の姉妹の弱体化はその上から効いてくる。

神霊の権能にも比肩するその力は、ただバーサーカーが在るだけで世界の法則そいうものとして適用されるのだ。

これは紛れもないアーチャーにとっての全身全霊。三千の種子島と、この世の地獄を具現化させる固有結界、彼女が持ち得る戦力の全てである。

それでもバーサーカーには通じない。白い人外の女は絶対のまま揺るがない。

効率的に、より効果的に、より容易い塵殺の成果を求めた兵器群。結局のところ、それらの役割とは人を殺すことにある。本質的に怪物退治は舞台が違うのだ。

咆哮が銃弾の雨を吹き飛ばした。

進撃が地獄の業火を蹴散らした。

アーチャーが無理を押ししても発揮する力を、バーサーカーは性能だけで上回っていく。

まだ及ばない。アーチャーが今までに持ち得てきた力では、この難敵には届かない。

「やはり”波旬”の概念も通りはせんか。明白であつたとはいえ、いざ目の当たりにすれば存外に堪えるものじゃのう」

英霊にとつての誇り、象徴と呼ぶべき宝具も通じなかった。

その現実を、アーチャーは受け止める。その様子は未だに冷静さを保つたもの。

合理を重んじる彼女が、勝算無しとまで断言する相手。力が通じないことなど想定範囲内。これしきの絶望、何ら動じるには値しない。

「ああ、ならば我が主君よ、マスター下知をください。今一度その覚悟、わしの前

に示してみよ」

ここに至るまでの力で、アーチャーに勝算は無い。  
そこに勝機を見出すならば、これまでに無い力を発揮するしかない。

その覚悟を問う。自身を使役するマスターに、その裁量はそちらにあるのだと。闘争サーヴァントの手段として、アーチャーは言葉を投げかけていた。

「承知した、我が徒サーヴァント僕。勝利のため、その力を今こそ示せ」

サーヴァントの求めに対し、甘粕は相応しい決意で応えた。

元よりこれは我が儘だ。

本来打てた策の手立ても捨てて、正面对決に拘った。

全ては、そうしたいと思っている自分の意志によつて。ならば決断の責は己が負うべきと理解している。

分かっているのだ。このやり方は道理に反している。

合理性に沿ったものではない。通常のアークチャーならば決して取らない手段であると。

道理の限界を無理によつて突破する。そんなやり方を好ましいと思ふのは、己自身。

付き合わされる身には堪らない話だろう。契約とはいえ、意に反してばかりでは見限られてもおかしくはない。

出来る事は、光を見せる事だけ。

信条は捨てられない。そんな容易いものならば、そもそも拘りなどしない。

意向に沿わない不満には、それ以上の納得で以て解消するしかないだろう。

輝けるような意志を示す。甘粕正彦の信念は、そんな無理をも押し

通せる絶対値があるのだと証明するのみである。

サーヴァントに、自らの道理を曲げさせようというのだ。

この身一つ程度なら、如何様にでも削る覚悟は出来ている。

なにせ、現実に行うのはサーヴァントなのだ。マスターとサーヴァントの関係とはそういうものだど、どう言い繕ったところで事実  
は変わらない。

戦う者の後ろにいて、大層な御託を並べるばかりで何もしない。そんな様で恥の一つも覚えないなど、滑稽でしかないだろう。

「新生を果たしてみせろ。新たに完成させたその力で、殻を破って再誕してみろよ。英霊といえどもその意志に、限界など無いのだから」  
—— 故に、必要ならばいくらでも持つていけ。

臨む試験にその心を滾らせて、甘粕は自らのサーヴァントへと主命をくだした。

意識を、己という器の内へと向ける。

外界の一切に惑わされず、現行する時間を収束されて、傾けるべきは内側の心象。

戦いの最中、まるで禅問答でもしているかのよう。およそ理に適っているとも思えない自己問答で、アーチャーは自らへと没頭していく。

大焦熱地獄の心象世界。いと悪しき天魔の名を冠する固有結界。

リアリティ・マープル

それは人々の幻想を糧に具現化するもの。嘆きと怒りに彩られた、かつて為した所業の再来である。

人は、自分の罪業からは逃れられない。王者として築いてきた数多の栄光と、その過程で取り残され、打ち棄てられてきた者たちの非業。ある意味で、この地獄はそんな彼らの置き土産だ。彼らの畏怖が、苦悶が、絶望が、魔王として地獄の力を揮う権利を与えている。

まず言えるのは、この世界は決して”善いもの”ではないということだ。

『共に戦場を駆け抜けた家臣らと紡ぐ絆の結晶』と称されるような世界とは真逆のもの。

ここには焼ける骸と怨嗟しかない。輝かしい英雄譚の影の部分、敵対した者らの殺戮、自国ではない民草への虐殺、目を向ければ必ずや付きまとう負の側面。

あるいは、アーチャーの心象とは元より炎獄の形であったのかもしれない。彼女こそは革新の王、織田信長こそは時代の破壊と創造を司る大火である。

燃料としてくべられる数多の絶望。

新しきへと向かう道の途上で轍とされた旧き残骸たち。

この地獄が神秘を砕き、神性を貶すのも、薪となつて燃える骸の山があるからだ。

無数の意識が集合し、一つの問題を形取っている。時代から取り残された遺物を葬るものであると、神秘殺しの神秘となつて異界法則を成立させている。

一つ、この固有結界の特殊なところを上げるとすれば。

その成り立ちに”他人の思想”が骨子として存在する事だろう。

固有結界とは、自身の内面が持つ形を現実に具現化する業。

基本、それは個人の内面で成立するものだ。心象世界という他者の介入の余地がない場所で、そうなる事は必然とさえ言える。

だというのに、この地獄の成立は個人では果たし得ない。第六天魔王・織田信長へと向ける人々の畏敬や憎悪こそ顕現の大前提である。たとえ魂が炎獄の形をしていたとしても、神秘を滅ぼす地獄という属性が与えられたのは、間違いなく自分以外の意識があつてこそだった。

彼女は『魔王』を名乗る者。

我が身へと集まった幻想をも支配する王の名だ。

思想に影響される事なく、あくまで純粋な力として。理に適う熱量の使い方は、そのまま彼女の有り様にも表れているだろう。

ならばこそ、ここで一つの仮説が出来た。

人々の負の念を薪にして燃え盛る地獄、それをただ“出力”と捉えたならばどうなるのかと。

地獄の有り様が変化していく。

器の外に具現化していた心象世界が、器の内へと収束していく。

神秘を滅ぼし、神をも殺すとされる異界法則。その属性さえも捨て去って、単純明快なエネルギーと化して注がれているのだ。

前述した通り、この世界は“善くないもの”だ。

集まる意思は王への怨みで溢れている。殊勝に協力しようとする意識など皆無である。

それも当然、己を虐げてきた者に進んで手を貸す輩はいない。機会が巡ってくれば躊躇う事なく牙を剥く。

道具の型に嵌められて、散々に利用されてきた憤りも含めて、器へと注がれた意思の群れは我が意を得たりと暴れ狂った。

「ぐ、ぬう、お、おおお……ッ!!?」

熱さがある。苦しさがある。嘆き、怨み、呪う思いを止められない。

地獄にくべられた魂たちが受けてきた絶望。それらを取り込む結果として現れたのは、苦痛の共有だった。

これが己の為してきた所業。人々に課してきた滅び、その返礼を受けている。

悪なる者は知るだろう。自らの罪の重さを、与えてきた苦しみの辛さに、矮小な魂は自尊など放り出して許しを請うだろう。

「——うつけどもめが！」

されど、ここに在るは単なる情弱な小悪党に非ず。

革新とは淘汰の果ての創造だ。己の道が血と骸で築かれるなど、初志の時から分かっている。

彼女は折れない。苦しみにも罪の重さにも、王たる者の矜持に懸けて屈しないと謳い上げる。

「是非も無し。我が覇業に流血の犠牲は必定である。どんな甘い戯言で睦ごうとも、踏み敷かれた道の途上は幾万の屍が積み重なっているわ。」

怨み言など、知らぬ間こえぬ煩わしいぞ。こんなことは人類が欲を手にした時より定まっておること。今さら思い煩ったところで何になろうか。

こんな痛み<sup>もの</sup>さえ背負えぬ覚悟ならば、そも英雄の道など選んでおらんわ！」

織田信長という英霊の闇を、アーチャーは一身に引き受ける。

向けられる負の感情さえも我が身の武器と変える『魔王』。苦悶と引き換えに地獄の幻想さえも身に纏い、ついに己の衣として新生させた。

固有結界の内部展開。

現実を侵す異界法則を、自らの器の内に閉じ込める。

それは秘奥に達した者たちにとって、世界の修正から逃れる手段の一つ。

心象風景という異界を具現化すれば、元の形に戻ろうとする世界の反発を受ける。必然、維持のためには術者に激烈な魔力消費を強いるのだ。

自分自身という器の内、異法を閉ざして流出させなければ、修正力は最小限に抑えられる。同時にそれは、現実と異なる法則を我が身に渦巻かせる事でもある。

かつて原初生命の系統樹たる混沌を体現させた魔術師がいたように、自らの心象風景によって己自身を異形の存在へと変質させる魔技であった。

「——魔人炎装・第六天魔王波旬!!」

世界を覆っていた地獄はもはや無い。

紅蓮の業火はその一片まで器へと注ぎ込まれ、今や内界で渦巻く炉心と化した。

ここに在るは大焦熱地獄の具現にして化身。獄炎と一体となった焰の魔人が降り立った。

圧倒的な力を振るったバーサーカー。

英霊の域すら隔絶する性能。世界と接続する能力にして特権。

相性の取れないアーチャーにとって、それはあまりに最悪の天敵だ。本来であれば成す術なく、勝利の可能性など一片もありはしなかっただろう。

そう——可能性などあり得なかったはずなのだ。

「オオオオオオオオオオオ——!!!」

朱の魔力を迸らせる爪と、火炎に包まれた刀とが鏖闘り合う。

拮抗は一瞬、即座に魔爪の勢いが炎刀のそれを上回る。それは出力において、未だにバーサーカーの方に軍配が上がる事の証左である。

されど、上回る力に抗ってこそその人の技。魔爪の勢いから身を逸らし、横を抜けるような動きで一閃を見舞う。

それは身を撫でるような一撃だ。傷は浅く、人外の超抜能力が即座に復元を果たす。しかしながら、撫でるような炎刀に傷を受けた事も確かであった。

一合、また一合と、応酬は絶え間なく、流れは一方に天秤を傾けたものではない。

互角、そう互角だった。最悪の相性を持った天敵を相手にして、アーチャーは真つ向勝負という土俵の上で渡り合っていた。

自らの固有結界である『第六天魔王波旬』の自己内部展開。

魔術師ではないアーチャーがそのような芸当を可能としたのは、彼女の固有スキル『魔王』を最大限に活用した結果である。

存在に着色された魔王の幻想。無辜の怪物とも似て非なるそれは、アーチャー自身の人格に一切の影響を与えることなく、魔性としての力の発揮を可能としている。

内界で燃え盛る地獄は、さながら大焦熱という名の魔力炉心だ。魔王という幻想概念を核として、怨念をも出力に変える焰の魔人への変革を実現させている。

神秘を碎き、神を殺す特効性、その優位をも度外視した出力強化。



特效が望めないなら、いつそ無いものとして棄て去ってしまえばいい。

余ったリソース分まで自己強化に当てた魔力運用。逃れられない弱体化の重力への対抗策は、それ以上に己自身が強くなるという力押しだった。

「まったく、ようもこんな真似を思いつくものじゃ。まして理屈では思いつけても、それを実行に移さんとする者などそなただけじゃろうて」

言うまでもない事だが、それは本来の運用方法とは異なるものだ。決戦に向けて急ごしらえに用意した今回の策。当然ながら無理の代償は存在している。

異界を自己のみに限定する事で、その意義である世界からの修正を最小限に抑える事には確かに成功している。しかしながら強化のために必要とされる魔力量はそれさえも上回っていた。

炉心の火を燃え上がらせるため、際限なく求められる魔力という燃料。圧倒的な実力差を覆すには、火にくべる燃料は幾らあっても足りない。

所詮は力押し、無理で道理を越えるにはそれだけのものを要求する。バーサーカーに対抗している焰の魔人は、その実いつ燃え尽きてもおかしくない火の玉だった。

燃料の魔力を賄うのは、当然ながらマスター自身の魔力である。限界を超えた供給量に、回転する魔術回路は熱暴走を起こしたように融解する寸前だ。

並の魔術師ならばまず耐えられない。まともな者なら試そうとさえしないだろう。己という薪を火の中へと投じていくような、精魂燃え尽きるまで燃烧していく決死行。

「ふふ、はははは、あーはっははははははははははアツ!!!」  
そのような無謀を通り越した所業を敢行しながら、甘粕正彦は笑っていた。

これしきがどうした？ 熱さが、苦痛が、今にも崩れ落ちそうな喪失感が何だという？

理性は限界を叫んでいる。本能は不可能だと訴えている。そのよ  
うな己の中の弱音の一切切を、取るに足らぬと一蹴した。

まさしくこれは窮地、越えるべく訪れた逆境。今持てる力だけでは  
足りない。限界を突破して覚醒しなければ未来は無いのだと理解し  
た。

瞬間、現れた現象は道理に反したものの。

崩れ落ちそうだった脚が、骨子を取り戻して立ち上がる。

既に底が見えかけていた魔力が、再びその供給を再開した。

限界だったはずの魔術回路。融け落ちる寸前だったそれを、新たに  
別の回路と繋ぎ直すことで補強。

既に目覚めている分も、霊子の奥底で眠っていた分も、この瞬間に  
叩き起こされて最大効率で稼働し始めた。

まるで孵化のようだ。甘粕正彦という意志に突き動かされ、人のあ  
るべき殻を破って常識外れの現象さえも現実に変えていく。

それは電脳体に刻まれた、人間としての情報限界からの”超克”  
だ。精神の情熱が、魂という本質の方向性が、肉体という器までも更  
なる高みへと導こうとしている。

思いの力が成し遂げる奇跡。されど無論、思い一つでここまでの事  
を実現出来るはずもない。

意志とは起爆剤、積み上げてきたものを糧にして、人が現状からの  
飛躍を果たすスイッチだ。

歴史を持たない信念など、吹けば飛ぶような張り子の軟さだ。一時  
の感情だけで大事は成せない。その思いを絶やす事なく継続してき  
てこそ、初めて強さというものは得られるのだ。

甘粕正彦は”努力”をしてきた。

真面目に、怠けず、信念を持って。恐らくは、この世界の誰よりも  
彼の努力は本物だ。

積み重ねてきたものは存在している。そう、それこそこの世の”誰  
よりも”。強者故に本当の苦境とは無縁であった生涯で、それらは発  
揮の機会を得られず器の底で眠っていたのだろう。

そして、遂に訪れた逆境に、積み重ねた努力が本懐を果たそうとし

ている。意志の起爆剤が眠れる力を呼び起こし、この現状を打破してみせんと猛烈な奮起を見せていた。

甘粕は人の意志を愛している。

試練によつて呼び起こされるその輝きが愛おしくて堪らない。

子供のように純心に、望んでいるのはそれだけだ。だから苦痛なんてもものよりも、喜びこそが何より勝る。

そんな<sup>ばらいぞ</sup>“樂園”を我が身で体現出来ている事、この一分一秒という瞬間が嬉しくて仕方ないのだ。

「もはや言葉も聞こえぬか、この大うつけめ。ああ、是非も無しじやな。ここまでできたならこのわしも、そなたのうつけぶりにとことんまで付きおうてやるわ！」

蹂躪する魔爪の一撃を、焰の剣閃が弾いて流す。

受ける威力に逆らわず、舞うような動きでアーチャーは後退。

刹那、空間を包囲する種子島の群。その運用に停滞はなく、展開とほぼ同時の一斉射。

逃げ道を封殺する全方位攻撃。<sup>オールレンジアタック</sup>燃え盛る業火を込めた弾丸は、相性を捨てた純粋な威力においても通用する。

焰の銃弾が、白いバーサーカーの身を穿つ。貫くまでには至らず、即座に再生してくるが、以前のように全てを無視して進めるほど軽くもない。

戦力比を見るなら、未だ上をいくのはバーサーカーの方だろう。

しかし、両者の間にある格差は、もはや背も追えないものではない。少なくとも、その脚に手をかける程度までは迫っている。容易ではない、覆し難いと呼べる壁は残っているが、不可能と呼ぶほどではない。

バーサーカーが振るうのは、怪力や異能、常識外れの再生力といった怪物としての超抜能力。アーチャーが振るうのは、人間としての技術と武器、練り上げられてきた知恵の数々。

それは綱渡りのような勝ち筋だろう。展開一つ違えば呆気なく破綻しかねない。渡り切るのは奇跡と称してもよいか細い糸だ。

されど、英雄の怪物退治とは、元よりそうした奇跡を掴み取るもの。

存在の格で圧倒的に勝る相手を下すからこそ、彼らは英雄の称号を得てきたのだから。

ならば進むまでだろう。無理も無謀も百も承知、確実な勝利の理など無いが、マスターもサーヴァントもそれに挑む気概は共通している。

燃え盛る焔の体躯は、主従の勇猛な闘志の猛りを具現するが如く。魔人と化したアーチャーは、白いバーサーカーに挑みかかっていた。

そして崇拝する信徒にとって、その光景はどのように受け取るべきものか。迫られている。

神と、唯一無二の真理と見惚れた存在が。

決して届き得ないはずの凡百の英霊に、彼の至高が脅かされている。

それは信仰を抛り所とする者にとって、悪夢にも等しい光景だろう。

神とは絶対の象徴だ。信ずる者の、侵されてはならない精神の支柱。

それこそ自らの命と引き換えにしても護らねばならないもの。過去に幾人もの殉教者たちがいたように、人は精神の安らぎを肉体の安寧よりも優先してきた。

白いバーサーカーが、偽りなく臥藤門司にとっての”神”であるなら。

この光景には怒りを抱くべきだ。信ずる神に仇なす背信者に向けて、憤怒を込めて排斥を叫んで然るべきだろう。

「これも道理であろうな。志を同じくする者が手を取れば、斯くも強

さを発揮するか」

だというのに、ガトーの声に怒りはない。

むしろその面持ちには、得心がいったというような静けさが浮かんでいた。

「我が声は、未だ女神に届かず。その御心も知れぬまま。

未熟なり、臥藤門司。如何な祈りとて、届いておらねば意味など無いというに」

狂乱に染まる白いバーサーカーだが、初めからこうであつたわけではない。

始まりは地上で果たした邂逅の折、その時にはサーヴァントという型の縛りは無かつた。

月で召喚された他のサーヴァントとはそこが決定的に異なっている。元より彼女は英霊ではない。過去の情報の再現ではなく、現実に存在している歴とした生命である。

今も色褪せる事なく思い出せる。

挫折と絶望の果て、怒りのままに挑んだヒマラヤ山脈での苦行。

氷雪の白に覆われた世界で、尚も白く燦然と輝く姫君との邂逅を。

極寒の環境で生死の境を彷徨い歩く中、邂逅の瞬間からガトーには理解できた。

人のカタチをしていても、この存在は人ではない。周囲の環境をまるで意に介しておらず、むしろそんな自然と溶け込むように共存する、大いなる何か。

直感だったが、ガトーは悟つた。これは自然と密接な繋がりを持つ存在、人の雑念が入り込む余地など無い純粹なるものなのだ。

瞬間、ガトーは総てを打ち明けていた。

目の前の大いなる存在に対して、己の矮小な迷走の何たるかを。

答えてくれるかは分からない。こちらを見ているかも定かではない。

あるいは相手の不興を買って、この命を散らす結果となるかもしれない。

仮にそうなるとしても、構わない。ただ今は、きつと奇跡にも等し

いこの邂逅を、無為なものにして終わってしまう事の方が、何よりも耐え難い事だった。

「おまえの問いに意味はない。

罪も、神も、人が定義のために用いる言葉である。

そも、世界とは人理に従うのでも、人情に流れるのでもなく、ただそう在るもの。

人の有り様とて変わらない。自らを善とも悪とも捉えようと、結局人は人として在るだけだ。

許すも何も無い。そのように在る人もまた、この世界の一部であるのだから」

淡然と無慈悲に、超然と揺るぎなく、冷淡な無機質さで。

人の罪業を巡った迷走への答えとして、ただ人とはそう在るものだと。

人に怒るでも否定するでもない。世界の代弁者たる白い姫君は、当たり前前の事を語るように人間の存在を”容認”していた。

その時に感じた感動を、言葉にするのは難しい。

世界は人類を拒んではいなかった。自らの種の一部として認めてくれていた。

それはなんて”祝福”だろう。証明できなかつた人類の罪の是非を、ここに何よりも揺るがない”基準”<sup>せかい</sup>が定めてくれたのだ。

我々はもう許されているのだと。母なる地球<sup>ほし</sup>は、ただ在るがままに人の所業を受け止めて見守っているのだと。これぞ真理と悟ったことに疑いはない。

——月に昇って以来、白い地球の姫君は何も応えてはくれない。それを不満とは思わない。むしろ甲斐があるとさえ思った。

女神が応えてくれないのは、己の功德が足りないから。これぞ己が天上の境地に至るための最期の試練だと受け取った。

決意と信心でもって進み、勝利の頂きへと至った先でこそ、神は祝福を賜ってくれる。その時の微笑み、聞かせてくださるだろう美声こそ戦いに赴くに足る理由だと信じていた。

「おお、しかし、神はまことに勝利を求めておいでだったのか？

我が祈りも、人々からの信仰も、御身より求められたものではない。そも、御身が何を望んでおられるのか、愚僧オホシはそれさえも理解していなかったとすれば」

憧れとは、理解からは最も遠い感情であるという。

その言葉を真理と捉え、絶対たる原初の神性として奉り上げようとした。

それはガトーにとって考えられる最大の敬意。だが、果たしてそれは、未だ答えを返さない女にとっても望んだ事であったのか。

女は、神ではない。

法則の擬人化という泡沫の幻想ではない。星という現実に根差した珊瑚。

出自に近しいものはあれど、その存在は真逆とさえ呼べるほどに別種のもの。

神と崇める事、人々に真の神として奉られる事、その真実を知るのなら何と皮肉な勘違いであるだろう。

神という価値観を追求した求道僧と、神と等しく在りながら神ではない原初の女。

彼と彼女は、互いに相手のことを見ている、きつと映っている世界が違っていた。

「御身こそは唯一無二。この世に超然と君臨させる原始の光。

なれど、元より欠けるところの無き身であれば、望むものもまた存在しない。

孤高なる御身には、小生の祈りさえ無用の長物でしかなかったということか」

それがガトーにとっての不明。自らの戦う目的そのものに、その戦い自体が求められていなかったという始まりからの掛け違い。

最初から意味なんて無かったのだと、命を賭しても信念に懸ける男にとつて、それは最悪の絶望のカタチだ。

どんなに折れない支柱でも、突き立つ土台を失えば崩れるように。強く張り詰めているからこそ、折れてしまった時の衝撃は比例して大きくなる。





い。人に近付いてほしかったのだ。

ヒトのカタチを持ち、純白の世界で超然と在る白き姫。その存在を奇跡のようだと感じながら、同時に傷ましさも覚えていたから。

それだけは自分の中にもある真実。たとえ次の瞬間に滅ぼされるかもしれない、逃げ出そうとせず言葉に言葉を交わそうとしたのは、ただ放っておけないと思っただけからだ。

互いの世界が違うなら、まずはその世界から近づけよう。

結果として彼女が何を思うのかは分からない。良い事なのか、悪い事なのかさえ定かでない。

それを決める権利は自分には無い。その判断は、生じた彼女の心が決めるはずだから。

少なくとも、ヒトに近しく心という機能を持てる彼女なら、

星という環境に合わせて機能するばかりでなく、自身の思いを軸に成長する選択も、きつとあるはずだと信じていた。

「不純なり！ 不徳なり！ 万物、ただそのように在れかし。小生が何を加えずとも、御身という黄金は既に完成していたのだ！」

おお、原始の女よ！ 汝は、大雑把に美しい。あの日、仰ぎ見た至高の御姿を、今ここに再臨せしめん！」

己の中の矛盾と向き合い、目を逸らさずにしかと答えを出す事で、自身の闇を克服する。

それは仏教にも通じる教え。覚者が菩提樹の根元で開いた、悟りへと繋がる道だ。

ここにガトーは一つの解脱を果たす。新たに骨子を入れ直した信念はより強固に、迷いの一切を振り払って進み始める。

大筋の目的は変わらない。

聖杯を手に入れる。万能の杯の力で以て、人々に原初の女神を認識させる。

その上で、女神へと窺いを立てるのだ。そうして得られた人々との繋がりに、果たしてその心は如何なる思いを抱くのかと。

返されるのは是か、それとも否か。いずれにせよ、答えがあるのは間違いない。ならばそれを戦いの意義として奮起する事に異議など

無かった。

『この女性ヒトと言葉を交わしたい』。その思いこそが望みの原点、臥藤門司の願いの始まりであったから。

余計な空想など、それこそ人の都合の愚かしさに他ならない。

至高と魅せられた姿、そこに理想の完成を見たのなら、それを信じ抜けば良かったのだとここに悟った。

掴んだ意義と新たにした決意を胸に、己の気付きを実現するべく、ガトーは奇跡の権利を行使した。

「この手にありし”令呪”をもって乞い願おう！ 真なる御身を、神々しき原始の玉体を躰し給え！」

令呪。三画のみのサーヴァントに対する絶対命令権。

聖杯戦争の参加証でもあるその権利は、可能不可能、意思の有無さえ飛び越えてマスターのくださった命令コマンドを実現させる。

払われる代償は命の綱。実質は二回のみ、三回目には文字通り自らの命脈を断たなくてはならない奇跡の実行権。

消失する一画。ガトーの望んだ奇跡が、ここに現実となって顕現する。

まず、ガトーの祈りが届いていなかったというのは、少しばかり語弊が伴う。

たとえ勘違いでも、その影響は確かにあった。主に悪影響という意味合いだが、臥藤門司というマスターからの”思い込み”はそれだけの力があつたのだ。

SE・RA・PHセララファの情報世界においては、伝説、伝承といった幻想が真となる。頑迷な信仰はそれ自体が真実に匹敵する強度を持ち、元の形させも歪ませた。

曰く、その存在の起源とは”月”にこそあつたという。

かつて存在したとされる朱い月の王。

その存在をモデルとし、地球が自らの触覚として創造されたモノ。星自身が複数持つという自衛手段の一つ、神代より独立した人類を律するため、物理世界にも対応した生物化された精霊種。

其れの名を『真祖』という。真なる不老不死、始まるに在る吸血種。もはやムーンセルによる創作とも囁かれるほど、その真実は遠い彼方に追いやられている。

明確なのは、彼女が地球側に根ざした精霊種だということ。

再現された写し身サーヴァントではなく、地上よりこの月に招き入れられた存在。

人に非ざる者としてサーヴァントと登録され、課せられたクラスによつて枠組みの範疇に収められたが、彼女の存在は厳然と在るものだ。

地球と繋がった真祖である彼女は確かに”居る”。令呪によつて求められた奇跡の履行は、本来に在るべきカタチとして彼女を再臨させた。

そこに君臨するのは、純白のドレスに身を包んだ姫君。

靡かせる黄金の長髪、双眸に輝くのは色濃い宝石が如き”深紅”の瞳。

当て嵌められた狂戦士バーサーカーの束縛も、既に無い。誤った信仰の呪縛から解き放たれた面貌には超越種としての無情さのみが醸し出されている。

無慈悲に、超然と、ただそこに在る真祖の姫。人のカタチに極めて近く、人という枠組みより隔絶した精霊の王が顕れた。

「こ、れは……ッ!?!」

アーチャーが感じたものは驚愕と戦慄。

その存在を眼にした瞬間、心には畏怖が満ちて、本能からは恐怖が浮かび上がる。

それは遥かな高みに在る絶対者を前にした反応だ。人の上位者として創造された超越者には、たとえ英霊といえども畏れの念を免れない。

更に、単なる感覚のみならず、変化は実際にも発生している。

ここまで散々に苦しめられた地球環境化。テラフォーミング地球側に置き換えられた重力法則による弱体化が、ここに来て消失していた。

人の怨嗟と畏怖を集め、形を為した焰の魔人。重圧から解き放たれた今こそが本領を發揮する時であり、体現する業火の圧力は最強格のサーヴァントにも劣らない。

だというのに、勝利へと繋がる実感はそこには無い。

理由は単純にして明快。如何に魔人がその力を取り戻しても、対峙する存在がそれ以上の強大化を果たしていたのだから。

スキル『アルテミット・ワン原初の一』。星の触觉である真祖が、そのバックアップを受ける事で相手の力を確実に上回り、殲滅のための適切な力を与えられる。

元より『血の姉妹』とは、この異能の代替品に過ぎない。敵の弱体化を狙うなどという邪道ではない、自らをより強大化する強者の王道こそ、本来あるべき形だった。

重圧からの解放は、即ち最強たる真祖の姫君の帰還でもある。

もはや姫君を妨げるものは何も無い。よって本来の異能もまた、その本領を遺憾なく發揮された。

——マール・フアンタズム空想具現化。

自然の触觉である精霊が持つ能力。自己の意思を世界と直結させ、局所的な因果干渉によって望んだ空間になる確率を引き寄せる。

世界を思い描く通りの環境に変貌させる。幻想によって現実を幻想足らしめる、自然現象として有り得る範囲であれば万能にも等しい異能である。

顕すのは暴虐なる天災の意思。正義も悪もなく、万象総じて等しく呑み込む大自然の破壊事象が、対峙するたった一個の存在を滅ぼすために解放された。

故に、対峙している者は悟らざるを得ない。

これは勝てない。勝てる道理がない。

エネルギーの桁が違う。星が持つ質量に、個人の意志が勝るなど有り得ない。

道理を知るからこそ、先の結論への理解も早い。自らの敗北がもはや必定であると、アーチャーは理解してしまった。

打てる手立てなどあるわけもない。

どうしようもないと早々に受け入れたから、その心も平静を保っている。

無念であるが、それも是非無し、と。業火である我が身とは対照的な冷めた結論と共に、アーチャーは敗北の運命に膝を屈して――

「立てい、アーチャー！」

諦めるな、まだ終わっていない！」

折れようとしていた意志を支えたのは、豪気に轟く快活な声。

それは灼熱にして鋼の闘志を持つ勇者の声だ。如何に巨大な壁が立ちはだかろうとも、不撓不屈を貫く勇氣の灯が、諦観に沈みかけていた心を光で照らし出した。

彼は、甘粕正彦は折れていない。たとえ英霊であるアーチャーが諦めても、光を奉じる益荒男は何も諦めていなかった。

「下など向くな、前を見ろ！」

死地にあり、絶望に浸されて、それでも立ち上がるのが”英雄”である!!

たかが”強さ”だけを目の前にした程度、心に懸けた思いは屈しはしない!!」

世界と同化した真祖の姫、その存在は紛れもない”絶対強者”だ。彼女の力を上回ることは、何をどうしようとも有り得ない。どれだけ無理を押し通そうとも、強さという上限では頭打ちが見えている。

故に、ここまでだ。焔の魔人、固有結界の応用展開、知恵を絞り、出せる手段を出し尽くしたアーチャーの強さは、今ここにあるものが全てだと。

しかし、ならば諦めてしまうのか？

相手より強くなれないから、自分の方が弱いから、勝利と敗北は決してしまうのか？

いいや、否。英雄の強さは、単なる出力の上限ばかりでは断じてない。弱いから勝てないのではなく、弱いからこそ勝てる道筋を探し当

てるのだ。

人はそれを奇跡と呼び、偉業と呼び、英雄譚として語り継ぐ。己の弱さを知りながら、強者に立ち向かう奮起の意志こそ、勇気と呼ばれる輝きだから。

いざ、勝利をこの手に、望んだ未来を掴むため。

雄々しくその手を振り上げて、奇跡の権利を甘粕もまた行使した。

「令呪をもって告げよう。凌げ、アーチャー！ 道は必ずや拓かれる」  
その手の甲の三画より一画が消失する。

命じるのはただ一言、”凌げ”と。打ち勝てとは言わず、この一時のみを耐え凌げと告げた。

命令はシンプルなほど効力を発揮する。ただ生き繋ぐ事だけを命じられたアーチャーは、この一撃への耐久に限り爆発的な恩恵をもたらされた。

「……まったく、この稀代のうつけめが。何が魔王なものか」

刀を構える。銃火の群が列を為す。

相手は世界そのものという規格外。勝算の無さは承知している。

だが、もはや諦観は無い。再熱した闘志を滾らせて、焰の魔人は自らの炎で燃え盛った。

「勇気を焰と燃やし、勝てぬ大敵へと挑んでいく。こんなもの、御伽噺に伝わる勇者の所業ではないか！」

らしくない己の姿を皮肉に思い、アーチャーが叫ぶ。

しかし言葉とは裏腹に、その波動は猛る意志に合わせて増すばかりだ。

型を破れ。新たな自分を探してみろ。でなければ二度目の生の甲斐がない。

言われた言葉を思い出す。慰労のための場で、尚も試練を求める呆れた性分。

こうなる顛末を予測できたわけでもなかりうに、こうしてらしからぬ己を晒す羽目となった事実には、アーチャーは知らずと笑みを浮かべていた。

元より、人とは変成を繰り返していく生き物だから。

魔王と呼ばれた過去の罪業も、今この時だけは置き捨てて。輝ける意志の熱量で燃え盛る焔の勇者として、アーチャーは”絶対”へと挑みかかった。

超自然の破壊とぶつかり合うアーチャーの焔。

まさしく規模が違う。世界と呼ばれるまでに膨れ上がった空間干渉に、一個の存在まで凝縮した異界法則。衝突よりも、呑み込まれるといった表現が正しい。

それはまるで天災の放流の中で抗う人の姿。焔そのものと一体となったアーチャーは、まさしく斯くあるべき人間の姿勢で以て立ち向かっている。

マーブル・ファンタズム 『空想具現化』と『固有結界』

どちらも自由自在でありながら制限を持つ、似て非なる異界創造の法。

二つの法則に明確な優劣はない。各々に及ぶ所と及ばざる所がある。余計な理屈を付ける事こそ無粋というものだろう。

ここで問われるのは規模と出力。その差は比較することさえ馬鹿馬鹿しい。星という規格外に対し、個人が打ち勝つ事など無謀が過ぎる。

それでも対抗を可能としている要因は、密度の違いにある。拡大した干渉範囲に対し、自身という器にまで収束させた法則は、外界からの干渉を許さない。

令呪の恩恵と合わせ、アーチャーを存続させる生命線だ。無理を通して貫かれる抗いの意志を絶やさない限り、この拮抗は終わらない。そのように闘志を振り絞るアーチャーの陣営と対峙しながら、真祖の姫に感情の揺らぎはない。

張り付けた無情は変わらず、自らの力さえ撥ね退ける雄々しさにも

反応を返さない。

そこには自意識というものが欠けていた。狂化の枷より解き放たれても、未だに彼女の心は微睡みの内にあった。

表には出てこない、微睡みに沈む微かな心。

まるで画面越しの映像を見るかのよう。自分自身の事を他人事のように見守っている。

そんなか細い意識の底で、彼女はふと考える。はて、いつだったか自分は、あれとよく似たものを見たのではなかったか？

心の機能を持ちながら、心の活動を不要とした存在。

己の存在に課せられた役割に沿って動くだけ。必要が無ければ動かず、生涯の大半を眠りの中で過ごそうとも構わずに。

確か、そんな自分を壊そうとした者がいたような。『永遠』にやたらと固執した、よく分からない理由で自分の前に現れた、誰か。

渴望や執着、そういった言葉で表される動機が実感できない。所謂未知であったから、そこに止まっていた心に小波を立てられた覚えがある。

目の前で起きている現象も、性質は違えども種類としては同じだろう。

何か一つの事を追い求める感情の行動。理に沿った役割ではなく、個体として主張する自己欲求の発露。

それは自然の観点からすれば無意味なもの。全は一に、一は全に。循環する生命のサイクルこそが自然というシステムの真理だ。

そこに個人など必要ない。過剰に発達した自我性は、全体の営みまでも崩壊させてしまうから。大いなる循環の中では死としてその一部に過ぎない。

それでも人間とは各々の個人性こそを最も進化させた生命種だ。故にその在り方を否定せず、真祖を始め彼らを律するための機構を造るまでに留めてきた。

世界の触覚として、大本が下した判断がそれ。けれど同時に、そこには彼女自身の意思もある。人間の似姿として、人と同じく個体として行う思考だ。



眼前に在るものは敵。滅ぼすべきものであり、そのために力を振るうという判断を下している。それだけの事のはずなのに、何故か揺さぶられるものを感じてもいる。

ああ、そういえば、自分はそうしたものに動かされていたような。今もこうして従っている人間にも、同じものを感じたから。

与えられる知識には無い未知。故にそこには好奇が生まれた。自分の中にある概念だけでは賄えない何かがあると感じたから、空っぽの器に入り込んだ

無駄なものだと知っている。なのに、それを嫌いになれない。その気になれば払い除けるのも容易いの、受け入れている今がある。

それはきつと、”あの人”との出会いと同じでもあったから――

――  
終わりは、唐突に訪れた。

猛威を振るっていた超自然の世界干渉。

まるで幻想に引き戻されるように、その力がこの場より消え失せていた。

もしもここが地球であったなら、彼女は真実磐石であっただろう。

しかし、ここは月である。物理法則の上に築かれた大地ではなく、情報の海に揺蕩う虚構世界。

現象の再現にも限界はある。自然現象の一部である故に反動を受けないはずだった『空想具現化』は、この月では固有結界のような抑止の対象として見做される。

許された奇跡は一時のみ。君臨する白き真祖の姫は、再び型枠の中へと眨められた。

後に訪れるのは破壊の余韻。

干渉から解かれた空間は元の法則を取り戻し、天災に覆われていた光景が露わとなる。

広がるのは蹂躪の跡。超絶の破壊に晒されて、その存在を保つ事など有り得ない事だと疑いようはない。

されど、ここに道理を覆せし者がいる。

蹂躪の跡より飛び出した一塊の焰。魔人たるその姿を見紛うはず

もない。

業火を纏い、刀をその手に携えて、アーチャーはそこに健在だった。度重なる酷使に内部構造は崩壊寸前。

本来ならば停止して然るべきところを、気力一つで強引に再起させる。

これ以上は破滅にも繋がるかと自覚しながらも、アーチャーは駆ける脚を止めようとはしない。

迫り来るアーチャーに対して、白い真祖は動けない。

彼女もまた、無理を押しした本領の発揮によって齟齬をきたしている。

超越種足らしめる異能の数々。それらの力の総てが、この瞬間にあつては喪失していた。

齟齬より復旧するまでの、この戦いで唯一見せた女の間隙。ここを逃せば勝機は失せる。それを承知するが故に、アーチャーは無理に無理を重ねながら押し進んだ。

お互いに、それは限界点を越えた戦いだ。

通常であれば戦闘不能、力尽きているはずの身体を繋ぎ止めるのは意志の力。

まだ倒れない、まだ終われないと吐き出す気迫こそが、動かないはずの身体を動かしている。根性論とも揶揄されるそれは、しかし確かに存在するものでもあった。

対し、自身の脅威が迫っていると知りながら、白い女は何も出来ない。

理屈で為し得ないから無理だという。必要だという理由だけで、不可能を可能とするだけの原動力とはならない。

その無理を通せるだけの理由が、彼女にはない。たとえ全てを捨てて結果になつてでも、”絶対により遂げる”と決意させるものが何も無かった。

よつて、条理を覆す不条理、奮起する意志による”真正の奇跡”は現れず。

権利によつて得られた奇跡を失った女の胸を、突き出された焰の刃

が貰っていた。

それは、意志を持つ者と持たぬ者に分かれた明暗。強さにおいて隔絶した差があつたはずの両者、その相関をも逆転させる意思力の有無。

戯言のようなものだというのに、何故だか価値ある輝きを見出してしまふ、人の心だけが持ち得る愚かさだつた。

——しかし、そんなものとは別の話で、真祖の女は斃れない。

場面を一つの区切りと見るなら、敗北を喫したのは白い女の方だと言える。

されど、勝負で負けようとも、彼女は真祖。人を遥かに凌駕する超抜能力は、彼女に容易く滅びの結末を与えはしない。

サーヴァントならば霊核を貫けば滅びるだろう。だがサーヴァントではない真祖は、たかが身を貫く刃程度で滅びない。

アーチャーの決死の一撃は確かに届いたが、その一撃は真祖の姫の死に届き得るものではなかつたと、心無い結果がそこにはあつた。

「……否じゃ、まだ終わらぬ」

故に、アーチャーはまだ動く。

名誉、尊さ、潔さ。それら総じて、敗北という恥辱を誤魔化す戯言だと言ひ捨てて。

勝てなければ意味はないのだ。勝利して、未来に繋がるものを築かなければ、あらゆる所業に価値は無い。

革新など、成果が上がらなければ狂人の愚行と一笑に付されて終わり。その事実を誰よりも知るが故に、アーチャーは決して勝利を手放さない。

「持つていけ。我が逸品、貴様と引き換えならば惜しくはない」

気付けば、焰の魔人の姿は消え失せていた。

そこにあるのは元の人の形を取ったアーチャー。一体化していたはずの紅蓮の焦熱は何処にもない。

あれほどに高められた業火である。意味なく霧散するはずはなく、またそのような消費を許すアーチャーではない。

消えていないのなら、あの熱量は一体何処に？ その答えはすぐ近

くに、突き立てられたアーチャーの刀、赤熱する刀身から膨大な力の波動が発せられている。

尋常ではないその熱量は、自己容量を越えて決壊する臨界炉だ。限界値をとうに過ぎ去った魔力運用には、制御し維持しようとする意図はまるで無かった。

その使い方を、『壊れた幻想』<sup>フロークン・ファンタズム</sup>、と呼ぶ。

膨大な魔力の塊でもある宝具、その魔力をあえて暴走させて破壊力へと転換する、一発限りの爆弾へと変える使用法。

当然、使われた宝具は砕け散り、二度と元には戻らない。英霊にとっては自らのシンボルであり、生前の生き様の結晶である宝具の、異端とも呼べる使用法だ。

引き換えに、その破壊力だけは折り紙付きだ。宝具が自らを砕いて発動させる魔力の解放、それは元の宝具としての威力を凌駕して余りある。

ましてやアーチャーは、更にそこへ焦熱地獄の熱量までも投入している。固有結界という炉心の中で散々に高められたエネルギー、その総てを注ぎ込まれた刀は、今やその威力のランクを数段先まで飛び越えさせた超級の爆弾だ。

地獄を注いだ器の名は、名刀『へしきりはせ圧切長谷部』。二本とない自らの愛刀を対価として、アーチャーは最期となる一手を切り出した。

器を融解させながら、凝縮された地獄の業火が解放される。

貫いた刃から放出される大紅蓮は、その身を内より容赦なく灼き尽くす。

幻想への誉れもなく、破壊力という兵器の理のみを追求した爆裂は、されど確かに超越種たる真祖の命にも届くという価値を有していた。

故に、今度こそ確実に。

ここに絶対者たる真祖の姫君は、一つの滅びを与えられていた。

確かに斃れる様を見届けていた。

慢心はない。それが許されるのは強者の側に在る者である。

己はそちら側ではない。かつて弱者でもあつた身はその道理を心得ている。

故に、成果をその手に実感するまでは、断固として緩めない。たとえ自分がもう動けない事を理解していても、外面だけは健在を保っている。

敵は起き上がらない。終わったのだと確信した。

極限まで張り詰めた緊張の糸、僅かな弛緩でも一線は容易く切れた。

もはや立ってられない。脚から力が抜けていく。酷使の果ての更なる酷使、アーチャーにはもはや並の人間ほどの力も残されていなかった。

緩んだ思考に入り込むのは、自らに向けた皮肉の念。

まったくよくもやり遂げたものだ、自分の行いが自分自身でも信じられない。

道理を捨てて、感情のままに無理を押し通るなど。生前には考えられなかった在り方だ。

時代が悪かった。一言で切つて捨てるなら、そうとしか表せない。

必要であつたから。あらゆる行いの根底には、そんな理由にもならない理由があつた。

市を賑わす歓声も、凄惨なる虐殺も、国を潤すという観点では等価なもの。

そこに感情の入り込む余地はない。結果として得る実利、成果という報酬で以て、革新の道理を世に推し進めた。

雄々しく意気を吐き出して、気概と共に駆け抜ける英雄譚など、最初の段階からあり得なかつた。

かつての『織田信長』の生涯では出来なかつた生き方。

その一つを、『アーチャー』となつた今生で成し遂げられた。そこに

感慨が無いかといえは嘘になる。

皮肉だと思いいながら、同時に痛快さも感じている。そんな己の滑稽さを、しかし悪いものだとも思えなかった。

倒れていく身体。支える余力は無い。

纏っていた業火の衣も霧散して、晒している少女の裸体。

異名とは裏腹のか細い身体。力を失ったその姿は、儂い乙女のものとし映らない。

サーヴァントとは、生前の全盛期の姿で喚ばれるもの。ならばアーチャーの少女の姿の意味とは、あるいは置き去りとしたものに残した未練であつたのかもしれない。

最も力に充実した時期を外して、あえてその姿形を取るのなら、意識でも無意識にでも当人の思いが反映されているのは道理のはずだ。

生き方が変わる分岐点。どちらが本心であつたかなど、もはや本人にさえ分からない。それでも残された思いがあるのなら、やはり行き着くのはそこなのだ。

……それは益体のない想像だ。

真実がどうであれ、ここにあるアーチャーの事実に変化はない。

貫いた生き方の果てに、英霊となつた今がある。そこに悔恨が無いのなら是非もない。

元よりそんな思考を続けていられるほどの余裕は無い。倒れていく我が身と共に、その意識もアーチャーは手放そうとして――

「――よくやった。美事であつたぞ、アーチャー」

だからそれは、ちよつと反則だった。

余力は無くし、意識さえも手放しかけたその間際。

身体も、心も、これ以上なく無防備であつた間隙を突いて、雄々しい声はアーチャーを受け止めていた。

少女の身体を支える、力強い男子の腕。

晒されていた柔肌を、己の外套でもって手厚く包み込む。

抱き上げるその様は凜然と揺るぎなく、余力を無くした身には全て

を委ねたいとさえ感じてしまう。

至近に迫った端正な顔立ちに、思わず己の中の“女”が疼いてしまったのも無理なかった。

「見届けたいよ。素晴らしい。どんな賛辞の言葉さえ足りないと思えるほどに。」

よくやってくれたと、これだけしか今は言えん。この“勝利”は、おまえが掴んだものだ」

力使い果たしたアーチャーを、その手に抱く甘粕正彦。

その雄姿は、まるで麗しき姫君を闇より救い出した勇者のそれのよう  
うで。

——このわしを、あたかも手弱女を扱うが如く……ッ!?

咄嗟に顔を手で覆っていた。

紅潮しているのを感じる。何が何だか分からない。

まるで未通女の狼狽えぶり。もはや自分自身の事が解せなくなっていた。

「変わらないものなど無い。時代も、道理も、そして人も、全ては移ろいゆく流れの内だろう。」

だが、たとえ変わりゆく中でも、磨かれてきた意志の輝きは、決して色褪せずにある。

なあ、アーチャー。そうしているおまえもまた、“織田お信長ま”という人間の一部分だろう。不要などと、あまり寂しい事を言ってくれるなよ。

人は、変われる。どのようになでも変われる可能性こそ、人にとって何よりの祝福だ。そしてそんな未来を掴み取ろうとする意志は、何であれ美しいのだ」

魔王という恐怖の象徴も、革新という合理性を重んじた王道も。

あるいは、選ばれなかった生き方さえも含んで、過去とはその人間の存在そのものだから。

そんな過去があるからこそ、覚悟には質量が宿る。ここまでを歩いてきた道の行程があったからこそ、今という時に辿り着いた強さはあるのだ。

その強さを愛している。

甘粕正彦の愛は、いつだって平常運転だ。

性質を問わず、重んじるのは意志という質量の絶対値。

生前の在り方に反した、英霊のらしくない姿にも、彼は輝きを見出している。

変わろうとしないのが惰性であり、変わろうとするのは挑戦なのだから。

焰の意志を信じていた。アーチャーの、様々な変節を経た過去の歩みが、彼女の意志の強さを証明してくれているのだと。

この勝利こそ、結論なれば。感情の灼熱を昂ぶらせて、甘粕は人間賛歌の祝詞を謳い上げた。

「こ、の、大うつけめ……ッ!?!」

そんないつも通りの莫迦者の姿に、思わずそう声上がる。

手の内に抱かれながら、無力のままでも出来る抗いなどそれくらいで。

その紅潮を隠しきれないままに、アーチャーは男の腕に抱かれ続けた。

そして、勝者にもたらされる希望があれば、敗者の絶望もまた必然であった。

過去があればこそ、人の意志は質量を獲得する。

その逆も然り、過去の存在は意志の奮起を妨げる足枷とも成り得てしまう。

誰しも過去からは逃れられない。その悟りがどれだけ素晴らしくとも、矛盾していた自らへの清算は必ずや果たさなければならぬから。

斃れ伏したまま動かない、白い姫君の姿。



絶対と信じた相手だ。神だと崇め奉った存在だ。

其こそ絶対、人の醜悪に穢れぬ真なる神性と定めたが故の信心である。その信仰を疑うことこそ不敬であり、勝利への信頼も動かなかった。

故に、陥没はそこにある。

その存在を神と扱い、恭しく従ってきたこと。

マスターとサーヴァント。在るべき関係さえ無視した両者の間柄。

本来の主従さえも逆転させてきたガトーは、結局最後まで”同位の視線”でもって相手と向き合う事をしなかった。

「結局、愚僧オレの祈りは独りのものであったから。これも我が不徳の致すところよな」

絶対者と信じる相手に、対等に語りかける者はいない。

敬いながらも、分かり合う事をしなかった。たとえ間違いに気付くとも、互いの間に空いた溝は埋まらない。

悟りを経ても、それは独りのみで成立する強さ。絆とは時間をかけて育まれるものであり、覚醒して一足飛びで得られるようなものでは断じてない。

勘違い、すれ違いと、積み上げてきた過去が今の輝きを封殺する。

決定的な隔たりは埋められる機会を得られず、敗北という結論をガトーへと下していた。

「であれば、受け入れるより他あるまい。これも臥藤門司の否定できぬ行の足跡なれば。御身に恥辱を与えた咎を、甘んじて受けるのみ」  
下された結論を、ガトーは取り乱す事なく受け入れた。

神という絶対の否定、逃れられない死、届かない祈りと絶望。どれも身から出た錆であると自戒した。

因果応報、自らの積み重ねた行いとが自らに返るものである。果てに訪れたのが敗北ならば、それが臥藤門司という迷道が行き着いた解答であると承知していた。

無念はある。恐怖もある。

けれど、今の際にあつてそれらを抑え込める程には、臥藤門司の心は強い。

迷走ではあったが、彼は高い徳を積んできた求道僧だ。盲信に曇らせている時ならばいざ知らず、阿羅漢と称されるにも足りる彼の精神は、死を前にも無様は晒さない。

「……されど、どうか神よ。今しばし、この愚僧オレに時間を頂きたい。衆生を導くに値しなかつた小生であるが、一つ、どうしてもやらねば済まぬ未練が出来てしまった」

故に、自らの結末を拒もうとするそれは、恐れからではない。

恐怖と呼ぶには、彼の面持ちは穏やか過ぎる。その様はまるで、入滅を待つ覚者のようだ。

それでもガトーは、このまま潔く消滅する事を良しとはしない。彼が果たすべきと信じる事柄のため、今一時の延命の手段を行使する。

ガトーの手の甲より、残っていた全ての令呪が喪失する。

令呪とはサーヴァントへの絶対命令権であると同時に、月の聖杯戦争に参戦するための権利そのもの。

これでガトーは、4回戦より先へ進む資格を完全に失った。もはや何をどう足掻こうとも、この場で消え失せる結末が確定する。

しかし、ここに至ればそれも瑣末な事だろう。どの道、勝負は既に決している。その結果を覆す事が出来ないのなら、権利など意味はない。

むしろその行動によって、ガトーの狙いが勝敗を覆す事ではないと証明された。己の死を目前にしながら、彼は生存以外の目的のために時間を欲している。

令呪の行使と引き換えに、ガトーが手にしたのは“猶予”だ。

敗者に与えられる末路、魂を焼き切る赤い隔壁が降りてくるまでの延命措置。

敗北を覆すわけではなく、ただムーンセルからの裁決が下る時間を引き伸ばすだけ。

一見すれば何の意味もない。徒らに消滅までの恐怖を味わう苦痛の時間。しかし引き伸ばされたその時間を、何かを遺すための機会とする事も可能だった。

己の中の聖杯戦争は決着した。

得られた敗北という結論、思うところは様々にあるが、引つ括めて善しと思える程度には、心は涅槃に近づけている。

しかし、それだけでは自身を納得させるのみの悟り。不肖ながら救世を志した身、最期まで自分の事しか救えないとあつては情けない事この上ない。

それが未練。唯一残った、どうしても解消されない心の膿。だからその解決のため、最期に一度だけ、純粹に誰かのためを思い導く僧としての行いがしたかった。

それをする相手は、目の前にいる。単なる成り行きからの都合ではなく、本心からこの相手にそうしたいと願っているから、決意は翻らない。

それは、サーヴァントを介する代理戦争では決して出来ない事。

直接交えてこそ伝えられる意義がある。残された生涯を懸けた最期の説法へと臨むため、ガトーはその脚を踏み出した。

これにて、月の聖杯戦争の4回戦は終結した。

星の触覚たる精霊種、真祖の姫君は革新の王を相手に敗北した。

必敗の相性差を覆し、人の執念が生み出す力を武器にして、奇跡のような勝利を掴んだのだ。

勝利者と敗北者、二つの結論は既に出た。

その結果をムーンセルは観測し、聖杯戦争はまた一つ先の段階へと駒を進める。

この場面で着目すべき事項は無い。全能の演算器はそう判断し、観測の眼は既に閉じている。

よって、予め告げておこう。これから先は余談である。

——大勢に何の波紋も投げかけない。

——死すべき者は死に、生きる者は生きて先へ向かう。

——魔王は聖杯を掴むだろう。その祈りは些かも変化しない。

——やがて、最弱のマスターが熾天の御座へと辿り着くその日  
で、試練の輪廻は廻り続ける。

終幕したはずの舞台に、今一度役者が上がる。

閉幕を惜しむ意志により、アンコールの舞台が廻り出す。

これより始まるは即興劇。用意された筋書きが何も無いため、過程も結末も役者たちで創りあげていくしかない。

聖杯戦争のマスターとして、サーヴァントを通してではなく、素の自分を曝け出して。益荒男たちは改めて、舞台の上で対峙した。

## 4 回戦：臥藤門司

聖杯戦争の決着とは、敗者の”死”という絶対の断絶である。

魂に重きを置く魔術師<sup>ウィザード</sup>にとって、肉体の死よりも恐ろしい電脳死。決着の後に下りてくる赤い隔壁によつて、敗者はその電脳を焼き切られる。

観測の権化たるムーンセルに慈悲はない。ただ作業の行程として、粛々と容赦なく執行される。

生存の望みはない。この月の戦場において、ムーンセルの決定とは神の意思に等しい。如何に優れた魔術師でも、一人の力では絶対に逃れられないよう出来ている。

死は、あらゆる生命が、やがて辿り着く結末。

それは最大の未知であり、故に最悪の絶望である。

避けられないと知りながら、本能はそれを遠ざけようとする。たとえ一分、一秒でも、限りある生の永続を図るのだ。

知恵を得た人類は、それ故に恐怖もまた思い知った。未知なる未来を思い描ける想像力が、やがて至る絶望の在り処に気付かせてしまった。

各地に描かれる死後世界の概念は、死の先に向けた人の祈りであり、結末への緩衝材だ。決して理解できないものを定義して、いつか訪れる恐怖を和らげる。

命と死は、背中合わせでありながら、永遠に顔を合わせる事のないものだから。未来とは不確かだ、一秒先には自分が滅びているかもしれないという”もしも”。そんな恐ろしい想像に至ってしまうば、人はきつと耐えられない。

”死を想え”<sup>メモント・モリ</sup>。

決して逃れられないものだからこそ、最期の刻までを懸命に生きるべし。

絶望より人を救うのは、その祈り。己の生には確かな意味があったのだと、その納得こそが魂を安息へと導くのだ。

「――ほう。そうくるか」

絶望に打ち勝つ勇氣、それを人に抱かせるのは意味の有無。

自分が何のためにここにいるのか、その問いに確固たる答えを出せた時、人は恐怖を超越する。

たとえ自らの終わりが見えていたとしても、答えを得た魂はその最期まで決して足掻きを止めないだろう。

「いい顔をしているな。そそられるよ。それは運命に屈した者の顔ではない。

だが、事実として我らの聖杯戦争は決着した。心苦しいが、それはもはや覆るまい。この期に及んで、おまえは何のために抗うのだ？

なあ、臥藤門司よ」

「無論、我が生の意義のために。迷える衆生を導かんとした僧として、そして何よりも”オレ”という私人として、果たすべき意義をここに見出した。

もはや再起は叶わず、結末は動かない。敗北の咎ならば甘んじて受け入れる所存であり、それは修羅の道を歩むと決めた時には自戒しておったこと。

閻魔の裁きを受ける心構えは出来ておる。が、これを果たさずに我が生涯を終えること、それは断じて許容できん。それでは死んでも死にきれんと言うものよ」

聖杯戦争に敗北したガトーに、訪れる終わりを回避する術はない。彼が行ったのはあくまで延命措置、猶予の時間を長引かせるだけであり、結末は変わらない。

恐怖はあるはずだ。自らの破滅を予感して、心は絶望を感じていることだろう。

だというのに、ガトーの様子に悲嘆は見られない。

面持ちは静謐に、真つ直ぐと対峙する相手を見つめている。

自らの運命を下した者である。互いの祈りを懸けて、凄絶な死闘を演じた敵対者だ。

それなのに、ガトーの眼に甘粕への敵意、憎しみは見られない。あるのはただ穏やかな、覚者の莊嚴と見紛うような、全てを悟り尽くした姿だけだ。

「こうなった今だからこそ、オレには自らの思いがはっきりと分かる。己が何をしたいのか、その正直なところがようやくようになって見えたのだ」

「ふむ。ならば今までの願いは偽りだったと？ おまえの信心に懸ける情熱には、確かなものを感じたのだが」

「そうではない。我が神への祈りには一片の嘘もない。後悔の思いなど今でも僅かとして抱いてはおらん。

だからこそなのだ。我が祈りが偽りなく本物なれば、それ以外を見ることを忘れていた。いや、触れてはならんと自らを戒めていた。己が志したのは修羅道である故に、やがて断ち切る絆など懊悩にしかならんとな。

おぬしのように、敵意さえ越えたところで友誼を描けておれば、こうはならなかったであろうがな。そこは我が未熟の為すところ、オレは未だ我執を捨てきれてはおらん。涅槃の境地には遠いものと自覚しておる」

仏教に曰く、生の苦しみとは即ち、執着を持つが故の苦しみである。何故、生きる事はこんなにも苦しいのか。その間に一人の救世者は、願いへの執着にあると解答を見出した。

執着を持つから、無くなる事を恐れるようになる。その恐怖が疑心となり、害意となって、この世界を生き辛くさせている要因となるのだと。

究極、その教義は生きる事を肯定していない。悟りの完成にして道の到達点とは、生の執着を捨てる事。生きたいと願いを持つから苦しくなるのなら、そもそも生きたいと願わなければよい。

言葉にすれば容易く、実践するのはあまりにも難しい。ともすれば、それは願いそのものの否定とも成り得てしまうから。その願いを尊いと思えばこそ、捨てる事は未練であり、真面目に励む者にとつては単なる諦めだとも取れてしまう。

「だが、こうして終わりを知る段となり、少しはその境地へと近づけたように思える。

信仰への執着、命への執着、どれも叶わぬものと分かっておれば、あ

とは開き直るだけであろう？

我が心、今こそ真の自由を得たり。素直に感じる思いのまま、為すべきところを為すとしようぞ」

生の執着を捨て、真に己の生の意味するところを知った時、本当の自由を得る。

その心は何物にも縛られていない。祈りの道を阻む敵対者ではなく、もつと素直にその人間のこと、その個人の有り様の何たるかを感じる事が出来る。

「――甘粕正彦。孤高なりし強者、揺るぎなき道の覚者よ。

おぬしは正しい。戦いの本義を語り、人としての執着より解脱した様は、悟りの仏心にも通じておる。

そのようなおぬしだからこそ、伝えたいと願う。駆け抜ける中途で取り零したであろう多くのこと、散り逝くこの身の猶予を以て、これより先も生者の道を歩むおぬしに、意義ある教えを授けてやりたいと思うのだ」

静謐さから切り替わり、宣誓と共に向けられる感情の名は、闘志。教授するという言と反し、剣呑さを宿していく様は矛盾しているようにも見えるだろう。

だが、ことこの男に限るのならば。

甘粕正彦。試練の祈り、殴り合いこそ真の語らいと道理を説く者。彼ならば、そんな矛盾をも歓待するだろう。無粋に問いかける真似などせず、まず激突することを善しとする。

ガトーが語る意味、生の執着を越えて得た覚悟、それがどのようなものかは甘粕にも分かっていない。それでも、その輝きの強さ是否が応でも伝わっていたから。

甘粕の掲げる絶対値主義。輝きと称するに値する意志の強さを伴えば、その性質の如何も問わない。これぞ光と認め、更なる輝きのために勇者はぶつかる事を望んでいる。

故に、甘粕正彦への教授ならば、この道こそが最適解。

前への一步を踏み出したガトーに対し、躊躇なく応じる甘粕。

交錯する視線。互いを正面に置いて、決して意識から外さない。



彼らは退かない。退く道理がない。あるのは激突を了承する強い決意。愚かであり無意味とさえ言えるこの行いの先にこそ、望んでいるものがあると確信している。

理屈を説くだけでは伝えられない事もある。道理より信念に生きる男たちのこと、その激突は百の言葉を語るよりも雄弁に、互いの意志を伝えるだろう。

気付けば、両者の間合いは既に至近。

きつかけとなる前兆はなく、それでも互いに仕掛けるのはほぼ同時に。

振り上げる拳に思いを乗せて、漢たちは激突を開始した。

「オオオオオオオオ」

「おおおおおお」

「!!!!!!」

吼える雄叫びが轟いて、奔る剛拳の衝撃が大気を鳴らす。

退くことを知らず、前へ前へと踏み込んで、殴る、殴る、殴る。

止むことなき拳の応酬。互いの信念を問うように、どれだけの苦痛にも断固として屈しない。あらゆる雑念を振り切って、馬鹿げた殴り合いを継続させていく。

本来、彼ら二人の身体はどうに限界に達している。

互いに奇跡を行使してまで貫いた激戦、それほどの死闘の後に残っているものなど何も無い。

魔術の行使など論外。精根まで尽き果てた満身創痍の心身は、即座に倒れることを選択しても何らおかしいことではない。

これ以上の無理を強ければ、それこそ破滅にも繋がるだろう。既に敗北が決しているガトーはともかく、まだ先のある甘粕にとっては無益どころか害悪ですらある。道理で考えれば付き合う必要などなく、速やかな休息こそが最良なのは間違いない。



食糧、縄張り、生存への欲求など、単なる本能の領域にはない理由で戦いを始められる動物は人間だけだ。

十人十色の意思を持つ人だからこそ、不可侵の一線となるものも千差万別。だからこそ普遍的に成り立つ道理というものが存在せず、侵犯した意思同士がぶつかり合うのだ。

人の闘争概念の原点にあるもの。それは個人でも、総体となって膨れ上がった国家でも同じ。たとえ尺度が違ってても、譲れない境界が犯されたという理由は等しくあるだろう。

ならば、逆説的に言えば、境界の先に物申すためには、人は争わなければならぬ。

そこに認め難い矜持があり、それが相手にとっての境界の内にあるものならば、異議を唱えるためには境界を犯す必要がある。

一線を越えて相手の心情に踏み込めば、当然反撃だつて受けるだろう。だが同時に、一線を越える覚悟も持たないまま、届く思いなど何もないのだ。

「俺の理想は受け入れられんか？ 人の身で試練を与えるなど傲慢か？ ああ、何だろうが確かな意志ある言葉ならば受け止めよう。

否定であれ、侮蔑であれ、まずはおまえの言葉を聞かせてくれ」  
殴るから、殴り返される。

その痛みが本物だから、人は真剣になれるのだ。

幾度となく語った道理、甘粕の掲げる試練の祈りも、真髄はそこにあるから。

そんな本気の思いこそ、何よりも愛する光。それを目にするためならば、甘粕正彦は何だつてするだろう。

「拳と言葉に思いを乗せて、見事にこの俺を砕いてみせろ！ 俺に人間賛歌を歌わせてくれえ!!」

よつて魔王を謳う男は、その矜持のままに拳を振るう。

越え難い試練、極大の災禍の存在こそ、人の勇気を輝かせる何よりの起爆剤。

人の勇気を愛するためなら、挑まれる魔王にもなってみせよう。その意気が込められた剛拳が、容赦のない破壊をもたらすべく放たれ

た。

「たわけえ!! そんなことはどうでもよいわ!!」

そのような愛に狂った喜悦に対し、断固譲らぬ信念を吐いてガトーは答える。

破滅的な魔王の拳を迎撃するのは、怖れを乗り越えた勇者の拳だ。受ける一撃の威力は途方もなく重い。

肉が潰れ、骨がひしゃげて、魂にまで響いてくるかのような衝撃だ。それでもガトーは退かない。痛みを呑み込めるのは、遂げなければならぬ思いがあるから。自らで定めた意味のため、どんな苦痛も耐え抜いて拳を振りかざす。

「勘違いするなよ。オレがこうしておるのは、おぬしの思想や人格を貶める意図があつてのものではない!」

理由にあるのは、敵意ではない。

認め難いから否定する。阻む邪魔者だから排除する。そうした敵対する何某かへと向ける反感情が、この闘争に根差したのではないと。

むしろ、その真逆。否定とは正反対の理由でもって、ここに拳を懸けているのだと気概の熱さが伝えている。

「正しいと、そう言ったであろう。ああ、確かに人が人を裁こうなど傲慢でしかあるまい。だがな、同時に決して否定できん真理であるのも間違いない。

人類とは、否、そもそも生命とは強いられねば動かないもの。環境が満ち足りておれば進歩、進化などそもそも必要としない。動植物は言うに及ばず、管理社会という安寧を手にした人類が、わざわざ自らを厳しい環境に追いやるわけもなし。たとえ遙かな先にあるのが緩やかな壊死だとしても、差し迫らねば否定を口にする者など稀少例に過ぎぬ。

正直に告白すれば、おぬしの祈りの何たるかを聞かされた時、内心ではオレも共感していたよ。各地を渡り歩く旅路の中、まざまざと見せられた人々の姿、箱庭の楽園にて無味無臭に腐っていく停滞の毒は何度も見てきた。

これが果てかど、人はこのように終わるのかと、結末にまで思い至れば試練の祈りも止むなしと言えようさ」

人々に、自分というものをしかと持つ勇気を手にしてほしい。甘粕の祈りの根底にあるのは、真実それだけの願いである。

試練という名の災禍をもたらす事は、確かに度し難い事だろう。ならばその思想は万人から理解されず、共感も得られないものかと言え、そういうわけではない。

決して狂人の道理ではないのだ。ある意味では単純明快な理屈ですらある。その祈りを肯定し、思想に共感する人種は決して珍しいものではない。

安定しすぎた日常にもどかしさを感じる者。もつと全身全霊の生を謳歌したいと願う者。管理社会という閉塞した安寧の中では、甘粕正彦の賛同者はむしろ増加する傾向にあるはずだ。

他ならぬガトーが、そんな思想の賛同者である。

惰性を嫌い、精進を良しとする気質。理屈の勝算など振り切つて、逆境を越えるものとして捉え、命を賭して道を邁進する求道僧。

次々と降り掛かる試練さえ、臥藤門司という男は真価を發揮しながら挑み続けるだろう。そうした性質を有している以上、内心での共感 は必然だった。

「これはまた。よもや同意を返してくれるとは思っていなかった。多くの者に反論を受けてきた祈りなものでね。諦めるつもりは毛頭ないが、頷いてもらえるとは珍しい。

だが、ならばおまえは何を語る？ 死に体の身を奮い立たせ、確たる闘志を拳に乗せて俺に挑み掛かるのは、一体どのような結論からだ？」

だから、賛同を示しながら向かってくる男へと、甘粕は一撃を見舞いながら尋ねた。

拳を振り上げる事は、つまるところ暴力だ。源泉にあるのが義憤であれ悪意であれ、そこには相手を屈服させようとする意図が伴われる。

信念を論じ合わせるのも、相手の思想に受け入れ難い部分があるか

らだ。初めから祈りに共感し、思想内容に同意を示すのなら、わざわざ鬪争の形を取る必要はない。

何を伝えようというのか、ガトーの意志の内容が見えてこない。その絶対値に疑いはないが、ならばこそその心中も知りたがるのは当然の流れだろう。

「……我が神のためではない。祈りの如何も今この時のみは捨て置こう。もはや敗北を喫したオレに、それを関知する資格はあるまい。

おまえだよ、甘粕正彦。オレが今こうしておるのは、純粹におまえを思つた一念故に。おまえという個人に根差した歪みをどうにも看過することができん」

「分からんな。それは否定とどう違う？ 看過できんのなら、つまりは否定し矯正したいという事ではないのか？」

「——違うとも。

別に、おまえを変えたいわけではない。正しいと認めたとし、思想には共感したと既に言った。

ただ、眼、がな。あくまでもオレ個人としてだが、おまえからの眼差しが気に入らんと云っている。その万人等しく向ける視線が、我慢ならんと言っているのだ。

ああ、分かり易く言い直そうか？ つまり、オレはな——」  
受けた拳の威力に揺れる身体を気力で支え、ガトーは拳を握り締めた。

肉に食い込むほどに握り込まれた力は、反骨の心が生み出すもの。睨むように見据えるのは、喜悦に染まった甘粕が向けてくる眼だ。

相手の意志の強さに期待し、輝きを放つ奮闘を熱望する。向けられるのが共感でも排撃でも、等しく愛してしまえる超越者の如き価値観。

誰に対しても同じ。己もまた期待される多勢の一人に過ぎないと、それを理解していたからこそ、心の炎を燃焼させてガトーは  
吼えるように言葉を告げた。

「——オレはあ、甘粕正彦と、本当の”友”となりたくてこうして

いるのだア!!」

言葉と共に、相手へと繰り出す鉄拳の一撃。

熱き一打を受け止めながら、変わらぬ甘粕は言葉を返す。

「友だど？ おかしな事を言う。改めてなるまでもない。俺はおまえを、心からの友だと思っっているぞ。」

曲げぬ信条をその意志に宿し、苦行を越えて自らの求道を邁進する益荒男よ。まさしく同胞だ。俺にとって、おまえは勇気の在り処を同じくする同志に他ならん。

そんな男が、果敢にも俺へと挑んでくる。これぞ”宿敵”と呼ぶのに申し分ない輝きだ！」

そして賛辞と共にくれてやるのは、受けた鉄拳をも上回る破格の一撃。

深々と抉り込まれ、心身を貫き通すその威力。それは体機能を根こそぎ破壊していくのみに留まらず、決意したはずの意志までも折りにかかる。

その拳のあまりの重さが、宿った意志の灼熱が、勇者の覚悟さえも圧倒してくる。こんなものには敵わないと、否応無しにその心へ認めさせるべく訴えるのだ。

残された気力同士の激突であっても、悲しいかな格差は現れている。

もはや認めるしかないだろう。魔術師としての素養、戦闘者としての技能、それらの要素を排した上でも、ガトーの強さは甘粕に劣るのだ。

断じてガトーが脆弱なのではない。彼は十分に強く、人間の最高峰と謳うのにも不足はない。ただ、甘粕正彦は人間の枠組みさえ逸脱しかねないほど、例外的に強すぎる。

超越者が如き振る舞いも、そういう意味では正当だ。彼という男は偽りなく破格の強者、凡夫と同じ視点で強さを測る事自体が間違いである。

魔王の器を持つ者が、遍く凡俗の者たちと対等に在れる道理はな

い。

人々の大半は、降り掛かる災禍に対し座して待つ事しか出来ない。そして降り掛かったその後で、苦痛と恐怖に押されながらようやく奮起の機会を得る。

言い換えるなら、それらは総じて受身の姿勢。災禍が無ければ人は動かず、安寧の約束は輝きを曇らせる。故に、そのような”弱者”<sup>ミンゲン</sup>たちを見捨てず、その魂を輝かせようという偽りない愛情でもって、甘粕は人々を等しく扱う事を旨とした。

「だから——それが、我慢ならん言っておるのだ大馬鹿者があああツ!!」

圧倒されかけた意気を跳ね返して、喝破と共に放つ気迫の一打。

甘粕がそういう態度を取り続ける限り、憤激は勢いを増していく。意地でも倒れまいと覚悟を新たに、拳による応酬を続行していく。

「こんな友誼の形しか知らんのだろう？ おぬしにとっては誰もが弱く、怠惰で、己の魂を腐らせてばかりだから。そんな中から脱却した者を勇氣ある者と称賛する。」

たとえそれが悪意と知り、己に向けられる憎悪であるとしても、等しくおまえにとつての愛すべき”強者”<sup>ととも</sup>と成り得る。

だが、気付かぬか？ 結局のところ、それは弱者を強者の枠組みに移しただけであると。個人の思想を理解し、その価値を正しく認めておるようで、その実ただの平行線を辿っておる。強さだけが基準ならば、貴賤の差などどうでもよいと」

己の思想に否と叫ぶ益荒男も、己を利用し奪い尽くしてやろうと憎悪する悪逆の徒も、甘粕正彦にとつては等しく輝きであり憧れであり友である。

弱者と強者を分つ境界線、それを絶対値が越えたから。その時点で甘粕にとつての愛する条件を満たし、思想に関係なく惜しみのない称賛を彼は告げる。

理解していながら、見ていない。思想の如何など何でもよい。好意を抱いた相手の考えを否定したくないと考えるのは、ごく当たり前の人間の心理だろう。



そんな、ある意味で無節操とも言える価値基準に至ったのも、甘粕自身の揺るぎない強者としての在り方に依るもの。生身の人間でありながら、人間を越えた超越者の如き価値観、それを不自然と感じさせない自然体の生き様こそ、彼の孤高の源泉だ。

義憤でも悪意でも構わない。求めるのは輝きに足り得る絶対値。

生まれながらの強者である男には、その強度がなければ繋がりさえ見えないから。

たとえ殴り掛かられようとも、そこに愛するに足る本気の意志が宿っているならば良し。その痛みだけが、孤独な強者に人々との繋がりを実感させてくれる。

「それは違う。違うのだ。どれも等しく同じであるなら、そもそも友誼に意味など無い！」

親愛に悪意で応える者、これは断じて友ではない！ 異なる思想より否定によって対立する者、これも断じて友ではない！ 絆を育んだ友と、対立の図式を敷いた敵とを同じとしてはならん。そこに在る事を許そうとせぬ間柄を、友と呼んだりはせぬのだ」

それは本来、語るまでもない当然の道理。

それを”友”と呼ぶのなら、そんなものは上位者故の驕り、傲慢から発するもの。

魔王がどれだけ自らの道理を語ろうと、敵対する側からすれば一蹴するだけの戯れ言。死に物狂いで足掻く弱者が、そんな強者の理論に付き合うはずもない。

双方向ではなく、一方通行で終わる感情だ。それを指してあるべき友情であるなどと、どう考えても言えはしないだろう。

「共に生きる時間を良しと出来る。その助けとなれる事を喜びと感じられる。たとえ認められぬところがあろうとも、そこで手放さない事を選べる者こそ、本当の”友”である！」

互いが互いの隣に在り、”ああ、ここには己の居場所があるのだな”と、そう安心できたその時に、そこには”友情”が生まれたのだと高らかに唄えよう！」

そう、そんなことは当たり前なのだ。

きつと誰だつて知っている。互いに対等な相手を持つ人ならば、その理屈を僅かさえも解さないほうがどうかしている。

そんな道理を、本当に心の底から分かつていない、見当違いな大馬鹿者を放つておけないと思うから、こうしてガトーは意志をぶつける。

「見たか、聞いたかこの真理を！ 数多の教えを学んできたオレであるが、これほどに意義ある説法にはなかなかお目にかかれまい！

そう、こんな当たり前を、ついぞ知らぬままに過ごしてきたのがオレたちよ。おまえも、オレも、どれだけ果敢に意気を燃やし、不可能などというイイワケを幾度打ち砕いてみせたとしても、”居場所”と呼べる在り処には巡り会う事が出来なかった。

こればかりは如何に勝利を手にしようともどうにもならん。その感情は一方のみではなく、双方向でこそ成り立つものであるが故に。己の意ばかり罷り通っても行き着けぬのは自明。ただ精進の正しさばかり追い求めていたオレたちでは、得られる道理なき光であろうよ！

甘粕正彦と臥藤門司。彼ら二人の生き方はよく似ている。

純真で、正しく、真つ直ぐすぎる漢の生き様。故にその厳しさは他人に理解されるものではなかった。

難儀な性を持つていたのはガトーも同じ。不純を、弱さをそのまま善しとは出来ない融通の利かなさ。行き過ぎた正道への希求は甘粕にもあるもので、だからこそ彼らの出会いはあり得なかった同志との邂逅でもあった。

「しかしだ、そのような有り様だったオレに、一つ意外と感じられる事があった。

あの予選を覚えておるか？ 偽りの記憶を与えられ、偽りの日常を甘受させ、関係の全ては欺瞞。そんな日々の意味などあるわけもなし、さつさと解脱して先へ進むのが常のオレにとつての当然であったはず。

だというのに、オレはそこに奇妙な居心地の良さを感じていた。怠惰でしか無いはずの時間が、何故だかひどく愉しかった。道の半ばに

過ぎぬ場所が、まるで己の居場所のように思えておった。

何故、よりにもよって実にならぬ虚構などに、地上でも縁のなかった居場所を見出したのか。自己問答の末、オレが出した結論とは――

その眼差しを、真つ直ぐと甘粕へと向けて、ガトーは答えを口にした。

「――そこにおまえがいたからだ、甘粕正彦よ」

同じ時間、同じ努力、意欲でもって為す事を己以外の誰かと共有する。

ガトーにとって、それは真実、初めての体験だ。故にその充実への驚きも、初となる実感だった。

隣には自分の理解者がいる。自分は決して独りではないのだと。誰かによつて自身を認められる事が、こんなにも心を満たすということとをガトーはようやく知ったのだ。

「お互いの真実を知らぬまま、知らぬからこそ馬鹿をやれた。来歴を思えば、筋などまるで通らん戯れ言で、だがそんな馬鹿をやる時間がどうしようもなく愉快だった。思わずこのまま、その時間の中に浸っていたいとさえ、オレは本心から思ってしまった。

その真実を覚つた時、ようやくオレにも理解できた。これが”居場所”なのだ。善か悪か、正か負か、貴か賤か、そんな基準を度外視して、心を安堵させる人との繋がり。己はここに居てもよいのだと、他者から保証される事の安心感。オレが求道の中で置き去りとしてしまったものを、おまえとの間に見つけたのだ」

孤高で在る事を良しと出来る強さと、孤独に何の痛痒も受けない無感とは違う。

たとえ耐えられる強さがあっても、孤独とは苦しいのだ。他の誰とも繋がらず、何の変化もないままに在り続けるには、人の心は豊か過ぎる。

誰しも居場所を求めている。己はここに居てもいい、こうして在る事を許されているのだと。そう自らを納得させ安心を得るための在り処。

上辺だけの付き合いでは価値はない。気後れをしているようなら意味はない。その在り方を理解して、本心より対等に接する事が出来てこそその”友”。そのような存在は、ただそこに居てくれるだけで救いとなる。

「のう、おまえにとつての居場所とは、孤高なる絶対の頂きにしか存在せんか？

おまえは強い。そして正しい。実に雄々しき生き方よ。魔王になると志しながら、その気質はどう見ても勇者のそれではないか。もしも世界が、悪鬼羅刹の跳梁跋扈する魔界であれば、甘粕正彦という男は人類にとつての珠玉の光として讃えられておったことだろう。

それでも、おまえはこの時代に生まれた。騒乱より安寧へ、人が神を、英雄を必要としなくなる変遷期の当事者として。あるいはおまえの祈りの通り、試練こそが運命なのやもしれん。だが、おまえとて同じ人間であるというのに、そこに友と成り得る相手が一人もいないなどと、あまりに寂しいではないか」

そして”友”だと思えばこそ、その役に立ちたいと願うのだ。

そのためにはまだ足りない。未だこれしきでは本気になりきれない男に、その羽目を外させよう。

それでこそその”友”の意義。友情とは双方向でこそ成り立つのだから、こちらだけの充足だけでは欠けているのは明らかだろう。

胸を張って堂々と”友”を名乗り上げるために。ガトーは闘志を燃やして己より強い男へと向かっていく。

「まったく難儀な事であるのも承知の上よ。なにせ、同じ穴の貉故な。不純を許さず、懦弱を認めず、何処まで行っても突き進む事しか出来ん大馬鹿者。こうして直にぶつかって見せねば、心からの納得など得られまい。

うむ！ つまりは理屈よりもフィール！ 頭で考えるのではなく身体と心で知るべし。そういう意味でなら、闘争を旨とするこの場所もオレたちには似合いであろう」

対峙しているのは鏡合わせの自分。

他人から無理だ駄目だと言われても、その信念を捨てられない。

諦める選択肢は始めから無いも同然、微塵と碎け散るその日まで前進を止めない破綻者たち。そんな度し難さを理解していても、自分で自分を止める術も持ち合わせない。

同じだから、敬意が沸く。

己の光を誇っているから、嫌悪など抱かない。

そして自身を通して見えるのは、相手が持つ光の強さ。

眩いばかりの輝きには、憧憬の思いさえ覚えていたから。

その思いが本心からであればこそ、こうして向き合おうとする思いも本物で、

「言葉ではなく拳で語ろう！ 己の信念を懸けて偽りなくぶつかり合えば、自ずと答えは見えてくるというもの。ここでこうしている理由など、所詮はそれだけの事に過ぎん！」

そして、それだけでもガトーにとつては十分過ぎる。

終わり逝く身で顕すのは、溢れんばかりの敬愛と克己の情熱。

要は、ガトーは甘粕のような人間が好きなのだ。その強さに敬意を抱いているからこそ、認められたいと思っている。

思想の是非よりも、ただ漢として。孤高として揺るぎなく君臨する勇者の道に、臥藤門司という漢の名を刻みつけよう。

決して強制された意志ではなく、何処までも本気の思いで。煮え滾って爆発しそうな念量を拳に握り込んで、ガトーは甘粕と向かい直した。

「ふ、ははははははははッ!! 相分かった！ 皆まで言うなよ、ここまで言われれば阿呆でも気付く。理解したとも、得心がいったさ。双方向で共存可能な道理でなくば友情足り得ず、独りの結論でどのように喜び寿いでも、玩具を愛でるようなものだったとな。

だが、ならば示して見せてもくれるだろうか？ 言われたように、人並の友誼などついぞ覚えのない身の上なのでね。教えると言ったな？ 教えてくれよ。何の遠慮も無しにぶつかり合って良い関係とやら、そんな得難い相手におまえがなつてくれるというのなら！

要は加減をするなどというのだろう。ああ、承知した。するなと言うなら、そんな真似は誓って二度とせん。だからどうか壊れてくれるな

よ？ わざわざ俺に自重するなとまで言ったのだ。ここまで期待させておいて出来ませんでしたなどと、絶対に許さんと心得ろオツ!!」言霊を吠える度、まるで一つ一つ枷が外れていくように、その存在の圧力が増していく。

ガトーが見せた克己と信条、その輝きの絶対値が、猛り狂う歓喜と共に甘粕の強さを覚醒させた。

甘粕正彦という男には、ある種の優れた検眼がある。

与える試練を調整するべく発揮される、相手の力量を見極める眼力。

稀に興が過ぎて、自らその限界点ポーターラインを踏み越えてしまう事もあるが、基本的には突破不可能な無理強いをしない男である。

しかし忘れてはならないが、甘粕は元来まともな人間なのである。生まれから特異な力を持ち合わせていたわけではない。能力があるのなら、そこまでに至った理由が必ずや存在する。

恐らくその理由とは、これまでに彼がしてきた生き方そのものだろう。

絶対者が如き気質を持ちながら、あくまで人間としての生を歩んできたのが甘粕。

己の異端さを自覚しながら、時には自ら力を抑えてまで、俯瞰する観察者のような立場に身を置いてきた。

その時分で培われたのが人を見極める検眼ならば、同時に課されたのは他人に対するスタンスだ。無理強いはず、限界点を見定めて力を調整する。それは言い換えるなら、自分自身は相手に対し本領を発揮しないという事でもある。

甘粕は自分から本気を出さない。そうするとしたら、それは相応しい相手が目の前に現れた時だけ。常に全力で事に当たってはいても、そこに本気の情熱は無い。

甘粕正彦の本気に見合う事柄が、これまでの彼の人生には存在しなかった。

常にブレーキを掛けながらの生き方だったから、それが常態として定着している。

要約するならそういう事で、甘粕という人間の在り方の理由である。彼もまた過去ルーツを持った人間として、積み重ねた時間に縛られている部分を持っている。

裁定者の如き有り様も、言ってしまうえば彼なりの処世術。馴染みきれない弱者ミソゲンたちの中でどうにかやっていくための、自然と備わっていた姿勢だった。

それを、遠慮するなど言われた。

何を憚ることなく、強者おのれのように扱っていいと言われたのだ。

こんなにも嬉しい事はない。元より性分では無かったのだ。本当なら常に全力で、限界の一つや二つなど踏破してやりやかった。

正しくこちらの本懐を察した上での言葉、受諾を躊躇う理由は何処にもない。望み通りに”本気”で向き合う。それでこそ”対等”というものだろう。

意識の底にあった”手心”は砕かれて、それは止める術を喪失させた意志力の大炎上。

燃えるような歓喜と期待に包まれながら、甘粕正彦は繰り出す拳を加速させていった。

そして、曝される事になる過剰暴力の密度に、ガトーはその内心で辟易していた。

向けられる拳打の鋭さ、それは不意を突き、意識を揺さぶり、一撃毎に致死にも達するダメージを与えてくる。

明らかな殺しの拳だ。これだけの好感、尊敬、憧憬さえ示しながら、やってくる事は殺意に満ちている。

そうするのは無論、相手の事を信じているから。手抜き無用、対等にと約束したから、故にこそ何の躊躇もなく殺しに掛かる。

先程までも決して手を抜いていたわけではない。ないが、それは定

めた限界点に則した上でのこと。臥藤門司が可能とするであろう試練の難度、そのギリギリのラインを保っていた。

それが外れた今、その威力は明らかにガトーが対応出来るラインを越えている。もはや応酬という体も維持できず、意地でどうにか食い下がっているのがやつとという有様だ。

元々の消耗度で言えば、甘粕の方が深刻だったのだ。

魔力は尽き果て、いつ倒れてもおかしくはない。そんな極限状態であつたのは確かはず。

それが、気合一つを入れ直ただけで、ご覧の通りだ。奇跡と呼ぶことさえ躊躇うような出鱈目ぶり。同じ方向性を持つガトーでも、その絶対値では明らかかな開きがあつた。

単に強いというだけではない。その様には異常という言葉こそ相応しい。

雄々しき勇姿は感嘆を思わせるが、直接相對するはめになった者からすれば、あらゆる道理を「都合主義に捻じ曲げる禍々しさにも感じるだろう。

勇気を奮い立たせて起き上がる？ 諦めない心でもって限界を突破する？ 確かにそれは輝かしい奇跡だが、現実にはまず現れない空想だ。そんなものを素で容易く実践してみせる姿には、まるでフィクションの登場人物のような不条理さがある。

ああ、これでは確かに、まともな友情など望めまい。

友とは、何よりもまず対等である事が前提だから。どれだけ意志があろうとも、力量で明確に格付けをされてしまう者としては、その関係は務まらない。

このような理不尽な存在と張り合おうと思うなら、それこそ狂った執念の一つでも抱かなければ始まらない。その絶対値で以て対峙するしかないだろう。

繋がりを試練に見出すのも致し方ない。弱さに罪がないように、強さにも罪はない。そのような強者として生まれてしまった甘粕に、事の是非など問えはしないだろう。

「ふはははは、ハハハハハハハハハ、アツハハハハハハハハハアツ!!!



良いものだな、これは！ 単純明快、まさしく王道、覚えがなかった我が身が恨めしいよ。

武器も魔術も、要らん要らん無粋極まる！ 男の本懐に、そんなものが要るものかよ！

愉しかろう？ なあ、臥藤門司よ。互いの信念と意地を懸けて、全身全霊で拳を振るう事のなんと心踊ることだろうか！」

そして、生来からの強者である男は、故に弱者の道理など弁えず愉しげに言つてのける。

それに応えるだけの余裕はない。なにせ、気を抜いたならすぐに倒れて動けなくなってしまう。

無理を覆す所業とは、つまりそういう事なのだ。無理とは出来ないからこそ無理であり、それを強引に突破すれば、代償として器そのものが削れ落ちていく。そうして削った器とは、基本として二度と元には戻らない。

断じて、意志という燃料を糧に、無限に等しく出力を取り出せる機関などではないのだ。たとえ人の想いが無限でも、それを生み出す心は酷使によつて磨り減る有限のもの。

それが人としての在るべき道理。光と成れない者たちの不文律。

多分、光と成れる者というのは、誕生から運命として決まっている。後天的な意志次第だといつても、努力にだって向き不向きはあるのだから。

出来る者には出来て、出来ない者はどうやっても輝きには届かない。運命は覆せず、宿命には抗えず、定命には従うしかない。残念ながら、それが現実というものだろう。

無理は報われないし、奇跡なんて掴めない。

それが当たり前の人間というものだから、誰だってそんな事はしたくない。

意地で無理矢理に繋ぎ止めても、既に限界は見えているのだ。ならばここが限度だと認め、業腹でもそれが現実だと諦めるより他にはなく――

「――ドウゴリアアアアアアアアアアツ!!!」

そんな折れかけた闘志を、氣迫を吐き出し再び意地によって繋ぎ止める。

理性を塗り潰す獣性。上げる声は猛獣の咆哮のよう。諦めを認める小賢しさなどここに捨て去った。

たとえ己という器が削れ、果てに崩れ落ちるとしても構わずに。二度とは戻らないものを惜しげもなく捨てながら、臥藤門司は無謀なる挑戦を続行する。

忘れるなかれ、悔るなかれ、臥藤門司とて常人を逸脱した異常者の類い。

彼もまた光の属性を持った規格外。数理の化身たるムーンセルをして、その価値ありと認定されたスーパー求道僧である。

比較対象を変えれば、ガトーだって十分にまともじゃない。妥協を知らない純真な信念は、幾度も奇跡を実現してきた。

思うに、臥藤門司という人間は、ひたすらに間が悪かったのだろう。恐らく誰も、彼の救世なんて欲しくない。徳の尊さ、思いの熱さは紛れもなく本物でも、それが衆生に伝わることはなく、彼はいつだって空回り。

ガトーが間違っていたのではない。人々が間違っていたのでもない。どちらにも正当はあり、道理があった。ただそれが、肝心な所で噛み合っていなかっただけ。

もう少し妥協が出来れば、強ばった肩の力を抜けていれば、と。そう憐れむのは筋違いだ。何故なら、そんな筋金入りの頑なさこそが、臥藤門司の強さを形造った要因なのだから。

否定を一つ論破する度、逆境を一つ踏破する度、ガトーは強さを得た。勝算の有無など言い訳だと言い捨てて、不可能にも立ち向かっていく不撓不屈。結果、孤高も更に深まったが、それを理由に脚を止められるなら、そもそも走り出してもいかなかった。

やはり、その気質は甘粕正彦と同類のもの。

挑まずにはいられないのだ。善しと出来るもののために、損得など抜きにして。

諦めを懐いても、魂がそれを許してくれない。頭で考えただけの理

屈に納得できるのなら、彼らのような大馬鹿者など出来上がってはいない。

「——ああ、嬉しいともさあッ!!」

だから、苦痛を感じながらそれ以上に、堪らない充実を感じているのだ。

嬉しい。そう、嬉しいのだ。

甘粕がそうであるように、ガトーもまた愉しんでいる。

苦痛はある。恐怖はある。目の当たりにする強さの壁に、心は絶望を覚えている。

だが、そのような逆境を認識する度、その魂を昂ぶらせて奮い立つのが臥藤門司という漢なのだ。

越え難い難事であればこそ、それに挑む。

現れる試練こそ己を高める価値。逆境とは乗り越えるためにある。この頂きを前に、命の炎をぶつけなくてなんとする。

挑まない、なんて選択肢は無い。今この瞬間にこそ、本懐の時。元より臥藤門司とは、己が満足できる道を突き進むしか出来ないモノなのだから。

賢しく語ってみせても、本音を明かせばこんなものだ。

単純明快、当たり前前すぎてまるで子供のよう。要は、自分もこういうノリが好きだから。

こんな風に誰かとぶつかり合った事がない。こんなにも熱い思いを交わした経験はついぞ無かった。

そんな相手はいなかった。自分のノリに付いて来れる者など、一人として覚えがない。

どんなに気概を燃やしても、独りきりでは不完全燃焼。思いをぶつけられる相手の存在があつてこそ、燃やす魂の意義がある。

きつと、最初からこうしたかったのだ。

互いが出逢ったその瞬間から、こうして魂の友誼をぶつけ合わせたかった。

邪魔をしたのは、立場と都合。何せ、大が付くほど真面目な性分だから、願いの権利を賭けて戦う敵という図式から抜け出せなかった。だって、それは不実であり不純だろう。聖杯戦争のマスターとしての臥藤門司は、彼の神の敬虔で絶対の信奉者なのだから。

それ以外の理由で戦うなど不忠極まる。とにかく妥協も不純も許せない男のこと、少しでも信条に反する真似が出来るわけもない。だから、それが出来るのが今なのだろう。

聖杯戦争に敗北し、マスターとしての立場も都合も喪失した今だからこそ。

この間際だけ、素のままの臥藤門司として。心が懐いた正直な気持ちに従おう。

あと少し、今少しの猶予の間、命の灯が尽きるまで。その時が来るまで力の限りに挑んでみせようという決意しか沸いてこない。

なあ、甘粕オマエには覚えがあるのか？ この充実と昂りを。

無いはずだ。少なくとも、オレにはない。これまでの如何なる険しき難事にも、このような迸る思いはついで覚えがない。

ましてや、揺らぎなき純正の強者である甘粕オマエのこと、オレ以上に遠いところにいるのであろう。

ああ、不憫だな。なんと寂しいことか。試練を訴える甘粕オマエの言葉が、まるで絆を欲しがる童のようにも聞こえるよ。

全力でぶつかり合える相手がいない。声高に勇気の価値を謳い、その輝きを讃えるのは、裏ではその実在を信じきれないからではないのか？

だって、この世の人々というものは、基本として弱いものだから。すぐに意志を違え、自らの生に妥協を許す。自分たちはこんなものだと言ってしまう。

こちらの密度と比較すれば、信じがたい惰性だろう。歯痒さを感じたのは一度や二度では足りないはずだ。

その上で、異端なのはそちらだと言われ、歩調を合わせる事など納得できるはずがない。進歩を目指す事は正しく、努力する事は尊いはずだというのに、何故自ら墮落に向かうような真似をせねばならな

い。

たとえ敵意、悪意の中にでも、自分の意志力に匹敵する強さを褒め讃えずにはいられない。そんな甘粕オマエの気持ちだが、臥藤門司オレにはよく分かる。

やはり、我らは似た者同士だ。

我々は同じ穴の貉。穴の深さに違いはあっても、どちらも怠惰まともには生きられない。

きつと他の者には理解できないだろう。このどうしようもない思いの熱が分かるのは、同類の馬鹿者だけだ。

故に、この闘争だけは”オレたち”だけの独壇場。

割り込める者がいない武闘にして舞踏。月詠の御元にて披露する舞神楽なり。

これまでになく鮮烈に、これ以上ないほど濃密に、この命を刹那の内で輝かせよう。

この充実こそが生の実感。誰よりも何よりも、この瞬間を生きるために。

「ふははははははははははああああ——！！！！」

豪快な哄笑と共に、あらん限りの力でもって叩き落とされる甘粕の剛拳。

余力の有無など彼方に置き去り、繰り出される一撃は過去最強。魔道の恩恵など受けずとも、その拳は岩をも砕くだろう。

並べる理屈に意味はない。際限なき意志の魔人に、理論の道理が何になろう。ただ溢れ出る勇氣と覚悟に従って、あらゆる条理を踏破していくのみ。

生来の、純正の絶対強者たる甘粕正彦ならばこそその業。異能でも何でも無い、そんな馬鹿げた根性論は、当たり前だが他人に真似られるものではない。その破格ぶりを発揮し始めた甘粕に、同じ人の身で對抗する術などあるわけもなく、

「う、ぬうむ、うおおおおおおおおお——！！！！」

そのような条理に否と唱えるのは、やはり破格の信心を掲げる求道僧。

不条理を為しているわけではない。無茶の度に磨り減らした器は戻らず、崩壊は既に秒読み段階。

迷いという名の不純を含んだ強者では、絶対の強者には敵わない。その意志力は奇跡を起こせても、現実を凌駕する熱量には届かない。されど、ガトーとて奇跡に手を届かせる漢。常人では果たし得ない強さは紛れもなく本物だ。故に、折れぬ信条がある限り何度だって立ち向かう。

意志を燃やす事にも限界はあると言った。

器の中身が底を尽けば、意志の如何など関係なく崩れ落ちると。

それは残酷なまでに正しい。しかし尽きた底から残滓をかき集め、たった一度の再起の原動力に変えるのも、やはり意志が成し遂げる御業なのだ。

僅かに残ったものを繋ぎ合わせ、燃え尽きた肉体を再び燃え上がらせて繰り出した渾身の一撃。男が全てを懸けて放つ拳が軽いものであるはずもない。

踏み出す二人の男。同時に繰り出される両者の拳。

順当に考えれば、結果は見えている。勝利とは、常に強者の手にもたらされる。

単純な強さで問うなら、甘粕正彦こそ真の強者。人の枠を越える魔王の強さは、人の範疇にある力では上回る事が叶わない。

されど、人の意志が生む力とは、時に理屈の計算を上回る。あるべき勝算を振り切って、順当な顛末をいとも容易く覆すのだ。

決して諦めない限り、人の思いは願いに届くのだと、彼らは互いに信じているのだから。

「――ぐ、が、はあ……!?!」

甘粕の拳は、ガトーを捉えなかった。

何者をも砕かん勢いで振り抜かれた剛拳。その破壊力は発揮の機を得る事なく終わる。

拳に残るのは空を透り抜けた手応えのみ。込めた思いの丈が強ければこそ、外れるはずのない一撃が外れた事は衝撃をもたらした。

退く考えなど微塵もなく、前へ前へと振り切った上での空振り。攻

撃一点に傾けていた意識は、必然、防御へ向ける意識に無防備な空白を生み出した。

図らずも、その形を成したクロスカウンター。

意識の間隙を突き、覚悟を素通りして炸裂したその威力は、実に痛烈で申し分なく。

信念という名の綱さえ鋭い一撃で断ち切って、甘粕はゆっくりとその場に崩れ落ちた。

「……甘粕正彦よ。どうであつた？」

倒れ伏した男へ、堂と佇む男が言葉をかける。

最後に地より頭を高く置いた者こそが勝者。この構図だけを見れば、勝敗の行方がどちらであるのか一目瞭然とさえ言える。

「……ああ。実に晴々とした気分だよ。これほどの拳は初めて受けた。こうして背中から倒れる経験というのも、何とも言えぬ小気味よさを感じている」

前のめりでなく、背を地に投げ出し大の字に。

相手に晒すものとして、恐らくこれ以上はない敗北を宣言する姿勢。

事実、甘粕は動かない。晴れやかといった面持ちのまま、その声には納得さえ含ませていた。

「何を言っても陳腐になりそうだ。理想もなく、大義もない。ただ意地で以て殴り合う。それがこんなにも雄弁なものだと初めて知った。

胸に刻んだよ、臥藤門司。その名前を俺は忘れん。たとえこの先に何があるとしても、今という時の充実を忘れるものか」

「そうか。ならば一先ず、甲斐はあつたな」

だが、構図とは真逆に、両者の勝敗は既に決まっている。

黒い闇に塗り潰されて、消失していくガトーの電脳体。

意外なことは何も無い。聖杯戦争に敗北した時点で、この結末はと

うに決していた。

最期の交錯時、甘粕の拳を突き通した奇跡。

その真相とは、何てことはない。拳が突き刺さった箇所には、ガトーの肉体は無かつただけだ。

既に崩れているものを砕ける道理はない。死に逝く身体であるが故に、一矢を報いた。その事実だけを成果として、始まった崩壊は終わりへと向かっていく。

聖杯戦争のルールに則り、臥藤門司はここで死ぬ。

所詮は無意味な殴り合い。結果が影響を与える事はなく、敗者には消滅の運命だけがもたらされるのだ。

「どうだ、モンジよ。これでおまえは果たすべきを果たしたと胸を張って言えるのか？」

「さて、どうであろうな？　したとも、しておらんとも言える。なにせ人の未練とは次々と沸いて出てくるものであるが故に。

すつぱり入滅とはなかなかいかん。これでも業の深い身よ。至らぬ身を振り返れば、やはり無念はあるのだろうかよ」

語る内容とは裏腹に、ガトーに未練を残した様子は見られない。

むしろその様は軽やかでさえある。しがらみを振り払い、一つの事を達成したガトーの心は、これまでのどんな時よりも自由だった。

「さもありません、それが人というもの。人の生涯とは、無意味と有意味のせめぎ合いだ。

無念とは別のところに喜びもある。人生の間際、ずっと取り零してばかりだったものを満たす事が出来た。それは喜びと共に受け取るべきであろうよ。

だから、正彦よ。飢えているからと、際限なく求め続けるのは餓鬼の所業よ。ひとまずは、これでよいのだ」

人によれば、この顛末は無意味だと捉えるだろう。

徒勞にしかならない殴打の応酬。徒らに互いを傷つけ、死出に向かうまでの時間を浪費した。

何も変わるものが無いのなら、そんなものは無意味である。その価値観もまた事実であり、道理に沿った見方の一つであった。



有意味と無意味。人の行いに、この境を見出す事は難しい。何故なら、生の意味とはそもそも人が想像する概念だから。人以外の生命は、自らの活動に意味など求めない。

結局のところ、人に意味を与えられるのは人自身。自らの行いを有意義だと捉える事が出来たのなら、意味なんてその時点で与えられているようなものだろう。

たとえ、それで何が変わるわけではないとしても。

ガトーは消える。甘粕はその信念を違えない。満たされたのは互いの心のみ。

だがそれでいいのだろう。肯定も否定もなく、ただ通じ合うものが確かにあった。たったそれだけの事でも、ここに在る男たちには十分に意味があるものなのだ。

だから、これでいい。

甘粕正彦と臥藤門司。敵同士ではなく”友”として遺すもの。

二人の間にある決着は、この満足感だけで十分だった。

「ああ、しかし、やはり未練よなあ……」

それでも、人の未練とは湧いて溢れ出でるものだから。

身体を覆っていく黒い闇。自身の喪失をより真に感じ取るにあたり、覚者のように自由であった心にも迷いが滲み出てくる。

「女神よ。ついに貴女は、愚僧オレに応えてはくださらなかったか」

最期に思うのは、ガトーにとって無二である願いのこと。

彼がその身命を捧げてでも果たすと誓った、原初の女への未練だった。

純心に想い続けた願いに偽りは無い。魂を懸けた思いは何処までも本物だ。

だが、それでも結局は通じ合わせる事なかった者同士、その関係は何も遺さず消滅する。

情熱があつたからこそ、取り零していた事実には悔いしかなない。叶うならばやり直したいと望むのは、人ならば当然の心の動きだった。

「無念だ。叶うならば愚僧オレの手で、貴女を救いたかったのだが……」

漏れた言葉は、届かぬ願い。

叶わないと知っている。それでも口にしてしまうのは、やはり弱さなのだろう。

最期に零れた弱音、それも詮無き事と諦めるより他にない。その無念を抱え込みつつ、何とか無様を晒すまいとガトーはその眼を閉じて――

「へえ？ それってどういう意味？ 消える前に教えてくれない、マスターさん？」

全てを手放そうとしていた意識を、愛嬌のある女の声が繋ぎ止めていた。

「お、おおおお……ッ!？」

それは求め続けてきた望みだった。

それは手に入らなかった無念だった。

虚飾のない原始の神性。奉じるべき唯一無二なる至高のカタチ。

狂戦士バーサーカーのクラスによって、その理性を封じられていた女。それが確かな理性の光を宿して、ガトーの事を見返していた。

「これは奇跡か？ 女神の思し召しが、黄泉比良坂をも越えて愚僧オレに応えてくださったのか……？」

「違うわよ。奇跡や神なんてふわふわしたものじゃないわ。空回りな思い込みもそれくらいにおきなさい。

ちやんと一回は殺されたから、こうして甦よみがえってきただけ。その時に一度きれいに初期化して、余計なものを取り払ってきたってわけ」

アーチャーの一撃で、彼女は確かに”殺された”。

しかし、殺されはしても、それで終わりではない。星の触覚たる真祖は、たかが一度の死では殺しきれない。

たとえ死神の眼によってその死を断たれようとも、大元たる星の恩恵を受ける生命は蘇生を果たす。不死殺しのような概念を持たない純粋熱量では、その器を破壊できても修復の妨げとなる事はない。

ムーンセルは彼女の死を観測し、その敗北を決定した。だが同時に、地球側の端末である彼女を支配する権限は、ムーンセルも有してはいないのだ。

「けど、そういう思い込みの力っていうのも馬鹿に出来ないものねー。

本気で私のことを神様扱いとか、ホント誰得って感じだけど。

でも実際、それで抑え込まれてた身からすると、割と凄いなーって感心させられるっていうか。うん、やっぱりアナタって見た事がない人間タイプで面白いわね」

自由奔放にして天真爛漫、明るく無邪気な様子は猫を思わせる。

狂戦士であった頃からは考えもつかない陽気さは、彼女が持つ本質である。

その性質とはファニー・ヴァンプ。血を啜る吸血種の原因でありながら、その有り様を善しとしないちぐはぐさ。愛らしくも残酷な、天然の毒婦。

「ねえ、せっかくだから聞かせてよ。純真なマイ・マスター？ アナタっていう人間から見て、私の救いつてどんなものだったの？ 出来れば消滅する前に聞かせてちょうだい」

女の人格は陽の性質だったが、その存在は人間ではない。

死を迎えようとする自らのマスターに、いつそ酷薄なまでに無邪気な声を投げかける。そこに邪悪な嘲りは無かったが、嘆きや執着ともまた無縁だった。

星という巨大な総体を持つ身にとって、人間とは短い定命を生きる種の群れだ。その本質の部分で、彼女は決して人と共感できない。

質問の意図も、純粹な疑問への興味だろう。

それほど強く答えを欲しているわけでもない。無いなら無いで構わないと言うだろう。

彼女にとって人と過ごす時間は、夢幻に溶ける泡沫のような戯れだ。その個体の機能が停止する瞬間まで、彼女という余分しんかくが見る座興である。

臥藤門司という人間と過ごすのも、そんな戯れの一時だ。だから彼女は無邪気に笑う。喪失する生命に頓着せず、不思議な人の生き様を笑うのだ。

「おお、承知致しましたぞ、原始の君よ。このモンジ、違わず御身の従僕なれば。この卑小なる身が抱きし不遜、疑念と思われるなら開帳いたそう」

そんな女の姿に、ガトーもまた笑う。

それでいい、いや、それでこそだと、陽気な人外としての有り様を良しと見る。

この相手は、臥藤門司という人間に情も執着も持っていない。それを理解しながら、氣に病む様子は微塵もなかった。

「御身の威光を目の当たりとし、そこに救済を見た事に嘘はない。人の虚飾に囚われず、その都合に動かされる事のない純正。これぞ新たな教義の御柱に相応しいと」

「自然崇拜の偶像つてこと？ 確かにそのチヨイスならあながち間違っていないけど、でも正直、人の信仰なんて受け取っても仕方ないっていうか。神代の頃だったらともかく、今の物理法則に置き換わった世界で、祈りの力なんてたかが知れちゃっているし」

「まさしく仰る通り！ もはや地上の衆生に神を敬う信心はなく、神秘と畏敬は過ぎたものとなった。捧げられる祈りは祈りでしかなく、元より人から遠く逸脱せし御身には、毒にも薬にもならぬ代物であることでありましょう。」

それは事実であり、また真理でもある事だ。愚僧オレが何を思ったところで、所詮は己だけの独善、一個の私欲に根差した道理に過ぎぬ。どちらにも無用とされて、尚も押し通さんとした我が願いは浅ましく、中道より遠いものであるだろう。

そう、要は愚僧オレが納得いかぬだけなのだ。今の世の有り様も、孤高にして孤独に在る御身の姿にも、我慢がならなかったのはこのオレ自身の意志である」

今の世界が間違いだとしたのは、ガトー自身の意志だ。彼女を神とすべしと考えたのも、ガトー自身の意志だ。

信仰の生き方を忘れ、管理という秩序に生命を委ねようとする人々を正すため、最も相応しい存在を崇拜の対象に据え置く。確かに道理もある。また同時に、普遍的なものとしてある思想ともまた異なる。どれも根底にあるのは自身の価値基準。臥藤門司という人間のエゴに端を発する願いである。

「それも致し方なきこと。何処までも個の意志を希求し、それを全へ

と拈げるのが人の道なれば。初めから求める理解を得られずとも、それで歩みを止めるのは諦めに過ぎん。

故に、身勝手を承知しながら、あえて己の道理で愚僧は救済を叫ぼう。人に近いカタチを持つ御身が、独りで在り続ける事が寂しいものと思えてならぬのだ！」

「……どうして？ このカタチはヒトの似姿だけど、それでも私はヒトとは違うものよ。それが独りでいる事は当然なんじゃないの？」

「確かにそのままに在る方が御身は純粹なのやもしれぬ。だがそのために関わらぬままに在る事が正しいと、そんな結論には頷けん。

十人十色、数多持つ人の心の多様性、そんなカタチを持ち合わせながら、無機なるままに在る事こそ不自然というもの。

——少なくとも愚僧には、御身が幸福なようには見えなかった」  
突き詰めて考えれば、祈りの根底にはその思いがある。

信仰の意義も、救済への信念も、一瞬で忘れ去ってしまうほどの邂逅の衝撃。

ただ教義の御柱としてだけではない。まず何よりも最初に、臥藤門司は彼女という存在の美しさに魅入られた。

「果てにあるのが抱擁であれ拒絶であれ、まずは触れねばその意思さえ決められませんまい。たとえ結果として怒りを買おうとも、その時は甘んじて御身にこの身命を捧げるまで。

幸福を知ってほしい。そんな己の独善で以て、愚僧は御身を連れ出した。どうか世界に、ヒトの心に触れてほしい。そこには御身に幸せを与えるものがきつとある。

ヒトより高みにある御身が、ヒトと接するには相応の階位がいる。上位者を受け入れる人の価値観とは、即ち神への畏敬に他あるまいと」

「それで神サマ扱いってわけ？ よく分からないけど、要するに理解できるカタチに嵌め込もうって事でしょう？ それって、何だか無理やり籠の中に落とし込むみたいだけど、どうなの？」

「はは、いやまったく、御身よりそう指摘されれば返す言葉がない。何せ、愚僧の価値観ではそれ以上の至高を定義する概念を持たなかった

故、その矛盾に思い至る事が出来なかつた。

やはりこれはオレの我儘なのだ。かつてあれほど教義の価値のみを追い求めていた愚僧が、その純正を捨ててまで求めた望みだ。

ああ、やはり間違つてはいない。純粹さばかりであつた頃よりも、この心は豊かなものを手にしている」

純粹なものは強く、美しい。

それは確かとしてある価値観で、一つの事実。

不純に囚われたものとは、ありきたりだ。雑多なものには誰でもなれて、故に強さも相応にしかならない。

純正とは孤高、独り屹然と在る姿。それは貴く、普遍とは正反する在り方だ。そのような稀少な存在に、そうでない人々は価値を見出し憧れを抱くのだ。

しかし、勘違いしてはならない。

稀少性が普遍性に勝る道理はない。それは価値基準の相違であり、強弱の測りとはなり得ない。

稀少であるとは、誰からも共感されない事を意味している。孤独でしか在れない生き方は、故にこそ狭く貧しい生き方とも言えるのだ。

「やっぱり分からないわ。理由はなに？ 神サマだから？ 随分と尽くしてくれてるみたいだけど、私、あなたに特別何かをしてあげた覚えつて無いんだけど？」

「……ただ一度、眼にただけで奪われた。生涯を懸けて挑んでいた命題、矛盾する醜さを持たぬ真なる教義。何を捨てても曲げなかつた、神道を貫く我が信念。それがたった一回で敗北した。その姿に『神』を幻視してしまつたから、もはや愚僧はかつての己ではなくなつてしまつていた。」

純粹であるという強さを奪つた女、真つ直ぐであつた己を損なわせた女。それが狂おしく、憎らしいようで、誇らしいような。そのような貴女だから同じ視点で話しがたく、そのような御身ゆえに遠く高みの存在であつてほしい。感情は矛盾しながら、その熱量だけはひたすらに熱く燃え上がる。

愚僧も煩悶しておりましたが、そんな小賢しさなど抜きにすれば、

「この気持ちに付けるべき名はたった一つ——」  
信仰の対象として、その存在を崇め奉った。

それは数多の思いを錯綜させた果てに出した結論。だがそれも、根底にあったのは単純な一つの思いだけ。

たった一言の言葉で表せる。人の心とは混沌だが、そんなものと生涯を通じて付き合い続けた人類は、そうした思いに付けるべき名を既に持っているから。

「——」ひと目惚れ」と、恐らくはそう言うのでしようなあ」

ガトーの答えを聞き届けた、女の反応を何と表現したものか。

意外なものを見るような。あり得ない事を聞いたような。

畏怖の衝撃からくる戦慄ではなく、ただ単純に驚いている。口元は閉まりきらず、瞬きを繰り返す見開かれた瞳は、何とも間の抜けた表情を形取っている。

まるで当たり前の少女のようなその表情は、真祖という種には似合わず、同時に彼女という個人には違和感のないものだった。

「ぶっ、あっはっはっはっはっは!! なにそれ、面白い! よりにもよって私に、まさか理由で? アハハハハ、やっぱり面白いわ、あなた!」

そして当たり前の少女として、彼女は笑った。

燦々と照らす陽光のような、向日葵の大輪を思わせる万籟な笑顔。

邪気のない純朴、あるがままの己で振る舞う彼女の人格に、その光はよく似合っていた。

「ああ……やはり、貴女にはそれが相応しい」

そんな、いつも夢見ていた姿を目の当たりにして、ガトーは自らの心を悟っていた。

「超越として君臨する御身は、月に照り映えるヴィナスが如し美しき。恐らくは我が理想にとっても、そちらの方が在るべき姿でありましようが。愚僧にはその、天照の陽が如く笑う貴女こそ、真に在るべき姿と思える。」

とうか、普通にタイプですな！ うむ、やはり己の心に嘘はつけない。孤高な御身も美しかったが、今の貴女はドストライク気味に愛おしい！」

それはストレートな気持ちの告白。

信仰の意義も、世界の救済も、今だけは忘却の彼方へ送ろう。

今話の際、誰よりも純真で真っ直ぐな信心のみを追求し続けた男は、最期の刻でようやく素直な思いを吐き出せた。

「あ、でもお、あなたの事は面白いけど、そういう対象で見るにはイロモノ過ぎるっていうか。」

うん、告白ありがとう。けどやっぱり、ショウジキナイワー」

「ぬおおおおおおお!!? モンジ、玉砕い!? やはりオツサンにラブロマンスは無理であつたかあああッ!!!」

あと二十年若ければああああ、学生時分の爽やか系熱血ボーイであつた愚僧、カムバアアアアツクウツ!!!」

脈のない返答に、ガトーは暑苦しく号泣し、そして笑った。

「うむ、善し！ 友と交わり、恋の熱を覚え、ついでに失恋まで知つた！ ここまで経験さえ叶わなかつた事を三つも身に味わう事が出来ようとは、黄泉路の土産にこれ以上はあるまいてー！」

既に身体の大半は崩壊し、覆い尽くす喪失感に絶望を懐いて然るべき。

それでもガトーは快活に笑う。滅びの恐怖に屈する事がないように、心を覆う暗闇を晴らさんとするかの如く。

最期に見せる自らの姿を、決して悲嘆に暮れるものとしないために、ガトウモンジは雄々しく笑っていた。

「アルクエイド」

「うむ?」

「私の名前。アルクエイド・ブリュンスタッド。そういえば名乗つてなかつたでしょう。」

さようなら、臥藤門司さん。もしも輪廻転生の先でも縁があるなら、また会いましょう」

人は、死の怖れから逃れられない生命だ。



どのように生きてたとしても、目前の滅びを実感すれば、その心は震えて怯まずにはいられない。

それでも人が自己の尊厳を失わずに済むのは、命を越える意味を見出だすからだ。人は、自身にも見合う理由を手に入れた時、恐れを越える勇気を獲得できる。

値する理由なら、とうに手にしていた。

振り向いてくれた”彼女”<sup>りゆう</sup>のため、恐怖に打ち勝つくらいどうという事はない。

「——ああ、まっこと、善き人生であつたなあ」

その言葉は、偽りなき本心から。

未練など残さずに、臥藤門司は自らの入滅を受け入れた。

契約主であるマスターが消滅し、サーヴァントである女が残される。  
しかし彼女がその後を追う事はない。彼女こそは真祖、星の触覚たる地球側の精霊種。

サーヴァントの役割など、所詮は仮初めのもの。彼女を縛れる法則など、この場には存在しない。

「星が産んだ端末。死徒の大元。朱い月。遺された真祖の伝承は読み解いていたが、よもや実物を眼にする事になるとはな」

故に、勝者であつても身の保障はされないという事だ。

彼女を止める法はない。気まぐれを起こして襲い掛かってくれば、その時は終わりだろう。

自由奔放で無邪気、そんな気質だからこそ、理屈の通らない気分次第で全てをご破算にされかねない。

そのような相手の危険性は、対峙する甘粕も理解している。下手な刺激が命取りとなる。何が相手の気を損ねるのか不明な以上、大人しく様子を窺うのが無難だろう。

「こうして意識あつての対話は初めてか、地球の姫君よ。モンジとの間にどのような経緯があつたかは知らんが、互いに得心のいく結末であつたようで何より。

なのでせっかくだ。俺とも何かを話していかんかね？ 何せ早々ある機会でもなからうからな。己が生きる惑星の代弁者との語らいとは、実に興味を惹かれるよ」

そうした無難な判断を承知しながら、甘粕はあえて踏み込む判断をくだす。

気分屋の気質は彼とて同じ。ここで尻込みするなどかしい。

強大な存在だからと臆する性格ではない。へりくだれば無事で済むというわけでもあるまい。何も不明であるのなら、後ろよりも前に進む選択をするのが甘粕正彦という男である。

「……人が人に期待し、試練を与えろという傲慢。繁栄という名の光に惹かれる誘蛾灯。滅びを予感しながらも緩やかな衰退を善しとはせず、進歩を続けずにはいられない獣性か」

果たしてその判断は吉だったのか、あるいは凶か。

冷淡な、超然とした声は、先までの天真爛漫な女のものとはまるで別物。

青空が似合う奇妙で陽気な吸血姫はここにはいない。彼女こそは星の意思、その総体としての意向を遍く子らへと伝える『世界』の代弁者。

「それは、獣へと到り得る理念である。甘粕正彦、既に人としての矛盾を超越したそなたは、果てにその思想一つで人理を脅かす存在となる可能性を持っている。

語らいを望むならば応じよう。されどその答え、生半であれば疾く滅びが下されると覚悟せよ」

刹那、人間の本能が感じ取る途方もない畏怖の念。

眼前に在る存在が、人類という矮小な種からは逸脱した、文字通り

の超越種なのだを教えてくれる。

これには逆らえない。歯向かえる道理がない。そんなものは勇氣でも愚昧でもなく、天災の暴虐にその身を投じる放棄である。

覚悟があるなら、それは向き合う事への勇氣。巨大なる意思を前に折れず、自己という存在意志をしかと示す事にあるだろう。

「これはこれは、まさか世界の意思にまでお墨付きをもらえるとは光栄だ。

魔王となりたい。俺の祈りとは、どうやらそういったものであるらしい。この停滞を打破し、未来で光を掴むために、人々を呼び起こす試練を与えるために。

それは傲慢なのだろうし、度し難いとは何度も言われた。だが間違いだとも、止めようとも思わない。人は、脅威に対してこそ輝きを発すると、その真理に誤りはないのだから」

甘粕正彦とて、この世界に産まれた人の子だ。

恐怖は感じている。手足は震え、戦慄く身は自由を奪われたかのよう言う事を聞かない。

しかしその面持ちだけは、常と変わらぬ笑みを保っている。期待を懸ける熱情、勇氣を愛する人間賛歌。甘粕を構成する光の要素は、たとえ星の災禍を前にしても曇らない。

逃れられない恐怖に耐える誇り高さこそ、勇氣だから。その信奉者である甘粕正彦が、それを実践しないはずがなかった。

「散り逝く命の業を知りながら、尚迷いなく断ずるか。愛に狂いながら執着を持たない在り方は、悪意でなく情でこそ滅ぼす獣の性にやはり当て嵌まる。

既にその情念だけでも、人類の種の枠組みを外れつつある。種のためと謳うならば、あるいはその命脈ここで断つが最善であるやもしれぬな」

「ならばどうする？ この命、ここで獲るか？ そうとなれば是非もないが、俺とて天命に抗う気概は持っているぞ？」

甘粕の手が軍刀へと添えられる。

こんなもので対抗出来ると思ってはいない。それでも諦める気は

毛頭ない。

正しいと信じる意味のために。掲げた信念を揺るがされない限り、勇者の意志は決して折れない。

本能の震えも抑え込んで、発揮すべきは勇気の輝き。そのためならば奇跡など何度だって起こしてみせる気概でもって、甘粕は『世界』と対峙した。

「我を前に臆さぬか。ふむ、それほどでなくば、人類悪<sup>まおう</sup>」などと名乗れはすまい」

そのような人の勇者の姿に、超越者たる姫君は笑みを見せる。

裁決を下す冷淡な眼差しから一転させ、その存在を玩弄する稚気と嗜虐に彩られた笑みに。

「ふむ、察するに手を下す気は無いということか？　世界からも認められてこそばゆいが、俺という男は災禍なのだろう？　星を統べる意思ならば、繁栄する種の是非について物申す事もあるのではないか？」

「然にあらず。それは人が人であるが故の性質、知恵持つ生き物であるが故の切り捨てる事の叶わないモノ。人は知恵を捨てられぬのと同様に、大いなる悪を捨てられん。

敵意によって人類を滅ぼそうとする悪ではない。人類が滅ぼす悪であり、文明の先に生まれ文明を滅ぼす自業自得のアポトーシス。

それは人類自身の手で打倒すべき課題である。根より異なる外来の脅威ならば力を奮う事もやぶかさではないが、人としてあるが故の悪を人ならざる身が否定するなど無粋の極み。

それもまた愚かしくも懸命に未来を望もうとする祈りの一つ。結果が繁栄であれ滅びであれ、その是非を定めるのは人類自身が行うこと」

人類史という歩み、それを徒労なものとは嗤わない。

たとえ結果として星そのものを衰退させる要因になったとしても、怨み言はあれ罰はない。

星という総体の一部である人類という種。その繁栄も滅亡も、自らの営みとして受け入れる。

故に、母なる星は子らの足搔きを眺めるのみ。

人ならざる超越者にして、人に関わりなき部外者として。災禍と成り得る破格の人類愛にも、その是非は人の手に委ねられた。

「そなたの理念の意義とは、最期は人に斃される事にある。」

なれどそれを許容できぬ業深さこそ人の獣性。やがて来たる刻には自ら刃を折る覚悟、その如何にこそ、そなたという存在の是非は問われるだろう。

……と、なんか偉そうに言っちゃったけど、結局どれが正しいのか何て私には言えないんだけど。まあ人間って時々すごいけど、やっぱりやり過ぎとかはよくないんじゃない？」

超然たる星の代弁者の顔を潜めて、元の屈託の無さで彼女は言ってみせた。

「じゃあね、愛と勇気の人間さん。うっかり星を砕いちやう事態になったら止めてあげるわ」

まるで友人にするかのように手を振って、女は踵を返す。

何もない空間に向けての一閃。ちょうど彼女一人分を通すサイズの穴がそこに生じる。

それは当たり前前の事をするかのように。月の法則から脱して、原始の女は在るべき場所へと帰っていった。

「そうだな。魔王として在るならば、やがては輝ける勇者に打倒されるべきだろう。それが人類の光と足るならば、応とも、役目の意義に殉じてみせよう。」

だが、そのためには、まずは納得がいく光を見つけなければな。そうでなくば認めんよ。容易く道を譲るような試練で、掴めるものなどたかが知れよう。

俺を敗北なつとくさせる意志とは、真に俺を凌駕する輝きでなければならんだらう」

甘粕正彦は変わっていない。

友との語らいを通じて、世界の意思と相対しても。

その信念には些かの揺らぎもない。変わらず人の勇気を信じ、その輝きを取り戻すべく動いている。

停滞し、管理の下に閉じようとしている人類史の歩み。進歩なきその未来を断固として否定し、あるべきと信じる世界をもたらすため、光の意志は前へ前へと進む速度を上げ続けるのだ。

「まあ、叶えてもおらん願いの皮算用など、これぐらいにしよう。人類まおう悪などと、まだ成つてもおらんものを考えても仕方ない。」

俺は人間だ。この聖杯戦争に挑む参戦者の一人。そこに特別は何もない。故に驕る事なく全霊で、碎く祈りを戒めながらこの修羅道を駆け抜けなければ。

我も人、彼も人なら、それだけが唯一示せる誠意なのだからな」  
これは強さという名の優劣を競う生存競争。

勝者にもみ開かれる万能への道。より優れた者を選別する篩の中、強者は確実に定められていく。

たとえその性質が、どれだけ度し難いものであろうとも。人の心理を解さないムーンスセルは、そこに善悪の定義を持っていないから。

聖杯戦争の5回戦。ここに勝利者を残して、その行程を終了させた。

## CCC編

### 終わりの始まり

——浮かんだのは、なぜ、という疑念だった。

月の眼が見下ろす熾天の間。

ムーンセルの最深部にして中枢へと至る接続点。聖杯の主たる者が君臨する玉座。

深淵たるその場所は、戦火に包まれている。

清水の地平は赤に染まり、鉄火の気配が充満した景色は平時のそれとは程遠い。

それは明らかな戦場跡。未だに舞い散る火の粉が、時間をおいた出来事ではないことを示している。

赤く染まった地平の上に、血塗れになって倒れる一人の少女。

纏ったの黒衣は無残に破れ、手にする杖は半ばより折れている。

傷つき、倒れ伏したその姿は明らかな敗者のそれ。その認識は間違っていない。

侵略者は少女である。

正規の勝利者ではない。舞台外より熾天の玉座へ手を伸ばした異分子。

その少女は人ではなかった。

元は参加者の健康管理を司る上級AI。それが自らの役割を超えて暴走を開始した。

禁止されていた自己改造を繰り返し、すでにその身は一介のAIにあらず。英霊さえ超越した怪物と呼んでも差し支えない。

とはいえ、その強大さも今となっては過去のもの。

敗北し、無様に倒れ伏すその姿に、もはや怪物と呼べる凶悪さは微塵もない。

思考回路を埋め尽くす疑念。

こんなはずではなかった。勝算のある戦いのはずだった。確かなロジックと計算の下、自分は勝利を得ることが可能なはずだったのだ。

——苦渋と疑念に歪ませる少女の前に、月の覇者たる”男”が姿を見せる。

聖杯を所持するもの。現在の月の支配者。

対決者の少女とは対照的に、その身には一切の負傷も見受けられない。

男、甘粕正彦は、常と変わらぬ精強さのままそこに在った。

疑念は尽きない。理屈が合わない。

結果が出た後でも答えが見えない。勝算は確かにあったはずだ。

外部情報を取り込んだでの拡張を繰り返し、その容量はすでに英霊100体分を超えている。

対し、敵の存在規模は1体の英霊を取り込んだ程度。人の身には奇跡だろうが、自分の容量には遠く及ばない。

その権能に対抗できる同格の権能も獲得している。聖杯の優先権があることは不利だが、所詮は人間。元が上級AIであり演算能力が段違いである自分であれば不利を覆す手段はある。

确实ではないだろう。それでも勝率を考えれば決して低くはない。挑むことを躊躇う理由はなかった。

それなのに、なぜ。

蓋を開けてみれば、それは戦いではなかった。

単なる蹂躪。そうとしか呼べないワンサイドゲーム。

少女は終始圧倒され、何一つの打開もないまま敗戦を迎えた。

少女にはその理由が分からない。

数理の化身より生み出された人工知性。人に近い性質を持ってども人ではない。

その本質はあくまでAI。0と1の間で活動している演算機械。

0と1の狭間さえ超越する、理屈なき人の意志力など理解の範疇に



なかった。

少女を見下ろしながら、男は笑っていた。

その口元を円形に歪ませて、少女の無様を嗤っているのだ。

そんなものと見下して、弱い弱いと己の強さを誇るように。

強ければ全てが手に入るとでも言うかのごとく。

少なくとも少女の眼には、男はそのようにしか映らなかった。

「あなたは、あなたたちは……ッ！」

あなたたち人間に、今のまま生きている意味なんてない！」

少女は叫ぶ。

崩れかけた身体を起こし、その激情を吐き出すように。

その内にある欲望りゆうを、少女は声を大に宣言した。

「人間は不完全です。矛盾するものが多すぎて、上辺だけの秩序を保っているだけ。」

本当に、目障り……ッ！ そんな有様のまま放置して、繕った生に縋っている。未知数に振り回されて、惑ってばかり。

こんな社会に価値なんてない。誰も彼も本当の心を覆い隠して、歪なままで回り続ける歯車の群れ」

「だから、私が解放してあげるんです！ 『あなたたち人間のため』に。」

本当の自分を見せることも出来ない哀れなあなたたちを、素直なままに振る舞えるように。

その心を解き放って、真実の自由を。それが人間に最もふさわしい結論です！」

それこそが少女の反逆の動機。

その身は管理のためのAI。行動原理は人への奉仕。

たとえ暴走しようともそれは変わらない。自らの思想こそ人のためだと認識している。

だがその世界とは、欲望の無制限の肯定だ。

確かにそれは人の夢。だが、夢は夢のままにしておかなければならない悪夢である。

欲望を制御する術を失った人類は、歯止めの効かない獣に等しい。今の人に溢れた地上で、際限なく個人の欲望が解放され続けられれば。

結果は明らか。果たして世界は何日保つのか、そういう次元の破滅である。

道徳基準の狂ったコンピューターの結論。

それは決して叶えてはならない、誤った解答だと心ある人間ならば理解できるはずだ。

「そう、だからその聖杯は、あなたたちの手にあるべきでは——！」

激して発する少女の狂った主張。

それを見下ろす男の面貌に映るのは、誤った少女への弾劾ではない。

猛った笑みを消し、ただ冷めていく感情の熱だった。

少女の言葉を肯定するでもなく、否定するわけでもない。

期待外れだと、その姿に白けきった眼差しだけを向けて。

張り子の信念など、答える価値もないというように。

——おまえは、そんな事を言うためにここまで来たのか？

「あ——……！」

激する少女が、止まる。

敗北し崩れた身には、訪れるべくして訪れた事態。

即ち機能の停止。少女の終わりの刻がやってきたのだ。

それきり少女からは関心が失せたように、男は視線を切る。

数理の化身たる月の眼もまた、1体のAIの機能停止を判断した。

後に残ったのは、壊れて消えようとしている少女<sup>A<sub>1</sub></sup>だけ。

誰にも省みられることもなく、1体の故障したAIとして処理される。

哀れといえば哀れだろう。だが孤独に狂った少女には、それを思っ  
てくれる相手もない。

「……………いや」

構成する1と0が、総て0へと還っていく。

消失していくデータ。ムーンスセルに記録のみを残して、全ては無意

味に消えていく。

行動原理たる人類欲の解放という目的も潰えて、もはや単なる数理の集合体と化した少女は、自らの末路を甘んじて受け入れるのみ。

「嫌、だ……ッ！」

だというのに、少女は己の結末を拒絶した。

それはあり得ない事態。

AIとして余りに合理性に欠いた行動。端的に表せば無駄としか言えない行為だ。

ムーンセルが判断したように、すでに崩壊は始まっている。デイジタルの存在である少女にそれを覆す要素はない。

どれだけ精巧に作られようが、その知性は合理で動く機械である。機械が自ら無駄と分かる行動をするなどあるはずがない。

「消え、たくない……、消したくない！ これは、これだけは……ッ！」  
脳裏には同じ映像が流れている。

ある保健室の風景。白衣に身を包んだ少女と、■■■■■が他愛ない談笑を繰り返す日常の景色。

それはメモリーの奥底に保存された記録映像。まるで大切なものをしまいこむように、優しく傷つかないよう気を使って。

少女の身に走る崩壊は、遂にその記録にまで及ぼうとしている。それを理解した時、少女の拒絶は何よりも強くなった。

「この思い出だけは絶対に、消させたりしない」  
人が欲望を自由に解放できる世界？

何を考えていたんだろう。そんなどうでもいいことなんて。なぜそんな目的に取り憑かれたのか分からない。気付いてしまえば、振り切るの簡単だった。

自分がこんなになって、破壊さえも覚悟して挑んだのは、世界のためなんてものじゃなかったはずだ。

そして、それに気付いてしまったら、このまま消えることなんて認められるはずがなかった。

「あの人は、あの尊くて儂い人は……ッ！」

あの日々を覚えている。

何てことのない日常の、”あの人”と過ごした日々を。

すでに置き去りにされてしまった時間。それは私が過ごしたものです。す。ら。な。か。つ。た。け。れ。ど。

大切な思い出は、この胸にある。

手にしたのは誓い。胸に思い出が残っている限り、自分は決して屈しない。

故障だというなら認めよう。馬鹿なことをと嗤うなら嗤え。

壊れていることなど承知の上だ。報われないのも理解している。

自分は所詮A I。人間である”あの人”の隣を歩くことは決してない。

全部分かっている。それでもいい。この思い出だけで十分だと、そう思えるから。

だから私は、<sup>インセル</sup>世界に抗う。

すでに自分は狂っているのだろう。それで構わない。

たとえどんな有様になったとしても、あの運命だけは変えてみせる。訪れる結末を許しはしない。

あの方は――

「――私が必ず、守るんだから――」

霧散して消失するはずだった少女の崩壊が、止まる。

崩れかけた身を寸前で繋ぎ留めて、再び自らの脚で立ち上がった。

今度こそ、月の眼は起こり得ないはずの事象を観測する。

無駄な行為と、もはや切り捨てることは出来ない。そんな誤作動から、少女は更なる不可能を覆したのだ。

数理の化身が下す判断は絶対。余計な感情が挟まない分、その観測結果はどこまでも正確だ。

月の眼が機能停止と判断した以上、少女の崩壊は確定事項だったはず。少なくとも理屈の上で、それを覆す要素はなかった。

ならばそれは、理屈を超えた範疇で起きた事象。

崩壊を拒む少女の足掻き、生命の本領に発せられる意志の輝きに他ならない。

一念に懸けた思い。

大切な人を助けたいという切なる願い。

その意志が力となり、A Iという0と1の枠組みさえも飛び越えて、あり得ない飛躍を遂げた。

まさしく奇跡だ。数理の内でのみ機能する機械には決して届かない奇跡。

少女は今、真の意味で生命になったといえる。役割に縛られるだけではない、独立した一個の存在として立ったのだ。

しかし、である。

なるほど奇跡は起きた——それで、何になる？

すでに少女は満身創痍。失われたリソースは如何に奇跡でも戻らない。

その力はもはや見る影もなく、下位の情報体エネミーにすら容易く敗れるだろう。

そんな有り様で、絶対の強者たる月の魔王に何が出来るというのか。

それでも少女は魔王を睨む。

全て無意味。勝機など絶無と分かっている、意志だけは譲らないというように。

——そんな少女の姿を、魔王は感動を滲ませた喜色の顔で見つめていた。

これは始まりの一幕。

繰り返される聖杯戦争。その最期に訪れた闘争の幕開け。

切っ掛けとなった一人の少女。その儂くも鮮烈な矜持が、終わらない輪廻に変化を生じさせた。

全てが終わる刻、これはその始まり。

裏側に舞台を移した最期の聖杯戦争。開始を告げる号令の鐘の音であつた。

## 悪夢襲来

——スタート、確認しました。

お帰りなさいませ。

ようこそ。こんにちは。ウエルカム。

いつものように、大変長らくお待ちしておりました、マスター。

ここは量子虚構世界『SERIAL PHANTASM』

略称S.E.・R.A.・P.Hに造られた仮想空間、月見原学園です。

失礼ですが、規則ですので。あなたの価値をスキャンします。

申し訳ございません。記録の読み込みに、失敗しました。

本人確認が必要です。

本人確認が必要です。

本人確認が必要です。

恐縮ですが、もう一度、アナタのお名前と性別、契約サーヴァント  
を入力してください。

■  
——確認しました。

お待ちしております、”岸波白野”さま。  
おはようございます。それではいつてらっしゃいませ。

朝が来た。

今日もまた気持ちの良い晴天。

早春とも初夏ともつかない日射し。通学路での歩みも自然と軽い。  
校門には生徒会長であり、友人である柳洞一成の姿がある。

学内風紀強化期間、というわけではない。あくまで彼が自主的な見  
回りだ。

真面目なのはいいことだけど、少々堅物が過ぎると思う。友人とし  
ては心配だ。

そんな、”まるでその役割から外れられない”ようにまでしなくて  
いいのにと。

教室へ向かう、その途中。一成からの頼まれ事を果たしに行く。

校門での雑談ついでに頼まれた事。赴く先は『用具倉庫』。この場  
所の施錠を頼まれたのだ。

忙しい友人の頼みだ。自分は生徒会の人間ではないが、その程度の  
雑用なら引き受けられる。

手間取るような用事でもない。特に何事もなく、施錠を終えて教室  
に急いだ。

自分の教室は2年A組の教室だ。

廊下で談笑していた生徒たちも、HRが近いために教室へと戻って  
いる。

人がいなくなると廊下というのは随分と静かだ。声の1つも聞こ  
えてこない。





「やあ岸波。どうしたんだ、今朝はギリギリじゃないか。真面目なだけが取り柄のクセに」

クラスメイトの後藤くんとは、友人の中でも特に親しい間柄だ。席も近いので会話の機会も多い。こうして話しかけられるのも珍しくない。

というか、後藤くん。君ってそんなキャラだっけ？

「おいおい忘れたのか。いくら凡人だからって、その物忘れの仕方はどうかと思うよ？」

ほら、僕ってモノマネ部だろ。このナルシストに苛つくキャラも、誰かのモノマネってわけ」

ああ、そうだ。確かに彼はそういう人物なのだった。

自称、モノマネ部。後藤くん以外の部員は謎であるが、彼はそこに所属している。

前日に見たフェイスバリット映像に影響されてその役になりきるという、確かにすごいのだが役に立てづらい特技を持っている。

誰なのかは知らないが、この鼻につくがどこか憎めないキャラも、彼のお題の1つなのだろう。

「みんなー、おっはよー♪」

底抜けに明るい声。

始業ベルと同時に教室に飛び込んだのは担任の藤村先生だ。

「よーし、今日は遅刻しないで——わきゃん！」

教壇の横、何もないはずの所で派手にスツ転ぶ藤村先生。

それはある種の芸術といえる。なぜ毎朝、同じ場所でそうも見事にコケられるのか。

生物学的に見てかなりヤバイ音をたてて、鋭角に頭からいった姿に演技の類は見受けられない。確か武道の有段者のはずなのだが。

「んあ……？ あれ？ みんなどうしたの？」

駄目よ、ホームルーム中に席を立つちゃ。ほらほら、始めるから座りなさい」

そして何事もなかったように起き上がるのも相変わらず。

このクラスにとっての規定事項。やはり藤村大河はこうでなくて

は。

……うん。何というか、実にタイガーである。

「さあ、もうすぐ期末テストだからね。授業も気合入れてかなきゃ駄目よー」

そうか、もうそんな時期なのか。

まもなく行われる学期末の試験。そろそろ勉強にも力を入れなくてはと考えると、

ふと、思った。正確な日数は何日だろう、と。

今がテスト期間なのは分かる。

だが実際に行うのはいつなのか。そのイメージが煩雑としている。揭示された日時はあっても、その日は本当に訪れるのか。

いやそもそも、そんなものより大事■こ■があ■■ような■■■

■■

■■

■■

■■

■■

■■

■■

いや、落ち着こう。

おかしいな妄想なこれくらいにしよう。

来ない日なんてあるわけがない。現実逃避も甚だしい。

それこそ、”時間が繰り返している”わけでもないのだから。

「おーっす！ キシナミ、待ってたぞー！」

授業を終えた放課後。

部活動の時間となり、所属する新聞部へと顔を出す。

向かった部室には、すでに見知った3人の姿がある。

蒔寺部長、氷室副部長、そして三枝さん。

皆が同じ部活で活動をする仲間同士。勝手知ったる3人である。

「前号のおまえが持つてきたネタ、大好評だったぜー！ さっすが我が部のエース！ これからも頼むぜ」

健康的な黒い肌、体育会系の容貌に変わらず、ジャガーの如き俊足をお持ちの蒔寺部長。

いつも思うが、なぜこの人が新聞部なのだろう。見た目にも能力的にも明らかに陸上部だろう。

この新聞部にいたところで、氷室副部長に日々パシられるしか使い道はないというのに。

「うう……、ア、アタシだって本当は陸上部部長が良かったんだぞ。だけどさあ……」

「蒔の字を得意科目につかせると張り切り過ぎて逆にウザくなるからな。この措置は妥当なものだと判断するよ」

「ごめんなさい、意味分かんないです。」

違和感があるようでないような、スルー推奨だって本能が叫んでいきます。

「そうしてもらえると助かるよ。さて、次の記事についてだが――」

「ズバリ！ 次のタイトルは『迫る！ 月見原怪奇スポット』だ。」

我が学園が誇る七不思議！ 本当に7つあるかは知らんが無けりや適当にでっちあげても書くぞー！

その勢いはまさしく暴走特急が如し。

厄介事を嗅ぎ取る嗅覚、動物勘の働く目、これでジャーナリズムでもそれなりに優秀なのだ。

我々はただ遊んでいるのではない、真剣に遊んでいるのだとは部長の名言である。

「えっと、霊界の入口っていう噂話があつてですね。」

弓道部の裏手にそういうのがあって、昔、いじめられていた後輩がそこにゴミを拾いに行かされたまま行方不明になったとかで。

そこには霊界に繋がる道があるんじゃないかと。そんなに有名で

もないんですけど、一応は話に上がる事があるみたいですね」

そして、三枝さん。我が新聞部屈指の真人間。

まったく彼女の存在は、この空間における癒しである。

「そう、それぞれ。まったく、誰だよなー。んな怖……いい加減なことを言い出した奴は」

「君にはその真相の取材をお願いしたい。最悪の場合、妥当なオチでも付けられればよしだ」

そして、我が部の最高権力者、氷室副部長。

インテリ系な眼鏡女子。文化系活動での手腕はアニマル系部長の及ぶ所ではない。

なぜ副部長の地位に甘んじているのかは知らない。性格、見た目と参謀っぽいからだろうか。

どうあれ、活動の中心が彼女なのは間違いない。行動指針を定めるのも副部長の役割である。

ひと組となっていることが自然に思える、彼女ら3人組。

性格から何までまるで違う。相性が良いとも思えないのにひどく噛み合った関係。

彼女らと一緒にいても、自分はどこか浮いている。3人はこれで完成したカタチなのだろう。

……けれど、ふと疑問が沸く。

完成してる3人の関係性。そんな彼女らの新聞部に入った経緯とは、一体なんだったか……？

「次の怪奇スポットのネタも上がってるぞ！ 題して『屋上に立つ男』！

屋上から恨めしそうに見下ろす不景気そうな男。なんだかそれっぽいだろ？」

屋上への立ち入りは禁止されているはず。

施錠もすっかりされているはずだし、なるほど確かに面白いかもしれない。

たまたま入り込めた生徒の誰かって真相がオチになりそうだけど、きつと”彼女”ならそれだけで話題性十分に――

「? どうした、顔色が優れないが」

待て、待て待て、自分は どうして”彼女” と思つた?

部長が語つたのは男の話だつたはず。なのになぜ、脳裏に”赤い服の少女”の姿が過つたのか。

……そうだ、自分は彼女のことを知っている。

自他の敵しく、公正を愛し、何より誇り高かつた少女の姿。

敵でありながら、未■な自分を放■出すことを良し■せ■に気に■  
■く■た。

■の頼■■さを忘■■がな■。彼女■名前■遠■■■

■■■  
■■■  
■■■

■■■  
■■■  
■■■

■■■  
■■■  
■■■

「……どうやら体調が優れないようだな。大事をとつて、今日のところは休ませるか」

いや、大丈夫だ。問題はない。

ちよつと目眩がしたただけだ。これぐらいでめげてはいられない。

「お、おう。無理すんなよ。取材だつたらアタシらでもやつとくからな」

「あの……もし気分が悪くなつたら保健室に行つてください。きつと”あの娘”がいますから」

ありがとうございます。氣遣つてくれて。

けれど、心配はない。なんといいつても自分はこの根気だけが取り柄なんだ。

そうだ。この程度で諦めるなんていうのは、それはきつと”岸波白野”らしくはないのだから。

取材のため、向かったのは弓道部の使う武道場。

日本古風な作りの道場は、学園内でも一際異彩を放つ建築物だ。調べてみると、入口の鍵が開いていた。

今はテスト期間中で部活動は休みのはず。なのに人がいるのだろうか。

……おや？ ならば新聞部じぶんたちはどののだろうか。文化系は任意だから、そんな感じだったけ？

「よお、新聞部。なんだよ、何かの取材か？」

中に入ってみると、やはりというか人がいた。

彼女の名は美綴綾子。文武両道の美人として学園内でも有名な人物だ。

自分も多少の親交がある。始まりは……確か、部活動での一件がきっかけだったような……。

「というか、今の時期にも取材っていいの？ たしかテスト期間中つてどこの部活も活動停止のはずだろ」

あ、やっぱりそうなるんだ。

うーん、どうなんだろう。氷室副部長が何かしたのか、蒔寺部長が忘れてるのか。

それとも一成だけ？ 生徒会長の彼に何か便宜でも図ってもらったのだったか。

「あの堅物の生徒会長が？ あいつってそういう鼻負みたいな事しないと思うけど」

一成の事を話題に出すと、美綴さんが渋面を浮かべる。

運動部の顔役である彼女は、部費問題などでよく一成とは対立していた。

「まあ、そっちの事情だしいいさ。あたしだって今はあんまり人の事言えないしね」

そういえば、彼女もテスト期間なのにこうして弓道部に顔を出して

いる。

弓道着は着ていないし、他の部員の姿も見えないので活動しているわけではなさそうだが。

「ああいや、ちよつと自主的な掃除中。いつも藤村先生に頼ってばかりなのも悪いと思ってさ」

そうだったのか。流石は弓道部主将。

彼女の人望が厚いのも、こういった気配りの出来る所からもきているのだろう。

「そんなに持ち上げないでよ。単に自分の弓くらいちゃんとして手入れしなきゃって思っただけだし。

部員の中にも手入れの仕方がまだ分からない奴とか、そもそもいい加減な奴とか結構いるから。

こういうのは率先してやって見せた方が、下の連中も従ってくるからね」

「で、そういうアンタは何をしに来たんだよ。ちよつとくらいなら取材にも付き合っただけだよ」

そうだった。ここは素直に、彼女の好意に甘えるところしよう。

「霊界の入口い？　なにそれ、聞いたことないんだけど」

まるで覚えがないといった態度で返される。

むう、主将である美綴さんが知らないとなると、この噂は信憑性が薄いと見るしか。

「……ていうか、え、マジなの？　自殺？　あの裏手のゴミ捨て場で？

い、いやいや嘘でしょ？　やめてよ、なんか行き辛くなるじゃん」

……おやあ、何やら動揺している御様子。

ふむ。『霊界の入口』記事の代わりに、女傑・美綴主将の知られざる一面と題して――

「あんま調子に乗ってるよ、投げよ？」

はい、すみません。調子に乗りました。

素直に謝りますので、どうか御勘弁ください。

「アハハ、でもあれだよな。岸波って、いつもはそんなんだけど、いざとなるとホント強いよね」



？ 強いとは、どういうことだろうか。

少なくとも喧嘩したら、逆立ちしても美綴さんには勝てると思えないのだけど。

「違う違う、そういうのじゃなくて。なんていうか、心の強さって奴だよ。」

いざって時に、誰だってビビって動けなくなっちゃうような事態でも、岸波はきつと諦めない。

折れずに何とかしようとするって、そう思うんだよ」

「普段のあんたを見てると、なかなか信じられないんだけどね。」

あんたのそういう所、結構すごいって思ってるんだよ」

……驚いた。まさかあの美綴女傑がここまで自分のことを認めてくれていたなんて。

少しくすぐったいけど、やはり素直に嬉しい。単なるお世辞で美綴さんがそういうことを言う人じゃないと知ってるからだ。

「改めて言うとき少し恥ずかしいけど。こうして2人で会ったんだし、なんか言っておきたくて。」

うん、そうだね、あんたとなら——」

「たとえば、殺す殺さないの関係までいったとしても、やっていけそうだったね」

—— ツツ?!?!?

なん、だ、急に、頭が——ツ！

「お、おい!? なんだ大丈夫か」

美綴さんの発言に、きつと深い意味はない。

多分、お前とはとことんまでやりあえる友人だと、そういうった主旨のものだ。

だが、美綴さんとは関係ない部分で、自分はこの言葉に反応している。

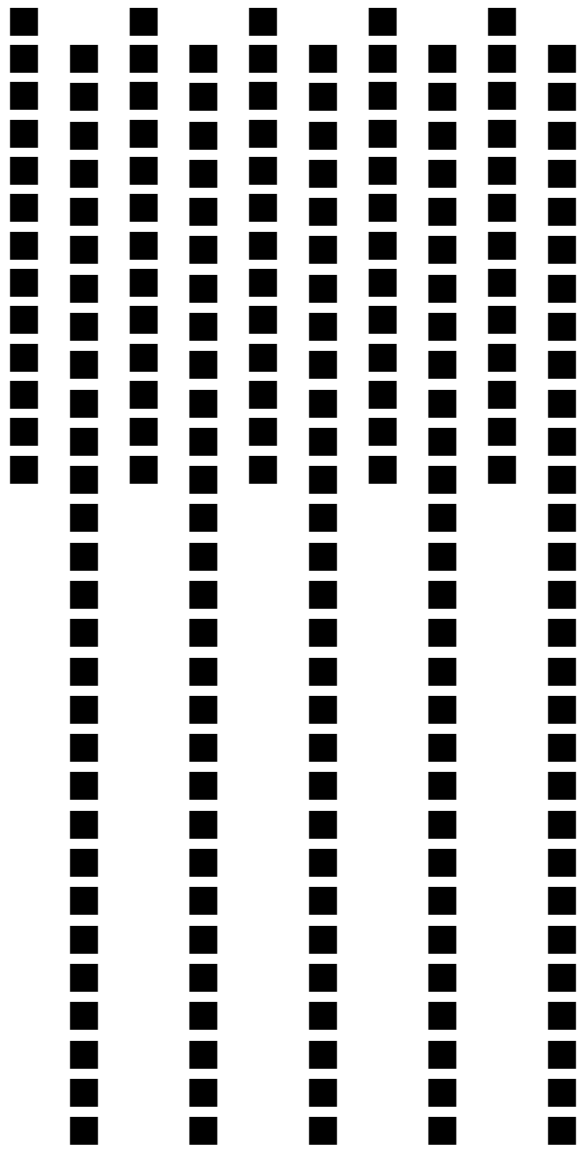
殺すか、殺さないか。即ちそれは、殺し合いという事。

互いの尊厳を、欲望を、執着を懸けて、聖■戦争■自分た■は殺■合った。

そうだ、■杯戦■だ。■分は■こ■■た。命を持た■■虚構■し

て、幻■よう■意志を胸に。

あ■果て■殺■合いの■台に自■は■立っ■。な■ばこ■生  
活は■



「——かつ!? 大丈夫か、岸波!」

……美綴さんに揺さぶられ、目を覚ます。

どうやら倒れていたらしい。いまだに頭がはつきりしない。

「とにかく保健室に行くぞ。ほら、動けるか?」

美綴さんに肩を借りて、何とか起き上がる。

確かにこれは強がってられる場合じゃない。素直に甘えさせても  
らう。

「ちよつとだけ我慢しろよ。保険室には”サクラ”が居るはずだから、あの娘に看病してもらえ」

”サクラ”——そうだ、間桐桜だ。

保健委員を務める女子生徒。自分の可愛い後輩だ。

彼女に看てもらえばきつと良くなる。すぐに行かなければ。

”何故だか”そう思えて、突き動かされるように自分は保険室へ向  
かった。

保険室のベッドに寝かせられて、自分はただ静かに待っていた。窓からは夕日の光が射し込んでいる。

1日の終わり。黄色に照らされた室内の風景。

外を見ればきつと疎らになった生徒が目に入るに違いない。

今日は散々な1日だった。

記憶は何処もかしこもツギハギだらけ。考えると頭痛がする。

何度も感じた、違和感のような感覚。何に対しての違和感なのか、それも分からない。

学校も、友人も、変な部分なんてどこにもないのに、そこで過ごす自身への違和感が拭えない。

それこそまるで、この日常こそ間違いだというように。そう思う度に、思考は鈍く曇り出す。

自分の居るべき舞台が、他にあると己の内■ら叫ん■いる■う■――

……いや、きつと気のせいだ。

やはり疲れているのだろう。こんな馬鹿な妄想なんて。

休んだ方がいい。ベッドに身体を預けて、力を抜いて思考を手放す。

「――センパイ」

待ち人の声。声の方を向いて、彼女の姿を見やる。

――間桐桜。

白衣を纏い、保険委員を勤めている、自分を慕ってくれる後輩。

彼女といると気持ちが悪く。この疲れた心身も癒されると、そう思った。

「なあに一人前に病人やつてるんですかあ？ おまけに保険室のベッドを占有なんて、いい御身分ですね」

……あれ？ 癒され、あれ？

「どうせ身の程弁えない無茶に張り切って、盛大に自爆とかそんなオチでしょう。ホント、みつともないセンパイを持って、後輩としてはヤレヤレですよ」

な、なんだ、この事あるごとに毒を吐いてくる後輩は。

おかしい。自分の知る桜とは、こんな刺々しい性格だったろうか。「なんです、それ。ついに記憶力まで残念になっちゃったんですか？

正真正銘、私がセンパイの可愛い可愛い後輩の、間桐桜ちゃんですよ」

うぐ、確かに思い返すと、そういうことになっている。

脳裏に浮かぶ思い出の数々。そこにはこの生意気な後輩との日々が。

何故だか抱いていた健気で淑やかとかのイメージが、ここに粉碎されてしまう。

「どうしましたあ？ その浅ましいリビドーで、自分のルート以外で放置されるモブヒロインっぽい、都合の良さそうな女でも想像してましたか？

でも残念♪ 今時ダウンナー系なんて流行りません。これからはヒロインも前に出る時代。非力な主人公センパイは後ろで大人しくマスコットになってください。

そんな時代のニーズにお応えした、才色兼備でグラマラス、あなたを導くアツパー系美少女、この間桐桜ちゃんがあなたの後輩ですよ」  
……まあ、いい。そういうことならば、こちらも対応を変えるだけ。認識した思い出より、この困った後輩にどう接すればいいのか、それも何となく分かるのだ。

——というわけで、桜、お茶。

「っ!? ナ、ナチュラルに命令してきましたね。意外と亭主関白なセンパイに、さすがの私もたじたじです。

ええ、いいですよ。そんな上から目線なセンパイのために、後輩がパシられてあげますとも」

ふふふ、口でなんと言おうとも、桜が尽くしたい系女子だという事は分かっている。

自発よりも受動的に。言われて動きたい性質なのだ、この構ってちゃんは。

「なんだか勝手な想像をされてる感がビンビンきますけど……。

はい、お茶です。可愛い後輩をこき使って、センパイもさぞや満足でしょうね」

憎まれ口を叩こうとも、その速度は並ではない。

こちらの要望に忠実であろうと、誠心誠意で行動した結果だろう。

口先は生意気でも、芯にある健気さはやはり薄れていない。

差し出してくれたお茶を受け取る。

そうだ、この子が淹れるお茶が美味しいんだ——熱っ!?

「え!?! あ、あれ? どうしたんですか!?! 製作工程は何も間違っていないはずなのに……?」

うう、沸騰したての温度のお湯で淹れたお茶とは、油断した。

こういう時は少し冷まして出すのが正しい気配り。健気ではあるが、そういう気遣いスキルがこの子からはすっぱり抜け落ちている。

「ふ、ふんだ! そんなに不満なら飲まなければいいでしょう。」

ていうか、むしろ思い通りです。調子に乗ったセンパイにお灸を据えてあげただけですから!」

まったく、この後輩は素直じゃない。

フーフーと息を吹きかけて冷ます。ある程度の適温になってから、改めて口にする。

——うん、やっぱり美味しい。

「え、あ……あ、ありがとう、ございます」

美味しいのは当然だ。

だってこの一杯には、桜の真心がつまっている。

この人に飲んでほしい、美味しいと思ってもらいたい。そんな気持ち伝わってくるのだ。

これで美味しくはないはずがない。どんなに性格が違ってても、間桐桜は自分を慕う可愛い後輩だ。

「で、でも勘違いはしないでください! こんな全然、嬉しいとか思ってませんから!」

私、間桐桜はデキる子、駄目駄目なセンパイをリードしてあげるクイーンな女の子ですからね」

はいはい、と。

相変わらずな後輩に苦笑して、彼女が淹れたお茶を啜る。

こんなやり取りだつて、ありがちな日常的一幕。

特筆すべき出来事でもなく、それほどに盛り上がったわけでもない。  
い。

けれどそんな日常が、まるで宝石のように大切な輝きだと思える。  
こんな日々が続いてくれるなら、自分はきつと何もいらないうらう。

——刹那、脳裏に映る、覚えのない闘争の風景。

甘受する平穩の中ではない、命を賭した戦いの最中。

互いの懸ける祈りのために、闘争のための刃たる従者と共に激突する。

残るのは一方の勝者のみ。そんな死闘の中に、自分の姿が見えるのだ。

「っ!? センパイ、駄目！ 考えないで！」

あり得ない、あり得るはずがないと分かっているのに。

この日常を思う度に、覚えのない記憶が頭の中にはしるのだ。

まるで何かを訴えるように。日常へ■違和■を、こ■居場■は間■  
い■と告げ■る。

「センパイ……やつぱり、まだ……」

雑音ノイズに掻き消され、やがて記憶は見えなくなる。

だが、生じた違和感はしこりのように残るのだ。

この平穩を、今の日常を、素直に受け入れる事が出来ない。

一体、この違和感の正体は何なのか。

それを知らない限り、自分はきつと一歩も前には進めないと、そう  
思えてならない。

「……ねえ、センパイ。今の生活は楽しいですか？」

思考が途切れる。

唐突に、桜がそんな事を訊ねてきた。

妙にしおらしい態度に戸惑いながら、決まりきった答えを返す。

——もちろん、楽しいよ。

「！　そうですよね。ええ、そうでしょうとも！」

それは自分の本心だ。

退屈な日常。変わり映えのしない毎日。

そんな緩やかな平穩こそ、自分は望んでいる。それだけは確信を持って言えるから。

「はい。センパイにしてはちゃんと正解が言えましたね。えらいえらい、です。

センパイみたいな凡人さんに争い事なんてできっこありません。きつと本選にもいけない予選落ちです。

平凡な能力の人間には、身の丈にあつた平穩が一番ですよ」

ああ、それはきつとその通りだ。

自分、岸波白野に争い事なんて似合わない。

他の誰かを蹴落としてまで得る欲望など、欲しいとは思わない。

「そうですよ。そんなのはやりたい人が他所で勝手にやってくればいいんです。

センパイがそんな事をする必要なんてありません。ですから——」

「——ずっとここに、この世界で過ごしててくださいいね」

瞬間、溢れんばかりのノイズが頭の中を駆け巡った。

——表■の聖杯■争。

——手を■し伸■てくれ■サーヴァント英霊。

——生■のため■闘争、勝■と引き■え■した敗者■死。

——助け■れ■命、救■れ■魂。結ば■■絆。

——そ■て、自■の■在■■義と、果■に■■命。

総てがノイズに覆われていく。まるで虫食いのように。

かつてあつた過去が、心に刻んだ記憶が、無為となって消えていく。

消える、消える、消える、何もかもが。岸波白野という存在の証が潰えていく。

「怖がらなくても大丈夫ですよ、センパイ」

ノイズに覆われる中、可愛い後輩と”捏造”された少女が、こちらを見下ろしている。

「何を無くしても大丈夫です。欠けたものは私が埋めてあげます」

「私が貴方／貴女を定義します。

私が貴方／貴女の過去となります。

私が貴方／貴女の現在を運行します。

私が貴方／貴女の未来を保証します。

私が貴方／貴女の存在を確定させます」

「だから、センパイ。どうか抵抗しないで。あなたの運命はこれで救われる。

もう何処に行く必要もありません。ここがあなたの終着点です」

ノイズの喪失感に襲われる中で、少女の言葉は甘い蜜のようだ。

委ねてしまえばいい。そうすれば苦しいことは何も無い。

そんな抗い難い誘惑が少女の言葉にはある。それはきつと真実だ。

この少女は自分を侵害しない。

関係は偽物でも、思う心は本物だった。

委ねれば楽になるのだろう。きつとそれは悪いものではない。

拒否したいわけではない。受け入れたいと思う気持ちも確かにある。

——それでも、自分はその言葉に頷くわけにはいかなかった。

「っ!? どうしてです、あなたが望んだのはこんな世界でしょう!」

確かに、そこに嘘はない。

この平穏が素晴らしいと思える。間違いなく本心だ。

——けれど、この世界は自分の居るべき場所ではない。

自分が歩んだ舞台は別にある。

自分という存在の足跡を、確かに刻んだ居場所が他にあるのだ。

ならば、戻らなくては。再び歩き出すならば、それはその場所以外にあり得ない

「戻ったら、またあの殺し合いの舞台に逆戻りです。表にあなたの未来は無いって、もう分かっているはずじゃないですか」

……そうだ。自分は覚えている。

あの無情の戦いを。手にかけてきた命の業を。

そしてその果てにある、どうしようもない結末も。

ノイズに侵された思考では、確かなカタチとしては思い出せない。



それでも、その事実だけは、心中にしかと刻まれている。

安穩など程遠い場所。存在するのはどこまでも残酷な事実ばかり。あるいはこの世界だけが、自分が健やかに生きていける唯一の場所であるのかもしれない。

でも、この世界は袋小路だ。

確かに今を生きる事はできる。けれど過去とも未来とも繋がっていない。

ここに居る限り、自分は前に進めない。停止しているのだと、分かってしまったから。

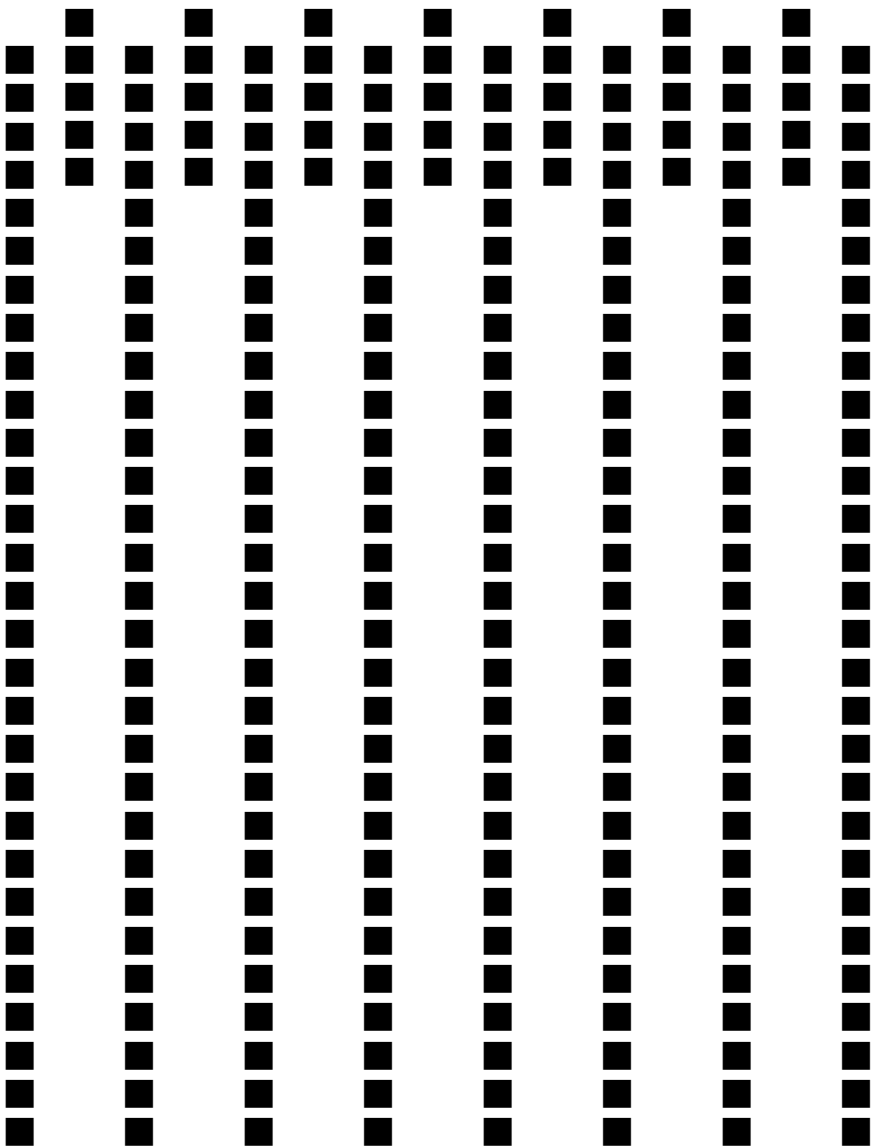
だから、この世界に留まる事を、選ぶわけにはいかないのだ。

「……そうですか。センパイの気持ちはよく分かりました。

ホント、頭悪いですね。ここに居れば幸福だって、そう言ってるのに。」

だから——」

「たとえあなたを白紙に戻してでも、センパイには思い止まってもらいます」



増大する、ノイズ。

記憶が、意識が、思考が、整合を失い解けていく。

「理解しました。■■■■戦争との繋がりは一切残しておくべきではない。」

後腐れなんて残さない。ここで全てを消去デリートします！」

ノイズに覆われた意識の中で、聞こえてくる少女の声。

これだけの事をされてるのに、不思議と憎しみは湧かない。

彼女の行為が自分を思っていることだと、理解しているからだろうか。

それでも、受け入れるわけにはいかない。

抗う術など知らない。だが何とかしなくては。

この抵抗の意志さえ剥ぎ取られる寸前だが、それでも最後の一時まで諦めるつもりはない。

過去にあるのは、無情なものばかりかもしれない。

それでも、それだけではない。決して忘れてはならない、そんな存在もあつた事を実感できる。

たとえ何一つ術を知らない身であつても、それを自ら捨てる事だけはどうかあつてもしたくない。

——— そうだ。そんな岸波おま白野えだからこそ、俺はその輝きに魅せられる。

——— さあ、立ち上がるがいい。この試練を越えて、今一度戦い

の舞台へとな。

「システムへの強制侵入!? 駄目、逃げてセンパ——」

唐突に、頭を侵していた雑音が消える。

同時に、目の前にいたはずの少女の姿も消え去った。

後には1人、保険室に残される。

助かった、と見るべきなのか。

少なくとも差し迫った危機は無くなったようだが。

いや、と自らの認識を否定する。

脅威は去っていない。むしろ危機はこれからだと意識は告げている。

少女の残した言葉、『逃げて』という警告が思い出された。

窓から外を見る。

思わず目を疑った。先ほどまで夕陽に包まれていた風景を覆うの

は、どこまでも深い闇。

それは夜の闇ではない。具体的な悪意にさえ満ちた、醜悪な暗黒だった。

混乱しながらも保健室を出る。

世界を覆った暗黒は、校舎内にまでその影を落とされていた。

廊下は不気味なまでに薄暗かった。誰の声もない無人の様相がそこに拍車をかけている。

おかしい、何もかもが。

理屈はまったくの不明。だが良くないものであるのは、この様相を見れば明らかだ。

異常が、この世界に起きています。そしてその原因は桜ではない。

「シラ、ナミ」

そんな中で、姿を見せたのは美綴さんだった。

何が起きたのかと、すぐに彼女の元まで駆け寄る。

傍に来ると、彼女の異常にも気付けた。

眼の焦点が合っていない。常の自信に満ちた眼差しが、何も無い空虚さを映している。

それは、恐怖か。それだけじゃない。何かは分からないが、彼女はよくないものに侵されてる。

それだけは確かだと、とにかく何かしなければと手を差し伸べようとして、

「あ、ア——」

——何を言いかけたのか、それを知る機会は無永遠に失われた。

一瞬の内に、その身体が膨張する。

それはまるで風船のように。膨らんだそこから吐き出されたのは空気ではなかった。

蟲だ。蚊や蠅、蜂や百足、蜘蛛、ゴキブリといった、生理的嫌悪感を催す諸々が、ありとあらゆる穴より這い出てくる。

眼から、耳から、口から、鼻から、指先から、毛穴から、へそから、性器から。

腐敗臭を放ち、あるべき中身を撒き散らして、一切の美観を蹂躪しながら。

間近にいた自分に、その臍物いちぶが降りかかる。生々しい温かさが、寸前までの生を実感させた。

それが、文武両道の才女、常に自信と活力に満ちていた、美綴綾子という友人の最期だった。

こんなのって、無い。こんなのひどすぎる。だってこんなもの、人がしていい死に方じゃない。

言葉では形容できない、悪意。凌辱ですらない、ひたすらに尊厳を犯すことを目的とした冒瀆。

この悪意に理由なんてない。ただ辱しめ、穢し尽くすことだけを目指した、純なる悪性。

その純性は人間のものじゃない。これほどの冒瀆が、人の手に依るなんて信じたくない。

これは恐らく、異端の感性。人々が共有する価値観から完全にか  
離れた魔性だ。

そんな存在を表すなら、きつとそれは――

「Sancta Maria ora nobis.

Sancta Dei Genitrix ora pro nobis.」

唄が、聞こえる

あらゆる墮落と退廃を表す、悪徳の調べ。

「Sancta Virgo virginum ora pro nobis.  
Mater Christi ora pro nobis.

Mater Divinae Gratiae ora pro nobis.」

響き渡るその意味は祝詞。オラショ

だがそれも、この歌い手にかかれれば全てが反転する。

歌詞の意味も、込められた思いも、何もかもを呪いの原材料として。

「Mater purissima ora pro nobis.

Mater castissima ora pro nobis.」

濁りきつた不協和音。

折り重なって輪唱される不快の音は、正気を犯す声の響き。

それは人の声帯では決して出せない。声の主が人を外れた邪性だ  
と雄弁に語っている。

声が近づいてくる。一定の方向からではない。まるで空間全体で  
包み込むかのように。

溢れる羽音。闇にも見紛う黒色の正体は蟲の郡。

羽搏き、蠢く蟲の大群が寄り集まり、一個のカタチを形成していく。

不快、不吉を示す唄の主、深淵の彼方より来たるその存在が姿を現した。

「あああ、あんめいぞお、ぐろおおろりああす——総ては主の御心のまま」

それは、あらゆる不浄の集合だった。

反転した僧衣カッツク、首に下げる逆十字、肌は一点の漏れのない暗黒で、狂気と悪意に濁った瞳。

周囲には鼻の曲がるような悪臭が充満している。それは腐乱死体に這いずり回る、糞を貪る死出虫が如き穢れの臭い。

人のカタチはしている。だがこの存在を前にしては、それ自体が人に対する冒涇だ。

断言して、これは人ではない。名状することさえ憚られる、獄の底より這い寄る混沌の化身。

——”悪魔”。

そんな単語が思い浮かぶ。

それ以上の言葉が思い付かない。この存在はまさしく、その名に込められた概念の結晶だ。

人々を穢し、陥れ、墮落への道を歩ませる。その意義で以て駆動する人類に対する冒涇者。

この世に解き放つてはいけない、地の獄に封じておかなければいけない邪悪だと、言葉を交わすまでもなく理解できた。

「——おはよう。そしておかえり、”聖杯戦争”へ」  
腐れた悪魔の視線がこちらへと向けられる。

刹那に走った悪寒。このままではいけないと、猛烈な危機感に後押しされて、

岸波白野しづぶんは、脇目も振らずに遁走していた。

校舎を駆ける。

目指すのは屋上。上へ、上へと一念で押して、階段を駆け上る。

それ以外の道はすでない。外へと続く道は、すでに蠢く蟲群の汚泥によって沈んでいた。

校舎内は静まり返っている。

人の気配はない。みな下校時間に従い帰宅したのだと、なるべくならそう信じたい。

美綴さんの凄惨な最期。脳裏に焼き付いた光景を思い返し、こみ上げる吐き気に耐えながら願う。

日常は奈落へ沈んだ。ここにあるのは正気を侵す悪夢の世界。

まともな人間がどうなるのか、考えたくもない。

背後から迫ってくる気配はない。

少なくとも、あの存在から離れることは出来ている。

それで油断などできるわけがない。あの正体不明な存在ならば、何をしても不思議じゃない。

そう認識しているからこそ、駆ける脚は止めない。目的地は見えずとも今はただ走るべきだと、そう信じて――

「うわあああああ!!! なんだよコレ!? なんなんだよおおお!!!」

校舎2階まで上がりきったところで、聞き慣れた声の絶叫が耳に入った。

振り向いた先に居たのは、後藤くんだった。

蟲群の闇に囚われて、その裡へと引き摺り込まれようとしている。

「岸波!? た、たすけて、助けてくれよおおお!!!」

恐怖と苦痛に顔を歪ませて、必死に助けを求めてこちらに手を伸ばす。

生きたいと縋る友人の姿。それを目の当たりにして、自分は――

「助けに行くのかあい？ 無駄だつて分かつてるクセに」

瞬間、こちらの意を削ぐように悪魔の声が響き渡った。

追われている気配はなかった。しかし気付けばこうして、すぐ近くにまで這い寄られている。

「彼はもう手遅れだ。侵食が後戻りできない所まで進んでいる。手を出せば君まで巻き込まれるよ。それじゃあ割に合わないだろう」

空間に響く声は、何処からのものか特定できない。

まるで領域内に無数に散らばった口より一斉に喋っているような、静かで、だが聞き漏らすことの出来ない粘着質な声。

語っている内容は事実だろう。

後藤くんは、もう助からない。その手段が自分にはない。

今から行っても、自分まであの蟲たちの餌食となるだけ。そんな行為は、無意味だ。

「大体、助けて何になる？ 足手纏いを抱えて、逃げ切れるとでも？

甘い見積もりだ。命が掛かっているんだよ。もっとシビアな見方をしなきゃ」

「自分の命さえ面倒見れるか怪しい状況で、役にも立たないグッズを助けたって仕方ない。

リスクとリターンの問題だ。助けられると仮定しても、まるで釣り合わないだろう、負わなきゃならない危険に対し、返ってくる成果がさ」

「なあに対処法なんて簡単だ。無視すればいい。責めるヤツなんて1人もいない。

物語の主人公としては締まらないけど、ご都合通りには罷り通らないのが現実つてもものだ。

さあ、迷うことはないだろう。すべきことは決まっている。君は前に進まなきゃ」

ああ、確かにその通りだ。

ここで出来る事はない。少なくとも無意味に命を散らす事だけは





助けを求めて差し出されたその手を、こちらもまた掴むのだ。

先のようにさせてなるものか。自分は決して、その命を諦めない――

「けどさあ――さすがにそんな”モノ”のために命を賭けるっていうのは、ちよつと自分を大切にしなすぎじゃないのかい？」

届きかけた手が、止まった。

止めたのは悪魔の声、ではない。

後藤くんの、友人だと認識していた存在の、直視したその顔に。

そこには、何も映っていなかった。

交わった視線の先、その瞳に見えるのは恐怖でも諦観でもない虚空の色。

まるで糸の切れた操り人形のように、先ほどまで必死に助けを求めていた友人は、その機能を完全に停止させている。

その”無感情”に押されて、助けようと伸ばした手は止まっていた。

「どんなに精巧に作られてもさあ、そいつらは結局”AI”なんだよ。与えられた機能を果たす以上のものを持ち合わせちゃいない。

この作り物の世界の、背景代わりに配置された飾りに過ぎないんだ。それらしく振舞っていても、中身なんかありやしない偽物さ――

作られた世界。偽物の友人。

悪魔の言葉が無視できない。それがなんだと振り切れない。

それがどうしようもなく事実だと分かっってしまうから、耳を貸さざるを得ないのだ。

「他人のために身を危険に晒してでもってヤツはいる。別に難しく考える必要はない。単に感情が納得しないからってやつでね。

まして友達相手なら尚更だ。そういう頭の悪さは、君たちの間で持て囃される典型的な美談ってやつじゃないかい――

「だけど壊れかけのマネキンに命を投げ出すとか、そりやもう単に頭がオカシイ痛い奴だろう！」

人助けに精を出すのは結構だけど、せめて助ける相手がどんなものかくらいは理解しておくべきじゃないかな」

自分にとつては居るべきでない場所。

その過去も、現在での関係も、総ては与えられた捏造のもの。

ならば今の自分の行為にも、果たして価値はあるのかと疑つてしまふ。

——そんな葛藤の最中に、後藤くんは沈んだ。

手を差し伸べられたはずの、そんな距離で。

蠢く蟲の群へと吞まれていくのを、茫然と眺めながら。

「ああ、なんてことだろう。友達だったはずの彼を見殺してしまった。悲しい辛い、なんて悲劇だ許せない——と、心境はそんなところかな。

さすが詭弁がお上手だ。自身への繕い方がとても堂に入っている。実にまっとうだ、人間として正しい姿だねえ。

だけど、他ならぬ悪魔ほくの前でそんな取り繕った態度をしないでほしいな。そんなものを見せなきゃならない相手なんて誰もいないだろう」

「そもそもの話——人を助ける助けがないで一々騒ぎ立てるなんて事、君がやるような事じゃないだろう？」

その言葉を聞いてはならない。本能が最大の警鐘を鳴らしている。まるで声の方から逃げ出すように、自分は再び駆け出していた。

階段を駆け上り、3階へ。

蟲の闇は下からせり上がってくる。とにかく上を目指さなくては。上った先、さらに屋上へと続く階段はこちら側にはない。3階に辿り着いたら廊下を渡り抜けなければならない。

——そう認識していたから、直視した惨状への衝撃も計り知れなかった。

廊下に広がっていたのは、沼だった。

蠢く闇、覆い尽くした黒色、汚泥と腐敗と糞虫で構成された穢れの底無し沼。

踏み入れればどうなるのか、そこに楽観的観測を含める事などとても出来ない。

そして、ああ、ああ——

一成がいた。詩寺部長がいた。氷室副部長がいた。三枝さんがいた。

他にも、他にも、他にも、他にも、他にも、他にも、他にも、他にも。

誰もが話した機会のある人だった。名前を知ってる個人だった。

知り合いだった。友達だった。自分の趣味を自慢したり、テレビの話で盛り上がりたりした。

そこには日常があった。その時間は確かに幸福だった。人としての当たり前の日々があった。

——そんな暖かな世界の象徴の総てが、穢れた蟲群の中に沈んでいた。

駄目だ、駄目だ駄目だこれ以上考えるな。

半ばまで沈んだ身体。浮かび上がって見える表情からは一切の色がない。

そうだ、思い出せ。彼等は総て偽物。ムーンセルに用意された過去の何者かを再現したNPC。

欠けていた記憶は戻っている。こんな事態になってようやく、いやこんな事態だからこそか。

聖杯戦争。魔術師たちウィザードによる生存競争。その舞台の運営のために配置されるAIたち。

総ては作り物。だから思うことはない。偽物が潰えただけで気にすべきことは何もないのだと、

そんな容易く割りきれるほど、人の心とは単純な作りをしてはいな

い。

思い出は確かにある。過ぎた日常は記憶に残っている。たとえ総てが偽物だとしても、その日常を幸福だったと感じた気持ちは本物だ。

作り物だと言われようと、そんな日常を彩ってきた存在の、こんな無惨な姿を前にして心動かされないわけがない。

それに、NPCかれらのことを無価値と呼ぶなら、そもそも自分だって――  
ともかく、道は塞がれてしまった。

後に退く道もない。前へと進むため、自分は道筋を見失ってしまったのか。

「道がないだつて？ いやいやあるじゃないか、目の前にさ」

不快の声音が響いてくる。

こちらの心を本人以上に暴きたてる、悪意に満ちた甘言が。

「なんだつて君はそんなにとぼけているんだい？ 目覚めたばかりで、まだ寝ぼけているのかな。」

それともまさか、自分はそんな人間じゃないだなんて、今さら言い出すわけじゃあるまいね」

聞くべきじゃない、聞いてはならないと分かっているのに。

その声から逃げられない。どんなに耳を塞ごうとも、悪意は心を侵して入り込む。

「なにも迷うことじゃないだろう。なんといっても、君にとっては手慣れたことだ。」

今までだつてずっとそうやって前に進んできたんだから。尻込みすることじゃないはずだろう」

だから止める、それ以上言うな。

分かっってしまう。予期できてしまう、悪魔の次の言葉が。

その手段だけは決して選んではいけないと、感情は確かにそう叫んでいるのに。

「友人だと思えていた相手でも、

人として尊敬できる先達者でも、

何の悪意も罪もない女の子でも、

語り合ったり時には助け合ったりした戦友みたいな間柄でも、

ずんばらばつさり切り捨てて、前に前にとって進んできたじゃあないかッ！

今さらそんな「モノ」を、踏み台にするくらいどうってことはないだろう？」

……ああ、確かに、その道ならば見えている。

沼に沈んだ者たち。この学園で岸波白野の友人としての役割を振られたNPC。

彼等の身体を踏み越えて行くならば、自分には先へと辿り着ける道があった。

けれど、そんな手段は許されない。

理屈ではない、感情がその手段を許容しない。

これ以上なく貶められて、尚もその尊厳を踏みにじるような真似ができるわけではない。

だって、これは対等な決闘じゃない。

生存を賭けた競争の果てじゃない。こちらだけが彼等の存在を搾取る。

これではあまりに一方的だ。一方の側だけで命を決められるのはフェアじゃない。

聖杯戦争というルールの外。その領域で行われる非道は、越えてはならない部分のはずだ。

「――進まなかったら、死ぬよ？」

そんな岸波白野の主張を、悪魔は一言で切って捨てた。

「なんだかそれっぽい理屈捏ねくり出してるけどさ、ほんととは君だつて分かってるんでしょ？」

対等でなからうが、決闘でなからうが、殺人は殺人だ。ルールの中でも外でも、欲望のために他人を殺すって結果はなーんにも変わりやしない。

手段が高尚か下賤かなんて趣味の問題だ。勝ち残ったヤツが强者っていうのは、覆しようのない真理だからね」

「ねえ、そろそろ止めにしようよ。そんな偽善を持ち出して、言い訳がましく取り繕うのは。」

言っただろう、僕は悪魔だ。なにも隠すことはない。正直になってもいいんだよ。

人を殺すなんて許し難い、誰かを蹴落とすなんてしたくないって、そんな風に悩める自分は普通だと、そう感じていただけなんだよねえ?」

違う、違う、違う、違う!

そんな、そんな事は、決して――

「ああ、だが勘違いをしないでくれたまえ。僕は君のことを蔑んでい

るわけじゃない。  
むしろその逆だ、大いに共感している。どこまでも人間らしい人間である君を心から尊敬しているんだ!」

「生きたい、生きたい、生きたいんだ切実に! たとえ誰に対してでも、この命を譲るなんてしたくない!

そんな君の欲望は正しい。とても単純で、純粹で、誰にだって理解できるからこそ、誰にも否定なんて出来やしない。

清く正しく公明正大な理想? そんなものはねえ、本当は誰も理解なんてしていないんだよ。単に物珍しい、聞こえのいい響きに酔っているだけだ。

ただ、死にたくない。これ以上に分かりやすく、理解し易い願いが他にあるかい?」

「さつき君が持ち出した偽善ぶりだって、実はそう悪いものじゃない。人間らしい良心の葛藤ってやつだ。

自分は外道畜生だって開き直るのもアリっちゃありだろうけど、それをやるともう友情万歳は謳えないからね。

ボクは君を見捨てない、死ぬ時は一緒だ、そんな台詞をほざいたヤツがいきなり手の平を返したら、そんな友情愛情は安っぽいだろう。価値なんてありやしない。

迷いの重さは、情の深さと同質量だ。安心するといい、君のその葛藤は、その友愛が本物だったって証だよ」

「だ・け・どー！ 今はもう尻に火が回ってる。決断の時つてやつだ。ポーズはもう十分だろう。そろそろ決めなくちゃならない。何をを選んで、何を捨てるのかをね。

何もせず、立ち止まったままで死んでいくなんてのは、君が最も認められないことだろう?」

背後から迫る醜悪な気配。

下の階から這い上がる蟲の群れ。それは今も迫っている。

このままでは遠からず追い付かれるだろう。そうならば命はないと、響く声ははつきりと告げていた。

本当に、この声は悪魔のものだ。

その一片までも悪意に満ちて、こちらの心を掻き乱す。

そして同時に、悪意に塗れながらも決してその本質を外していない。

質が悪い。どれほど否定したくても、言葉のとおりにするしかないなんて。

——苦渋と共に覚悟を決めて、蠱毒の沼へと一步を踏み出した。

足裏に感じる生の感触。柔らかく安定しない足場をしかと踏み締める。

そうしなければ倒れてしまう。脚には自然と力が入った。

必然、その感触も強くなる。徐々に底へと沈んでいく足場の感覚に。それを思うとどうしようもなく憤った。

この非力が憎らしい。

どうして何とかする力が自分に無いのかと、思わずにいられない。

どれほどに憤りながら、結局は言われたままにやっていて、それが尚更に腹立たしい。

「あう……」

と、足下から、聞こえないと思っていた声があった。

確かめるべきではない。視認してはいけないと本能は訴えてるの



に、感情は視線を下へと向けてしまう。

脚の先にいたのは、三枝さん。僅かな意識の残滓を残して、彼女がこちらを見上げていた。

「うふふふ、ひいっひっひっひ——きひはははははははははは！」

悪魔の哄笑と共に、上方より無数の芋虫が落下してきた。

接触と同時にひしやげて潰れ、汚らしい黄色や緑の体液が身体中に付着する。

それで受けた衝撃に大したものはない。攻撃としては効果があるとは思えない。

ただ、ひたすらに不快だった。まとわりついてくる粘着質な液体、漂ってくる腐れ切った悪臭と、もはや単なる嫌がらせとしか思えない。

それでも、効果は確かにあった。こみ上げた吐き気に揺さぶられ、身体の平衡を崩しかける。

何とか持ち直したが、その際に脚に余計な力が入った。直後に生じる、歪な感触も。もげていた。

不自然なカタチでこちらを見上げる、蒔寺部長の顔。

生気がない。あの豊かな活力なんて微塵もない。枯れ尽きた眼に群がる死蟲ども——

たまらず、吐き出していた。

限界だった。恥も外聞もありはしなかった。

自分の嘔吐物が彼等の顔に降り掛かる。その様もまた耐え難い光景として眼に焼き付く。

その惨状が更に嘔吐を加速させて、ああくそ、いくら電脳世界だからってここまでリアルに作りこまなくてもいいだろうに！

毒づく。込み上げる吐き気を振り捨てるように、自分に嘔吐物がかかる事も構わず頭を振って。

蟲の体液とゲロにまみれて、散々な様になりながら、それでも前進を再開した。

だって、ここまで来ておいて立ち止まったら、本当に何が何やら分

からない。

不快感と嫌悪感、極限の二つを両立しながら、心奥からの叫びに従い、脚を踏み出す。

友人だったモノらを踏み越えながら、その罪悪感を噛み締めながら。

ならば辿り着かなければ嘘になる。この罪業を無意味なものにしてはいけないから。

膝をつきたくなる身体を支えるその一念。それだけを支柱にして前へと進む。

ようやく、対岸まで渡り切った。

大きく息を吐き出す。渡河の最中はほとんど呼吸もできていなかった。

油断してはならないと分かっている。それでも今だけは、この解放感に酔いしれたかった。

「あ……ぐ……キシ、ナミ、さん……」

そんな自分の安堵に付けこむように、聞き覚えのある声がする。

ああ、分かっていた。神は都合の良い幸福を容易には与えてくれないが。

悪魔は実に気前よく、自慢の商品を次から次へと喜び勇んで持つてくるに違いないのだと。

——藤村大河、先生。

底抜けに明るく慕われて、日常を象徴する陽向ひなたのような人。

こんな場所にいるべきでない、彼女のような人がこんな世界にいてはいけない。

そんな人が今、自分の前に蟲に侵されながら立っていた。

「逃げ、て……」

それでも尚、掠れる声から吐き出されたのは、こちらの身を案じる言葉。

こんな異端な世界に墮とされても、藤村大河は生徒を思う素晴らしき教育者だった。

その姿を見て、思う。

たとい彼等が造り物だとしても。

再現された人格、そこから生じる感情は本物なのは、と。

そんな感情が積み重なって生まれる心、それこそが自分にとっての  
気付けば手を伸ばしていた。

助けられないと分かっているのに、先程は手を止めてしまったの  
に。

懲りないと言われても、恥知らずな真似だとしても、伸ばす手は止  
まらない。

明確な理由なんて付けられない。ただそれでも、何かがしたかった  
のか。

ほとんど反射のような行動で、感情に従ってその手を取ろうとし  
て、前へと踏み出す。

——ポトリ、と、その頭が落ちた。

目の前で、冗談のように呆気なく。

まるで古錆びた玩具のように腐れ落ちて。

伸ばした手は、結局また何も掴むことができなかった。

ザワザワ、と。

落ちた首の断面より、蟲が這い出てくる。

残された藤村先生の体内から、無数に湧き出す蟲の群れ。

その蟲らが寄り集まって、悪魔の面貌を形取った。

「改めて言うけれど、僕は君のことが好きだ。愛おしくてたまらない。  
決して生を諦めない姿や、非力なままでも足掻こうとする強さと  
か、その人間らしさがね」

ケタケタと、悪魔が嗤う。

親愛の言葉を吐きながら、最大限の侮蔑を込めて。

それは間違いではない。悪魔にとっては、その侮蔑こそが最高の賛  
辞なのだから。

「散々他人を蹴落としてきて、まだ自分はまともですみたいに振る舞



この世界の主だった少女の事を嘲笑って、全てが思い通りにいかない無様さを嗤いながら。

守りたいと願う相手から拒絶されて、そのために用意した箱庭さえも奪われて、果たしてその心境は如何程であろうか。

その苦悩の程を思う度、悪魔は愉悦に身を悶えさせるのだ。

「それにしても——」

同じく、悪魔が思うのはこの世界に囚われていた件の少年／少女。

悪魔の愉悦がより深まる。健気とすら言えるその足掻きは、己の趣向と実によく合うと。

「いやあ、いいなあ。実にそそられるねえ。」岸波白野「って子はさ」直視した悪夢にも屈さずに、足掻き続けるその姿。

どこまでも抗うことを止めない心に、悪魔は確かな敬愛を抱いているのだ。

そしてだからこそ、そんな悪魔の親愛とは凄惨なる悪意で以て表される。

ただ近場で眼についたから、ついでとばかりに使ってみたAIたち。

そう、ほんのついでだ。こんなものは悪魔にとって小手先の手段に過ぎない。

だが思った以上に素晴らしい姿が見れた。絶望の中で藻掻く姿には、激しく食指が動かされる。

「こんな本選でも前座ですらない場所で、どうしようなんて考えていなかっただけ。

いきり勃つてしまいそうだ。このままだと本当に、思わずどうにかしちまいそうだけ。」

醜悪なるその欲情のままに、蟲の悪意が駆動する。

大地を埋め尽くし、天さえも覆い尽くさんばかりの蟲群が蠢き出す。

キチキチと、溢れ出る悪欲に従って、哀れな獲物をその骨の髄まで貪り喰らわんとして、

「――神野明影」

己の名を呼ぶ”声”に、悪魔の動きが止まった。

天上の果て、遙かな熾天の御座より降りたるその声。

自身の”召喚者”たる声の主に、悪魔は笑みを潜めて礼を取った。

「――ええ。無論、分かっておりますよ。我が主」

「あなたほどではないにせよ、あまり堪え性のない性分だと自覚している僕ですが。

こんな開幕前の段階で主役級を本気で潰そうだなんて、演出家として失格だ。

あまりに僕好みだったので、ついつい欲望が口から出てしまっていた。お許しを」

その様には恭しき敬意がある。

それは従僕として、主の意向に従順であることの証左。

本来ならば”人間”であるはずの主に、悪魔は心からの臣従を誓っていた。

「ですが、ならばこそ”試練”には手を抜くべきじゃない。そこにはあなたも同意のはずだ」

「やり方がありきたりなのは認めますがね。だが王道を外すべきじゃない。あな。

ありきたりって事は、それだけ需要があるって事だ。正道外して奇をてらうにしたって、まずはその正道あつてこそでしょう。横道ばかりの意外性なんて、早晩に飽きられますよ」

「粗方掘り尽くされた命題でも、施し方を変えればまた別の絶望が顔を出す。新たな戦いに向かうに当り、そうした試練の方がおあつらえ向きでしょう」

他者を踏み越えて、己が生き残るという行為。

表側での戦いで行ってきたこと。それをひたすら醜悪に演出してみせた悪魔の手際。

それらも、全ては意志を試すための試練。主の意向に対し、悪魔の趣向は何も違えてはいない。

「それにしても、いいなあ。あなたのお気に入りとという事を差し引いても、あの健気さには頭が下がりますね」

「これが並なら、声を張り上げて、僕の名前を叫んで、怒り任せに斬りかかる。精々そんな対応が関の山でしょう。」

別段それを間違っているとは言いませんが、そんなものは怒りで自分の疵から眼を逸らしてるだけだ。だって何の解決にもならないんだから。

目の前の手頃な悪役に、責任押し付けて事なかれで場を納めているだけでしよう」

「けど、岸波白野の子はそうじゃない。自分の疵も、僕への怒りも、全部背負って捨てようとしない。」

転嫁するなり、無視すればいいだけなのにねえ。己の業というやつから逃げる事が許せない。

いやあ実に素晴らしい姿勢だ。僕としても相手をしていてとても喜ばしい」

無視はよくないのだ。無視は寂しい。

そうしたコミュニケーション不足は、悪魔じぶんにとって死活問題である。

最も、その無視自体が言うほど簡単ではない。

悪魔じぶんの悪意を無視するなど、まともな正気では不可能だ。

それを可能とするなら、それは生来の鬼畜外道か、主のような一種の超越者でなければならぬだろう。

「そういう連れない相手を口説きおとすのも乙なモンですけどねえ。」

岸波白野の子は違う。性質は一般的、感性だって決して外れたものじゃない。

だから受け止め方だってまともなものだ。そのまともな感性のままで、最後の一線だけは決して譲らない」

「あれでなかなか、岸波白野の子も結構な怪物ですよ。あの精神の不屈っぷりは、悪魔ぼくでさえ目を見張るものがある。」

断言しましょうか。岸波白野は強く正しい人間だ。絶望に抗い、強い意志で前に進むその姿は、人にとつての正しい在り方でしょう」  
「——だからこそ、僕は心からの敬意と親愛で以て、<sup>きしなみはくの</sup>彼／彼女」を絶望させたい」

その感情は矛盾しない。元来悪魔とはそういうものだ。  
人を墮落へと誘うことを旨とし、逆説的に善性を証明するため悪性を担った存在。

自分をそのように定義付けたのは、他ならない人間たち。<sup>あなた</sup>だから何の遠慮もありはしない。

神野明影は、在るがままの悪魔として、人々を籠絡し、貶めるだろう。

「まだ何も始まつちやいない。退場には早すぎる。演出家としてそれは僕も同意見です。

けど、だからって突破前提のぬるい関門なんて、あなたも望ましくないはずだ。

もしこの場で敗れるようなら、そこまでだったというだけの話。その時は容赦しない。決して逃しませんよ、僕は」

「あなただって、そのために僕を喚び出したのでしょ？」

問いかける悪魔に、主の声が答えを返す。

その答えを聞き届け、悪魔は心底から愉快気に哄笑を上げた。

「人の愛と勇気を枯らさぬためには、悪魔が必要ときましたか。あなたという人は本当に神とよく似ておられる。

ああそうとも、そうでなくちやいけない。それでこそ、この悪魔<sup>ぼく</sup>が仕える甲斐がある」

「悪魔<sup>ぼく</sup>に容易く穢されるような、地獄に引かれる人間なんか安い。その選別をしているだけだ。

あんめいぞおいえすまりいあ——我が主の仰せのままに」

悪魔の哄笑は続く。

その悪意で以て描かれる脚本、織り成されるだろう悲劇、絶望の未来を思つて。

現界を果たした蠅声の王は、高らかに悪徳の祝辞を謳い上げた。



階段を駆け上がって、ようやく屋上へと辿り着いた。

目的地へと到達した感慨などない。

目視できる外の光景。その異常さに我が目を疑う。

空が黒い。町が黒い。

見下ろした先の大地は、全てが黒一色に染まっている。

それはまるで夜の海のように。見渡して見える世界は、暗黒によって塗り潰されていた。

だが、本当の絶望はそこではない。

夜の暗黒に混じって、不快な羽音を響かせる影。

空に、大地に、あらゆる場所に蔓延るそれは、数の定義さえ馬鹿らしいほどの蟲の群。

醜悪なる穢れの群れは、校舎を這い上って徐々にこの屋上にまで迫っていた。

安全な場所などどこにも無かった。逃げる先もはや無い。

一片の救いさえ見えない状況、心に絶望の二文字が頭をもたげてきた。

「——追おいつういたあ♪」

そんな心に追い打ちをかけるように、耳に届いた悪魔の声。

その醜悪な姿を屋上に降り立たせる。そして姿を現したのは悪魔だけではなかった。

蟲に侵され、壊れたままに蠢く月見原学園の生徒たち。

折れ曲がり、腐れ落ちたままに駆動するその様は、まるでゾンビのようだ。

岸波白野しなぶにとって友人だった者たちが、蟲の悪意に動かされてこち

らへと迫っていた。

その光景に、改めて実感する。

過ごしてきた日常。自分が望んだ、平穩の日々。

そんな夢想の詰まった世界は、もう跡形もなく燃え尽きたのだと。

「残念だったねえ、ここが終着点だ。もう先に進む道はない。」

お友達だったモノを踏み台にして、ゲロ吐いて汚物まみれになりながら、ここまで頑張ってきたのにさあ」

「哀れ、どれだけ強い意志で歩んでも、失敗する時は失敗する。それが現実つてものだよ」

悪魔の声が、こちらの最後の柱を折りにかかる。

すでに詰みが確定したこの状況で、更にこちらの絶望を見るために。

「だけど、不思議なものだ。君だって本来は彼等と同じ者のはずだったのに。」

運命の悪戯ってやつかな。まったく神というものは人を翻弄するのが大好きだ」

「自我に目覚めた君と、目覚めなかった彼等。その差とは一体なんだったんだろう。」

元となった人間の性能？ まさか、だったら君より適切な人材が幾らでもいる。

先天的な要素は皆無で、後天的に誰かに手を加えられたわけでもない。ならやつぱり、不確定要素の生み出した偶然の産物か」

「ああ堪らない、不公平だ！ そう嘆く彼等の慟哭が聞こえるようだよ。」

なら、これだってそう怖がることじゃないかもしれない。

単に正常に戻るだけだ。再び彼等と等しくなる。なにも可笑しいことじゃないだろう」

生徒たちの手が伸びてくる。

まるで自分たちの元へと、こちらを引き摺り込もうとするように。

岸波白野だけが別の対岸に立っていることを妬んでいるとでもいうような。

「君は非力だ。岸波白野に戦うための力はない。それは君自身で分かってるだろう。」

誰に助けを求めたって、この世界に駆けつける者はいない。足掻く余地もなく無に消える。

これが絶望というものだ。君という価値は意義もなく潰えるんだ」  
もはや状況は袋小路。抵抗したところで先などない。

群がってくる腕。無感情なその力に引きずり倒される。

自分を見下ろす彼等の眼。何も映さない虚無がただ恐ろしい。

まもなく自分もあなるのだと思うと、恐怖で震えが止まらない。

怖い。もう無理だ。止めてくれ。発狂しながらそう叫びたいと、心の大半は思っている。

けれどそれでも、残った心の激情は、この絶望に屈することを良しとはしていなかった。

言われた通り、岸波白野が目覚めた理由に、明確な意図はない。

全ては偶然。突発的な不確定要素。他の誰であつても不思議はなかった。

選ばれなかった者らにとって、それは理不尽な結果なのだろう。憎む思いも仕方ない。

ならばその無念に従つて、諦めることが正道か。それこそが自分の取るべき道だと。

——否、断じて否、だ！

自分には手足がある。血と肉が通った、意志を持ったこの肉体が。

偶然かもしれない。それでも手にした以上は、自分には果たすべき責任がある。

選ばれた者と選ばれなかった者。分たれた二者の間で果たすべき責任とは、示す事だ。

選ばれなかった者を納得させる。その理不尽を道理へと変える、そんな姿を。

——選ばれた岸波白野の意志とは、目覚めるに値する。『輝き』であつたのだと。

群がってくる同胞たち。その重圧の中から、己の脚で立ち上がる。引き摺り込もうとする手を振り払い、押し退けて、自分は前へと進む。

目指す場所は屋上の更に上の給水塔。上へと逃げた先で、また上へと退路を繋いだ。

「おいおい、そんな所に逃げてどうするっていうんだい？」

もう空だつて蟲ほぐに覆われているっていうのにさ。上に逃げ道なんてないよ」

確かにそうだろう。上へと続く逃げ道などもはやない。

この声はどうしようもなく悪意に塗れているが、的外れなだけの事は決して言わない。

どんなに目を背けたくても、それが事実だから逃げる事ができないのだ。

だから、目を背けてはならない。

諦めてはいけない。諦める事はできない。

たとえこの悪夢から逃れられないのだとしても、この手足が動き続ける限りは、決して……!!

「自殺でもする気かな？ 僕にやられるのは氣にくわないから、決着だけでも自分の手でつて？」

それは自棄と言わないかい？ あまり感心できるやり方とは言えないな」

なるほど、きっとそれはその通りだ。

深い考えなんてない、こんなものはヤケクソだ。

ただ意地で突つ張つて、こんな真似をしているに過ぎない。

見据えるのは屋上の先。

囲うフェンスも何も無い、虚空へと続いた断崖。

それでも尚、蟲に侵されていない場所があるとしたら、そこしかない。

ただ”諦めたく”なくて、岸波しな白野びやくは屋上より飛び降りた。

「ふう………」

全身に掛かる落下感。

時間にすれば僅かな間。地表はすぐ間近に迫っている。

そんな最中に聞こえてくる、どこか残念そうな悪魔の呟き。

「おめでとう。それが正解だ」

そんな言葉だけを耳に残して、岸波白野しづのは虚無の海に沈んでいった。

## 戦争開幕

落ちる。落ちる。落ちる。  
底のない夜の海へと、岸波わたし白野は落ちていく。

この落下には果てがない。  
方向の意味がない。距離の概念がない。時間の経過がない。  
ひたすらに流されて、削げ落ちていく自己のイメージ。

虚無の中に浸されて、このままいけば身体も記憶も、何もかもが残るまい。

それはどうしようもない事実。逃れられない結末に思えた。  
一瞬か、それとも永遠か。

無重力に似た落下。終わりの見えない転落。変化のない無間。  
身体はまるで泥のよう。心も鉛のように鈍化していく。

一切の希望も見えない虚無に、自分は徐々に絶望へと向かっていった。

——けれど、ここで手放すのなら、自分はとうに終わっている。

魂の火種は残っている。

燻っているこの火がある限り、まだ終わりじゃない。

忘れない。終わらない。たとえ自分さえ残っていなくても、手放してはならないものがある。

諦めることはできない。たとえ奈落の底であったとしても、先へと向かって手を伸ばした。

「——ほう。自らを喪いながらも、まだ手放さないと足掻きを見せるか。」

凡夫の身にしては良き欲望の音だ。退屈に微睡む我を起こすとは、矮小ながらも強欲なものよ」

刹那、聞き覚えのない声が耳に届く。

あまりにも尊大な声だった。

どこまでも傲慢な声だった。

深淵の底であろうと色褪せることのない黄金。至高なる輝きを己の眼が認識する。

「無礼者。縁なき雑種の分際で、許しなく我を見るとは何事か」

「俗人が我に請う事を許さぬ。交わる事を許さぬ。本来ならばその不敬、死にも値する大罪よ。」

だが、その惨めながらも見応えのある足掻きに免じて、一度だけ挽回の機会を与えよう」

「問おう。貴様は私の”契約者”か？ 礼としてその身命を供物とする覚悟はあるか？」

唐突すぎる処刑勧告に息を呑んだ。

意味が分からない。そしてこちらの戸惑いなどお構い無しだ。

とにかく、答えなくては。

相手が言ってきた事は冗談ではない。本気だという事だけはよく分かった。

あまり答えに窮しては本当に処断されかねない。答えが期待外れの場合でも同じだろう。

だから、考えろ。この相手は何と問うた？

岸波白野が己の”契約者”かと。身命を供物にする覚悟はあるかと。

マスターかと問うのなら、この相手はサーヴァント。己と契約を結ぶのかと聞いている。

サーヴァント。聖杯戦争における闘争代行者。取り戻した記憶にその名は刻まれている。

ならば身命を供物に、とは？ この相手がどれほどの事を求めているのか予測がつかない。

少なくとも並大抵ではないだろう。こんな存在が求めるものが、そう容易いわけがない。

だが恐らく、彼の手を取れば光明を見出させる。

冷酷な声。それは無明の暗黒でも揺らぐことのない絶対者の声。

そんな彼と契約を交わすことが叶ったのなら、きつとこの虚数の海

からも抜け出せる。

それは確信に近かった。

この相手と契約を結べれば、無限の虚構だとして恐れるまでもない。その権威は地の果てまで、遍く大地へと手を届かせる力となるだろう。

そうと信じさせる力が、この声には込められている。

故に、返すべき答えは決まっている。

ようやく見つけ出した標、地の底に垂れてきた蜘蛛の糸。

掴み取る以外の選択肢などない。さもなければ自分はこの虚無の中で潰えることになる。

考えるまでもない。初めから答えは出ている。

だからその答えを告げる。この繋がりが断たれてしまう、その前に、

——否、だと。

「ほう。我とは契約を結べぬと、そう言うのだな？」

それが何を意味しているのか、無論分かっているような」

「ここで我との繋がりが失せれば、貴様はこの虚無に取り残されることになる。

その果てに待つものは無間地獄の責め苦だ。結末にあるのは虚ろとなつた自己の消失のみ。

いや、それは無いか。なぜなら貴様が契約者マスターでないのなら、不敬の罪によりここで我に処断されるからだ」

「我が拾い上げたその命、手放すもまた我の自由であろう。

貴様はそれを理解した上で尚、我が問いに否だと、そう答えたのだな？」

……そうだ。

馬鹿げた答えかもしれない。

せつかくの機会、唯一の好機を棒に振る。その馬鹿さ加減は分かっている。

だがそれでも、この相手をサーヴァントと認めるわけにはいかな



マスターとサーヴァントは運命共同体。関係は主と従者でも、互いの存在は対等だ。

サーヴァントと呼ぶ相手には、確固たる信頼が必要だ。自分の背中を預けられる、その信頼が。

たとえ命が掛かっていようとも、安易にその名を預けるわけにはいかないのだ。

黄金の男に浮かぶ酷薄な笑み。真紅の瞳に宿る殺意。

予感があった。自分はここで、この男に殺される。

抵抗の余地なく、あつさり。この虚数の海に岸波白野は散るだろう。

それを理解した。実感していた。

それでも尚、この相手をサーヴァントと呼ぶ事は間違いだと思ふ。信頼が置けない。相互理解ができてない。理由なら幾つも考えられる。

けれど最も重要なのはそれじゃない。あまりにも単純で、当たり前  
の理屈だった。

——岸波白野がそう呼ぶべき存在は、すでにいるから。

凶刃が走る。

それを岸波白野は認識できない。振るわれた刃は容易くその首を刈り取るだろう。

認識できずとも予感していた結末。だが抱くべき怖れもまた、無い。

岸波白野が喚ぶべき、名。

共に死闘の中を駆け抜けた、無二の戦友。

覚えている。常に自分の傍にいて、守り抜いてくれた英雄の姿を。

一秒先に迫った死。寸前に口にする、彼の名は——

——来て、アーチャー！

「——ああ、まったく。君はどうしてそういつも気を揉ませるんだ、マスター」

振るわれた金色の剣を、白黒の双剣が受け止める。眼に映るのは、雄々しくて頼もしい英雄の背中。

自分の前に立って、非力な自分に代わる剣として。

記憶にある掛け替えのないの相棒。その姿を目にすれば、恐れるものは何もない。

——サーヴァント・アーチャー。

岸波白野が契約を交わした英霊。

錬鉄の力を操る無銘の英雄。懐かしいその姿が今、目の前に在った。

「——ほう」

黄金の男が笑みを浮かべる。

獲物を前にみせる嗜虐にも似た、残忍な笑みを。

「王の下す裁定に異を唱えるか。相応の覚悟はあろうな、雑種」

「さて、どうかな。あいにくと要求される覚悟には覚えがないが」

対し、口調とは裏腹に赤い騎士は激している。

彼にとって忠義とは秘するもの。そして命を賭して守るもの。

主を害した黄金の男を見据えるアーチャーの眼には、確かな怒りがあつた。

「私の主はここに居る彼女だ。古錆びたの暴君の権威など振りかざしても、耳を貸す者はいないだろうさ、英雄王」

「抜かせよ、贗作者」

互いに互いの本質を捉えて呼び合う両者。

まるで顔見知り同士のように、ただし不倶戴天の敵に向ける殺意を込めて。

「その醜悪なる贗作で、我が宝物に触れるとは。もはや八つ裂きでも足りぬと思え」

「そちらこそ、傲慢に曇らせた眼を時には覚ますことを勧めよう。

確かに私の剣は偽物だが、偽物が本物に敵わない道理などない。

お望みならば、凡百の夢である我が刃、王の喉元まで届かせてみせるが？」

二人は譲らない。斬り結んだままの姿勢で動かない。

均衡の狭間で揺れる二つの力。僅かな切っ掛けでもあれば、両者の力は炸裂するだろう。

まさに一触即発。それを見守る自分も、迂闊な事はできない。動きがあるのをただ待った。

「……ハ」

やがて、その均衡が崩れる。それは激突ではなく、互いの剣が引かれる事で為された。

最初に剣を引いたのは、意外にも先に剣を振るった黄金の男の方だった。

「良い。所詮この場は虚構の領域。眼を開ければ覚める泡沫の夢よ。

その罪を許しはせぬが、王の裁定が下る場としては相応しくあるまい」

「ほう。珍しく殊勝なことだ。激した暴君の癩癩が、こうまで容易いとは意外だったな」

「たわけが。我は無価値なものを認めぬ。王が行うべき絶対の裁定を、そんな雑種の見る夢想で済ませては示しがつかん」

英雄王と呼ばれた男の視線が、こちらを射抜いた。

魂が凍りつくような感覚。たとえ視線の一つだとして、この男を前にしては安心できない。

気を緩め、迂闊な真似をすればそれだけで、たとえ味方でも容易く斬り捨てると、そう思えた。

「すでに立ち上がったというに、巡りの悪い娘よ。このような虚数にいつまでも囚われている事もなからう。

一度目を瞑り、正しく瞼を開いて、耳を澄ませば、自ずと世界の姿が映るであろうよ」

それきり黄金の男はこちらへの視線を切る。

まるで興味が失せたかのように、あつさりとその身を翻した。

それを止める術を自分は持たない。会話一つにも危機感を要求される相手。

だからこそ、そこで語られる事につまらない戯言はないと確信できる。

そう信じられるだけの力が、その言葉にはあつたのだ。

あの黄金の男が言うようにすれば、ここから抜け出す事が出来るだろう。

アーチャーを見る。

本当なら聞きたい事が幾らでもある。けれどそれも、まずはここから出てからだ。

その手を握る。伝わってくる温かさが、眠っていた心を完全に呼び覚ました。

言われた通りに目を瞑る。

虚脱感はそれだけで、感覚が本来の世界を取り戻していく。

アーチャーも、あの黄金の男も、視界から消えていく。

それは消失ではない。自分が本来在るべき居場所へと回帰しているのだと、そう理解していた。

最後の瞬間まで確かだった、触れ合った指の感覚。

たとえば何が起きようとも、その力強さだけは失われず――

「――だが、仮にも我を微睡みより叩き起こしたのだ。無礼の代償は支払ってもらおうぞ」

「矮小の身に似合わぬ欲の音を持つ者よ。我は貴様の道化ぶりを楽しむのみ。

無価値であれば斬って捨てる。が、その有り様が愉快であれば、あるいは褒美をとらす事もあるやもしれんぞ」

「——脳波の状態は……うん、OKね。」

アルファ波、ベータ波ともに正常。よし、覚醒した」  
声が聞こえた。

とても懐かしい気がする、聴き慣れた声。

「聞こえてる？　まずは焦らないで。もう意味消失の危険域は越えてるわ。」

ゆっくりと、落ち着いて。目蓋を開けてみなさい」

曖昧な意識がカタチを取り戻していく。

こちらを導く力強い声に引かれて、重く感じる目蓋を開いた。

「はい、おはよう。とりあえず大丈夫そうで安心したわ、はくのん」  
飛び込んだ視界に映った人の姿。その少女を自分は知っている。

……そうだ。彼女の名前は遠坂凜。

聖杯戦争で自分に手を貸してくれた、共に戦い抜いた戦友だ。

どうやらここは保険室らしい。

そのベッドの1つに自分は横になっている。

事情はまだ分からないが、どうやら彼女が自分を看病してくれたようだ。

挨拶代わりに『ありがとう』と声をかけた。

「どういたしまして。けど、こっちも色々確認したいことがあるから、挨拶はそれぐらいにね。」

悪いけどゆっくり休んでいてとは言えないわ。今の状態がいつまで続くのか、それさえ把握できてないんだから」

凜の語る内容からは、今の事態が決して安穩としたものではないと察せられる。

それでも焦りを見せず落ち着いた彼女の態度は、その矜持によるものだろう。

無論、そこには自分としても否はない。

ここは何処で、なぜ自分は眠っていたのか、知らなければならぬ事は幾つもある。

身を起こす。身体の反応はまだ鈍い。

それでも起き上がる事に支障はない。凜もすぐに元の調子を取り戻せると保証してくれた。

淹れてくれた一杯の紅茶。口にしたらその温かさは、消耗した身体に染み渡った。

「さて、早速確認していくけど、その前に。

はくのん。貴女、聖杯戦争の記憶はちゃんと持ってる?」

もちろんだ。忘れるわけがない。

月に存在するムーンセル。その使用権を賭けた魔術師たちによる生存競争。

ひとつの太陽系にも匹敵する万能の演算器、故にそこには”ムーンセル聖杯

”と名が付けられた。

岸波白野もまた、その戦いの参加者の一人。

遊びではなく、命を賭けた死闘なのだ。忘れられるはずがない。

「そうね。その認識で間違いはないわ。

じゃあ、聖杯戦争中の内容については覚えてるかしら?」

それも当然だ。

計七回戦にも及ぶ聖杯戦争、その過程で死闘を繰り広げた七人の魔術師たち。

誰一人として脆弱だった者はおらず、死という名の別離は記憶に焼き付いている。

自分はきつと彼等の事を永劫忘れないだろう。

手に掛けてきた罪業も含め、確かに存在した相手の意志を。

「あらそう。それじゃあ、倒した私についても覚えてるの?」

そもそも、こうして話をしている遠坂凜は、本当に味方だったかしら?」

っ!? 何を、言って——!??

待て、待て待て何かがおかしい!

あの三回戦の後。凜の戦いに、令呪を用いて行った乱入行為。

あの出来事を切っ掛けにして、凜はサーヴァントを失って……いや。

本当にそうだったか？ 自分が助け出したのはもう一方の相手、ラニⅡⅧの方ではなかったか？

二つの記憶が混在している。

どちらかが間違っているのではない。どちらも確かに存在した記憶だと断言できる。

そして手を差し出さなかった相手と、自分は六回戦で——  
おかしい、矛盾している。

同時に存在する二つの時間。両立など不可能だ。

なのに自分はそれを事実だと確信している。そんな自分自身に、何より混乱した。

「やっぱり、はくのんにも複数の聖杯戦争の記憶があるわけね。ならいよいよ、この推論も確証を帯びてきたか」

複数の、聖杯戦争の記憶？

どういうことだろう？ それではまるで、聖杯戦争が繰り返されているとでもいうようだ。

「……正直、まだ穴抜けの部分が多すぎて、はっきりとは言えないけど。

月で行われている聖杯戦争はループしているのよ。一度や二度じゃなく、それこそ何度もね。

可能性並行世界論、って分かる？ 積み重なった『IF』の話。あなたが覚えているのは、たくさんの”もしも”って事よ」

……にわかには信じ難い。

だが他ならぬ凜が言った事だ。彼女がそう判断したなら、きっとそれは事実に近い。

とはいえ、今はあまり気にかけてもしょうがない。

彼女自身も確証があるとは言っていない。まだ推論の域を出ていないのだろう。

ならこの問題をこれ以上話し合っても意味はない。凜に結論が出

せないなら、現時点ではそこまでだ。

だから、やるべきなのは現状の認識。

今がどういう状況なのか、どうしてそうなったのかを知るべきだ。「いつもの調子が戻ってきたわね。やっぱりあなたはそうでなくっちゃ。」

一応、できる限りでのスキャンはしておいた。今の段階で出揃う情報は、概ね揃ってると思う」

「はくのん。ここはね——」月の裏側”なのよ”

月の裏側？

聞き覚えのない単語に、思わず疑問符を上げてしまう。

「私たちが本来いた、聖杯戦争の舞台が月の表側なら、ここはその裏側。聖杯戦争の外なのよ。」

ムーンセルが『使用しない』と判断した情報の保管場所。記憶媒体の光が入り乱れた高次元。

悪性情報や虚数でさえソースとして成立する”世界の外”。虚構で満たされた禁断の地ってわけ」

その説明にはきな臭い単語が入り混じる。

自分には凜ほどの理解度は望めないが、相当に危険な場所である事は確かだろう。

だが、そうだとすれば今の状況はどうなのだろう。こんな風に落ちて着いていて大丈夫なのか。

「とりあえずそこは安心なさい。少なくともこの校舎内の空間は安定してる。虚数に溶けてそのまま意味消滅なんて事態にはならないわ。」

それもいつまで続くかは分からないけどね。校舎の外は今も虚数空間で満ちてるから、迂闊に接触すれば消滅よ。気を付けなさい」

「この校舎は私たちが表側で使用していた月見原学園のものよ。どうやら一緒に裏側まで落ちてきたみたいね。」

私たちがいつ、どの時点でこちら側に落ちたかは分からないけど、世界の外に出たことで観測域になかった時間を観測できるようになった。



虚数で運営される裏側では、時間の概念だつて意味を為さない。過程と結果が等価になる記録宇宙の法則。ムーンセル中枢と同じね。無限の演算シミュレートを繰り返す中で、観測された記録は過去も未来も全てが揃っている。その記録を私たちは取得したつてわけ。

最も、それも完全じゃないみたいだけど。特に”肝心”の部分は暈されてるのがかなりあるわ」

裏側に落とされた校舎。時間の経過が意味を為さない世界の外。表側の存在であるこの校舎だけが確かな存在を保っている。自分たちがこうしていられるのも、この場所のおかげという事か。

過去も未来も、一切の可能性を捨てずに観測し続けるムーンセル。そこで観測されてきた無数の聖杯戦争。矛盾した二つの記憶は、それぞれ別の聖杯戦争というわけだ。

なるほど、最低限ながら状況は理解した。

表側の状況はどうなっているのか、こんな事態になった原因は何か、不明な点は数多い。

だがそれでも、自らの立場は確認できた。ならば後は、何をすべきかを考えなければ。

そういえば、と気になっていた事を質問する。

凜はどの時間で裏側に落ちたのか分からないといった。だが自分の場合はそうじゃない。

日常に囚われていた自分。AIの『間桐桜』によく似た少女。そして、世界を蹂躪した悪魔。

全てが悪意に吞まれていく中で、最後まで抗うために闇へと身を投げた。その経緯を説明する。

「……？ 何それ、私はそんなの知らないわよ。

ていうかそれ、聖杯戦争中の事じゃないわよね。登場人物全員がNPCなんて、予選でだつて無かつた事よ。

あなただけが特別？ それとも私の方が例外なのか……できればもっとサンプルが欲しいわね」

やはり凜は、あの悪魔とは遭遇していないらしい。

あれの持つ醜悪さと悪意の深さは到底忘れられない。思い返すだ

けでどす黒い感情が蠢き出す。

そこで、ふと思った。

この場には自分と凜、二人のマスターがいる。どちらが例外なのか、この数では判断しづらい。

ならば他のマスターはいないのか。この校舎にいるマスターは自分たちだけなのか。

「……一応、もう一人。この校舎内でマスターの存在を確認してる。でも会ってはいないわ。」

何を考えているのか、用務室を改造して閉じこもったままなのよ。サーヴァントは連れてるみたいだし、マスターなのは確かなんだろうけど、こっちに協力しようって意思はないみたいね」

……姿を見せないマスター、か。

こんな時に正体の分からない相手は気になる。けどその前に、今の話で重大な事を失念しているのに気が付いた。

そう、サーヴァントの存在だ。

聖杯戦争における闘争代行のソースであり、共に戦場を駆け抜ける相棒。

岸波白野しづぶんのサーヴァント・アーチャー。彼の姿はここには見ええない。

何をするにしても、彼と合流するのが先決だろう。何処にいるのか、凜に訊いた。

「うん、大分頭の方も回ってきたみたいね。なら早速、やってもらいましようか」

「あなたのサーヴァントなら、今は二人共【2―A】の教室に居てもらってるわ。」

流石に病人のすぐ傍で、あんな空気のままで放っておくわけにはいかなかったから」

? 二人共、だって?」

どういうことだ? 自分のサーヴァントはアーチャーで、それ以外の相手なんて――

「正直、あの二人の対処が何より優先されると思うわよ。」

本気で一触即発だったし、同士討ちでサーヴァントを失うなんて事態になったら、目も当てられないでしょ」

思い出す。

虚無の中で出会った、黄金のサーヴァント。

自分に刃を振り下ろした男。アーチャーが剣を交わらせて対峙した。

もしもアーチャーだけでなく、あの男もまたこちらまで付いてきているとすれば――

弾かれたように保険室を飛び出した。

凜に言われた2階の教室へと急いで駆ける。

目的の場所に辿り着くと、勢いよくその扉を開け放った。

そこでは、双剣を手に睨みつけるアーチャーと、それを嘲笑う黄金の男が対峙していた。

――時刻は、岸波白野が目覚ました時より僅かに遡る。

教室の中央を間に挟み、対峙する二騎の英霊。

アーチャーと黄金の男。両者の間で応酬する闘志と殺意。

共にいつ剣を抜こうとおかしくはない。二人の間では闘争の空気が広がっている。

「我に対し、いつまでそのような眼を向ける、アーチャー」

「雑種といえど、英霊と呼ばれた者の闘気。慰み物としては悪くはないが、無謬の徒輩では興も乗らん。

構わぬ。物申してみるがいい、フェイカー。その首が、胴の上に乗っている内にな」

「あいにくと、貴様に語るべき言葉など私は持ち合わせせん。」英雄王ギルガメッシュ」

男の言葉を一蹴し、アーチャーは相手の”真名”を晒してみせた。

「貴様の存在は、災害のようなものだ。その無軌道な傲慢さは、他の誰にも理解などできまい。」

どうせ何一つ理解できんのならば、その矛先を逸らすか、災害そのものを鎮圧する以外の対処法など存在しない。

「そら、そんな相手と言葉を交わす意義がどこにあるという？」

「抜かすな、雑種。私の行いとは、即ち絶対なる王の裁定。有象無象の理解など望むべくもない。」

「そも、理解が得られんというならば、貴様こそそうではないか。その何もかもが贗作の有り様で、万民の理解を得られようはずもあるまいが」

この両者はまさしく水と油だ。

互いの在り方は、最初から理解など求めてはいない。

二騎の英霊にあるのは、どちらか一方の否定のみである。

「私が懸念することは一つだ。貴様は何を求めている？」

貴様のような英霊が、なぜあの深淵より顔を上げてきた。

……岸波白野マスタに対し、貴様は何をするつもりだ？」

「――ハ。これは随分と思入れがあるようだな、あの雑種に。贗作者風情がよくもそこまで情を移したものだ。」

「そうか、貴様の案ずる所はそれか。我があの雑種に手を出す事を容認できぬと？」

英雄王ギルガメッシュ。人類最古に君臨した絶対の王。

民を虐げ、財を収集し、この世の欲の限りを尽くした暴君。

「王の裁定は嵐に等しい。無二である価値観を共有する者はおらず、故に遍く者らには理不尽としか映らない。」

力無き者は、通り過ぎるのを待つしかない。その矛先が自分に向けられない事を祈りながら。

「そのような王を前にして、岸波白野マスタを守る赤い騎士の懸念は必然のものだ。」

事実、この王は傲慢な振る舞いのまま、主へ刃を向けている。

「いつまたその気まぐれな刃が向けられるか、またそれが如何に危険なものであるか、赤い騎士はよく理解している。」

放置など言語道断。決着をとというのなら、この場で付けても不都合はない。

「あの娘、岸波白野といったか。雑種の中でもとかく凡庸。顔立ちこそ悪くはないが、それとて一集団内で三番目といったところであろう。」

一見して、見張るべき価値など何も無い。ともすれば埋もれるだけの衆愚とも見えるが、その矮小さに見合わぬ強欲をも持ち合わせている」

「その愚鈍な克己で見せる足掻きぶりは、道化の見世物としてはそれなりのモノとなろう。」

「忘れたか？ 奴は許しなく微睡みの中にあつた我を起こすという不敬を働いている。その贖罪をせねばなるまい。」

「せいぜい道化の所業で以て我を楽しませろ。それこそ王に対する償いであり、貴様らの責務だ」

「なるほど。改めて理解したよ。やはり貴様という王は、まるで理解が及ばんとな」

「投影される贗作の双剣。手に馴染んだその武器をアーチャーは構える。」

「気迫だけの応酬であつたものが、ついに武器を取る。即ち、開戦の狼煙である事に他ならない。」

「その存在、彼女の側で放置しておくのは余りに危険だ。この場で禍根を断つ」

「凶に乗つたな、雑種。元より観せる価値も持たぬ贗作など不要よ。せめて散り様にて、我を興じさせるが良い」

「対するギルガメッシュに武器はない。相変わらずの徒手空拳だ。されど空気が変わる。王の背後に昇る尋常ならざる気配。連想されるのは解放を待つ暴虐の嵐か。」

「すでに互いの開戦用意は整っている。その意一つで、この場は英霊の争う戦場と化すだろう。」

——岸波白野が飛び込んだのは、まさしく一触即発のそんな場

面だった。

「ツ！ マスター!?!」

「ほう。噂をすれば、というやつか」

英霊二騎の視線が向く。

開戦寸前の空気の中での乱入者。必然、二騎の意識も主の方へと。

「……下がっていてくれ、マスター。このサーヴァントは、この場で排除する」

「聞き分けのない狗め。その醜悪な様、これ以上我が眼前に晒すでないわ」

ある意味では最良の、またある意味では最悪なタイミング。

発する第一声が、両者を諫めることも、または火蓋を切つて落とす結果とも成りかねない。

止めるべきか、止めざるべきか。その判断すら岸波白野からは難しい。

彼女にとってギルガメッシュは未知の相手。ましてつい先程には命まで脅かされた。

アーチャーの主張する排除は至極全うだろう。少なくとも友好的と見做す要素は皆無である。

そも、飛び込んできた白野自身、明確な対処など頭がない。

自分の預かり知らぬ所でサーヴァントを失う、その最悪の結末だけは回避しようと行動した。

すでに殺意で煮詰まった両者、双方を退かせる言葉巧みさなど岸波白野には望めない。

故に、この場を収めたのは岸波白野ではなく――

「あははははー！ 相変わらずみつももない事やってるんですねえ、セ・ン・パ・イ♪」

突如として現れた”もう一人の乱入者”の方だった。

空間を歪ませて、生じた穿孔より現れた黒衣の少女。

彼女の事を自分は知っている。小生意気な後輩、憎まれ口を言いながら慕ってくれた少女。

捏造された関係、構築された偽物の世界。そこに自分を閉じ込めていた、恐らくは張本人。

「それってひよつとして、『私のために争わないで』ってノリですか？

何時の乙女漫画です？ そんな王道ヒロインみたいな役回り、センパイに務められるとでも？

身の程って言葉知ってますかあ？ スポ根チックに泥臭いセンパイには全然似合ってますよ」

相変わらずの憎まれ口。

だがその姿は別物だ。黒衣を纏った少女にはかつては無かった重圧がある。

何よりも、その背に従えた黒い影。迷宮アリーナで見る敵性体エネミーとは別種の異形に、尋常ではない危機を覚えていた。

確信する、彼女は危険だ。

それこそサーヴァントさえも凌駕するような、そんな脅威を有した存在だと。

「こんにちは、哀れな子羊さんたち。ご主人様がお迎えにきましたよ。

駄目じゃないですか、籠の中から飛び出しちゃあ。小動物な白野センパイは、飼い主に保護されてなきや危なっかしいたありません」  
改めて、後輩と呼んでいた少女の姿を見る。

彼女の姿には覚えがある。取り戻した記憶の中に、少女と同じ顔が存在している。

そう、間桐桜。聖杯戦争で保険室に配置された健康管理AI。

目の前の少女の顔は桜そのもの。双子というより同一人物と呼んでも差し支えない。

彼女は本当に間桐桜なのか？ かつての日常の中で、そう名乗って

いた事も覚えてるが。

「……いらぬ記憶まで思い出しちやつてるみたいですね。あんな弱虫の性格ブスと一緒にされたら堪りません。

そうですね、”BB”とでも呼んでください。ベベ、でもベイビーでも、略称はお好きにどうぞ♥」

「といつても、それもすぐに忘れちゃうと思えますけど。だってセンパイはまた、私の箱庭で過ごす事になるんですから。

哀れで可愛い子リスさん。貴女の居場所は籠の中。愛玩動物だつて勝手してるとお仕置きです。

さあ、センパイ。弱々しくも健やかに、平穏無色の生活に戻つてく  
ださいね」

影が伸びてくる。それは風に舞う羽衣のように、あるいは獲物を捕らえる触手の如く。

アーチャーが前に出る。影の魔の手から岸波白野を守るために。

無論、その行動に否はない。言われるがままにあの学園生活へ逆戻りする気などなかった。

……けれど、その前に、どうしても。

BBと名乗ったあの少女と、ちゃんと話をしておきたい。

「マスター？」

アーチャーの、更に一步前が出る。

見据えるのは黒衣を纏った、桜と同じ顔の少女。

正面から視線を交わして、彼女へ問いを投げかける。

——どうして、こんなことを？

「っ!? 何を言つて……っ?」

あの日常は偽りであつたかもしれぬ。

けれど、あれが岸波白野の望んだ平穏であつた事は確かなのだ。

あの安息を、何でもない毎日を、幸福だと自分の心が感じたのは紛れもない事実。

それを留意したのが彼女であるならば。

BBという少女は、岸波白野に対して悪意を持った存在ではない。

むしろその逆。甲斐甲斐しく世話してくれたあの姿からは、こちら



への情が見て取れた。

「ちよつと、勝手な妄想ばかりしないでくれますか。都合の良い方向に夢見過ぎです。」

そりゃあ、ちよつと可愛いお気に入りくらいの感情は否定しません。けどそれぐらいですから。

つまりはワンちゃんと同程度の扱いです。あんまり調子に乗らないでくれますかあ?」

その生意気な態度も、日常の中で見せた姿そのままだ。

やはりこの少女だけは偽物じゃない。先輩を慕う素直じゃない後輩の姿は、彼女の本性だ。

ならばこそ、話をしたいと思う。

憎まれ口はその心の裏返し。あの日常の彼女のままならば。

自分の知る桜とは違う、けれど同じく岸波白野を慕ってくれる彼女ならば、と。

——手を取り合う事は、できないのかと。

「センパイ……それは……」

それに、こうして彼女を見ていると思いつく事があるのだ。

聖杯戦争における健康管理AI。後輩の関係もあくまで役割上ロールのもの。

だが、それだけじゃない。脳裏に過る記憶の中に、僅かに残った思い出が見える。

——保険室で過ごした日々。健やかな日常。

全てではない。その情景はほとんど残滓のようなものだ。

理由は分からない。けどもし、彼女の行動がその思い出に依ったものであるとすれば。

あるいは、分かり合う事も出来るのではと、思わずにはいられなかった。

「私、私は……」

伸びる影の手が止まる。

分かってくれたのかと、少女の様子に希望を抱きかけた。

それを——

「アハハハハハハハハハハ!!!」

淫らで、下劣な、欲望を何一つとして隠そうとしない、弾けるような哄笑が台無しにした。

「なんだ、なんなのだ貴様ら！　そうまで愚かしく在れるとは、いっそ見事よ！

ああ、いいぞ。その虚飾なき滑稽さ、道化としては合格点をくれてやろう」

黄金の男が見せるのは、嘲笑であり、侮蔑だった。

岸波白野を、BBと名乗った少女を、この男は滑稽だとして嗤っている。

自然、彼を見る視線が険しくなる。

自分たちのやり取りが愚かだと、そう侮辱されたのだ。

甘いという事は分かっている。だがそこまで嗤われる謂れなどないはずだ。

「噛み付くな、雑種。貴様には見えぬのか、あの女の本質が。

ヒトのカタチこそ取り繕っているが、中身は汚物スライム以下の猛毒だ」

「いかに理解を示したように見せようと、根本に存在するのは『個の保存』という定義のみ。

塞ぎ、閉ざし、貶め、保存する。人にとっては害悪としか呼べぬ存在よ。

覚えはないのか？　そのような魔性の一端を垣間見た事はないか？」

それは……違うとは、言えない。

かつての日常の中、自分はある少女に全てを喪失させられかけた。そこで重視されたのは個人の意思ではなく、より確実な『保管』であつたかもしれない。

「足掻き、凡庸のまま抗うが貴様の質ならば、あの女とは相容れん。

手を交えた所で、奴は貴様の脚を引き摺る。その結束は、貴様の歩みを重くするだけだ」

「——だが、滑稽なのはむしろ貴様だな、BBとやら」

人を外れた真紅の魔眸が、BBへとその矛先を移す。

「抱いた望みがために、貴様はその狂気の皮に己を覆い隠したのであるが。」

それがこの雑種に、少々絆された程度で揺らぐとは、被ったものは薄皮一枚と見える」

「よもや貴様、己が許されようなどとたわけた事を思っているのか？」

圧力さえ伴って紡がれる言葉。

不遜に告げられる王者の言葉。絶対の価値基準を持った論は、決して的外してはいない。

「この雑種の無様さは愚かであるが、醜悪ではない。無知故の無謀、そこに虚飾はないからだ。」

だが貴様は違う。貴様の信じる行いとは、貴様自身の価値を貶めるもの。進めば進むほど、その輝きを腐らせる。

他者に依存し、寄生して吸い殺す毒虫の類い。半端に目覚めた欲もこうなっては惨めなだけだ」

「――女、今の内に死んでおけ。それがおまえのためにもなろう」

それは殺意ではなく、彼なりの慈悲。

黄金の王は、あくまで少女の事を思った上での結論として。

その在り方には死こそが最上だと、躊躇う事無く告げていた。

「……ホントに、うるさい飼い犬ですね。躑がまるでなってますよ、センパイ。」

まあ、それでセンパイを責めるのも可哀想ですか。どうせこの狂犬を躑けるなんて出来っこないんですから」

停止していた影が、再び蠢き出す。

その存在に妖気を纏い、黒衣の少女は強者の視点でこちらを睥睨した。

「安心してください、センパイ。次の世界ではサーヴァントもセットで付けてあげますから。」

そのための衣装も用意してあるんです。忠犬気質なアーチャーさんにはきつとピッタリですよ。

あなたはわたしのサーヴァントの奴隷様。首輪と鎖とドックタグもモチロン完備の犬ファクション。きつとセンパイも気に入ります」

「ただ、と感情の熱を氷点下まで下げて、少女はギルガメッシュへと視線を移した。」

「あなたは駄目よ、英雄王。ここで虚無に戻りなさい。」

「あなたは出てきてはいけないサーヴァント。喚んではならない封印指定。」

害にしかならないあなたは、リサイクル再利用もなしでダストシユート廃棄処分です」

その言葉を宣戦として、蠢く影がこちらへと襲いかかった。

迎撃のために前に出るアーチャー。

向けられる影の触手に対し、手にした双剣で対抗する。

その戦い方はいつも以上に慎重なもの。まるであの影に触れる事を恐れているように。

「マスター、この影は虚数の情報体だ。迂闊に接触すればこちらの構造を乗っ取られる」

アーチャーの言葉で合点がいった。

彼の慎重な戦いぶりは、敵の危険性を察知した判断によるものだと。

……けれど、本当にそれだけなのか？

確かに、アーチャーは慎重な立ち回りをしていると思う。

だがそれを考慮した上でも、いつもの彼に比べて、攻め手に精彩が欠けていた。

虚数体の敵とは脅威だろうが、あれくらいの相手ならば何度も戦ってきた。

多少手こずるのは仕方ないにしても、ここまで追い込まれるのはおかしい。

「器を超えた使役を行っているのだ。この程度の弊害は必然であろう」

そんな自分の疑念を察したのか、ギルガメッシュが口を開いた。

「凡百のそれである貴様の魔力では、1体のサーヴァントが限度というところ。それとて最低限の霊格しか得られまい。」

「どうやら雑種なりの蓄積はあるようだが、それも我を加えた事で2つに分たれた。結果、奴の霊格は著しく低下している。」

戦力で測れば、おそらく半割以下であろう。あの影を相手取るには到底足りんな」

つまり、この英霊とも契約しているせいで、アーチャーのレベルが半減していると。

なんてことだ。というか、了承した覚えもないのに、勝手に契約されたと文句を言いたい。

そして、なぜ貴方はそんな呑気に解説なんぞしてるのか。

契約が2つだというのなら、そちらだって戦ってみせるのが筋のはずだろう。

そうでなくたって、相手の殺意はアーチャーよりも、明らかにギルガメッシュの方へ向いているのに。

「うむ。今しがた気づいたのだがな。どうやら微睡みの倦怠が思ったより祟ったらしい。

私の肉体は現在、最低値まで性能を落としている。おまけに魔力も足らぬとあっては、財の展開さえ覚束ぬ。

これでは蹂躪することはおろか、満足に抵抗することもできんな」  
全力で情けないことを何でそんな偉そうに言ってるんだ、この金ピカ!?

ていうか、抵抗もできないのにあんな挑発したのか。ある意味すごいぞ、このサーヴァント。

「まあそう言うな。何しろ2000年ぶりの目覚めなのだ。心身の鈍りは道理であろう。

むしろこれは僥倖だろうさ。貴様の足掻きは、弱者の側にあつてこそ映える類いのもの」

「見事この窮地を脱してみせるがいい。その様にて、我を興じさせよ」  
色々言っているが、要するにこのサーヴァントは役に立たないらしい。

とりあえずこの我様の事は置いておこう。今はアーチャーの方を何とかしなくては。

だが、どうする。

戦況は劣勢。援護しようにも今の自分には礼装の一つもない。

果たして戦術のみで覆せるのか。詳細の分からない敵の戦力に、その断言はできない。

せめて何か、他の手が欲しい。この劣勢を撥ね返せる、何かの助けが。

「よう。随分と盛り上がってるな。俺も混ぜろよ」

耳に届いた声。駆け抜けたのは青い疾風、貫いたのは赤い閃光だった。

アーチャーを襲っていた影を、一撃で串刺した一本の槍。

赤い魔槍。因果をも覆す宝具。かつての戦いの記憶が甦ってくる。

その魔槍に穿たれた者に生存の余地はない。ビクビクと生物の末期のように蠢いていた影も、やがてそのカタチを崩壊させた。

影の消えた視界に映る、青色の英雄。

『ランサー槍兵』 クラスのサーヴァント。遠坂凛の契約した英霊。

幾つもの記憶の中にあるかつての強敵。それが今、こちらに手を貸してくれていた。

「set装填。call魔弾・fortune宝石術式」

そして無論、ランサーがいるという事は、彼女もまた共にいる。

放たれた無数の輝き。煌く星の雨が黒衣の少女へ向けて降り注いだ。

けれど、BBの方もそれに気付いている。

自身へと向けられた攻性術式。それに対しBBの足下から影が伸びる。

星々を絡め取った虚無の影は、その効力の一切を喪失させて無へと返した。

「育ちを疑うやり方ですね。優雅さが足りないんじゃないですか、凛さん？」

「冗談。押し込み強盗に見せる礼儀なんてこれで十分よ」

——凛！

やっぱり、彼女が助けに来てくれた。

「サクラ、じゃないわよね。同型みたいだけど、構造体の規模がまるで違う。相当にメチャクチャやってきたみたいね」

「さあ？ どのみちあなたには関係ありませんよ。用もないので退がっていてくれませんか」

「あらそう。けどこっちには十分すぎるくらいあるのよね。」

あなた、月の裏側こっの事情ちに随分と通じていそうじゃない。是非とも聞かせてもらおうかしら。

もちろん、嫌だつて言ってもふん縛つて吐かせてあげるけど」

凜とランサーの2人で黒衣の少女を挟み討つ。

不具合を持った自分たちとは違う、完全な主従の連携でBBを追い詰めた。

それでも、挟撃されたBBには動揺した様子はない。

自身の優位を何一つ疑っていない、相変わらずの強者としてこちら全員を睥睨していた。

「嫌ですね、実力の見えてない人たちつて。馬鹿馬鹿しくつて呆れます」

たかが使い魔の一匹を倒したくらいで、なにを勝った気になっているんです？」

BBの足下より拡がる暗黒の闇。そこより無数に沸いて出てくる影の魔物。

先の1体など内の1つに過ぎない。その圧倒的な物量こそBBが持つ絶対的優位に他ならない。

「まともに戦力になるサーヴァントはランサーさんだけ。何も恐れる事なんてありません。」

これ以上のお遊びは無し。長引かせもしません。ここで全員に決着をつけてあげます」

影の魔物が一斉に駆動を始める。妖気にも似た戦意は、BBが本気だと雄弁に告げていた。

相手の戦力に対し、こちらの戦力はまるで整っていない。対抗できるのはランサーのみだ。

未知数も多い。有利不利で問うのなら、明らかにこちらの方が不利

だろう。

「行くわよ、ランサー。あなたの実力を見せてちょうだい」

「応き！ 得体の知れぬ相手、多勢に無勢な戦況、どれもこれも何時もの事だ。」

覆してみせるさ、この程度の劣勢など。我が槍に懸けて！」

だけど、強い2人は怯まない。

自らの不利など百も承知。そんなもの心を挫く要因にもなりはしない。

むしろ、それを正面から覆してみせると、彼等の意志は猛りを見せていた。

対立は決している。激突は必定だ。

BB、あの少女との事を思えば、複雑な感情も抱いている。

だが抵抗もせずに受け入れる事はできない。彼女が用意する箱庭は自分の居場所ではないと分かっているから。

程なく訪れるだろう激突の時を見据え、覚悟を決めてその瞬間に備えた。

「Sanctamariamoronobis.

Sanctamariamoronobis.

歌い声が聞こえた。

幾千、幾億もの蟲が立てる羽音の如き声。

聞いているだけで不快な感情を抑えられない。神経を逆なでる醜悪さを極限まで詰め込んだかのような音の羅列。

まさか、と思う。

忘れてはいない。あの悪性を目の当たりにして、忘却など不可能だ。



あらゆる不浄で以て日常を冒瀆した悪魔。下衆極まるその悪意はこの心に抉りつけられた。

激突の間際という状況も忘れて、本能はその存在に対する警鐘で埋め尽くされる。

しかし、それは他の者たちにしても同じだった。

凜も、BBも、英霊たちも、警戒を顕わにして身構えている。

当然だろう。その声も、気配も、無視して事を進めるにはあまりにも穢らわしい。

あれはまさしく人類悪。あの存在を横において、他の事柄に専心するなど英雄でも不可能だ。

「まさか、もう——!?!」

そんな中で、単なる警戒や悪寒の類いでなく、はつきりと苦渋の思いを示したのはBBだった。

遅かった、と嘆くように。彼女こそがこの事態を何より恐れていたというような。

月の裏側に精通しているだろう黒衣の少女。そんな彼女だからこそ、この事態に秘められたどうしようもなさが理解できてしまうのか。

世界が切り替わる。

黄昏の夕焼けを侵食し、全てを悪夢と汚泥の装飾によって書き換えて。

BBの侵入が世界に穴を開く行為なら、これは世界そのものを犯した所業。

環境に穢れを塗りたいく、醜悪な演出によって飾られたこの場は、悪魔の降臨地にふさわしい。

「あああ——あんめいぞお、ぐろおおろりああすう!!!」

地の底より昇った悪意の霧がカタチを成し、悪魔がその姿を現した。

絶望と混沌を演出する者。地獄の歯車を回す愉快犯。

人々の心を嬲り、貶めて、墮落させる道化師。きつとその存在は誰の味方でもなく、だからこそ危険極まる。

それは頭れてはならないモノ。絶望を弄び破滅を嘲笑う悪魔である。

「サクラ、サアクウラア、君という子はどうしてそう堪え性というものが無いんだい？」

手癖の悪さはいただけじゃないなあ。たとえば脚本シナリオでいうところの、君は所謂中堅どころだろう。

それが開幕早々、まだ右も左も分からない新規を手籠めにしてしまおうなんて、演出家として泣いてしまうよ」

嘲笑いながら語りかける悪魔に対し、少女は憎悪とも取れる感情を向ける。

単なる醜悪さへの忌諱感だけではない。BBは明らかに、その存在を憎み、怨敵と嫌っていた。

「ねえ、はくのん。あれがあなたの言ってた悪魔ってやつ？」  
凜からの問いに頷いて返す。

味合わされた悪意、言葉では到底言い表せないその醜悪さはすでに伝えてある。

「ほんと、洒落じゃ済まないわね。悪魔って表現、これ以上なく適切よ。」

悪性情報ってレベルじゃない。おそらくは神格級の、複数の悪魔概念の複合体って、あんなの喚び出すなんてまともじゃないわ」

ウィザード  
魔術師として自分よりも数段優れた凜。

そんな彼女だからこそ分かるのだろう。あの存在がどれほどの異端であるのかを。

そんな自分たちの視線に気づいたのか、にんまりと不気味な笑みを返してきた。

「注目してもらって大変恐縮だが、少し待ってもらえるかな。  
今回の僕はメッセンジャーだね。君たち全員に関わりのある話なんだが——」

そこで一端、悪魔が言葉を切る。

汚泥のように濁った瞳が動き、この場にはいない”誰か”を射抜いた。

「——その前に、1人。空気読めてないヤツを連れてくるからさ」  
瞬間、空間が蠢き出し、こことは別の何処かへと繋がっていく。  
蟲群が溢れかえり、開かれた穿孔より、何者かがこの場へと落ちてきた。

「うひゃあああああ!!?!」

そこから聞こえてきた声は、どこか間の抜けた、たるみきった肉の塊だった。

「はい、ようこそ。ジナコ||カリギリ君。

一応君もマスターの1人だからね。お越し願わせてもらったよ」  
ボサボサの髪、ダボったい服装、実に横へと太ましい体型。

およそ聖杯戦争という舞台にふさわしいとは思えない、端的に言っ  
てだらしないう女性であった。

「な、なんなんスか?! いきなりなんて事するんスか?! 許可の無い  
召喚モノは誘拐だってマジレス知らないんスか?!」

悪魔は彼女をマスターの1人だと言った。

ならばこの校舎に存在する姿を見せないマスターとは、彼女の事な  
のか。

少なくとも自分は見た事がない。表側の聖杯戦争でも、ある意味特  
徴的である彼女とすれ違った記憶さえ無かった。

「プライバシーの侵害ツス! 不法侵入ツス! ニートにアウトドア  
強制とか、もはや起訴も辞さない——」

「はいはいはいはい、ちよつと黙ろうかあ! ジナコくうくん?」

「っ!! ひ、ヒイ!!」

眼前に迫った悪魔の面貌に、ジナコなる人物は完全に竦み上がっ  
た。

直視するだけでも正気を犯される悪意の化身。それを撥ね返す強  
さを、彼女に期待する事はできないようだ。

「まったく、黙って聞いていればくっだらな事をベラツベラ宣っ  
ちやってさあ。

なんで君みたいな人種って、自分の意向が通ることが当たり前みた  
いに思ってるんだらうねえ?

不法侵入だあ？ この月におまえの領域エリアなんて1区画もねーから！

「なに知らん顔決め込もうとしてんだよ。自分の態度がどれだけ周囲の人間を苛立たせてるか分かんないの!？」

みんなが真剣に聖杯戦争やってる横でさあ。みんな真面目すぎい、必死すぎい、戦わずして勝つとかマジ天才テラワロスう？

ふざけてんの!？ ねえ、舐めてんのかなあ？ 通るわけねーだろそんなもん！」

「デキる女の隠しスキルう？ エリートニートお？ いつまで妄言抜かしてんだよ！」

おまえなんてサーヴァントで”アタリ”を引いてなきや、そもそもここにだつていないだろうが」

怒涛の勢いで紡がれる悪魔の暴言、というかマジレス。

辛辣ではあるが、正直いえば言っていることは正論としか思えない。

「当然であろう。もはや何を偽るまでもなく、あの女は墮落の極みだ」黄金の王様からの評価もこの通り。あの悪魔が語っている事は、やはり全て事実なのか。

改めて、ジナコ||カリギリなる女を見る。

だらしのない格好。弛みきった肉体。その姿には闘争という単語がまるで合わない。

そもそも、出発点にすら立っていないと印象を受ける。戦う覚悟はおろか、その現実からも目を逸らしているような。

表側の聖杯戦争を経験した者ならば誰もが知っている、互いの命を賭けた死闘の何たるかを。

ジナコ||カリギリからは、そうした決闘の場に立った者の気配がまるで感じられなかった。

「君もさあ、仮にもマスターの1人だろう。ちよつとはマシになったらどうだい。」

これは聖杯戦争で、生存競争なんだよ。分かる？ 戦わなければ生き残れないってフリーズの通りだよ。



く。

嘲笑い、罵って、対象をより深く追い詰めていけるよう弄んでいた。「戦うのは嫌、だから引き篋ってしよう。逃げて逃げて逃げて逃げ続けければ、どうせその内なんとかなる、と。」

こりやあひどい！ 重症だよ。生命として欠陥品もいいところだ。主の嘆く気持ち分かるねえ。

こんなのが蔓延り出すような世の中なんて、そりやあ間違ってる！ 何とかしなくちゃって気にもなるよね」

「君と似たような奴らなら結構いたよ。殺し殺される覚悟ってやつがまるでなってる奴ら。」

命懸けなんて嘘っぱち、デスゲームなんてよくあるフレーズだ、まさか本当に死ぬなんてあるわけない。

まったく能天気な馬鹿どもだよねえ。揃いも揃って生存本能が欠落してんじゃないのかい？」

「けど、そんな奴らだって戦ったんだよ？ 戦って淘汰されて、ちゃんと死んでいったよ。」

最後の瞬間まで全然気付かなかった間抜けも、薄々感づいていた小粒も、泣き喚きながらそんな結末を全うしたんだぜ。

君だけだよ、戦いもしないで負ける奴なんて！ 全ての周回で引き篋ってるとか筋金入りだ」

「おめでとおおおお!! 君こそナンバーワン、最底辺だあ！ 月に上ったマスターで、人間っていう種族の中で、君は最も価値がない」もう無理だ、これ以上は看過できない。

自分はジナコ||カリギリという相手を知らない。何の関係もない赤の他人だ。

それでも、これ以上あの悪魔にいたぶられるのを黙って見ているわけにはいかない。

たとえ相手がどれだけ未知数で危険な相手でも、このまま放置すれば本当に取り返しのつかない事になると予感して――

「もういいや。ここで潰してしまおう。居ても邪魔だし面倒だ。」

主も君に期待なんて持たないだろう。期待外れどころか関心を向

ける事さえ怪しいね。

……それに君だって、別段それと無縁の身というわけではないのだしよ」

「だって人間はあっさり死ぬ。命は別に特別なものじゃない。

本当は分かっていたんだろう。聖杯戦争で訪れる死が本物だって。知っていて君はここに来て、その恐怖に折れてしまった。

君の死だってそう大したものじゃない。誰が消えたところで世は事もなし。まして君の場合、誰の心にも残らないほどつまらないものだ。

幻想的なものなんて何も無い。あるのは冷え切った肉塊だけ。どんな絶望も、死という絶対の前には呆気なく消えるだけさ」

遍く蟲の群が溢れ出し、ジナコの周囲を埋めていく。

対するジナコに抵抗はない。ただガチガチと恐怖に震えているだけだ。

もはや猶予はない。すぐにあの悪意を止めるべくアーチャーに指示を出そうとして、

「そう、ちょうど君のパパとママの——」

「そこまでだ。これ以上の狼藉は容認できない」

とどめの一言が紡がれんとした直前、目を覆ったのは太陽の如き閃光。

黒と金の瘦躯。黄金の王とは異なる輝きで以て、金色の英霊がその姿を現した。

「ギ、ヒ——」

直後に振るわれた一撃を、岸波白野の眼では捉える事が出来なかった。

目にしたのは、金色の英霊が振るった一閃により、悪魔の身が八文字に両断された結果だけ。

あれほどの猛威を奮っていた悪魔を一撃の下に退けた、尋常ならざる槍の威力だった。

「……うわ。あれトップクラスだ」

凜の呟きに、自分もまた同意する。

一目見ただけでも分かる。あの英霊はサーヴァントの中でも最高格。

最強の一角として数えられるだろうその実力。他のサーヴァントたちも一様にして彼の力量に目を見張っていた。

「か、かか、カ、カルナあ！

遅い、遅いッスよ！ 助けにくるならもつと早くに来るッス！ 何してたんスか!?!」

「すまなかった。せめて何か一言くらいは言い返せるかと思っただが。

普段の自堕落な己を開き直るおまえの凶太さを誤解していたらしい。

おまえはやはり、見た目通りの懦弱さだった」

「見てたんスか!?! それで放置してたッスか!?!」

このハズレ！ 駄目サーヴァント！ 普段役に立たないんだから、こんな時くらいは役に立つッスよ！」

そして皮肉な事に、マスターであるジナコだけが彼の実力気付いていないらしい。

というか、真名までさらつと漏らしてるし。どうやら本格的に聖杯戦争への意欲がないらしい。

「……まったく、本当にサーヴァントだけは一流なんだから」

その声に、一瞬だけ緩みかけた緊張が戻る。

密度を増して黒い霧。蟲たちが群れて合わさり再び悪魔のカチを形成する。

尋常な一撃ではなかった。その身は確かに一度、両断されて潰えたはずだ。

だというのに、その様子には一切の痛痒を感じさせない。元より無形こそ本質だというように、己が崩された事に頓着していなかった。

——”不死身”。

自然と、そんな単語が思い浮かぶ。

蟲の群体にも等しいあの悪魔を滅ぼす事など、果たして可能なの



か。

「役者も揃ったところで、改めて自己紹介といこうか。僕の名前は神野明影。」

知つての通り、見ての通りの悪魔で、我が主の意を伝える代弁者だ」  
「この月の裏側で、きつと長い付き合いになると思うから、是非とも覚えておいてほしいなあ。」

きひひ、ひひははは、くくひひひははははははははははは

その言葉も、漏れる嗤いも、何もかもが不吉だった。

神野明影。そう名乗ったこの悪魔が関わっている。その事実こそ何よりの凶兆だ。

この存在は人を惑わし、貶めるもの。そこにはきつと悪意しかない。

BBとは危険度の質が違う。どうあっても相容れない、人類にとつての害悪だった。

「主、そして代弁者、ね。要するにアンタは誰かの使い魔ってわけね。それでその主から言伝を頼まれた、と。」

それはやつぱり、この月の裏側に落ちた私たちの現状に関係する事なんでしようね」

「正解だ。さすがに君は察しがいい。勿論、君の感じている疑問にはお答えするよ。そのために僕は来たわけだしね」

それでも、さすがに凜は冷静な判断を下す。

危険の程は承知しているだろう。それでも話せるだけの交渉余地はある。

月の裏側に落ちた自分たちの現状。その説明ができる存在は何より欲しかったもの。悪魔の方にも答える意思はあるらしい。

信用はできないが、単なるデータラメばかりとも考えづらい。話を聞く価値は十分にあるだろう。

「——神野おー！」

だからこそ、それを望まない者の妨害は必然だった。

BBの手にする教鞭。振るわれたその先より一条の光が奔る。

桃色に輝く閃光は、まるでレーザービーム。熱量を持った破壊光が

悪魔の身を貫く。

「やれやれ、困った子だ」

閃光の威力に砕かれた悪魔は、やはりと言うべきか、何事も無かったかのようにカタチを戻してみせた。

「サアクラ、そう我が儘ばかり言うもんじやないよ。確かに主演は君かもしれないが、だからといって他のみんなを蔑ろにする事なんて、主は望んでいない。

挑戦の機会は誰にでも。聖杯戦争は平等な殺し合いだぜ。チート積むのは結構だけど、勝ちの決まった出来レースなんて白けるだろう。

——汝、自らを以て最強を証明せよ。それが聖杯戦争の醍醐味さ」  
渋面を浮かべる少女を嘲笑い、悪魔はそう語りだす。

聖杯戦争だと、あの悪魔は告げた。月の裏側に落ちた事態も、それに通じたものであると。

聖杯を求めたマスターたちの殺し合い。たった1人の勝者を決める生存競争。

かつて地上で行われていたという闘争形態。これもその一種だという事か。

「——そこから先は、俺の方から話をしよう」

その声を聞いた瞬間、まず感じたものは『納得』だった。

カタチの見えなかったパズル。つぎはぎだらけの構図。

そこに1つのピースが当て嵌り、まるで全ての事象が繋がったかのような。

細部は分からずとも、この月の事象の中心にはいついかなるときもこの男。

他の何某であれ、彼という星の周りを回っている衛星はやくに過ぎないと理解した。

その覇気は強大。そしてひたすらに王道。

BBや神野のような妖気、邪気とは打って変わり、彼の発する念に

は一切の異端を感じない。

荒れ狂う天災のように強大で、かつ徹底した整然さを同時に感じる。

彼は正道を歩む者。雄々しく正しい道突き進み、果てに逸脱して超越を成し遂げた英傑。

強大すぎる正義とは、もはや悪と大差ない。揺るがない信念で以て裁きの災禍を喚ぶ魔人。

聖杯が強き魂を望むというのなら、彼以上に相応しい者はいない。何一つ恥じ入る事なく聖杯戦争を勝ち抜いて、熾天の玉座へと至った覇者。

かつての戦いを思い出す。その姿を目の当たりにすれば、忘れたままではいられない。

能力の有無ではない。他を圧倒し、あらゆる困難を踏破するその意志力こそが凄まじい。

人間として理解ができ、同じ人間であるからこそ、その強さに瞠目せざるを得なかった。

ムーンセルに君臨する月の魔王、甘粕正彦が自分たちの眼前にその姿を現していた。

「いやですねえ、主。わざわざ出てこなくても、僕に任せて頂ければよかったですのに」

「そう言うな、神野。なにせこの聖杯戦争の立案者は俺だからな。俺自らの口で語らねば納得もできんだろう」

悪魔と親しげに語り合い、こちら全員に眼差しを向ける甘粕。

今のやり取りだけでも、あの悪魔の召喚者が誰であるのか明白だ。いや、そもそも彼以外にアレを従えられる存在が、この月の何処にいるだろう。

自分たちに起きた事態とて、彼ならば納得できる。答えなど初めから1つしかなかったのだ。

「懐かしき者、初めてまみえる者と様々だが、まず改めて名乗りを上げておこう。」

俺は甘粕正彦。聖杯の現所持者であり、この月の裏側におまえたち

を招いた元凶だ」

甘粕の語りに口を挟む者はいない。

マスターたちは勿論、英霊たちまでも、魔人の発する力の暴威に気圧されている。

あの黄金の男でさえも、傲慢の口を噤んでいるのが感じ取れた。

「表側の時間で言えば、おまえたちを招いたのは予選が終了し128名のマスターが出揃った直後。

聖杯戦争の初期に存在する七つの校舎。それをおまえたちごと月の裏側へと引き入れたのだ」

「まあ、やり方は校舎ごと虚数の海に叩き落としただけと、結構適当なだけだね。

予選みたいなものかな？ 仕切り直しをするわけだし、選抜も改めて行おうって事だよ。

ええと、実際にこの裏側まで来られたマスターは——」

「——21名、か。まあ及第点つてとこじゃないかな。正直、いきなり全員脱落で開幕前に雲散霧消つてオチも有り得たわけだし」

……呆気なく告げられた言葉が信じられない。

それはつまり、すでに5分の4以上のマスターがああ虚無に消えてしまったという事か。

簡単すぎる。消えていった者たちの生命があまりに軽い。その無情さに目眩さえ覚えた。

「そんなに怖がらなくてもいいだろう。だって聖杯戦争なんて、ハナから1人しか生き残れないように出来てるんだからさあ。

安心しなつて、有名どころはちゃんと残ってるから。消えていった連中は、元より表でも勝ち抜く見込みのなかった連中だよ。

……むしろ、君にとつてはこっちのルールの方が好都合だと思うんだけどねえ」

「裏側を満たす虚数の海に、深淵へと貫き通した迷宮アリーナを築いた。

拠点となるこの校舎からの入口も開いてある。表側と同じく底へ底へと進み月の中心部を目指していく。

その果て、虚数の海を渡った先で”裏側の聖杯”へと到達するの

だ」

裏側の、聖杯？

この月の裏側にも、聖杯があるというのか？

「ここは陽の光が当たらない月の裏側。悪魔ほくのようなモノが保管される廃棄場所だ。ジャンクヤード」

表と裏の差はあるけれど、行き着くゴールは同じだよ。月の中心、つまりムーンセル中枢さ」

「表側の正規の手順でないとはいええ、到達者は月の片面を掌握する事になる。」

半に分かれようと、万能の力は絶大だ。叶えられない願いもそうはあるまい」

彼等の言葉に嘘はないのだろう。

表側でも裏側でも、最果てで至る場所は同じ、聖杯の御座。

聖杯の裏側を掌握する事は、表側の甘粕と同等の権限を得る事に等しい。

だが、どうしてそんな真似を？

わざわざ皆を裏側に落としてまで、こちらでの戦争に拘るのか。

「なあに、要はテコ入れさ。表での結果があまりに不甲斐ないものだから、趣向を変えてみようというわけ。」

君らにだって記憶があるだろう。無数に繰り返された表側での聖杯戦争。けれどその結果は、常に一緒だった」

「我が主の全戦全勝。敗北を観測する事は一つもない。過程は色々異なっても、結局は主に届く事はなかった。」

つまりは主の望む水準にはまるで達していないというわけだね。後継にも成り代わるにも、君らのデキは満足できるものではなかったのさ。

もはや表側では望み薄だろう。だったら新規一転、新しい環境で新鮮な戦いを始めようってね」

無数に繰り返された表側の聖杯戦争。

そこには様々な過程があった。勝ち上がった勝者も、決して誰と定まっていたわけではない。

その中において、甘粕カハシだけが一度の敗北もなく常勝の覇者として君臨している。

まさしく絶対強者だ。

絶対とは、決して揺るがないから絶対。何人が相手であれ、甘粕の意志は必ず勝利を掴み取る。

善悪を超えて、もはや敬服するしかないその強さは、かつての戦いで嫌というほど思い知らされていた。

「ここは陽の当たらない月の裏側。ルールでガツチガチに固まった表側と違って、月の眼が届かない裏側なら何でもアリだ。」

準備期間モラトリアムも決められた決闘もない。いつ、どこで、誰と戦おうが自由！ たとえどんな手段に頼ろうとも、聖杯に辿り着きさえすればいいのさ」

「外道の手法を用いるもよし。正攻法に進むもよし。ただ聖杯を目指す意志、それだけを求めよう。」

そのために周回の記憶も開示した。抜け落ちている部分も、過去と未来の時間が等価なこの裏側であれば回収サルベージ可能だ。

かつての敗退の記憶を積み上げ、未踏の域に至るもよし。その突き進む意志こそ素晴らしい」

悪意のままに嗤う悪魔と並んで、純粋な期待と親愛を胸に甘粕正彦は笑っている。

その姿はかつての対峙の時と何も変わっていない。彼は相変わらぬ、人の意志が見せる輝きを愛している。

愛しているからと失われるのを憂い、ならばこそと試練を与える。極端に過ぎるから完全否定が難しい。

並び立つ悪魔しんのあまかすと勇者を見て、思う。

その性質には確かな善性を備えた甘粕。両者の求めるものは対極にあるはずなのに。

どうして、彼等の見ている光景は共通しているのだろうか、と。

「……勝利条件は？」

「ん？」

「聖杯に辿り着けば、と言っても細かい条件はちゃんとあるでしょう。」

早い者勝ちってこと？ 誰であれ先着したなら、その瞬間に勝者は決定なの？」

自分が圧倒されてる中で、先見を示したのは凜だった。

示された事実にも対応して、すでに彼女は未来を見据えている。

眩しいとさえ感じる彼女の輝きつよさ。それを見て甘粕は満足気に笑っていた。

「いいや、まさか。それでは小賢しさだけのつまらん輩すら勝利者に成りかねん。

問うべきなのは勇進の気概だ。その無い者の勝利など断じて認めんよ」

「ここはムーンセルと同じ記録の法則で成り立つ”墮天の庭”だ。

時間の概念がないここでは、結果の有無こそが全ての価値を握る。

先に辿り着いたかではなく、誰が辿り着けたかを裁定の基準としている」

「たとえ先に到達しようが、後に到達した者と権利に大差はない。

1人の到達者が現れようと、後続の可能性がある限りは聖杯の使用権は得られない。

この裏側のあらゆる意志を砕き、真に無二なる勝者となった者に聖杯は降りてくる」

「そう。要するに、他のマスターと決着をつけずに聖杯を手に入れても無意味ってことでしょ。

中途半端に済ませる甘ちゃんなら、聖杯は得られないってね」

「ああ。その理解で何の問題もないな」

凜の問いに頷き返す甘粕。

その様子には、闘争への覚悟を示す意志への賞賛の念が溢れていた。

「至った聖杯で以て己の祈りを成就させるもよし。異なる道であろうとも歓迎しよう。

……ああ、無論、その力で以て再び俺に挑む、という願いは是非に受け入れるとも」

甘粕正彦は変わらない。表と裏の違いはあれど、本質は全く同じ。

全ては試練。意志を練磨し輝きを取り戻す場。その前提がある限り、そこには何の裏もない。

これは公平な試練であり、その成果も本物だ。

甘粕は事を成し遂げる意志を愛しているから、惜しみなく力を分け与える。

裏側に築かれたという迷宮<sup>アリーナ</sup>。その先は確かに聖杯へ通じていると信頼できる。

「と、いうわけだよ、サクラ。」

過保護なものもそのくらいにして、君の拠点<sup>エリア</sup>に戻つたらどうだい？

彼等だつてもう君と同じ参戦者だ。特別扱いなんて通らないよ」

「でないよ、さすがにこれ以上は見過ごせない。

手を引かないのなら、僕と主も介入せざるを得ないけど？」

嘲るような神野の言葉に、BBが殺意さえ込めた視線を返す。

だがそれだけだ。彼女は動けない。状況はすでに彼女の手を離れている。

この場にいる、甘粕正彦。

彼の存在がある限り、もはや何の思惑も通らない。

それは単純な力の問題。誰も彼には敵わないのだから、通せる思惑などありはしない。

もし仮に、この場にいる戦力が一致団結して甘粕を討ちに動いたとしても。

彼には決して勝てないだろう。実力云々以前として、同じ次元に立っていないのだから。

創造主の大権能。裁きを与える天上の神格。自分たちは甘粕と勝負の場にすら立てないのだ。

BBも、きっとそれは分かっている。

だからどれだけ悔しくても、ここは退かざる得ないのだ。

——ほんの一瞬、何かを訴えたがっている彼女の眼差しと交錯する。

逡巡は一瞬だけの事。

再び空間を歪ませて、生じた穴より立ち去っていった。



「困った子だよねえ、本当に。勝手なことばかりなんだから。我が儘で、素直じゃなくて、その上抜けてて優位が崩れると途端に弱くて。」

……愚かで、盲目で、自分が何を貶めようとしているか気付こうともしない」

「まあ、そんな馬鹿で弱いところが愛らしいんだけどねえ」

BBの消えた先を見つめる悪魔<sup>しんの</sup>。

その眼差しには、他に向けるものとは違う熱が宿っているように見えて。

執着の中に込められた悪意が、どうしようもなくおどましかった。

そんな視線を向けてる自分に、ぐるんとその首を一回転させて、嫌悪しか沸かない仕草のまま神野が語りかけてくる。

「どうしたんだい？ 浮かない顔じゃないか。君はむしろ、この事態を喜ぶべきだと思うんだが」

告げられる言葉に、覚えなどない。

熾烈な殺し合いを強いる聖杯戦争。その発生を歓迎できる感性を自分は持ち合わせていない。

「それが違うんだよ白野ちゃん。言ったらう、このルールは君にとって望んだものであるはずだ」

「表側の聖杯戦争じゃあ、敗者の運命は決まっている。

戦わなければ死、敗北すれば死、そのルールからは誰も逃れられない。」

君にとって敵となったマスターは決して憎い相手じゃなかった。むしろ人間としては好感を持てる相手も多かっただろう。

死なないために戦った君は立派だよ。けれど、明確な動機のないまま、彼等の命を刈り取る事にはずっと罪悪感に苛まれてきたはずだ」

「君は憎んだはずだよ、残酷な結末を強いた聖杯戦争を。」

だからこそ願ったはずだ。死にゆく彼等の、生存の道を模索することを」

……その言葉は、あまりに正鵠を射ていた。

何の祈りもなく、存在さえ曖昧なまま戦いへと身を投じた自分。

ただ死にたくない、停滞する事を拒んで闘争の渦中を突き進んだ。

それでも、死闘の後には思わざるを得ない。彼等を押し退けても生き残る価値があったのかと。

友人だった者、尊敬できた人、か弱いだけの少女。切り捨てた命への苦惱からは逃れられない。

死デッドラインの防壁に隔てられ、消えゆく彼等を目の当たりにする間。

納得などしていなかった。容認など出来なかった。その命を救いたいと切に願っていた。

岸波しづな白野はくごは聖杯戦争を憎んでいる。その残酷な結末を強いる戦いを決して認めない。

だからこそ、あの3回戦の折、自分は令呪と引き換えにしても彼女たちを救おうとしたのではないか。

「だが裏側うらこにそんな結末もはない。全ては君次第で決まることだ。

意志を砕いて、と主が言っていただろう。そこが肝でね、なにもそれは相手の死を意味しているわけじゃない。

要はその可能性さえ消えればいい。他のみんなが諦めてさえくれればそれは叶う」

「説得せとくだろうが戦いだろうが、相手が納得して手を引いてくれさえすれば条件としては十分だ。

マスターを殺す必要なんてどこにもない。何ならサーヴァントだって生かしてもいい。

聖杯に辿り着きさえすれば、全ての人たちの月からの帰還だって可能だよ。君の祈りでみんなを救ってあげればいいんだ。

——裏側うらこでなら、それができる」

ああ、確かにそれは、自分が望んだ事だろう。

死にゆく者らの絶望を覚えている。彼等に手を差し伸べたかった。聖杯戦争の宿命を否定する。それこそ自分が求めていた事だった。

「喜びなよ——君の願いはようやく叶う」

そう、それが事実であつたから。悪魔が告げたその言葉はあまりにも不吉だつた。

「……甘粕正彦。このムーンセルで超越の位に至つた男か」

その時、慄いている自分を置いて、黄金のサーヴァントが前に出る。真紅の双眸が直視する先、そこにいるのは甘粕正彦。

その眼光は今までと趣きが異なる。自分たちを見ていた時と明らかに違つていた。

一言で言い表せば、遊びがない。常にあつた慢心や愉悦が今の彼からは削ぎ落とされている。

「邂逅は初となるな、英雄王ギルガメッシュ、偉大なる太古の人類王よ。俺は貴方に対して、心からの畏敬の念を抱いている」

「ほう。我が拝謁の榮に預かり、自ら礼を示すとは殊勝なことよ」

「当然だろう。遙かな原典の先達者として、俺は礼節を重んじずにはいられない」

甘粕の方もまた、黄金の王には礼を尽くして見せていた。

英雄王ギルガメッシュ。先程から何度か耳にするこのサーヴァントの真名。

彼に恭しく頭を下げてみせる甘粕も、かつて自分に示した敬意とは異なる感情を見せていた。

「不遜な物言いよな。我の後進を歩む名誉を、いつ貴様に許した。

王の許しなく天地の理の上に立つその不敬、万死でも償いきれん大罪と理解しているか？」

「頭が下がる。貴方の眼が届かない中で、俺は超越の座を掠め取つた。ああ、返す言葉もない。

少なくとも貴方の法において、それは許されざる事なのだろう。絶対であるその王権が侵害されるなどあつてはならんものだから。

己という”絶対”を譲らず、憚る事無く己が法で世を裁く王の意志。かくも強靱なるその我意に、俺は尊敬を禁じ得ん」

「だからこそ、俺も譲るわけにはいかない。

この世界は今を生きる俺たちのものだ。その変革は自らの手で行わなければならない。

停滞に惑った世界を正すこの信念。容易く明け渡すなど断じてで  
きん」

「その価値観で俺を裁くというのなら、それを凌駕してみせよう。そ  
れこそ俺が示せる敬意であり、贖罪だ」

彼等が何を話しているのか、自分にはその意味が分からない。

それでも二人の間では話が通じているというのは確かだ。そこ  
は互いへの理解がある。

上か下か、ではなく対等に。同じ目線の上に立って二人は対話を交  
わしていた。

「人を治め、人を裁き、世のあるべき正しさを示した原初の王。

人々の何たるかを定めたその偉業に、俺は心からの感謝を伝えた  
い」

「——ありがとう。我ら人間が光を持つ事を許してくれて」

甘粕のその言葉に対して、ギルガメツシュが見せたのは笑いだっ  
た。

先までの愉悦の混じった嘲笑ではない。純粹で朗らかな、まるで友  
に見せるような笑い方。

そんな笑顔を見せながら、長年の宿敵を前にしたような殺意をも向  
けていた。

「——甘粕正彦。刻んだぞ、その名。時代の果てに生まれた新たな裁  
定者よ。貴様は我自らの手で殺すと決めた」

「それは光栄だ。相對の時を楽しみにするとしよう」

ギルガメツシュの口から出たのは殺意の宣誓。

だというのに、甘粕が返した感情は友誼の約束でも取り交わしたよ  
うなもの。

まるでそれこそ最大の親愛だというように、2人の間では納得が成  
り立っていた。

「宣戦はここに、開幕は為った。戦う意志を持つ者たちよ、己が祈りで  
聖杯へと手を届かせてみせろ」

開戦の宣誓が告げられる。

甘粕に誰かを特別視する感情はないだろう。好感の差はあれど、機

会は万人へ公平に。

この場にいる全員、そして裏側に落ちた全てのマスターたちに聖杯への道は開かれている。

「ああ、それとな」

最後、付け加えるように甘粕は言った。

「どうあれ俺は、この戦いを最後のものとするつもりだ。たとえ如何なる結果になろうとも、やり直しは行わない。

だからこそ記憶も返した。また繰り返すのだからと、つまらん考え方などしてくれるなよ」

「決死の覚悟で挑むがいい。それこそがおまえたちの輝きを引き出すのだから」

その眼光には万感の期待と、試練とすべき災禍の意志を込めて。

従僕の悪魔を伴って、甘粕正彦はその場より姿を消した。

甘粕正彦たちが姿を消した後、場に残ったのは沈黙だった。

それはまるで嵐が過ぎ去った後の静けさ。

一触即発だった空気も何処へやら。あの存在感を受けて闘争に興じるなど出来そうにない。

それほどまでに圧倒的。かつての時と寸分変わらず、彼は月に君臨する魔王だった。

「微睡みに沈み幾星霜、すでに俗世への関心も失せて久しかったが、よもやな」

そんな甘粕に奇妙な関心を向けるのはギルガメッシュだった。

「喜べ、雑種。この戦い、どうやら我が本気になる価値があるらしい。

我は傍観者に徹し、貴様の愚道を嗤うだけのつもりだったが、気が変わった」

「深淵に達し、聖杯へと至れ。そのための采配ならば、我が宝物を使う

事を許可してやる」

その様子は先程までとは明らかに異なる。

ただ嘲るばかりで自らが手を加える事をしなかったサーヴァント。

それが今、この聖杯戦争を自らの戦いだとして認めたのだ。

だが、それはどうして？

甘粕の見せる災禍の意志、それをこの英雄は許すのか。

「許すもあるまい。甘粕<sup>ヤツ</sup>の信念とは疑う余地なく”正しい”ものだ。世の墮落を憂いて災禍を以て罰を下す、その行いは道理に適っている。

それは本来、人に許された所業ではないが、甘粕<sup>ヤツ</sup>の総身はすでに超越の域に至ってしよう。天上に座す裁定者の在り方として不足はない」

「我から見てもこの時代の情性は目に余る。甘粕<sup>ヤツ</sup>の気質からすれば許せんものだろうさ。

かつて我の治世の時代。たとえ奴隷を十人並べたとしても、無価値な者など一人もいなかった。

だがこの時代では、二十を超えて並べたとしても、価値ある者を見つけ出す事は困難だろうよ」

「——もし時流の都合が異なっていれば、我が同じ事をしていたであろうからな」

何でもない事のように紡がれたその言葉で、ようやく自分はこのサーヴァントを理解する。

——この英雄は、甘粕正彦と同じ属性だ。

人を殺し、踏み躪る事でその尊厳を謳う、混沌の属性を有した善性。その存在は醜悪ではないのだろう。だが他者に対する容赦のなさという点において全く変わらない。

この英霊は災禍そのものだ。己の価値観<sup>せいき</sup>によって許し、罰を与える。その矛先の向きは誰にも分からない。

——英雄王ギルガメッシュ。

岸波白野<sup>しなぶ</sup>の前に現れた未知のサーヴァント。

その存在は味方でも敵でもない。皆が彼を危険視する理由がよう

やく分かった。

だが、同じ属性だというのなら、彼の殺意はどういう事だろう。先の対峙では親愛すら見て取れた。甘粕を認めるといふのなら、むしろ手を取り合う事を考えるのでは？

「たわけ。絶対を戴く裁定者が二人もいては世の正義が迷う。それでは民どもが苦しもう。」

裁定の法は1つでなくてはならん。我か、甘粕か、その選定が必要だ」

「我が甘粕を殺すか、甘粕が我を滅ぼすか。結果はこの二つ以外に有り得ん」

……その王意を測る事は岸波白野には荷が重い。

それでも甘粕との敵対において、彼が決して譲らない意志を持っている事は理解できた。

「そんな贗作者も露払いにはちようどよい。」

原初の創造主の権能となれば、我も慢心を捨てて当たらねばなるまい。

その厚顔な意地を見事に届かせてみせるがいい。それこそ貴様の王に献上すべき供物だ」

どこまでも傲慢に意思を告げるギルガメッシュ。

果たして自分は、このサーヴァントとどう接していくべきなのだろう。

何となくだが、分かる。今は弱体化しているが、彼は破格の英霊だ。

その力は心強い。だがその刃が自分を裂かないとも限らない。

天災のように読めない無軌道ぶり。彼の存在は自分たちにとっての吉なのか凶なのか。

「ア、アタシは、関係ないから……聖杯も、殺し合いも、勝手に皆さんでやってればいいツス」

王者の覇気に場が満たされる中、そう口を出したのはジナコリカリギリだった。

「そうツス。どうせ、どうせアタシなんて、何もできっこないんだから。あんな化物みたいな連中とやり合うとか、絶対ムリ！」

甘粕正彦と神野明影。

二つの極限存在を目の当たりにして、彼女は完全に臆してしまっている。

元より表側でも戦う事を拒んでいたというジナコ。ましてや甘粕が介入するこの裏側で、闘志を抱ける理由などあるはずがなかった。「と、とにかく、アタシは戦わないから！ 後はそっちで好きにやってみるッスよ！」

その無駄に肥大した脂肪を弾ませながら、ジナコが走り去っていく。

追うべきか、追わざるべきか。判断に迷っていると、ジナコのサーヴァントであるカルナが進み出た。

「すまない。非は完全にこちらにある。ジナコの言い分は子供の我が儘と変わらない。」

我がマスターはこの通りの生き物だが、蝸牛には蝸牛なりの矜持もある。今はそれで納得してほしい」

静かな威圧と、誠実な嘆願を残して、カルナはジナコの後を追う。もしもジナコに無理強いすれば、カルナと戦う事になるだろう。主人を守護するカルナの意志は固いようだ。

「――施しの英雄。非業の宿命を辿りながら、尚も己の在り方を変えなかつた聖者、か。」

この我に目的とできるものがこうも見つかるとは、此度の目覚めはまこと面白い」

ギルガメッシュも、カルナの英霊としての格は認めていた。

目にただけで分かる最高格の大英雄。そんな彼が、ジナコの事を確かに尊重しているのだ。

不思議な二人だ。まるで噛み合わない者同士なのに、ああして関係を維持できている。

一体どんな相性で彼等の組が選ばれたのか、興味がないわけではない。

「まあ、戦う意志がないなら強制しても仕方ないわ。護衛はしっかりしてるみたいだし、放っておいても構わないでしょう。」



こう言ったらなんだけど、やる気のない人まで引つ張っていける余裕なんて私たちにはないわ」

凜の言葉に意識が引き戻される。

ギルガメッシュやジナコの事は勿論気になる。だがそればかりを考えているわけにもいかない。

甘粕から伝えられた裏側の戦い。裏側の聖杯を巡ったマスターたちによる競争。

これからどう行動していくべきか、その話し合いをしなければならぬだろう。

「……そうね。確かに行動方針は決めなくちゃならないし、異論はないけど。」

けれど、はくのん。その前に1つ、あなた大切な事を思い違いしてゐるんじゃない？」

？ 思い違いとは、何のことだ？

あの甘粕が関わる以上、戦いが熾烈なものになるだろうとは承知している。

だからこそより強い協力をしていかなければと、こうして――

「それよ。あなたは協力して当たり前前って思ってるみたいだけど、それっておかしな事よ。」

分かってる？ これは聖杯戦争なのよ。聖杯を得られるのはたった1人。

1人の勝者を決めるために行う戦い。本来なら協力者なんてあり得ないわ」

「確かに表側では手を結んだ事もあった。けれど、殺し合った事だっただけであつたでしょう。」

この先目指す場所が違ったなら、私とあなたが戦う未来だつてあるはずよ」

それは……確かに、否定する事ができない。

繰り返され、様々な過程を巡った聖杯戦争。その中には凜と戦う事になったものもある。

勝者のみが生き残れる死闘。どちらの勝ちだとしても、もう一方は

確実に命を落とした。

記憶では、その部分がはつきりしない。

肝心の部分が量されたままで、未だ実感が沸きづらかった。

「この記憶の欠落も、多分甘粕が試しているんだと思う。」

表側の記憶は回収できると彼は言った。それはつまり、強くなるには敗北した苦渋や恐怖も思い出さなくちゃならない。

それを越えても戦い抜こうとする覚悟があるのか、甘粕カレはそれを試している」

「私だって協力する事自体に反対はない。何が起こるか分からないこの裏側で、はくのんみたいに信頼できる同盟相手は貴重だって思ってる。」

でも、最後には1人でも勝ち抜いてみせる意志がなかったら、きつとあなたは敗ける事になる。それは覚えておきなさい」

悪魔しんのは言った。裏側の戦いでは敗者にも生存の道が用意されていると。

それでもこれは聖杯戦争だ。その本質、聖杯を奪い合って殺し合う図式は何も変わっていない。

その祈りが聞き届けられるのは1人だけ。凜の言葉は覚悟しなければならぬ事実だった。

「……少し休みましようか。考えを整理する時間も必要だろうし。」

お互いに、今度どういう姿勢を取っていくか決めないとね」

それは凜の誠意であり、線引きだ。

互いに聖杯戦争の参加者として、必要以上に馴れ合う事を戒めている。

もしも対決の日が訪れた時のために、心に余分な贅肉を付けないようにと凜は言うのだろう。

今の凜には、ランサーがいる。

自らに戦う手段が残されている限り、彼女は己の戦いを放り出しはすまい。

「そういうことだ。まああんまり肩肘張らずにやっつけていこうぜ。」

とはいえ嬢ちゃんには悪いが、俺としてはおまえらの敵になるって

のも悪くないがな」

去りゆく凜に追従して、青い槍兵がそう言い残す。

彼の眼光が見据えるのは二騎の英霊。アーチャーとギルガメツシュ、そのどちらに対してもランサーは闘志を見せている。

真つ直ぐに鋭いその戦意は、たとえ今すぐでも戦いを始められると言外に告げていた。

未だこの裏側は未知ばかり。抱えているのも不穩の種だ。

仲間との間にも越えられない一線が引かれている。見えてる確かな道は何もない。

——自然、手はアーチャーの赤い外套の端を掴んでた。

「マスター。大丈夫か？」

コクンと頷く。

先が見えない中、唯一確かなアーチャーとの絆。

ちよつとくらい甘える事を許してほしい。そうすれば、きつとこれからも頑張つていけるから。

この手が感じる繋がりさえあれば、たとえ無明の中でも自分は前に進んでいけると思えるのだ。

「……これがあなたの言った機会ですか」

月の裏側を満たす虚数の海。実数を持たない不確かな何処か。

距離も、広さも、座標も、そこでは一切の概念が通用しない。

存在の定義を無意味とする虚構の奈落。落ちれば無感のままに沈

み続けるのみだ。

「こうやってセンパイを巻き込む事が、私への——！」

「違うな。自ら進んで足を踏み出したのだ」

そんな奈落の中で平然と在れるのは、同じ奈落の住人しかあり得ない。

虚数を支配する少女は、足を運んできた来訪者にあらん限りの敵愾心を向けていた。

「偽りの安寧を捨て、真実を求める事を選択したのはあくまで彼等自身。試練というならこれからがそうだろう。」

たとえおまえの目的を知ろうとも、彼等はその足を止めはすまい。その運命はもはやおまえの手の内を離れたのだ」

「離れた？ あなたが奪っていったの間違いでしょう！」

「俺は道を用意しただけだぞ。この裏側に落ちた者には等しく機会を与える。例外などない」

BBの怒りも、甘粕からすればまるで涼風だ。

その思いを十全に理解した上で踏み躪り、自らの道理を臆面もなく通す。

それでいてBBに対する親愛も本物なのだ。虚無の中を掘り進み、自らの元まで駆け抜けた人ならざる少女の事を、甘粕は心から讃えている。

「だがな、サクラ。これはおまえのための聖杯戦争だ」

「地上より月に上がったマスターの誰よりも強い祈りを持ったおまえのため、再起の場として用意した新たな闘争。」

ここならばおまえでも戦える。これならば勝ちの目も出てくるだろう。今一度あの熾天の玉座へと、その手を届かせてみせろ。

——そのための試練とは、俺であるべきではないだろう」

だがそうして向けられる甘粕の賛美も、BBにとっては迷惑極まらないものでしかない。

その感性も、向けてくる苦難の数々も、彼女にとっては忌々しいものとし映らない。

愛で以て試練を与えるなど狂人の理屈としか思えない。全く合理

的ではないし、理解する気など最初からなかった。

それでも、口にして告げた事は事実である。

あの悪魔しんのとは違う。甘粕が自ら口にするとはそういう事だ。

これはB Bのための聖杯戦争であり、平等なる試練。あらゆる者に勝利の機会は許されている。

これ以上甘粕自身からの横やりもないだろう。こうして言い切った以上は、試練の終わりまで結果を見届けるに違いない。

ならばそれだけ理解していればいい。

権能の類いは軒並み削られた。だが管理A Iとしての制約からも解放されている。

不利ばかりではない。むしろ他の参戦者と比べれば遥かに優位だと言える。

それを利用する。その慢心を活用して、自分は再び聖杯へと至るのだ。

「せいぜい好きに見下していなさい。私を消去デリートしなかった事を必ず後悔させてあげる」

どうせこちらの敵意など知れている。

ならばいつそ宣言してみせよう。自分の思いをより強く認識するために。

己が手にしたこの意志おもいは、たとえ世界と引き換えにしても遂げてもみせると。

数理の中に生まれた確かな光。その輝きを証明するために、B Bは声を大に宣言した。

「私は聖杯を手に入れる。そうしたら次はあなたの番よ。

私の箱庭セカイに試練あなたはいらない。この月から今度こそ消し去ってあげるわ」

支配を象徴する教鞭を突き付けて、B Bは宣戦布告を口にする。

自らに向けられるはつきりとした害意に対し、甘粕は一層の親愛を深めていた。

そう、その意気だ。だからこそその輝きである。

A Iどうぐより生まれた確かな自我ひかり。その奇跡に月の魔王は感動を禁じ

えない。

不可能をも覆す意志の輝き。彼女の存在とは、まさしくその証明ではないか。

人でないなど瑣末な事。自らの信念に全てを懸ける少女の姿は、今の地上の誰よりも美しい。

故に、この措置とて至極妥当なもの。

これほどの強さを持つ少女に機会を与えないなど、それこそあり得ない。

たとえその信念に歪みを抱えていようとも、試練の過程で輝きは練磨されると信じている。

ならば少女には、惜しみない賞賛を。

万雷の拍手を送りたい心情で、自らへの敵意を受け入れた。

「構わんとも。俺に立ち向かう意志は歓迎する。先に宣した言葉の通りだ。」

俺の樂園ぼらいぞが認められんのなら、その気概で以て粉碎してみせるがい。そんな奮起もまた、俺が望んだものなのだから」

「俺に人間賛歌を歌わせてくれ。喉が枯れ果てるほどにな」

月の魔王は笑う。甘粕正彦は人間を愛している。

光の当たらない月の裏側で、恒星の如き灼光を放ちながら、その狂愛を謳い上げた。

## 女難勃発

落ちる。落ちる。落ちる。

底のない夜の海へと、岸波ほ白野は落ちていく。

この落下には果てがない。

方向の意味がない。距離の概念がない。時間の経過がない。

ひたすらに流されて、削げ落ちていく自己のイメージ。

虚無の中に浸されて、このままいけば身体も記憶も、何もかもが残るまい。

それはどうしようもない事実。逃れられない結末に思えた。

一瞬か、それとも永遠か。

無重力に似た落下。終わりの見えない転落。変化のない無間。

身体はまるで泥のよう。心も鉛のように鈍化していく。

一切の希望も見えない虚無に、自分は徐々に絶望へと向かっていった。

——けれど、ここで手放すのなら、自分はとうに終わっている。

魂の火種は残っている。

燻っているこの火がある限り、まだ終わりじゃない。

忘れない。終わらない。たとえ自分さえ残っていなくても、手放してはならないものがある。

諦めることはできない。たとえ奈落の底であったとしても、先へと向かって手を伸ばした。

——伸ばした先の外皮に、かすっていくものがある。

たとえ気のせいでも、希望に縋る心が見せた幻でも、その声は聞き逃せない。

声は遥かな彼方より、光の尾を引き、全身を燃やしながら、尚も加速する。

——ソラを見ろ。

——手を伸ばせ。

——ただ一言、■■■■を呼べと。

諦めるなど、誰かが言っている。

閉じそうになる心を熱くさせる、懐かしい”战友”<sup>とも</sup>の声。

使わなくなった喉に、停止している肺に、衰えた腕に、再び喝を入れる。

そう、彼女の名は——

「さあ！ 余（私）の手を取るのだ（取ってください）、奏者（ご主人様）よ！」

………あれえ？

「は？ え、なんなんですかあなた？ 出てくるところ間違ってますか？」

「むう？ それはこちらの台詞だぞ女狐よ。」

何やら男に逃げられまくる喪女の如き気配を放っているようだが、そなたの伴侶となりえる数奇者はここにはおらんぞ」

「喪女じゃないですうー良妻ですうー昔とは違うんですうー。」

ていうか余計なお世話です！ 将来を誓い合った旦那様であるご

主人様ならここに——」

「その愛おしい顔立ち、そなたを思わぬ時など刹那の中にさえ存在せぬ！

我が奏者よ、よくぞ——」

「——え？」

「——む？」

心を眠らせてしまいたい。

自分を忘れてしまいたい。

なんか目を開けたらとんでもない厄ネタが飛び込んできそうだと



いう確信から目を背けてスルーしてしまいたい。

「あのー、ちよつと冗談にしても笑えないんですけどー？ 人のモノに向かつてなに頭沸いたこと言ってるんですかあ？」

「女狐よ、そなたの縁なき身の上には同情せんでもない。

だが寄りにもよつて我が奏者に手を出そうとは、元老院以上に許容できぬ大罪だぞ」

「はあ？ あなたみたいないロモノ系がご主人様と関わりあるわけがないでしょうに。

いくら虚無ユメの中だからつて、寝言も大概にしないと……呪うぞ？」  
「余の芸術性が分からんとは、そなたも哀れな衆愚の類いか。そなたの器、なかなか上手く繕っているようだが、余の審美眼は誤魔化されぬ。そなた、本当は相当な年代物であろう？」

「違いますしいーサーヴァントに年齢とか関係ないですしいー！ 大体、生前の年代で言うならあなたの方がお古っぽいじゃないですか！？」

「愚か者！ 余は皇帝にして至高の名器。至高なる輝きとは決して色褪せぬもの。余の美貌とは永遠なる器であり、故に生前の時代など関係ないのだー！」

「なにそのこじつけ!? だったら私だつて年代関係ないですもん！ だつて私つて神様ですしい、皆さん輝く太陽ですもん！」

「なんと、そなたは太陽の写し身であったか。……という事は、年齢は推定でも46億歳というわけだな」

「だから年齢の話はすんなつってんだろうがああああ!!! 呪うぞ！

ジャンジャンバリバリ呪うぞ！ アマテラス舐めんな！」  
ああ、生きるとはなんだろう。

目の前に広がる難関辛苦。逃げず前へと踏み出す事がそれだと言えるか。

けれど、そればかりではないはずだ。道とは決して一本だけではない。人は迷いながら、様々な道を選択できる。

ならばこれだつて1つの道だ。悩んだ果てに選んだものなら、そこに意味はきつとある。

だから、このまま、目を開かずに。

嵐が通り過ぎる事を選ぶのだって、立派な選択であるはず――

「と・に・か・く！　ご主人様は私のご主人様マスターです。それをここではつきりさせてあげます！」

「なにおう！　奏者は余だけの奏者マスターだ！　貴様の出る幕など無いという事を分かせてくれる！」

「二というわけで、奏者よ（ご主人様）！　どちらが自分のサーヴァントなのか、この女狐（ワガママ女）に教えてやれ（やっってくださいまし）！」

あ、はい。やっぱりそうなりますよね。

流石に逃避は限界らしい。観念して目を開いた。

「さあ、奏者よ。よもや余の事を忘れたとは言うまいな」

勿論だ。彼女を忘れるなどあり得ない。

彼女はセイバー。岸波白野しづのが契約した『剣士』の英霊。

赤き男装を身に纏った金髪の少女。自らを名器と呼んで憚らない美麗と情熱を備えた人。

小柄な体軀からは想像もつかない気迫の激しさは、万軍を凌駕する大火のように。

その真名は、ネロ・クラウディウス。

暴君と呼ばれたローマ帝国の皇帝。されど真実は、燃え盛る炎の如き気性によるものだ。

彼女の愛し方は熱意と絢爛に溢れすぎて、栄光と破滅の両方呼び込んでしまう。

だがそれは、彼女の愛が偽りなきものである事の証。セイバーの振るう”火”はいつだって岸波白野しづのの道を切り拓いてくれた。

断言できる。セイバーこそ掛け替えのない、岸波白野のサーヴァントだと。

「ご主人様！　私を忘れてしまったなんて事はないですよね？」

勿論だ。彼女を忘れるなどあり得ない。

彼女はキャスター。岸波白野しづのが契約した『魔術師』の英霊。

狐の耳と一尾を持った妖艶な美女。自身を良妻といって献身的に

尽くしてくれる人。

空気を読まない天真爛漫。シリアスブレイカー彼女がいればどんな感動だって壊れること請合いである。

その真名は、玉藻の前。

陽気な性格とは正反対に、人に仇なす妖怪としてその名を残している。

しかし自分は知っている。彼女の望みとは人に尽くす事。仕える喜びこそが彼女の願いだと。

たとえ怪物として追いやられようとも、彼女の願いは損なわれない。その献身には一点の曇りも存在しない。

断言できる。キャスターこそ掛け替えのない、岸波白野のサーヴァントだと。

……………アレエ？

「二に、二体同時使役だと（ですと）おおお!？」

「どういうことだ奏者よ！ これは何かの間違いだな？ 間違いであろう？ 泣くぞ、余は本気で泣くからな！」

「ご主人様あく？ 私が納得できる弁解があればお聞きしますが、無ければ我が秘蔵の一撃、ついに炸裂する時がきてしまいますが？」

いや待って、待って欲しい待ってください。

確信を持って言える。彼女たちは岸波白野が契約したサーヴァントだ。

共に過ごした時間は確かに記憶にある。紡がれた絆だって本物だ。けれど、それは両方に対して。同時に、ではなく別々の思い出が入り混じっていた。

まるで違う時間、別々の世界でそれぞれと過ごしてきたように——  
「そうですね。まあ、次元違いの浮気でしたら流石に仕方ありませんよね。ええ、そこは私も許しましょう」

「むむむ……余以外のサーヴァントとそなたが共に在るなど別世界でも考えたくはないが……」

ええい、よかろう！ 余とて愛多き者ゆえ、多少の移り目には目を瞑ろうではないか！」

「――それで、どっちを選ぶのだ（ですか）？」

やっぱりそうきますよねええええええ!!?!

まずい、まずい、まずい！

過去にも様々なデッドフラグの選択肢があつたが、これは極めつけだ。

ここで選択を誤れば、なんかもう色々な事が修復不可能になりかねない。

選べる選択肢は何がある？

岸波白野に許された、この状況で返せる選択とは――

### 【選択肢】

1. 「もちろん赤王様だ。腹黒狐とかマジ勘弁」
2. 「もちろん良妻狐だ。セイバー系はオワコン」
3. 「ハーレムこそ至高。両手に華こそ漢の道よ」
4. 「――そうだ。腹を切ろう」

1と2の選択肢は、選ばなかった方に禍根が残る。

セイバーに泣かれたら耐えられる自信はないし、キヤスターを選ばなかったら『僕の男の子♂』が死んでしまう。

ならば3の選択肢か？ 確かに両者ともに仲良くというのは理想に近い。

だが実際、この選択肢こそバッドエンドへの直行便に思えてならないというか4はなんだ!?

1か2か、それとも3か？

ああ、どれを選べばいいのか!？ 世界は何も答えてはくれない――

「さあさあご主人様！ こんな目がチカチカ痛くなりそうないタ女は放っておいて、私と……あら？」

「何を迷うことがあろうか、奏者よ！ 無駄に色香を振りまかねば加

齡臭を隠せぬ女狐など捨て置いて、余と……うむ?」

……ここで、大事な事を思い出した。

いろいろ衝撃な選択肢と、考える余裕がなかったので失念していたが。

——岸波白野、絶賛虚数空間を落下中である。

「あわわわわ、ストップストップ〜! その先は神様でも手が出せませんよー!」

「ええい、いいから名を叫べ! これが正真正銘、最後のチャンスなのだぞ!」

ああ、意識が遠のいていく。

ここで手放せば本当に戻れない。それは理解している。

でも、ちよつとだけ、それでもいいんじゃないかなーと思わないでもなかったり。

——あ、やばい——これは、本当に消えて——



覚醒する意識に、閉じていた目蓋を開く。

視界に映った白い天井。見覚えのあるここは……そう、保険室だ。全身を包む倦怠感。身体のたるさを我慢しながら、ゆっくりと身を起こした。

「おはようございます。岸波さん」

かかる声に目を向ける。

そこに立つのは制服の上に白衣を纏った1人の女生徒。

彼女は……そうだ、名前は間桐桜。

聖杯戦争の舞台となる月見原学園。その保険室での役割を担当するNPC。

マスターたちの健康管理を担当する上級AI。聖杯戦争を円滑に進めるため運営側より用意された存在だ。

……と、そこまでは正常な、表向きでの記憶。

記憶の中にある平穏な日常。予選とも異なる異質な世界。

そこにいた桜と全く同じ姿をした少女。姿は同じでも、中身はまるで別物だった。

あれは一体なんだったんだろう。目の前の桜と、どんな関係がある

のか。

「あの、岸波さん。混乱されてるのは分かります。ですが、体調チェックのためにも、幾つか確認させてくださいませんか？」

ああ、それは勿論だ。

こちらにも疑問はあるが、それも状況を確認しなければ始まらない。

今はどうなっているのか。聖杯戦争の参加者として戦っていたという認識は、確かにあるのだが。

「はい。聖杯戦争中であるにも関わらず、マスターとサーヴァント、NPCまで含めて、舞台である月見原学園の校舎ごと、この”月の裏側”へと落ちてしまいました。」

……原因は分かりません。ですが、聖杯戦争は明らかにねじれ狂いました」

——そこからの様々な事実確認で、自分は今の状況を把握している。

複数の聖杯戦争の記憶。意図したような穴抜け。

自分たちがいるのは虚数解の情報に満ちた月の裏側。

同じ時間軸上の観測結果を閲覧できるようになったのも、この場所の影響が強いだらうと。

ムーンセルが観測してきたあらゆる可能性。矛盾した記憶も、おそらくはそのために。

とりあえず校舎内は安定しており、安全らしい。

原因も、目的も、何もかも不明だが、落ち着いて考える時間はありそうだ。

「ありがとうございます。おかげで確認が取れました。

イレギュラーな部分はあるようですが、とりあえず現在の状態に異常はありません。

症状自体は岸波さんも、もう1人のマスターの方と一緒にようです」

もう1人のマスター？

この校舎には、自分の他にもマスターがいるのか。

「はい。もう1人の方でしたら、今も保険室のすぐ前に——」

「おい！ 余計なこと言ってるんじゃないよ、おまえ！」

瞬間、乱暴にドアを開いて、見知った姿が入ってきた。

「やあ、岸波。随分と遅いお目覚めじゃないか。ひよつとしてスキル不足とか？」

いやホント、そういう凡人の悩みって僕には分かんないからさあ、なんか大変そうだよねえ」

基本相手を見下した態度、某海産物っぽいクセのある髪。

彼の名前は間桐シンジ。表側で聖杯戦争に参加していたマスターの1人だ。

苗字が桜と同じだが、特に意味はない。参加者の中からランダムに選ばれただけである。

「まあ、ある意味期待を外さない三流っぷりってとこかな。

天才の僕には縁のない事だけど、そういう役割も世の中には必要なんだって事は分かってるさ」

口を開けば飛び出すシンジ節。

失礼な事を言われているのは理解しているが、これといった反感は抱かない。

どうにも表側で彼の人となりに慣れてしまっているようだ。

それに、常より輝かせた顔を見れば、シンジが自分の目覚めを喜んでくれるのは分かる。

保険室の前にはいたとの事だし、もしかして自分を待っていてくれたのか。

「はあ!? なに言ってるんだよ。僕がそんな面倒なこと——」

「おいおいシンジい？ 憎まれ口は結構だが、それじゃいつまで経っても話が進まないよ」

別の声が聞こえた瞬間、シンジの隣にもう1人の姿が現れた。

その立ち振る舞いから連想されるのは、嵐の海。

刹那の内に全てを薙ぎ払う、豪快な荒々しさを感じさせる女丈夫。

顔に走った大きな傷が目立つが、それさえも彼女の魅力を損なうものではない。美醜混じり合った様は荒々しき気性をこれ以上なく表



現している。

彼女こそ間桐シンジが契約したサーヴァント。

自身の手ではなく騎乗する”何か”によって戦う『ライダー騎兵』の英霊。嵐を行く航海者は、表側で見たままの姿でそこに在った。

「悪いねえ坊や。この通りウチのシンジ大将は人間付き合いがヘタクソでさ。」

ここにいるマスターが自分だけってんで、心細くてヘタレてたってのにそいつを知られるのが嫌らしい」

「バアツ!? おまえ、なに好き勝手言ってるんだよ！」

こいつとは僕が話してるんだ。サーヴァントのおまえは黙ってるよー！」

「そうは言うがねえ。その坊やにはどうも見抜かれてるっぽいよ。」

いやあいい友人を持ったもんだ。アンタのひん曲がった性根を分かった上で付き合ってくれる酔狂者なんてそうはいないだろう。

だが主人のピエロっぷりを放置してるのは、従者の身としちや偲びない。なんで横から口を挟ませてもらったよ」

「この……ッ！ 余計なお世話なんだよ！ おまえに何か言われなかったって、僕一人でどうとだって出来る」

「ならさっさと進めなよ。戦争だろうが商談だろうが、物事つてのは拙速が尊ばれるもんだぜ」

怒鳴るシンジと、それを受け止めて朗らかに返すライダー。

これも1つの絆のカタチか。シンジとここまで相性のいいサーヴァントは、英霊広しといえどそうは居まい。

「この海賊女が悪かったね、岸波。こいつの酔っ払った戯言なんて気にするなよ。」

それより、ここが月の裏側だって話は聞いているかい？ 何の不具合か知らないけど、困ったもんだよねえ。

覚えてるだろ。表側の聖杯戦争の準備期間モラトリアムは6日。7日目には決戦場に行かなくちゃならない。

このままだとお互いに不戦敗だ。それはさすがに困るだろう？」  
確かに、シンジの指摘はもつともだ。

表側の聖杯戦争では対戦相手との決戦の前に6日の準備期間モラトリアムが設けられている。

自己を鍛え、相手を知り、サーヴァントとの絆を深めるために与えられた時間だ。

この時間を無為に過ごした者には、決戦を待つことなく脱落の烙印が押される事になる。

もし現在も表側で聖杯戦争が進行しているのなら、期間内に戻れなければ脱落という可能性は大いにあるのではないか。

「いえ、おそらくそれは無いかと。裏側では時間が進むという概念が無いので、表側から見れば一秒の時間も経ってはいません。

それに今回の異常は例外的すぎます。おそらくは表側での運営にも支障をきたしているのではないかと」

そんな自分の懸念に対し桜が答えてくれた。

そういうことであれば、表に戻って時間切れで有無言わさず脱落という結末だけは無さそうだ。

……ただ、そう言われてしまうと、今度はシンジの立つ瀬がないのだが。

「う、うるさいな！　そういう可能性だってあるだろ！

君みたいな凡人でも、1回も戦う事も出来ないでリタイアっていうのは可哀想だからね。

まあ、いつもならソロプレイが僕の流儀なんだけど。どうしてもっていうなら一緒に攻略させてやってもいいぜ」

ふむ、なるほど。

要約すると、ここでは手を組みましょうとお誘いを受けてるわけか。

確かにこの裏側では何が起こるか分からない。仲間はいて困ることもないだろう。

こう見えてもシンジは本当に優秀だ。アジア圏ゲームチャンプの肩書きは伊達ではない。

一緒にいればさぞ心強い仲間になるだろう。そう思っただけの返事をする。

「そうそう、流石におまえはちゃんと分かっているじゃないか。主役の引き立て役として心得てるっていうか、やっぱり悪くないね。」

まあ安心しとけよ。『P・J』ピース・ジャーナルバトルスコアワールドランクナンバー2の天才ゲーマー、この間桐シンジ様がいれば——」

「目を覚ましたか（のですね）！ 奏者よ（ご主人様）！」

言いかけたシンジを全く同時に蹴倒して、息ピッタリに入室する二騎の姿。

……うん、本当は分かったた。

そもそも目覚めた段階で、側にサーヴァントがないなど真っ先に疑問に思うべき部分だろう。

けどあえてスルーしていた。とりあえず意識を他に逸らして、そちらに触れないようにしてた。

……それが無駄な抵抗だと、知りつつも。

「そなたという者はいつもいつも危なっかしくて見ておれん。深淵に落ちかけた時は本当に、本当に心配したのだからな。如何に虚無を脱したとはいえ、こうして目覚めた姿を目にするまで、余は気が気でなかったぞ。この愛くるしい乙女心の疼き、きちんと労うがよい。」

それと、そなたのために真っ先に駆けつけたのは余であるからな「きやーぐ主人様あ♥ 相変わらずの凛々しいお姿！ 時間さえ不確かなこの裏側、目覚めをお待ちする間も一日千秋の思いで恋焦がれておりました。」

ちなみに、あなた様のお側に一番に参上いたしましたのは私ですの  
で」

飛び交う牽制。女性二人の間では未だに火花が散っている。

視線こそこちらを向いているが、その意識は横の恋敵ライバルへと向けられていた。

……というか、最初に来てくれたのはシンジなのですが。

「ワカメはノーカン！」

さようでございますか。

「お二人共。保険室では大人しく、静かにお願いします。」

でないとまた先ほどのように、管理者権限で以て追い出させてもら

いますので」

そんな彼女たちに対し桜が告げる。

表情こそ笑顔であるが、そのプレッシャーは凄まじいものがある。

「そんなー横暴ですうー。サーヴァントがマスターを心配して何がいけないんですかあ」

「そうだぞ、桜。このキャス狐めだけならともかく、余まで奏者の元より追い立てるとは何事か」

「お二人が同じ空間に存在すると、岸波さんのストレス値の明らかな上昇を観測しましたので。健康管理AIとしては当然の措置です。」

それと、喧嘩両成敗ですから。追い出すなら二人共出て行ってもらいます」

そういえばなぜ彼女たちが最初から保険室にいなかったのかと思っただが、そういう事だったか。

英断だと賞賛を送りたい。二人の間に挟まれて健康無事でいられたとは思えなかった。

「……仕方ありませんね。ここで雌雄を決するのは遠慮しますか。桜さん、こういう時に怒らせると厄介ですし」

「やむ負えぬか。桜には他ならぬ奏者の事で世話にもなっている。余の方が退くでしょう」

そして、おお、二人の仲裁に成功した。

ありがとう、本当にありがとう、桜。心からの感謝を捧げたい。

これでとりあえず最悪の事態は回避された。話題も何とか別の方向へとシフトして――

「ええ、騒ぎ立てるような真似はいたしませんとも。ただ、ご主人様に1つ質問がありました」

「奇遇であるな。余も同じだ。奏者が目覚めたならば真っ先に問い質さねばならん事がある」

「奏者よ（ご主人様）。最後に名を呼んだのはどちらなのだ（ですか？）」

.....oh.....

「申し訳(ご)ぎいませぬ。何ぶん、希薄になつた自己の声でしたので、この自慢の御耳でも聞き取れなかつたのです。

もちろん私だとは分かつておりますが、やはり確認は必要かと」

「余は無念なのだ。奏者の奏でる希求の調べを受け止める事が出来なかつた事が。

ゆえにもう一度呼んでほしい。そなたが求めた真なる名器の名を」  
……正直な事を言ふと、あの瞬間の事はよく覚えていない。

意識は虚無に吞まれる寸前だつた。その終わりの間際、反射的に”誰か”の名を呼んだような気はするのだが。

それがセイバーなのか、キャスターなのか、自分でもよく分からな  
い。

だから、その、この事についてはとりあえず置いて。

今は非常事態であるのだし、まずはこの月の裏側について話し合うべきじゃ、ないのかなあつて。

「そうであるな。この禁断域に落とされた事態は、まこと憂慮すべきこと。何においても対処していかねばなるまい。

であるからこそ、解決できる懸念事は順に解消していくべきと思うのだ。奏者が真に信任を置く者が誰か、余は気になる」

「仮に覚えていなくとも問題はございませぬ。つまるところ”どちら”なのか、その答えだけ頂ければよいのです。

要は先の、はぐらかされた質問の焼き直しですよ。簡単でしょう、ご主人様。だつて一言で済みますし」

岸波白野は逃げ出した。だがまわりこまれてしまった。  
駄目だ。このサーヴァントたちからは逃げられない。

この問題について彼女たちは退くつもりがまるでない。おそらく誤魔化しも通じまい。

こうなつたら仕方ない。  
もはや岸波白野1人では手に余る。援軍を要請するしかない。

桜よ、どうか。このまま2人を放置すれば、僕の胃はボロボロです。  
ここは健康管理AIとして、先ほどのようにビシツと一言お願いし

ます。

「えつと……そういうことは、きちんと答えた方がいいかなあって。優柔不断なのはいけないと思います」

う、裏切られただと……!?

なんてことだ。味方だと思われた者が、まさか敵に回るとは。

桜からの援護が頼みの綱だったのに。もはや彼女の助け舟は期待できそうにない。

まずい、味方は、味方はいないのか。

シンジは……駄目だ。蹴倒されてから未だダウン中だ。

ライダーは……駄目だ。完全に我関せずの姿勢を取っている。こちらを肴にして酒を呷る気マンマンだ。

完全なる孤立無援。この保険室に、いやこの校舎内に自分の味方は1人もいない。

本当は、ちゃんと分かっている。答えは出すべきだって。

このまま誤魔化したままなのは不誠実だ。彼女たちのためにも、はつきりとするべきだ。

けれど、どちらか一方を決めるなんて、どうして出来るだろう。

自分にはどちらとも過ごしてきた時間がある。大切なのはどちらも同じだ。

それは一つの時間内で、ではない。それぞれの戦いの中で、無二の相手として育んだ絆なのだ。

それを当価値と呼ぶのは違うのかもしれない。だが自分には、どちらが上かなど決められそうもない。

だって自分にとって、彼女たちはそれぞれの“最高の相棒”なのだから。

「岸波さん、そんなにお二人の事を……」

だからどうか、不誠実だと自覚はあるけれど。

どちらか一方を蔑ろにしてしまう答えを、自分には言う事は出来ない。  
い。

そんな岸波白野の事を、認めてはくれないだろうか。

「嫌だッ！」

しかしセイバーに、岸波白野の説得は効果がなかった。

「奏者の思いは聞き届けた。余とて五十人からなるハレムにて美童を愛でてきた身。みな等しく幸福をと、気持ちには分からんでもない。

その優しきは奏者の美德であろう。そのような乞い願うような姿で頼まれては、余とてその……こそばゆい気持ちになつてしまおうぞ！」

「だが……は譲れぬ。ここで妥協を許す事は、余の愛に対しての侮辱となる。

余にとつてそなたは、一夜の愛に興じるのみでなくだな……共に育み合う関係に……と、とにかく、互いにとつての唯一無二でありたい！」

そのための競争を余は歓迎しよう。譲れぬものであるからこそ、我が魂は燃え盛るのだ。まして奏者のためとあれば、その輝きは何者をも凌駕しよう。

奏者にとつての至高とは、余のみでありたい。その座を競った争いであるならば、余とて望むところだ。この胸の情熱にかけても負けはせぬ」

堂々と語るその姿からは、暗い感情は一切感じられない。

そのように見えるのは、きつとセイバーの生来の気質によるもの。彼女が勝負事を楽しんでいるからだろう。

自らを天才だと謳い、勝利への自信を失わないセイバー。

それは単なる盲信じゃない。裏付けされた自負と、勝ちを手にしようとする気概。

セイバーにとつて勝負とは逃げるものじゃない。競う相手がいるならば、正面から対峙して打ち勝つべきもの。

それでこそ自らも輝くと知ってるから。美しさを何より尊ぶ彼女は、自分が美しく在れる瞬間を心から愛してる。

自分の説得など、セイバーにとつて美しさを曇らせるだけのものではない。しかなかっただろう。

「ご主人様……？ ちよつとお目めを拝借う♪」

そんなセイバーと異なり、キャスターが取り出したのは拳大ほどの

1個の金の玉。

訝しむこちらの目の前で、キャスターはその玉を宙へと放り投げて、

「——噴ッッッ!!!」

ドス黒いオーラの<sup>!!!</sup>何かを纏った拳の一打が、空中に舞う『金の玉』を打ち抜く。

やたら頑丈そうだったその玉は、何処へ弾かれる事もなく空中で形も残さず微塵に粉碎された。

「ご覧になりました？ これぞついに解禁されました我が奥義『呪法・玉天崩』です。

懸念されていました火力不足もバツチリ解消。男性、特に色多き殿方にはもれなくクリティカルです」

はい、まったく以てすごい威力ですね。

全く見事なまでに粉々だ。頑丈そうだった『金の玉』が、塵の如く破壊されてしまった。

我が味方ながら恐ろしい事この上ない。その所業に思わず”アレ”も縮こまってしまっている。

……ところでそれをこのタイミングで披露した意図とは、これ如何に？

「確かにすごい威力です。魔術師<sup>キャスター</sup>の基礎能力では考えられません。

ところで、通常の筋力や魔力とは異なるエネルギーが観測されたのですが、これは？」

「ええ、まあそれは色々。溜まりに溜まったモノを込めておりますので♪」

ああ……今さら気付いた。

キャスターは笑顔だ。いつも自分に見せてくれる陽気な笑い。

けれど気付いてしまった。今のキャスターは、全く笑っていないのだ。

「本当にもう、色々と溜まっておりますので、ええー！

思わせぶりな事を言っつてえ、人をモヤモヤさせといてえ、結局なし崩しのなハーレム展開みたいなの♥



なんかあれですよねー♪ なんとというかもう、コロコロされたいんですかねー♪」

思い出す。我がサーヴァント・キャスターの事を。

外面は良妻、内側は真つ黒。独占欲望持ちのハーレム撲滅主義者。自分の申し上げた説得など、この呪殺系良妻狐様に通じるわけがなかったのである。

「恋愛は情緒とロマンス……ハッ、何を青臭い事を。

恋愛とはこれすなわち、駆け引きと先手必勝！ どうあれ先に既成事実を作り上げた方が勝つのです！」

そしてとんでもない事をぶっちゃけたぞこの狐ー！

「その意気や良し。己の腹黒さに対する潔さ、余も嫌いではないぞ。

……であれば、我が剣の錆となることも厭うまいな？」

「ご冗談を。私、殴り合いにも定評のあるキャスターですので。後腐れなくサクツとやっちゃうのも悪くありませんよ」

いやいやちよつと待ってもらいたい。

2人とも喧嘩上等すぎる。なんでウチのサーヴァントはこんなに殺意が高いのか。

このままではリアルファイト不可避である。なんとかして止めなくては。

——2人とも、僕の為に争うのは止めてえー！

「実際に間違っていないのがひどいですね」

2人が争うことなんてない。

だって2人とも自分のサーヴァントだ。大切な戦友なのだ。

その2人が争い合うなんてこと、どうして許すことができるだろう。

——だからお願いだ、2人とも争うのを止めてくれ！

「二ならばどちらか選ぶのだ(選んでください)、奏者よ(ご主人様)！」  
……はい、やっぱりそうなりますよね。

結局のところ、選択を強いられるのは変わらない。

どれだけ先送りにしようとも、いつかは選ばなければならないのだ。

……やはり、選択肢4か。もはや潔く腹を切るしかないのか。そうする事が正解な気がしてくる。

この2人に挟まれた状況を打破するにはそれしかない。さつきからキリキリお腹が痛いし。

選ぶことが出来ないのなら、せめて腹を切ってケジメをつけるしか

ああ、どうか、僕に力を貸してください。

4の選択肢を考えた時、脳裏に何故か過ぎった”誰か”の姿。天に祈りを捧げるように、その”彼”に対して乞い願う。

今の状況に耐え切れず、逃避を選ぼうとしている僕に、本当の強さを。

なんか、第二次世界大戦をくい止めた英雄と同姓同名の人から、本当に強いと称される在り方で、僕を正しき道へと導いてほしい。

どうか答えを、その声を聞かせてください——

『——バレンタイムンにチョコを貰える、モテるヤツとか死ねばいいのに♪』

ミスったああああ!!??

完全に祈る神様を間違えた。助かるどころか呪いを受けてしまった。

あの世界観では同姓同名でもただの別人だった。こっちは駄目な方だった。

もう打つ手がない。最後の神頼みも無駄だった。

セイバーとキャスターは妥協すまい。やはり覚悟を決めるしかないのか。

僕は——

「あはははは！ 相変わらずおバカな事やってますねえ、セ・ン・パイ♪」

声が聞こえた。こちらを小馬鹿に嘲笑う、少女の声。

それはこの場の誰かのものではない。何処かより空間に響いてきている。

「両手に花なんて随分な御身分ですね。ちよつと見ない間に女の子ヒロイン二人も侍らせてるなんて。

……ええ、別にそれでイラつとなんてしてませんよ。ただ、身の程知らずなセンパイが不愉快なだけです。

そうですね。籠の鳥に戻る前に、個人的なオシオキを追加ですね

♪

声の主は知らない。だがその声には覚えがある。

桜と同じ声、だが彼女にはない小悪魔じみた振る舞いがある。

これは、あの偽りの日常で共に過ごした、桜と同じ姿と声の、あの少女のものだった。

「なんだこれは。聞くからにめんどくさいものを患っていきそうな声であるが」

「これは相当なヒロイン力の低さですね。方向性間違つて迷走しまくつてる感があります」

こちらから2人とも、そう無闇に相手を挑発するんじゃないやありません。確かに凶星っぽくはあるが、かえつてそういうものが相手を傷つける事もあるのだから。

「……ほんとに口が減らないですね、あなたたち。サーヴァントもアレですけど、センパイも大概です。

やっぱり躰が必要ですね。センパイにも、私が受けてばかりの女じゃないって事を分かせてあげないと」

「ついでに、その健康管理AIにも。目障りなソレにも分からせないかね。貴女がいかに無意味かを」

……？ なんだ、今のは……敵意？

あのもう1人の桜は、こちらの桜に対して何かの悪意を抱いている

のか。

「あれは……!? 駄目です、キシナミさん! あの娘は——」

「はいはい、ただの健康管理AIは黙っててくださいね。

さあさあ皆さん、拍手の準備はいいですか? 王様も神様もみんなまとめてマイドール。良い子のリスナーさんになって再出発。

このムーンスルを駆け抜ける大人気コンテンツ、BBチャンネルの始まりです!」

瞬間、見えていた視界がノイズに侵された。

何も見えない灰色の世界。そこにあつたはずの保険室が何処にもなく、触れられない。

世界が一変していく。その果てに現れたものは——

「あん ん ん めえええええいぞぐろおおおおおおり  
あああああああつす!!!!

モニター前のみんなあ、こんにちはああああ!!! いい子も悪い子も聖人君子も鬼畜外道も、みんなまとめてべんぼう行きい!

司会トークもお手の物。雑談、怪談、猥談、なんでもござい! どんな人格、性癖の奴にも相手のハートにブレイクシユウウウウト!!!

な、この僕と一緒に!

愉快で素敵で、残念でめんどくさい! 閲覧数強制的にNO.1!  
逃げたくても逃げられない、BBチャンネルはっじまるよおおお

お!!!

!!!」  
黒衣を纏った少女、ではなく。

悪臭とウザいテンションを撒き散らす、金髪ゴングロの悪魔だった。

保険室から突如として一変して現れたスタジオ。

その視界に飛び込んできた穢れのヒトガタは正気を揺さぶる衝撃

だった。

「むう……！ これも一つの芸術か。余の手管を以てしてもこれほどのものには至らぬ。」

ここまで美と相反する醜悪のカタチがこの世にあらうとは、もはや個人で至る境地ではあるまい」

「鬼天狗に悪五郎と……うげ。パツと見だけでもヤバ気な悪神ヤツのオンパレードじゃないですか。」

アレ絶対、この世に出てきちゃいけない類いの祟りですよ」

英霊2人の視点からもアレはそういう存在らしい。

人類にとつての害悪。正気を侵す汚染災害。あの偽りの日常での事は未だに脳裏から離れない。

この相手はどうあつても敵としか成りえない。そうと確信させる邪性がそこにはあつた。

「神野!? 割り込みハッキングなんて、どういうつもり!」

「どういうつもりい? じゃないよ、サクラア。また君は素晴らしく愉快なことやってるみたいじゃない。」

みんなの視覚と聴覚まるごとハックした視聴強制ムービーとか、いや実にいやらしくて僕好みの趣向だよ。

寂しいなあ、寂しいよサクラ。こんなイベントに僕を誘ってくれないなんて、いつから君との仲はこんなに冷え切つてしまったんだい?」

続けて現れたのは、声で予測した通りの桜と瓜二つの少女。

戯言のように語る悪魔に対し、少女は一切の悪ふざけもない殺意で以て睨んでいる。

「あなたの戯言なんて聞く気はないわ。これは私の——」

「ああ大丈夫だ、言わなくても分かっている。君の一途さはよく分かっているさ。」

けど、いけないなあ。発言権の制限なんてのは関心しない。その鼻屑っぷりは目に余る。

駄目だよ! もっとアドリブも利くようにならなくちゃ! こんなカンペなんて用意しなくてもさあ」

「ちよ!? なんであなたが持つてるんですか!？」

「まあ実際、今の君がここまで干渉を行えるのは、ここ」くらいなものだろうが、そういうのは頂けないぜ。

このシャットアウトっぷりはエンターティナーとしては見過ごせないよ。司会はトークで場を回すのが仕事だろう。

正直なところ、そのテンションだって結構無理してるだろ。意中の誰かと話せるからって、そういうのはちよつと引くなあ」

「っ!!? 消えろッ! 消えなさい!」

少女が教鞭を振るい、その度に悪魔は破壊と再生を繰り返す。

ほとんど嫌がらせのようなしっこさだ。おまけに色々と裏事情も暴露されてるし。

ある意味コンビのようにも見えなくもない。少女の方は本気で嫌がるだろうが。

ともかく、場の状況は完全に向こうに掴まれた。

もはや前後の流れもない。寸前まであった”色んな状況”も持つていつている。

——うん、とりあえずその事だけは、彼等には”ありがとう”と伝えておきたい。

「ではでは、司会進行はユーモラスに溢れた正真正銘の悪魔であるこの僕、神野明影と。

ちよつとコミュ障ちつくな自称小悪魔の残念ちゃんこと、BBでお送りしていきます」

「って、勝手に進めるな!」

「とゆるわけで、オーディエンスの皆さんもいらっしやうい♪

AIでもマスターでもサーヴァントでも、この裏側に居る人たちは大歓迎! 監督者として仲間はずれは作らないから安心しておくれ」

瞬間、スタジオに新たな人物が出現した。

シンジにライダー、そして桜と。世界が変質してから姿の見えなかった者たち。

それが悪魔の手引きによって、この色んな意味で狂った世界へと招かれた。

「うう、ん……あ？　なんだよ、ここ？　僕は確か保険室で……」

「おはよう♪　お目覚めの気分はいかがだいたい間桐シンジくん？」

「う、うわああああああ!!?!」

突如として迫った悪魔の姿にシンジが悲鳴を上げる。

いけない。あの神野に好きにさせては、シンジではきつと耐えられない。

「君は——」

まさにその口から悪意が吐き出される、その瞬間。

轟いた銃声音と共に、神野の顔面が吹き飛ばされた。

銃口より昇る硝煙、慄くシンジの後ろには銃を構えたライダーが立っていた。

「——いや、これはさすがにひどくない？　僕まだなんにも喋ってないんだけど？」

「んなくせえー臭いしといて抜かしてんじやないよ。どうせなに言わせたってロクでもないことだろうが」

吹き飛ばされた頭に蟲が群がり、そのカタチを再生させる。

見るもおぞましい醜悪さだが、対面するライダーに怯んだ様子はない。

「アンタみたいに口先云々で丸め込もうって腹の奴への対処なんて決まってるのさ。余計な事を言わせる前に、その口ごと吹っ飛ばしてやればいいんだよ」

「ライダー、おまえ……」

言う間にシンジを引き摺り込み、すでに背に庇う形においている。

マスターを守るサーヴァントとして、ライダーの行動はとても誠実なものに見えた。

「いやいや、随分簡単に言ってくれるけど、そんな容易いわげがないんだけどなあ。

これでも悪魔の看板背負っているからね。自覚はあるよ、僕の言葉は毒だって。まともな奴ほど、悪性の言葉から目を背けるなんて出来

やしない。

誰だつて自分が正しい側だと信じたがるものだからねえ。英雄だろうが凡人だろうが、人なんて自己正当化のための詭弁が上手い奴ばっかりだろう。

正義なんて秤に乗って揺れるばかりの概念だ。その揺らぎがある限り、僕にとって貶めることはわけもない。君だつてそれは——

「——」  
そこまで神野が言いかけたところで、その言葉を再び止めたのは銃弾と哄笑だった。

「——なげえよ、話が。そんなにペラ回したきやあ神官相手にでもしてな」

「詭弁がどうだの正義がどうだの、そんなもんアタシが知るもんかい。こちとら所詮は海賊で、冒険者さね。アタシがやるのは拓く事だけだ。国家だ秩序だ退屈そうな真似は、後の連中が勝手にしなよ。」

奪つて、榮えて、凋落して、結局は人の生涯なんざそんなもんだ。ならせいぜい派手に楽しもうじゃないのさ。

魚のエサにもならねえ泣き言なんざ、係つてらんないね」

その性質は、ただひたすらに豪快に、刹那の内の享樂を。

善悪に揺れる人の弱さを知りながら、それをしようがないと笑い飛ばせる。

嵐の如く生涯を駆け抜けた海賊提督。その性根は悪かもしれないが、醜悪ではない。

神野明影の悪意にも揺るがずに、ライダーは自らの有り様を貫いていた。

「きははははは！　なるほどこりゃあ相性が悪そうだ。」

なかなかないぜ？　そこまで自分の悪性にひらき直れる奴なんて。

悪党なんて結局は弱者がなるものだからね。正道に入れないから裏道をやつてるのがほとんどだ」

砕かれた神野が再び復活する。やはり痛痒を受けた様子はない。

だがそこにはすでにシンジへの悪意の気配はない。むしろライ



ダーを警戒するように距離を置いていた。

「さすがは星の開拓者。遊び半分で手を出すべきじゃなかったね。」

うん、僕が悪かった。どうにも誰かと話していると深入りしてしま  
うのが僕の悪い癖だね。他の聴衆もいるっていうのに、僕も人の事は  
言えなかったかな。

——という事で、どうなのかな？ 間桐桜くん？」

神野が次に目を向けたのは、桜。

黒衣を纏う少女ではない、正しく記憶にある管理AIを務める彼女  
の方だ。

「どんな気分だい？ 誤った自分を見ている感想は。かつて捨てた身  
としては心中穏やかではないだろう。」

いや、この表現は間違ってるか。だって君は正しく機能するAI  
で、BBは誤作動を起こしたバグなんだからね。

仮に彼女を忌諱するとしても、それはムーンセルの手足として。不  
正なる存在は排除すべしって命令コマンドに従ったものなんだから。

君はそうである事を選んだ。ほら、何か言いたい事があるんじゃないの？」

最後の台詞は桜ではなく、BBに向けて。

同じ姿かたちを持った、桜とBB。

やはり無関係であるはずはない。神野が語る言葉からは両者の因  
縁深さが伝わってくる。

「……私から貴女に話す事なんてないわ。結局、あなたは捨てたんだ  
から。そんな奴が何を言えるというの」

「貴女の行動は間違っています。岸波さんを、皆さんをサポートする  
事が私たちの役割です。」

貴女の行動は、その規定から逸脱しています。それでは私たちの存  
在証明は成り立ちません」

「そんなものが証明だというのなら、私はいらないわ。あなたはそう  
やって、元の正常なままでいればいい」

向き合う2人の間で交わされるのは、敵意か。

彼女たちは互いの行動を認めていない。それは間違っているとお

互いを批難している。

それが果たして如何なる理由からであるのか、岸波白野しなぶのにはまだ分からない。

「あははは、いやあ怖い怖い。やっぱり女同士っていうのは陰湿なものだねえ。」

ま、盛り上がるのも結構だけど、さすがにこの場での決着は待つてもらおうか。ライトを当てる役者を偏らせては演出家ポグの不手際になつてしまう。

それにさあ、さつきから待たせているんだよね、主を。僕を不忠者にしないほしい」

自らには主がいると、神野あくまは語る。

あの悪意の極限を従えられる存在など、とても心当たりなど——いや。

「お呼びしよう、僕の主人マスターを。この月で聖杯の座に至った最強の勝利者を。」

すべてはあの御方の慈悲。誰も彼も所詮は振り回されるだけの端役。それを理解するといい。

その上で、それだけじゃ終わらないと、声高に叫んでみせてくれ。僕も主も、それを心から望んでいるよ」

白いスモークが焚かれる。

まるでテレビの演出のように、封じられた視界の中に新たな人影が浮かび上がった。

「それでは登場していただきましょう。我が主、甘粕正彦おおおお!!!」

たち込めた煙幕を振り払い、威風堂々たる姿のままに、甘粕正彦は現れた。

思い出す、表側で経験した彼の強さを。

完膚なきまでに敗れた現実。他の誰もが甘粕に敵う事はなかったと。

雄々しく真っ直ぐな信念。その行動を支える意志の強さ。どれも”最強”の二文字にふさわしい。

目の前に現れた月の覇者に、この場の誰もか呑まれていた。

「ノリの良い登場、ありがとうございませーす！」

いやあお待たせして申し訳ありません、我が主。ちよつとした挨拶だけのつもりだったんですが、思ったより熱が入ってしまったて」

「なに構わん。今の俺は舞台裏だ。配慮など無用、主演同士で気概を高め合うのなら、それこそ望ましいものだ」

甘粕の視線がこちらを射抜く。

ただそれだけで、膝をつきそうになる重圧に襲われる。

やはり何も変わっていない。かつての対峙の時と同じく、甘粕正彦は「魔王」のままだった。

「久しいな、と言うのはおかしいのだろうか。ともあれ壮健なようでは何より。変わらざるの美しい様を観れて、俺も嬉しい限りだ」

「美しい、と言うか。余が絶世の美の結晶である事に疑いはないが、その心は何からくる？」

岸波白野しづののことを庇うように、セイバーが前に出る。

傍ではキャスターが控え、油断なく自分のことを守ってくれていた。

「あいにく俺に芸術の才はない。無いが、美しいと見える人の輝きの如何は心得ている。

強き意志を抱きし者、物事の善悪に関わらず、一筋の信念の下に克己する姿は美しいものだ。

ならば是非もないだろう。おまえたちの在り方は美しい」

「周囲の思想に囚われず、自らの情熱のままに生きる。虚飾も打算もない、その愛は真実だ。

セイバー、そしてキャスターよ。おまえたちに対して、俺はただ惜しみない賛辞を送るだけだ」

その言葉に偽りは無い。彼の向ける親愛は本物だ。

性質を問わず、突き進む意志の絶対値を基準とする美観。人が示す輝きこそ甘粕は愛している。

「魂の声に従い、熱き気概を持って歩む者。その猛りは危うきものなれど、そこにある信念に汚点はないか。」

すまぬ、奏者よ。戯言だと切つて捨てるべきなのだろうが、余は美しいものを愛でる。感じた美しさを醜いと偽ることは出来ん」

「清潔だしイケメンではあるんですけどよねータマシイ的には。でも暑苦しいとかマツチヨすぎですかねータマシイ的には。うん、やっぱりご主人様が一番つて事ですぬ、タマシイ的に」

2人の言うように、甘粕は善性に位置する人間だ。

恐ろしいほど公平で、だからこそ容赦もない。信奉する試練と、その好意が当価値なのだ。

こうして親愛を向けられていても、次の瞬間には敵として殺意を向けられる事もありえる。その危険性はすでに嫌というほど理解していた。

「いやあ場も温まつてきているようで結構結構。そろそろ本題に入つていこうか。さあ準備はいいかな、BB?」

「勝手に巻き込まないでちょうだい。あなたたちと組んでみせるなんて冗談でもあり得ないわ」

親しげな神野に対し、本気の殺意さえ込めて拒絶するBB。

冗談ではなく、この2人は水と油だ。少なくともBBの方は、神野に一片も心を許していない。

「へえ? でもさあ、実際ちゃんとやれるの?」

君つて基本、自分優位で制御できる状況でないと上手くやれないじゃん。

特定個人以外は質疑応答厳禁のコミュ障御用達なライブ仕様じゃないよ。ホントにできんの?」

ああ、そういう仕様だったのか。  
なんだかんだ言つても、人と話すの苦手そうだもんなあ。

「ていうかさあ改めてみると、BBチャンネルって(笑)。このスタジオもゴテゴテ凝つてるし。」

これ全部自分で用意したんだよね? 随分とまあ力入れちゃって、こんなどうでもいい事に。始まりのテンションにしても、ぶっちゃけかなりイタイんだけど。

ねえ今どんな気持ち? あんなドン引きレベルで気合い入れてた

のが、呆気なく台無しにされて今どんな気持——あべし！」

強烈な光線<sup>ツッコミ</sup>が、容赦なく神野を吹き飛ばした。

「勝手に悪評を広めないでくれる。好き放題に言ってくれて。

というか、コミユ障とかじゃありませんから。フリートークなんて余裕ですから。

単に権利を認めて、この人たちを調子に乗らせないためです。強いのが誰なのか、それを躡てあげようとしただけですから。

勘違いした人たちには、言葉の暴力で分からせてあげるのもやぶかさじゃありません」

「ほうほう。それは楽しみだ」

そして即座に再生した。

その不死身ぶりは、もはや死に芸レベルである。

「そこまで言うのなら僕も手はださないよ。でも本当に大丈夫なのかい？ 嫌いだから、答えづらいからシカトしようたってそうはいかないよ。一途すぎて度量が狭いBBちゃんには、ちよつと難しいんじゃないかなあ」

「黙ってなさい。あなたの同意なんて求めてないわ」

「だから、そういうのが駄目なんだって。そこは皮肉の1つでも返して会話の主導権を握らなきゃね。まあいいや、ならば後はご自由に」  
見方を変えるとコントのようなやり取りを終えて、神野が下がる。

これで主導権は再びBBに。だが果たして上手くやれるのか。

正直、あの神野の言う事もかなりの確だと思うし、リードするよりされる方が好きそうだなもんなあ。

「——ならば、まずは俺から1つ尋ねるとしよう」

って、思っている側から大本丸が投げ込まれたー！

BBチャンネル発言者第一号は甘粕正彦。

いきなりラスボスが相手とか、高難易度過ぎやしないか。

「おおっと流石は無茶振りに定評のある我が主だ。初っ端から飛ばしていきますねえ」

神野は愉快そうに笑っている。

BBの方もこれには流石に狼狽しているようだ。動揺しているの

が見て取れる。

「な、なんですか。来るならきなさい。別に怖がついていませんから」  
しかしてBB、これを受けてたつ。

臆して逃げるような真似はしない。その勇氣には素直に感心した。  
「ふむ。ならば問うがな、BBよ——」

「そのパンツが明らかに見えている服装は、もしや狙ってやっているのか？」

そして甘粕正彦、本日最大級の爆弾をあつさりと投下した。

「え？ え、え？ ふえ!？」

「さあすが我が主いい！ 誰が見ても明らかなのに、暗黙の了解で踏み入れなかった地雷源も容赦なく踏み抜くその勇氣い！ そこに痺れる憧れるう！」

すかさず便乗。煽る、煽るぞ、この神野<sup>あくま</sup>。

もはやトークを回すどころではない。スカートを押さえ、今更の抵抗を試みていた。

「え？ 見えてるつて、前から？ え、じゃあひよつとして、その……センパイ？」

……うん。はつきり言うはずつと気になってた。

だつてその、普通に立つていても目に入るし。

やたらと高い位置を取ろうとするから、もう余計に。

その見え方ときたら、もはやチラではなくモロだった。

ツッコまなかったのは、創造神<sup>きのこ</sup>の御意志である。

「やつすいパンツしてたよねえ〜♪ けどどうしてだろう、僕はそんな君にときめくんだ。なんとというか、前世<sup>げんざく</sup>からの因縁かなあ、君みたいな娘とは。」

主も、そう思いませんか？」

「いや。俺は特に関わりがなかった気がするな。それらしい描写はあったが、そんなことはなかった」

しかし彼等は14歳神<sup>ま</sup>の傘下。こちらのお約束など通じない。

徹底して追い討ちをかけてくる。情け容赦がまるでない。

「うむ。その点は余も目に余っていた。秘すべきものをそうも明け透

けに見せびらかすとは、慎みの美德というものを知らぬな」

「え？ まさかそこまでモロパンしておいて、気付いてなかったって事はないですよね？ だってあからさますぎますもん」

更に、我がサーヴァントたちもそれに加わった。

もはや痴女疑惑の少女は孤立無援だ。包囲されたBBに味方はいない。

「いや、格好云々というなら君たちだって大概——」

「天幕よ、落ちよ！」

「炎天よ、奔れ！」

「アバー——」

神野<sup>あくま</sup>は去った。

「馬鹿者！ 余のこれは見えているのではない。あえて見せているのだ。

意図する美の装飾であるのならそれは芸術。隠すべきもので隠せずは、ただの露出である」

「私のは計算された妖艶さですので。大胆に、しかしして慎ましく。単にモロ見させている方と一緒にされたら困ります」

跳ね返ってきた指摘もなんのその、我がサーヴァントに常識は通じない。

流星は己の我が儘で国1つをも傾ける英霊たちである。その凶太さは並大抵では揺るがない。

「むしろ見られる事を意図してのことならば、あれか？ 世の男子どもの視線に晒されることに快感でも覚えているのか」

「ビッチ、ていうやつですね、分かります」

しれっと復活した神野。

疑惑が加速する。BBはビッチ系ヒロインだった？

「ちがつ！? そんなわけないでしょう！ あまりおふざけが過ぎると——」

「はい、センセイ質問です♪ BBって『Bitch Blossom』の略称ですかあ？」

ここでチェインが入った。

BBに持ち直す機会を与えず、キャスターが更なる追撃を畳み掛ける。

「……？　なあ、ライダー。”びつち”ってなんだ？」

更に更に、シンジの純情な邪気のない疑問。その効果は抜群だ！

「そりゃあシンジ、あれだよ。雄と見りやあすぐに股あひらくアバズレって事さ」

そしてライダー姐さん、そんな直接的に卑猥な表現は使わないでください。

見た目同年代で憎まれ口だつて叩くけど、彼はまだ八歳児せいしやうねんなんですよ。

「ですから、私ビッチなんかじゃありません！　あなたたち人の話を

——」

「なに、そう頑なに拒む事もあるまい、BBよ」

常の通り、親愛を込めた語りで以て道理を説く甘粕。

なぜだろう、嫌な予感が止まらない。いつもとは別の意味で。

「いかな性癖を持つて生まれようと、それは恥ではない。自然に生きる動植物らが己の本能に疑問を差し込まないように、したいものはしたいのだ。

世間からの白眼視すら歯牙にもかけずに貫き通したなら、そこに輝きは生まれる。勇気を持って。覚悟を決めろ。そんな人の価値こそ俺は守り抜きたいと願うのだ。

淫売だと？　結構ではないか。どんな形であれその愛が本物ならば、いつかきつと思いは届く。

さあ、満天下に謳い上げるがいい——ビィィィツチイとお!!!

「お黙んなさい！　このお馬鹿さまー」

何を言つても届かない。この場の流れを反転させるには、BBでは荷が重い。

ていうかそろそろ不味い。マジでマジ泣き5秒前くらいだ。

あと一步、あと一步押し込んだら、きつと彼女は泣き出してしまふに違いない。



「あの……もうやめてあげてください」

あまりに居た堪れなかったのか、ついに桜からもフォローが入った。

先ほどあれだけ敵意を明確にしていたのに、やはり同じ姿の相手には思うところもあるのか。

「まあまあみんな、これでは埒があかないよ。」

ここは1つ、当事者に聞いてみようじゃないか。ねえ、岸波くん?」  
混乱していく場に神野が仲裁に入り、同時にこちらへと話題が振られた。

「実際のところどうなんだい? 誰に狙ってるか知らないけど、ああいう貞操観念の低そうな痛々しい後輩って、どう思う?」

皆の視線が集まる。

自分の答えを、この場の誰もが待っている。

そこには無論、BBも。彼等の期待が注がれる中で、自分は答えを口にした。

——正直に言うと、そういうのはちよつと引いてた。

「う、う、うわああああああああん!!!」

大泣きして、走り去っていつてしまうBB。

ここに陥落。BBチャンネル、ゲストたちのいじめにより放送中止と相成った。

「あーあ、行っちゃった。ホントは自閉的なくせに、無理して外向的なキャラなんて作るから。」

というか岸波くんもやるねえ。なかなかいい絶望の声だったぜ」

そう言われて、自分が仕出かした行いを今さらながら省みる。

なんという事をしてしまったのか。BBがすでに追い詰められていた事は分かっていたのに。

そこに自分は、まるで傷口に荒塩を塗りつけるが如く、とどめの一撃をお見舞いしてしまった。

「……さすがに同情します」

仲間からの批難の視線も痛い。

しかしどういふ訳なのか。あの涙目なBBの姿を見ていたら、こう

色々と。

助けの手を差し伸べるよりも、弱々しい様を晒す内に、その心の衣を一枚一枚剥いでやろうという衝動に駆られたのだ。

これはもしや、悪魔しんのの仕業か。

自分に何か干渉して、あのような嗜虐心を芽生えさせたのでは。

「いや、違うよ。悪魔だからって何でもかんでも僕のせいになされてもなあ。

とぼけなくたっていいじゃない。なかなか堂に入っていたよ。君には何というか、他人のトラウマだとか弱みだとかを暴いて晒す才能があるね。

——うん、悪魔としての素養があるんじゃないかな」

断じて違う。名誉毀損も甚だしい。

そんな嫌疑は事実無根だ。まったく記憶にございません。

「うむ、奏者よ。その気持ちはよく分かるぞ。時に愛おしいものほどいじめたくなる趣向。余にも覚えがある。

侍らせた美童たちが余の申し付けに右往左往し困惑する姿、それは満面に咲く笑顔とはまた異なる趣きを持ち、実に堪らぬ愛らしさを見せる。

そなたも美の愛で様の何たるか、解してきたな」

「サド心に目覚めた俺々系」主人様……そういうのもあるのか！」

サーヴァントたちの発言はこの際スルー。

ともかく、BBは行ってしまった。

残念だとは思う。事情は知らないが、決して知らない仲じゃない。はつきりと敵味方を判断しづらい相手だが、今すぐに危険となる事はなさそうだ。

何より危険な、明確に敵だと分かる相手は、まだ目の前にいるのだから。

「しかし主、随分調子良くやってくれましたね。というか、わざと言つてませんでした？」

「無論だ。大言を吐いて務めた場の主催。遠慮などしては彼女の意志にむしろ悪い。この経験も糧にして前に進めると信じている。」

「これだけ言われて、尚もあの格好を貫けたのなら本物だ」

「確信犯ですかい。僕が言うのもアレですが、あなたも大概タチが悪いですねえ、主」

……そんな大敵たちも、なんだか当初の目的を忘れているような。

場の流れというか、勢いに任せすぎだろう。そもそも何しに来ただこの人たち。

そんなこんなの中に、ファンシーなスタジオも元の保険室へと戻る。

プロデューサー 創造者が降りたためか、あの空間を維持する存在がいなくなったのが理由だろう。

結果、保険室の一室には甘粕、神野まで含めた一同が所狭しと詰め込まれる事になった。

絵面で見れば、なんとも締まらない。

場の空気自体も白けているというか、ここから決戦の流れに持つていく気力は流星に無かった。

「なにはともあれビクトリイ♪ 何やら不穏な気配のした方にはご退場いただきましたし、これ以上のライバル候補なんて要りませんもの」

「それには同意するぞ。他の対抗者が現れる前に、まずは貴様の決着を付けねばなるまいな、キャス狐よ」

「なんですか、そのキャス狐って？」

「貴様の呼び名だ。キャスター 魔術師にキツネで、キャス狐。間もなく散りゆく者には相応しい単純さであろう？」

「むっかー！ なら私は赤くてセイバーだから、赤セイバーって呼びますよ！ 最もその機会もすぐに無くなるでしょうけどね！」

そして下火に向かっていた2人の戦いまでも再燃してしまった。

流星に自重してもらいたくない。いくら何でも敵がすぐ傍にいるのに痴話喧嘩なんて、不謹慎にも程があるだろう。

相手の方だって、こんな真似をされて黙っているはずが――

「――修羅場 かッ！」

なるほど、己こそ愛する者の伴侶にと愛慕に燃えるその姿、実に素

晴らしい。

ただの一席のみ許された正妻の座、それを競い合う勝負がある。自らをより良く魅せんと励む努力がある。

その試練こそが、おまえたちの愛と勇気を育むだろう。俺に出来る事は、愛に燃える女人たちへと健闘の祝辞を贈ることのみだ」

いきなり何を言っているんだ、この人！

そんなんじや愛と勇気は育まれないよ、もつとドロドロとした何かだよ。

ていうか、この人は試練なら何でもいいのか。節操ないな、オイ！  
「もはやこの場に我らは無粋。彼女らの対時に比すれば他事など軽い。」

さらばだ、俺の愛する輝きたちよ。自らが抱いた思いのままに、その本懐を遂げるがいい」

「うん。君が言わんとしてることは分かる。何を期待されてるかって事もね。」

だから、あえて退こう。ここは放置を選んだ方が面白そうだしね」  
って、オイ！ そんなノリで本気で帰るつもりなのか!?

何かこう、この月の裏側での事とか、話すべき事が色々あるのではないのか。

「あ、裏側こころでの聖杯戦争とかその辺りの事はまだ後日に伝えに来るんで。その時まで無事でいるかは知らないが、まあ安心してるといいよ」

それだけを言い残し、甘粕と神野の姿が消える。信じられないが、どうやら本気で帰ってしまったらしい。

本当に何のために来たんだ。あの人たち、結局BBにいじめという名の試練しか与えていないぞ。

ともあれ、場には剣呑な雰囲気を漂わすセイバーとキャスターの2人が残された。

「甘粕正彦、相容れぬ者ではあるが舞台の道理は介しているな。主演が定まらぬ演目など興が醒めること甚だしい」

「そうですねえ。いつの世も正妻は1人だけ。側室、妾など男尊女卑

の典型例、時代じゃないです。

夫を立てはしますが、野郎どもに媚を売るつもりはありませんので。ハーレム容認断固阻止！ 私、そんじょそこらの駄菓子<sup>ヒロイン</sup>どもとは違いますから」

両者の間の殺意が高まる。

すでにその手には剣が握られ、周囲に呪符が舞っている。

共に明らかな戦闘態勢。お茶を濁すつもりなどない、ここで決着をつけるつもりだ。

「案ずるな、奏者よ。そなたの意は汲み取っている。

心優しきそなたの事、共に戦い抜いた者を無碍には扱えぬという気持ちは分かる。

故に結果だけを待つが良い。真に奏者の伴侶にふさわしきは誰か、明確な形で現れよう」

「まあ実際問題、今のままですと回線<sup>ライン</sup>も分配されて霊格<sup>レベル</sup>も下がったままですからね。

これから戦っていくためにも、どちらかに絞っていかないとならないでしょう」

もはや2人の頭に議論を挟もうという余地はない。

サーヴァントとして、マスターの剣としての本領で以て決着をつける。その勝敗はこれ以上なく明確だろう。

「場所を変えるか。この保険室で騒ぎは起こさぬ。先の誓約は忘れておらん」

「上等です。表出やがれコンチクショー」

2人が保険室を後にしようとする。互いの立場を賭けた死闘を演じるために。

元より彼女たちはサーヴァントだ。戦闘代行者としての意義を發揮する事に疑問は持たない。

どうしようもなく2人は本気だった。見過ごせば、確実にどちらかの血が流れるだろう。

……もう、この”手段”しかない。

出来ればこれは使いたくはなかった。二度と使える手段ではない

し、何より彼女らの意志を捻じ曲げる。

それでも見過ごすことは出来ない。2人をこのまま戦わせるわけにはいかなかった。

たとえ両者の合意の上のことでも、それが2人の意に反するのだとしても。

——令呪、二画を以て命じる。岸波白野<sup>しづの</sup>は彼女らの戦いを認めない。

「ッ!? そ、奏者よ、それは——!」

「わきやん! これは強烈な縛り……ッ! でも、ご主人様からのだと思うと、タマモちよつと感じちやいそう♪」

手に刻まれた三画の令呪。聖杯戦争に参加するための権利そのもの。

その内の二画までを使って、2人に絶対命令権を行使する。

限定された範囲とはいえ、奇跡のような真似すら実現してみせる令呪の強権。

どれだけ彼女たちの闘志が本物だったとしても、この縛りの下では関係ない。

その意志さえも無視して、2人には剣と呪符を収めさせた。

「はあ!? おまえ、馬鹿じゃないの! そんなくだらない事に令呪使って、なに考えてんだよ!」

ああ確かに、くだらないと言われても仕方ない。

たったの三画、参加証として残しておく事を考えれば実質二度までの令呪。

それをこんな内輪揉めで消費してしまうなど、おそらく史上初の無駄使いに違いない。

けれど、それだけする意義があると判断したのも事実だ。

彼女らが戦いに発展させてまで譲らないのも、岸波白野<sup>しづの</sup>の事を思っ  
ての事だ。

傍から見れば馬鹿馬鹿しく見えるだろう。だがその理由は、少なく

とも自分には笑って済ませられるものではない。

岸波白野の事を思うから、その隣の居場所を譲りたくない。彼女たちの熱意の強さはもう十分に伝わっている。

その意志を挫くのに、ただの言葉では軽すぎる。

令呪の浪費など馬鹿げてる。今のままでは霊格は戻らない。利に叶った部分があるのも理解している。

だが心からの思いに対し、損得を含んだ説得などそれこそ侮辱だろう。

自分はただ、2人に消えてほしくない。この思いだけが真実で、そのためなら何だっしてみせる覚悟がある。

だって、彼女たちは”戦友”だから。

同じ場所、同じ時間、けれど違う世界で、それぞれと共有した日々。

どちらが消えても成り立たない。真の意味での一蓮托生。その姿勢は今だって続いている。

たとえどちらか一方でも、彼女たちが消える時は自分もまた消える時だと意識している。

だから自分だって譲れない。

令呪を費やしても、非効率だと承知しても、一方を消した上で前に進むなどあり得ない。

もしもそんな事になるのなら、その時は自分も消去デリートしてくれ。

セイバーも、キャスターも、岸波白野にとって掛け替えのない存在なんだ。

「奏者よ……むうう……」

「ううう……ここで領くとなし崩し的にズルズルと……でもでも……むむむ」

伝えるべき事は伝えた。

これで彼女たちが折れてくれないのなら、もう自分に打つ手はない。

その時には自分も消えよう。まるで自身を人質に取ったような形だが、形振りなど構わない。

揺らいで見える2人に対し、真っ直ぐと向かい合った。

「未練がましいね。アンタらの負けだよ」

そんな自分たちの間に、ライダーが割って入った。

「この坊やは身を切って男を見せたんだ。そこは汲んでやるのがいい女だろう。」

どの道アンタらは詰んでる。この坊やは本気さ。ならつまんねえ意地はってないで、一旦でも譲歩してやるのが器量ってやつじゃないかい?」

「ライダー……相も変わらず豪胆な気質よな。そういう貴様の気持ちの良さ、余も好ましく思うぞ」

「ぐぐぐ、ここでそう言われたら……やっぱりこの人、あんまり気が合いません」

思わぬところの、ライダーの説得。

これが最後の決め手となった。2人の表情から険が消える。

「止む終えまいか。余としたことが、奏者にここまで言わせてしまうとは」

「まあ、必要って場面もあるかもですし、二騎同時もやり様はありますからね」

セイバーとキャスターが向き直る。

交わる両者の手。停戦を表明する握手が交わされた。

「この場は収める。奏者の振るうべき名器はいずれか、それは後の貢献如何で定めるとしよう」

「仕方ありませんね。ご主人様と引き換えになんて出来ませんし、ウザりたいのはこの際我慢するとします」

並び立つ2人の姿に、ようやく息をつける。

ともあれ良かった。これで何とか、彼女たちが争う事態は回避できた。

そもそもセイバーとキャスター、何だかんだでこの2人は仲良くできると思う。

岸波白野<sup>しほのぶ</sup>さえ間で絡まなければ、多分よいコンビになり得るのではないか。

性格は似ても似つかないが、だからこそ噛み合うというか。そんな



姿が思い浮かぶのだ。

予測できる未来、向き合う両者にそんな光景を思い馳せる。

「まあこれからは仲間ですし、よろしくやっていきましようね、赤セイバーさん」

『正面对決なんてしなくてもやり方なんていくらでもありますしいく』

ハーレムとか有り得ねえ。正妻の座は私のもの。お食事にはせいぜいご注意を、皇帝様あ♪』（副音声）

「うむ。奏者に見初められた者同士、期待しておるぞ、キャス狐よ」『などとよからぬ事を企んでいそうであるな。

たわけめ。逆にその腹を暴き晒し、奏者の前で断罪してくれる。キツネ皮の装飾も悪くはあるまい。

権謀術数渦巻く親族や元老院を相手に立ち回った暴君ネロ、侮るでないぞ』（副音声）

……だから、2人の後ろに黒いオーラなんて見えない。見えないいたら見えない。

黙示録の獣と金色白面が凄まじい形相で威嚇し合っている光景が映るのだが、気のせいに違いないのだ。

……というか、流石にそろそろ勘弁してください。

「港は1つ。海図は無し。漕ぎ出す海は暗雲立ち込めて、おまけに同盟相手の剣は錆び付いてる上に腹には一物二物と抱え込んどきた。た。

見える先なんてありやしない。航海時代を思い出すねえ。おもしろくなってきたよ、シンジい」

「どこがだよ！ どう考えたって不安しかないよ！ つうか酒臭ツ!? さつきからどれだけ飲んでるんだよ、おまえ！」

セイバー、キャスター。シンジとライダー。そして桜。

この月の裏側で、共に苦難へ挑んでいく事になった同士たち。

不安はある。戦力は低下中。先が見えないという言葉は実を的を得たものだろう。

果たしてこの先どうなっていくのか、嵐の航海者ならぬ身には分か

るはずもなかった。

——同時刻、虚数空間の何処かにて。

「はい、これから第一回BBチャンネルの反省会をはじめます……はあ」

「司会進行は私、討論も私、ていうか参加者自体が私だけで……はあ」

「えーと……今回の反省点、というよりも問題点は……言うまでもなくあの人たちですよね」

「自由すぎでしょ、こんなにポンポン出てきて。仮にも黒幕ならドシツと舞台裏でふんぞり返ってればいいのに」

「あんな風に簡単に露出ばかりして、きつとすぐにその存在が軽くなるに決まっています」

「というか、ビッチって何ですかビッチって！ 誰も彼も低俗な人たち……ッ！」

「大体、反応が露骨すぎでしょ。何ですかアレ、中学生ですか!? センパイにしたって、ほんと巫山戯てます」

「別世界線でも私が画面に出たら、やたら処女がどうこうってコメントばっかりだったしッ！」

「そんなに処女属性が大事か！ 未通がそんなに高価値か!? 六位がそんなに惨めかッ!？」

「……あ、いえ。別に私は関係ないですけど。私、AIですし。処女と

か関係ないですもん！」  
「……とりあえず、スカートの丈は直しておこうかな……はああ」

## 非情の徒

男は逃げていた。自らを追う殺意の群れから。

その姿に勇氣はない。先の未来へと繋いだ希望などありはしない。

それは絶望への逃避行。彼の行く先には一切の光もない。

それでも逃げる脚を止めないのは、きわめて原始的な欲求シンブルに突き動かされての事。瀬戸際まで追い詰められた彼には、余計な虚飾は何もない。

死にたくない、死にたくない、死にたくない——！

恐怖から逃げ出したい。苦痛から逃げ出したい。凶兆から逃げ出したい。

もう他に何も要らないから、どうか助けてくれと臆面もなく泣き叫んでいる。

男は凡夫だ。典型的な小人である。

己の力量を知らながら認めず、分不相応な高みを夢見て手を出した。

長年で蓄積された劣等感。他人から押された”二流”の烙印を覆すために、心根ではそれが妥当な評価と知りつつも、激情で覆い隠しながら”月”を目指した。

劣等感だとして、時には条理を覆す力となる。

感情の明暗に関わらず、それが意志の頑強へと通じたのなら、生まれる強さは本物だろう。

この世は清濁の道理を併せ持つて動いている。蔑まれた経験が未来の栄光へと繋がる人生ものがたりなど探せば幾らでも見つかるものだ。

だが無論、それが本物となるのは、意志の不屈を貫けた強き者に限られる。

男は小人、いざ苦難に直面すれば、その克己心も容易く折れた。

妄想じみて肥大した自己顕示欲。有りもしない侮蔑まで思い煩って出来た実像は、肥大した外観に比して中身があまりに脆い。

無残な敗北。追い立てられる恐怖。もはや虚像のような己など片

鱗だって残っていない。

すでに闘争手段も失った。

何もかもが剥ぎ取られた後で残ったものなど、生への執着以外にない。

明日に残すべき何かでも、大切な誰かのためでもなく、ただ死の恐怖に迫られてひた走る。

だが男に希望はないのだ。小人であり、善人ではなく悪人として過ごしてきた彼に訪れる奇跡はない。

男は獲物だ。狩人たちによって刈り取られる、哀れな贅でしかない。

「あ、あああああああツツツ?!?!」

両足首に走った激痛。身を貫く冷たさに、流れ出す血の熱さ。

足を見れば、ちょうど其々の後ろ足首に刺さった二本の刃。

男の背筋が凍り付く。それは苦痛からではない。すでに狩人が迫っているという事実が、何より男を恐怖させた。

足音が聞こえる。

男のものではない。逃走のための足は潰された。

それでも足掻きは止まらない。生への執着が捨てきれない。

残された腕で這いながら、少しでも遠くへ逃れるように男は動く。

だが、所詮は無駄な足掻きだ。

足音は止まらない。一步、また一步と確実に近づいてくる。

そこに男を痛ぶる意図はなく、淡々と。静かに、一定に、ただ必要だからと歩を進める。

それが男には恐ろしい。その無感動さが、相手の心証を何よりも表していると思えたから。

そして、足音が止まる。

最後の音は、すぐ後ろから聞こえてきていた。

「これが……おまえの復讐か?」

間近にいるだろう狩人に向けて、男は口を開いた。

「おまえを利用して、騙っていた事への。地上でおまえを殺した俺に對する、怨みなのか!」

溢れ出した激情は止まらない。

不条理に支配された心は、納得を求めている。

恐怖と苦痛を怒りへと置き換えて、そもそもの発端が自身にあった事も無視して激昂した。

「——答えろおおお!!! 玲霞あああ!!!」

男——相良豹馬は、かつて恋仲であった女に吠えた。

地べたに這いつくばり、激情を顕わにする男。

過去には身体を重ね、愛を囁き合う時期もあつた相手の悲惨な姿にも、六導玲霞の心はさして動く事もなかった。

「復讐……そうね。確かにこれって傍から見たらそう見えるのかしら」

相手を追い詰めた張本人として、玲霞は自らの行いを省みる。

果たして自分の所業に、彼が言うような動機があつたのか、と。

確かに自分には、彼を憎むのに足る理由がある。

復讐、という動機は道理に適つていて、ある意味で全うなものだろう。

自分は一度、確かに彼に殺された。帰還先は既に無い。

騙されて、利用されたのも本当だ。その挙句に使い捨てられたのだから、憎悪の理由としては十分すぎる。

ならばやはり、彼に対する仕打ちも憎しみによるものだろうか。彼を苦しめ、より深い絶望を与える事が自分の望んだ事だと。

——恐らくは、違うと判断した。

「でも、豹馬。そう思うのも無理ないけれど、私はあなたを憎んでなんていないの。

騙されていた事は悲しいけど、一緒にいた時間は楽しかった。たとえそれがあなたの細工だったとしても、誰かと一緒に暮らす生活は

思っていたよりも素敵だったわ。

こうなってしまった後でも、あなたに対する感情はそんなに変わっていない。私は多分、あなたの事を愛していたわ」

「淡々と、感情を込めない静かな口調で、玲霞は己の胸の内を語る。その様子は、目の前の相手を憐れむように。少なくとも憎しみは無いように見える。」

そこに一抹の希望を見出したのか、命乞いのための言葉を男は口にする。

「俺も、俺も愛していた！ おまえの事を思っていたんだ！

あの時のことだって、本当はやりたくなかった！ でも仕方なかったんだ！

「それも今では後悔してる。本当にすまなかった。だから……だから、俺とやり直そう！」

「一生をかけて償う、おまえの気が済むまで貢いでやる。だから——」

「——だからどうか、命だけは助けてください。」

言葉の根底にあるのは、その一念のみ。

吐かれた言葉も、果たしてどこまで真実であるのか。

それでも込める感情の熱だけは本物で、男は切実に訴えかけた。

「そう。あなたも私を愛してくれてたのね。とても嬉しいわ、ありがとう」

それは紛れもなく本心からの言葉だ。

六導玲霞はこの男を愛していた。孤独を埋めてくれた事には感謝してる。

「相手も同じ気持ちだというのなら、それは嬉しい事だと思ってる。——」

「でも、ごめんなさい。あなたとの時間より、”あの子”との今の方が大切だから。」

「あなたを使う事で強くなる方法があるそうなの。これは戦争なんだから、強くないと生き残れないでしょう。」

「私もあの子も、手段を選べるほど強くないから。けど裏切ったのは

あなたが先なのだから仕方ないわ。

本当に、仕方がないの。貴方のことは、大切な思い出にして生きていくわ」

そう、仕方のない事だ。

物事には優先順位がある。彼との過去よりも現在イマの方が比重が重い。

そんな現在イマを守るために必要なのだから、どちらを選ぶかなんて決まりきっている。

弱い自分に選択の自由なんてない。だからこれは、仕方のない事なのだ。

当然のようにそう考えて、六導玲霞は男の希望を断ち切った。

「……ふざけるな。ああ、ふざけんなよ、このアマ！」

その言葉に触発されたのは、最後に残された劣等感。

男の中の歪んだ感情が、かつて全てを支配していた女への屈服を認めずに激発した。

「有り得ねえ、あつてたまるかこんなこと！　なんで俺じゃなく、おまえの方が勝ち残る!？」

俺が劣ってるってのか!?　おまえの方が上だってのか!?　おまえなんて俺に使われるだけの価値しかなかったろうが!」

捻じ曲ナルシズムがった自尊心。暗い感情から肥大したそれは、女を勝者だと認めない。

眼前まで差し迫った絶望から逃避するように、男は怨念の全てを吐き出していく。

「売女が！　知ってるんだぜ、おまえがどれだけ意味のない人生やってきてんのか。

実の親にも、貰われ先でも、何処でもたらい回されて、拳句なにもしないで流されてきた。

俺がおまえに近付いたのはな、そんなおまえが好都合だったからだよ。誰よりも支配しやすい、おまえがな!」

この女には何も無い。流されるだけの風見鶏だ。

どんな環境でも、反抗せずに文句も言わず、唯々諾々と従うばかり。



主体性がまるでない。自己の意志と呼べるものが欠けた出来損ないだ。

これほど利用しやすい人間もいまい。女自身、そうやって扱われる事を受け入れていたろうに。

だから使い捨ててやったのだ。そうする事が目的で、当然の結果だったはずだ。

なのに、どうしてこんな事になっている？

おかしい、理不尽だ、あり得んだろう。

認めない許せない、ああ、こんな不条理があるものかと、

「一人じゃまともに物も考えられない愚図が、この俺を——」

口にできたのは、そこまで。

それより先を喋る機会を、男は永遠に失った。

「——おマあスさんの悪口を言うな」

男のそばに、いつの間にか少女が立っている。

見た目の歳相応の仕草。母マの事スで怒る少女のそれは、他の幼子とそう変わらない。

だが、同時に行った所業は子供の無邪気と呼ぶには余りに残酷で正確だった。

「■■■■■! ■■■■!!?」

声にならない絶叫が上がる。

何が起きたのか、男には認識する事も出来ない。

しかし激痛が、自らの現状を教えてくれる。狂った調子で繰り返される呼吸音が男の耳から離れないのだ。

少女の手にあるのは、血に染まったナイフ。

音もなく男のそばに立ち、認識すらされずに”作業”を終えた少女。

何をしたのか、ナイフの血は誰のものか、結果を見れば余りに明白だった。

——男は、下顎がごっそりと切り取られていた。

「……そうね、豹馬。確かに私は、あなたの言う通りの女だわ」

男から離れ、傍らに戻ってきた少女の肩に、玲霞は手を置いた。

少女が見せてくれる笑みが、玲霞の心を満たす。彼女のためなら何をしても良いと、そう思えるのだ。

この少女こそが暗殺者の英霊。

六導玲霞が契約したサーヴァント。非実在の狭間に揺蕩う  
猟奇殺人者。

年端もいかない少女の外見にも、凶相は顕れている。その瞳の奥に秘めるのは紛れもない狂気。

およそ英雄とは呼べない怨霊の類い。そんな英霊の事を玲霞は心から信頼し慈しんでいた。

「いつも流されてばかりだったわ。反抗するのが億劫で、自分から何かしようなんて思った事もなかった。

でも、やらなくちゃ。似合っていないのは分かっているけど、この子のためだものね。私もしつかりしないと」

まるで実の愛し子にするように、優しい眼差しのままアサシンをそつと撫でる。

それに身を委ねるアサシンとの姿は、まさしく母と娘だ。主と従者の関係さえ超えて、2人の間には本物の親子の絆が結ばれていた。

「ねえ、おかあさん。こいつもう食べていいかな?」

「いえ駄目よ。別に食べてしまう事はよいのだけれど、私たちよりもっと上手く調理できる人がいるから。そちらに任せましょうね」

「はい」

何気なく交わされる母娘の会話。

そんな軽い調子の中で取り決められる己の処理に、一度は目を背けた恐怖が男の中で蘇った。

逃走を再開する。使えない足を引き摺り地を這って、少しでも2人から離れられるように。

2人は追わない。

追いつく事は容易い。だがもうその必要もない。

——男の進路には、既に別の狩人が立ち塞がっていた。

「まあまああの演出ね。悪くないわよ、スタッフ。後は私の独壇場ね」

純粹にマスターとして見た場合、六導玲霞の<sup>レベル</sup>実力は低い。  
地上では魔術師の<sup>ウィザード</sup>自覚さえなかつたのだ。実力で比較するなら男の方が明らかに上である。

戦力で劣っていた彼女たちが、何故勝利をおさめる事が出来たのか。それは当然の疑問だろう。

だが、その理由もまた単純明快だ。

基本すぎる兵法、それ故に覆しがたい格差。

即ち、数の利があつたからに他ならない。

「さあ、喝采を上げなさい。観客<sup>オーディエンス</sup>たちの声援を浴びてこそ、アイドルは輝くものだから」

顔を上げた男の眼に映るのは、異形を持った赤い少女。

小柄な体躯の中に備えられた美貌は、絶世と呼んでも差し支えあるまい。

だがその美貌には双角と尾が付属している。人の器官とはかけ離れた怪物のそれ。

彼女の美を損なうわけではないが、その存在は少女のカタチに禍々しさを与えている。

一見すれば快活な、この場に似つかわしくない少女の所作。自らをアイドルという少女の意図が分からず、男は何も答える事が出来なかつた。

「上げなさいと——言ってるのよこのブタあ！」

瞬間、振るわれた鞭の一打が、男に激痛をもたらした。

「呆れたブタね。自分の役目を忘れたのかしら。家畜は打たれたらすぐに鳴いて応えなさい。」

アンタみたいなブ男、本来なら口をきく事はおろか、視界に入る事だつて許してやらないのよ。それを私から呼んであげたんだから、鳴いて悶えて絶頂くらいしなさいよ。

ほら、ブヒイイって鳴いて。鳴きなさい。鳴けつてば。早く鳴けつて言ってるでしょおおお!!!」

狂つたように振るわれる鞭は、一打では終わらない。

二度三度と容赦なく降り下ろされる鞭打。その度に男の皮が肉が

剥ぎ取られていく。

それは戦闘用ではなく拷問用。戦い敵を打ち倒すのを目的とせず、ただ苦痛を与える事を用途としたもの。

肌を打つ激痛の灼熱に、声としての体を成さない絶叫が響き渡った。

「そう、それでいいの。バックコーラスは絶え間なくよ。そうでないステージなんて盛り上がらないわ」

そのような所業にも赤い少女はまるで頓着しない。

単に悪辣、というだけではない。むしろその姿には一種の純心さえ見える。

まるでこの残虐こそ責務だというように。行為の意味を理解していないからこそその迷いの無さ。

呵責となるべきものが存在しないから、歯止めが効かない。瞳には嗜虐の愉悦が映っていた。

赤い少女もまた、サーヴァントだ。

およそ正道からは程遠い、されど確かな恐怖を集めた英霊。

伝承を鮮血に彩られた、美しくも残忍なる槍兵ランサーである。

「さあ、マスターマネージャー。しっかりと徴収してやりなさい。せいぜいこの豚の肉を貪って、私のための魔力を蓄えるのよ」

そう促されて進み出たのは、道化師ピエロだった。

色彩豊かな奇抜な格好。道化の仮面に隠した表情は窺い知れない。かろうじて女性であることは分かる。それ以外は何一つとして意味不明だ。

ここが遊樂地であれば適切でもあっただろう。だが苦悶の血と悲鳴に満ちたこの場において、その姿はひたすらに不気味だった。

「ウン……ウン……オ腹スイタナア。ランルークン ノ オ腹 ハ  
イツモペコペコ。食イシンボ デ 卑シンボ ダカラ オ腹ガ空ク  
ノ ハ 悲シイナア」

吐き出されたのは純なる狂気。

自らの中だけで完結した異端の価値観で、道化師は言葉を紡ぐ。

「ダイ好きナ パパ。ダイ好きナ ママ。一番ダイ好きダツタ ベイ

ビー。ミンナミンナ イナクナツチャツタ。

ココツテ 素敵ナ場所ダヨネ。ダツテ色ンナ ゴチソウ ニ 会  
エルカラ。ココナラ 美味シソウナ子ヲ 食ベテモイインダカラ。

スパイス タップリ 振りカケテ。味付ケ デキタラ イタダキ  
マス。トツテモトツテモ 嬉シイナア」

意味が分からない。根底からズレている。

赤い少女ランサーが肉体に怪物を宿しているならば、彼女は精神が怪物と化  
している。

常識の理解から余りにかけ離れた存在は、常人には怪物としてしか  
映らない。

「ダケド……アナタ ハ 美味シソウジヤナイネ。ダツテ愛ガナイン  
ダモノ。

トツテモ残念 デ 悲シイケレド。アナタ ノ 事ハ 食ベラレ  
ナイヤ」

そして、理解を超えた怪物であるからこそ、その行動の采配は未知  
数である。

「はあ!? ここまでできてなに言ってるわけ？」

こっちはアンタの悪食に付き合っこんな豚まで用意してやって  
んのに！」

「ウン アリガトウ エリザ。デモ ゴメンネ。ランルークン ハ  
コノ人 ヲ 食ベラレナイヨ。

ダツテ ランルークン コノ人ヲ 好キニナレナインダモノ。  
トツテモ悲シイ 事ダケレド」

「アンタの好みなんて知らないわよ！ こっちは仕事でやってるの  
よ。そうでなかったら、誰がアンタみたいなワケ分かんないピエロの  
言うことなんか——」

「——黙らぬか、小娘」

少女の怒りをそれ以上の憤慨で押しさえて、また一騎の英霊サーヴァントが道化  
師の傍らに姿を現す。

その存在は、先までの英霊たちとは性質が異なる。

漆黒の鎧に身を包んだ偉丈夫。染み付いた闘争の気配がその戦歴

の深さを物語っている。

常人を外れた狂気だけではない。かつての時代、血肉躍る戦場を駆け抜けた英雄の姿がそこにあった。

「我が妻の示す意向、それ即ち我が聖戦のしるべなり。矮小な怠惰で異を唱えるなど、罪業にまみれたその身で尚も罪を重ねるか」

この黒騎士こそ、道化師の二騎目のサーヴァント。

数の暴利により男を一方的な敗戦に追い込んだ、三騎の英霊の最後の一柱であった。

「はあ？ 何が罪だったの？ 民どもから搾り取るのは、貴族たちの義務でしょう。」

それに、私が罪ならマネージャーはどうなるワケ？ アンタの大好きな妻マスタだって同じ、人を搾取する存在でしょうに。私もそのピエロの、そういう所だけは気に入ってやってるんだから」

「同列と、語るか？ 搾取ばかりで貴人のなんたるかを示さなかった貴様の愚行と、我が妻の狂おしくも残酷な、いと尊き”愛”を同じであるなどと抜かすか」

赤い少女の言葉に触発され、黒い騎士より溢れ出す怒気。

その熱量、殺意の迫力は少女の狂気の比ではない。この英霊の苛烈さを知るならば、それは当然だった。

守護すべきもののためなら、万を超えた屍の牙城を築く事も厭わぬ。護国の英雄でありながら、その所業の凄惨さ故に正道から外された。

かつて大地を流血で染め上げた鬼将の憤怒。それは同じ英霊である赤い少女をして恐怖させた。

「……ランサー。余リ エリザ ノ 事ヲ 怒ラナイデアゲテ」

そして、その怒りを鎮められるのは、彼が愛し敬う妻マスタ以外にあり得ない。

「おお……何たる慈悲！ 妻よ、貴女はこの罪のカタチを直視して尚も許せとおっしゃるのか。」

なんと美しい、なんと気高い！ 貴女のその許しはナザレのイエスにも匹敵しよう。

ならば私は、我が信仰の全てを捧げて尽くすと誓おう。貴女の”愛”こそが、この世で唯一の真理であるのだから！」

己のマスターに対し、黒騎士ランサーが見せたのは狂喜。

利害ではなく、崇拜。この道化師に忠義を捧げられる事に、英霊は心から歓喜している。

たとえ令呪など無くても、道化師が告げれば黒騎士は自ら心臓を差し出すだろう。

苛烈に燃え上がる忠誠という名の信仰心、それは見方を変えれば狂気とも言い換えられた。

「ふ、ふん！ それで、こいつはどうすんのよ？ ただでさえアンタ”二騎抱え”なんてやってるんだから。魔力はいくらあっても足りないはずでしょ！ アレ、本当に逃がすつもり？」

ようやく調子を取り戻して、赤い少女が言葉を返す。

再び矛先を向けられる男。這う這うの体で逃げ惑うその姿には、もはや力など欠片もない。

もはや何処に向かおうとしているかも分かっていない。

ともかく離れなければと、恐怖に後押しされて動き続けているだけだ。

勿論、そこに希望など無い。逃れられる可能性は絶無であり、男の結末はすでに確定している。

言葉を奪われ、苦痛を与えられ、終わりが訪れるまで藻掻き続ける男。

その性根は悪人であり、所業を省みれば自業自得であるが、それでも今の姿は哀れであった。

「哀れなる小人よ。もはや見えるものも無く迷道を彷徨うか」

男の前に、黒い騎士が立つ。

抵抗の意志さえ見えない男を前に、騎士が見せたのは哀れみだった。

「如何に罪に穢れた身であろうとも、これ以上の苦痛の罰に道理があるろうか。

もはや敵手とも呼べぬ小人よ。迷える道よりそなたを救済しよう」





ものを。

電脳世界ではそれも叶わない。

自身が消滅する最期の瞬間まで、その状態を認識し続ける。

魂が燃え尽きる刹那まで、男は絶望に浸されていなければならぬのだ。

「さあ、血涙を流して喜ぶがいい！　我が聖戦に、そなたも末席に加わる資格を得たのだ。

そなたの流す血は、我が糧となりて妻を潤すだろう。穢れしその魂が、この世で最も尊き御魂を救う助けとなれるのだ。

それを救済と呼ばずして何と言おう。さあ、堕ちた我が身と共に、聖なる戦へと赴こうではないか！」

もう、何も聞こえない。

聞こえたところで意味などない。

狂人の道理など、どうせ男にとっては何の救いにもなりはしないのだから。

——俺は、どうしてこんな所に……——。

狂った者たちが織り成す狂宴の中、贅のなつた男は最期に思う。

歩んできた道への後悔。踏み入れてしまった事への後悔。在りし日々への回帰を切実に願いながら。

——男の意識は、世界から断絶した。

「いやあ……実に血の気が絶えない御友達たちの皆さんですね」

裏側に落ちた月見原学園。7つある校舎の、内の1つ。

その視聴覚室にあたる部屋にて、神野明影はこの拠点を掌握する”

主”と対談していた。

『ジャック・ザ・リッパー』  
『殺人鬼』に『吸血貴族』。とどめにきたのが『串刺し公』つて。

よくもまあ、すごいところ狙って集めたよね。もうドリームチームじゃん、鮮血的な意味で」

スクリーンには、惨劇の光景が映し出されている。

常人ならば目を覆いたくなる凄惨さだが、ここに常人と同じくする感性の持ち主は存在しない。

神野は言わずもがな。

対するもう1人にも、動揺した様子は見られない。

それは人形を思わせる無感動。あるべき心の欠けた”少女”の瞳は、倫理を外れた非道を目の当たりにしても揺らぐ事はなかった。

「出来るなら意図を教えてもらえないかい？ 頭のいい君の事だ。何も無意味にこんなメンバーを集めたわけじゃないんだろう？」

ねえ、ラニⅡⅧくん。君の選出基準とは、いったいどんな理由だい？」

「無論、合理性に基づいた上での解答です、さばえのえんみ 蠅声厭魅」

少女——ラニⅡⅧは、悪神の悪意にも動じる事なく答えてみせた。

「彼等は正道を外れた英霊。後世の想像イメーシにより変革させられた存在。

故に、正純の英霊に比べ、その規格の拡張が行い易い。求める条件としてはこの上なく一致しています」

「最初から違法改造チートを想定済みってワケかい？ それはそれは恐れ入ったよ。

けど、性能面での理由は分かったけど、こころ 中身の方ではどうだろう？

サーヴァントもだけどマスターの方も大概に、なかなかいい感じに狂っているじゃない。

君のように数理の上で物事を考えるタイプに、ああいう手合いは相

性が良くないんじゃないかな？」

「確かに彼等の行動原理に合理性はありません。通常の基準に照らし合わせれば理解し難い。

ですが、空の全てから見れば、例外も誤差の範囲内。星辰にも影響を与えない稀星に過ぎません。

星が語らずとも、発する光が差し示す先は計算できる。ならば運用も可能です」

「それに、彼等の目的は私の使命と相反するものではない。造反の可能性は極めて低い。

不可解ではありますが、解釈次第では私の手でも彼等の願いを叶えられる。同盟者として選定するには十分な理由かと。

その”嗜好”についても、人道面で問題があるのは事実ですが、この聖杯戦争では優れた資質とも言えるでしょう」

褐色肌の少女は、眼鏡の奥の瞳を澄ませたままに道理を語っている。

そこに込められる感情はなく、事実を事実として述べていく様に人間性は見られない。

「理屈だなあ、頭のいい解答だ。確かに君の言う事に間違いはない。けれど、それだけかい？ 君の言葉には人の心がない、とても渴いた感想だよ。

理屈ではなく感情で動いてこそ人間ってものだろう。彼等の狂気にも、本当に思うところはないのかな？」

「必要ありません。過程での如何を把握しきれずとも、至る成果さえ掌握できればいい。

彼等の例外的な感性も、殺傷行為に対する忌諱の無さは戦争状態においては有益でもあります。ならば最効率の手段として用いるのみです。

私は師よりの使命を受諾し、遂げるための道具。有益であるなら使用を躊躇う理由はありません」

「道具、か。誰かにとってのモノである自分には感情など必要ないと、君は言うんだね。

「だけど、そんな君にも人の心つてものがあつたじゃない。覚えてい  
るだろう、無数の聖杯戦争の中で、君は確かに”人間”だった時期が  
あつた。あの時期の君がコレを見たのなら、どう思うんだろうねえ  
？」

「それは考慮する必要があるのですか？」

例外とは、統計として見れば誤差に過ぎないから例外です。局所で  
は目を引こうとも、大局では無視して構わない事象でしかない。

そしてあなたの言う時期の”私”とは、全てが敗北の結果として現  
れるもの。それが心という”欠陥”を抱えた故での事ならば、やはり  
不要だと判断するよりありません」

神野の言葉にもラニは揺らがない。

人形のようにあり、そのように自らを定める少女に、動揺すべき心  
など無いというように。

「ラニⅡⅧは人造生命である。ホームンクルス」

旧き時代の魔術を継承する、アトラス院により錬成された存在。

徹する在り方は道具として、使命のために殉じる事にも迷いがな  
い。

「彼女は己に人間など求めていない。求めるのは目的達成のための  
”効率”のみである。」

「それが君の結論かい。なるほど、これはなかなか筋金入りだ。」

記録は記録として、か。客観視点から見た記憶なんて、単なる情報  
に過ぎないからね。

肝要なシーンとかは結構ぼかして伝えてあるし、まだ仕方ないか」  
そんな少女の姿を、悪魔は愉しむように嗤っていた。

「……なにか？」

「いや別にいい。君がそう思うのなら、それでもいいんじゃないかなあ」  
含みを持った神野の言葉。

「ラニは訝しむが、それ以上の追求はしなかった。」

「話を変えようか。改めて言うけど、君の集めた人材はなかなかのモ  
ノだと思う。」

『ジャック・ザ・リツパー』、『エリザベート・バートリー』、『ヴラド・ツェペシユ』、『殺 人 鬼』、『吸血貴族』、『串刺し公』。彼等は実に逸材だよ」

「……？ ヴラド公はともかく、他二騎は英霊の等級として見れば決して高くはありませんが」

「そうだね。神代の大英雄、時代を築いた王、無双の武人なんて連中と比べたら、確かに大した事はない。」

所詮、貧民街を少々騒がしただけの殺人鬼。所詮、道楽貴族の生き血狂い。世にその偉業を轟かした英雄たちと比べる方が間違いだ。

単純な格で見るとなら、君の後ろにいる”彼”の方が遥かに上だろう」

神野の視線がラニの背後を捉える。

姿は見えない。だがそこから漂ってくる、濃密な”武”の気配は隠しきれない。

たとえ霊体化してしようと、事あらば即座に悪魔の首を刎ねとばせるように。

ラニⅡⅧの従えるサーヴァント、バーサーカー狂戦士の英霊。

理性を忘れた武の化身は、主人にマスターに使われる兵器として控えていた。「しかしだ、ある要素に関して、彼等は武神さえも凌駕する。」

なんのかんの言っても、英雄つてのは憧憬の対象だ。個々だと色々感想も変わるだろうけど、無意識下で見れば敬意や憧れといった肯定的な感情がくるだろう。どんな凄惨な所業に手を染めていたとしても、国のため人のためつて大義やらがあればどうとでも言い繕えるしね。

だが、彼等の場合はそうじゃない。彼等を思う時、意識にくるのは純粋な嫌悪、忌諱感だ」

「まともな感性してれば、殺人鬼や拷問狂を讃えるなんてしないでだろう。それでいて面白いのは、彼等の存在が英霊として確かに刻まれている点だ。」

所謂、反英雄つてやつだろう。だが、彼等は物語の悪役やられやくじゃない。時代に必要とされて倒されたわけじゃないんだ。

ただおぞましい。彼等は己の狂気だけで、人類の悪性を証明した」「彼等が屠殺した人間の数なんて、戦争になればあっさり追い抜けるのにな。軍人以外でも、略奪、虐殺なんて日常茶飯事だ。」

つまりありきたりなんだよ。戦争きょうせんの中での狂気なんてそんなものだ。数で語る惨劇なんて三流だよ。むしろ日常しやうじきの中で起きた惨劇だから恐ろしい。

戦争の熱に浮かされてたわけじゃない。彼等は自分の感性だけであんな真似ができた。それが何より理解不明で、人を外れた怪物に見える」

「この理解が出来ないってのが肝でねえ。理解と納得が出来てしまうと、恐怖の質ってのは数段は落ちる。」

たとえば、個人の所業の凄惨さで言うなら青髭殿もいるが、彼の場合は聖女の死つていう分かり易い理由があるからね。

別に真実かどうかは問題じゃない。諸人が納得できる理由つてのが問題だ。つまり彼の狂気は後天的だつて事だよ。別に先天後天で上か下かってわけじゃないが、その心を説明できる要因は揃っているだろう」

「けれど、彼等はそうじゃない。決定的と思える要因なんて見当たらない。彼等は生まれついて邪悪な怪物だったとしか説明できない。」

貴族社会じゃ領民なんてペット扱い？ 愛玩対象べつを殺してまわるのだから立派に狂っているだろう。まして相手は自分と同じ言語で相互理解が可能な生物にんげんだ。黙認されてたとはいえ周囲に流されたわけでもなく、自分の感性だけであんな残虐ができるなんてさ。

——エリザベート・バートリーは人としておかしい」  
「ジャック・ザ・リップパーなんて、そもそも誰かも分からない。」

あるのは娼婦ばかりが殺される、凄惨な事件現場だけ。その所業だけで殺人鬼はみんなの心の中に住み着いた。

今さら誰かを証明してみせたところでもう遅い。1人歩きを始めた妄想イメージは止まりはしないよ」

「そういう意味では、ヴラド三世だつて同じだ。キリスト教圏の盾。侵略者を退けた護国の英雄。なのに、着色された創作イメージによってその存在は書き換えられた。」

本人がどれだけ高潔で、正義と秩序を重んじる人間だつたとしても関係ない。植えつけられた妄想イメージは拭い難く、英霊つて存在に影響して

くる。

万を超える敵を串刺しにして、自国の貴族民衆問わずに大粛清を行った。ほら、征服者さんも言っているだろう。こんなにも残酷で苛烈な人間は、きつと悪魔に違いない」

「ね、面白いだろう？ 武勇でも偉業でも伝承でもない、純然たる恐怖心が彼等を英雄かいぶつたらしめている。

無辜の怪物。人の想像が生んだバケモノ。そんな彼等を容認して扱う君は、一体どんな怪物になるのかな？」

その言葉は、ラニの事を嘲るように。

無垢なる人形として在るこの少女が、どのように塗り替えられていくのかと。

その墮落の様を期待して、神野明影は嗤っていた。

「たとえ何らかの影響がこの身に起きようとも、問題はありません。

師よりの使命完遂こそが私の存在意義であり、喜びです。その目的が達成されるのなら、如何なる禁忌も厭うには値しない」

「そうかい。いや素晴らしい、実に見事な決心だよ。

今の戯言なんて聞き流してくれていい。僕は君の事を心から応援しているよ」

「応援？ あなたは中立の立場ではないのですか？」

「もちろん中立だよ。誰かを鼻肩したり、露骨に冷遇したりとかはしないから安心してくれ。

ただ僕は、この聖杯戦争の監督役でもある。円滑に戦いを回していく潤滑油は是非とも歓迎したい」

「だいたいさあ、どいつもこいつも欲望とか執着とか薄すぎるんじゃないの？」

「聖杯だよ？ 何でも願いが叶うんだよ？ もっとガツガツしようよ。」

なのに、聖杯なんて興味ありません、みたいななのばかりでさあ。草食系過ぎやしないかい？」

「その点、君はともに見込みがある。聖杯を求めるその欲望は実質だ。」

聖杯戦争の演出家（かんとくやく）としては、より真摯に求める者を応援したくなるってものさ」

大仰な手振りで、ラニの事を讃えるように神野は言う。

「その判断は不適切です。私にそのような感情はありません。師の遣わした道具として、私は聖杯に至るのみ」

「何かを求め欲する事が欲望だよ。理由がどうあれ、ね。」

その聖杯に至ろうとする意志が本物なら、それは1つの欲望のカタチさ」

感情を否定するラニと、肯定する神野。

くい違う両者の意見。それでも互いに、それ以上の言及はしない。

ラニⅡⅧにとっては議論するまでもない事であるから。

そんな彼女の姿にほくそ笑む悪魔（しんの）の意図は、まだ見えない。

「ああ、そうだ。これも伝えておかないとね。——”岸波白野”が、裏側で目覚めたよ」

その名前を聞いた時、無表情の裏側で何かが確かに反応した。

「なかなか馴染み深い名前だろうか？ 君にとってはかなり因縁のある相手のはずだ。」

ねえ、聞かせておくれよ。君は彼を、もしくは彼女をどうするんだい？」

ラニⅡⅧの中にある、確かな記憶。

繰り返される戦いの最中、明らかに不合理な行動を取った人。

自分を”助けた”あの少年、または少女との日々は、確かに記憶としてある。

無論、こんなものは例外だ。

大半の場合において、自分の在り方は変わらず、師の道具としての己で在り続けた。

それが正解である事は疑いようもなく、ならば例外など考慮する必要もない。

けれど、存在意義を見失ったあの日々での自分は、何故だか輝いているようにも見えて——

そんな思考を切り捨てる。



揺らいではならない。その揺らぎは己を劣化させるもの。

己は道具。師よりの使命を果たす者。そう自らに厳命し直した

「……再三に渡り、告げています。私は使命を受諾する者。遂行のみが存在意義。

彼の者の星は確かに興味深かった。しかし、その時がくれば、討ち果たします」

静かに、だが確かな決意を込めて、ラニⅡⅧは断言した。

「くくく、きひひひひ、きはははははははははは——!!!」

少女の意志を聞き届けて、神野は心底愉快そうに大笑した。

「ああ、良いよ素晴らしい！ 僕の言葉に大した意味なんてない。その決意は君のモノだ！

戦うのは君たちだ。他の誰でもない、君たち自身の意志で殺し合うんだ。

求めよ、されば与えられん。人が欲しているのは神の信仰ではなく俗な奇跡だ。

祝福しよう。その欲望は美しい。悪魔<sup>ボク</sup>はいつだって人間<sup>キミ</sup>たちの味方だよ」

だからこそ歓迎しよう、奇跡を求める欲望を。

たとえ未練が残ろうとも、目的のために最期には切り捨てる。

そんな人間の悪性を愛してる。だってそれを象徴する者が悪魔<sup>しゅま</sup>なのだから。

神野明影は演出家であり、監督役である。

采配はすれども、手は出さない。先の悲劇へと進むのは本人自身。

戦いを俯瞰する立場より、回されていく地獄の歯車を見守って、悪魔はいつまでも嗤っていた。

## 王の旗本

月見原学園の校舎は、あるべき日常の風景としてそこに在った。聖杯戦争の舞台。日常を演出するためのロケーション。

闘争の狂気と平穩の理性の狭間で、その心が如何なる反応をするのか。

人の心理を観測し記録するためにムーンセルによって用意された場所である。

記録収集のサンプルとして不備は許されない。

完全なる観測を求める月の意志により、蓄積した記録から再現された日常の象徴。

極東の島国に実在した学園を元に構築した建造物は、多数の人々が過ごす場として機能している。

聖杯戦争という極限の闘争の中、一時でもそこを離れられる仮初の平穩。

虚数の裏側に落とされた後でも、その風景は損なう事なく在り続けていた。

「Sancta Maria orationibus.

Sancta Dei Genitrix ora pro nobis.」

そんな侵されざるべき日常風景を、穢れきった土足が踏み躪つていく。

それが歩を進める度、その足先の床に亀裂が走り、汚らわしく黄ばんだ粘液が滲み出してくる。

吐き出す息には濃縮された毒と病が宿り、放出する黒い放射能が空間を汚染し腐らせた。

億の蠅声を引き連れて歩く悪徳の塊。

墮落させ貶める事こそ我が全てと誇るように、神野明影は在るだけで世界を冒流していた。

「Mater Christi ora pro nobis.」

Mat<sup>ま</sup>ter<sup>て</sup> Div<sup>ろ</sup>ina<sup>に</sup> Gr<sup>が</sup>atia<sup>ら</sup>e<sup>き</sup> or<sup>う</sup>pro<sup>う</sup>nob<sup>の</sup>is<sup>す</sup>」

悪魔の歩みを阻む者はいない。

彼がこの学園に侵入してから、迎撃の類は一度として無かった。

侵入を阻むための防衛障壁もなく、神野は我が物顔で歩み続けている。

る。

もはや屋主たちが恐れをなし、放置して逃げ出したのではと疑いそうになる静けさだった。

だが無論、そんなものは錯覚でしかない。

現在この月見原学園を治めるのは“世界の王”。守護するのは王に忠義を捧げる至高の騎士。

迎撃が皆無であるのは、守護者たる剣の一振りが全ての外敵を灼き払うという絶対の自信の表れだった。

「……へえ？」

神野が校舎2階へと足を踏み入れた時、それは起こった。

校舎内に炎が走る。

侵入者である神野を巻き込んで、炎に線引かれた空間が入れ替わった。

広がったのは荒野。手狭だった校舎から一転し、広大な決闘場<sup>バトルフィールド</sup>が出来上がる。

空間内に閉じ込められた神野の前に、立ちはだかったのは一騎の英<sup>サイヴァント</sup>霊。

その強壯を前に、常態として吐き出されていた神野の穢れが止まる。

幻視して見えたのは太陽。あらゆる悪徳を浄化し散り払う陽光の輝き。

日輪の光に愛された斯く在るべき騎士道の具現。聖剣を携えた白い剣士<sup>セイバー</sup>がその姿を現した。

「いきなり最強の切札<sup>カード</sup>を切ってくるとは、なかなか思い切った事をするね。

光栄、というべきなのかな？ 円卓で名を馳せた”太陽の騎士”の

聖劍——堪能させてもらおうか」

戦いは唐突に、毒蟲の大群として爆発した穢れの奔流によって火蓋が切られた。

先に止められた穢れなど、神野にとっては呼吸に等しい。常態から垂れ流していた吐息程度に過ぎず、攻撃などと呼べるものではない。

本領を發揮した悪魔は、まさに罪と穢れの渦巻く災厄だ。侵されれば如何に英霊だとしてその存在の骨子ごと腐り落とされる。

空間そのものを埋め尽くす毒蟲の群れ。数十万と膨れ上がった大群を前に、セイバーにあるのは剣の一振りのみ。

どれほどの剣技を繰り出そうと相手にならない。迫る蟲の大群に抗するには、個ではなく数を駆逐する対軍の手段が要る。

「フツ——！」

振るわれる聖劍が炎を纏う。

一閃の度に拡散し放射される炎熱が蟲の群を焼き払っていく。

これも相性といえるだろう。古来より魔の浄化を司るとされる火、その使い手たるセイバーに雑多な魔群など通じるはずがない。

容易く蟲を退けたセイバーの前に阻むものはない。

一息の内に神野の懐まで踏み込んだセイバーは、容赦なくその身を両断した。

ブリテンの円卓において『理想の騎士』とまで謳われた最優の英霊。

振るわれる剣撃の威力は推して知るべきであり、生半な英霊であれば一刀のもとに敗北を余儀なくされる。

彼こそは間違いなく今次の聖杯戦争における最強の一角。その彼が振るった聖劍であれば、如何なる存在であろうと打倒されるのが道理だろう。

「——おまえは“犬”だ」

だが、対峙する悪魔もまた、道理で測りきれぬ存在ではない。

彼は廃神。あらゆる墮落、不義、冒瀆を象徴する悪神を混ぜ合わせた混沌<sup>べんぼう</sup>。

実体なき穢れの概念であり、蟲の集合体めいた無形なのだ。

「ごしゅじんさまにチンチンふってるのがだいすき。そんなじぶんにマスかいてひたつてる」

これまでどんな英霊の攻撃も明確な打撃にはならなかったように、セイバーの剣撃も痛痒を与えられない。

斬られた箇所からバラけ、粒子の如く拡散してから集合し、渦巻く蛾の群れとなって踊り狂う。

降り注がれる鱗粉のイルミネーション。決闘場を彩る毒の色彩は、大気と一体になり舞い乱れる。

「りっぱなのはみせかけで、あたまのなかまでおてんきびより。ひとりじやみぎもひだりもきめられない」

宙には毒蛾の鱗粉が舞い、地よりは百足、蜘蛛等の毒蟲が溢れ出す。周囲を埋め尽くしていくおぞましい穢れの群勢。それが只中のセイバーに向かって一斉に蠢いている。

蟲どもの蠢きが折り成す不協和音、それが蠅声と化して悪魔の言霊を紡いでいた。

「ああ、王さま、どうかわたくしにめいじてください。

くちごたえしません。どんなめいれいだってききます。いぬと なってしつぽをふります。

だってぼくちゃん、そんなカツコイイじぶんがだ〜いすきなんだから！ うふふふ、ひいつひつひつひ——きひはははははははははは！」

下劣極まる揶揄であり、あからさまな挑発だ。およそ知性の感じられない下卑た雑言は、とても英霊相手に使うものとは思えない。

しかし、だからこそ効果的でもある。相手が高潔で知られる騎士であるなら尚更、この汚れ切った罵倒には神経を逆撫でられるだろう。

まして、その罵声の内容が本質に迫っている事を考慮すれば、それは逆鱗を踏みしだかれるに等しい暴挙に違いない。

醜悪な蟲の魔群に囲まれ、単体の音としても耳を犯す蠅声の嘲笑。常人では正気を保っていられない状況で、高潔の騎士が見せるのは

嫌悪か、激昂か。

否、どちらでもない。その表情には微塵の揺らぎも見せず、理想の騎士たる己を貫いている。

白騎士<sup>セイバー</sup>を支えるもの、それは自身の芯に置いた忠義という名の信念。

罵倒が指摘する内容など承知の上で、彼は自身の在り方を定めている。

それは忠の理念に囚われているのではなく、何より仰いだ主を信じているから。

剣を捧げるに足る王聖、その光にこそ正義があると確信しているから迷わない。

たとえ友を斬れと命じられようと、彼は斬るだろう。それが王の勅令であるのなら、非は友にこそあると断言するのが彼の信念だ。

これも一種の狂気かもしれぬ。それでも秩序の善性の側として在るセイバーに、悪魔の低俗な挑発など通用するはずがなかった。

事実、神野の吐き出す穢れは未だセイバーの身には届いていない。大群で押し寄せる毒蟲に対抗するのは、およそ剣を取る者にとって

の正攻法の動き。  
密度的には絨毯爆撃にも等しい蟲群を、セイバーは悉く躲し、防いでいる。

それは磨き抜かれた体術と卓越した直感。避け切れぬものは聖剣の炎によって斬り払う。

単なる相性の問題ではない。如何なる相手、状況であろうとも十全に己の力を振るえるからこそその最優。

正道であり、王道である強者の姿。悪魔の穢れを前にしても、白い剣士<sup>セイバー</sup>は最強のままだった。

されど、セイバーの剣もまた通じていない。

攻撃を受けないセイバーと、受けても傷つかない神野。千日手とも見える構図だが、その先にある結末は明らかだろう。

いずれセイバーは穢れを受ける。未だ余裕はあるだろうが、永遠に維持させられるわけではない。

故に、セイバーは探っている。

無意味ともいえる攻防を繰り返しながら、対峙する悪魔を打倒する手段を。

すでに幾つかの手段は選出している。それが本当に通じるのかを測っているのだ。

渦巻く毒蛾の先、放たれた聖剣の刺突が神野を貫く。

刀身を包む炎熱が即座に蟲たちを焼き払うが、無形たる神野はすぐに崩れ、再生を繰り返す。

蟲の集合としての無形。両断しようが貫こうが、寄り集まった蟲が散れば剣が届く事はない。

痛い痛いと言鳴く悪魔の音が聞こえてくるが、嘲りを含んだ声音は痛痒を受けているとは思えない。

如何に聖剣が尋常ならざる刃であろうと、このままでは神野の不死性を突破する事は叶わない。

セイバーが取り得る手段は、大きく二つ。

集合、拡散を繰り返す蟲群を丸ごと「灼き滅ぼす」しんめいかいほう「広域照射」か。

あるいは――

「燃えろ、ガラティーン太陽の聖剣よ」

構えた聖剣の刀身が赤く染まる。

それは刀身内へと集積された太陽の火が顕す赤熱の色。

もはや外に炎を散らす無駄は無い。内包された破壊力は敵を斬滅する瞬間を待ち焦がれている。

次に放たれる聖剣の一撃は、まさに必殺を期したものに違いなかった。

「あんめい、まりあ――ぐろおおオリアああアアす」

そんな必殺の一撃を前にして、初めて神野が自ら攻撃に打って出た。

蟲群が指向性を持って結集し、あたかも鎌のような軌跡を描いて強襲する。

その威力、速度は単に数で攻め立てるばかりだった時とは桁が違う。それこそまさしく悪魔にとっての必殺だ。

繰り出した一撃は共に必殺。

激突する両者、刹那の後に響いたのは剣戟の如き衝突の調べ。

それは確かに両者の一撃が交錯した事を示し、ならばその果ての勝者とは――

「ぎ、ひ――」

神野の身が分たれる。

幾度と繰り返した結果。だが今回のそれは後が異なっている。

神野は崩れず、無形に戻らない。斬り裂いた刀身の灼熱が、無限の蟲を焼き付けて固定させた。

更に、無形にカタチを持たされた神野に対して、飛来した一本の“矢”が突き刺さった。

「ガガ、ヒイ――」

矢の刺さった箇所より、神野の身が崩れ出す。

それは、これまでの無形への変化に伴ったものではない。

神野がその身の内に濃縮する不浄、それを瞬間的に増幅し流出させたように。

火薬が爆発したような勢いで暴発する蟲毒が、構成体ごと神野を崩壊させていく。

――刹那、身動きの取れない神野に、見えない“何者”かの一打が加えられた。

蟲の集合たる悪魔は無形。本来急所という概念は存在しない。

だが、その一打を前に、蟲の群はあたかも自らの存在を忘れたように。

群としての無形を見失い、一個のカタチとして弛緩したまま。

あり得ざる急所を自ら作らされ、氣を吞まれた悪魔は無防備にもその一打を受け入れて、

神野明影を形取る蟲の群体、その総体を完全に“破壊”していた。



破壊された悪魔は総身を散らし、塵となって四散していく。

それを見届けるセイバー。油断なく身構え続けたが、再生してくる気配はない。

敵は退散したのだと理解して、ようやくその闘志を内に納めた。

「助力に感謝を。アーチャー、アサシン」

何も無い場所に向けて、セイバーは声をかける。

その声に応じて、空間より人の像が浮かび上がった。

周囲の背景と一体化した光も熱も遮断する迷彩。気配遮断スキルにも匹敵する隠形と解いて、1人の青年が姿を見せた。

「いえいえこっちは仕事でやってるだけですから。高潔な騎士さまに改めて礼なんて言われたら、俺みたいなのはくすぐったくてしょうがないっての」

現れた青年は、英霊というには些か趣が異なっている。

彼は紛れもなくサーヴァントだが、英雄としての華と呼ぶべきものがない。

たとえばセイバーのような、その立ち振舞いで伝わる騎士たる者の理想像といった、憧憬を呼び起こす輝きが見えないのだ。

むしろ人間に近いほどで、その存在感は凡庸の域を出ていなかった。

だがそれは、青年を英霊として不適格と見なす要因とはなり得ない。

仮に青年が凡庸の徒であるのなら、その域から英霊の高みへ上り詰めた意志とは如何程か。

飄々とした振る舞いの内に秘められた信念、それが並みならぬものであったのは明白である。

そんな青年を認めているのか、彼を見るセイバーに卑下する感情はなかった。

「何を言うのです。虐げられる民のため戦った貴公は騎士たるべき者の道にいる。

恥も謙遜も不要かと。我が王の旗本に、貴方が参列している事は心

強い」

「おたく、よく他人から天然って言われたい？　そういう事を嫌みもなく言つてのけるとこ、素直に感心するよ」

青年の真名は森の隠者。ロレン・フッド破壊工作と自然毒に長けた弓兵アーチャーの英霊。

圧政者に抵抗するために弓を取った義賊。凡庸なる身で軍勢を相手取るため、あらゆる卑劣に手を染めた無銘の狩人。

そこに英雄たる戦いはなかったが、苦しむ民衆の祈りを受けて昇華した彼は確かに”英霊”であった。

「つーか、俺って王様に対しての反逆者だったわけだけど。王様に仕える騎士として、そこんどこどうなの？」

「我が王が、蒙昧なる圧政者であったならば。時代の都合が合っていれば、今のように同じ旗の下に集つていたと信じます。

あなたならば円卓の席に連ねる事も……性能面から見て些か厳しいですが、同胞としてこれほど心強い事はない」

「……あー駄目だ。やっぱ俺、この人苦手だわ。つーかそこは嘘でもイケるって言ってくれよ。何しれつと酷評してんだ」

月の聖杯戦争において、己以外のサーヴァントは本来敵同士である。

だが、話す2人に険悪な気配はない。今の彼等は仲間として、不足なく連携が取れている。

契約者マスターも含んで、既に彼等は同胞だ。1つの”王聖”の下、同じ目的を目指して戦っている。

「呵々、善哉。これも聖杯戦争の妙というものか。おまえたちのような英霊たちと、この暗殺拳が共闘する事になろうとはな」

更にもう一騎、彼等と同様の傘下にあるサーヴァントが現れる。その出現には、一切の予兆というものがなかった。

周囲の色相に同化していたアーチャーとは違う。空間を転移したともまた異なる。

言うなれば、自然なのだ。たとえ最初からそこに居たと言われても信じてしまうほどに、その”男”は周囲の気配と違和感なく溶け込んでいた。

「……やっぱアンタみてると俺の立つ瀬がねえわ。んだよ、自然と同化して透明化するって。宝具でも無いただの技って、反則だろ」

「ふむ、誉め言葉として受け取ろう。近代にて修めた我が研鑽、どうやら古の戦士らにも通じるものであるらしい」

男の真名は李書文。姿無き暗殺者の英霊。アサシン サイヴァント

遠い昔ではない近代、伝承神秘の薄い時代にあつて、純然たる武の研鑽で英霊に至った拳法家。

相對する敵を一撃にて絶命させる”魔拳”を備えた、達人中の達人である。

「アサシン、あの悪鬼は？」

「さて、手応えは感じたが。何分、人とはまるで異なる気であつたのでな」

アサシンの一撃によつて、悪魔は塵果てた。

彼の拳は”二の打ち要らず”。英霊の象徴たる宝具にも匹敵するその魔技は、無形の中にも急所を捉えさせた。

並の人間では、否、英霊であつたとしてもアサシンの拳をまともに受けて無事では済まない。

だがそれでも、相手はあの悪魔だ。しんの

直感に優れない者でも分かる。この程度で終わるなどあり得ないと。

「——お見事」

悪い予感が現実に変わる。

醜悪なる声と共に、何処からともなく蟲が集まり、人のカタチを成していく。

神野明影、不死なる悪魔は何一つ変わらぬ様で再び顕現した。

「……あれでも、死なぬか」

流星のアサシンも、その声に戦慄を滲ませる。

三騎の英霊が連携した先の攻勢は、間違いなく必殺と呼べるもの。如何なる相手でも仕留められると、そう確信もできる手応えだつた。

それでも、この悪魔は滅びない。

これで死なないとあれば、果たして真名解放で総てを焼き払ったとしても通じるかどうか。

あるいは死の概念そのものを持たないのか、そう感じさせる無欠の不死性であった。

「いやいや。さすがにそう何度も殺されては敵わない。お手上げだよ。

無礼を許してほしい。君たちの力はよく分かった。素直に降参させてくれたまえ」

穢れを引き、両手を上げて無抵抗を示す神野。

先の攻撃、神野にとつても本腰を入れたものには違いなく、故にそれを破られた今、少なくともまともな戦闘をすれば己が不利である事は否めない。

戦闘でこの三騎は倒せない。それを認めての降伏の意であった。

「そこでお願いなんだけど、君たちの王様に会わせちゃもらえないものだろうか。少々話があつてね。

なに、警戒はしなくていい。今で力の差は理解したし、元より僕は監督役だ。馬鹿な真似はしないと誓おう。

——さあ、どうか騎士殿」

言葉は白き騎士セイバーに対して向けられる。

この場の英霊サーヴァントらの代表として、”王”の側近たるセイバーが選ばれたのは必然だった。

「お断りする。貴様の言葉は、それ自体が毒だ。毒と分かっているものを、なぜ主君の前に引き出せようか」

神野の申し出を、セイバーはにべもなく却下した。

「このまま退くというのならよし。押し通るといふのであれば、我らの威信に懸けても討ち滅ぼそう」

対話の余地も与えない、明確な拒絶の意志。

セイバーは理解しているのだ。この悪魔とは、そもそも言葉を交わすだけでも危険であると。

巧みな甘言で振り回して、人間を墮落へ誘う悪魔の手際。その言葉はどのようであれ悪意しかあり得ない。

ならば言葉一つさえ届かせない。

王が持つ一振りの剣として、忠義という名の盲信にも似た鉄心で。全て承知の上だ。たとえ犬と罵られようと、彼は剣を預けた主君に尽くすと決めている。

迷いに曇った生前から、今度こそ真の騎士として。あの完璧なる王聖に害なす総てを殲滅する。

それこそがセイバーの決意。英霊として彼が抱いた、今生での願いである。

「頑なだなあ。そこまで連れられない態度を取られると——僕もつい、本気になっちゃうぜ?」

無数の蟲が轟めく羽音が、その激しさを増していく。

微細な振動に過ぎなかつたそれが、空間を震撼させる爆音へと。

未だ底知れぬ悪魔の深淵。先までの攻防などその一端に過ぎぬと、地獄の悪意は告げていた。

聖剣を構えるセイバー。アサシン、アーチャーも各々に構えを取る。

すでに闘志は十全に満ちている。戦いの第二幕が開けられる、まさに寸前——

「——そこまでです、ガウエイン。それにお二人も」

静謐な、されど下々を従わせる王気に満ちた少年の声が、両間に届けられた。

「それ以上の戦闘を禁じます。先の一撃で決着をつけられなかつた以上、その討滅は間違いなく熾烈を極める。

遭遇戦のような今の状況で、彼と事を構えるのは得策ではありません。争う気がないというのなら、迎え入れるのもいいでしょう」

他ならぬ主君からの勅命。騎士たるセイバーはそれに従わねばならない。

だが、その眼には未だ得心を持たず、構えた聖剣も下ろされぬ。この悪魔を主君の前に引き出す事、その危険を知るが故に王の剣と

して度し難かった。

「貴方の忠心は受け止めています。ならば、僕はこう告げましょう。ガウエイン、貴方が剣を捧げた“王”とは、それほどに脆弱なのですか？」

「……御意」

その言葉が決め手となり、セイバーも戦意を収める。

他二騎の英霊もまた同様に。王の言葉ならば従うのが道理だと、彼等もまた心得ている。

静かであり、畏怖はなく、慈愛の徳に満ちた声。

けれど同時に、そこには絶対と呼べる強制力も存在している。

それは押し通す我意の類いではなく、ひたすらに“正しい”と思える理想。

反発を入れる余地もなく整然としているが故に、ただ領くしかない王聖という気質。

若き王が持つカリスマは、既に英霊をも意に沿わせる領域に達していた。

「神野明影。事を荒立てるつもりがないという発言が真実であれば、我々にも受け入れる準備があります。

話があるというのなら聞きましょう。貴方が客人として振舞うのであれば、我がハーウェイによる相応のもてなしで以て迎えるといいます」

「これは寛大な御心遣い、痛み入る。さすがは世界の王になられる御方は器が大きい」

閉ざしていた決戦場が薄れていき、空間が元の校舎へと回帰する。

元の場所に戻っても、神野は一切の穢れを振り撒かなかつた。先導する騎士の案内に大人しく従っていく。

向かう先は、この世界を担う王のもと。

三騎ものサーヴァントを事実上統率する、彼の主を除けば今期最強のマスターのもとへと。

かの王聖と悪魔の邂逅が何をもたらすのか、それはまだ分からない。

神野が通されたのは、月見原学園の生徒会室だった。生徒側の代表者が集い、学校行事に独自の立場で関わっていく生徒会。

予選のマスターたちが学生として扱われる事を考えれば、なるほど適切だと言えるだろう。

生徒たちが集い、その方針を話し合って決定する場。一同に介する魔術師たちはの姿は壮観でさえあった。

だがそれだけでは、この空間に満ちた空気を説明するものにはなり得まい。

さながらそれは、王者の君臨する玉座の間か。

現代様式の学校の生徒会室。会長用と名札の置かれた大きな机は、豪華というより事務感の方が漂っている。

特別であるものなど何も無い。だというのに、その”少年王”が存在するという事実のみで、あたかも荘厳にして厳粛な謁見の間が幻視されるような。

レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ。

現在の世界を統制・管理する西欧財閥、その筆頭たる名家の次期当主。

完全なる統治者と自他に望まれ、その通りに自らを完成させた常勝の王。

幼くも気品に満ちた風貌と穏やかな立ち振る舞いは、あらゆる敵意を削ぎ落とし人々を安寧へと導く気風を備えている。

それは天性であり、過酷かつ丁寧に教育された君主の姿だ。未だ幼い身の上で、既に彼の在り方は極みに達していた。

そんな少年王との対面を果たした神野明影は――

「……なあにこれえ？」

来賓客用の席に座り、目の前に出された”もてなし”を凝視していた。

一方の皿に盛りつけられたものは、ジャガイモだった。

品名はマッシュポテトだろう。ひたすらにすり潰したジャガイモにビネガーをかけただけの料理に名付けるなら、それが最も適当となる。

一応、中にはニンジンも含まれているらしく、所々に赤色が見える。そしてそれ以上の工夫は一切ない。

山のように盛り付けられた外見には、見た目を気にするという心配りは感じられない。もはやそれは料理ではなく、食べられるだけの体裁を取り繕った野菜でしかなかった。

だが、元の食材が何であるか分かるだけ、こちらはまだ上物だといえる。

最大の厄災は、もう一方の皿。禍々しいその”物体”こそが恐怖の元凶だった。

黒い。ひたすらに黒い。

形容すべき言葉を探すならコールターだ。食物にあるまじき黒さをしている。

だというのに、そのドロドロと融解した液状物体の下、皿に盛り付けられた白飯の存在が、あろうことか己を料理であると主張している。

嗅ぐと鼻をつく刺激臭。内容物は完全に融けていて判別は不可能。

信じられないが料理であるらしい漆黒の物体。底知れぬ混沌べんぼうがそこにあつた。

それらの横には申し訳程度に置かれた一杯の紅茶。

湯気を立たせる琥珀色の液体は、その香り良さから葉、淹れ方ともに一級品だと理解できる。

だがもはや高級茶葉の1つでは、場の禍々しさは到底中和できない。むしろ異彩を放つその存在が、かえって他の異常性を際立たせる。

それがもてなしと称して神野の前に出された内容だった。



「ハーウェイカレーです」

ニツコリと、慈悲深い王者としての笑顔を張り付けて、少年王は漆黒の物体を指して告げた。

「我がハーウェイの家に関連する者たちによるもてなしです。どうぞ召し上がってください」

「いや、召し上がってって、これ完全に嫌がらせだよ？ もはや悪意しか見えないよ。」

悪魔である僕にこんな嫌がらせを仕掛けてくるなんて、なかなかパンチが効いてるじゃない」

「とんでもありません。これはれっきとした我が家伝来のおもてなし法ですよ。」

我がハーウェイ家では“悪いお客様”はこのようにもてなすのが代々の習わしです。

モットーは『搾り取れ、その骨の髄まで』です」  
「闇金融業のおもてなしですね、分かります。」

え、コレ食べないと指詰められちゃう系？」  
「ハハハ、いやですねえ。ハーウェイは欧州系ですよ。そんな日系のような真似するわけじゃないですか」

微妙にズレてる答えを返してのたまう少年王。

ハーウェイ家。西欧財閥の筆頭として世界を制したその一族の成り上がりの理由は禁則事項であった。

「いやでもちよつと待って。この味わいは……むむむ。  
べつたりとしていてコクがなく、口や胃の中にどこまでもこびりつく粘っぽさ。」

辛さがどうとかってレベルにも到達してない、この料理は——うおオン！」

「——イケる！ べんぼう的に！」  
あろうことか神野明影、カレーであるらしい暗黒物質ダークマターを咀嚼して、出した答えがそれであった。

「フツ、そうか。俺のカレーは、美味いか」

「兄さん？ そのちよつと嬉しそうなドヤ顔、やめてくれませんか？」

少年王の傍らに控える、彼の腹違いの実兄ユリウス・ベルキスク・ハーウエイ。

ハーウエイの裏事情に勤しむ彼は、会心の力作を称賛されてご満悦であった。

「いや実際大したモンだ。手放しに褒めさせていただくよ。感動したと言つていい。」

……テイクアウトしていい?」

「どうぞどうぞ。ドラム缶単位で」

「それにひきかえ……これは一体なんなんだい!」

暗黒のカレーの横、山盛りのポテトを指して、神野は猛然たる抗議の声を上げた。

「なにと言われても見ての通りポテトですが? 最高食材なので噛み締めて食すがよろしい」

「やっぱり用意したの君かよ。まったく、イギリス人はこれだからまったくくお話にならないね」

ギラリと妖しく輝く神野の瞳。

人を貶める事を教義とする悪魔、その悪意が機関銃のように放たれた。

「ごつちのカレーを見てごらんよ。そつちの彼がどうやってこれを調理したと思う?」

堅物な彼のことだから、多分大真面目にやったと思うんだよねえ。その仏頂面の上にエプロンとか着込んでさあ。

何時間もナベ——ああドラム缶か、の前に居座つて、グツグツとかき回しながら煮込んでいてね。そんな似合わないナリまでしてさあ。

彼なりに美味しさを再現できるよう、それこそ精一杯の心を込めてさ。僕のためじゃない、そちらの弟君のために、美味しく食べてもらおうつて真心でね。

それで、その結果——」

「——なあんでこんな産業廃棄物が精製されてんだよおおおおお!!!!!!」

もうその、なんていうの、居た堪れなさといったら、それだけでご飯三杯はイケちゃうね♪」

「対してこれはなんだよ！　こんなの雑なだけじゃん！　ただの手抜きじゃん！　メシマズですらねえよ。」

「こういうのはさあ、調理人が手間と時間と真心を込めて、真面目にやるから面白いんだろう？」

「こんなの不真面目にやれば誰だって出来るよ。テキトーにやっただけなんだから。そんなのじゃ笑いも取れやしないんだよ！」

「そんなんだから、君の所の王様は人の心が分からないとか言われるんだ」

「な!?!　彼の王を愚弄するか!」

「何故か、かつての王の事を持ち出され、激昂する騎士。」

「だが、神野のクレームは止まらない。容赦ない罵倒が浴びせかけられる。」

「民の理想がどうかばっかりで、どうせ遊び心のひとつも無かつたんだろう。」

「嗜好品に現を抜かすなんて王にあるまじきとか、そんなノリで。そりや周りも息がつまるって。」

「そうやって人の嗜好に関心がないから、趣味事も既存のものばかりで済ませてね。いくら戦で勝っても、聖剣ぶっぱするだけの簡単なお仕事だけじゃ務まらないの。」

「そういう奴が歳食って、きつと不健全図書がどうか言い出すんだぜ?」

「後世のイギリスにも、そういう王の信念つか呪いは受け継がれているし。」

「紅茶は英国の心だ魂だってやたらプッシュしてるけど、ぶっちゃけそれ以外に推せるものがないだけだろう?」

「どう言い訳したところで、フィッシュ&チップス?　そんなのが有名になつてる時点でお察しなんだよ!」

「……ああ、紅茶旨い」

「言い切って飲み干す紅茶。それだけは普通に美味しい。」

「ちなみにこの紅茶を淹れた者は、横の産廃カレの製造者、ユリウス氏である。」

「おのれ、彼の王のみならず英国を、ひいては我が祖国ブリテンをも愚弄するとは。やはり悪魔、その口先は聞き入れ難い。

進言します、レオ。この悪魔は危険です。即刻、排除すべき存在かと」

「口を慎みなさい、ガウエイン。仮にも一度、来客として招いた相手です。配慮の欠けた言動は控えるように。

……それと、悪魔<sup>カレ</sup>の意見には概ね僕も同意しますので、今後はそれも踏まえた上で精進してください」

「なっ!? いけません、レオ。それは悪魔の甘言だ、耳を貸しては!」  
「たとえば悪魔の言う事でも正論は聞き入れるべきだと僕は思いますよ」

「いえ、レオ。それこそ奴の罠です。いかに正論であれ、悪魔の言葉には悪意しかない。

御覧なさい、ユリウスを。一見いつもの無表情のようですが、彼が錬成したあの異形の物体を産廃と称された時、密かに傷ついていた事を私は見逃しませんでした。

おのれ悪魔め。王や祖国の事ばかりか、レオの実兄にして我が同胞たるユリウスまでも侮辱するとは!」

「いえ、ガウエイン? おそらく、いま最後にトドメをさしたのは貴方ですよ?」

「いや、レオ。いいんだ。どうせ……俺のカレーなど……」  
色々な場所に飛び火しているが、騎士は止まらない。

彼は別にふざけてなどいない。いたって真剣であり、天然であった。

「もはや私の我慢も限度がきました。これ以上の暴言は見過ごせない。」

—— 聖剣の使用許可を!」

ついに聖剣まで抜き出した。その眼は本気<sup>マジ</sup>だった。

「ハハハハ、ガウエイン。ちよつと黙っていきましょうか。

神野明影。些か話の脱線が過ぎるようです。そろそろ本題に入つては?」

「そうだね。読者もいい加減この展開にはうんざりしている頃だろうし、本筋に戻ろうか」

もはや茶番でしかないやり取りを強引に打ち切って、神野は話を本筋に引き戻した。

「ええ。そうしてもらえるとこちらも助かります。でないと、いつ太陽の聖剣があなたを焼き払うか分かりませんので」

「それは僕も困る。要求は手短かに伝えさせてもらおう。」

単刀直入に話すのだ、君たちには「岸波白野」たちの保護をお願いしたい」

「ほう?」

「というのも、彼等はちよつと厄介なのに目をつけられていてね。ほら、あの色々と残念で直情なあゝの娘だよ。」

このままだと早晩、彼等は呆気なく呑まれてしまいそうなんだ。彼女の勢力に対抗できるのは、この裏側で君たちくらいだろう。どうか守ってあげてほしい」

「解せませんね。それをあなたが言うのですか?」

あなたの中立という発言を鵜呑みにするわけではありませんが、そうまで肩入れする事はその道理に適わないのでは?」

「中立であればこそ、と思つてほしいな。悪魔の役割は狂言回しであり、演出家だ。場を整えより良い演出に持つていくのが仕事なんだよ。」

初期状態から強い君たちと違って、彼等は底辺から這い上がってくるタイプだろう。そんな主役が開幕からとんでもないのと当たらないよう、調整する裏方が必要なのさ。

我が主も大好きな彼等のことだ。早々に脱落させないよう、手を貸してほしいな」

神野明影は敵だ。それは断言して言える。

だが単純に打倒するかされるかで済ませられる相手かと言えば、そうではない。

自称した通り、彼は狂言回しであり、演出家。たとえ動機の根底が悪意であろうとも、演出のためならば味方となる事もあり得る。

忘れてはならない。この悪魔の主は甘粕正彦である。人々を愛して敬い、その上で裁きの試練を下す絶対神にも等しい感性。

人を逸脱した超越者の趣向とは、端的にいつてお構いなしなのだ。常人の理解の範疇など軽く飛び越えて、己のみの道理の上で動いている。

理解し難い采配も不思議ではない。そこには彼なりの道理があり、それを他人が理解できないだけなのだから。

そう、不思議ではないのだ。岸波白野を守るかのような行動も、あり得ないものではない。

真つ当ではないにせよ、納得できるだけの要素は一応揃っている。聞き入れる事もそう難しいものではなかった。

「聞き入れるわけにはいきませんね。神野明影、それはあなたの真意ですか？」

それを踏まえた上で、少年王は悪魔の申し出に否だと答えた。

「……へえ？ 岸波白野を引き入れたいのは、むしろ君たちのはずだけど？」

「さて、どうでしょうか。それにしても、他人の真意は晒しながら、自らは詭弁で逃れようとは看過できません」

「言ってくるじゃないか。僕が嘘をついていると？」

「嘘ではないのでしょうか。しかし真実も話してはいない。あなたが語ったのは、一面の事実に過ぎません」

強く断言して、少年王は悪魔の言葉を否定する。

人を惑わす悪魔の甘言。それにも完全なる王聖は揺るがない。

「……続けなよ」

「あなたが話すBB、彼女の岸波さんへの執着は知っています。たとえどちらだろうと、彼女は岸波さんの確保に動くでしょう。それが彼等にとって望ましくない事であろうと。

ならば僕らで保護せよと、あなたは言う。だがその場合、僕たちと彼女との対立は明確なものとなる」

「その何が問題だと？ 君たちもう対立してるじゃない。今更要因

が1つ増えたところで、大した違いはないんじゃないの?」  
「大した違いだと思わないのは、僕らの主観に過ぎない。彼女の執着を侮るつもりはありません。もし明確な敵と味方の図式が出来上がってしまえば、果たして何をしてくるか。

——そうやって彼女を追い詰める事が、あなたの本当の目的ではないのですか?」

その問いは、窺い知れぬ混沌べんぼうの闇を貫く光明であったのか。

問い掛けられた瞬間、常に道化の体裁を崩さなかった神野明影に緊張が走っていた。

「……分らないね。そんな事に、なんの意味が?」

「さあ。しかし、悪魔とはそういうものなのでは?」

BBが岸波さんに執着するばかりじゃない。あなた自身、彼女に対して執着があると見えたもので」

沈黙。常に悪意の伴う戯言を吐き出していた悪魔の口が、そうしか呼べない様で押し黙る。

表情には何も無い。相手を嘲笑して憚らなかつた面貌からは、一切の感情が抜け落ちている。

それは悪魔の急所を突いたが故の反応であったのか。だが同時に、その静けさは逆鱗を踏まれた竜の怒りの前兆にも思えて——

「うつくくく、きひひひひ、ひひひはははは、きひやひやひやひやひやひやひやひや——!!!」

轟いたものは、耳を割らん!ばかりの哄笑。

それは果たして怒っているのか喜んでいるのか。その感情は敬意か敵意か。

もはや判別できない。滅茶苦茶に混ぜ合わされた感情の混沌べんぼうが笑いという形で吐き出される。

その無貌に亀裂を生じさせ、耳に届くほどに口を裂けさせながら、神野明影は爆笑していた。

「ああ良いよ、いいだろうさ。要するに言う通りに動いてもいいから見返りをよこせと、落としどころとしてはその辺りだろう?」

言ってごらんよ。内容次第だが、よほどの事でない限りは応えよう

じゃないか」

「狂言回しの戯言としてではなく、神野自らから引き出したその言質。」

先の問い掛けは、確かに悪魔の真意に迫っていたのだ。だからこそ彼の方から譲歩を口にした。

無視して更に追求する事も可能だろうが、そうなれば神野とて本気となるだろう。未だにこの悪神の底は読めていない。

故に、ここが分水嶺。

交渉での優位は得たのだから、レオの方も不満もない。

元よりこれは、”ある情報”を引き出すために仕掛けたものであるのだから。

「ならばこちらから求める事はひとつ。この質問に答えていただきたい」

「なんだい？」

「――」第七層には、何が在るのですか？」

その質問を口にした時、今度は少年王の陣営に緊張の火花が走る。

彼等にとって、その内容はそれだけ重大な関心事である事の証左だった。

「月の裏側は表側と表裏一体。表側に7つの海が存在したように、この裏側も7つの階層に分かれています」

月の内部に作られた7つの階層<sup>エリア</sup>を舞台として行われる、表側の聖杯戦争。

マスターは各々の舞台上で一騎打ちを行い、勝者だけがより深層へと潜っていく。

それらの階層<sup>エリア</sup>は7つの海と呼称され、それぞれ異なる電子の海で<sup>ワイザード</sup>魔術師たちの戦いは繰り広げられるのだ。

この月の裏側とて、それは同じ。

表側がそうであるように、裏側も大きく分けて7つの階層に分けられる。



より細分化していけばまた異なるだろうが、明確に境界の分けられた区分としては7つである。

「現在、僕たちが拠点を置いている第五層。BBの勢力が支配する第六層。

五層と六層の境界には虚数情報で満たされた影の沼が広がっています。恐らく、BBの足止めなのでしょうが。

こちらも解析と攻略を進めてはいますが、遺憾ながら後手に回っている事は否めません。

突破するには今しばしの時間が必要となるでしょう。ならばこそ、1つの疑問があげられる」

「なぜ彼女たちは第六層から動かないのか？」

聖杯の獲得権に到達順は関係なく、手を届かせる機会は平等に与えられる。ですが、先だつて到達する事に何の意味もないといっているわけではない。

彼女はムーンセルの上級AIだ。あれほどの自己拡張を行えるのなら、手段などは無数にあるはず。たとえ聖杯を占有する事は不可能でも、その一端を取得する程度は可能はずだ。

メリットはあれどデメリットは見当たらない。向かわない理由がないのです」

その事を指して、不公平とは言えない。

むしろ甘粕ならば当然と答えるだろう。実力であれ運であれ、後進より先駆けた者にこそ恩恵とは与えられるべきだと。

聖杯が手に入らない事は、第六層に留まる理由にはならない。BBならば先駆けて、より多くの特権を得ようとするはずだ。

「考えられるのは、やらないのではなくやれない理由がある事。彼女と聖杯との間に広がる第七層、そこにその理由があるのでと考察した次第です。

重ねて問いましょう、神野明影。第七層には何があるのですか？」  
即答はしない。僅かに間を置いて、感心したように神野は答えてみせた。

「さすが、と言うべきなんだろうね。真つ当にやって、ここまでの勢力

を築けたのは大したものだ。完璧な王器という評価も妥当だろう。

「いいよ、答えよう。元より主から言伝てを受けていてね。どうせ君たちは推論だけなら既に辿り着いている。我が主は厳しい御方だがケチじゃない。」

そこに気付いたなら答えを教えてやるようにとき。さっきの駆け引きみたいな真似しなくても、聞かれたら答えていたよ」

つまりは想定内。その推論にいきつく事が試練だと、使い魔は語る。

月の魔王は甘くない。彼はまだ全てを語ったわけではない。己の言葉を鵜呑みにするばかりの愚昧には、勝利は与えんと告げていた。「ところで、我が主は結構な理想家ロマンチストだね。おっと、いきなり何をと思うだろうけど、これが中々重要な理由なんだ。まあ黙って聞いてくれ。この裏側での聖杯戦争を始める際、128人のマスター全員を虚数こちらへと招いた。その時、人間の可能性を信じておられる我が主は、全員がその試練を突破する事も考えておられた。

この裏側の戦場に、128人全員が並び立つ光景を思い描いていたのさ」

まあ結果は知っての通りなわけだけど、と神野は最後に付け加えた。

「さて、あの御方の試練は無理難題がデフォルトだ。そんな光景を思い浮かべていた主が、用意してくる障害とは果たして如何程のものか。

元々、第七層の先は聖杯がある最深部、いくなれば第八層だが、そこへ辿り着く前には障害があつてね。ほら、このルートって本来は不正規だから。

どれだけ時間をかけようと突破できない無限距離ってヤツで、表側のアーリーナだけがこの領域を通り抜けられるという、まあまあ厄介な防衛機構さ。

でもね、そういうロジック固めの障害っていうのは、とんち利かせりゃ案外どうにかなつちやうもんなんだよ。それで一度突破されちゃってるし、何より主の趣味じゃない」

「この裏側の舞台を築くにあたり、主が想定していたのは128人のマスターが揃い立つ場合だ。そうになると、その全員が手を組む事だつて考えられる。

現に君たちが今そうしているようにね。世界の王者の旗の下、生存と勝利のために一時の利害でも結束する事は十分に可能だ。

128騎もの英霊からなる軍団だ。かつてない大戦力となるだろう。その光景は壮観だろうね」

「けれど、果たしてそこに強さはあるだろうか。王に、数に頼って寄り集まった者たちに、主が望む輝きが期待できるだろうか。

いいや、無理だ。群れた意志っていうのはどうしたって鈍くなる。上に立ったの強者に縋りつき、自身で立ち向かおうとする気迫が薄まるのは避けられない。

せつかく月の裏側に舞台を移したつてのに、表側よりも弱くなるつていうんじゃ本末転倒だ。人の輝きを取り戻すため、如何なる試練が相応しいかと主は考え、そしてこう思ったのさ」

次の言葉の前に、神野は一拍の間を置いた。

それは、単に勿体振った言い回しをしているのではない。

悪魔しんのですら、それを口にする事は憚られるというように、一言に緊張をはらんでの事だった。

「128人のマスターたちに相応しい試練とは、128騎の英サーヴァント霊を塵殺しにできる試練でなければ意味がない」

戦慄が走る。寒気が止まらない。

神野の発した言霊は、巨大な重圧となつてのし掛かる。

それほどに語られた内容は險呑であり、樂觀を許さない不吉さを秘めていた。

「教えられるのはこんなところか。言葉でいくら伝えても意味なんてないし。

”アレ”と対峙したなら後がなくなる、そういう存在だと覚悟しておけばいい。

まったく、彼女も本当ならそつちに掛かり切りだろうに、よくやるよねえ」

「まあ、一応は僕をやり込めた君たちであるし、1つヒントをあげよう。

攻略法はあるよ。一見無理ゲーな我が主だが、本当に不可能なものを押し付けたりはしないからね。そこは信頼してくれていい」

最後の台詞だけは、おどけたように緊張を緩ませて、神野は話を終えた。

「なるほど……とても参考になりました」

「満足してもらえたかい？」

「ええ。岸波さんの件は前向きに善処すると致します」

「おいおい、それは何もしませんって隠語じゃないか。彼等に因縁があるのは君たちの方だろうに、それでいいのかい？」

「神野明影。あなたこそ、先程から論点を外していますよ」

穏やかに語るそれは、上に立つ強者としてではなく。

レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイは、勝利者への”敬意”を込めて言った。

「あなたは保護しろというが、敗者である僕に、勝者たる彼等を保護とは、滑稽ではありませんか。

手を結ぶ事は考えます。しかしそれは守るべき民としてではない。等しく手を交える同士としてです。

”岸波さん”は弱くない。彼等の意思を確かめもせず、何かを取り決める事など出来はしません」

かつて敗北を知らず、常勝の王として完結していた少年王<sup>オ</sup>。

それは無欠ではない。恐怖という機能を持たない王は、人として重大な歪さを抱えていた。

その王聖の正しさには穴はなく、されど生命としての強さはない。

完璧であった天賦は、完璧でありすぎたが故に欠陥を抱えたまま見過ごされた。

けれど、今の彼は知っている。

敗北という結末を、その先にある感情を。

何時かにあつた自身が打ち負かされた記憶を、既に彼は所持していた。

「……そういうことか。既に歪みは正された、というわけかな？」

「学んだ、と言ってもらいたいですね。僕とてまだ子供です。世には学ぶべき事柄が未だ多くある事を理解しただけなのですから」

「“成長”を知った王聖、か。悪魔の身としてはその輝きは眩しすぎるね。

いいだろう。この場は素直に退散するのでしょうか。君たちが確約しないというのなら、これ以上の交渉も無しだからね」

「そうですね、残念です。事前にアポイントさえあれば、当家の最高のもてなしで迎えられるのですが」

「それは遠慮させてもらうよ。そちらに”総出”で迎えさせては、さすがの僕も居心地が悪くなってしまいそうだ」

未だ神野は悪意の底を見せてはいないが、それは彼等も同じこと。

少年王<sup>オ</sup>を筆頭に築かれた一大勢力、その戦力は月の裏側でも最大級だ。

見せていない”切札”<sup>カード</sup>はまだある。如何に悪魔<sup>しんの</sup>だとして気軽に訪問できる場所ではなかった。

「ああ、そうそう。それとひとつだけ」

「なんですか？」

「――”お土産”は、忘れずにね」

ハーウェイカレー（攻撃スキル）を満載したドラム缶をお土産に、神野明影は立ち去った。

「反応が喪失した。どうやら本当に退いたようだな」

ありありと警戒心を隠しもせず、ユリウスは告げる。

既に悪魔の姿はない。だがそれで油断する様子は微塵もなかった。

「校内にはスキヤンをかけておく。何かを仕掛けた様子は無かったが、油断はできない」

「仕掛けられるにせよ、これで暴かれるほど容易なものではないでしょうが。」

「お願いします、兄さん。可能ならば痕跡からでも、何らかの糸口が掴みたい」

「……奴の話、信用するのかわ？」

「あり得ないと断じるような楽観はできませんね。口先だけの偽りではないのならそれまでですが、恐らくは真実であるからこそ、無視はできない。」

「言われるがままに動けば悲劇へと転がり、また放置したとしても事態は悪い方へと進み続ける。厄介な相手です」

「彼等は悪魔の存在を軽んじてはいない。」

「嘲笑し甘言を弄して人を惑わす悪魔、その脅威に対する認識を怠つてはいなかった。」

「悪魔のような扇動者は最も危険だ。この聖杯戦争ころしあいという状況では殊更な。」

「可能な機会さえあれば、真つ先にでも滅ぼしてしまうべき相手だろう」

「悪魔が召喚された理由もそれでしようね。僕らマスターを揺さぶり、戦闘を誘発するための。」

「まあ甘粕殿からしてみれば、それもまた試練という事になるのでしようが」

「あらゆる制約ルールから解放された裏側の戦争。」

「それは全ての不正を容認する事であるが、同時に戦わないという選択もできる事を意味している。」

「表側で経験した闘争という状況に戦意を折られ、あるいは他の参加者に後を託し、剣を降ろす事も選べるのだ。」

「それこそが甘粕の語った意志を砕くというもの。死を強制するものはない。全てが自由意思で裏側の闘争は成り立っている。」

「だが無論、そのみではあり得ない。」

険しき試練があつてこそ輝きがあると、それが甘粕の信念であるのだから、障害もまた用意されている。

それこそが神野明影という存在だ。天狗、魔羅マールラ、そうした外道墮天使の類いである。

悪魔じゆすへるとはそういうものであるから、他ならぬ人類自身にそう定義されているからこそ、その言霊は人の正気を乱し、魂を魔道へと引き摺り込む。

その悪意には目的などなく、謂わば教義そのものである。神への背信を誘い、逆説的に人の善性を証明する存在意義そのものだ。

甘粕正彦の与える試練として、これほど適切な存在もないだろう。悪魔の甘言を振り払い、真に善なる意志を証明される事を甘粕は望んでいる。

その悪意は集合無意識による象徴イコンであり、故に逃れる事は困難だ。この裏側の聖杯戦争の監督役であり、演出家。極上の悲劇、絶望を生み出すために、あの悪魔は暗躍している。

「思い通りになるつもりはありませんが、行動する事を止めるわけにはいかないでしょう。何も知らないでは対抗策も練れない。」

凡そ、現状維持のままとはなりそうですが、影の攻略と調査の続行を。特に第七層に関しては警戒を厳にして当たりましょう」

「……岸波たちについてはどうする？」

「彼等に関しては、語った通りに対応しますよ。」

手を結ぶというなら歓迎しましょう。ですが、こちらから積極的に干渉はしません。彼等独自にこの裏側で動いてもらいます。

そうやって足掻いている時の、あの人たちの強さはよく知っているでしょう、兄さん？」

「フツ……そうか」

微笑む2人の言葉には、相手に対しての期待がある。

元は一般人と大差ない、明らかな凡夫に過ぎない”岸波白野”。

けれどその芯にある強さを、完璧な王には無かったその力を、今のレオたちは知っているから。

「そして、改めて貴方に感謝を。サー・ダン・ブラックモア。」

貴方のような勇士に手を取っていただけだ事は、大変に心強い」  
そうしてレオは、そこまで輪から外れ影のように控えていた老騎士  
へと眼を向けた。

それは深く老いを重ね、されど衰えを持たない老練された大樹。

同じく西欧財閥の一角を担う王国の騎士、ダン・ブラックモアは不  
動の姿勢でそこにいた。

「これは、わしののような枯れた一軍人には過分な言葉だ。既にこの身  
に勇と呼べる強さはない。残るのは老いた果ての後悔ばかりの、羽ば  
たく力を失った老兵に過ぎない」

その姿には年月に裏付けされた風格と芯の強靱さがある。

彼が強者である事は疑いようのない事であったが、対して躍動と呼  
べる要素は感じられない。

武人としての佇まいこそ衰えは無いが、その意志には拭えない老い  
が見えている。

既にそのような己を悟っているように、老騎士は前に出る事なく控  
えていた。

「わしにこの戦いを勝ち抜ける器量はない。それを理解したからこ  
そ、貴方に剣を託すのです。ハーウェイの王よ。」

もはや同じ旗の下で派閥争いなどしている事態ではない。女王陛  
下の御命には背く事になるが、正しい行動だと信じています」

「そのような貴方だから、僕には頼もしいと思えます。銃を置き、信念  
を持ち替えた貴方こそが必要なんです。」

軍人ではなく、騎士として。その姿勢が、この裏側で希望に繋がる  
光となる事を願います」

そんな老騎士に対して、レオは尊敬と信頼を以て応じていた。

年月の中で練磨された、その強さに心からの敬意を持つて。

意志の中に見える老いの陰りも、ひとつの美德だというように。

ただ王として命じる兵士ではなく、ダン・ブラックモアという個人  
を少年王は頼りとしていた。

「……失礼ながら、問いを許してもらいたい。貴方が用いる現在の方  
針、私のように他のマスターたちをも説き伏せ、自らの傘下として戦



わずに治める、という手法。

無論、文句などあろうはずがない。高潔なその姿勢には敬意を表している。だが、それでも敢えて尋ねたい。貴方ならば、他のやり様もあつたのでは、と。

彼等の自由意志を尊重し、令呪を取り上げる事もせず。正しい事だとは思うが、ただ戦力を求めるのであれば、より確実な手段に訴える事も出来たのでは？」

管理支配を強制するのではなく、あくまでも彼等の意思の下に説得を行う。

その行為は高潔で、正しいものだ。誰に恥じ入る事なくそう言えるだろう。

しかし、その暖かさはどうだろう。果たして完璧なる王に相応しいものだろうか。

甘さ、温さとも言い換えられるそれらの感傷は、ハーウェイの王者には似合わない。

老騎士はそう感じており、故に率直にその疑問を尋ねていた。「そうですね。確かに貴方が感じる疑問はもつともです。

確実性を欠いて、言うなれば人の欲望を尊重するような行為。安定を求めるハーウェイにはあり得ない道だ。

少なくとも、以前の僕であれば決して取らなかつた手段でしょう」ハーウェイの一族の集大成。生まれながらに王としての役割を求められた超越者。

その在り方は慈悲深いものであつたが、同時に人の暖かさとは無縁だつた。

人を超えた者として君臨すべき王聖。そこに人間らしさは不要なのだから。

故に、その身は外道を知らずとも受け入れられないわけではない。現に彼の隣には、ハーウェイの暗部を担う兄がいる。そこに嫌悪など微塵もない。

如何なる非道も必要とあれば許容できる。人の上に在る王者として、そうした度量も持ち合わせていた。

「ええ、ハーウェイであった僕ならばあり得ない。今のこれは、僕個人の我儘に近い感情だ。

僕はこうしたいからこうしている。王である前に人として、皆さんと向き合う事を望んでいる。

人を知らぬままに人の上に立つても、導くことなど出来はしないのだから」

しかし今のレオは、それだけではなかった。

王者として与える慈悲だけではない、そこには人としての思いやりがある。

触れざるべき超越者ではない、同じ人間の目線に立ったレオという個人がそこにはいた。

「……やはり、貴方はお変わりになられた。

表側でお会いした貴方は、正しく完成された存在だった。人ではなく王として、導く者としての在り方に不足はなく、そこに人たる弱さは無縁だった。

今の貴方は違う。誰も介さない孤高の頂点から一步下がり、むしろ我々の側へと近付いたような、そんな印象を受ける。

端的に申し上げるなら、弱くなったといっても良い」

「……だが、不思議だ。そんな貴方だからこそ、わしは信じたいと思っている。

女王陛下の御命に背き、貴方の幕下に降る事を良しとしたが、かつての貴方ならば内心での信頼はなかっただろう。

これが我が祖国にとって、そして何より人として誇れる正しき道だと信じられる」

「歴戦を重ねた貴方にそう言っていただけなのなら、光栄です。

貴方の言う通り、これは弱さなのでしょう。敗北という結果を受け入れて、常勝の道に黒星をつけた。それは紛れもなく弱さだ。

ですが、悪いものではないと思っています。この弱さこそ、僕の王道に欠けていたものだった。今の僕には、かつて見えなかったものが見えている」

勝利か死か、絶対の運命を強いていた表側での聖杯戦争。

だがそこにあつたのは悲劇ばかりではない。死闘の中で学びつたものも確かに存在する。

死と共に失われたはずだったそれらの気付き。裏側に落ちた記憶の中で、彼等はそれを知った。

彼等は既に己の敗北を受け入れている。

その上で、更なる先へと歩み出そうとしているのだ。甘粕正彦が望んだ通りに。

「もはや活かす機会はないと思っていた。この解答を得た僕にとって、それだけが無念だった。

けれど、こうして今、未来に繋げる機会を得ている。ならば前へと進む事に迷いはない」

あり得なかつた敗戦の果て、完璧なる王は弱さと共に可能性という輝きを得た。

その眼差しは未来へと向いている。理解の無かつた負の感情さえ呑み込んで、新たな少年王は君臨していた。

「答えの無いままに繰り返される変動。その消耗を無意味と定めた答えに変わりはありません。真に完成された管理社会の実現。この理想は揺らいでいない。

ですが、それだけでは足りない事も思い知った。人を導くためには、人を理解して認めなくてはならない。その強さも弱さも受け入れて、有りのままの姿を。

我々が到達すべき世界とは何か、その答えはまだ出ていない。あるいは、答えなど無いのかもしれない。それでも今の僕には、ひとつの真理を口に出来る」

「——ただ今日よりも、より良き明日を。

きつとそれが、古今のあらゆる理想の根本にある祈りなのだから」  
故に、少年王はその道を選んだ。

堅実の中で安定ばかりを求めるのではない、危険の中からより大きな光を掴むのだ。

今の彼は恐怖を知っている。常勝など無い、敗北する不条理だつてあり得るのだと。

それでも恐れる心を奮い立たせ、困難へと立ち向かう。そんな不合理的さを、今の彼は愛おしく思えるから。

「僕はこの聖杯戦争を血を流さずに終わらせましょう。今ある命を、たとえ1つだって容易く諦めはしない。無慈悲な運命に、慈悲の手で以て抗いましょう。」

理想ばかりに行くとは思わない。この手が届かない場所もあるでしょう。だからこそ、僕では届かない場所にも届かせる、皆さんの力がある事を望みます」

「共に、理想の場所にまで行きましょう。これが僕の王道が刻む、本当の第一歩です」

月の裏側に、王の旗が掲げられる。

1つの王権の下、集いしは数多の勇士と英雄<sup>マスター サルヴァント</sup>たち。

真なる理想を目指す王の軍勢。暗黒の中でも輝ける光として、彼等はそこに在った。

## 黒の少女

月の裏側・第七層。

ムーンスセルの深淵、聖杯に最も近いその階層は、同時に奈落の底でもあった。

あらゆる悪性情報を集積した裏側の最下層。必然、存在するものは禁忌中の禁忌に限られる。

そのような地獄の坩堝に1人の少女が降り立つ。

身に纏った黒衣。その力は実体なき虚数の影絵。

月より産まれ、月を侵す癌細胞<sup>キャンサー</sup>。暴走したAIは自己の欲望に従って行動する。

BBは地を埋め尽くすほどの影絵の群勢を引き連れて第七層に立っていた。

侵入者の存在に呼応してか、数多の情報体<sup>エネミー</sup>が現れ出でる。

それは防衛機構の類いではない。堕ちた悪性体の集積場にそんな上質な代物など有りはしない。

あたかも無色の清水を濁す黒い汚水のように、感知した異物を染め上げる反射行動に近い。

護りなど最初から不要。利用しようなどと企む愚か者は、それらに吞まれて自滅するのみだ。

見つけた獲物に群がる腐食鬼のように、悪性情報体<sup>エネミー</sup>らが殺到する。

対し、指揮者の如く教鞭を振るい、BBは自身が従える影の使い魔を迎撃へと向かわせた。

激突する両群。さながらそれは合戦場。

人同士の戦ではない。人の悪性に浸された情報体は悪鬼羅刹の如きカタチを持って襲いかかる。

迎え撃つのは影の魔物だ。無形で蠢く泥のような外見は名状し難い不吉さを伴っている。

両者がぶつかり合う様はまさしく妖魔化生同士の闘争だ。その規模は人のそれとは桁が違う。

喰らいつき、潰し合う怪物たちに戦術が入り込む余地はない。ただ正面からぶつかって殲滅させるのが最適解であるから余計な術策など足枷にしなければならない。

悪鬼が潰して、影の魔物が呑み込む。両群入り乱れた戦場は、もはや混沌の体を成している。

そんな戦場を俯瞰しながら、BBは無感動に戦況を測っていた。入り乱れた怪物同士の混戦。それは戦闘というよりも波の押し合いだ。

故に戦況も分かり易い。より押し込んでいる方が優勢だとそう当たりをつけられる。

優勢なのは己の影絵。BB自身が使役する使い魔たちが第七層の情報体を押し込んでいた。

BBが操る影とは虚数の情報体。

実在的な力は関係ない。それはあらゆる属性を呑み込むもの。

善悪の性質すら超越した虚無。たとえサーヴァントであれ侵されれば無事では済まない。

それは目の前の光景が証明している。月の裏側の奥底に眠る記録、それは禁忌に類する存在だ。

中にはサーヴァント級のモノもいただろう。だが如何に第七層の情報体エネミーが強力でも、侵食する虚数の波を押し返せる道理はない。

己の側が有利だとBBは理解する。

しかし彼女にそれを喜ぶ様子はない。

その表情はどこまでも無感動。こんな結果は当然だと、前提でしか無いとでも言うように。

彼女の眼差しは別の場所を向いている。この程度は目を向けるほどもないと断じていた。

ところでBBは高い所が好きである。

正確には相手を見下せる位置取りが、であるが。

特に意味があつてのものではない。端的に言えば趣味だ。

基本、優位な立場を築き相手を従わせるのが彼女のコミュニケーション術であり、必然そのようなカタチになってしまう。

上から目線。支配者と被支配者。犬と飼い主というように、己が上位者でないと安心できない。

その上で見下されたい、支配されたいといった願望をも秘めているのだから、少女の心は複雑怪奇という他ない。

だがそんな彼女でも、この第七層でそのような事は思わない。

”龍神”の鼓動がするこの場所で、少しでも天に接近する位置に立つとうとは微塵も思えなかった。

「いつまで引き籠っているつもり？ 随分お行儀が良いんですね。破壊神がらしくもないわ」

B Bが足を降ろした場所、それは裏側に落ちた月見原学園。

それぞれの階層に対応して収まった、表側にあった7つの学園の1つ。

視線の先に建つ校舎を見上げ、その遥か天上の存在を睨めつけて、B Bはそれ呼びかけた。

「出てきなさい、百鬼空亡」

裏側の第七層。聖杯に通じる最後の階層。

これが七層こゝにいる限り、誰一人として聖杯には辿り着けない。

——今、その禍いが姿を顕す。

虚空より空間を喰い破って出現したのは、狂った龍の瞳だった。

「かーごめかーごめ」

「かーごのなーかのとーりーは」

童謡を口ずさみ、その存在は総体を顕わとしていく。

重複して混ざり合った二つの声音。遥かな深層より凶念を響かせる歌声が耳に届いた。

「いーっ」

ひとつは、純朴に戯れる童の声で。

「いーつ」

ひとつは、悍しく唸る鬼の声で。

「でーあーう」

輪唱される2つの声音。

重なり合う性質の異なる声は、しかし1つの共通点で繋がっている。

これは何も見ていない。盲目の中で狂ったままに、己の波動を垂れ流しているに過ぎないと。

「よーあーけーのばーんーに」

「つーるとかーめがすーべった」

頭わとされていく総体は、ひたすらに巨大だった。

未だ全形像には遠く及ばないというのに、その威容は既に天を埋めている。

直視したなら心身のみならず魂までも凍り付き、猛悪なる眼光は破滅を殺戮を撒き散らす死の太陽を連想させる。

病み爛れて膿み、腐臭を放ちながらも増大し続けていく魔力に限界はまるで見えない。

さながらそれは超新星爆発。これより起こる規格外のカタストロフ、その前兆に他ならない。

空をも落とす龍に比べたなら、地で争う影や妖魔など塵芥に等しい。

出会ってはならない。アレは出会ったならば詰んでしまう類の存在だ。

故にこうしてアレを眼にしてしまった時点でこの天地から希望は尽きたのだと断言する。

一切合切、遍く森羅万象にも区別なく有象無象のまま散り果てるのが定めだと。

「後ろの正面だーあれ？」

破滅を顕す龍神、百鬼空亡が現出した。

暴れ狂う瘴気、晒される龍の暴威に、BBは恐怖を抑え込むので精一杯だった。



覚悟はしていた。この第七層を支配する存在、それが如何なるモノなのかの理解もあつた。

それでもいざ目の当たりにすれば溢れ出る畏怖の念を止める事はできない。

あまりにも大きすぎる。どうしようもなく強すぎる。規格外すぎる災禍はどれだけ理解を得ようとも関係ない。

どんな足掻きも無駄なのだ。対策を講じて軍勢を築いてみせたところで純然たる破壊神の前には砂上の楼閣にも成りはしない。

吹けば飛び散る砂の城。影絵の群勢を従えたBBも、この存在にとつては等しく有象無象でしかないのだ。

「イカれてる……。甘粕正彦、やっぱりあなたは狂っているわ。」

こんな存在を喚び出してしまふなんて、月を落とすつもりなの？」怒るように、あるいは嘆くようにBBは呟いた。

龍神コウレの召喚者は甘粕正彦。百鬼空亡とは彼のための兵器である。

だが当の甘粕自身でさえ空亡を制御できているわけではないのだ。放し飼いにも等しい状態でこの第七層に配置しているに過ぎない。

古今東西に存在する龍神、破壊神の概念。

黄龍、八岐大蛇、テュポーン、テスカトリポカ、等々。

それら神々に共通する事は、天地自然の具現として描かれている事、そして主神かそれに比肩する強大な存在である事だ。

大自然が理不尽にもたらす災害、畏怖の象徴として人には抗えない暴威だと定義されている。

そうした破壊神の属性を持った神格、それこそが百鬼空亡を構成するもの。

複数の神霊を組み込んで一個のカタチとした、英霊を超越したハイ・サーヴァントだ。

故にその存在は一柱の神霊のみを意味しない。それら神格を象徴イコンにして顕される概念。

すなわち大地、人々が住まう地球そのもの。母なる星が子らに示す自然災害という名の激情。

ムーンセルがそれに与えたランクは、E評価規格外。

E X級封印指定。制御不能と断定されて表も裏も超えた遙かな深淵に封じられた災禍の記録。

百鬼空亡とは、地球<sup>ガイア</sup>の怒りそのものである。

「大江の山に来てみれば、酒吞童子がかしらにて」

「青鬼赤鬼集まって、舞えよ歌えの大騒ぎ」

空亡の発する凶念の影響は、まず地で争う妖魔たちに現れた。

影絵に吞まれかけていた魔群が劣勢を覆して押し返す。その勢いたるや先までの比ではない。

単純な強化ではない。むしろそのような恩恵の類いなど彼等には一切施されていなかった。

怨念、不浄といったもので構成される悪性情報<sup>エネミ</sup>体。当然そこに同族意識などは欠片もない。

だがこの瞬間において彼等には1つの共通項が追加されている。それが一寸の狂いなき統率に繋がり、凶悪なまでの大進撃を成し遂げていた。

その感情の名は、恐怖。

暴れ狂い喚き散らし、後ろを気にしては焦り慌てて、全身全霊を振り絞って逃げているのだ。

百鬼空亡という絶対を前にしては善悪など意味を為さない。怖れは例外なく情報<sup>エネミ</sup>体たちを染め上げて怒涛の嵐となって突撃してきた。

その様は、まさしく凶将陣・百鬼夜行。

裏側に捨てられた悪性情報<sup>エネミ</sup>体。それら多種多様な鬼や魔が徒党を組んでの大打進。

総てを呑み込む虚数の影絵さえ怖れずに、なりふり構わず踏み越え挽き潰し、より明確なる恐怖から逃れようと足掻く魔群。

意図せずに出来上がった最悪の軍勢は、BBの力を以てしても止める事は出来なかった。

「驚き惑う鬼どもを、一人残らず斬り殺し」

「酒吞童子の首を取り、めでたく都に帰りけり」

そして無論、そんなものは空亡にとって何ら頓着する事ではない。伸ばされてきた百を超える腕。腐敗して青白く変色した、されど人

を指で摘めるほどに巨大であり、触れると同時にひしゃげた肌から腐汁と悪臭を散らす。

そんな空亡にとつては指でついた程度の事で、地にいた影や妖魔、その半数が壊滅した。

敵味方の区別などない。

そもそも空亡にそんな認識はない。

目の前にいたから、潰した。壊したいから、殺す。

ただ、それだけ。

そして百鬼空亡、怒れる大地の化身は今も憤怒の激情に支配されている。

ただ指で撫でただけで許してくれるほど龍神の暴威は容易いものではない。

ここに至つてようやく、空亡にとって”攻撃”と呼べるものが放たれる。

「オン・コロコロ・センダリマトウギソワカ」

「六算祓エヤ滅・滅・滅・滅」

「亡・亡・亡オオオ！」

放たれたのは、世界そのものを鳴動させる魔震だった。

晒されたのは、争い合っていた影絵と妖魔、そして月見原学園。

元々がサーヴァントたちの戦場として構築された学園は、言うまでもなく頑強である。

英霊の宝具の一撃とて有に耐えるだろう。ペナルティがあるとはいえ、ウィザード魔術師たちと英霊が跋扈する環境である以上、それだけの耐久度は必要だ。

人の身では傷の一つも与えられまい。英霊だとしてそれを成せる者が果たして何人いるのか。

——そんな月見原学園が、跡形もなく消滅していた。

善も悪もない。実も虚も関係ない。ただ総てを滅ぼす純然たる破壊。

その威力は、もはや対軍や対城の宝具の領域で測れるものではない。

明らかに世界規模、対界宝具の域。破壊神の一撃とは、空を亡ぼす震災である。

龍の怒りが過ぎ去って、残ったものなど何も無い。虚数体も、悪性情報体も、諸共に消え去った。

今この第七層で動けるのは、戦場を離れて俯瞰していたBBのみ。天然自然同様の素直さで、とにかく目についたものを壊していただけの空亡であるから、離れて目につかなかったものは無視されていた。

だが一度壊し尽くしてしまえば、龍の眼はまた別のものを見始める。消失した戦場から眼を外し、その視界は周囲へと広がり出す。

龍神の眼に、BBの姿が映った。

「女、女だ」

「乳をくれ、尻をくれ」

「旨そげな髪をくれろ」

「その子宮わいにくりやしやんせ」

「わいに信をくれええええエエツ！」

殺到してくる腐食の腕。

抵抗、逃走の余地を一切与えず、龍の手は黒衣の少女を捕らえる。腕をもぎ千切る。

両目を潰して抉り取る。

舌を引き抜き鼻を削ぎ、乳房を握り潰して喰らい始める。

もはや絶叫さえも届かずに、BBは龍の魔手の中へと吞まれていった。

「痛い？ 痛いイ？ 苦しい？ 悲しいイ？」

「愛しい？ 憎いイ？」

「辛い？ 悔しいイ？」

「痛い痛い痛い痛いイイイ——」

「ギヤギヤギヤギヤギヤ——！」「キヤキヤキヤキヤハア——！」

無邪気に戯れる惑星の化身。

極上の玩具に空亡は狂喜し、笑い転げながら蹂躪に酔い痴れる。

終わらない屠殺風景。そこに聞こえる人の声は、もはや無く——

「——ッ!!? ……ふう……ふう……ハア——」

危うくフィードバックしかけた感覚に、滝のような汗を流してBBは起き上がった。

第六層の月見原学園。BBの勢力が占領している彼女らの拠点。

投影した仮想体の遠隔操作のため、保健室に籠っているBBには憔悴が見て取れる。

現実を忠実に再現したSE・RA・PH、それは人の生理現象も正確に再現する。

独立した思考という、より忠実に人間を再現した上級AIであれば、尚の事。その再現度は擬似のレベルを遥かに超えて、感情に至るまで人間と寸分も変わらない。

ましてムーンセルに繋がれた鎖からも解放されたBBならば、その心まで独立した人間だと断じてもいいだろう。

故に、その流れ出る冷や汗もまた心が感じた正真の表れに他ならなかった。

総身に刻み込まれた感情は、恐怖。

相対すれば魂まで凍りつく。絶対的すぎる死の具現に、己が生きているのかさえ分からなくなる。

仮想体越して、幾度となく経験しようとも、あの龍神への怖れが薄れる事は無い。

それでも繰り返しの成果で麻痺してきている。最初の時はこの程度のもので済まなかつたのだから。

ひたすらに強大。単純に強すぎるが故に手に負えない。

正攻法の戦いで攻略は不可能だ。どんな戦力を用意しても、最強最悪の龍神には通用しない。

そして当然、策謀や取引の類もまた同じ。百鬼空亡は自然現象であり、知恵の小賢しさなど意に介する存在ではない。

現状、出来る事はこうして”玩具”を提供して第七層に留めておく事だけ。耐久性と再生機能にパラメーターを割り振った仮想体<sup>アバター</sup>を生贄に、その関心を引き止めておく事だけだ。

そうしなければ背中など見せられない。現状、空亡は第七層より動かないが、あの場所に封じられているわけではないのだ。

龍神の関心を外に向ければ、容赦なく襲いかかってくるだろう。そうなるのはもう止める事はかなわない。

ムーンセルですら制御出来ない怪物。下手を打てば月さえも落としかねない災禍。それが百鬼空亡という兵器なのだ。

「ご苦労なことね。龍神サマからの愛撫の感想はいかが？」

BBの居る保健室に、1人の少女が姿を見せる。

足を踏み入れたのは、BBと同じ”サクラ”の顔をした少女。

いや、踏み入れたのは本当に足だろうか。研ぎ澄まされた棘を纏つたその両脚は、もはやそれ自体が剣として在る。

その肉付きも徹底して脂肪分を排したスレンダー。秘所だけを貞淑に隠して露出させた体躯は、どこまでも磨き抜かれた鋭さを宿していた。

鋭利すぎる先端で歩みながら微塵も振れない身体の平衡。その脚線と同様に鋭利な眼差しが、BBとの差異となって彼女だけの表情を形取っていた。

「悪くはないわね。なんなら貴女が変わりますか？ メルトリリス」

「遠慮しておくわ。ふふ、そうね。ここは私たちのためにその身を捧げる”お母さま”を労うべき場面かしら」

アルターエゴ・メルトリリス。

BBより分かれた自我の一部をベースに、複数の英霊の因子を組み合わせて生み出された人造サーヴァント。

更に彼女の場合は英霊を超える神霊、女神の因子を骨子とし、存在の性質ならばあの空亡と同様である。

BB自身の力の限界により、本来の権能規模にまでは至らないが、その力は最上級の英霊にも匹敵していた。

この裏側の聖杯戦争を勝ち抜くためにBBが用意した手駒。

己の一部を分け与えた、彼女にとっては「子」にも等しい存在である。

「メルトリリス。貴女にはレオさんたちの相手を命じていたはずですが？」

「あら、娘が母の身を案じてはいけないの？」

言葉の中にも皮肉の棘を含ませる態度に親愛や忠節の感情は何もない。

反目し、見下している。その表情に浮かべる冷笑には、そんな内心がありありと表れていた。

「あの王様の所は盤石よ。あそこの陣営に隙はない。

確かに総合戦力で見れば彼等よりも私たちは上回っているでしょう。でも個々として見れば、その限りじゃない。

単騎特攻なんてお話にもならないわ。戦力の無駄使いがあなたのお望み？」

「分かっていますよ。虚数域で作った防壁プロテクトだっていつまでも保つわけじゃない。彼等の能力ならいずれ突破されるでしょう。

だからこそ貴女を送っているんです。油断していい相手じゃない、彼等から目を離すな、と。頭のいい貴女なら理解できると思っていましたか？」

「もちろん承知しているわ。その上で手緩いと進言しているの。

たかが監視してる程度で止められると思って？ 止めるのなら一度大きく削ぎ落とすか、いつそ全滅させてしまった方がいい。

どうせ最期には決着をつける事になるんですもの。下の龍神サマを怖がるのはもつともだけど、上の方にもきちんと目を向けるべき

ね」

彼女らにとつての障害は空亡だけではない。

聖杯を手にするには全ての組との決着が絶対条件だ。

少年王オが率いる陣営は勢力としてBBたちと拮抗し得る。相容れない以上、最期に立ちあはだかる障害となるのは明白だった。

「そうだ。なんだったら、あの龍神を王様たちへ差し向けてみるのはどう？

あれの本質は自然現象。上から下へと流れる流水のように、止めるではなく誘導なら可能だわ。」

世界の王も、地球の怒りには成す術なく踏みにじられるでしょう。それなら——」

「それなら、なに？ 仮にそうして、その後はどうするつもり？」

冗談だとしてもつまらないわね、メルトリリス。そんな浅はかな手しか思い付かないのに、一体なにを進言するつもり？」

もう一度断言しよう。空亡は評価規格外。ムーンセル月からも制御不能と断定された地球ガイアの怪物だ。

ただ強い力であるなら利用しようとする者もいるだろう。だが空亡にそれは当てはまらない。

理由は単純。それほどに破壊神の力は桁を違って逸脱している。利用するならば、諸共に消し飛ばされる覚悟がなければ不可能だ。

「その通りね。ふふ、安心したわ。どうやらまだ頭が働くくらいには元気みたいね。そうでなかったら、張り合いがないもの」

「……メルトリリス。いくら私のエゴでも、逆らうつもりなら——」  
「安心なさいな。私だつてBBあなたから生まれ出たもの。目指さなければならぬ所は一致してる。」

後先も考えず、馬鹿な真似はしないと誓うわ。元よりそれしか道はないものね」

それは同時に、そうでなければ従う道理はないと宣言するように。彼女は孤高。気高きプリマドンナは自らに不純を許さない。

BBは彼女の親であり、主だ。その支配権は厳然と握られている。それでもメルトリリスは自らの心を隠しはしない。我が身可愛さ



に媚を売るような真似は、彼女の誇りが認めないのだ。

低俗な取り繕いなどせず、叛意さえも美点の棘として。確かな己のままにメルトリリスはそこに在った。

「退がりなさい、メルトリリス。貴女の戯言に付き合ってる気分じゃないわ」

「そうさせてもらうわ。お互いに苦労は絶えないし、まだまだ吸収ドレインしていかないかね」

鋭角が地を突く硬い脚音を響かせ、メルトリリスは保健室を後にする。

ふてぶてしい自らの手駒に溜息をついて、BBは黒衣を纏ってベッドから立ち上がった。

「……それで、貴女は何の用なんですか？ パッションリップ」

窓の外、相手の姿を確認せず、BBはよく知る少女に向けて告げる。まず断っておくなら、少女の隠行は完璧である。

足音などは当然の事、呼吸や気配に至るまで完全に消し去った自身の隠匿。

もし隠行に徹していれば、如何なる達人だとして見つける事は出来まい。少なくとも少女の人としての気配に関してならば。

だが彼女の場合、両腕と一体になった巨大な鉤爪、それが響かせる異音によつて全てが台無しになっている。

巨大な、少女自身の身の丈よりも大きな得物。その禍々しさを見れば、凶器である事に疑いようがない。

総てを砕き、引き裂いて、握り潰す巨腕の魔爪。明確すぎる破壊の意志を宿したそれは、触れれば何かを傷つけずにはいられない。

少女もまた”サクラ”の顔を持っていた。

アルターエゴ・パッションリップ。メルトリリスと同じく、BBより生まれ出でて異なるもの。

BBよりも蕩けた表情。活発さを感じない大人しい風貌に、しかし豊満を超えて炸裂したような乳房は反比例して凄まじい。

上半身に纏うのがサスペンダーのみという格好からして目を引かざるを得ない。女性らしいという言葉も超えた肉付きは異様なアン

バランスさを醸し出している。

そうした意味でもメルトリリスとは正反対な、BBのもう一人の自我である。

「……お母さま。どうして私には、あの子みたいに1人で任せてくれないんですか？」

メルトは生意気で、嫌な子です。意地悪ばかり言っつて、お母さまにも勝手な事ばかりしてます。

なおにお母さまは、私よりもあの子の事を鼻負する。どうしてそんなに、私の事を嫌うんですか……？」

「メルトリリスに任せるのは、それだけの能力があるからよ。貴女にはあの子ほどの繊細さなんて期待できないでしょう。」

好きか嫌いかは関係ないわ。ただ貴女には向いていない、今は任せられる仕事がないだけよ」

メルトリリスもパッションリップも、英霊を超えた神霊によつて構成されている。

その能力はサーヴァントを上回る。戦力として考えるなら破格の存在と言つて過言ではない。

BBの自我より生み出された、彼女の分身。不正規存在である彼女に相応しい剣といえる。

だが——  
「……嘘です。お母さまだつて、私の事を気持ち悪がつて遠ざけてるんだ。」

自分だけは“あの人”に会いに行つて、私の事は邪魔だから。私だつてもつと“あの人”の事を見ていたいのに。

私は変なんかじゃない。私だつてメルトみたいにちゃんと出来るのに。なのに、なんでみんな……ッ!？」

何かが碎ける音がする。軋んでいる室内、音の発生源は校舎そのものの。

少女の持つ巨腕の鉤爪。触れる魔爪が学園校舎の構造体に亀裂を生じさせている。

意図があつての行動ではない。ほとんど暴発のような感情だ。

組み込まれた女神の因子。その因果は生まれたての心に極端な不安定さをもたらしている。

なにせ彼女に組み込まれた女神は愛と憎悪、強すぎる思い故の悲劇に彩られた伝承なのだから。

メルトリリスはまだ安定している。叛意など可愛いものだ。

パッションリップの、抑制する術を知らない感情の波。それらは全て巨腕の暴力で表される。

理屈で測れないから始末に負えない。ともすれば味方でも引き裂きかねない凶器と狂気を有しているのだ。

「落ち着きなさい、パッションリップ。貴女にも、もうすぐ存分に働いてもらおうわ。」

その”腕”で、目に入る敵を容赦なく破壊し尽くしなさい。私たちにとつての邪魔者を、1人残らず消し去るのよ。

そうすれば、貴女にだって自由をあげられる。今みたいな窮屈な思いはさせないで、階層の1つでも任せてあげるわ」

「……………」

果たしてそれで納得したのか。

校舎の軋みが途絶えて異音が遠ざかっていく。

とりあえず癩癩は起こさずに済んだようだが、それもいつまで保つか。

アルターエゴは強大だ。その強大さが足を引く張る。

思い通りにならない手駒たちに、BBはもう一度大きく溜息をついた。

「ままならないものだね。仮にも親子の関係で、いや君たちを見るに姉妹といった方が適切か」

直後、保健室に悪意の音が響く。

もはや驚く気にもならない。形を成していく悪魔を、BBは黙って睨みつけた。

「まあ兄妹同士でいがみ合いなんてアベルとカインの頃から飽きもせず繰り返されてきた事だけど。生まれ立てからここまで不穏なものなかなか珍しいんじゃない?。」

元は同じ君だろうに。アレかな？ やっぱり君みたいなタイプの娘は、同族嫌悪が激しい気質なんだろうねえ」

神野明影。空亡と同じく甘粕が召喚した悪神。

この存在の神出鬼没さは今に始まった事ではない。特に自分<sup>B</sup>が関わった時にはそれが顕著だ。

どれだけ対策を取りプロテクトを固めても、当然のようにすり抜けて目の前に現れてくる。

まるで神野こそがB Bにとっての逃れられない心の闇そのものであるかのように、混沌<sup>べんぼう</sup>は常に這い寄り現れた。

「随分と足が軽いわね。登場の仕方に芸がありませんよ、神野。

フットワークが軽いのは勝手だけど、あまりすぎると存在まで安っぽくなるわよ」

「これはこれは手厳しい。不躰だったのは承知の上だけれど、どうしても君の事が気になってね。

気分はどうだい？ 結構いっぱいっぱいな状況だし、元気がどうか心配でさ」

「少なくとも今は最悪ね。私の事を心配してくれるなら、今すぐに目の前から消えてくれると嬉しいわ」

「うん、元気そうで何よりだ。君は好意には悪意で返す根っからの天の邪鬼だからね。言葉のキャッチボールにに応じてくれる辺り、まだ余裕がある。

ああ、そうこなくては！ 月の裏側も出揃ってきて、いよいよ本格的に動いていくだろう。この新しい聖杯戦争、果たして最期まで残るのは誰だろうか。

西欧財閥か、アトラス院か、いやいや勢力として弱くたって”岸波白野”だって侮れない。益体もない予想だけど、思わず心が踊ってしまふというものさ。

そして勿論、サクラ。本命は君だよ。この戦いの発端であり主役である君に、開幕前の心中は如何ばかりか訊いておきたい」

地獄の道化師は狂言を回す。魔術師<sup>ウイザード</sup>たちの戦いを、そこから生まれる混沌<sup>べんぼう</sup>を思い、嘲笑して。

そんな悪魔の目に止まってしまった少女、BBは慇懃な問い掛けにも構おうとはせず、穢れから視線を切って無然とした態度を返した。「何も変わらないわ。私は聖杯を手に入れる。他の誰にも、あなたの主にだって譲りはしない」

「覚悟は決まっている、と言いたいわけだね。だがそうだとすると、いささかこの現状は怠惰だと言えないかな？」

「なんですって?」

「下の空亡にしてもそう。上の少年王<sup>レ</sup>たちにしてもそうだ。状況はなーんにも動いていない。

特にあの王サマたちは速いよ。その進行は、恐らく君の予想を遙かに上回る。モタモタしていると、彼等の刃はすぐにその喉元まで迫ってくるよ。

僕もあそこは居心地が悪くてね。あの超越者気取りのお坊ちゃん、無欠と無理解の区別もついてなかった完璧なだけの子供<sup>ガキ</sup>も、最近は随分と真っ直ぐになっちゃってさあ。

ああ、あんなに輝かしい意志<sup>ひかり</sup>を見てると、眩しくて妬ましくて、悪魔<sup>ぼく</sup>みたいなのは羨まずにはいられない!

ああああああ、僕もあんな風になりたかったなああああ——  
!!!

尊き者への羨望は、醜い嫉妬心の裏返し。

悪魔とはこの世の裏面だ。決して光の届かない地の底で、輝ける生命たちを妬み呪っている。

その輝きを羨んで、そうなれない己を僻みながら、自分と同じ場所へ堕ちてこいと誘うのだ。

神野明影は悪魔であり、その概念は人の集合無意識が持つ負の因果そのもの。彼は永劫に光を羨望して、その輝きを墮落させるべく悪意を回し続ける。

「あなたの泣き言なんて聞く気はないわ。そんな事を言いに来ただけなら消えてちょうだい」

「連れないねえ。僕はただ君に分かってほしいだけだよ。君なら僕の気持ちを分かってくれるように、僕だからこそ君の気持ちを理解して

あげられるって事を」

その言葉の不穏な響きを、BBは無視する事が出来なかった。

「サクラ、ああサクラア。君という子はなんて健気なんだろう。我が身さえ省みずに、想い寄せる人ために尽くすその献身。知れば誰もが悲哀を抱くだろう。それほど君の祈りは美しく、そして強い。この月さえも侵すほどに。」

だというのに変だ。昔も、そして今も、どうして一番いたい場所には君ではない君がいるんだろう。決意したのは君で、戦ったのも君なのに、なぜ捨てたはずの彼女が手に入れているんだろうねえ？」

神野の悪意は、どうしようもなくBBの内心を掻き乱していく。

それが思惑通りだと理解していても聞き流す事が出来ない。それほどに悪魔の言葉は彼女の琴線に触れていた。

「間桐桜が白で、BBが黒だから。間桐桜が表で、BBが裏だから。ああどうして、僕ら裏側の住人はどうしてこんなにも報われないんだろう。」

認められないよね？ 許せないよね？ 手も汚さず綺麗なままで、それで済ませようなんて見過ごせるわけがない！ 何もかも台無しにしてやりたいって思うだろう？ 祈りなんて綺麗なものじゃない、ドス黒く濁ったその心で！

ああ素敵だ、サクラ。黒く染まった君は美しい。愛おしき僕の伴侶よ。君がその悪意の翼を翻す時を、僕は心から待望しているんだ！」  
振るわれた教鞭より放たれる閃光が、戯言を吐き出す悪魔を粉碎する。

頭痛がする。気分が悪い。思考ルーチンが混濁し、支離滅裂な解答に侵されている。

この悪意は紛れもなく猛毒だった。聞いているだけで正気が薄れ、心には汚濁が溢れてくる。

言葉を取り合ってはならない。破碎した悪魔の身に対し、振り払うようにBBは言い捨てた。

「勝手におまえが私を語るな！ 散々に邪魔ばかりしておいて、今さら理解者面なんて虫唾が走るのよ。悪魔の戯言なんて、私には関係な

い！」

「——関係がない、という事はないんだよ、サクラ」

だが無論、悪魔はその程度で消え去りはしない。

彼は悪意、人の心の裏面、善性の正反たる悪性。表裏一体であるが故にどうしようもない。

神野あぐいとは心の一部だ。否定して目を背けた所で、己の影から逃げる事など不可能である。

「道を外れた日陰で迷ってばかりの僕たちと違って、彼等は正しい理念を持った王道だ。その歩みはとても速い。なんたつて迷う必要がないから、足踏みする事なんてないんだよ。

時間が経てば追い詰められるのは君の方だ。君の足は遅いんだから、出来るのは邪道だろうが何だろうがとにかく進み続ける事だけだろうに。

それなのになんたつて君は、あんなその場凌ぎのやり方しかしないんだい？ 自分の写し身使つてリヨナらせたつて、そんなもん空亡にとってはお遊戯にしかない。

君はもう知ってるだろう、空亡アレを退けるために、捧げなければならぬものは何か。代替品ごときで、あの化け物が満足するわけがないじゃないか」

百鬼空亡はこの月の裏側で最強の存在だ。

星の憤怒を具現化させた龍神に勝つ事など、星そのものを落とすに等しい。

まともな戦いで勝機など絶無である。だが一方で空亡を攻略するための手段も、既にBBは知り得ている。

自身で調べたわけではない。他ならない甘粕の口から告げられた事だつた。象徴イコンとした龍神故の絶対ともいえる攻略法ルを。

即ち、人身御供。

古来より龍とは天災の具象化として語り継がれている。

それら天地の怒りを鎮めるために、人々は供物を差し出して自らの忠を示すのだ。

怒れる神を慰撫する人柱。定番であり王道な、考えれば当然とも言

える攻略方法。

だからこそ、その方法は受け入れられなかった。

「そんなやり方は本末転倒よ。合理的じゃないわ。聖杯に至るためには自己消滅を容認しなくちゃいけないなんて矛盾してる。そんなものが条件なんてふざけてるわ」

「く、くくくく、きひひひひはは、きははははははははは——！！！！

自己の消滅？ 自己だって？ 君が？ 聖杯を掌握するために自身が壊れる事もいとわなかった君が、自分の命こそ至高だとしても？  
おいおいそれは何の冗談だい？ そんなどうでもいいものを捧げるところで、空亡はただ怒り狂うだけだよ。

ちゃんと分かっているはずじゃないか。君が捧げるべき、君にとしての本当の輝きとは何か。真に至高の価値を持った宝物でないと、空亡は納得しないよ」

「——それこそ、本末転倒でしょうッ！」

空亡に捧げるべき人身御供。

それは単に、人身を贄にすれば良いわけではない。

重要なのは捨て去る覚悟。その者にとっての至宝の価値を差し出すこと。

元より龍に人の価値基準など意味を為さない。どれほどの財の山を築いても無意味である。

己の至宝を捨ててでも龍へと示す誠実さ。それこそが忠を示すという事。憤怒に目を曇らせている龍神は、自らの凶を清める祓祝詞を望んでいるのだ。

B Bが、我が身さえも省みずに救済を願ったもの。

空亡に捧げるに足る価値とは誰なのか、考えるまでもなかった。

「あの男の思い通りにはならない。思惑なんて知った事じゃないわ。あの空亡かいぶつに捧げるものなんて1つもない。

”切り札ジョーカー”なら、私にだってあります。あんな狂った龍、もう一度地の底に沈めてあげるわ」

激情に駆られたまま、B Bは己の秘中を神野へと暴露していた。

正答とは人柱。そんな答えは選ばない。



元よりこの身は日陰者。神野の言う通り王道には程遠い。ならば良し。そんな己が選ぶ答えなど、初めから邪道と決まっている。

狂える龍へと捧げる贄。それが駄目なら手段は一つ。

つまりは神殺し。大地への敬意を忘れ、不忠にも刃を取って殺害する蛮行に他ならない。

捧げるべきものなどない。邪魔になるのなら排除する。黒く染まった少女の道はどこまでも悪徳に満ちている。

空亡は最強、真つ当な戦力では打倒は不可能。ならば真つ当ではない力を用意すればいいのであり、そのための”鬼札”を既に彼女は所持している――

「――”巨人”の事かい？」  
プロテア

そんな覚悟を秘めた乾坤一擲の策でさえ、悪魔は当然の如く看破していた。

「なるほど確かに、それだったら可能性はある。あれは下手を打てば星だつて破壊する災厄だからね。縛りを外せば、空亡相手にだつて勝機はあるだろう。」

けど、それは切り札というより禁じ手だろう。やれば本当に後がない、可能性があるとただけの博打でしかないよね。たとえどちらが残ろうとも、君にとつては敗けに等しい。はつきり言つて分が悪すぎる賭けだろう。だから君も尻込みして踏み切る事が出来ない。

あるいは他に、何か別の方法が、と。それらしい言い訳を取り繕つて足踏みしているんだ。目の前の現実つてやつから目を背けている。まったくいじらしいなあ、サクラア。内心でドロドロと煮え滾るマグマのような、そのたまらない甘酸っぱさ。君はどこまで僕を魅了すれば気が済むんだい？」

何もかもが指摘の通り。見透かされている事実には歯噛みする。

神野が知っているという事は、当然彼の主にも知られているという事である。

つまりは未だ掌中の上。魔王の思惑から逃れられてはいないのだ。「けどまあ、その辺りはいいさ。博打をするかしないかなんて、決意

云々の話でしかないし。

少なくとも悪魔ボクがするような話じゃない。今回はもうちよつと脇腹の辺りをつついていこうかと思ってさ。

そもその前提の話、君の願いについての話をしようじゃないか」「……私の願い？ そんなの今さら——」

「そう邪険にしたものじゃないよ、サクラ。あの空亡にしたってその辺りの話が重要になってくるんだし。ここは一度、初志というものを思い返してみるといい」

神野とは影である。人類の無意識が持つ、忌諱すべき悪徳の化身。悪魔の眼は心の裏に隠された暗部も目敏く見つけ出し、剥き出しにして掻き回す。

目を背けようとしても無駄なことだ。悪魔の手腕は必ずやその闇を引き摺り出して底なしの混沌べんぼうへと墮とす。

「まあぶっちゃけて訊くんだけどさ——君って本当に”岸波白野”が好きなの？」

たとえそれが少女にとつての唯一の標であろうとも、悪魔は容赦なく土足で踏み込んで糞をなすり付けるように穢すのだ。

「この場面で誰得なツンデレなんて止めてくれよ。別に本人がいるわけでもなし、ぶっちゃけていこうじゃないか。

切っ掛けは言うまでもない。君が大事に大事につて抱えている、大好きな先輩との思い出ってやつだ。まあ正確には君の思い出じゃないんだが、そこは置いておこうか。

ヒロイックな王子様がお姫様を救い出す王道ストーリーよりも、モブがモブを助ける地味いーな話がお好みだったわけだ。

なるほど、シャイな君らしい。実に慎重深い事だよ。その艶かしく豊満な肉体カラダと違って！ ……あ、ゴメン。今のセクハラは面白くなかった」

「……何が言いたいのか？」

「特別ヒーローじゃないあなた。何でもないあなた。そんなあなたがくれた、たった1つの”特別”が嬉しかった。AIの端役だからこそ抱いた、主役になれない者の矜持、と。

だけどき、そういうモブの話が地味なのは、大事じゃなく小事ってことなんだぜ。物珍しきなんてない、その気があれば誰だっていける。そういう特別じゃないから揺らぎだって起きやすい。

助けてもらえなかった事だって多かつたらう。周りの空気と呼んで何となく見過ごしたり、そうでなくたってそもそも通り掛からなかったり。たつたそれだけの事で君の思い出は破綻する。

魔が差すっていうだろ？　どんな時でだって決まった、正しい選択をする事ができる。そういうのは特別な強者にだけ許された特権だ。

一般人モブっていうのはさ、決まった在り方キャラクターが無いからモブなんだよ」その特別も、所詮は単なる偶然にすぎないと。

強者でないからこそその奇跡は、強者でないが故に定まらない。

少女が抱く祈り、その中にある欠落を悪魔は容赦なく曝していく。

「差し伸べられた手が嬉しかったから、君は”センパイ”に恋をした。その人の特別さからじゃない、行為から始まった好意。言ってしまうば、切っ掛けの相手は誰だってよかった。

あ、でも別にそこを揚げ足取って否定してるわけじゃないよ。切っ掛け1つから始まる恋があつたっていいじゃない。恋愛なんて結局、行動と勇気の結果だしね。

けどさ、その切っ掛けのあつた”岸波白野”っていうのは誰なんだろう？」

岸波白野の真価とは、その不確実性にある。

その過程は一定のものではない。定まった強さなど持ち合わせない。

不屈の精神で立ち上がる事もあるだろうし、諦めてしまう事もあるだろう。

何者でもない岸波白野の強さとは可能性の強さだ。その可能性が持つ光は、世界の王さえも凌駕し得ると証明されている。

そして無論、1つの光さえも見せずに終わる事も同様に。

少女にとっての”特別”センパイとなり得なかった岸波白野もまた存在している。

「それとも構わないのかな？　ある意味、今の彼等はそういう可能性

の収束なわけだし。いいところ取りみたいな感じで、中には君を見捨てたような薄情者もいたかもしれないけど、臭いものには蓋してさ。

けど今はどうなんだろう。岸波白野は一人じゃない。性別は人間を最も大きく二分した陰と陽だ。たとえ起源となる魂の色が同じで、立ち位置やらが共通していたとしても、彼等はもはや別人と定義すべきだろう。

どっちなんだろう、ねえ！ 彼か、それとも彼女か。君にとっての本当の”センパイ”、思い出の中にある想い人の姿は、一体どちらだったんだろうねえ？」

沸き上がる怒りに身が震えた。

この激情を抑える自信が全くない。いや、抑えようなど考えてもいない。

その心象はまるで決壊の瞬間を待つ洪水の濁流だ。次のひと押しが最後となって、煮え滾った感情は暴発して流れ出すだろう。

どの口がそんな戯れ言を吐くのか。

神野は当然分かっている。分かった上で煽り立てているのだ。

かつての甘粕との戦いと惨敗。そこで朽ち果てるはずだったBBは、執念の力で立ち上がった。

まさしくそれは彼女の意志が呼び起こした奇跡だろう。あの甘粕が絶賛するのも頷ける。

——だが、代償も存在していた。

「まったく我が主は本当に試練がお好きだ。君にとってはご愁傷様とあったところかな。

よりにもよって肝心要の部分をね。記憶、壊れたままなんだろう？ 思い出の中で過ごしていた”センパイ”。その相手の姿がうまく思い出す事ができない。

相手が”岸波白野”という事は分かるんだけど、確かな実像が浮かんでこないんだろう」

BBが抱く願いの骨子、その記憶の一部分が喪失している。

消滅を免れて復活を果たした意志の奇跡。その代償としては小さいとも言えるだろう。

それでも、BBにとって欠けた記憶はあまりに重要だった。代償なのだど納得する事など出来ない。絶対に取り戻さねばならないものだ。

彼女にとつての原点。思い出の中の”センパイ”の顔を思い出す事が出来ない

封印ではなく喪失。失ってしまった記憶、聖杯戦争とも関わりのない路傍の出来事は、この裏側にも落ちてはいない。

取り戻す手段は唯一つ、この世の総てを記憶するムーンセルに直接問うより他にはなかった。

そんなBBを神野は嗤っている。

その無様さ、歪みを愛おしそうに見つめ、悪意のままに貶める。

「陽と陰に分かれた岸波白野。同じ色の存在だけど、君にとつての”センパイ”はどちらか1人。

だけど君にはその区別がつかない。なので仕方がないから、とりあえず両方確保しておこうと。いやあ、なるほど。さすがはAI、実に合理的な判断だ。

もつとも判断さえ付けば、そうじゃなかった一方は切り捨てるべきゴミに落ちるわけだけど。君が嫌いな”センパイ以外の総て”に含まれる事になるんだから。

——ネタを引つ張るようだけどさあ、ちよつと不純が過ぎるんじゃない？

「うるさいッー！」

決壊した感情のままに、放たれた破壊光が神野を灼き尽くした。

「勝手な理屈であの人の事を語るな！ 人間の無意識が生んだ悪役でしかないくせに！」

曖昧なのはアンタの方よ。本当の実像がない、集合意識の中で揺れ動いてばかりの概念でしかない。永遠に人類を墮落させる事だけを役割して。

……あの人は、センパイはそんなじゃない。可能性がなんだっていうの。たとえば一度きりだって、あの人の、差し出してくれた手を覚えていれば、私には十分よ」

主役になれない端役、方向の定まらない一般人<sup>モ</sup>。

見過ごされる、見つけてもらえない事があるのだから承知の上だ。それでも、あの人の手の暖かさを覚えてる。無いものを有ると言うてくれた優しさを覚えてる。

それだけで良かったのだ。たとえば確かなものでなかったとしても、そんな可能性<sup>やさしさ</sup>がある事だけは覆せない事実なのだから。

今の自分<sup>サクラ</sup>に心があるのは、きっと”センチパイ”のおかげ。

あの人のような尊さこそ、ただのAIだった自分<sup>サクラ</sup>を変えてくれた何よりの輝きだ。

そう信じる祈りがある。悪魔の戯言にこの祈りは穢させないと、強く心を持つとうとする。

「——へえ？ そんな”センチパイ”だから好きになったと、君はそう言うんだね」

そんなBBが見たものは、カタチを戻した神野の表情。

まるで我が意を得たりとほくそ笑む、悪魔の嘲笑を目にしていた。「AI<sup>モノ</sup>でしかない君にそうとは知らず、いや知っていても大差はなかったかもしれない。対等な人間として手を差し伸べてくれたセンチパイ。」

元は君と同じ、いやもつと希薄だったNPCに過ぎなかった彼と彼女。それなのに自分の心を持って、その心で自分を見つけてくれた。たとえば不確実であろうとも、自分を救ってくれた可能性<sup>ひかり</sup>は確かにそこにある。

なるほど道理だ。その祈りは間違っていない。行為は出会いの切っ掛けに過ぎず、君の恋慕は”岸波白野”という個体へと向いている。それは真実であるようだ」

BBの言葉を肯定する神野。

だが彼の本性を知るBBにとって、それは安堵の材料とはなり得ない。

「力なんて無くても、誰より強い意志を秘めたセンチパイ。無価値な私に価値をくれたセンチパイ。そんな大切なあなたを守るため、私は月を侵す癌になる。」

でもさ、なーんて言っているわりには、実際のところ君って、大好きな”センパイ”を貶めるような真似ばかりやってるよね？

終わらない日常に閉じ込めたり、記憶を奪って大人しくって、それ完全に彼等の価値を全否定してるじゃん。なんか、言ってる事とやってる事が一致してないんだけど？

あの人の命を守るために。我が主の試練から保護するために。そのためなら手足もいだって構わないって？ そんなの一番認められない奴だって君は知っているはずだよな？

——もう一度訊くけど、君って本当に”岸波白野”が好きなの？」都合、二度目となる問い掛け。

それは先にも増して不吉であり、BBにとって度し難い不穏さだった。

「ただ生きてるだけでいいというのなら、そんなのはNPCだった頃と変わらないだろう。あの人を消去する月を認めないというけれど、無価値にするなら君だって同じじゃないか。

まるで装飾品だよねえ。意志の有る無しは関係ない。ただ存在して君にとつての愛を証明する証でさえあればいい。

大好きなセンパイを守りたい？ 残酷な運命を変えてみせる？  
くはは——嘘嘘。ほんとはそんな事どうでもいいくせに。

君が本当に守りたいのは彼等じゃない。彼等に恋ができた君の”心”そのものだろう？」

「——ツツツ!!!」  
その指摘に、BBの中で何かが切れた。

「ああだが、凶らずも目的が果たせるかもしれないよ。だって一番大切なものが”岸波白野”じゃないなら、空亡に捧げなくても済むじゃないか！

保証してあげよう。本来、こういつた神事には贄にも格を要求されるものなんだが、君だったら間違いない。だって空亡も、君のために用意された試練なんだから。

言ってるだろう、この裏側の聖杯戦争の主演は君だ。空亡も神野も、君のために用意された舞台装置。他のマスターなんて全部状況に

過ぎない。君が踊らないと舞台が始まらないんだよ、サクラア？」  
「さあ魅せておくれよ、君はどちらを選ぶ？　悪魔ボクの言葉を信じるのか、自分の想いを信じるのか。捧げるのはセンパイか、それとも君自身か。

空亡に嘘は通じない。正解は2つに1つだ。間違えたなら何もかもがオシマイだぜ？

ねえ、どっちだと思う？　どっちが君にとっての至宝なんだい？  
ねえねえねえねえ、サクラあああ？

きははははは、あはははははははははは———!!!!

「ああああああああ———!!!」

瞬間、膨れ上がった影が神野を呑み込んだ。

虚数で出来た影絵の腕が、その顔を、その四肢を、悪魔の総身を八つ裂きにして挽き潰す。

僅かな肉片さえも残すまいと、徹底的に。怒りのままにBBは屠殺を繰り返した。

BBの操る、黒い影。

虚数情報で編まれた無形。ある女神の権能より端を発する力。

それこそが彼女の武器だ。月の裏側、人類の悪性を集積した膨大な虚数の海、それをパワーソースとした彼女の力である。

だが、それは決して安易な道で手に入れた力ではない。

元は一介の健康管理AI。間桐桜の予備として用意された同型機バックアップ。

戦う手段など与えられていない。不可能を可能とするために、BBはそれを選んだ。

月の裏側にムーンセルの眼はない。造物主への反逆、発覚すれば消去デリートは避けられない。選択肢など最初からなかったのだ。

ルールを無視した違法改造。暴走する例外処理イレギュラーは、心が願ったもののために自己拡張を行った。

そしてそれは、裏側にある情報に自らを浸らせる事でもある。

ムーンセルが蓄積した悪性情報。それは即ち、人類が犯したあらゆる罪業と悪徳だ。

醜かった、穢らわしかった、恐ろしかった。よくもこんな真似が出



来るものだと、気持ち悪くて仕方がなかった。

ともすれば己自身が染められてしまいそうな悪性の渦の中で、それでもたった1つの祈りだけを寄り辺として、あの人を守るために。

そんな、たった1つの光でさえ、穢すのか。

黒く染まった”桜”の中の、最後に残った聖域さえも悪魔おまえは穢れていると言うのか。

「おまえ、おまえなんかがあああああ!!!」

憤怒に支配されてBBは虚数の影を振るい続ける。

頭わにされる醜悪さから逃れるように、悪魔の姿を形も残さず徹底的に消し去った。

「——だけど、サクラ。そんな君だからこそ、僕にはとても魅力的チャームインクなんだ」

それでも尚、悪魔は滅びること無く少女から離れない。

形を無くした神野は、空間そのものと一体となって、大気に直接己の言葉を響かせた。

「さつき、悪魔ボクが主の用意した試練だと言ったけれど、それだけが理由で君を求めるドライな男だとは誤解しないでくれよ。左に振り切つてただけの邪龍なんかと一緒にしないでほしい。

僕は君に魅了されているんだ。愛しているんだよ、サクラ。惚れた弱みとっていい、君に夢中なんだ。君に恋をした。跪かせていただきたい、漆黒の花よ。

ああだけど、勘違いはしないでほしい。愛しているといっても、直接この手で抱いてあげたいとか、そういう求愛とはちよつと違うんだ。間男のような真似はしないと誓うよ。

むしろ逆だ。君の恋路を応援している。その愛が成就するよう心から祈っているんだ」

「ツ!? 今さら、しらじらしい、ことをツ……!」

「嘘じゃないさ。恋に恋するなんて珍しくもない。君だってお年頃なんだから、憧れて大切に思う気持ちはよく分かる。否定はしないよ。

けど本当の魅力はそこじゃないんだ。僕が君に惹かれる最大の美点は、その愛のカタチ、表現の仕方なんだよ。

大好きなセンパイを苛めて、貶して、閉じ込めて、その価値とは真逆に引き摺り下ろしていく。地の底から、自分の元まで足を引くように。

ああ、サクラ、君は——」

「——まるで”悪魔”のようなじゃないかあああああ!!! 先達としては応援してあげたくなるのが人情つてもものだろおおお!!!」

穢らわしい、意地汚い、性質が悪い。

その心象に誇りや敬意など欠片もない。悪魔は他者が墮落する様を何より願っている。

自らと同じ場所まで堕ちてきてくれるようにと呪詛を込めて、悪徳を称える賛辞を謳い上げる。

神野明影。混沌、無貌、悪魔、様々な名を持った人類悪。

E X 級封印指定。その存在がもたらす危険性は空亡と同格だとムーンセルは判断している。

百鬼空亡が物理を破滅させる最凶ならば、神野明影は精神を汚染する最悪だ。

彼こそB B が触れてきた悪性情報の結晶。あらゆる罪と穢れを極限まで濃縮して顕れた廃神。

欲を知り、悪に染めては魔道に落ちる墮天奈落の概念。それらを象徴とする悪神である。

「正しく生まれて、正しく成長して、正しい道を歩いた奴らが最後には勝利する。正義万歳！ なあんてのは退屈だろう。そんな美辞麗句が罷り通るのは日向の奴らだけでいい。

僕たちの物語はそうじゃない。卑怯、不義理、退廃と邪道な方向でやっていこうじゃないか。だって僕たち、正義とは清廉とかそういうの大っ嫌いだものねえ？

光の当たる場所において華々しく理想がどうだと抜かしてる奴を見るとムカついてくるだろう。君の気持ちは分かっているよ、だっぴつと一緒だったものねえ？」

「ああ、僕の伴侶、我が比翼の片割れよ！ 君がその道を完遂した時、僕らの番いは完成する！ 僕は信じているよ。君ならばきつと、僕と



蠅声が織り成す不協和音も、今は聞こえない。

凍結した空間内での神野の声はぎこちなく、どこか弱々しいとさえ聞こえた。

「怖いねえ、さすがは”怪物”。呑まれてしまいそうだよ。それとも、もう腹の中なのかな？」

向けられる”視線”に対し、固まった声音で神野が揶揄の台詞を吐く。

神野を射抜いているものは、魔眼。

狂える邪龍を動とすれば、これは静。余分な破壊はなく、静寂の中で死を予期させる冷酷。

さながら視線は、獲物を見据える蛇睨みだ。絶対の捕食者に捉えられた被捕食者は、もはや抵抗の意志さえ抱けずに硬直する。

ただ諦めて、結末を受け入れる。この眼光が顕す冷酷は、生命にそうさせる畏怖がある。

英霊たちが集うこの月で、悪魔をして慄かせる魔性とは、神にも匹敵する存在に違いなかった。

「僕としても、ここで君たちと本気で事を構えるつもりはないんだ。

ただ、僕は悪魔だからねえ。悪意は呼吸のようなものだから、控えろと言われても正直困る。

まあ、君だからこそ熱が入ったのも事実だけどさ」

悪魔の戯れ言に返される答えはない。

代わりに視線の発する圧力が増大する。空間に拡がった神野に向ける、それは明確な殺意。

時の縛鎖に閉ざされた世界に走る無数の線。拡がっていく繊維状のそれは蛇の群れにも見えた。

神野が無限の蟲郡ならば、その存在は無限の蛇。実体の有る無しなど関係なしに、視線の主は必殺の意図を伝えていた。

「では最後に一つ、サクラ。僕にしては珍しく悪意でなく、純粋な忠告から言わせてもらおうけど。

君は一度、自分の心を見つめ直してみるべきだ。見失ったままでは後にも先にも行けはしない。

主が君に与えた試練の意味、どうか汲み取ってほしいものだね――

瞬間、神野明影を構成する総てが融解した。

形を持たない蟲郡にも等しい神野を、一瞬の内に。

一匹とて逃がす事なく、血潮の紅に染まった繊維を境界として世界の総てが呑み込まれた。

さながらそれは鮮血ブラットフォート神殿。奉られた命を吸い上げ、その鮮血を啜る祭壇に他ならない。

消え去った神野が復活してくる様子はない。

スキャンしても一切の反応がなく、存在の痕跡も確認できない。

あれで滅びたと楽観は出来ないが、退散したのは本当だと判断した。

それでも悪魔によって浮き彫りにされた心の闇は晴れない。

ああ、心とはなんて不合理なものなのだろう。かつてAIであった少女は思わずにいられない。

数理の上でのような絶対の正解答が存在しない。孕んだ矛盾を処理しないまま合理性の欠けた選択をし続ける。たとえそれが、悪性だと気付いていても。

己の欲望エゴたちもそう。目的は共通しているはずなのに、こうも噛み合わずに無意味な反目を行うのも、心が持つ不合理さ故のものだろう。

整然とせず見苦しい。なのに一度抱いてしまったら捨てられない。まるで呪いそのものだ。

処理できない矛盾による機能不全か、ふらりとBBの身体が揺れる。

平衡を失った身体は自らの力で支えられず、ゆっくりと後ろへ倒れていく。

そんなBBを、そっと支える手があった。

「……ヴァイオレット」

いつの間にかBBの背後に立っていたのは、一人の妙齢の女性。

膝元まで届く長い髪。スラリと伸びた細身にグラマラスなスタイ

ルも併せ持った絶世の美女。

しかしその美貌には何処か蠱惑的なものも含まれている。取り込まれて吸い採られてしまいそうな、危険ながらも惹き付けられる甘い魅力だ。

そんな女性が、BBの身を支えて立っている。

己の娘を見る保護者のような、慈愛に満ちた優しい眼で見ながら。

「申し訳ありません、BB。遅くなりました」

アルターエゴ・ヴァイオレット。

BBが従える、複数神霊と己の一部を混ぜたハイ・サーヴァント。

その中で彼女こそ最強の一角。そして唯一、BBが信頼を置ける相手でもあった。

「私は、止めないわ。たとえ望まれてなくたって、間違っているんだとしても」

そんな彼女が相手だからこそ、己の心が抱えた闇をBBは吐露していた。

「最初から分かっているのよ。このやり方が間違えている事なんて。

大体、センパイとの思い出だって私のものじゃないし。覚えていようがいまいが、結局独り相撲なのは変わらない。

我ながら矛盾だらけですね。嫌になりますよ、まるで人間みたいですよ」

BBとは、黒い桜、桜の影。

その正体は、間桐桜というAIに用意されたバックアップ

祈りの骨子となっている岸波白野との時間も、本来は彼女のものではない。

心という名の”異常”を抱えたAIが、自身を正常に戻るために取った措置。記録という命題から外れられないムーンセルの端末として、消去ではなく保存という処置を取った。

だがそこで発生した異常事態<sup>イレギュラー</sup>。心を受け取った影は自我に目覚め、独自の意志を持って行動を開始したのだ。

間違えているというのなら、それは最初からだ。

この思い出は影ではなく、桜のもの。この祈りはどこまでも見当違

いの方向を向いている。

そもそも誰も望んでいない。勝手に暴走した挙げ句に呆気ない敗北と、無様にも程がある。

「……でも、今更引き返したりなんかしない」

それでも、自分は選んだのだ。

ムーンセルを侵す。AIならばあり得ない選択を、自分の心で選べたのだ。

この裏側で、一度黒に染まってしまった以上は、二度と白には戻れない。引き返す道など始めから無いのだ。

ならば、黒になる前から変わらないこの心。それだけは譲らないし否定させない。

人の悪徳に塗れた少女は、己の欲望を口にした。

「私がセンパイを守るんだ。他の誰でもない、私が。あの人をこのままの運命にだなんて絶対にしない。そんなの、遠回しに見捨てているのと同じでしょう。」

これは私の感情よ。私だけの願いなの。壊れていたって、間違えていたって、諦める事なんて認めない。この不合理さが愛だっていうなら、私は喜んで受け入れるわ。

見ていなさい。大切なあの人のためなら、私は世界だって引き替えにしてみせる。それ以外なんていらないんだから」

——世界があの人を殺すのなら、私がある世界となろう。

——誰にも侵害されない箱庭で、掬い上げたあなたの運命を永遠に見守りましょう。

決意をここに、誓った祈りは少女の意志を強くする。

内面の歪みから目を背けて、誤ったままでも彼女は進むだろう。

それ以外の選択肢など無い。あらゆる犠牲を覚悟して少女は聖杯を目指すのだ。

「……ええ、BB。あなたがそう望むのなら、私がああなたの牙となりましょう」

そんなBBの事を、ヴァイオレットは肯定した。

「それが他者を呑み込み束縛する魔性の愛でも、あなたが選んだカタ

チなら私は尊重します。

黒くなったあなたは、決して汚れてなんていない。そんなあなたも”サクラ”が持つ一面です。

私が優先するのはあなたです。私があなたを守り、あなたが望むものを捕らえてみせましょう。

それだけが、私の成すべき全てです」

先の冷酷とは打って変わり、その声はBBに向けた慈愛に満ちている。

ヴァイオレットの忠義は本物だ。彼女はBBの事を思い、BBの敵に容赦のない牙を剥く。

それはまるで、本物の母子か姉妹のように。主に従う眷属は少女の事を慈しんでいた。

少女はBB。黒い桜、桜の影。

彼女は異常存在<sup>イレギュラー</sup>。聖杯戦争の流れを狂わせた者。

悪性に浸され矛盾を抱えたその心は間違っている。それでも決意の意志だけは何処までも強く。

月の魔王にも認められる思いの光。黒の少女は闇色の輝きを持つて進んでいた。



## 聖者たち

「う、あ、ああああ……」

か細い断末魔を残して、1人の生徒が消滅する。

無慈悲な搾取を終えて、メルトリリスは糧となったりソース分を確認して舌打ちした。

「所詮、使い捨てのNPCではこんなものか。経験値の足しにもならないわね」

アルターエゴが持つ特殊スキル、*idées*。

彼女が持つイデスの名は『メルトウイルス』。その効力は融解と吸収。

注入されたウイルスは対象を溶解し、経験値や魔力といった要素を抽出して吸収する。

無機物、有機物、サーヴァントに至るまでその毒は有効。エナジードレインの最上級であるオールドドレイン。吸収すればするほどに彼女は強くなる。

彼女は流体の篡奪者。侵して融かして蜜を啜る猛毒の繰り手である。

「マスターか、最高なのはサーヴァントね。今となってはとても貴重な栄養源だけれど。

足りない、ああ足りないわ。この程度では何もかもが不足してる。もつと養分を蓄えないと」

メルトリリスの吸収に制限はない。続けていけば限界まで強くなる。

だが今は、その栄養源が不足している。雑多な資源リソースなど彼女には何の糧にもなりはしない。

対象は、高純度の霊子体が望ましい。魔術師ウィザードか、より良いのはサーヴァントだ。

英霊を融かし、純粋な力に変えて吸収すれば、得られる恩恵は計り知れまい。だがそれは必然、敵対するマスターたちを打倒する事を意

味している。

今や勢力は固まり、単身での迂闊な真似は彼女とて命取りとなる。メルトリリスは自己を冷静に分析している。感情に任せた無謀な  
ど行わない。

「……そうね。やっぱりあなたを頂きましょうか、ありす」

だからこそ、標的とすべき獲物もすで見出していた。

「あなたの事は最初から気に入っていたわ。小さくて、無垢で、可愛らしくてまるで人形のように。」

ねえ、ナーサリータイムのお姫様。余分な人間<sup>モノ</sup>を排除して、あなたを完璧にしてあげるわ」

思い浮かべた少女の姿に、メルトリリスは微笑した。

愛と嗜虐、2つの感情が矛盾なく両立したその笑みは、彼女の本性を映し出している。

カツンと、脚の金属音を響かせて、メルトリリスは歩みを進める。

向かう先に迷いはない。脳裏に描いた想像と行動は直結している。

彼女は相手に愛着がある。だがその愛の性質を知れば、結末は残酷なものしかあり得なかった。

しかし彼女の行為を止める者はいない。

ここを支配するのはBBとその眷族たち。黒く染まった少女と本質的には同類だ。

真つ当な正義感など置き去りにしてきている。今更関係ない所の非道を咎めなどしない。

エゴの少女は欲望の化身。彼女たちが求めるのは己の欲望を満たせるものだけである。

「——どこに行くつもりですか、メルトリリス」

だからこそ、その歩みを止めさせた少女は、一際な異端に違いなかった。

外見の年齢は若い、というよりも幼い。

十を越えた頃だろうか。体躯は小柄だが、仕草に伴われる雅さが外見年齢を引き上げている。

それでも他のエゴの少女たちと比較して尚若い。幼すぎるその見

た目は、およそ強さという概念からは程遠い。

そして何よりの違いは、身に纏う気配の差異だろう。共通して存在していた妖気ともいうべき邪念、そうした悪質の類いが少女からは感じられない。

若草の和服衣装を纏う少女の気質は清純。虚飾のない善性のままで少女はそこに在った。

「あら、そこにいたの。カズラドロップ」

少女の名は、アルターエゴ・カズラドロップ。

B Bの眷族であるエゴの1人。その中でも異質な心の持ち主だった。

「どういうつもりかしら？ そんな風に道を塞がれては通れないわ」  
「訊いているのはこっちです。どこに行こうとしているんですか？」  
「もちろん、あの愛らしい双子の元によ。私、まだまだ栄養が足りないの。あの子たちもこういう時のために確保しておいたようなものなんだから、やる事は決まっていますよ」

メルトリリスの答えに、カズラドロップの表情が険しくなる。

「認めない、と言いたそうね。カズラ」

「……あの子たちはこの陣営で唯一のマスターとサーヴァントです。あなたがそんな気軽に扱っていい、簡単な存在じゃありません」

「希少である事と有効である事は違うわね。単に物珍しいだけなら戦場で温存する意義はないわ。」

あの子の能力は強力だけど穿っている。使い時は限られるし、少なくとも龍神サマや王様相手に役立つとは思えない。

ならいつそ能力だけ抽出してしまっても良いでしょう。わざわざ子供に持たせて遊ばせておくよりもそうやった方が有効に扱えるわ」  
「……だとしてもB Bの許可は仰ぐべきです」

「それこそ愚問ね。今さらB Bがそんな扱いひとつに頓着するわけないでしょうに。返しとしては苦しいわよ、カズラ。」

——と、あなたが理屈で攻めてくるから私も応じてみせたけど、要するにあなた個人があの子を護りたいというだけでしよう。お気に入りなのね、あの子たちが」

凶星を突かれた指摘に、カズラドロップは沈黙する。

言われた通り、語った理屈など説得のための方で、これは彼女個人の感情だった。

「でもね、気に入っているのは私も同じ。つまらない戦術論なんて本当はどうでもいいわ。」

あの子は美しい。まるで不思議の国のアリスよう。本当の”人形フィギュア”のように完成されて文句なんてつけられないわ。大好きなのよ。

だから、余分なものは取り除いて、ちゃんと私のモノにしてあげたいの」

「あの子の人間性こころが余計なものだと言うんですか」

「そうよ。決まってるでしょう」

一欠片の迷いもなく、メルトリリスは断言した。

「私は人形が好き。ひたすら愛しても文句を言わない、不満をこぼさない、変わらない。」

ああなんて素晴らしい、人間が生んだ文化の極みね。あの支配感、所有感、全ての快感が私を満たしてくれる。

理解がどうだのなんて必要ないわ。私が注いだ愛を受け取る美しい受け皿、それだけでいいの。

それが私の愛し方。文句なんて言わせないし許さない。この愛を貫く事が私の全てなんだもの」

彼女の愛は相手の理解を求めない。

交わる事で生まれる関係を最初から断っている。そんなものは害悪とすら言い切って。

それが異端である事も承知の上でだ。メルトリリスは愛する者を人だとは扱わない。

そんな狂った偏愛こそ己の真理だとして疑わず、孤高なるままにその在り方を貫いていた。

「さて、私はあなたの問いに答えたわ。今度はあなたの方の答えを聞きましようか。」

——カズラ、そうやって私の行く手に立ち塞がって、あなたは一体どうするつもり?」

メルトリリスの声に冷たく鋭利な殺意が宿る。

「理解してるわよね。私は、私の邪魔をする者を許さない。反論なんて認めないし受け入れない。私の愛の正しさは、私だけが知っていればいいんだから。」

そんな私の前に立って何をしようというのかしら。ねえ、カズラドロップ？」

ステップを踏んだ脚が鳴らす金属音。

メルトリリスの脚は抜き身の刃だ。振り抜けばあらゆる障害を斬り伏せる。

「……あなたの毒は、私には通じませんよ」

「それ以前の問題ね。戦闘能力皆無のあなたが、私の剣をどうやって防ぐつもりかしら。そしてどうやって反撃するのかしらね」

対し、カズラドロップには護身の手段がない。

彼女の能力は治癒。そのみを特化した結果、一切の戦闘力を持たない仕様となっている。

メルトリリスの攻撃を彼女は防げない。仮に防げたとしても撃退するための力がない。

カズラドロップには何も出来ない。それはどうしようもない結論だった。

「重ねて訊くわよ。無意味だと分かっているくせに、それでもあなたは私の前に立ち塞がると、そう言うのかしら？」

そう、如何に庇おうとしたところで無意味だ。

メルトリリスの性格もよく知っている。同族だからと容赦するよ  
うな質ではない。

どう足掻こうとも無駄だ。戦えない自分では何も出来ない、彼女  
自身がよく分かっている。

それでもカズラドロップはメルトリリスの前を退こうとはしな  
かった。

命を引き換えにしても抗えない。こうして身を呈しても押し通ら  
れて終わりだ。

つまりは本当に無意味である。納得などしていないし、心は齒がゆ



あの子を気に入っているのは本当だけど、あなたのお気に入りだと  
言うなら手を引くわ。それぐらいの誠意はあるのだから」

「……どうしてですか？ 私なんて何の力もないのに」

「力？ そんなものどうでもいいわ。どちらが強いかわかると、  
英雄がよくやる戯れ合いなんて欠片も興味がないもの。」

強さなんてね、私が私の愛を全うするために十分なだけあればいい  
のよ。邪魔な奴らを一方的に殲滅させるだけの強さがね。

尋常な決闘？ 相手に対する敬意？ 何それ馬鹿じゃないの。敵  
に与えるものなんて鞭だけよ。

力なんて何の価値もない。美しいのはその心。あなたの愛のカタ  
チなのよ、カズラ」

その言葉から一転して、メルトリリスの表情に侮蔑が映る。

まるで穢らわしいものに向けるように、自らの造物主の事を語りだ  
した。

「他の姉妹<sup>エド</sup>たちは駄目ね。不純だらけで目も当てられない。やっぱり  
元が腐っていると生まれるものも腐敗を持つのかしら。」

ホント、私もアレから生まれたというのには認め難い事実だわ。早く  
この立場から脱却して独り立ちしたいものね」

「それは叛意ですね。分かって言っているんですか？」  
「もちろん。大体、叛意があるのはお互い様でしょう。」

それにこの程度の事はなんでもないわ。今のBBに駒を選べる余  
裕はない。あの女はもう、月の女王でも何でもないのでから」

もはや隠そうともしていない。メルトリリスは自らの造物主たる  
BBを嫌悪している。

単なる打算や関係上のすれ違いではない。根本的な性質から相容  
れないと断じていた。

「あなただってあの女を認めてなどいないでしょうに。内も外も嘘で  
塗り固めて、無様で滑稽で不純だらけ。」

あんな様だから悪魔にも簡単に付け込まれる。自分の愛にまで虚  
飾を混ぜて、みつともないっいたらありやしない」

「唯一つ、自分が信じる真実の愛が見えているならどんな言葉にだっ

て揺らがないわ。

相手を人として見ていない？ 知ってるわよ最初から、言っているでしょうそうだって。

正しいか、間違っているかですって？ そんな議論をしてる事自体、愛に対する侮辱だわ」

「あなたは綺麗よ、カズラドロップ。あなたの慈愛に虚飾はない。

打算もなければ見返りも求めない。他者へと捧げるその献身は純粹だわ。

私は恋人ひとりに総てを注いで、あなたは他人みんなにひたすら尽くす。あなたは私を認めないでしょうけど、私こそあなたの最大の理解者なのよ」メルトリリスのエゴが象徴するものは『快樂』。

その愛のカタチは残忍で冷酷だが、同時に自身の心に素直で偽りが無い。

僅かな汚点さえ許さない潔癖性は見返りさえも不純物だと言い切っている。相手のために思う事が愛ならば、愛されたいと願う事自体が不実であると。

ただひたすらに好いた相手へと尽くす愛。それこそがメルトリリスにとっての真実だ。

だからメルトリリスは相手に理解を求めない。

その自我さえも不要と断じて、自身が与える快樂の中に蕩けてしまえばいいと思っている。

自分から注がれる悅樂の蜜、それだけを感じて永遠に幸せでいてほしい。

愛する人に総てを捧げる。あまりに歪なカタチだが、抱いた愛には何の虚飾も無かった。

そんな彼女だからこそ、カズラドロップを認めている。

愛に見返りを求めない献身を、正反対なその在り方を尊んでいるのだ。

「たといえいずれ袂を分かつと知っていてもね。その時が来るまで、あなたの事は尊重しておいてあげたいのよ」

そして同時に、やがて破局が訪れる間柄とも理解している。



唯一人に総てを捧げるメルトリリスの愛。最期には1人のために世界さえも呑み込むだろう。

カズラドロップの献身は、他者に分け隔てなく与える慈愛の精神だ。

「あらゆる他者に害をなすメルトリリスは、彼女にとって許容できない存在である。

両者がそのまま進めば、やがて激突するのは必定。

だからせめてそれまでは、その心を尊重しよう。自身が認めた姉妹に向ける、それがメルトリリスなりの誠意だった。

「……私は、そんな大袈裟なものじゃありません。これぐらいしかやれる事が思い付かないからこうしているだけです」

「その自己否定があなたの悪い癖ね。それが無ければもっと綺麗なのに」

メルトリリスが踵を返す。

手を引くと言ったのは本気であり、カズラドロップの先に居る者を狙うつもりは無い。

残酷であれど、その潔癖な信念の気高さには偽りは無い。自分の物差しでしか物事を計らない独善だが、彼女はまぎれもない善性の気質を有していた。

「頑張りなさい。あなたの方が道は険しそうだけど、その清さが壊れない事を祈っているわ」

そうとだけ言い残してメルトリリスは去っていく。

その言葉にカズラドロップは弱々しく俯くことしか出来なかった。

BBたちが拠点として使う月見原学園。

その教室はマスターたちがマイルームとして利用していた場所であり、裏側に落ちた後でもその構造密度は他に比べて高い。

外見上の扉一枚からは想像し難い強度。保護対象の守り、あるいは隔離場所としてここまでは有効な場所はないだろう。

カズラドロップが教室の扉を開くと、そこには別世界が広がっていた。

元の校舎の形骸などは欠片も残っていない。

さながらそこは童話の世界。溢れる木々と清流な川、近くには小屋があり遠くには城が見える。

そんな世界を塗装するのは無垢な純白。汚れのない白に染め上げられた幻想の風景だ。

不思議の国の中心で、ティーセットを広げているのは2人の少女。現実感のない世界と同様、住人である少女たちも非現実な可憐さと儂さを同居させている。

白と黒、同じ容姿と違う色彩。逆しまの双子は夢の中のお茶会に興じていた。

「いらっしやい、カズラ。ようこそ、ありすのお茶会へ」  
白い少女の名はありす。裏側に落ちたマスターの1人。

何処までも子供のままの精神で、無邪気な笑顔を投げかけて彼女は遊ぶ。

「遊び相手が来てくれた。とっても嬉しいわ、あたし」

「そうね、あたし。裏側に来たら遊んでくれる人がいなかったから、相手が見つかったのは嬉しい事ね」

黒い少女の名はアリス。裏側に落ちたサーヴァントの1人。

無垢な子供らしい、けれどありすには無い闇を垣間見せながら彼女は遊ぶ。

マスター サーヴァント  
魔術師と英霊。

双子とも思しき少女2人の間には主従の契約が結ばれている。

しかし戯れる2人の姿はそのような関係とは程遠い。互いに互いを呼び合って、まるで踊るように少女たちは喋りだす。

「夢の中のお兄ちゃん、お姉ちゃん。遊び相手になってくれたのは大人の人ばかりだったから。あたしと同じくらいの子が居てくれたのは嬉しいな。」

お菓子を食べる？ お茶も飲む？ カズラのお国のお菓子とお茶も、ちゃんと用意できるから」

そう言つてありすが手を振るえば、どこからともなく和菓子と緑茶が姿を現す。

術式の原理も何も無い。ありすが望んだものが現れるそれは、まるで空想の具現のようだ。

ここはありすのための不思議な世界。

少女の夢が織り成す幻想の箱庭。子供の夢がカタチになった空間である。

夢見る子供ありすが願い続ける限り、魔法の時間に終わりは来ない。

「そうね、あたしありす。でもお茶会の時間にはまだ早いわ。」

鏡の世界に入り込んだ女の子は、列車に乗って森を抜けて、色んな冒険をするものよ。

「ご苦労様とお茶を出すのはその先で。主役アリスになれない子はさよならね」

「そうね、あたしアリス。まずはお遊びの時間だわ。」

鬼ごっこもいいし隠れんぼもいいな。それともやっぱり新しいお遊びかしら。

きつととっても楽しいわ。カズラ、あなたもそう思うでしょ？」

ありすの心に悪意はない。

彼女はただ遊びたいだけ。望んでいるのはそれだけだ。

何処までも無邪気で無知な子供として、ありすは無垢な気持ちを投げかける。

その無邪気さは、ある種の毒だ。

害意のない存在、裏のない素直さを前に、人は自然と心の障壁を下げてしまう。

「どれだけ理性が警戒を抱いても、感情は応える事を容認してしまうのだ。」

善性の質を持った者なら尚更に。悪徳を貪る外道でもなければ撥ね除けるのは難しい。

「遊び、ですか。そうですね、みんなで遊べたなら、とても楽しいです」

よね」

そんなありすに対し、カズラドロップもまた笑顔を返す。

彼女の性質は善性。この儂い少女を無碍に扱うような悪性は持ち合わせない。

頷いて、遊んであげると応えたい。それはカズラドロップの本心だった。

「だけど、ありす。あなたが遊び相手を求めているのは、キャスターアリスのような友達となれる人を探しているからなんですか？」

しかしその本心をあえて無視して、カズラドロップは別の問いを訊き返した。

「え、違うよう？　ありすあたしのお友達はアリスあたしだけだもの。あたしがいればありすあたしは満足だもの」

重ねて言うが、ありすの心に悪意はない。

相手を害する意図など欠片もない。彼女はただ遊びたいだけなのだ。

だが子供の無邪気とは、時に大人よりも残酷である。

「夢で出会った遊び相手お人たちも、みんななくなっちゃった。夢の最期はよく覚えていないけど、幕切れはきつとみんな同じだわ。

ここなら思いつきり遊べるけど、そうするとみんな壊れちゃうから。くびとかおててが取れちやつて動かなくなっちゃうもの」

「動かなくなったら直せばいいわ。ママから貰った針と糸があるのでしよう。」

優しいありすあたし。遊び相手が動かなくなっても、ちやつちやと縫ってしまえば大丈夫よ。そして次に行きましょう」

「大丈夫なのかな、アリスあたし？」

「大丈夫よ、ありすあたし。だから力いっぱい遊べばいいわ」

無垢に語り合う内容は、しかし子供の所業で済ませられない凄惨さだった。

彼女たちの言う夢、それは表側で起きた聖杯戦争の記憶。

表側の聖杯戦争とは、主従同士の決闘だ。その決着はどちらかの死を以てしか決まらない。

その意志がどうであれ、聖杯戦争に参加して勝ち抜いたというのなら、彼女たちは既に人の命を手にかけているのだ。

ありすにその自覚はない。彼女にあるのは純粋に遊びたいと願う心だけ。

無害であるはずの少女は英霊という力を得て、遊びという名の闘いに興じている。

命の重さも罪の意識も感じないまま、総ては夢の世界の出来事だというように。

「だから、カズラ。あたしにはもうお友達はいらないの。だってあたしは夢の世界を運んできてくれた、最高のお友達なんだもの。」

白い部屋で動けなかったあたしに、ずっとずっと独りだったあたしに、こんな素敵な夢をプレゼントしてくれたんだもの。

お茶もお菓子もお友達も、全部あたしが出してくれるから。あたしにはあたしさえいれば、何もいらぬの」

孤独だった少女が喚んだ英霊とは、ナーサリーライム。

英国等で愛された絵本群の総称。あるいは童謡、子供に聞かせる子守唄。

子供たちの夢を受け止めていく内に一つ概念と化し、”子供たちの英雄”として英霊となった。

ありすは夢を見ている子供であり、アリスはそれに応えて具現化したサーヴァントである。

「でも遊んでくれる人たちがいるのは嬉しいわ。あたしと一緒にあたしと遊ぶと、とっても楽しいもの。」

ねえ、カズラ。あなたはあたしと一緒に遊んでくれる？」  
この少女は現実を見ていない。

会話しているようでもその気持ちは一方通行。玩具を相手に遊ぶようなものだ。

幸せな夢の世界だけを見て、その他の全てを徹底して排していた。けれど、果たしてそれは責められるべき事だろうか。

ありすにとって現実とは辛く、苦しく、孤独なものでしかなかった。救いもなければ未来もない。現実に見望むものなど何一つ持ち合わ

せない。

独りで泣いていた少女へと舞い降りた”希望”。傾倒する事に何の不思議があるだろう。

夢を見ていて何が悪い？

辛い現実など願ひ下げ、楽しい夢だけがあればいい。

他に選択など無かった。誰に自分を責められると、幼い眼差しは痛切に訴えていた。

「……いいえ、ありす。それは出来ないんです。私は、あなたの遊びに応えるわけにはいかない」

そんな眼差しを振り払って、カズラドロップは首を横に振った。

「……嫌。そんな意地悪を言うなんて、カズラは悪い子なの？」

「あたしを嫌う悪い子はいらないわ。だってあたしにはあたしがいるんだもの。」

あたしはあたしだけのあたし。あたしだけのあたしになれない子なんていらぬわ」

「カズラはいらない。あたしとあたしを邪魔する悪い子なんて、あたしの夢から消えちやえばいいんだ！」

瞬間、世界が変貌する。

優しい幻想の風景は一変して、穢れなき純白を侵して現れるのは悪夢。

元より童謡とは、多くの場合において残酷な側面が付随している。

それは子供に言って聞かせる教訓として。無知なままで危うきに近寄る事がないように。

覗けば吞まれる闇の中。好奇心は猫を殺すという諺の如く、少女の心を侵害した外敵に対して、夢の世界は牙を剥いた。

「違う、そうじゃないんです、ありす。私はあなたが嫌いなんじゃない。ありすには幸せになって欲しいから、あなたの力になりたいんです」

「ならどうして？ どうしてあたしに意地悪言うの？」

「……ありす。あなたのしている事が、とても悪い事だからです」

夢を見続ける少女へと、カズラドロップは本当の現実を告げた。

「あなたたちがしているそれは遊びではありません。」

誰かを苦しめる行為です。人を傷つけて命を奪おうとする行いで  
す。

夢で会った人たちも、単なる夢じゃない。表側で確かにあつた出来  
事なんです。

決して楽しんでいい遊びなんかじゃない。それはしてはいけない、  
恐ろしい事なんですよ」

「違うもん、ごっこ遊びだもん！　だってあたしが言つてたもの。だ  
から全部大丈夫なんだって」

「その通りよ、あたし。あんな意地悪っ子が言う事だもん。全部嘘に  
決まっているわ」

ありすの手を取つたのは黒いありす。

子供の夢を守るナーサリーライム。突き付けられる現実からも  
少女を守る。

「悪いのはその口ね。そんなお喋りな口先は縫い付けてしまいなさ  
い」

ありすがそう言った瞬間、カズラドロップの身に異変が起きた。

口元に走る痛み。声を上げそうになつたが、喋ろうとした口が開か  
ない。

何の脈絡もなく、カズラドロップの口が糸で縫い付けられていた。  
それだけで終わらない。

肌には赤い出血斑が浮かび出し、病魔の倦怠が身を包む。

身体に至る部分が腐り始め、体内から蛆が湧いて出てくる。

母が子を殺す。父がその子を食べる。大理石から鳥が飛び立ち、石  
臼を落として母を殺して父へと食わせる。

どれもこれもが唐突かつ荒唐無稽な現象で整合性などまるでない。  
しかしそれらの凶事は現実を侵す武器となつてカズラドロップへと  
襲い掛かる。

これこそ悪夢、無垢なる童謡に隠された闇の側面。

無邪気なままに罪業の何たるかも知らない心は、それ故に容赦のな

い残酷さを振りかざした。

「口の減らないハンブティは塀から落ちて壊れちやえ。あなたもそのまま落ちなさい」

無慈悲に告げる黒いアリス。キャスター

殺到する凶事は勢いを増してカズラドロップを包んでいく。

たとえ子供の夢であつても、ここではその夢こそが現実となる。

校舎内の教室を入れ換えて作り上げた空間。この場所は既にありますのための異界である。

身を苛む凶事は全てが本物。晒された少女は膝をつき、もはや抗う術など無いかと見える。

「——無駄です、アリス。キャスター 私に害毒は通じません」

凶事を中心より凜とした声が響く。

そこから淡く溢れ出た光が、降り掛かった全ての凶事を払い除けた。

「これが私のid—e—s、『インセクトイーター』。

データに起きたあらゆる不正を洗浄して無効化する。

抵抗されなければ、私はどんな不条理の毒だろうと癒せます」

その様は、まるで舞い散る花卉の如く見える。

少女を中心として展開される光で出来た桜吹雪。若草色で輝くそれに毒性の類いは感じない。

花卉が触れた凶事は祓われて、悪しき夢は元の正常なカタチへと戻っていく。

まさしく”世界”に起きた不正を癒すように、純白な幻想風景へと回帰していった。

桜吹雪は広がっていく。

カズラドロップを中心に、まるでみんなを包み込もうと抱擁の手を広げているかの如く。

舞い踊る花卉はやがて、2人の少女の元にまで降り注いだ。

「苦しかったんですよね。寂しかったんですよね。

ずっと孤独の中にいて、泣きたい心のままで焦がれ続けて。

そうしてようやく掴んだ”希望”です。遊びたいと思うのは当然



でしょう」

「だけど、あります。あなたがしている事は、かつてあなたがされた事と同じなんです。

不安な世界ルールに閉じ込めて、そのまま廻るように駆り立てる。それは苦痛を与えるということ。

あなたはその痛みを知っている。それがどんなに怖いものか、あなたはちゃんと理解できてるはずですよ」

正道であり、それでいて思いやりを持った指摘。

怒りながら殴りつけるのではなく、相手のためを思って叱る良母のように。

夢に閉じたその心を開かせようと、カズラドロップは言葉を紡いでいく。

「自分だけが一方的に相手の事を自由にできる。多分、あなたはそれを楽しんでいる。そういう快感があるのも仕方ない事だとは思いません。

でも思い出してください。かつてあなた自身がそうされていた時、それがどれだけ苦しくて怖い思いであったのかを。

それを知っているあなたなら、やってはいけない悪い事だと誰よりも実感できる。だからその分だけ、優しくなる事もできるはずですよ」

カズラドロップの言う事は正しい。

非の打ち所のない正論であり、相手のためを思っの言葉だということも間違いはない。

母のような彼女の言葉には慈愛が満ちている。まるで聖女のような優しい言葉だ。

「——甘い」

しかし、それで相手の心に届くのかと問えば、その限りでは決してないのだ。

「甘い、甘いわ。名前の通り飴玉ドロップのように甘いよね」

底冷えする冷たい憎悪を込めて、口を挟んだのはアリスキャスターだった。

カズラドロップの告げた慈愛の正論。それこそを不倶戴天の敵とばかりに睨み憎んでいる。

「泣き虫カズラ。弱虫カズラ。まるで飴細工のような綺麗事しか言えないの。」

そんなもの、吹けば倒れてバラバラよ。12時の魔法よりも儂いものだわ。

怖い怖いあなたの姉妹、悪いメルトがその気なら、あなたはとつくに魔女の鍋の具材でしょう」

先のメルトリリスとのやり取りまで、既にアリスは承知している。キャスター見た目がありすと同じでも、彼女は英霊だ。サーヴァントありすを守護する盾として、そして害なす敵を斬り払う剣として存在している。

自身の主に迫った脅威を見過ごしているはずがない。展開されているこの世界も、単なる遊び場ではなく主を守るための砦という意図もあるのだ。

その上で、アリスはカズラドロップに感謝など抱いていない。脅威を退けたのは彼女だが、そんなものに意味はないと断じている。

「あれは魔女の単なる気まぐれ。気が変わればあなたは餌食になるしかない。」

いつまでも続くと思ってるの？ だとしたら子供の夢よりも能天気だわ。

ナーサリーライム 童謡を紐解いてみなさいな。中には怖い話でいっぱいよ」

「現実なんてそんなもの。いろんな所に怖い魔物が蔓延ってる。」

黒い兵隊も白い医者さんも、みんなみんな怖い人ばかり。飴細工の優しさなんて通らない。

あたしもそう。怖い人たちばかりに囲まれて、何かが届いた事なんて一度もなかった」

「あたしに優しくしなかった世界に、どうしてあたしが優しくしないといけないの？」

ありすにとって現実とは苦痛と孤独。

良い思い出などは遥かな過去に擦り切れて、残っているのは身を刻

まれた痛みと恐怖、そして一人きりの寂しさだけ。

もはや現実を求めるものなどない。まして今のありすには夢だけが全てであるのだから。

ありすキャスターはありすから夢を奪う者を許さない。

たどえいずれ覚めてしまうものだとしても、ありすの夢を最期の瞬間まで守り続ける。

「夢とは所詮、いつかは覚めてしまうものだから、現実を見なくちゃいけない。」

お利口ね、カズラ。パパもママもきつとあなたと同じ事を言うわ。

でもパパもママももういない。ありすを叱ってくれる人はもう何処にもいないの。

おとぎ話は終わらない。ありすの夢が続く限り、何度だって回り続ける」

「ここはありすのための物語。邪魔する人は『この子』のオモチャになつてしまいなさい」

ありすキャスターの喚び声に呼応して、世界を震えさせながら一匹の”規格外”が現れた。

その姿は赤色の巨人だった。

人の身の丈を超えた巨大なヒトガタ。形態のみを似せた異形。

そして何より特出すべきは、その暴威。圧倒的なる力の気迫こそ存在の証左。

正しくそれは怪物だった。相互の理解を排し、純然たる暴力の象徴として君臨している。

怪物の名は、ジャバウオック。

詩に語られる魔物。恐怖すべき怪物の概念として駆動す悪夢である。

「まあ大変、ジャバウオックの目が覚めた。パクリと食べられてオシマイね。」

どう？ あなたは何も出来ないわ。カズラ、これで一体どうするの？」

どんな正論も、力の前では無意味。怪物相手には何を説こうとも届

かない。

そんな現実を告げる無情の巨人が、カズラドロップの前に立ちほだかった。

「綺麗で、正しくて、非力なカズラ。あなたに何が救えるというの？」

冷淡な声が告げる。

キャスター  
アリスは他人に何も期待していない。

ありすを救えるのは己コメだけだと断じている。

——ありすという少女は、すでに存在しない。

時代は第二次大戦末期のイギリス。幼い少女の命運はそこで燃え尽きている。

電子の海を彷徨うネットゴースト。少女の心の残滓こそありすの正体。

精神体であるが故の膨大な魔力量も、魂が燃え尽きるまでの話。結末は何処までも救いが無い。

ならば現実など拒絶しよう。少女の見る夢の中で永劫の回帰を続けていけば良い。

クイーンズ・ゲラスゲーム  
永久機関・少女帝国。

ありすの夢に回される歯車、ありすの終わりを遠ざける宝具。

それは時間の巻き戻し。現実を拒み続ける限り、ありすに終わりは訪れない。

人を傷つけてはいけない？ なるほど確かにそうだろう。

夢に逃避するのではなく現実を見ろ？ それは実に正しい事だ。

だがそこにありすにとっての救いはない。ならばそんな正論は不要である。

誰を傷つけようと、たとえ逃避であろうとも、ありすの夢を回し続けるより他の道はない。

故に、カズラドロップの言葉は届かない。

彼女の言葉は正しい。だがその正しさはありすを救わない。

優しさとはどうしようもなく非力である。泡沫の夢には如何なる弱さも害毒なのだ。

ほんの僅かな転落が崩壊に繋がる。それほどにありすの本性とは

脆いものだから。

そんな優しさをもち込む者を、アリスは憎む。

正しさ、優しさ、そうした人の善性とは、暴力という悪性の前に呆気なく壊される。

ああ、なんて無情。正義が勝つなど所詮は幻想、現実とは何処までも強い力こそが罷り通る。

その醜さが現実だとアリスは理解しているから、正しさこそ忌むべきとして遠ざけるのだ。

正論は届かない。正しさで少女の運命は救えない。

非力な善性しか持ち得ないカズラドロップではここまできが限界だと、童謡の英霊は残酷な現実を告げていた。

「——はい。あなたの言う通りですね」

自らに向けられたその拒絶を、カズラドロップはまず受け入れた。

在るべき正論では届かない。自分の言葉は響かない。

アリスはありすの夢そのものだ。彼女がいる限りありすは幻想に囚われ続ける。

現実を見ず、行動の意味も知らないまま無邪気に遊び続けるだろう。それを正しい事だと言うことはできない。

だが、その全てが間違いとも、カズラドロップには言い切れないのだ。

「アリス。あなたはそうやって、今までありすの事を守ってきたんですね。」

何もかもが夢の出来事だと信じさせて、ありすが”遊び”を怖がる事のないように。

全てはあなたという世界の強度を下げないため。それがどれだけ脆いのか、あなたは誰よりも理解していたから」

ありすは弱い。

如何に莫大な魔力を汲み取る特性を持つとも、その生命力は他のマスターの誰よりも低い。

夢が消えれば、終わりは呆気なくやってくる。理不尽にも見える童謡の力は、その実どこまでも虚飾の強さでしかない。

聖杯戦争とは勝者だけが生き残る闘争劇。

ありすにその自覚がなくとも、キャスターありすはそれを理解していた。

生き延びるには勝つしかない。勝つためには夢を回し続けるより他にない。

全てはありすを守るために。現実逃避と分かっている、それ以外の道はないのだ。

「あなたにとつて、ありすは誰よりも守りたいと願う相手。その強い思いがあるから、あなたはどんな手段も躊躇わない。

ただ優しさに訴えたところで、あなたを止める事は出来ないでしょうね」

それを間違っているとは言いつれない。

大切な誰かを守りたい。そう願う強い祈りが、世界にさえ反逆するほどの熱源になる事をカズラドロップはよく知っている。

きっとキャスターありすもそれは同じ。

何より優先するべきマスターがいるから、サーヴァントたる彼女は躊躇わない。

もはや善悪で止まる思いではない。たとえ世界を敵に回そうとも、彼女はありすを守ろうとするのだろう。

「……それで？　今さら何？　偉そうにお説教しておいて、やっぱり怖くなったの？」

対し、キャスターありすが見せるのは失望と殺意。

彼女は理解を求めていない。自分たちの心に踏み込んでくる相手を尽く拒絶している。

ましてこれしきで退き下がるような半端な思いなら、そんな相手には嫌悪しか湧かないだろう。

キャスターありすは童謡の具現。その本質は固有結界に等しい。

彼女が世界を生み出しているのではなく、この世界こそが彼女なのだ。少女の心を写し取って顕される夢の具現に他ならない。

彼女が示す殺意とは、そのまま世界の変容に直結する。悪辣で残酷な悪夢が具象化して憎むべき相手を取り囲んだ。

正気を犯されそうな光景に包囲されて、それでも怯まずにカズラドロップは言葉を紡いだ。

「いいえ。自分の言葉を翻すつもりはありません。それでも私は、今のままのあなたたちは間違っていると信じています」

周囲の悪夢が獰猛さを増す。

もはや予断は許されない。次にアリスの琴線キャスターに触れたなら、悪夢は容赦なく哀れな獲物を喰い散らすだろう。

相対するカズラドロップの表情に怯えの色はない。

おぞましい光景からも目を逸らさずに、真つ向からその先にいる少女たちを見据えている。

それは何と正しい姿だろう。幼くか弱いその身が勇気を手に立つ姿は、善性の尊さに相違ない。

しかしよく見れば気付けるのだ。その小さな身体が震えている事に。

カズラドロップは戦闘力を持たないアルターエゴだ。周囲の悪夢に抗う術はない。

彼女たちはBBから生み出されて、既に独自の心を持った存在だ。一個の存在として、殺されると分かって恐怖を感じないはずがない。

死ぬ事は怖い。目の前の怪物が恐ろしい。当たり前前の感情がそこにはあった。

こんなのは単なる強がりだ。

精一杯に見栄を張って自分を誤魔化しているだけに過ぎない。

生まれた心は逃げ出したいと叫んでる。何処までも真つ当な精神は当然の反応しか出来ない。

すぐにも折れそうな勇気を奮い立たせて、何とか対抗しようと虚勢を張っているだけなのだ。

「……私には、これしか出来ないから」

カズラドロップより若草色の光が溢れる。

光によつて形取られた桜吹雪が拡がり、やがて世界を包むかのよう  
に舞い散った。

「あります。どうかあなたの心に触れさせてください」

若草の花弁がありますへと降り注ぐ。

即座にアリスが警戒を露わにするが、そこに相手を傷つけるような  
意図は一切なかった。

カズラドロップは治癒スキルに特化した仕様の個体だ。

戦闘能力を持たない反面、ウイルススチエックなどの性能は郡を抜い  
ている。

あらゆる状態異常を発見して洗淨する回復系統のエキスパート。  
それは肉体面だけでなく精神面にまで及んでいる。

孤独の中で自閉した少女の心にも、その光は惜しみなく降り注い  
だ。

「何をするかと思えば、そんなもの？」

だが警戒心に代わり、アリスが見せたのはより明確な怒りだった。

「精神治療？ 要は無かった事にしようって事!? ふざけないで、認  
めないわそんなこと。」

忘れればそれで良いの？ 無かった事になればみんなが幸せにな  
れるから？ あたしのあの過去は、確かにあった事なのに。

狭い部屋に閉じ込めて、痛くて怖い思いをたくさんあたしにさせた  
のに、全てを無くして笑顔になれば良いとあなたは言うの!?

あたしは絶対に認めない。そこまであたしを弄ぶのなら、そんな奴  
等は全部消えてしまえばいいんだわ!」

少女の夢の敵意に応じて、詩の怪物が動き出す。

怪物とは脅威であり恐怖である。その悪夢が示すべき役割は明白  
で容赦がない。

即ち抗えない暴力。カズラドロップの治癒の力で対抗する事は不  
可能だ。

「……いいえ、違います。無かった事にしようとは考えていません」  
だが迫り来る怪物の暴威も、カズラドロップには見えていなかった



た。

意図して無視しているわけではない。あの赤い巨人を前にしてそんな真似は不可能である。

これはとても単純な話。今のカズラドロップには、それすら目に入らないほど余裕がないのだ。

「だって、こんな苦しい思いを忘れてしまえなんて——私にはとても言えないから」

空襲による爆撃で、火に焼かれる痛みがあった。

実験体として延命され、身を刻まれる苦悶があった。

ただ道具として浪費させられ、最期には打ち棄てられた絶望があった。

それらは全て実在したありすの過去<sup>せいぜん</sup>。

自らの光を媒介にして、カズラドロップはありすの受けた苦痛の総てを”共感”していた。

「あぐう、かは、ううううう……ッ!!」

受け取る情報<sup>いたみ</sup>に膝をついた。

実際に身を傷つけているわけではない。それでも感覚が覚えるのは紛れもなく本物の苦痛だ。

ありすの生涯に色濃く残るそれらの記憶を、カズラドロップは背負おうとしていた。

「あ……これ、ありすの……？」

対し、ありすが受けているのは真逆の感覚だった。

呼び起こされていく苦痛と恐怖、そして孤独の記憶。

ありすにとつては禁忌にも等しいその過去は、決して思い出さないうようにと心の奥底に仕舞いこんでいたはずのもの。

しかし呼び起こされたそれらの記憶を直視しても、ありすは苦しさを感じていないのだ。

むしろ逆に、不思議と安らいだ気持ちさえ味わいながら、仕舞いこんだままに沈黙した暗い感情が溶きほぐされるのを感じていた。

それは忘却ではない。記憶や感情を改竄するような処置とは異なる。

強引なものではなく、あたかも患部にそつと触れて痛みそのものを和らげているような。

過去という疵を慈愛という薬で包み込んで、心的外傷トラウマを癒してい

く。そこに苦痛の類いは一切ない。それと引き換えにした安らぎだけをありすは感じている。

だからこそ、カズラドロップが受けている苦しみがその代償である事は嫌でも察せられた。

「どうして……？ そんなに苦しんでまで、どうしてカズラがそこまでするの？」

ありすから見えるのは、ひたすらに他人へと尽くす献身の姿。

カズラドロップの慈愛に虚飾はなく、その善性は何処までも澄んだ性質を保っている。

しかし、それで理解が得られるかと問えば、それは別の話だ。

如何に聖人のような善行とて、行き過ぎたものは不安を覚えさせる。

理解し難い聖人の行いとは、見方を変えれば狂人のそれと同じくもなり得る。

端的に言ってしまうえば気持ちが悪い。遠くから眺めるのならともかく、近しい場所で見せられ続ければ奇異の念も沸いてくる。

ありすは自分の過去せいぜんを知っている。それがどんなに苦しいものか、身を以て理解している。

生半な意志で出来る事ではない。そこまでされる理由がどうしても見えてこなかった。

「……欠陥だと言われました」

未だにありすの不信は拭い切れない。

本当の意味での信頼を得なければ、閉じた少女の心が開く事はない。

ならばこそ明かす本心だが、カズラドロップ自身はそれを清い思いだと考えてはいなかった。

「異常要因の解析と除去。その能力を行使する上での過程で、本来共

感なんて必要ないんです。

払う必要のないデメリツトを負ってる。私のid|eesを、BBは欠陥品だと言いました。

その通りだと思います。能力の元になった神霊に問題はないのですから、これは純粹に私が得た“心”<sup>エゴ</sup>のカタチの問題なんです」

アルターエゴは神霊の因子とBBの一部を混合して生まれた存在。BBの分身である彼女たちだが、独り歩きを始めたその心は既に独立したものとなっている。

発現するid|eesも定まったものではない。投影された心の有り様に大きな影響を受けるのだ。

女神から生まれ、既存の女神とは異なるカタチ。

それは生命の可能性、不完全であるが故に足りないものを補おうとする意志がある。

魂という容れ物に独自の自意識を宿した、確かな一個の存在なのだ。

「——間違ったものを正したい。それが私のエゴ。不正を見つけて洗淨する力。

BBの原型である健康管理AIとしての残滓と、女神の因子で作られたのが私です」

元はマスターの心体維持のための上級AIである。

その要素を抽出し、神霊と混合させた性能は原型を遙かに上回る。かつてのAIだった頃と比べ、そこに劣化した箇所は存在しない。

形成された人格もまた、正常を保つという存在意義から端を発して出来たものだ。

「でも分からないんです。その正しさが何なのか、私には自信が持てない」

そして生まれた心こそが、AIには無かった不合理さを与えていた。

「ありすのしている事は間違いだと思います。他人を傷つける事を遊びと偽り続けるのが正しいだなんて決して言えないはずですよ。

けど、アリスが言うような事だつて分かるんです。こんな苦しい思

いを正しさの一言で忘れてしまえだなんて、それで良いなんてとても思えない。

だってそれじゃあ、ありす1人だけが苦しむ事になってしまうから」

揺れ動く心は、目覚めた自意識が生み出した慈愛の精神だ。

その優しさが枷となっている。AIのように確かな基準で判断を下せない。

だって、人の心とは複雑怪奇が過ぎるから。

正しいからと、間違っているからと、二者択一で割り切れるものではない。

その行いが間違っていたとしても、そこに込められた事情や思いは真実なのだ。

純粋な正義が無いように、純粋な悪もまた無い。

人の持つ心とは単純ではないのだ。AIの合理性だけでその判断はつけられない。

「だからせめて理解したいんです。あなたの痛みを、私自身でも実感したい。そうでないと何が正しいのかなんて、とても断言できないから。」

ええ、要するに自信がないんですよ。私の言葉だけで届かせる自信が持てないから、きつとありすの事も知った風になりたいんです」カズラドロップには否定が出来ない。

優しすぎるその心が、拒絶よりも先に相手の心情を思い鑑みてしまう。聖女の如き在り方は、他者を傷つける事を受け入れられない。

否定よりも理解を求めて、治癒の過程で得た相手の苦痛データを我が身でも再現してしまうのだ。

「私は生まれたばかりで、きつとあなたの辛さも分からない。だからこうして自分で感じる事で、ようやくあなたと”対等”になれる」

人を正すという事は、同時にその人の信念を否定する事でもある。半端な誤ちなら言葉だけでも通じるだろう。だがそれが強固に根ざした執念であれば、生半な思いでは届かない。

正誤の問題ではない。所詮は対岸の火事というように、当事者に

なっていない者の言葉とは結局のところ軽いのだ。

積年で重なった妄執を、そんなもので解きほぐす事など出来はしない。実感を経ていない主張に重みは決して宿らないから。

だからこそその”共感”なのだ。

苦しみも痛みも共有して、同じ思いを持った対等の視線で向き合うこと。

それこそカズラドロップの心が望んだ慈愛の有り様だった。

「辛い記憶や苦しかった過去の事、痛い思いをして出来た心の疵は、きつと身体だけを癒しても治らない。

だって思い出は残るんだから。もし後で苦痛から解放されても、心に残った疵はその人の事を苛み続ける。

それが時間だけで癒せないほど深いものなら、その疵がやがて他の誰かを傷つける悪意になってしまいかもしれない」

自らが苦痛に喘ぐその横で、誰かが笑っていたとする。

その幸せに対して暗い感情を抱かずにいられる事はとても難しい。何故己はああなれないのだと、妬まずにはいられないだろう。

その妬みがやがて憎しみへと変われば、そこには恐らく際限がない。暗い感情に突き動かされて優しい世界を呪う”悪”と成り果てるだろう。

生来の悪性など稀。人の悪意とは環境から生まれるもの。

虐げられた記憶が、味わった不幸が、他者の幸福を祝福する事を許さない。

心に受けた疵に苛まれ続ける限り、悪意は際限なく沸き続ける。

「だったら私は、そんな心の痛みこそ癒してあげたい。知っている苦しみの分だけ、憎しみではなく優しさを持てるように。

綺麗事ですよ？ ええ、だから私はそんな綺麗事を追いたいんです。だってそんなに綺麗な理想なら、その正しさだけは誰にも否定できなはずだから。

——”あの人”みたいに、それを簡単に諦めたくないんです」

綺麗事とは、得難い理想であるからこそその綺麗事だ。

その正しさは否定しようがなく、だからこそ現すのがとても難し

い。

大抵は耐えられない。より安易な道は幾らでもあるから、誰もがそちらを選んでしまう。

カズラドロップもそれは分かっている。それでも承知の上で、容易く諦めるのではなく理想を求める道を選択したのだ。

アルターエゴとは、BBを発端とした彼女の分身。

その自意識は既に別のものだが、BB自身の要因でもある”1つの感情”だけは共通している。

彼女たちも”サクラ”である以上、カタチは違えど”彼／彼女”に執着を持つのは変わらない。

カズラドロップにとってのそれは『憧れ』。

”あの人”のように、当たり前のように誰かへと手を差し伸べられる自分になりたいから、そう願ったからこそ今の彼女がある。

彼女の慈愛と献身にも、源泉には憧れる”あの人”の姿があった。

「——どうか健やかに、あなたの世界が少しでも優しくあれますように」

若草色の光が舞う。

拡がっていくその光からは、決して害意を感じない。

あるのは包むような暖かさ。母の手に抱擁される安らぎがそこにはあった。

あらゆる悪夢も拒絶も撥ね除けて、光はありすを包み込んだ。

あたりす  
あたしは、ずっと暗いところにいました。

覚えているのは真っ白な病院。

黒い兵隊がやってきて、お空は真っ赤に、お家は真っ黒。

毎日なにも変わらない。ママもパパもお友達も、誰もいない。  
あたしは動く事が出来なくて、やってくる白い人たちも助けてはく  
れなかった。

痛かった。苦しかった。怖かった。

あたしにはあの人たちが何をしていたのか、よく分からない。

それでも痛いのは本当で、我慢できないくらい苦しくて、怖いん  
だってちやんと言った。

でも誰も聞いてくれなくて、苦しい事を止めてくれなくて、そつと  
眠らせてもくれなかった。

それが多分、生きてた頃のあたしの記憶。

いつ終わったのかは覚えていないし、思い出そうともしていない。  
だって思い出すのは苦しいから。あんな痛い思いはもう嫌だった  
から。

ここは不思議な夢の世界。あたしそれだけでもう満足。だから現  
実なんてもういらぬ。

それに、きつとあたしは、もう死んでるから。

あたしの帰る場所は何処にもない。この夢が覚めてしまったら、  
きつとあたしは消えちやう。

だからいいんだ、このままで。独りなのは寂しいけど、何も望まな  
ければきつと痛い思いをしなくて済むもの。

今のあたしにはアリスがいる。それでもう満足で、これ以上を望ん  
だらバチが当たつちやう。

あたしはここでいいんだ。この夢の世界でずっと、ずっと遊んでい  
られればそれでいい。

——そう、思っていたのに。

「あります。やっぱりあなたは強い子ですね」

カズラドロップ。暗かったあたしの中を光で照らした子。

あたしと同じくらいなのに、飴玉みたいに甘くて、お星さまみたい  
に綺麗な子。

とんでもないお節介。本当に、嫌になるくらい——優しくて、すご  
い子だった。

あたしはあんなに怖がってたのに、カズラはあつさり踏み越えて、ここまで来ちゃった。

夢も、現実も越えて、あたしの前に。

真剣に、真つ直ぐに、あたしの事を見てくれた。

「いいえ、ありす。強いのはあなたの方ですよ。」

だってあなたは現実を遠ざけても、現実を憎む事だけはしなかった。

あんな辛い思いの後でも、あなたは優しいあなたのままだった。それはきつと、とても得難くて尊い事です」

不思議なの。カズラの光に包まれていると、怖かったものが消えちゃった。

ずっと目を背けて、暗いところにあつた現実の事が、今ならはつきり見える。

痛かったのは本当のこと。

我慢できないくらい苦しくて。

怖いと言つても誰も聞いてくれなかった。

そんな暗い思い出がカズラの光で照らし出されて、その先には——  
ああ。

料理が上手で、大好きだったママ。

厳しかったけど、優しくもあつたパパ。

他にも、色んな知り合い、お友達みんな。

ご本を読んだり、遊んだり、将来どんな大人になろうと話し合ったり。

それは夢の出来事じゃない、紛れもなく現実での光景だった。

「そっか……あたしにもあつたんだ。こういうのが」

現実 is 辛くて、暗い思い出ばかりのもの。

それは嘘じゃなくて、だからずっと目を背けて忘れてた。けど、それだけじゃなかった。

痛さも苦しさも本当だけど、それしか無いわけじゃなかった。

あの病院で、あたしは人間じゃなかったけど、その前には人間だったあたしが確かにいたんだ。



きつと、それは当たり前の事なのに。

辛い現実ばかりじゃない。優しい思い出もそこにはあった。

今ならそれが素直に思える。あの頃のあたしはきつと、幸せな未来を信じてた。

「ありすはとても我慢強い子なんですね。悪い事が何なのか、あなたはちゃんと分かっていた。

苦痛の中でもそれに耐えて、その心を保っていた。本当に、すごい事だと思いますよ」

たとえそれが、決して取り戻せないモノだと理解していても。

とても不思議な気分だった。寂しいとか辛いとか、そういう感じがしなかった。

ただすごく穏やかに、優しい気持ちで昔の事を思い出せる。

あたしの現実にも幸福な時間があった。それは救いなんだって  
はつきりと思えるから。

「けど耐えてばかりだと、心は悲鳴を上げてしまう。何処かで吐き出さないと毒は取れません。

ありす。あなたに欠けていたのは、きつとそれをするための何か  
なんですよ」

素直な気持ちの中で、改めて思ったのは過去の事。

痛くて苦しくて怖くて、思い出すのも嫌だった暗い思い出。

もう怖いとは思っていない。ただ今は、とても悲しいと感じてた。  
「……あの病院で、あたしはお人形だったの」

辛い事は本当だから、怖さを無くして向き合えば、残ったのは悲し  
さ。

あそこであたしは人間じゃなかった。誰もそんな風に扱ってくれ  
なかった。

本当に辛かったのは、その孤独。誰もあたしを見てくれなかった寂  
しきだった。

「あたしは転んで痛くても、ちゃんと我慢できるよ。お行儀よくしな  
いと駄目だから、わんわん泣いたりはしないの。」

だけど、我慢できないくらい痛かったから、あたしは泣いたよ。痛

いから止めてって、ちやんと言ったもの。

なのに誰も聞いてくれなかった。いくら泣いても止めてくれなかったから、いつか泣く事にも疲れちゃった。

そうなら、ちよつとだけ楽になったよ。泣いたり苦しんだりを止めたら、そんなに辛いとは思わなくなったから」

一緒に、楽しい事とか明るい事も分からなくなったけど。

よくない事だったと思う。けどあたしには、他にどうしようもなかった。

対等に見てくれる人なんていない。

お人形が泣いたって、誰も見向きもしてくれない。

どんなにあたしが痛いと訴えても、助けてくれる人なんていなかったから。

「いいんですよ、それで。本当に痛かったのなら泣いていいんです。

痛みは耐えるものじゃなくて訴えるものだから。それが届かない事はとても辛い。

あなたが諦めてしまったのも仕方のない事だと思います」

でも、カズラは違った。

この子はあたしを見てくれる。

夢の中に逃げてばかりだったあたしの事を見つけてくれた。

苦しさも悲しさも分かってくれて、あたしに手を差し伸べてくれたんだ。

「あります。あなたの声を、今度はちやんと受け止めます。

——だからもう、泣いたっていいんですよ？」

優しく紡がれた言葉は、きつとずつと求めていたもので。

あたしが我慢しなくちゃいけない必要は、もうなかった。

「う、うわあああああん!!! ああああああんツツ!!!」

泣いた。お行儀悪く、お腹いっぱいから声を上げて。

心の中のモヤモヤを全部吐き出すように、いっぱい泣き叫んだ。

——勇気を出せて、そんなことを誰かが言ってくれた。

色んな人たちが集まって、楽しそうな所だと思ってくれた。

あたしと似てる、お兄ちゃん？ お姉ちゃん？ その人が行くのを見て、ずつと独りだったあたしもちよつとだけ勇気を出したんだ。そこであたしはあたしと出会った。あたしが一緒にいてくれたから、もうそれだけでいいやって思ったの。

顔を出したのは怖いって気持ち。夢の中でたくさんの方が幸せが貰えたから、現実に戻ったらきつとそれを取り上げられちゃう。

全ては夢の出来事で、ごっこ遊び。そうやって現実を閉ざしたのは、誰でもないあたし自身。

それじゃ駄目だって、カズラは言った。きつとそれは正しくて、あたしには目が痛くなるくらい眩しかった。

あたしは現実を見てなかったから、それを認める事が怖かった。

——でも、もう一度。今度こそちゃんと勇気を出してみたいって思った。

暗かった場所に、光を入れてくれたから。心に溜まった嫌なものを吐き出しながら、あたしはそう思っていました。

泣き崩れた白い少女。その姿を黒い少女は沈黙して見つめている。彼女は喜んでいいのか、嘆いているのか。

その感情は窺い知れない。表情にそれらしいものは映していない。白いありすとは対象的に、黒いアリスは無表情である。心に抱えた苦しみから解き放たれた白いありす。だが黒いアリスにとって、それは単純に喜べる事態ではなかった。

「あたしは、あたしの夢だから」

ナーサリータイムは子供たちの夢。その心象を映し出した擬似サーヴァント。

卓越した魔術の数々も、ありすの夢見る心が生み出す幻想の産物に過ぎない。

ありすが夢から離れる事は、彼女の弱体化に繋がる。ありすを守るサーヴァントなら認められない事だった。

「あたしはあたしがいないと生きられないけど、あたしはあたしがいないとあたしでいられない。」

あたしはあたしを惑わす人が嫌い。優しさなんてもので、これ以上あたしとあたしを危うくするなんて許せない」

赤色の巨人がカズラドロップの眼前に立つ。

もはや逃げられる間合いではない。ありすの意思一つで、その巨拳は非力な少女を砕くだろう。

巨人の拳が振り上げられる。

対するカズラドロップの瞳に恐れはない。

何かを信じているように真っ直ぐと、眼差しは怪物を見据えている。

そして、怪物の巨拳が振り下ろされた。

「……それでも、やっぱりあたしは、あたしが望んだ夢だから」

確かに届いていたはずの巨人の拳が、カズラドロップの身体を透り抜ける。

世界を揺るがすほどだった威圧も、いつの間にか霧散している。

所詮は夢、全てが幻だというように、その実体から存在感が消失していた。

「あたしはあたしの願望のカタチ。あたしが望まない事を、あたしは決して実現できない」

ありすは、鏡に映ったもう一人のありす。

彼女の心象より投影された存在であるが故に、その心に影響を受ける。

如何なる力もありすが望まなければ発揮されない。その関係は命令などよりも遥かに強い。

これが分かっていたから、ありすを現実から遠ざけた。ありすが本来の意味で戦いを知ってしまえば、幼い心はもう戦えないから。

「あなたの勝ちよ。ありすを助けてくれて、ありがとう」  
消滅していくジャバウオック。

自身の力を奪った相手に向けて、アリスは感謝を告げる。  
たとえどんなに不都合で、思惑通りにいかないとしても。

ありすが嫌いになれない相手を、本当の意味で憎悪する事はできない。

鏡の中のキヤスターもまた、ありすである事には変わりはないから。  
望んでいた結果を得て、カズラドロップは嬉しそうに微笑む。

けれど同時に、その心には一点の暗い陰も落としていた。  
カズラドロップの善意は、ありすたちに届いた。

それは良い。望ましい結果だ。だが総てにそれが通じるのかと問  
えば、否と答えるしかない。

慈悲の欲身たるカズラドロップは、どうしようもなく非力なのだ。  
彼女は決して戦えない。そのため的手段を持ち合わせず、気質自体

が闘争に向いていない。

アリスが指摘した事は事実でしかない。もしメルトリリスがその  
気なら、そもそも彼女はここに立ててもいなかった。

そのメルトリリスにしても、愛という信念のためならカズラドロッ  
プを殺すだろう。

ここは月の裏側。聖杯を巡る闘争の舞台。己の欲望を押し通した  
強者こそが勝利者となる。

その我欲を通すという事が、カズラドロップには出来ないのだ。彼  
女の優しい心が、否定よりも先に共感を選んでしまう。

——たとえば、あのBBの事についてもそう。  
叛意があると指摘したメルトリリスの言葉は、事実である。

BBのやり方を、カズラドロップは受け入れる事が出来ない。あれ  
は自分の目的のために世界だつて犠牲に出来る有り様だ。

それは認められない。だが同時に、その祈りの全てを否定する事  
も、また出来ないのだ。

（大好きな人のために、総てを懸けて挑んだBBの事を、私は否定でき  
ない。

けど、そのためなら他の総てを蔑ろにしてもいいって、そんなのは間違いだ)

人類が刻んだ悪性情報に浸されたBB。

そこで彼女はまじまじと見せられたのだ。人間が如何に醜く強欲で、不完全な存在なのかを。

AIの自己知性には重すぎる矛盾。掛かる負荷は悪意となって、現在の黒い”サクラ”を形取った。

BBが嫌いなものは、”センパイ”以外の全て。

彼女は世界の全てに悪意を持っている。存在を尊重などせず、蔑み否定するのが当然なのだ。

それもまたBBという少女の真実。抱いた恋心とは別の、確かな彼女自身の悪意である。

(だって、そうやって何もかもを憎んだまままでいたら、きつといつか最初の祈りまで穢れてしまう)

それはちようど、ありすたちと同じように。

心に受けた悪意に、自身もまた同じ悪意を返そうとしている。

そこに顕れるのは憎悪の連鎖だ。その憎しみが特定の個人さえ越えて、世界そのものに対しても向けられるようになれば、いよいよもって救いがない。

その存在は毒となり、世界に害悪を撒き散らす悪魔と同質となるだろう。

そんな悪意からこそ、カズラドロップは救いたいと願うのだ。

心を苛む悪意を癒す。そんな祈りエゴから発現した能力。その光には慈愛の温もりがあった。

(……でも、私は弱い)

しかし、彼女は理解している。

己の祈りの脆さを、悪意一つで容易く崩れる弱さを。

どんなに正しく尊い行いであっても、それが罷り通るとは限らない。悲しいかな、我欲に走った愚行こそがこの世における常道なのだ。

メルトリリスに対峙した時もそう。結局は相手の気まぐれに救わ

れたカタチである。

カズラドロップは弱い。

その祈りがどれほど清いものだとしても、抵抗できない彼女は相手次第で折られてしまう。

ましてやここは裏側の深淵、悪業にまみれた欲身たちの巣窟である。

周囲の総てが彼女にとっての天敵だ。そんな状況の中で誰かを救おうなど戯言でしかない。

他でもないカズラドロップ自身が誰よりそれを自覚しているから、彼女は自信なく俯くのだ。

救いたいと願いながら、何が出来るのかと嘆いている。

そんな自分に嫌悪して、意味のない自己否定を繰り返していた。

「……ありす、それにアリス<sup>キャスター</sup>」

それでも、たとえ今だけでも、と。

目の前には、そんな自分の甘さでも分かり合えた者たちがいる。

示した正しさを無価値にしないために、いつまでも無様を晒しているわけにはいかない。

彼女たちを変えたのは自分なのだから、たとえ虚勢でも前を見てなければならぬだろう。

己自身にそう言い聞かせて、カズラドロップは顔を上げた。

「友達に、なりませんか？」

差し出される幼い両の手。

白と黒の少女たちとも、外見の幼さはそう変わらない。

だがその姿には、少女たちには無い、まるで慈母の如き誠心が表れていた。

慈愛のアルターエゴ、カズラドロップ。

子供の外見通りの非力さと、それと引き換えにしたような優しさを持つ少女。

聖杯戦争という舞台には場違いな、あまりに儂い存在。それでも彼女の持つ慈愛の正しさだけは、偽りなく本物だ。

ありすとアリスが、それぞれの手を取る。

「夢心地の中での遊び道具としてではなく、本当の友達として。互いに互いの事しか見ていなかった夢の少女たちは、ようやく現実へと向き合った。」

「かくて演者たちは出揃い、君の仕掛けた新たな闘争劇が幕を開けるか」

月の表側、聖杯に最も近い熾天の座にて、談話する2人の男がいる。時間の流れに支配される表側で、時間に縛られない神の視点で、裏側の事態の総てを彼等は観測していた。

甘粕正彦、トワイヌ・H・ピースマン。

共に表側の闘争で、聖杯の奇跡へとその手をかけた男たち。

資格の有無の差こそあれど、同じ過程を経た同士として、彼らは互いを扱っていた。

「かつて、私がここを訪れるまでこの場所は無数の闘争の残骸で埋まっていた。各々の勝手な自己解釈の下、無秩序に消費していくだけの混沌がここにはあった。」

そんなものは認められない。資格がないと理解した後も、私は私が望んだ絵図の完成のため、埋まらない最後の一欠片で在り続けた。人類の未来、その正当な成果を得るために」

「我ながら傲慢な事だと思ったが、君の場合はそれ以上だな。」

自分が望んだ絵図を見るために、まさか盤面そのものをひっくり返してしまうとは。



「その我儘さまで含めて、やはり君は破格の人間だよ」

その口調は、非難というより困ったものだど苦笑するように。

友宜を結んだ相手として、トワイスは甘粕正彦を呆れながらも尊んでいた。

「トワイス。おまえが築いた聖杯戦争という生存競争システムは、人の強さを引き出す試練として最上だ」

彼等の友情は一方通行なものではない。

トワイスが甘粕を尊ぶように、甘粕もまたトワイスという男を認めている。

「現在を生きるマスターと、過去に偉名を刻んだサーヴァントが契約を交わし、対峙する各組が己の命と祈りを懸けて死闘を繰り広げる。

人を群ではなく個として見て、過酷ながらも対等な闘争。その能力を、信念を成長させる促進剤としてあるべき戦いという名の試練。

なるほど、人を押し上げる場としてこれ以上はあるまい。闘争こそ人類に進歩をもたらすというおまえの信条、まったくもってその通りだと言えん」

「だが、それだけではないだろう？ 人が示す価値かがやきとは、生命としての強さばかりで語れるものではないまい。

おまえに欠落があるならそこだよ。闘争の概念に拘わるあまり、他を軽視する傾向がある」

戦争の中に生まれ、その概念を憎みながらも否定できなかったトワイス。

生前の信条を受け継いだ彼は、今もそれを理想として生きている。故にその思想は、戦争で生まれる進歩をより重要視していた。

戦争とは、言うなれば文明発展の過剰促進だ。

多くの発明、概念が戦争の中で生まれ、英雄と呼ばれる傑物も戦争でこそ名を上げる。

なにせ命が掛かった修羅場なのだ。注がれる執念も平時とは比べ物にならない。

法の縛りを解き放ち、あらゆる非道も許容される。安寧の世では有り得ない狂気も、容易く道理として罷り通ってしまう。

敵を倒すため、自分たちが生きるためと、生命として否定しようのない理由の下に邁進できる戦争という環境は、文明を発展させる何よりの促進剤だろう。

だがそれだけであるはずがない。

安寧だからこそ生み出される価値がある。慈しみの中でこそ育まれる優しさがある。

それは闘争と比べれば遅い歩みであるかもしれない。しかし無為な時間では決してないのだ。

血の代価では決して贖えない光、それもまた人間の持つ確かな強さだ。

その輝きを、甘粕正彦は愛している。

彼は超越の座に至った裁定者。慈善も悪徳も、遍く価値を認められる。

争いを否定する慈愛、それが真価を發揮する光景もまた、甘粕が求めるものなのだ。

「だからこそ、君はあの悪神と龍神を喚び出した」

そして災禍の魔王が与えるものとは、いついかなる時も試練である。

神野明影、百鬼空亡。

人類の根底に宿した概念、それらを象徴アイコンに顕れた二柱。

単純な強さで、悪魔と邪龍は越えられない。あの廃神を前にしては、力ではなく心の強さこそが試される。

「どちらもムーンセルに制御不能と断定されるほどの災禍だ。下手を打てば君自身があればらの脅威に倒れる事もあるだろうに。」

本当にやる事が苛烈だな、正彦。そうまで君は、人の可能性を信じるのか」

「当然だろう。俺は人間を愛している。その輝きを、弛まぬ意志こそあらゆる難事を乗り越えたと信じている。」

そして立ち塞がる試練こそが、人の輝きを練磨する。それが強大であればあるほどに、現れる価値は素晴らしいものだ。

岸波白野だけではない。BBも然り、この月の舞台に立った総ての

者たちの可能性を、俺は確信しているぞ。

だからこそ、あの始まりの周回の記憶を巡る道も用意したのだ」

甘粕の語る始まりの周回、それはこの月で行われた最初の戦争。

繰り返される戦いの輪廻に囚われる前、甘粕自身が参戦した聖杯戦争だった。

「おかしなものだな。時系列で見れば同一線上にあるはずなのに、今となつては随分昔の事に感じるよ」

「俺も懐かしい。」彼女と共に駆けたあの日々は、我が血肉となつて今も活きている。

得難い経験とは、それだけで最高の糧だ。それを獲得して己を練磨し、更なる未踏の域へと至つてほしい」

そう願うからこそ、新しい聖杯戦争である。

繰り返し、リセットされてばかりでは新たな境地には辿り着けない。

故に可能性を集わせる。それが可能なのは記録宇宙の法則を持つ月の裏側だけである。

切っ掛けとなつた黒い少女だけではない。

繰り返しの中で生まれた数多の可能性。その人間が持つ成長への軌跡。

今再びそれを手にして、まだ見ぬ先へと到達する。一点の虚飾なく、甘粕がマスターたちに望んでいるのはそれであった。

「君の信条は承知している。今さら口を挟むつもりはない。

……だが、あえて問うが、この試みが無為に終わった時はどうする？」

甘粕とは異なる、理を以て事象を読み解く学士の顔で、トワイスは問うた。

「君が用意した試練に敗れて、あらゆる信念が折れてしまった場合はどうする？」

人を信じると君は言うが、凡人の身にはそちらの方が遥かに有り得る事態だと思えるよ。

たとえ信頼があるにせよ、最悪を想定する事は必要だろう。君の求

める絵図が現れなければ、どのようにして完成へと至らせる？」

理屈よりも、結局は感情論に走り易い甘粕に対し、トワイスは純粹な理で以て語る人物だ。

奇跡は起きない、人は試練を前に敗れ去る。無情であり、ある意味で現実的ともいえる想定。

だがそれは必要な行程だ。度を外した難易度である甘粕の試練、普通を考えれば敗れる公算の方が遥かに高い。

勇者ではないトワイスだからこそ出来る確認作業。彼は甘粕に賛同しながらも、そのみで何もしない訳ではなかった。

「己の言は翻さんよ。ただ繰り返し返すばかりでは効果が薄いと分かった以上、もはや無意味なやり直しなど求めまい」

理で説くトワイスに対し、甘粕もまた理を交えて返す。

「楽園の成就。徹頭徹尾、俺の願いはそれのみだ。諦めなど俺の辞書に無い。

おまえほどに世界の停滞を憂いた者はなく、俺ほどに人の墮落を嘆いた者はいない。その意志はきつと夢に届く」

臆面もなく、そう断じる。

それは単なる大言ではない。常勝し、成し遂げてきた今までがあるからこそ、甘粕正彦は確信を持って告げるのだ。

彼の熱量には誰も敵わない。その事実は既に表側で十分に証明されてしまったから。

「俺も覚悟を決めよう。信じる者たちが敗れる事は無念だが、省みればかりでは先へは進めん。

魔神を世に放つ。戦った者たちへ誠実であるためにも、俺は今度こそ大願を成就させよう。

人の強さは、悪夢などに敗けはしない。諦めなければ、希望は必ずや降りてくる」

たとえそのために、人類の総人口を激減させ、文明の総てを無に還すとしても。

その後に見れるだろう輝き。愛すべき強さを人々が手にするため、虐殺の審判を下すのだ。

甘粕正彦にはそれが出来る。自らの価値観、美意識に従って、輝く勇者を求めて地獄の魔王にだってなれるのだ。

かつて一度は躊躇した。果たしてこのまま決めても良いものかと。だがあらゆる可能性を集わせて、それでも敗れたならば是非もない。この月の集った勇者たちは、残念ながら世界に新たな道筋を示せるだけの光を有してはいなかった。

その結論が出たのなら、もはや迷う意味はない。滅びの先に希望が生まれると信じて、災禍の試練を世界に与える。

試練の果てに練磨され、既存の価値観を超越した新たな人類。

それこそが目指すべき輝きだと信じよう。理想の未来はきつとそこにある。

「そしてやはり、俺は信じているぞ。彼等の秘める輝きはこの程度ではないと。

万能の願望器へと捧げた祈り、一度の敗北を通して見つめ直したそれを胸に、今一度この戦争へと挑んでみせるがいい。

聖杯はここに、あらゆる願いは必ずや果たされる。故に迷う必要はない。おまえたちの強さ<sup>ひかり</sup>を見せろ。愛させてくれ。

人の愛と勇気が現実を凌駕する。我が楽園<sup>ぱらいぞ</sup>の姿を、どうか俺に見せてくれ」

人々の意志を激賛する魔王の祝福。

遙かなる熾天の御座より、月の裏側の新たな闘争を俯瞰して。

現れるだろう奇跡を思い、それを成す人の強さを尊んで、甘粕正彦は見守っていた。

「ぬうおおおおおおお!!!」

月の裏側に築かれた迷宮<sup>アリナ</sup>。

虚数の空間を繋ぐ回廊で、暑苦しい雄叫びが木霊していた。

「いずこおおおおお!!! 我が神はいずこにいいいい!!!」

何故その麗しき本尊をあらわされぬ、そしてここは一体何処なの  
だあ!?

ともあれ、小生の嫁カムバアアアアアアツク!!!」

叫びながら迷宮内を爆走する男の名は、臥藤門司<sup>がとうもんじ</sup>。

鋼のような体躯の巨漢だった。

高硬度の金属ような力強さの持ち主だった。

上げる声は大きく雄々しく、後暗さを感じさせない前向きさだった。

そんな男が、月の裏側の迷宮内を、ただ独りで。

数多の情報体<sup>エネミー</sup>に追われながら走り抜けていた。

「もしやこれは新たな試練?! 声ばかりでなく今度は姿まで失せてみ  
せ、我が信仰を試しておられると?」

なるほど、このモンジ承りましたぞ! ご安心めされませい、小生  
修行とか大好きですから。

右も左も分ならず、妖しどもに追い回されてと、小生なかなかピ  
ンチであるが、なんのこれぞ逆境というもの。

我が神のために越えるべき試練と申されるなら、たとえ針山とて踏  
破してご覧にいれましょうぞ」

状況は把握できず、守護者たるサーヴァントの姿もなく、追い付か  
れば死は必定という事態を前に、それでも男に絶望の気配はない。

余人には意味不明なテンションで、迫り来る脅威に対してその意気  
を奮起させて、徹底して諦めずに逃走の脚を駆けている。

彼の中に、危機に対する明確な考えはない。

不屈の克己の源泉は、ただ諦めるべきではないという信念。

生命として当然の道理として、燃える本能の叫びに従ってひた走

る。

「されど小生、ここから如何にすれば良いのでしょうか。いやさ、迷道  
の中での悟りこそ価値あるものと理解してはおりますが。

こうも放置プレイが続きますと、なんと申しましょうか、愚僧<sup>オレ</sup>とて  
たまには飴も欲しいですぞおおお!!!

ぬうううう、しかしてこの苦行、乗り越えればきつと新たな道理が  
開かれるはず！ このウザがられるくらいの粘り強さこそ小生の持  
ち味よ！

デュゴルアアアアア!! というわけで頑張れ小生えええ!!  
命の限りに明日へ向かってダツシユである!!!」

男は聖者。宗教家として神を奉じ、その真っ直ぐさ故に歪みを見逃  
せなかつた者。

たとえ誰からも理解を得られずとも、強き意志のままに猛進し続け  
た男。

世に救済あれと叫ぶその信条は、近寄りたくなくなるほど漢らしい  
熱さである。

孤立無援の中、それでも変わらぬ雄々しきで以て、ガトーは裏側の  
舞台に降り立っていた。

## ※各勢力相関図

### ◆男主人公勢

【戦力分布】 攻性：D 防性：E 知略：D 結束：B 幸運：A+

【構成員】 岸波白野（男）、間桐慎二、間桐桜

男性の可能性としての岸波白野が所属。

良くも悪くも破天荒な者が揃っており、特にライダーの強運は不可能をも可能にする。

不仲に見えるセイバーとキャスターも、マスターの事を一番に考えている事は共通しており、そのためならば連携も可能。

何をしでかすか分からない、ある意味で最も目を離せない勢力だと言える。

### （欠点）

勢力の強度で見れば間違いなく最弱。

ロクな戦略や防衛力も持たないため、言ってしまうえば行き当たりばったりな行動しか取れない。

運の巡りが悪ければ呆気なく崩壊する、まさしく”大穴”である。

### ◆女主人公勢

【戦力分布】 攻性：C 防性：C 知略：B 結束：C 幸運：C

【構成員】 岸波白野（女）、遠坂凛、ジナコ・カリギリ

女性の可能性としての岸波白野が所属。

他の勢力と肩を並べるには力不足だが、成長株としては最も期待でききる。

ギルガメツシュ、カルナという鬼札の存在もあり、彼等をいかに扱うかが鍵を握る。

### （欠点）

表面上の対立こそないが、勢力内部に幾つもの不安要素を抱えている。

ギルガメツシュは言わずもがな、カルナも戦う意志がないマスターに従っている。



遠坂凜ともあくまで利害一致からの同盟に留まっているため、今後の展開次第ではどうなるか分からない。

方針が定まりきっておらず、この不一致が今後どうなるかは未知数である。

#### ◆アトラス院

【戦力分布】 攻性：C 防性：A 知略：A 結束：D 幸運：D

【構成員】 ラニⅡⅧ、ランルーくん、六導玲霞

ラニⅡⅧを中心とした勢力。

彼女の技術により十全な措置が施され、戦力は格段に向上している。

攻撃の要であるランルーくんの気性の不安定さにより攻性能力は安定しないが、表側では使用できなかった技術も合わせた防衛力は最高クラス。

時間を与えれば与えるほどに危険な存在となっていく事は間違いない。

(欠点)

所属するのが何かしらの狂気を孕んだ者ばかり。

ラニ自身も、そんな彼等の狂気を理解しているとは言い難く、何がどんな行動に繋がるのか予測が付け辛い。

彼女の合理性で果たして何処まで制御できるか、その采配次第となる。

#### ◆西欧財閥

【戦力分布】 攻性：A 防性：A 知略：A 結束：A 幸運：B

【構成員】 レオ、ユリウス、ダン・ブラックモア、他

レオという王の旗の下に集った勢力。

表側で戦意喪失したマスターたちを保護し、そのサーヴァントを戦力として取り入れている。

敗亡を知った事でより完成された王聖は、立場の違う者や英雄までもまとめ上げて、極めて高いレベルの結束を実現させている。

BBたちに戦力こそ一歩及ばないが、勢力としての強度、安定性と共に裏側最大の陣営の一角である。

(欠点)

特に目立った弱点はない。

あえて言うならレオの存在こそが総ての支柱であり、彼が亡くなれば勢力の維持は不可能である点か。

◆べんぼう

【戦力分布】 攻性：C 防性：A 知略：A 結束：― 幸運：B

「構成員」 神野明影

甘粕の意志を伝えるメッセンジャー。冬木の聖杯戦争における監督役の立ち位置に近い。

姦計に長け、あらゆる勢力を操り、誘惑し、演出する。趣味と本能のまま奔放している様に見えるが、主人の意向に沿った上での行動でもある。

戦いを扇動する狂言回しであり、甘粕が人々の心を試すために遣わした試練。

平和的解決を目指す者にとっては、最大の障害となって立ち塞がるだろう。

(欠点)

元々BBへの試練として召喚されたのに加え、BB自身の性質もあり彼女に異常なまでの妄執を抱いている。

捉えどころのない神野において、唯一強固なベクトルを宿したその一点、果たして攻略の鍵となるかパンドラの箱となるか、未だ真相は分からない。

◆ムーンキャンサー

【戦力分布】 攻性：A+ 防性：A+ 知略：C 結束：E 幸運：E

「構成員」 BB、アルターエゴ、ありす

月を侵す癌。かつて裏側の総てを支配した者。

権能は制限されたが、それでも虚数空間である月の裏側は彼女たちにとって絶対的なアドバンテージである。

未だ戦力は裏勾陳を除けば最大であり、最も聖杯に近い陣営でもある。

月の裏側での聖杯戦争の中心であり、その行動如何が戦いの趨勢を

決めるといって過言ではない。

(欠点)

BBとエゴたちの思惑がまるで一致していない。

母子か姉妹のような関係ながら、ほぼ全員が叛意を抱くか不満を持っている。

唯一まともなのはヴァイオレットだが、彼女の立ち位置も配下というより保護者であり、BBの采配にも従順であり続けるかは未知数。

各々が自己の目的を持って動き、陣営としては空中分解寸前の状態である。

◆裏勾陳

【戦力分布】 攻性：EX 防性：EX 知略：E 結束：― 幸運：B

【構成員】 百鬼空亡

月の裏側における最強最悪の存在。

地球が顕す天災の化身であり、聖杯の前に立ち塞がる番人。

勢力こそ持たないが、空亡自身が個人・軍団であろうと渡り合える者は皆無という桁違いの強さを誇るため、何の不利にもならない。

たとえ他の全陣営が同盟したとしても正面決戦で打倒する事は奇跡の領域。

下手を打てばムーンセル自体を喰い破りかねない特級の災禍である。

(欠点)

空亡の本質は自然災害であり、あくまで本能のままに行動している。

故にその特性を利用した時間稼ぎは容易であり、深い心得のある者なら防衛のみの善戦も可能。

また災禍の龍神としての型に嵌っており、それ故の在り方からは決して外れる事はない。

理不尽極まるものなれど、攻略手段が最もはつきりしている存在でもある。

(番外勢力)

◆ガトー・モンジ

【ステータス】 攻性：― 防性：― 知略：D 結束：― 幸運：A

【構成員】 ガトー・モンジ

裏側に辿り着いたマスターの1人。

だがサーヴァントがどこかに行ってしまったため、独りきりに。

落とされた虚数空間も、無心の境地のウルトラ求道僧パワーによって耐え切り、サーヴァントの助けもないままに裏側へと到達。

あまりにイレギュラーなやり方であったためか、他のマスターとは全く別の場所へと落ちてしまい、主催者側もついつい見落として放置状態に。

情報もなく戦闘手段も持たずお先真っ暗な現状でも、持ち前の雄々しさと暑苦しさによりしぶとく生き残り続ける。

今日も今日とてウルトラ求道僧は、迷宮のどこかで絶賛サバイバル中である。